

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03058 8834



UNIVERSITY OF TORONTO  
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER  
COLLECTION

*purchased from  
a gift by*

THE DONNER CANADIAN  
FOUNDATION











昭和六年八月十日印刷  
昭和六年八月十五日發行

（普及版古事類苑 全六十冊）

（白石製本所 製本）

發行者

後藤亮一

發行者

川俣馨一

印刷者

和田助一

東京市芝區金杉新町十二番地

發行所

東京市小石川區竹早町三十二番地  
内外書籍株式會社內

振替東京三一七〇〇番

古事類苑刊行會

東京市小石川區竹早町三十二番地

發賣所

内外書籍株式會社

振替口座東京 八九六〇番  
電話小石川 一〇五四番  
三二六九番

單式印刷株式會社印刷





轉宮同題

明嘉靖十六年六月壬子水月  
四時圖十二卷六十八頁  
正日明

明嘉靖十六年

上海圖書館藏

明治四十二年六月二十五日印刷  
明治四十二年六月二十九日發行

版權所有



神宮司廳





青地友治郎

〔資勝卿記〕寛永八年十一月四日、狂言師山脇五郎左衛門石見守受領勅許、

〔近世公實嚴秘録〕御能前置御徒の事

一とせ鸞仁、右衛門と云へる狂言師、竹馬と云狂言に、御舞臺より掛け下りて、大廣間の方へ走りゆかんとせし時、件の御前置鸞仁、右衛門をとらへうごかさず終に引すつて御座敷蘇鐵の間へつれて行て、御目付衆へ渡しけり、此御徒は阿久澤彌大夫と云人なり、御目付衆吟味有しかば、仁右衛門答て申けるは、拙者不調法申譯無御座候、併し大廣間の方へ缺出候は、何の心もなく只竹馬に乗候と、幼少の節の心持になり候て面白く存我をわすれて右の仕合にて御座候と、申上げるとなり、此申條に相違も有間敷とて、然ば鸞は其藝に自然と妙なりとて、却て此以後仁右衛門が藝術に精心を入し事を、世の人感歎せり、

〔翁草百四十二〕寶暦の頃までは、狂言師に、三宅藤九郎、梶貞五郎など云ふ堪能あり、藤九郎は泉派、

貞五郎は大藏派也、藤九郎は、千鳥繩なひ栗焼等の世話事、他に是に及ぶ者なし、貞五郎は大名事あるは、惡坊等の大場なる事を得たり、或時御所の御能番組に、惡坊有り、右兩人立會勤べきよしを仰出さる、兩人流儀違故、是まで立會ふ事なし、されども勅命なれば、辭する事能はず、貞五郎惡坊を勤め、藤九郎はアドを勤む、之をつたへ聞て、都下の好士、其日庭上に群をなして、是を見ふつす、實も此兩人が立會、他に於ては曾て出來がたき事なれば、見る人甚だ珍賞して、感動せざるはなし、



〔天保十一年武鑑〕御能役者

親世大夫略○中

狂言 鷺仁右衛門

狂言 鷺傳右衛門

狂言 矢田清右衛門

狂言 名女川辰三

日吉長三郎

同 八丁ぼり 岡村茂左衛門

狂言 岡田七之助

同 木挽丁三丁メ

郎○中

金春七郎略○中

狂言 大藏彌右衛門

狂言 大藏又市略○中

實生彌五郎略○中

狂言 大藏彌大夫

狂言 矢田清右衛門略○中

金剛右近略○中

狂言 大藏雄太郎

狂言 大藏八右衛門

狂言 高安甚左衛門

喜多六平太略○中

狂言 脇本藤三郎

狂言 長命勘次郎

〔江戸總鹿子六〕狂言師

源助町 大藏彌太郎

木挽町 大藏長大夫略○中

檜物町 鷺仁右衛門

南鍛冶町一

丁目 鷺山三郎

三十間堀五丁目 長命勘左衛門

脇本佐左衛門 逆水五郎兵衛

〔京都御役所向大概覺書六〕能大夫并囃方之事

狂言師

一尾州略石

上京柳園子

山脇藤左衛門

一松平淡路守

木屋町松原上ル町

神原悦齋

一松平加賀守略

樋井佛光寺上ル町

林庄六

一松平右衛門略

新町出水上ル町

原勘五郎略○下

〔明和京羽二重三〕狂言師

大瀧流 原勘五郎

梶吉藏略○以下

豐流 高井門治

和泉流 尾州 山脇藤三郎 加州

三宅半九郎

同

同 三平

同

同 乙九郎

同

三宅總三郎

尾州 野村丹藏

〔續視聽草 四集三〕散樂人由緒書

大倉彌太郎

狂言之初り、元亨之頃、比叡山北畠之住玄惠法印、世人磨練のため、始而是を作り候由、然處江州坂本之住所日吉彌兵衛と申もの、玄惠法印を傳授之由申候、日吉彌兵衛同彌太郎、同彌次兵衛同彌右衛門同彌太郎、同彌右衛門右六代目相續申候處、六代目日吉彌右衛門を私先祖金春四郎次郎相傳申候、四郎次郎ハ今春大夫禪竹末子也、金春四郎次郎同万五郎、宇治彌太郎、山城國宇治に二年住居候故、宇治と改申候、其後金春座頭取仕、大藏と改申候、大和國多武峯八講之能之時、大夫號をゆるされ、檢校を補任を請候○中

鷲傳右衛門

狂言の始り并作者不承傳之、大猷院様○家光 御代を相勤、鷲傳右衛門、同小三郎○下

〔猿樂傳記下〕大藏彌右衛門道林と號す、狂言師の家と成、元祖にして名人也、是高安不休が舅也、道林が嫡子彌右衛門、次男八右衛門、三代目彌右衛門、常憲公○德川 御近習に被召出、故其弟子傳之丞を以家を繼しめ、長大夫と名乗せし處、渠も被召出、三代目の彌右衛門が子彌右衛門、鷲聲にて上手也、○中

鷲の家は、本名長命にて、長命權之丞狂言の上手也、太閤の御意に入、九州名古屋御旅館の時、水邊へ御出御遊興の時、權之丞川へ飛入、鷲の缺を踏まねをして御覽に入れ、是より鷲々と召され、鷲と改させ給へり、○中

脇本佐左衛門狂言の家は、一流めづらしき狂言渠が家に多し、常憲公御近習に被召出、渡部と稱す、本名渡邊也、古へは田中と云一流の家も有しが、今は絶たりといふ、尾州に山口和泉といふ狂言師の家も別家也、



こびかさね雪山を千代にふれどつくらん雪山を千代とつくらむ。

七ツに成る子北越 喉おちやめのとトモ

七つになる子がいたいけなこといふた、ものがほしとうたふた、扱もくわごりよは、誰人の子なれば、定家かづらかはなれがたやのく、川舟にのせてつれておちやろにや神崎へく、そも扱もわごりよは、踊りとが見たいか、おどりとが見たくば、北さがへおちやれの、北壁峨の踊りは、つゝらぼうしをまやんときて、おどるふりが面白い、よしの初瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき人は見たいものぢや、ところくおまいりあつてとふ下向めされ、とがをばいちやがおひませう。

狂言解

〔明良帶錄世職〕四座猿樂略○中

猿の一黨大藏の一黨能狂言の一風を立、

〔嬉遊笑覽五歌舞〕大藏は猿樂狂言の本家といふべし。略○中大藏彌左衛門虎明が昔物語慶安四年予

が家は狂言の根元なり云々、猿は本名字長命なり、今の長命次郎大夫は祖父の子かたになりて、名字をもろふ猿といへば、仁右衛門親攝津國磯島といふ在所に住し、生れ付首長くして、水邊に住ほどにとて、異名に付し名なり、仁右衛門親は下手にて、わかくて親にはなれしを、仁右衛門を云なるべし三之丞伯父取立しこと、近き頃迄人の知りしことなり、それを我家などと云ひは、かたはらいたきことなりと、次郎大夫度々申されし、我又今の次郎大夫を仁右衛門親かたと云れしを、直談に聞し、されど猿の名字四座になし、是今人の知たる事なれども、世へだりて知る人あらじ、又云、猿の笛狂言神樂同かつこ笛の習といひならはせども、猿は能に有て狂言には舞なし、然るを仁右衛門親猿舞をまひしとて、それより猿といふと知らぬものはいへど、さにはあらず、前にいふごとく、さやうの名をとるべき人にてはなし云々とあり、

をならべつれ、いざ御田植をいそがん、苗代をく、とろ、とならしすましつ、水も豊に水口を、祭おさむる神の御田、みどりも程なかりける、まか、田うへい五月男女うへい、五月女、めでたき御田うへにをり立、をりたちて、田植いさをとめ、笠かふてきせうぞ、笠かふてたふならば、猶も田をばうよ、いかに五月女、富岡山に白玉椿の花のさいた見たるか、八千世をかきねて、さいたるぞめでたき、いかに五月女、早苗とるとて、手をとるぞをかしき、とつたらば大事か、わかい時のならひよ、いかに五月女、早苗とる、山田の寛ももりにけり、引まめ縄の露ぞか、りたる、五月の早女房と、春の露と、聲くらべせう、春のうぐひすと、いかに五月女、艶書文がほしいか、けまやう文をたふならば、さをなうれしからまし、けまやう文をとつたりと、何にまよぞみめわる、つらくい男の、いふた事の腹立、まことにはらがたつかや、誠に腹が立ならば、水鏡をみよかし、五月女のかげうつす、苗代のすみすみの水は、かゝみかは、かゝみは見たりとも、顔はよこれたり、かはよこれたりとも、おもふ人は持たり、いかにさをとめ、この所の山々に、花のさいた見たるか、實きつとみたれば、金の花もさいたり、あふめでたや、まことにめでたかりけり、目出たき御代には、千重万重富ふれり、や、富ふれり。

〔和泉流小舞謡〕土車 家土産 花の袖 七ツになる子 吉野葉 石河藤五郎 柳の下 番匠屋 春毎 十七八 曉の明星 いたいけしたる物 岩飛 兎 宇治の晒 鶉 貝づくし、河水 津のくに 猿子を 忍ぶ其夜 蛤を 瓢たん 赤きは酒 景清 いとし若衆 道明寺 虎送 爰をどこぞ 鎌倉の女郎 春雨 住よし いと物ほそき 街道下り 小原木

〔和泉流小舞謡〕春毎 雪山トモ  
春毎に、君をいはひて若菜つむ我衣手に降雪を、はらはじはらはで、そのま、にうくる袖の雪、は



し御覽候なと申候が、人にこそよれ、阿闍梨杯に向て申さふする事ではおりない、餘りに不審に候間、此事を阿闍梨へ申上、主の寢やをそとみやうと存る、いかに阿闍梨へ申候、今宵の主程情深き人は有間敷候、奇特にお宿を申されいかに夜寒なればとて、女の身として夜中山へ分入、薪木を取、火に焚てあて申さんとの志難方奇特成人にて候が、阿闍梨には何と思召候ぞ、ハア扱もく目さとい御方じや、今度こそ能う寢られたと存たれば、又御目が覺た、亦こちらの三位殿は能う寢らるゝ事じや、何と致さふ、夫々何の思ひ切て寢るにねられぬといふ事がある物か、恐らく寢て見せう、いかなく寢られぬく、身共は寢うくとおもへ共、最前主の申た事が片心にかゝつて、中くねられぬ、今度こそ能う寢られたそふな、さらばはづいて見う阿闍梨ツエヘンと云てか、又一つ云て、同断、今度ハ三位の方へ向て、エヘンと云て、阿闍梨か、又ツエヘンの方へ少し出でエヘン、少々下り下をニツ打エヘン、又同断、阿闍梨咄々嬉しや、漸々御側をぬけた、惣じて某が癖として、人の見よといふ事はさのみ見度ふもなし、亦人のな見そと云事は見度うてならぬ、さらば急ひで主の闇を參て見う、ア、哀しやくくなふくおそろしや、主のかくひたるこそ道理なれ、寢屋の内には人の死體は數知らず、死體白骨軒とひとしく積かさね、其上鞠程の光りものがいくつともなふ御座ある、所詮此所に御座有ては、阿闍梨の御命をも取り申さふする間、此よし申、いそぎ引立申さふ、ハア見て御座る、下

〔能仕舞手引〕四又〇賀御田

雷聲にて神主出名乗、扱さをとめ違とうく出られ候へやと云て、さがりはにて掉女いで、神山とうたふ、神主より詞をかけて、舞臺へいで、まいる間、又さがりは也、扱又まか、有て、神主參らせ候くと云出し、色々云立て、田植い早乙女とうたふ間、拍す、この歌の納め、まことに目出度かりけり、目出たきと踊節より拍さず、まきりにて神主納る、

同音 神山のく、加茂の河浪豊なる、みとしろ小田を植んとて、さをとめの袖をつらね、かさは

〔譚海〕<sup>四</sup>田安中納言殿<sup>○宗</sup>は、風流好古人に遇させ給へり。<sup>○中</sup>高砂の能のあひの狂言のことばなどは、全く此卿の御作なりとぞ。

〔能仕舞手引〕「一高砂又あひ生とも云<sup>○中</sup>」

狂言出時、御身は所の人にて候か、所の人にて候は、ちかふ渡り候へ、ちと物を尋候べし、是は九州肥後國阿蘇の宮の神主友成にて候が、此所はじめて一見の事にて候、此所におひて高砂の松のいはれを語て御きかせ候へ。

狂言

當所にはすまひ仕れども、委き事をば不存候、去ながら御尋なさるゝを、かつて不存と申もいかにて候へば、うけ給り及たる通、あら／＼申上ふするにて候、掘じて高砂のまつとは當社と住の江の明神夫婦の御かたらいをなし給ひ、此所へ日々に御影向なされ、砂を此松の本へかきあげ、かきあげし給ふによつて、いづくの浦よりも、高砂成ゆえに、たかさごの松、高砂の浦と申候<sup>○中</sup>。又古今の序にも、高砂すみの江のまつもあひおひのやうに覺へて御座候は、當社とすみよし明神いよ／＼夫婦の御かたらいをなし給ひ、攝州播州の間は、はるかに海山をへだてたると申せども、たがひの御心あさからず御座候程に、あひもろとも此まつの本にて、神かたらひましまして、今に神慮も松もろともにさかへます事、千秋萬歳めでたきしさいにて候、先承及たるは、此分にて御座候が、扱何とおぼしめし御尋被成候ぞ。<sup>○下</sup>

〔間輯〕黒塚

シラキツレに付て、出直に太鼓座へ着、扱も／＼此陸奥の人倫絶たる所に住ながらも、主の情深き事は、奇特にお宿を申され、いかに夜寒なれば、とて女の身にて夜中に山へ分入薪木を取、火に焚てあて申さんとの志し、又とあるまじき人にて候、去ながら常の女に替り、何とやらん物すごき體にて候間、能く心を付て見申て候へば、案の如く山へ参りざまに立戻り、わらはが寝やの内は



佐保山

望月

石橋

道成寺

姥捨

檜垣

一子相傳

安宅貝立

舟辨慶 船中ノ語  
舟歌

石橋亂序ナシ

朝長舞法

春日龍神町積リ

〔花傳書八〕一狂言のあひの事、中入の仕手のいでたちもかんがへ、手まの入にはながくかたる物なり、手まのいり候はぬ大夫のこしらへのあひは、みじかくかたる物なり、そのこゝろがけ肝要也。

〔花傳書三〕狂言の調子の事、第一の調子一大事なり、まへのなかいりのてうしをよく吟じて、相應していひいだし、中比よりちと調子をあげてかたり、またおさめの時分に、もとのてうしになをしとゝむべし。

はやうちのふるい、竹の雪などのあひしらひ、道成寺のあひしらひ、かやうのたぐひはいかにもいかに、もてうしだかにいひてよし、いかにあらゝといふあひしらひなり、うたひの調子より一調子高いふあひしらひ也、あふひのうへのあいしらひ同前。

一かな王、かんたん、江口、松風、かやうのたぐひは、調子たかきをきらふなり、其うたひのてうし尤に候、か様のたぐひおほし、是をもつて分別あるべし。

一西行櫻にあの柴がきの戸をひらきて、うちへ入候へといふところ、狂言こなたへ御入候へ、さらさらゝと云調子めり候へは、櫻花とうたはれず候、又さらゝしだるく候ても、櫻花とうたはれず候、さらゝといふとき、むかひのさくらはな、調子と、うたひの位を吟じ、さらゝといふべし、此心がけかんよう也、か様の事あまた有べし、いづれの謠にも渡るべし。

婢丸

小袖曾我

鷄立田

元服曾我

滿仲

三笑

邯鄲

皇帝

西王母

鶴龜

咸陽宮

烏帽子折

雲雀山

芭蕉

賴政

實盛

吉野靜

班女

弱法師

竹の雪

愛染川

室君

放下僧

求塚

土車

難波蔦止

卒殿

中傳

桃仁

江の島道者

昭君

貝盡し

猿聲

鉢叩

大藤内

麤水

大會大勢

鞍馬天狗大勢

是界大勢

弦師

敦盛アキヲ

芭蕉蕉鹿

山姥卯膳溫化

半蔀立花

藤戸大根渡

天鼓樂器

綾鼓

舟辨慶早駒束

正尊

定家

砧

戀重荷

朝長

萱

木賊

御田

殺生石

春日龍神

奧傳

木實爭ひ

惟盛

勸進聖

奈須

鏡御裳灌道者

繪馬大勢

神子神主

竹生島道者

置鼓

芳野

志賀

土車打切

置鼓

芳野

志賀



三日 三本柱 こよみ あさひな 茶斤座頭 腹つゝみ わかめ 入間川 なきむこ  
傘まやうく

〔御湯殿の上の日記〕慶長三年六月三日、ならより上ずのきやうげんし十人ばかり参りて、黒戸の御庭にてきやうげんあり、八でう殿大かく寺どの、竹の内殿御けんぶつになる、准後の御方参り、ないくの男たちしこう也、ひるく御まゐる、十でう巻もの、ゆかし二千疋、きやうげんしに下さるゝ、

〔難波江<sup>六</sup>〕三番叟

アヒ コレハ、能ノ間ニ狂言師出テ、其能ノ一番ノ大概ヲ物語スルナリ、能ノ間トハ、装束ナド付カフル間ノコト也、サル故ニ能役者ハ狂言ヲシラデモヨロシ、狂言師ハ能ノコトラ、オロくワキマフベキコト也、

〔諸流和泉流名寄一覽<sup>附録</sup>〕小習奈須與市語  
對照 能間之部

一役間 初傳

翁附脇能

小書附能

常陸希

國栖

合甫

大江山

唐船

千引

氷室

三井寺

竹生島

花月

自然居士

百萬

籠太鼓

黒塚

藤永

西行櫻

車僧

山姥

天鼓

舟辨慶

安宅

舍利

七騎落

鐵輪

藤戸

俊寛

ふたによつて、あれへいたれば、わけもないことをいひをつた、太 是はいかなこと、あれ程水を  
めへぬつてなくに、まだきがつかぬ思ひ付た、致し様が有すみととりかへてをきませふ水入と  
へるか 女 扱もく、かなしや、片時ものはなれぬやうに思ひましたれば、わかれになりまして、  
かなしうござる、太 扱もく、おかしいことかな、取かへてをいたをえらいで、すみをかほへぬ  
つた、あの顔は扱もく、おかしや、申々ござれ、シテ 何ごとじや 太 こなたは誠になされ  
ぬに、仍而、私が水とすみと取かへて置ました、あの顔を見させられ、シテ 誠にあれは汝がいふ  
通じや、扱もく、だまされたに、くいことじや、何とせふぞ、思ひ出した、此鏡をかたみじやといふ  
てやつて、はぢをか、せふ、太 一段とよふござらふ、シテ なふく、國本へ下つたらば、追付迎  
をのぼさふけれど、それ迄のかたみじやと思ふて、此鏡を見てたもれ、わがりよに是をやるぞ、  
女 扱もく、彌かなしうござる、此様なかたみをもらはふとは、夢にも思ひませなんだ、扱もく、  
情ないこととてござる、やあ、是は何者が、此様に、すみをぬらしをつた、あ、腹立や、こなたがし  
やつたか、腹立や、シテ いや、それはえらぬ、太郎くはじやが才覺じや、女 えらぬとお  
しやつても、きかぬ、すみをぬらねばをかぬぞ、シテ 是は何とする、顔へすみをぬつてやれ、ゆる  
せゆるせ、にけ入 女 やあ、太郎くはじやめ、そこにをるか、をのれもぬつてやらふ、太 これは何  
とめさる、此様にぬられて、どういなれふぞ、あ、ゆるさしやれ、女 どちらへうせる、まだぬら  
ねばならぬ、やるまいぞ、

〔看聞日記〕永享四年十月十日、鳥羽ニ女猿樂勸進自昨日始云々、拍手アサレ喚などは男也、

〔異本、糸河原勸進申樂記〕寛正五年 甲申 卯月五日、七日、十日、

狂言

初日

三の九長者

猿引

かくれがさ

はちた、き

くわいらう

八幡まへ

三郎太郎

二日

鬚やぐら

うさぎ

大か小か

鬼の豆

いもじ

ちしやく

追付下るであらふ、そふあらば、かの人、又いつ逢もまれの程に、今日は暇乞に、かのかたへ  
ゆかふと思ふが、何とあらふ、太 是は一段とよふござりませふ、シテそれならいざゆかふ、汝  
も供をせい、太 畏てござる 進行シテさあこい、太 参ります シテやい、此仕合を  
國本にきいたら、けふかあすかと思ふて、待かねてゐよふぞ、太 左様でござる、もふし、何か  
と申内に、是でござる、御出なされた通申ませふ、それにござりませ、シテ心得た 太 申ござり  
ますか、頼だ御かたの御出なされてござる、女やあめづらしいこそがする、太郎くはじや、何と  
頼ふだ人のござつた、太 中々左様でござる 女なふ、めづらしや、これはどち風がふいて  
御出なされた、此中は久々見へませなんだによつて、心もとなふ存じました、シテいかにも此  
中は久しうおりやる、先わごりよもそくさいでまんぞくいたした、それにつき、太郎くはじや今  
のことをいはふか、太 仰られませ 女何ごとでござる、心もとなふござる、シテいや別のこ  
とでもない、長々在京する所に、訴訟思ひのまゝにかなひ、近日國にくだる程に、今日はそなたに、  
いとまごひにきておりやるは、女やあ、何とおほせらる、國本へ下る、それなら、又いつあひ  
ませふもまれまい、扱も、かなしひことでござる、顔に入らそばに、置、シテそなたのなげきは  
尤じや、去ながら國にくだつたらば、追付迎をのぼすであらふ、待てゐさしませ、女そふ仰  
られても、こなたの心がくにもとへござつたらかはり、わらはがことをわすれさせられふと思  
へば、かなしうござる、太 是はいかなこと、誠になる、と思ふたれば、顔へ水をぬつてなかる  
る、にくいことじや、申々、ちよつとござれ、シテ何ごとじや 太 あれをこなたは、眞實なくと思  
召すか、あれは顔へ水をぬつてなかれます、シテなんの其様なことがあらふ、あれ程わかれを  
かなしがつて、なくものを、何をわけもないことをいひをる、女 申々、どちへござります、御めに  
かゝるも、すこしのうちでござる、こゝにござりませ、シテされば太郎くはじやが用が有とい



大猷院變御川家光ヨリ拜領  
ケントク、赤ッル 惠美酒 福來上リヒゲ、同 フクレ、赤ッル 盤又、龍右衛門ブアク、同 ウソブキ、福來

### 大藏彌右衛門

猿現權ヨリ祖父道佛拜領、毘沙門台德院權御川秀忠、白サフス、倫拜領、龍右衛門ブアク、赤ッル、  
ハナヒキ、龍右衛門ケントク、赤ッル 猿同右四面ハ今春先祖ヨリ、光リ鬘、龍右衛門黒男、赤ッル 父尉、  
同 延命冠者、日光ニタリ、龍右衛門キツ子、福來ホウソノブアク、赤ッル 山櫻、廣明 牙ブアク、赤ッル  
ブアク、日ヒ 末社、龍右衛門ツウエン、三光 祖父、小牛 同、赤ッル 同、タシマツマ上リヒゲ、小牛フクレ、  
古作 姫、龍チビクニ、同ケントク、赤ッル 又五郎、同 女サル、同 甘サル、同

### 大藏八右衛門

三番三、龍右衛門 惠美ス、赤ッル フクレ、龍右衛門 猿、

### 鷲傳右衛門

ブアク、赤ッル ケントク、同 ウソブキ、同 フクレ、同トヒ、龍右衛門 キツ子ニ行ノ面作江州多賀ノ社  
邊ノア、

〔鹽尻古〕一猿樂の狂言に、下ざまなる女のまねする事ハ、是ニハ白木綿ニ面、行人の如く包む、是を  
かつらといふ、衣服ハ冬も麻の帷子を著し侍べる、當時布子の姿なりとかや、

### 〔續狂言記〕すみぬり女

シテ大名 遠國にかくれもない大名、長々在京する所に、訴訟思ひのまゝに相叶、新地を過分に拜  
領いたした、是程うれしいことはござらぬ、先太郎くはじやをよび出し、悦ばさふと存る、やいや  
い太郎くはじや有かやい、太はあ シテゐたか 太 お前にをります シテ 汝をよび出すこ  
と別のことでもない、長々在京する所に、訴訟ことごとく相叶、新地を大分拜領したは、めでたい  
ことではないか、太 是は御意なさるゝ通、おめでたいこととござる、シテ それにつき、國本へ

もふあてがひはまづあるべからず、たゞそのことはりをべんじて、けんてうの道理を、一座に云きかするをもて道とす、抑をかしと者、かならず數人のわらひどめく事職なるふうていなるべし、ゑみの内にたのしみをふくむと云、是はおもしろくうれしき感心也、この心に和合して、見所人のゑみをなし、一けうをもよをさば、おもしろく、ゆうげむの上かいのをかしなるべし、これをかしの上手と云り、むかしのつち大夫がきうげん、此位風なりし也、それに附ても、數人あいれむのしほをもちたらん生得は、藝人のみやうがなるべし、ことば風體にも、職なる事をなさずして、貴所上方さまの御耳にちかからんりこう、きやうだんをたしなむべし、返々をかしなればとて、さのみにいやしき言葉、風體ゆめ／＼あるべからず、心うべし。

〔花傳書〕一狂言をしへる事、まづはじめ初心なる時は、いかにもおかしく、人のわらひ候やうにしへ候物也、さて少々狂言をもまおぼえ、如形仕候時、あまりせかしき事をそくとのぞき、狂言にみを入面白き事をまぜべし、其後はや年もゆき候はん、よきしてと申時は、いかにも物すくなふかしましくなき様にまんにして、はづれをかしきことを入、とつといふ様にする、こと、是上手のわざ也、稽古の次第大方如此、

〔掬鑑〕中 釣狐寺

南莊少林寺ノ塔頭、永徳年中ニ耕雲菴ト云アリ、其住僧伯藏主ト云リ、○中世ニ云傳、釣狐ノ狂言又札幌共此寺ヨリ發リ、然バ才覺ナリシ狐ノ謀ナレバ、其時大藏某狂言ニ作シテ、彼狐威シ老翁ニ化シテ狂言ヲ見テ、猶野狐ノ骨髓動テ、口傳セシトナリ、誠ニ狂言綺語トハ云ナガラ、道ニ達シスレバ、如是奇特モ有事ニヤ、尤家ノ大事トスル狂言也、

〔四座系圖〕家ノ面覺略○中

鷲權之丞

面箱

千歳 初日ヨリ

三番 更

三番 更二日目 子十人

同三日目 烏帽子  
の祝儀子

同四日目 作リ道

同五日目 三  
儀髪 の

同六日目 髪を引

同横ガ、リノ舞

同附ノ舞

一子相傳

鳴子 眞ノ形

金岡古式

釣狐 眞ノ形

花子 眞ノ形

狸腹鼓

狸腹鼓 草ノ形

同 眞ノ形  
亂菊

三番 更 後  
合段

三番 更 初日

田歌よし

千歳 大流

三番 更 後  
合段

三番 更 和天地  
合

御賀の松風流

犀の神風流

蟻風流

千々尉風流

盧橘風流

大黒風流

三盤風流

蒼頡風流

餅風流

鶴龜風流

如意寶珠風流

如意珠風流

鳳凰風流

毘沙門風流

志屋宇利屋宇地風流

仙鶴風流

春神風流

福神風流

松龜風流

住吉風流

松竹風流

布引風流

相生風流

根延風流

七夕風流

壽福風流

仙人風流

三角風流

布留風流

四季の神風流

春日風流

○按ズルニ、此餘入門式、小習中習等ノ各目省略ス、

【習道書】申樂一座人數、其役々習道次第、略中

一 狂言の役人の事、是又をかしの手だて、あるひはざしきしく、又はむかしものがたりなどの、一  
けうある事を、本木にとりなして事をする、如此、又信の能のみちやりをなす事、わらはせんとお



金藤左衛門  
同

月見座頭  
同

まんちう

左近三郎

栗隈神明

餌差十王

物真似

氏結

合相烏帽子

茶懸座頭

呼聲

榮堀

鬼の紐  
右者○金藤左衛門以下流儀ニ無之狂言

牛錢

寶の瘤取

〔附流和泉流名寄一覽附〕一番習

太鼓負

歌仙

木の實爭

田植

泣尼

水汲新發意

大盤若

若菜

法師ケ母

箕被

石神

鳴子

花盗人

鶯

木六駄

大藤間替ノ綾東

松脂亂カケリ

名取川カケリ入

狐塚小歌入

三人離交三曲

鞠坐頭四人立

鈍根草眞ノ形

寐音曲舞入

業平餅重飾

薩摩守謡入

鞠猿床机ノ傳

釣狐アト

花子小アト

花子アト

大習

蟬眞ノ形

法師ケ母替綾東

泣尼眞ノ綾東

猿聲眞ノ形

野老白頭

庵りの梅

越後鉦

唐人相撲

金岡

釣狐

狸腹鼓アト

花子

比丘貞

枕物狂

大事之習

鈍根草

花爭同

富士松同

痺同

素袍落同

繩絢同

棒まばり同

清水同

寢音曲同

井杭同

瓢の神同

六人僧

唐人子寶同

鬼丸

水汲新發意同お茶の水

箕被同

鶯

竹生島道者

釣狐同こんくわい

狸腹鼓

鶏流同鶏泣

御冷し

竹生島參同

空腕同

止動方角同

狐塚同

樋の酒同

杭か人か人か杭か

伊呂波同

米市同

佐渡狐同

大藤内同

業平餅同

鞍馬聲

大盤若同

石神同

木六駄同

勸進壺

花子同座同鼻

鞍馬參同

鬚々頭同

かねのね同

口眞似同

千鳥同

文荷同

簾屑

栗焼同

伊文字同

長刀應答

隠し狸

鉢叩同

庵の梅同

弓矢太郎

若菜同

鳴子同

越後聲

奈須の語同

比丘貞同

舟ふな同

太子の手餅

肝同

咲嚙同

武惡同

附子同

ぬけがら同

柑子同

柑子俵同

合柿同

鶏猫同

藥水同薬水同祖父

御盗人

泣尼同

法師ケ母同

花盗人同

唐人相撲同

金岡同

枕物狂同

角水角水雙

内沙汰右近左近

鎌腹同

引括り同

連尺

河原太郎同同

節分同同

馬口勞

雷同同

犬山伏同同

鼻山伏鼻同

野老

章魚同同

歌爭土筆同

芥川同

猿座頭花同見座頭

井礪同同

長光同同

連歌盜人同同

太刀春同同

二九十八同

瘦松同

吹取同

鈍太郎同同

太鼓負

今神明

朝比奈同同

政頼同

蟹山伏同同

彌宜山伏同同

茸同

祐善同同

蟬

鳴子遣子同

膏藥煉同同

鞠座頭同

不見不聞不聞座頭

茶壺同同

瓜盜人同同

心奪同

岩橋

兒流鑄馬同

因幡堂同同

鏡男同同

歌仙同

二王同同

八尾同同

鬼の繼子同同

腰祈同同

柿山伏同同

塗師平六同同塗師

通圓同同

八句連歌同同

酢薑同同辛

含弟同同

川上座頭同

三人片輪同同

盆山同同盆山盜人

牛盜人

腥物

伯母ヶ酒同同

釣針同同

子盜人同同

右流左止

茶子味梅

圖罪人同同

搏打十王

首引同同

苞山伏同

蝸牛同

樂阿彌同同

雙六

胸突同同

謀生の種

清水座頭

伯陽同同

磁石同同

文山賊同同

横座同

成上り同



寶の槌同

寶の笠同 笠

麻生同

目近込骨同 目近

末廣がり同

張章魚同

三本柱同

松囃子

雞聲同

音曲聲同

懷中聲同

口真似聲

八幡の前同

引敷聲同

樽聲

船渡聲同

猿聲同

折紙聲

岡大夫同

庖丁聲同

孫聲

二人袴同

塗附早漆同

今參同

秀句傘同

栗田口同

人馬同

鞠猿同

鴈磯同

禁野同

入間川同

萩大名同

鴈大名同 鴈 盗人

墨塗同

鬼瓦同

文相撲同

鼻取相撲同

蚊相撲同

二人大名同

昆布賣同

二千石同

文藏同

鱸庖丁同

布施ない經同

宗論同

名取川同

魚說法同

とちはぐれ

雪打同

骨皮同

佛師同

不腹立同

地藏舞同

金津地藏同 金津

六地藏同

小傘同

笋同 竹の子

重喜同

酒講の式

財寶同 西翁

若市同

宗八同

薩摩守同

柱杓

呂連同

惡坊同

惡太郎同

飛越新發意同 飛越

花折新發意同

連歌十德

若和布

鬚梅同

老武者同

木の實爭同 葉爭

田植

吃同

千切木同

貫聲同 泣聲

水掛聲同

賽の目同 賽の目 聲

きかす座頭

ちどり

おばが酒

棒しばり

右近左近

口まね

こもり

鮎包子

宗八

ちしやく

ちぎり木

すばじかみ

鏡おとこ

合柿

因幡堂

文山たち

いもじ

御茶の水

子盗人

長光

瓜盗人

ぶす

土筆

かくれ笠

やせまつ

人馬

鴈つぶて

竹生鳥參

二人大名

昆布賣

ぶあく

膏藥煉

さつくわ

右七十八番、金春四郎次郎、宇治彌太郎二代之内作候由、

目近

大黒連歌

三人夫

舟渡聲

さいの目

鼻取すもふ

范

花あらそい

か、し

大刀はい

ほねかは

惡太郎

隠ば、

引く、り

河原太郎

横座

盆山

竹の子

舍弟

むねつれ

なりあがり

あかやり

なわない

右二十三番、作者不相知、

〔諸流和泉流名寄一覽〕但シ細字ノ右ハ大藏流、左ハ龜流、同稱ノ

夷毘沙門

夷大黒

大黒連歌

毘沙門連歌 毘沙門

福の神

松脂

筒竹筒

三人長者

餅酒

三人夫

昆布柿

鷹かり金

筑紫の奥

勝栗

松様

弓矢

煎じ物

鍋八撥

牛馬

鏡腹巻

なべ八はち

はな折

せんじもの

包丁聲

惡坊

引敷聲

すあふ落し

岡大夫

ぬけがら

せつぶん

八幡の前

朝比な

二人ばかり

くじさぬけん

もち酒

連歌盗人

筑紫貝

茶つば

三人かたは

昆布かき

まんはい

唐すまふ

閑あみ

入間がわ

ぬし

今參

法師がは、

秀句からかさ

枕物狂

鴈盗人

犬山伏

黒塗

ふくろう

萩大名

梯山伏

うつばざる

貳千石

ふし松

はくやう

まとう方角

いくぬ

ふんそう

八句連歌

よねいち

連歌毘沙もん

つりざつね

びくさだ

ひげやぐら

花子

右五十九番玄惠法印作之由

あさふ

八尾

三本柱

首ひき

よろい

鬼のまゝ子

あびす大こく

かみなり

牛馬

せいらの

鴈かりがね

清水

水掛聲

音曲聲

禰宜山伏

鶏聲

蟹山伏

栗田ぐち

腰いのり

文相撲

老武者

蚊すまふ

わか市

禁野

通圓

鬼がわら

いふせん

たこ

くりやき

さつまの守

舟ふな

ろれん

けいりき

こひこゑ

かねの音

金津地藏

そらうで

地藏まい

くらま參

どん太郎

いろは

とふろちり

まひら

さる座頭

狐つり



考ふるに、親世彌次郎大永以前の人なれば、その一代前の小次郎が作の遊行柳の事も、傳書に入まじきものにあらず、彼下間法印の臆斷によりて、強て偽書と定めん事はおぼつかなし、

〔七十一番歌合〕<sub>下</sub>五十番 右 猿がく

秋の霜翁おもての白髭のながきよあかず月をみるかな

戀られてむくいやするとゑめい冠者うつくしげなる人とみえはや

○

狂言

〔人倫訓蒙圖彙〕<sub>二</sub>狂言 人として笑を催すためなれば、法外俳優の事なり、

〔賤者考〕狂言にアドといふは、去ての趾をふむ意か、古言にあともひとといふは、人を率ることなり、それと同意にて、去てに率らるゝ稱なれば、もと清音なるべきに、アドと濁りていひならへり、

〔猿樂傳記〕<sub>下</sub>狂言師の發り詳ならず、猿樂の根元たる、とう／＼たらの舞祝言畢て、其供して行たる者、其跡より出目出度といふ事をいひ囁すに、其儀を後世に、色の黒き尉三番叟と取締たる物にて、可笑風俗を笑ふを、歎びの至りとす、是を古人は笑と呼て、萬歳の袋持に等し、猿樂興りて能となり、其初の古代の翁渡しを舞を以、其をかしみ囁子、是に舞を續けて式三番の法を立たり、其をかしみを勤る者狂言師といふて、能の内の答を仕り、中入の時間、延引の所を結ぶ、是ばかりにしては見だてなしと、今の狂言を仕はじめ、物好に付、玄惠法印狂言の詞を百六十番作りつづらせたりと云々、

〔續視聽草 四集 三〕散樂人由緒書

玄惠法印作之狂言

末廣がり

宗論

實の槌

腹不立

福の神

ぶつ師

あびすじゆもん

布施ない經

まつやに

名取がわ

春齋答ラレシカバ、忠勝、儒臣ニ召仕ハル、人ハ、必漢書ノミニハ限ル可ラズ。略中 舞詠ナドハ神  
儒佛有職、歌道ノ事迄モ、取集メタル物ナレバ、是等ハ猶以テ一座ノ不審、挨拶ノ爲吟味シテ、覺悟  
アルベシト申サル、春齋亦面シテ歸ラレ、三日過テ源氏小鑑ヲ持參セシトカヤ、或時少年、春齋ニ  
問ケルハ、カクソソニエイトハ如何ナル事ゾト、尋ラレシ詞ノ下ヨリ、夫ハ舟辨慶ノ詠ノ中ノ不審  
ニヤト申セバ、其事也ト云シニ、春齋カクソソニエイト書テ、新古今釋教ノ部ニ、觀音ノ夢中ニ示シ  
タル歌ト有テ、手ヲ引合テ義經ノ船出ヲ、靜ガ祝ヒ舞ヒタル詞ナリト答ヘラレシ、其後弘文院ノ  
春齋ニ云テ、空印ニ心付ラレズバ、斯ク當座ノ挨拶ハ成間敷ニ、諸曲ヲモ一通見置シ處ニ、今カ  
ル淺ハカ成ル事ナガラ、即答シタリト申サレシ、林家ニテ和學ニ長ゼラレシハ、春齋也ト人々申  
ケル。

〔群書一覽管五〕能花傳書

八卷

卷首に風姿花傳とあるせり、應永七年卯月從五位下左衛門大夫觀世素元清が序に云。略中 凡わ  
かきとしよりこのかた、げんもんの稽古のをよぶところの條々、たいがいあるし申をくところ  
なり、按するに、貞徳が懸草に云、近き代のうたなど書て、奥にふるき歌人の作とあるしたる歌書  
など多く侍り、また猿樂の秘書とて花傳書抄といふものを、ある人天滿の下間法印に見せられ  
ば、これは偽書也、金春禪鳳が奥書有て、中に遊行柳の能の事をかけり、此うたひは觀世彌二郎と  
て、近き世のもの、作りたる能なりといはれし、よろづうたがはしき物の本をとりあつかはん  
人は、その作者の時代を、先よくかんがへざるべきことなり云々、又按するに、能作者を記せる書  
に、觀世小次郎が作三十二番の中に遊行柳ありて、次に彌二郎が作二十五番をあるせり、其書の  
奥書に云、右能本作者、依安藤典厩御所望調進之、觀世彌次郎長俊連々直談時、物語申趣所注置  
如斯、又此上猶可被聞召合者也、于時大永四年甲申孟夏上滑、吉田藏人兼將在判、此奥書を以て

〔夜鶴筆叢〕亂舞の事、一人のたのしみにいたされ候は、聊以苦しからず、まかし兼て規定の通り、能は當家<sup>○松平</sup>にてはいたさぬ事に候、仕まひ、番囃子などは苦しからず候、乍然人なかにては無用に候、其譯は代々能など好み、家中もはやり候大名の家あまた有之候へば、是らはおのづから功者のものも有之候、當家は右體の事あまりこれなきは幸ひの事に候、只今より稽古致し候とて、萬事をすて亂舞にかゝり、費用をいとはすけいこさせ候所が、逆も外のもの、見候てほめ候處へは參らず、とかく簡様なるものは、人のをそしり候ものゆゑ、骨を折てわらはれ候やうなるもの故詮なき事、殊に實事にとり候ても、熊阪のまねをし、或は靜の眞似をなし候も、尤もなる事にも無之、大將のすべき事とも存せられず候、

〔蔭涼軒日錄〕寛正六年正月十八日、奉報蔭涼軒御成、仍間物院主出迎、又出送、於御所間御手水、前十四日松拍快晴、猿樂十二老益健、又音阿妙舞之由、在御談餘也、二月廿九日、夜前御院參、四鼓以後還御、觀世勤十五番云々、音阿勤七番云々、三月九日、今日御院參、觀世勤、其能云々、五月廿四日、奉報當軒并御談義之事也、<sup>○中</sup>前廿一日、觀世宿所有、與洪藏主問訊之事、仍以愚老引之、仍辭之、今晨御成之次、談餘彼藏主被申、其時宜猿樂之様子、愚老雖有瞻望之志、愚老而憚之由、懇々披露之、御一笑耳、九月廿五日、東大寺寺務西堂延請諸老及愚老并侍者等、而煎點小飲、清茶談笑、歸即參謁于一乘院御所、仍四座申樂、今春、金剛、觀世、寶掌、依觀世有寵順第一番被抽之、其餘三座以圖定次第、金剛、寶掌、今春、仍如此也、各出奇、尤爲壯觀也、各勤三番、仍十二番以後、觀世勤一番也、今春、音阿彌雖爲老者、各勤一番也、四座四翁列舞、希代奇觀也、申樂首尾十三番也、

〔明良洪範〕酒井忠勝、隱居シテ空印ト號シ、牛込屋敷ノ山莊ニゾ住居ケル、<sup>○中</sup>此時隱居セルニ付テ、將軍家ヘ捧ゲ物ノ品定トテ、林春齋父子ヲ招キテ、唐筆畫讃ノ吟味セラレケル、御臺所ヘ獻上用意ノ内、土佐光信ガ畫キシ源氏ノ大屏風一雙、此繪ノ意ヲ尋ラレシニ、歌書ノ事、不案内ノ由



ノ法式トシテ、今ノ御代迄モ儀式ノ様ニ用ヒラル、コト如何有ベキヤ、○下

〔後は昔物語〕我<sup>平</sup>澤<sup>結</sup>幼年より亂舞を好て、考るに能役者といふ人の藝も、劇場の役者の如く、昔は上手にて今は下手なりといへば、夫にもなれども、一體拍子の合ひ方等委敷微細になりて、云はゞ利口に成たるといふやう也、昔と違ひ素人には上手多く成たると見えたり、是を考るに、むかしは素人には惜みて、委敷意味は傳ざりしと見えたり、前に云如く、今の人はこらへ情薄く成りて、素人にもよき事を傳ふるよりして、素人にも功者多し、近年遠き諷といひし物の、近き諷となりたる物多し、是又立廻るものは珍らしからぬやうに覺て、遠き諷を能にても囃子に出す様に成りぬ、たとへば神樂なれば、龍田三輪のみにて、卷絹は遠き方にて、何方の能に卷絹有しといへば、めづらしき物出たりと云様にありしが、今は三輪龍田同様の朝夕の喰物と成る、盤渉の早舞なども、融、海人、稀に當麻も出したるを、今は絃上、須磨源氏などをも不斷遣ひしと、樂は唐船、邯鄲久敷物なりなどいひて、三笑、枕蓆童などを不斷著におろし、亂なども常の事になれり、素人も遠き物をも突掛りに打つを手柄として、早く家本の弟子と成り、傳授を多くすますを旨とし、家本も謝禮を取事なれば、望に任せてゆるす族多し、されば傳授物濟たるには、不相應なる下手もあれども、能く穿鑿して學ぶ者は、黒人に劣らぬ者多し、昔の素人は師深き意味を教ざる故これにて能きことゝ覺て仕舞たると見えたり、いづれ素人は今のかたよろしと覺ぬ、

〔朝倉敏景十七箇條〕一從京都四座之猿樂等切々呼下、見物被好間敷候、其價を以、國の猿樂之内、器用ならん者を上、仕舞をも被爲習候者、末々まで可爲嘉樂事、

一於城内夜能可爲無用事、○中

右之條々能々服膺し、晝夜相勤めて、永く子孫に貽厥せらるべく候、諸事内方を謹厚沙汰し候へば、他國の惡黨は、邪魔せぬものなり云々、

みしが、常に此のことを云ひて笑ひあへり、又武家の貴人、猿樂のうたひものをならひて、一節をうたふまでは、せめての事なり、其の所作を學びて、猿樂師と打ちまじりて、色々のわざをなしてまひかなで、ものするは、有るべきこと、もおもはれず、異國にて、後唐の莊宗と云ひし天子、俳優を好みて、みづから其の所作をなして、たのしまれしが、ほどなく天下を失はれしこと、五代史に見えたり、俳優は今の世の狂言なり、士君子の耻づべきことなり、昔平相國の白拍子を好まれしも、妓王、妓女、佛など云ふ白拍子を召してまはせしのみなり、宮女などにこれを習はせたるに非らず、鎌倉の相摸入道が田樂を好みしも、みづから其の所作を習ひたるに非らず、今の世には、やんごとなき人も、猿樂を好むほどにては、自ら其の所作をなして樂しむとす、昔の人に異なり、風俗の下れる悲しき世のありさまなり、前代舊事本記と云ふ書は、大成經とも云ふ、近き頃世のまれもの有りて、聖德太子の舊事本記の名を竊みて偽作せるなり、近世に出来たれることどもを、皆古よりあるさまに書きなせり、其の中に猿樂も神代に猿女と云ふ者より始まり、聖德太子の時三十六番の猿樂あり、白翁黒翁といふものあり、指打の鼓二つあり、兄鼓弟鼓と云ふなど、あらぬことをかきまゐるせり、大なる誤にて、世を誣ふると云ふことはなり、かやうの書を見て、猿樂は往古より此の國にあることぞとおもふは大なる惑なり、南都の春日の祭に、いつの比よりか猿樂をなし、内裏にて近き世には、猿樂を御覽あるはいかなる故ならん、賤しき東人は得えらぬことなり、世に古を好む人まれなる故に、かやうのことにも必づかず、流俗にまがひて、すぢなきことをもよしと思ひて、其のまゝに打ち過ぐるなるべし、

〔政談四〕能ト云物夥シキ費ナル物也、然レドモ當時武家ノ規式ノ様ニ成タル上ハ、此外ニ何ゾカヘ物ナクテハ止ベキ様ナシ、室町家ニテモ御筈初ト云コト有テ、其初ハ樂ヲ用ヒラレタリ、能ハ東山殿ヨリ始リタルコト也、東山殿ヨリ室町家ハ衰タルコトナレバ、衰ヘタル世ノコトヲ武家

〔元寶日記〕寶永二年三月六日於白書院將軍家○繪川自遊舞○繪川使公卿見之。

〔獨語〕猿樂と云ふことは、玄惠法師が書けると云ふ庭訓往來にみえたれば、鎌倉の北條家の時より有りしと見ゆれども、如何なる戲なりしと云ふこと詳ならず、今の世の猿樂は、室町の時より始まれりとかや、竹田の八郎泰嘉勝と云ふ者、此の戲をなしはじめけると云ふ、嘉勝は今の猿樂師の今春大夫が先祖なり、室町の公方鹿苑院殿○足利より、武家にて天下を治め給ふに、古より有り來れる、公家の禮樂を捨て、別に禮樂を作らる、禮は今川左京大夫氏頼、小笠原兵庫助長秀、伊勢武藏守滿忠三人命をうけてこれを議定す、樂は即猿樂なり、それよりこのかた今の世に至るまで、是を武家の禮樂として敢て改めず、武家の禮皆此の國の俗禮なり、猿樂は俗樂なり、猿樂の音は、怒る聲なり、鼓うつ者の口を張りてさけぶも、怒るさまなり、孔子の仰せられし北鄙殺伐の聲と云ふものは、是ならん、今の武士こは、やりたる衣服を着て道をゆくに、臂を露はし、肩張りの臂を掉りて、いかめしくふるまふによくかなへる俗樂なり、但猿樂には淫聲なき故に、人の心をとらかさず、是のみ他の俗樂に勝れり、然れども猿樂には、死せる者の幽靈あらはれて、僧にあひて弔をうけ、罪業を滅し、佛果を得ることを多く作れり、幽靈にあらざれども、おほかた佛道を宗とする趣なり、故に世のはかなきことをまめして、人に菩提を進むる心なきは少し、是を作れる人多くは佛者なる故なり、武家に猿樂を玩ぶは常の事にて、さもあるべきが、吉事の宴饗にこれを用ふること心得難し、酒をすゝむるに付きて、其の詞の其の事になへる一節をうたふは、賓主の情をのぶるわざなれば、中華の古人詩を賦せしに類すべし、猿樂をなせば、幽靈のあらはれて弔をうくるさま、又は世の無情をえらすなど、はかなくかなしきことをうたひまひて、たはむるゝを忍はしともおもはず、只笛鼓にてはやしたてゝ、まひかなづるを、目出度ことゝのみ思ひて、いまはしきに心づかざるはおろかなる事なり、淺の檢校と云ひし目くら法師雅樂をこの





雜掌人

手水こゝに有べし

一 樂屋入之事

一番に道具、二番に大夫、其次脇座入者也、

一 正面の橋よりは、大夫一人通者也、又大夫に被下時、太刀を此橋より、もちてあがるなり、仕舞柱より出入をすべし、舞臺の高さ御座と對様、

一 舞臺の高さ、勸進能はすこしかはる、

一 御座敷と舞臺との間、六間、間中、其間には、道具禁制、但如此はあれども、たゞ三間が能なり、○下略

〔能仕舞手引〕舞臺之次第

一 舞臺のひろさ一丈八尺也、居座一丈也、昔は置舞臺也、其後板敷の高<sup>サ</sup>八尺也、近代八尺二寸也、一橋懸<sup>リ</sup>のは、五尺也、是は人の手をひろぐれば五尺、それを表して五尺也、長<sup>サ</sup>は拾壹間、九間、七間、但定の外に故實也、口傳、又云、阿彌禪竹時分より九間に定<sup>ル</sup>、是は人道の九品を表し、人道物まね九品、其外なしと云心也、又九字の子細も有之事口傳、

〔譚海<sup>四</sup>〕禁裏にて御能御覽ある時は、紫宸殿の前に能舞臺を臨時に構へ興行するなり、能終りぬれば、即刻舞臺を取はらひて、その跡へ砂利を敷て、石すへの穴など見へぬ様にかくす也、舞臺は取はなちにする様にこしらへ置て、又かさねての能に用るやうにゑたるもの也、仙洞御所には能舞臺常に建つてあり、

〔異本〕紵河原勸進申樂記、於紵河原勸進申樂勸世大夫、歲三十六勸進聖、青松院善盛法印、歲九十八鞍馬寺勸進聖也、于時寛正五年甲申卯月五日、七日十日、

御一獻 初日 管領 二日 畠山 三日 治部大輔

申傳へ候し、又永享の比、左兵衛佐義淳へ御成の時は、兼而はしが、りにやねはなく候用意して被置しに、御能半に大雨ふり候ひしに、則やねを組仕たて候て、御能無相違ありし由常に瑞笑物語仕候つる。

〔甲陽軍鑑<sup>七</sup>品第十六〕能之次第

舞臺の圖

口傳

一舞臺の高さは、御座敷によるべし。口傳

一舞臺のうしろに、いかやうの人有とも不苦さりながら弓鏹など、長道具をば置べからず、是は正面要心のためなり。

一地うたひのうしろには、屏風を立てし、又夜に入ば鐵籠をあかす、橋が、りにて同前、

一舞臺の上をふく事あらば、むねよりふく、同おほひと申が本なり、

一上の水引のあまるをば、柱にまくべし、

一橋が、りの長さ三間、廣さ一間、但所によりて今長とも

一松を立てる事、まほ柱の松枝<sup>五</sup>、幕ぎはの松枝<sup>九</sup>、らんかんの竹末とくをゆひちがゆる也、

一脇のうしろの柱に、愛宕の札をおす、

一勸進能の時は、脇座の柱ぎはに蠟燭あり、略中

一樂屋之次第

はやし手

大夫座敷

面箱

狂言大夫

鏡臺

地うたひ

脇大夫

りちかくみれば、能あさくなる物也、そのうへびやくゑの能などは、下より見あげ候て、あしちかのかきは、第一人をよせまじきため、又は時のいひ事、口論などの用方にもよし、それゆゑさやうにたかき舞臺にては、あまり近所は能も見ぬ也、かた／＼以垣を用る也、

一中の舞臺は二間、まなか四方也、是もひさしは其かつかうなるべし、是も舞臺より一間置て、くるわにたかさ五尺ほどのかき有べし、はしが、りへも、人のよりつき候はぬやうに、間をゆひきりて尤に候、縁のたかさ四尺也、

一小庭ののふなどは、二間四方の舞臺もよく候、これもひさしは其かつかう見合なるべし、四間のおたいならば、わき居座はえんをいだすべし、ぶたいのえんの高さ三尺、

一橋が、りの長さの事、大庭のは十三間十一間なり、中のは九間七間也、みじかきは五間なり、五けんよりみじかく候ては、能なりがたし、橋が、りに色々のならひ心持あれば、みじかくはなつきにてはならざる事のみおほし、はやしなどもまぐさはより橋のあひだに、段々うちやうあり、はしが、り能のかんよう也、

右いづれも常の様子なり、御前の能は少様子替るべし、いたじきなどの高さ、御見物所のかつかうによるべし、

一御前の御能の舞臺には、正面に庭へきざはしあり、これは舞のうちに、大夫御前へめす事あり、その時のためなり、きざ橋とをりは見物をかぬものなり、

庭敷の前の舞臺は、敷板のかつかう、少さじきより舞臺をたかく、板敷をはる也、

〔大内問答〕一舞臺のはしが、りには、屋ねをば不仕候哉の事、

やねの事常には不仕候、又やねをふきたる事も候よし申候、文安の頃、畠山左衛門督入道持國へ御成の時、俄二番目の御能より大夕立に而、御座敷にて二三番させられ、公私御無興のよし



鐘ノ作物の事、ワキ出名乗て能力呼鐘をふたい棟木にツリて、能力ワキヘツリたるよし云時、今日の鐘の供養に、女人禁制ノ由云付て、能力畏て候ト云て居座へ直ルとき次第を打也、鐘のツリ所ブタイの真中ヨリ少脇の方へヨセたる吉ト也、是は小鼓ノ方へ足をヨク見せん爲也、鐘の口廻ト高サト竹を同高サニ切べし、一丈五寸ニ竹を可切、

鐘の緒の打やう、コシラへ故實アリ、鐘ヲあげおろす所幾度も在之、然間引事功者の役也、ワキの語の内ニ大夫自身衣しやうを著ル、鐘中へ始ヨリ入て出ス道具ノコト、般若面赤頭、バチ、打杖、或は鉄鏡など入ル、衣しやうして見ン爲也、

道具師

〔明和〕京羽二重〔三〕能道具師

新町通出水上ル町

半田次右衛門

島丸綾小路下ル町

山口權左衛門

舞臺

〔雍州府志〕芝居古八略中

觀世大夫之爲勸進能時、棧敷有六十六軒、是表本朝六十餘州者也、其中

設舞臺、正當處高構之謂公方棧敷、芝居中央建舞臺、方三間餘、是則施藝術之場也、舞臺之後構一室、是謂樂屋、於此所各刷裝束、廻橋懸、出舞臺、其橋懸之長自五間七間九間十一間至十三間、横一間餘、左右設欄干、倭俗諸物體相曰懸、其經營似板橋、故號之、施藝人經鏡間、使揚幕、出自橋懸、能大夫於樂屋刷裝束、臨橋懸之處謂幕際、斯處懸大圓鏡、照見吾形、故或謂鏡間、若有不正之事、則使著其衣裳者改正之、其人稱衣裳著凡猿樂之中、能并脇及狂言、堪其事者稱大夫、故此三大夫出橋懸時、樂屋之幕、使二人揚幕之左右、是謂諸幕、而爲榮也、倭俗每事一雙謂諸、至笛鼓、則雖堪其事者、無大夫號出橋懸時、使揚幕右一方而已、是稱片幕、

〔花傳書〕能の舞臺の橋がゝりの事

一大庭の舞臺は、三間四方、ひさは其かつかう成べし、えんのたかさ五尺也、舞臺のぐるりに間一間あまり置て、高さ五尺あまりに垣をする物なり、左様のたかさえんの上にての仕舞は、あま

四枚、白短尺三枚、一まいづゝ入ませて付る。

〔能仕舞手引〕<sup>四</sup>賀茂

つくり物はじめより出す、かくのごとく一ツなるをば、少し見付はしらの方へよせてをく能也、ぶたいの真中にをけばワキの方へヨリて、置合わろき也、一ツのときは諸能のつくり物みな以かくのごとく也。<sup>○</sup>略

松風

一つくり物の松の置所舞臺の真中よき也、是は車を置合てゑかるべきと也、總じて二つ有作物は、舞たいの置合有之事也、然ども一つを早く取時は、本作物を能所にをく也、是は車も暫く置によりて、羽衣の松よりは、少脇の方へよする心有、諸能作物等の置合尤古實有べき事也、

一つくり物の松はじめヨリ出ス、今春には短冊不付、觀世には付る、舞たい先を通る程おきてをく、<sup>略</sup>○圖 鹽汲車はワキ座になをり、一聲ノ内ニ出ス、今春ニハ車の上に桶二ツ置、觀世には桶一つ車の上に置、一ツはツレ女持て出ル、後に車を引すて、大夫床机に腰懸、連女もつくばふ時に車取入る、

〔能仕舞手引〕<sup>五</sup>三輪

作物はじめより出、やねなし、引廻し有、或云、七五三のしめを引ともあり、中入つくり物へ入、千早懸と云時、つくり物の後より出ル、大夫出て序の間に引まわしとる。<sup>略</sup>○圖 中入してのち、内より衣かくる、衣の裾をそとへゑりをワキの方へなすべし、故實有事也、口傳、

〔能仕舞手引〕<sup>六</sup>野々宮

つくり物始ヨリ出ル、鳥井に柴垣シメをハリ櫛ニ付ル、<sup>略</sup>○圖 車の作物は今春<sup>○</sup>今觀世<sup>○</sup>共に出、道成寺

〔花傳書〕一玄、ほくむ桶の事、銀にたび候て、下三分一ほど、こん玄やうにてさいしき、島をきんでいにて、水などかきてよし、金薄など結構がらせてをくべからず、同桶のをの事、あさぎちん黒茶尤に候、くれなゐ紫、えろきなるを中々せぬ也、高砂當流<sup>○</sup>、<sup>世</sup>親はくまでをもつ、太和が、り其外餘の座には、きをもつ事不審に候、かけ其落葉のつきせぬはといふ時は、くまで尤に候、はけ其とは謠になし、うたひにかけどもとうたは、仕舞する事第一不審なり、とかくうたひと仕舞と別なるは、ひがことたるべく候か、

〔能仕舞手引〕高砂

昔は作物有<sup>○</sup>、<sup>略</sup>勿論はじめより据置、近代は其沙汰なし、或云、御即位移徙その外珍敷仕ンニハ、當代にも出して可然、由此時は作物の拵やうに故實有べし、

兼平

一觀<sup>○</sup>、<sup>世</sup>方には船のつくり物あり、置所、舞臺右の端ト真中トノ間少しすじかへて置、竿は右同

三井寺

作物大夫の中入過てソノマ、出す、鐘樓に鈴をツル、今春ハヒヅメヲ置、他流ニハロクニヲク、鐘置すまして、次第打出す也、<sup>○</sup>、<sup>略</sup>或云、鐘ヲ玄ゆもくにてツクコト有、

猩々

つくり物はじめよりいだし、つばのうへにひしやく也、<sup>○</sup>、<sup>略</sup>つくりものいづるはまれの事なり、

關寺小町

作物に大夫入て、はじめより出ル、つくり物のやねわらや也、<sup>○</sup>、<sup>略</sup>大夫の腰の通兩脇に糸をハリ短冊を付る、左に四枚右に三枚付様アリ、右の方に杖をよせかけ、ハリたる繩にもたせて置也、故實有、引廻有、サシ聲の朝三鉢ト謠前にとる、床机に腰かけてウタウ、或云、短尺下繪なし、雲ノ短尺

一四條室町東江入ル町

〔明和〕京羽二重〔三〕能裝束師

二條通高倉西江入町

吉田清右衛門

新町通二條上ル町

越後屋喜右衛門

衣書

〔雍州府志八古蹟〕芝居○中

能大夫於樂屋劇裝束臨橋懸之處謂幕際斯處懸大圓鏡照見吾形故或

謂鏡間若有不正之事則使著其衣裳者改正之其人稱衣。裳。著。

〔能訓蒙圖彙〕四物。著。せ。

松平紀州様

下天神社于  
魚柳上ル

吉田五郎兵衛

同

同

半十郎

松平安藝守殿

出下しや町通  
水小路へ入

山口權左衛門

松平賀州殿

小四洲上ル  
小路院通

藤田太右衛門

釜座通御池

山川五兵衛

釜座通御池

高井清右衛門

松平賀州殿

門等四院

平井才兵衛○以下  
四人略

〔能之衣裳付〕序夫能之衣裳の著せ様古今に至迄更に替る事なし尤上懸下懸の違ひ少は有ども、

見覺の致さぬものなり雖然脇師拍子方者多く著せる人は少し又初心の大夫も二三十番は覺

るといへども悉くは依不知何方に而も迷惑有也予が家に傳りたる一卷見れば百廿番仕舞付

衣裳の著せ用知せる有未初心の衣しやうさせ又は人々の便にならんかしと令板行者也、

元祿貳歲巳霜月吉日

道具

〔能仕舞手引〕一劔○圖略下  
敷之中略、面桶

かつらぎ葛桶○中

田子○中

舍利

水桶

鉦○中

葛鼓

よき

略○中

唐團幣

尉扇子

珠數

鈴

滿珠珍干○中

庭鳥○中

野干○中

舞扇子



差付所

下長者町通新町西へ入町

烏帽子折

室町通三條下ル町

舞扇子屋

小川通本誓願寺上ル町

同町

室町通六角下ル町

同町

三條釜の座

借能衣裳屋

新町通五條橋下ル町

出水通新町東へ入町

烏丸通二條下ル町

〔京都御役所向大概覺書六〕諸職人之事

能裝束師 井 衣裝著せ

一尾州方

下立賣千本東江入ル町

一松平加賀守方

室町通丸太町上ル町

一龜田内匠方

夷川烏丸西江入ル町

一松平淡路守方

佛光寺柳馬場西江入ル町

一出水西洞院東江入ル町

一二條高倉西江入ル町

一四條柳馬場西江入ル町

一撞木圖子

藤村二郎左衛門

三宅近江

舞扇子や三右衛門

久文字や勘左衛門

龜屋利兵衛

井筒や平右衛門

大扇子や市郎左衛門○中

龜屋彦兵衛

川崎次右衛門

錢屋善四郎

龜田市右衛門

小谷金兵衛

藤井新助

濱岡勘七

半田次右衛門

吉田清右衛門

山口權右衛門

藤田太兵衛

ルコト歎クベキアリ能ノ裝束我等若キ時トハ今ハ仕立方ヨホド違タリ女ノ著ツケ唐織ナド、以前ハ身幅廣ク裝束ツケタルトキモ、フクレタル容體ニテ、大ニ古風見エタリ、今ニテハ身幅セマクセヨトテ、袖形モ大ニ違ヒ、當世風ノ形ニセリ、其中甚シキハ、古傳セシ裝束ヲモ、今風ニ仕タテ直ス人モアリト云ヘリシトゾ、カ、ル職人サヘモ、コレホドノコトハ必アリ、況ンヤ士大夫トシテ、古今ノ變ヲモ辨ゼズシテ、其制ヲ替ルハ奈何ンゾヤ、

〔天保十一年武鑑〕御裝束所御能織物師 上まき丁連池百助 上まき丁俵屋嘉吉

御能裝束道具師 白かれ丁小林定七

〔能訓蒙圖彙〕諸職之名匠

唐織屋 小川通上立賣下ル町 連池平右衛門

衣櫛通下立賣下ル町 俵屋八右衛門

大北小路 上立賣堀川東へ入町 中西六兵衛

上文屋辻子 東洞院通下立賣下ル町 玉屋四郎兵衛

尉斗目屋 油小路通下長者町上ル町 黒川相模

水衣屋 東洞院通下立賣下ル町 油野傳兵衛

せいかう屋 四條上ル觀音辻子 鯉川十右衛門

上京文屋之辻子 大北小路 七左衛門

せいかう屋 藤右衛門

五郎兵衛

五左衛門

縫薄屋 新町通下長者町上ル町 谷口七左衛門

猩々

一ツキ、大口、袖無、腰帶ハサヲ髷、あふぎ持、刀指、○中或云、長絹にても法被絆切にてもくるしからず、總別唐人能は絆切用て不苦とぞ、諸能准之、略

一大夫、紅袴、腰帶、ツボ折小袖、赤頭、面猩々、あふぎ持、又大口にても、いかにも赤裝束を用、

〔能仕舞手引四〕八島

一ツキ僧一人、或三人、白衣、水衣、腰帶角帽子、珠數持、扇持、

一大夫、尉、白衣、水衣、腰帶、面三光、あふぎ持、釣竿かたぐる、玉だすき取、又ツキ能にかたげ物あらばつきて出るよし、

一連男、水衣、こしおび、放髷、あふぎ持、釣竿かたぐる、玉だすき上る、

一大夫、後唐織絆切、法被右肩、こしおび、梨打るぼし鉢巻、白面平太扇持、太刀はく、或は大口ソバツギにても、

〔大館常興日記〕天文十一年二月十二日、今度唐船に猿樂の裝束に成つべく候き物御さ候間、させられて觀世に可被下と被思、食候由内々御尋也云々、尤可然奉存候由各言上之、仍總次加證文申也、日行事攝州より、以折紙承之也

〔享保集成絲綸錄三十六〕元祿十七申年二月

覺○中

一能之裝束甚結構成も相見候間、有來分は各別、向後輕可仕事、○中

二月

〔甲子夜話二十一〕關岡某ト云ルハ、官服ヲ仕立ツル町人ナリ、蹴鞠申樂等ノ服ヲモ制ス、其業ヲ以テ時々予○清松浦ガ邸ニモ來ル、ソノ内ノ一人年六十餘ナルガ語シハ、裝束ニツキテモ、古風ノ變ズ

諸の儀なり、式子内親王いにしへ禁中に御入候時のありさまをば、僧に亡靈とかりにへんげし  
て、まなふて御みせ候すがたなれば、むらさきの御衣可然候、

〔花傳書六〕一せうの類、但眞のつり人、木こり、すみやき、鹽汲れうしなどのあふぎのさしやう、あま  
りあたらしくなき扇を、右のわきにさきをうしろへなし、かなめの方を前へしてさすべし、かり  
そめにも、つまくれなひなどは、中々持ぬ物也云、あふぎのさしやう、つり人、まほくみなどの類は、  
つねのごとくに前へさすべし、いやしきせうの類、よき人のかりにへんげたるは、前にあふぎさ  
すべし、

〔能仕舞手引一〕高砂

一ワキ、三大臣、五人立たちたる例もあり、大口、かりぎぬ、腰おび、烏帽子、あふぎ持、○中

一大夫、尉、大口、水衣、腰帶、尉髪、あふぎ指、面小尉、箒持は、今春○サラへ持は、親世○うたひの文句ニハサ

ラへ叶歟、

一連姥、白衣、水衣、

一かつらの上にうば髪懸、

一かつらおびいろなし、面うば、あふぎ指、箒持、今親とも○中略

一大夫、後、大口、狩衣、腰帶、垂黒、鉢巻、透冠又は風折にても、面カンタン男、カ平太、カ扇、

湯屋

一ワキ、大口、長絹、腰帶、風折、金、黒、あふぎ持、

一トモ、すはう袴、髪帶の折上つねの扇、太刀持、

一連女、白衣、覆かつら、かつら帯、面はなににても女面、文持ていづる、

一大夫、白衣、覆かつら、盤帶、面小面、あふぎ持、



一ひた面の出立の事、いかにもく下を色々と出たち候て、上をくすみ下がさねに取あひ候やうに、いでたち候事肝要也、去ながら人により其身に似合たる小袖あり、又にあはぬこそであり、其みあはせかんよう也、又大夫のとしのほどらひにもよるべし、

一旅僧、びやくゑにてすこしえはれたる水衣に候、

一夏をむすぶ僧、或は住所の僧、みやこがたの僧はいかにもく引つくろひゑもんたゞしく、水衣小袖はきとしたるをちやくすべし、

一僧都、法印、阿闍梨上人、その僧はいかにもけだかく尋常にひきつくろひ、いかにも水衣もはきとしたるを著すべし、時により大口きる事あり、

一草のせい木のせい、其外へんげの物のふるひ出立、何と出たち候てもくるしからず、

一鬼の出立、いかにもくゑりおほく、かさねをもあつく出立候事、かんようなり、いかにもくあかくいろくくと出立候なり、

一神のふかりぎぬあかく、ばうはきいろなし、下がさねはいかにもく色々と取あひ、はえあひ候やうにいでたち肝要なり、かりぎぬ色なしならば、うはぎはいかにも色々しき小袖尤に候、中

一道成寺出立の事、前はなしでもしやめんに相應したる小袖つばをるべし、後はつばおりをと

り、面をかけかへ、常流世○観はおほひかつらのびんをみだし、ながかもじ尤に候、大和かゝりはまやぐまをかづくなり、中

一定家の後の出立の事、むかしはつたかつらの色をなじもえぎのちやうけんをきたりけるを、此花傳書をつくられしより、このかたむらさきのちやうけんにさだむ、其子細は定家の大夫は式子内親王にてまします、謠の儀に云、ありし雲井の花の袖、むかしをいまにかへすなるといふ

頭巾 角頭巾略○中 透冠 唐冠略○中 鍬形略○中 沓略○中 金風折 烏帽子 大臣帽子 黒

風折略○中 頭巾 袈裟略○中 天冠 龍立略○中 腰帶略○中 葛帶 はさら 大臣烏帽子 な

しうち 霜烏帽子 たてゑばし

〔花傳書〕能といふ本意は、おもしろきを本とす、またて見るしければみどころなし、衣装のきやうゑもんあしければ、其姿みられぬ物也、たとひ上手たりといふ共、またてあしければ、身體に花さきがたし、上中下序破急の能の位をほんとして、似合たるやうに出立候事かんようなり、一天子の御事は申に及ず、みやたち公家の御うはさを作りたる能の出立いかにもくけだかくいでたつべき事かんようなり、

一女御かうい其外公家上臈の御風情作りたる能出立の事、いかにもくけ高くうつくしく、花やかいろいろかさねに念を入出立べし、まづうはぎはからおりを本とせり、大内上臈なりとも、うねめなどは又位さがりたる宮女なり、心得べし、からおりなどは無用也、楊貴妃取分からおり本也、大夫三十のうちくるしからず、年よりたるしてはこれを斟酌すべし、その子細は、年よりぬれば、つまはづれ見入身なりすがたかゝりまで、わかき時にちがひいやしき物なり、かたく斟酌尤に候、若き大夫もころなどにはづれ身なりあしき大夫はこの能を斟酌尤に候、

一物狂の出立、ちかきところよりきたる物狂、遠國より來る物狂、ちがふべし、遠國の物狂のいでたちは、ちとふるき小袖然るべし、ちかき物狂の出立は、あたらしきいしやうくるしからず候、惣別左様の人は、衣装を色どりかざり、はきとしたて目にたつ小袖無用なり、

一舞候老人の出立、いかにもくくすみたるいろなしの小袖、もつとも候、さりながら上いろなくば、またぎは少色どるべし、小袖の色によりはえあひ候やうに出たつべし、但上の装束によるべし、能によるべし、

〔駒井日記〕文祿三年二月九日、暮松を以大閣様江○豐角坊作之面、明日十日に御進上、拙者持參可  
仕事、

〔梵舜日記〕慶長八年五月十八日、豐國神事如常、越州住人出目助左衛門ト云、大明神依御靈夢、今春  
之小面一、新敷ウチヲ奉納了、

〔雲萍雜志〕羯摩乘親は、きはめて面打の上手なりけれども、ひと、せに一つは打たず、性酒をこ  
のみて酔ひて、舞ふことを樂しむ、ある折から老母のいへりけるは、はや米の櫃には蜘蛛の巢をか  
けたり、勤めて打つべきにやとせめければ、乘親おどろきて、さあらば今日よりして懈らず、打つ  
べきなりとて籠りけるが、四五日を経て面を打ちて、あつらへたるかたへ持ち行き、料を持ちか  
へりて母にわたしければ、母よろこびていへるは、多くの金を得しは、面いくつ打ちたるやとと  
ふに、八おもて打ちたり、されども心になはざるが、その中に七面あれば、みな家にのこせりと  
て、取り出だし見せたり、鬼女の假面なりければ、見るさへおそろしとて傍におきけり、その夜盜  
人入て親子臥したるを伺ふを見て、母かの鬼面を顔におほひて、眼の穴より見ながら、やよ盜人  
の入たるぞ、乘親おきよといひけるを、盜人見てあとさけびおどろき、いづくともなく逃失ぬと  
ぞ、

裝束

〔能仕舞手引〕能衣裳之圖

白箔○圖略、縫摺箔、あついた、唐織、尉斗目、縫箔、法被、長絹、舞衣、狩絹、白衣○

水衣、寄水衣、唐織、大口、指貫、直垂之上、同下、半切○袴、そはつぎ又袖無、長袴上

同下、すはふ○中

姥髮、かつらがみ、羽圍○、赤頭○、黒頭、黒垂○、烏甲、白垂、烏袴、腰袴、葉袴○中、長範

源助上滿壽滿弟

弟子出目

近江弟子

宮田筑後 京都ニ住ス

近江弟子

梅岡次郎兵衛 江戸ニ住ス

洞白弟子

兼子儀右衛門 江戸ニ住ス

〔大館常興日記〕天文十年八月十二日、禁裏様より能の面二男被思食、晴光に被下之、傳奏廣橋殿承之云々、仍則上意へ懸御目此趣申入處、傳奏へ可參申、歟其段愚老可相談候由仰也云々、いかにも傳奏まで參候て忝通言上可然存候御太刀など進上はかへりていかゞと存候由申之也、使富左也、

〔太閤記十四〕將軍於名護屋癸巳御越年之事

今春大夫八郎、觀世大夫左近被召寄御能御覽有べきとて、飛力指のぼされければ、二月下旬○文年○中兩人至名護屋下著せり、略今春家の名物こおもて、はんにや、小尉、三光の尉、觀世家の名物、ふかひおもて、まは尉、あふみの女、こへしみなど、うつさせられ度旨、内々にて御所望有しかば、辭し申に及ばれぬ事にや有けん、即面を上奉る、其比山城宇治郡醍醐に角坊とて、面などをうつし侍りて、たぐひなき名人有、即めし下し、うつし奉るべき旨、木下半介を以て被仰出し、かば、十日計のうち、に五出來し上奉る、御一覽あるに、何れが本、何れがうつし共見えわかざるにより、御威不斜、種々の引出物拜領してけり、残りの面共も出來し奉れば、おもての天下一になさるべき旨おぼされて家康利家などに、いかゞ有べきととひまいらせられしかば、尤宜しくおほしますべしと申上られけり、其夜めし出され、銀子五十枚并天下一號之御朱印給りぬ、角坊が仕合、とかう申に及ばれず、かく能にすぎ給ひしによつて、名物のおもて共多く聚り來る事、大かたならぬ事共な



洞水滿矩 トモミツノタテマツ 又滿昆 トモミツノタテマツ 初名木工之助  
享保十四酉年死、六十九年、

甫閑滿猶 トモミツノタテマツ 初名中藏  
寬延三年死、四十八年、

友水庸久 トモミツノタテマツ 初名木工之助後義恩ト號、  
明和三戌年死、三十二年、

石井三右衛門

長雲庸吉 トモミツノタテマツ 初名木工之助  
安永三午年死、二十四年、

洞雲庸隆 今年四十三歲

出目家

三光坊  
二郎左衛門滿照 トモミツノタテマツ 越前國府中、新町ニ住ス、是面  
打ノ始ナリ、凡三百餘年許、

二郎左衛門滿則 トモミツノタテマツ 住所同

源助秀滿 トモミツノタテマツ 古源助ト稱ス、初名源次郎、後常心坊、又  
常慶トモ云フ、府中村安詳寺ニ住ス、

右滿照ヨリ秀滿迄ヲ越前出目ト稱ス、上作ノ物多シ、目利口傳、

元休滿永 トモミツノタテマツ 又滿長、初名源助、京都ニ住シ、後江戸ニ住ス、  
古元休ト稱ス、寛文十二年死、百二十六年、

元休滿茂 トモミツノタテマツ 初名源兵衛  
享保四亥年死、七十九年、

元休滿真 トモミツノタテマツ 初名十八  
今年六十六歲

兒玉家

近江滿昌 トモミツノタテマツ 初名左源太、滿永養子トナリ、出目ト稱ス、後離縁シテ兒玉ト號ス、初江戸ニ住シ、  
後京都ニ住ス、寶永元年申年死、九十四年、

長右衛門明滿 トモミツノタテマツ 又滿貞、後近江ト改ム、  
京都ニ住ス、終年不知、

長右衛門能滿 トモミツノタテマツ 初名市郎右衛門

弟子出目

滿永豐  
元利榮滿 トモミツノタテマツ 江戸ニ住ス、古元利ト稱ス、  
寶永二酉年死、九十三年、

元利壽滿 トモミツノタテマツ 初名淺右衛門  
終年不知

元利右滿 初名二郎大夫

近江打ト云、井關先祖ト云、

出目は開燒印 ウツシハ上手、少進法印取立、

友是開子開

出目源助燒印 後元休ト云

同近江燒印 元休養子也、其子長右衛門近江京都ニ住ス、

出目喜兵衛 源介弟子、受領シテ備後ト云、洞伯ト云、其子奎之助、

出目源助 法體シテ源理ト云、子源之助、

角ノ坊打ト云者有不勝

奎介 受領シテ大和ト云、狂言面打也、

〔假面譜〕井關家

三光坊弟子  
上總介親信近江國海津住

次郎左衛門住所同

備中掾住所同

河内大掾家重初近江國ニ住、後武州江戸ニ住、正保二戌年死、百五十二年、

上總介ヨリ備中迄三代ヲ、近江井關ト云、イセキト彫附有、依之世ニ片假名イセキト唱フ、近江

井關上作物多シ、目利口傳、河内ハ古今比類ナキ上作ナリ、後ニ業ヲ易ルト云ヘリ、依テコノ子

孫面打無シ、

河内弟子  
大宮大和真盛法名木工入、初南都ノ社人ノ由、後武州江

出目家 大野 出目トヲ

大光坊弟子  
是閑吉滿初越前國大野ニ住シ、後山城國京都ニ住、長閑時代元和二辰年死、百八十二年、

友閑滿承應元辰年死、百四十六年、 助左衛門面打タズ

洞白滿初名加兵衛、後備後掾、又淡路掾、初滿永弟子、夫ヨリ滿昌ニ從フ、後助左衛門養子ニナレリ、正徳五未年死、百八十三年、

小面 狸々 中將 喝食 邯鄲 姥 シンカク 小尉 慈童 山姥 同斷

赤鶴吉藏 越前大野ノ者、龍右衛門時、 桀若 飛手 長靈 天神 黑鬚 大痘 獅々子 猿

増阿彌久次 人寶永四年迄三百二十六年也、平安ニ住ス、ヨ サウノ女 泥眼 孫三郎 マスカ

ミ 小姫 曲 近江 龍女

氷見宗忠 増阿彌同時越中法花坊主也越 姥 蛙 瘦男 景清

福來 人王百一代後小松院應永年中人、寶永四年迄三百十四年也、越前一條ノ人也、

石王兵衛正友 雛尉 鼻腕 石王 アユフ メウカ ハ尉 俊寛 橋姫

春若 夜又トモ 守ト云、其後丹波守トモ云、

小牛次清光 永和中、大和 小牛尉 朝倉、笑尉 アカフ

越智吉丹 人王百四代後土御門院文 曲 近江

比叡山三光坊 是ハ醍醐通ニ上橋ト云、 三光尉 大痘 小尉

十作之外ノ上作

千種アヤカシ 三井寺僧日光 永徳文藏 越前永平寺ノ僧西連

慈雲院 本願寺ノ下間少進ニ有之 南都興福寺ノ知恩坊 彌勒 翁有之也 是ハ佛師ト云

井關 河内ト云 近代ノ上手也、鞍打之後ニ醫師ニナル、是ハ天正年中ノ人、法名回齋ト云、駿河ニモ

住ス、信長時代、

近代ノ作

タンマツマ 狂言面ノ作 是ハ長命徳右衛門伯父也 山田喜兵衛 タンマツマ弟子

新田新助 打、狂言面打也、

越前打ト云不勝、三光坊未流出目先祖ト云、

ん、是は一筋づ、抜とるなりといひて、彼列來りし人々、包袱の裡よりひとつの翁の彫面うづめんをとり  
いだし、鋸のこぎりもて亦四郎が髭を一すぢ抜ては、かの木面にうゑ、亦一根ぬきてはめんに植るにぞ有  
ける、亦四郎疹いぼ堪かがたく涙を流し、おのれは剝落して進することゝ、こゝろえ、御誓住はいたし候  
へども、斯様のなんぎに候はゞ、御免し給はるべし、價金はこのらす返し進すべしと云ければ、彼  
さむらひ大いに驚り、剃たる髭は死毛なり、誰か一圓金にも買ものあらんや、武士に兩言なし、今  
になりて斷言を承引んや、爾なんと我とは奈何にもあれ、我主君へ辨解なし、今は爾何といふとも、節  
に是をぬきとるべしと叱けるにぞ、亦四郎怕れいり、玄くろからは詮方なし、左も右も倣給へとて居  
りける、彼ひとく、再般またまた鋸をとりあげ、亦四郎が面上にむかひ、髭一根をぬきとりては、彼面上に  
植、また抜てはうゑける事上首の如し、亦四郎兩眼より泪を流し、堪居ける、當日一日には植かね  
けるにぞ、次の日も亦來りて、斯のごとく倣、三日にして漸々に植をはりけり、亦四郎是より後心  
ぬけして、飢子のごとくなり、鬱々ふさふさとして暮しけるが、五六十日過て、二三日病て死去す、寛政六寅  
年七十九歳なりし、

假面工

〔雍州府志土七〕假面 凡舞樂并猿樂依其事掛數品之假面於面顔而舞造其面謂打面、凡面有十作、  
倭俗巧手造之物總稱作、其於作舞面也、古今内十人、有得其名者、近世井關近江爲巧手、舞樂面自中  
華來者多、

〔四座系圖〕面作覺

德若鎌倉安野太子、人王八十九代龜山院文永年中ノ人、  
也、文永元年ヨリ寶永四年迄四百五十二年ニ成、

三日月 トカウ アヤカシ 節男

邯鄲 鷹 頼政 マスカミ 右之類ヨシ

石川龍右衛門重政 人皇九十代後宇多院弘安年中ノ人、弘安元年ヨリ寶永四年迄四百三十年  
也、平安四條ニ住ス、



十四五の時の事を作りたるのふに、わかおとこなどにもあふまじく候、わか男は十八九かほ也、加様の事よく心得べし。

〔能訓蒙圖彙<sup>四</sup>〕諸職之名匠

面屋。

堀川通中立賣下ル町 兒玉近江

鳥丸通下立賣上ル町 清右衛門

下立賣鳥丸東へ入町 勘左衛門

〔百家琦行傳<sup>三</sup>〕髭の亦四郎

安永天明のころ、江戸青山久保町に髭の亦四郎と云もの、在けり、夫婦とも白髭にて一對の雪のかしらなり、別て亦四郎は猶清く、白糸をもて頭を編るがごとく、髭の長さ一尺一二寸あり、妻にはいさゝか黒毛もまじりたれども、亦四郎は鬢髭とも黒き毛とては、一根も有事なし。<sup>略</sup>中一時四十餘りの士下隸二人ひきつれ入來り、亦四郎に對面し、それがしは市谷邊何がし侯藩中の者なるが、不斗貴老の髭のうつくしき事をつたへ聞我君これを買もとめ度よしを曰ふ、這故にわざわざ來りて此事を談するなり、倘苦しからずば其髭を賣くれ、價は望にまかすべしといふ、亦四郎聞て、賤老數年大事にかけて延し候ふ髭なれば、一向に賣事を好ず、さりながら止事なき御方の御要に用ひ給はらん事、冥加の程もありがたくおぼえ候ふ、若這髭をまゐらせなば、如何ばかりの酬謝をたまはらんやと問ければ、彼さぶらひ曰く、三十金を贈るべしといふ、亦四郎はつねに無欲の者なりしが、當下いかゞおもひけん、彼三十金にて髭を賣さむらはんと答けるに、ぞ侍は嬉びて、さらば四五日を経て髭請取に來るべし、且證首に半金をわたすべしとて、十五兩おきてかへりけり、斯て四五日を過しける處に、かの侍また二三人を倡引來り、亦四郎に髭の日の残り十五金を與へければ、亦四郎よろこびて是を請をさめ、然ば髭をさし上べしとて、剃刀をとり出し、剃落さんと傲けるを、かの侍大いにおどろき急におし止め、剃おとしたる髭何にかせ

一難波の梅京が、りははやおとこにて候、たうかふりにて、破の舞なり、餘の座はあくせうをかくるもあり、あくせうの時はかくにまふ也、出立ちがふべし、

一さねもり前せうなり、後わらひせうなり、

一とほる前わらひせう也、後中將也、

一たむら前童子なり、後はやおとこか三ヶ月也、平太はかけぬ也、田村は祝言の修羅なり、平太は祝言にかけぬ面也、わき能など、にかけ候事、大きなひがことなり、略下

〔花傳書〕一面を見るやうの事、まづ面のおほひをとり、面のうちにあて、めんの緒をつけ候所を、

左の手にとりて、右の手をつき見べし、是は貴人の御前にての見様也、同連ならば其心得有べし、

略中

一面のおのゆひやう、かつら帯の玄たへさがりたるを、二すちながらのけてゆふもあり、一筋玄たへなりたる方の、うへにゆふこと本也、

一中將の面、わか男の面、かはりはまゆのあるとなきとのかはり也、まゆのあるにはまみのけがき有まじ、又まゆずみはかまには、まみのけがき有べし、右のかはりめなり、

一兒と童子めん、しばいおなじころなれども、かはり候所は、ちごはけだかきかほばせにて、是もまみのけがきなし、まゆずみをはくなり、又童子の面は、かほばへ、あまりにけ高くなく、みだれがみにてまみのけがきあり、

一めんの事、あまりあたらしきは、きらめきてあしき物なり、またあたらしきみにくきとて、あまりふるすぎて、ことはげたるも猶見ぐるしき物也、よきほどのふるき尤に候、

一面の緒の事、女面は紫男面はあさぎ、せうのめんは玄ろし、鬼の類はいづれもあかし、

一面のかけやうの事、其うたひに作りし人の、としばいいくつの年比をつくりし事よくわけ、二

也、其上としよりなり、小町ははじめは宮女なれ共年老て狂亂となり、乞食になれる女なり、海士の後は龍をいたゞき候へば、つねのやせ女にてはとりあひ候はず候、いかにものすさまじく、目かね入たる女可然候、此心もちいづれへもわたるべし、

一草木のせい、其外ばけ物のふるひ、ときによりいゑやうにより、はやしてにより、おもてかはるべし、さだまらず、

一道成寺本なりのゑやめん、鐵輪なまなり可然候、あふひの上は中なりのゑや面尤に候、

一せうの面の舞能は、いづれもいし王うひやうゑゑかるべし、

一ゆやはこおもて也

一松風はふかいおもて也

一鞍馬天狗後へしみ也、またあくせうきる事、大へしみ大あくせうのはやしわけ大事也、出立まぢがふべし、

一うかひ、昭君後大天神なり、またこへしみきる事もあり、さいたうの鬼なり、大夫の心もちせうくんにすこしかはる也、

龍神のふるひ、くろひげ也、

一ふちとの前にやせ女きる事あり、又うばの面きる時もあり、大夫のこゝろもちそとちがふべし、出立もすこしちがふなり、

一かなわの前、あふひの上の前の面のやせたる女の、物おもふけしき有て、其さますさまじげにて、目もとすこき女面をきる也、

一物狂のふるひ能によりてちがふべし、大方のとをりは、女物狂ならば、少としふけたるかほの少やつれたる面尤に候、

やうの、じやくろくわつとはき給へる所を打、天神のめん、天神の能にきしよりの名也、人のかりめされしと、ふしぎ成れい夢有てかへされしめん也、家にをさめたてまつれ共、又れい夢有て、今もきる也、小へしみは世子きいたされしめん也、よのものきべきこと、今の世になし、はめんにてうかいをばえいだされしめん也、ことめんにては、うかいをほろりとせられし也、めんも位に相應たらんをさべし、此座のちと年より、まゝ有女めん、ちち打也、世子、女のうには、是れをきらふへし也、猶名よのめんどもあるべし。

〔花傳書五〕一面のかけやう、高砂弓八幡など、はじめは尉の面、後は目にかねの入たるは、やき男の面なり、さりながらよきは、やしそろひたる時は、すぢのめんなどきる事あり、すぢおとこのときはくらゐなを急なるべし。

一天冠いたゞく能は、そうのおもてなり、但菩薩の能ならば、でいがんの女面なるべし、付うたひの位をよりて、又でいがんきぬ菩薩あり。

一通小町、藤戸、あこぎ、うとふ、にしきぎ、いづれも靈のやせ男なり、但右の内にて通小町は、面の心もちちがひ候、其子細は公家也、深草の少將戀にやつれたるかほなれば、面けだかきをもちいる也、残りはいやしきれうしなどの、うき世のわざにやつれ、死たるかほなれば、面に其心得有べし、是はおほきなるちがひ也、いづれの能も位を分別し、上臈下臈をわきまへ、其年比までも分別をとげ、似合たる面可然也、衣装のきやうも同前なり、また錦木はすこしちがふ、是はあまり下らうにあらず、そのうへ懸路にて死たれば、かよひこまち、うとふのあひだ也。

一定家ひがき、そとばこまち、あまのち何もやせ女なり、去ながら定家は、式子内親王ひめみやにてまします間、かはえけだかくやせたる面なり、卒都婆小町ひがきは、少いやくやせたる面、まかるべく候、何もうやしき能にはあらねども、式子内親王にはくらべがたし、ひがきは白拍子



天ノ面是ハ聖德太子ヨリ敬下世間ニカケ申面ニテハナク候 翁太子御作此面ニ付奇特多 三番神同斷

翁弘法大師 小面龍右衛門 磐若ハニヤ坊 三光三光坊 小尉三光坊 曲越智 中將

龍右衛門 ツリ眼赤鶴 邯鄲龍右衛門 増増阿彌 テイ眼増アミ 姥龍右衛門 乞食越智

童子龍右衛門 山姥福來 長靈狸々 龍右衛門 平太德若 アク尉福來 シカミ赤鶴

鼻コフ福來 蛙氷見 大天神赤鶴 大ヘシミ三光坊 マスカミ德若 石王石王兵衛 カヲ

ナカ龍右衛門 連姥龍右衛門 小飛手赤鶴 小天神同 小ヘシミ三光坊 シンカク 大飛

手一ヘン アヤカシヒュイシ 石川越智○仙

〔世子六十以後申樂談儀〕一めんのこと、おきなは、につくわうち、みろく打ち也、此座世○觀のおきなはみろく打也、いがをはたにて、ざをたてそめられし時、いがにてたづねいだしたてまつしめん也、あふみには、まやくづるさるがく也、鬼のめんのじやうす也、近頃ゑち打とて、ごせんゐんの打、うちのもの也、女のめんじやうす也、ゑちせんには、いしわうひやうへ、たつ右衛門迄は、たれもきるに子しや、其後ふんざう、其後こうし、其後徳君也、いしわうひやうへ、たつ右衛門迄は、たれもきるに子細なし、夜しやより後のは、きてをきらふ也、こんがうごんのかみがきしふんざう打の本うち也、此座に年よりたるせう、たつ右衛門戀のおもにのめんとて名よせし、わらひせうはやしやが作也、おい松の後などにきるはこうし也、ゑちの打し面共打て、あふみさるがくにゆいもつしけるが、やまと名人とて、世子のかたへいわとうして、送りしゆいもつのめん、今ほうしやう大夫のかたにある女のめん、かほほそきせうのめん是也、とき／＼げんざんみに、さいすきてきられし也、おとこめん、近比よきめんとさた有し、ちくさ打也、君おとこめんはたつ右衛門也、く阿井のとびて、此座の天神のめん、大へしみ、小へしみ、皆しやくづる也、大へしみをば、他國よりはやまとべし、みと云、此めん也、大へしみ、天神のめん、もつはら觀阿よりのちち代のめん、とびてはかんせうじ





圖心に浮みし儘此謠をうたひ候が、例よりもこゝろのどやかに謠よく覺候ぬと申せしかば、白極は偏に我非を悔て、是則我心の師也とて、福王が弟子と成ぬ去れば自然と人をなびけたる謠なればとて、流義の秘藏とせしと云へり、

〔槐記〕享保十四年閏九月廿二日御本殿御口切、准后様○近衛家照入江様鷹司様三門様○中略

一調

蟬丸

權之進

獨吟

善介

松虫

十郎兵衛

五郎四郎



浮舟

玉葛

太鼓一調親世左吉春雄右衛門

葛城親金

百萬親

松山鏡親金

遊行柳親金

小鹽親金

野守親金

杜若親金

唐船親

龍田親金

山姥親金

春日龍神親金

智願寺親金

西行櫻親

六浦親金

雲林院親

照君親

鶉飼親

三笑親

胡蝶親

金禮親

伯母拾親

水室金

難波金

當摩金

舟辨慶親金

卷絹金

是界金

羅生門稱ニ相動申候

金

無謠一調親

一調一管

葛城親金

雲林院親金

唐船金

杜若親

遊行柳親

獅子親金

〔翁草五十六〕一謳曲に更科と云曲舞有、さもなきやうなる謠ながら、福王派にて大切にする謂は、

一昔白極善兵衛或は萬野九郎兵衛と云鼓打、其世の妙手なり、福王茂兵衛も謠曲堪能たり、或侯家の饗席

に此兩人を召て、鼓の一挺を打せらるゝに、次の間にて福王白極に對して、何を可謠と問ふ、白極

何心なく、何成とも謠るべしと答、無程一挺始り、福王出て此更科を謠出す、白極此謠を知らず、去

れ共歴々の饗席と云、殊に何成共と答し上の事なれば、時宜に隨ひ鼓を擊終ぬ、聞人兩人が堪能

を興す、其翌福王が許へ白極行向ひて、頻に慙愧ス、福王其所以を問、白極手を拱て曰、予藝に誇る

心聊無しと、常に相嗜處に、昨日不圖も御邊に對し、卒忽成過言に及ぬ、あれは何の謠に候や、御傳

へ可賜と、誠に後悔の心面に顯れぬ、福王手を拍、扱々堪能の人哉、其謠を不知してあの如き一挺

の感情凡手に非ず、あの謠は更科にて候、御次にて御邊へ相尋し時、何成ともと有し故、心廣く不

浮舟 親 玉葛 親幸、 小督 幸

一調一管 親世新九郎

江口 芭蕉

右觀世大夫森田庄兵衛相手之外相勤不申候

一調一管 幸幸小左衛門 大倉六藏

江口 幸、大、 芭蕉 幸、清、 班女 幸、大、

右ハ森田庄兵衛相手ニヨリ相勤申候

大鼓一調 萬野市郎兵衛 金春三郎右衛門

江口 萬、金、 東北 萬、金、 芭蕉 萬

雲林院 萬、金、 俊成忠度 萬、金、 三輪 萬

土車 萬、高、 勸進帳 萬、金、 百萬 萬、高、

柏崎 萬、高、 籠太鼓 萬、金、 笠之段 萬、金、

八島 萬、金、 女郎花 萬、金、 老松 金、高、

玉之段 金 善知鳥 金 雨月 金

熊坂曲、切、 金 東岸居士 高 景清 前後 高

重一調 萬野市郎兵衛 金春三郎右衛門

定家 萬、高、 木賊 萬、高、 謠無一調 金

一調一管 萬野、金春、

江口 萬、金、 芭蕉 萬、高、 東北 金

一調一聲 高安三太郎

班女 高

獅子 幸

置鼓 清

三井寺 萬、金、 班女 萬、高、

花筐 萬、金、 蟬丸 萬、金、

鳥追舟 萬、金、 櫻川 萬、金、

道明寺 萬、金、 放下僧 萬、金、

二人靜 金、高、 歌占 金、高、

田村 金 自然居士 金

東岸居士 觀幸、大、清、

舟橋 觀

殺生石 觀

夜討曾我 觀、大、

小督 觀、大、

阿漕 觀

藤戸 觀

熊坂 觀

龍 觀

舊 觀

白髭 觀

俊成忠度 清、大、

白樂天 觀

吉野靜 大

三輪 大

玉葛 觀、大、

源氏供養 大

芭蕉 觀、幸、大、清、

梅枝 大

松風 觀、幸、大、

定家 清、幸、大、

雨月 大

歌占 清、幸、大、

木賊 幸、大、

蟻通 幸、清、

老松 觀、大、

難波 觀、清、

高砂 觀

大教事一調 觀世新九郎

蟻通 春日龍神 野守 山姥 砧

右之内山姥砧觀世大夫相手之外相勤不申候、

神樂一調 觀世新九郎

三輪 龍田

右觀世大夫相手外相勤不申候

亂曲獨吟一調 觀世新九郎

玉取 近江八景 鼓瀧 香椎 一字題 實方 島廻 上宮太子 加茂物狂 飛鳥川 妻戸

横山 起證文 勸進帳

右十四番一調觀世大夫相手之外相勤不申候、

獨吟一調 幸清次郎

勸進帳 起請文 願書

右之内起證文願書前々ヨリ實生大夫相手ニテ相勤申候、

一調一聲 觀世新九郎 幸小左衛門

本式の一音一調一管ト云は、外に習有事也、

二段返しといふ事、螢當麻後出はに有、太鼓秘事にて常とは變る故、謡ひ出し習ひあり、

〔諸諸流名寄〕一管春日市右衛門 森田庄兵衛

眞音取一、春、森、 盤音取一、春、森、 戀音取一、春、森、 呂返音取春 双調音取一、春、森、

盤涉調音取一、春、森、 序之舞春 盤涉調序之舞春、森、 亂一、春、森、 神樂一、春、森、

羯鼓一、春、森、 早笛一、春、森、 筑紫笛春 鈴之段一、春、森、 獅子一、春、森、 躰津島春

躰舍限春 盤涉調樂一、春、森、 津島一、春、森、 豐後下り端一、春、 一越調音取森、春、 平調音取森、森、春、

五音音取春 秘曲音取春 修羅音取森 三重音取森 亂曲音取森 影之音取一

下之音取森 平調返森 草音取一 結音取一

眞音取置鼓一、春、森、 盤音取置鼓春 羯鼓春 序之舞太二 一、春、森、

早笛太二 樂同春、森、 神樂森 亂森 驚一、春、森、

獅子一、春、森、 一調大倉六藏九郎 幸小左衛門 清次郎門 櫻川大、清、幸、 雲林院大、清、幸、 采女大、親、

江口大、清、幸、 三井寺大、清、幸、 二人靜大、清、幸、 雲雀山大、親、 笠之段大、清、幸、

班女大、親、幸、 半蔀清、大、 蟬九大、清、幸、 花篋大、清、幸、 女郎花清、幸、

玉之段親 籠太鼓大、清、幸、 道明寺親 百萬大、清、幸、 柏崎大、清、幸、

放下僧大、清、幸、 善知鳥大、清、幸、 錦木大、清、幸、 松虫大、清、幸、 八島親

鳥追舟大、清、幸、 土車大、清、幸、



管調

西洞院蛸藥師下

金春流  
阿州谷田友吉人略一

姉小路妹、辻下

觀世流  
加州小寺正藏人略一

〔花傳書〕<sup>四</sup>一いちやうつゝみの謠やう大事なり、いかにこまやかにかろく、文字のあとをうつべし、ひとりうたひならば、うたひかろくあるべし、文字ぐさりき、あはせ打べし、うたひてあまたにて、つゝみあい、てはなりがたし、あひてある時のつゝみのくさりにひきかへ、謠のふしを聞わけ、さびしくなき様に、地つもりを面白くいろへ候事かんよう也。

〔音曲玉淵集〕<sup>四</sup>一一調獨吟の事

大鼓小鼓太鼓ともに諷ふ番數流々大概定り有て、又其外をも打なり、一調は先囃子方をおもとする故、何にても其はやし方の望む物を諷ふ也、扱上端の後鼓す、む所有驚きて謠をくづすべからず、又もちり大すちかひなど打所も同前也、本の拍子をむねに持べし、とかく手所に心得有べし、譬へば三井寺名所多ヨリ花筐又リふじんヨリ如此サシノ内下音より諷出ス、又或は人の所望に依て、サシの初手より諷事も有、此時はサシの内二所習ひ有總じてサシの内、あふとあはぬとの諷やう有、此外せみ丸道行松虫、扱上端より蘆刈、笠の段、蟻通、ノット切迄、安宅、勸進帳、放下僧上端ヨリ小歌如此、其外品々有、太鼓は小鹽杜若、せいぐわんじなどはワカより諷出ス、又曲舞の末太鼓の打出シヨリも諷ふ、當麻後シテヨリ野間、東方ヨリ春日龍神、こうしやのけんそくヨリ大概如此。

一調一セイは、大鼓小鼓ともに打、せみ丸王子は跡より一セイヲ打道行迄或はうき舟、玉かつらなどをも待諷より諷ひて、一セイを打なり、一セイの出所習ひ也、太鼓も鞠飼、實盛など打也、一調一管は大鼓にても小鼓にても、笛を加へ諷ひ獨吟也、はせを、江口先此二番に限る、諷にぬく所有て習也、適は此外も有

可、既傳其技、兼習太鼓于國廣、國廣號宗伯、所謂觀世與左衛門似我是也、重家遂改權頭流爲似我流、其子左吉重次幼習此藝、被稱于世、慶長十九年重次歲纔二十來在駿府八月二十日本多上野介正純永井右近大夫直勝奉鈞命、令重次改金春座爲觀世座、以敏于其術故也、時金春大夫在大坂拜此奉書獻其返狀、卽有旨、昇觀世大夫忠親以爲後、勞欲不使重次復舊座也、正純喚忠親及結埼座之老者述命、令重次稱觀世號也、似我有一子曰與五郎善擊太鼓、歿於筑紫、而似我亦物故遺言以其家秘譜寄觀世大夫宗節、令無紛失、宗節妹與宗可母爲親戚、故忠親以彼秘譜悉皆授重次、片紙無所遺漏、寬永十七年仲冬二十九日、於江戸營中有饗宴舞樂、時近臣奉旨曰、聞往歲於駿府嘗以重次弱年時、既有仰後日可爲巧手、其言於今有信、且僉云似我以來之良手也、賞之、須許紫關從四位阿部對馬守自御簾內持紫緒出授太田備中守資宗、其登舞臺召重次而對馬守述恩許之旨、資宗居之於金泥扇以昇之、重次拜戴而退、既而對馬守重諭台命曰、觀世與左衛門者、昔年之佳名也、自今以後重次亦宜稱此名、重次伏拜感謝、時重次歲四十六、翌日思想、觀世與左衛門云者、我徒之嘉稱也、雖拜賜之辱、奈冥譴何哉、可畏也、不若辭退之、乃訴陳于備中守、時劍客柳生氏聞之達於台聽、時有旨名于一藝者欲避此號、不爲無謙、而可有冥助、不可有冥譴、唯須喚稱焉、重次愈恐悅焉、○下

〔八水隨筆〕金春三郎左衛門は太鼓の上手なりしが、右の目あしかりしゆゑ、まての出端見にくし、それ故とせんとはしが、りの方顔まがりしとなり、その弟子それをまねて、みな顔をまげて打也、觀世新九郎生やら、くせやら、是も顔まがるなり、門人同じくまげて打也、

〔江戸總鹿子<sup>六</sup>〕太鼓

加賀町

觀世左吉

神明町

今春又次郎

八丁堀

今春三郎左衛門

〔元治<sup>一</sup>〕京羽津根<sup>三</sup>太鼓

よびはべりしかども、そのみちしらぬもの、とりさたは、さうにまこと、おもはれざりしに、秀次關白殿聚樂にて御能ありしに、朝長の儀法太鼓、そのころの玄やうす金春又右衛門と申ものつかまつりし、その日くれはて、幽法公へまいり、こん日は御けんぶつゆへむねおどり、手ふるひせん後を忘し候なにとか候しとおそれうやまひて申き、幽法公御休息ありしか共、御對面ありて、今日の所作御褒美なされ御洒下され、御座たけなはなりしに、くたびれるべけれど、一番うたれよかしと仰られて、すなはち御小鼓をあそばされし、大鼓は平野忠五郎笛は小留亦三郎、諷は勘七など、みな不斷の御返習にて杜若をはやしき、此者の太鼓まらぬもの、耳にも、自由自在こ、もとのばち音どはかはりたるやうに聞しに、又右衛門兩の手をつき、忠五郎にむかひ、一番今生の思出に聽聞仕度と申せしかば、ひさしくあそばされず御忘れなされ候へども、夜ふけき、人もなし、又興に乗じたる折からなればとて、遊行柳をくせ舞よりうたはせ、太鼓にさしむかはせたまひたるよそひより始御かけごゑ御ばちをと、凡夫の所爲とはさらに存せられざりき、御屋形中神妙になりて、皆人息をもつがぬやうにありし、されば我等がむざと信じて、殊勝に思はるゝにやと存、彼又右衛門が顔をつくくゝと見はべりしに、いつともなく額をたゝみに近くして、こゑたて、はえほめ申さす、のんにてすきまもなく感じ、打終らせたまひて、つきたる手を膝にあげ、かたぶけたる頭をふり、あをのきたるかほをみれば、兩眼より咸涙雨のごとくこはし侍りき、物の上手と名人とかはりめは有ものなりと、こゝろにおもひまりはべりき。

〔羅山文集<sup>十九</sup>〕觀世重次太鼓記

秦氏之舞曲權興于河勝、而後世已久矣、就中其名鳴於世者、大和國秦氏信、所謂圓滿井、金春禪竹是也、其子氏元宗印、子元安禪鳳、子喜照宗隨子八郎喜勝及連、子安照禪曲子氏勝精本、子重勝宗竹子盛勝、自禪竹至今爲九世、及連弟彌七郎喜家號道壽、學太鼓于金春權頭喜家子、又右衛門重家號宗

事也と云、

金春總右衛門太鼓の家は、金春大夫が庶子にして家を立たり、代々總右衛門彦九郎と號して、天和の頃彦九郎早世、弟子の内より森孫兵衛家を繼て、彦九郎に成しが、間もなく御近習に被召出に付、先總右衛門が弟子、植村三郎左衛門家を預る、金春の名字を繼、是は死たる彦九郎が幼子萬之助が看防也、三郎左衛門功者にして、家傳を預り置し者なれば、世に奔走す、實生座に被仰付て、是より實生と稱して、養子三郎次郎をも、藝能を以御近習に被召出、伴三郎次郎と名乗しむ。○中略彦九郎が子萬之助元服して、金春彦九郎と名乗、父が家を立たり、然るに渠も御近習被召出、川井與左衛門と改號す故に猿樂の家は、三郎左衛門が弟子、中西新次郎が弟、新六郎を繼しめ、金春總右衛門と名乗しむ、藝達者成しが早世して、實兄新六郎を顧ひ家を立たり、是當時の金春總右衛門也、彼川井與左衛門享保の中年、御願を立、猿樂の列へ立返り、金春彦九郎の名に戻る。○中略樋口久左衛門の家は、もと江州小野澤の郷士、樋口石見守といふ者、武功有て太閤に仕へしが、太鼓の上手なれば、御旨に叶ひ、千石の所領を給り、東照宮にも御懇に付、御代に及び本領安堵仕、後病死の刻、悴甚七幼少なれば、初知百貳十石別所村計り給り度と願ひ、其餘は御上へ御返し申上、甚七毎々參勤仕候格にて、子孫武士たる處、當久左衛門は觀世座に入、

〔老人雜話〕樋の口と云、太鼓の上手、津國より來て京にて時めきける、道善よりはるかに後なり、太閤の時分なり、樋の口が太鼓は老人も度々聞たり、石井了雲が姪に石井傳右衛門と云ふ者あり、新在家南町に居る、彼が亭にて拍子ありて、樋の口が撃けるをも聞く、是が聞をさめ也、了雲もうちたり、樋の口は太閤の御前に御用ありて、拍子二番過て來る、笛は一増也、樋の口、一増に御老僧いざ一番仕らんと云、一増は此時老人なりしとぞ、

〔戴恩記〕曲法公

○細川幽齋中略

太鼓をば似我が大事をのこさすつたへをきたりと、ないくき、お



芝門前町

大藏長右衛門

大藏六藏

大藏重兵衛

新九郎一所

寶生權九郎

大鼓

弓町横丁

葛野市郎兵衛

同

同九郎次郎

芝門前町

高安三太郎

尾張町

樋口久左衛門

出雲町

楠田六右衛門

京橋南一丁目

今春三郎右衛門

〔元治〕京羽津根〔三〕小鼓

小川二條角

幸流 土州關口富之丞人略三

衣棚竹町屋上

幸流 加州北村郁次郎人略二

大鼓

北小路西洞院東

石井流 加州石井仁兵衛人略二

室町榎木町上

幸流 阿州檜橋熊三郎

綾小路西洞院東

萬野流 阿州能勢與左衛門人略三

東六條

村上希藏人略一

〔雍州府志〕大小鼓革

京師二條加賀屋并鳥丸三條南賣之元出自加賀國其製之人謂丁金彼

所張爲良猿樂之所用大鼓亦在二條通加賀屋并鳥丸懸革於筒兩端以緒結之是稱調纏緒後調其

音之謂也大凡調緒用紅禁裏貴紫色故堪其藝者被許紫色又公方家鼓調絲貴青色故猿樂等中能

之者免青調或紫調凡擊鼓者有數流所謂大倉流觀世流之類是也

〔人倫訓蒙圖彙〕太鼓

太鼓のはじまりは釋尊の御時々時の太鼓をうつよりはじまれり其事

下にみえたり抱は陰陽を表す當時打手觀世左吉今春又次郎太鼓は鼓屋にあり

〔猿樂傳記〕下觀世左吉が太鼓の家は似我傳流也左吉が先祖觀世與左衛門上手にして弟子共に

教ゆるには己が太鼓を我に似よくといふなり依之似我與左衛門と人呼其子孫左吉と號す

私に曰此家に片撥といふ事あり是は先祖名人にて四座不殘集めて片撥にも及ばずといふ

もはや九つにもなるべし、今より革など取よせ候はゞ、おそく成べし、残念なりとの給ひし故、御所望に御座候はゞ、可仕よし申上ければ、急には革出来まじきかとありけるまゝ、當番の節は急なる御用もはかりがたかりしゆへ、常に持參仕ると申て、さつそく取出し打けるが、一段よく出来しとて、御褒美なりける其のち又所望ありけるが、一度は御用相立申候事故、それよりは宿り番に持參不仕と申ければ、是も尤なり、所望のたびに間があはゞ、けつく珍らしかるまじとて、彌賞美せられしよし。

〔耳塵集上〕一大坂道頓堀にて勸進能ありし時、京よりはねや庄右衛門とて、名人の小鼓三番目を打れしに、諸人こそつて是を聞く、尤上手とは思ひしかども、さのみおどろかず、則初日の事なりしに、藤十郎は庄右衛門弟子殊に無二の懸故、見舞がてら見物して諸人の評判を聞、すぐに庄右衛門旅宿へゆき、此度の能大坂の衆中の心ざす所は御身一人、まかるにさのみほめもそしりもせず、心得あれかしとなり、庄右衛門心あかれ明日よりほめられて見せんと有しが、案のごとく二日めより日本第一の上手とほめたり、藤十郎又行て、今日の評判格別何と心得鼓を打給ふやと尋しに、庄右衛門曰、初日は大事にかけ、御身が狂言する様にはめられんといふ事をはなれ、まんろくに打たり、今日はさらばほめられんとおもひ、少し曲を打たり、それ故ほめるならん、ほめさすやうにはうちやすきもの、まんろくには打にくきものとかたりぬ、予同座に居て是を聞はめられふとはめられまいと自由になるは、是名人の藝也と、つく／＼顔をうち守り居たりぬ。

〔江戸總鹿子<sup>六</sup>〕小鼓

芝新錢座	寶生	新九郎	尾張町二丁目	幸	清次郎
南さや町	幸	清六	新橋南三丁目	幸	五郎兵衛
くれ正町	幸	五郎八		幸	五郎左衛門

神樂にかゝる時、小寺頭を一つ撃と格別三輪の位よく成て、段々神樂に成に隨て、小寺があしらひ感に堪て、粕谷が工夫の段に非ず、さすがの粕谷も心に深く小寺を感じて、我恥かしく小寺に付て行、一番の首尾言に述がたき程出來しと也、此事を後に粕谷申出して世上に金七我等など牛角の藝の様に思へども、金七又は地頭高橋十郎兵衛などは、我藝とは段有り、今にての藝頭は、此兩人なるべしと云り、又速水伊左衛門も太鼓の名手にて、世に金七伊左衛門と賞せり、去れども役者仲間にて、伊左衛門相手を殊外いやがりし也、其故は譬ば三輪をうつに相手の位あしければ、相手に構はず、我獨り三輪の位を撃つ、金七は相手次第に、三輪にて相手過て、卷絹の神樂の位を撃ても、夫を咎めず、一番の首尾を能せり、仍金七相手に成るを皆悦びし也、愛を以て見れば、金七方優れりと云べき歟、さればにや世に云處も、兩人甲乙なしとは云へども、などやらん金七伊左衛門と云り、伊左衛門金七とは云ず、八丸赤人を云に、赤人人丸と云ぬがごとし、先々云る、だけ優れる歟、粕谷も中尾五郎四郎牛角と雖ども、五郎四郎次郎兵衛とは不云、次郎兵衛五郎四郎と云り、自然の位なるべし、地方は中にも亂舞の末席なれば、人も餘り評せずといへども、高橋が地は格別によりかりし故に人賞せり、凡の地は、皆大夫四拍子に隨ひて、夫に合すを專にするに、十郎兵衛は左に非ず、粕谷が三ッ地を難じて、足下の藝に合せては、三ッ地まんぞくならずと、直に次郎兵衛に教諭す、次郎兵衛之を信じて、夫より工夫して三地よくなれると也、

〔八水隨筆〕幸清次郎かけ聲甚あしく、鼓は上手なり、弟子共鼓をにせる事叶はず、聲のあしきをまねる、人々わらへば流義なりと答ふ、皆々西施が顰をならふものなり、○中

牧野長岡侯に仕へし吉田助六は仙臺の産なり、大倉流の大鼓をよく打しとて抱へられしよし、呼出されて數年とまり番の節、革をよくほうじ、さめぬやうにふくさにつゝ、み、夜具の内へいれしなり、ある夜君侯夜づめの節、ふと諷をうたひ給ひ、夜がふけずば助六が一てうをきくべきが、

皆謂當時無雙也。延寶元年十一月十日、殿中有申樂出御以前有召、而觀世大夫重清及新九郎豐重  
跪候大廣間簀子、時元老前橋少將源朝臣忠清、執政小田原侍從越智朝臣正則、世喜宿侍從源朝臣  
廣之、土浦侍從源朝臣數直列座、同朋珍阿彌載紫調於臺居其側、正則朝臣述台命曰、新九郎家藝之  
名彰聞、且鍊磨之嗜、今猶不懈、依御威賜紫調、松平因幡守信與時兼中、揆擲之、重清豐重稽首奉拜、謝  
之、豐重頂戴紫調、退入樂屋、既而申樂、如何及第三番、江豐重紫調於小鼓、勤其役、擊聲之響、疾舒應  
節、鏗鏘驚座、先是同技之中、授與紫調者三人、然其齡四十五十之間也、豐重今未及四十、而蒙此恩許、  
可謂榮之又榮、而何大幸、加焉、匪嘗不辱先祖之名、可以楊子孫之顏色也、豐重與重清同祖、而出自伊  
賀服部氏、然因其樂座之號、以觀世爲氏、云余殊替於擊節、然有先人記紫調事之例、故不能拒豐重請  
而聞其所語、以述大概、人各有家藝、勤其藝、得其名、預公榮者、誰不美之哉、癸丑延寶元年十二月申旬

〔雍州府志古蹟〕芝居略○中

大小鼓并太鼓、能其事者、被免紫調、凡大小鼓并太鼓、以紅緒縛兩面革於

筒兩端、此緒謂調、本朝貴紫色、故堪其藝者、用紫、又公方家所用之鼓、以青色調結之、小鼓役者、中上手  
人常預此鼓、倭俗諸藝、堪其事者、稱上手、携常所預之青調鼓、出舞臺、擊之、是預鼓之徵、而其人是爲榮、  
〔有德院殿御實紀附錄十七〕散樂は好ませ玉はざりしかど、略○中 鼓打ものに紫のまらべをゆるさ

れしも、此御時を權輿とせり、其はじめ御ゆるしありしもの、なほ鼓には金春三郎右衛門、高安三  
太郎、小鼓には觀世新九郎、幸清次郎、太鼓は金春總右衛門等なりし、

〔翁草百四十二〕二條大政所は、加賀宰相綱紀卿の姫君、當時の大女院御所の御母堂也、略○中 亂舞を

好ませられ、常に御うらにて、御内々女中計の御囃子まげ、有り、或時御里方の抱役者は苦し  
かるまじとて、加州の役者粕谷次郎兵衛、小寺金七を召れ、女中交りの御囃子有、此兩人堪能の者  
とは云へども、女中相手の囃子は初メなれば、召るゝより其工夫をして參上す、既に囃子始り、三  
輪を次郎兵衛、金七勤之、笛、大鼓は女中也、扱曲舞の内、粕屋工夫の通りにて、首尾尤よかりし處に、



二十ヶ年以前に病死す、此十兵衛昔癩病を煩ける也、二代目常音は養子也、養父常慶養子に鼓の秘曲を可教と致處に、常慶譜代の家來にすぐれて鼓を好まかも器量有て、はや脇にて聞取故、これらに聞せまじき爲に、大坂へ使を申付候所に、彼者此段を悟りて、大坂へ行真似して、板敷の下へ入聞居ける、其時道成寺、松風、狸々の鼓を教へける、初は扇子拍子故に、恥と聞取難き所に、二度目は手にて疊を打教へける故、板敷にこたへて能聞ける、其後來常慶に申けるは、大坂にて鼓を習たると、打て聞せ候へば、常慶不興して委細に吟味せしに、板敷の下にて聞取たる事を白狀す、常慶甚叱りけれ共、彼が器量を感じて、重て不及咎に、是幸庄次郎と云し、小左衛門が父也と云云、

〔寫峯文集<sup>十一</sup>〕小鼓紫調記

夫鼓者八音之一也、論古樂者曰、鼓爲群音長、故凡奏樂則無不有鼓、本朝神樂久矣、遠矣、歷朝左右伶樂有所由來也、今世俗謠樂者、古謂之散樂、或曰自神樂分、故稱申樂、其節奏亦無不用鼓、鼓有小有巨、蓋擬古之轉鼓、鼓乎、申樂有四座、曰觀世、曰金春、曰保生、曰金剛、每座各有其長稱大夫、而擊鼓者無不備焉、觀世音阿長子松盛繼大夫之家、季子信滿號小次郎、又稱權守、以巨鼓鳴於世、其事跡詳在僧周麟集、信滿有三男、彌次郎長俊、彌三郎元供、小次郎元賴是也、元供尤精巨鼓、其子曰彦右衛門豐次、其時今春座有宮増彌六親賢爲小鼓名手、乃是豐次母之昆弟也、萬松院源義晴卿使親賢移觀世座、賜淺黃調緒親賢改名彌左衛門、無子、以豐次素就習小鼓、故讓其家、豐次以甥續舅、悉究其秘、自是以小鼓爲家傳、光源院源義輝卿復賜淺黃調、令細川兵部大輔藤孝授之、豐次剃髮改稱宗授、其子又次郎重次亦以家技顯、靈陽院源義昭卿以藤孝爲使、价賜淺黃調、及豐臣秀吉公治世再預其賜、重次老而蓬髮、改名道叱、其子曰新九郎豐勝、雖達其藝、多病閑居、祝髮號宗治、以新九郎名讓其子豐重、豐重未滿成童、既有傳藝之器、宗治携之參向江府、爾來每有申樂、御覽無不動役、逐年積年手熟名顯、舉世

大藏六藏が家は、元伊勢の津の者也、道智參宮の序、六藏が大鼓を開て、能鼓に可成と伴ひ來り、召仕の如くにして置業を教ふる器用にして他人の傳授事を聞取打を以行末平藏が爲にいかゞあらんと、小鼓に仕替へさせたり。○中

石井了雲といふ大鼓、太閤御家の上手功者、其甥に家督せしむ、是を石井傳左衛門と號、紀州家に召抱らる。

威徳と云大鼓の家あり、元祖源四郎鼓に達して其音高し、藝能を勤め、其頭を打し時、南大門の軒瓦碎け、地に落たりと世にいひ傳ふ、寶生座に子孫勤む。

楠田吉田といふ古き小鼓の家あり、いつの頃よりか、是等をはじめ幸流の弟子となる。

〔老人雜話〕桑垣元二と云鼓者名高し、觀世又次郎などより先輩なり、道成寺など有る時は、又次郎よりは桑垣がうちたる事多し、桑垣は宮増が弟子にて男色也、鼓はすぐれざれども、物を知りたることたぐひなし。○中

大藏道智は、元來猿樂の家にて、南都に居る、道意は東洞院三本木に居る、道智も大鼓の上手、道意は小鼓の上手也、拍子かけ聲鳴音、殘所なき古今の上手也と皆人云へり、道智が弟にて、年は二十計も下なれば、道意に鼓を習たるものは今も多しと也、道智が子は平藏、其子は源とて、平藏が姉の子は源右衛門也、平藏は早世す、源右衛門鼓は大藏宗悅全く取立たり、宗悅は六藏とて今の長左衛門父也、伊勢の津の者也、道智參宮の次に鼓を開て、よき鼓にならんとて教たる也、大鼓餘りに器用成によつて、平藏がために如何と思ひて、小鼓に取立つ。

大藏道智道意は道入と云者の子也、道入は今春及連が弟也、道意は宮増が弟子也しを、道入同心になくして宮増が師にて美濃權頭が直弟となる、宮増は美濃權頭と云者の弟子なり、

〔渡邊幸庵對話〕大藏が家は、大藏雅名十兵衛、常慶、大藏常音、十兵衛、又四郎、十兵衛、此五代目の十兵衛は、

さんと、新十郎が留守を伺ふと覺へて、新十郎他出と披露し、閑所に隠れて居しを留守と心得傳授の事共、權九郎に傳へしを、不殘聞取たり、其後父夜行に出し、夜更に聞取たる事ども鼓にのせて稽古し、弱法師の一聲を打て試る折から、父歸宅し外にイみ是を開扇翌日に及び札明せしかば、包まず忍び聞取たる由申故、家業志深きものなりとて、父も思ひ付しが、早世故家督は權九郎繼て、後新九郎と改號す、三男を實生彌三郎といふ、觀世流の大鼓の家を新に取立たり、弟子にて指田市兵衛大鼓なれば、其與力とせしむ、彌三郎死後、查三郎跡を繼て、實生座たり、扱新九郎後年願ひを立家の義は觀世流と申候間、本名に復し度旨尤御免有て、觀世新九郎と名乗たり、此人中風にて其子權九郎當時新九郎也、○中略

大鼓は大藏流、威徳風、三郎右衛門流、市郎兵衛流品々あり、○中略

高安三太郎大鼓の家は、高安壽閑脇師となるを以、權頭道善以來の大鼓の家を、第三右衛門に渡すを以、相續す、○中略

葛野が大鼓の家は、先祖を葛野信助と云侍也、田中と云者の鼓を傳へり、素人にて家を立る、其子九郎兵衛は大藏宗全に便り修行し、上手となり、其頃、曜の囃子に頭を取て、囃九郎兵衛と世に呼、渠紀州の御家へ御附被成、其子九郎兵衛も、上手にて江戸へ被召、觀世座被仰付、後入道して田光と號す、○中略

大鼓の大藏が家は、金春及連が弟大藏源右衛門始也、後入道と號す、南都猿樂にて其子道智尤上手也、其子平藏續て上手也、早世す故に平藏が姉の子を以家を立、源右衛門と號す、是を大藏宗悅取立たり、源右衛門子の源右衛門鼓よし、然るに譯有て弟子を害し自害せしに付、其家斷絶す、故に家傳の一巻は、公儀より御下知にて金春三郎右衛門、高安三太郎方へ渡す、此兩家は、大藏の弟子筋也、○中略

〔人倫訓蒙圖彙〕<sup>二</sup>鞞 鞞に大小有小を小鞞と稱して大の上に座する、大鞞は陽にして呂なり、小鞞は陰にして律なり、これ陰陽和合の器なり、當時小鞞打ハ觀世宗兵衛、保生新九郎、大藏長右衛門、幸野清五郎、大鞞ハ葛野市郎兵衛、鞞師二條玉屋町烏丸六角下ル丁、大坂ハ堺筋かはら丁、

〔猿樂傳記〕<sup>下</sup>小鼓の傳來は、其始美濃權頭といふ、是は南都の樂人にて、拍子堪能の者也、猿樂藝世に起り、其謠物に章を付舞ふ時は、屈伸の長短のほどを快する爲に鼓を以て是をはやす、夫よりして笛太鼓をも取揃へたり、權頭微細ならざる者なれば、其細なる事を工夫し、小鼓を作りて打初、其深味を極む、是よりして囃子方の内にては、小鼓を表に立たり、之を宮増彌左衛門傳へ、其弟彌七郎共に傳授す、宮増は元來武士也、其父老衰に及ぶを以、戰國の仕へを止て、南都西の京に居住す、兄宮増彌左衛門、其業堪能にして、其弟子多しといへども、其中にも幸四郎次郎秀方にして、其傳を繼たり、○中

幸流の事先祖四郎次郎は、元春日の社人、宮増が正流を以、繼律義なる處を以、流義とす、永祿の頃也、元は山州宇治に住居す、<sup>是二代目四郎次郎也、天正七卯年死</sup>其嫡月軒、小左衛門が次男久次郎より、清次郎が別れたり、月山小左衛門が嫡子、五郎次郎家を繼て早世し、其子幼年なる故、弟の小左衛門に家を渡す故、家業を勉めて、又後見の幼子を以、家を立しむ、是を幸清次郎といふ、○中

新九郎家も宮増より出たり、觀世大夫先祖宗雪が大叔父に、觀世小次郎といへる者あり、○中 男に了實といふて、成長せし者、小鼓を嗜て、宮増彌七が弟子と成、其小鼓の家を立、觀世又次郎と名乗、拍子利の上手也、其子孫新九郎也、其頃桑垣元二とて、名高き小鼓打あり、是も宮増が弟子又次郎より先輩也、常憲公<sup>○德川綱吉</sup>の御代初、の上手也、渠御旨に違ひ、年を越て鎌倉に塾居す、其後被召歸、寶生座に被仰付、寶生新九郎と名乗たり、其嫡子新十郎、父に劣らぬ藝なりしが、繼母の詞にて父に憎みを請、次男權九郎を以、家督とせんとす、傳授等は教へず、斯る事故、極傳は權九郎に許



御機嫌甚惡しく、辨へもなき男とてまかりければ、なをくさわがす、各もそのせきにては氣たたりて、必定松風の位には至るまじ、今少し心を落し付て出たまへ、尾張様の御機嫌に違へば、御出入を止らるゝ計藝者の一藝を仕損するは、一世のみならず末代までの瑕瑾なりとて、たばこ盆引よせけるに、各あきれながら、尤なりと感じけるとなり、此松風シテは喜多七大夫、大鼓葛野一郎兵衛、小鼓幸五郎次郎と割て、殊の外出来、尾張侯にも委細聽しめし、庄兵衛を褒美ありしとなり。

故一更又六諸侯方にて能ありし時、融を吹しに俄に雷動しければ、盤しきを改めて黄式にふきたり、人々如何のこと、云しに、雷の調子ばんしきなる故吹かへたるとなり。

〔江戸總鹿子六〕笛

八丁堀

春日市右衛門

三十間堀一丁目

森田庄兵衛

京橋南四丁目

一噌六郎左衛門

三十間堀三丁目

篠井忠次郎

源助町

長命吉右衛門

山下町

大藏助右衛門

源助丁

長命清左衛門

瀧山町

竹中庄次郎

〔京都御役所向大概覺書〕能大夫并囃方之事

洛中住居扶持人笛吹

一尾州古

上立賣室町西 入ル町

藤田六郎兵衛

一松平加賀守古

室町上立賣下ル町

山本甚右衛門 〇下

〔元治正治〕京羽津根 三 笛

室町九太町

森田流 加州 杉治郎助 〇四

堺町竹屋町下

平岩流 仙臺 平岩勘七 〇三

下立賣油小路西

一噌流 三村勝五郎 〇一

之丞といふて狂言師也、長命は元一流の家にて、古へは大夫をも勤めたり、

貞光安兵衛笛は、永祿の頃、京西の岡に、貞光久左衛門と云笛の上手あり、三好の一族に従ひ京軍に討死す、其跡絶たるを、金剛方より寛文の頃取立て、其貞光所縁の者として、貞光安兵衛と呼て、彼の笛の家を興す、渠小鼓は庄兵衛に稽古に付、今は小笛の家の弟子也、當時の安兵衛は其弟子にして、金剛が座付也、其子は小八郎、

一書に曰、能笛に四流あり、所謂一噌流、森田流、庄兵衛流春日流、湖流、尾州家等也、中村一噌といふ妙術あり、一噌流の始祖也、森田氏もと大森氏なり、毛利元就の臣、穴戸伯耆守笛に妙を得たり、醫師何某に傳ふ、天正の頃、大森庄兵衛七歳より醫師に習ひ、妙を得世に鳴る、是森田の始祖也、

#### 〔堺鑑下〕惠藤源左衛門

北莊矢藏下町ノ住人也、中村備中入道一噌ノ笛ノ弟子ニシテ、其妙ヲ得タリト云リ、所持ノ瓦落ト云笛ハ、當津常樂寺ノ僧成就坊ノ什物、管絃ノ笛ニテ有シテ、惠藤所望シ、一噌ノ指圖ヲ受、京指田ニ直サセテ、亂舞ノ笛ニ用ト也、其後常樂寺ニテ能アリシニ、此笛ヲ吹クレバ、金堂ノ軒ニ響瓦落タル故、笛ノ德世ニ聞近衛殿ヨリ記ヲ被遊、瓦落ト名付玉フ名管也、此笛ヲ弟子藤田清兵衛ガ手ニ渡ス、其後尾張大納言義直卿扶持人ト成由也、

〔八水隨筆〕森田庄兵衛後宗卿尾張様にて御客の節、松風のはやしあり、各支度出來ける時、庄兵衛見へず、御座敷よりは早くはじめよと、度々仰下されけれども、庄兵衛見へず、所々尋ける時程過てふらく、出來れり、みなくせりたて、いかゞといはるれども、少しも動せず、二便滯れば業ならず、頻にはらもちあしくなりし故、隱處へ行しなり、只今腹くつろぎ返たり、是にてもまだ笛はふかれず、今少またれよと云、元來庄兵衛は不足の質故、各彌せきたち御催促度々にて、上の

〔猿樂傳記〕<sup>下</sup>一噌が笛の家先祖を一噌といふて、豊後<sup>中</sup>の者にて、初備中屋と云者也、笛の上手にて京に上り吹を以牛尾といへる吹手を音を入たり、其頃笛庄兵衛、木野など、云上手も在しが、其跡はなく一噌流今に傳來す、<sup>略</sup>○<sup>中</sup>

森田庄兵衛が家は、素人にて森田長藏と云上手なり、二條御城にて被召し時十六歳也、若輩にて上手なりと、渠を小笛と御呼に付、小笛といふ稱となる、其子庄兵衛若くして上手也、渠咽に疵付たるを押て病氣と申立、逼塞せしむ、其子を以庄兵衛と名乗せたり、是又笛上手世に鳴る、父其逼塞して棧入道して宗善と呼、京都に住居せしむ、常憲公<sup>○</sup>被召出に依て、罷下り御用を勤む、燕尾をかぶり長袴にて著座す、蓋し業熟して名人也、其子庄兵衛が子當代庄兵衛也、

春日市右衛門が家は、河内高屋の城主、畠山照高の臣、鹽川口兵衛と云、三、四千石領したる者也、畠山家亡て浪人し、其節常に嗜の笛を以て世に交り、つひに業となり、其子市右衛門續ぎて家業とし、東照宮に御目懸られ、汝が笛面白く、息の長き事、春の日の長閑なる如くなれば、春日と號せよとの上意により、春日と號す、初め長命清左衛門が弟子なり、<sup>略</sup>○<sup>中</sup>

長命清左衛門家は猿樂起りの時分より笛の家也、子孫清左衛門が家本家也、枝葉茂り諸狂言ともに分れたり、簀笠之助と云ふ者、初は長命平大夫といふて狂言師也、渠伊賀の服部の末の者故、服部と改號、其子孫簀笠之助と號、無役にて賣生座に居たり、長命清左衛門南都に住して、一噌が世に鳴り習ひ多を聞及び京へ來て毎日毎夜田舎者の姿にて、一噌が家の門外にイミ、笛の稽古を聞、一噌是を怪しみ南都の長命なりと見届、内へ招き入、其上に渠が笛を所望し、己も吹て聞せたり、長命かくして一噌が習ひどもを聞取、上手と成を以、春日市右衛門を取立しが、子孫に及び笛衰へ、金剛座に付て、當時清左衛門家、何となく却て春日が弟子と成、彼一噌が方へ行し、清左衛門が六番目の弟、長命兵助是を金剛座へ入、子孫あり、渠は尾張の御扶持を得て、第七の弟、長命權

〔花傳書<sup>八</sup>〕一笛は第一十二しやうかをおぼえさせよ、第二手うつりをなをせ、第三鼓をおぼえさせよ、第四うたひをおぼえさせよ、第五仕舞心を知せよ、とかく第一仕舞心なくば、手のふき所いゝるゑどころをばつらなるべし、音は漸々に入べし、返々ほそ竹にて吹ならはぬ物也、縦シかくならず其ふとき竹にて吹ならふ事肝要也、

一大小共につゝみをしへやうの事、まづかまへ、くせ、手あたり、やごゑにかまはず、數をはんにおぼえさせて、小つゝみうち覺たらんとき、手あたりをなをせ、手あたりにて鼓の音がふもの也、それにてひとときはつゝみあがりてきこゆるもの也、さて其次にかまへをなすべし、又かまへなをり候へば、ばつくん鼓見事にみへ候物なり、そのつぎにくせをなをせ、そののちにやごゑをなすべし、つゝみあがり候程、自然とやごゑはひとりあがる物也、さて如此段々になをしあげ候てより、あぢ位をつたふべし、まづく、大方の次第此分也、はじめ初心より何もかも一度になをし候へば、それにかゝりてつゝみあがらぬなり、又をそくなをし候へば、くせ身なりなをらず候、見あはせの時分かんようなり、

一太鼓をしゆる事、是も大方つゝみと同前なり、先はじめ二三番程おぼゆるうちは、よろづをなをさずしてうちおぼえさせ、心付候時分に、ばちの持やうかまへをなをし、さて其後かけごゑをなをし、其次にくせをなす也、はやくくせをなをし候へば、それにひかれてげいはあがらぬ物也、其後所々に手をうたすべし、はじめの地たしかにおぼえざるうちに、手ををしへ候へば、太鼓のかゝりあしくなり候、扱漸々こうゆき候時分に、味ををしへ、あぢ大形ゆきたるおり、ふし位ををしゆべし、かやうの段々見合肝要なり、

〔人倫訓蒙圖彙<sup>三</sup>〕笛 横笛と號す、○中 當世笛吹は森田庄兵衛、春日市右衛門、一噌八郎、右衛門、庄田與兵衛、其外略之、



ばうおく、れんば、あいしやう、うらみ、いかり、まひ、はたらき、如此の音聲さま／＼なれば、おぼえす  
まて、てうしのかりさがる事ある也、ふえふきも、この道を心えて、まての音聲にまたがひて、この  
こしつをもて、ねをさぐりて、さて舞歌のひまのあらんところへ、本調子とねちあはせて、人には  
まらせぬやうに、てうかんをつなぐ事、是申樂笛の道なるべし、

一さるがくは、物まねの氣轉によりて、萬聲にかはる音聲なれば、てうしのすこしかりさがりあ  
らんは、さらにまてのふそくにはあるべからず、昔大和さるがくに、名生と申笛の上手ありし也、  
京極の道與入道佐官被列さるがくのあひのぶるは、わるき事なれ共、このめいしやうがふえを  
きくほどは、時節のうつるをもわする、ぞと、かんせられたるほどのふえの堪能なり、ある時神  
事さるがくの當座にて、爲手のとうりやうと、わらんべと、論議を歌ふ時、そのときのてうしらん  
けい也、若聲はいまだわらんべ聲にて、盤式かゝりにかりてゆく、まての聲はらんけいなり、それ  
にかす／＼の論議をうたふほどに、兩人のてうしふどうにして、おけうになるべかりしを、かの  
めいしやう、笛のてうしをば、もとよりのらんけいにふきながら、若聲のかたをば、てうしをすこ  
し心してはんしきかゝりに色どり、まてのかたをば、ほんてうしのらんけいにふきて、たがひの  
音曲ふいにきこえて、當座もおもしろかりき、さるほどに、かやうにふくとは、一座にきゝしる人  
もなかりしを、そのまてのちに名生にむかて、今日のふえ、ことに／＼まんへんにて候つる也と、  
ほうびまたりし時、めいしやう申やうき、いだされまいらせたれば申也、老聲若音の論議のて  
うしのこじつ、すいぶん仕立候也と申たりき、是はまかしながら、老聲の拍子をかへて、色どりを  
るゆへに、老聲のてうし一音に連曲して、不意音文に成就しぬ、是則をさまれる世の聲に相當し  
て、安くたのしむこえだてやあらん、然ば如此、いにしへの役者の上手は、たゞ一座のまてのかん  
をほんとして、卽座一けうの成就をなして、當代までの手本ならずや、詩序云、治世之音、安以樂、

一身なりを忘れてひやうしをまれ、もろくのくせのなき様に、第一のたしなみ也。○下

〔花傳書〕一御前のはやし、小座敷などにてのはやし、またわたましなどののはやしの時、雙調の舞には吹はらはぬならひなり、

〔習道書〕申樂一座人數、其役々習道次第。○中

一鼓の役人の心うべき事、既にうちたて、いまだまての一聲、さし事をも云いださぬまでは、我力なれば、なにをも一心のまてにまかせて、せいひようおんりきの手かずをつくして、はやしたつべし、さて次第々々舞歌二曲、物まねにいたりては、わたくしあるべからず、まての心をうけて、二曲をはかせて、事をなすべし、これさるがくつゝみの道なるべし、大こなんども、おなじ心なるべし、凡なにの大こなりとも、うちたてはらん、玄やうなるべし、

一笛の役者の事、當座一會の序、破急にわたりて、調感をなす、一大事の曲やくなり、さるがくいまだはじまらぬ以前に、まばらくふきしづめて、初樂即座の當感をなすやく也、既に舞歌にいたりては、まての音聲をき、あはせて、調感をなし、音聲を色どるべし、爰にふえのやくしや、第一心えべき道あり、抑笛と申は、調子の器物なれば、ふえを、ほんとすべき事、せひなけれ共、一座の成就をなすべき事、別の大事あり、樂人のふえなどには、かはるべきことあり、申樂笛の心と者、ません爲手の音聲にて、うしのすこしかりさがる甲乙あるべし、それにふえを、ほんなればとて、本てうしのまゝに、心もなくふきとをらば、まての音聲と、笛のてうしと、ふどうなるべし、まからば當座の音感、ふけうなるべし、さるほどにたゞまてのこゑのには、ひにおうじて、少々とてうしをこゝろえて、てうかんを色どれば、一座のてうしちがふとは、きこえず、たゞおいなる音感なるべし、又爲手の調子のすこしきかりさがる事、是又さのみふそくにては、あるべからず、せうみやう、さうかなんのだにも、すこしてうしのかりさがりはあるもの也、さるがくと申は、一切の物まね祝言、

て分別すれば、きこゆるものなり、

一 囀のはやきと、かろきと、まだるきと、まづかなるとは、大なるかはりにて候、かろきと申は、のりてよきつにする／＼とゆくを、かろきと申候石車にのりかた拍子にさきだつを、はやきと申候、まづかなるとは、のりてよき位にゆくさきだ、ず、あとへもさがらず、ゆる／＼とまんにゆるをあらせてはやすを、まづかなると申候、まだるきと申は、位うたひの跡へさがりたるを、まだるきと申なり、これおほきなるかはり也、略 下

〔花傳書 四〕四日の能の囀やうの事

一 初日は二日の手を殘し、いろよき花の、つばみたるやうにはやすべし、

一 二日めには三日めの手をのこし、きのふまでさかざりし花の、けふやうやくかつさきたるやうにはやすべし、

一 三日目には四日めの手をのこし、きのふまでかつさきし花の、けふはさかりとみゆる様にはやすべし、

一 四日目には春をおしみて、さき殘る花のみな咲みだれ、木々の木々、四方の山々も色めきたり、人のこゝろもうきたつやうに、おしますのこす手をつくし囀べし、四日のはやしやう、おほかた如此はやすべし、五日めもあらば、其人の手がら次第に囀すべし、かくいへばとて道にゆるさる事、第一のひが事也、五日の能といふ事は、一切なき事にて候、四日の能も近代さだまり候、昔は三日より外はなく候、

一 よろづのなり物、身なり肝要也、身なりかまへあしければ、見にくきものにて候、第一のたしなみとは、身なりの事にて候、  
一 ねいろをわすれてあちをまれ

べし、文字うつり程よく聞分、字にさはらぬやうに心がけべし、又、謠にかんあるふしなど打けし候ぬ様にたしなむべし、手をうたんとての前に、手に似たる地をうたぬ也、これを手の前をいかにもかすませ、囃候て手をうてば手に感ある物也、小鼓ならばおつより打手うち候はゞ、其手の前は地をきざみにてやり、さておつより手をうち出し候へば、手にかんあり、又きざみよりうつ手をうたむと思はゞ、外の地をおつかちに、さて手をきざみより打候へば、天と地とに水きはきらりとたちてかんある物なり、謠の曲ならば呂のふしは越、かむのふしはきざみ也、かむのふしの所のは、きざみより打てよし、呂のふしよりうち出ては、おつよりうちてよし、是一大事のならひ也、第一はよしと申は、大夫を本とせり、大夫は一座の大將、花をつかさどるゑんなれば、かけるまじき所にてかけり、かけるべき所にてもかけらず、舞留るとも當になき手を、色々にかへて舞留る、謠のみじかきふしをながく引、ながき節をみじかくつめ、難曲をうたひすへ、打きる所をうたひすへ、さうにしてすぐにやり、色々様々にわがまゝにふるまふ也、囃よくくめんをやり、由断なく心得べし、大夫のはたらきのいかにもく、よきやうに、はよしよりもてなす事肝要なり、上手たりといふ共、大夫のはたらき似合れば、藝は下手と心得べし、惣別役者は大小太鼓笛地うたひ狂言に至るまで、花の下にたとへたり、下草は花のゑんのにぎはひ、威勢ある様にとばかり心がくべし、其心持肝要也、いかにゑんの振舞は面白候共、下草のとりあひあしければ、いかにとしてよき花とは申がたし、加様の事稽古大方にて成がたし、よりく不斷のたしなみこゝろがけゆだん候まじく候、大夫たとひ下手にして、名人なり共、囃は大夫をうやまひ、大夫につくべし、○中略先囃の口傳と申は、序破急陰陽の位をよくたんれんして、囃わけ肝要なり、太和がゝりは陰陽の位を、女はかせ男はかせと申也、名こそかはれども同事也、能一番の間に、次第は序にて破と留るもあり、又序の序と留るも有、或は破急ととむるもあり、是は謠のこうあんをよくわきまへ



一認様共ニ若黨召連申間敷事

寛文八年申五月八日

〔御當家令條 三十一〕覺○中略

一町人舞々猿樂は、縦雖爲御扶持人、向後刀さすべからざる事、

一百姓町人之衣類、絹、袖、木綿麻布、以此内分限に應じ、妻子共に可著用事、

一舞々猿樂右同斷、但役相勤候時分は、熨斗目不苦事、○中略

亥○天和二月

〔明良帶錄 世職〕四座猿樂

職子方

葛野九郎兵衛威德源四郎金春三郎右衛門、高安三左衛門代々大鼓の家として、小鼓は觀世新九郎、幸清次郎、笛は森田庄兵衛、一噌又六、春日市左衛門、清甚兵衛、笹井忠五郎、貞光安兵衛、太鼓は觀世左吉、同權八、金春總右衛門、高安三郎兵衛、同音長、俗に城頭といふ、日吉十五郎、命尾八郎右衛門、幸王傳兵衛、大供三郎、代々傳來せり、

〔秋苑日涉 五〕百戲

散樂此云沙羅樂俗謂之能、全浙兵制所謂奴也、樂器有橫笛三鼓、以節歌舞、三鼓、一曰大鼓、廣於羯鼓而格

甚短、下有小牀、斜架置膝前、擊用兩杖、二曰小鼓、似細腰鼓、左手捧在右肩上、以指拍之作朋肯之聲、三

曰橫胴似小鼓而大、挾在左脇下、亦以指拍之、其聲甚震、三鼓並不詳所始、其制與腰鼓都疊答臘諸鼓

頗相似矣、按杜佑通典唐散樂用橫笛一、拍版一、腰鼓三、今之三鼓蓋出於腰鼓、差殊其制耳、○下略

〔花傳書 七〕一まづ囃といつは、水に物のうきてながるゝがごとくに、はやき瀬をばはやめ、まづか

なるせをばまづめ、諸の位を分別して、諸の文句に似合たるやうにはやすべし、惣別諸のうちを  
はやすに、める字はる字をかんがへ、又うたひの呂かんを開分て、それに相應するやうにはやす

〔御當家令條 二十六〕覺

一 猿樂之輩其家之藝常々無油斷可相嗜事、

一 其藝之外不似合不致事業專可守古法事、

一 万事可隨大夫下知若訴訟之義於有之は其座之大夫を以役人迄可申進之但大夫非義有之者役人迄可申屈事、

以上

覺

一 兼而被仰出御能には大夫所江致寄合無越度様可仕事、

一 先年如被仰出万事不願儉約を用ひ屋作衣類茶食物等ニ至迄其例を承合分限ニ應じ輕く可仕事

一 其藝を不相嗜而不入武藝等を心懸義可爲停止事、

附其藝之裝束道具之外不入道具不可所持事、

一 大名小名令參隨意を構不可無作法事、

一 於公家大名高家一座は相伴不可仕事、

正保四年

猿樂法度

一 道中ニ而道具持セ申間敷事

一 藝專ニ可相嗜不似合外之藝勤申間敷事、

一 絹袖可著事

一 御能之時分大夫方江參謂合可仕事、

は浪州一箇國也、五十貫可然と云々、諸家の爲とて被申也、是も舊例を存せらるゝ儀なるべし、其頃觀世大夫が父音阿彌もあり、然間能はて、音阿彌に二千疋被下、是は折紙なり、毎年如斯御成之時、觀世に被下祿此定也、私ざまにては是より減じたらんも、不足にては有べからずと云々、又諸家の内者などは、其人によるとみえたり、但別して扶助を加ふる時、彼引懸入の事也、

〔大館常興日記〕天文十年正月十四日、緣阿爲御使來臨、觀世四郎足袋御免事申候かやうの者には御免などの御儀無之事候哉、樣體具可注申上由仰也、如此輩はきと御免など、御ざ候御事不承候、乍去就所勞之事にて候は、たれへにても申候て、以其心得内々得御氣色、はかせられて可然存候、きと御免などの御儀は、不承言上仕也、

〔落穂集追加〕乘輿御制禁の事

一間曰乘輿は以前も今時の如く、御吟咏強有之たる事にて候や、答曰、只今とてもと申内に我等坏若き頃の義は、乘輿の御制禁別て稠敷有之たる様に覺へ申候、○中今時の御免駕籠杯と申物は無之也、其節も四坐の猿樂共は御願申上、老若をかぎらず竹輿を御免被遊けれ共、一同に黒く塗りて乗り申義は、外々の竹輿に紛れ不申様にとの義に有之と也、

〔難波江〕六三番叟

鳥駕籠 亡友吉見鐵一ノイヘルニ、鳥駕籠モリハ士人ニマガハザル爲ナレバ、誰ノヲテモヨシ、ナレバ目玉觀世ハ、觀世大夫元享ノコト也、目ノ玉蓋大キクアリタレバ、世ニシカ云常ニコレニ乗テ、吉原ナドヘモ遊ビニ往タリトゾ、目印ニナリテ、用辨ヨロシトテナリケリ、今ハコノ高名ノ乗タルモノ故ニ、コレニ乗タキナド、云モノモアリ、或御役者ノ、其鳥駕籠ニ乗タシトイフヲ、或一貴人キ、テ、汝ハ年モリカク、舊モ未熟ナレバ、今少シ稽古シテノレトイヘリトカ、主客コノ駕籠ノ由來ヲシラズ、タレ目玉觀世ノ乗レルヲシラテ、規模トオモヒタルゾ、ワカシキトイヘリ、

一殿中にて能させられ候時は、必近江猿樂兩人、田樂二三人、御前の通の御えんの下のゑらすに、敷皮を敷て祇候致候而能をはめ申候正月松ばやしの時は、各一重被下候又能いま一番などは、公方様直に被仰候事も候又、公家御相伴衆など被申候事も候つる、御供衆伊勢守なども同前、古しへは御縁より下へおりて、御供衆など申されたる候、近來はさも候はず候、

一同時小袖ぬぎの事、御服被下候へば、必大夫いたゞきて、すはうの上に打かけてきて、くれはのきりを舞候て、さてぬぎ候て、左のかたにうちかけて、御さかもりはつる迄候、又舞申候時も、かたにかけながら舞候、御服出候へば、公家大名御供衆申次、其外御通りに出たるほどの衆、かげにて小袖をぬぎ、舞臺へ一人宛持て出候ておき候を、座の者取候て、樂屋へ罷候又わたくしざまにて、も亭主のぬがれ候へば、各ぬぎ候、客人よりはぬがぬ由申候、一度に二ぬぎ候事も、常の事にて候、大夫一人にも、各つかはし候、又座の者などにも、心ざし候てもぬぎ候、金仙寺にてゑげく小袖ぬぎの候ひし時、我がぬぎ候おのゝはぬぎ候まじきなど申され候て、一人ぬがれたる事も候、一すはうぬぎの事は、も殿中にては御直垂出候へば、各ぬぎ候、前のごとく舞臺へ持て出候てをき候、翌日大夫其外座の者持て廻候、御ひたゝれの事は申にをよばず、めんゝなどは要脚に上下をそへ被遣候、私にても同前、すはう肩衣など、ぬぎてなげ候事あるまじく候、一能半に何にてもつかはされまじく候、さ候へば、大夫めんをはづして、戴き候間、ゑあはせ大事と申候、下

〔家中竹馬記〕一慈照院殿○足利義政

御成始には、親世大夫能を仕て、万足舞臺に置く、也、其趣は五貫

づ、並たる中を繩にて結て、左右に拾貫引さげて、拾人して持て出る也、白砂の上より舞臺にく、正面には不置大夫則罷出て御禮を致して、其後座之者執て行也、翌年の御成よりは、勢州貞親の異見にて五千足被下也、其謂は三職并國持れたる方は、毎年の御成に毎度百貫也、今當方○土岐



〔宗五大草紙上〕大酒の時の事 同殿中一獻の事

一同時○大酒 猿樂田樂其外遊者に折紙遣候事亭主よりなれば無是非候客人より被遣候をば、誰がし殿よりと亭主のきかれ候やうに可申是故實也、公方様にて御折紙被下候ば御能はて、うたひ申候時かならず大夫に被舞候て後勢州の役にて被遣候大夫御折紙を深く戴き懷中致し候私ざまにても同前又私にて要脚を持て出候て遣候事も候、それは五百疋三百疋百疋などの時の事も千疋とも候へば折紙に書て遣候但し千疋より内をも折紙に書候事又大夫に千疋總座へ千疋など折紙二被遣候事も候し大夫に五百疋役人により三百疋二百疋などかはりて金仙寺などにて被遣候事も候し又諸大名へ御成の時は萬疋被遣候其時舞臺の兩に五千疋宛つまれ候五百疋づ、兩の手に引さぐるやうにこしらへて大名の内衆器用もよく随分の仁十人持て被出候又折紙にて被遣候事も候歟此度承候へば島○足利の公方様義種 畠山式部少輔所へ御成の時御供衆の末々の人同名の衆持て出られ候舞臺の兩に五千疋づ、つまれ候由承候不審に存候同名備中入道瑞笑たしかに大名内衆随分の仁持て被出置候を座の者樂屋へはこび候由記し置れ候、

一殿中にてまげき能の時は觀世に三千疋づ、被下候由候又被下候はぬ時も候し又正月松ばやしの時はまゆらいに萬疋當日萬疋被下候し御臺様よりは御服十被下候前にあるし候如し、きとしたる時萬疋被下候、

一慈照院殿○足利 義政 御時觀世窮困之由聞召されて大名衆に扶助有べき由被仰候時畠山殿維本

にて能をさせられ候て千貫被遣候庭面の座敷に千貫つまれ候て戸をたて、をかれ能はて、折紙をつかはされ、さて戸をあけられたる由うさぎ大夫物語致し候しいらぬ事ながらあるし

候、○中略

一同金三枚

不明門佛具屋町

宮川七郎兵衛略下

〔人倫訓蒙圖彙〕地誌 謠は日本の遊興の随一なり、作者多くあつて、神祇釋教戀無常唐土、日本の古事、古歌、古詩の意、すべて士農工商のことわざ、幽玄鬼神のことにいたるまでつくさすといふ事なく、詞を和、和語を以てつゞり、枕詞たくみに、詞の縁を第一とせり、神事祝言の場、遊宴の座敷におゐて、これをもてあそばすといふ事なし、國家泰平の調子、鬱をさり老を若やくの功能有て、誠にめでたき様なり、

〔雍州府志八〕芝居略中 助能大夫之音者、十人或二十人、同音唱之、謂地誌、

〔花傳書〕一地誌をうたひ候時、扇をばさかてに持、かなめにてそとこゝろの拍子をうつべし、拍子高くうつこと有べからず、

〔殿中申次記〕四日月正

一公家大名略中 一善通士、觀世大夫

右御對面之次第略中 五番に公家と申入て公家衆被參、其次に陰陽師つゞきて懸御目、其後善通士と申入て善通士參、其後觀世と申入て、御障子を内よりあけ申て、於庭上懸御目也、略中

觀世大夫、同三郎父子に御服被下之、當年始被下之、

〔大内問答〕一觀世大夫と田樂の次第は如何候哉の事

まへより觀世大夫は、田樂よりうへを仕候、然に近日上意の趣は、御當家の御事は、等持院

殿様足利氏より始申也、然者田樂は、増阿彌、觀世是阿彌被召出間、觀世より田樂は前たる故に、

田樂可進申候旨被仰候、右京兆我等言上之趣は、年久義は不致存候、普廣院殿様足利義教、東山殿様足利義政、以來は觀世進申旨雖申上候無裁許、田樂を被召出候、定而觀世も先規の次第追而可

申上か、次第は此分候、

を出て漣や、志賀の浦舟漕れ行く、末は荒乳の山越えて御尋候へと答ふ、念頃に致へて給り祝著申候と云て、夫よりサシを諸ひ出せしとなり、流石脇も狂言方も、功者の出會故、少しも動顚の色もなく、却て模様になりまほらしかりしとなり、胸忘れの事は、随分功達の上にも間々有事にて耻にあらず。

〔耳塵集上〕一高安友之進といへる能の脇師名人のきこへ有大坂道頓堀にて勸進能有し時、初日の前日友達をいざなひ舟遊びに出酒にみだれ放埒の體也、折ふし京より津田三益といへる醫師見廻に下り同船に有しが友之進にむかひ、此度の能御身獨の目當也、則明日は初日然らば今日はきんがく有べき處に、油斷の體、明日の初日大事ならずやと異見ありしかば、友之進答て曰、初日は大事のものにてはあらず、大事は常の稽古にあり、稽古の時、魂を入能覺へ込、初日はわすれて出るなり、初日を大事とおもへば、我藝にあらずと答へければ、三益感じ入たるとなり。

〔江戸總鹿子六〕脇師

靈巖島

進藤權右衛門

木挽町つきじ

實生新之丞

京橋南四丁目

春藤源七

源助町

高安彦太郎

弓町

福王茂兵衛

〔京都御役所向大概覺書六〕能大夫并囃方之事

洛中住居扶持人脇師

一尾州尾州 現米四拾石

小川中立賣下ル町

小坂井宇右衛門

一金五枚 松平加賀守金

天使突抜魚店下ル町

同倅勘左衛門

一同金三枚

間之町夷川

長村林右衛門

羅生門、檀風、鳥追、四番の能をば、脇師にて勤むべしと相譲り、大口着用を許す、此時迄は紅葉狩を最上とす、斯して已來進藤も福王も是を學びたり、壽閑が子の彦太郎、後太郎右衛門と號す、是不休入道也。○中略

進藤が家は、元山科の百姓にして、元祖權右衛門諱よく大音にて、脇能のワキに出て見事也、觀世大夫是を引廻し、毎度我能の脇をさせ、上洛の時、二條御城にて藝よく出來、御旨に叶ひたり、此御能、猿樂相詰居、皆見物す、春藤友高、高安不休評判して、渠は油斷のならざる者也、素人にもかゝる者ありと讃美したり、是より藝益募り、觀世座の脇の家に定りたり、其弟久右衛門も、藝よく男よし、然るに兄權右衛門病死、故、其家を繼て觀世座たり、觀世事御家の大夫にて、其座の脇師なれば、公邊もよく勤めたり。○中略

福王が家は、元來武士也、足利將軍の時没落して、觀世が弟子となり、つひに猿樂と成、觀世が脇を勤るより、其座付盛なるを以、諸迄觀世と同流也、其福王をば、福王豊後といふ、是に子なし、然るに太閤の五奉行の内、長束大藏少輔關ヶ原の時、御敵の張本人列なれば、切腹仕るを、以其妾流浪して、豊後が方に來り住す、是懷胎なれば、頓て男子を産、豊後は是を養育して、己が子とし、福王茂右衛門と名付、脇師の家を繼しむる、かゝる事故、福王が家は、長束が子孫と世にいふなり、

〔老人雜話〕小次郎は信長の時分脇上手也と云、信長の初の比なり、小次郎が嫡子に彌次郎と云あり、是も脇の上手にて、小次郎に劣るまじと云、是は大德寺やらんに能ありて、歸るさに僕に殺されたり、勝れたる男色にて、其弟に了室と云あり、近比まで存生す、是は脇は下手なり、

〔翁草百四〕昔日江都御能に山姥有り、脇は進藤權右衛門とかや勤之、然るに脇名乗濟て、サシへ掛るとき、胸忘れして如何ともする事なく、さらぬ様にて狂言坐へ向き、その人の渡し候か、……善光寺への道敷へて給候へと云、則、鷲仁右衛門罷出て、是は思ひもよらぬ事を御尋候物かな、都



者なし、金春家にて、其弟源左衛門を定て、脇師に立て用ゆ、故に金春源左衛門は、脇師の祖也、春藤源七は、右源左衛門弟として家を立る故に、源の字を貰ひて名乗、後入道して友高と號す、其子を源七と呼たり、源七が子を彦次郎と云、其子六右衛門を、目腐六右衛門と世に呼たる上手也、觀世大夫京都にて能興行の時、脇能を進藤權右衛門勤男よく大音にての大臣脇なれば、見物の目を驚かす、其次二番目の増脇、此六右衛門勤、目くされ一人の増脇なれば、見立なき所なるを相勤め、見物の感心、初度の進藤に勝れる上手との取沙汰、略中

高安彦太郎家は、元ト大家にして、元來河内國玉藻大明神の神職也、本名横田と云、古へは高安村を領したる由、高安道善大鼓の名人にて、權頭と號す、猿樂にて其業諸藝に達したる者を權頭になさしむ、渠京軍に討死したり、是を長助と云、其子與八郎幼少に付、金剛が脇を勤る、金剛伊左衛門後見したり、其時分は大夫の外は定りたる職なく、一族門弟の内にて、相應に其業をなさしむ、笛鼓も大夫の方の傳授を請たる也、高安が大鼓も、元と金剛より出たる故、金剛伊左衛門は、與八郎成人して預り置し傳授の書を渡す、與八郎嫡太郎右衛門は、脇師と成、是春藤友高が聲にして、金剛伊左衛門にも由緒あればなり、故に其弟高安三右衛門、先代よりの大鼓の家を繼、其太郎右衛門後壽閑と號す、斯て舅友高には、高安が子は嫡女の腹にして孫なれば、之を彦太郎と名付て、兩家並て脇師の家を立たり、是より脇の家にて、翁なしといふ事をはじめて、式三番の代りに用ゆ、式三番過て開口といふ業有、此兩様脇師の家ばかりの傳授なり、大夫の業にか、はらず脇師一分の藝也、開口には、九足の偏はいといふ習あり、小鼓あしらひ有、開口は極て高砂に添ふ、惣じて第一番目の能を、脇能と唱へ來るも、脇師のおもたる故也、翁なしも脇能の前に付、翁と千歳との法を脇一人して相勤る、是皆心持也、高安の家は、全く金剛が同流にして、壽閑脇師となり、達人也、春藤友高舅として其業を指南し、當時の脇師の家を、兩家にて立るを以、金剛又兵衛より、張良

同町 大藏庄左衛門

〔京都御役所向大概覺書<sup>六</sup>〕能大夫并囃方之事

京都屋鋪有之御知行被下候能大夫

一貳百石 貳拾人扶持 大宮通觀世町

一百五拾石 上京畠山町

洛中住居扶持人能大夫

一松平土佐守方 一百石ニ拾五人扶持 油小路一條上ル町

一尾州方八拾石ニ 室町頭下半町

洛中住居扶持人之外能大夫

一下立賣小川東江入ル町

一元誓願寺小川西江入ル町

〔元治改正〕京羽津根三能大夫

西洞院二條上 片山九郎右衛門

釜座御池上 淺井喜次郎

東六條 宮谷直之進

北野下ノ森 川勝陽之助<sup>三</sup>以下略

二條新地 竹内平七

〔明良帶錄<sup>世職</sup>〕四座猿樂

進藤福王、春藤高安等脇師と稱し、上下の一流を立

〔猿樂傳記<sup>下</sup>〕脇師の事、猿樂起りて能興行の時、弟子にもせよ、其時々脇に用ひ、別に脇師と定むる

觀世織部

金春八左衛門

堀池庄兵衛

金春喜左衛門<sup>○中</sup>

竹村孫之進

川勝安之丞

同九郎三郎

金春流 同九郎三郎

金剛流 竹田權兵衛

尾州寺田左門次

甚多流 堀池平之丞

然而推譲於爲父之後者、而不爲焉、但以擊鼓爲之能、笛韻既揚、大小鼓聲應之、手如電掣、一鼓再鼓、衆音皆絕矣、人皆眩耳目矣、加之爲人有才智、而能問本朝神代以降之故實、復窺和歌之所諷詠者、旁搜索、漢唐興廢故事、而布之於歌詞、度之於曲調、以作新聲者、幾番々、衆工之中、無出其右者、歲甫十五、未冠、先帝花園院召之上殿、御手賜扇、時慈照相公侍上前、加手以令拜其賜、榮執大於焉、信光其先出自服部氏、乃伊賀州之甲族也、服部有三好男、春日大明神託其長男、告曰、事神掌樂、父不可而疾卒、次男亦爾、於是父母携季子入大和州、禮長谷寺觀音、路逢一僧、爲季子求名、名曰觀世、遂詣春日之廣獻其季子報神之託也、因留居和州、更姓氏爲結崎氏、以掌神樂矣、結崎有好男、所謂世阿彌者也、鹿苑相公義○足利滿所愛幸也、世阿彌年八十一、至普廣相公之時、其伎朝野稱焉、至晉阿而大興、以故繼世阿之後云、夫優者之伎、始乎秦河勝、今爲此伎者、皆其後胤也、蓋觀世者、本系服部氏也、爲神所託、不可與衆優同議焉也、

〔老人雜話下〕觀世黑雪は宗雪が孫也、宗雪子無し、保生大夫が子を養子とす、三郎と云、黑雪は三郎が子なり、宗雪も三郎も、東照宮御懸にて、兩人共に三河にて死す、今に至て觀世の家は、御家の大夫なるは此故也、相國寺石橋兩度の大能ありしに、初度は宗雪、後の度は三郎が大夫なり、是は百年許以前の事也、脇は小次郎、大鼓は高安道善など出づ、小次郎一の弟子に堀池宗室と云ものあり、二日の能に張良を二度芝居より所望しければ、宗室にさせたり、

〔二水記〕永正十八年○大永元年四月十三日、午刻、令上洛之次、於姉小路神明見猿樂、大夫上京小童也、

〔江戸總鹿子六〕能大夫

瀧山町

金剛大夫

山王町

今春大夫

弓町横町

觀世大夫

幸町

寶生大夫

神田

喜多七大夫

宇田川町

今春八左衛門

梅若大夫は、其家一流にて、先祖信玄の大夫也、太閤の御代、御先代以來の知行故丹波に住し、權現様御代になり、四座の家立、猿樂も相極候由承り及び、江戸へ罷出、被召出度よし願ふ處、四座と大夫も定りたる上なれば、百石被下、觀世座のツレ被仰付、一族同名餘多にして、本家は梅若九郎右衛門也。

堀池といふ家あり、觀世宗雪三郎父にて、相國寺の大能勤る時、脇は觀世小次郎にて、一日の能に張良を二度芝居より所望しければ、堀池宗實は小次郎が一弟子なるを以、宗實に是をさせたり、是其頃はワキ師と極りたる人なく、よき能をば外の大夫が勤る故也、此宗實はシテ大夫にて上手也、其子孫大夫職にて、松平土佐守殿大夫となる。

鶴屋七郎右衛門といふ大夫あり、古七大夫が門弟にて上手也、其子山田市之丞、甲府御家の大夫にして、文昭公家宣御供申御家人となる、父已來の傳授不殘といへども、住吉詣の亂拍子はなしと云に、此市之丞が子市十郎は、不行跡にて出奔す、鶴屋京にて略也○中略

尾州の御大夫、紀州御家の大夫、澁谷が家は、七大夫が弟子、中頃觀世流と成たり、又七大夫へ立歸る。

水戸御家大夫、鳥屋吉兵衛は、七大夫弟子也、代々其名を名乗、功者なり。

甲府御家の大夫、山田市の丞は、七大夫が弟子にて、鳥屋が子なり、御本九へ御供申て、後御旗本に被召出、生島文右衛門と改號し相勤、略○下

〔翰林蒞蘆集六〕觀世小次郎畫像法名宗松、號大雅、

本朝以優鳴者、觀世小次郎信光、故音阿之第七子也、音阿者、事於普廣○足利慈照○足利南相公、尤見愛幸者也、伎究其妙、王侯之第、嘉賓之燕、登歌臺、今當舞殿、肇神頭、今呈鬼面、或作武夫、桓々之貌、或爲婦人、啾啾之姿、於須臾頃、千態万狀、令觀者喜怒哀樂之情、動蕩于其內、天下奇觀也、信光克傳父伎、



渠が藝を思し召出され、太閤御代、渠が業を上方にて、毎度御覽有しに、其内に清經の能、すごとく  
と還幸なし奉るとの所の所作、下間少進と、大大夫と、七大夫が三人仕分たる事共を、思召考られ  
ける時、藤堂には、大大夫が恩免の事を相願ふを以、御免にて被仰出けるは、七大夫は何方に罷在  
ぞ、御能被仰付、御覽有度と上意の時、柳生申上けるは、某渠が居所、當所御座候得ば、尋見申さんや  
と申上らるに付、尋來れとの仰を蒙り、大和在所邊にて尋出し、則呼下すを以、被召出、七大夫義元  
藝を、鼻金剛に習て上手となるを以、金剛と一所に可罷在、由被仰付同居す、數年の浪々なるを以、  
一世一代の勲進能を勤むべしと、御免にて勤之、千兩の金子を得たり、此時の金剛は若輩なれば、  
當時其家内にて、七大夫盛なるを以、其座付の脇師高安太郎右衛門には、金剛が方の邪魔害成事  
を思ひ、是非とも外宅せよと強て申、七大夫を外へ移す、其段公儀より御咎め有を高安申ひらき  
たり、然れども兼ての御下知を用ひざるを御怒りにて、三百俵を配分可仕との上意に付、今に毎  
年貳百俵づゝ、七大夫方へ送ると也、尤高安がゝる執持仕候事不調法なりと、御切米百石の内、四  
拾石被召上、別家と成る迄は、金剛名目也。○中元祖七大夫若輩の時器用なれば、右の諸家へ便り  
て、學びたりし程の手際と見えたるに、若輩の時より見劣るを以、其節白狐大夫と異名す、夫より  
少し前に金剛が弟子と成、是よりめつきりと上手に成し故、喜多七大夫が家は、金剛流にして、元  
祖七大夫には、中頃金剛が家を持ちたり。

〔猿樂傳記〕下。日吉。大夫の家は、江州坂本日吉の神事を勤る氏神の末なり、觀世實生が下の地謠に  
日吉多し、其本家は日吉權大夫といふて、津輕の家に仕ふ、其子も彼家に勤む、はじめの權大夫は、  
實生古將監に多く傳授を教へたり、當時は却て實生の弟子と成、信玄太閤御當家○續のはじめ  
迄藝に名高く上手成と呼ばれしが、末斷絶、日吉も其末如在、山崎に居たる吳松大夫といふもの、  
末もなし、渠は太閤の御旨に叶ひたる者なり。

す、渠大藏の跡目に、弟庄左衛門を立置を以て、當時其後庄左衛門也、三男金春三郎右衛門大鼓の家となる、是大藏源左衛門弟子也、次男金春又右衛門大鼓の家たり、是一流の者家衰たるを執立

たり、後の大大夫が嫡子七郎、本家相續して、其嫡子近代の八郎、德喜也、略○中

金剛大夫は、坂戸家と云ふ圓滿より六代目の家にて、大和の内坂戸四百五十石を領す、天正の頃

の金剛は、小牧合戦に、三好秀次の軍に従ひ、敗走の時は、只一人秀次の供して討死す、其子なく、千葉の家のを以、名跡を立る故に、金剛が家は千葉の支流といひ傳ふ、渠關ヶ原の時、石田三成に

屬せしに付、沒收せられ、代々の坂戸領地を失ひしが、藝者の事なれば、被召出御藏米三百俵を賜る、其子世に鼻金剛といひし上手也、別て勤能に秀ぶ、或時は界の能の工夫を厠に居ながら案じ

たる、其形天狗と成しほどの心を附しものにて、面數舊家なれば多く持傳へし、其面は金春が家の面を借て勤む、能畢て直に返したりと、又家實に尉の面、不動の面、杯、六十六面の内にして、別て

大切也、不動の面は、元來野寺の本尊の御頭なるを面に直して、調伏曾我に掛る、此面を掛て鼻に障るといふて、裏の方を削りしが、彌鼻に障痛み甚しく鼻を損す、是かの異名となる、權現様御旨

に叶ひ、毎度御能被仰付、金春に續て舊家なれば、四座と御定の一座也、略○中

喜多七大夫家は、舊家にあらず、慶長年中、元祖七大夫は、鼻金剛が弟子にて、其父は堺の蛇谷に住

せし翁屋也、廿七歳の時、大坂御合戦にて、夏御陣也金春の大大夫と共に大坂へ籠城し、五月七日、真田

左衛門佐に伴て、將軍家の御備へ伐込、大大夫は馬上、七大夫は步行也、大坂落城に及び、兩人ともに落去て、大大夫には、藤堂和泉守常々目を懸らるゝに付、藤堂方へ走り入て隠れたり、七大夫は

大和の方へ逃行しが、其道にて柳生但馬守通り合せしが、是を頼まんと行向ひたり、但馬守甚叱りて退かしむるを以夫より因みの者を尋て、是に便り隠れ居たり、將軍家には、渠が功なる事を

御惜みにて、見付次第成敗せよと仰有しかども、兩人ともによく隠れ課せり、其後御能の度毎に、

名人どもへ頼み、一流の道成寺を興立せり、笛庄兵衛、小鼓小左衛門、大鼓九郎兵衛、太鼓惣右衛門と申合成就す、將監嫡子九郎は後の將監也、世間上手にして、常憲公○總川御代、世に名高し、次男は觀世の家督左門也、三男實生大夫とて、越前家の大夫也、後浪牢して奥州岩城に住し、晩年又江戸へ出、當時の實生大夫を指南す、後の將監嫡子主馬、次男嘉内、共に年若にして死す、故に三男造酒之丞は、加賀の家の大夫に出し置しが、是を副子にして丹治と改號し、將監病死して、渠家督の處に、是も早世し子なく、其姉嫁たる實生新次郎が子を以家を立る、是當代の實生也、金春金剛は、足利將軍家の大夫にして、秀吉公御當家様○總川迄の大夫也、中頃信玄の大夫にして、當御代別て御大夫也、大藏も信玄の大夫也、日吉大夫は信長の大夫なり、

金春大夫が家は、猿樂の開基樂頭大和圓滿が子孫也、圓滿が時、能數六十番を定む、後世に至り、其數次第に増益して餘多に及ぶ、中頃は是を業とする者、國々より出て、弘治永祿の頃には、大夫たる者十六家あり、此十六家の流義を、元祖七大夫には、不殘傳授したりと云、十六家今は退轉して、日吉、梅若、春日等のみ、家衰る儘にて殘れり、かゝる譯を以、金春が家にて、今に至り六十番の外を用ひず、○中略金春が家、川勝大臣より近代の八郎迄五十一代に及ぶ舊家也、八郎が父を七郎と云、其父を大夫といへり、渠に男子餘多あり、嫡子八郎家を繼て後及連といふ、次男金春源左衛門、一色を勤む、是より脇師の家別に立、三男大藏大夫と號す、渠は武田信玄の大夫となり、甲州に行、其子後大久保十兵衛と號し、御家へ被召出、御郡代を勤、石見守に任ず、死後譯有て滅亡す、三男大藏源左衛門、大鼓の家と成入道と號す、四男大藏彌右衛門、狂言師となる、及連が子七郎嫡子にて家を繼、次男惣右衛門、大鼓の家となる、七郎が子八郎家を繼、是後の大大夫なり、渠己が次男を以、大藏大夫が家の絶たるを重て執立る、其子大藏求馬、父の跡を繼てツレたり、常憲公○總川御代、御奥に被召出、大久保十郎兵衛と號して奉仕し、享保十年の後、御願を立、御暇を給り、奈良へ引越

流にして、まかも又觀世が座の脇の家なれば、謠の章も替りなし、此鬼若家を興し、後入道して黒雪と號す、其子を左近大夫といふ、左近壯年にして病死す、實生將監が次男を家督として、左門と號し、左近大夫が子久米之介を其子として、後の家督を渡すべしと定む、久米之介成長に及び、相共に勤し、所常憲院様御吉御小姓に被召出、藤本源右衛門と改號し、其後筑後守に任ず、依之左門には、觀世三左衛門が子、三十郎を家督に定、織部と改號せしめ、則家を渡したり、是は子たる者諸大夫と成、公邊勤仕せし處、猿樂として徘徊迷惑に存する故にて、隱居して、服部十郎左衛門と名乗、後年におよび薙髮して、圓雪と改しが、老後に及び眼盲たり、其實子を服部三郎四郎といふて、ツレの家たり、其子三十郎家督を得て、大納言家重公院信の御能の御師範たり、惣じて猿樂の舊家を御糺被成、四座と御定に付ては、御家の大夫元被仰付たるものなれば、觀世を以四座の第一とし、金春舊家の最上なれば、第二に立らる、斯る譯故、四座の大夫兩人づ、南都の薪の能は、觀世は御免にて、江戸に在、依之殘り三人兩人づ、相勤、觀世が夏より冬迄百日の間休息の御暇給はるを以、百日以後出勤御目見の節、五色の合せ小纏を獻上す、此儀關ヶ原御陣の時、諸手へ軍用の爲、合せ小纏を御渡しの時、觀世此儀を蒙り、諸陣へ配りたる此吉例なる由也、諸軍陣より觀世小纏を是れへもくと申詞にて、觀世縷の名を得たり、正月御謠初に初手をうたふ御吉例の御祝として、御肩衣を脱て賜ふを以、伺公の面々不殘、肩衣を取て觀世にあたへらる、略中

實生大夫が家は、元觀世が一族、是も服部氏にして、其元祖は觀世が弟子也、其後觀世が庶子を送り、家を相續せしめ、かゝる事故、觀世が流儀に元來は替る事なし、古將監若き時は、元祖七大夫上手なれば、是にたよりて藝をみがきたり、達人なれば、古來よりの上懸りに、七大夫流の下掛りを加へて、己が作意を交、新規一流のものとなり、其加へ取交し事をのけて見れば、觀世流にして謠も左の如し、將監才發の上手なれば、世に觸るを以、其家に道成寺の傳なき故、其時分の囃子方の



八丁ぼり  
竹しま丁

山本七郎右衛門

飯倉片丁

池田平左衛門

ッレ  
京はし大工丁

深尾甚左衛門

同  
八丁ぼり

田中庄右衛門

地  
京はし弓丁

太原勘兵衛

狂言  
芝西おうじ丁

脇本藤三郎

同  
北八丁堀七軒丁

齋藤與右衛門

同  
市谷火のぼん丁

大曾根新兵衛

地  
木びき丁

竹内源右衛門

地  
つきじ

村上九左衛門

新組

清水左太郎

ワキ  
西のくぼ

石寺權平

笛  
北八丁堀水谷丁

寺井勘兵衛

小ツツミ  
てつほうす

長命勘次郎

太コ  
赤坂

石井銀次郎

地  
つきじ

吉田查一郎四人略

狂言  
八丁ぼり

植田紋右衛門二人略

地  
北八丁堀

野村理兵衛

地  
市谷火のぼん丁

大曾根巳之介

物著  
八丁堀松や丁

大夫

〔猿樂傳記上〕四座并喜多座の始等の事

觀世大夫は伊賀の服部の一黨の者也、足利將軍東山殿に仕へて、觀阿彌と云同朋也、渠に仰せて、猿樂の業を學びはじめ勤しむ、其子世阿彌其子音阿彌と續き、同朋にて勤之、其子俗にて、觀世三十郎と號し猿樂となり、金春が聲と成彌藝修行熟し、子孫相續す、太閤豐臣秀吉御代世間に繁昌して、能大夫あまたありといへども、金春觀世最上たるも右の譯故也、太閤の御時權現様德川家康御在勤の後、御休息として關東御下向の時、いづれの大夫成とも江戸へ被召連、御慰の御能可有と太閤の仰により、然らば觀世大夫を御連被成度由御願にて、御借り被成候事、是常々御出入仕りし故也、夫より毎度江戸へ下向仕候に付、天下とならせ玉ひては、直に御家の大夫と成たり、入道して宗雪と號す、實生大夫が子を養子として家を譲り、三郎といふて家督す、五山相國寺にて大能あり、觀世が家の石橋兩度あり、初度宗雪、再度は三郎勤る脇は觀世小次郎也、後年三郎御科有て、沒收追放せられ、蟄居の内病死す、其子鬼若被召出といへども、父沒收に付家業退轉し、傳授の書物は有といへども其習なし、依之福王が家より、搦ての事を傳授す、福王が家は觀世が家と同

ツレ かんだこんや丁	寶生 權三郎	地 淺草馬道	己野 助次郎	○以下地	松本 九八郎
太コ 下谷同肩丁	高安 長次郎	地 かんた	矢田 源次郎	○以下地	一噌 要之助
ツレ 下谷かや丁	矢田 八郎左衛門	ツレ かんた松下丁	服部 助五郎	○以下地	實生 彦三郎
ツレ こんや丁三丁メ	清 甚兵衛	小ツバミ 八丁ぼり	楠田 伊兵衛	○以下地	幸 甚太郎
地 かんた九軒丁代ち	三谷 太郎右衛門	太コ 芝神明前	實生 新三郎	○以下地	
狂言 芝新丁	大藏 彌大夫	大ツバミ 南八丁堀	威徳 甚左衛門	○以下地	
小ツバミ 下谷長者丁	幸 五郎兵衛	小ツバミ 八丁ぼり奥力丁	幸 清五郎	○以下地	
大夫 百石 金剛右近 芝新倉五丁メ		大ツバミ 八丁ぼり中奥力丁	高安 三太郎	○以下地	
ツレ 大夫一所	長命 金次郎	笛 こまこみ	長命 清左衛門	○以下地	
同 芝源介丁	春日 善次郎	笛 三田四丁ノ	大供 勘之丞	○以下地	
狂言 芝新あみ丁	大藏 雄太郎	ツレ 大夫一所	長命 専右衛門	○以下地	
地 大夫一所	日吉 龜之助	笛 南部	長命 加兵衛	○以下地	
地 大夫一所	高安 孫右衛門	小ツバミ 三十間ぼり	大倉 權三郎	○以下地	
小ツバミ 八丁ぼり	長命 甚右衛門	大コ 北八丁ぼり	川井 彦兵衛	○以下地	
大ツバミ	春藤 次郎兵衛	狂言 新あみ丁	大藏 八右衛門	○以下地	
太コ	長命 甚三郎	同 あさぶさくらだ丁	高安 治太郎	○以下地	
ツレ 大徳寺前	幸 藤太郎			○以下地	
大夫 二百石 喜多六平太 はま丁袋丁				○以下地	

小ツヤミ  
しばしんせんざ

觀世 新九郎

小ツヤミ  
三十間ほり六丁メ

幸清 次郎

大ツヤミ  
つきぢ門跡わき

葛野九郎兵衛

喜ばし弓丁

延命太郎兵衛

大ツヤミ  
西のくぼ

樋口半四郎

大ツヤミ  
同所

樋口釜太郎

大ツヤミ  
本所御たい所丁

梅若孫七郎

大ツヤミ  
ふか川富よし丁

福王清兵衛

大ツヤミ  
本芝二丁メ

清水助五郎

大ツヤミ  
ちぞうばし

高井 兵助

大コ  
つきぢ

觀世與左衛門

小ツヤミ  
新せんざ

觀世權九郎

大コ  
芝金杉三丁メ

觀世權八郎

金杉  
狂言

多田傳七郎

地  
八丁ほり

梅若勘四郎

狂言  
ちぞうばし

鷺 仁右衛門

狂言  
北八丁ほり

岡村茂左衛門

狂言  
ちぞうばし

岡田七之助

狂言  
ちぞうばし

日吉長三郎

同  
ツレ

日吉市十郎

地  
かやば丁

日吉勘四郎○以下地三

同  
木引丁三丁メ

名女川辰三郎

山伏井戸  
ツレ

山田傳右衛門

同  
いぐら五丁メ

長谷川七左衛門

同  
置がん鳴

尾崎權左衛門

ツレ  
西のくぼ

岸原勘次郎

同  
弓丁

植田六兵衛

同  
本材木丁四丁メ

大塚吉左衛門

地  
まみ穴

大塚地方百五十石  
市谷御門前仲ノ丁

同  
弓丁

金春八左衛門

大夫  
金春七郎

春藤源七郎

ツレ  
かうじ丁山本丁

春日四郎右衛門

大夫  
大夫同席

金春清藏

ツレ  
ばん丁御馬や谷

笹井 豊次郎

ツレ  
かうじ丁山本丁

大藏助次郎

大夫  
大夫同席

長命久三郎

笛  
下谷御から丁

大倉長右衛門

小ツヤミ  
大はし向柳川丁

幸 五郎次郎

小ツヤミ

大藏利左衛門

小ツヤミ  
あたこの下

金春三郎右衛門

大ツヤミ  
あざぶ谷丁

黒川 權兵衛

太コ  
うらかやば丁

金春徳右衛門

大ツヤミ  
ゆしま下手段丁

金春 又三郎

大ツヤミ  
あざぶ谷丁

大藏彌右衛門

狂言  
麻布いもあらひざか

大藏 又市

大コ  
がぜんば谷

長命庄次郎

狂言  
芝通新丁

松村五郎左衛門

以下地  
二十人略

大藏 又市

地  
かうじ丁

寶生彌五郎

同

今川ばし通  
三番土手下

同所

寶生 新之丞

神田ばたこ丁

寶生 金五郎

同

同

同

寶生 金五郎

古事類苑

樂舞部十四

能樂三

觸流

〔猿樂傳記〕下松井喜左衛門は、もと大藏流の狂言師也。幼年の時、嚴有公觸吉の御弱冠の御遊びの御相手に被召出たり、後年御用に付役者の觸頭の命尾某相果たる故、觀世方より山田藤右衛門、金春方より松井喜左衛門を差出し、兩人觸頭と定む。

〔天保十一年武鑑〕御能觸流

二百後  
元すきや丁

山田藤右衛門

二百後  
本八丁ぼり三丁メうら通

松井小三郎

五人フサ  
見習

山田

吉次郎

能役者

〔雍州府志八古蹟〕芝居○中

凡自能大夫脇大夫、狂言大夫以下、至笛、大小鼓、太鼓、地謠者悉備、是謂一

座

〔明良帶錄世職〕四座猿樂

御能役者と稱す。若年寄支配なり、散舞といふ、俗に猿樂といふ、また能役者と稱す。

〔天保十一年武鑑〕御能役者

大夫 二百五十六石

觀世大夫

京橋南二丁目号丁

同居  
觀世鐵之丞

ウキ  
うらかやに丁

ウキ  
小石川戸さき丁

ツレ  
北八丁堀かやば丁

梅若六郎

笛  
かやば丁

春日市右衛門

笛  
下谷御から丁

森田庄兵衛

進藤權右衛門

福王彌三右衛門



致せしを、いかにも感心の體にて見居たりければ、友人の曰く、辻能杯は畢竟心を留る物に非ず、誠に其形に似たる事をして、間を合して置物也、増て道成寺杯は、笑種計の事なるに、いかで左様に見給ふぞと尋れば、更々左に非ず、千介が道成寺今日始めて見るに、甘心云計無し、今日をきて大夫に是程道成寺を舞ふ人は覺えず、尤其形はわけもなき事にして、からが一體道成寺我物に成てある也、餘の物をする心も、道成寺も同じ心にて勤るゆへ、自ら道成寺くつろひて面白し、理り哉、爰彼こにて、道成寺の場數、千介ほどのもの他に有まじ、いか程上手にても、場數少き故あれほどくつろがすと云て、寔に甘心して見物しけるは、流石權之進と云る、大夫程有と人々稱せしとぞ。

〔草茅危言〕五 戲場之事 附 淨瑠璃

世ノ辻能ト稱スルモ、非人ノ部タル故、平人ヨリ交ヲ通ゼズ、他所ハ知ラズ、大坂ニテハ宴會ノ席ヘ、辻能役者ヲ招クナド云コトタエテナク、○下

程罷出候之刻被出云々、仍馳向、終不追付、則參棧敷了、大夫兩人有之、相代了、

〔宇野主水記〕天正十三年、今度秀吉御在洛關白ニ成給<sup>略</sup>○中、七月一日參内アリ、禁中ニ御能アリ、上

下京ノ手能。秀吉ヨリ被仰付ト云々<sup>略</sup>○中、御能五番弓八幡田村三輪紅葉狩、吳服ノ切<sup>略</sup>○中、能ノ大

夫ハ上京ニテハ、ほりけ、ワキハほりけ、ガ伯父リウハト云入道前虎屋ト云タル者也、下京ノ大夫

ハ、禁裏御能ニ何ニテモ被下事無之、大夫若衆ナドナレバ、御扇被下事ナドアリ、今度ハ秀吉公ヨ

リ越後ノ帷二百進上ニテ、ソレヲ則悉被下訖、様ノ物極、膈六位モチテ書テ遣候、舞臺へ出遣事

無候也、

〔看聞日記〕永享四年十月十日、鳥羽之女猿樂勸進自昨日始云々、隆富朝臣重實以下見物ニ行歸參

語、美女五人歌舞殊勝、言語道斷見物也云々、拍手<sup>アッ</sup>、吟<sup>アッ</sup>などは男也、女共ハ如遊君音聲殊勝、觀世など

にも不劣、猿樂之體神妙也、棧敷六十三間、雜人充滿、不知數、群集云々、自西國方上洛云々、女猿樂希

代珍敷事歟、廿六日、抑聞彼女猿樂、廿三日於室町殿猿樂三番仕、赤松一獻申沙汰<sup>家先於赤松屋</sup>

御褒美、則被召御前御賞翫云々、万疋御小袖甘重被<sup>織物十重、練貫十重云々</sup>下三番仕畢、觀世仕被見云々、

〔時慶卿記〕慶長九年四月十九日、北野ニ女房能アリ、又御靈御旅所ニモアリ、終日鼓謠ノ聲聞、二三

日以前ヨリ在之、

〔慶長日件錄〕慶長九年四月廿一日、已刻御靈御旅所勸進能見物ニ行、大夫女房也、つれ同女房、女猿

樂八九人有之、世人美人ぞろへと稱之、

〔長澤聞書〕一亂世の後、京師專女能はやり申候、則吉野と申傾城の大夫四條河原にて能いたし候、

其刻織田上心御忍び候て見物被成候處に、織田宇樂殿衆と上心衆と喧嘩いたし、侍多く果申候、

又舞臺も不殘崩し申候、殊外大騒動に付、女能堅く御法度被成候、

〔翁草<sup>五十六</sup>〕一近頃にも能大夫橋本權之進友人と伴ひ、堀井千助が辻能を見物す、其日道成寺を

一若人は弓馬鞠又は歌道の事。○中音曲なども、ちとは稽古候て可然候。略○中手猿樂はまかるべからざるよし申傳候由故勢州も堅くの給ひ候し、

〔東寺百合文書イノ百二十八〕謹請申 手猿樂之事

右手猿樂事、近年大方御制禁之處、今月十八日夜、於乘親在所沙汰之、然出來當座喧嘩之間、則雖可有御罪科被猿樂一向停止之段、不分明歟之間、於今度許者預御宥免者也、所詮於自今以後者、堅被停止畢、若背此旨、向後致沙汰者、會所出輩、不及是非之御沙汰、速被破却住屋、被召放諸驛、至其身者、永可被寺中於追放也、縱雖不加判形於此請文、於境內住人并寺家被官之輩者、可爲同罪者也、仍爲未來龜鏡請文之狀如件、

長祿三年七月 日

乘珍花押

〔親長卿記〕文明十八年正月十九日、早旦參内、一獻申沙汰也、有猿樂七郎大夫也、於軒廊前小庭在之、

二月四日、參内、今日外様一獻申沙汰也、有猿樂守山手猿樂也廿四日、依召參内、有一獻守山小猿樂、依召

祇候、十九年三月十八日、午刻許參内、今日近衛前關白○政家公一獻申沙汰也、有手猿樂龜大夫有十四番、

長享二年二月廿三日、午刻許參内、今日近衛前關白并西園寺前左府、德大寺左府、花山院右府等一

獻申沙汰也。○中有猿樂龜大夫有十四番十三番、一番養老瀧、二番經正、三番江口、四番自然居士、五番邯鄲枕

六番楊貴妃、七番元服會我、八番通小町、九番角太河十番金輪十一番伏見十二番七騎落十三番岩

舟、

〔蔭涼軒日錄〕長享三年正月廿四日、今夕於讃州第有松拍、松拍十番手、能五番有之由、永德傳語之、

〔親長卿記〕延德三年三月二日、有内裏手猿樂外様人々一獻申沙汰云々、四日、近臣一獻申沙汰也、

略○註 有手猿樂、

〔二水記〕永正十七年八月廿七日、京小猿樂、可見物哉之由、轉法輪三條有使者、可致同道候由申了、午

一鳥帽子類壹ッ入三箱

一頭巾五ッ入壹箱

一同五ッ入壹箱

一大頭巾壹ッ羽團扇

一たご大小貳組冠  
但腰付壹ッかつみ柄壹ッ

一小鼓貳挺壹ッ太鼓壹ッ

一床几壹ッ段能臺懸壹ッ

一木

長刀貳本張子鏡壹面

一扇子八本夕顔造り物壹ッ

一梅造り枝壹本

一木

明造り物三本木鎌壹本

一御幣貳本鶴龜冠之物貳ッ木刀六本

一四ッ手網壹ッ鏡木壹

本木之槌三本

一矢壹本木刀身計壹本珠數貳連白髮壹ッ

一張子幕壹張

〔吉原雜話〕一口七郎右衛門方には能舞臺ありけり故に平日能をせしなり。○中略

享保元文の頃も、若いものども山口の舞臺を借りて能興行、

氷室 頼政 黒塚 蘆刈 鉢木 融

一角町巴屋吉左衛門方にも能舞臺あり、廣座敷の疊をあげると下は舞臺板にて、左右の戸棚を明けて手すりを付ければ、直に棧敷となる、舞臺の下土間へは瓶をならべていけ地形せしなり、  
〔甲子夜話〕九十六、予○松ガ隠莊近所ノ番場ニ、御倉前ノ札串松屋貞吉ノ別宅アリ、町ノ裏家ナルガ、ソノ中ニ能舞臺ヲ建テ時々能興行ス、大名ノ能又ハ座ノ大夫等ガ興行ホドノ勢ナリ、一體町人ハ能ヲスルコト成ラヌコト故觀世大夫ガ連ノ日吉市十郎ガ名目ヲ假リ、日吉舞臺ト稱シテ興行セリ、予モ往テ見物セシガ、頗ル盛ナル體ナリ、

〔粟田口猿樂記〕此座は太子○臺の御時、秦のなにがしより相傳へたれば、三座四座など申侍れど、是ぞ誠に統領にて侍れ、其外多くにわかれ侍ども、いま京洛上下に手猿樂とて、おはくいでき侍るたぐひなるべし、

〔宗五大草紙下〕色々の事

手猿樂  
小猿樂



參可致候、

右之通、町中不洩樣可相觸候、

申五月廿七日

町年寄  
役所

淺草猿屋町家持

元札差

松屋佐吉

右之もの所持能裝束七拾七品、同道具類六拾四品左之通、

一 紺地金入牡丹之模様半切壹ツ 一 白同斷 一 萌黃地櫻模様同斷壹 一 白絹大口貳  
 ツ 一 同精好半切壹 一 紫精好半切壹ツ 一 白地芭蕉織模様裝束壹ツ 一 鶴菱龜  
 甲裝束壹ツ 一 赤地扇之模様裝束壹ツ 一 赤地桐模様半切壹ツ 一 紫地下夕垂櫻模  
 樣長絹壹ツ 一 赤地狩衣貳ツ 一 紺地金入桐ニ色わき狩衣壹ツ 一 萌黃唐模様法被  
 壹ツ 一 白地桐模様法被壹ツ 一段織縫箔模様裝束壹ツ 一 鱗車ニ桐裝束壹ツ  
 一 麻染分懸直垂壹ツ 一 黒地雲之模様狩衣壹ツ 一 柿色水衣壹ツ 一 淺黃水衣壹ツ  
 一 紺地縹陳裝束壹ツ 一 紺地絹裝束壹ツ 一 御納戸地絹七寶裝束壹ツ 一 黃地  
 黒棒島水衣壹ツ 一 黃霞水衣壹ツ 一 飛色島麻之草胞壹具 一 黃ニ黒松之模様同壹  
 ツ 一 白地無地之のしめ壹具 一 菊蝶縫模様裝束壹ツ 一 龜甲鶴丸裝束壹ツ 一  
 綾織紺白中形懸ケ直垂壹ツ 一 白金入牡丹模様直垂壹ツ 一 白菊地毛織裝束壹ツ 一  
 一 御納戸絹袷壹ツ 一 飛色金糸たんは模様長絹壹ツ 一 媚茶水衣壹ツ 一 麻かちん  
 松竹紋懸直垂壹ツ 一 紺紋紗水衣壹ツ 一 石帶五ツ 一 かつら帶三ツ 一 白木綿  
 鉢卷三ツ 一 飛色絹裏付肩衣壹ツ 一 萌黃絹中立肩衣壹ツ 一 小紋絹肩衣壹ツ  
 一 花色絹肩衣壹ツ 一 白木綿九くけ帶貳筋

臺體ニ補理置候分、是又取上ル○中略

天保七 申五月

右柳原主計頭於御役宅同人申渡之、尤吟味ニ不相成呼出し即日申渡ス、

〔諸事留三〕天保七 申 年五月

淺草猿屋町家持

元札差

松屋佐吉

右者南本所番場町所持地面請借地ニ補理置候能舞臺、當時取崩有之、木品等被召上御拂ニ相成候品書左之通、

一杉角柱八本 一檜土臺四本 一椀抱三丁 一松水引梁四丁 一松丸太軒之桁五

本 一小屋梁四本 同床大引三本 同根太貳寸五分角拾五本 一般舞臺板三拾貳

枚 一般天井板拾貳坪 一松竿縁拾五本 一同丸太面付小屋桁七本 一般羽目板

五拾枚 一松三間之手摺リ一、口同貳間一ト口瓦拾五坪半 一柱下伊豆石尺角四本

一瓶貳ツ

右來ル六月四日迄ニ、望之者南本所番場町名主友太郎方江罷越、見分之上翌五日四ツ時主計頭

殿御番所江入札持參可致候、

淺草天王町家持

元札差

伊勢屋嘉兵衛

右之者武州須崎村利兵衛住居之内借請補理置候能舞臺體之もの、當時取崩有之木品等被召上、御拂ニ相成候品書左之通、○中略

右來ル六月四日迄ニ、望之者は主計頭殿御番所江罷出、見分之上翌日四ツ時、同御番所江入札持

市人自爲能

〔續祝聽草二集九〕市人猿樂咎

申渡

淺草猿屋町

家持札差佐吉父隠居

定吉

右 佐吉

同人弟 長之助

文之助

同所天王町

家主札差

加兵衛

同人倅 加十郎

其方共之内、定吉始佐吉、長之助、文之助、其能を好み、召仕迄も謠稽古致し、南本所番場町佐吉所持之地面<sup>江</sup>添借地致し、座敷續<sup>江</sup>能舞臺を補理、定吉は小鼓を打、長之助太鼓、佐吉文之助者仕手脇いたし、裝束之石帶<sup>江</sup>は自分紋を附、毎月催候度、每能役者、又は素人ニ而も業之宜ものは差加、見物に參り候もの<sup>江</sup>挨拶ニ出候節は、定吉佐吉共繼上下著し、能に而已、打掛り罷在、加兵衛横渡世向は支配人へ萬事爲打任、能狂言を好、別莊座敷之疊上ダ候得は舞臺に相成候様補理折々狂言相儀、佐吉方に能有之節は加り、銘々裝束に候、迎錦繡を繰、加十郎儀は放蕩もの<sup>江</sup>多分之金銀遊興ニ遣捨、妻呼迎候之節、待請出迎等多人數寄集り、料理向祝義差出し候義、夥敷其當座日々客を招き、大行成致し方<sup>略</sup>、町人之身分を不顧奢侈ニ流、身分不相應之至り不届ニ付、此上及吟味、夫御仕置可申付處、格別之譯を以宥免、佐吉加兵衛儀は札差取放手鎖、定吉加十郎義は手鎖、長之助、文之助、義手鎖申付候、尤能裝束類并佐吉別莊ニ補理有之候、能舞臺取上ダ、加兵衛義も別莊舞

侍中牧野成貞憂之、以爲人主不宜間居、乃勸王召儒講經、召僧講法、召猿樂人作戲、於是無論林信篤等諸博士、日侍講筵、郡下諸名僧更進見、及猿樂人數輩、日夕奏技、並爲消日之具、

王好猿樂、不徒觀聽、亦親爲之、猿樂人自卑賤起爲中郎者、百餘人、有拜朝散大夫者、國初以來所未曾有也、○中略

王好猿樂、諸侯以下倣之、洋々其聲、盈溢于城市、家人子弟競學習、以求仕進、雖士不耻、與猿樂人比、況其下乎、諸侯唯備前侯綱政、土佐侯豐昌、中村侯昌胤、一關侯建顯、八戸侯直政、好雅樂、

〔元寶日記〕元祿四年三月十日、年頭之勅使千種有能、院使小川坊城俊、御對面、十三日、鑾公卿等將

軍家綱吉、自遊舞令見之、公卿依懸望也、四月廿五日、命御一族衆於營中、令遊舞、江口尾張光貞、伊網敦加茂水戸綱條葛城松平加賀守、畢而有饗應各賜器物、

〔常憲院殿御實紀附錄〕當代綱吉、御好文の事はいふもさらなり、常の御遊には殊更申樂を好

ませ玉ひ、常に御みづから人に先だちて御所作ありければ、御身ちかく仕へ奉りし者はさらなり、三家諸大名諸有司まで、みなその技に携らざる者はなかりき、

〔文恭院殿御實紀附錄〕西の御所家慶、散樂翁舞を舞せ玉ひしことあり、こはその業の者すら

たやすく舞得がたき事なるを、いとよく舞せ玉ひければ、見奉る人々感ぜざるはなかりき、このよし御所家慶、聞しめされ、遊藝にもあれ業の至りふかきは、悦ばせ玉ふ所なれど、其業いたる

については、おのづから其道執心深くなるものなり、古より明君良將の亂舞遊曲を、ことに深く好める者を聞ず、上これを好めば下これより甚しき習ひなれば、近習の者ども、おのづから文武

の心掛薄く成て、後には能役者の眞似するやうに、成行事あらんぞかし、さては風俗をもこなふべきなり、氣血運動の爲慰みにはよかるべし、まひて執心し玉はぬやうに、よく思召さる

べしと、御教諭仰進せられしとぞ、



長秋大名は細工頭矢部助之進定成朝比奈は勘兵衛景憲つとむ、八月十日、又猿樂催さる、三輪は書院番曾我太郎右衛門包助、實盛ハ小姓水野右京進勝忠、兼平ハ高家大澤右京亮基重、船辨慶ハ書院番蒔田數馬助長廣、芭蕉ハ保田甚兵衛宗雪、是界神保左京茂明、葵上ハ中興小姓瀧川長門守利貞、柏崎ハ森川三左衛門氏時、櫻川ハ書院番本多丹後守重世、鶴ハ水野出雲守成貞、源氏供養ハ小幡孫市郎直之、東北ハ稻葉忠右衛門某清經ハ左京茂明、狂言五番、麻生ハ書院番中川左平太、重良、骨皮ハ大簞筒奉行柳原兵左衛門忠直、胸突ハ使番小幡勘兵衛景憲、ふすまハ小姓組西尾小左衛門重長、梟ハ腰物奉行大河原源五左衛門正良なり、十二日、この日猿樂催さる、佐久間將監實勝ハ卒都婆小町、柳生但馬守宗矩は富士太鼓、永井日向守直清は國柄、保々兵九郎貞季ハ舟辨慶つかふまつる、はて、日向守直清より躍を進らす、記日十七日、未後猿樂御覽せらる、源氏供養ハ柳生但馬守宗矩、海士は永井日向守直清、東岸居士は保々兵九郎貞季つかふまつる、廿八日、この日新舞臺にて猿樂あり、老松田村、定家谷行三井寺、藤戸、天鼓、女郎花、三輪なり、定家ハ柳生但馬守宗矩、三井寺ハ永井日向守直清、藤戸ハ佐久間將監實勝、天鼓ハ保々兵九郎貞季、其外みな猿樂のもの等役す、大僧正、天海見る事ゆるされて饗せらる、

〔明良洪範三〕酒井忠勝空印ノ曰、猿樂ハ武家自分ニスベキ業ニ非ズ、其家ノ者コソ面白クレドモ、自分ハ元ヨリ子息家士等ニモ禁ゼラレシト也、或時尾張光友卿殿ニテ、御嫡子五郎太綱誠卿殿御能遊バサレシヲ、御自慢心ニテ忠勝ヘ御見セ有シニ、更ニ感心セラレズシテ申ニハ、大人トシテ勿體ナキ御事也、他ノ人ヘ仰付ラレ然ルベシ、御稽古ノ事ニテ、最早御器量ノ程モ見ヘ候ト申止メラレシト也、忠勝成瀬ニ向ヒテ、武家ハ幾度モ武ヲ講ゼラルハ、コソ本意ナラン、大人公子ノ御身トシテ、幽靈女ノ眞似更ニ益ナシ、故ニ達テ申上テ止メタリ、

〔三王外記 憲王〕王○鎌川性忌克、喜怒不當、左右近習多忤、冒獲罪、或被斥逐、或幽死、甚者王親刃殺之、

佐久間將監

大會

大橋龍慶

善知鳥

岡田將監

鶴飼

觀世大夫

羅生門

以上

進藤

權右衛門

春藤

保々石見守

清三次 郎介

庄六右衛門

十三右衛門

長口右衛門

笛太 新七

笛 又三

笛太 勘左 七吉

笛太 三彦 四九 耶耶

右何レモ前代未聞ノ役者衆也然ルニ政宗ノ太鼓ノ役ノ義御褒遊バサレ候其時先太鼓ヲバ觀  
世左吉ニ先ヘ御持セ其跡ヨリ出ラレ摠役者ドモト同ジャウニ御禮致サレ候ヘバ公方様イヤ  
イヤト御讃遊バサレ候ヘバ御前ニ伺候ノ諸侯異口同音ニドツト譽玉フ正宗其時ノ裝束ニハ  
下ニ淺黃地ニ金紋ノ鈍子裏紅梅其上ニヒツ鹿子ノ小袖ニ金紋ノ五色ノ糸ニテ廻リ七寸四方  
程ニシテ雪ニ薄ヲ五所紋ニシテ淺黃裏肩衣ハ戻子後前ニ唐團ト寫唐草ヲ金ヲ以テ摺箔袴ハ  
ヒワタ地ニ色々菱ヲ金紋ニ織付サセ扱亦太鼓打スマシ玉ヒ舞臺ヨリ直々御前ヘ參ラレ候ヘ  
バ各サリトテハト讃玉フ公方様ニモ事ノ外御機嫌ノ上上意ニハ聞召及バレ候ヨリ今日ノ藝  
ブリニ御肝ヲツブサレタリ今ヨリハヨキ役者ヲ御見付遊レタリトテ御戲レ御笑ヒ遊バサレ  
候

〔大猷院殿御實紀 三十五〕寛永十四年七月廿一日けふ奥にて猿樂あり翁は書院番頭本多美作守

忠相三番更は使番小幡勘兵衛景憲天鼓は中奥小姓森川三左衛門氏時清經稻葉長三郎某源氏  
供養小姓組與頭中山勘解由直定鶴飼は小納戸星合伊左衛門具枝百万は書院番駒井次郎左衛  
門昌保自然居士は蒔田數馬助長廣善知鳥は書院番頭田中主殿頭吉官三井寺は使番多賀左近  
常長藤戸は書院番頭組土屋長三郎政重蛸は書院番曾我太郎右衛門包助狂言五番口眞似は銃  
炮大箆筒奉行榊原兵左衛門忠直犬伏は書院番中川左平重良清水は小姓組西尾小左衛門重

未佛が原御傳授不被成候ニ付權現様御殘り多被思召佛が原を被習候様にと被仰候常眞は江戸へ罷下候其正月廿一日權現様には田中藤枝へ御鷹野に被遊御留守中に佛が原御習被成候得と被仰置候故御稽古被成候正月廿四日田中にて權現様御煩付被成二三日過而駿府へ御歸城御病氣殊之外重きに付御子様方宇都谷迄御迎に被成御出候神祖御駕籠之内より常陸は佛が原習請候哉と御尋候得者中々成就仕候と被仰上權現様御意には氣色本復次第佛が原御見物可被遊由被仰候其後御氣色重り終に御能も無御座四月十七日に御他界也頼宣卿是を御殘り多思召紀州へ御入部和歌御宮御建立之後此事不被忘思召九月十七日臨時の秋祭被仰付毎

年御神事能不息兩三年者毎度佛が原を被仰付仍此九月十七日の御神事能は御國末々萬々歳迄も無退轉筈ニ被成御定候と其後贅市郎大夫其外へも被仰渡候

〔玉露叢<sup>十</sup>〕寛永十二年正月廿八日ニ、二ノ九ニ於テ將軍家光公へ、仙臺ノ政宗御膳ヲ上ラル。○  
中

一今日ハ大小身ニヨラズ、御能ノ御役付アリ、

御能組

翁 内田平左衛門

千歲

本多太郎左衛門

三番

小  
姐  
勸  
兵  
衛

高砂

進藤

其

市控  
有有  
衛衛  
門門

櫻井八右衛門  
實盛

權右衛門

## 衛取

三松平四郎與野守

毛利甲斐守  
江口

九郎右衛門

邪助

館市右衛門

加藤式部少輔  
玉菟

進藤

門介

笛 長 次 郎

永井日向守  
道成寺

高安

352

太  
左  
吉

保々兵九郎

春藥

門

第七節

夏月

1

1

---

事とおぼされしに依て、御仕舞なされ候へ共、如此之靈驗に驚いそぎ下山し給ふて、兵庫之寺に御泊候ひしが、さても弘法は人間に在し時心剛に徳厚かりし人なむめり、今度は高野山に對し、如形善盡し侍りしかば、うれしくおはしまさん事にて侍るに、けふの雷電などは、以外之たゝりなり、さすがなりける權者にて有つるよと、感じ給へり、

〔駒井日記〕文祿四年四月十日、關白様秀次豊臣辰刻が伏見江御成、則太閤様秀吉豊臣御殿江被成御出、同申刻迄御逗留、及晩聚樂へ還御、

一伏見聚樂におゐて御能可被成由御能組之次第、

初日聚樂 一御能 老松 一同 源氏供養 一清經 關白殿 一春日龍神 常眞

一三輪 家康 一御能 かんたん 一はせを 筑前 一御能 大ゑ 一猩々

關白殿略○下

〔老人雜話上〕或時太閤秀吉豊臣馬に騎て、烏丸通を參内す、新在家の下女四五人、赤前垂を掛けて出て見物す、太閤馬上より見て云、只今我内裏にて能をすべし、皆々見物にこよと、

〔老人雜話下〕太閤内裏にての能度々の事也、其比謠を作て、明智討ち、高野詣など云あり、高野詣には大政所の幽靈出給ひて、あら有難の御弔やと云ことあり、太閤と東照宮と加賀大納言殿と三人狂言もあり、毛利輝元鼓をうたれし事もあり、道智當手になることもあり、明智討に明智になるは、其比山崎に居りし大夫吳松なり、

〔慶長見聞錄案紙下〕慶長十五年四月十九日、於駿府内府様家康徳川爲御慰下、手揃之御能有之、遠山

民部少輔鈴木久右衛門池田備後守脇水無瀬一齋右之輩勤之、

〔南龍公言行錄上〕元和二年正月、織田信雄入道常眞公江戸へ年頭之御禮に下る、迎、駿府へ立寄、三  
四日御逗留、權現様御馳走御能有之、頼宣卿へ佛が原被遊候得、見物仕度之旨、常眞公所望、頼宣卿



て被遊候やうにと新九郎申けり、日數やうくつもり、御稽古の程もかさなり、仕廻すくなに、扇などもびやかなれば、見る人とかう申に及ばれぬ事にて有けるよとて、かんじあへりぬ、事松金銀御服などおびたゞしく拜領有、諸侯大夫衆も、一かたならぬもてはやしなれば、門前にぎはひにけり、

〔駒井日記〕文祿三年二月九日、大坂御本丸於御舞臺太閤様秀吉被遊、一番吉野詣、二番田村三番

關寺小町、四番源氏供養、五番老松、右何も太閤様被遊、關白様秀次御見物、

〔太閤記十六〕高野詣之事

三月○文祿三年三日、秀吉公高野へ御登山なされ、青巖寺に御寄宿ましく、て、二親尊靈のため、御焼

香いかにも懸に沙汰し給ひけり、○中四日の夜宜ふは、今度出來侍る新諸五番御能遊し、一山の

衆徒に見せ、學問之勞を慰めむと也、其旨役者之者共に觸候へと仰出されしに、木下半介奉り、金

春大夫其外役人共に申渡し、かば、五日之未明より、青巖寺門前に參りにけり、今日は一天に雲

もなく、四方に風もなふして、いとをだやかなれば、何も役人共舞臺に著座、色はへて見えにけり、

一山の上下能めづらしさに、老若押合、門の外より内に入むと、せきあふ事見るめさへ痛みぬ、笛

のねとりなど、ほのめきければ、大かたまづまりかへり、御能初りけるに、事外に出來つゝ、袖より

大やうにおさくしければ、見る人皆興さめてけり、抑高野山は、昔より笛太鼓つゝみ大師の制

禁にして、一向左様之沙汰なかりしなり、高野詣と云新謠の舞のうちより、空のけしき聊かはり

侍るよと云もし、見えもし侍るうちに、乾の方より黒雲一村おほひ出たり、見るがうちに、天地頓

に震動し、雷電夥しく鳴出、疾風甚雨まぶき横ざり、肝魂も消はて、是はくくと互に目を見合、息は

づみ身の毛もよだつて、恐れざるはすくなし、秀吉公も壯年の昔より、高野山之事かく聞及ばせ

給ひしか共、かやうの事は何之地にても、其あらましをことくしく傳への、まれ共實はなき

〔甲子夜話<sup>二十三</sup>〕田安殿ノ家士某云フ、觀世大夫勸進能興行ノトキノ切手ノ紙ハ、メヅラシキ紙ナリト承ハル、コノモノ君ガ家ヨリ先例ニテ贈ルト聞ク、冀クハ其紙ヲ賜リタシト請フ、然ルニ予<sup>○松</sup>ガ家曾テ此事ナシ、其後予觀世大夫ニ問タレバ、カノ紙ハ加藤遠州<sup>侯</sup>大洲ノ家ヨリ先例ニテ贈ル、ソノ紙ハ別段ニスキタテ、與ヘラル、ト云、紙ノ中ニ木葉ヲイロノスキ入レタルモノト、コレ何ニ縁テ然ルヤ、人ノ知ラザルコトナリ、

〔守貞漫稿<sup>二十三</sup>〕勸進能

近年大夫一世勸進能一度、或ハ江戸ニテ行之、或ハ京坂ニ於テ行之、其時ノ官許ニヨル歟、<sup>○中</sup>大坂勸進能ノ場ハ、從來難波新地ノ郊外ニアリ、蓋行之コト稀ナリト雖ドモ、其場常ニ在テ、敢テ不壞之也、然ルニ天保中北野ノ郊外ニ移遷之、

武人自爲能

〔太閤記<sup>十四</sup>〕將軍於名護屋癸巳御越年之事

思はざらめや光陰箭のごとし、文祿元年もやうやく事あげき中にまぎれくれ、<sup>○中</sup>とかうのゝしる内に、鶏正旦の祝音をとなふ、<sup>○中</sup>折ふし城州八幡山の暮松新九郎年頭之御祝儀申上候はんとて、なごやに至て下向せしかば、御氣色にて、殿下<sup>秀吉</sup>〇豊臣みづから御能をも御けいこ有て、御心をものどめさせ給ひ、又は陣之衆士をも慰めんと也、思ふどちへだてなく云かはしけるは、御年も漸耳順にちかからむねがはくは止給ひなば、目出事になむ侍らんと云も有、又笑をふくみてさみし侍るも過半せり、初の程は山里にして、御伽衆計被召連御けいこ有しが、御仕舞のよしあしをつゝ、ます有やうに申せと御誼也、新九郎をしへ申やうのつきん、しさ、いみじさ、不一方、もはや表向に物し給ふとも、くるしく侍るまじき由、暮松申上しかば、其さま宜しからんことを、強て思ひけるにこそと宜ひつゝ、弓八幡は天下をおさめ、民を安んずる能なれば、御けいこ有しが、事外宜しく侍る由のみにて有し也、五十日計の内に、十五六番覚え給ひしが、やがて舞臺に

段申上候以上、

巳十月

遠山左衛門尉

鍋島内匠頭

朱書

弘化二巳年十二月十六日、安藝守殿一己之再考被仰渡下ゲ札ニ而申上候様被仰渡候ニ付左之通下ゲ札致し、同月十、八日御直進達、

本文朱書ニ申上候觀世大夫能興行之通、小間割金三千兩ニ被仰付、町方差支有無之儀御尋ニ付、猶勘辨仕候處、三千兩之割合、

上之町屋小間壹間ニ付 銀壹匁八分六厘壹毛餘

中之町屋 銀壹匁三分六厘壹毛餘

下之町屋 銀八分六厘壹毛餘

右之通に御座候間、當時困窮之者共多には御座候得共敢而極難澁と申程には至る間敷、請取候方ニ而は格別減少致し候間、折角相願候勸進之詮も薄き義と奉存候事故、左候得ば觀世大夫同様三千兩之割合ニ被仰付候共、町方痛に相成候程之儀も有之間敷、尤興行中ニ而も歌舞伎見世物類等相休に不及旨申渡候は、差支之義無之筋と奉存候、依之此段下札を以申上候以上、

巳十二月

遠山左衛門尉

書付

書面實生大夫願之通、來午年於當地勸進能興行可致旨、同人被仰渡候段奉承知候、

巳十二月廿七日

遠山左衛門尉

鍋島内匠頭

〔武江年表〕<sup>八</sup>嘉永元年二月六日より晴天十五日の間、筋違橋御門外加賀原に於て、實生大夫勸進能興行あり、五月十三日終る、興行の日毎に、遠近の貴賤輻輳して鐘を立るの所なし、

八月〇<sup>弘化</sup>七日

實生大夫

〔實生大夫勸進一件留〕已<sup>朱書</sup>二〇<sup>弘化</sup>年十月七日御直左衛門尉上ル

安藝守殿

實生大夫勸進能之儀ニ付取調申上候書付

遠山左衛門尉<sup>町奉行</sup>

實生大夫一世一代日數勸進能興行願書被成御渡候ニ付先例其外取調候處貞享四卯年於本所實生大夫勸進能日數四日興行中兩組與力同心爲誓固差出候趣御用勸方覺帳ニ記有之候旨寛延二巳年松平宮内少輔殿江先役能勢肥後守申上候書留有之尤右貞享度勸進能興行中堺町昔屋町本挽町芝居見世物相止可申旨右町役人江申渡候趣町年寄申傳有之其外舊記をも爲相調候處留記連續不仕能興行に付町觸等之義

<sup>朱書</sup>

觀世大夫勸進能興行之節は前以町觸仕見物札料町々小間割を以金三千兩取立相渡其外

日本橋外四ヶ所江右興行有之候趣札差出候儀ニ御座候

但天保度觀世大夫勸進能之節は能日數も永く外見物もの相止候義は同人相願不申候差支有無勘辨仕候處今般實生大夫勸進能被仰付候は定而市中見物札料取立候義ニ可有御座候哉町數之義先前々引競候而は格別相殖候得共近來町法嚴重に申渡人別改建家建物嚴敷取拂場末之處は沽券地に而も明地明店多候而衰微之町々も不少上納金等差出候者も多分有之且町入用減省之儀精々取調質素を示し無益の金錢不費様に相制し町會所等に而も窮民御救御手當も骨折居候折柄ニ付於町方差支無之共申上兼候得共實生大夫儀も一世一代之儀ニ而昇平之御恩澤に浴し相願候儀に付町々小間割出銀之儀朱書に申上觀世大夫勸進能興行之節之半減ニも申付能興行日數纔に而も歌舞伎見世物類相休候ニ不及旨申渡候は町人其痛にも不相成於町々強而難澁差支之義も御座有間敷哉に奉存候依之御渡被成候書面返上此



舞臺 三間四方橋懸り拾貳間九尺

松之棧敷上七十九軒 竹之棧敷下七拾九軒

疊札場 貳百六拾坪餘 入込札場 三百五拾坪餘 印客疊場 貳拾八坪

大夫樂屋六拾四坪餘、總樂屋十九間ニ五間ニ一ヶ所、地謠樂屋五間ニ一ヶ所、警固場、二間ニ間半、但 三間、舞臺より向御棧敷迄凡廿壹間程、南棧敷より北棧敷迄凡三十五間程、鼠戸壹ヶ所、

右之通觀世大夫勸進能書付

〔武江年表<sup>五</sup>〕寶曆七年九月廿三日より、深川八幡宮境内にて、大藏氏勸進能興行、

〔武江年表<sup>七</sup>〕文化十三年九月廿二日より、幸橋御門外壘地に於て、觀世大夫賜奉勸進能興行あり、

日數は晴天十五日を期とす、興行の間場中より失火して、舞臺棧敷、樂屋一間に燒亡す、再び普請をなして興行し、翌年九月に至て終る、

〔武江年表<sup>八</sup>〕天保二年 幸橋御門外に於て、觀世大夫勸進能興行あり、十月十六日を初日として、

晴天十五日の間興行の定なりしが、雨天其外にて翌年へかゝり、日數の外日延興行あり、辰保<sup>三</sup>年  
の六月に至て停む、興行の日數  
朱書 殿群集せり

〔寶生大夫勸進一件留〕遠山左衛門尉殿○江戸本行御呼年番方仁杉八右衛門以取調可申上旨被仰渡、

安藝守殿 小野田熊之助を以御渡

私儀文化四卯年被召出、御興御用迄も相勤、冥加至極難有仕合奉存候、御時節柄奉忍入候儀には  
候得共、私先祖義は寛永八末年於淺草一世一代勸進能奉願相勤、延寶四辰年於鐵炮洲一世一代  
勸進能奉願被仰付、貞享四卯年も一世一代勸進能相勤享保十四酉年、南都興福寺寄進能是亦相  
勤候例も御座候に付、何卒梓并弟子共爲廣場稽古、來午年中於御當地私儀一世一代日數勸進能  
興行被仰付、被下候様奉願候、右願之通被仰付候得ば、座中藝道出精勵にも相成、重々難有仕合奉  
存候、何分願之通被仰付、被下候様偏ニ奉願候、以上、

著服、股立取相廻り申候、尤大夫方より差出候座之者、鬘斗目麻上下著、同心之前後ニ附候而相成申候、但能之内狂言之内ニ而も、人立騒ぎ鎮り不申候節ハ、差圖いたし同心相廻申候、

一與力同心ニ大夫方より一汁三菜ニ而、朝夕之賄始終出申候、并餅菓子之折出ル、先達而御伺申上置候ニ付受納、與力拾人にて配分致候、同心者銘々包菓子差出申候、

一三月十八日より四月十一日迄、日數七日ニ惣町中割付候、

惣札金合三千壹兩

内疊札貳千九百八拾七枚、此金千四百九拾三兩貳分、

入込札三万百五拾枚、此札金千五百七兩貳分、

惣人數四万五千八拾五人

觀世大夫方へ、諸大名并御役人より音信在之候處、

合三百五拾八軒

内金拵六兩壹分、銀千六百貳枚、

金ニノ千百四拾八兩ト銀六匁

金銀合千百六拾四兩壹分銀六匁

二口合金四千百六拾五兩壹分銀六匁○中略

一外側板圍間數

東七拾七間三尺 道三間通り入 南六拾間四尺 道七間通り入 西四拾五間 道

五間通り入 北六拾七間三尺

惣坪數合四千百三拾四坪三合七勺五才

太鼓槽場 毛鍵拾本建ル但し紫きの事紋藤巴四方へ引廻ヌ

候、北の方ハ觀世大夫棧敷之次ニ而御座候、南の方ハ端より二軒目ニ而間口奥行天井張候義も同斷ニ御座候得共、橋懸りの方一向相見ヘス、舞臺ヘも遠き方ニ御座候、兩組與力棧敷ハ北の方町奉行之棧敷二階下ニ而、竹之棧敷壹間四方ヅ、貳ヶ所並び在之候、其次壹間四方町年寄之棧敷壹ヶ所御座候、與力町年寄之棧敷ハ古來無御座候得共、此度ハ何角世話ニ相成候ニ付、相極置候由、右兩人申候、

一疊札場貳百六拾坪餘、入込札場三百五十坪餘、合六百坪餘之屋根松竹之棧敷、屋根惣樂屋之屋根共、うすこけら葺ニ出來いたし候、

一松之棧敷七十九軒ハ万石以上、右二階下竹之棧敷七十九軒ハ万石以下之棧敷ト相極候由、尤竹之棧敷ニ而も、常之武士方ヘハ先ハ借し不申候積之由、右兩人申之候、

一初日より七日迄、町々見物之者割合有之候、尤武士方も入交見物八日目より十五日迄相對ニ而見物、尤武士方町方右同斷、著服之義ハ上下ニても袴ニても白衣ニても、勝手次第之由、

一松竹之棧敷男女入交、翠簾掛見物右同斷、尤女之外かぶりもの不相成候、

一疊札之疊朱印之疊、右兩端處之疊ニハ隅に白木綿にていろは附を縫付場所之善惡遠近を分申候、

一疊札入込之札之寸法、三寸壹分ニ糊入紙貳枚合ニ致、其内ヘ葉共ニ口入漉込候様ニ相見ヘ、朱印押申候、尤毎日札紙印鑑共ニ替リ申候、

一三月十八日初日ニ而、五月廿三日迄ニ日數十五日能有之候、

一初日より翁可有之處、大夫弟市三郎同月十七日病死いたし、四月十八日迄九十日服在之候故翁ハ不致、四月廿二日より翁相勤申候、

一能一番過候得バ、芝居道通りを朱鍵貳本、突棒貳本、町人足爲持、雙方同心貳人ヅ、四人羽織袴

一寛延三年午春、筋違橋外明地ニ而、觀世大夫一代能興行、願之通被仰付候ニ付、前年町々へ左之通建札在之候事、

來午年三月神田筋違橋外於明地ニ、觀世大夫勸進能有之候間、望之者ハ可致見物者也、

巳十二月

右建札之儀、奈良屋市右衛門方ニ而相認、御高札近所者除、左之通町々木戸へ打付申候、

日本橋北之方木戸 芝口貳丁目木戸 芝車町木戸 馬喰町四丁目木戸 麴町壹丁目木戸

勸進能日數十五日興行町割之覺

疊札一日ニ三百枚、十五日分合四千五百枚、壹疊ニ付五人詰 壹枚代金貳分

入込札一日ニ三千枚、十五日分合四万五千枚、壹枚ニ付 銀三匁

右札代金都合四千五百枚

觀世大夫能場所出來ニ付、爲見分町與力服部仁左衛門、吉田十郎兵衛、下役同心召連罷越候處、觀世大夫座之内、日吉傳兵衛、彌石藤七、出合町御奉行、棧敷貳ヶ所、警固場貳ヶ所、舞臺樂屋惣棧敷等悉く相廻り見分致し候、

一警固場壹ヶ所ニ朱鍵五本、突棒、指俣、鍔リ三本ヅ、八本建候、臺木金物を打、貳ヶ所共出來有之候、與力拾人之鍵五本ヅ、建置く、臺木貳ヶ所共無之ニ付、御道具之際ニ建處拵候様申付候、

一警固場貳ヶ所之内、太鼓槽下向ニ壹ヶ所、地諾後通之末ニ壹ヶ所所有之候、辻番所之様成、警固場ニ拵置候ニ付、如何と不審申懸候得共、古來ヶ様成ル義ニ而有之故、先格之通仕候由、右兩人之者申之候、橋懸り之方ハ警固場より一向相見へ不申候、

一町御奉行、棧敷貳ヶ所之内、北之方ハ宜敷相見へ、南之方ハ惡敷有之候、是も先格ニ而御奉行御先方ハ橋懸リ之方へ極候由、右傳兵衛、藤七申候、右ハ松之棧敷間口壹間ニ、奥行三間、天井張有之



一右四日之内、廿五日者當日之警固役與力同心不能出、能場見物人大勢ニ而木戸込合候由、其夜八時過實生大夫方より御番所江注進有之付、當番與力一方より壹人宛貳人、同心雙方貳拾人、御奉行紋付之高挑灯壹ツ宛爲持罷越見物人猥無之様ニ申付、當日之役人罷出候て、右出役ハ同心引連罷歸候、

一能場込合候ニ付、廿六日ニハ場所江其夜八時ニ參著仕候様ニ觸來、右刻限ニ參著、兩御奉行ハ紋付之高挑灯二ツ宛四ツ御出被成候、能過見物之者出拂候節、朱鍵突棒と一所ニ御番所江相返候、

右之通、御用勤方覺帳ニ記置候、此外ニ書留相見江不申候、以上、

巳〇寛延二年八月

服部仁左衛門

〔實曆集成絲綸錄 三十二〕寛延二巳年十一月

寺社奉行江

來午年三月中、觀世大夫於筋違橋外明地、勸進能晴天十五日興行、願之通相濟候、因茲寺社方觸之義願候先格も有之由候間、遂吟味可被相觸候、

寛延二巳年十一月

町奉行江

來午年三月中、觀世大夫於筋違橋外明地、勸進能晴天十五日興行、願之通相濟候、依之町觸之義願候先格も有之候由候間、遂吟味可被相觸候、

一所々札建候義并芝居之内警固之儀も、遂吟味可被申付候、

〔續視聽草 七集一〕寛延勸進能書留

勸進能書留

殊仕候處、元和明暦兩度之一代能之節、與力同心出役仕候、勤方帳面書留等無御座候、

一六拾三年以前貞享丁卯七月、實生大夫一代能於本所興行仕候節、與力同心出役仕候義左ニ申上候、

一貞享四年丁卯七月、於本所實生大夫一世一代勸進能興行仕候ニ付、任古例誓固爲役人、與力一組ハ五人ヅ、兩組ニ而拾人對上下著、同心一組ハ拾人ヅ、兩組ニ而貳拾人、無紋之黒御借羽織著仕罷出候、

七月廿二日 同廿三日 同廿五日 同廿六日

右之通日數四日之内、爲誓固役、與力同心相詰候、夜七時分ハ罷出、晝七時前場所仕舞申候、尤出役之内より、與力壹人芝居無別義旨并大名衆ハ使者參候廻をも、日々御届申上候、朝夕之料理ハ大夫方ハ賄候を用申候、

一初日之、前日場所爲見分、出役之内ハ與力壹人同心壹人宛、兩組立合罷越申候、

一朱鍵一方ハ五本宛、雙方拾本、突棒一方より三本宛、六本、御番所ハ出申候、此道具ハ毎朝與力同心出宅仕候制限ニ、同心貳人御番所江差遣、御奉行より出候幕并鍵突棒を、町人足ニ爲持能場江罷越申候、此人足ハ兼而町年寄ニ申付置、刀を帶、毎朝御番所江呼寄置、同心ニ差附遣候、尤手

明をも一兩人宛差出候、

一芝居廻り候義ハ、能一番過人立騷候時分、同心貳人宛立合、朱鍵貳本、突棒貳本人足ニ爲持、道通りを一日之内幾度も相廻し、不行義無御座候様ニ申付候、同心ハ無紋之黒羽二重羽織二十、町人足ハ布柿色之帷子拾六、同柿色黒子持筋を附候羽織拾六御借し被成候ニ付、前方ハ町年寄ニ申付縫立、黒羽織ハ銘々同心江年番ハ相渡、毎日出人之者代る、著仕候、布帷子羽織者、町年寄方より直ニ町人足ニ爲著申候、手傳と幕持候者ニハ不相渡候、

右之通御座候、以上、

七月〇寛延三日

觀世大夫

私義近年中於御當地ニ、一代能興行之義奉、願度存念ニ而罷在候、就夫私共先祖共於御當地、一代能興行仕候例、左之通ニ御座候、

一右之通被仰付、早速左之所ニ五ヶ所江札立申候、

日本橋 淺草橋 新橋 芝札ノ辻 麴町札ノ辻

御町奉行様江右之通先規之通相認、座之者持疊仕掛御目、御同心衆御添被成下、右五ヶ所江被遣、名主江御預毎朝立懸、晚ニ取入、不損様ニいたし、能濟次第返候様に被仰渡被下候事、

一芝居之内、兩御町奉行様御棧敷掛々、御與力衆同心衆御堅ノ、芝居御巡見被下候事、

一右能之節、麻上下著用いたし候者付添、江戸御町中太鼓打セ申候事、

一能幾日有之候共、御町何町御座候共、一町ニ而能一日ヅ、見物之積、

一町江通之札 三枚ヅ、

一町江入込札 三拾枚ヅ、

但一日ニ百町ヅ、見物之積

能之日數并場所ハ、被仰出候而相極申候、先例有増如斯ニ御座候、

七月

觀世大夫時〇中

實生大夫於本所一世一代勸進能興行仕候節之義申上候書付

服部仁左衛門

覺

一百廿九年以前元和七年辛酉二月、觀世大夫重成、九拾四年以前明暦二丙申六月、觀世大夫重清、於御當地一代能興行仕候節、町組與力同心出役仕候義委細書上候様ニ被仰渡候ニ付、帳面吟

意せり、○中

頼政是は勸進能などの初日にはせぬ事なり、初日には祝言なれば、八嶋田村をびらなどの様に、勝修羅（きりぎりす）をするもの也、

〔猿轡上〕頼政

頼政は負修羅なれば、勸進能の初日には祝言の能にあらざればせぬ事也といへり心えず、あるひはよめどり、むこどり、わたまし等の祝義の能などにこそ、祝義なればかちまゆらをすべき事に侍れ、勸進能はあながち祝義にあらざれば、まけしゆらをまたり共くるしからの事なり、其上兼平頼政はまけしゆらなれ共祝義の能にもするまさいあり、密傳なれば其品をえるさす、

〔最有院殿御實紀三十一〕寛文五年七月廿二日、本所にて猿樂今春勸進能興行するにより、諸老臣傳役かはるゝ見物すべき旨仰出さる、

〔兩意閑話〕觀世一代能の事并木賊刈の事

一享保年中、觀世大夫一世一代の勸進能を行ひ京都の河原に舞臺を造り、棧敷を拵へ、芝居を興行す、見るものは蟻の如く群集せり、

〔武江年表五〕延享四年、淺草大護院八幡宮修復助成の爲、三年の間、晴天八日づゝの寄進能興行あり、

〔勸進能一件留上〕觀世大夫先祖一代能仕候義付、此度觀世大夫方より差上候書付、

私先祖共於御當地戸○江一代能被仰付相勤候覺

元和七年二月、觀世大夫重成、於御成橋能興行仕候、

明暦二年六月、觀世大夫重清、於神田橋能興行仕候、



汰シ、彼巷説俄ニ止ニ至ルト云々、

〔當代記〕慶長十五年五月七日、梅若大夫於駿府致勸進能、五日ノ中人多寄、

〔石岡道是覺書〕一大手之内修理亮様備中守様御屋敷、外郭江御屋敷被下其屋敷跡にて、觀世大夫

勸進能被仰付候、貴賤入込見物、大猷院様○鎌川にも被爲成上覽之由、諸大名より棧敷かけ見物

ある日に、陸奥守様正宗公外に能壹番御所望にて、能最中に正宗公棧敷より舞臺へ、大島臺を指

出し候に、大薄をこしらへ、それに白銀と小粒を露に付候て、大夫に被下候由、

〔大猷院殿御實紀附錄五〕一とせ八重洲河岸にて勸進能興行あり、四民老若のわいだめなく、府内

は言に及ばず、近郷よりも聞傳へ群集して見物す、舞臺の西脇に鏡もて山を築かれ、見物のかへ

さ、心のまゝにゆるしてとらしむ公○鎌川には馬場先門内にてその様御覽あり、かの鏡賜らむ

とて争きそふにより、蹂躪して毀傷する者あるに至る、よて七日の間張行と仰出されしが、わづ

か三日にてとゞめ玉ひしとぞ、

〔嚴有院殿御實紀十一〕明暦二年六月四日、神田明神の法樂とて、筋違門外にて觀世左近勸進能張

行の事、こふまゝにゆるさる、

〔嚴有院殿御實紀十五〕万治元年四月六日、猿樂喜多十大夫上洛のいとま給ひ、京にてこふまゝに

勸進能興行せしめらる、

〔舞正語磨上〕万治元年の秋のすゑ、つれづれなるまゝに、津の國大坂を立出て、京にまかり、まづ清

水にまふで、かへるさに四條川原を通りしに、貴賤群集して、只今北十大夫能ありと云、此大夫は

一とせ江戸神田の明神にて、神事の能を見侍れども、予もまた數寄のみちなれば、下手の能をば

見じともあらず、鼠戸のほとりに徘徊せしに、料足一錢にて番ぐみをうれり、それより内に入

てみれば、おびたゝ敷塀をゆひまはし、五十八間のさじきをかまへ、芝居の體いとべうく、と用

園回廊作勸進云々、

〔二水記〕永正十八年○大永五月一日、午時令見物猿樂大命王於八坂有之、爲塔修理勸進之、

大永六年十月三日、已刻勸進猿樂令見物、在所知恩寺西方也、大夫上京蒞屋也、

〔親俊日記〕天文七年三月十六日庚寅、於坂本金剛大夫勸進能在之、觀世四郎脇之事、自江州依彼申之、則以緣阿伺上意、御同心○此旨○遣了、

〔大館常興日記〕天文九年三月十七日、來廿三日より觀世大夫勸進猿樂可有之、仍佐棧敷事、波多野丹波守護代也方より内々富越かたへ申之云々、此勸進はたの取沙汰之云々、廿三日、今日より

觀世大夫勸進猿樂在之、在所四陣芝の樂師近邊也云々丹波守護波多野取もちて如此也云々、京兆も棧敷へ御出候云々、廿六日、今日勸進猿樂有之云々、廿七日、今日も勸進猿樂有之云々、廿八日、勸進猿樂今日迄在之云々、

〔當代記〕慶長十二年二月十三日ヨリ、江戸本丸ト西ノ丸ノ間ニテ、觀世、今春勸進能有之、兩御所川家康秀忠棧敷有、同諸大名棧敷在之、知行役ト云々、但一間ニ付永樂一貫文也、同勸進能ノ時四日ノ勸進錢百廿貫在之、棧敷錢六十貫有之、一人ニ十錢ヅ、ト被仰出候へバ、大夫ドモ云ク、ヤ、コ躍ナドモ無左様ニ御座候間、外ノ聞迷惑之由申シ、札ヲ不立、人ニヨリテ勸進錢ヲトル、但何モ永樂也、

〔武德編年集成 五十三〕慶長十二年二月十三日、江城本丸ノ間ニライテ、觀世今春兩大夫尊命ニヨツテ勸進能ヲ催ス、○中去年以來作毛不熟ニヨツテ、米コクノ價高直ニシテ、カクノゴトク逸遊禁ゼラルベシトイヘドモ、神君淋疾ヲウレイ玉フコトヲ、京畿ニラキテ御病惱殊ニヲモキヨシ謳歌セシメ、遠國難說喧シキノキコヘアルユヘ、孟春三日ヨリ七日迄、營中猿樂ヲ催シ、商賈人等マデ芝居ノ見物ヲ免許セラレ、今マタ勸進能ヲナサシメ玉フユヘ、此コト都鄙ニ沙

一同 伊勢守

一同 赤松判部少輔

一同 赤松次郎法師

一同 勘達聖

以上六十三間也

のしぶきの分は已上御簾こまる有 取ふきの分は悉簾也 以下悉くさかくし有

みいろ木づくりなり 舞臺のしぶき西にひさし有橋がゝりにもやねあり廣板ぶきかうら

ん竹、公方様御棧敷計上下堅板壁也、御棧敷は簾簾掛也

〔親長卿記〕文明四年三月四日出坂下有勸進猿樂仍罷向中御門中納言旅店令同道爲見物也

〔栗田口猿樂記〕永正第二仲呂中滑於栗田口勸進猿樂之記大夫今春生年五十二歲

初日 十三日

嵐山 清經 熊野 美人草 うとふ 杜若 野守 鹽汲

第二日 十四日

中將姫 横山 三井寺 昭君 邯鄲 自然居士 兼 依雨如形

第三日 十六日 昨日依雨延引

西行櫻 八島 葵上 頼風 海人 邯鄲 自然居士 舍利章 陀天七郎 百萬

第四日 十七日

山婆 實盛 十念 定家葛 舟橋 柏崎 二人靜 兼 御所 兼 棧敷 兼 岩船 兼

以上三十番

〔二水記〕永正十四年五月廿五日勸進猿樂<sup>大宮</sup> 蜜々見物了參外様番 廿七日勸進能爲見物可

同道之由從武衛殿度々有使雖然御樂稽古無其際候間不罷出 六月十八日於春日有勸進能大

夫春藤也今日蜜々伏見殿各有御見物予<sup>藤原</sup>參御棧敷及晚頭還御

〔宜胤卿記〕永正十六年三月十六日兼永卿來自今日於祇園林邊勸進猿樂 十七日大夫觀世云祇

一上様御成以前、御供出車以下七日同前、略中

白樂天狂、三木狂、督願寺コロミ、見、箱王曾我アサイナ、實盛音、茶ガキザトウ、二人靜音、ハ

ラツマ、四位少將若メ、碓入間川音、放下僧音、馬太刀、見、杜若音、シユウカサノ、見、まきみの

原音、十番、養老音、餅音、能、名取老女音

一還御如以前御興、直ニ治部大輔殿江、御成路朱雀ヲ南江、河崎ヲ一條ヲ西江、鳥丸ヲ南江、御相伴

衆悉御參、讃州御參、

一猿樂役者共如昨日祇候亭主ヨリ觀世大夫ニ万疋被遣、御小袖スギアリ、御服之外六十三有之、

略中

十一日 甲午 天晴

勸進無爲無事、御禮御太刀諸家ヨリ參、

御棧鋪之次第

御棧鋪七間 南向東

神さき西上様の御次のしよき

二間日野殿

二間聖護院殿

二間大衆院殿

二間細川讚岐守殿

二間細川民部少輔殿

二間細川清路守殿

二間六角

樂屋入口警固侍所公文役也

三間神つきの東、神さきの方様のしよき、神さきの東のしよき

二間青蓮院殿

三間管領今日奉行衆

二間山左衛門佐殿

二間山名殿

二間山名兵部少輔殿

二間京極侍所

二間民部卿法眼胤祐

三間神様敷西

二間二條殿

二間三寶院殿

二間善法寺

二間細川兵部大輔殿

二間細川利部少輔殿

二間細川下野守殿

二間富樫殿

中一間御鳴食衆、御領ヨリ被遣

二間梶井殿

三間取フキ、山名殿

三間治部大輔殿

二間山名相摸守殿

二間一色殿

二間土岐殿

二間樂屋路分



殿へ伺申、猿樂衆悉キノ上下ヲ著也、

初日 四日

相生 狂 三ノ丸長者 八島 サルヒキ 三井寺 カクレミ 源氏供養

中、見、 丹後物狂 八幡之前、見、 鞠飼 昔 以上七番

一御下棧敷ニ 田樂 永阿 同字阿 日吉 石若 赤童子 御口祇候

一御一獻管領御申候 奉行秋庭 侍御棧鋪ノ後、門外、同從管領固之、御雜掌調藥師寺信濃奉之、御精進也、

一河原橋御警固所司代 多賀豐後守高忠

一能果テ則還御 戊辰 常ノ御輿也、直ニ管領へ御成、申樂共役人則管領へ參、能ナシ 御服面々御供

衆以下、御内者悉小袖ヌギアリ、御服小袖都合八十三有之、

一御相伴衆悉管領へ御參也

亭主ヨリ觀世大夫ニ万疋被遺、還御ハ四時、

二日 六日 雨無能  
七日 廣寶

御成以前ニ上様御供以下如昨日也○中

一御一獻畠山殿ヨリ御申、仍御門役所同御沙汰、山名彈正少弼殿山名相模守殿○中 各御一獻末

つかためされて御棧敷江 祇候、從勢州ふれ被申、二日めは猿樂悉淺黄之上下也、田樂以下如昨日

祇候、

鶺鴒 狂、ヒゲカイマテ、 敦盛 蚊、見、 山祖母 昔阿 小、見、 春近 鬼ノマメ 松風村雨 昔

イモシ、 自然居士 キ シナク、見、 戀の重荷 昔 以上七番○中

十日 三日 巳 天晴

〔牧民金鑑〕寛文六年四月

覺○中

勸進能相撲操之類見世物在郷ニ留置諸人群集可仕義は可爲無用事○中

午六月

〔猿樂傳記〕上四座并喜多座の始等の事

觀世大夫は○中渠家の一世一代の能京都にて興行の時、雜式町代より札を立る、觀世大夫殿能

被成候との文言也、是足利の時に、鞍馬の堂建立の時、勸進能の例也、

〔京都御役所向大概覺書〕上雜色勤方之事

一四座之能大夫勸進能いたし候時分警固に罷出候、勸進能辻札總而公儀江相願赦免有之、勸進

能并舞、其外寺々什物寶物開帳辻札之儀方内々打せ申候○中

一勸進能勸進相撲有之節、方内々罷出候、

〔看聞日記〕嘉吉三年三月十八日今日於亭子院有勸進猿樂可有三ヶ日云々、觀世仕棧敷大名共見

物万人群集云々、殊勝之由見物之人語之、廿四日、自今日於三條河原有勸進猿樂生熊本名仕、万

人鼓操云々、五月七日、淨蓮華院修理勸進猿樂、今日於土御門河原觀世仕云々、此間平家勸進於

或小庵宗一檢校語云、猿樂六番万人鼓操之由見物之者語、八日、勸進猿樂、如昨日八番仕云々、

九日、猿樂今日結願、七番仕云々、

〔札河原勸進猿樂日記〕慈照院義○足利御時、寛正五年甲申四月

多田須河原勸進申樂、觀世大夫又三郎卅六歲、音阿彌六十七歲、

勸進聖法印善盛九十八歲

一公方様御車御同車○中上様御所様御成以前御輿也○中御成有而則能始、以觀世四郎勢州貴

神人等、祈禱致其沙汰、先以寺門之存分ニ落居、寺門安堵、珍重々々、

〔羅山文集十九〕觀世重次太鼓記

重次中略、觀世、明年十八年正月二十六日、賜暇還鄉、豫讀仲春值南都春日社前舞樂俗曰、擊紫調太鼓、

便被許之、寺家社家并中坊等、胥議令金春大夫八郎、於神前舞三輪金剛大夫於興福寺南大門、舞泉

郎猩猩亂重次於此三番、共援其桴、闔路山節、漸將降、一鼓聲高、衆樂停者歟、聞者惜其闕不知厭焉、

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年六月七日、この日四座の猿樂に令せらるゝは、春日兩度祭の時、

今春寶生金剛三人の内二人づゝ、參てこれを勤め、一人は府に侍るべし、但觀世大夫はこれまでのごとくたるべし、兩祭禮料として、年々八木五百石づゝ、給はるべしとなり世に薪の能なり

勸進能  
一代能

〔雍州府志八〕芝居中略、凡四座大夫、一代一度、必於京師施能、是專非貪利而已、爲施其人之名也、

是稱代能、凡三箇日也、公方家歸路多來臨三管領之宅、每一家有饗、凡稱勸進能者、中古以來沙門堂

塔建立時、構芝居、必倩觀世大夫、而催猿樂、其始北山鞍馬寺有僧號青松院法印、善成、自慈照院義政

公至普廣院○普廣院、光源院、義輝公、世壽保、一百餘歲、斯僧爲再興鞍馬寺、請觀世大夫而於只洲河原催

之、是勸進能之始也、勸進勸人使赴善之謂也、中世以來爲佛神供給諸米錢、是亦謂勸進、如今專爲乞

取諸物之義也、俵俗沙門稱聖、凡能未始數日以前、揭籍於洛中所々十字街頭之門柱、其板面記何月

何日、觀世大夫殿於其處有勸進能、有一覽念望之人、則須來見、終有年號月日、其下有勸進聖誰某之

字、以其所聚之金銀爲建立資料、故元因、借公方家之觀世大夫板面用殿字、今觀世雖自催勸進能、依

此舊例用殿字、俵俗貴其人稱殿、猶稱殿下閣下之類也、

〔享保集成絲綸錄四十六〕寛文元丑年十二月○中略

一勸進能仕候者於有之者町年寄方江相斷可申事、

十二月

十日、エンマシコンハル大夫マイル、一コンノ代下行事、料足一貫五百文送、大魚一嘆、慈仙二箱、酒二桶二斗、味噌鹽以下下行、一ノウノ次第、ワキハ、タカサゴ、次ウデノウキフ子、次シントモナガ、次セウキ大ジン、次ニシキマ、次タンゴモノクルヒ、十二日、コンガウ大夫一コン送事、料足一貫文酒二桶一斗五升、大魚一嘆、慈仙二箱、味噌鹽下行、一ノウノ次第、ワキニハウシヤウカウ、次サダトウ、次タカヤスノ女、次スルスマイケズキ、次ナガラノハシ、次ワウシウウチキヨ、十三日、クワンゼ大夫マイル、一コン送申候事。中一ノウノコト、ワキニイセノ御タノノウ、次ミチモリ、次カンノカウツ、次ニマツカゼムラサメ、次ニナキフドウ、次ホトケノハラトヒノサワマイルス、  
〔武家名目抄稿 式十八〕薪御能

増補簡井家記云、元龜元年二月七日ヨリ薪ノ御能アリ、順慶ノ代役別所監物相勤タリ、

按、薪御能は御能夜陰に入べき時、兼て算料の薪を諸臣の内、さるべき人に充課て、出さしむる事と見えたり、本書によるに、此時始て有し趣なるが、後にも見えざれば、押立たる名目にはとりがたけれど、姑く爰に出せり、本書は簡井家にて、成たるなれば、この時此役を勤しを規儀に取なして薪の御能とことんしく、書なせしと知べからず

〔春日正預祐範記〕慶長十年二月五日、呪師走二座、金剛、寶生、口笛ニテ翁沙汰、先代未聞候也、從兩總官御供一殿二瓶下行了、金春親世闕如之條、下行無之、金春藝能可有沙汰由申之、只今役者依無之、闕如ト云々、八日、社頭之能無之、十一日、薪能至今日無之、三月十一日、從將軍家康、依仰、五師五人、伏見へ被越了、薪之能之事、御札明ト云々、十八日、今日已剋奈良六人之年、寄共五人、禁獄了、薪之能之事、及寺門ト對決處、盡々町人之沙汰曲事不及是、非トテ將軍以外御逆鱗也、五人之内、壽閑一人者、及八旬老體之間、以憐愍被殘置了、一角可有御成敗之由被仰出ト云々、如何可成行哉、併神罰冥罰、眼前万民之取沙汰、天下無其隱、今度之式、盡々一授之體、諸人驚歎、其上此中奈良中ニテ、恣行儀、此度限沙汰之條、如此成下事、偏ニ大明神御罰ト、都鄙奉仰之、社中ニモ三ヶ條立願、拜殿并



勤む、其作文は毎年同文を用ゆ、是畢て直に弓矢の立合を舞ふ、是は當番の大夫面々にツレを伴ひ、開口を勤る脇師と五人して、始より裝束にて、太刀を帶し並居て、其中より脇師出て開口を勤る、其後大夫ツレ共に立て同じく舞ふ事畢て各座したる所へ銚子出て、大夫より順々に吞也、春の神事は二月七日より始り十四日迄、南大門の前の芝の上にて相勤能三番あり、日の有内に一番半ほど過て、暮掛るに及ぶを、以其前にて簪を焚、故に薪の能と號す、此七日の間に若宮の神前にて、晝の内に能三番ありて、七日の日數の内定日なし、總じて冬春ともに雨降は能止て、其日廢りと成、此七日ともに、權頭等毎日式三番を勤む渠等が勤料、薪の能料として、春日に五百石宛あり、其内より一人三名宛取來、元此權頭は今<sup>春</sup>金<sup>金</sup>寶<sup>寶</sup>の三人にて、兩人づゝ年番として登り勤之を、御用として御止有か、又は忌服のさし合の時名代あり、

〔春日拜殿方諸日記〕寶徳三年二月九日ヨリ薪猿樂在之次第日記

九日、圓滿寺座今春大夫同樂頭マイル、酒二桶二斗、大魚一啖、慈仙二箱、鹽味噌在之、用途一貫五百文、市屋へ下行送了、其後舞樂頭拜殿マイル、一獻時五百文引手物給、同金春大夫マイル、三百文引手物給、同春松イヅル、百文給了、金春三郎御禮申、二百文給了、十日、雨フリテナシ、十一日、酒戶座金剛大夫マイル、酒二桶一斗五升、大魚一啖、足一貫文送、十二日、遊崎座觀世大夫マイル、酒二桶一斗五升、大魚一啖、慈仙二箱、足一貫文、樂屋へ送、十三日、トヒノ座寶生大夫マイル、酒二桶一斗五升、大魚一啖、慈仙三箱、料足一貫文送、都合十貫七百卅五文、<sup>コレハ毎日マイル、酒、酒ハ廿五文ヅ、大魚三百文ヅ、ジセン八十文ヅ、</sup>同廿日、黒石大夫參、法樂仕事、酒一桶一斗、慈仙一箱、鯛一懸、味噌シヲ送了、料足一貫文在之、廿六日、觀世三郎大夫法樂仕事、酒一桶一斗五升、鯉一啖、ジセン一箱、味噌シヲニテ、料足一貫文送、

四年二月十日ヨリ、タキマノサルガクアリ、

臺棧敷共に潮水のうへにありて、四方來觀の者堵の如し、殊に新町の倡妓は各競て衣服の美をつくし、これをみる、永祿のころ此舞臺にて興行せし番組に、大夫觀世三十郎、同大夫宗節、脇觀世橘右衛門、同福王甚右衛門、笛春日市右衛門、同延命喜右衛門、小被幸五郎次郎、同下村新十郎、大被三谷三助、同堺助九郎、同荻野左馬之助、太被三谷彌三郎など、弓八幡二人、靜松虫卒堵婆小町、龍太鼓、西王母、高砂を舞ひしこと、舊記に見えたり、中にも高砂は、聖護院御門主の御所望とぞいひつたへたる。

〔日次紀事二月七日〕薪能自今日南都興福寺南大門薪能始元是興福寺夜中法會之間寺僧之奴存觀世保生金剛四座之樂近世四座之中兩座在東武南都休假兩座勤之今七日二座交勤之八日又如此至九日則初日一座告衆徒於若宮前施藝其日次座勤門能十日亦次座知此於此宮能終自十一日之間兩座則十四日兩座相交勤門能

〔世子六十以後申樂談儀〕一南とたきんの御神事は、ひかしは時せつさだまらず、夏なども有し也、さればあふさるがくなかりし程に、清次をめされて御きうめい有べきよし有し時、子細を申、其時より、げにも申樂、かんにんぶんとて、二月になさる、其時二月ならば、末代かき申まじきよし定申し、あいだ此座にをきて、二月の神事ならばかくべからず。

〔猿樂傳記上〕南都にて春日の神事、薪の能に、翁三人毎年出る、千々財延命冠者の有形にて、今翁三人は、四座の大夫、銘々の名代也、四大夫兩人づ、多年より登りて十一月の神事を勤め、夫より二月の薪の能迄を勤む、觀世は公儀の大夫に付罷登りて神事を不勤、依之三大夫のみにて、兩人づつ毎年登り勤之、依之大花表の前にて翁渡し、規式は名代を常に定め置是を金春が權頭、金剛が權頭、實生が權頭と呼て、翁を勤しむる、是等三人毎年不殘罷出勤る故に、銘々に面箱持を先に立出る、其囃子方も常に定置を以、渠等式三番を打、是等を年預と呼也、南都冬の神事十一月廿七日には、御旅に神輿を昇居置し前にて能あり、廿八日には大鳥居の前にて、當番座附の脇師開口を

少故能興行も相止る所に、關ヶ原御一戰以後の義は、四座の者共も御當地へ罷下り候に付、神田神事能の義を再興いたし、觀世大夫方へ相頼み可申と有之候所に、北條家繁昌之節、北條氏直能の師匠として、保生四郎右衛門と申者を招ぎ申さるゝに付、保生大夫上方をば病氣故隠居いたす旨申立、小田はらへ下り、氏直の舞を指南仕候より事起り、小田原中悉く保生流と罷成り候處、天正十八年に至り、北條家斷絶故、氏直扶持人の役有を初め、町方の亂舞を數寄候者迄、悉御當地へ罷出、渡世仕り居申内に、右の通り暮松大夫罷下り、神事能初るに付、小田原崩の役人共、右の能に出相勤るを以、保生大夫義をヒイキいたし、暮松大夫跡代りに取持となり、實不實の段は、不存候へ共、我等弱年の節、去る老人の物語にて承りたる趣に候也、右暮松大夫の子孫は、今程は太々神樂を打候頭となりて居申候となり、

〔天明集成絲綸錄 二十六〕寶曆十三末年八月

御勘定奉行 江

神田明神神主  
芝崎豐後

右祭禮道具及大破候ニ付、先達而爲修復料御金被下候得共、修復行屆兼候ニ付、此度拜借相願候、先達而御金被下候儀ニは候得共、修復難行屆當九月祭禮前差掛候儀ニ付、金三百兩拜借被仰付候、修復致方勘辨可致旨可被申渡候上納之儀は、神事能興行之節、出銀仕候町々、一統右拜借金高割合來申暮迄致出銀候様可申渡旨町奉行 江 申渡候間、右出銀を以可致返納旨、是又可被申渡候、尤町奉行御勘定奉行可被談候、

八月

〔嚴島圖會 五〕十六日 三 法樂神能

此日より十八日まで三日の間、御能舞臺に於て猿樂あり、府下并に島内の能役者これを勤む、舞

一能興行前日肥後守殿御番所江、出役中村又藏、小原六左衛門、滋野傳兵衛、向方服部仁左衛門、磯貝藤兵衛、松浦安右衛門、被召呼、制限等被仰聞候ニ付、七ツ時前より出宅明ヶ六時前山王江罷越申候、右詰所ニ疊貳疊敷有之、兩組向合朱鍵五本宛、突棒壹本宛、指俣壹本宛、夜中ニ付御頭御紋付候高挑燈壹張、設置同心三人宛、與力詰所前ニ並居、能壹番過候へバ、朱鍵貳本宛取、道具壹本爲持、同心差添、兩組ともニ矢來之外を相廻申候、見物人入交申候ニ付居すまひ辨當つかひ候事ハ相構不申、多業粉給候事は火之元之爲ニ候間申付候、高聲などを致候得ば、もの靜ニ可致旨を申付ル、

此方出役

年書

中村又藏八〇以下  
名略下

〔落穂集追加〕神田明神の事

一問曰、右神田明神の祭禮の節、神事能興行と申は、古來よりの事の様に承るが、但近來より初まりたる事か、答曰、神田祭禮と申は、右申通りの趣に候得ば、古來より神事能などのあるべく様はなく候、我等承り候は、京都に於て關白秀吉公の時代に、暮松大夫と申たる者有之、殊外秀吉公の氣に入にて、四座の者共の觸かしらのやうに有之候處に、子細有之上方の徘徊を相止て、當地へ罷下ると也、其節には名有る猿樂共の江戸下りを仕る義いさゝか成る折節、暮松大夫不慮に罷下り候に付、武家町家によらず、亂舞に數寄たる輩は、何れも暮松大夫を馳走仕候中にも、大傳馬町に罷在候五靈香と申町人亂舞を好を以て、別て暮松を取持、町年寄佐久間坏の子供迄をも、暮松が弟子に引き付て、我居宅の内に舞臺を出らひ、稽古能の興行を初、其後相談をいたし、暮松が助成の爲、神田の社の中に於ひて、神事能を初め候節、町年寄共のはたらきを以、江戸中より出金を出させ、夫を取りあつめ、暮松方へ遣候を以、心安く渡世仕るとなり、其後右の暮松相果子供幼



田政右衛門、平塚伊右衛門、能登守殿より野尻元右衛門、田中半助、大竹傳右衛門、下役御月番々六人、殘ル貳組々七人宛罷出候。御月番出雲守殿、御月番明ケ能登守殿、此方大御非番也。

一朱鍵 三本 一銀 壹本 一掛俣 一幕壹張

右者前日當番々、奈良屋市右衛門手代ニ相渡ス。

寶曆二年申十一月廿一日御用覺帳書拔

一寶曆二申年十一月廿一日、御月番能勢肥後守殿御番所々見分、御用之儀急ニ有之候間、只今早

早下役壹人宛召連、右御番所江年番中村又藏、服部仁左衛門罷出候様ニ申來候ニ付、早速罷出

候處、肥後守殿被仰聞候者、大納言家治堀川御痘瘡被遊候爲御祈禱、觀世大夫、金春大夫、實生大

夫、金剛大夫、喜多十大夫、御先例ニ而願上、於山王神前能興行致候間、與方同心見廻ニ差出候様

にと被仰渡候間、右之場所見分致候様にと被仰聞候、依之先年之通、町年寄月番喜多村彦右衛

門、并樽屋三右衛門、年番下役同心竹澤彌惣左衛門、鈴木常八召連、山王社地江罷越場所見分致

候、尤役僧修成院江申入候而、社僧寶泉院、長命院、社家小川織部、千勝主水立合見分致候、御役者

觸頭山田藤右衛門、松井喜左衛門江も參居合候間申談候。

一舞臺は先年之通、大夫より建申候見分ニ罷越候節ハ、過半出來致候、廻廊を樂屋に取、矢大臣門

は樂屋道ニ致、往來とめ申候、山中之へ切竹矢來等は、先年之通別當神主方より申付候由ニ御

座候、此方與方同心詰所先年之義承合候處、別當神主方ニ而、かゝ覺不申由ニ付、下役同心竹

澤彌惣左衛門、鈴木常八又々差遣承合候處、觀理院役僧修成院、右下役兩人江申聞候者、御堅役

人中之義ニ御座候得ば、大夫方ニ而致候とも、又別當神主方ニ而致候共いづれにも先年之儀

承札、此方ニ而詰所可致候之間、左様相心得候様にと修成院申聞候、右詰所ハ別當神主方ニ而

取搭申付候。

〔大猷院殿御實紀三十〕寛永十三年四月廿四日、日光山にてはげふ神事猿樂行はれ、勅使をはじめ上達部殿上人みな棧敷をかまへ、諸門跡及一山の衆徒ことごとく見物す、在山の諸有司は鑿隱の事をつかさどり、大河内金兵衛久綱は膳部の事を總督せり、樂は翁三番叟、高砂田村、芭蕉、舟辨慶、天鼓立田祝言、狂言五番鍋八、横入間川鑄物師比丘定清水、廿五日、日光山にはげふも猿樂あり、翁三番叟、西王母、江口、紅葉狩、葵上、自然居士、熊坂祝言、狂言五番、末廣がり、止動方角、薩摩守、梟鷲宗論法師、此日猿樂へは鶯眼十萬疋かづけらる、門主大僧正よりも、四座の猿樂へ太刀金馬代をかづけ、其以下へ銀五万疋をほどこす、

〔舊記拾要集三〕元祿十五年午九月十二日御用覺帳書拔

覺○中

一同○神田 神事能之節伊豆守方々與力四人、越前守遠江守方々與力三人宛同心は月番越前守方々六人、伊豆守遠江守方々七人ヅ、可指出事、

右之通、元祿十五年午九月十二日、御三人御相談之上相極候由、御書付年番江御渡し被成候、以後のため書付置申候、

午九月十三日

正徳五年九月御用覺帳書拔

一正徳五年未九月廿六日、神田明神神事能之候ニ付、前日出役與力御月番中山出雲守殿御番所江被召呼、神事能盤固如前々之作法能様ニ可申付旨御直ニ被仰渡候、出役七ツ時出宅いたし、明ヶ六時過より能初り、晝八ツ時仕廻申候、  
一寶生大夫能相勤之、

右出役此方々下村彌助、中村三左衛門、安藤忠右衛門、多賀又八、出雲守殿方々秋山源右衛門、吉

仕、翁ハ四人一同也、ス舞ハ一人ヅ、次第々々ニ在之、蟻ト云物、ス舞ノ先ニ出也、小鼓十五張、大鼓二張也、能ノ時ハ笛二管、大鼓二ツ、鼓ハ一ツ、アリ、先金春二番メニ觀世也、是ハ役者如常、役者一人ヅ、也、金春ハ橘、觀世ハ武王ト號、次保昌仕、次金剛也、

〔豐國大明神臨時祭日記〕去程居諸如箭推移、已七年忌ニ相當、臨時之行御祭禮、

○慶長九年八月

豐國大明

神ヲ諫申候へと、秀賴公ヨリ被仰付、然者四座ノ猿樂、新儀之能ヲ一番宛作立、神ヲ諫申ニハ、莫如奏舞樂、爾豐國大明神者、御能ヲ數寄給ヒ、常々遊し、幾間、一入威悅可有御納受乎、

○中略

豐國大明神臨時御祭禮次第

四番 猿樂四座之衆、新儀能一番宛作立、

ツキ金春

其次觀世

其次寶生

其次金剛

一度に四人面ヲ當、面箱も四ツ持て出、三ばさも四人舞也、大鼓四丁、小鼓十六張にて、搓出しを打、囉、天地も響渡り、社壇も動く計にて、殊勝さ感涙浸袖定而、明神も可給成、感應乎新儀能一番宛仕り、鳥目千貫、四座之大夫に被下候也、

〔義演准后日記〕慶長九年九月八日、猿樂澁谷與兵衛尉、午刻來、宿御陵町仰付了、夜明於清瀧宮、

○關寺隱

守藏寶前能三番、羽衣松蟲猩々、九日、巳刻神幸、役人等如形御旅所ヨリ還幸、八足如例奉居、神輿、次

備御供、次彌宜奉幣、次式三番、脇クレハ、厚盛、西行櫻、東岸居士、舟辨慶、天鼓老松七番、天鼓、老松二番者親與兵衛尉致候、余子息千滿悉致候、一向幼年也、奇特也、座衆何モ京ニテ名人共也、見物群集、猥

雜近代之事也、一事無違亂、無爲珍重々々、先師御代ヨリ猿樂ニ被成候、往古田樂也、天文廿二年ヨリ退轉、去年始再興、寺中彌無爲可及萬代耳、夜明ハ當年再興也、去年ハ無之、旁珍重々々、往古ハ拜

殿ノ東方塔トノ間、歟、假會所ノ舞臺ノ振合也、今度ハ無便宜間、拜殿ノ西方庭ニ構之、仍寶殿後ニ成了、可恐事也、但春日若宮御神事猿樂、社頭ヲ後ニ成テ猿樂在之、可謂傍例歟、

今春、金剛觀世、寶掌立合、一曲一舞、御棧敷黒木御所北面、又一曲一舞、各歌祝言也、隨兵田樂一曲、一舞、中門口刀玉本座新座流銅馬三番射之一、物造者第一番渡之、大鳥居至社頭而場之間凡十町許、需木縁紅櫓挾路、神々靈々豈不恭敬乎、前廿五日四座申樂次第、一番觀世出雲トツカ、二番金剛二見ノウラ、三番寶掌浦島、四番竹田大夫、小原野花見、五番觀世十郎、鶴次郎、六番金剛クマンキリ、七番寶掌打入ソガ、八番今春梶原二度ノカケ、九番觀世音阿サチモリ、十番金剛ナガラノ橋、十一番寶掌星宮十二番今春誓願寺十三番音阿ウカイ以上、廿九日、南都一乘院御所南面左邊堂上公卿列座、庭上布衣奔衆觀世一座、右邊堂上西邊南門跡一乘院、大乘院裏頭列座、庭上隨身公方小者、火炬在、四角舞臺中間小橋在、西東樂屋黒木七間松葉葺之、前南門管領畠山尾張守殿護之、北門武衛治部大輔殿護之、御相伴關白二條殿三寶院南都傳奏日野殿被參也、十月二日、前廿八日後宴、白木御所四座申樂如以前之座、各勤二番也、以上八番有之、栗籠三箇自景德寺獻之、蓋舊例也、廿八日後宴、四座各勤二番爲八番、雖然如以前於一乘院、第八番以後音阿又勤一番也、能者山婆也、東大寺寺務西室殿、戒壇院長老來謝也、東北院以使者有贈而謝之、

〔龍關寺新要錄長八尾〕

田樂頭第三度再興事

慶長八年癸卯

九月九日

長尾宮祭禮如常、抑猿樂事、今年以松橋法印、頻山上下良家學侶可有、再興之由、一同申入了、尤神妙候、召仰付了、大夫上京、澁谷與兵衛當時禁裏御樂頭也、至元和二年、同澁

谷出仕申畢、同三年八月廿六日後、陽成院崩御、仍猿樂略之神幸ハ如例年在之、依崩御延引例雖未聞、略

之了、同四年五年龜松大夫申樂仕之、同六年龜松死去、仍春日禰宜藤一左近大夫致之、大乘院門跡

江申入御下知、

〔時慶卿記〕慶長九年八月十四日子ハ豐國臨時祭見物ニ妙門ヘ參上候、棧敷ニ八條殿御座、伯廣橋、勸修寺、飛鳥井、同少將、祭主等參候、先乘馬百番、其次田樂、其次能アリ、四番四座、一番ヅ、新作シテ



又申達ニモ見ユル如ク芝居ユエ、麻上下ノマ、庭上砂利ノ上ニ居ルコトナリ、サレドモ長キ間  
ノコトナレバ、先輩申傳ヘニテ、鋪紙ヲ懷ニ入レテ、群居ノ後ハ密ニ出シ鋪クコトナリシヲ、今ハ  
小布圍ヲ懷ニシテ、コレヲ鋪テ縦覽スト、

又或人目撃ノ言ニハ、アルトキ俄ニ雨降出セシコトアリシニ、下サレノ傘ヲサシ庭上ニ立、手拭  
ニテホウカムリヲナシテ見物セシモノアリシト、卑賤ノ者トテ、上ヲ憚ルコトナキ、コゝニ至ル

又下サレノ御酒錫瓶子ニ人レタルヲ取渡スト、町人ドモ爭ヨリテ飲ントシ、後ハ瓶子ヲ引合テ  
錫器ユエ、ネデ切テ兩斷スルモアルトゾ、

又或人云拜見人麻上下ユエ小袖ハ紋附ナラデハ著マジキニ賤人ハ別ノコトニヤ、島織ニ紋所ヲ紙ニチキリツケ著出ルモアリト、又或人云ニハ、島小紋染ナド紋ナキモ、構ナク著出ルトゾ、又煙具ハ御禁制ナレド、煙ナド懷中シテ潜ニ吞ニヤ、群衆中ヨリ煙リ處々ニタツトナリ、

コノ大略ニテ、其不行作ノ體知ルベシ、サレドモ目出度御祝儀ノ御時ナレバ、下々隨意ニ歡樂ヲ允サル、ゾ、太平覃恩ノ嘉典ナルベシ、

〔看聞日記〕應永廿三年三月十日、御香宮神事猿樂如例、樂頭八田愛天大夫自去年有罪科事被拂入田庄云々、仍當所ニ令隠居、依爲樂頭雖執行神事、脇之猿樂無之、仍他以猿樂流大法師丹、雇之令猿樂云々、十一日猿樂如昨日、九月十七日今夜山田宮神事猿樂也、樂頭矢田雇伊勢猿樂云々、廿五年三月十日、御香宮有猿樂、攝津國猿樂鳥養云々、十一日猿樂同前六番仕云々、神事恒年之儀無爲珍重也、

物々々不可盡○中祭禮次第馬長女巫乘馬禮人乘馬青囊馬上擊鼓或吹笛四座申樂大鳥居垂松

右之通、御能見物に罷出候者共に、成程入念を爲申聞、其町々割付之人數之外、餘人壹人も召連申間敷候、若狻に於有之は、御改之上、急度曲事に可被仰付候間、少も違背仕間敷候以上、

## 二月

〔常憲院殿御實紀〕延寶八年九月十八日、宣下<sup>○</sup>德川綱吉<sup>將軍</sup>宣下<sup>御</sup>祝の猿樂あり、市中人も見る事をゆるされしかば、町奉行島田出雲守忠政して、酒菓鳥目賜ふ、

〔甲子夜話續編〕重キ御祝儀御能ノトキ町人見物ノ事

御能見物ニ出ル町數八百八町、見物ノ者人數五千七百十四人、

日本橋ヨリ品川ノ方、此度ハ一番入、日本橋ヨリ淺草ノ方御中入後入り、一番入ノ者ハ曉七ツ時ニ下馬ノ廣場ニ其町ノ印シ轅ヲ立、ソノ所ニ屯シ、正六ツ時ニ御入門ヲナス、此時名主代ノ者、立固ノ者ヘ何町何十人入リトコトワリ行クニ、ソノ所ニ傘ヲ積テ山ノ如シ、コレヲ一人一柄ヅ、取リテ御門入ス、夫ヨリ見物シテ御中入リノトキ、後ノ人數ヘ替リトシテ退散ス、コノトキ御玄關前ニ出レバ、町奉行此度ノ御祝儀トシテ食事下サル旨申渡シ、代トシテ一人青銅一貫文ヅ、下サレ、御酒御菓子下サル、御酒ハ錫瓶子ニイレアリ、御菓子ハ紙ニ包ミ、土器ニノセ下サル、前後一二ノ者同斷ナリ、本所ノ地ハ廣シト雖モ、吉田町二丁、柳原町四丁、志水町一丁、長坂町一丁、新坂町一丁、コノ九丁ヨリ人九人ヲ出スト、<sup>○中</sup>  
町入ノ者謹慎ナルベキガ、ナカ<sup>ハ</sup>サニハ非ズシテ、群囂亂噪ナリ、サレドモ町奉行御落椽ニ出テ、仰渡ノ旨ヲ大言ニ述ルトキ、町人ドモ承ハレ云々ト申シ渡セバ、サシモ諸人皆拜伏シテ、ソノ體殊ニ慎メリ、御威光トゾ云ベキ、畢テ町奉行立入ントスレバ、口々ニイヨ口上ナド高唱シ、又親玉ト呼ビ、或ハ千兩箱ナド賞呼シ、<sup>○</sup>戲場ニテ、<sup>○</sup>同音ニテ、<sup>○</sup>種々ノ<sup>○</sup>諸語ヲ<sup>○</sup>發スルトゾ、<sup>○</sup>異ドヨメクトゾ、高家某目撃ノ語、

響應之日、一門他家之衆中を招請せられ、老中の響應禮畢り候後におゐて、其參會之衆中のために一獻之禮を設けられ、此外他日之招請に及ぶべからざる事。○中略

四月

〔翁草 三十九〕一正徳五乙未年四月十七日、東照宮百回御忌相濟、五月十一日、江戸御城ニ於御能有之、開口の文句は弘文院製する處左の如し、

夫日の光山高く、動かぬ御代は、も、年の後なを万づ代々かけて、若竹の葉の生つべく、松の緑はみさほにて、目出度かりける時とかや、

〔大猷院殿御實紀 四十七〕寛永十八年九月九日、若君降誕の慶宴をひらかれ、猿樂あり。○中略芝居の市人へは菓子酒青銅を給ふ、雨ふりければ、市人等へ傘を授らる、

〔享保集成絲綸錄 六〕寛文四辰年二月

一明廿六日於御本丸御能有之に付、御えらす江見物被仰付候間、見物ニ罷出候町人共、町々割付候人数之分、さかやきをそり髪を結、對のあさの上下を著し、いしやうみぐるしく無之様に仕明廿六日明六ツに右馬頭様御屋敷之向小細工御長屋之前、土屋民部少輔殿屋敷之前迄、月行事召連罷出相詰可申候、御奉行衆御差圖次第、御えらす江入可申候、其節不作法ニ無之様可仕候、其町割付之外、壹人成共、紛者入申候は、御改之上曲事に可被仰付候間、町々月行事致吟味相改入可申事、

一御えらすにて御折御菓子被下候節、猥にはい取不申、謹て頂戴可仕候、

一被仰渡候儀有之候は、謹て御請可申上事、

一脇差一圓無用之事、

一御能見物に手代出し申間敷候、自身に可罷出事、

り、びく貞腹立す、この半に河内守忠舉舞臺にのほり、猿樂に唐織時服纏頭す、

〔政談<sup>四</sup>〕將軍宣下ノ御祝儀トテ、家々ニテ能ヲスルコト詮モ無コト也、台德院様<sup>○</sup>、<sup>○</sup>德川 將軍宣

下ノ時ハ、未天下ヲ不知召バ、簡様ノコトハ有マジ、大方ハ大猷院様<sup>○</sup>、<sup>○</sup>德川 將軍宣下ノ時分政

宗、三齋ナド云様ナル游俠者ノ仕始メタルコトカ、今ハ作法ノ様ニ成タル可成、去ドモ公邊ヲ

敬フ筋ナレバ、誰止ルトモ不成、其仕形ヲ見レバ、御老中ヲ招請シテ食モセス膳ヲスヘ、親類近

付ヨリ末々出入ノ醫者町人迄ヲ集メ、ムサトシタル奢ヲ仕、新ニ舞臺ヲバ立、其舞臺ヲ猿樂ニ

取ラセ、又猿樂ニ居ヘタル膳枕ヲカケ流ニスル類興ガル奢、何ノ益モ無コト也、是等ノ仕方了

簡可有事也、

〔鳩巢小説<sup>下</sup>〕一堀田筑前守殿<sup>○</sup>、<sup>○</sup>正 ノコトモ申候<sup>○</sup>、<sup>○</sup>中 筑前ドノ存生ノ内ハ、常憲院様<sup>○</sup>、<sup>○</sup>德川 何ニ

テモ御氣隨ノコト無之候、イヅレモ筑前ドノ死去以後ニテ候、役者ヲ御取立ナサレ候コトナド、

急度申上ラレ候故、筑前ドノ存生ノ内ハ、役者ヲ御近習ニ被召仕候コトナド無之候、一度御能有

之善ノ處、俄ニ雨天ニ相成候テ、油障子ヲ可申付由、牧野備後守ドノ申サレ候、筑前殿被申候ハ、タ

トヒ公家衆ナド御馳走ノ御能ニテ、一度モ二度モ延候以後、雨天ニ候ハバ、油障子被仰付御能有

之可然候、是ハ御慰ノ御能ニテ候、雨天ニ候ハバ、イク度モ御延引ナサレ、イツニテモ晴天ノ節仰

付ラレタルガヨク候由、達テ申上ラレ御能止、詔リ申コトハ一度モ無之、ケ様ノ類毎度ノ義ニ候、

然ドモ後々ハ少シ騷大ニナリ被申候故人々憎申候、

〔享保集成絲綸錄<sup>七</sup>〕正徳三巳年四月

今度就將軍宣下<sup>○</sup>、<sup>○</sup>德川 諸家御祝儀饗應之次第<sup>○</sup>、<sup>○</sup>中

一前例能興行有之候は、囃興行せられ、囃興行の前例有之候は、諸ばかりにて、可被備其規式事、

一老中を饗應之外、一門他家之衆中を招請せられ、能囃等興行之例有之候家々、於今度は老中を



案○鎌川 御長袴に而大廣間出御上段著座、中小臣等進て御簾を掲ぐ、殿橋侍從登舞臺至橋掛、御能始をいふと歸本座則始る、式三番松龜風流、進藤權左衛門開口高砂、觀世田村、今春東北、金剛善界、保生祝言養老、觀世以上五番此外狂言三番式三番過て御簾を下す、將軍家入御東北過て後、要脚の役人等鳥目五百貫を舞臺に積かさね著座之役人等相續て被物を廣蓋に載、忠清前に置て猿樂一人宛出て搦す、忠清被物を取次令經頭四座之猿樂出て、鳥目を樂屋に運取於是響應あり、中響應過て勅使院使其外之仁も出本座猿樂見物す、此時に大納言様出御、中猿樂御見物あり、中大納言様入御有暫而將軍様出御猿樂終る、

〔大猷院殿御實紀 六十一〕正保二年七月七日、日光山成功の御祝ありて、毘沙門堂門跡公海響せられ、三家諸大名これにあづかる、猿樂は高砂、田村、芭蕉、龍田、祝言、狂言三番、麻生、口まね、比丘貞なり、酒井河内守忠清能始吳服渡の役す、市人みる事ゆるされしかば、町奉行令して折櫃并に青駄を下さる例は五百貫下さるべきを、けふは市人まいりしもの少ければ、こと更の恩召にて参りたるものへ千貫給ひ、又殘暑甚しければ、市人等は半にしてかへらしめらる、

〔寛明日記〕承應二年八月十二日、去頃下向之公家衆登城、公方様、鎌川午の刻御白書院、江出御、今度正二位大納言有轉任、叙從一位右大臣輔右大將、中今日御祝儀之御能、組時香

明暦二年六月廿二日、公方様御痘瘡御快然并御袖被爲直、旁々御祝儀御能被仰付、在江戸之大名衆へ御料理被下之、

〔常憲院殿御實紀 二〕延寶八年九月十八日宣下、鎌川御祝の猿樂あり、三家を初め万石已上に見せられて響膳をたまふ諸大名菓子を獻す、酒井河内守忠清能始のこをつたふ、翁三番、叟松龜風流、高砂、開口の詞にいふ、夫松は千年の緑常盤にて、梢のけしきさはやかに、惠の陰のあらたなる、正木のかつら代々永く、めでたかりける時とかや、田村、東北、張良、程々亂狂言三番、末廣が

猿樂七番 能組

難波 觀世大夫 田村 今春大夫 源氏供養 七大夫 道成寺 觀世大夫 熊坂 七大夫  
三輪 今春大夫 狸々 觀世大夫

〔大猷院殿御實紀<sup>十五</sup>〕寛永七年四月十八日、薩摩中納言家久卿のもとへならせ給ふ、<sup>略中會所にて猿樂御覽あり、翁、高砂、清經、源氏供養、天鼓、黒塚、玉鬘、吳服、御好にて喜多七大夫、櫻川をまふ、舞臺に要脚五万疋をつみ、猿樂大夫鼓吹二百餘人に、唐織あるは時服を纏頭す、</sup>

〔大猷院殿御實紀<sup>二十二</sup>〕寛永十年四月十一日、伏見兵部卿貞清親王はじめ、公卿響應せられ猿樂あり、白樂天、兼平、源氏供養、葵上、鶺鴒、舟辨慶、祝言なり、

〔大猷院殿御實紀<sup>四十七</sup>〕寛永十八年九月九日、若君降誕の慶宴をひらかれ猿樂あり、家門并諸大名饗せらる。<sup>略中</sup>けふの猿樂は翁三番叟、開口風流あり、高砂、田村、芭蕉、善界、老松、狂言<sup>三四</sup>三番、目近、米骨、いくゐ、舟鮒なり、芝居の市人へは菓子酒青銅を給ふ、雨ふりければ市人等へ傘を授らる、

〔大猷院殿御實紀<sup>七十四</sup>〕慶安二年五月二十日、大納言殿<sup>○德川家綱</sup>日光御參はてし御祝、並に公卿響應の猿樂あり、翁三番叟、高砂、田村、芭蕉、善界、祝言、狂言二番、八幡前樂安彌、要脚廣蓋例のごとし、三家をはじめ、諸大名旗本の群士、皆みる事ゆるされて饗せらる、けふ公卿響應の座へ松平和泉守乗書もて、大納言殿より盃臺をつかはさる、三家にも同じ市人みなみせしめらるれば、庭上に群集す、炎暑なればとて、庭上の市人に編笠をゆるされてきせしめられ、また屯食をもあがたれ又町奉行の廳にて、一人毎に青銅百疋づゝ、あがちあたふ、凡そ三千人なりしとぞ、

〔寛明日記〕正保二年四月廿九日、勅使院使依召登城尾張紀伊、亞相水戸黃門、兩參議、水戸中將<sup>○中略</sup>諸大夫御譜代の御家人近習外様御旗本諸役人各出仕、御祝儀猿樂被仰付に依て也、已刻公方様

公家衆、座敷ニテ御見物也、池田三左衛門、毛利宰相、對馬屋形、加藤主計頭等同座有之、

〔當代記〕慶長十二年正月七日ヨリ三日打續於江戶能有之、觀世ハ去年十一月下ル、今春ハ十二月下ル、初日能ノ砌、神田ノ下町二百軒餘焼失、町人能見物之所ニ如此芝居ヨリ皆退出、

正月七日ヨリ三日ノ能ノ時、江戸ニテ大夫ドモ仕合ノ事、將軍秀忠ヨリ被下物、

觀世大夫銀百枚、今春大夫銀百枚、綿百把、今春子銀百枚

金三枚進藤久右衛門京町人、今春脇、

金壹枚春藤六右衛門今春脇、同今春又二郎 太鼓同今春彦九郎 同小鼓幸清五郎 同長命

大夫 同太鼓ハクゴク善太郎 同日吉ツレ 同觀世脇福王 觀世ツレ 同山科彌右衛門

金二枚狂言上手大藏彌右衛門 狂言上手同長命甚六 同狂言鷲仁右衛門

銀廿枚高阿彌又左衛門 同上田又四郎京町人、太鼓、

此外猿樂ドモ、何モ銀十枚宛被下、

〔東武實錄〕寛永三年九月九日、第四日○此月六日、後、朝御膳御内々ノ儀、今日猿樂、大廣間上壇

ノ下ノ間ニ御簾ヲ垂ル、御簾ノ際中ニ、御座ノ疊ヲ敷キ、御茵ヲ設ケテ主上ノ御座トス、左ニ御座

ノ疊ヲ敷テ、御茵ヲ設ケテ中宮ノ御座トス、右ニ御座ノ疊ヲ敷テ、御茵ヲ設ケテ女院ノ御座トス、

儲ノ御所大廣間ノ縁通リニ至テ、屏風ヲ以テ是ヲ圍ヒ、筵道敷布毯、蓋猿樂、觀覽密々ノ儀也、宮、攝

家、前官ノ大臣、諸公家、諸門跡、諸大名以下諸大夫、殘ラズ出仕、次間ニ御簾ヲ掛テ、屏風ヲ以テ是ヲ

圍ヒ、大相國秀忠將軍家光川○德川ノ御座トス、其次御簾ヲ垂レ、宮、攝家、前官ノ大臣、諸門跡ノ座ト

ス、駿河、尾張、紀伊、三亞相、水戸、黃門、御同座、此外ノ公卿、殿上人各縁ニ伺候ス、兼テ圓座ヲ敷テ、廊下

ヲ以テ大名以下諸大夫衆ノ座トス、殿上ノ間ノ縁ヲ以テ、諸司、宮司、院司、北面諸大夫、坊官等ノ座

トス、○中略

此外攝家清花ノ公卿ハ申ニ及バズ、隣國ノ大名小名數ヲシラズ見物ス、各式正ノ裝束ニテ禮義甚嚴重ナリケリ、

〔太閤記十四〕將軍於名護屋癸巳御越年之事

今春大夫八郎、親世大夫左近被召寄御能御覽有べきとて、飛力指上されければ、二月下旬<sup>○文祿二年</sup>兩人至名護屋下著せり、其旨披露有しかば、頓て登城いたすべきにて、翌朝御目見え申せしに、下向の程油斷なかりしよとて、御機嫌いみじく、萬御ねんごろに物し給ふ、

文祿二年卯月九日於名護屋本丸御能之次第<sup>○本文載三組下</sup>

〔言經卿記〕慶長八年七月七日辛酉、殿中<sup>○二條城時、川家康在此</sup>御能有之付、早朝ニ子、冷、四、倉部等同道參了、大夫者今春也、東方朔朝長松風、檀風、安達原、當麻、藤戸、百萬吳機<sup>キ</sup>等也、申刺各退下了、夕、倉有之、御酒等有之<sup>○中</sup>、今日能三番スガテ、今春父子肩衣<sup>ミヌバシ</sup>、大夫百萬文、舞臺ニ被積了、永井右近大夫渡之、侍衆廣蓋カタビラ入テ出テ、座ノ衆カタビラニヅ、也、八日壬戌、殿中御能有之、早朝ニ子、冷、倉部令同道參了、辰下刻ニ相始了、大樹別ノ御座敷也、細々參了、御振舞有之、申下刻各退下、今日御能、白樂天、大夫<sup>今春</sup>八島<sup>同</sup>、江口<sup>同</sup>、谷カウ<sup>同</sup>、自然居士<sup>同</sup>、熊坂<sup>今春</sup>、弓八幡<sup>同</sup>等也、次見物衆庭上衆被立了、次七騎薙、大夫安威、攝津守、紅葉狩士、岐入道見松、實盛、江節、舟辨慶、ワキ一齋、大夫太一坊、矢立鴨<sup>キ</sup>、前輪入道半入等也、

〔時慶卿記〕慶長九年六月廿四日、二條城へ北政所殿<sup>○豐臣秀吉</sup>被申入、能親世大夫仕由候、

〔慶長日件錄〕慶長九年六月廿五日、殿中<sup>○二條城</sup>御狼樂見物ニ參、大夫親世矢立賀茂、八島、二人靜、舟辨慶、生贄三輪、是界、返魂香、山姥、養老、二人靜之後、大夫ニ百萬一重被下之、其外座者悉單給給之、公家衆、島丸父子、飛鳥井父子、藤宰相、廣橋辨花山院、大納言、德大寺、日野宰相、堀川侍從子<sup>○舟辨</sup>等也、<sup>○中</sup>總別公家衆之座敷大樹<sup>○總川</sup>之御座之間、以屏風被立切、御自由御見物之故也、一乘院門跡、同



信長公馳走被成。○中三日目に、梅若大夫能を仕候て。○下

〔總見記〕新公方御親陣將軍宜下并御能附關所停止事

同月○永祿十年十月廿四日、公方家○足利ノ假御所ニライテ、將軍宜下御祝ノ御能アリ、信長出仕セラ

レ、御太刀御馬進上被申、公方ヨリ今度粉骨ノ輩見物可仕由上意被成下、觀世大夫ヲ召サレテ、弓八幡ヲ脇能ニテ十三番可仕旨上意ノ處ニ、信長公被聞召、諸國ノ干戈未止、危キ時節ヲ忘レテ、悠悠トシ給ハンコト然ルベカラズ片時モ早ク御能仕廻レ、在京ノ諸士ヲ早速本國ヘ返シ被遣休

息セシメラルベシトテ、御能五番ニ續メラレケリ、御祝ノ次第初獻ノ御酌ハ、細河右馬頭藤賢ナ

リ、此時久我大納言晴通卿ト、細河兵部大夫藤孝、和田伊賀守惟政ト三使ヲ以テ、信長ヲ副將軍カ管領カ、望次第可被仰付由、上意有クレドモ、信長堅ク御辭退有テ此義ナシ、御能ハ高砂觀世大夫、

同小次郎大ツバミ大藏仁助、小鼓觀世查右衛門、笛長命太鼓ハ觀世又次郎、二獻ノ御酌ハ大館伊

豫守晴忠、此時右ノ三使ニテ信長ヲ被召御盃致下、御座御腹卷拜傾、二番御能ハ八島同大夫、大鼓三

谷長助、小鼓幸五郎次郎、三獻ノ御酌ハ一色式部大夫藤長、三番御能定家、此時信長ハ天下一人ノ

小鼓ノ上手ノ由聞召シ及バレタリトテ、色々御所望有クレドモ、堅ク辭シテ打給ハズ、四番御能

道成寺、大夫右ニ同前、大鼓大藏仁助、小鼓觀世查右衛門、笛伊東總十郎、五番吳服、右ノ役者仕之、御

能過ケレバ、一座ノ猿樂ハ申ニ不及、田樂桂ニ至ル迄、信長公ヨリ大分ノ引出物ヲ下シ給ハル、最

モ此亂世ニハイカメシキ大變哉ト、諸人目ヲ驚カシケリ、

〔總見記〕霜臺御上洛相撲興行名器見物事

同○永祿十年四月十四日、公方家○足利二條新御所ニ於テ御能御興行、觀世今春兩大夫カハル、七

番舞ヲ、公方家御上覽、次ニ見物ノ面々、飛騨國司姊小路殿、伊勢ノ國司北畠殿、摂信長公、徳川殿、畠山上總介照高、一色式部大夫藤長、三好左京大夫義次、松永彈正少弼、久秀、細川兵部大夫藤孝等也、

金春羽衣觀世 山婆金春八郎 殺生石金春長正 鷄立田觀世 芭蕉同 岩船同 松虫同 程々同

以上十五番及日出終也。○中略

### 同廿三日

一同廿三日、依上意少弼定頼ニ一獻被下之候、御湯漬參ル、其後七獻參ル、觀世大夫、今春大夫御能仕ル、夜明及日出也、御能組八番、難波梅觀世 經正觀世 遊屋今春 春日龍神觀世 二人靜觀世 野守觀世

世郎今春 吳服觀世

〔朝倉始末記〕四 義昭公被爲成于朝倉屋形次第附御能事

同年○永祿十一年 四月上旬二條ノ關白晴良公、義昭公ヲ御見廻トシテ、都ヨリ密ニ越前國ヘ御下向有

ケリ、去ニ依テ國主義景、關白殿御馳走ノ爲メ、且ハ義昭公御慰ノ爲ニトテ、同五月十七日御成ヲ

ゾ申請ラレケル。○中略 出御ハ十七日ノ午ノ刻ニ極リケル程ニ、二條殿先御出有ケル。○中略 四獻之

時、大館樂屋ヘ行テ御能可始由ヲ申サル、斯テ御能始リシカバ、義昭公御簾ヲ揚サセ給テ、二條殿

トトモニ御見物也、役者ノ次第、翁ハ鷺田、センザイハ小泉新七郎、サンバサハ梅新次郎、仕ケル、

大夫ハ服部達次郎、脇ハ三輪次郎、右衛門、神主權少輔福岡四郎、右衛門、ツレハ半田源左衛門、小泉

彌七郎、笛ハ青木七郎、三郎、千秋又三郎、阿波賀藤四郎、小鼓ハ前波五郎、右衛門、大鼓ハ上田六郎、兵

衛、太鼓服部兵部丞、此外齋藤與七郎、櫻井新三郎、氏家彌三并ニ金山、藤林壁田、山本千秋、上野森宮

石、藤田古澤ノ某等各藝ヲジ盡ケル、

〔甲陽軍鑑〕品六第十四 戸石合戰、信玄公の御代に、一の無手際なる合戰也、此時節は信玄公、少も大事

になされず、歸陣ありて、何の仕置の沙汰もなく、猿樂をあつめ、七日の間能をさせて見物あり、

〔甲陽軍鑑〕品十一上第三十四 永祿十一辰年六月上旬に、甲州信玄公より、信州伊奈飯田城代秋山伯耆守

を御使に被成、美濃國岐阜の織田信長公ヘ、御縁者御祝儀の御音信。○中略 秋山伯耆、岐阜におひて、

猿樂等舞臺に出て鶴飼をぞ拍子ける能未終に軍兵どもを隠置て切て出奉討公方を申て天下

黒間に成はて、本國播州へ馳下己が城に楯籠る。略下

〔飯尾宅御成記〕寛正七年二月廿五日未測於飯尾肥前守之種宅御成。足利義政上様同前及暮雨降、

猿樂在之。觀世大夫同音阿彌何候

還御。並下刻依御沈醉御快然云々。略中

一能注文。予時大夫觀世又三耶自公方被下也

いそのはらは、たむら、あすか川かんだむ三王、ろう太こ、かげきよ、かきつばた、はうか、いはふね、お

おゑ、まやうん、さねかた、以上十三番、

一万疋舞臺積之、はこび候役者肥前同名衆云々、太刀、二千疋大夫又三郎給之、二千疋。音阿彌給候也

〔二水記〕永正十八年。大永元年十月六日、今日於武家御所有猿樂、武田申沙汰云々、十一日、今日細川

猿樂有之、爲見物同道也、少時行彼家出一間之所見之、各裏頭之體也、今日儀武田振舞云々、入夜六

番了歸家、後聞酒宴及曉天、猿樂十五番云々、

〔親俊日記〕天文七年三月廿六日庚子、公方様。足利義晴御能アリ、觀世大夫、細川殿同播磨殿、同五郎殿、

貴殿口不例已後御出、くれは、たむら、かきつばた、かんやう宮、春日龍神、春榮、大會

乞能、かなわ、小袖曾我、舍利、玉かつら、東岸居士、相生

〔光源院御元服記〕同。天文十五年十二月廿二日御成。足利義輝次第

一同月廿二日、彈正少弼定頼旅館、江御成有之。略中

一御能觀世大夫、金春大夫伺候、祿物萬疋、被積舞臺、御供衆渡之役者也、金春大夫三千疋、日吉大夫

三千疋、日吉嵐、并田樂長阿良阿、元阿、三人令伺候、御庭是舊例也、各折紙千疋宛被遣之、

一同日御能組之事、高砂、觀世大夫、田村、同野宮、金春大夫、大會、觀世、東岸居士、同舍利、觀世、道成寺

殿中に而はさぬかつきの外は、御庭へ入不申候、於自餘は出家衆裏頭の衆など被入候、庭もせばく候へば、男衆などは無用に候歟、但見物衆のなきもいかゞにて候まゝ、可被相計候、

〔近世公實殿秘録〕御能前置御徒の事

毎年三月公家衆御馳走御能、其外御祝儀御能、凡て御表御舞臺にて御能興行の節は、御前置御目通り固め入候、御先代より有之御規式なり、

大廣間

御白書院

●●●●

御舞臺

此星御徒前置なり

御前置御徒は非常の變をいましめの固めにして、御舞臺の方御前の方を心をくばりて相守るなり、御敷皮の上に禮義正しくのしめ上下行儀つくろひ大小を帶し、諸手を膝の上に置て、わき目をふらす固候なり、常憲院様綱吉御代迄は、朝未明より右の通り仕、御能幾番有之共、御仕舞迄罷出しとなり、依之固めの御徒氣を屈して病氣發りせつし仕る者、有之けり、依之御近代は御前置御徒三番更つぎ能狂言の時代り、二番目より御中入迄、夫より祝言までと三代りに相勤るなり、然共其任至て大切なり、

〔永享記〕成氏の御事

嘉吉元年六月廿四日赤松左京大夫滿祐、京都四職の其一にて、無雙の出頭人なりけるが、企逆心、其頃の公方普光院殿義教公を奉討ける、其前にて一の不思議あり、縦ば京都室町殿の御殿の或小座敷に、二寸計の人形數多出來て、猿樂をまけるに、鶴飼の能をぞ囃しける、諸人不思議に思ひ、集て見て餘りに珍事なればとて、彼人形散り散りに成し時、一ツ捕て入鳥籠置まかども、食物をも不得ば、頓て其儘飢死けるとぞ聞へし、其後程なく赤松入道の館に有御成て、御遊始りけるに、



の能仕候へと仰候時は、御供衆まかり下て、誰々にも申聞せ候。堂上又は大名などして仰候事は不及見候是を以分別あるべく候。

一 同時に猿樂に折紙被遣候は、何時に可遣候哉の事、

御能果候てうたひ申時、必大夫に爲舞候。其時被遣候殿中にては此分に候。被遣候へば、大夫ふかくいたゞき懷中仕候。又私々にては、大夫はかに座の者の内誰々にと申ても遣事候時分は不定候。

一 御客人より猿樂に折紙被遣候事も候哉、然者誰人に遣候哉の事、

客人より折紙被遣候事、毎々有之候義に候。客人の供衆可被遣事も有之候。又亭主がたの人に被渡て被遣候事も有之。其時は誰々より被遣のよし、亭主被聞候様に猿樂に申聞する故實に而候。於殿中は此方勤役ニ而候。一獻申沙汰の人體より被遣のよし申聞せ候。

一 御能に付て、色々故實共御座候よしに候、いかやうの義候哉の事、

別に故實と申義は不覺悟に候。乍去諸人見物申義候間、毎事に付候而無越度様に各心掛候由古より申習はし候。うたひなどの禁句以下の事は、猿樂其ふん別いたすべく候。其外めしつかはれ候衆、言葉の禁句等候へば、主人の越度の様に前々も其沙汰共候し、庭にかゝりを焼候時分より、やねへ人を上られ候。是は火の用心に而候。殿中に而は檜皮師と大工に申付、やねへあげ申候。

一 辻固并門役など申付哉の事

御成などには可相易候間、辻固は不被置候か、塀中門には見物衆を可被撰候間、棒持をも可被置候哉。

一 御能見物衆、いかやうの人をば入可申候哉の事、

一同時に御座敷に御簾かゝり申候哉又まき申候やの事、

殿中の御能の時はかゝり申候、燈臺參り候てより伺申、御簾あげ申候、あげやうの事は内へまき候て、ふさかけに掛申候、鈎さきは外へ成候、兩人の役に而候、又各々の御參會に、ずだれかけられ候事をば、見及申さず候、

一舞臺に鳥目つまれ候時分并持て罷出る人體の事、

つまれ候時分の事は、能はて候て、うたひ申候時、頓而可然候、つま申有所の事は、持て罷出候かたの舞臺のはしにつまれ候、何も正面のわざ有るべし、五十疋宛左右に積候と申事も候得共、只一所に可然候、五百疋づゝからげて、兩手にかゝへて被持候、千疋づゝもたれ候、殿中に而は、我等同名、又は御供衆之内、わかき人なども被持候、諸家へ御成候時は、亭主の一家又祇候の衆被持候、それに隨而諸大名にても随分の衆被持候、さがりたる役の様に諸人被存候へ共、むかしより此分に候、鳥目をば積候はで、萬疋の折紙被遣候事勿論に而候、被積候事は稀の事に候、

一乞能をば誰人に而申され候哉の事

於殿中は初番に此方庭上へおり候て、今一番と申つるのち／＼には、御相伴の堂上、又御相伴の面々なども御乞被成候、又御供衆なども申され候、慈照院殿様○足利義政は度々直にも被仰出候、必乞能は御座候事にて候人によりて御縁より申されし事も候、

一御能の時、大夫御座鋪へも被召上候哉の事、

殿中にも大夫上へまかり上り候へとの事毎々御座候、慈照院殿様直にも被仰出候、また誰々に申候へと被仰出候時は、御座敷より被仰事候、御乞能の時も此分に候、堂上又御相伴の大名迄は此分、御供衆も同前、但御供衆人により罷下候て申たるが、猶時義可然、又今度はいかやう

たる所邊に而、如前御禮を申、手をつきて御縁へあがり申候、異義仕合は無之候へども、群集の中に而獨役に而候まゝ、もとくよりむづかしき様に申ならはし候、素襖のひもを治候が可然候、○中略

一 御能の時、走衆庭上に祇候のよし候、同田樂も伺候仕のよし承及候、其樣體いかゞ候事、

走衆庭上に三人宛、兩方に六人祇候、出やうははびきをさし、太刀に敷皮を持添候、いまだ表へ御出御座候はねば、舞臺の前を罷通、兩方に祇候、御出以後に而御座候得ば、兩方一度に疊合候様にと、慈照院殿様○足利義政被仰出候以來は、一方は舞臺の後を通り、兩方同時に祇候候て、御庭の成敗被申付候、又すわうぬぎなど御座候得者、庭上に而も少かたゞよりすわうぬがれ候を、座の者など罷下、かいまやく仕候、かたゞ三人のをば猿樂一人して取あがり、また一方の三人のも、猿樂一人して取りてまかり登候、同田樂も兩三人も致、祇候候もとくより此分に候、○中略

一 御能の時、舞臺の燈臺は、いかやうの人體可持參候哉の事、

於殿中は御供衆の役にて候、參候次第は一、二、三、四と次第候、またまゐるを取候事は、御前の方より取申候、まゐり候事は、臺ながら取事本義にて候、らふそくを取おろしてとる事は不可然候、但さやうにも成候はで、不叶様にも候はゞ、不及力候、總別大事の物にて候、火など散候はぬやうに取べし、はさみに而取候事可儀候、こゝろを添候はねば仕合あしく候、庭もせばく候へば、御前のかた二所にも可然候、かやうの役仕候事は、さがりたる役に而は無之候、

一同時かゞりをば、いかやうの者に申付候哉の事、

殿中に而も又私々にても、庭の者に申付候へば、篝火の臺以下用意候て焼申候、又塀中門、又門かゞりの事は、門役より焼申候、

の御祝とぞ聞えし。

〔季連宿禰記〕元祿十五年九月廿九日丁丑、今日於仙洞有猿樂興、仕手觀世大夫云々、此仕手去比木北野邊勸進能興行、今日於洞中被藝者等各參云々、

〔嚴有院殿御實紀〕明曆二年二月十三日京にて來月初旬禁廷の散樂興行あれば尾邸家人の笛師を上洛せしめらるべしと傳へらる、禁闕には猿樂の徒は出入する事を得ざる故とぞ、

〔大江俊矩公私雜日記〕文政七年十二月廿一日己卯、内々方仕舞、囃子、能御覽、御燭御用、申、刻予常保兩人參勤、但任例午刻過參入、申議奏、卿令拜見、參勤之儀者如例、屆能奉行也、小倉前中納言、勘解由小路左京大夫、須

磨源氏之始、依奉行命供御燭、其儀如例、不及改、酉半刻前相濟、自能奉行退出、被示兩人令退出、了、

一仙洞御幸被爲、在

一御番組御囃子 富士山 野村三大郎 垣勘五郎 芭蕉 片山九郎右衛門 竹生島 川勝權六郎 井杭 三宅藤九郎 通盛 三次郎

地藏舞 坂倉聖藏 川勝權之助 木六駄 三宅雄三郎 鉢木 九郎右衛門 千切木 北尾清介 須磨源氏 堀池左兵衛 附祝言

武家行能樂

〔長祿二年以來申次記〕同月○正五日

一御成在之、未刻畠山殿 毎年の儀也 當職之時は、正月月中兩度御成被申也、今日は上様は御成舞之、仍御相伴衆以下伺公被申也、猿樂在之、觀世仕之、

〔大内問答〕一御能はいかやうの身體罷出はじめさせ可申候哉、同舞臺以下様體の事、

於殿中は此方勤役仕候、畠山殿に而は遊佐四郎左衛門尉京極殿ニ而者多賀豐後守赤松殿ニ而ハ、浦上美作守役仕候間、御分別候而可被仰付候様體の事無異儀候時分見合、そと伺申、御次の間の縁より罷おり、庭上に而卒度御前のかたをみて手をつき、舞臺の柱のきはより罷あがり、はしが、りを通り、かく屋の内へ入事も有之、又まくのきはにて申きかする事も有之、扱罷歸りざまにははしが、りの柱の邊にて手をつき、舞臺より庭上へおり、前庭上にて手をつき



賢并予參了、白鬚、江口、小鹽、輪藏、烏頭、舟辨、慶龍田、是害柏崎、遊行柳、祝言キリ等也。九月廿一日戌戌、早晚參内了、黒戸ニテ御能有之、大夫ハ虎屋彌吉也、能者白樂天、賴政、野宮、張良、葵上、項羽、愛染川、天鼓、鞍馬、天狗、祝言クレハ等也、酉刻相終了、廿二日己亥、早朝ニ參内了、如昨日、黒戸ニテ御能有之、大夫同前也、アマ、マンデウ、女郎花、杜若、自然コジ、セウキ、祝言ヲウウ等也、已刻ヨリ始申下刻ニ相終了、

〔慶長日件録〕慶長九年十月七日、參番來九日照高院○准后御申沙汰、可有御能云々、九日依雨御能延引、十日、今日御能也、○中日出比御能相始、大夫本願寺少進法師也、鶴飼、實盛、江口、是害三、輪

鶏龍田、藤戸、三井寺、玉鬘、祝言吳羽日没之比御能終、十一日雨降、仍後朝御能延引、十二日、一日御能後朝、早々より參内、御能遊行柳、舟辨、慶龍田、黑塚、融、富士太鼓祝言等也、

〔言經卿記〕慶長十年九月廿一日癸巳、女院ニテ御能有之、下間少進法印、一身ハ大夫也、出御也、門跡其外、關白殿御參也云々、廿二日甲午、女院御能有之、昨日如也、

〔義演准后日記〕慶長十一年八月六日、明日於女院將軍○德川ヨリ猿樂御申沙汰ニ付、諸門跡悉可院參、由御觸也、仍今夕出京、御樽折等進上、七日、辰初刻院參、攝家諸門跡不殘御出也、○准后方照高

院准后、予一乘院准后三人也、親王方ニハ妙法院宮、大覺寺宮、聖護院宮、竹内宮、梶井宮、青蓮院等也、殿上ニ各御座、女院ハ本御殿主上○後モ御座ノ由也、一獻等將軍ヨリ御下知曆々也、能觀世大夫

十一番在之、金春五番イタス也、八日、辰初刻院參、今日ハ金春ヲキナヲアテ了、觀世ト互ニ施藝能了、十番在之、一獻等如昨日、御能果了、公家衆悉召出、賜酒了、

〔大猷院殿御實紀〕元和九年閏八月十四日、大御所○德川御參内あり、されどうちノ儀にて、まづ女御○後水尾の御方にわたらせ給ひ、それより内へいらせられ、紫宸殿の前にて猿樂御

寛あり、能は湯谷、高砂、田村、源氏供養、紅葉狩、自然居士、また御好にて養老あり、これは女御御懷妊

月九日、一明日十日於禁中、四座之猿樂御能被仰付、同十一日少進、暮松立包など御能可仕之由被仰出、

〔孝亮宿禰記〕文祿四年五月十五日、今日太閤秀吉豐臣御沙汰於禁中御能有之、八幡大夫帷一重被下、各座之人々不殘被下之也、其次第藏人廣蓋ニ入テ持出之、階二三段下テ諸大夫ニ下ス、諸大夫取之下也、今日之儀、攝家宮門跡、太閤若公等有御見物、

〔老人雜話上〕太閤秀吉豐臣禁中にをいて、能をなされし時、吳松は立合に能をせり、吳松能をする時は、太閤長柄の刀を帶し、虎の皮の大巾著を下げて、橋がりの中程に立ながら見物す、能は、てけるにも其儘立給ふにより、大夫裝束を著ながら、腰をかゝめて通りけるとぞ、略○中

太閤禁中にて能ある時、猿樂に被物下さるれば、同様に出て拜領し、肩にかけて入給ふとぞ、

〔御湯殿の上の日記〕慶長三年六月八日、ならにのふの上す有よしきこしめして、御らんせられたきよし、とくせん田○前へ仰いださるゝ、やがて申付、御めにかかけ候はんよし申、十七日、清涼殿にて御のふ候とて、舞臺がくやこしらゆる、廿二日、清涼殿にて御のふ十三ばんあり、たゆふふち一まいる、こん三獻まいる、略○中よに入候て御庭にかゝりたく、めんだうへもぶたいへもまよくいづる、きよくら人、新くら人いだす、廿三日、たゆふごてうにまいりてうたい參らせ候、御扇下さるゝ、御所望にて御のう九ばんあり、こん三こんまいる、略○中がくやへだいの物御さかしのだい、御たるいづる、よに入候て御庭に籌をたかるゝ、まよくもいづる、

〔言經卿記〕慶長九年三月廿七日戊寅、女院御所ニテ御能有之、出御、八條殿門跡衆、女中衆悉參仕也、廣橋大納言、右大辨宰相等申沙汰也、御振舞有之、御通有之、諷及亂酒了、今日觀世大夫、同ムス十歲ア也、江島、田村、松風、龍虎、芳野、閑、自然、居士、源氏、供養、安宅、岡崎、當麻、天鼓、山姨、祝言高砂等也、廿八日己卯、女院御所御能有之、出御已下、昨日ノゴトシ、大夫御扇被下了、右大辨宰相被遣了、清原秀

〔宜胤卿記〕永正十六年正月廿六日、於内裏有猿樂近臣中、依雨只三番云々、

〔言繼卿記〕天文十三年二月二日辛未、五過時分參内、親王御方依御遲參、御能四過時分始了、御所ニ

大祥寺殿岡殿、入江殿御參也、各祇候之衆前右府甘露寺大納言略中、九獻參了、夜半ニ退出了略中、

今日御能共、

難波海 田村 東方朔 羽衣 遊屋 攝待 大會 三輪 アコギ 自然居士 シヤウジ

ヤウ 高砂 岩舟等也

十日、木内彌二郎來、暫難談了、去二日御能時之代八百疋渡遣了、先日從廣橋六百疋被渡候殘貳百疋、從長橋局被渡候、今日取ニ來了、

〔駒井日記〕文祿二年十月五日、四日之日付にて木下半介、山中橘内、長束友阿彌書中略中、

一同日三〇十月、四過御參内秀吉、御前之御酒過候而舞臺被爲御覽、五段を御舞候、其外橋懸を羽

筑羽忠三、羽與一岐中、丹中、御ねらせ被成候、諸公家諸大夫畏見物、御參内御裝束にて略中、一御

能者五日御稽古、木下與右衛門、舟越生熊、橋本、鈴木、宮木、野村、大島、伊藤彌吉、侍を出、百人之分にて

御門之口、又見物衆稽古仕候、のしつ遣ひつしき〇の以下、上様を御借被成候、一見物者四足之

門 一がくやへの出入は日之門 一奉公人者舞臺之廻袴肩衣にて、一禁中々總之大夫に三

百貫被下、始にくれ松、二番金春罷出、右之三、百貫いたゞき申候、御配分は太閤様可在御沙汰由、江

戸中納言家康、小鼓、一民部法印狂言三日、三番、其外狂言なし、一御能者三日にて候、一日づ

つ御休にて候、但天氣惡候は、何も相延申候、七日長大夫彌七書狀略中、去五日於禁中御能五

時分始申候由、十月八日、一六日之日付にて山中書中に、從禁中被下候鳥目被成御支配候、吳

松卅貫、今春廿貫、上様十貫、家康、常真、羽筑五貫、其外者次第に三百疋二百疋宛、忠三與一は日暮候

て能不被仕敢、五百文宛被遣候由、十一日、一於禁中太閤様御能あそばし、女共計見物、三年四

有酒宴密々見之略○下

〔親元日記〕寛正六年二月廿三日辛丑、自貴殿○伊勢以太田七郎太郎方去廿七日仙洞御能目錄有、御存知度之由、觀世ニ可申云々、則能向申之本十番用意七番分、以大夫自筆注申之、翌日披露申云云、

うのは やしま 夕がほ 音○觀世音阿彌 だんふう きぬた かきつばた はうか ぶねんこじ せい

願寺 おもに 以上十番

用意分 あしかり よりまさ 名取老女 るぐち 音 野々みや かつらぎ みやうる上人

### 七番

廿八日丙午、御院參 御供 一番 能 觀世 已前目錄十番内 あねん居士なし、仍 其外うとふ、かつらぎ名取老女、野々宮養老以上十五番、三月九日丙辰、御院參 御供 二番 花御覽也、能衣、觀世、榮公見物裏頭、

### 式三番

泰山府君 後音 はるちか 音 松風村雨 ふしき曾我 音 くらま天狗 三山 あたか 音 小町 そとば

三輪 音 ま、 ひやく万 御名 明惠上人 まづか 音 天鼓 柿 鳴不動

〔二水記〕永正十四年二月十三日、今日外様之申沙汰也、○中 時刻主上 ○後 出御御座、○中 可始猿樂

之由度々被仰出、雖然有不合期事歟、二獻之時分始之、當翁面脇能右近、○中 未刻許雨降、仍止能、又

被構舞臺於孔雀間下、見物衆馳走、物忿以外也、公私聊失其興、則猿樂始之、四月廿四日、召事御返、

今日公方御沙汰也、有猿樂 宮千代丸 於清涼殿有之、御禮同每度、中務卿曼珠院宮万松軒等御參能十番

計也、見物衆道俗男女如雲霞、及五更各退出了、十五年正月廿六日午、刻著衣冠參内、○中 午終刻

許始猿樂、當翁面 脇能 難 十番了、乞能一番了退出、



右御門前兩組與力同心警固仕候、警固之外與力目付指出候事、町方火之廻差出  
 『京都御役所向大概覺書』上雜色勤方之事

一御即位、行幸、御入内、御能、其外御用之節罷出相勤ル、

〔薩戒記〕應永卅三年四月一日乙丑、四辻宰相中將委保送使者曰、今日於院小松後可有猿樂參入、哉之

由被仰下者、申依所勞難參之由、十三日丁丑、今日院猿樂云々、予定親藤原依所勞不參、

〔看聞日記〕永享四年正月十一日、仙洞小松後有猿樂觀世、室町殿被參、攝政三寶院祇候五六番了被退

出、其後猶猿樂十二番云々、祿物万疋、攝政以下進折紙云々、廿九日、仙洞有猿樂、觀世仕云々、卅

日、抑仙洞昨日猿樂自室町殿被止申、俄延引、今日有猿樂云々、三月十三日、抑猿樂推參事、頻望申

間、祿物等不及用意、雖然明日可仕之由仰、仍室禮庭上垣結廻、舞臺橋棧敷等構之經營無他事、十

四日、椎野殿入來、猿樂爲御見物也、天氣陰晴未定之間、猿樂有無如何、大光明寺長老僧達可被見物

之由令申、中天氣欲晴之間、猿樂參見物、難人群集、猿樂一番了、狂言之後、又雨下、違亂無極、仍寺長

老於大光明寺、可被御覽之由被申、先年於大光明寺有猿樂、以其例被申、雨甚降之間、無力止猿樂於寺、可仕之由仰、難

人退散、物恐不可說也、則寺へ行、椎野女中以下悉行於地藏殿客殿、有猿樂見物衆又群集、猥雜也、猿

樂先進目六十番也、其内少々取替令所望、目錄、

一番みす、於御所仕之二番かつほの玉自是於寺仕三番すみだ川四番三藏法師五番自然居士

六番九郎判官東下向七番重衡八番よこ山九番井手玉水十番曾我五郎元服十一

番白拍子えつか至深更十一番了、祿物御所、椎野女中男共、寺長老退藏庵寺官等各賜之、十五日、晝猿

樂初見物衆又群集、猿樂目六、

一番ニさかほこ二ニ通盛卿小宰相事三ニ佐野船橋四ニ薦物狂五ニ續櫻事六ニよ

ろほし已及秉燭之間、六番了退出、祿物御所、椎野賜之夜、椎野依張行猿樂兒喚四五人參於殿上、

方、三は院御所、四は主上御座、五は女中、六は攝家親王、七は諸家之公卿混雜せり、御諸司は階之上、御附之武家町奉行は階之下、御能奉行之家來平士等町奉行一列に圓座之上にて拜見す、圓座に居者は帶刀す、上座に居者は丸腰也、番組大方九番御乞能三番、都合十二番程也、此御能より前日後日又御能有是は御内證之御能とて、惣拜見は不叶、參仕之公卿計也、七番計有之由也、

〔雲錦隨筆〕大内の御能に出勤を願ふを初參と號す、其願書の文言の趣意は、家元四座の者にては御座なく候と申上る事なり、其師匠たる者奥印して差上れば、御聞濟ありて、御能毎に出勤いたせば、銀六匁下させられ、御樂屋武家玄關より奥への長き板間の半に疊をしき、幕を打ありて、幕の外は京兆尹御通行也、飯は朝晝夕三度下され、間々赤飯紙づかい、川端御菓子檜葉燒の大饅頭小判二、一條虎屋二、一條虎屋暮前より御酒を下され、參内丑の刻、御上には折々蒼朮をくゆらし給ふ也、夜に入ば御燭を藏人持出る尤折々蠟燭藏人は帝より賜はる所の御衣を著すと也、

〔甲子夜話〕禁廷ノ御能ニハ、能役者其場ニ入ルコトヲ禁ズ、因テ素人ノミナレバ、後役者ノスル能ヲ、關東ニテ見物スル如クナラズ、院御所ニハソノ禁ナシ、先年親世大夫上京ノトキモ、召テ觀覽アリト、此等ノ談話、今春高倉宰相ノ旅館ニ趣タルトキ聞キシ所ナリ、時ニ傍ニ勝興八郎居テ云、平家ヲカタルモ、能役者ニハ檢校等傳ヘズト、是モ始テ聞タリ、河原者ヲ賤メタル古風ノ遺ナリ、

〔譚海〕禁裏にて御能御覽ある時は、紫宸殿の前に能舞臺を臨時に構へ興行するなり、○中能を仕る物は四座の猿樂のものにはあらず、町人の其道に好たる者に仰付られる也、島屋又助などいふもの、年來勤來るなり、いつも御能の時は、町人も拜見ゆるさるゝ事也、

〔京都御役所向大概覺書〕御即位并御能其外警固之事

一御即位御能、正徳元年卯三月四日五日、禁裏日之御門御清所之御門を拜見之者共入込候ニ付、

閑す座頭

大藏彌大夫

觀世大夫  
江口 春藤源七

金春三郎右衛門  
觀世新九郎

一噌又六

入間川

大藏彌太郎

林清之達  
蘆刈 進藤榮次郎

福田清兵衛門  
高田伊右衛門

青木多吉

節分

蟹櫃之丞

觀世大夫  
船辨慶 春藤六右衛門

寶生彦三郎  
觀世權九郎

觀世左八郎  
貞光小八郎

米市

大藏彌大夫

樂井清太  
土蜘蛛 高安彦太郎

梅若孫七郎  
西十四郎 觀世權八郎  
清甚兵衛

觀世大夫  
祝言金札 進藤平右衛門

平澤文右衛門  
福王清兵衛 寶生新太郎  
青木多吉

享保□□大江都の北すちかへ橋のほとりにまばゐして、勸進能興行せられしときの番組とな  
む。

勸進行露樂

〔後水尾院當時年中行事〕「猿樂は宮中に入ず、但道の者にあらざるは、參る事常の事なり、

〔光臺一覽〕當月○三の中御能有、俗に櫻の御能といへり、時に應じての事なるべし、搦別御所の

御能は、觀世保生、金春、金剛の四座の申樂は相勤る事不相叶、京住之扶持人、或は浪人能師勤之、院

方も御幸有其節は、惣門を緋人止め也、御能有之、終日は烏丸通、寺町通、九太町通、今出川通、經緯の

町奉行より火消番廻順す、内裏は御諸司の與力同心廻順有也、攝家親王、諸門跡方、諸家一同に參

内有札は五六千も押方也、被賦下は攝家親王家十枚、大中納言七枚、五枚宛殿上人は僅二枚なり、

清涼殿の前に舞臺建也、諸家之内にて御能奉行兩人有、從三位以上の衆也、必此御方は修理職奉

行を兼たる衆也、是中一人宮内卿と申たる人有、御所にても平士に御能奉行修理職奉行俱に有

之也、平人と日之御門より入て御能拜見す、清涼殿東之一座敷は法親王方并法中、二は院の女中

此二番者、雨降候て無御座候、

三年四月八日、太閤様秀吉豐臣吉臣從施藥院羽柴筑前へ式正御成、何も供奉兼裝束、太閤様御車同御能

有之、一番高砂今春子、二番田村觀世、三番源氏供養金剛、四番山姥今春大夫、五番狸々寶生○下略

〔槐記續編〕享保十七年二月廿八日、關白公東門跡得度ニ渡御○中略九ツ時事畢ル、而シテ御能始ル、

翁 千歳 八木藤四郎

橋本權之進 高砂 津田勘十郎 中村孫三郎 吉田治右衛門 多田千四郎

野村八郎兵衛 八島 麻生 何某 仲尾壹岐 藤六 八木藤四郎 谷大帽子 中村幸助

權之進 東北 釣狐 白藏主 原勘五郎 井神五郎右衛門 入能勢與三 右衛門 中村幸助

御中入夜二入

八郎兵衛 道成寺 梶良五郎 小島平八 松橋源八 高谷田兵衛

竹内平七 三輪 福神 福神 山田與三 右衛門 同島居庄四郎 中喜六 中喜六 中喜六

若尾彦十郎 祝言 宮川吉兵衛 有田治右衛門 松本和泉 三右衛門 中喜六 中喜六 中喜六

〔寸錦雜綴〕於江戸筋違觀世大夫勸進能興行

初日

觀世織部 高砂 福王茂右衛門 金世吉左衛門 寶生新三郎

末廣がり 日吉猪右衛門 福王茂十郎 梅若孫七 左衛門 貞光小八郎



初日 一翁

くれ松新九郎

御能○豐臣秀吉  
一弓八幡

ツレキ 春藤  
同 大臣かう  
同 岩もと

御能  
一はせを

れぎ 金人  
大夫ツレ ぶよけん  
大ツレ かう田

御能  
一皇帝

大臣 春藤  
大ツレ 岩もと  
大ツレ 伊太

筑前  
一源氏供養

あつき 岩もと  
あつき 伊太  
あつき 伊太

鼓草中納言  
一千手

ツレキ ぶよけん  
あつき 伊太  
あつき 伊太

江戸中納言  
一野々宮

あつき 伊太  
あつき 伊太  
あつき 伊太

御能  
一三輪

あつき 伊太  
あつき 伊太  
あつき 伊太

奥市郎  
一遊行柳

あつき 伊太  
あつき 伊太  
あつき 伊太

忠三郎  
一うのは

あつき 伊太  
あつき 伊太  
あつき 伊太

小 又次郎  
太 助左衛門  
太 忠兵衛

枕物 狂言民法  
安藝宰相○毛利輝元

大 五郎次郎  
小 平藏次郎

大 江戸中納言○徳川秀忠  
小 おか田新八

大 信濃大夫  
小 信濃大夫

大 五郎次郎  
小 五郎次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

大 又次郎  
小 又次郎

狂言 長命甚六 大藏龜藏

二番田村 大夫 今春八郎 わき 今春源左衛門尉 大つゝみ 樋口石見守

小つゝみ 觀世又次郎 笛 長命新右衛門 あひ 大藏龜藏

狂言はなとり大名 彌右衛門 相撲今參り 甚六

三番松風 大夫 今春八郎 わき 今春源左衛門 つれ 竹俣和泉

大鼓 樋口石見守 小鼓 幸五郎次郎 笛 八幡助左衛門

あひ 長命甚六

狂言釣ざつね 祝彌三郎 あと 甚六

四番郎那 大夫 暮松新九郎 大臣 春藤六右衛門 大鼓 かなや甚兵衛尉

小鼓 いや石與二郎 笛 長命吉右衛門

狂言宗論 大藏彌右衛門

五番道成寺 大夫 今春八郎 わき 武俣和泉 大鼓 大藏平藏

小鼓 幸五郎次郎 笛 長命吉右衛門

狂言 彌右衛門○中

六番弓八幡 大夫八○金春 拜領之御小袖を著し罷出御祝言を仕候也、

七番三輪 大夫 今春八郎 わき 春藤六右衛門 大つゝみ 大藏平藏

小つゝみ 觀世又次郎 笛 長命新右衛門 太鼓 今春又次郎

八番金札 大夫 今春八郎 わき 今春源左衛門 大つゝみ 大藏平藏

小つゝみ 幸五郎次郎 笛 長命吉右衛門 太鼓 深谷金藏

〔駒井日記〕文祿二年十月七日、去五日於禁庭御能組之次第

ル、夫ヨリシテ竹千代殿ヲ徳川次郎三郎信康ト名ノラシメ、岡崎殿ト稱號セラル、信長公御喜悅ナリ、斯ニ不思議ノ事有ケリ、信康元服ノ祝トシテ、遠州濱松ノ城ニ於テ、徳川殿ヨリ被仰付、十五番ノ猿樂ヲ興行アリ、觀世十郎是ヲ役シ、信康モ御舞有リケルニ、觀世楚忽ニ申ケルハ、今日ノ御能組ハ十年以前、今川義元ヲ信長公ヨリ御討捕ノ前カタ、駿府ノ城ニテ、同氏眞ノ御所望ニテ仕リタル能組ニ、一番モ替ラザル番組ナリト申ケルヲ、不吉ノ事ヲ申シタリトテ、徳川殿御父子殊ノ外氣ニカケ給ヒ、終ニ觀世十郎勘氣セシメ給フトナリ、後ニ思ヒ合スレバ、信康ノ御行末不吉也ケル前表ナリシカ、

〔翁草 三十一〕天正十九年辛卯七月、秀次公ハ生身魂の御膳を聚樂へ被上、秀吉公、北の政所、松之丸殿、淀殿御一坐にて祝給ふ、其日御馳走に、觀世、今春、暮松に能を仰付らる、秀次公仰に、今日秀次馳走なれば、何事も客人の望次第也、能の番組は何々ぞと尋給ふ、暮松申上るは、白髪忠度、野の宮と申上る、秀吉公聞召れ、脇能をば誓願寺に可致と宜ふ處に、古々脇能は目出度神祇の能を用ひ來候、誓願寺坏は如何に奉存旨申上候へば、重て宜ふは、阿彌陀如來は九品の淨土の主也、其主たる身が歡喜踊躍せらるゝは、能々目出度事にて有つらん、然れば今日の能は誓願寺を脇能に可致との事にて、其通相動しとかや、

〔太閤記 十四〕文祿二年卯月九日於名護屋本丸御能之次第、

翁 金春八郎 千歳振 大藏六 さんばさ 大藏龜藏

もみ出し 大藏平藏 とうとり 幸五郎次郎

一番高砂 大夫 今春八郎 わき 今春源左衛門尉 つれ 長命甚次郎

大鼓 大藏平藏 小鼓 幸五郎次郎 笛 長命吉右衛門尉

太鼓 今春又次郎 あひ 大藏彌右衛門尉

る能なれば、なにとして智恵なきもの、かやうの事をまらんや、能組の條々如此、さりながらこれは初日のふくみ也、二日目より又かへ候てもくるしからず、かくかぐらなどを入番か  
ずあるべし、まへ日の能に似たる能をせぬなり、

〔大内問答〕一御能數は猿樂次第に候か又從此方被申付候哉の事、

能數は先七番可然候、何々を仕候へと被仰付事に有之候、又猿樂次第と被仰事も有之候、殿中に而能組の書立を此方へ出し候を、内々備上覽候へば、何々仕候へと被仰出事も御座候、多分先七番させられ候、其以後乞能の事は御氣色次第に而候、何に能數をば半に仕候、但調の時を  
かれ候事も在之、

〔畠山亭御成記〕一永正十五年三月十七日、畠山式部少輔順光亭へ御成、○足利義稙中略

一能數十三番、此内三番今春大夫仕之也、

〔親俊日記〕天文七年二月十三日丁巳、細川殿にて觀世大夫能アリ、貴殿御出、

難波梅 タマノリ 江口 アタゴ空也 カンタン 山ウバ 櫻川 ゴザウ 誓願寺 大エ

コイ能 シャウト、 シャリ

〔三好筑前守義長朝臣亭 御成之記〕一三月○永祿四年卅日、未刻 御成、○足利義輝中略

一御能數之事 老松 八嶋 ゆや 春築 松風 春日龍神 三輪 張良 野の宮 野守

當麻 自然居士 猩々 志賀

已上十四番 吳服仕候歟

〔總見記 十一〕岡崎三郎殿元服事附禁中御修理同被行善政事

同年○元龜二年秋八月吉日良辰ヲ撰ビ、松平竹千代殿、三州岡崎ノ城ニテ御元服ノ儀アリ、是徳川殿嫡男ニテ、信長公御駕ナレバ、御使者ヲ被遣、御祝儀ノ目錄他ニ異ナリ、即信長ノ信ノ字ヲ遣ハサ



一四番に鬼能を定むる事、是も鬼なればとて、たゞの鬼のふにあらす、めいどの鬼を本とす、其子細は此まへの能ゆうげんのかつら也、脇のふに神祇をまなび、二番に惡魔かうふくの修羅かくのごとく代を始めて、榮花つもつてゆうげんになるときは、又めいどのところへゆくなり、かくのごとくたのしみをきはめ、榮花さかんにてもあれ、人間の一期は一すいのゆめ、電光朝露いしの火、まぼろしのあひだの世なれば、たのしみもたのまれず、只菩提心の心をおこし、後世をねがはん事本意なり、然によつてけふはあれども、あすを期せざる浮世なれば、因果むくひのめいどのすがたをあらはしたのしみ、榮花も菩提のたよりには、ならざるとのこゝろを、えらせんとの儀によつて、四番にめいどの鬼をするなり、またはやうやくなかはもすぎぬれば、四ばんめの時分は、諸人もねふる比なれば、一つは萬人のねふりをもさまし、氣をもつけん爲に、一座のうちに、かた／＼もつて鬼をもちゆる也、これ能組の秘事也、かくのごとくおもしろきあそびのうちにも、のちの世の體を此世にてつくりしつみとがにひかれて、それ／＼の罪にくるしみをうくる體をみて、後世をおもひ出し候へば、我人の發心をおこし候へば、佛法ものふにあり、説法の場にもいるも同前なり、さるによつて、うたひを無盡經といふも此儀なり

一五番に義理をさだむる事、世間は仁義禮智信の五常をそむかずして、ぎりを本とする事本意なり、○中略

一六番に祝言をまたする事、これは一座のおさめなれば、君をいはひ、身をいはひ、所をいはひ、花ははるすぎつれども、またたちかへり、春きぬれば、すぎにし春のごとくには、なさきさかふると、それを表し、さかへりぬる春に、又あふたのしみをいはひ、かさねておさめ、六番にはじめ有つる祝言をまたする也、

右此如一日ののふに、ありとあらゆる世間の有様を、こと／＼くあらはし、萬民にこれを見す

延曲すべし申樂一會之習道如此

永享二年三月日爲座中連人書

〔花傳書〕能くみの事、一日に六番なり、子細は抑此國を六十六にわる事、役行者、行基菩薩、國々の水をのみわけ給ひ候へば、六十六色これあり、かるがゆへに人の心も國々にかはり、聲言葉なまり以下まで別にわかつ事、右の水のかはりめの子細也、この國も六十六のふのはじまる所も六十六番なれば、其數を表して、一日に、一〇一番一六番にさだむる也、

一番に祝言をする事、神能にさだまりたり、祝言にてあらば、なにのふにてもあれ、是あるべき儀なれ共、神能にさだめ候事は子細あり、日本は神國なり、神代よりつたはる國なれば、今人王の御代に至るまで、我朝の守護神たり、かるがゆへに其日祈禱として、神をくわん玄やうするといふ心によつて、一番に神能なり、

二番に修羅をする事、抑此國は弓矢をもつて、あくまをたいらげ、おさまるくになればとて、あくまかうふくのために、修羅を用いる也、

三番にかつらをする事、みなごとにかつらにてさへあれば、何なりともと心得候事、はおほきなるひが事なり、かつらはゆうげんのかつら本也、其ゆへは一番に神代のはじめをうけ、二番にあくまかうふくの修羅を引、三番には加様に國おさまり、天下泰平の御時は、ことくゆうげんなり、かるがゆへに三番に幽玄のさだむ、幽玄いろくあり、男の幽玄もあり、さまぐの幽玄ありといへ共、女のふにさだむる事、二番の修羅おとこのふなれば、陰陽和合と取あはせ、三番にかつらなり、そのうへ世おさまり、泰平の御代には、いろにそみかためで、幽玄つもりてれんぼのみちになるゆへなり、かるがゆへに世間の有様をまなびたるものなれば、れんぼゆうげんのかつらをするなり、

御肩衣神祖以來ノ御物今ニ所藏セリ、其中神祖ノ御肩衣ハ、アラキ麻ナルガ、固ヨリ葵ノ御紋ツキテ淺黃色ノ無地ナリト云、其頃ハ淺黃ノ無地ニテモ御紋サヘ付バ、吉服トナリシコト、見ユ、  
〔水戸歳時記〕正月二日、諸初アリ、公在國ナレバ、諸初ノ禮、島屋吉兵衛ツトム、時服ヲ賜フ、諸士ニモ拜聽サシム、

〔徳川禁令考<sup>三十</sup>〕<sup>年始</sup>〔慶應三卯三月廿三日

御祝儀事御廢止之件々

河内守殿御渡

大目附<sup>江</sup>

御初<sup>略</sup>諸<sup>中</sup>

右御祝儀御禮等御廢之事<sup>中</sup>

右之趣向々<sup>江</sup>可相觸候、

三月

龍組

〔習道書〕申樂一座人數其役々習道次第、

一申樂の番<sup>中</sup>數の事、むかしは四五番にはすぎず、いまも神事勸進等には、信の能のさるがく三番きうげん二番、已上五番也、きんねん、貴所さまにて仕事は、ことの外にばんかすをつくして七八ばん、十ばんなど、貴命にて仕る事、わたくしならず、然は能の序破急の事、脇能は序也、二番、三ばん、四ばんは破にて、事をつくして、五ばんめは急にてはて、序破急おさまりて、遊樂成就の一會なるに、おもはざるに、ばんかすかさなれば、序破急又あらたまりて、曲道も前後する風體なり、返々藝人のため一大事也、まかれども、貴めいなければ、力なき次第これにつけても一座心えて、破急にかゝる所を休息して、手をおしみ、曲をひかへて、能の風體まなく、のおくをのこす手立を安得すべし、堪能達人の藝力、此時あらはるべき歟、よくかねてのこうあんをもて、能の序破急を

近本多上野介伺候御諸五番、觀世大夫、梅若大夫、其外御服二領宛拜領云々、

〔元寬日記〕元和二年正月朔日、同晚景秀忠公酒井忠世、土井利勝ヲ召テ、唯今迄於駿府江戸、正月元日、二日御禮并三日御禮、同夜御諸初、五日六日寺社御禮、往々雖有其法式、次第混亂シテ放埒也、仍テ自去年被遂御吟味、御禮之儀式新規被定之、自今以後御子孫於御代々可致定式之旨被仰出、

三日、同日夜御諸初、略下

〔東武實錄〕元和二年正月二日、去年ノ春ハ攝州大坂亂擊故ニ、御諸初是ナシ、此春天下太平ニ靜謐ス、是ニ依テ御嘉例ノ如ク、江城ニ於テ今夜御諸初アリ、諸士參賀ス、

〔寬明日記〕承應三歲正月三日、今晚御諸初有之、

〔嚴有院殿御實紀附錄〕先々諸曲始は正月二日、略中の事なりしが、二日は寶樹院殿○鎌川峯生母の忌辰、廿日は前代○鎌川光來の御忌日なれば、承應年中より諸曲始は三日、略中にせられしなり、

是より今に至て永制とはなりぬ、

〔當時珍說要秘錄〕當將軍○鎌川重家御虛性の事

御諸初附觀世大夫、四海波の小謠うたひ直せし事、略中

去年正月三日の夜、御諸初の節、御盃事、御三家方と被遊候節、例年の通諸侯よりの獻上御盃を披露有之、其節觀世大夫、高砂の小うたひ四海波をうたふ、是御家の故實なり、去れば觀世謠出しけるに、諸半の時に將軍家御盃事を被遊かけて、急に御小便にたゝせ給ひ、其後御座に著せ給ひければ、觀世大夫又四海波の小謠を謠直しけり、去ば耳立て聞え、同じ小謠を兩度申て謠ひし事、如何の様に聞えし故、觀世大夫方へ御目附中穿鑿被致しに、觀世家にて幾度も御三家御連枝御盃事不濟内は、四海波の小謠繰返してもうたひ候故實にて御座候由、御答申上げるとや、

〔甲子夜話〕九觀世大夫ニ邂逅セシトキ聞ケリ、彼家ニ正月御諸初ノトキ、拜領スル所ノ御代々ノ



〔東照宮御實紀附錄七〕文祿元年正月二日、聚樂の邸にて諸初の式行はる、著座の次第は、第一秀次、第二岐阜中納言秀信と定めらる、加賀亞相利家云く、秀信は正しく織田殿の孫なれば第一たるべし、今日の儀注はたが書しといへば、石田三成、それがし殿下○豊臣の仰を奉てかきしといふよて、利家、秀吉へそのよしをいふ、秀吉そは理ながら、秀次は我甥にして、ゆく／＼養子にして家繼せんと思へば、第一座に定めしなりとて、聽入ざれば、利家は心地あしとて座を起んとす、君○川家その様御覽じ、利家まばしまたれよと有て、秀吉へ宜ひしは、殿下そのはじめ、かりにも秀信の後見せらるゝと有しをもて、織田家の舊臣もみな歸服せしなり、いま利家が、秀信を上座に立むといふも、舊義を忘れざる心より出て、あながち秀信に左袒するにもあらず、かゝらば秀信をば、別に奥方にて拜禮、盃酌の儀をすませられ、表様にては秀次を一座につけ給はば、人心事體に於て、兩ながらその宜を得むかと仰られしかば、太閤もその允當の御處置に感じ、仰のごとくせられて、諸初の式事故なく遂行はれしとぞ、

〔家忠日記追加十三〕文祿元年正月二日、夜に入、江城にして御諸初之賀儀有、松平家忠城に登て著座、廿日、例之如、台徳院殿○德川秀忠之御方にして御諸初有家忠參賀す、

〔慶長日記〕慶長十五年正月二日、江戸御城御諸初、

〔泰平年表 台徳院〕慶長十五年正月二日、御諸初の儀式有、河に御諸初此時より始る事に非ず、三今年正月始て御諸初著座の配座を記して、下毎年通補す、是年より御式共改められしもの歟、

〔石岡道是覺書〕一正月三日御諸初に、外様より立花井有馬左衛門佐様、杯先例に寄て今に御登城之事、古左衛門佐様之御咄に、權現様駿河に御在城之時、御先祖亂舞御好にて御能有候砌、御相手に被爲呼、度々登城之由、此例を以、今も御登城被成候由、

〔駿府政事録〕慶長十八年正月二日、入夜有御諸初、宰相殿、中將殿、少將殿、日野唯心、山名禪高、永井右

モ御服織節拜領之、

〔家忠日記増補五〕天正二年正月二日夜に入例の如く濱松の城に於て御諸初有諸士參賀、

〔一話一言十〕御諸初の事

一 正月三日御諸初ノ事、林春齋ノ兩朝時令卷上ニ、其始不詳略中トアリ、御當家川德氏ニテハ、天

正二年正月二日、東照神君於遠州濱松城有御諸初、自是毎年爲恒例、

〔家忠日記追加六〕天正七年正月二日夜に入て、濱松の城にして例の如く御諸初あり、松平主殿助家忠城に登て著座す、

〔武德大成記十二〕五州ノ諸士歲初ヲ賀スル事

天正十一年正月略中二日ノ夜、先例ノ如ク御諸初ノ儀アリ、諸士御前家廣川ニ參候ス、

〔梵舜日記〕天正十一年正月三日、於御方秀吉豐臣臣謳始在之、拙子各參會、

〔太閤記十〕筑紫陣御觸之事

明れば天正拾五年正月元旦之出仕など、亂世に事かはり、式掌之沙汰に及て物ふりてけり、二日之晚には御諸初とし、四坐の大夫ども召よせられ、御かはらけめぐりにけり、諸侯大夫其外紹巴昌叱なども御祝儀申上、一きはうたふ聲々もゆたかにして、萬歳をよばふ、大夫共には小袖二重づ、坐のものにも一重づ、引給ふ、めでたかりし事共也、

〔家忠日記追加十〕天正十五年正月二日夜に入、駿府の城に於て御諸初有諸士參賀す、

〔伊達日記中〕一若狹へ御入馬候而十七年ノ御越年ニ候間、御譜代衆新參衆何レモ參ラレ候、御祝儀被申上、別而美々敷正月ニテ候、十四日八〇天正十年正月十御嘉例ノ御諸初候、御亂舞ノ上、毎年大狂言ヲ被成、御自酌伊達宗政ニテ御奉公人へ御酒ヲ下サレ候、新國上總六十二成願ニ白粉塗鼓ヲ御前ニ

テ擊申候、盛氏御恩ヲ相請年ハイニ不似合由取沙汰仕候、

細工の臺の物、獻上の事なり、家々に依て毎度同じ様成模様なり、或は鶴龜の細工、松竹の模様、前田家、井伊家は、制札の下に、蔭の生へし細工の臺を獻上するなり、去れば將軍家大廣間へ出て勤むる事也、其時觀世大夫一人罷出平伏して四海波の小謠諷なり、是恒例の御規式なり、畢て將軍家被爲召候所の御肩衣をとらせ給ひ、觀世大夫へ下し給ふ、同有合ふ國主城主の諸侯より、布衣以上以下旗本の面々までも、不殘肩衣を取て觀世大夫に給はるなり、此事御規式なり、附、翌日觀世大夫方へ御徒目付罷越、白銀拾枚にて公方様御肩衣を請戻し來る事は、是に准じて皆諸侯より思ひ／＼使者を以、目錄にて肩衣を取戻す事、觀世大夫は、毎年、の徳分と成し事なり、此子細は、三代目將軍家光公大獻院殿の御事也、或年正月二日御謠初の夢に、上下御齒不殘落させ給ふと御覽被遊悉く御氣に掛させ給ひ、齒はよはひとよませたり、其落たるはよはひかたぶくとて、事の外御不興被遊たり、御側に在合せし人々何と可申上様なかりしに、折節觀世左近御謠初に參り懸り居たりしが、是を承り大音聲にて諷ひけるは、

落齒 おちばかくなるまでのちながらへて、猶いつ迄もいきの松、是もひさしき名所かな、これも久しき名將かな、

と申上たり、是を殊外御悦び遊され候て、忽御機嫌直りて、被召たる御肩衣を御手自下され、人人も遣し候様にとの上意にて、面々も肩衣をぬいで觀世大夫に與しとかや、此例にて今に右の通有之なり、

〔親元日記〕寛正六年正月四日壬子、御成御供二番、西還御、即於殿中御一獻、任例觀世大夫以下役人伺公、謠初也、

〔親後日記〕天文八年正月四日癸酉、貴殿伊勢御出仕如例年、殿中御誕初、觀世大夫同四郎祇候、何

但御賄頭壹人下役之者召連罷出役之、

〔將軍德川家禮典錄一〕正月三日酉下刻大廣間出御、公方様、内府様御中段御著座、御長袴御先立老中披露御向被著座、如御嘉例御盃事有之、老松之御囃子初る、出仕面々へ御酒被下、御三家始諸家より獻上之御盃臺出之、御奏者番御板縁ニ出座、大夫へ吳服白綸子紅裏重入渡之、猿樂能役者共へ折紙大夫ハ千疋鳥目十貫文宛、渡之、大夫共へ被下候吳服著之一同三人弓矢之立合舞之、終る時分御銚子入、老中月番御目通御下段伺公之時、御肩衣脱せられ、御側衆を以老中へ渡し、次に西丸老中右同様内府様御肩衣西丸御側丸渡之、御本丸西丸老中板縁ニ而觀世大夫へ被下、御三家方始出仕之面々、肩衣可被脱旨老中傳、御三家へ上意有之、老中出座御祝儀申上之畢而入御、

但猿樂共出御以前より素袍著之、板縁ニ伺公、

一今晚大手下乘所内櫻田御門外ニ而、篝火をたく、

四日、三ヶ日御規式并御謠初迄相濟候爲御歎、御三家より使者被差出之、謁老中、

〔槐記〕享保十二年正月二日、夕參候、今宵ハ御謠初近ニテ、内匠采女、承長、拙山科御前ニ出ヅ、

〔續百一錄〕享保廿一年正月八日、日野家ウタヒヅメ、

元文四正月八日、諷初御當家御サカヅキナシ、

〔當時珍說要秘錄三〕殿中行事之事

一正月略○中三日、夜に入御謠初有之、四座の猿樂相勤、公儀蘇鐵の間に催し候事、此日夜に入、公方

様○德川家重西の丸より大納言様○德川家治被爲入、松の間大廣間に出御、御上段に被爲附候、右御謠

初の爲御祝儀、御譜代の面々、不殘登城の事、御謠初は御譜代大名計登城といへども、當時は、外様にも歷々多く登城有て、將軍家御縁に屬せし人々には、前田島津伊達家も大形登城なり、尤御旗本の面々、布衣以上の役人、不殘出仕仕候事、所謂諸侯より、今晚暮時前より、御盃臺とて、檜



衣御側衆渡之、老中西丸老中、三之間南之方板椽にて大夫に渡之、歸座之節御三家江肩衣可被  
 脱之旨會釋有之、夫々出仕之面々へも、何も肩衣可脱之旨傳之、尾張殿、紀伊殿、水戸殿江上意有  
 之、老中出座御祝儀申上入御、但松竹之畫星御三家々進上之臺持出ル、役人但御酌加其外之御  
 給仕、兩番頭中典五  
 位之小姓勤  
 之、○下略

## 〔九祝舞〕弓箭立合

剛下 乘の弓蓬の矢の功は、同まことに目出たかりけり、あら有がたや、いざやわれらも大來目  
 の命にいのりてな、ゆみはり月のやさしくも、雲の上まで名をあぐる、弓矢の家を守らん、  
 上ノラズ  
 武士のやそ宇治川のながれまで、水上清しや弓張の月あはれめでたかりける、治る御代の  
 時とかや、上ノル釋尊は、同大悲の弓に、智慧の矢をつまよつて、三どくの眠を驚し、愛染明王は弓  
 矢をもつて、陰陽の姿を顯せり、されば五大明王の文珠は、やうゆうと現じて、棋首蛇を取て弓  
 を作り、眼睛を化さしめて、矢となせり、又我朝の神功皇后は、せいとの逆臣を退け、民堯舜の榮  
 えなり、應神天皇八幡大菩薩水上清き石清水、ながれの末こそ久しけれ、

## 〔柳營年中行事 正月〕同夜日 御諸初之次第 〇中

一大廣間御座敷向迄、百目掛并百五十目懸御蠟燭建之、御同朋役之、

一御規式、前於蘇鐵之間猿樂共ニ御酒被下之、

但大夫始猿樂、烏帽子素袍著勤之、

一御城中所々御門、加番御道具飾之勤仕之、御玄關前其外御門之御紋附大挑燈建之、

屏重御門御先手、御弓頭一組、中御門、加番御先手、御鐵炮頭一組、御臺所口御門、右同斷、

右之通勤之、與力熨斗目麻上下、同心も麻上下著之、大手下馬下乗橋詰櫻田下馬於此三ヶ所籌

火焚之、

原信濃守、本多伊勢守、

右南北<sup>江</sup>相分れて著座

初獻 御盃 御引渡 御拾土器<sup>略</sup>○中

二獻 御盃 御吸物<sup>御引渡代</sup>之○中<sup>略</sup>

三獻 落之臺 星之物 御酌 御加

御前<sup>江</sup>召上時、老中出座、可謠旨傳之、觀世大夫高砂四海波の小謠うたふ、御加有之御盃臺に戴之、尾張殿頂戴之、御肴被遣之、加有之盃を持御次之間<sup>江</sup>被退時、老中取之御酌<sup>江</sup>渡之、此間老松之御囃子初ル、御前<sup>江</sup>被召上、御加有之、其御盃紀伊殿頂戴之、御肴被遣之、加有之、盃を持御次之間<sup>江</sup>被退時、老中取之御酌<sup>江</sup>渡之、御前被召上、御加有之、其御盃水戸殿頂戴之、御肴被遣之、加有之、歸座之節御酌代ル、御酌、御加、落之臺引之、右之盃取之御通りに成、此間に尾張殿紀伊殿、水戸殿進上之臺上、三疊目に置之、老中被露之、御前御右之方に置之、○中<sup>略</sup>

十二獻 御酌 御加

御前<sup>江</sup>被召上、御加無之、其御盃御銚子に戴之被下之、頂戴之節御酌代り御通被成、御酌御加、高砂之御囃子還御通御銚子二共ニ一同に入、○中<sup>略</sup>

一御奏者番一人御椽に出座、大夫<sup>江</sup>吳服渡之、并猿樂に折紙被下之、御奏者番兩人にて渡之、勿論猿樂共出御以前、素袍著之、板椽に伺公、

但大夫に白綾紅裏之吳服被下之畢、而弓矢立合之節、是をつばをりて一同に舞之、

十三獻 松竹之臺 御酌 御加

御前<sup>江</sup>被召上、御加之時、大夫一同に弓矢之立合舞之、終時分御加有之、御銚子入畢、而老中罷出、御目通にて中座御中段椽類に伺公之時、御肩衣御側衆渡之、次西九老中右ニ同、大納言様御肩

今日於三間之御庇御うたひぞめ在之、大夫以下役人少々祇候、御供衆祇候、大名御相伴衆不參細川殿進上之御扇十本、内御扇壹本御服壹重、大夫に被下之、并御服一重四郎に被下之、伊勢守何も遣之、三獻候、三獻めに大夫被舞て被下之、三獻目御酌也、

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄御對面御祝已下之事、略中

一應仁之亂前までは、今日四日正月諸初とて、御會所にて、一番の番頭一獻被申、一獻始也、觀世大夫、

同四郎兩人祇候致し、謠を申候し也、兩人御服被下、唐織物又一番の番頭嘉例の舞あり、御服織物

拜領、常徳院殿義倫御代まで、大夫祇候致し謠申候、御服被下候近年面むき一獻なし、

〔公方様正月御事始之記〕一正月四日御諸初、觀世大夫、同四郎左衛門致祇候、從右京大夫勝元細川進

上之御扇に、御織物之御服を被相副候て被下候、同四郎左衛門には、御織物の御服を給候也、仍大

夫に遣様之事、伊勢守貞宗御扇を右に持同御服を左の手にかけ候て持出、先御扇を遣さて御

ふくを渡候時、大夫給則いたゞき申、やがて謠ひ申候、其後四郎左衛門に御小袖遣候、是は御服ば

かりなり、音曲をも不申候、例年此分にて候也、

〔東都歳事記正月〕三日、今夜御諸初、

〔年中行事故實考正月〕三日、略中御諸初、御當家三河御在國の節より行はれしも、古代には所見なし、

〔柳營秘鑑五〕正月三日、略中

一同夜御諸初、酉後刻大廣間雨上様出御、御長御先立、老中御刀、御中段御著座、

尾張中納言殿、紀伊中納言殿、水戸宰相殿、

右順々被出席、御對顔老中披露之、御向に著座、御次著座之面々、

松平遠江守、松平主水正、松平主殿頭、松平丹波守、牧野駿河守、奥平大膳大夫、松平山城守、小笠

松平遠江守、松平主水正、松平主殿頭、松平丹波守、牧野駿河守、奥平大膳大夫、松平山城守、小笠

供奉人安居院僧都并房官二人、大御堂僧正召其出世一人、房官一人、聖護院房官此門跡房官等數輩祇候了、凡此坐敷様不交他人歟、傍若無人之體也、風流驚目了、其後自公方御一獻賜之、於聖護院壇所賞翫之、大館入道始中終奉行旁眉目至、過分御沙汰也、

〔親元日記〕寛正六年正月十三日辛酉、明日松囃に可有御祇候之由、被仰出之旨、被申觸方々事、武庫被仰付之、入夜被觸申之三條權帥殿、公綱日野殿、勝光飛鳥井殿、雅親藤中納言入道殿、常慶三條宰相中將殿、鳥丸宰相殿、細川殿、同讚岐殿、成之一色殿、義直以上九人、此内飛細一讚四ヶ所江御使野依修理進、日帥藤中三宰、鳥宰五ヶ所太田五郎左衛門、十四日壬戌、入夜松御庭松囃能有之、昨夜被觸申御方々御祇候、其外管領始テ御祇候、并御供衆如例年御祇候、但一色兵部少輔殿、細川右馬頭殿、此兩所無其儀、依御歡樂歟、走衆如例庭上ニ祇候、御小者當年不祇候、田樂近江猿樂各一兩輩、并十二大夫爲見物、如例祇候、能以後大夫ニ折紙被下、

〔宜胤卿記〕文龜四年

元永正

四月廿日庚辰、今日武家松拍子依兩延引云々、廿一日辛巳、今日於室

町殿有松拍子云々、朝倉彈正左衛門尉貞景、自越前國上用脚實千餘沙汰之、觀世大夫一座、鼙風情許也、抑御即位依無用脚、經年不被行、每月廿日猿樂、今日殊嚴重爲之如何、

〔増山の井〕うたひぞめ俳

〔俳諧歳時記〕

正見 諸初

〔東山殿年中行事〕

正月

四日、將軍家御駿東出御于御對面所、中既而申次出于御縁關際事畢之由

言上之、則入御于當御所、略中

暫有テ渡御于三間之御底、有御一獻、一番ノ頭細川淡路左京亮入道

申沙汰也、左京亮并御供衆祇候、自餘者無參上、觀世大夫謠之、左京亮暨觀世大夫賜御服各一領云云、未刻御成于伊勢守亭、酉刻御風呂始經營盡美云々、或曰、還御以後於殿中御一獻有御謠始云々、

〔年中恒例記〕正月四日

略中



廊ノ棧敷へ參了、攝政聖護院准后并如意寺准后、寶池院僧正、青蓮院、予也。此面々事兼内々自是申  
 遣了、但青門事、自公方樣○足利直ニ被仰云々、當年八歲也、半尻著用之、攝政殿息也、執事安居院僧  
 都并廳務伊與法眼等供奉、松ばやし、午半計敷、御所へ參申也、種々見物驚目了、希有事共珍事々々、  
 此松ばやし事、鹿苑院殿○足利御幼少○六歲時云々播州へ御下向時爲慰申内者共寄合令風流云  
 云、其以來今日十三爲佳例、赤松亭ニシテ年々松ばやし悉皆十鼻也、以外大儀敷、此門跡兒并理性  
 院、妙法院、禪那院等僧正、淳基法印、宗濟僧都、隆濟僧都等、各具令見物了、此儀且依時宜也、門弟隨所  
 望、可見物由、以大館被仰也、御所西向四足門山名警固也、二條萬里小路管領警固、雜人更不入之也、  
 於此棧敷少一獻爲公方被仰付也、大館奉行、彼禪門來始中終奉行也、十五日、明日又於御所一色  
 修理大夫松ばやし申入也、仍爲見物可罷出一昨日十三被打開○中今日松ばやし在大略門跡  
 祇候者其歟、船笠等遺物在之、以内太刀代遣之了、○中及晚出京、明日一色松ばやし爲見物也、十  
 六日、今日一色修理大夫松ばやし如先日十三御所へ可參經營之處、依雨延引了、無念々々可爲來  
 十九日云々、十九日、御所樣渡御、相國寺方丈還御之後、松ばやし可在于還御以前參御所也、乘  
 車寶池院同車、梅賀、彌々、千代賀、喜久壽、參御車了、自余兒僧正以下乘車二兩令供奉了、此門弟等悉  
 可見物之由、内々依時宜也、棧敷如先度、中門廊被構之、攝政聖護院准后、予如意寺准后、青蓮院、實  
 相院大僧正、寶池院大僧正、大御堂僧正、廣橋儀同、萬里小路大納言、勸修寺中納言、廣橋中納言等一  
 棧敷參會、但棧敷以屏風經切之一方寄北攝政准后并大僧正等儀同見物之一方南積善院大僧正、  
 聖護院門弟、理性院前大僧正、○宗大慈院僧正、○基成若王子僧正、○忠院門弟、○聖住心院僧正、○實院門弟、○聖禪那院僧正、  
 光妙法院僧正、○基中性院法印、○成盛林院法印、○基大納言僧都、○宗大納言僧都、○濟大納言法眼、○隆梅賀丸  
 彌々丸、千代賀丸、愛賀丸、喜久壽丸、愛德丸、玉壽丸、慶玉丸、尊藤丸、以上此門跡兒也、自餘兒不參也、此  
 外南都佛北院境僧正、○後八幡前社務融清法印、萬里小路大納言、勸修寺中納言、廣橋中納言、青蓮院

一細川殿は雖、非當職、伺公云々、兵衛佐殿、畠山殿などは、非當職には無祇候也云々、  
〔殿中申次記〕正月十四日

一今日は一獻在之、於御會所平家<sup>ヤシ</sup>在之、其後御懸にて松奏<sup>ヤシ</sup>在之、是は一亂以前之事也、

〔東山殿年中行事<sup>正月</sup>〕十四日、夜ニ入又兩上様出御、西向松御庭カ、リニテ松囀<sup>觀世</sup>從<sup>役</sup>、簾中上覽、  
然後於同所南方有猿樂十番<sup>觀世舞之、見ニ于</sup>  
<sup>寛正七御記</sup>

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄御對面御祝已下之事

一十四日<sup>○正月、中略</sup>、いにしへは松<sup>ば</sup>。やしあり、觀世松ばやし過て能あり、用意に萬正、又當日に萬正

被下候、此折紙をばうたひ申時、御前にて伊勢守遣之、常徳院殿<sup>○足利義尚</sup>御代には廿五日にあり、日

吉兩人田樂兩人庭上に祇候千足づ、御折紙被下候兼日に御觸在之、御使申され候やうは、明日

於殿中猿樂させられ候、早々可有御參との御使ニ候、必伊勢名字にて御入候、

一廿日<sup>○中略</sup>、いにしへは於松御庭、小犬大夫能を仕候しと也、

〔公方様正月御事始之記〕一正月十四日、於公方様まつばやし御座候、從御臺様御小袖を十、觀世大

夫に被下、御ひろふたに九被入候て、御母持出られ候て、御臺様の御そばに被置候、さて御臺様の

上にめされ候唐をりの御小袖を、御母ぬがせ被申候て、如常た、み候て、九の御ふくの上にをき

て、御て、伊勢守に渡申され候を、請取申、御前を罷立、觀世大夫に遣之、大夫拜領仕、此十の御ふく

にて松ばやしを仕候て、懸御目候、次に御小袖を御ひろふたに入候次、第人の無存儀に候歟、御小

袖に色々高下有之事候、御母とは伊勢守が妻の儀候、御て、とは伊勢守事候、

〔花營三代記〕應永卅二年正月二日、松バヤシ參、西向ニテ仕、

〔滿濟准后日記〕永享元年正月十三日、巳半刻參御所、一昨日渡御、祝著之子細申入了、今日赤松、左京

大夫松ばやし於令沙汰御所<sup>江</sup>參申云々、仍可令見物之由、一昨日被仰聞、不及歸坊、直ニ寢殿中門



古事類苑

樂舞部十三

能樂二

松壁

〔下學集下〕松拍子

〔日次紀事正月三日〕

松拍子

公武兩家、有松拍子、俗正月三日、至十五日、唱謠或爲鼓舞、俗觀之、稱松拍子、松取長久之義、今日西東本願寺有能三番末寺僧徒著鼓東、

有動之、其後能大夫或

〔看聞日記〕應永廿三年正月七日、抑今夜地下山村風流之松拍參、次殿原田向藤田青侍松拍參、賜極

退出、其後經良卿、長資朝臣、彼松拍召具歸參、只今被下極等、於御前可賞翫云々、數剋酒盛亂舞、其興無極、十一日、自京松拍參、猿樂等亂舞、其興不少、極ヲ賜則飲之、令亂舞、祿物扇等賜之、十五日、地

下村々松拍參、先山村供行者等之人種々風流、摸舞樂參向之儀、有其興、則燒三毬杖、如例、菓子二合極

賜之、次三木村、次石井村、次舟津各種々風流、其興千萬、皆同賜極、見物雜人群集、

永享四年正月十三日、北畠松拍參、猿樂如例、祿太刀一、小袖一、繪書文等賜之、酒肴如例、猿樂四番、忽

之間止之退出、抑今日室町殿大名松拍參、此一兩年被停止、雖然新造御所殊更可參之、由面々

所望云々、今日赤松一黨參、風流結構如例、畠山前管領一色等又可參云々、十四日、室町殿へ兩日

昨日談參、松拍被召見物、種々風流、有九頭、其興千萬云々、十五日、晚景松拍山村木參、風流聊結

構、清水山橋文有其興、三毬杖燒、其後舟津松拍參、無風流、左道之體也、石井等不參、十九日、今日室

町殿松拍一色參、風流結構、攝政左府可有見物之由、被申參、其後可有御連歌云々、廿日、抑一色松





大久保傳兵衛西村總左衛門島九十郎川瀬德兵衛西田平兵衛高見九兵衛白井半兵衛上島多一桂九兵衛予をして八十人也、弟子の内此外は上村市兵衛平井市左衛門井上嘉助は諸指南家事業之者故之を加ふ、

關寺興行は絶て久敷なき事なれば、之を聞傳へ聽衆夥しく群集して、林阿彌の庭の張出し、謠半に崩るゝ許り所せきたり、然るに家元より此關寺びらきの事、殊の外六ヶ敷申來、その主意は尤免許せしむる上は、之をひらくべき條勿論也、然れども其よしを家元へ伺ひ、許容の上にて可相勤等の處、輕々敷届捨に致候段迄の大事を疎略なる仕方、不届之旨にて、祐三勘氣を蒙る是併ながら、祐三に對して許りの事にあらず、子細ある事なり、是まで知清方にて凡の儀を諸弟子へ差圖する事、老尼の身分不相應の事なり、元は家の娘といへ共、脇師福王が妻に成からは、福王が隠居にて觀世の隠居と云にあらず、然るに道の事に女の分として差出、兎や角と指圖をかふる段、甚以法に違へりとして、専ら知清への當りとぞ聞えし、尤一應の理は聞えたる様なれども、此知清は故有て觀世隠居と立る筋目あるよしなり、然れども家元段々代替り、當時續きも薄く成まゝに斯く遠ざかり行く事、浮世のさまなり、時に取て祐三が不肖と成けらし、仍て權門のかた其外歸依の僧などへ手寄を以て勘氣赦免を願ひ、漸く三とせを経て願ひ相濟ぬ、斯まで關寺は此道に於て大切にするなり、

〔南龍公書行錄<sup>上</sup>〕一慶長十九年十月朔日、京都諸司板倉伊賀守勝重、大坂城謀叛の由、早馬にて注進、此日は觀世三十郎に定家の紐解海士の泣懸り、檜垣の大事習ひ事を東照宮御自身御習可被成に付、御舞臺之支度、前宵より松平右衛門大夫正綱に被仰付、御子様方皆御能の役人にて被成御詰候、<sup>○下</sup>

る物多し。

〔實生流謠曲名寄一覽〕能目錄○中 免狀之分

實盛 楊貴妃○中

望月ツレ

石橋ツレ

紅梅天女

千歳

早舞クツロギ

五段神舞 盤

涉樂 盤涉序ノ舞

中傳免狀之分

朝長 井筒 照君 安宅 蟬丸 柏崎○中

習事免狀之分

松風 弱法師 綾鼓 隅田川 求塚 砧 定家 正尊 辛都婆小町 鸚鵡小町 木賊 此

外小習

大習之分

翁 亂 道成寺 望月 石橋 鷺

三老女

檜垣當時謠計能には相動不申候 娘捨 關寺小町

○按ズルニ傳授ハ各流共ニアレドモ省略ニ從ヘリ、

〔翁草百二十卷〕謳曲關寺小町は家元に於て至て大切にする事なり、先年園久兵衛入道祐三出府

して、觀世故左近に之を許され、其後關寺開きをなすとて、觀世遷居知清是は觀世大夫女にて、關

上京觀世屋敷に、隱居せり、故に京の弟子都て道の事此尼へ何の指圖を請てつとめ來れり云々、へ伺ふ處に、當大夫より免許の事なれば、開き

の事は江戸へ伺ふに及ばじ、聞濟て跡にて江戸へ届候て然るべきよし、指圖するに依、祐三是に

隨ひ、東山雙林寺林阿彌におゐて興行す、格別大切のもの故、此地方は弟子の内十人を撰び、改め

て誓盟を以之を傳へ、自餘の弟子をまじへず、

もあるごとく御教諭ありしことなれば、今とても學問にいかで怠るべきや、されどすこしやむことなき子細ありてまばし休むなり、あしからず思ふべしと仰られしかば、道筑涙をながして詞なく御前をまりぞきけるとなり、此とき西城に付られし小姓小納戸等、みな猿樂を學ぶべきよし、本城より仰下されしかば、いづれもとより、其技をなしけるに、松下隠岐守昭永、肉山七兵衛、永清の二人は、猿樂を學び得がたしとて、狂言を學びたり、これ近習の人狂言するはじめなりといへり。

## 〔翁草六十四〕謠曲新改正之事

明和ノ頃、觀世左近大夫元章○中我家ノ事ヲ恣ニ改メ、万ヅ隨意ニ舉動フ。○中

## 所謂新改並秘訣ノ目錄 習事分

木賊 戀重荷 檜垣 姨捨 卒都婆小町 碓 道成寺 鶯 石橋 關寺小町

別 望月 別 鸚鵡小町○中

此外 定家 大原御幸 藤戸 俊寛 當麻 景清 鉢木 角田川 遊行柳

右九番モ容易ニ謳事ヲ不許、誓盟ノ上ニテ許之、其上ニテ右ニ記ス、習十番ヲ一番允許ス、掟明和年中左近元章ガ定ル處也、但習十番ノコトハ、左近ガ新ニ立ルニ非、古來ヨリ習ニスル事也、

〔隨一小謠繪抄〕遠慮九番 鉢木、藤戸、俊寛、定家、當麻、景清、小原御幸、遊行柳、角田川、

習十番 安宅、卒都婆、戀重荷、碓、檜垣、姨捨、木賊、鸚鵡、正尊、關寺、

三老人 木賊、遊行柳、碓、

三老女 檜垣、姨捨、關寺、

三讀物 木曾願書、起請文、勸進帳、

右はいづれも習事にて、江戸直弟○親世流とならざれば、謠ことならず、其にも初心むざとゆるさ



御身を養ひ玉ふには、筋骨を勞動し、血脈を融通し玉ふに、まことなし、然れども尊貴の御身に  
ては運動し玉ふわざなければ、猿樂の御遊こそ然るべけれど、日毎に觀世左近をめして御學  
あり、近習の諸臣等もおほく此を習熟し、あかぬ御樂とせられけり、公いまだ大納言殿と申奉り  
て、西城にましますころ、本城よりの御沙汰にて、猿樂をも學ばせたまひしが、聰慧におはしけれ  
ば、いくほどなく其技にもよく熟し玉へり、ある日例のごとく左近を召て御學習有しに、左近本  
城の御寵遇をたのみ、不遜の舉動おほく、朝士を輕侮することすくなからざるよしきこしめさ  
れ、深くにくませ玉ひしかども、當時の事勢をはかりおはしましける、ある日石橋の舞曲を授奉  
るとて、赤頭といふものを御首にいたゞかせ、厚き唐織の衣あまたかさね奉り、假面をかけ奉り  
し折しも、五月のころ蒸暑なりしに、勿體なくも御頭を手にておさへ、舞臺の上を數十遍かけは  
しらせ奉りしかば、御息もつかれ御眼もくらみたまひけり、其後仰けるは、我祖宗の後をうけ國  
家の主たり、かゝる雜劇遊戲のために身體をつからし、若し病をこる事もあらば、何を以てか後  
世のあざけりをとくべき、今より後はたえてなすまじきなり、されど本城このみ玉ふことなれ  
ば、われ生涯は改むべきにあらず、近習の臣等この技をこのむものは、隨分に學ぶべし、又其職業  
の者になさしめて見聞はすべきなり、御みづからには學ばせ玉ふまじと仰出されける、まかれ  
ども、御父君の深く好み玉ふ御事なればとて、近臣又は役者等には、折々命じて御覽有しとなり  
この一事にても、公の英明獨斷、かつ御孝心の至りふかくまし／＼けることは、おしはかりてま  
るべきなり、

〔後明院殿御實紀附錄〕有德院殿（德川宗義）薨せられし後、いくほどもなく御學問に御こゝろを努  
し玉ひ（德川宗義）もし御病にても生じ玉はゞいかなり、とかく御養生のため猿樂をなさるべし  
とのことおこりぬ、此ころのことにや、道筑を御前ちかくめされ、大御所（有德院殿）の御在世に汝

〔花傳書ハ〕一能をしゆる事、一番に仕舞をしへよ、さてやうく仕舞おぼえたる時、二番に身なりをなをせ、扱くせの大方なをりたる時、仕舞の位をこめよ、かやうに段々をおりてをしへる事、師匠する者の秘事也、一番より百色も取かけなをし候へば、十方にくれ候て覺られず、退屈して藝わする、物也、此心がけ肝心也、扱二三番なし候てより、装束面にてまはせ装束あつかひ、面位をしゆべし、略中

一よろづの稽古の事、いかにも心のむきたる時ならふべし、氣のむかざる時、けいこする事ことの外の諸藝の毒なり、

一稽古の役者の外人をばあまた稽古の座敷へよせ候に、ぬ物なり、第一はれがましくて、稽古ならぬものなり、はやしの稽古よりものふの稽古とりわけみどころなき物也、かへすくまらうとなどよすれば、けいこにおもしろき事なければ、かたわきにてものがたりなどするものなり、いかにもけいこひそかにするものなり、第一雨のうち雪の中などとりわけけいこはまむ物なり、地うたひ二三人調子ひきくうたはせ、つゝみ手拍子口笛にてけいこすべし、大勢ありてははやしまぎれなをされず候、大方おぼえ候て、本のはやしにてけいこすべし、略中

一おさなき物に能をしゆる事、あまりにこびたる能をしへまじき事也、又おもてかけすして、いせいのなき能同前なり、いかにも仕舞おほきにをしゆべし、あまりこまかなるものまねはせさすまじき也、

一稽古にあしき役者にてまひ候事、ことの外の毒なり、略中

一おさなき人、はじめてをしへる能の事は、小鹽、經政、籠太鼓、楊貴妃、誓願寺、花月、藤榮、羽ごろも、あつもり、西王母、此類尤に候、

〔淺明院殿御實紀附錄三〕惇信院殿家○鎌川には御多病にまし／＼ければ、近習の人々すゝめ奉り、

ばつけ候なり、さてうたふとき、その曲を心得わけてうたへば、曲のつけやう相應してよきなり、おもしろきかんあるべし、玄かればたゞふしの付やうをもつて、うたひのはかせとす、文字うつりのうつくしく、すみにごりの曲に似合たるが、かゝりにはなるなり、ふしはかたきかゝりは文字うつり曲は心也、出よきいきも氣もおなじものふしきよくといふ同じ文字なれども、うたふ時は習ひやう別なり、稽古にいはいく、聲をわすれて曲を<sup>ま</sup>れ、曲を忘て調子を<sup>ま</sup>れ、調子をわすれて拍子を<sup>ま</sup>れといへり、又諸をならふ條々、まづ文字をおぼゆる事、其後ふしをきはむる事、其次に曲をいろどる事、其後こゑのくらゐを<sup>ま</sup>る事、其後こゝろほどをもつ事、拍子は初中後へわたるべき事、かんようなり、

一こゑをつかふ事、聲のむきたる時をうしなはじと、聲のくさりなど、申たるも、つかひたる後に樂をのむべし、これこゑのよくなるたしなみ也、聲をつかふ事、其聲のむきによるべし、又氣力にもよるべし、横のこゑをばたすけてつかひ、堅のこゑをばをしてつかふべし、聲につかはれてよきこゑあり、こゑをつかひてよきこゑあるべし、横堅ともにあるこゑをあひをんとは申なり、宵曉の事、よひには物敷をつかひてあかつきにすこしすくなくつかふべし、ことさら横のこゑなどをば、曉は聲につかはれてこゑをいたはりておさめて、聲をほんにつかふべし、返々こゑのむきたる時をうしなはず、つかふべき物なり、聲をつかふには、よひに曲舞五ツばかり調子高くうたひ、あかつき又地ごゑに曲舞三ツ四ツ、諸おさめに調子をあげて、小諸三ツほどたかくうたひさて何にても食をそと用べし、さなく候へば、つかへ候聲かへり候ものなり、玄よく用るも秘事なり、五十日ばかりつゞけてつかひ候へば、こゑかゝる物なり、其ときこゑをつかひぬき候へば能聲になり候也、聲の一稽古と申は夏百日、かん三十日、これをいふと、とりわけ冬のうち本なり、○下

〔諸曲〕道成寺

ワキ 詞 言語道斷加様の義を存て社、かたく女人禁制のよし申て候に曲事にて有ぞ、なふく皆  
皆かう渉り候へ、此鐘に付て女人禁制と申つるいはれの候を御存候か、ワキツレ、いや何共存せ  
ず候、ワキ さらば其謂を語て聞せ申候べし、ツレ 懇に御物語候へ、○中 ワキ 其時の女の執心殘  
つて、又此鐘に障礙をなすと存候、我人の行功も、加様の爲にて社候へ、涯分祈て此鐘を二度鐘樓  
へ上うするにて候、ツレ 尤然るべう候、ワキ 上 水かへつて日高川原の、眞砂の數はつくる共、行者  
の法力盡べきかと、ツレ 皆一同に聲を上、ワキ 東方に降三世明王、ツレ 南方に軍荼利夜叉明王、  
キ 西方に大威德明王、ツレ 北方に金剛夜叉明王、  
中央に大日大聖不動、○下

〔諸曲〕鶴飼

ツレワキ 如何に申候、此人を見て思ひ出したる事の候、○中 シテ 扱は其時の御僧にて渡り候  
か、ツレワキ さん候、其時の僧にて候、

教習

〔花傳書八〕一うたひをしゆる事、先ならひ候人の口つき候はぬあひだは、師匠たかく調子をうか  
がひ、ならひ候人はひきくうたふ物なり、其子細は、いまだ合點ゆき候はぬ間は、師匠のうたひを  
耳にきき、それをふかく似する也、ならふ人のたかくつけ候へば、字章のうたひにまぎれ、師匠の  
ふしみに、いにいらず候、さやうに候へば、ふしをなをす事ならぬ物なり、このころづけ肝要に候、  
またならひ候人、大かた口つき候にゑたがひ、次第々々にひきく習ひ候人に、たかくうたはする  
もの也、習ひ候人のうたひのよしあしをきき、入なをし候はんため也、

一立昌のならひやう、二いろに有べし、うたひの本をかくひとの曲を心得て、文字うつりをばう  
つくしくつくるべき事、またうたふ人のふしをつけて、文字をわかつべき事、文字によりてか、  
りに成て、五音たゞしく、句うつりの文字ぐさりのすへ様に聞よくて、ゆう／＼と有様にふしを



がふべし、まぐぎは淺くかるくといづるなり、舟人、木こり、すみやきなどは、ほしが、りまぐぎはのかまひもなし、名乗あさく名乗、おきつゝみ打わけ、其くらゐくにかふ、いやしき物の名乗は、かしら一つにてうちあげ候事、つゝみのならひ也、上たかき人、貴僧、高僧のなりなど、かしらおほくは、きと異に打あげ候、其時狂言のこゑありて、やがてなのるべし、

〔花傳書六〕一 おさなき人の大夫に、おとなわきにたつ事、其時のわきの衆の事、心持あり、わきのかたよりも、大夫をもとき、後見をふかく過たるは、みにくき物也、其心得肝要也、又幼者のわきにたちたるやうに仕候へば、おさなき人はたより有まじく候、其見あはせかんよう也、

一 わきのいのりの事、序破急有べし、はじめをまづかに珠數をもすり、いかにも間をとをくともみなをすべし、中頃を破によせていのり、後を急にいのるべし、急によする時、まゆすをさいさいもみなをしゝ祈るべし、但のふによるべし、善界、舟辨慶などは、祈り出より急也、道成寺、あふひの上大形同じ、前序破急あり、祈りなり、此心持いづれへもわたるべし、

〔音曲玉淵集四〕一 僧ツキの事

住僧住僧

とも

座主

法印

大口著る也、

是は真におもく

と謠出すべし、

大口著る僧はうつば僧

として常の僧なり、

さらりと風ふべし、

右大格如此ながら、其一番々々に必替る也、譬へば鉢木の脇はうつば僧にて出ても、最明寺時頼なり、鶴岡なども日蓮上人修行の比也、其外名僧達の名を顯はさぬ僧脇餘多あり、心を付て謠ふべし、總じて僧脇に限らず、番毎に心かはるべし、○中略

一のばりさうくだりさうの事

上り僧は定家のツキ、下り僧は江口の脇と申候へども、是も異名にて各別の事也、脇ばかりにも不限、外に習ひ有事なり、

よく習道して、一同に心をなして、ゆだんなく、平頭に曲をなすべし。是わきの人数の道なるべし。そうじて能にたつ人数の事四五人にはすぐべからず。まかればむかしは、まてあまたありしかども、ふたりなどにてよかるべき能をば、二人してせし也。人数あまたあればとて、大せい連座して、ゑぼしすわうのわたくしすがたにて、同音をうたふ事、さらにく道にてあるべからず、まづ大きにれうじなる事也。このふうてい、きんねん見えたるさほう也。心えられぬ事也。

〔花傳書〕<sup>五</sup>一大臣わき、男わき、僧わき、山伏、脇陰陽師などのわき、人あき人船頭、山賤などいろく／＼のわきあり、それ／＼のこゝろもちかんよう也。つねの心がけそれ／＼の大體を思ひ出で、かならずよくまよするもの也。但、又いはく、あまりにすぎたるも見にくき物なり。其かげん肝要也。けいこ由断にしてはなりがたし。けいこ常のたしなみにあり。

一いのりわき、山ぶしのいのりがふべし。陰陽、貴僧、高僧などの祈りちがふべし。陰陽の祈り俗體なれば、そのこゝろへあるべし。山ぶしのいのりはつよくあらくと、おそろしげに祈るべし。貴僧、高僧のいのりはいかにも真にいのるべし。是ならひなり。

一僧わきの心持、座主、阿闍梨、僧都など、ひらの僧ちがふべし。出立心もちそれ／＼の位により分別有べし。

一つねの僧わきいろあり。旅僧、住所の僧のほりくだりの僧、各々心もちちがふ。取分はじめてみやこにつく僧、心持色々おほし。口傳。

一男わき、鎌倉殿の御代官御奉行など、名乗わき。又何のなにがしなど、名乗わき。又船頭、木こり、すみやき、山かつ、里人、かやうのたぐひ、いづれも心持おほきにかはる也。勿論したて大きに替へし。御代官など、なのるはまくのうちまづかに橋が、りをもくしくあゆみ、けだかく名乗へし。何のなにがしなど、名乗脇、御代官御奉行よりすこし浅く心得べし。里人などおほきにち

〔花書傳<sup>六</sup>〕一大夫つれにたつ人、大夫よりせいのかき人、つれにたゝぬ物也、かつかうあしきものなり、つれは大夫と同じせいか、すこしひくき尤候、

〔猿樂傳記<sup>下</sup>〕梅若大夫は、<sup>略</sup>○中 江戸へ罷出、被召出度よし願ふ處、四座と大夫も定りたる上なれば、百石被<sup>下</sup>、觀世座のツレ被<sup>仰</sup>付、

〔謠曲〕高砂

シテ 昔の人の申しは、是はめでたき世のためしなり、<sup>ツレ</sup> 高砂といふは上代の万葉集のいにしへの<sup>シテ</sup>、住吉と申は、今此御代に住給ふ延喜の御事、<sup>ツレ</sup> 松とは盡ぬことの葉の、<sup>シテ</sup> 榮へは古今相おなじと、御代<sup>二人</sup>をあがむるたとへ也、

脇ツレ

〔習道書〕申樂一座人數、其役々習道次第<sup>略</sup>○中

一脇の爲手の心うべき條々、先切初に出て、開口よりその題目のいはれを分明に去をさめて、一會の事をなす事、是脇のまての一人一心の藝役也、ことさら開口は當日のはたんのくとして、萬見諸聞の祝言なれば、いかにもく、習道あるべし、それより後は、一座の平頭のくぎやうをほんとして、とうりやうのをきてのほどひやうしを心中に安得して、くぎやう同心の曲風をなすべし、抑わきのまての心中に、ことわけ心うべき道あり、とうりやうのしなんに、またがふをもて、わきのまてとは名付たり、たとひとりやうのふそくなりとも、其に就ても、ちからなきまてとして、一座をもつほどの主頭には、ことわけわきのまて、またがふべし、とうりやうふそくなればとて、わきのまての上手、別心の曲をなさば、一座ふどうにして、能の順路あるべからず、よきにもまたがひ、あしきにもまたがふをもて、わきのまてとす、これ第一のくぎやう也、くぎやうなくば、能すがたふいにあるべからず、このことはりをよくく、心えて、一座をなすを、脇のまての道とは申べきなり、又その外のわきの人數、一座のをきての曲風の、ほどひやうしのつめひらきを、よく

だひとり出べき事に、あるひは去ての藝力もふそく、又は音聲ふともかなねばとて、いはれなき人をつれて、初入門の見聞をなす事道にてはあるべからず、返々一身、一音、一曲の節風を、かなはねばとて、人数をたて、あまさへ下座より同音をうたふ事、さらにく道にてはあるまじきなり、諸曲においても、とうりやうの去てになる事は、上手とゆるさるゝきは也、そのきはめの目前の證見と者、たとひ音聲ふそくなりとも、卽座の曲をなす分力なくば、上手とは云がたし、物に上手と申は、かなはぬ所の事をなすをもて、道にいたる去てとは申べき也、さてそれよりのちは、既に脇の去ても立ならび、問答、助印も、一座の人数、平頭の事をなすたよりとして、他数に相同して、摠曲をもて、見聞一座の事をなす心をもつべし、これとうりやうの道なりとす、其外論義づかひのこわさき、爲手 人のやく也とす、

〔太閤記十五〕大坂西丸御能之事 甲午〔文祿三年〕九月十八日

吳服

仕手

金春大夫  
春藤六右衛門の下略

〔孝亮宿禰記〕慶長五年三月七日、於禁中有猿樂<sub>予</sub>、依催參之、御能シテ虎ヤ矢九郎大夫、<sub>下略之</sub>

〔花傳書三〕一つれにたち候ものうたひやうの事、大夫より調子をめらせてうたふべし、つけあひしてうたひいだすをき、文字一つ半分程をそく付るなり、大夫とおなじやうにうたひいだし候はんと思ひ候へば、うたひいだしそろはぬ物也、つけあひいかにもそくくになきやうに、一つ口にてうたふ様にきこえ候様にたしなむべし、大夫のうたひよく吟じとりかふてうたふべし、もし大夫よりはやくうたひ出す事など、さたのかぎりちじよくなり、たとひたゆふ下手にて、つれ上手なり共、大夫付べし、惣別つれにかぎらず、諸役者共に何と上手のよりあひにて大夫一人下手なりとも、大夫をとりかふべし、是上手のわざなり、仕舞などちつれと大夫と二人してする仕舞ある時、大夫忘れて文句にはづれをそく候共、つれのかたよりせまじき也、



鶴龜 右近 西王母 竹生島 東北 采女 半節 吉野靜 羽衣 六浦 小鹽略下

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月廿六日、若君二九内宮に參らせ給ふ略中かへらせたま

ひ、御座所にて御對面あり略中この御祝として御所より鶴進らせ給ひければ、饗し奉り給ひ、普第

衆万石以上諸物頭にも饗膳給はり、老松、東北、龍田、盛久、祝言の囃子あり略下

〔大猷院殿御實紀七十九〕慶安三年十二月廿六日、東照宮御誕辰にて、大納言殿本城へわたらせ

給ひ、御座所にて御對面あり、御祝の餅酒進らせらる、囃子喜多七大夫つかふまつる、高砂、軒端梅、

猩々三番あり、

〔嚴有院殿御實紀二十二〕寛文元年七月十一日、御座所にて囃子あり、猿樂大夫に時服一襲、鼓吹の

徒へ時服一づ、たまふ、

〔槐記〕享保十三年十一月十六日、御本殿御口切、准后様近衛内府様、入江様、御囃子アリ、權之進

立田 權之進

市左衛門

大郎兵衛

江口 同

市次

善次

亂 同

市次

金、善

仕手

〔書言字考節用集四〕仕手シテ樂鼓

〔倭訓栞前編十一〕

志 略 中

物の上手をえてといふは師手也、能などに師手脇などいへり、

〔賤者考〕シテといふは爲手、師手などの意なり、ツキは稱の如し、

〔習道書〕申樂一座人數、其役々習道次第略中

一棟梁の爲手の役道と者、當座の藝にいたりて、樂屋より出て、橋がゝりに立やすらひて、一聲一

句を上て、さて舞臺に出立して、さしことより、音曲一段うたひおさむるまでは爲手一人の役也、

縱令聲などふそくなりとも、此一聲一句の事をなさゝらんは爲手にてはあるべからず、若その

能の出し物によりて、ふうふなんどにて、老男老女兩人出て事をなさんは、それはまかるべし、た

てこの子思といへるは老人の鬚多きを形容したる詞にて、春秋左氏傳に出たり、宣公二年傳に、宋城華元爲植巡功、城者謳曰、睥其目、嚼其腹、棄甲而復、子思子思、棄甲復來、註に子思多鬚之貌、子思又西と見えたり、これはかの翁の鬚の多かるは、老人の壽瑞相なりと祝したるなり、

【難波江六】三番叟

風流 コレハ狂言ノ初ニスルナリ、廿番ホドモアリトゾ、

開口 コレハ御能ノアルトキゴトニ、林家ヨリ新詞ヲ奉リ、御役者博士ヲ付テ諸フナリ、役ナリ

○按ズルニ、開口ノ詞ハ武家行能樂條下ニアリ、參看スベシ、

【寶生流謡曲名寄一覽】仕舞目錄

羽衣キリ、東北キリ、熊野 采女キリ、六浦キリ、小鹽キリ、雲林院 半蔀○下略

【大猷院殿御實紀二十八】寛永十二年六月二日、新造の安宅丸御覽のため、品川にならせらる、○中略

安宅丸は兼て品川の湊にうかべ置、その所にて天地丸よりのりうつらせ給ふ、將監忠勝御祝熨斗折等を御前に獻じ、退て船魂祭をなす、仙臺中納言政宗卿松平新太郎光政はじめ、諸大名は兼て品川の海岸に待むかへ奉る、やがてその諸大名を御船にめされ饗せられ、御盃を賜はる、諸大名各伊達衣裳を著し舞曲を奏す、松平越前守忠宗と光政は、自然居士の曲舞をつかふまつりたりとぞ、

【槐記】享保十四年閏九月廿二日、御本殿御口切准后様、○近衛入江様、鷹司様、三門様、○中略

仕舞

半蔀 權之進 立田 助之丞 杜若 權之進 三輪 助之丞 土車 權之進

殺生石 同 海人 助之丞 橋辨慶 助之丞

【寶生流謡曲名寄一覽】囃子目錄

囃子

仕舞

翁立、千歳の舞、翁の舞がへり、素面にて三番叟もみの段、

黒色の面にて

鈴の段

右之通之順に御座候

○按ズルニ、秘傳九祝舞ニ據ルニ、翁ノ諸ニハ、初日、二日、三日、四日、法會舞、十二月往來等ノ名目アリテ、其文較、異同アリ、

〔運歩色葉集字〕于思ウイ翁ウ申ウ樂ウ三番ウ奏ウ之ウ調ウ也

〔三養雜記二〕とうくたらし

猿樂の翁のうたひもの、詞かつて明解なし、諸古抄、増抄、法音抄、拾葉抄等の諸注釋に、すべて翁を載せず、案するに、南留別志に、とうくたらしやらりうといふことは樂の譜なるべし、陀羅尼なりといへるは、ひがことならんといへど、樂の譜なるべしといふも亦非なり、とうくたらしは、都曇答臘とんたふらふの字音の轉訛せしなり、吳萊題が羯鼓錄に、大聲嘈々忽放肆、都曇答臘矧敢前と見え、都曇答臘は鼓の名なり、隋書音樂志、龜茲の條に、都曇鼓答臘鼓あり、白氏六帖にも、都曇答臘本外蕃樂、都曇似腰鼓而小、答臘郎蜡鼓也といへり、瑜伽論の十種聲の中にも、都曇等鼓俱行聲ともあり、

おうさいく

おうさいくのおうさいは、于思ウイの于に發聲のおをそへていへるなり、運歩色葉集に、于思翁申樂三番奏之調也とあり、ト養狂歌集に、ある人のもとへ正月七日に行ければ、七くさの歌よめといふ、あるじをいはひて、

于思ウイ翁ウうさいをうよろこびありや悦あれあとの大夫に鈴榮まわらしよといへるも證とすべし、さ

や、地 ひろばかりやどんとや、舞座して居たれども、地まいらふれんがりやどんとや、舞千早振  
神のひこさのむかしより、久しかれとぞ祝ひ、地そよやりちや、舞凡千年の鶴は、萬歳樂とうた  
ふたり、又萬代の池の龜は、甲に三玉をいたゞき、なぎさのいさごさくくとして、あしたの日  
の色をろうじ、瀧の水、れいくくと靜に落て、夜の月あざやかにうかんだり、天下泰平國土安穩、  
今日の御祈禱なり、あれはなじよの翁どもよ、地あれはなじよの翁どもぞや、いづくの翁どう  
どうく、舞そよや、舞千秋萬歳のよろこびの舞なれば、一舞ひ舞はふ、萬歳樂、地萬歳樂、舞萬  
歳樂、地萬歳樂、

右にて翁濟翁千秋這入る三番叟シテ柱に著坐、太つゝみ出打

### 三番叟

一 おゝさへく、よろこびありやく、わが此所より外へはやらじとぞおもふ、舞黒面にみなる、段濟、

### 三番叟

一 あゝら目出たや物に心得たる、アドの大夫殿に、ちよつとげんぞう申ウ、

### 面箱

一 てうど参りて候、三一たがお立にて候ぞ、面一あどと仰候程に、某随分物に心得たると存おあ  
どのために罷立て候、三一は、う、面一今日の御祝儀を千秋萬歳と、目出たきやうに舞ふてを  
りそへ、色の黒い尉どの、三一今日の御祝儀を此色の黒い尉が、千秋萬歳と目出たいやうに、舞  
おさめうする事は、何より以て安う候、先あどの大夫殿には、元の座敷へおもくくと御直り候  
へ、面一某座敷へ直らふする事は、尉どの、舞より以て安う候、先御まい候へ、三一まづ御直り  
候へ、面一先御舞候へ、三一イヤたゞ御直り候へ、面一あゝら目出たや、さあらば鈴をまいらせ  
ふ、三一アラやうがましやな、鈴鈴の聲、舞仕廻なり、



ざも鈴もあぐる、是にも五所拍子あり、さて、つねのごとくまふ、おほつゝみのまへにて、あし拍子こまかにふみ、三度まはるたびごと、かはをなづる事子細ある事なり、まいとめて面をぬぎ、やがてがく屋へかへる、

〔一話一言 三十六〕翁三番叟次第〇圖

式三番翁立

一面箱 狂言師 翁大夫 シテ 千歳 シテツレ 觀世流、寶生流、今春、金剛、勳、

三番叟 狂言師 笛 小鼓 脇手鼓 小鼓 願取 小鼓 脇鼓 大鼓 太鼓 地誦

右之順に出る、初め面箱出て目附柱の際に跪き居る、翁正面にて下に居るを見て、千歳以下皆跪き居る、千歳はシテ柱の際に居る、三番叟以下はやし方皆橋がゝりに居る、翁正面にて禮をして座につく、面箱翁の前に行、面箱のふたを明面を出す時、千歳脇坐に行坐す、面箱は面を取出しふたにのせ置て、千歳之次に坐す、はやし方一人づゝ順に、シテ柱にて禮をし坐につく、地誦は板附之方より出て、拍方之後に坐す、小鼓三人床几にかゝる、笛座附を吹出す、小鼓素袍肩を脱ぐ、笛座附之末ヒシギを聞、小鼓打出す、

翁誦出す

一とうく たらりく たらりあがりらゝりどう ちりやたらりたらりたらりあがりら  
らりどう、翁 所千代迄おはしませ、地 われらも千秋さむらはふ、翁 鶴と龜との齡にて、地 幸心に  
任せたり、翁 とうく たらりく ちりやたらりたらりたらりあがりらゝりどう、千歳  
ノ舞初る なるは瀧の水く、日はてるとも、地 たへすとうたり、ありうどうく、千歳 たへ  
すとうたりく、舞 君の千とせをへん事も、天津乙女の羽衣よ、なるは瀧の水日はてるとも、地  
たへすとうたり、ありうどうく、舞 スム 笛ヒシギ 千歳元之座ニ著、翁 あげまきやどんど

の右のかたにて禮をして座付、其時袖をあらゝとむらをす、そのをとをき、千歳面箱をおきな  
のまへにもちてゆく、おきなのまへに面箱をきてひばをとき、おきなの面をとりいだし、めん  
はこのふたにすへ、たゆふのかたへむけてをく、たちあがりわきの座になをる、さんばさうはし  
てはしらのわきになをる、その時いづれも座につく、まてはしらのきはにて、座付衆正面へ一禮  
あり、扱をのゝみな座付候てより、ふるやがて座つきをふく、つゝみうちつゝみおげのひばを  
とき、つゝみをとりいだし、もとのごとくにふたをして左のかたよりよりてこしをかけ、すわう  
のそでをひだりよりぬぎて、つゝみをひだりにもち、ひざにのせ、ふるのひしぐをまち、小つゝみ  
打いだす、おきな座してゐたれどもといふ時、立あがりつゝみうちのまへにてひろげさいふあ  
り、さてさまゝの祝言のうたひ、おきなのまいあり、つねのごとく舞おさめて、ぶたいのまん中  
にて、謹而禮をしてさてたちあがり、いかにもまづかにがく屋へいり、おきなの舞のうちに、むの  
段といふ事あり、これおほきにならひあり、秘事、

一せんざいのまいなかば、たきのみづとうたひ、ひだりより左右のへうちとり、つゝみ打のそば  
より、舞臺のなかへいで、たえずとふたり、つねにとふたりといひてしきる拍子あり、たつはいを  
してあふぎに目を付逆にまはる、さてあふぎをさしあげ、きみのちとせをへん事は、あまつをと  
めの羽ごろもよ、ばんせいましませいはふがうへ龜やすむなり、らりうとふゝゝといふ時  
あし拍子三ツあり、舞たまふつねのごとくに舞つゝみ打のまへにてつゝみ打のかたへむき、又  
ひだりへあふぎをとり舞とむる、あし拍子あり、さてもとの座になをる、

一さんばさう、大つゝみもみ出しうちいでき、あはせよきころにたちあがり、橋がゝりにてさ  
んばのうたひうたひいだし、やがてまふ也、さんばさうのまいすぎて、せんざい鈴をとりいだし、  
さんばにもんだう色々あつて、すゝをわたす、さんば鈴とつてぶたひ中ほどへ出し、さりてあふ

しらひあり、開口と云時鼓なく笛ばかりにて出て、千歳の高音といふを吹時、作文に繼て脇能の名乗をなおり、其跡にて次第をうたひ續て道行をうたふ。略中

#### 四座并喜多座の始等の事

猿樂といふは前段書記したる通にて、金春が家根源なる故に、翁渡しの傳授、今に至りて代々子孫に傳來す、金剛家は、元今春が別れなれば、其家へも傳へて、今に子孫に傳來す、此傳授元來習合の神道を以、執立たる物なれば、觀世は吉田殿神道の御家なれば、是へ參り神道の旨を承りしを以、觀世が家の翁は、唯一の神道なりといひ傳ふ、實生は代替りには上京し、吉田殿へ參り其意味を受得す、是を觀實は、吉田殿より翁渡しの傳授を請しと、世にいひならはし、聖德太子の神道は、今の習合也、其時代の神道の教に、唯一習合の差別なき故なり、

〔日本問答坤〕能舞姫古事 神樂ヲ奏シ玉フ、是神樂ノ始也、殿上地下ノ衆、又ハ内侍所ノ御神樂、諸社ノ神樂、一段ノ重事ニハ七夜御神樂、山行ハ六百曲ノカタノ神樂、今ノ能ニ用ル式三番ノ事也、翁之神ハ春日大明神、チ、ノゼウハ白髪ノ大明神、三番神樂ハ宇佐大明神、延命冠者住吉大明神也、

〔泰山集雜著 甲乙錄 四〕翁式三番神道傳來二千歳來於神前行之、於禁庭亦行之佳例也、

〔花傳書一〕一夫式三番座付の次第の事

第一 翁 第二 千歳 第三 三番 第四 笛 第五 小鼓 第六 大鼓

第七 太鼓 第八 謠衆 第九 狂言

一まくをあげ千歳二間ばかりいづるとき、大夫出べし、其次に右のごとくいづれも出べし、扱翁せんざいは座付の間、まてばしらのきはよりはし一はいにひとへならびに各々つくばう、さてせんざいぶたいのまんなかにて、面箱を目八分にかまへてもちてかしこまる、おきなせんざい

道の詞を難へたるなり、是何者の作かしらず、

翁と尉は、今式三番に舞ふ處にて、脇師の事は、式三番過、本能に及て其業を勤む、天の岩戸開け初たる處を學びて、是開口也、其心持傳授あり、故に脇師は脇能に至りて勤るを以其代りの心にて、千歳といふものを、面箱翁の初發の吟聲過て假りに立て舞ふ、是岩戸の前にて、戸隱手力雄神諸神に抽て、其功有處を表する也、上代は翁とシテ三人同様に立、一同に舞たり、一人は正神の神翁也、又一人は千々の尉と唱へ、今一人は延命冠者と唱ふ、此兩翁をば神の父とし、神の子として子孫相續し、萬代繁昌を含む也、此三人の翁を用る時は、一翁に面箱持一人宛別々に立て、三翁一同吟一同舞する故に、千歳にも三人一同に業を同じうす、かゝる譯にて、金春が家を始下懸りにて、面箱持千歳を勤る是古法也、上懸りにては別にして、ツレを以千歳を立る、後世の了簡也、翁千歳の役畢て、色黒き尉の面なしに立て業あり、此段過て風流の所作あり、色黒き尉は、狂言師より勤るを以、是に添たる流なれば、風流餅の風流等あり、風流畢て鈴の段、此時黒き面を掛る、是式三番に白色、黒色、肉色と、天地人の色を表す、白は天、黒は地、肉は人也、其肉色は面なしにて勤る處也、是残らず畢る、翁を始め總役人樂屋に入、中古は翁一人にて勤るにより、囃子方は舞臺に残り止り、直に脇能を勤る、古來は脇能にて、囃子方別に出たり、其式三番の内より、脇能の脇師大臣裝束にて、鏡の間の真中に、床几に掛り居る處へ、翁揚幕の内へ入て懷中より祈禱呪文の守りを取り出し、其脇師へ渡す、脇師是を拜受して懷中し、梯懸りへ○此間有脫字此時脇師心中に呪文あり、千歳の業を繼ぐ心持也、是手力雄の神を表する處也、是が開口の場也、然るを開口脇と呼て、新規の作文を正面に向て吟じ、是に繼で其脇能の名乗を云、是は目出度其節を賀する事にして、一ツの法也、全體脇能の脇として出て勤る處を、開關の開口の地なり、其作文なきをば、開口とはいはず、今常體是也、小鼓ばかりにて出て、正面に向て拜禮す、是を禮脇といふ、其小鼓を置鼓といふ、尤笛のあ



して戻しぬ、その後觀世江戸にてとくさ刈をせし時、先年信州の百姓らが評判せしをまもり、向の方へとくさを刈りければ、其能の出來たる事、大かたならず、みな目を驚すに至れりとぞ。

〔翁草 五十六〕一下手なる能大夫富士太鼓を致しけるに、猶も思へば腹立やと云所にて、手くだりを忘れ、びつくりして舞たりしを、見物聲をかけて、玄やと申せしを、此大夫は南無三寶舞損ひぬる氣の見えぬるにや、見物の笑ふよと、面の内汗をかきて、やうく舞治めける、後日知音の人、此ふじ太鼓の事を申出し、賛ければ、さればか様く、の次第にて有し故、見物の聲か、り候は、慥に舞損ひの見えて、笑ひし物ならんと覺候と申ければ、彼の人手を拍て、いか様其時の面は、凡ならず上手名人の業とこそ見えなれ、慮外ながら足下の御執行にて、あれ程の出來返ヌく、不審に存せしが、今の返答にて合點參りぬ、其前まはれ切たる所に、狂氣にて心替る味ひ面へ移り、甘心餘り有其氣の替り求ては出來難かるべし、舞損ひが怪我の高名也と笑ひしとなん。

〔閑田耕筆 四〕昔は能も手輕き事にて、臨時に見物者より所望し、夫に應じて何にてもまたりと見ゆ、今貴人の御乞といふもの、ごとし、當時は數十日前より催して番組し、役者をも定めての、しる也、彼輩いふ、猩々の亂といふもの、むかしは大夫の門にて若、切幕よりあふぎをひろげて出れば、囃の役人心得て亂をうちたり、然らざれば常の猩々也と、是等も手輕く、又其道に達者なるゆゑ也、藝は下手になり、事は重々敷なること何の藝も同じ。

〔猿樂傳記 上〕翁渡しの根元は、日本開闢の時、日の御神、天の岩戸に隠れ玉ふを以、八百萬神是を歎き、岩戸の前にて舞曲を調へ、是を慰め給ひしを學びたる物にして、能の總囃子方には、八百萬の神達を移したる故也、シテの翁を天照太神宮に表し、色黒き尉を住吉の神に表し、脇師を戸隱の神に表す。

一書には、翁は天照太神、千歳は八幡太神、鈴夫の三番叟は春日明神と稱す、諷ものは陀羅尼に神

〔雨意閑話〕觀世一代能の事并木賊刈の事

一享保年中、觀世大夫一世一代の勸進能を行ひ、京都の河原に舞臺を造り、棧敷を拵へ、芝居を興行す、見るものは蟻の如く群集せり、初日か二日めかに、觀世木賊刈を舞ふ、其面白き事見るものに堪へたり、爰にいかにも田舎めきたる百姓と覺しきもの、十人許連れ立ちて、能を見物して有りけるが、數千人の人數、悉く讚歎する中に、彼の百姓共は、さも思はぬやらん、何かひそ／＼囁合てうけず顔なりけるを、觀世舞ひながら此體をきつとみとがめ、扱能も終りければ、木戸へ人を遣はし、かく／＼したる衣類著たる百姓十人許、木戸を通らん時、必留め置き申すべし、尋ぬる子細有りといひやりければ、程なく能濟みて、木戸を出でんとする時、かの百姓どもを差し留めけるゆゑ、何事かと大に驚きしを、觀世さわがぬやうに樂屋へ呼びて申しけるは、今日我等木賊刈を舞ふ、其出來たる事、凡あるまじく思ふ心にて仕たりしかば、果して貴賤群集おしなべて感心の様子にみえたるが中に、其方共はさも思はぬ様子にて、何やらん打ちひそみて、囁合たるはいかに、其さまふしぎに思ふによりて、子細を尋ね度く、木戸にて留めさせしなりと申しければ、百姓共申すは、我等事は信州のその原と申す所の土民に候、今日木賊刈の能興行有るよし承り及び、我等も木賊かる者共なれば、なぐさみながら能とやらんを見物して、一生の癖の種にもせまほしく思ひて、今朝より芝居して見物する所、心なき賤の我々ども、感心して面白く侍る、去りながら、只今遊ばされたる内、いで／＼とくさからうよと申す所、鎌の御手我等が仕なれたるとは、聊替はりある故、申す事にて候といへば、觀世の曰く、それはいと面白き見咎めやうなり、いかにして汝等はあるかと尋ねければ、されば、とくさはむかふへ一刀切りにかり申し候に、今遊ばされたるを拜見いたし候へば、同じ所を前の方へ二刀にて、御かりなされ候を見申して候、あれにてはとくさはかられ申すまじく候と云ひければ、觀世大に感心して、物とらせつ、厚く賞

て、其頃の名人喜多七大夫も稽古して、修業の功なれば業ましたり、是等は上手といふべし、元祿の頃の金春八郎も流石の者にて、其家の法を守り上手なり、其頃或御方にて當時の大夫何れか能く致さるゝこと、御身の所存を承りたしと尋しかば、尤其家にして觀世織部年若しといへども申分なしと云ふ、寶生當時將監はと尋しかば、今程世にもてはやされ發向の大夫のことなれば、何とも申がたしと答ふ、金剛又兵衛はと問ければ、あれは御舞にこそ候へと、笑ひながら答へたり。

〔翁草 五十六〕一昔日東武御能に、諸侯威儀を整へて著座し靜り返ぬるに、其頃の觀世大夫幕を切てすつと出たるを、列侯の内よりイヤと聲を掛し人有嚴重の席にて卒爾の事誰人にや、あはや御不審を蒙なんと各堅睡を飲互に顔を見合ぬれ共、誰の云しとも不知、案のごとく御能濟て後、先程列席の内よりかけ聲の聞えしは誰成や、何と存聲を掛ケ候やと御尋也、其時柳生但馬守進出て、先刻觀世大夫切幕をズツと出候を見候に、其氣みち／＼一身の固め少も透間なく、中々容易に立向がたく相見え候故、御前を忘れ思はずも聲を掛候由被申上ければ、追但馬守相應の賛様也とて、何の御答も無りしとぞ。

〔意の須佐美追加〕喜多七大夫が祖古七大夫は、世に稱して藝術堪能なりしとかや、その母一見して批判するに、皆妙處を云けるとぞ、安宅の能を見て、汝が藝術殊外に進たれども、未妙に至らざるとみゆ、猶工夫してよと云しかば、さま／＼に勘へつゝ、日を経て後、是を□□□□いまださにあらじと云、此上は自慮に及がたし、其意を承たしと問ければ、さらば語ぬべし、一體豪氣十分にてさながら辨慶と見ゆるやと云、それをこそ第一と仕候へ、猶いかゞと云、さればその心得とみゆる也、そも／＼山伏のさまになり、さらぬよしをさま／＼陳じて、だに、關守のあやしみやます、初より辨慶と見へて通すべきやと云しに、ぞ讃歎して、彌術をねり妙を得しとぞ。

やなにの心も存せず候し、但此能に付ては、昨日のごとく幽玄にまはず、はやさすとうけたまはり置候へしが、もし思はずに想顔に出候を御見付なされ候つるやらん、昔保昌座に兄弟の上手の大夫侍りき、兄は關東に有し留主に、弟の大夫勸進能仕るに、此能のくせまひ更にうきく、とまはず、三段めに義經の前に跪え、ばらくなき、立あがり、殘る二段をまひ和歌をあげしを、棧敷芝居の見物、上手逆はめけるなり、東國の兄傳へ聞て悦喜し、但をのがせば居ながら其まゝ和歌を上べき物をと申せし、古き物語を申あげて退出せしと御咄しあり、また今時の猿樂もしらぬ大事古實をよく御ぞんじありし證據には、觀世左近大夫一代に一度の石橋の能を、神泉苑にてせしに、幽法公（細川）御見物あり、觀世が能にかぎりて水引をひかぬことなるをなにとて今日は引たるぞと、棧敷より御使あり、樂屋にこもり居たる梅若、日吉、めいりう、延命、福士、いやし等いき、残りたる古老の功者、覺へぬもわすれたるもやありけん、いそぎふためきて、水引を取入侍りき、關寺、道成寺、狸々の亂等は云に及ばず、あらはやしほうるの舞弓やのたちあひなどとして、彼道に秘傳する大事どもを、習ひたるものも、まれくはあるべけれど、幽法公のごとく、觀世大夫宗節、笛備中屋宮増彌、左衛門、高安與左衛門、似我與左衛門等のふるき役者を、一處にまねきよせさせて、見たる大名、幽法公ならでは、またとおはせざりき、

〔望海每談〕一慶長元和の頃、能の業におゐて、金春大夫下間少進と世に賞玩す、故に何方にても此二人を招き仕舞仰付らる、一日兩人召れたるに、少進立出て舞たるに、一入今日も舞見事なり、續て金春大夫立出るに、何のふり會釋もなし、老年のことなれば、鬢髪も白色まじりにて、丈低く龜相に見えたり、少進には面體本願寺の坊官にて、流石の人にて、器量よく色白く勿體有て、衣服もさらびやかに、其業能きを以て、いかでか少進に及ぶべきと、皆人思ひし前に、其堪能成こと格別成事を感賞したり、是を名人と云ふべし、寶生古將監を後世皆人賞美せしが、其家は上掛りにし



はせうかひがことなど、玄めつく、めつせられし、更に及びがたし、大男にていられしが、女能などには、ほそくとなり、玄ねんこじなどに、くろかみき、かうざになをられし、十二三計にみゆ、それ一代のけうほうより、うつりく、申されしを、ろくをんえん義満、世子に御むかい有て、ちこはこまたをか、うとおもふ共、こはかなふまじきなど、御かんのあまり御りこう有し也、なにもなれ、音曲としかへられし、事神變也、又いかる事には、とをるのをと、の能に、鬼に成てをとどをせむると云能に、ゆうりきくとし大になり、さいとうふうなどには、ほろりとよりほどきくせられし也、くさかりの能に、このむまは、たゞ今うへしに候べきやより、たとへひきし、すいゆかすくなど云くだして、こは忍ぶのくさまくらと、うたひ出し、目つかひし、さと入し體此道にをきては、あまくだりたるもの也、共及がたく見えし也、

〔渡邊幸庵對話〕一細川越中守忠興家來に、中村庄兵衛とて千石を取し侍あり、此子左馬介能の脇をよくして、役者にも増りたるとて、其時代の談話也、或時船辨慶を法樂の能動しに、白洲見物の中より、あれでも能の上手といふかと、高聲に欺笑ふ、左馬介聞とがめて、能濟申、則彼者を引止め、様子を尋るに、私は船頭にて候、故能は不存候、但風波のあらし時の船の漕様、あれにては無之候、艦の押様か、へ様違ひ申候、又辨慶とても波風荒き時は、あの様にては、船中に立れ、不申候と難じ申に付、波風の時船中に立こたへ申様、并船の漕様共に、彼船頭に能聞、左馬介心得けり、後に中村鞆負と云、何事も其道に便りて聞よし、

〔戴恩記〕石井了運といふ太鼓うちまいりてありしに、俄に關白殿豐臣よりめしありて、登城

細川あり、玄ばらくありて御歸りなされしに、なにの御用にかと名たづね申せしかば、昨日の

御能のうちに、少進法印せられし船辨慶のくせ舞面白、笛鼓のりて萬人ほめけるに、其方ばかりほめぬかほにてありしを、いぶかしく思に、その故をとほんとてめし候と仰ありし程に、いやい

〔宗五大草紙〕色々の事

一若人は弓馬鞠又は歌道の事、兵法、包丁又は當世はやり候大つゝみ、小つゝみ、大こ、笛、尺八、音曲なども、ちとは稽古候て可然候、略○中又若人は酒もりの時、一さし御舞候も能候、座敷舞をば大事のよし申候、いにしへの名人の事は見候はず候、近世には觀世せうせい、同ゆうけん、おちの彌三郎、大つち大藏大夫、日吉大夫、虎千代是等をおもしろきよし申候つる、まらうとには一色匠作、故秋庭備中、元重座敷舞を勝たるよし猿樂衆も申し候し、

〔意の須佐美追加〕古七大夫多喜上方に登りて、まばし逗留せしまに、小兒の跡にて病て死したりければ、終りを見ざる悲びさへそひて歎くらしつゝ、下りけるが、宿所に入んとせし時、うばなる女はしり出て、少君のうせさせ給しはとて口ばしるやうにて、もすそにすがりつかんとせしを門前なれば人の見る目もいかゞなりとつきのけり、つかれてそこに倒れけるを見て、あつと感じて、そこにうづくまりけるが、此兒の深き孝子なりける哉と云つゝ、内に入る、皆々見て何事にやと問ひければ、さればかれが我にすがりつくを見るに付て、かの兒の面影めにさへざるやうに有しが、かれがはたと倒しを見ると、數年心にかけてける、藤戸の佛うろひのひしと顯れて感通しぬる、誠に夢の覺たる心地して、妙術刹那に覺悟しぬ、偏にかの兒にならひたる也となみだを流し語ける、

〔世子六十以後申樂談儀〕先祖○觀世家觀阿、まづかの舞の能、さがの大念佛の女ものぐるひの能など、ことに名を得し、ゆうげんむじやうの風體也と花傳にも有、上くわにのぼりても山をくづし、中上にのぼりても山をくづし、又下三位にくだりちりにもまじはりしこと、たゞ觀阿一人のみ也、すみよしのせんぐうの能などに、あくせうにたてえぼしき、かせづえにすがり、まく打あけいで、はしが、りにて、物いはれし、いきをひよりろんぎいひかけ、又きの有常がむすめとあらはす

踏やう、他人へ見取られ間敷爲に、袴の裾を長くして足の甲を隠す、故に常服の袴をも、丈けを長くして、不斷は上にて折て著す、若御前にて、御所望有て舞時の爲也、尤金春が亂拍子は甚長し、是紀州の道成寺の、石壇六十有を、一ッ宛登る心にて、其數を踏也、其形赤頭にて直垂、他家黒髻を長く引、丸晝しの脱かけ也、

〔舞正語磨〕道成寺の事、略中、扱鐘入は人ごとに大事の物ぞと、口にはいへ共、その習をえる事なし、ついとび込待れば、大夫の腰より下、あらはに残り見えければ、あれやうなる入やうにては何の大事も有べからず、鐘の繩をひかゆるものと、大夫よく云合をして飛こむより、我すがたを、すこしもみせぬやうにするを、以、鐘入を大事とす、

〔花傳書〕五、一御前能の事、大都貴人の御前のげいは、まづ高人の御かたへ心をよくつけ候へば、かならず、まゝそこなひなしたとへばわがおほきみのくになれば、いつまでも君が代になど、いふ所は、貴人をうやまひたるふせいを心にもち、また手向をなしてかへりけり、いたはしの御ありさまやなど、いふ所は、つねには上面のかたへむきする仕舞ありといふとも、御前などは是をよけ候也、加様の分別よろづに渡るべし、是第一御前の能の心持也、足拍子たくさんにふむ事慮外なり、貴人のかたへうしろをむける事同前也、總別つねの能にも、上面へはうしろをせず、又御前の能にも、大夫舞臺ををりて御前ちかくまふ事あり、其時の唯一大事なり、大夫のとをざかり舞ゆく程、たくさんにはやすべし、位ちがふべし、能口傳あるべし、萬御前の能諸事心をつけ候へば、時にいたりて出来かんある物なり、わきつれにいたるまで、右のこゝろがけ御前にて肝要なり、其うへさしあひのなきのふをよく組合候はん事せん也、二日も三日もまへより、そののふを吟じ、くり返し、くふうして、さしあひなきやうにこゝろがけ肝要なり、御前の能にかざらず、いづかたにても所へさしあひ、亭主へのさし合を能ぐみの時、由断なくかんがへかんゑん也、

如斯いづれも心替る事なれば、能のこゝろも一色に定らず、其心わけく成べし、但狂女といふと物狂といふ差別あり。

一上中下の差別の事

女上 定家 野の宮 内親王御息所なれば上トス

中 源氏供養 うき舟 采女 宮女なれば中トス

下 藤戸 海人 賤の女なれば下トス

武考上 忠度 通盛 清經 公達なる故上トス

中 朝長 八島 源氏武者中トス

下 實盛 兼平 簾の梅 侍なる故下ノ武者トス

一勝修羅 田村是は説言の修羅といふ 八島 簾説言には勝修羅を用ゆ

一力道リキダウ細道の事力働細勤トモ

力道は現在の鬼 強くけはしき也

細道は神鬼也 冥途の鬼 こまやかに心付べし

〔猿樂傳記上〕四座并喜多座の始等の事

金春が家傳の道成寺、尤極傳なり、元其謠は、金剛が方にて作り出したるを、金春が方にて能に仕立る、其亂拍子は、大臣公卿の束帶の時、練足といふ足取の法を寫したる物也、練足は、堂上方高官の御衆にも、傳授事にして、息合腰遣ひ、足の踏やう習ひ有と云、春日の直神樂の時、練足の仕形を以、拍子を踏、猿樂にて是を見立て、亂拍子を踏出す、道遙院殿實藤原猿樂の亂拍子を踏を見て、我家の練足に似たりと被仰たるを、觀世聞傳へ、夫より毎度參り、御傳授を乞願ふを以、被仰聞たりといひ傳ふ、觀世が家にては、道成寺を極傳といふは、かゝる譯也、金春が方にては、亂拍子の足取



す事あり、さゝぬ事あり、ならひあり、こゝろもちある事也、付みだれの舞出しの事、大夫あしを右左によらすあげ候、さて順逆に急の足をふむ時みだるゝ、又大夫快して足をおる時より、みだるるもあり、またつくり物有時もあり、なき時もあり、真草行によるべし、つばおりの小袖のうへにこし帯する事あり、習ひ口傳あり、

〔花傳書<sup>四</sup>〕一舞は五段にさだむ、ざしきにては可然候、昔は三段に是をさだむ、當代あまりみじかきとて、五段にこれをさだめ、五七五七とて五せつの舞なり、是を九つにわけて九十のはやしともいへり、九つといへば序に序破急あり、破に序破急あり、急に序破急あり、如此なれば九つなり、かやうにくづして打べし、たゞきのふはうすき四方のもみぢばと、定家のくちすさび給ふごとく、これを九品の淨土にかたどりて、菩薩の舞あそびたまふ事、五節とて五段也、

〔音曲玉淵集<sup>五</sup>〕一舞 眞ノ序 序ノ舞 中ノ舞 男舞 神舞○中

一 つれの舞は三段なり

一 かつこ 神樂 がく カケリ地願落して飄出す、ハ、いづれものらす、

一 はたらき 太鼓事也、打上ル、破の舞 打上て飄出す

〔音曲玉淵集<sup>四</sup>〕一物狂ひに數多の心有

第一 別れを慕ふ物狂 班女 せみ丸 名越の祓

第二 我と狂ひ出たる物狂 愚亂れ心實より狂ふ也 百万 すみだ川 櫻川

橋立 柏崎 敷地物狂

第三 姿計にて謀に狂ふ物狂 心中は狂はぬ也 三井寺 籠太鼓 花筐

第四 物の氣にて狂ふ物ぐるひ うき舟 歌占 鶏龍田 二人靜

第五 執心の物ぐるひ 松風 卒都婆小町

さをまなぶ仕舞、げんざいの我身の仕舞、こゝろもちちがふべし、かやうの事こまかなるさたり、よく口傳すべし。

一海士の玉の段、うとふのきり、狂言にもどきて舞事あり、か様のたぐひおほし能する人の心がけに、さやうの狂言に自然似たる所のなきやうに、たしなむべし。

一鬼能ひやうしの事、いかにも身をゆりかけ、あら／＼とつよくふむべし。

一舞のうち下手のはやしにても、まづまりすぎは、其時の舞やうの事、段を略してはやくうたひ出すべし、さき立候はやしを俄におさへ候へば、位ちがひたちまち猶々はやしにむらいでき、わけもなき物になり候也、返々さやうのとき舞をみじかく留る事ならひ也、惣別位能ともあまりのらぬ囃は、はやくとめたるが尤に候。

一鬼かたの事色々あり、現在の鬼めいどの鬼、女の鬼、怨霊の鬼とて、人などの怨念にて鬼になりたるあり、其外まやたいてんぐ、是等色々ちがふべし、りきたう、さいたうの位は、いづれへもわたるべし。

一ゆや、野の宮、其外車にのるのふ、左のあしより、同じく馬に乗る、左の方より、足は右より。

一三輪の中入の後、みかげあらたにみへたまふにて、大夫作り物の中より出て、ぐりさしの間たちて居舞本也、曲舞にするもあり、又つくり物の中に其まゝ、こしをかけて居、みかげあらたに見へ給ふにて、まくをとらせ、ぐりさしのあひだこしをかけてゐ、もすそにこれをとちつけての仕舞、腰かけながらありて、跡をひかへて、またひゆくの時立より舞也、これは跡をひかへ、またひゆくといふ儀に合せて、おもしろき心もちなり、曲舞のはじめより舞候ても、別におもしろき仕舞もなく候へば、舞候事辛勞にて面白は候はで、いらざる事にて候か。○中略

一狸々のみだれ三つあり、真草行也、眞の亂れは少々、の功にてはなりがたきことなり、ひざさ、

一佛などの能我身を佛と思ふべし、いかにも心を殊勝にもちて、けだかくいづべし、  
一幽霊、我身を幽霊と思ふべし、いかにも心よはくともつてよし、

右それくの能心もち、大方如此、この心持なく候へば、能にそれくのいきほひなし、右心持  
肝要也、此外何の能も是を以分別あるべし、あはれなる所は、心をあはれにもち、物すごき處は  
心をすごくもち、いさむ所はいさめ、夫々の心もちかようなり、

一陰の能心もちの事おもてを陰に、うらを陽に心得べし、左様になく候へば、能しめりすぎ候也、  
一陽の能の心持の事おもてを陽に、うらを陰にあてべし、左様になく候へば、能つよみすぎつや  
なく候により、右の心得をまじへ、陰陽和合とこれをいふ、但能によるべし、陰の陰陽の陽と舞も  
あり、水無瀬定家の後、まつのかみ、幽霊のかたなどは、陰の陰なり、又もみちがり、羅城門な  
どは、陽の陽也、かやうの事をもつて、此類の能の位分別有べし、

〔花傳書〕<sup>五</sup>一いづれの仕舞にも、其文句にてするは、文句にあはぬ物なり、字二つ三つほどまへに  
すれば、本のもんくの時仕舞あふもの也、なくときも二字三字ほどまへになき候へば、なくとい  
ふ目に、手あたる物なり、なくとうたひにいふ時、目に手をあてなき候へば、文句すぎてめに手あ  
たるものなり、月を見て花をみてといふ時も、其字にあたりみれば、跡を見る也、字二つ三つまへ  
かどみては、よきころにうたひにあひ候物なり、見ならひなり、秘事也、

一女能に拍子をふむ事、たかくふまぬ物也、何の能も拍子はきびすにてふむ也、わきのふ、其分な  
り、こしよりうへのうごき候はぬやうに、身なりのくづれ候はぬ様にふむべし、搥身をゆりかけ  
あらくなどふむこと、女に似合す候、これ第一きらふなり、心得べし、

〔花傳書〕<sup>六</sup>一かげの仕舞、面の仕舞といふ事あり、かげの仕舞とは、いにしへのうはさを聞及び、其  
人のまねをする仕舞の事なり、面の仕舞と申は、わが身の事をわれとする仕舞の事、ひとのうは

歌人意 冬信公作

卷第八

習三讀物

勸進帳 信光作

起請文 長後作

願書

作者未詳

都合八十五曲

〔獨吟〕隱岐院

御出家の後はかくても鳥羽殿にわたらせ給ふべきやらんと御心身おぼし召るゝ所に、時氏又参じて、隠岐の國へ遷し奉る、<sup>クセ</sup>御供には男女わづか五人なり、前後の警衛もなく、百官の扈從もなし、たゞ庶人の旅に異ならず、道すがらの御有様申もゆゝしかりけり、さても此島に渡らせ給ひて、あまの郡かりたの郷と云所に御座を構へたりければ、只蜚人の栖に異ならず、昔は蟠洞、紫山の内にして春秋を送りむかへて樂み盡る事なし、今は菅屋の庇、蘆垣の月洩風もたまらねば、晝もつらし夜もうし、女御更衣の侍らふ所もなく、月卿雲客の拜趨もなし、只懷舊の御涙にまどろませ、たまふ夜半もなければ、なみ只こゝもとに立來るこゝちして須磨の浦のむかしまで、おぼしめしいださる、

舞曲  
舞法

〔花傳書<sup>六</sup>〕よろづの能の心もちの事

一 神能、心持出候て出る時、我身を神と思ふべし、いかにもけだかくもつべし、

一 鬼、わが身を鬼とおもふべし、いかにもいかれるこゝろをもちいづる事ならひ也、

一 修羅のこゝろもち、まくをあげ候とき、いくさばへ出る時のこゝろもち同前、

一女、わが身を女房とおもふべし、おびなどをもゆるくとして、こゝろをもちかにもまづかにいで候へば、女體によしあるものなり、



八雲 作者未詳

上宮太子

作者未詳

反魂香

元清作

砥並山

作者未詳

俱梨伽羅落 作者未詳

笠取

作者未詳

卷第四

美人摘 宮増作

妻戸

宮増作

當願幕頭

作者未詳

鳥羽殿

元清作

隱岐院 元清作

星

作者未詳

由良漢

作者未詳

佐夜中山

作者未詳

更科 作者未詳

横山

元清作

博多物狂

作者未詳

五輪碎

作者未詳

卷第五

西國下 玉林作

東國下

玉林作

泊瀬六代

元清作

卷第六

生田川、元清作

藥水

元清作

外濱風

元清作

法藥

貞信作

松竹 作者未詳

葛袴

作者未詳

浦下都

作者未詳

照日宮

清次作

雪山 作者未詳

寂光院

元清作

飛火

元清作

橋柱

元清作

自然物狂 清次作

賢女鏡

作者未詳

卷第七

青雲 作者未詳

三元

作者未詳

人日

同

桃花節

同

上巳 同

三月盡

同

朱夏

同

更衣

同

泛浦節 同

端午

同

夏枕

同

素秋

同

羅綺節 同

乞巧夕

同

星夕

同

中秋節

同

三五夕 同

陽數節

同

重陽

同

九月十三夜

同

九月盡 同

玄冬

同

初雪

同

歲暮

同

御裳澤 金

吉野 金

曙 金

歌占 金

母衣 金、喜、

菊水 金

山家秋 金

基 金

玉嶋 寶

卒都波流 寶、剛、

須麻源氏 寶、剛、

兵揃 剛、寶、

那須 剛

長谷 剛

教訓 剛

身延 剛

落葉 剛

弱法師 剛

高野物狂 剛

蘇武 喜

六元 喜

雪月花 寶、喜、

土車 喜

徒然 喜

當願幕當 喜

現在經政 喜

三曲

切瀨六代 喜、寶、

東國下 剛、金、寶、

西國下 剛、喜、

三讀物

木曾願書 剛、喜、寶、

起證文 剛、喜、

勸進帳 剛、金、寶、

〔獨吟八十五曲目錄〕卷第一

不盡 金村作

豐宴

家持作

敏馬浦

福麻呂作

芳野

赤人作

祭神 大伴坂上耶女作

好可來

憶真作

所聞多福

能登歌

深江石

憶真作

香菓 家持作

卷第二

玉取 作者未詳

近江八景

作者未詳

和國

作者未詳

四季

作者未詳

鼓瀧 元清作

香椎

作者未詳

一字題

作者未詳

眞方

元清作

蛙 作者未詳

卷第三

重盛 作者未詳

兵揃

作者未詳

經山寺

作者未詳

島廻

作者未詳

〔塵塚談〕<sup>下</sup>嫁娶の節祝言に小謠の事我等○小川 若年の頃○實 迄は庶人町家の婚禮に親族至事の時には必ず一座の者小謠を誦ふ事定式にて有けり近歲○文 小謠の沙汰絶てなし田舎にはこれ有事もあらんや是等の故にや其頃の小童の手習師匠は稽古終には小童に謠を教ゆる事一統に有しが今は謠を教ゆる稽古所はなき様子なり

〔祝言小謠集〕高砂

四海なみまづかにてくにもおさまるときつかせゑだをならさぬみよなれやあいにおひの松こそめでたけれ實やあふぎてもこともおろかやかゝるよにすめるたみとてゆたかなるきみがめぐみぞありがたききみのめぐみぞありがたき

猩々

よもつきじよろづよまでのたけのはのさけくめどもつきずのめどもかはらぬあきのよのかづきかげもかたぶく入江にかれたつあしもとはよろよろとよはりふしたるまぐらのゆめのさむるとおもへばいづみはそまゝつきせぬ宿こそめでたけれ

〔音曲玉潤集〕<sup>四</sup>一總じて謠物の上に吟といふ有○中 一人うたふを獨吟といひ○下

〔謠諸流名寄〕獨吟曲

玉取 親(親世)金(金)喜(喜)多

教瀧 親金

經山寺 親喜

松浦物狂 親喜

笠取 親

横山 親喜

近江八景 親喜

一字題 親金

阿古屋松 親剛

博多物狂 親剛

美人揃 親喜

太刀堀 親喜

和國 親

實方 親喜

上宮太子 親喜

鳥飛川 親喜

隠岐院 親喜

淡路 親金

四季 親

内府 親

返魂香 親

更科 親

由良物狂 親喜

富士山 金

獨吟

又此比は常の如く引居ずに渡し老せぬとつくる也。又曰、初手の諷序より謠出さず、所は高砂のと諷出さば、尾上の松も年ふりてト二くさり謠はせ、老の波と付べし、二番めよりは常の如く付る、扮婚姻養子等の祝儀、乗船などの門出には、うたひ返さぬ作法也。又羽衣、ゆやの諷は始終歸り度心を持故、二番ともに嫌、三輪の曲舞も忌也。常の旅の首途には、熊と諷返し、きりにも、養老のキリなど諷ふべし、余は是にて辨へ、總じて其場のさし合を考へ、避るをば功者といふ。

觀世宗雪新宅の能に杜若有しに、煙といふをさけて、信濃なる淺間のたけにたつくものト諷ひしと也。

進藤以三青蓮院御門跡にて、景清の諷有しに、青門の唱へをさけて、柴門ひとり閉てト諷ひしと也。

〔備前老人物語〕大閑秀吉公御陣の時、御馬廻り衆の陣小屋を見廻り給ふに、小謠うたひ小鼓うつ所あり、たちよらせ給ひ、垣の隙よりうかひ給ふに、内に武者三人あり、一人は具足櫃に腰かけて鼓をうつ、一人は扇をもちて謠うたふ、いま一人は盃をひかへ居たりける、おの／＼皆甲冑を帯したり、これを見給ひて、御氣色やあしからんと、御供の人々いぶかしくおもひしに、さはなくて、あれ見よや、退屈せぬやつばらかなとて、笑をふくませ給ひて、それ／＼あのやつばらに酒とらせよ、さのみくらゐ酔などせぬよふにいへとのたまひて、打過給ひしと也。

〔大猷院殿御實紀〕五十四寛永二十年七月十一日、若君より生御魂の饗奉り給ふ、よて井伊掃部頭

直孝○中略朽木民部少輔植綱はじめ、近習外様の物頭諸有司饗宴をたまはる、猿樂等小謠を奏す、

〔八水隨筆〕故進藤權右衛門親の忌日に、墓に詣り、毎度加茂の小諷をうたひしとなり、年の矢のはやくも過る光陰、おしみてかへらぬは、もとのふたへせぬぞ、たむけなるべし、ながれはよもつきじ。



とは明和の比、觀世元章（普觀院）文句節拍子總改正あり、梅と云新謠の出來しも此時也、出雲寺と云書林にて開板出來たり、是を新改正と云、

一卯。月。本。と云謠本は、謠曲家の尊む本也、今の山本板の本は其臨寫也、卯月本と云は觀世大夫黑雪齋、間入道の自筆の板本也、寛永六年卯月と奥書有故、斯く稱ふる也、黑雪齋とは恐多も、又無き堪能のものなりと、台命有て黒き雪の字を號給ひしより斯申となり、黑雪齋は藝道堪能のみならず、手跡は嵯峨様の能書也、

〔堺鑑下〕車屋道説

今春大大夫ノ弟子也、當津ニ來テ車町中濱ニ住シテ、家流ノ中ヨリ一流撰出シテ聲ヲ吟ジ、自筆ニシテ板ニ彫行車屋。本ト世ニ用ハ是也、元ハ七十五番ナルヲ、再加増シテ百番トナス、

〔老人雜話上〕太閤○豐臣秀吉氏郷を會津に封じて後出仕す、太閤他事を問はずして云、汝手を能く書けり、謠の本を一番書て呉よと、硯紙を持來れとのたまふとぞ、君臣心安き間がらなり、

〔花傳書三〕一四月朔日おなじく卯月八日などの謠、賀茂の小うたひ尤に候、

一小謠のうたひ様、あゆみをはこぶ宮寺のよりうたひ出し、松たかきとうたふてよし、其まゝ、松高きとは、まきしやうの時にはうたはぬなり、いづれの小うたひも同前、

〔音曲玉淵集四〕一小謠の事、先指寄て諷ふに大事の物なり、四季其場の相應を考へ、先祝言を諷ふべし、機をはりたゞしく軽く吟つよく、物を略せざるが祝言なり、

音曲はまづ祝言をもつはらにさては遊玄れんば哀傷

扱小諷は序より謠ふべし、高砂ならば音信はト下歌の所なり、いづれの諷にも序の所有、尤序より諷ふ時は、上歌所は高砂のくゝと返し謠ふ物也、事たらぬは無祝言なり、二つ目よりは返には及ばず、但外よりつけ候人あらば、上歌長生の家に社と引居て返すやうに謠ひかけ渡しても吉、

ニシタリ、サレド其書初ノ程ハ、ヨロシケレド、末ニナリテハ、入リミダレタルモノモアリトゾ、タ  
トヘバ、一冊ノ第一ハワキ能、二番ハカケリ<sup>カ</sup>ハタラキ<sup>カ</sup>、三番ハ上ノ舞<sup>カ</sup>中ノ舞<sup>カ</sup>、四番ハハヤ  
マヒ<sup>カ</sup>神樂<sup>カ</sup>、五番ハ祝言<sup>ル</sup>、<sup>牛</sup>分ス或ハ一番全アリテ、附祝言トテ、別ニ祝言ヲ付クルモノアリ、但  
シウタヒバカリ也、

〔翁草六十四〕謡曲新改正之事

右謡本直段付

上本 難子摺 角包

九謡目録 帙入 貳冊 内百番 百番 外百番 百番 習十番 帙入十冊 獨吟 八十五曲、帙入、九冊

以上 金物付桐大宮ニ入 代金 拾六兩

中本 美濃紙摺 角包

九謡目録 帙入 貳冊 代拾匁 内外貳百番 代金四兩拾貳匁五分

習十番 帙入十冊 代金三分

獨吟 八十五曲 帙入九冊 代金貳分貳朱

以上 金物付桐宮入 代金五兩三分

次本 諸紙摺

内百番 廿冊 代金壹兩壹分 外百番 同 舞臺圖 匁入 三冊 代金壹分

一番本 一冊 壹匁 二百番入 箱代五匁

右出雲寺和泉方ニ在

右書付、明和二酉年冬、諸國門弟ニ家元ヨリ到來、

〔隨一小謠繪抄〕一觀世流の謠に中改正とは觀世周雪退隱の後上京して改られし直し也、新改正

此抄に筆を染ること四十餘年、多くの秘事、家々の記録等を持ちあつめ、まらざるは學者に尋ね  
とひて、以てやうやく首尾せるものか云々、略中 寛保元年辛酉立秋日、空華庵忍鏡七十二翁誌之、

略中

奈良土産

三卷

此書今春觀世兩流の謠本に、文句の異なるものをことほり、百番の謠に難注をくはへて、文句の  
可否を評す、略下

謠曲本

〔長春隨筆〕一世に謠曲の本、近衛流を以書るを嵯峨本となづく、是は角倉與市本氏吉田を以近衛三藐院殿信尹公御門弟にて甚能書也、嵯峨に隱居して筆硯を友とす、然るに信尹公御子從一位太政大臣信尋公院皇子なり、成後は應山公と號す、近衛流一轉して能書にておはします、御慰に謠本一番御染筆ありて與市に下し給ふ、此謠は山姥也、北とも、松風共いへり、與市是につきて百番の謠本を書て、觀世左近大夫にあたふ、觀世是を家寶として、右の本を寫取、家傳の章をさし、板行として庫中に藏む、今觀世門弟となるものには、右の板本を一部ヅ、是を附屬す、表紙は黒く布目を打、うづまきの水を高く打出したる表紙何れも同じ箱入にして、是を與ふ名付て嵯峨本といふ、元來與市は近衛流を一轉して嵯峨流といへり、右の板本を又寫し、少し番組を入替て類本と號して、書肆に是を商ふなり、

〔難波江〕三番曳

謠曲有數種、光悦本一番一册ナリ、コレ最第一ノ、元祿板插架本、外百番、寶永板編架本、内百番

正徳板六丙申即享保元十八癸丑、享保板寛政板トハ、日ホド、天保板文句カハリアリ、

能ハ先五番ヲ一日ノ定メトスルナリ、公邊ハイツモ五番ナリ、狂言二番アリ、謠曲ノ書モ、五番ヲ一冊トスル、コノ意アルナルベシ、其五番モ彼ト此ト組合セテ、一日ニ興行スルニ便リヨキヤウ

さうかやれ。

○面白やなれても須磨の夕まくれあまのよび聲かすかにて、沖にちゐさき漁舟のかげかすかなる月の影、

□難にいはいく、幽といふ詞、此まもなき所にてふたつ出せる事つたなし、

△返答、貳十ありても三十出してもくるしからぬ事はじめのごとし、たゞし上のかすかは否也、あまの呼聲ほそくとをくきこゆる貌、下の幽は闇也、微也、隠也、と訓じて、秋ながら月も心ばそく見らるゝ風景なり、下の句にて、あら心すこのよすがらといふにて、猶おもしろし、何もあらの心からは、おもしろい事を思ふられまいよの、

○今春に曰、娑婆にての狂亂を猶わすれ給はぬぞや、

□難にいはいく、狂亂は耳にたてり、觀世に妄執といふ、此かたよし、

△返答、耳にたつれば蜚のなくも耳にたつ物也、妄執よりおもひこがれての狂亂なれば、一段ふかき文句尤情よし、おもしろし、又觀世のかたも誰がわるいと申ぞ、おもしろやるがくどし、

【群書一覽<sup>五</sup>註】謠抄

二十卷

百番の謠の注なり、作者つまびらかならず、後に古抄あるひは舊抄と稱す、<sup>○中</sup>

諷増抄

十二卷

加藤盤齋<sup>○中</sup>

法音抄

五卷

惠空和尙

此書二十二番の謠を注して、所々舊抄のあやまりをことはれり、<sup>○中</sup> 正徳四年五月刻、

謠曲拾葉抄

二十卷

惠南

卷首凡例に云、此謠曲拾葉抄は、花咲三世の老師一囊軒犬井貞恕撰しをかれしを、予も時々筆をくはへしを、老師の死期に、此抄を予に傳へて、猶ふたゝび其功をとぐべきよし、堅く約しける、予



を弔ふ相伴に、主君をもとぶらはせむとおもふぞや、義仲面目次第もなき事也、

〔奈良土産返答〕夫謳歌は、讃佛乘の因轉法輪の縁として、知識古徳の作おほし、まことに文質奇として妙なる物なり、まかるに此比奈良土産といへる書を見るに、百番の失をあげ且難言をもつてなじり嘲事數箇條におよぶ、是又何人の作かまらず、みな管見のいたす所にして、ひとつも其理にあたらず、およそ諸はみな寓言體にして、鯉鵬の翔たぐひおほし、かれも寓言をまらば、ひとつも不審はなさぬ道也、もしまた偏に實と見ば、また下愚のいたり也、此兩條をもつてあきらめんにすまざるなし、まかるを梓にちりばめて、よしなく孔方兄をつゐやすは何ぞや、予非家にありながら、略先師の大旨を探り得て、かれが難破を會釋する事まかり、猶堪能の人の口決あらん物よ、時や貞享いつ、戊辰の秋八月、洛陽中川の旅店に筆を染、

〔奈良土産返答〕松風

○今春に曰、是なる磯邊に一木の松の候に、札を打短冊をかけられて候、いはれのなき事は候まじ、尋ねばやとおもひ候、

□難<sup>○奈</sup>真<sup>○笥</sup>にいはいく、木の松に札をうつ程ならば、松風村雨兄弟のゑるしとまれの事はあらじ、然ば、いはれのなきことは候まじといふ詞、無益の事なり、

△返答、其札に松風村雨兄弟のゑるしと、たしかに書てありしを見ておもしろや、了簡か、書てある程ならば、尋ねばやとはいはぬ筈なり、書てなくばたづねばやといはひでは何とせう、さいせん木曾殿とぶらひに上りたる僧とはちがひ、西國あんぎやの僧なれば、何のおもひがけのないはづ尤なり、追付いはれを聞て、扱は此松はいにしへ松風村雨とうたひ出したるなり、ただし今も松に、たんざくをさへかくれば、みな松風村雨がゑるしか、田舎には新禰あたごの札のふるきをばおさむるといひて、松にくゝりつけて置が、それもみな二人の女のゑるしと申

道行ノ内末はるゝの都路をといひて、いさ白雲のはるゝと同じ詞は何事ぞや、をとづれば松にことゝふうら風の落葉衣とあり、同じくは浦風の浦風に落葉衣といひたき處也、住吉と申は今此御代に住給ふ延喜の御事、是は傳授事なれども、先おもてむきの道理きこえにくし、ノリ陽春の徳をそなへて、南枝花はじめて、ての字つゞきてあし、徳をそなへてのての字なくもがなと存る、中入いつまでも君が代に住吉に先行て、にノ字のてにはかさなりたり、上のは聖代なれば、君が代に住よきといひかけたればさもあるべし、下のかしましければ、住よしとしてまづゆきと作りたれば、よろしかるべきに、後シテ出ハすゞしめ給へみやづこ達、是までは神の宜ふ詞ならずや、明神の御詞にすゞしめ給へ宮づこ達とは、御いんぎんの至りと存る、

### 兼平

後シテ觀世曰、をろかと心得給ふ物かな、御身是まで來給ふも、我なき跡をとはん爲の御心ざしに、てましますや、兼平是までまいりたり、此僧信濃にありて、木曾殿討死せられたるを聞いたはしくおもひ、義仲をとぶらはんとて、はるゝ江州へ上りたり、兼平をとはん爲にはのぼらず、木曾殿をとぶらふならば、兼平も家臣なれば、次手に廻向などはすべけれど、先此僧信州より思ひたつは、義仲とぶらひの爲なるに、此詞にては兼平とぶらはんために、わざゝ上りたる人といふ詞也、さてもゝまんがちなる兼平哉、主君の弔に上りたる僧をまよはして、むりに我爲よといふは、不忠の侍とこそ思へ、今春日誰とはなどやうたてしやうたてしや耳にたてり、わがなき跡をとはん爲の、今觀世雨流共と同じ、所はこゝぞ我よりも、主君の御跡を先とぶらひてたび給へ、所は爰ぞとをしへねども、義仲は江州栗津が原にて果たまひたるとまりて、信州より上りたり、いらざるをしへ事かな、はじめ無調法をいひたるゆへ、爰にて弔の時宜をするか、但我

## 〔奈良簡〕標題

貞享四年惠風のはじめ、ならの葉の名におふ薪の能を見にまかりしに、さしも名ある人々の立  
 まふ袖はいふにやをよぶ、謠をきくに、ふしひやうしのこまやかにと、のひたるも、外には又な  
 き事なるべし、されどもむかしより作り誤れる所々、胸にこたへてつたなし、夫謠は代々のもて  
 あそびとして、主上大樹の御耳にもちかく聞ゆる物なるに、いかでかばかりは愚に仕立たりけ  
 ん、いといぶかしかりける、なき事をありしやうに作れるはくるしからねど、或は前後相違の詞、  
 又は句つゞきの品あしきは、なげかしき事にあらずや、諷は往年より度々に作りかさねて、其作  
 者あまたなりとは聞つれども、此諷は此人の作とまらぬゆへに、其心はかりがたし、尤始終難  
 き諷もあれど、それは稀にして難する諷はおほし、年比此事の心にかゝれば、旅宿のつれづれ、か  
 りの枕の老の寐覺に思ひよりて筆にまかす、此外に猶もあるべけれど、遽き謠は思ひも出され  
 ず、先此まゝにてやみぬ、かくもどかしけれど、いにしへ作りはじめたる時、不吟味愚味のいたす  
 處なれば、あやまりありとて、當時うたふ人の科にはあらず、其昔證をさしふしを極め、うたひ來  
 りて、家々の秘事するゝの相傳となりたれば、今更一口にてもなをすべきやうなし、狂言も  
 亦々同じ、然らばいらざる戲言なれど、人ごとといひて茶のみたるこそ、奈良茶のみたるにてはあ  
 れ、都て國榮へ民ゆたかにして、目出度世の聲をまらするは、亂舞にしく事あらじ、唯耳目をよろ  
 こばしむるのみこそ、かくおさまれる御代の賑ひなれば、なにか難波のよしあしもむつかし、聲  
 おかしくて拍子とりまふ、一さしの扇にも、千秋万歳のよろこびをたゝみこめたる世にしあれ  
 ば、此一冊を袖にして、京の子共の苞苴にす、物まれる人に見すべからず、〇中略

丁卯〇貞享 春二月

〔奈良簡〕上 高砂

無名野夫攬筆南京今御門旅店

道よりゑるし申すべし、俊寛の注に、山中檢校申す、葛城の注に、紹巴申すなど、あれば、その家々の説を集められしものと思はる、また詞の中にむかしより典據のつまびらかならざることあり、そは富士太鼓の注に、まうこうが手を出だし、はんらうが涙にても、此故事往古よりいまだかんがへず、二人靜の注に、もろこしのさくく自昔此故事知れざるなり、自然居士の注に、然れば、ふねの船の字を公にす、むと書きたり、船の字をわけて、舟の字をす、むと讀みたる訓見えす、近くは建仁寺の月舟へ、相國寺の惟高のとはれたれども、つひに見ぬとあつたぞ、出處不審、これらをもておもふに、梅村載筆に、秀次關白の時、謠百十番を注せられしに、五山の僧衆相國寺慈照院に聚り、故事ども其家々へ尋ねられたり、知れぬ事ども、多かりといふに、全く符合せり、猶載筆に云、遊子伯陽が月を愛せしこと、唐土のさくくは花に身を捨てたること、まうこうが手を出し、はんらうが涙のこと、船の字を公にす、むと書きたること、なんどの類、げにも不審なること、いもなり、俗間に古今和歌集の注とて、やくたいもなき假名がきの物あり、遊子伯陽は史記にありと云ひ、柞國は後漢書にありと云ふ、みな大なる僞なり、それをすぐに謠に作りたるなり、此時元信と云ふ僧、足利より上洛して、大佛の邊にゐたりしが、詩の却風柏舟を柏にす、むとよめり、舟は羞也と辨毛披意といふ書にありとて、片紙に記して言上す、諸人その本を見んといふといへども、秘して出ださず、博陸より急に詰問せられければ、件の本を出だす、開き見れば、唐本の傍に舟羞也の三字を細字に、日本にて書き入れたるなり、元信面目を失へり、又小野頼風が女郎花の事、深草四位少將が小野に通ふことも、謠に作れり、この兩人は公卿補任にもなしといへりと、建仁寺の雄長老語られき、この長老は謠の註作るときの棟梁なりと見えたり、この條は了阿大徳のかんがへなり、予<sup>美成</sup>○山崎がいとわか、りし時、示されしをおもひいで、こゝにゑるす、これによれば、謠曲に解しがたき詞のまゝあるも、ことわりとおばえたり、



可有之由被申了、天龍寺彰西寺者依所勢不出了、今日沙汰之本、高砂、うのはみわ、忠のり、西行櫻、楊貴妃、うき船、關寺小町、江口、さねもり、源氏供養、以上十一番也、四月四日丁未、相國寺慈照院へ罷向了、各來候昨日の如し、朝澄有之、次ニモチキ酒有之、每日有職方樂方筆とり了、神道方ノ冊子令、清書午刻ニ相終了、次各被歸候道もり、くろづかにしき、ていか、百萬等也、以上此間分百番也、有職方注之義者、子可仕之由、殿下ヨリ被仰出候由、鳥養道断申間同心了、冊子トリテ歸候、五月一日癸酉、殿下より諸之本注可懸御目由有之、而相國寺保長老ニ遣候而、道断トリテ直ニ可懸御目由有之同心了、

## 〔世事百談〕謠抄の勘文

謠曲の抄物に、謠古鈔と稱する注釋あり、その書の時代は文祿年間に撰みしものとおもはれたり、第一なる熊谷の注に、百聯抄解のことをいはんとて、この本は嘉靖四十二癸亥年あつめし書なり、文祿四年乙未年までは、三十三年なりとあり、又芭蕉杜若等にも、みな同じおもむきに載せたり、おもふにこの謠鈔の撰みは、一人の手になりたるものにはあらずと見ゆ、その證は橘の注に、一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛云々、此文を山門實地坊證眞は、中陰經の文とは引きたれども、今彼經を考ふるに、なしとありて、遊行柳の注に、中陰經云、草木國土、悉皆成佛云々、西行櫻の注に、草木國土、悉皆成佛、是中陰經の文なり云々、當麻の注に、中陰經云、一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛と、説きたまふなど、あるを見れば、後の三條は實地坊の説、はじめの一條は他人の意なることあるし、これによりておもふに、この鈔は諸家の説を集録したるものと見えて、猶三輪の注に、來歴は神道より記し、いださるべきものなり、阿漕の注に、贊のあし、吉田殿へ御尋ねあるべし、また兼平の注に、我たつそま、叡山のことなり、委しきことは天台宗よりあるさるべし、小鹽の注に、神もまじはる座の世、和光同座のこと、吉田殿注あるべし、蟻通の注に、和光此木に神

家ノ長トシテ、如是ハ器ノ事ニ御座候條、恩免ヲ奉冀ノ由固辭シケルニ、仍然ル上ハ新改ヲ止ラ  
 レ、古來ノ通ヲ以相續仕ベキ旨、重テ公命有テ織部其家ヲ嗣グ、嗚呼織部ガ言宜ナル哉、須ク始祖  
 ノ意ニ協フベシ、凡謳ハ自中古公武ニ專ラ翫セラル、狂言ナレバ、強テ事實ヲ正スニ及バザル  
 歟、且ツ言葉ノ巧拙雅俗トモニ、唯古來ノ儘ニ用ルコソ、其世ノ風俗遺リテ殊勝ナルニ、夫ヲ改ル  
 トキハ、雅モ却テ不雅ト成リ、自然ト文句音曲ニ不乗、音節ノ幽玄ヲ喪フニ似リ、其上當御代ヲ憚  
 リテ、假初ノ言手爾葉ニ氣ヲ配リ、謳替ル可可笑ノ甚也、譬バ急ギ候程ニノ類、悉除之、是ハ五十宮  
 樣御事<sup>查樣</sup>ヲ憚ル由也、五十ト急ハ何ゾヤ、不及評論事也、保ル己ガ拙サニハ心モ付ズ、古ノ唱句ニ  
 モ拙キ事多シト雖、斯ク迄ノ事ハ無リシヲ、聊事迄改スル心ノ程コソオカシケレ、謳ハ古ヨリ文  
 句不改ヲ賞シ、今樣ノ淨瑠里小歌杯ハ新作ヲ興ス、是雅俗ヲ分ツ所以也、<sup>實人ノ御前或ハ婚禮新</sup>  
 謳替ルコトハ、古ヨリ有ル習也、ソレハ其坐切ノ事ニテ、實ニ文句ヲ改正スルニ非、既ニ御當家ニ至松  
 ノ事ヲ謳替ル例是也、夫スラ文句不<sup>レ</sup>及、改正今度ニ於テハ文句悉ク改正スルニ仍、本文ニ難スル  
 處、夫ニ新謳ヲ以セバ、豈淨ルリニ異ナランヤ、其上今度ノ改ヲ見ルニ、謳ヲ評セシ物ニ、奈良土產  
 ト云本有リ、大旨夫ヲ本據ニシタル樣ニ見エテ、最淺聞シ、<sup>一説今度ノ改正ハ、左近ガ意計、他坐ヨ</sup>  
 リノ謗實理リトゾ見エシ、而ルヲ絨部再ビ古風エ戻セシ事大ニ可ナル哉、

〔言繼卿記〕文祿四年三月廿四日丁酉殿下<sup>○豐臣</sup>へ參候北ノ丸ニ渡御由云々、則御對顏、謳之。本。百。

番。注。□□可仕由有之、予にも有職分可注之由直被仰了、其外五山衆歌道者其道々相催可申了、相  
 國寺鹿苑院□長老へ被仰了、明後日可集會候御催云々、廿六日己亥、殿下ヨリ依仰謳之本注可  
 仕之由有之間、相國寺鹿苑院□長老ニテ各來集、予南禪寺三長老、相國寺兌長老、泉長老、東福寺哲  
 長老、澄西堂、建仁寺雄長老、稽西堂等也、又殿下之内、鳥養道斷謳衆四人等也、座敷替テ知恩寺長老  
 日蓮□久遠院本音坊要法寺世雄坊等也、少々紹巴へ申遣了等也、種々穿鑿也、早朝ヨリ罷向了、予  
 飯後罷向了、喰有之、謳有之、十番目ニ□□取了、高砂一番相濟清書之中書出來了、保長老殿下持參

祖の志を繼ざるに忍びず、中絶せるをおこし、説れるを正、又いまになす所の能といへども、古意にかなはざるは略き、中絶せる能及未爲能も、古意にあへるはくはへ、將子孫童形の間より、はやく秘事をえらしめんため、且先祖みづから能を作る例にならひ、梅の能を作くはへ、總て二百有十番とす、其中一番の習なるものを、分て十番とし、その餘見聞に近きを内百番とし、遠ものを外百番とし、謠本を著はせり、然れども猶訛あらん事を恐る、子孫相繼て改正せば、孝行是にしかり。

明和二乙酉年四月五日

親世左近素元章

〔翁草六十四〕謠曲新改正之事

明和ノ頃、親世左近大夫元章事、始親阿彌清時メク餘リ、元祖ヨリ傳リシ謠ノ文句ノ謬ヲ正シ、

且ツ言葉續ノ惡キヲ直シ、或ハ百番外百番行スルニ、山本長兵衛ヲ始、前ノ書林家ニテ謠ヲ行ニ百番ノ謠、周テ世ニ流布シテ、他方ハ世ニ不用ト雖、右ニ百三十番ト云モ、家元ヨリ定メタル數ニテモ、無テ唯通用ノ謠ヲ書林ノ方ハ世ニ不用ト雖、右ニ百三十番ト云モ、家元ヨリ定メ

ハ十一番也、委ト、古來定リシ中ノ謠ヲモ、古書ニ謠ノ字四疊ニテ各替ル、今春ハ誤、實生ハ謠、金剛ハハ典ニ記、ト、古來定リシ中ノ謠ヲモ、明、當流ハ謠ノ字ヲ用ユトアレ共、當世ハナシナベテ謠ノ

用字ヲ通、數番入替、又元章ガ作也トテ、梅ト云新謠ヲ組入、我家ノ事ヲ恣ニ改メ、万ヅ隨意ニ舉動ヲ

故ニ他流ヨリ誹謗之スル事喧シ、然レ共時ノ勢ヲ以公命也トテ、書林出雲寺和泉方ニテ新改ノ

正本ヲ開板サセ、古板ハ古流トテ自ラ不用様ニ、門流ヘ令レ知セケル、因茲侯家ヲ始歷々ノ面々、

偏ニ官板ノ思ヒヲ成シ、我モトヲシナベテ是ヲ調ラレケル程ニ、左近ハ俄ニ過分ノ德付テ

ゾ見エシ、夫而已ナラズ、一ト年江府ニ於一代能興行ノ折柄モ、公威ヲ借ツテ侯家ノ棧敷精羅ヲ

輝シ、諸家ヨリノ賜山ヲナシ勢ヒ猛ニ目醒シカリシガ、安永二年ニ身マカリ、其子三十郎ハ父ニ

先立テ早世シ、無嗣ニ仍左近ガ弟織部ニ本家相續仰付ラル、處ニ織部辭シテ申ケルハ、當流謳

ノ事、近年左近ヨリ申上、新改被仰付候處、儀生得氣、臆薄ク候故、新改ノ文句未鍛練ニ御座候、其

一体すぐに文句を繼柳はみどり花はくれないのいろ／＼としたまへるよし、さある事も候やと、答て曰、先啓の聖教目録に、柏崎等の諸數番を列て、存覺上人の作なりとす、さだめて考る所ありていふなんめり、相州國府津の眞樂寺に、蓮如上人の作なりとて、すなはち國府津といふ諸あり、親鸞聖人の舊跡にて、其寺より出板せり、いかにも其關山姥にひとしければ、人のいふにたがはざる事もあらん、

〔太閤記<sup>十六</sup>〕於大坂新諸御能之事

同<sup>三</sup>○<sup>年</sup>文<sup>錄</sup>三月十五日、大坂本丸に、おゐて、由已法橋<sup>揚州</sup>也、新作の諸、芳野の花見、高野參詣、明智、柴田、

北條、此五番金春八郎に仕舞を沙汰し候へと、兼て被仰付、其傳を受させ給ひ、御能を遊し、簾中がたへ見せ參らせられ候はんためとかや、

〔隨一小諸繪抄〕一門外不出の諸二番有、小原山<sup>岩井</sup>吉野川<sup>井上</sup>大相國近衛殿下<sup>内</sup>の御作に而、

右兩人へ被下置、由緒小縁ならぬ能也、安永年中の事なり、

改寫

〔改正諸曲草案〕故亞相田安源公<sup>宗武</sup>○嘗て諸曲譜本の謬誤多きを憂給ひて、侍臣岡部衛士<sup>眞淵</sup>に

命じて、悉く之を改竄せしめ給ひき、衛士我曾祖<sup>枝直</sup>考に詢りて、其訛舛を訂正し、勉て理順に詞

雅ならしむ、且新に梅枝一番を作て増加し、通計二百有十番となし、更て定本とす、茲に明和二年

乙酉四月端五觀世左近<sup>元章</sup>開雕して世に施行す、其本一時傳播せしかど、幾何もなく廢棄して、

當今は其舊に復し、一に俗譜に従へりとぞ、教坊の不文勝て痛歎すべけんや、○<sup>中</sup>天保乙未六月

加藤千年謹記、

〔二百拾番諸目録〕抑當流<sup>世</sup>○觀は觀阿彌に起りて世阿彌に成、音阿彌より傳へて三百年に越たり、

然れば其間中絶せる事あり、又訛れる所も不少、又世阿彌が比、能數甚多くして正すにいとまゐらず、依て能作書曲付書等を殘して、子孫に改正すべきを示せり、いま元章不肖なりといへ共、先



觀世彌次郎泰長俊信光嫡男、天文十三年死、五十三歲、月日未詳、法名心祐

外山又五郎吉廣金剛彌五郎 宮増

日吉四郎次郎安清後佐阿彌、長祿二戊寅八月四日死、七拾六歲

龜阿彌 與江元久 江波左衛門號五郎 内藤左衛門

福來 小田切能登

以上拾九人

井阿彌 竹田法印

〔猿樂傳記〕江口山姥は、一体の作といひ傳へ、卒都婆小町は高野山寶性院看快の作なりといへり、山本春帳の所作、謠作者附の書に云、謡は四座の大夫作りて、當座々々に能したる也能き人も作りたる也、世阿彌先祖作五十一番名目又六十一番あり、觀世小次郎三十二番、同彌次郎作二十五番、金春善行作十八番、金春善風作五番、宮増膳師作十番、三條西殿作四番、其外彼作、又は作者しらずも有、都合三百五拾番と有、各名目を顯はす、奥書に曰、右能本作者之事、依安東典厩御所望調遣也、觀世彌次郎長俊、連々直談之時、物語申趣所、注置如是、此上猶可被聞合者也、

于時、大永四年甲申孟夏上曆

吉田藏人兼將判

又一書に曰、謠の作の事、奈良土產に曰、如く、尤てにはのあしき處有れども、先づ常人の作るものにあらず、佛經の取やうなど、僧もよほど能き人の所作、案るに、其頃の活僧、歌人、連歌、貴人等、慰みに作れり、是を能大夫にあたへ、章を附させ、則其大夫の作分にしたる成べし、

〔山海里 六上〕謠

一猿樂の達人問て曰、謠は多く釋教にて作者は高僧方なりとて、山姥は連如上人と一体和尚との兩作なるよし、邪正一如と見る時は、色即是空其まゝにと一体のいへりければ、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もありと、連如の續たまへるを、

松蟲 元清作

放下僧

氏信作

張良

信光作

橋辨慶

安清作

泰山府君

元清作

忠信

元清作

明王鏡

信光作

大佛供養

作者未詳

小鍛冶

作者未詳

土蜘蛛

作者未詳

鐘馗

氏信作

羅城門

信光作

照君

氏信作

紅葉狩

信光作

松山鏡

作者未詳

谷行

氏信作

染川

作者未詳

大江山

宮増作

昌俊

長俊作

葛城天狗

長俊作

熊坂

氏信作

第六天

作者未詳

烏帽子折

宮増作

舍利

元清作

龍虎

信光作

檣天狗

作者未詳

國樑

元清作

蠅

信光作

合浦

作者未詳

玄上

金剛作

一角仙人

元安作

梅

元章作

習十番之部

卒都婆小町

清次作

道成寺

清次作

檜垣

元清作

戀重荷

元清作

砧

元清作

木賊

元清作

姨棄

元清作

石橋

元禮作

關寺小町

元清作

覺

元清作

都合二百十番

作者之人數

結崎治部

清次 本氏平、服部雅名、觀世丸、後三郎、落髮、號三觀阿彌

結崎左衛門

大夫 泰元 清次 嫡男、雅名、蘇若丸、後三郎、落髮、號三觀阿彌

金春式部

大夫 泰氏 信元 清、雙、若名、彌

結崎十郎

泰元 雅九 清、長、三、己卯十月、死、六十五歲、法名大圓

金春八郎

泰元 安林 法、禪、鳳

觀世小次郎

泰信 光親 世、三、丙子、綱、七月、死、八十八歲、餘、永

善界

印作田法  
元安作

白水良

元清作  
清次作

鞍馬天狗

宮增作  
元清作

當麻

元清作

野守

融

春日龍神

猩々

元清作

## 外百番之部

放生川

元清作

御裳瀧川

元清作

大社

長俊作

松尾

清次作

寢覺

作者未詳

淡路

清次作

板島

長俊作

富士山

元清作

逆鉢

宮增作

葛城鴨

元清作

嵐山

元安作

佐保山

元清作

繪馬

作者未詳

阿古屋松

元清作

磐船

作者未詳

東方朔

元安作

海藻刈

作者未詳

蟻通

元清作

金札

元清作

鶴龜

作者未詳

敦盛

元清作

碓潛

作者未詳

五條忠度

作者未詳

巴

信光作

龍梅

元清作

吉野靜

清次作

生田敦盛

元安作

妓王

作者未詳

知章

元清作

草子洗

清次作

空蟬

作者未詳

住吉詣

作者未詳

宮城野

作者未詳

大原御幸

元清作

三山

元清作

弄太鼓

元清作

佐用姫

元清作

鳥追船

金剛作

落葉

元清作

六月祓

安清作

藤

安清作

蟬麻呂

元清作

吉野天人

安清作

侍羅物狂

福來作

牽牛花

小田切  
龜登作

求塚

清次作

胡蝶

信光作

名取燭

元清作

雨月

氏信作

布留

元清作

道明寺

元清作

室君

作者未詳

輪藏

長俊作

接待

宮增作

枕慈童

作者未詳

景清

元清作

三笑

作者未詳

俊寛

元清作

丹後物狂

井阿彌作

鉢木

清次作

弱法師

元雅作

木曾

作者未詳

高野物狂

安清作

盛久

元雅作

墳風

元清作

七騎落

作者未詳

威陽宮

作者未詳

藤榮

作者未詳

右近	元清作	竹生島	氏信作	田村	元清作	通盛	井阿彌作
屋島	元清作	實盛	元清作	兼平	元清作	賴政	元清作
經政	元清作	朝長	元清作	清經，	元清作	忠度	元清作
項羽	元清作	船辨慶	信光作	軒端梅	元清作	佛原	元清作
夕顔	元清作	江口	氏信作	紫式部	氏信作	芭蕉	氏信作
采女	元清作	楊貴妃	氏信作	野宮	元清作	半菰	衛門左
井筒	元清作	千手	氏信作	玉葛	氏信作	熊野	元清作
浮舟	與江元 久作	班女	元清作	二人靜	元清作	花筐	清次作
松風	清次作	雲雀山	元清作	定家葛	元清作	梅枝	元清作
三輪	元清作	富士太鼓	元清作	龍田	氏信作	卷絹	清次作
西王母	元清作	小鹽	氏信作	羽衣	元清作	雲林院	元清作
燕子花	元清作	西行櫻	氏信作	誓願寺	元清作	六浦	安清作
葛城	元清作	遊行柳	信光作	百萬	清次作	小督	氏信作
櫻川	元清作	安宅	信光作	三井寺	元清作	花月	元清作
柏崎	江波左 衛門作	東岸居士	元清作	角田川	元雅作	自然居士	清次作
蘆刈	氏信作	邯鄲	元清作	天鼓	元清作	唐船	吉廣作
錦木	元清作	女郎花	龜阿彌作	船橋	元清作	鶴	清次作
通小町	元清作	鶴飼	江波左 衛門作	阿漕	元清作	山姥	氏信作
善知鳥	元清作	殺生石	安清作	藤戶	元清作	安達原	氏信作
大會	氏信作	葵上	氏信作	車僧	元清作	鐵輪	元清作



やうの心え也、又二きれにて入かはる能は、かきやすき也、其まゝする能は、目にははなれたる所をかくべし、是大事也、それがなければぬなりとしてわろし、松風むら雨などぞ、其まゝにて入かはりたる能成、うしとおもはぬ云すて、ひそとして有所也、かやうの所を、能々うかゝふべし、又源氏やしまにくだると云、ことにゑんけんを本にかきしを、ぐんぢんにいでたつもの、せうやうのきにかはるべしと云々、もりやののうに、もりやのくびをきると云所、こゝをばふしにてくびをきるべき所也、井あみうまれかはりても、ゑるまじき也、もりやとろんぎに云て、おとしへし、むくら子細に云々て、くびをきると云て、さつとして入べき所也、又曲舞はて、うたひろんぎにかゝる所しげ、れば、ひつかへて、ことばよりかゝる風體をかくべし、かみなどけしたることは、ことばにてかゝるがよき也、よし野のことをば、春の事にかき、立田のことをば、秋の體に、ふしをば、夏の體にかくべしと也、又きりひやうしは、舞とはたらきをみせん爲也、かきても、してもこころふべきこと也、今ほどのかきて、有まじき事をかき入る也、かひこに又君は、ふうんめでたくなしますにより、此又きみはと云によりてながき也、一天たい平の御代にて君のこと也、たゞながきがわろき也、さりながら、ことによるべし、松風むら雨ことを、き能なれ共、是はよし、なにごとをもこゝろ分て、さて中をこゝろふべし、前後し／＼かくにも、あまりにふつきりに、ついたりやうには有まじき所を心ふべし、たゞことばのはひを知るべし、ぶんしやうのはうは、とはをつめて、りのあらはるゝを本とす、

作者

〔二百十番謡目録〕内百番之部

高砂

元清作

弓八幡

元清作

白鬚

清次作

難波

元清作

追松

元清作

志賀

元清作

白樂天

元清作

養老

元清作

氷室

富増作

賀茂

氏信作

吳服

元清作

玉井

信光作

此能共をもて、新作の本體とすべし、凡近代作書する所の數々も、古風體を少うつしとりたる新風也、昔のさがものぐるいの狂女、今のひやくまん是也、まづか、本風有、丹後物狂、昔ふえのものぐるい也、松風村雨、昔しほくみ也、戀のおもに、昔あやの大こ也、まねんこじ、古今有、さの、船橋、古風有、如此いづれも、本風をもて、再反の作風也、其當世によりて、少々こと葉をかへ、曲をあらためて、年々去來の花種をなせり、後々年もて同反たるべき定如此、

〔世子六十以後申樂談儀〕一能をかくに、まよはきうをかくとて筆計にかくはわろき也、ふせいのまよはきうをかくべし、さてこそ、まよをやふりたるにて有べけれ、筆のみのまよはきうは、聞所は面白けれ共、風せいなし、ふでと風せいあひかなひたらんには、是非なし、玉水に立むかへばなどかき、ひがしにむかひ、又西になど、風せいに成體を心えてかくべし、かきてゆくに、ことばに花をさかせんとおもふ心にけはくせられて、句長になる也、さやうの心をおもひきりてかくべし、すさのをのうたひをよくかける也、神代には、天照大神のせうとの神とあらはれ、人のよには、やまとたけのみこと、いこくをせめなどかきて、それよりあづまのことをかくべきを打捨て、曲舞のすゑにてやつるぎの宮と申なんとせんご／＼して、曲舞のうちに、一こんりうをかける也、まゆんろまゆんろとをゐてか、ば句長に成て遙成べし、此分目を心えべし、ふるの能に、そや女ぬのをあらうもんだうより、まゆんろなれば、ふるのけんのいはれをうたふべきをはつみ、ゆきふるのたかはしとうたふこと、まけんを本にするゆへ也、もときに名所のほしきは、かやうのゑんけんのたよりのため也、又其ま、いはれよりうたふ共、ふせいに成べきもときならば、いはれをもうたひ出すべし、曲舞のまよに、抑ふるとはと云、みつるぎなど、いはれをうたへばつよき也、はつ御ゆきとうたひぬれば、魅ふるがいで來て能に成也、さねもりに、ひげあらふより、まゆんろならば、かつせんに成體をかくべきを、又さねもりかなと云て、入はにた、かうたる體をかく、か

一はうかさは軍體の末風、碎動の態風なり。まねんこじ花月、男物ぐるひ、若は女物ぐるいなどい  
てもあれ、其能の風によりて、碎動の便風あるべし。○中略

一、碎動風鬼の能作、是軍體の末流の便風也。是は形鬼心人也。がやうの能多分二、きれの能也。はしめ三段。若は二段ありとも、みじかくと書て後の出物、さだめてりやう鬼なるべし。○中略

一如此條々、能く見得して書作すべきなり、爰に又、開開、開眼とて、能一番の内、破急の間に是あり、開開者、二開一感をなすべきは也、其能一番の本説のことはりをかきあらはして、數人の心耳をひらく一聲に、又其ことはりをあらはす文言、曲聲にかなひて、理曲一音の聞感をなして、卽座に一同の褒美をうる感所也、理曲二開を、一音の感にあらはすさかひを、開開と名付、又開眼者、其能一番の内に、見風感應の成就の眼をあらはす、在所あるべし、舞動風體の間に、卽座一同の妙感をなす所なり、是は爲手の威力の出風なり、筆者の作書にはあるまじきかなれども、かやうの眼曲も、其風をなすべき在所なくばあるべからず、まければ舞曲をなすべき態所を、よく／＼安得して作書すべきなり、一番のまなこを、ひらく妙所なれば、開眼と名付、仍開開は筆者の作、開眼は爲手の態なるべし、兩條一作の達人において、是非あるべからず、又開眼一開元、妙所可有、口傳可尋、中略

一大よそ三體の能、近來をしいだして見えつゝ、世上の風體の數々

やはた あひ老 やうろう 老松 玄はがま ありどほし 如此老體數々 はこざき

うのは めくらうち ちづか 松風村雨 ひやくまむ うき船 ひがきの女 小町  
如此女體 みちもり さつまのかみ さねもり よりまさ きよつね あつもり

如此軍體 たんご物狂 ちねんこじ かうや あふさか 如此遊狂 戀のおもに

さの、船橋 まゐのせうしやう たいさんもく 如此碎動風

さの、船橋 まゐのせうしやう たいさんもく 如此碎動風

の花にははせて柳が枝にさかせむより、なをありがたき花種なるべし。まかれればかやうの風に相應したらん、藝人をや、無上妙感の達人とも申べき。此外まづかぎわう、ぎ女などは、人體しらびやうしなれば、和歌をあげ一聲をながめ、八びやうしにかゝりて、三重の聲曲をなし、せめをふんで、舞人にいる風體なるべし。かやうなる者は、きりびやうしのしづかならんかゝりを入はにせん事、似合べき也。又ひやくまんやまうばなど、申たるは、曲舞まひの藝風なれば、大かたやすかるべし。五段の内、序急をさしよせて、破を體にして、曲舞を本所に置いて、曲舞二段ばかりを後段をばもみよせて、道の曲舞くりに、こまかにかきて、次第にてまひとむべし。又女物ぐるいの風體、これはとても、ものぐるひなれば、なにととも風體をたくみて、音曲こまやかに言ふるまいにさうをうして、人體幽玄ならば、なにとするも、おもしろかるべし。よそをひをうつくしく、曲のかゝりをたくみよせて、事をつくし、色をそへて作書すべし。如此上果風より、貴人、まらびやうし、曲舞まい、狂女、色々を心え分て、其藝道のすぢめくゝをあてがひて、作書する事、能道をまゐりたる書手なるべし。

一、軍體の能姿、假令源平の名しやうの人體の本説ならば、ことにく平家の物がたりのまゝに書べし。是又五段のほどらい、音曲の長短をはからふべし。又いりかはりて出る事あらば、後のきわに、曲舞などあるべし。まからば、破か急へかゝるべし。かやうなる能は、六段などにもなるべし。又いりかはらねば、四段なるもあり、能によるべし。はじめのきわをひきよせて、みじかくと書べし。軍體の風姿、本せつによるべきほどに、書やうのかゝり、一べんとさだまるべからず、音曲などもみじかくとかきて、急をばしゆらがゝりのはやふしへ入べし。人體によりて、いかりてよかるべきもあるべし。げなげかるふしがゝりにて、もみくとあるべし。軍體の出物、定めて名のりごゑあるべし。心得て書すべし。



と行事十句計也、下てうたふより、甲の物までの一歌い十句計也、自是破二、さて開口人と爲手との問答こと葉四五づゝに過べからず、此問答に、又老人夫婦など、事のいはれをもんたうて、云開事あり、其も又二三づゝに過べからず、さて甲の物にて、みな同音にうたひだす事より、うたひとむるまで、十句計を、二きれにうたふべし、自是破三、其後曲舞などあらば、上聲五句計、さし聲五句、下て云おさむるまで五六句計、曲舞十二三句は、甲物十二三句計にて、其後言葉論義ニツ三ツづつうたひて、わさゝかるゝとうたひとむべし、自是其後出物の人體、天女、男體、いづれにてもあれ、橋がゝりにて、甲物さし聲云ながして、一聲上て、後句は、同音などにて、長々たふゝとあげながして、云くだすべし、さてせめ論義ニツ三ツづゝうたひて、かゝりたる音曲にて、かるゝとやりかけてうたふべし、又出物の舞樂の人體によりて、きりひやうしなどにて入る事もあるべし、いづれもゝ長くてはわるかるべし、長短の事音曲句數をもてはからふべし、是序風の能姿たいがい也、脇の能には、助など出て似合かゝりなれば、老體の風に定まる也、此外老體の能姿、まなまなによりてあるべし、又女體の祝言、五段の風體、是同、

一女體の能姿、風體をかざりて書くべし、是ことに舞歌の本風たり、其内におきて上々の風體あるべし、あるひは女御かうゐ、あふひ、ゆふがほ、うき舟など、申たる、貴人の女體、氣だかき風姿の、よのつねならぬかゝりよそをいを心えて書べし、まかれば音曲よりかゝりをも、よくゝ心えて、道のものゝ、曲舞音曲などのやうにはあるまじき也、たけたるかゝりの、うつくしくして、幽玄無上の位、曲も妙聲、ふりふせいも此上はあるべからず、すこしもふそくにてはかなふべからず、かやうなる人體の種風に、玉のなかの玉を得たるがごとくなる事あり、如此の貴人妙體の見風の上に、あるひは六條みやす所の、あふひの上に附たゝり、ゆふがほのうへのものゝ、けにとられ、うきふねのつきものなどゝて、見風のたよりある幽花種、あひがたき風得也、古歌云、梅が香を櫻

はきはめたる達人の才學の能なり。

二、作とは種をばかやうにもとめ得て、さてなす所を定むべし、先序破急に五段あり、序一段、破三段、急一段なり、開口人出て、さし聲より、次第一歌まで一段、自是破さて爲手の出で、一聲より一歌まで一段、其後開口人と問答ありて、同音一うたひ一段、其後又曲舞にてもあれ、只歌ひにてもあれ、一音曲一段、自是急、其後舞にても、はたらきにても、あるひははや曲、きりひやうしなどにて一段、已上五段也、若は本説の體分によりて、六段ある事もあるべし、又はしなによりて、一段たらで、四段などある能もあるべし、先本風體と定所五段也、此五段を作り定て序にいかほどの音曲あるべし、破三段に三色の音曲いかほど、急に似合たる曲風いかほどと、音曲の句數をさだめて、一番をこんりうするを能作とは申也、能のまなかゝりによりて、音曲の序破急をのゝ曲付かはるべし、能一番の長短、五段の音曲句數をもてはかるべき也。

三、書とは、其能の開口より、出物のまなゝによりて、此人體にては、いかやうなること葉をかきて、よかるべしと案得すべし、祝言、幽玄、戀じゆつくわい、ぼうをく、色々のゑんによるべき、まいかのこと葉を能の風體に因りて、とりあてがひて書べし、能には本説の在所あるべし、名所きうせきの曲所ならば、其所の名歌名句のこと葉をとる事、能の破三段の内のつめとおぼしからん在所に書べし、是能の堪用の曲所なるべし、其外よきこと葉、名句などをば爲手の云事に書べし、かやうにこの條々をとりあてがふを能と書とは申也。

三體作書條々、老、女、軍三體也。

一老體是大方脇能の懸也、先祝言の風體、開口人出て、次第より一うたひ一段に音曲、五七五、七七五、と行事、七八句うたふべし、七五を一句と定、只歌一首を貳句と可得心、さて爲手の出で、自是破一段、老人ふうふなどにて、五七五、七五の一聲より、七五、二句過て、さしこゑより、七五、

なれや、都に歸りて世がたりにせさせ給へと思ふは猶も妄執か、たゞうち捨よ何事もよし足曳の山姥が山廻りするぞ苦しき、<sup>シテ</sup>あし曳の<sup>上</sup>山めぐり、<sup>下</sup>シテ一樹の陰一河の流、みな是他生の縁ぞかし、ましてや我名を夕月の浮世をめぐるひとふしも、狂言綺語の道すぐに讃佛樂の因ぞかし、荒御名殘おしや、いとま申て、歸る山の<sup>上</sup>地春は梢にさくかと待し、<sup>シテ</sup>花を尋ねて、山めぐり<sup>地</sup>秋はさやけき影を尋て、<sup>シテ</sup>月みるかたにと山めぐり、<sup>地</sup>冬はさえ行時雨の雲の、<sup>シテ</sup>雪をさそひて、山めぐり、<sup>同</sup>めぐり、<sup>シテ</sup>て輪廻を離れぬ、妄執の雲の、塵つもつて、山姥となれる、鬼女が有様みるや、と峯にかけり、谷に響て今迄爰に、あるよと見えしが、山又山に、やまめぐり、山又やまに、山廻りして、行へもえらす、成にけり、

〔能作書〕一能作書條々、先種、作書、三道より出たり、一に能の種をしる事、二に能を作事、三に能を書事也、本説の種をよく、案得して序破急の三體を、五段に作なして、さて詞をあつめて曲を付て書連なり、

一、種とは、藝能の本説に、其態をなす人體にして、舞歌のため大用なる事をあるべし、抑遊樂體と者、舞歌なり、舞歌二曲の態をなさらん人體の種ならば、いかなる古人名しやうなりとも、遊樂の見風あるべからず、此理を能々安得すべし、たとへば物まねの人體の品々、天女神女、乙女是神樂の舞歌也、男體には、なりひら、くろぬし、源氏、如此遊士、女體には、伊勢、小町、ざわう、ざ女、まづか、ひやくまん、如此遊女、是はみな、其人體、いづれも、舞歌遊風の名望の人なれば、これら、を能の根本體に作なしたらんは、をのづから遊樂の見風の大切あるべし、又はうかには、ぢねんこじ、花月、とうがんこじ、せいがんこじなどの遊狂、其外無名の男女老若の人體、ことごとく、舞歌によろしき風體に作入て、是を作書すべし、如此大せつの本風體をもとめうるを種と名附、又作能とて、さらに本説もなき事を新作にして、名所、きうせきのゑんに作なして、一座見風の曲感をなす事あり、是

ぎおそろしき、其よを思ひまら玉か何ぞととひし人迄も、我身の上に成ぬべき、浮世語りも、恥かしや、シテ 春の夜の一時を千金に替じとは、花の清香月に影是は願のたまさかに行逢人の一曲の、其程もあたら夜に、はや、唄ひ給ふべし、セル げに此うへはともかくも、いふに及ばぬ山中に、シテ 一聲の山鳥羽をた、ッレ 鼓は瀧なみ、シテ 袖は白妙、ッレ 雪をめぐらすこの花の、シテ 難波のことか、ッレ のりならぬ、上 歌 同よし足曳の山うばが、ッレ 山廻りするぞ苦しき、シテ 夫山といつは、ちりひぢよりおこつて、天雲か、るせんでうの峯、同 海は昔の露よりしたよりて、はたうをた、む、ばんすいたり、サシ 一洞空き谷の聲、梢に響く山びこの、無聲同 音をきくたよりとなり、聲に響かぬ谷もがなと望しも實かくや覽、ッレ ことに我住山家の氣色、山たかふして海近く、谷深ふして水遠し、同 前には海水老やう、として、月真如の光りをか、げ後には嶺松ざゝとして風常樂の夢を破る、シテ せいべんかま朽て盤空くさる、同 かんこ苦深ふして、鳥驚かすとも、云つべし、ッレ 遠近の、たづきもまらぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の聲、すごき折々に伐木丁として、山さらに幽なり、法性峯そびえては、上求菩提を顯し無明谷深き粧は、下化衆生を表して金輪際に及べり、抑山姥は、生所もまらず宿もなし、唯雲水を便りにて、いたらぬ山の奥もなし、上シテ 然れば人間にあらずとて、隔つる雲の身をかへ、かりに自性を變化して、一念化生の鬼女となつて目前に來れ共邪正一如とみる時は、色即是空、其まゝに、佛法あれば、世法有煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山うばもあり、柳はみどり花は紅ゐの色々、扱人間に遊ぶ事、有時は山賤の、樵路に通ふ花の陰、休むおもに、肩をかし、月諸友に山を出、里迄送るおりもあり、又或時は織姫の、いをはたたつるまどに入て、枝の、鶯糸くり紡績の宿に身を置人を助るわざをのみ、まづの目にみえぬ鬼とや、人の云覽、上シテ 世を空蟬の唐衣拂、同 ぬ袖にをく霜は夜寒の月にうづもれ、うちすすむ人のたえまにも、千聲萬聲の、碓に聲のしでうつは、唯山うばがわざ



め名をたて、世情萬徳の妙花を開く事、此一曲の故ならずや、まからばわらはが身をも弔ひ、舞  
 歌音楽の妙音の聲佛事をもなし給は、などかわらはも輪廻をのがれ歸性の善所に至らざら  
 んと、恨をいふ山の鳥獸も鳴そへて、聲をあげろの山姥が、靈鬼是迄來りたり、<sup>上</sup>ふしぎの事を  
 聞物哉、扱は誠の山姥の、是迄來り給へるか、<sup>シテ</sup>調我國々の山めぐり、げふしも爰に來る事は、我  
 名の徳を聞ん爲也、謠ひ給ひて去とは我妄執をはらし給へ、<sup>上</sup>此上はとかく辭しなば恐し  
 や、若身のためやあしかりなんと、はかりながら時のてうしをとるや拍子をす、むれば、<sup>シテ</sup>  
 詞まばさせ給へ、迎さらば、暮るを待て月の夜聲に、唄ひ給は、我も又、眞の姿を顯すべし、<sup>上</sup>すはや  
 かげろふ夕月の、<sup>上</sup>歌さなきだに、暮るを急ぐ深山への、<sup>同</sup>雲に心をかけ添て、此山うばが一ふ  
 しをよすがらうたひ給は、其時我姿をもあらはし衣の袖つぎて、移り舞をまふべしといふか  
 と見れば、其ま、かきけすやうに、失にけり、<sup>上</sup>餘りの事のふしぎさに、更に誠とおもほえ  
 ん、鬼女が詞をたがへじと、<sup>上</sup>歌松風共に吹笛の、<sup>下</sup>聲澄わたる谷川に、手まづさへざる曲水の、  
 月に聲すむ、み山哉、<sup>後</sup>シテ荒物すごの深谷やな、あら物すごの深谷やな、寒林に骨をうつ、靈  
 鬼なく、前生の業を恨む、深野に花を供する天人、返々も幾生の善を悦ぶ、いや、善惡不二、何を  
 か恨み、何をか悦ばんや、<sup>調</sup>萬箇目前の境界、せんかべう、として、いはは蛾々たり、山また山、い  
 づれのたくみか、青巖の形を、削りなせる、水又みづ、誰が家にか、碧潭の色を、染出せる、<sup>上</sup>恐しや  
 月もこぶかき山陰より、其さまけしたるか、ほばせは、其山姥にてましますか、<sup>シテ</sup>調迎はやほに  
 出初しことの葉の、氣色にもまろしめさるべし、我にな、恐れ給ひそとよ、<sup>上</sup>此上は恐ろしなが  
 らうば玉の、くらまざれより、顯れ出る、姿詞は人なれ共、<sup>シテ</sup>調髪にはをどろの雪を、戴き、<sup>上</sup>眼  
 の光りは星のごとし、<sup>シテ</sup>扱面の色は、<sup>上</sup>レさにぬりの、<sup>シテ</sup>軒の瓦の鬼のかたちを、<sup>上</sup>レこよひ  
 始めてみる事を、<sup>シテ</sup>何にたとへん、<sup>上</sup>レいにしへの、<sup>上</sup>歌同鬼一口の雨の夜に、<sup>上</sup>かみなりさは

と云事を曲舞に作つて御唄ひ有により、京童部の申ならはして候又此比は善光寺へ御参り有  
 たき由承候程に、某御供申唯今信濃國善光寺へと急候、サシ都を出てさ、浪や志がの浦船こが  
 れ行末はあらちの山越て、袖に露ちる玉江の橋かけて末ある越路の旅思ひやる社はるかなれ  
 上歌 梢波立鹽こしの、あたかの松の夕煙きえぬうき身の罪をきる彌陀のつるぎのとなみ  
 山雲路うながす三越路の國の末成里とへば、いと、都は遠ざかる、さかひ川にも著にけり、  
ワキ御 御急候程に、是は、や越後越中の境河に御著にて候、暫是に御座候ひて、猶々道の様杯を  
 も御尋あらふするにて候、シツレ實や常に承る、西方の淨土は十萬億土とかや、是は又彌陀來  
 迎の直路なれば、あげろの山とや覽にまいり候べし、下とも修行の旅なれば、乗物をば是に留め  
 置、かちはだしにて参り候べし、道しるべしてたび候へ、ワキ荒ふしぎや、暮まじき日にて候が  
 俄に暮て候よ、扱何と仕候べき、シテ女上なふ、旅人御宿参らせうなふ、調是はあげろの山とて  
 人里遠き所也、日の暮て候へば、わらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ、ワキ荒嬉しや候俄に日  
 の暮前後をばうじて候、懸て参らふするにて候、シテ今宵の御宿参らする事、取分思ふ子細有、調  
 山姥の歌の一節謠ひて聞させ給へ、年月の望なり鄙の思ひでと思ふべし、下カ、ル其爲に社日をくらし、  
 御宿をも参らせて候へ、如何様にもうたはせ給ひ候へ、ワキ是は思ひもよらぬ事を承候物哉、  
 扱誰と見申されて、山姥の歌の一節とは御所望候ぞ、シテ調いや何をかつ、み給ふ覽、あれにま  
 します御事は、ひやくま山姥とてかくれなき遊女にてはまさずや、先此歌の次第とや覽に、下よし  
 足引の山姥が、山廻りすると作られたり、荒面白や候、調是は曲舞によりての異名扱誠の山姥を  
 ば、如何成者とかしろし召れて候ぞ、ワキ山姥とは山に住鬼女とこそ曲舞にもみえて候へ、シテ  
 鬼女とはをんなの鬼とや、よしおに成共人成とも、山に住女ならば、童が身の上にてはさふらは  
 すや、年比色にはいださせ給ふ、言の葉草の露程も、御心には懸給はぬ、調恨申に來りたり、道下カ、ルを極

謡曲文及其終

〔謡曲〕猩々

ワキ 調

是は唐土かねきむざんの麓、楊子の里にかうふうと申民にて候、扱も我親に孝有により、有夜不思議の夢をみる楊子の市に出て酒を賣ならば富貴の身と成べしと、おしへのまゝになすわざの、<sup>上</sup>セル時去時來りけるにや、次第く／＼に富貴の身と成て候、<sup>詞</sup>又爰にふしぎなる事の候、市毎に來り酒をのむ者の候が、盃の數は重れ共、面色はさらに變らず候程に、餘りに不善に存名を尋て候へば、海中にすむ猩々とかや申候程に、今日は潯陽の江に出て、彼猩々をまたばやと存候、<sup>上</sup>歐潯陽の江のほとりにてく、菊をたゝへて夜もすがら、月の前にも友まつや又かたぶくる盃の影をたゝへて待居たりく、<sup>上</sup>地老せぬや、藥の名をも菊の水、盃もうかび出て友にあふぞうれしき、此友に逢ぞうれしき、<sup>シテ上</sup>みきときく、<sup>同</sup>名も理りや秋風の、<sup>シテ上</sup>ふけどもく、<sup>上</sup>地さらに身にはさむからじ、<sup>シテ下</sup>ことはりや白菊の、<sup>下</sup>地ことはりやまらざくの、させわたを温めて酒をいざやくまふよ、<sup>シテ上</sup>まれ人も御覽すらん、<sup>上</sup>地月星は隈もなき、<sup>シテ上</sup>所は潯陽の、<sup>上</sup>地江のうちのさかもり、<sup>シテ中</sup>猩々舞をまはふよ、<sup>上</sup>地蘆の葉の笛をふき、浪のつゞみどうとうち、<sup>シテ上</sup>聲すみ渡るうら風の、<sup>上</sup>地秋のまらべや、のこる覽、<sup>シテ下</sup>有難や御身こゝろすなほなるにより、此壺にいづみをたゝへ、唯今返しあたふるなり、よもつきじ、<sup>下</sup>同よもつきじ、萬代までの竹の葉の酒、くめどもつきず、のめどもかはらぬ秋の夜のさかづき、かげもかたぶく入江にかれたつ、あしもとはよろ／＼と、ゑひにふしたる枕の夢の、さむると思へばいづみはそのまゝ、盡せぬ宿社めでたけれ、

〔謡曲〕山姥

次第

善光ぞと影たのむ、く、佛の御寺尋む、<sup>ワキ</sup>調

是は都方に住居仕る者にて候、又是に渡り候御事は、ひやくま山姥とてかくなき遊女にて御座候、加様に御名を申謂は、山姥の山廻りする

も理りや、切りくべて今ぞみがきもり云々トアルヲ、徳川氏ノ時、其本姓松平ナルヲ以テ、松ヲ  
煙ニスルトノ意ヨリ忌避シテ改メタルナリトノ傳説アリ、觀世ノ正本ヲ以テ註釋セル謠曲  
拾葉抄寛保元年著ニモ、原作ノ儘ニシテ改メズ、

〔翁草百四〕或る侯家の能に、番組の内、其家にて遠慮すべき文句を、前方に随分穿鑿して謠ひ替へ  
をよく云ひ合せ、とくと改めて能始り、三番目采女の半に成て、淨土の春に劣らめやと云文句有  
り、而るに其侯の愛妾の名を於虎といふ、夫迄は心付ずして、地謠の所に臨んで俄に心付、おとら  
と許は責てのもの事なり、おとらめと有ては後難あるべし、何とぞ謠替んと思へども、時に取て  
頓意も浮まず、是非なく淨土の春におとらさまと謠ぬとかや、笑べし、都て茶の湯、謠講等の  
龜相は、昔より限りなき事ながら、中にも可笑、龜相少く爰に記、或所の謠講に、忠度のシテの出端  
過て、ワキ、御身は此山賊にて坐か、シテさん候、是は此浦の蟹にて候と云べきを誤つて此浦の者  
にて候とうたふ、其時ワキ者ならば浦にこそ住べきにと謠ひぬ、さのみ耳立ぬ様なれども、心大  
におかし、認じて謠は多くは謠かけに寄て、問答する事なれば、其言葉の番ひ違ふ時は、得ては斯  
る事多し、よく心を用ゆべき事也、又園久兵衛方の講に初て出たる人、加茂の脇を謠ふとて、いか  
に是なる水汲むと云ひ懸て、女性を忘れて、心中に色々と思案しても急に出ず、詮方なく、そつと  
小聲にて水汲女中に尋べき事の候と謠ければ、開場にジャ／＼と笑ひ聞えけるとぞ、夫より其  
人は大に愧て、再び講に出ずとなん、又素人の講に、鉢の木のシテ問答の内に、加様の鉢ノ木に罷  
成りとうたふ、開場にて不審して、謠損じは常の事ながら、加様の鉢に罷成を、鉢の木に罷成とは、  
存もよらぬ云ひ損じなり、いかなる譯にやと様子をきけば、燈を幽かにして本を扣へ謠ひける  
故鉢の木の本に、加様の鉢にと字にて有けるを、はの暗きに鉢の字を鉢と見違へたるなりとて、  
大に笑に成ぬとかや、此類の龜相を思ひ出なば、盡期なからまし、



禁愚

非れども、普通の者謠か様にもなし、さすが素人故各覺へざりしもおかし、堂上方にては此謠武家の四海浪と同前にて、假初の參會にも出ぬ事なく、殊外近き謠と思召處に、知らぬと申せし故、大に笑ひ玉ひぬとなむ、理り哉松の葉の散失す、正木の葛長くつたはり鳥のあと有らん其程は、よも盡せじな敷島の歌には神も納受のと云文句なれば、堂上に専ら謠給ふ筈の事也、

〔花傳書三〕「かどいでのうたひは、うたひかへす也、つゞみもうちかへす也、みじかくうちかへす也、やがて歸るといふ儀なり、

一船中むことり、よめ入のうたひは、うたひかへすべからず、門出のうたひとはうらおもて也、これはかへすといふ事をきらふ也、むことりよめとりのうたひは、第一の祝言なり、高砂のうたひを本とせり、これあひおひといふ儀也、

一わたましの謠の事ならひといふは火事をいむ也、されば其心がけかんよう也、うたひのうち火事のたぐひのある事、よくかんがへ、其謠をうたふまじきなり、調子も雙調を用る也、むかしは盤渉水性なればもちひ侍りしが、當代は是も火をけし候へば、火事の道具としてこれを略し、雙調に定む、雙調は春の調子なり、春は四季のはじめ、としのはじめなれば、これ第一の祝言なり、かるがゆへに家のはじめにもちゆ、またいはく雙調は本性なり、かたぐもつて家に相應の調子と是をかふせり、

## 〔謠曲〕鉢木

シテ 枌松はさしもげに、同枝をため葉をすかしてかゝりあれとうへをきし、そのかひ今は嵐吹、まつは本來ときはにて、薪となるは梅櫻切くべて今ぞみかきもり、衛士のたく火はおためなりよくよりてあたり給へや、

○按ズルニ、まつは本來ときはにて、薪となるは梅櫻ノ句、原作ニハ松は本來煙にて、薪となる

候へと仰しかば、堀尾心ある士にて、柳一荷、折一合、船につみ出にけり。○中かくて堀尾より樽肴を送りしかば、扱も心有かなく、とおし返し、感悦し、月清二三酌て、長左衛門にさしければ、是も數盃を傾け、難波殿へ恐侍るとて、さしぬれば、近松に一禮し、其後金吾へさしてけり、長左衛門中のみせんとて、心よげに請し處に、月清、願寺の曲舞を謠ひ出けり、聊おくしたる顔色もなくつねの如し。

〔槐記續編〕享保十八年三月七日ヨリ至十七日、一所記之。○中

昔シ應山○近衛ノ御時、二疊大目ニテ御茶アリタル跡ニテ、小畠了達へ御意ニ、何ナリトモ謠ヲウタへ、此席ニテ所望セン者、普通ニハアルベカラズ、又此席ニテ謠フ者モ、亦普通ニハアルベカラズトアリシニ、扇ヲトリモナラサズ、翁ヲ謠フタリ、メヅラシキコトヲ思ヒ付タリト思ヒシニ、獅子吼院殿○親王ノ後ニ聞召テ、扱モ出來タリ、圍居ニテ初テ所望アラシニ、君ノ惠ゾアリガタキ。○高ニテモアルマジ、盡セヌ宿コン目出度ケレ。○程ニテモアルマジ、大夫ニトリテ随分廣キ處ニテ、高音ノモノヲ随分下音ニテ、座敷ニテ決シテウタハヌモノヲ謠フタルハ、最モヨク思ヒツキタリトテ褒美ナサル、イカサマニモ翁ナラデ、ウタフモノハアルベカラズト仰セラル。

〔翁草 五十七〕一堂上方拜賀の宴席へ、謠曲の者を召れけるに、幸御長袖の賀筵拜見もし度とて、或素人二三人申合せ参りしに、何の大納言殿かの、中納言どの段々参向有て、式々の盃酒、酒宴闌ニ及び、それらの祝儀つゝ、宜敷うたひけるに、興に乗じ給て、何大納言殿とやらん、是を付けよとて、何歟謠出し給ふを聞けば、其謠を知らず、二三句うたひて、サア付けよと宜へども、只ハツハツと計にて汗をかき居る故、餘の公卿達、氣毒がりて、助音有謠終て、皆の者は謠の役に來ながら、是を知らぬやと、甚笑給ふ故、彼素人ども亦面して、唯今のは何と申諺にて候やと申にぞ、あれは俊成忠度也とて、各こぞりて笑給ひ、結局是が興に成て、猶々酒も長せしとかや、此謠遠き物にも

イリ、御甲ノ緒ヲシメラレ、太ク過シキ栗毛ノ馬ニメサレツ、閑々ト御出馬ナリ、

〔陰德太平記 五十六〕上月城沒落附勝久自害事

同○天正 七月二日、神西三郎左衛門元通城ノ尾崎へ出自裁スト披露シケレバ、諸軍士群聚シテ見物ス、元通城中ヲ出テ肩推脱テ、太刀ヲ拔ナガラ、比來嗜タル道ナレバ、聲イト美クテ鍾馗ノ曲舞ノ半ヨリ、榎ノ花ノ上ナル露ヨリモト、緩々ト謠ヒ、哀也ケル人界ヲ、今コソ離果ニケレト、末ヲ少諷替ヘテ、聲ノ下ヨリ腹十文字ニ搔切テ伏ニケリ、哀レ尋常ナル自害哉ト、見人咄トゾ感ジケル、

〔陰德太平記 六十一〕攝州在岡城沒落之事

村正○略天正七年九月二日ノ夜、忍テ在岡ノ城ヲ立出ル、○中或固屋ニハ人生如輕塵、棲弱草、

況ヤ戰國ヲヤ、一時ノ後ヲサヘ不知世ニ、唯吞ヤ諷ヘヤトテ、江口ヲ諷ヒ、川舟ヲトメテ逢瀬ノ波枕、浮世ノ夢ヲ見習ハジノト、聞ニモ化シ世ノ理リ、餘所ノ様ニモ思ハレズ、實ヤ皆人ハ、六塵ノ境ニ迷ヒ、六根ノ罪ヲ作ル事モ、見ル事聞事ニ迷フトイヘルニ付テモ、適人中ノ善果ヲ受ナガラ、五戒十禪ヲバ不保シテ、斯戰國ニ生ヲ受、利欲ノ爲ニハ殘害殺戮、迭相吞噬シ、又ハ受執ニ引レテ、嫉妬煩胸、貪意守惜ノ念ニ顛倒迷蒙シケル、現在ノ業ヲ悲テハ、未來ノ報果ヲ恐レテ、サシモニ武カリシ村重モ、坐ニ袖ヲヅ沾シケル、サレバ村重ハ、從來亂舞ノ嗜ニテ、如形堪能也ケレバ、且ハ此程ノ積鬱ヲ散ジテ、乍立江口一番ノ終ノ迄聞タリケルガ、後此時ノ話シケルニゾ、此拍子違ヘリ、彼所ノ手クダリ惡カリシナド云ケルトカヤ、

〔太閤記 三〕備中國冠城落去并高松之城水攻之事

前夕○天正十年 秀吉は堀尾茂助をめして、明日四日午前高松之城主清水兄弟并輝元加勢之鐵炮大將二人湖水の上にして、致切腹籠城之上下悉く助んとの事なり、汝明朝船にて出向ひ、檢見

守被官共うたい申させらるべき事、可爲如何哉之由内々被尋下之云々、更くるしからの御事と存候旨申上之也、可爲上二處

一本常重而來入然者おきゑんの様に板を被敷候ては、いかゞあるべく候哉由、内々御尋之云々、此段舞臺にて觀世などうたい申させらるゝ、同御事たるべし、さ候とて御ゑんのたかさおなじ様には不可然、たゞ庭上に板を被敷分、更くるしからす存候、むかし細川殿被官三番藤衛門尉と申候は、一段の音曲にて、觀世座にて脇をもさせられ候つる、又ぶたいにてうたはせられ候し御事也、仍板の事ぶたい同前と存候よし申入之也、廿日、以晴光内々被尋下、今日近衛殿大覺寺殿など御參、右京兆も祇候、略○中京兆御被官衆少々、伊勢被官衆、於庭上うたい被申云々、板被敷也云云、

〔總見記〕鳴海桶狭間合戰事附義元討死事

去程ニ五月三〇永祿三年十八日ノ夜ニ入テ、敵早大高ニ參著ノ由、丸根ノ城佐久間方ヨリ脚力ヲ馳テ申シ上ケリ、信長公御家老ヲ集メラレシニ、軍ノ御評定ハ無之シテ、唯世上ノ御難談ニテ御酒宴ニ及ブ、宮福大夫ト云フ猿樂羅生門ノ曲舞、兵ノ交リ頼ミアル中ノ酒宴哉ト謠ヒケレバ、殊外御威有テ黄金ヲ被下、既ニ夜モ深更ニ及ベリ、各宿所ニ歸テ支度アルベシトテ被歸ケリ、家老ノ面、面歸ナガラツブヤキケルハ、口比ハ能大將ナレドモ、御運ノ末ト相見ヘ、智慧ノ鏡モ曇ルヤラン、指タル軍ノ御工夫モ出ヌト見ヘテ、笑止ナリト云合テ歸リケリ、角テ其夜ノ明ケルヲ待セ給ヒケルガ夜、既ニ明方ノ事ナルニ、鷺津ノ城ヨリ注進アリ、敵只今鷺津丸根兩城ヘ人數ヲ取掛候ト追々申來ル、信長少モ騒ギ不給、教盛ノ舞ノ人間五十年外典ノ内ヲクラブレバ、夢幻ノ如クナリ、一度生ヲ受ケ滅セヌ者ノ有ベキ歟ト云所ヲ、繰返し舞セ給フテ、サラバ蝶ヲ吹立テ、具足ヲコセヨト被仰ケレバ、小姓衆スナハチ御鎧ヲ奉ル、靜ニ御物具ヲ召シ堅メ、立チナガラ御食ヲ三盃マ



がたし、古人も學ばずんば、道を知らずといへり、論語に切するがごとく磨するが如くと云々、夫  
諸の神代よりはじまれりとなれば、もとを勤ずんば有べからずと、先神道の子細を尋、其後儒道  
歌道にもとづき、佛道に心をつくし、悟道をはつめいして後、我家の道に取付、是を委しくせんさ  
くするに、諸一番の次第ふしはかせをうかがふに、天地陰陽万物に相應せずと云事なし、諸とい  
つは、かれい延年の法、世のため人の爲、我家の道なれば、分明せずんば有べからずと、こゝろをく  
るしみ骨をくだき、日夜朝暮寸陰ををしみ、分陰もけたいなく、年久敷是をせんさくし、言句の内  
をも惡をのぞき善をくはへ、さう玄やうかくちう五音の位に、直なるふし、そるふし、すぐむふし、  
ゆるふし、のるふしの味ひを分明し、末代愚人の爲とて、あらためて句に玄やうをさし直し、希代  
の名人なり。略中坐席をうかゝひ、時の調子をうたひ出し、文句にこゝろを付、大夫を花の玄んと  
し、役者を下草とこゝろへ、序破急の位をそむかず、大竹のごとく直にふし、すくなきを本意と諸  
ひ給へり、是に依て左近大夫を天下の名人と申傳へたり、

〔たはれぐさ〕此國の樂といへるは、能なるべし、樂のたぐひといふべきものさま、あれど、その  
こゑことにたゞしからねば、もちふべきにしもあらず、能はおはやけのふるまひより、下々のな  
ぐさみまで幾世ともなくもてはやし、玄かもそのこゑいやしからずともいふべし。音調 節奏こゑふしは  
そのふるきに、玄たがひ、唱歌をことゝくあらため、此國の樂とさだめ、聖人世におこり、まこと  
の樂をつくり給ふをまちなば、をしへのたすけとはなるとも、害とはなるまじ、されど其玄やう  
かをつくる事、たやすきにあらず、もろこし、やまとのふるき文ども、おほくよみ、いみじき才徳あ  
りて、人情事理に達し、玄かもやまとことばよくつくる人ならでは、つくるとも其益あるまじ、か  
たしといふべし、

〔大館常興日記〕天文九年七月十九日、本常來臨、明日近衛殿など御參ありて、一獻御さ候は、伊勢

〔尤之雙紙下〕さす物のまなへ

うたひのほんにはまやうをさす

〔宗五大草紙上〕大酒の時の事司殿中一献の事

一能半に何にてもつかはされまじく候略中大酒の時うたひ候事も候、猿樂も大夫の謠ひ出し

候に付てうたひ候大夫候はねば座の者も次第候て一人とうを取うたひ候まらぶとも一人とうをとりて、うたひ出候につけて、うたふべきにて候、あなたこなたよりうたひたきまゝには候まじく候、又うたひを取かけては、うたひ候はぬ物にて候、左様に候へば物忌にて不可然候、鼓太鼓なども、あれこれ打たきまゝにうたす、笛も同前、又當世舞一せいはや太鼓などゝて、酒盛の内に聞へ候故、有まじき事にて候、左様の事は稽古の時あるべく候、今は都邊にも昔に替りたるよし申候、

〔宗五大草紙下〕色々の事

一若人は弓馬鞠、又は歌道の事、兵法、包丁、又は當世はやり候、大つゝみ、小つゝみ、大こ、笛、尺八、音曲などもちとは稽古候て可然候、謠はもじの扱ひ、口のうち以下口傳肝要候、四座共に謠の節は替り候へ共、程拍子あひ曲などは可爲同前、謠は觀世大夫又三郎と云ふ其後三郎と云ふ其兄小四郎、同八郎、此四五人面白由沙汰候し、其外日吉源四郎宮と云ふ又虎菊三郎とて、ふるき名人候し、

〔慶長見聞集西〕岡崎左兵衛音曲を好む事

聞しは今、尊きも賤しきも謠うたはぬ人なし、上がゝりをうたふ人あり、下がゝりを好人ありて、こゝろへうたひ給へり、此頃は觀世左近大夫がゝりとて皆人うたふ、此左近大夫は觀世の家始て、前代末聞謠の名人と天下におゐて沙汰せり、略中有識の人聞て我聞及しは、觀世左近大夫若年のころ、つくゝおもひけるは、我家の道萬事の品有て事廣ければ、さらに善惡の道理辨へ

一 あたるふし 一字にアタル二字にふるゝずなしト云

〔音曲玉淵集五〕一落スふしの事

落す前のすぐ成章ヲ陰息に諷ふべし則半分下ル心にて階也、是をくらるといふ、○中略

一 伸るふし

百百萬ノアル嵐のかせ 持には非ズ 朝○朝長修羅道にをちこちのノア

一 まはすふしの事 一流ハ是ヲなすふしト云ふ

廻スふしは章二つの心也上は直下はさげ、小廻はよせる心 中廻は上をすぐに持、下は當りさげの心、大廻は章三ツの心 初はすぐ、次は少上げて、後は中さげの心上音有、入廻は上にて入下は當ル心、又上は直下にて持有是は下音に有ふし也、○中略

一 ノム章

三○三井寺 かねのひゞきは○中

一 かさぬる章 此章大かた下音に有息をソト分クル也、突べからず、山山越ニ頭ヲつよく出せば息わからず、又ふる章にまがふ、ず、形をけつりなせる水又水

一 ゆりこぼし 「一ニ如此三ツユルヲ云、皆中音也、○中略

一 よする 是等も二字づゝよすべし、○中略

一 はこぶふし 是はふしの名なり、○中略

一 ふる章へ ふらねば拍子にはづるゝ也、○中略

一 フルトラストの間の章 拍子にかゝる、但頭ヲ色に下ゲてかゝる小キ章也、○中略

一 一ツラス章 フルヲス板本に差別なし下ル聲のおもき物也、拍子にかいらず、只下げても、拍子に合所の事也、○中略

一 イロの事 ふしト詞トまじるヲ云、○中略

留べし、但破の謠にても序の心に留るをよしとす、是をとむる曲とも申也、

〔音曲玉淵集<sup>四</sup>〕一總じて謠物の上に吟といふ有、謠曲も其通りにて、強吟<sup>〇</sup>和吟<sup>〇</sup>などいひ來れるは、

全く聲音の噂なり、<sup>略</sup>中 吟も強和にまがふてゆけども、兎角吟といふは一通り別段にて、是を

辨へざれば、音の移りなど不<sup>口</sup>宜<sup>傳</sup>

一節といひ章といふ論

口にて謠ふ所ふしにて、節の字は程よしとも訓する也、それを點に書あらはしむる所章にて、章はあきらかと訓する字なり、然るにまやうの字は聲といふ字也といふ人有、此説用ひがたし、既に花傳書にも章の字を畫たり、

一はかせの事<sup>略</sup>中

元來はかせといふはひやうしの事也、古書に女拍子男拍子と書て、めはかせをはかせと訓せたり、一切の謠ひ物、伸引ユル所、笛貝等の吹物、琴瑟の類、各はかせ有、是皆ひやうしなり、佛家の聲明のはかせも皆ひやうし也、<sup>略</sup>中

一くるとまはるとの事<sup>略</sup>中

今はくるまはる一名に成、一流ハクルト記ス、一流ハまはると記ス、

まはる曲といふは、或は無二のちち聲なりとも、わざとたゝぬやうにして、聲をひしぎ、いかにも

まほり入たるをいふ、但餘りむま過たるは恥辱也、<sup>略</sup>中

一入<sup>ル</sup>ふしの事

内へ入ルをいふ故、陰息にていふべきを、陽息にていふ故、外へ出はね上るやうに聞ゆ、是も入ふしの前の一字ふんばつて入べし、扱入次の下ル章、大かたなめらかに成安し、陰息にて下ル也、<sup>略</sup>中



舞ても度々遊興に成なり、外の音曲の祝義に用ひられぬは、定規の拍子なき故なり、

一 謠は元來長歌をつらねたる物故、文句も五七五七とわかる事、是和國の風なり、七五合せて十二の文字數に、雨だれ拍子八ッ也、此時はいまだ大小の鼓もわからぬ所、是拍子の濫觴也、然れども十二の文字不足の時は、鼓のかけ聲をかけて十二の數に合すなり、

盛○盛長  
りくそういまだ明ざるに

芭○芭蕉  
水にちかきろうたいは

浮○浮舟  
人からもなつかしく

軒○軒端  
ところはこのへの

堀○堀川  
げにやとしをへて

放○放下僧  
青陽のはるのあしたには

曲舞の出に限らず、拍子有所は、をしなべて此格也、

白○白樂天  
やまとのくに

老○老松  
わがてうよりもなを

かやうに謠の詞文字つらなり出來、是に隨ひて拍子もをのづと起りし事也、されども同

じ節、同じ拍子に計行ては、あやをなす事なき故に、文字の過不足をふしにて、或は廻し引

かさね、或はよせはこびなどして、拍子の間合正しく分れたり、鼓も勿論色々のあやを掛

て打とも、間合にをひては違ふ事ならぬなり、  
略○中

一くつ冠の事

譬へば序にて謠出さばとむる所も序にとめ破にて出さば破にてとめ、急にて出さば急にて留る也、是即ちくつ冠の曲といひて嗜む事也、謠の中程は輕々と謡ふとも、留る所は謠初たる位に

て、とき／＼申まねをばすべからず、きんみつと申もの也、物也と云はなつべし。

〔八拍子上〕凡例

一 謠拍子の本原八ッ拍子をもつて、囃子謠に大小の鼓本法の打方拍子付を左右に記し、打切、打込、打上、惣而頭事の謠出しをわから、舞神樂樂、かつこ、かけり、舞はたらき等の打方各笛の譜に拍子付をなし、太鼓の頭所をあるし、一聲出端早笛の打方、并に謠出しをくはしく書顯す、此書を會得すれば、いづれのうたひ、拍子方も同じ理なるゆへ通せずといふ事なし、且拍子、合ひ方に種々の口傳あれ共、八ッ拍子に洩る、事なく、秘事習ひの打方悉く此八ッ拍子より割出せり故に、獨吟、曲舞のふしはこび等を、此畫中にあて、工夫あらば、謠の故實正しく、拍子合イ方たがふといふ事なし。○中略

時安永七戌戊季孟春

洛陽龜曳誌

〔音曲玉淵集三〕一もろ／＼の音曲おほしといへども、祝儀といへば、上は天子より下万民に至る迄、能囃子謠を主とする事所以有、尤拍子といふ事、雨だれ拍子といふに付て、人の脈より作り出したるといひ、或は漏刻より作りしなど、いへども、拍子は天生の理にて、万物に拍子なきといふ事なし、人間平生の言語ウツといふより皆拍子なり、然るに謠には此拍子に慥成定規を定め、ふしの伸縮みに、規矩準繩を備へたり、是則大小の鼓の間あり。○中略 又古流當流とて、文句ふしは少づゝの替りめあれども、拍子におひては昔より今にいろふ事ならぬは、人間自然の道理に叶ひたる所なり、元來樂は神代の樂にて、雨だれ拍子なり、其雨だれ拍子にあやを付て、短く寸尺を極め、みつ地の拍子を定め、すなはちそれに和歌の七五の文字を切合せたる義なる故、天地自然の拍子、神代の樂より作り出せる所なれば、昔より今に替る事なし、勿論此末たとひ千年を経るとも、此拍子をいろふ事はならぬ道理なり、去に依ていつも高砂、東北、井筒など、同じ事を謠ひ

もらんとちかひ給り、ちともおちす、くわくといひたる、だけ有ておぼゆと也、なにの何んとかつてほろりとおとす、南阿みだ佛のふし也、かはたけのながれの女と成さきのよのむくのまで、おもひやるこそかなしけれ、へい家ふし也、ねひ觀音力、たうしんだんくの所ふしもことばも、ひやうしもさうおうたり、音曲はれんばかゝり、花が有也、ふしと云はたけなどにも有やうに、先わるきことをいふかゝりが本也、つんときつて引のべうとてつむる、皆かゝり也、さてかゝりは何ぞと、立かへりてみれば、ゆうにほうのこときの事也、

一もじなまり、ふしなまり、何のと云てにはの字のなまりたるがふしなまり也、もじのなまりたるもじなまり、もんじもてにはの字もをなじことなれ共、心得分べし、松には風の音は山、此松には風のふしなまりたるよし申せど、秋の野風にさそはれて、此野風同やう也、よきふしなまりは面白、させるかなきに、ふしなまりををくべからず、うたにも、やまひにをかされぬうたはくしからず、共いへり、小野の小町はのほ、こはきもじ也、いひすつべし、人の宿をばかさばこそ、いひかけておとす、わろし、さやうのこともあれど、こゝにてわろし、かさばのばよりさぐべし、夏の祝言にうけつく國、つくとあたるわろし、すぐに言べし、みかさのもりのものもじすぐ成べし、一念彌陀佛の念すぐにいへばこはし、かやうのときは、ねんとひやうしやうのかゝり成べし、是はふし也、とりわき、神風やはじめたてまつり、たてとあたるわろし、すぐに云べし、めぐみひさし、久となまればわろし、はるごとに、きみをいはひて、はひてとはるべからず、ゆふべの風にさそはれ、ゆふべのへを下すべし、らうおういまだ、いまだをすぐに云べし、げにや、皆人は、六ちんのきやうにまよひ、皆人は六ちんと、きうにはをいひすて、すぐにうつるべし、六ちん下よりいふ、わろき也、光げんじと名をよばる、此ともじりつにてつくべし、をなじこゑにてはつくべからず、南あみだ佛をも白しといはれしふし也、くわんとうあやまつてなまらかすこと有まじ、喜阿音曲の上ずに

と分けてうたふと心得べし、たゞうたひはふしを本にす、あひをんとうたふと先心得て、ふしをもつくべし、まげひらに、こゝぞゑんぶのならざかに、此こゝぞゑんぶのならざかにのふし、くせまひには有まじきふし也、こうたふし也、曲舞ならば、をくりてひんなまらすやう成べし、西國くだりの曲舞に、あしの葉分の月の影かくれてすめるこやの池かくれてと、句をもつ心ねにうたひしを、南阿、曲舞ふしならば、なほひんなまらかせと申されける程に、それより今のふし也、よろぼしのくせ舞、そこしやうねはくせ舞也、くせ舞は次第にて舞そめて、次第にてとむる也、二段有べし、後の段はよすべし、かうの物なにのなににて有ければ、かんのことのいかいかのと、二斗ないし三斗も、をなじかゝりにいひて、さてかかんのことのとくる也、たゞかうのもの一にて、やがてくるはわろき也、後のだんのすゑ、かうのものにならんとて、まへに有のぼりふし也、とくとさそはれて、身をうきくさのねをたえて、なんと云所也、有難も此寺にげんし玉へり、有ときはせうねつ、大せうねつのほのほにむせび、有ときはなど云所也、眞實ののぼりふしにては有まじ、さりながら、次第々々にのぼれば、のぼりふし也、是皆くせまひをやはらげたる也、略 中  
一たゞかゝり也、むかしのやまと音曲は、さしてかゝりなければ、もじなまりよく聞ゆかゝりだによければ、なまりはかくるゝ也、かやうに、あだ成夢の世に、われらもつゐに殘し、何一ときをくねる覽いづれもなまりたれ共、かゝりありてなまりかくるゝ也、南阿彌陀佛日本一の音曲といはれしうたひ也、喜阿がふし也、たう阿、やうくはかなやなど、さらばしやくそんの出世には生ぜざる覽、つたなきわれらがくわほうかなや、是をいづれもきたなき音曲なれ共、かゝり面白ければ、たうよも日本一とほめられし也、たう阿うたひとつけしもの也、たけたるかゝりの有は、音曲たけ有て聞ゆる也、らう人こたび申やう、われは手なづち、あしなづち、むすめをいなだ姫と云ものにて候也、ちゝのらうおう手なづちはげんだゆうのしんとあらだれ、東海道のりよ人をま



〔花傳書二〕一座敷にてうたひの調子の事、小座敷にては平調よりうたひだし、雙調にあげてうたひとむるなり。

ひろまにては、雙調より黃鐘にうたひあげてとむるなり、もしはやしながくあらば、十番目ほどには盤渉にあげて可然候、さりながら是は當座のざしきの相應の調子なり、これを時の調子といふ。

〔世子六十以後申樂談儀〕一音曲のこと、音曲とは能のまやうね也、さればかんよう又此道也、音曲の上古と申さんは、五音は四まやより、りつりよさうをうたるべし、五音相通のことは、たゞならひ成ば、まゐるべき事のみならずといへ共、先有べき分さいは、まゆがくして、まゆうげんをば、いづれの調子こゑをもつていひ、かなしみをばいづれのこゑにていふと、道を分てしらすは有べからず、けいこの次第と云は、先わがこゑの正體を分別しての上のこと也、さて正路にもとづくべし、すぐ成かゝりは祝言也、是をぢたいとしてゆうげんのかゝり、れんばのかゝり、あいしやうむ常音など、其かゝり、うもん無文の心ねつきて、たけたる位にのぼるべし、一返に心をやりて、よをきらふべからざることを、能の十體に渡ることゝしるべきが如し、たゞ音曲はうつくしくさんになへるが上くわ也、又くせ舞かうたの差別有事を心得べし、さるがくはこうたかゝりのみにて、くせ舞はかくべつ也、然共觀阿白ひげのくせ舞をうたひしより、いづれをもうたふ也、然共たゞあげさげ計にて、うちなりたるくせ舞だうの音曲にてはなし、かれをやはらげたる也、されば、くせまひはくせ舞とうたひ、こうたにもまなゝの體有ことをわけて、又あふみでんがくにもちゝとかはれることを心え、能をもかき、ふしをもつくべし、いたりゝて能音曲の一心にきする所、萬徳の妙くわをひらく成就なるべし。○中

一くせ舞とこうたのかはり目、くせ舞は立てまふゆへに、ひやうしが本也、くせ舞には、わうしゆ

たひはまうげんよりはや亂曲になり候間、古人の申をかれ候事ども、皆はうぐになり候、たゞし世上如此候とて、此道をすつる事も有間敷事に候、よく／＼分別かんようなり、○中略

一ふしにかねの位といふ事あり、右の上下の心也、又字うつりに前をながく引は、のちをつむる、まへをよすればのちを長く引を、四寸六寸といへり、これは字づもりの心のかねなるによりて、かねの位といふ、たとへば六寸と六寸とあはせ候へば尺にはづれ候、諸もまへをひき、またおもしろがらせて、のちをもひけば、六寸と六寸になりてうたひしたるし、この用心のかねなり、然によりて六寸四寸に諸候へば、尺にあふ也、かるがゆへによつてなり、

一うたひのいきつきの事、女能などにあら／＼といきをつく事、見ぐるしきもの也、いきのつきやう、いかにもまづかにつきてよし、

一うたひに一字づめ二字づめといふ事は、一字つめて二字のふるを、一字づめといふ、又二字つめて一字のふるを、二字づめといへり、三つながらのふる事、寸にのび心のかねにはづるゝにより、うたひしたるし、返々きらふ也、

一文字をくりといふ事、ながき字二つつゝき候時は、まへのながき字をうたひけし、さきへはやくとりつけば、うたひかるし、これを文字をくりといへり、○中略

一音曲聲出口傳 一調 二機 三聲

調子をば機がもつ也、吹物の調子をねとりてきにあはす、まして目をふさぎて、いきを内へひきて、扱こゑを出せば、こはさき調子のなかより出る也、調子ばかりをとりて、きにあはすして聲をいだせば、こはさき調子にあふ事さうなく、調子をば機にこめて、こゑをいだすゆへに、一調子、二機、三聲とはさだむる也、また三調子をばきにてもち、聲をば調子にて出し、文字をばくちびるにてわかつべし、文字にもかゝらはぬほどの曲をば、かはのふりやうをもつてあひしらふべし、

集をつくりたり、これも一代集のかしらなり、さるによつてうたのみななみは古今集にこえたる事はなし、かるがゆへに歌道のあそびの後、此曲舞をうたへとあり、

一五音のまきうたひの大事、是にきはむる處の條々、先五音とは祝言、幽玄、戀慕、哀傷、亂曲、この五つのこゑのわかち也、よく心得べし、世間に諸手おほくありといふ共、五音に詠わけ候人はまれ也、五音たゞしくうたはずば、うたひ面白きといふ事有間敷なり、万事をすて、五音のたんれん心がけ肝要也。○中略

一第一祝言、この曲味はたとへばとしのはじめの御よろこびといへるがごとし、これはこまごましき事もなく、たゞ祝言と一體するのみなり、されば曲にいりほかなることなく、こゝろには祝言をふくみ、いらりと字性たゞ敷するゝとうたふなり。○中略

一第二幽玄、此曲味はよせいを本とす。○中略幽玄といへばとて、引はへてながゝ敷ゆふゝとうたふにはあらず、心のうちにゆうをもちうたふといへり、只、まうげんの長閑なる儀なり、殊に幽玄はものつよきを本とす、かへすゝゆうげんの二字、よく分別有べし。○中略

一第三れんば、此曲味は以前の幽玄のふかくなりたる也、よせいを思ふ曲味切なり。○中略

#### 一第四哀傷

此曲味は春の花もみなちりゝに成はて、野山も風の物すごき木々のこすゑ、あさちがはらのけしきを見るがごとし、そめゝつる色をつくしはて、ばうをくのあれたるに、むしのこゑかすかなるこゝろなるべし。○中略

#### 一第五亂曲

此曲はたけたる曲なり、うたひいまだいたらざるに、われとたけさせてうたふは、さらにきかれず、○中略是もまへゝの四音をすぐれてうたひ候ては、いかでか此らん曲となるべき、當時のう

朝の堪能なるに同じかりしが、謠をうたふ事は、いかにも叶ひがたき由申き、凡唐通辭共のよき口の者に限て、謠ばかりはうたふ事成がたし、此調子いづれの國にもなき事成よし唐人も申き、〔人倫訓蒙圖彙〕<sup>中</sup>謠 ふかあみがさにつれ謠、いかさまだしは、まさいらしく、耳をかたぶけて聞ば、其まゝかたはらのいたひもあり、一向こぐちからさいく成もあり、中にも顔のかは念の入たるは、大道にてあいてなしに能をする也、秦平の御代とて、たれとがむる者もなく、すきゝのむしがあつて、足を留てみてゐる衆生もあり。

〔花傳書〕<sup>三</sup>抑謠といつは歌道より出るなり、先難波づの淺香山のことの葉によそへて、長歌をつづけ、それにふしをつけてうたひと號せり。<sup>略</sup><sup>中</sup> 貴人高人の御所望のときも、俄うたひつまらず、おりにふれたる謠口にいづる物なり、第一に字章、いかふ文字うつり、のべちやめ、ゆる、ふる、はつす、いる、くる、あげさげ、一字つめ、二字つめ、三字あがり、三字さがり、三つひき、文字をくり、ならぶふし、たつみあがり、ほど拍子、きつてきらすふし、なまり、あたる、はる、其外次第道行、付ふし、せれふかゝるふし、さしごゑ、さしごと、一せい、小うたひ、いろ、言葉、曲舞上は、ろんぎ、入は、あひのうたひ出は、きり、かくのごとくのうたひわけ、みな人つねに是をうたふといへども、こゝろをしりてうたふ人なし、それゝのこはいろをうたひわけ、五音たゞしくうたふ事、第一のならひなり、又十體といふ事あり、是あまりいらざる物なり、高上のまへにてうたひわけきかせ候はでは、筆には書がたし、たゞ五音といふ事、謠わけねば面白きといふ事なし、謠やうの事、あらゝこれにあらはすとこゝろの條々如此。<sup>略</sup><sup>中</sup>

一船中のまひの祝言は、自然居士の曲舞養老のきりなり、

一歌の會連歌の後などに、謠ひ是あらば、蟻とをし、の曲舞是可然候、其いはれは紀貫之は、世にかくれなき歌の名人にて、御書所をうけたまはり、いにしへいまでのうたのしなをえらび古今



す、元亨釋書の安珍が傳に、その事をゑるして安珍がことゝせり、日高川の繪詞あるひは道成寺の繪詞ともいひて安珍がことを繪がけるもの三卷あり、又賢學物語とて、賢學といふ僧のこととして作れる畫卷一卷あり、その道成寺のことを謠曲に作れる時に安珍にまなごの庄司が娘清姫が戀慕するよしに作意して、かつ許多の脚色をそへたり、おもふにまなごは氏にはあらで異名なるべし、あまりに娘をふかく寵愛するといふ心にて、愛子の庄司とは名づけしなるべし、されば謠曲の文句にも庄司娘を寵愛のあまりになどいふこともあり、

〔慶長日件錄〕慶長八年九月二日乙卯當番早々參、○中今日、昨日壁書之趣被仰出、○中

又爲私定置條々之事、○中

一各こうた、まひ、うたひ、并雜人共わるぐるひ停止事、○中

右條々隨分互申合可相嗜候、其上於違背者各迄可申達候也、

慶長八年九月二日

各連署加判形

廣橋大納言殿

勸修寺宰相殿

〔後は昔物語〕京の丸山の貸座敷杯に諷講といふ事あり、尤素人にて諷を好む人、いひ合せて番組を作り、座敷を借りて諷ふ、蔭の間或は縁がはにもあれ番組をはり、何シテ誰ワキ誰など張出し置て、蔭にて謠ふに、諷を好ける人、けふは丸山に諷講ありといふ、行て聞んとて、好きの人といひ合せ、辨當杯こしらへて、一間蔭あるひは縁がはにて、其素諷を六番も七番も聞て歸ると也、これらの心の人は、人多き江戸には一人も有べからず、彼の松の内聞て居たる如き人心よりも、猶堪忍強き事也、これらを聞ては、ちと耻敷も思ふべき也、

〔紳書〕一今井元昌物語に、六官と云唐人は、本朝の語によく通じて、小歌淨瑠璃三味線なども、本

凡謳出於源氏物語及和漢軍記者多矣、如高砂以延喜帝稱當代、如羽衣本於遍照僧正之諷詠、如三輪預子玄寶僧都之類、皆近世製也、太子<sup>○</sup>聖製三十三番者何耶、恐此鑿說矣、<sup>○</sup>中如今四座曲節有、定格家傳、鍛練甚難、爲遊藝之上、而貴賤老壯必用之、

〔猿樂傳記上〕後嵯峨院の御宇に、往昔村上帝の御文庫に納メ置給ひし十六章の謠物の次第、叙聞に達し置たるを思召出され、謠舞へき物なりとて、上代よりの樂人の頭人たる、大和圓滿が家の者に賜ふ故に、音曲の鳴物を添て、今の能を仕始たり、此圓滿の家といふは、聖德太子、倭國の音樂舞樂を定め給ふ時、川勝大臣を以て、其事に預らしめらるゝに、付子孫へ傳へて代々樂頭たり、故に今圓滿に謠舞へき由を仰有し、川勝大臣の時より、圓滿猿樂の家にして、とう／＼たらしの翁渡し、家に傳るを以、其吟聲にて十六章の謠物を誦ひ、其謠を囃す笛鼓にて是を囃して、舞曲を取立たり、其吟聲は僧家に伽陀と云呪讃の吟聲を元として、移し來る處也、是太子の神道習合を始給ふによる也、<sup>○</sup>中其十六章の謠物、今の曲舞計也、一芭蕉、二東北、三源氏供養、四錦木、五何、六何、七八九十何々と、十六章ありしを、圓滿が是をはじめてより、前にさし、次第の文段を添跡に論義、切り謠迄の文句を足し、今の一番謠と成事珍らしく、世に翫ぶを、以其後一休和尚、山姥、江口を作り、段々一番物の謠出來たり、後來其一番物百番に及び、又二百番と成、三百番に及びて、其餘近來は六七百にも及ぶ、觀世家にて遊行柳出來、朝鮮陣の時、肥前の名古屋の御陣城において、芳野詣、高野詣、明智等の五番、太閤御慰能として出來たり、羽衣は權現樣駿府に御座の時出來、角田川は關東御入國の後、彼地の遊民夫婦して、舞に似たる座敷藝を、渡世とせし者仕始たる由也、

〔鹽尻二〕一猿樂の謠に、源氏供養といふは、源氏物語の表白を取り、略して曲舞に作りし物也、

〔世事百談〕道成寺

道成寺の謠曲の安珍清姬がことは、もと法華驗記に見えて、寡婦と旅僧の事として名をしるさ

錦戸 寶生

加茂物狂 寶生、喜多、

鳥追舟 寶生、喜多、

滿仲 寶生、喜多、

土車 喜多

籠祇王 喜多

水無瀬 喜多

飛鳥川 喜多

二人祇王 喜多

定家 觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、大原御幸 觀世、寶生、  
金剛、喜多、 當摩觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、遊行柳 觀世、寶生、  
金剛、喜多、

藤戸 金春、金剛、喜多、ハ太コ有

觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、景清 觀世、寶生、  
金剛、喜多、俊寛 觀世、寶生、  
金剛、喜多、鉢木 觀世、寶生、  
金剛、喜多、角田川 觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、石橋太コ 觀世、寶生、  
喜多、道成寺太コ 觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、

戀重荷太コ 觀世

檜垣 觀世、寶生、  
金剛、喜多、木賊 觀世、寶生、  
金剛、喜多、伯母拾太コナシニモ 觀世、寶生、  
金剛、喜多、卒都波小町 觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、關寺小町 觀世、金春、寶生、  
金剛、喜多、鸚鵡小町 觀世、寶生、  
金剛、喜多、望月 觀世、寶生、  
喜多、

驚若年ニテ相動 喜多、寶生、

〔嬉遊笑覽五歌〕寛正の頃興行ありし猿樂能の諸の名に出雲十柄、鶴次郎、打入曾我、梶原二度のか

け、星宮など書しもの有り、今の内外二百番といふは見えず、今その名の轉じたるか、廢れたるか、

えらずといへり、按ずるに、今二百番の外、百番の内、似たるものあり、十柄は大端といふあり、外

里の音とはかはりたるものと見ゆ、其諸曲共、

みて知べし、其他もあつたものと見ゆ、覺悟せす、

〔隨一小謠繪抄〕一鳥屋野といへる謠は、親鸞上人四百五十五年の御忌に作られたる能なり、一向

謠曲

〔和漢三才圖會十六卷〕能略○中

謳齊聲而歌也、不用絲竹相和、徒歌曰謠。本字謳。○中略

枕慈童 同	寶生	柱上 同	寶生、金剛、喜多、寶生	一角仙人 同	金春、寶生、喜多、寶生
檀風 同	寶生、喜多、寶生、金剛、喜多	大蛇 同	寶生、喜多、寶生、喜多	鷄龍田 同	寶生
飛雲 同	喜多	須麻源氏 同	寶生、喜多、喜多	愛宕空也 同	喜多
鱗形 同	喜多	現世鶴 同	喜多	萬城天狗 同	喜多
天鼓 同	觀世、金春、寶生、ハ太コナシ	吉野天人 同	觀世	關原與市 同	寶生、ハ太コナシ
大瓶猩々 同	觀世	梅枝 同	喜多、寶生、喜多、寶生	猩々 同	金剛、喜多、寶生、喜多、寶生
富士太鼓	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	蟬丸 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	花篋 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
班女	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	柏崎 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	三井寺 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
櫻川	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	浮舟 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	雲雀山 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
玉葛	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	東岸居士 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	花月 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
自然居士	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	善知鳥 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	安宅 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
蘆刈	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	春榮 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	盛久 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
通小町	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	元服曾我 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	橋辨慶 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
小袖曾我	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	大佛供養 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	夜討曾我 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
小督	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	住吉詣 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	忠信 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
草紙洗	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	放下僧 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	松虫 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
籠太鼓	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	歌占 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	七騎落 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
高野物狂	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	竹雪 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生	三山 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生
接待	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生			弱法師 同	金剛、喜多、寶生、金剛、喜多、寶生



綾鼓 同	寶生	草薙 同	寶生	豐干 同	寶生
千引 同	寶生	求塚 同	寶生喜多	謹法 同	寶生
照君 同	金剛喜多、 金春寶生、	常陸帶 同	寶生	三笑 同	寶生喜多、 寶生、
藤榮 同	金剛喜多、 金春寶生、	雨月 同	金剛喜多、 金春寶生、	雷電 同	寶生、金剛、 喜多、
谷行 同	金剛喜多、 金春寶生、	國栖 同	金剛喜多、 金春寶生、	胡蝶 同	寶生
融 同	金剛喜多、 金春寶生、	大江山 同	金剛喜多、 金春寶生、	藍染川 同	觀世、寶生、
舍利 同	金剛喜多、 金春寶生、	土踰 同	金剛喜多、 金春寶生、	第六天 同	觀世
皇帝 同	金剛喜多、 金春寶生、	大會 同	金剛喜多、 金春寶生、	龍虎 同	觀世喜多、
野守 同	金剛喜多、 金春寶生、	烏帽子折 同	金剛喜多、 金春寶生、	海人 同	金剛喜多、 金春寶生、
熊坂 同	金剛喜多、 金春寶生、	禪師會我 同	喜多、寶生、	調伏會我 同	喜多、金剛、 寶生、
西行 櫻 同	金剛喜多、 金春寶生、	正尊 同	喜多、寶生、	項羽 同	金剛喜多、 金春寶生、
唐船 同	金剛喜多、 金春寶生、	鶴飼 同	金剛喜多、 金春寶生、	鐘馗 同	金剛喜多、 金春寶生、
山姥 同	金剛喜多、 金春寶生、	阿漕 同剛ハ	阿古木、金剛、喜多、	鐘馗 同	金剛喜多、 金春寶生、
卷絹 同	金剛喜多、 金春寶生、	邯鄲 同	金剛喜多、 金春寶生、	葛城 同	金剛喜多、 金春寶生、
小鹽 同	金剛喜多、 金春寶生、	龍田 同	金剛喜多、 金春寶生、	雲林院 同	金剛喜多、 金春寶生、
百萬 同	金剛喜多、 金春寶生、	三輪 同	金剛喜多、 金春寶生、	蟻通 同	喜多、金剛、
威陽宮 同	金剛喜多、 金春寶生、	車僧 同	金剛喜多、 金春寶生、	鴛 同	金剛喜多、 金春寶生、
羅生門 同	金剛喜多、 金春寶生、	張良 同	金剛喜多、 金春寶生、	鐵輪 同	喜多、寶生、
小鍛冶 太コ	金剛喜多、 金春寶生、	合甫 太コ	觀世	松山鏡 同	金剛喜多、 金春寶生、
錦木 太コ	金剛喜多、 金春寶生、	葵上 太コ	金剛喜多、 金春寶生、	舟橋 太コ	金剛喜多、 金春寶生、

## 二番目

田村

金剛喜多、金春、寶生、

清經

金剛喜多、金春、寶生、

忠度

金剛喜多、金春、寶生、

兼平

金剛喜多、金春、寶生、

八島

金剛喜多、金春、寶生、

賴政

金剛喜多、金春、寶生、

經政

金剛喜多、金春、寶生、

敦盛

金剛喜多、金春、寶生、

船

金剛喜多、金春、寶生、

巴

金剛喜多、金春、寶生、

生田敦盛

金剛喜多、金春、寶生、

俊成忠度

金剛喜多、金春、寶生、

知章

金剛喜多、金春、寶生、

碓渚

金剛喜多、金春、寶生、

實盛太

金剛喜多、金春、寶生、

通盛同

金剛喜多、金春、寶生、

朝長同

金剛喜多、金春、寶生、

## 三番目

東北

金剛喜多、金春、寶生、

野々宮

金剛喜多、金春、寶生、

佛原

金剛喜多、金春、寶生、

夕顔

金剛喜多、金春、寶生、

芭蕉

金剛喜多、金春、寶生、

井筒

金剛喜多、金春、寶生、

源氏供養

金剛喜多、金春、寶生、

采女

金剛喜多、金春、寶生、

江口

金剛喜多、金春、寶生、

松風

金剛喜多、金春、寶生、

熊野

金剛喜多、金春、寶生、

二人靜

金剛喜多、金春、寶生、

楊貴妃

金剛喜多、金春、寶生、

半部

金剛喜多、金春、寶生、

千手

金剛喜多、金春、寶生、

吉野靜

金剛喜多、金春、寶生、

空蟬

金剛喜多、金春、寶生、

祇王

金剛喜多、金春、寶生、

杜若太

金剛喜多、金春、寶生、

羽太

金剛喜多、金春、寶生、

智願寺太

金剛喜多、金春、寶生、

六浦太

金剛喜多、金春、寶生、

藤太

金剛喜多、金春、寶生、

陀羅尼落葉太

金剛喜多、金春、寶生、

## 四番目五番目

善界太

金剛喜多、金春、寶生、

舟辨慶同

金剛喜多、金春、寶生、

鞍馬天狗同

金剛喜多、金春、寶生、

黒塚

金剛喜多、金春、寶生、

紅葉狩太

金剛喜多、金春、寶生、

女郎花太

金剛喜多、金春、寶生、

春日龍神太

金剛喜多、金春、寶生、

殺生石太

金剛喜多、金春、寶生、

名  
 〔同見〕能名 三輪 御裳 陸盛 身賣 三井寺 〔同志〕能名 舍利 猩 慈童 嶋廻 白  
 鬚 俊寛 師子王 重衡櫻 死體送 志賀忠則 四位少將 自然居士 酒點童子 敷地物  
 狂 俊成忠則 七崎落忍 〔同毛〕能名 守屋 盛久 求塚 文覺 〔同勢〕能名 蟬丸 是害  
 昭君 先帝 鐘馗 誓願寺 殺生石 千手寺 千手重衡 西王母 〔同具〕能名 須磨 鈴鹿  
 山 角田川 菅生物語

## 〔諸諸流名寄〕脇能

高砂 太口 觀世、金春、寶生、金剛喜多、寶生、老松 同 金剛喜多、金春、寶生、白樂天 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 加茂 同 觀世、金春、寶生、金剛喜多、寶生、難波 同 金剛喜多、金春、寶生、白髭 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 玉井 同 觀世、寶生、金剛喜多、寶生、水室 同 金剛喜多、金春、寶生、養老 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 右近 同 觀世、寶生、金剛喜多、寶生、吳服 同 金剛喜多、金春、寶生、志賀 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 竹生島 同 觀世、金春、寶生、金剛喜多、寶生、弓八幡 同 金剛喜多、金春、寶生、寢覺 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 江島 同 觀世 代主 同 觀世 九世戸 同 觀世、寶生、  
 逆鋒 同 觀世 和布刈 同 金剛喜多、寶生、嵐山 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 大社 同 金剛喜多、寶生、鶴龜 同 月宮 殿喜、生、金剛喜多、寶生、東方朔 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 西王母 同 金剛喜多、寶生、輪藏 同 觀世、寶生、道明寺 同 金剛喜多、金春、寶生、  
 放生川 同 金春、寶生、淡路 同 金春、金剛、佐保山 同 金春、  
 源大夫 同 金春、寶生、富士山 同 金春、金剛、鶴祭 同 金春、  
 岩舟 同 切替 觀世、金春、寶生、室君 同 金春、金札 同 切替 觀世、金春、寶生、  
 繪馬 同 寶生、金剛、伏見 同 寶生、松尾 同 寶生、  
 浦島 同 寶生 御裳濯 同 喜多

金春、金剛、喜多を下掛りと云也、皆能大夫と稱す、略下

〔猿樂傳記〕上、四座并喜多座の始等の事

金春、金剛は、奈良に住居して、京都の御用には罷登り相勤、觀世實生は、京住して居ながら直に相勤る、是よりして、觀世實生を上掛りと云、金春、金剛を下掛りと呼ぶ、

〔甲子夜話〕九十五、亥コノ三月、丁觀世大夫が宅ニ能ヲ見物ニ往テ、弟ノ四郎ト四方山ノ物語セシ中、

予○松浦清云フ、四座ノ流ヲ世ニ上掛リ下掛リト稱スルハ如何ナル故ゾト問ヘバ、コレハ某が先祖

モ實生ノ先モ、京ニ住シテ、時ノ公方ノ能舞ノ事ヲ承ル、金春ト金剛ハ奈良ニ在テ申樂ヲ爲ス、因

テ俗ニ、近キヲ上ト云ヒ、遠キヲ下ト云シヨリ起ルト、然ラバ喜多ノ家ハト問ヘバ、是ハモト金剛

ノ弟子ナルヲ、憲廣○鎌川ノ御寵遇ヲ得テ、適別ニ一家トナル、此時御用ノ爲トテ、假面ヲ金剛ニ

乞シニ、コレハ重代ノ物ユエ、家ヲ離シガタシ、其代リニトテ、金剛ガ俸祿ノ中ヲ分チ與フ、コレ今

喜多ノ有スル所ナリト、

〔堺鑑〕下、宮尾道三

今春及連ノ家人也、此地ニ來テ上源町ニ住ス、今春家ノ謠ノ中ヨリ、又一流謳出セルニ依テ、是ヲ

宮尾流トテ世ニ用、

能樂曲名

〔運步色葉集〕班女ハシメ能名、巴國ハセ同、羽衣ハコモ同、〔同〕道能名、追松オヒマツ、小鹽コシヅメ、負燒オノヤキ、女郎花オウゴウハナ、姨捨山オヤサツヤマ

隱岐院カシノ幸コト〔同〕多檀風タナフウ能名、武文タケモリ同、當麻タケマ同、大會オホエ、高砂タカサ、谷行タニユキ同、竹雪タケユキ同、田村タムラ同

唐船カフネ立田タテタ同、龍田リウテン、玉葛タマカズ同、道明寺ミチアカサ能名、道成寺ミチナリ同、太刀堀タチウリ、丹後物狂タニナリ、短尺忠則タナカ同

〔同〕久黑主クロヌシ能名、大伴オホトモ、黑塚クロヅカ同、皇帝オウダイ同、花月ハナツキ能名、草薙クサナギ同、〔同〕婦二人閑フタヒトヒラ能名、〔同〕阿能名、朝顔アサガハ

葵上アヅマノ、嵐山アヲヤマ、敦盛アツシ、案山子アノヤシ、蘆荊アヲ、綾鼓アヤヅミ、合火アヒ、蟻通アリトウ、藍染川アイゾメガハ、安宅判官アヲケハツカン、安達原アヲハラ、阿

古貴コキ〔同〕佐能名、犀鷺シシ、實盛サツシ、貞任サダニ、三咲ミサキ、佐衣サエ、佐保山サホヤマ、双子洗フタゴシ、西行櫻サイギョウオウ〔同〕遊雪鬼ユキキ能



は今の代の猿樂などに、あふみふし、やまとふしなどいふがごとし云々、是近江猿樂、大和猿樂、詔のふし違ひし也。

〔猿樂傳記〕上四座并喜多座の始等の事

古代は猿樂國々に有之、十六家あり、丹波猿樂と云も、今の者共多く丹波に住居して、京都より其業を聞て招る、時は出京し、國大名より招る、時は、其國へ罷越、滯居して、又古郷に歸り住居す、今春金剛を始、觀世、梅若、春日、長命等、彼家十六家也、喜多十大夫が家は此外也。

〔後愚昧記〕永和四年六月七日、今日祇園御興迎也。○中大樹○足利構棧敷○四條東見物之、件棧敷、賀

州守護富樫介經營、依大樹命也云々、大和猿樂兒童○釋觀世之猿被召、加大樹棧敷見物之、

〔春日社參記〕廿八日○寛正四年九月、足利義政春日社參詣後宴とて、けふは又きのふの御棧敷に引かへて、うつくし

き杣木どもにて、白く作りみかける所に、廿五日のやうに、やまと猿樂の四座とかや、さまゝの興を盡して、はてには田樂など有て、子の刻ばかりにぞ還御なりける、

〔當代記〕慶長十年七月七日、八日、九日、能有之、初二日、觀世大夫行之、後一日、ハ日吉梅若、八大夫仕之、此三人ハ丹波猿樂也、

〔人倫訓蒙圖彙〕能、能といふ事、むかしより有といへども、其傳記たしかならず、百一代後小松

院の御宇、鹿苑院相國公○義滿足利の代に、觀世世阿彌といふ者、公方家の能大夫として、盛に是をも

てあそび、一家をたて、觀世流あり、今にいたつて第一也、觀世より今春保生、わかれ、今春より金

剛座、わかれて、是を四座といふ猿樂といふ事は、神代猿田彦の餘流のいひなりとかや、

〔明良帶錄世職〕四座猿樂

御能役者と稱す。○中室町將軍家はを好み玉ふ、此時觀世、音阿彌實生等、此曲を傳へて、賞美を得たり、此曲に長じたるもの金春、金剛、及び喜多氏、また一流之曲を傳ふ、觀世實生を上懸りといひ、

時長者になさる、新座、本座、法勝寺の三座の長者也、道の面目、何事かこれにしかん、略下

〔花傳書〕夫申樂延年のことわざ、其源を尋るに、この國にはじまるところは、地神五代あまてる御神の御時に、天の岩戸の神遊し給ひし時、八百万の神たち、たかまが原にあつまりたまひ、此曲をつくり、御はじめあつて、岩戸のまへにてかぐらといふ事をそうし給ふ、其神樂成就して天照皇太神宮岩戸を出給ひ、日本あきらかになるより、此かた今に此曲繁昌也、されば目出度曲なればとて、其風をつたへまなふといへ共、代へた、りぬれば、其風をまなふ事及びがたし、かぐら管絃は役者あまたなれば、諸人もてあそぶ事なりがたし、近代あまたの役者を略し、なり物のしやうかをかぞへ、のふといふ事を作り初也、其みなかみをたづぬるに、御門より秦川勝に仰て、天下安全のため、又は万人快樂の爲に、おもしろき曲をつくり候へとありしかば、川勝承て其とき十三番の能を作りはじむる也、然其今のやうなる能の心もなく、和歌を上た、打はやして、一曲一かなで一座の遊びまでにてありつるを、中比天下に竹田はつとりとて、兩人曲の名人ありつるが、此曲を再興し、其時彼兩人六十六番ののふを作り、色々の曲をそへたる也、今にかすの能と申は是也、竹田は今春大夫なり、はつとりは當家世の源なり、されば神代のまなび、はやしはかつら男のよそほひをにせ、うたひは神歌を表せり、然に神事にのふをすると云も此儀也、

〔二百拾番諸目録〕作者之人數

結崎治部奏清次

本氏平、服部、雅名、觀世丸、後三郎、落、藝、號、阿彌、宗、音、應、永、十、三、丙、戊、五、月、十、五、日、死、五、十、二、歲、

〔運步色葉集〕

申樂

大和 猿樂 近江

〔尺素往來〕爲勸進

略 中 和州江州之猿樂、各可播所能候、

〔貢丈雜記〕

二品 一近江猿樂と云事、舊記に有り、猿樂の諸のふしも所々にて違ありし也、古今童蒙抄云、文明八年一條

古今集大歌所御歌也、あふみふり、これはあふみの國より出たる曲也、曲の字をふりとよむ、たとへ

覽太子所筆申樂延年記告群臣曰上敬諸神下安庶民莫過於申樂即河勝遠孫秦氏安重興此伎又有紀氏某爲氏安女弟之婿故二人共俱起之日々舞之於大內殿前天皇以六十六番事繁而一日難徹故抽其事爲三番稻積翁代積翁父丞是也自此傳之至氏安二十九世之孫是號金春大和州圓滿井之座是也太子所親作之鬼面秘在此座於是大和州有四座外山結崎坂戸圓滿井是也奉春日神事江州有三座山階下坂比叡是也奉日吉神事河內有新座丹波有本座攝津州有法成寺此三座奉賀茂住吉神事伊勢州有和屋勝田主門此三座奉大神宮事云略下

〔世子六十以後申樂談儀〕一やまとさるがくはかうかつよりすぐにつたはるあふみはきのかみとて有し人のする也さてきうち也時代能々たづぬべしやまとたけだのざとあいのざはうしやうのざとうち入く有たけだはこんほんのかうかつよりのめんなど重代有てあいのざは先は山ださるがく也伊賀の國服部の杉の木と云人の子息おたの中と申人やうしにして有しが京にてらくいばらに子をまうく其子をやまだ小みの大夫と云人やうして有しが三人の子をまうくほうしやう大夫生一觀世三人此人のながれ也彼山だの大夫は早世せられし也こんがうはまつたけとて二人かまくらよりのぼりし者也名字なし猶たづねてきしおくべしあふみはみましのざ久座也山科は山科と云所のかせ侍成しがみましがむすめと加してさるがくに必ざして山科の明神春日にて御座歟籠て進退をいのるからすしやだんのうへより物を落す見ればおきなめんにてまします此うへはとてさるがくに成ちやしをば山科におきをととをば下さかにをき三男をばひえにをく其より三座のながれと成然共山科そうりやうなれば日吉の神事いまに正月朔日より七日にいたるまで山科獨してをきなをす彼めん也中今のいはどうをうちしもさがと云名字をのぞきて日吉と號す近比山よりのげちといへ共無念成こと也みまし大もりさかうと下三座丹波のまゆくはかめ山の皇帝の御前にて申樂をせし

〔雍州府志古八〕芝居略○中 一種有猿樂、或謂謠樂。古所謂散樂乎、今謂能。各依施其所能之藝能也。猿

樂神代猿田彥之餘流也、然彼徒忌猿字、是謂神樂之變風、而除神之示篇猿代申字而用之、

〔甲陽軍鑑品五第十三〕平井の旗本侍衆、大小共に行儀惡成、武具の支度もやめ、亂舞法度あれ共、表む

きは、小謠を一ツうたはね共屋敷の裏に、座敷を立、日々夜々に亂舞を張行す、

〔陰德太平記四十七〕輝元隆景元長開陣附古志降參之事

元就朝臣老病重ヲセ給ヘバ、歸テ針石湯液ノ孝ヲ可被盡トテ、元龜元年八月下旬、輝元隆景、元長

雲州平田ノ陣ヲ立テ、藝州ヘ歸給ケルガ、路ヨリ杵築大明神ヘ社參有テ、略○中 捧グ物千拝許ニ及

クレバ、唯寶ノ山ノ動キ出タルニ不異千家、北島ノ兩國造、社人等ニ鼓舞ノ堪能共多クレバ、亂舞

可相催ナド申シケレド、元就ノ御不例無心元トテ、翌日早天ニ同所ヲ立テ歸リ給、

○按ズルニ、亂舞ハ亂雜ニシテ章ナキノ謂ナリ、舊クハ五節淵醉、其他酒宴等ノ時ニ、之ヲ爲シ

シガ、後世ニハ能樂ヲ正或ハ亂舞ト稱セシナリ、

〔翰林蒔蘆集六〕觀世小次郎畫像

秦河勝者、化生乎人王三十代欽明天皇之御宇者也、天皇一夕夢有神童言曰、我是秦始皇之後身也、  
以有緣生於日域、請爲臣矣、時大和州有洪水之變、初瀬川大漲、有大甕流來、止于三輪明神厩前、土人  
開之視、則有一男子、身體如玉、土人奏之、天皇曰、所夢見者此人也、舉美之、賜姓曰秦氏、其才智與年相  
長、至十五歲授大臣位、而奉五朝、以至推古女主之時、豐聰太子監國、祭祀天地神祇、以布安國利民之  
政、因作六十六番之面、命河勝弄假觀、其途於橘內裡紫宸殿前、令作此伎、由是四海波穰、萬民康樂也、  
太子以其神樂折神字名之曰申樂、說文云、申亦神也、大歲在申、以猿配之、故後世稱之曰猿樂、以爲孫  
供奉之類也、錯矣、河勝遂入攝津州、遊難波浦、乘一小舟任風之所行、而舟浮西海、著播磨岸、土人聚觀、  
其形非常之人、靈威可畏矣、共謀立神祠祭之、曰大荒明神、其後人王六十二代村上天皇萬機之暇、觀



遊宴ヲ盡シ活計シケルガ、猿樂ハ是退齡延年ノ方ナレバトテ、御堂ノ庭ニ棧敷ヲ打テ、舞臺ヲ布種々ノ風流ヲ盡サントス、近隣ノ貴賤是ヲ聞テ、群集スル事、侈シ、彦七モ其猿樂ノ衆也クレバ、様ノ裝束共、下人ニ持セテ、樂屋ヘ行ケルガ、略下

〔倭訓〕前編二十三のう。神佛の事より以下、万の能ある事をつゞりて、舞となしたるより、能とは名けし也、ほど／＼につけて能は必ず有べき也と、體源抄にもいへり、將軍義滿公の時に、觀世世阿彌といふものより起れりといへり、其始め神樂になぞらへ神事に勤む、よて大社に凡て其座あり、觀世は秦川勝が裔にて、樂家也とぞ、又太平記に毎日酒肴を調て、道々の能者どもを召集めて、其藝能を盡させて、座中の興をぞもよほしけると見え、三代實錄に、雜伎散樂競盡、其能と見えたる意なるべし、

○按ズルニ、能トハ神樂ノオノ男ノオト同ジク、藝能ノ意ナリ、

〔猿樂傳記〕上、扱此猿樂の藝を能と唱ふる事は、圓滿が家に傳へたる、翁渡しを眞初に舞ての上、能を始む故、翁渡しを面とする事シテの業にあり、能に移ては、脇師先へ出て、勤る次第を、一番目の能を脇能と呼、脇師はシテに續ての藝なるを以、翁なしといへる習有て、眞初に是を勤、此時はシテの翁渡しを略してせず、依之シテの業を貫首と立て、能化に比し、其外の役者を所化に准ふよりして、舞ふ處を能と唱ふる故に、能と號す、

〔玉勝間〕九能といふ樂

西宮記相撲條に、相撲了能優一番とあり、能優は猿樂のたぐひと聞えたり、近き世に能といふ名はこれなるべし、此能字は音態なるべきに、のうといふはむかしより誤れるにや、

○按ズルニ、今流布スル所ノ西宮記ニハ、東部王記天慶二年閏七月十三日ノ條ヲ引キテ、相撲了俳優一番トアリ、

といふは、西宮記四の巻、相撲のくだりに、種々雜藝とあるところに、左見蛇樂、散樂、右犬吉干とある、この四くさの藝などなり、同記に、散樂侍臣五位六位重相校走井弄玉と見えたるにて、そのさまおほよそにはまられつ、をかしかりつるよしは、三代實錄三十八の巻に、右近衛内藏富繼、伎善散樂、令人大笑とあるにておしはかれつ、蛇樂、犬は蛇のまね、犬のまねをせしにぞあらん、吉干はそのやうさらにまられず、今の世には能といふわざをぞする、そのわざをかしからぬを猿樂といふは、此能にそひたる狂言の藝は、いとをかしければ、それを猿樂といひしを、後に能のかたには、いひうつせるなるべし。

〔北邊隨筆〕猿樂

東鑑建久五年、參猿樂、小法師中太參施藝上下解頤云々、江次第標注に、散更猿樂也とあり、いかなるわざをしつるにかあらん、上下解頤とあれば、今の世の狂言といふ物のごときわざにや、されど今は能といふ方をば、かへりて猿樂とはとなふるなり、物語ふみどもに、さるがう、さるがうことなどいふはこれなるべし、宇治拾遺には、伶人の中より舞ひたるよしみゆ、もと能狂言といふ名も、田樂よりおこれる事とおほしく、文安田樂能記といふものに、次刀玉、玉阿、今阿、兩人勲之、次能藝一番、熱田のまゆんかう門の能、二番如沙汰の能などみえ、人数をあげたる名の下に、た庭の能、たれ狂言などみえたり、能以後、於會所舞音曲御見聞、福若丸は御座の砌に候す、自餘は在廣庇、裝束をば著して、居ながら詞をいひかはして、表能之形、此風情亦有興、狂言相交之、兩三番松阿勤之云々など見えたり、

〔太平記二十三〕大森彦七事

暦應五年ノ春ノ比、自伊豫國飛脚到來シテ、不思議ノ註進アリ、其故ヲ委ク尋レバ、當國ノ住人大森彦七、盛長ト云者アリ、○中此大森ノ一族共、細川卿律師定禪ニ隨テ、手痛ク軍ヲシ、楠正成ニ腹ヲ切セシ者也、サレバ其動功異他トテ、數箇所ノ恩賞ヲ給リテ、ンゲリ、此悦ニ誇テ、一族共様々ノ

樂記形勾當之面現<sup>おもてあらは</sup>早戰事之皮笛<sup>かわふエ</sup>目舞之翁體<sup>おきなみづか</sup>巫遊之氣裝<sup>きさう</sup>貌京童之虛左禮<sup>きやうどうのきやうざれい</sup>東人之初京上<sup>とうじんのかきやうじやう</sup>なほあまた載たり源平盛衰記にも猿樂と申はおかしき事をいひつゝけて人を笑かし侍るぞかしといへり後世にだうけと云是なり<sup>略</sup>○中根元いやしき業なる故にや順德帝の御抄には猿樂のごとき庭上に参ることを止むべしと書せ給ひ明月記には下衆猿樂を召るゝ先々此事なし仍只侍猿樂を可召といふこと見えたり下衆猿樂とは其家をたてる猿樂なり今も同例にて朝廷へ参ることなしとぞ寛喜の頃より後猿樂衰へ北條執權の末京都將軍の初までは田樂のみ世に聞えて猿樂の沙汰はなかりしが貞和五年に四條の橋を渡さんとて新座本座の田樂能くらべをせし時に始て日吉山王の示現なりとて猿面を著せし猿樂を舞出せしと太平記に見えし是より又田樂は衰へ猿樂盛に行はるその後さまゝの事作り添て謠といひ能といふ事に成し古雅なることはなく散樂といひし時の残ると見ゆること更になし是貞和以來作出せし故なるべし職人盡歌合に猿樂又曲舞まひといふものゝ歌又判詞を見るに今の狂言といふものぞ貞和已前の猿樂といふものなるがごとし昔の猿樂今の狂言に轉せし事ある歟<sup>按</sup>職人盡<sup>職人盡</sup>歌判詞<sup>歌判詞</sup>ともに古き散樂とおほしき事<sup>事</sup>も見<sup>見</sup>古き猿樂は今の狂言なるべきは別に證を求むるにも及ばざるべし

〔松の落葉〕猿樂

さるがくのはじめは猿のまねしてをかききわざしけるよりさる名はいひつらんさてのち此たぐひのをかしきわざ何くれといできぬれどそのおやなるゆゑにすべてをかききことするを猿樂といふやうにぞなりにけるそは宇治拾遺に陪従はさもこそはといひながらこれは世になきほどのさるがくなりといへるにてあるべし陪従のをかしきことしたるを猿がくとはいへるにてことに猿樂といふわざしたるにはあらずさてさるがくのとぐひのをかしきわざ

ふ兩説は誠としがたし用るにたらず東鑑卷十四云、參、猿樂、小法師中太丸、飾、上、解、頃云々、是、今ノ狂言師ノ所作ノ類ナリ、

一猿樂と云は、散樂ノ轉語也。

轉語トハ、詞ノ也、さんかくをさるかくといひ違へたる也。散樂とは正

樂にあらずるを云也。三代實錄に内藏宮繼長尾米繼伎善散樂、令人大咲とみえたり。古ノ猿樂は人に笑らはする事を其藝とする也。今の狂言師は古ノ猿樂ノ本體を藝トスル也。今ノ能ト云フ物ハ、既に鎌倉の末の代比より始る歟。大森、康七が能興行、事、太平記見、東山殿ノ比より彌盛になりて、古の猿樂の風變じたり。古の猿樂は人を笑はす也、即散樂なり、猿が舞始しといひ、又正樂にあらずる故、猿の字を付るといふ説、前に記したれども用ゆべからず、

〔賤者考〕猿は人眞似をよくする物ながら、人ならねば思ふさまならぬが、中々にをかきより、をこ事をさるがふといふなり。○中此語に字を充て、猿樂とも申樂ともかけるは、田樂に分たひとなりしを、後には猿といふ字の賤しげに聞ゆるを忍みて、その道の者附會をなし、申樂の申は神字の篇を省きたるにて、意は神樂なりなどいかめしげにいふは、捧腹にたへず、田樂を猿樂ともいひし事は、新猿樂記にてしらる、もとは同物後は異をなせり、

〔嬉遊笑覽〕

五歌、

猿樂はもと散樂の假字なり。散樂は莊子に散木とある、散字の如く、散、人散位の散も同意にて、正體なきなり、三代實錄、貞

觀三年六月二十八日云々、有雜伎散樂透撞呪擲云々之戲とみえ。○中、その後村上天皇御製の散樂策にも、嶋嶸來朝而有解頤之觀と書せ給ふ、恐らくは舊史の誤をうけて書せ玉へるにや、鳴訝

人來朝の事はいかゞ、新猿樂記に猿樂之態鳴訝之詞とあり、彼是ともに誤にて、鳴訝と書べし、後漢書南蠻傳に鳴訝人とあり、是なるべし、源氏物語等のかな文には、散樂をさるかうといへり、故

に江家次第には散更とも書たり。○中、宇治拾遺に、陪從家綱行綱兄弟が猿樂の物語りをみるに、其時に臨みてする業にて定りて作り設けたるにはあらず、今のいごとは茶番と又さばかり

にもあらず、古き曲もありと見えたり、散樂策に所謂船太、新鉢羯、魚丸、世羅國世稱妙舞、また新猿



事等アル時ハ、能樂ヲ營中ニ行ヒ、諸侯及ビ士分ヲシテ陪觀セシム、又御能拜見ト稱シ、江戸ノ町人ニ觀覽ヲ許シ、コトアリ、

狂言ハ滑稽諧謔ヲ主トシ、一場ノ戯曲ヲ演スルモノニシテ、大藏、猿、和泉等ノ諸流アリ、而シテ能樂ノ中間ニ於テ、其能ノ來由等ヲ陳ブルヲ聞ト云フ、八島ノ能ニ義經ノ事、兼平ノ能ニ兼平ノ事、阿清ノ能ニ漁父ノ事ヲ陳ブルノ類ナリ、

名

〔下學集<sub>下</sub>〕猿樂<sub>猿</sub>

〔庭訓往來〕可招居輩者、<sub>中</sub>猿樂田樂、<sub>中</sub>招居有屑之族、可召仕公私之役、

〔倭訓栞<sub>前編十</sub>〕さるがく 東鑑に猿樂と見ゆ、猿女のご事より起れりといへり、猿女は神代紀に

くはしく見えたり、邑上帝辨散樂御製に、宜學峽猿之奇態とのたまへるは、猿樂の名によりて説をまうけさせたまへる也、樂記にも俳優侏儒獲難子女不知父子と見え、鄭注に獲、獼猴也、言舞者如獼猴戲、亂男女尊卑也といへり、一説に散樂の訛音也、ともいへり、散樂は周禮より見えて、鄭注に野人爲樂之善者、若今黃門倡といへり、散樂をさるがくとよむは、駿河をするがとよむに同じと、秦廣貞が歌舞同異抄にも見えたりとぞ、<sub>中</sub>本樂は衣冠束帶也、猿樂は烏帽子直垂也、袈裟には本樂を用ゐ、武家には猿樂を翫ばるゝを恒例とす、細川入道常久おきて定められし也といへり、

〔貞丈雜記<sub>人品</sub>〕一猿樂又申樂とも書也、觀世、今春金剛、實生を四座と云、今は猿樂といはずして、能役者と云人多し、又役者とはかりも云人あり、役者とはかりはいふまじき事也、何にてもすべて役を勤る者は皆役者なり、猿樂と名付る事、眞の智恵にあらざるを猿智恵と云、眞の蜻蛉にあらざるを猿蜻蛉といふ如く、眞の樂にあらざるゆへ猿樂といふ也、一説に、山王の猿が舞ひ始し故猿樂と云、又神樂の代りに神前にて舞事あるゆへ、神と云字のつくりを取て、申樂と云など、い

## 古事類苑

### 樂舞部十二

#### 能樂一

狂言(附)

能樂ハ舊ク散樂若シクハ猿樂ト云フ、散樂猿樂ノ事ハ、樂舞總彙ニ詳ナリ、因テ又申樂トモ書セリ、初メハ諸  
謠ヲ以テ主ト爲シ、ガ、足利氏ノ時一變シテ、諸謠ノ事ハ狂言師ノ行フ所ニ屬シ、田樂ノ能  
ヨリ一轉シタル一場ノ戲曲ヲ稱シテ猿樂ト爲ス、即チ能樂ナリ、傳説ニハ、聖德太子、秦河勝  
ヲシテ猿樂ヲ作ラシムト云フ、足利氏ノ頃、大和ニ外山、結崎、坂戸、圓満井ノ四座アリ、春日社  
ノ神事ニ從ヒ、近江ニ山階、下坂、比叡ノ三座アリ、日吉社ノ神事ニ從ヒ、河内ニ新座アリ、丹波  
ニ本座アリ、攝津ニ法成寺アリ、此三座ハ賀茂住吉兩社ノ神事ニ從ヒ、伊勢ニ和屋、勝田、主門  
ノ三座アリ、大神宮ノ神事ニ從ヘリ、應永ノ頃、結崎次郎此技ヲ善クセシカバ、將軍義滿召シ  
テ同朋ト爲シ、觀阿彌ト稱ス、其子元清亦同朋ト爲リ、世阿彌ト稱ス、父子共ニ從來ノ猿樂ノ  
面目ヲ改メ、新曲ニ曲節ヲ施シ、舞容ヲ定メ、笛、大鼓、小鼓、太鼓ヲ以テ樂器ト爲ス、世阿彌ノ子  
音阿彌又名アリ、此技足利幕府ニテハ深ク之ヲ重ジ、遂ニ武門ノ式樂ト爲ス、又毎年歲首ニ  
諸初ノ式ヲ舉ゲシガ、徳川幕府ノ時ニモ恒例ノ式ト爲セリ、當時觀世、金春、保生、金剛ノ四座  
アリシガ、徳川幕府ノ時、金剛ヨリ分レテ喜多ヲ出ス、是ニ於テ五座トナル、是ヲ御能役者ト  
稱シテ世祿ヲ賜ハレリ、此技足利氏ノ時盛ニ行ハレシガ、豊臣秀吉大ニ此技ヲ好ミ、自ラ舞  
曲ヲ奏スルニ至レリ、故ヲ以テ、武臣ノ此技ヲ修ムル者漸ク多シ、徳川幕府ノ時、年始、又ハ慶



至極ニ奉<sub>レ</sub>存候御慈悲ニ前々々ノ幸若ノ筋目被<sub>レ</sub>開召上<sub>レ</sub>是迄ノ通ニ被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下候ハ、難<sub>レ</sub>在可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>存候以上、

○按ズルニ本書ハ貞享元年幕府ニ書上タルモノナリ、



御渡被成候御書付ヲモ所持仕候事、

後小松ノ天子<sup>江</sup>先祖桃井幸若丸參内仕、一曲申上候節モ、元祖桃井播磨守ヨリノ由緒ヲ以、桐菊

ノ御紋ヲ被<sup>下</sup>幸若ノ音曲ハ末世ニ至テモ白人藝タリトノ御給旨頂戴仕候其趣ハ去ル七年已

前幸若共先祖書被仰付、松平因幡守殿石川美作守殿迄指上申候事、

台徳院様<sup>○鎌川秀忠</sup>御時分、同名三人ともに御夜詰被仰付、毎度御前<sup>江</sup>被召出御咄被仰付、御暇被<sup>下</sup>

候時ハ、例ノ通御時服御白銀ノ上ニ御鞍置ノ御馬拜領仕候義御座候、則御鞍御燈即今小八郎所

持仕候事、

大猷院様<sup>○鎌川家光</sup>御時代御上洛ノ節、私親八郎九郎御借仕候、其刻參内ノ義被仰出、音曲申上候、尤

先祖幸若丸參内仕候古例ノ通、白人藝ノ御式位ニ被仰付候事、

御城ニ而町人猿樂御はり紙ハ、元年ヨリ御座候へ共、幸若ノ御はり紙ハ古ヘヨリ無御座候、摺ジ

テ幸若ハ先規ヨリ一分ニ立來リ諸藝者ト替リ、乍憚御公儀様ヨリ外諸大名方ハ少扶持ニテモ

不申請候、其外いづかたよりも只々以御合力不申請、幸若ノ末々ノものどもハ壹紙半錢のうは

まいト申義モ古ヘハ無御座候、寺方町屋ニ而ハ音曲不申、万端白人藝ノ法式ニ相勤來リシ事、

一幸若ニ音曲被仰付候節ハ、前々ハ白人藝ノ御作法取ふくさ半上下ニ而申上候、熨斗目長袴著

仕候義ハ無御座候事、

一幸若ノ藝ハ古ヘハ舞候儀ハ無御座候、座著ニ而申候ゆへ、本名ヲ音曲ト申、世間ニテ舞トモ申

候へ共、實名ニ而ハ無御座候事、

一舞々ノ儀ハ、大かしらと申候而、舞々ノ座ヲ立上方ニ罷在候、御當地ニ而ハ芝ノ神明ニ罷在舞

申、古ヘハ舞々猿樂ハ世間ヨリ配斗ヲ取舞臺ニ而仕候事、

右之趣申上候段恐多事、存候へども、此段不申上候へバ、自今以後ハ舞々ト同事ノ様ニ被成迷惑

孫越前に住して代々一流を立、神君三州岡崎御在城の時、この徒を召て其音曲を賞せられて、その一族に家祿を賜る。幸若八郎九郎同彌次郎、同小八郎以下、年番にて江戸に至りて其業を勤めたり、何れも三番交代なり。越前丹生郡西田中村に居住なり。

〔類例略要集〕幸若御禮參上

在府中御扶持方被下之、御暇銀子被下、

桃井播磨守直常末裔

幸若左兵衛家

天文十六年未九月、三州岡崎江被召出賜三十人扶持、初而廣忠君江拜謁以後度々御用、但舞々、其比舞謡候様、處今ハ無之由、

禮以後度々御用、

右同斷、但高寄員數不定、

幸若八郎九郎家

文祿慶長之間、伏見江登城御目見以後度々御用、

右同斷、但此三家共ニ分家同時參上、

幸若小八郎家

右同時以後同様、此外三十郎、與一右衛門、小左衛門、紀十郎、四軒は、右三苗の内分高百石ニ而配分故、參上之節、五ケ年目三苗と同時に罷出、御扶持方拜領銀子各差別有之、寛政度迄勤番詰合之處、以後五ケ年目九月參府、正月御暇と相定ニ付、三苗ニ而各番ニ罷出、

〔幸若文書〕乍恐以口上書申上候事

今度被成御渡候御書付ノ面、謹而奉相守候、權現様御時代ヨリ幸若ハ少由緒御座候段、被聞召屈、御陣御上洛ノ御供ヲモ被仰付、伏見大阪ニテモ先祖共少分ノ御奉公タテ仕候故、同名三人共ニ越前ニ而御知行拜領仕、一年代リニ被仰付、右ノ由緒ヲ以藝侍ノ品ニ相勤來リ、鍵ヲモ御赦免被成、去ル十六年已前申ノ年迄持セ來リ候處、其節御儉約ノ御書付出、町人猿樂刀ノ義、其外萬御改ノ處、幸若共ニハ江戸近ク鍵持セ候事無用ニ可仕、旨被仰渡、其已後ハ奉相守持セ不申候、則其節

局ニテ各食アリ、鶴蛙等之御振舞也、過分義也、子ハ依、咳氣則退出、十八年五月六日、登城廣大、西園寺、同中將、松木、滋野井、少納言等也、竹内ヘ遣入出仕候、香若舞御所望、初祝一口、又大職冠ノ端計ニテ止之、入鹿御所望ニテ舞一番、

〔嚴有院殿御實紀三〕承應元年正月廿一日、幸若の舞御覽あり、その徒に時服を纏頭せらる、廿五日、幸若の舞曲御覽あり、

〔嚴有院殿御實紀附錄下〕幸若、大夫琵琶法師などめしいで、その技をきこしめし興じ玉ふこと、常におはしましき、こはいづれも古雅のものにして、上つがたの御遊には、いと似つかはしき御事なり、申樂は表立しき儀節には行れけれども、常に御覽の事はまれなりしとぞ、

〔昔々物語〕一むかしは幸若の舞はやり、振舞の節幸若八郎九郎、其外傳右衛門、市右衛門、杯十人有之、麻上下にて來客同前に料理を出馳走す、膳過候て座敷へ出一禮有、客も御太儀と云、何ぞ承度と所望す、一流物たとへば大職冠、きよすげ、まなき能、あつもりかと様々番を伺ふ、舞仕舞て暇乞して歸る時、客所望すれば不歸、近年はすきとなし、

〔後水尾院當時年中行事下〕一猿樂は宮中に入ず、中略幸若大かぐら等のまひく、又くるしからず、

幸若待遇

〔天保十一年武鑑〕幸若音曲 越前丹生郡西田中邑住居

一番三百石 午子 幸若左兵衛、同三十郎、 二番二百五十石

辰

幸若八郎九郎、同與一右衛門、

三番三百四十五石

申

幸若小八郎、同小左衛門、

百石

越前國敦賀郡田島村住  
幸若紀十郎

〔明良帶錄世職〕幸若音曲

若年寄支配なり、音曲家を俗に舞大夫といふ、幸若の一流は建武以來桃井幸若九桃井幸若九子息なり子

おぼしめさば、あたりのうら人をめして御尋あれと申、さらばめせとて、餘多をめしてとひ給ふに、其夜のおきのてい、何事ありとはまらねども、みな此ていとこたふる、さてはまづめて有ける物を、<sup>色</sup>ふびんにちはらをとひけるとて、妻子をかへし給ひけり、

〔陰德太平記 十九〕義隆卿築山没落之事

同<sup>天文</sup>十年八月二十六日、大樹義輝公ヨリ上使有、又大友義鎮ヨリモ使者有ケレバ、築山ニ於テ水肴山萩ノ至珍ヲ集メ、饗膳ヲ結構シ、日夜ノ酒宴アリ、幸若流ノ舞ノ上手小大夫ニ志田<sup>鳥帽子</sup>折ナド舞セラレケレバ、上下聴聞ニ貪著シテ、合戦ナドノ噂モナシ、

〔陰德太平記 二十〕陶持長殺嫡子義清事

越前ヨリ幸若大夫下向セシカバ、義隆卿甚ダ賞玩シ給ヒ、懸テ鳥帽子折ヲ所望有ケリ、大夫廂ノ間ニ於テ手拍子丁ト拍テ之ヲ舞ケルニ、聴聞ノ貴賤感慨ニ堪兼テ、袖ヲ濡サヌハ無リケリ、陶ノ入道宿所ニ歸リ、嫡子次郎ヲ近付、汝幸若ガ音曲學得ツベキヤト云ケレバ、幸若ヲ似セ候ハン事ハ、誠ニ鶴ノ真似スル、鶉ニテ候ハンヅレ共、父命ニテ候ヘバト扇ヲツ取手拍子打テ舞ケルニ、聲響亮々タルハ、震林木、涌流泉、幸若ガ舞ヨリモ猶面白ク聞エタレバ、父ノ入道モ、哀レ器用第一ノ吾子哉ト思ケルニモ、君ノ御上蔑如ニ申ケル事、一入身ニ入テコソ覺エタレ、

〔常山紀談 四〕東照宮高天神の城をかこませたまひ、柵を付て固く守らせらる。城中後詰を乞ども勝頼出す、飯盡けり、栗田刑部使をもて幸若が舞を一曲所望し、是を今生の思ひ出にせんと申けるを、東照宮聞し召、やさしくもいひけるよとて、幸若に高館を舞せらる。栗田が最愛の小姓、時田鶴千世といひし者に、絹紙やうの物をもたせ出して、幸若に贈りあたふ、

〔時慶卿記〕慶長十年十月四日、女院御所ニ舞アリ、幸若ガ子弟十四歳ト十歳ト奇妙也、露拂、後祝言、夢大庭ガ合ルコトアリ、中ハ矢、島、鞍、馬、出、勸、進、帳、腰、越、土、佐、正、尊、以上已刻初、未刻ニ果、少納言



也、今もあり、

〔信太〕<sup>調</sup>明ては人めまげしとて、夜のまにをくり奉り、曉かけてちはらは我宿へこそかへりければ、すでに其夜も明ければ、小山どのより御使立て、ちはら大夫をめされ、さて汝はまだをばまづめて有けるか、中々御尋までも候らはず、やがて沈申て候、小山此由聞よりも、さほどにまづめけるに、何とて其時のけんみはこはぬぞ、わうやがて心得たり、なんぢはさうませんぞの家人いかさま心がはりをし、おとしぬるとおぼゆる、たゞとはんにはよもおちじ、あれよつてがうもんしてとへ、承ると申て、ちはらをとつてふせちうにあげ、七十よどのがうもんは、目もあてられぬ次第かな、<sup>くどき</sup>五たいまんぶんきれそんじ、餘くつうの有時は、まやおちばやとおもひしが、まてまばし我こゝろ<sup>ふし</sup>ちはらはいる日のごとく也、まだ殿をたとふれば、出る日つぼむ花なれや、よめいをいふともかぎりあり、かはれや命とて、いかにとへども落ざりけり、<sup>上</sup>水火のせめをあて、とふ是にも更に落されば、こぼくよりも繩をさげ、<sup>なるす</sup>あぐる時には、いきたえて、おろせばすこしよみがへる、七日七夜は隙もなく、あらてを入かへせめければ、さのみはいかで、こらふべき朝の露と消にけり、小山<sup>ことば</sup>おほきにいかつて、妻子はなきか重てとへ、承ると申て、二人のわかば、もろともにひつすゆる、小山此とみるよりも、おつとがいひし事をまらぬ事はよもあらじ有のまゝ、にく申せ、いつはるけしきの有ならば、やがておつとがごとくなすべしと、おほきにいかり給へば、女房うれへたるけしきもなく、たとひみぢんになされ申とも、まらぬ事をば申まじ、ありし夜のあかつき、只今まづめにゆくと申て、小舟一そうこしらへ、まだ殿をのせ申、沖をさしてこぎ出す、みづから餘のかなしさに、急ぎはまに出事の子細をき、さぶらふに、まだ殿の御こゑにて、高聲念佛を申させ給へば、ちはらもともに申、だんぶと物のなつてより其後は音もせず、<sup>下くどき</sup>かやうにうしなはれ申身が、まだ殿<sup>入</sup>の御命になどかはり申、一まづおとし申さぬぞや、<sup>調</sup>これいつはりと

中元服曾我 笈搜 堀川夜討 常盤問答

勸進帳 和田酒宴 伊吹落 景清

日本記 未來記 琉黃島 張良

短那須與一 腰越 清重 四國落

蓬萊山 木曾願書 鞍馬出 入鹿

新曲 馬揃 九穴具 富樫

百合若大臣

以上四十一

〔開田耕筆<sup>四</sup>〕謠ひものは其書傳り、節章など付たるものあれど、聲ふりうせぬれば、ふたゝびかへらず、今様あるひは、まをり萩などいふものも傳はらず、七八十年前までは、京にても行れし舞といふものも、今は知る人なく也たり、越前に幸若とて、其家あれども、祿あるゆゑに、世間へ廣めんとせざるにや、其書おのれは、幼き時常に見たり、

〔獨語〕近き世に幸若の舞と云ふもの、室町の末とかや、桃井氏の子孫に比叡の山の兒にて、幸若歴と云ふもの、まひ始めけると云ひ傳ふ、琵琶法師の物語に似たる處もあり、猿樂のうたひに似たる處もあり、何にもあれ少しも淫聲なきものなり、舞とはいへど、起ちてまふことはなく、たゞ扇にて手を打ち拍子を取るのみなり、詞は定まりたる數ありて、皆昔物語を演べたり、新しきことをば作り出ださず、士大夫の中に玩びても、淫佚を進むる恐なし、寛文延寶の頃までは、諸侯貴人の宴饗にも、是を用ひて心をなぐさめ、酒をも進めけるに、元祿の比より猿樂さかんになりて、幸若の舞世にすたれたり、

〔貞丈雜記<sup>二</sup>人記〕一幸若と云ハ音曲をする者也、扇びやうしをとりて、古の軍物語などをうたふ者

曲名

禁殿幸若音曲達天聰、光信亦詣闕下見聞之、唱曲之形相威儀嚴然、驚天下耳目、斯故寫其形模、汝於爲孝子者與之云、安義再拜領之、被而見之、如亡父再生、安置于影堂、炷拜如在、慎終追遠之志、不勝筆也、夫孝百行之始也、有孝心不墮父業、全部三十六番之外、擊節于新曲之卷、流布天下、人愈讚嘆、安義有二子、長曰彌二郎、義重弟曰八郎、九郎別分一家、一華却有兩華影、音曲之譽、誼世間、義重嫡子義元後號宮內卿、義元出義光、義光出義成、有以辭條祿作浪人逝矣、義成實子誠重、雖爲浪人、勤實家業、赤心片々奉禮家、康公于時秀吉公薨御之後、家康公寓居于伏見中島藤堂館之曰、大閣之五奉行押寄藤堂館謀討家康公、極動其時、誠重年來志在于茲、鐵炮玉藥纏腰待懸押寄諸士、欲打取其志切同朋阿彌能見之、奏達家康公、感其志而賜食邑三百石、行年六十一逝號誠重、養子良親十三奉禮東照宮、東照宮備父誠重有忠信之志、稱美不淺矣、或時應召侍于柳營、舉唱數々音曲、東照宮讚嘆曰、備少年而父亡、一門親戚之傳、傳家秘而教子備、聞爾音曲不減古人、自今以後、克可戒後生等、踏先哲之轍、不改音節、只依于舊、如此臺命重於鼎銘肝膽、其門庭子葉、孫枝深根固蒂、至今日、不墮家聲、將謂梅檀林無雜樹也、良親行年六十一寂號實子、二人長男義知、二男資親云々、義和十七歲拜謁于大猷院、殿爾來奉仕于大樹家、綱公每々於御前相勸音曲數番、褒讚無限、特拜領金銀時服、恩榮深於海、高似山、有子一人、童名伊八郎、義智年十三奉拜謁大樹家、綱公於營中同名三十郎尊親爲脇、音曲相勸、曲終後稱揚二葉梅檀也、累代不墮家聲、至祝不盡、略○下

〔幸若事蹟集〕幸若音曲目錄

信太 夜討曾我 大戰冠 滿仲 敦盛

長八島 兵庫 裨賀 錄田 大臣

高館 烏帽子折

十番切 伏見常盤 文覺 笛の卷

旦夕是閑吟ス其曲後小松帝之達叙聞數召見直詮雖幼年依勇士孫タル不隨勅命再勅下難默止遂參內奏一曲叙感不斜而則數帖類此曲可集トノ勅宣下ル其時幸若丸勅答曰祖父直常ハ武德振天下剩一國守護タリ其嫡孫トシテ風音曲事似與父祖耻謂而不隨勅命故到來世不爲藝家繪旨可賜間不可捨置トノ依蒙勅命生國越前ニ下リ白山登山不思議有靈現音曲一部成就ス又參内シテ右之奏曲叙感之餘勅桐菊之賜御紋到子孫家紋トス剩從五位下被任宮内大輔被補且亦幸若音曲ト有稱號賜繪旨于今家寶トス

〔幸若文書〕由緒書

越中國桃井氏末裔幸若丸幼天稟性篤實而閑觀音妙行自一心出而應無不逼能觀音聲隨響而答大千圓應況世界教主以音聲導人天誰不稽首哉因茲幸若丸傾心于音聲三昧不得其妙不蒙佛天加之被力爭到其溫奧身心清淨跳足三十三回拜詣于白山大權現權現感通其丹誠而重々彰奇瑞從是乃知此身即大極而具五臟五臟有五音六腑即六呂也天一水生則借其潤而發聲語業鼓激臍輪氣海中牙齒敲磕發妙音齊天地運行無極之德初擊節于松枝雛鶴音曲後條目分長中短三段象天人地三才三十六番準一年十二月廿四氣也右條目事跡略記帝都武門榮衰君臣父子忠孝之實事勸善懲惡之一助也有時於白山幽谷聞雉一聲搏發明八島曲中發露々節不是神助爭得如此秘藏乎抑譽唱一曲時節飲食心身堅固胸中無物大虛廓然發妙音聞者無厭無足爲與樂拔苦之良因音聲益不可勝計其譽遍夷洛後花園朝有詔召幸若丸辱任諸大夫仍號幸若右大夫安真攀上紫宸殿前新築瑤台唱起我家音曲終于日本記曲叙感有餘至末代幸若家可具諸大夫之威儀重降口宣特領御鼓大小至今日秘在爲家珍號安真功成名遂還生緣故鄉年及耳順而文明年中五月二日臨終正念示寂矣誰弗哀惜哉越前一乘谷古道場葬之號祥翁全吉居士孝子彌二郎安義圖畫亡父之像造順思燒香念誦于真前至京師尋土佐將盛光信宅對談舉求筆亡父遺像光信拍手曰先於此召



# 幸若音曲

幸若音曲ハ桃井幸若丸ノ創ムル所ニシテ子孫世々越前ニ住ス徳川幕府ノ時其俸祿ヲ受ケテ毎年輪番ニ江戸ニ來リ柳營ニ於テ之ヲ演奏セリ其技只扇拍子ヲ取リテ昔物語類ヲ謠フノミ因テ之ヲ音曲ト稱ス而シテ別ニ舞曲ヲ行フ者アリ之ヲ大頭ト稱シテ以テ幸若音曲ニ分テリ

名稱

〔書言字考節用集四〕幸若カワ近世舞曲家住越前傳云桃井直常末葉幸若丸在台演光林坊好釣節爾來傳于世

〔和漢三才圖會十六〕舞中

按舞未知何世始是亦出俗人行粧面昔物語附音節而已有爲形舞居舞之異今有幸若臺頭笠屋之三流近年淨瑠璃甚流行以來舞廢

〔雍州府志九〕芝居凡舞曲有兩流其一幸若其一大栢傳言中古桃井氏之童爲小兒在比叡山

岩松家童亦然稱幸岩丸兩童共在山門爲慰寺僧作舞曲唱之是稱幸若流又有一家其家紋大

栢葉二枚相並依之其一流稱大栢流至今有兩流今稱大頭者誤大栢者乎倭俗僧家之侍童在天

台眞言釋小兒於禪刹謂喝食其體大同小異

〔幸若八郎九郎家桃井系圖〕直詮明編四國生從五位下宮內大輔一本宮內少輔文明二庚子五二

母朝倉彈正敏景女

父直知老死之時直詮僅十歲孤ト成送年月其比越前者父祖敵國ナレバ依難叶居住江州叡山之光林坊詮信者所緣之依爲僧賴之江州ニ下登叡山學問祖父直常足利家被討亡流浪之身ト成平世志和漢之道或時詠歌曲翫四明月又或時調音聲臨東湖流翫八島軍ト云草紙附節句而

起原

中に、あしからずと見ゆるが、ふるきひさくの柄ありやなどいふを見ればつめを袖ふしたり、びはなどひくにこそ、めくら法師のびわ、其さたにも及ばぬことなり、道に心得たるよしにやと、かたはらいたかりき、ひさくの柄は、ひもの木とかやいひて、よからぬ物にとて、ある人仰られし、わかき人は少の事も、よく見えわろくみゆるなり、

〔羅山文集五十〕羅者 贅者

毎歳毎月諸贅、會于總檢校、置酒歡娛、列國之主大率與、其費而至使然也、且朱門高牆問之、乃曰、此誰某國主之檢校家、見其衣袴、乃飾而緣、即而問其能、乃不知、琵琶絃撥、備有一人粗抱、四絃語、平家者、不能驚耳、況於六律六同五聲八音、而掃地而無知者、贅者彈琵琶、語平家物、語而爲節、如此而其所爲如此、可謂民之賊矣、

〔樂家錄四十七〕舊例 武臣神職醫師沙門修音樂之舊例○中

想中華者、令贅誦詩及掌撥簫管、是贅者精神不馳、詳于音律故也、不聞本朝自古令贅與于奏樂之例、是有限哉、所謂贅者、非今之琵琶法師、彼者謠今樣淫人耳、且以琵琶爲誦、平家之節、戲漫樂器可惡之甚也、何足言焉、

〔梅花無盡藏五〕謹依南豐梅心和尙贖官僧端正赴尾楞嚴禪寺之尊押云、

爲試諸方具、眼師琵琶放下、破生涯半醒半醉夢中夢、脚尾脚頭、岐又岐、鳥杖豈非奏學伴、鶯聲自是送行詩、楞嚴會上阿那律、一段光明遂有期、

〔七十一番歌合中〕廿五番 左 琵琶法師

ね覺してあな面白といふ聲に月さゆるよを空にえる哉

〔尤之雙紙下〕ひく物のまなへ

小うたにのせてさみせんをひく、平家にあはせて琵琶をひく、

ぬ御代の春千秋樂には民を撫で萬歳樂には命を延ぶる樂も、年ごとに今日汲かはす盃に、君と御國を祝ふなる松ばやしこそめでたけれ。

聖觀會

〔雍州府志<sup>十</sup>〕愛宕郡

石塔 毎年二月十六日、衆盲檢校於四條河原、建之。<sup>○中</sup>依彈琵琶、尊妙音辨財天、今日光孝天皇之

御忌日也。盲人檢校以下至衆分、自昧爽聚清聚庵、總檢校在座上、壁揭守誓神并妙音天畫像、各拜之。然後誦心經、修御忌、爾後有獻於茲酌太瓶酒、盲人六派之中於四派、擇檢校之能說平家物語者、交使

談平家は謂石塔會。<sup>○中</sup>每年六月十九日、又各會清聚庵、而有納涼之會、是謂涼一座之式、粗如石塔

會之儀。<sup>○中</sup>城方兩流盲人少、都方中戸島玄正派亦人少、故此兩派之中各隔年而勤之、故六派之中

四人檢校、談平家平家未始前總檢校大音唱太平之詞、其終高呼鳥羽湊船著、衆盲一同揚大音、呼惠伊々々也。古檢校中之所領在日向國、至秋種載米於大船、到山城鳥羽津、今雖無其事、是祝語而存古

之微意也。

〔東都歲事記<sup>二</sup>〕十六日、本所一ツ目弁天堂琵琶會。<sup>○今</sup>朝十二座の神樂あり、巳刻より警者本社の

終る、當社は元祿の頃杉山檢校信一<sup>一</sup>（家果作和一）の勸請なり、檢校は相州江の島の弁才始なり、新

興と稱す。<sup>○中</sup>略

〔東都歲事記<sup>二</sup>〕十九日、本所一ツ目辨天社琵琶會。<sup>○來</sup>由二月の件と合せ見るべし、今日京都にも

重頼の涼といふとぞ。

〔薩戒記〕應永三十二年六月廿七日乙丑、藏人中務丞源重仲來、密談曰、近日主上<sup>○</sup>上皇<sup>○</sup>後御中

不快、其故召比巴法師、可聞食平家物語之由、自內被申院、無先例、不可然之由、有御返事、

〔徒然草<sup>下</sup>〕すべて人は、無智無能なるべきもの也。<sup>○中</sup>又ある人のもにて、琵琶法師の物語をき

かんとて、びはをめしよせたるに、ちうのひとつ落たりしかば、作りてつけよといふに、ある男の

雜載

き我が身一を如何にせん、それ人間の習にて、昨日の迷は今日覺、昨日覺りし人とても、明日は迷ひし事もあり、人の上とて左のみ云ふては如何せん、物の報は物毎にあり、埋木に如何なる花か咲ぬらん、實に成りてこそ思ひ知らるれ、皆人は時にいたりてなげき悲み、袖に露おくばかりなり、兼て後世を思ひ知れ、生は死の本、逢ふは別の初とは、誰も云ふなる言の葉なれど、昨日今日とは思はざりけん、人には永く添はん者、只何事も腹は立て、も言葉は残せ、千歳此の世に在る身の如く、慳貪邪見は諸事無益、僅此の世は假の宿氣をあさく、と心寛くも能く持て、法の道には誰も深かれ、極樂の只一筋の道の理を誰に尋ねん、佛ならねば知ろし召されず、佛とは何を岩間の苔衣、只其の儘の姿にて、慈悲より外に如く心はなし、是に付けても皆人は、親子兄弟夫妻の中、又は朋友の中とても、此の世計の契なり、死して行く身の野邊迄は、婆の情に我も誰もと供を致せども、野邊より先は只一人、今は冥土に赴かん、先立つものこそ哀れなれ、今日までは人を送りて歸りしが、何時かまた我は送られて、人を歸さん、涙川、幾瀬渡るも淵なれば、御法の舟こそ戀しけれ、これにつけても老若男女に至るまで慈悲をも願へ、慈悲は萬行の功力によりて、死しての後は極樂のすゞしき風にうかべば、則ち成佛疑ひなし、身は得達の縁となり、唯人間のなげきの中の悦びとぞなる。

〔薩摩琵琶歌二調〕春の調

島津久光公作

新玉の年の始めの壽や、昔のまゝに吹きあぐる、笛と鼓の音までも、春の調べに聞えつゝ、玉簾ゆるぐ風立ちて、舞の袂も長閑なる、神の齋垣の老松も、枝を連ね葉を重ね、うべも大夫の蔭高く、齡を君にゆづる葉の、常盤の色ぞ比類なき、軒端に咲ける梅が枝も、和泉式部の縁とや、床しくかはる窓のうち、晝みる袖にうつりくる、好文木の名に耻ぢず、又高砂住の江の、松に相生の尉と唄、妹背の契り末ながく、千世の例にひかれつゝ、四方の海原浪なきて、吹くも静けき時津風、枝も鳴さ



た過し年、江州竹生島に詣でし時、經正の彈給ひし琵琶の撥なりとて見侍りしが、水牛にて造り、本のかたはくりて、末は、三味線の撥のごとく、廣さ纔に二三寸には過ざりし、此國の撥とは天壤の相違なり、竹生島にあるは、後世の偽物なるべしやとおもふ、予もあまりめづらしさに、撥一ツ求得て都のつとに持歸り、人に見すれば、皆目を驚せり、又鹿兒島にありし時、森本見流なる人の家に招かれ、種々馳走の上、實生といへる法師をよびて、琵琶をひかせり、遠近、五倫花の香、小町、玉章、似我、墨繪、老曾の森、鴛鴦の夢などいふうた數々ひけり、先其うたの名も雅にして、其章もまた古めかし、其音のひくきは、春の鳥の霞の中に囀るが如く、谷の清水の岩ほにむせぶに似たり、其まらべ、高きは、冬の風の枯殘る松に渡るがごとし、京都などにて聞つる、平家琵琶などには似もよらず、彼白樂天が琵琶行はじめて思ひ合せり、又崩（クニ）といふものあり、是は薩州の昔、伊東大友など、合戰の事を語るにて、其聲もはげしく、琵琶の手も繁手なり、はじめのうたとは、格別に異なるものなり、もつとも、是は新ら敷聞ゆ、はじめのうた、殊にめづらしく覺へて、只京都に此聲なき事の口をしければ、予も一ツふたつ習ひ歸りて、京都にも傳へんと思ひしかど、殊にむづかしく、たやすく習ひ得べくもあらねば、残り多かりしを、もだしぬ、此夜の雅興すてがたくて、別に琵琶行壹編を作りて、日記にゑるせり、又彼うたの章をも、書寫して歸りぬ、のぼりての世の事に心あらん人は、彼琵琶京都にも、傳へよかしとおもふのみ、

## 〔薩摩琵琶歌 初編〕墨繪

心とは何を云ふらん不思議さよ、墨繪に書きし松風の音、況んや此の世を諸法實相と聞く時は、峰の嵐も法の聲、邪正一如と見るときは、迷も覺もなかりけり、万法一如と觀すれば、谷の朽木も皆佛さのみ不審はなかりけり、三界に身は安からん小車の、我が惡業に引かれ來て、錦の紐をいつか解くらん、四の邪の一の箱にたゝまれて、何も苦しき貪欲の深き流に身を沈め、浮ぶ甲斐な

名をととなへ、琵琶を弾しながら、法華經、禮文をだみたるこゑにて、いともながきふしにとなふ、荒神といふは、天孫神のことのよしにて、祈禱神慮にかなふをキメテスリと云、祈終ば、八重山酒をのみて、その盆へ札一枚をのせてかへる、

## 〔西遊記〕琵琶の妙手

都の琵琶は只平家物語をうたふに、其聲の調子を引出すために、琵琶を用ゆ、又雅樂の琵琶は、太鼓にのりして、畢竟は拍子のみなり、律は糸の事なれば、有りうちともいふべし、只此二種あれども、もて遊ぶ人稀にして、感ずる人も又稀なり、俗間には絶てなし、略中されど此二州薩摩なるは、他國とは大に異なり、其形も平家琵琶などよりはちひさく、撥は黄楊木にて作り、甚だ大にして、扇をひらけるがごとし、年若き武士みな琵琶をもて遊ぶ、彼二州は名だゝる勇猛の風あるに、裾高くかゝげ、長き刀を十文字に横たへたる荒おのこの夜なく、琵琶をひきありく、其風情おもひやるべし、其調正しく其うた雅にして、他の國の琵琶とは、似もよらず、殊に大隅國には、池田甚兵衛といふ人有りて、當時第一の名人なるよし、夜ふけ月清きに、獨り琵琶を弾すれば、浦千鳥集り來る事、常のことなりと聞にぞ、其人のゆかしくて、彼地に尋いたり見るに、始羅郡の砂清き浦にはとりして、茅の軒端物さびしく住なせり、かくといひ入れば、とく迎へ入れて相見る、其人むそぢにあまりて、温潤の質なり、打つけに琵琶のぞみたれば、遠くたづね來りしにかんせしにや、又好める道ゆへにや、いなめる色もなく、木の下といふ名器を取出して、ひとつたつ彈せり、其たへなる事はさうにもいはず、誠にいにしへ、但馬守など堪能の名を得て、水神も感せしなどいふを、今の京都の琵琶に思ひくらべては、いふかしく疑しかりけるが、今日此國の琵琶を聞ては、じめて水神の感せしも、理りなりと覺へ、年ごろのうたがひは皆はれにき、京都のむかしの聲は、皆このあたりに傳り、殘りて、今にてはかへつて、京都はむかしの聲たへたりとこそあらるれ、ま

此長門本と稱するものは、林氏のいへる、赤間關阿彌陀寺の本を傳寫するものなるべし、又琵琶家に關字本と稱するもの有、これは節がはりの所ごとに關字して、その物語をかたるに便よきやうにまたるものなり、

〔聲曲類纂〕平家物語之事

琵琶法師の語る所の平家物語は、十二卷の平家物語へ、其儘に節を付たるなり、○中はるかの後淨瑠璃節といふもの出來てより、平家はすたれ淨瑠璃節世に行れたり、

〔嬉遊笑覽音六上〕一種盲人琵琶を鼓し、地神經を誦して、竈神を祭る、佛説地神經一卷あり、鄙俗の文字にして、藏中になきものといへり、實荒神とよべり、禪神にて、如來荒神、鹿亂荒神、忿怒荒神の三佛説にな、この竈神をなすものを、今はびはほうしと呼て、當道の瞽者は賤しめて、部類を異にするものなり、古へびは法師といふは、すべてびは彈て、平家かたる者をいふなり、

〔西遊記〕琵琶の妙手

九州には琵琶法師といふもの夥敷有りて、琵琶を彈じ、路頭に立て米をもらふ、其うた其律、かまびすしくて、聞に堪へず、又琵琶は地神經をひく、三味線法師などの、いやしき者に、よはひすべきものにあらすなど、おこがましくいひの、しりて、竈神するも有り、薩摩大隅の二國、もつともおはし、

〔琉球年代記〕託女荒神ばらひ

此國奇なることは、託女となへて巫女おほく、民間にことごとくこれを信ず、毎年正三五九月を吉月として、家々いはひたのしむ、朔望には、早朝より、かの託女をまねきて、荒神ばらひの如き祈禱あり、託女のまへには、八重山酒如き酒也の一盃を盆にのせていだす、第一に、シテリキユ、アマミキユ、あまつかみ、うなばらのかみ、八幡宮、天滿大自在天神を拜し、爲朝公ヨリ代々の賢王の御

〔良齋間話〕<sup>下</sup>昔シ琵琶法師アリ、獨リ山中ヲ行キ路ニ迷ヒ、人家ニ至ルヲ得ズ、日モ已ニ暮ル、ト覺ヘ、宿鳥ノ聲稀ニ聞ヘシカバ、大木ノ根ニ腰ヲ掛ケ琵琶ヲ出シ、大木ニ向ヒ路ニ迷ヒシユヘ、已ムヲ得ズ、今夜ハコ、ニ宿ヲ借ルナリ、拙キ調ナレドモ一曲ヲ奏シ、宿ヲ借リシ恩ヲ謝ス、是吾徒ノ法ナリトテ、大木ノ下ニテ、平家ヲ一曲ヲ彈ゼリ、此法師ノ志篤シト謂ベシ、

〔東海道名所記〕江尻より府中まで二里廿町、こゝは馬のすくなき所也、<sup>略</sup>○中座頭一人琵琶をもちて入來りつゝ、平家をかたるびわをば時々ぼとらゝいはせけれども、調子もあはず、平家はなほあか下手也、<sup>略</sup>○中我朝には延喜第四の御子蟬丸は、逢坂山にこもりてたぐひなき琵琶の上手にておはしけるを、今琵琶法師の根元とし、そのながれをくみけるといふに、此座頭殿のびわは、おもしろげもなし、平家は下手なり、せめてこゑすねたるぞかし、

〔嬉遊笑覽〕<sup>六上</sup>法師の平家を傳ふるもの、一部十二卷に通するを、一部平家といふ、其外に鏡劍の卷と云ことあり、<sup>今この御書を太平記に附るは誤</sup>是を大秘事として、護りにうたはず、故にその

文段をまらず世に傳ふる古寫本、多く異同あるは、替者の口授、其儘まゐるし、故なり、替者の用るは、かたり平家として、印本とは異なりとも云り、長門本十二卷<sup>東見記云、長門國赤間關に、平家物語の寺なり、常の平家物語とはいたく異にして、源平盛衰記の、異本といふべきものなり、每卷長門國安徳天皇儀奉納、信濃前司行長、以自筆本書寫畢と記せり、又八坂本十二卷、與書云、寛永三年の</sup>

春の頃、藤田檢校城慶、加賀國にて筑後方檢校城一用ゆ雲井の本と與書侍る平家物語を求侍りき、此本則其雲井の本を寫畢、筑紫方檢校城一本と與書侍る、故に藤田檢校城慶此本を用て、八坂方の平家と號す、

〔群書一覽〕<sup>雜一史</sup>平家物語

十二卷

按するに、水府の新編鎌倉志の引書に、異本平家物語と稱するもの、八坂本、鎌倉本、長門本等なり、



れば、妖忽消ぬといへり、其後賴政鶴を射たれども、猶死すして、井野隼人さし殺してとゞめたりと聞ゆ、義家鳴弦せしは、天仁元年の事なり、鶴の出しは、近衛院仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武徳既におとれる事はるかなり、今又賴政におくる、事四百五十年、われ又賴政におとる事、遠かるべければ、おぼえず涙の流るゝとぞ語られける、

〔嚴有院殿御實紀〕慶安四年五月十九日、日光山、逮夜法華八講僧四十口、廿一日、山には逮夜頓寫なり、岩船檢校城泉平家を彈す、

〔嚴有院殿御實紀〕二十、萬治三年十一月六日、夜中平家琵琶を聞し召る、

寛文元年正月十五日、平家琵琶御聽聞あり、三月十七日、平家琵琶御聽聞あり、五月五日、蒲節例のごとし、略○中夜中平家琵琶聞召る、八月十九日、今夜平家琵琶聞召る、九月廿九日、夜中平

家琵琶聞召る、

〔嚴有院殿御實紀〕四十一、寛文十年八月二日、茨城檢校琵琶聞召る、十日、茨木檢校平家琵琶聞召る、ことはて、銀十枚、時服二たまふ、十月二日、茨城檢校平家琵琶聞召る、十一月十二日、今日、茨木檢校平家琵琶聞召る、

〔嚴有院殿御實紀〕四十三、寛文十一年十月晦日、この夕松平阿波守綱通が内、山下檢校、小笠原遠江守忠雄が内、高坂檢校をめして、平家琵琶を聞し召る、十一月朔日、高坂山下兩檢校、昨日琵琶を奏せし賞として、時服三づ、かづけらる、

〔近世畸人傳〕四、土肥二三

二三、は俗稱土肥孫兵衛といふ、略○中茶は織田の風を學び、また香をこのむ、平家をかたりて、琵琶はまかも上手なりしとぞ、略○中杜鵑と銘ある琵琶一面、平家二巻を、三河の士山田氏にあたへて、今なほ其家に藏せりとなん、

天徳寺あはれがりて雨霽と泣ける、さて今一曲前の如くあはれる事をき、度といへば、那須  
與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半より天徳寺また落涙數行に及べり、後日に家臣の輩に、  
過し日の平家は、いかゞきつるといふに、家臣ども尤おもしろき事にて候、但し我等どもひと  
つ心得ぬ事こそ候へ、前後二曲ともに、勇烈なる事にて、あはれるかたはすこしも候はぬに、君  
には御威涙にむせばれて候、是はいかゞの事にて候にや、今に不審なる事にいづれも申あひ候  
といへば、天徳寺おどろきて、只今迄は、各を頼しく思ひ候ひしが、今の一言にてさて、力を落  
して候、先佐々木が先陣を、よく合點して見られ候へ、頼朝舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶  
原にもたまはらぬ生暖を高綱に賜るにあらずや、されば其甲斐もなく、此馬にて宇治川を先陣  
せずして、人に先をこされなば、必討死してふた、び歸るまじきと、頼朝に暇乞して出ける、其志  
を察して見られよ、あはれならぬ事かはとて、まばしば涙を拭ひつゝ、まばしありていひけるは、  
又那須與市も、大勢の中より撰ばれて、只一騎陣頭に出しより、馬を海中に乘入て、的にむかふに  
至るまで、源平兩家鳴をまづめて是を見物するにも、し射損じなばみかたの名折たるべし、馬上  
にて腹かき切て、海に入むと覺悟したる心を察してみられ候へ、武士の道ほどあはれる物は  
候はず、某は毎に戦場に臨では、高綱宗高が心にて、鎗を取候故、右の平家を聞も、兩人の心を思や  
りて、落涙にたへざりし、然るに各には、あはれになかゝしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊  
は、たゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出るにてはなきにやと思はれ候、それにては頼もしか  
らずこそ候へと云しかば、諸臣皆迷惑して辭なかりしとなり、

〔常山紀談〕輝虎ある夜、石坂檢校に平家をかたらせて聞ければ、鶴の段を聞て、まきりに落涙  
せられけり、かたへの者ども、あやしみ思ひければ、輝虎のいはく、吾國の武徳も衰へたりとおぼ  
ゆる也、昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪ありしに、八幡太郎鳴弦して、鎮守府將軍源義家と名のりけ

給リツル數寄ノ程コソ面目ナレト、真都三重ノ甲ヲ上レバ、覺一初重ノ乙ニ收テ、歌ヒスマシタリケレバ、師直モ枕ヲオシノケ、耳ヲソバダテ聞ニ、簾中庭上諸共ニ聲ヲ上テゾ感ジケル、平家ハテ、後居殘タル若黨通世者共、サテモ賴政ガ甥ヲ射タル勸賞ニ、傾城ヲ給タルハ、面目ナレ共、所領カ御引出物カラ給リタランズルニハ、莫大劣哉ト申ケレバ、武藏守聞モアヘズ、御邊達ハ無下ニ不當ナル事ヲ云物哉、師直ハアヤメホドノ傾城ニハ、國ノ十箇國計所領ノ二三十箇所也、共、カヘテコソ給ラメトゾ耻シメケル、

〔看聞日記〕應永廿三年四月九日、祖一勾當參、平家申初參也、廿三日、賀茂祭也、典侍廣橋大納言近衛使伯少將雅量住心院深基法印參、一獻持參源賴朝正弟子、實ハ子、有一獻參、三位重有長實等朝臣、行豐祖一參一獻之間、平家申數剋候退出、廿五年三月卅日、抑於塔頭有會合壽藏主被申沙汰、予

起請女中芝殿三位以下濟々候、一獻之間、安一平家申、一獻了、於御所又平家申賜扇、廿八年四月九日、常順檢校常反寶泉許へ細々來云々、可推參之由申之間、召之物語上手也、以之爲藏、平家ハ下手也、物語申、誠殊勝、其興不少、平家一兩句申聞衆濟々候、一獻廣時申沙汰神妙也、殊更茶十袋御扇等賜之退出、此常順ハ青蓮院御寵愛門跡ニ常住祇候云々、檢校ニモ自門跡被執沙汰、被成云々、廿九年霜月十八日、稚野以下被歸、予大通院ニ宿、宰相以下皆祇候、及深更座頭參、今日來可被聞食由、自方丈被申則召之、常存弟子城笠檢校云々、仁和寺勸進平家之時三人語、其人數云々、平家五句申、音聲殊勝也、平家畢則休息、

〔駿臺雜話〕仁は心のいのち

相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺豪健の勇將なりしが、ある時、琵琶法師を招て、平家を語らせ、て聞けるに、いまだ語らぬ先に、琵琶法師にいひけるは、某はたゞあはれなる事をき、度こそあれ、其意得して語り候へといへば、法師心得候とて、佐々木四郎高綱が、宇治川の先陣を語けるに、

シケル最中ニ、不慮ノ事出來テ、高貞忽ニ、武藏守師直ガ爲ニ討レニケリ、其宿意何事ゾト尋レバ、高貞多年アヒ馴タリケル女房ヲ、師直ニ思掛ラレテ、謂ナク討ンケルトゾ聞エシ、其比師直、チト違例ノ事有テ、且ク出仕ヲモセデ居タリケル間、重恩ノ家人共是ヲ慰メン爲ニ、毎日酒肴ヲ調テ、道々ノ能者共ヲ召集テ、其藝能ヲ盡サセテ、座中ノ興ヲゾ促シケル、或時月深夜閑テ、萩葉ヲ渡ル風身ニ入タル心地シケル折節、眞都ト、覺一檢校ト二人ツレ、平家ヲ歌ケルニ、近衛院ノ御時、紫宸殿ノ上ニ、鶴ト云怪鳥飛來テ、夜ナク鳴ケルヲ、源三位賴政、勅ヲ承テ射テ落シケレバ、上皇限リナク、叙威有テ、紅ノ御衣ヲ當座ニ肩ニ掛ラル、此勸賞ニ官位モ闕國モ猶充ニ不足、誠ヤラン賴政ハ、藤壺ノ萬蒲ニ心ヲ掛テ、堪ス思ニ臥沈ムナル今夜ノ勸賞ニハ、此アヤメヲ下サルベシ、但シ此女ヲ賴政音ニノミ聞テ、未ダ目ニハ見ザンナレバ、同様ナル女房ヲアマタ出シテ引煩ハバ、アヤメモ知ヌ戀ヲスル哉ト、笑ンズルゾト仰ラレテ、後宮三千人ノ侍女ノ中ヨリ、花ヲ猜ミ、月ヲ妬ム程ノ女房達ヲ、十二人同様ニ裝束セサセテ、中々ホノカナル氣色モナク、金沙ノ羅ノ中ニコソ置レケレ、サテ賴政ヲ清涼殿ノ孫廂ヘ召レ、更衣ヲ勅使ニテ、今夜ノ抽賞ニハ、淺香ノ沼ノアヤメヲ下サルベシ、其手ハ緩トモ、自ラ引テ我宿ノ妻ト成トゾ仰下サレケル、賴政勅ニ隨テ、清涼殿ノ大床ニ手打掛テ候ケルガ、何レモ齡二八計ナル女房ノミシテ、貌繪ニ書共、筆モ難及程ナルガ、金翠ノ粧ヲ飭リ、桃顔ノ媚ヲ含テ、並居タレバ、賴政心彌迷ヒ目ウツロイテ、何レヲ萬蒲ト可引心地モ、無リケリ、更衣打笑ヒテ、水ノマサラバ、淺香ノ沼サヘ、マギル、事モコソアレト申サレケレバ、賴政、

五月雨ニ澤邊ノ眞薦水越テ、何レ萬蒲ト引ゾ煩ラフ、トゾ讀タリケル時、ニ近衛關白殿アマリノ威ニ、堪カチテ、自ラ立テ、萬蒲ノ前ノ袖ヲ引、是コソ汝ガ宿ノ妻ヨトテ、賴政ニコソ下サレケレ、賴政鵝ヲ射テ、弓箭ノ名ヲ揚タルノミナラズ、一首ノ歌ノ御威ニ依テ、年月戀忍ツル萬蒲ノ前ヲ



於客殿兩人語

高倉院紅葉觀事、藤賴入道油黃島觀事、後鳥羽院御位、文德天皇相撲節事、三句語之、

〔爲峯文集十一〕鳴門琵琶記

後鳥羽帝御宇、藤行長退隱叡岳、作平家物語、教盲人生佛、彈琵琶唱之、琵琶法師之以平家爲業、始于此、爾來徒類甚多、○中謂其爲師長者、而稱檢校各統其部下替者、以先後爲之座次、就檢校之中、推其

老成者而定十臘、十臘第一座、號總檢校、而諸國替者皆宗之、十臘以上常住京都、其餘檢校所任、其

意是家法也、近世唱平家、其名最秀者曰高山檢校丹一、曾奉拜東照大神君、台德院殿、○德川屢召於

營中、彈平家、漸至全部、四絃曲節超群、拔類極秘得妙、爲中興之師、丹一多弟子、其中小寺檢校溫一、殆

與師將青藍寒水、奉拜台德院殿、大猷院殿、其推却之撥音、聞達於尊聰、舉世無不傾耳、其弟子曰並河

檢校安一、亦精其藝、先是居二臘時、恭蒙今大君幕下鈞命、亂琵琶於御前、可謂幸也、既而爲總檢校、故

住京師、不能東來、其弟子曰茨木檢校果一、此嘗學於安一、而請益於溫一、熟練通達者也、久養於山迹

國郡山城、主本多拾遺政勝家、平生多病、不赴他邦、去歲偶應召到江府、調平家於殿內、殊蒙台威、跨越

於其師、其徒皆羨之、嗚呼、師授資受四傳、不隕其聲、雖小技有可聽者乎、嘗聞丹一所傳之琵琶、撥面有

畫工法、眼狩野元信圖、瀑布號大白瀧、方今果一琵琶、以其響拔尋常、號自然、以爲家珍、執政世嘉宿城

主拾遺和州太守久世君廣之、眷遇果一、而令名手法印狩野探幽、畫白濤、高舉之勢於撥面、青漆革而

更號鳴門、寓揚名於一時之意、而與自然兩名並稱焉、於是請余記其事、余雖識平家事實、不通其音調、

且與果一未會面、然執政之旨、不能拒焉、況是亦文字之餘業、不能辭之、乃據其草本、聊演大概、非好事

而爲之者也、就想果一彈平家、其要在曲節而已、若夫聞之而有感於源盛平衰、則豈不爲鑑戒之一助

哉、辛亥之夏

諸平家

〔太平記二十一〕鹽谷判官議死事

陸地三方ノ大將、已ニ京ヲ立テ、分國ノ軍勢ヲ催レケレバ、鹽冶モ我國ヘ下テ、其用意ヲ致サント

靈一  
景一  
清一

城一建業

城元住洛東八坂郷、此源稱八坂方

城意

城存

〔臥雲日件錄〕文安五年八月十九日子又問座頭話平家之由、最一日○中性佛之後、曰如一檢校者有

弟子、一曰覺一、一曰城一、城一弟子城元、居八坂、城元次曰城意、城意次曰城存、城存尙在焉、覺一弟子有四檢校、曰通一、曰靈一、曰景一、曰清一、某乃靈一弟子也、

文明二年正月四日、入夜聽平家、薰一曰○中城一有兩弟子、一人以一字爲名、一人以城字爲名、此兩人弟子相承于今如此云々、

〔五元集拾遺〕凡蟬丸より官をつく、坐頭の都とはいかにといはれて、

三味線に引てのこりし四の緒の一はめくらの名になりにつり

名人

〔看聞日記〕應永廿三年六月八日、椿一檢校參、當時有名望堪能者也、則於導場平家三句申聽衆僧以下濟々候、又有一獻晚景事了還御、九日、重有長資等朝臣罷點心之後、平家聽聞云々○中入夜椿

一檢校參、五句申聞衆群參、十月廿七日、紅葉盛也、藏光庵紅葉御遊覽新御所折節順一句當平家語

之間、一句御聽聞、其後即成院入御、三船申沙汰云々○中順一被召一句語、被下御扇云々、廿四年

五月十七日、安一座頭參、千一檢校弟子云々教仲三位ニ引付云々、平家一兩句申、中品平家也、十一月十九

日、椿一檢校參入、夜召導場平家語之、聽衆濟々候面々感嘆無極○中椿一又召一兩句語、孟酌數巡、

王櫛平家嘆其興不少、深更事異、

〔看聞日記〕應永廿八年六月九日、抑相一檢校、專一檢校退藏庵ニ來云々、當世名人也、未聽聞之間其志不少、依以壽藏主退藏坊主ニ聽聞有其志之由令申、不有子細之由申之間、夜陰密ニ退藏ニ行、則

也、下ッ法皇是ヲ有叙覽、斯ゾ被遊ケル、

上歌池水ニ汀ノ櫻散布テ波ノ花コソ盛リナリケレ、シホリ口説舊ニケル岩ノ絶間ヨリ、落來水

ノ音サヘ、故ビ由有所也、綠羅垣翠黛山、繪ニ書共筆モ難、及偕女院ノ御庵室、御覽ズレバ、軒ニハ萬  
槿、藥葱交ノ萱草、折聲、瓢蘆屢、空草顏淵巷、滋藜藿深、鎖、長下ク、雨原憲ガ樞ヲ濕ス共可謂、三、重杉

ノ葺目モ豁ニテ、時雨モ置露モ、洩月影諍テ、可堪共不見ケリ、後ハ山前ハ野邊、イ篠小篠ニ風噪、世  
ニ立ヌ身、習トテ、憂節滋竹柱、初重都ノ方ノ言傳ハ、間遠ニ結落架羅ヤ、初重中音、僅ニ事問物トテ

ハ、嶺ニ木傳フ猿ノ聲、賤ガ蒸ノ斧ノ音、是等ガ音信ナラデハ、藥葛防已來人稀ナル所也、○下

流選

〔貞德文集〕下平家御執心之由、城方都方檢校勾當座頭、何當家江出入仕候、

〔庭訓往來抄〕上琵琶法師ハ中比ハ盲タル者ハ、入道シテ鼠色ナル衣ヲキテ、ビワヲ袋ニ入テ廻也、

是ヲ琵琶法師ト云リ、近代公家ニ或公達ノ盲目アリシヲ、直垂ヲ著セテ京中計ヲ經廻ラレシ也、  
餘ニ平家面白カリシニ依テ、禁裏ヘ被召、琵琶ヲ彈ジ物語ヲセシ也、其恩賞ニ城ト云字ヲ賜也ヤ、

サ方ハ上ニツク、イナカタハ下ニツク也、何モ城ノ字也、公家達ノ會合ニハ、先是ヲ崇敬シテ座上  
ニ居、愛セラレシ也、其後ヨリ座頭ニナル也、

〔雍州府志〕<sub>略</sub>愛宕郡

石塔<sub>略</sub>○中凡衆盲之中、有六派、而生佛爲始祖、爾後如一檢校、是人有二弟子、曰覺一、曰城一、城一弟

子城元住洛東八坂郷、城元弟子曰城意、城意弟子曰城存、覺一弟子有四人、曰通一、曰靈一、曰景一、曰  
清一、是也、所謂六派者、城方之中、大山派、妙文派、都方之中、志道派、戸島派、玄正派是也、

〔翁草〕百二十一、盲人五派

一方玄正派、月島派、城方大山派、妙文派、

生佛坊<sub>略</sub>建久年中人

如一建業<sub>略</sub>建業之字見二水記、今書檢校、擬備官、

覺一建業

通一

申計候、恐惶謹言、

卯月四日

中條駿河殿

柴垣又兵衛乘形

〔群書一覽一〕平家物語

十二卷

又軒一筆云、平家物語引句語ハナハタの事、引句はふしを付琵琶に合せてうたふ音曲也、語句はびはを下にさし置、ふしもなく書籍の素讀などするやうに、其事實を諳ツにてかたるを、語句といふ云々、〔平家正節〕右此灌頂卷者、盲僧平曲之中、次大小二曲之奧秘、凡不レ一部之章句、曲節諸語之者、猥不許傳授、仍而此書爲家藏、最不出窓外者也、

〔平家物語十二〕小原御幸

シホイ口説 斯シ程ニ法皇ハ文治二年春、比建禮門院、大原閑居、御住御覽ゼマ欲ウハ被思召ケレ

共、二月彌生ノ程ハ、嵐烈餘寒モ未盡、下ケ峰ノ白雪消遣デ谷凍モ不打解自聲、春過夏來ツテ北祭モ過シカバ、法皇夜ヲ籠テ大原ノ奥ヘ御幸ナル、忍ノ御幸也ケレ共、供奉ノ人々ニハ德大寺花山院土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々ハツミ候ヒケリ、指聲鞍馬通リノ御幸ナレバ、彼清原深養父ガ補陀樂寺、小野皇太后宮舊跡觀覽有テ、其ヨリ御輿ニゾ被召ケル、中音遠山ニ掛ル白雲ノ、散ニシ花ノ信也、青葉ニ見ユル梢ニハ、春ノ餘多ゾ被惜、比ハ卯月廿日餘リノ事ナレバ、夏草ノ茂ミガ末ヲ分入セ、中ユイ給フニ、始タル御幸ナレバ、御覽ジ馴タル方モ無ク、人跡絶タル程モ被思召知哀也、初重西山ノ麓ニ一字ノ御堂有、即寂光院是也、舊造成セル泉水木立由有様、所也、中音薨破霧燒不斷香扉落月挑常住燭共、ケ様ノ所ヲヤ可申、初重庭若草茂合、青柳糸ヲ亂ツ、池ノ蘋浪ニ漂錦ヲ曝スカト謬タル、初重中音中島ノ松ニ掛レル藤波ノ、裏紫ニ咲ル色、青葉交ノ遅櫻、初花ヨリモ珍布、初重岸ノ疑冬咲亂、八重立雲ノ絶間ヨリ、山郭公ノ一聲モ、君ノ御幸ヲ待顔



〔野槌<sup>下五</sup>〕勸修寺良門十三代の孫、葉室時長、平家物語作者の隨一也と、公卿補任にあり、それは四十八卷の盛衰記なるべし、行長が作れるは十二卷平家にて、生佛に教へたり、又俗間に平家勸文一冊あり、六人の作者を載たり、舛誤おはければ信用にたらず、凡此物語に數本有盛衰記と平家物語と、一事の内に不同もあり、長門赤間關阿彌陀寺にて見たりしは、十六卷あり、又和州よりきたる本を、京なる人の許にて見たりしは、廿餘卷ありき、又琵琶法師のかたるにも往々不同あり、〔臥雲日伴錄〕文安五年八月十九日、予又問座頭話平家之由、最一曰、昔爲長卿<sup>四〇</sup>、<sup>〇</sup>菅原爲長、寛元<sup>四〇</sup>者、作此書十二卷、留在于播州、後曰、性佛者、上之於音曲而歌詠耳、

文明二年正月四日、入夜聽平家、熏一曰、惡七兵衛カゲキヨ、平家一代、武家合戰様盡記之、平大納言トキタ、文官歌詠等事皆記之、其後曰、爲長三位者、摺拾諸記集之、玄會法印剪裁以爲一書、名曰平家、凡相共評論者三十四人、但除平大納言惡七兵衛也、最初曰、性佛者、於禁中讀之、既而曰、城一者、話之、

〔獨語〕昔は賤しき者の、歌も詞もやさしく、きゝにくからず、<sup>〇中</sup>琵琶法師の平家物語は、天台の聲明のふしをうつして、生佛といふ目くら法師、おのれが生れつきの聲にて、語りはじめたりといふ、今の世まで傳れり、詞は本より平家物語なれば、云に及ばず、ふしも昔の習なれば、きゝにくからず、琵琶を合すれば、其の聲も淫ならず、玩ぶ人に損なし、

〔和漢三才圖會<sup>十六</sup>〕語平家

今琵琶法師所語平家は也、其音聲殆不清亮、如獸吼、蓋生佛之聲然故耳、凡語平家謂一、句二、句諸謂一番二番、淨瑠璃謂一段二段、

〔貞徳文集<sup>上</sup>〕今朝都方城方檢按衆、勾當衆烈、平家聽聞申候、何<sup>茂</sup>琵琶者名絃候、一谷合戰、忠度都落於檀浦次信最後、大原御幸取々殊勝候調子、甲乙明々相交、白聲、又者二重三、重被繰上候、面白事無

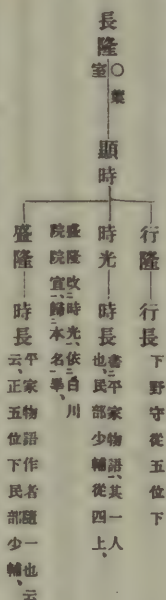
のこゑに似たる處あり、六道講式のはかせ、及び叡山大會の時など、よみあぐる聲明のふし、今の座頭のかたるによくうつりて、まがふところおほし、

〔醍醐雜抄〕平家作者事

或平家双紙奥書云、當時命世之盲法師了義坊實一名之說云、平家物語、中山中納言顯時子息左衛門佐盛隆、其子民部權少輔時長作之、又將門保元平治已上四部、同人作云々、此時長前作平家廿四卷之本、籠伊勢大神宮訖、是佐渡院之御時也、順德帝是也、後嵯峨院御在位之時、吉大貳入道輔常吉田○即大貳藤原資經、法名乘順、高藤十二世孫、公輔補任云、天福二年出家、作之平家物語、民部少輔時長書之、合戰事依無才學源光行基八經世孫、古今作者部類云、建仁三年任大監、物水源抄作者、詠之、十二卷平家資經卿書之、又鶴談集第七云

一平家の物がたりは、民部少輔時長かきたりけるを、合戰の事をばさいかくなしとて、源光行にあつらへたりけるとなむ、十二卷平家と云物資經卿書之、

〔諸家大系圖七原〕



○按ズルニ、本書ニ時長二人アレドモ、傍註ニ據ルニ、時光ハ盛隆ノ改名セシモノニテ、蓋シ同人ナレバ、其子時長モ亦同人ナルベシ、又按ズルニ、徒然草ノ信濃前司行長ト云ヘルハ、行隆ノ子行長ノコトナランカ、行長ト時長トハ從兄弟ナレバ、相混ジテ誤レルニテモアルベシ、姑ク附記シテ後考ニ備フ、

傳來

〔倭訓栞<sup>中編二十一</sup>〕<sup>比</sup>びはほうし 琵琶法師なり、座頭をいふ、或は替者の琵琶を弄するは、蟬丸より始るといへり。

〔今昔物語 二十四〕源博雅朝臣行會坂言許語第廿三

今昔源博雅ト云人有ケリ、<sup>略</sup>○中此人村上ノ御時ニ

ニ一人ノ盲庵ヲ造テ住ケリ、名ヲバ蟬丸トゾ云ケル、此レハ敦實ト申ケル式部卿ノ宮ノ難色ニテナム有ケル、其ノ宮ハ宇多法皇ノ御子ニテ管絃ノ道ニ極リケル人也、年來琵琶ヲ彈給ケルヲ常ニ聞テ、蟬丸琵琶ヲナム微妙ニ彈ク<sup>略</sup>○下

〔源氏物語<sup>十三</sup>明石〕をかべにびはさうのこととりにやりて、入道びはの法しになりて、いとおかしうめづらしうて、ひとつふたつ引いでたり、<sup>略</sup>○下

〔花鳥餘情<sup>八</sup>明石〕入道琵琶の法師になり 比巴ひきてありく法師なり、當時の盲目のごとし、小

右記云、召琵琶法師、令盡才藝給、少祿云々<sup>寛和八年七月十八日</sup>

〔徒然草<sup>下</sup>〕後鳥羽院の御時信濃前司行長、稽古のはまれ有けるが、樂府の御論義の番にめされて、七徳の舞をふたつ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うきことにして、學問をすて、遁世したりけるを、慈鎮和尚一藝あるものをば、下部までもめしおきて、不便にせさせ給ければ、此信濃入道を扶持し給けり、此行長入道平家物語をつくりて、生佛といひける盲目にをしへて、かたらせけり、さて山門のことを、ことにゆゝしくかけり、九郎判官の事は、くはしくしりて書のせたり、蒲冠者の事は、よくまらざりけるにや、多くの事どもをあるしもらせり、武士の事、弓馬のわざは、生佛東國の者にて、武士に問聞てか、せけり、彼生が生れつきのころを、今の琵琶法師はまなびたるなり。

〔徒然草参考<sup>八</sup>〕行長入道慈鎮和尚に扶持せられし故にや、平家のよし、おほくは台家の聲明

よそへてもげにぞ戀しき人まねのおほひかづらの女すがたを

## 琵琶法師

琵琶法師ハ、琵琶ヲ彈ズル盲僧ノ稱ニシテ、傳ヘテ以テ字多天皇ノ皇子敦實親王ノ難色婢九ニ創マルト爲セドモ詳ナラズ、一條天皇ノ比ニ及テハ、琵琶法師ノ名漸ク史籍ニ散見シタレドモ當時ハ未ダ雅樂ノ範圍ヲ出デズシテ別ニ一種ノ指法アリシニハアラズ、其平家物語ヲ演ジテ之ヲ琵琶ニ合スルハ、鎌倉幕府ノ比ニ起ル而シテ此物語ノ作者ハ或ハ信濃前司行長トシ、或ハ葉室時長トシ、或ハ菅原爲長トシテ、其說一ナラザレドモ、始テ之ヲ琵琶ニ合セテ語リシモノハ、盲僧生佛一作性佛ナリトス、是ヨリ後、盲僧一作性佛ニ之ヲ傳ヘテ城下方下都下方下ノ二流ヲ生ジ更ニ大山妙文、志道戸島、玄正等ノ六派ニ分ル、ニ至レリ、平家ヲ語ルニ引句、語句アリ、引句トハ琵琶ノ調子ニ合セテ唱フヲ云ヒ、語句トハ琵琶ヲ膝ノ前ニ置キ、徒ニ唱フヲ云フ、要スルニ其手法甚ダ疎ナルヲ以テ、徳川幕府ノ時、等三味線等ノ盛ニ行ハル、ニ從ヒ、之ヲ好ムモノ漸ク稀ニシテ、終ニハ殆ド絶エナントスルニ至ル、是ニ於テ薩摩琵琶起ル、薩摩琵琶モ亦初ハ盲僧ノ專業トシテ、平家ノミヲ語リシガ、後ニハ遠近五倫等ノ數曲ヲ製シ、漸ク繁手ト爲シ、人意ニ適シケレバ、薩隅ノ地ニハ大ニ流行シテ、少年ノ輩ハ弓馬ヲ習フノ餘暇ニ此器ヲ弄ベリ、

名稱

〔庭訓往來〕琵琶法師、縣御子、傾城、白拍子、遊女、夜發聲、

〔下學集上人〕座頭法師

〔書言字考節用集四人〕琵琶ビバ法師ボウシ一檢按是則次曰勾當薩摩未詳今檢太平記載琵琶、



還御彼宿へ成、閏十月三日、有田樂、御難掌兵衛佐殿沙汰アリ、御出儀同前、

〔海人藻芥〕勸進ノ田樂猿樂棧敷ニ出候事、先々ハ一官一職ニ至ル程ノ人不望其處、然而近代二條攝政殿初テ見物セシメ給門跡ニハ梶井門主同令出給、其後公家ノ輩并諸門跡見物連綿ナリ、雖然近衛殿一條殿ハ未出給ハズ門主ニハ御室曾テ不令出給也、一年田樂棧敷多ク崩レテ、見物ノ道俗留命、其棧敷ニ二條攝政殿以下公家ノ人々、多令出棧敷之間、何者カシタリケン、落書ニ、

田樂ノ將基タラシノ棧敷ニハ王計コソ登ラザリケレ、同棧敷ニ梶井宮令出給ノ間、落書ニ、

釘付ニシタル棧敷ノ破ルハ、梶井ノ宮ノ不覺ナリケレ、其比者如此棧敷ナドヘ、サリスベキ

人ノ出タルハ、不可然事ニ諸人思ヘリ、仍テ落書ナドモ有ケルニヤ、當代ハ只出ザルヲ以加難儀、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年○寛治元年九月十六日丙寅、相模國毛利庄山中有怪異等、毎夜田樂粧之由、土

民等言上云云、

〔増鏡

七

北野の雪〕

そのおなじころ安嘉門院

○

邦子内

親王、

中略

よろづの事御心のまゝにこのましく物し給

ひける、童舞白拍子田樂などいふ事このませ給ひて、いにしへの郁芳門院にも、やゝまさりてぞ

おはします、

〔建武年間記〕口遊、去年八月二條河原落書云々、

○元年

中略

略

犬田樂ハ關東ノ、ホロブル物ト云ナガラ、田樂ハナヲハヤルナリ、

○下

〔宇野主水記〕天正十二年十二月、今度當門跡

○本

へ田樂ト云モノ御禮ニ参リ候、出立ハ衣裳ハ何

ヲモ著ルトミヘタリ、今日方阿彌出立、襷色ノ小袖ニ布白袴、ヒヤウモンノアサギノスワヲ紅皮

アリ、末廣ガリノ房腰ニサス也、

〔七十一番歌合〕五十番 左 でんがく

田樂のちうもむくちの透れんじのぞくぞ月の細め成ける

○中

略

緋額ヲ張、天蓋ノ幕ハ金欄ナレバ、片々ト風ニ散滿シテ、炎ヲ揚ルニ不異、舞臺ニ曲桌、繩床ヲ立雙  
べ、紅綠ノ氈ヲ展布テ、豹虎ノ皮ヲ懸タレバ、見ニ眼ヲ照シテ心モ空ニ成ヌルニ、律雅調冷ク、颯聲  
耳ヲ清處ニ、兩方ノ樂屋ヨリ中門、口ノ鼓ヲ鳴シ、音取ノ笛ヲ吹立タレバ、匂ヒ薰蘭ヲ凝シ、絳ヒ紅  
粉ヲ盡シタル美麗ノ童八人、一樣ニ金欄ノ水干ヲ著シテ、東ノ樂屋ヨリ練出タレバ、白ク清ラカ  
ナル法師八人、薄化粧ノ金黒ニテ、色々ノ花鳥ヲ絳盡シ、染狂タル水干ニ、銀ノ亂紋打タル下濃ノ  
袴ニ下結シテ、拍子ヲ打、アヤイ笠ヲ傾ケ、西ノ樂屋ヨリキラメキ渡テ出タルハ、誠ニ由々數ゾ見  
ヘタリケル、一ノ籥ハ本座ノ阿古、亂拍子ハ新座ノ彦夜叉、刀玉ハ道一、各神變ノ堪能ナレバ、見物  
耳目ヲ驚ス、角テ立合終リシカバ、口吉山王ノ示現、利生ノ新タナル猿樂ヲ肝ニ染テゾ出シタル、  
斯ル處ニ新座ノ樂屋八九歳ノ小童ニ、猿ノ面ヲキセ、御幣ヲ差上テ、赤地ノ金欄ノ打懸ニ、虎皮ノ  
連貫ヲ蹴開キ、小拍子ニ懸テ、紅綠ノソリ橋ヲ斜ニ蹈テ出タリケルガ、高欄ニ飛上リ、左ヘ回右ヘ  
曲リ、抛返テハ上リタル在様、誠ニ此世ノ者トハ不見、忽ニ山王神託シテ、此奇瑞ヲ被示カト、感興  
身ニゾ餘リケル、サレバ百餘間ノ棧敷共、咏兼テ座ニモ不蹈、アラ面白ヤ難堪ヤト喚キ叫ビケル  
間、威聲席ニ餘リツ、且ハ閑リモヤラズ、清ル處ニ將軍ノ御棧敷ノ邊ヨリ、嚴シキ女房ノ練貫ノ  
妻高ク取ケルガ、扇ヲ以テ幕ヲ揚ルトゾ見ヘシ、大物ノ五六ニテ打付タル棧敷傾立テ、アレヤア  
レヤト云程コソアレ、上下二百四十九間、共ニ將基倒ラスルガ如ク、一度ニ同トゾ倒ケル、若干ノ  
大物共落重リケル間、被打殺者其數ヲ不知、

〔花營三代記〕應永廿八年十二月二日、祇園御旅所、大政所勸進有田樂、增阿彌御棧敷七間以上、棧敷

六十管領ヘ御成アリ、其ヨリ御棧敷、江御車、御方御所様御同車アリ、廿九年十月廿二日、有勸進

田樂、增阿彌御棧敷七間之内、三間ハ御臺也、其外皆去年ノゴトク、御所様官領成佳例、御方様御馬

ニテ成、自官領御同車ニテ御棧敷成、廿九日、有田樂御出次第、同前御雜掌、細川右京大夫入道殿

## 寺院行田樂

○按ズルニ三月十七日ト六月十五日トノ淺草三社權現祭禮ノ時、及ビ七月十三日ノ王子權現祭禮ノ時、田樂踊ヲ行ヘリ、事ハ神祇部雜祭篇ニ載セタリ、

〔太平記<sup>三十</sup>〕持明院殿吉野遷幸事附梶井宮事

梶井二品親王ハ、此時天台座主ニテ坐シケルガ、同ク被召捕サセ給テ、金剛山ノ麓ニゾ坐シケル、此宮ハ本院ノ御弟慈覺大師ノ嫡流ニテ、三度天台座主ニ成セ給ヒシカバ、門跡ノ富貴無雙、御門徒ノ群集如雲、師子田樂ヲ被召、日夜ニ舞歌ハセ、茶飲ミ連歌仕ヲ集メテ、朝夕遊ビ興ゼサセ給シカバ、世ノ譏リ、山門ノ詆ハ止時無リシカ共、御心ノ中ノ樂ハ、類非ジト見ヘタリシニ、<sup>略</sup>下

〔蔭涼軒日錄〕寛正六年十月五日、奉報西芳寺御成之事也、<sup>略</sup>中

四座申樂之内、觀世勸佛頭山、尤勝絶

之由被仰談之、田樂永阿彌勤女能殊不著面爲可笑也、田樂元來於南都不著面、仍爲素面、可被笑欺、以千阿彌日被仰出、尤爲永阿榮乎、

## 勸進田樂

〔太平記<sup>二十七</sup>〕田樂事附長講見物事

今年<sup>五年</sup>○貞和多ノ不思議、打續中ニ洛中ニ田樂ヲ翫ブ事法ニ過タリ、大樹<sup>釋氏</sup>○足利是ヲ被興事、又無類サレバ萬人手足ヲ空ニシテ、朝夕是ガ爲ニ娯費ス、關東亡ビントテ高時禪門好ミ翫シガ先代一流、斷滅シヌ、ヨカラヌ事ナリトゾ申ケル、同年六月十一日、抖擻ノ沙門有リケルガ、四條橋ヲ渡サントテ、新座本座ノ田樂ヲ合セ、老若ニ分テ能クラベラゾセサセケル、四條川原ニ棧敷ヲ打ツ、希代ノ見物ナルベシトテ、貴賤ノ男女舉ル事不斜、公家ニハ攝籙大臣家門跡ハ當座主、梶井二品法親王、武家ハ大樹是ヲ被興シカバ、其以下ノ人々ハ不及申、卿相雲客諸家ノ侍、神社寺堂ノ神官僧侶ニ至ル迄、我不劣棧敷ヲ打、五六八九寸ノ安ノ郡ナドヲ鑄貫テ、<sup>ワタ</sup>圍八十三間ニ三重四重ニ組上、物モ修シク要ヘタリ、巳時刻ニ成シカバ、輕軒香車地ヲ爭ヒ、輕裘肥馬繁ニ所ナシ、幔幕風ニ飛揚シテ、薰香天ニ散滿ス、新本ノ老若東西ニ、幄ヲ打テ、兩方ニ橋懸リヲ懸タリケル樂屋ノ幕ニハ

一京都發足之日限

三月廿二日出立四月七日日光山迄著到、神事相勤申、同廿一日、日光發足江戸へ罷出申、東海道筋罷登候様に書附在之候、

一田樂勤役之場所は、壹ヶ所相見え申候、

田樂相勤申時節は、舞樂人罷出、申樂を奉候而引取申處、早速田樂罷出相勤申候、其跡へ又々樂人罷出、相勤候儀に見え申候、右之外に能狂言之類は一向相勤不申候、其節始終御支配之義は、御執頭中兩人、雲山院眞覺院御兩院之御世話にて相勤申候、

以上

泉原二徳記之

〔新安手簡〕<sup>四</sup>與寒川儀大夫書

田樂法師、貴邦<sup>江</sup>近ヨリ初リ候ヤウ承リ及ビ候、敝邦<sup>戸</sup>ホヨリ初リ候コト、何ノ書ニモ見當リ申

サズ候、朝野群載大江匡房田樂記ニモ常陸ヨリ出ルト申スコトハ、之レナキカト覺へ申候、然レドモ城下ヨリ八九里隔テ候テ、金沙山ニ田樂ノ者罷在リ候、法師ニテハ御座ナク候、俗ニテ夷ト稱ハ、一種ノ者ニ御座候、毎年東照宮御祭禮ノ前日四月十六日、假殿ニテ田樂相勤メ申シ候、金沙權現祭禮七十三年、丑年毎ニ大田樂之レアリ候、是ハ奇觀ニテ御座候、小田樂丑未年毎七年ニ必ズ之レアリ候、<sup>○下</sup>

〔新安手簡〕<sup>五</sup>寒川儀大夫書<sup>諸所</sup>

坂本田樂ノ義、古昔比叡ノ下法師是ヲ學ビ、日吉祭禮ニ此儀式ヲ爲シ、一足ノ履ヲ著、劔ヲ拔テ踊躍シ、或品玉ヲ取ルナド、人ノ笑ヲ求メ候處、近世諸院ヨリ停止、只今ハ田樂法師ト申ス者ハ之レナク候、併古例ヲ存シ、日吉祭禮ノ日ハ、外ヨリ雇ヒ來リ候テ相勤メ候由、種々ノ伎藝ヲ仕リ候ヨシ承リ及ビ候、



あり、

【日光山志<sup>五</sup>】御神事御行列略○中

田樂法師 宮仕一人

金色の立烏帽子、赤地金襴の袍、奴袴は茶色の綾織、拍板を襟にかけて糸鞋をはけり、

御法會の砌は京都より田樂法師數輩くだり御行列に供奉し、御旅所にて舞曲なきり、先年より京都田樂法師の内一人當山に留めさせ玉ひ、千萬歳とかやいへるもの、子孫を常には宮仕に被仰付御宮へ勤め、兩度の御神事の時には、田樂法師の役にて供奉せり、此黨京都にすめるもの、其稱號千萬歳、又十萬歳、百萬歳、萬々歳など、名乗といへり、

【田樂法師由來之事】一正徳五年未四月於日光山東照大權現様一百年御神忌之節、田樂役人六人

出勤之次第

一道中上下共御傳馬六疋拜領之

一路用金道中上下三十日分、金子拾四兩一步拜領之、

但上六人は一人前一日に錢百五十文宛 下拾人は一人前一日に錢百文宛

一日光山逗留中之扶持方、金子拾四兩錢一貫文拜領之、

一日光山逗留中宿料、金子三兩拜領之、

一宮様より被物ツツ二ツ拜領之

但代金にて被下置候由

一御布施物金子百兩拜領之

右は御法事御奉行様より、京都御所司様へ被仰越、御所司様御裏印之御證文にて、御代官小堀仁右衛門様にて請取申候、

大鼓床机にのせ、先より太鼓功者成者持居手の内有よし、近年は床机の上に太鼓臺にのせ打申候、

能六番、狂言三番、年々番組替り有、二年番組左にふるす

田樂法師、立烏帽子にて、兩人立合開口あり、

菊水、松巴、經政、ふるごほり、まのお、合浦

又ノ年箱崎、雪鬼、常政、ふるごほり、かしは、合浦

狂言、御福田、くらま参り、山行、其外猿樂に同じ名替り有、

能相濟、田樂法師を客殿へ召上グ、歪事有、小謡うたふ、歪臺、積交、龜足、給はる

其後申刻、白幣出御、頭坊頂戴し、田樂法師、新座本座兩度ニ請取、庭上にて奉幣有之、○中略

一廿七日早天、頭屋兒客殿に御出、満寺僧出仕、

庭上左右二行に、樂頭幣持、田樂法師、新座本座仕丁床机に居、田樂法師一獻式々有

金銀五色御幣二本、新座本座受取、休幕居へ行、○中略 興福寺内

第一番田樂法師、兩座壇前に二行に立ならぶ、一座ヅ、藝能相濟、壇上へ中の壇かづらのわき

を一人ヅ、衆徒寺僧の間を通り、門の内へ入ル、花笠の法師高木履にて上る、老人なる故、近年木

履御免のよし、田樂法師同一座右同斷門の内へ入り、渡り不殘相濟退參の後、門より出西へわたる、

○中略

一田樂法師、新座本座、一座ヅ、奉幣、二行にならび藝有、是までを朝座といふ、社家、禰宜、五師三綱、諸役人退出す、神前

とは、禰宜相つとむ、○中略

一二十八日、御旅所、後日御能、○中略御能相濟、諸役人退散の後、

田樂法師兩座中門ノ少北に神前に向ひ、熾き残り、熾火、打入立合、開口は兩人立、連舞等有之、一獻祝儀

〔明徳二年室町殿春日詣記〕明徳二年辛未九月十五日、室町殿于時准五后春日御參詣日記之事、中略十七日、今日祭日也、十八日今日田樂猿樂也、御棧敷七間、薄檜皮大鳥井ノ内三丁計敷、東頼

西面、

〔豐國大明神臨時祭日記〕去程、居諸如箭推移、已七年忌ニ相當臨時之行御祭禮、慶長九年八月豐國大明神ヲ諫申候へと、秀頼公ヨリ被仰付、中略

豐國大明神臨時御祭禮次第略中

三番 田樂衆三十人様々の出立にて、相並弓手馬手列二行、刀ヲ拔テ品玉に取而參る事如意の威風者、拂墨雲の竭神、弓矢ヲ對而參るは、執定慧の弓箭、禦四魔之軍敵、鉾ヲ振而參るは、以三戰之鉾、拂諸之賊難、惡鬼降伏御祈禱ナリ、略中

〔春日大宮若宮御祭禮圖〕一同日十一日田樂法師、新座本座より壹人ヅ、編木タタキ大鼓高足持參致し、頭屋の坊へ上る、略中

一廿四日、田樂頭屋にて、五色の御幣調之、殺人別火

一同日、田樂法師殘らず新坊へ來る、由樂法師補任ハ、或徒より出る、中略

一廿五日、頭屋之御幣の本に、翌廿六日田樂法師に給はる所の裝束、これをかざりをく、已刻田樂法師不殘來り、銘々に札を付をき、其後一獻を給はり退出す、略中

一廿六日、未明より田樂頭屋御幣客殿へ出る兒二滿寺の僧出仕、對屋へ衆徒、中門へ白衣若僧、庭上へ仕丁列座、其後閑頭幣持之僧四人、新座本座の田樂法師廿六人、庭上に二行に床机へ參集し、客殿より田樂法師壹人ヅ、よび出し、裝束を給はる、略中

右之外、一臈より三臈まで被物被引之、

其後田樂法師、庭上にて藝能相つとむ、

寶曆五年二月十一日

家原寺

久藏院

〔業黃記〕寛元四年六月廿八日乙卯、今日祇園御靈會去六日大政所燒亡之間、式日延引、緣限、馬長等任例有御覽略○中此後步。田樂強雖不可然、又有先例、大猿樂等推參、可相從、頻欲施藝、然而被追退了、

〔勤仲記〕弘安七年六月十三日己未予兼作藤原爲御使參關白殿、明後日十五、祇園十列乘尻一人及

關如了、兩御方之間一人可被召進之由、可申之由、以前藤黃門被仰下、即馳參申此旨、十四日庚辰、

馬長御覽事予申沙汰略○中次侍所步。田樂等參入、有其興一返廻了退出、

〔嘉元記〕延文五年十一月廿日、常樂寺市ノ祭於市場夷前在之、樂頭中小路座藥師田樂、奈良之新座

田樂一圓ニ參勤、如法殊勝、祿物三貫文給了、

〔至德二年記〕一同○十月十七日、祭禮○春日宮出仕事○中

田樂兩座參勤之後、左右著座、社司氏人等令退出了、十八日、期日田樂猿樂等在之、田樂頭人

ハ中御門逆修坊坊主ト、西院坊主觀識律師等也、

〔嘉慶元年春日臨時祭記〕五月廿五日朝之程、聊有雨之絕間、各勇悅○中慶重蓮順守行列之次第令

奉行之○中

田樂法師 佐々良

兩人公頭高足アイシラヒ忍真房二三條勤連房辰市下野房若狹公、モキノ手ノ助公、高足刀玉

懸鼓

今江子羽字野上總公順勝房大輔公勝順院藏人公越後公鼓打之緣勝房シテテイ源精房前

高足持順信房、紅打ノ水千ニ著、

田樂雅頭輔鹿公、脇田床子持、春綠房御幣豐陽房細男御幣丹後公、高笛

列座左右之樂屋之後、田樂猿樂等、各發藝盡能、田樂之座、西猿樂之居東○下



飯阿イ、チ

似阿小鼓

愛阿舞能等通語也

林阿大鼓

龍阿能之

玉阿刀玉

金阿能高

松阿狂言

最阿言足

今阿刀玉

一阿狂言

幸阿笛

德阿狂言

同十八日、若君様足利義親征夷大將軍足利義奉成る門跡様如意寺殿同渡御、昨日之窮屈以外難忘諸事御幼稚之御事也、田樂御見物之御望定可有之なれば存忠儀所成申也、午之半刻光御、御輿袖白上賜御御力者八人、御太刀ハキ十人、左右に列行、庭前ニ雙居たる見物衆皆追拂畢中御盃

三獻之後田樂始之中門口以下如昨日、

一番

水くみの能

二番

あつもりの能

三番

女の敵うちたる能

四

番

關原與一能小兒三人ニ沙汰、三人能愛兒之興畢、三

五番

夜念佛能

六番

はらかの能

七番

源氏の能

八番

若水の能 限日之暮能終下

神社行田樂

〔田樂法師由來之事〕一年霜月、南都春日明神御祭之節、二十六人之數相揃出勤仕候、本座之一脇

御門主様へ御目見奉申上、祭禮之場にて田樂之式、并能五番相勤申候、御神事下行現米五十石、

二十六人之裝束不殘面々拜領仕候、別紙目錄に相見え申候事、

一 每歲四月十七日、紀州和歌浦東照權現様御祭禮人數六人罷上、田樂相勤申候、四月申之日、比叡

山王祭人數三人出勤仕候、五月廿八日、攝州住吉大明神御田植神事に、六人參勤仕候、右何れも

古來より相定候、下行米頂戴仕候事、

一 於日光山大權現様御神著之節ハ、毎度人數六人出勤仕候、道中御傳馬御證文頂戴仕來候、正徳

五年御百年忌之節、裝束道具并御布施金子百兩上下之路用、逗留中入用等迄拜領仕候、別紙目

録に相見え申候事、中

右之通藤田松阿彌招寄せ相尋承届趣、粗如斯御座候、以上、

與甚尋常ニ起タリ、暫有テ拍子ヲ替テ、歌フ聲ヲ聞ケバ、天王寺ノヤウウレボシヲ見バヤトゾ拍子ケル、或官女此聲ヲ聞テ、餘ノ面白サニ障子ノ隙ヨリ是ヲ見ルニ、新座本座ノ田樂共ト見ヘツル者、一人モ人ニテハ無リケリ、或ハ袴勾テ鴉ノ如クナルモアリ、或ハ身ニ翅在テ其形山伏ノ如クナルモアリ、異類異形ノ編者共ガ、姿ヲ人ニ變ジタルニテゾ有ケル、

〔東山殿年中行事正月〕廿六日、未刻御成于京極持清亭、御作法同前、有田樂親世之

〔文安田樂能記〕伏見殿と奉申は、當今の現親王常にわたらせ給ふ實意有子細テ奉仕する事他

に異なり、依文安元年六月廿九日、此弊坊に奉成畢、爲催興及晚福若九本座田樂召出テ於中川舞

曲兩三番音曲數返、藏阿飯阿愛阿已下六人庭上に座、今阿刀玉取之懸御目、始而御覽之間、御入與

無極、仰曰、如此の儀可有之者、一向に能藝を可被御覽物をと被悔思、召由被仰下、申云、誠爲此尊慮

者重奉成、可申沙汰旨言上、依此儀今度文安三年三月十七日成申者也、御行粧歷々親王御方同令成給中

御樂被始略次田樂 先中門口 ビンザ、ラ 菊阿彌 笛 玉阿彌著花笠高足

次立逢 飯阿 愛阿 寵阿 全阿也 揚萬歲聲飄袖事良久

次刀玉 玉阿今阿兩人勤之、其役常之儀は壹人也、

大能藝 一番 勢勢田の玄春ゆんかう門の能 二番 女沙汰の能 三番 北野物ぐ

るひの能 四番 尺八の能 五番 なるこの能 六番 書寫の能 七番 法然上

人の能 八番 小野小町の能 九番 屏風の能 十番 さねかたの能

春日雖、永夕陽西にかたぶく間日没を其期として、貴賤群集之人、每能盡威聲萬歲之美談、只驚耳

目云々、近來新座繁昌本座零落す、今又本座古に歸して與座畢中翌朝參御禮中

田樂之趣人數注之  
福若麿 菊子丸愛阿 寵喜久丸寵阿 藤松丸似阿 菊阿ピンザ、ワ

ケバ馬ヲモ不步セズシテ、ノドノト馬ヲ步スル程ニ、家ノ内市ヲ成シテ喰ル、年クシテ廊ノ有ル妻ニ馬ヲ押寄セタレバ、喜ビ乍ラ下ヌ□タル所ニ居エツ、先ヅ心モ不得ヌ事ナレバ、供奉郡司ニ、彼ノ郡司ノ主聞給ヘ、此ノ田樂ハ何ノ料ニテ爲サセ給フゾト問ヘバ、郡司ガ云ク、西塔ニ參タリシニ、勲ニ爲ル功德ニハ、樂ヲナム爲ルゾト被仰シカバ、儲テ候フ也、其レニ講師ヲバ樂ヲシテナム迎ヘ可奉キト人ノ申セバ、參ラセテ候ヒツル也ト、供奉其ノ折ニヅ、此奴ハ田樂ヲ以テ、樂トハ知タリケル也ケリト心得テ、可咲ク思ヘドモ、可云キ人モ无カリケレバ、供養シ畢テ山ニ登テ、勇タル小僧共ノ中ニ、田樂ノ事ヲ語レバ、トヨミテ咲ケル事无限シ、供奉本ヨリ物云ノ上手ナリケレバ、何カニ可咲ク語リケム、賤ノ田舍人ナレドモ、皆然様ノ事ハ知タル者ヲ、彼ノ郡司ハ无下也ケル奴、カナトゾ、此レヲ聞ク人皆誇リ咲ケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔吾妻鏡 三十六〕寛元三年八月十六日戊寅、鶴岡馬場之儀、殊被結構、略中馬場儀、神子田樂、馬場儀等如常云々、

〔太平記 五〕相模入道弄田樂并闘犬事

其比弘元洛中ニ田樂ヲ弄ブ事昌ニシテ、貴賤舉テ是ニ著セリ、相模入道高時北條此事ヲ聞及ビ、新

座本座ノ田樂ヲ呼下シテ、日夜朝暮ニ弄ブ事無他事、入興ノ餘ニ、宗トノ大名達ニ田樂法師ヲ一人ヅ、預テ、裝束ヲ飾ラセケル間、是ハ誰ガシ殿ノ田樂、彼ハ何ガシ殿ノ田樂ナンド云テ、金銀珠玉ヲ逞シ、綾羅錦繡ヲ敷カレリ、宴ニ臨テ一曲ヲ奏スレバ、相模入道ヲ始トシテ、一族大名我劣ラジト、直垂大口ヲ解テ拋出ス、是ヲ集テ積ニ宛山ノ如シ、其弊ヘ幾千萬ト云數ヲ不知、或夜一獻ノ有ケルニ、相模入道數盃ヲ傾ケ、醉ニ和シテ立テ舞事良久シ、若輩ノ興ヲ勸ル舞ニテモナシ、又狂者ノ言ヲ巧ニスル戲ニモ非ズ、四十有餘ノ古入道、醉狂ノ餘ニ舞フ舞ナレバ、風情可有共覺ザリケル處ニ、何クヨリ來トモ知ヌ、新座本座ノ田樂共十餘人、忽然トシテ坐席ニ列テヅ舞歌ヒケル、其

未ダ暗キニ西塔ヨリ忿ギ下テ、三津ノ邊ニ白々ラト明ル程ニ行タレバ、船ハ兼テヨリ儲タリケレバ、乗テ行ケルニ、矢馳ニ渡ル程一時許ノ渡リナレバ、已時許ニ三津ニ渡リ著タリケル、見レバ前ニハ鞍置タル馬三疋ト云ヒシカド、十餘疋許引立タリ、亦白裝束シタル男共十餘人許立並タリ、凡ソ様々ノ下人共四五十人許村々ニ立テリ、供奉此レハ物見ル者共ニヤ有ラム、何ヲ見ゾト思テ、東西ヲ見廻セバ、露可見キ物モ只今不見エズ、船寄セツレバ下テ引キ寄せタル馬ニ乗ス、其ナル法師二人亦馬ニ乗セテ前ニ打立タルニ、今十餘疋許ノ馬ニ、此ノ白裝束シタル男共、ハラハラト乗ス、此ノ男共ハ迎ヘニ遣セタル也ケリト、其ノ時ニナム心得ケル、日ノ高ク成スレバ、馬ヲ早メテ忿ギ行クニ、此ノ白裝束ノ男共ノ馬ニ乗タル、或ハヒタ黒ナル田樂ヲ腹ニ結付テ、法ヨリ脇ヲ取出シテ、左右ノ手ニ桴ヲ持タリ、或ハ笛ヲ吹キ高拍子ヲ突□ヲ突キ、桴ヲ差テ、様々ノ田樂ヲ二ツ物三ツ物ニ儲テ打墮リ、吹キツレツ、狂フ事无限シ、供奉此レヲ見テ、此ハ何カニ爲ル事ニカ有ラムト思ヘドモ、□テ否不問ズ、而ル間此ノ田樂ノ奴原、或ハ馬ノ前ニ打立チ、或ハ馬ノ後ニ有リ、或ハ喬手ニ立テ打行ク、然レバ供奉今日此ノ郷ノ御靈會ニヤ有ラムト思ヘバ、極カリケル折ニシモ來リ會テ、此ル奴原ノ中ニ具シテ行クハ、物狂ハシキ態カナ、不意ニ知タル人ヤ會ハムト思ヘバ、袖ヲ以テ顔ヲツフト隠シテ行クニ、郡司ガ家漸ク近ク見ユ、家ノ門ノ前ニ百千ノ人立舉テ見ル、疾ク忿テ行カムト爲ルニ、此ノ田樂ノ奴原供奉ニ向合テ、鼓ヲ打テ向ヒ□ヲ笠ノ鉉ニ突懸ケ、桴ヲ捧テ頭ノ上ニ招キ、此シツ、行モ不遣セズ、腹立シキ事无限シ、辛クシテ郡司ガ門ノ許ニ行著テ、馬ヨリ下ムト爲ル程ニ、郡司祖子出來テ、左右ノ馬ノ口ヲ取テ、乗セ乍ラ家ノ内ニ傳キ入ルレバ、供奉此ナ爲ソ、只其ニテ下セト云ヘドモ、穴忝ナヤト云テ耳ニモ不聞入ズ、然テ此ノ田樂ノ奴原ハ、馬ノ左右ニ烈シツ、次ギテ遊ビテ入ル、郡司吉ク仕レ己等ト云ヘバ、鼓打ツ者三人馬ノ前ニ向テ、乙仰張リテ極ク打行ケバ、供奉佗テ疾ク下シテバ吉カルベキニ、此ク狂ヒ行



も、かのまねをしてもてあそぶ事になりしをも、名をば猶田樂とよび習はせり、其後又二たび變じて田樂と云一藝の道出來て、法師のする事になりて、その家をたて、本座新座などとして、座をわかち、刀玉とかやなどの類をし出し、刺猿樂の如く謠をうたひ、能といふ事をする事になれり、かの田うゑの田樂は、田子の心倦み形の疲るゝをいさめ慰めて、其わざをばげまさむが爲なるを、田の神を祭る神樂なりといふ説の有より、一轉してかの法師のする田樂を、所々の神社の祭禮に、用ゐることにたりしなるべし、

## 〔今昔物語 二十八〕近江國矢馳郡司堂供養田樂語第七

今昔、比叡ノ山ノ西塔ニ住ケル教圓座主ト云フ學生有ケリ、物可咲ク云テ人咲ハスル説經教化ヲナムシケル、其レガ未ダ若クシテ、供奉ト云テ西塔ニ有ケル時ニ、近江國□□ノ郡ニ矢馳ト云フ所ニ有ケル郡司ノ男、年來極ク此ノ人ニ志有テ、山ノ不合ノ事共ナド常ニ訪ケレバ、教圓若キ程ニテ貧キ身ナレバ、善ク思テ過ケル程ニ、彼ノ郡司ノ男態ト來タリ、何事ニ來ツルゾト問、郡司ノ男ノ云ク、年來ノ願ニ依テ佛堂ヲナム造リ奉リテ候フヲ、此レ勲ニ吉ク供養シ奉ラムトナム思ヒ給ウル、年來ノ睦ニ御マシナムヤ、何ニ亦勲ニ可仕カラム事共ヲモ、被仰レムニ隨テ構可候キ也、年罷老テ候ヘバ、偏ニ後世ノ爲ニト思テナム候フト云ヘバ、教圓詣デム事ハ糸安キ事也、其ノ日ノ未ダ朝メテ三津ノ邊ニ、迎ヘノ船ヲ遣セ給ヘ、亦矢馳ノ津ニ馬二三疋ニ鞍置テ遣セ可給キ也、然ラバ功徳勲ニ爲ルニハ、舞樂ヲ以テコソハ供養スレ、此ハ皆極樂天上ノ様也、但シ其レハ樂人ナド呼ビ下スハ大事ナレバ、否呼ビ不給ジナト云ヘバ、郡司ガ云ク、樂人ハ己ガ住候フ津ニ皆候ヘバ、樂仕ラム事ハ事ニモ不候ズ、安キ事ニ候フ、然レバ樂ヲ可仕キニコソ候フナレト云ヘバ、教圓供奉ノ云ク、然ダニ有ラバ極タル功徳ニ成ナム、疾々ク返テ、其ノ日ノ曉ニ、三津ノ邊ニ行テ、船ヲ可待キ也ト云ヘバ、郡司喜テ承ハリヌ、御船ヲ疾ク參セムト云テ去ス、其ノ日ニ成テ、曉ニ

東對にてなん御らんすべきとおほせ事うけ給て、いま二三日のほどなにわざをと思、その日に  
なりて、かのすみのついひちくづさせ給、東の對に宮との、うへ○道長妻倫○長わたらせ給、女房達候か  
ざりは參る、わかうきたなげなき女ども、五六十人ばかりにも、ころもといふ物いとまろうきせ  
て、まろきかさ其きせて、はぐろめくろらかにつけて、べにあかうけさうせきせてつゞけたてた  
り、堂あるじといふおきな、いとあやしききぬき、やれたるひがさとして、ひもときてあしだはき  
たり、あやしきさましたる女ども、くろかいねりきせて、はうこと云物ぬりつけて、かづらせさせ  
て、かささゝせて、あしだはかせたり、又でむ○がぐといひて、あやしき様なるつゞみこしにゆひつ  
けて、笛ふき、佐々良といふ物つき、さま○の舞、あやしの男ども歌うたひ、ゑひて心よくほこり  
て十人ばかりあり、そが中に、このたつゞみといふものは、れいのにもにぬ心ちして、こほ○と  
ぞならしくいめる、またまうものし給殿ばら、ひんがしのすのこにて見給、わかき君達四位五位  
などは、ゑんにをしかりて見けうじ給、又いと大きなおけおりびつどもに、これらがくひ物  
どもなるべし、もてつゞきたり、さま○めづらしきものどもをのみもてつゞけたれば、いみじ  
うめづらしう御らんす、さていきつきていまうへの、しる、御覽じやりて、いとおかしうおぼし  
めさる、ありつるがくのもの共、道の程つゝ、ましげに愚へりつる、かしこにては、我まゝにの、し  
りあそびたるさまども、いみじうおかし○下

〔田樂考〕貞丈曰、右の文を案するに、殿の仰には、田をうゑさせよとありて、田樂せさせよとは仰  
ざりしに、其日田子の出るにつれて、田樂の者の出たりしは、田うゑには必定りて、田樂ははな  
れざるものなればさありし也、本文にも見たる如く、田子は田うゑ歌うたふ者也、田樂の者の  
中にも、かの歌をもろ聲にうたひて舞ふ者あり、樂うち笛ふきさゝらつきて、かの歌をはやし  
かなづる者あり、されば田樂とは名付たるなり、後には此事一變して、田うゑにあらざる時に

様にて田樂相勤可申之由、南都一乘院宮様より被爲仰付候間、泉州紀州何も申合、早速上京可仕之旨申越候、依而仲間申合、二月三日京都二徳方迄相揃申候、翌日四日八ッ時紫宸殿の御庭へ、田樂法師十三人出勤仕候、南門之脇に菊の御紋之御幕引廻し在之候、其所樂屋に被仰付候、是より御前へ渡るに、笛にて進み出申候、御翠簾之右脇に御門跡様方御五方御座被遊候、其下に御公家様方六七十人計、一所に御見物被成候。

役附

笛 宗佐 編木 二徳 同 勝齋 小鼓 二阿彌 太鼓 徳阿彌 橋阿彌

清阿彌 菊阿彌 文阿彌 外に編木四人都合十三人、

一番 中門口 二番 居なかり もとき 清阿彌 三番 かいかう 徳阿彌 四番 立逢 二徳阿彌

小鼓 二宮宅 五番 刀玉 清阿彌 六番 高足 清阿彌

右六番相濟申、直に高足にて樂屋に乗込申候也、樂屋にて御盃致頂戴之、其後退出仕候、翌五日晝時分、一乘院宮様より御使者御樽一荷、奉書一束、銀子三枚、御目錄頂戴仕候て、皆々難有御禮奉申上、六日之朝、大坂迄歸著仕候。

寛永十九年午二月七日

清阿彌書之

臣下行田樂

〔榮花物語<sup>十九</sup>御著<sup>九</sup>〕

かくて賀茂のまつりなどもすぎて、五月<sup>三〇</sup>治安になりぬ、大宮<sup>〇</sup>後一條母<sup>〇</sup>つち

みかど殿におはしませば、殿<sup>〇</sup>藤原<sup>〇</sup>なになにを<sup>〇</sup>して御覽せさんと覺しめして、この殿の御ま

やのまぐさのたは、との、きたせか院と云所にぞうへける、このごろうふべかりければ、みまや

のつかさめして、このたうへん日は、れいの有さまながら、つくろひたる事なくて、おこがましう

いかにもありのまゝにて、この南のかたのむまは、みかどよりあゆみつゝかせて、ちちのうちよ

りとをして、北さまにわたせ、うしとらの方のついちをくづして、それより御覽じやるべきなり。

渡道蓬壺客又爲一黨步行參院侍臣復參禁中權中納言基忠卿捧九尺高扇通俊卿兩脚著平蘭笠參議宗通卿著藁尻切何況侍臣裝束推而可知或裸形腰卷紅衣或放髻頂戴田笠六條二條往復幾地路起埃塵遮人車近代奇怪之事何以尙之其後院不豫不經幾程遂以崩御○此年八月都芳門院崩自田樂御覽之場蓋轉見御葬送之車爰知妖異所萌人力不及賢人君子誰免俗事哉

〔古事談王一道后宮〕永長元元原作九年大田樂事或人記云七月十二日參內祈年穀奉幣定也今日

有殿上人田樂事卅餘人云々頭依所裝束或蒙被仰定紅帷有風流以冠宮蓋爲笠差貫有風流田

主藏人少納言成定勅定大笠上多志目風已上藏人所調備一足顯雅懸鼓經忠高足宗輔懸鼓修理

大夫顯季朝臣右中辨宗忠朝臣左中將顯實朝臣兵衛佐實隆侍從師重少輔懷季銅拍子前兵衛佐

長忠朝臣右少辨時範民部大輔行信治部大輔敦兼佐兵衛佐師時少將顯通左馬頭師隆因幡

守長實周防守經忠藏人盛家小鼓權辨重資朝臣馬權助家定民部權大輔基兼美作守基隆等云々

笛吹右馬頭兼實朝臣藏人式部丞宗仲也暫遊南殿次於上御曹司數刻成其曲秉燭之後引參一條

院深更又歸參內裏云々予偷伺見之宛如夢世間事難計難知可以目云々十三日今日一院殿上人

田樂兼內殿上人之輩不供奉但長實經忠此二人猶參仕依堪能云々裝束ノ風流思々以就內裏終

夜田樂云々上達部尻卷四人左兵衛督基忠治部卿通俊右兵衛督雅俊宰相中將宗通等云々皆直

衣持高扇付大物忌云々如此日々夜々在々所々諸院諸宮又殿關白藏人所已下郷々村々田樂或

被召貴所或參詣神社云々

〔二水記〕永正十四年十一月十二日女中男衆田樂事有之例年被申沙汰之儀也廿二日有御田樂

今日御返也男衆大略令祗候於御三間有此事十六年十二月廿七日入夜參伏見殿有御田樂事庭田

佳例申沙汰云々

〔田樂法師由來之事〕一寛永十九年正月廿八日京都泉原二德より飛脚到來仕來二月四日禁中



笛笠	一	綾蘭笠	十三枚	太鼓	五	同撥	十
腰皮	五	高足 <small>同書ニマカアシ</small>	二本	同布	二切		
足駄	一足	傘	十五本	頭紙緒 <small>同書ニクビカミノヲ、水千テ</small>	十二筋		
編木 <small>同書ニザ、ワト云トアリ</small>	六	襷	二				
以上							

右ハ每歲十一月南都御祭之節、新坐本坐二十六人出勤仕候時、興福寺頭屋より相渡申候、

日光山參勤之節、頂戴仕候道具覺

狩衣	六人前	指貫	六ツ	石帶	六筋	末廣扇	六本
綾蘭笠	五枚	立烏帽子	壹ツ	編木	二ツ	笛	一管
小鼓	一ツ	大鼓	二ツ	高足	二本	刀玉	二ツ
牀机	六脚	杵	六足				
以上							

〔朝野群載三〕洛陽田樂記

永長元年之夏、洛陽大有田樂之事、不知其所起、初自閭里及於公卿、高足、一足、腰鼓、振鼓、銅鈸、子、編木、殖女、春女之類、日夜無絕、喧嘩之甚、能驚人耳、諸坊諸司、諸衛各爲一部、或詣諸寺、或滿街衢、一城之人、皆如狂焉、蓋靈狐之所爲也、其裝束、盡善盡美、如彫如琢、以錦繡爲衣、以金銀爲飾、富者傾產業、貧者跋而及之、郁芳門院○細川准母、殊催奴威、姑射之中、此觀尤盛、家々所々、引黨豫參、不唯少年繙素成、群佛、師、經、師、各率其類、著帽子、繡褌、襪、或奏、陵王、拔頭等舞、其終文殿之衆、各企此業、孝言朝臣、以老老之身、勤曼蛇之戲、有俊有信、季綱、敦基、在良等朝臣、並折桂射鵠之輩、不偏一人、或著禮服、或被甲冑、或稱後卷、驍勇爲隊、入夜參院、鼓舞跳梁、摺染成文之衣袴、法令所禁、而檢非違使、又供奉田樂、皆著酒衣、白日

一小鼓之事

右ハ平生之能之小鼓に、少も相違無御座候、打はやしの間合ハ、一臈の編木を間取申候、一臈の編木ハ、二臈の笛を頭取に仕候由申候事、

一下臈羯鼓之事

右之羯鼓之沙汰一定、不仕候、只今致所持候羯鼓ハ、毎歲南都御祭に出來候を直に取歸り候由、長く短く横幅廣く、樂人之羯鼓とハ其形相替り申候、指渡し九寸計にて、胴間五寸計有之、麻の細引にて玄め申候、常之小太鼓と其形替り不申候、名を羯鼓太鼓と覺來り申候、尤和歌山御神事に罷出候節ハ、通例之羯鼓之由申候、何分<sup>ハ</sup>か<sup>ト</sup>覺不申趣に相聞え申候、<sup>ハ</sup>二本にて常之太鼓之桴にて御座候、啼音も小太鼓之音にて、羯鼓之音にてハ無御座候事、

一拍子打方之事

右太鼓も小鼓も同様にて、始終三ッ拍手にてセメノ音も無御座候、太鼓ハ小鼓に相續き打申

候由之事、<sup>○中</sup>

右之通段々穿鑿仕候而、漸々相分り申候品、逐一書附指上申候、以上、

八月

久藏院<sup>○中</sup>

田樂裝束道具目錄

樂頭ノ衣 同 重袴 一具 幣持ノ衣 同 重袴 一具 一臈ノ水干 一具 一臈ノ指貫 一具

笛ノ水干 一具 笛ノ指貫 一具 平ノ水干 一具 平ノ指貫 十一具

強帷<sup>ラ</sup> 十三具 筆帷<sup>ヲ</sup> 春日<sup>ニ</sup> 舞<sup>ニ</sup> 十三具 裏絹<sup>同書ニ</sup> 十五

出腰<sup>同書ニ</sup> コシ<sup>也</sup> トアリ 十三筋 裏絹<sup>同書ニ</sup> ミキ<sup>トアリ</sup> 十五

石ノ帶 一筋 一臈帶 一筋 鼻紙 十五 扇 十五本

も本能之道具と、同様に御座候事、

以上

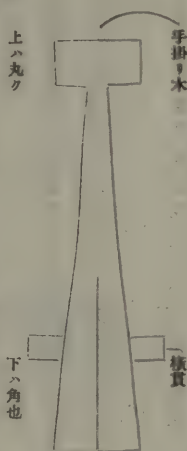
五月廿七日

一 六月二日、田樂法師六人相揃參上仕候而先達而松阿彌御返答申上候品々相殘分、逐一答之覺

略○中

重而御尋之趣、逐一承之書附指上候覺、○中略

一 高足二本



右之道具、長五尺計、五色に彩色申候、是も傳授之品有之候而兩足を横貫へかけ、庭上をありき

申候事、

一 編木寸法事

右之形繪圖に寫し別書指上候事

一 横笛之譜事

右中門口笛之譜一紙書寫指上候事

一 笛竹寸法事

右笛竹長一尺二寸、穴七ヶ處有之候、總テ黒塗にて繪やうも無之、砥卷も無御座候事、

一京都室町通畑山圖子と申處に、泉原二徳と申累代之田樂一人致住居候、此者八人株相勤候由之事、

一紀州伊都郡入江村五人致居住候、坂本氏と申候、此者は十人株相勤申候、右三箇國に而二十六人之株は相勤候得共、現在之者は都合八人にて御座候、京都二徳は賣人にて罷在候、紀州泉州は農業渡世にて、諸方之御神役相勤申候事、

右之通藤田松阿彌招寄せ、相尋承届趣、粗如斯御座候、以上、

寶曆五年二月十一日

重而御尋之趣、逐一承之書附指上候覺、○中略

一本座新座之事

右人數并樂器道具等摘別には、無御座候、六人之内に而、本座之一脇二脇三脇と申、年脇次第に役儀相勤申候、其外不足之人數は京大坂堺之中にて、落髮之願人相雇申勤來候由之事、

以上

右之通段々穿鑿仕候而漸々相分り申候品、逐一書附指上申候、以上、

八月

久藏院

〔田樂法師由來之事〕田樂法師之義、重而御尋ニ付、五月○寶曆五年廿六日、當國○和泉大津村藤田松阿彌

招寄せ、相尋申候返答口上之覺、○中略

一樂器之事

右之答、田樂相勤申節は、一脇は奉幣祝言相勤申、其後編木を摺りはやし申候、二脇は花笠を被り、足駄をはき横笛を吹申候、三脇は小鼓を打申候、下座五人は羯鼓を打申候、五人は編木をすり申候、都合十三人、紫の指貫をはき、狩衣を着用仕、綾蘭笠を被り、革沓をはき申候、右之鳴物何



〔七十一番歌合下〕

七  
五  
七



泉州大津村田樂法師三人從古有之、每年住吉春日祭禮出勤伎藝、著高屐、拔刀爲弄玉、未知其所始、  
〔増鏡<sup>十</sup>の述〕北白川殿の女院子、○安嘉門院、邦龜山准母に大納言の君とて、さぶらひし人の曹司に、下野といひしものは、田樂とかやいふ事する、あやしの法師の名をば玄駒といふが女なりき、○中略をのづから御覽じ山、○龜そめけるにや、ときめきいで、この院にめしわたされて、花山院の大おとゞの御子になされ、廊御方とぞ付させ給ふ、

〔田樂法師由來之事〕小川新右衛門殿御代官所泉州泉郡大津村に罷在候田樂法師二人

藤田松阿彌

藤田清阿彌

右二人之者共先祖より此所居住仕候、往古は本座十三人、新座十三人、都合二十六人、比叡山之麓江州坂本村に致居住候得共、段々衰微仕、諸國へ致離散候、其時代は何頃と申事一切相知れ不申候、

太閤秀吉様御在世、大坂御城にて御前へ被召出、田樂能相勤候節は、大津村に罷在候事分明に御座候、其以前之義は、曾以申傳も無御座候事、但仲間廿六人之内、右二人之者共八人株相勤來候由申候、○中略

一往古は記録數多所持仕候處、八十年計以前紀州居住之者共方にて、不殘燒失仕候、只今松阿彌致所持候記録二通、文安三年記、應永十三年記書寫仕指上申候、此外には一切古記は所持不仕候、代々父子致口傳候て、祭禮田樂相勤申候、尤右兩人之者八人株相勤申候、往古は御上々様へも出入仕甚致繁昌候趣、當時四座の能太夫之類と相聞申候然ども、只今にては、相定候祿も無御座、祭禮下行而已にては、渡世も難仕候故、百姓相兼農業に而家名相續仕候、依之委細之譯一向覺不申候事、

りて、すなはちゑいらん有べき也、御道まゐるべし、それこそ安き御事なり、かの鐵劍に分入て、彭祖が友をあつめつゝ、御遊をもてなし申べし、いとま申て歸るなり、君が齡は久かたの雲のうへにて見る菊の、あかるゆふ空の星も照りそふ白菊の鐵劍に入にけり、有難や菊の下水すめる世の、濁らぬ御代と守るべし、久かたの御代のまゐるしも空なれや、音は嵐の山の名の、みねの紅葉も色めきて、とよはた雲もあかねさす日影も匂ふ新菊の水花をあらふや、菊水のながれをくんで此君に捧て、千代にや千代といはふなり、そも仙樂の數々は、王母が桃花かりうのろうこよかこのみ、千尋の竹の葉に露をうけたるせんざいの藥、そへばなをもまさり草、この菊水をたてまつれば、魏の文帝の御壽命をも、既に百年の齡をたもち給ふ、南陽縣の菊水は、かりうをくんでやはひを延とて、彭祖は仙家に又にけり。

〔田樂法師由來之事〕一六月○寶曆五年二日、田樂法師六人相揃參上仕候而先達而松阿彌御返答申上候品々相殘候分、逐一答之覺○中

重而御尋之趣、逐一承之書附指上候覺○中

### 一田樂曲之事

右田樂之曲と申は、刀玉と高足と二色之外は無御座候由申候、刀玉とは圖に寫候通、短キ刃物都合三本外に日の丸の繪の扇一本袋に入持參仕候て、綾蒔笠にのせて庭上に持出て、左右之手にて、四本を一處に取候て、空へなげ上げ曲取致候、是は神前之所作にて、魔障を拂候曲にて御座候と申候、其外に曲と申事一切無御座候事○中

右之通段々穿鑿仕候而、漸々相分り申候品逐一書附指上申候、以上、

八月

久藏院

田樂法師

〔和漢三才圖會十六卷〕田樂法師

てをいを忘されど寒風を身にいとはずされば老せぬ藥とはたれもかくこそ菊の水くみて内裏にとほりけり、只今來る仙人はいづくより來り給ふぞ、是は君に仙藥を奉らんために參内申て候、めでたしめでたし、おさまる御代のまゐるしには、仙人も山よりいで、聖人も出世するならひなり、扱かた、はいかなる人ぞ、是は周の文王の御代につかへ奉る慈童と申者、七百歳を経て今は彭祖と申なり、扱周の代の人ならば、か程までながらへ給ふこと、何と申いはれにて候ぞ、ふかきいはれも候はず、只今くみて參りたる菊水を吞し謂れなり、扱菊水を吞ならば、たれもよはひをたもつべきか、中々の事、まづ我にてはきこしめせ、うたがひも南陽縣の菊の水、めば命はいくくすり、七百餘歳をたちては、よはひはもとのごとくなり、君もきこしめせ、臣もあがめて菊の水吞ばかならずよろこびの必さへきれ、憂はながくわすれ、水の菊を折花を摘て、ゆく年を返さ、舞ゆく年の數をかへさむ、猶々壽命を延たまふいはれ、懸に御物語候へ、

其頃釋尊靈鷲山にて法華を祝給ひしに、穆王駒の足をはやめ、法にひかれて、おのづから靈山の會座に參りて、御法を聽聞し給ひしに、穆王に告てのたまはく、いまこの法は汝がためなり、末代の天子に授くべしとて、普門品の二句の偈を慈童に授給ふ、されば天子御そく位の帝位のきつほうといふ事、此御代よりははじまれり、其頃慈童は御門の御てふあいかがりなかりしあまりにや、あやまつて皇帝の御を越し、咎により、鐵劔山に流さるゝ、かの山と申は帝城をさつて地數百里、ころう機をときて人間の通ふ事なし、御門あはれとおぼしめして、普門品の二句の偈を慈童に授けおはします、されば忘れじと、鐵劔山の谷川の菊のした葉に書つけて、ひめむすむかひて此偈を誦して日を送る、其後ち菊における露、この菊水に落添て、不死の藥となりしより、流を汲で齡をのぶ、されば誰とても吞ば、命も幾葉、靈山の妙法、鐵劔の菊にとゞまり、不老の藥となるとかや、若菊水をきこしめして、壽命長遠に天下をたち給へや、有難し、かの鐵劔山に分い



六月三日

重而御尋之趣、逐一承之書附指上候覺、

一謠之番組何成とも一冊寫取申ふしことば之印等附可申事、

右謠之内菊水の一巻、詞がら分明に御座候故、寫取申指上申候、但ふしことば之印附相尋候處、  
分明には覺不申候と相見申候、定かには聞え不申候、依之本之儘に書寫候事、

一まてわき裝束之事

右まてわき共に直垂に大口をはき舞申候、尤謠により立烏帽子かづら面迄、それ〴〵相改候  
由之事、

一間狂言之事

右狂言之番組二拾番計御座候、由茶の湯、布施十井經杯と申、能之狂言と相違無御座候事、  
右之通段々穿鑿仕候而漸々相分り申候品、逐一書附指上申候、以上、  
略 〇 申

八月

久藏院

〔田樂法師由來之事〕菊水

君が齡は久堅の〴〵、つきせぬ御代ぞめでたき抑、是は魏の文帝の御代に仕へ奉る臣下なり、扱  
も我君いまだ若年の御位なれども、民を憐み給ふ事、三皇五帝の御代にもすぐれたまへり、日出  
度御代にて御座候へば、山々の仙人急ぎ參内申せとの宣旨をかうぶり、只今鐵劔山へと急候、君  
が代は千代に八千代をさゝれ石〴〵、岩ほと成て苔のむすまで、幾歳になるみがた、幾代つもり  
て程もなく、鐵劔山に著にけり〴〵、八千代まで咲そふ菊のまさり草、久しき君のめぐみかな、扱  
は我君いまだ若年の御位なれども、民を憐み給ふ事、三皇五帝の御代にはすぐれ給へり、日出度  
君にておはします、いざ菊水を奉り、壽命を授け申さん、此菊水を吞人は、壽命七老よの徳をなし

記錄計にて、仲間中に相殘候書物無御座候事、

一 田樂謠之本書寫可相成哉之事

右之答、江戸へ參上仕候は、不殘持參可致候少々は、爰許に而も書寫仕候事可相成義と奉存候

事○中略

以上

五月廿七日

一 六月二日、田樂法師六人相揃參上仕候而先達而松阿彌御返答申上候品々相殘候分、逐一答之覺

泉州泉郡大津村

藤田松阿彌

同

同 清阿彌

京今出川通室町西へ入町

泉原二德

紀州伊都郡入江村

坂本清林

同

同 林西

同

同 西林○中略

一 田樂能之謠本所持仕候義、先達而六七十番も御座候様に申上候得共、仲間中立合致吟味候處、漸々拾七八番は相殘申候、右謠本書寫之義、御所望に御座候は、内々に而指上可申候、但田樂之能と申は、春日之御祭禮に相勤候而已にて、平生稽古も不仕候故、一向御慰み之所作柄にては、無御座候、若參上仕候て、相勤候様に被爲仰付候は、奉畏候、装束は田樂之装束を直に用申候、笛太鼓等は本能之道具を借り用申候而、格別には無御座候事、

以上

社修神事佛事時多有之、是賤術也、

〔平家物語〕ぐわんだての事

後二條の關白殿

師通藤原

山王の御とがめとて、おもき御やまふをうけさせ給ふて、うちふさせ給

ひしかば、母うへ大殿の北のまん所、大きに御なげきあつて、御さまをやつし、いやしき下らうの  
まねをして、日吉の社へ參らせ給ひて、七日七夜があいだいのり申させおはします、まづあらは  
れての御立願には、まばでんがく百ばん、百番のひとつ物、略下

〔張州府志〕

五

熱田社四序祭奠略

五月六日

中略

中略 熱田社四序祭奠略 古證狀之内、熱田神領落合郡神役云、五月芝田樂、名不設、鎮之謂也、

田樂能

〔田樂法師由來之事〕田樂法師之義、重而御尋に付、五月

五年 寶曆 廿六日、當國

和 大津村、藤田松阿彌

招寄、相尋申候返答口上之覺、略中

一 田樂之能と、本能と相違有之候哉之事、

右之答、只今世上に仕候本能とは、一向別事にて御座候、謠之番組も有之候得共、通用之謠にて  
は無之候、往古は田樂之謠、三百番も有之候様に申傳候得共、只今相殘候は、漸々六七十番程は  
書傳所持仕候、詞書而已にて曲譜は一切無御座候、或は菊水綾井、又は羊など申様之名にて御  
座候事、

一 田樂能之鳴物之事

右之答、小鼓并太鼓何も本能之鳴物と相違不仕候、打はやしは二十六人之内に而、不殘相勤申  
候、外之役者には頼不申候、但能之外に間之狂言も仕候、是も古來之番組相傳仕候事、

一 古來相傳之書物有之候哉之事

右之答、古來相傳之記錄、先年紀州にて焼失仕候、其外には一向所持不仕候、先達て指上候通之

# 古事類苑

## 樂舞部十一

### 田樂

田樂ハデンガクト云フ、中古田植ノ時、笛鼓ヲ鳴ラシ歌舞シテ、其勞ヲ慰メシニ起因セシナ  
ラン、田植ノ狀ヲ模セルモノニシテ、其曲ニ刀玉、高足、一足等ノ態アリ、其器ニ腰鼓、振鼓、銅鈸  
子、編木等アリ、當時盛ニ上下ニ行ハレシモノニテ、堀河天皇ノ永長元年ノ大田樂ノ如キハ、  
殊ニ著名ナルモノナリ、鎌倉幕府ノ時ニハ、専ラ僧ノ業ニ屬シ、其人ヲ田樂法師ト稱シ、本座、  
新座ノ二部ニ分レタリ、中ニ能藝ト云フモノアリ、北野物狂ノ能、女ノ敵討タル能ノ如キ是  
ナリ、要スルニ此藝ハ足利氏ノ時、猿樂ノ隆盛ナルニ及ビ、漸次衰廢シテ、後ニハ春日、住吉、日  
光等ノ諸社祭祀ノ時ニ、僅ニ之ヲ見ルコトヲ得ルノミ、

名稱

〔下學集〕下卷田樂アノリ

〔尺素往來〕爲勸進本座新座之田樂、和州江州之猿樂、各可播所能候、

〔倭訓栞〕前編十七でんがく 洛陽田樂記に、永長元年之夏、洛陽大有田樂之事、初自閭里及於公卿

と見えたり、高足、腰鼓、銅鈸子、編木等の藝あり、又小鼓あり、田野の樂といふなるべし、或説に神樂  
を析て申樂とし、申樂を削て田樂とすともいへり、今信濃佐久郡志、賀村に田樂屋鋪あり、常陸久  
慈郡金砂山の神事に田樂あり、

〔雍州府志〕古八芝居略中 一種有田樂、是又有本座新座、謠曲亦有數十番、兩座共法師而施藝術寺





一。奥。樂。屋。

壹ヶ所

右文化十年八月之通於御文庫之邊、假御建物奉願候、被少ニ候得共、裝束改著差支候間、其儀無之

候様奉願候、略中

右例之通奉願候

〔古今著聞集二十〕魚虫金獸 永安二年五月二日、東山仙洞にて鷄合の事ありけり、略中 北而下、鴈等錦の

地鋪を庭上に敷て、舞臺に擬す、妓女二人、甘洲をまふ、

〔嚴有院殿御實紀三十〕寛文五年五月十九日、舞樂御覽あり、白木書院庭上に舞閣を設て、左右に帷屋をかまふ、

樂屋

〔樂家錄四十〕略話 近世混樂所之裝束所與樂屋之名也、著聞集云、設樂屋於池之中島、又源氏物語以續于釣殿之廊爲樂屋、是著座奏樂處之名也、於賀茂者、社司等號樂之屋、是亦古語也、

〔內裏式上〕七日會式

前一日、所司辨備豐樂殿、略中 設樂人帷於舞臺東南角、

〔古今著聞集六〕管絃歌舞 堀河院御時、六條院に朝覲行幸ありけるに、池の中島に樂屋を構へられた

りけるに、御所水をへだて、はるかに遠かりけり、博定勅をうけ給て、大鼓をつかうまつりける、

〔樂所錄〕文化十三年五月

口上覺

來十五日後、於小御所御庭舞樂被仰出候ニ付、別紙之通被仰付被下度、宜御沙汰奉願候以上、

五月

辻 下野守

安倍信濃守

岡 甲斐守

匹辻前大納言權御内

松岡造酒殿

一口樂屋

壹ヶ所

右文化十年八月舞樂之節、於承明門東廻廊被仰付候通、此度も被仰付被下度、尤常樂屋之通、茶湯火鉢等其節も被仰付候、及夜蔭候は、蠟燭等先例之通奉願候、

子鐵廿廷布袋花形料、絲一綯、綿半屯、綠絹一丈四尺、熏草半枚線、雜飾、料、餘節設舞臺同之、

〔貊氏新錄〕一舞臺之事

高舞臺之儀委細別記ニ注之、御記錄等ニ留リ候節ハ、寅之年被仰付候ハ、敷舞臺朝鮮人御饗應之節ハ、高舞臺ニ候得、バ其通可然歟、敷舞臺之儀、別記之通近世之儀と存候得共、當時於禁裏高舞臺敷舞臺と相分レ、兩様ニ有之候上ハ、其時之通可宜歟、

〔樂家錄三十七〕舞臺之圖

凡舞臺有二、一曰敷舞臺也、以檜作之、自樂屋隔二間半或三間許置之庭上、故謂爾、二曰高舞臺也、敷舞臺之下設臺高之、故謂爾、

敷舞臺之制法

敷舞臺高七寸或一尺許、而四方三間作之、但自中斷作二、以並敷之也、應以爲舞臺大四方同者、自向可乎、如此則舞人之猶亦無臺之害乎、

高舞臺之制法○圖

高舞臺高三尺許、四方四間許也、但四分作之、以並合之、前後有階、階橫一間許已上、皆黑漆之處々施金物也、又臺之端及階左右有高欄、高二尺許、而四隅於每角接合之、於階之角不接合之已上以圓木作之、朱漆而處々施金物也、已上總以掛金連合之也、

臺之腋引鈍子幔黃或黃或而其上掛上卷粧之上卷之數合左右十八而臺之上置敷舞臺高七寸許可乎而以純

子包之謂之地布黃或黃或於敷舞臺之下、伏竹以釘堅之也、

〔三代實錄陽成〕元慶六年三月廿七日己巳、天皇於清涼殿設酒宴、慶賀皇太后四十之算也、○中貞

敷親王舞陵王、上下觀者咸而垂淚、舞畢、外祖父參議從三位行治部卿在原朝臣行平候舞臺下、抱持親王、歡躍而出、



見分之上、新調又ハ取繕等被仰付候、然ル處又候今般御見分之上、御仕替御修復之儀相願候ニ付、今度之處ハ如何様共繰合、其儘相用候様被仰渡候段奉、畏候右ニ付新書會并豐明節會等ハ最早餘日無御座候事故、其儘繰合相用可申候、乍去十二月御神樂并來春三節會舞御覽并賀茂祭等御入用之品々ハ、難相有候間、何卒急々御見分之上、御修復御仕替奉願上度候、且護持方危路ニモ候様トノ御事ニ御座候ヘ其近年度々御修復相願候儀ハ、數多之内御仕替ニ相成候御品少ク、御取繕御品多分、且年延ニ相成候分モ有之候ニ付、度々相願立候尤數年相立候御品故、自然損多ク相成、夫故不得止事相願候、何卒此度之處、保方宜様奉願候、尤護持方ハ精々可致大切候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

九月

林左兵衛少尉印 ○ 以下略

樂舞

〔歌舞品目〕樂府、鼓、舞臺、中略、今ハ高舞臺、數ハ舞臺、別ア地、鋪、高舞臺、數ハ、四方三、尺、ツ、ハ、ノ、落、緣、ア、地、鋪、高舞臺、上ノ、數、物、ヲ、名、ト、イ、ヘ、リ、ニ、ハ、庭、上、ニ、直、ニ、設、ク、ル、コ、ト、ア、リ、中、略、今、朝、廷、新、國、都、府、刊、城、國、人、號、王、曰、豐、樂、五、紀、防、步、事、其、俗、以、六、月、爲、歲、首、至、於、七、月、七、日、十、二、月、一、日、左、所、崇、重、人、座、以、上、交、相、命、召、設、會、作、樂、唐、夫、寶、中、屢、遣、使、來、朝、獻、馬、項、床、并、毛、織、舞、錦、褥、ト、即、ナ、毛、織、ノ、舞、錦、ナ、ル、ベ、シ、鋪

〔內裏式〕上七日會式

前一日、所司辨備豐樂殿、舞臺於殿前、自殿南階、南去十一丈七尺、舞臺高三尺、方六丈七

〔儀式〕淺祚大嘗祭儀

午日卯刻、撤悠紀主基兩國帳、所司裝飾高御座、舞臺於殿前、自殿南階、南去十一丈七尺、高三尺、方六丈七、設樂人握於舞

臺東南角、南去八許丈、東去二許丈、

〔延喜式〕十五凡正月七日、預前節一日、寮官人率史生藏部裝飾舞臺、設冒甲四條、下敷兩面、帳一條、鎮

同別樣面

一人分

納曾利面帽子共

大小各二

二人分

後參撥

大小  
八本

蘇利古難面白楚笏共

五人分

新難味鞆冠笏下鞘共

四人分

古鳥蘇太刀重平緒共

四振

一本

同笏

四枚

貴德太刀重平緒共

二振大小

振鉞之鉞共

廿五人分

貴德鉞共

二本大小

狛梓棹

四本

管方襲裝束皆具

太鼓

一

二鼓

一

三鼓

一

太鼓

大鉦鼓

一

鉦鼓

一

大太鼓

一

太鼓

太鼓鉦鼓持裝束甲付

四人分

荷太鼓

一

荷鉦鼓

一

太鼓

太鼓鉦鼓持裝束甲付

四人分

左方同用之具

地布

一張

幔幕

六張但長五間四

水引舞臺并左右

太鼓鉦鼓

六張

總角

六十八

糸鞋

大小七十足

淺沓

近年東帶具淺沓兼用二相成候

七十足

以上之品、長櫃四十二樟ニ納之、

東帶具舞樂裝束樂器等員數之事、東帶具之中、寶永年中新造之後、御修履程遠候節、常々繁相用候品故、破損強、有形少々減候品有之候趣、近代之有形主、只今右書付差上候通ニ御座候、舞樂裝束類樂器等、寶永以來至只今、員數同様ニ御座候、併平舞小人裝束左方之中、如何仕候哉、從以前不足有之候、以上、

嘉永元 申 年十月

辻右近將曹印 ○以下  
六人略下

右美濃紙帳面仕立認之

〔樂所錄〕安政四年十月三日

口上覺

東帶之具、人長裝束、舞樂裝束御仕替御修復、去ル丑年、一昨卯年、昨辰年御修復等相願候故、夫々御

陪臚楯

四枚

同鐙鐙共

四本

同太刀垂平緒共

四振

太平樂太刀垂平緒共

四振

青海波太刀垂平緒共

二振

散手太刀垂平緒共

二振

同面帽子共

一人分

採桑老面帽子插頭杖下緒藥袋

一人分

還城樂面地樗大小各二

拔頭面帽子大小二

一人分

安摩雜面笏共

二人分

二舞面帽子插頭共

二人分

陵王面帽子大小二

一人分

同別樣面

一人分

胡飲酒面帽子樗共

一人分

賀茂祭舞人裝束皆具

六人分

同小人裝束皆具

四人分

同陪從裝束皆具

六人分

同小人裝束皆具

四人分

同太刀垂平緒共

大小十六振

同和琴袋共

一絃

奚婁

二

振鼓

二

一鼓

一

楷鼓

一

鞞鼓

一

太鼓

一

鉦鼓

一

大太鼓

一

大鉦鼓

一

荷太鼓

一

荷鉦鼓

一

太鼓鉦鼓持裝束甲共

四人分

右方具

平舞裝束皆具

八人分

同前掛裾

八人分

同童舞裝束皆具

四人分

蠻繪裝束皆具

六人分

豹裱裝束皆具

四人分

林歌裝束皆具

四人分

八仙裝束皆具

四人分

新鉢鞞裝束皆具

四人分

胡蝶裝束皆具

四人分

貴德裝束皆具

一人分

同童舞裝束皆具

一人分

納曾利裝束皆具

二人分

同童舞裝束皆具

二人分

新島蘇面甲帽子共

六人分

退走禿面帽子共

六人分

皇仁庭面甲帽子共

六人分

地久面甲帽子共

六人分

綾切面甲帽子共

四人分

八仙面甲帽子共

四人分

林歌甲

四人分

胡德樂面帽子共

四人分

同瓶子

一

同盃

二

貴德面甲帽子共

一人分

四位多袍 貳拾領 同夏袍 拾七領 五位多袍 二十九領 同闕腋冬袍 貳領  
 同夏袍 十八領 同闕腋夏袍 貳領 六位袍 九領 同闕腋袍 貳領 冠纓共  
 五拾頭 大帷子冬夏付 三拾八領 冬裾 五拾腰 夏裾 三拾腰 表袴 五拾腰  
 赤大口 三十四腰 石帶 五拾腰 指貫 三十五腰 單 二十領 淺沓近年舞樂之方  
 與兼用 五十足 人長裝束皆具 一人分 鞞鼓 一 太鼓 一 鉦鼓 一  
 相成候

此三鼓寬政年中ヨリ御前江被召置候

舞樂裝束

左方之具

平舞裝束皆具 八人分 同前掛裾 八人分 同童舞裝束皆具 四人分

蠻繪裝束皆具 六人分 東遊裝束皆具 四人分 同陪從裝束皆具 三人分

迎陵類裝束皆具 四人分 太平樂裝束皆具 四人分 打毬樂裝束皆具 四人分

陪臚裝束皆具 四人分 青海波裝束皆具 二人分 採桑老裝束皆具 一人分

同係物裝束皆具 一人分 散手裝束皆具 一人分 同童舞裝束皆具 一人分

拔頭裝束皆具 一人分 同童舞裝束皆具 一人分 還城樂裝束皆具 一人分

同童舞裝束皆具 一人分 胡飲酒裝束皆具 一人分 陵王裝束皆具 一人分

同童舞裝束皆具 一人分 管方襲裝束皆具 廿五人分 二舞裝束皆具 二人分

蘇合香甲 六人分 春鷲嘴甲 六人分 萬秋樂甲 六人分

輪臺甲 四人分 青海波甲 二人分 賀殿甲 八人分

散手甲 一人分 打毬樂毬打 四本 同玉 一

振鉞之鉞共 一本 散手鉞大小共 二本 太平樂鉞共 四本



布作面貳拾伍面 腰帶貳拾伍條 靴廿五兩 方響槌壹柄  
古樂 破陣樂 衣服貳具 腰帶捌條 靴捌兩 草鞋拾玖兩

右比較檢財帳所欠物如件、但婆利久太調度皆不請下、

主典 志斐連麻呂○下

〔續修東大寺正倉院文書 別集三十五〕欠失物伍種

吳女從帛袷壹片 鉦盤擊袷壹兩布 醉胡帛汗衫壹領已上三種前一具

崑崙腰袋壹具 金剛梓持已上二種後二具

右爲用月八日齋會、自倉代請下吳樂二具之內所欠如件、但以後日成求將進、

天平神護二年四月二十三日

吳服息人

〔古事談王一道后宮〕堀川院御時殿上人競馬ニハ、左ハ打毬裝束、右ハ狛梓裝束ヲ召テキセラレケリ、

不被用普通競馬裝束云々、

〔樂所錄〕弘化五申年十月

口上覺

束帶具并舞樂裝束樂器類等、員數書付帳面ニ仕立、出來仕候間奉差上候、此段可然御沙汰奉願候、  
以上、

申十月

辻右近將曹○以下六人略下

四辻前大納言樓御内  
芝式部殿

渡邊掃部殿

表書  
官庫束帶具并舞樂裝束樂器類員數書

束帶具

○按ズルニ、東大寺正倉院ニ現存セル舞樂裝束ノ中ニ、天平勝寶四年四月九日ト記名シタル者アリ、

〔續修東大寺正倉院文書 別集三十五〕樂頭襖子壹領 白襟脇細 帛汗衫壹領 帛袴參腰

右爲用東西二塔并七月十五日會以去四月廿五日請高麗樂二具之中所失、仍探求可進狀注以解

天平寶字八年七月十八日 淨人 小菅万呂○中

七月十四日下吳樂二具之内欠物

鼓片輪壹枚 圓冠貳口 大孤兒袍壹領 襖子壹領 吳女從腰帶壹條 已上前一之内 笛吹帛

汗衫壹領 鼓打布衫壹領 鉦盤打機壹兩 大孤父機壹兩 醉胡布衫壹領 已上前二之内

右爲十五日下充若櫻部梶取吳服息人二人、即檢定欠物如件、又此物十八日返上、更欠鉦盤機一兩、鼓俗二口、

〔續修東大寺正倉院文書 別集三十五 舊書〕右欠物之中、機一兩可進梶取并息人、鼓俗可進口口内藏金元粟田乙萬呂、仍記注如件、

主典志斐連磨 史生土師名道○中

八月廿四日下樂物計定所缺如左

高麗樂 頭單襖子壹領 梓舞末額肆條

刷形 袍壹領 振鼓帛 袷袴貳腰 末額貳條

弄人 帛汗衫貳領 袴貳腰 機壹兩 冠陸領 腰帶參拾貳條 鈴壹口 白盤壹口 履

并靴不請下

中樂鼓打 袴壹腰 三臺袴壹腰 宗明樂布衫一

家政所ニ子細ヲ申上テ返給了、然間夢想ノツゲニヨリテ、我家ノ未申ノ角ノ小社ノ下ニウヅミ  
 テクリ今東御門前社ノ其後光季ガ時、爲不審堀ヲ見ケレバ、面ハサ、ヒナクテアリケレドモ、神ノ物ト見ヘケレバ、手カクルニモアタハズシテ、ウツシテクリ、件ノ小面ヲ寫テ、光季ガモチタリケルヲ、光時ガ時ニ仁和寺御室ヘ進上了、今ニ彼寶藏アリ、略中

武部様眉黒左近司在也、又熊野ノ新宮、又東、大寺在之、殊勝面也、

賀茂社ノ面ハ、天ヨリ降タリト云、指雖無日記、古老所申傳也、

住吉社ノ面ハ、淡路ニテアミニ曳タリ、朝無損亡、龍宮面云、彼社古老傳也、

〔古事談六〕孝宅諸道佛師定朝之弟子覺助ヲバ義絶シテ、家中ヘモ入ザリケリ、然而爲達於母、定朝他  
 行之隙ナドニハ密々ニ來ケリ、定朝左近府陵王ノ面可打進之由依被仰下、至心打出テ愛シ、寢居  
 ノ前ナル柱ニ懸テ置タリケルヲ、父他行之隙ニ覺助來タリケルニ、面ヲ取トテ見テ、穴心ウ、此定  
 ニテ被進タラマシカバ淺猿カラマシトテ、腰刀ヲ拔ムス、トケヅリナラシテ、如本懸柱退歸  
 了、定朝見此面云、此白物來入タリケリナ、不孝之者雖他行之間、入居事奇怪事也、此陵王面作直テ  
 ケリ、但カナシク被直ニケリトテ令免勸當云々、

〔台記〕久安六年十二月九日辛亥、隆季朝臣語曰、近日借請左近府拔頭面形置私宅、去夜夢著褐冠者  
 曰、彼面形早還府莫久置私矣、覺見其面形、裏銘云、右相撲司延曆廿一年七月一日造、於是怖畏還府、  
 〔續修東大寺正倉院文書別集十裏書〕欠物

唐古樂素方皮兒布衫壹領 結襪帶貳條 中樂唱歌帛袴壹腰 櫛壹枚 靴貳拾兩○中 又靴  
 拾貳兩 末額參條

右請樂三具之中、欠物且注如件、

天平寶字八年四月廿五日

造東大寺司判官彌努○下

長サ九寸八分、横七寸八分、給きぬうら打、仕組墨繪有、白いとニ而四ツ打ノ緒付ル、緒長サかたかたニ而壹尺貳寸五分、

一そりこの雜面五人前

長サ壹尺三寸七分、横九寸七分、仕様右同前、あさぎ四ツ打緒付、長サ壹尺四寸五分、かた／＼ニ而、

延寶三年卯十月

〔今昔物語 二十八〕右近馬場殿上人種合語第卅五

今昔、後一條ノ院ノ天皇ノ御代ニ、殿上人藏人、有ル限員ヲ盡シテ、方ヲ分テ種合セ爲ル事有ケリ、  
略○中 右ノ方ニ公忠ガ嘆テ入ルヲ見テ、手ヲ扣テ咲ヒ合タル事无限シ、相撲ノ負テ入ルヲ咲フガ

如シ、咲フト等シク右ノ方ニ亂聲ヲ發シテ、落蹲ノ樂ヲシテ落蹲ノ舞ヲ出ス、本ヨリ勝負ノ舞可

有キ支度ニテ、左ニモ陵王ノ舞ヲ儲タリケレドモ未ダ事不畢ヌニ、此ク落蹲ヲ出セバ、左ニハ此

ハ何爲ル事ゾナド云合タルニ、關白殿○藤原賴通忍テ女車ノ様ニテ御覽ジケルニ、此ク落蹲ノ出ル

ヲ奇怪也ト思食テ、忽ニ人ヲ召テ、其落蹲ノ舞人慥ニ搦メヨト高ク仰セ給フ、時ニ落蹲ノ舞人踊

テ入ヌ、然テ裝束モ不解ズシテ逃テ、馬ニ乗テ西ノ大宮下ニテ馳テ行ケリ、其ノ舞人ハ多ノ

好茂也、面形ヲ取去テハ人モゾ見知ルト思ケレバ、面形ヲシ乍ラ申ノ時許ニ馳テ行ケレバ、大路

ノ人ハ彼レ見ヨ、鬼ノ晝中ニ馬ニ乗テ行クヲト云、噲テ、幼キ者ナドハ此レヲ見テ、恐迷テ實ノ鬼

也ケリト思ケル、ニヤ、病付タル者モ有ケリ、

〔教訓抄〕羅陵王

一面桴事、寛德ノ比、狛光高ガ家ニ相傳之、陵王面アリ、各々小面、小龍ヒ、依ニ立ノガル、不慮ノ事、光高ガ私宅ヲ

サガサル、間ニ此面失畢、タミノナゲキストイヘドモ、カヒナクシテ數日ヲヘテ後ニ、興福寺ノ

中門ノ内、コノ面ヲ懸タリ、誰人ノ所爲ト云事ヲ不知、一寺ノ沙汰トシテ納置庫倉了、然而光高寺



トコロニテ五寸八分強、裏黒スリ、龍ノウラ朱グン青ロク青胡粉鱗カキワケ、  
納蘇利

空青古色ニシテ詳ナラズ、眼ノフチ朱、唇朱、鼻ノ中朱、ウラクロ塗、裏書赤漆ヲ以テカケリ、頭ヨリ  
頤マデ七寸六分強、ヨコ耳ノトコロニテ五寸四分、

散手

面朱、眼中クロ、竪長七寸八分、ヨコ紐付ニテ五寸二分、裏クロスリ、赤漆ニテウラ書アリ、  
貴徳

面胡粉、眼中クロ、唇朱古色詳ナラズ、竪七寸三分、ヨコ紐付五寸四分、裏黒スリ、ウラ書朱漆、  
採桑老

面白肉雲母ノ艶ヲトル、眼中白唇朱甚ダアラク塗タリ、竪長七寸、ヨコ五寸、ウラ黒スリ、赤漆ヲ以  
テ裏ガキアリ、

二ノ舞

面古色ニシテ詳ナラズ、毛白ニクロヲヲリ、交ゼタリ、竪八寸六分、ヨコ紐付ニテ六寸四分、  
二ノ舞ノ面裏タメ塗、赤漆ヲ以テウラ書アリ、下ニ圖シタル面ノウラ書（島社二舞面承安三年八月日盛國朝臣調達）

二ノ舞

面古色ニシテ詳ナラズ、竪一尺、ヨコ紐付ニテ七寸、

面赤漆、眼黒漆ノゴトシ、竪七寸、ヨコ紐付ニテ五寸一分、裏クロスリ、  
此面（略）四ツアリ、當社ニテハ今胡德樂ニ用レドモ、ソノ實ハ未詳、

〔舞樂道具注文〕舞樂道具仕上ル目錄

一わま糺面貳人前

天平寶字八年四月廿五日

造東大寺司判官彌努○下略

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕合大唐樂調度

羅陵王壹面 倭胡壹面 老女壹面 咲形貳面已上並衣略

天平十九年二月十一日

都維那僧靈仁○下略

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕伎樂壹拾壹具

師子貳頭五色毛在 師子子肆面衣服具 治道貳面衣服具 吳公壹面衣服具 金剛壹面衣服具

服具 迦樓羅壹面衣服具 毘輪壹面衣服具 力士壹面衣服具 婆羅門壹面衣服具 孤子

參面衣服具 醉胡漆面衣服具

天平十九年二月十一日

都維那僧靈尊○下略

〔嚴島寶物圖會〕拔頭

面朱漆、眼眉齒ミナ黒漆、髮紺、麻ノヨリ糸、面豎一尺、ヨコ耳ノウヘ七寸一分、面ノ裏黒スリ、赤漆ニ

テウラ書アリ、

還城樂

面朱漆古色ニシテ、少シクロミアリ、眼齒ミナ黒、ツリ頤外朱ウチ黒漆、眼鼻草ヲ以テ頭ヨリツリ

タリ、豎長齒ヨリ頭ニ至テ六寸、ヨコ耳ノ上六寸七分、頤厚サ一寸二分五リン、面ノウラクロ塗赤

漆ヲ以テ裏書アリ、嚴島社還城樂面政所御寄進、永安三年八月日、佛師沙門□尊、跡直本、

陵王

面金箔ヲオクリ、髮空青、眼中金、鼻ノウチ朱、齒黒スリ、髭眉トモニ馬尾、釣頤外金、中黒、龍眼中白、マ

フチ朱、髮朱、毛ホリツケクロク青ノ毛ガキアリ、クチノ中朱、ウハ頤金、ウロコ朱ノカキワケ、緑青彩

リ、鰭彫物朱、緑青ノカキワケ、タテ龍ノ頭毛ヨリ上腮ノ下齒ノトコロマデ一尺三寸二分、横耳ノ

陵王降面 陵王降面在賀茂之社也云々詳無所載之舊記、

龍面 陵王面也在淡路海中掛于網而出世俗名之龍面而納之住吉社云々、

右所記之舞面四古物也今世無其名爲流布之面不知何時失乎否、

近代爲斷絶之舞面

採桑老降面 在官庫也本多氏所持之面也詳見于胡飲酒下、

右古物之舞面者萬治四年禁裏炎上時燒失了、

今世所傳之舞面

胡飲酒降面 多久貴所傳之重器也昔有二面掛南殿之櫻樹多氏舞人見之則我家舞採桑老與胡飲酒之面也因以爲天與之也乃藏之家自號曰降面其後獻採桑老之面於禁裏胡飲酒面耳爲家藏傳聞本面裏有筆記元和比當于久貴實父忠秀時以面裏破損漆之筆記隱晦今書寫其記者無之可惜哉、

右舞面一今世所傳之重器也、

已上所舉之舞面總六也

〔教訓抄〕散手破陣樂

元明天皇御宇和銅之比寶冠之面ハ天ヨリ降ル于今元興寺之者寶藏之以件本模寫留山階寺寶物也而モ文治ニ件ノ寶藏令燒失ヲワシヌ仍件面并玉樹ノ別樣ノ裝束悉令燒失了其後又山階寺ノ面ヲ寫返了元興寺ニ留置タリ

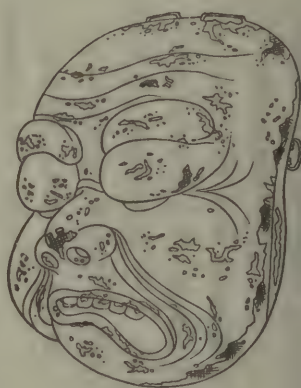
〔續修東大寺正倉院文書別集十卷書〕欠物〇中

作面貳拾伍枚略

右請樂三具之中欠物且注如件

〔雅樂假面圖〕

嚴島寶物圖會所載二舞



集古十種所載按摩雜面



緒白

イタメ紙地白  
 竪九寸八分  
 横七寸四分



集古十種所載大和國永室社藏蘭陵王面





尾壹尺三寸三分、大はね同前、横六寸壹分、細金尾長サ壹尺五寸三分、横六寸七分、但折かへしかた  
かたニてむく毛朱のうんげん、長尾こんせうゑんじニ而うんげん、中まへ細金でいニ而毛のか  
きわけ、うらにく色、仕様右同前、○中略

延寶三年卯十月

〔樂家錄三十八〕舞人携器類

還城樂

還城樂持桴曳蛇也、桴大率如陵王桴、而少長也、木蛇之輪三廻許、其總徑八寸許、立頭五寸許、已上彩色之、

〔教訓抄四〕還城樂

又○古云、此舞本者蛇ヲ取テ舞、而宇治殿ノ童舞ヲヲシヘラレタル時ハ、紙ヲマキテ輪ニツクリ  
ナゾモタセサセ給タリケル、

〔江家次第七八〕相撲召合

還城樂用舞裝、蛇者樂人置之、

〔樂家錄三十八〕舞人携器類

胡德樂

胡德樂酌人持瓶子及土器也、瓶子高一尺三寸許、筒徑六寸許、口徑三寸許、而地青畫唐草彩色、歪二、  
徑六寸許、銀薄之、

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目錄

一 瓶子壹ツ

高サ壹尺壹寸、口貳寸五分、胴のふくりにて六寸、疊すりニ而四寸四分、布をさせ堅地上々ぬり、彩

わけ朱くま總金うすさいしき、うら總銀九三ツ有、丸ノふち内外貳筋金の置あげ、中銀でい細金ニ而壹筋あいだニ入、くも形三所ニ有、せうゑんじニ而うんげん、總銀のうす彩色、大はね長サ貳尺壹寸横壹尺五寸、下ニ金九六ツ、上ニ金ノ九四ツ、但貳筋づゝの置あげ有、中は金、まわりはこんせう、ろくせう、朱のうんげん、細金貳筋ツ、入、みちは朱くまうすくも六所ニあり、置あげ、中ゑんじ朱ノうんげん、下のへりゑんじうんげん、でいから草有、かたのこんせうのうんげん、貳筋金の置あげ有、その中朱でいからくさ有、その外はまどのうんげん、でいからくさ有、いづれも總金の彩色なり、うら總銀九金の置あげ、貳筋ツ、入、中銀でいまわう朱ろくせう、こんせうニ而うんげん、中壹筋細金あり、くも六ツ、ゑんじまどのうんげん、かたはこんせう、でいから草、外まどのうんげん、でいからくさ、いづれもこんせう、ろくせうニ而、うすくまヲとり、但みち朱のうすくま、小はね長サ貳尺壹分横壹尺三寸五分仕様は右同前、かたニ金物あり、壹人前のかた羽、

かりやうびん四人前

いた入皮成程念ヲ入、彩色下地ニ仕、前ノ身長サ壹尺、横八寸、三段ニ置あげ、金むく毛、こんせううんげん、中まへ金の置あげ、金でいニ而毛がき、外は朱のうんげん、その次毛まどのうんげん、外はゑんじうんげん、その次の毛、こんせうのうんげん、外はろくせうのうんげん、その次の毛、朱のうんげん、外まど、うらにく色、後の方長サ壹尺貳寸、横七寸八分、むく毛、こんせう、ろくせうのうんげん、中まへ金置あげ、でいニ而毛がき、もの、次の毛、朱のうんげん、中まへ金の置あげ、うらにくしき色、小はね長サ七寸九分、横四寸四分、朱のうんげん、中まへ金の置あげ、うらは同前の彩色、中まへ細金、うわ尾長サ壹尺貳寸、横八寸、本ニ而四寸、むく毛、ろくせう、うんげん、まは朱のうんげん、中まへ細金、はねの長サ壹尺壹寸、六分横壹尺、むく毛、ろくせう、うんげん、小はね朱、うんげん、大はねこんせう、ゑんじのうんげん、中まへ金の置、金でいニ而毛筋かきわけ、うら同さいしき、中まへ、小の

〔龍鳴抄下〕皇座さう

すわへをもちてまうなり、

銅拍子

〔樂家錄三十八〕舞人携器類

迎陵頻

迎陵頻持銅拍子以鎗鉅作之形如常銅拍子徑四寸許厚七里許中施小紅緒於內結之外爲小緋而指入中指持之

迎陵頻羽  
胡蝶羽

〔樂家錄三十八〕棹附羽類

迎陵頻羽略○圖片羽長二尺許尾長二尺二寸許胴長一尺四寸許橫八寸許前方倣之

胡蝶羽橫長大率倣于迎陵頻

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目錄

一小蝶四人前

いたノ皮彩色下地成程念ヲ入ぬり申候後ノ身の長サ壹尺貳寸貳分は、七寸右は小ノ方大ノ方長サ壹尺三寸貳分は、七寸六分、かた金物一ツ金めつきまゝと、め貳所ニ有リ但前之は、のかた小の方長サ壹尺壹分づゝは、六寸三分大のかた長サ壹尺五分は、六寸六分、かたニ金物金のめつきまゝと、め四所ニ有リ總ふちろくせう段々のまきり金の置あげ但金銀朱えんじの段は、うんげんうすくものでい、かき金の所は、こんせう、ろくせうニ而くまゝとり、まべかきわけ、但朱ろくせうえんじ細金ニ而かきわくる、金銀の所ニ朱えんじこんせうニ而ひやう形うんげんかき入、うらはにくしき前後とも同前也彩色てふ小はね長サ壹尺貳寸壹分は、七寸壹分、丸紋三つ、差渡し貳寸七分、羽先えんじニ而うんげんでいからくさ有リ、こんせう、ろくせう朱ニてうんげん、其中細金貳筋入、中金の丸中通うすくも置あげ、中朱えんじニ而うんげん、まべのかき



打毬樂

打毬樂持毬打撥玉也、凡毬打俗如謂目藥指者、其製長二尺八寸許、本徑六分許、自末七寸許大作之、而其先五六寸之間曲之、但曲處內外厚作之而彩色之、其粧交大中小筋令纏之、玉大徑三寸六七分、高大概同于徑、以彩色爲五色之筋、略○中

埴破

埴破舊記曰、埴玉五、附于左右臂及膝與向、而舞之間取出之云々、舊圖玉一、其色白也、此舞斷絕因不能詳記、

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目錄

一玉壹ツ

高サ三寸六分、とうニ而さし渡シ三寸五分也、木地被下、此方ニ而布ヲさせ、成程堅地塗、彩色こんせう、ろくせう、まゆゑんじ、金はくニ而、うんげんの彩色上々ニ仕候、

一球打四本

長サ貳尺七寸六分、太サ七分、但そり有、下地被下、此方ニ而布ヲさせ、堅地ニぬり、こんせう、ろくせう、まゆゑんじにて、うんげんニはく、貳寸七八分程のうんげん彩色ニ仕候、略○中

延寶三年卯十月

〔樂家錄三十八樂裝束〕舞人携器類

曾利古

曾利古持白楚ふ、本無定法去皮以白爲佳、長一尺六寸許、徑三分餘乎、龍鳴抄曰、皇樂亦持白楚舞

〔龍鳴抄上食司〕放鷹樂はうふべし

まひのてい、たかのていとぞいひつたへたる、すわへもちたるべし、

但下地被下、こんせう、ろくせう、えんじ、金はくニ而、うんげん彩色、但先の廣キ所は、でいニ而から  
草あり、まらがいと、のふさ長サ壹尺付候、○中略

延寶三年卯十月

〔樂家錄<sup>三十八</sup>〕舞人携器類

採桑老鳩杖<sup>并</sup>藥袋下鞘松明

採桑老持鳩杖俗言鐘目杖也、<sup>謂鳩杖者、鐘目上居鳩形之作物、</sup>長二尺六寸、鐘目長六寸、<sup>鐘目長三分之、其二爲左居鳩其一分爲右方、</sup>各徑

八分許、黑漆之、而每端施逆輪金物、又杖與鐘目之界廻金物、固之而居鳩、<sup>爲則少洪也、有彩也、</sup>

藥袋俗言如圓藥袋、表白地金襴裏紅絹、徑五寸許、<sup>同之則一以紅緒箆口而附紅緒寸許、</sup>

下鞘如常下鞘、鞘長七寸許、<sup>黑漆底與鞘口施金物、亦自口去二寸許、</sup>周金物、設小環而附紅緒、<sup>緒垂七寸許、</sup>

但鞘口如指入劔作之、而劔與柄無之、<sup>或曰、蓋本有鞘而失之、後遂以無細爲法乎云々、</sup>

松明令白張者持之、檜長二尺許、厚一分許、橫七分許、三十本許爲一束、而本六寸許之間、包白紙以擦

結其上下、

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目録

一下鞘五本

長サ七寸八分、内壹本は七寸六分、太サ七分ニ五分柄長サ貳寸也、金めつきの金物有、但四所也、く

れないの四ッ打の緒付ル、

一杖ノ鳩壹ツ

はし々尾先まで五寸壹分半下地ヲぬり、彩色は山鳩の心ニ彩色、但でいさいしき也、○中略

延寶三年卯十月

〔樂家錄<sup>三十八</sup>〕舞人携器類

玉穗打

松下藥坊  
明鞘袋杖

略○中

建保五年<sup>申王</sup>正月十二日<sup>庚寅</sup>時ニ、範顯<sup>肥後守主</sup>夢ノ狀云ク、春日御社ニ參詣シテ、舞殿ノ前ノ藤ノ木ノ本ニ候テ、御殿ノ方ヲ見上テ拜禮仕候處ニ、樓門ノ下十七八許御ス若君ノ、以外ニ御勢大ニ御立チ御座ト見マイラセ候程ニ、玉垣ノ西ノハナノモトヨリ、束帶ナル殿藤木本ニアユミヨリ給テ、範顯ニ被仰云、近真ニ陵王ヲ可仕由仰セタマヘバ、家ニ傳ヘ候桴ノ候ハチバ、エツカマツリ候ハジト申也、陵王ノ桴作テ近真ニタウテ、御前ニテ陵王可仕之由可付仰ナリト、被仰候ヲ畏承候ス、但近真ニ範顯、陵王可仕由雖付仰候、承引仕候ハジト覺候ト申候ヘバ、束帶ノ殿重被仰云、其條ハ若難堪申サバ、可有別御沙汰之由被仰候程ニ、樓ニ立セ御、若君被仰云、蒙仰ス、イソギマカリ出テト、被仰候御音ノ深山ニ響以外ニ高クキコヘ候キ、此ノ仰ノ上ハ不及子細、慶賀門ヲ出候トヲホセ候シカバ、ヲドロキ候ヌ仍不經程シテ所進光近之桴本様有禪定院御所、即令申出、任本様桴造入錦袋、相具本様并夢狀于近真給了、其後令相傳テ近真令舞也、建保五年二月十六日夜、如夢相之狀以造與桴、相語テ樂人等春日ノ御社ヘ參詣玉垣前ニシテ舞之、<sup>○中</sup>件ノ桴并相傳面加修理之後、殆近真令相傳事、然者ハ相傳荒序之曲、嫡之輩可令相傳此桴者也、

〔難秘別錄〕胡飲酒

太鼓のばちの様なるものをもちたるも、人はばちとゑりたり、天王寺のものは、がくやの太鼓のばちをとられたれば、かたばちにてうつと、ゑりたりとかや、まことには酌といふものなり、ひさごつぶりのさけいれたるものなり、えながひさごなどいふものなり、

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目録

一後參桴貳本

長サ貳尺三寸四分、太サ差渡シ六分、末ニ而いてふの葉のごとくひらき申所、貳寸七分ノはゞ也、

如大鼓之桴

陵王

陵王持桴以金作之實長一尺一寸許而末少小本徑四分許末三分許而去本一寸許開一穴施紅緒結其端長七寸許總長一尺四寸許

拔頭

拔頭持桴長六寸許徑一寸許末少大黑漆之而桴先一寸之間削之先爲尖角本々有逆輪之金物但總二寸許而柄端去五分許開一穴施紅緒結其端長一尺許總長二尺許

還城樂

還城樂持桴曳蛇也桴大率如陵王桴而少長也○中略

二舞

二舞男形者一人持大鼓之桴一其製無異因略之○中略

古鳥蘇

古鳥蘇持後參桴其形如拂子名後參之桴者古鳥蘇舞四人出而後下隔二人長二尺本徑四分許末入于樂風持桴出而渡之上首亦令之舞故謂爾漸大作之其先四寸許之間曲之而其先作花形彩色彩色交大中筋令舞之而自花形之中出白毛糸其長一尺

許○中略

納蘇利

納蘇利持桴以銀作之長一尺一寸許本末徑四分許但中少大也

〔教訓抄〕羅陵王

一桴ノ事演主傳ニ曰ク陵王ノ桴ハ蘭陵王入陣ノ時鞭ノ姿也而ヲ渡我朝之後天平勝寶之比高野天皇御時以勅定被改當曲之古記五箇ノ新制之内也一者桴被縮一尺二寸二者不可著羅半臂



長サ貳尺三寸、横壹尺、布ヲきせ堅地に塗、おもてうるしはく、牡丹ノ花四ツ、つばみ貳ツ、極彩色、くわゑんはまゆぬり、但さちやうめんヲとり、めんの内うるしはく、金、但ふちまはりこんせうのうんげんに、でいニ而から草、うらもぼたんからくさ、地色うすかき、花四ツ、つばみ壹ツ、から草はこんせう、ろくせう、ゑんじに而、うんげんニ仕候、但はな置あげ也、花のまべ、でいニ而仕リ、まわりのへり、こんせうのうんげん、同とり手、ろう色、黒ぬり、略中

延寶三年卯十月

舞樂具

〔樂家錄三十八樂鼓束〕棹附羽類

持棹之舞、狛鈴之一曲也、長一丈一尺許、徑八分許、而彩色之、其粧相交大中小筋令、經

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目錄

一 狛鈴ノ棹 四本

長サ壹丈、太サ指渡シ六分半、但木柄ニ被、成下地被下、此方ニ而布ヲ袋きせニ成程堅地にぬり、彩色はこんせう、ろくせう、まゆゑんじニ而、うんげんのたんの彩色ニ仕候、

延寶三年卯十月

〔樂家錄三十八舞樂鼓束〕舞人携器類

一曲

一曲前掛、雞裏、左持錢鼓、右持羯鼓之桴、略中

壹鼓

壹鼓前掛、壹鼓、右持桴、略中

胡飲酒

胡飲酒持桴、其製如大鼓之桴、長五寸許、柄大徑八分許、頭大徑一寸八分許、黒漆之、而柄上下有金物、

垂緒圖如此○圖本束二緒金物一、次亦金物一、其制別不作之、一而如別有之作之也、其次結緒、亦端

施金物、長一寸許、而六角作之、但圓周許、六分、ヲ、チ、圖略、高三分、鋸之圖○圖如此、厚六分許、長二寸五分

輪形、已上無毛影、之、鞘梨地、蒔繪、口、施三分許之金物、而鑲之、之、亦施、凡其制、彫物、桐根、篠之、唐草、而中三

有粧、座、二、而其中、入、青、玉、而、以、金、挾、之、其、金、物、施、橫、六、分、許、長、四、寸、許、之、緒、附、之、其、制、以、紫、皮、作、之、但、施、緒

之、而三四箇、所以、金、物、合、開、之、又、鞘、口、與、鎗、之、間、二、箇、所、有、金、物、圖○圖如此、許、有、毛、影、之、鎗、金、物、圖○

略如此、金物、長四寸、其內一寸、鎗也、其制如、緒、附、也、

【樂家錄三十八】鉞 附 緒

凡鉞製、劍、長一尺七寸許、右方、金、柄、長七尺三寸許、黑漆之、突、長一寸三分許、下有石、總長九尺許、處之有

粉、左方、金、粉、割、有、鐸、徑二寸四五分、如、玉、圖、作、之、之、義、兼、王、鉞、耳、下、令、木、蛇、纏、之、青、小、環、附、緒、也、

緒製、長八寸許、橫四寸五分許、金、圖、左方、赤、地、右方、黃、下、六、七、寸、之、間、割、之、三、已、上、皆、有、緣、橫、三、分、許、金、圖、左、而

上端、含、竹、分、許、二、其、半、施、金、物、設、小、環、通、小、紅、緒、附、之、鉞、而、緒、表、裏、居、金、三、巴、徑、二、寸、五、六、分、右方、金、

【教訓抄七】一舞譜名目

梓散手 太平樂 奏上  
倍臚 貨德 奏上

【樂家錄三十八】舞人携器類

倍臚

倍臚、持、柄、及、鉞、也、柄、長三尺許、而上五寸許之間、作、蜂、火、裏、設、橫、木、二、木、其中、作、指、入、餘、之、穴、其、上、堅、打

木、爲、之、持、處、漆、而、板、表、裏、塗、白、粉、四、方、之、端、以、彩、色、爲、筋、表、畫、紅、牡、丹、立、木、裏、者、畫、唐、草、上、七、寸、許、表

裏、共、朱、之、

【舞樂道具注文】舞樂御道具仕上ル目錄

一 桶 四枚

## 脂當

脂當如俗行纏、以皮作之、其製作同形者二箇、而隔三分許連之、以爲半足、又上下去一寸許、橫七分許、皮厚一寸、各金地而有唐草邊但影地、裏紅絹其制橫二寸許爲雙、裏紅絹、一寸許宛而縫附之、而左右端施小緒長一寸許、又下邊自裏指出赤地金襴以粧

## 〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目錄

## 一負胡籙四ツ

長サ貳尺四分、は、上ニ而三寸五分半、中ニ而三寸貳分、下ニ而四寸七分也、あつさ壹寸三分也、表ニほり物有、布ヲきせ、成程上々ノ堅地ぬり、うるしはく、上々こげはく也、わきは金の置あげ、地はろくせう、地紋はほそがね花わちがへ、上はほり物うるしはく、金地はこんせうろくせう、まゆにてぬり、但でいニほそがねヲ入、うらの地まゆ丸五ツならべ、丸のふち金の置あげ、筋貳筋にて仕、其中通こんせうでいにてからくさ、中はから花、地はたん、その外總地にもあいだく、角々ニ、から花うんげんニ、こんせうろくせう、まゆにて彩色、見込は鳳凰の丸、ほそがね貳筋ニ而取、總地こんせう、花わちがへ、ほそがね、丸の内鳳凰、こんせうろくせう、まゆニ而うんげん彩色、但上々見込地はうすくも、地紋から花でい入金めつきの矢四本入、略中

延寶三年卯十月

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 秦王四舞人、面金甲、袴具常、脂當袍、鐙、石帶同子、帶、漬、胡籙、魚袋、太刀、垂平緒、肩當、籠手、肩漬、梓、

〔樂家錄三十八〕太刀之制附 垂平緒

太刀之制、總長三尺二寸許但柄六寸、鞘二尺六寸、柄白、絞、其中高二分許、小入柄之端以金施、甲金、其具一寸二、見、地、紋、之、而表方甲金之中央施小環、而以紫皮附二筋、

〔樂家錄〕三十八 秦王之具

秦王今世太平樂是也。鎧銅長橫見圖以韋皮爲質金也。但鎧札以下紅絹也。而施鎧札也。鎧札以皮作之。一分許平之。以紫平織之。緒前後鎧札下三通。中隔二寸。而肩三寸許之間。金襴自皆延之。前方面而前方鎧編以緒端連之也。於五分許上五通但後四通也。下邊以金襴作劒形者垂之。長四寸五分。橫三寸許但一者黃。一者赤。純子。真紅絹也。而劒形本施小鈴分德五銅後自肩五寸許下設小環施上卷紅唐打有領。徑四分許結。橫八寸許。長均于銅。○中略。

肩當

肩當著鎧當于頸廻具也。凡製法以皮爲質。表淺黃金。襴裏紅絹。端取緣平織也。端施牡丹掛之也。○中

肩塗

肩塗如獅子頭者作之。而自口切放之。二而口令塗橫三寸許之絹赤地純子。左右施紅緒指入于肩而結之。

籠手

籠手當于腕外具也。其製表淺黃金。襴裏紅絹。橫七寸。長一尺許。其爲先之處圓之。表施筋金也。但筋金以皮作之。厚七。風許。而有唐草透。但影地。生唐草。皆金地而處々入玉粧。○中

胡簾

胡簾之形如箱。而長二尺。橫四寸許。但於上下之端。橫五寸許平。深一寸五分許。而上有底下無底。表自上一尺五寸許之間當板。而自上去一寸許開穴。是矢筈見所也。長五寸許。橫三寸許。外八寸許之間有彫紋。方爲筋大。下五寸許之間無表板。而左右腋板次第欠取之。又裏板下端如屬木作之。已上皆金地。而底設小環二。施小紅緒。但一者自下五寸許上有之。而納矢四也。但矢根屬。將矢筈者。又曰中之菱筋。金及唐草。彩色。每端之玉緣。金已上。緒長一尺五寸許。而納矢四也。如鷹羽。各以金作之。略。皆高之。○中

帶塗

帶塗如鬼面。當于前帶上。故謂爾。凡大五寸許。厚二寸五分許。而地色如杉皮。齒白眉青彩之。



右方樂官者、赤地之處、青地之處、赤之、金物銀緒萌黃、其餘無異、

〔樂家錄三十八〕常裝束

襪子

襪子者、以生絹作之、如俗用足袋、而其製少異也、無脰無底、今所奉圖○圖之緣皆縫也、故著之則當于足底有縫、如竹筒、而前後皆縫、合之、紐如常足袋、

〔樂家錄三十八〕常裝束

糸鞋

糸鞋以素糸作之、五厘許其形如足皮之無筒者、口一寸許、裁斷之分前後、而前後端有緣環、前方別作四組緒施之、緒長一尺五寸許底用篋作之、底端縫合糸鞋、處用白草包之、而附牛皮爲裏、合三寸許○牛皮厚二

沓類

舞大率著糸鞋也、用異沓舞、凡三曲乎、

胡飲酒以韋皮如襪子作之、黑漆之、新靺鞨同于右、但筒端二寸許、以萌黃金襴爲緣、謂之靴沓也、

採桑老以韋之熏皮作之、色也其製如草鞋、但草鞋鞋一重也謂之烏皮沓也、

〔龍鳴抄大食調〕散手破陣樂といふ

束帶といふは、○中くりかはといふくつをはく、

〔龍鳴抄下盤注調〕採桑老うらう

能々をいたる人のすがたにて、○中くわには、いとぐつににたるものをはく、それが名たしかならず、たづぬべし、

〔大安寺伽藍縁起并流記資財帳〕合大唐樂調度○中

靴沓參兩

赤大口俗號赤袴

赤大口表裏共紅絹也。○中略

表袴

表袴表白綾地紋霞瓜紋。大三分餘瓜紋大三分餘而又其上有霞瓜。大五分許瓜紋大二寸裏紅絹也。○中略

袴類

凡袴異于常袴者總有三。一曰蒼蠶繪之袴也。表白生絹是束帶之袴也因不詳。二曰青海波袴也。其製同于束帶袴但裔八寸許赤地金襴也。其餘如常袴白綾地紋瓜霞其上以色糸有瓜霞縹也。三曰如指貫因其製不詳之所用曲名舉之。左宣舞袴之制別舉之

胡飲酒陵王倍臚秦王打毬樂拔頭還城樂散手拍鉾塼破登殿樂貴德納蘇利探桑老大紋菩薩常束也。袴

迎陵頻胡蝶東遊之三曲童舞也。袴制如指貫也。生絹用四幅表裏總八幅也。長凡三尺許前紐六尺後紐三尺許。迎陵頻蘇芳染胡蝶黃東遊白也。各以色糸有瓜縹。大徑二寸許各裏同于表。

〔續教訓抄二下〕左○左方中略踏懸錦一尺六寸。青地料赤地面料金物丸文四枚。面料半文十六枝四角料

錦文廿四枝綠料片面各六枚定。伏組糸白布紙廿枚。柿淡已上三種下地。○中略

右○右方中略大口單衣甲踏懸左同。但錦以青地被用許也。

〔樂家錄三十八〕常裝束

鞆掛

鞆掛者裂地等外不用之。舞人者每著之。形如俗用脚絆者。其製作同者二箇合連之爲一也。表金襴但中青地。長四寸橫二寸三分許上少廣廻赤地。長一寸三分許縫皆施平織緒橫五分許者爲飾裏淺黃色之布。有中縫故其厚二分許也左右各作二穴施金物附緒。唐打紅以之連結二箇。總長六寸六分許橫上五寸三分下四寸九分許

五分許並穿二穴施緒

緒長四尺此緒纏腰繫于左方之緒裏方輪結之

下重表中間有金置紋其數總十一左右之端及中五者形如半月者也

毛影桐其餘四者四角而毛影根篋○中略

襴褙○中

腰帶製以金作之橫二寸五分許長一尺二寸許而兩端折二寸五分許番之而左右端橫間二穴左右以施緒也但總地有唐草透影繞地而生唐草而以紅絹張裏但絹中包薄皮也

〔大安寺御藍緣起并流記資財帳〕合大唐樂調度○中

金作帶參條

平緒

〔樂家錄三十八〕太刀之制附垂平緒

垂平緒如忘緒也以下者謂垂以腰纏者謂之平緒乎此二者以大糸織之故厚三厘許也各橫二寸五分許垂長總三尺二寸許也此中兩端六寸許者不織之紛糸也其端三寸許染薄紫而折之二殘三寸許平緒也其餘皆間合之表方以色糸有唐草繡紋不定其繡附作之平緒長四尺許用同絹無繡無總地白紫之搦掛織成之也

秦王太平樂散手倍臚春庭花青海波皇帝多不用古鳥蘇貴德

〔樂家錄三十八〕秦王具

魚袋

魚袋魚吸魚之象也本末有魚尾也吸魚全體作魚銀地彩色被吸者作魚尾無鱗而腋三通圓漣欠之故自

有筋二而以金襴張之地亦

總長二尺許尾反自下計之則凡六寸許乎尾長三寸五六分

魚頭在牢厚一寸五分許橫三寸五分許但吸魚之長總長三分之二也被吸魚三分之一也

〔樂家錄三十八〕常裝束

袴

魚袋

ヒモノ、イト二兩二分、雲雁ノ地并皆略セズ、タウトキカクノゴトシ、此兩所ヲ略スルトキハ二兩ナリ、ウラキヌ四丈二尺二寸白練張、中略

右中略、下方、下襲面綾青村濃裏薄青色、其外ノ事左ニ同ジ、但緣錦以青地爲外、

〔樂家錄三十八〕常裝束

### 下襲

下襲表白綾、地紋桐草、染成菱、色紫、菱長一尺許、菱橫長一尺七寸、堅長一尺四寸、袖菱橫菱、菱中以上色糸、綾桐草、綾菱外、縮桔梗唐草、古圖、及韓菱也、領及袖端用赤綾緣之、領二重、袖一重、裾之廻以錦緣之、其橫一寸

七分、赤地、紋桐草、根、縫合緣之、界作平織、結、橫五分許者、縫附之、總裏紫也、中略

右方中略、樂官者菱紋黃中紺緣萌黃裏淺黃其餘無異、中略

### 著蠻繪之袍下襲之製法

凡著袍則下著常之下襲、謂常者以俗人之裝束、是通法也、著蠻繪袍之下襲少異也、製法及長橫同于常下襲、而無縮裾無緣也、表白綾、地紋龜甲、大徑一裏絹淺黃領及袖端紋菱、中略

### 裾

舞裝束之裾皆連續于下襲制之也、別用裾者止探桑老耳也、表浮線之綾、裏淺黃、長八尺也、其製不及記之、因略之、

〔樂家錄三十八〕常裝束

### 石帶

石帶以牛皮作、同形者二箇重用之、謂下重於下手、橫一寸二分、長二尺四寸、上手者二、而黑漆之、表皆含、如、兩端之周皆施、長一寸許、金物方、施、上重、右方食物之外、厚一分許、高起而表、又左方自端去、二寸五分許、並穿二穴、施鷓目、重、上下二箇以紅緒貫之、緒長一尺許、自外貫、又下重、右方自端去二寸



尺二寸、此外蹈二寸、頭二尺、大頸二尺八寸、二尺九寸ニタツベシラン一丈九寸バカリ、此ヨリ緒ヲイダスベシ、廣サ四寸五分、ウラレウノ相面ニヲナジ、ソメクサスワウ十兩、織文折金薄百四十四枚打下定、ヘリレウノアヤヲノ錦一尺八寸六ワリ、頸料長三尺八寸バカリ、廣サ三寸、衫料長サ七尺、廣サ三寸、フセクミノイト一丈二尺、廣サ四分バカリ、地紙○中略。

右略。半臂寸法左ニ同ジ、但文ニオイテハ銀薄ヲ用ベシ、又頭并衫錦青地ヲ用ベシ、

〔樂家錄三十八樂裝束〕常裝束

半臂

半臂表紺地、纈色、總裏花色、領及左右端以錦緣之、其横一寸七分也、赤地紋、桐唐草、根、葉、身長一尺七寸、此間左右端皆不縫附之、有續三筋、而有一奇緣、其横六寸、同色、紺、總總長二尺三寸也、下邊者紺二折之、爲緣也、當于左右腋與中爲襷、分許、襷之中、襷四横一寸許、而身下邊腋去一寸許、施長四寸許、紅緒、其端横貫小、木、許、以赤地金、包、之、○中略、長一寸。

右方。樂官者差筋用黃色之糸、緣萌黃其餘無異、○中略。

忘緒

忘緒表裏共紺地、纈色、横三寸五分、長三尺也、中横附紐紐横六寸、分、長、垂、兩端、寸許、長、垂、爲表之一端、自下九寸許之間有續、紋、其、間、。

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕合大唐樂調度○中略。

雜色半臂參拾參領

〔續教訓抄〕左○中略、方、下襲面料綾綾、唐、四丈二尺二寸和寸法ニ、四丈二尺七寸ニタツベシ、面ムラサ

キムラゴ色々ノ糸ヲ以テ、カラクサノヲリ枝ヲヌハシム、紫六十兩、ヘリノニシキ、赤地二尺、以之外緣ヲヲサシム、錦一幅ヲモテ十二破定、青地二尺フセクミ三筋、各長二丈五尺、ヒロサ三分許、ヌ

童舞袍身橫用一幅故其製如狩衣凡所用之舞三曲乎迎陵類赤紗胡蝶黃紗而以色糸有瓜繡大徑二寸

林歌袍紫紗地紋有鼠之繡紋一者金糸一者白相突裏布色花其製前後各用二幅如袍而無裾下邊之長均腋皆

縫之而每端以萌黃之金襴緣○中略許

八仙袍表紺地之生絹以色糸有鯉之繡大尺許裏布色花其制前後各用二幅如袍而無裾故下邊之長

均腋皆縫之而袍上掛紺糸之綱綱目四分許而每端以萌黃之金襴緣之二寸許著之則自上被之指入頭也

（圖略）袖一幅半餘緣橫二寸袖下一尺五分許長三尺八寸許前後各用二幅腋皆縫故如袋口而有緣頭指入之宛惟圓開之但橫五寸許長三寸許而入頸紙無蜻蜒

〔樂家錄三十八〕補襦舞樂裝束

謂補襦者袍之上著之者也凡其製有二也其橫一幅長六尺許中開入頭之穴著之則自上入頭而爲

腰帶也○中略

補襦橫一尺三寸長五尺六寸許四方以金襴緣之其橫各二寸總長六尺一尺七寸橫而折之二於前開入頭之

穴橫五寸五分許而入頸紙其製如狩衣等也地色等者因曲有異

腰帶製以皮爲質橫二寸五分許長一尺二寸許端作綱以金襴張之而兩端橫開二穴左右施緒也

用右補襦舞凡三四○三曲乎打毬倍臚狛銚埴破○中略

走物之補襦橫一尺二寸長五尺四寸許圓端而每端以白毛糸如線爲粧紛其端糸厚二分許其橫各三寸

許上下橫各四寸許總長一尺五寸許而糸與絹之界施平織橫五分許之紐其上以頭圓釘閉之釘頭徑三分許

而施裏絹大紙淺黃紙子取之二前開入頭之穴大如前而入頸紙也○中略

用右補襦舞凡七曲乎陵王胡飲酒散手還城樂拔頭貴德納蘇利

〔續教訓抄二下〕左○左方半臂中略ノレウノアヤ二丈三尺五寸如餘二丈四尺分定パカリニタツベシ身

二各四尺六寸五尺八寸ニタツベシ前ヨリクビライダスベシ前三尺五寸後二尺八寸カタミ一

補襦

半臂

ワキ詞今は歎てもかひなき事にて有ぞ、是社ふじが舞の裝束候よ、○中 女いま迄は行ゑもまらぬ都人の童を田舎の者と思召て、いつはり給ふと思ひしに、誠にゑるき鳥甲、月日も替らぬ狩衣の疑ふ所もあらば社、○下

〔續教訓抄二下〕左方○左袍イロヤマブキ、イロノイトヲモチテ、丸ノ文ヲヌフ、○中

右方○右袍モヨギ色、ヌヒモノ左ニ同じ、

〔樂家錄三十八〕袍之製

凡袍之製總有七、曰衣冠袍常裝束袍走物童舞林歌八仙蠻繪之袍也各圖之左、○中 并其所用之曲及色等目錄附之、○中

衣冠之袍不及圖之採桑老之袍者小葵、冬直衣也、新袼襪五位之袍二、六位之袍二、皆冬袍也、○中

常裝束之袍紗也、左舞赤、右舞萌黃也、以五色糸有瓜紋、大徑三寸許 此袍著之下襲上、故大率雖同于下

襲有少異也、其製比于下襲、則袖橫長三寸許、裾長五寸許、頸紙製法如衣冠之袍、其餘無異也、

用右袍舞凡十九曲乎、袍數左方六、右方六、每曲兼用之、青海波之袍雖長橫、制法同、紋耳異、○中略

振鈴一曲壹鼓、皇帝團亂旋萬歲樂、裏頭樂、五常樂、三臺、春庭花、喜春樂、威城樂、蘇合、散手、退走、禿、進

走禿、新鳥蘇古鳥蘇綾切、○中

蠻繪之袍、無紋之紗、謂蠻繪者紋名也 左方淺黃、一圖 右方黃、以五色糸有繡、其紋蠻繪也、紋形如唐獅子、相向、圖橫長

同于常裝束袍、○中

用右袍舞凡二曲乎 甘州登殿樂、○中

走物之袍、紋紗、左方赤、右方紺也、謂走物者、陵王等之類也 製法至于繡紋等大率同于常袍、其異者袖一短而端有

露耳、露大圓周四分許、長四尺許、而取之二、小輪結而去、袖端六七分、縫通之、但無通目、一寸許乎、而於袖下結止之也、凡作小輪者、爲著之時、指入中指、而縮也、

用右袍舞凡十一曲乎 胡飲酒、陵王、拔頭、逗城樂、打毬樂、散手、秦王、拍鈴、埴破、貴德、納蘇利、○中

〔樂家錄四十類話八〕天王寺樂人藺若狹守廣賴語曰、文祿之比、有謂甲鳥帽子者、而各著鳥甲之下、其比爲

童稚、故其形今難詳述焉、如立鳥帽子而著之、則至于拜甲不脫也云々、按古記、順德帝之御時、奏獅子之曲、戶部政氏進于庭中、脫甲掛之腰、而引立鳥帽子奏曲、是甲鳥帽子之事歟、

〔龍鳴抄大土食調〕散手破陣樂といふ

そのさうぞくは、たつかぶとうちかけ、○中又そくたいといふは、ちかぶと、あかきうへのきぬ、

〔舞樂道具注文〕舞樂御道具仕上ル目錄

八仙ノ甲四頭

高サ壹尺貳寸五分、横壹尺五寸七分、下地うるし、成ほど念ヲ入ぬりあげ彩色、下地但地はこんせうぬり、くわんの紋のまはり、劔形こんせうろくせうまゆにて、うんげん彩色、甲のまはりまゆのうんげんこんせうの所に、金でいのからくさ、下のへりこんせうぬり、から花金の置あげ、からくさはでいに面かき申跡先に金のめつき、てうつがいの金物有、中に桐のとう、下に緒付のつばあり、うらは花色羽二重ニ而はり、中に布の頭巾を付る、

一蘇合ノ甲六頭

高サ壹尺壹寸五分、中ニ而八寸、横羽先ニ而壹尺七寸五分、其次壹尺六寸、其次壹尺四寸、下ニ而壹尺壹寸三分、下地能念ヲ入ぬり、總地ろくせう、中まべ同、ふちまわり金の置あげ、小まべびやくろくとほそいねニ而かきわけへり七分、總金のうるしはく但金ノふちヲとり、ゑんじからくさ、さい敷、前後ニ金めつきの金物、中に桐のとう金物、うら金、きくの金物、金めつき、下ニ緒付のくわん有、うらもみ羽二重ニ而はり、○林歌、皇仁、黄、徳、散手等、甲略、

延寶三年卯十月

〔謠曲〕富士太鼓





裳長二尺五寸許、表黑純子地、紋白青海波、裏白絹、而腰周爲襷、二寸許、入總橫四尺許、附白紐、七尺許、長形、有圓字、大抵如冠、以木作之、塗金青、後之端施紉地之絹以掩髮、

御光以竹作輪、徑一尺六寸許、厚一分許、而中六本入于筋、徑二分許、遠之竹也、各金地而以黃色之紗張之、而中施紅緒、結附于羅、ホツ、但筋遠之竹方爲外也、

〔倭名類聚抄〕十二雲冠 唐令云、景雲、儼八人、五色雲冠、俗云、萬比、乃加之、其比、

〔箋注倭名類聚抄〕四按、雲冠今俗呼鳥兜者蓋是、

〔續教訓抄二下〕左唐樂、中略、甲錦二尺六寸、赤地一尺一寸、青地一尺三寸、裏料絹四尺許、フセクミ緒、

堀物金物金銅伏輪、中紙廿枚、白布二丈、柿淡已上三種下地料、中略、

右唐樂中略、大口、單衣、甲、踏懸、左同、但錦以青地被用許也、

〔樂家錄〕三十八常裝束

鳥甲甲之名處、予(安倍季命)未見之、故今私名之、是作甲之時、不以名呼之、則不恒于其分寸也、

鳥甲者、象于鳳凰頭、重紙厚一分許、以之爲質、而表金襴、裏以赤絹包之、如此者、大中小、總重三枚用之、

合左右計、則其最當于下一枚最大也、以上邊圓方爲甲首、其大者合左右各一枚、上邊及前後縫之令

縫六枚也、可容頭、但前方皆縫之、後方比、而作平織緒、橫五分許者、包縫處、而左右施金物圓中、桐也、八分、亦古

圓紋、風也、外方二枚、小、尤上、重者謂之、上、雲形者、特施于中間、爲紐耳、其形狀異於當于下者也、但製法

者無異、端皆以平緒包之、左右各二枚附之、而又其上橫五分許、絹如紐、爲之、令、高、之、施之、中間下

三枚束綴之、而紐上、前方左右合處、施金物束之、又自前、端隔三寸許、施桐金物、爲之、下邊設小環、爲之、

爲傳緒之處、左右同、結長二尺、又後方自端去一寸許、當于紐上、作穴、施鴟目、以紅緒、爲之、貫左右、結

之、此緒、堅結之、則甲中、狹、緩、結之、則甲中、廣、故著、一尺三寸九分許、橫、

一尺五寸九分許、橫、

玉ヲ貫キ、五色ノ勾ヲ莊レリ、金天冠ヲ懸タリ、其様大略天女ノ裝束タリ、而モ其色々普通ノ儀ニアラズ、伴目錄ヲモテ是ヲ勘ヘラル、

緑羅衣  
衣コ  
トレ  
イチ  
フ碧

桶  
襠  
玉コ  
トレ  
イチ  
フ金  
雀

青裳  
魁コ  
トル  
云ナ  
フ翠

同腰八筋ノ兩方ア三

羅袴  
見上  
定下  
ル長  
所短  
ナ色  
シ々

金玉繫  
頭コ  
ニレ  
懸チ  
ル金

環吐  
珞差  
アト  
リ、云、フ、  
赤前

ナ 雲  
覆 前  
フ コ  
レ  
玉

天冠ニ玉ニ笄ニ金鈴ト珠云

未  
大  
不  
風鳥

久利皮ニ  
モテ之ヲ  
造ル

已上二具裝束

併テ朽損ス、而モ不具、仍其正體未詳、但勅使申ニ隨テ、粗要ヲトリテ註置トコ

ロカクノ如シ

抑光季年來ノ不審ヲ披ガタメニ勅使左大辨匡房ノ許ニ行向テ名府ヲ捧テ玉樹金釵兩臂垂通名ノ子細尋申サレケルトコロニ答申サレテ云ク玉樹ト兩臂垂ト共ニ陳ノ後主所造ナリ而モ一曲タリ未其因縁ヲ知ラズト雖彼作者別人ニアラズ而兩臂垂曲未コレヲ見聞カズ但シ唐櫃ノ銘文尤詳ナリ予ガ不審同以開之然者今ニオイテハ玉樹金釵兩臂垂ト云ベキ歟就中舞ノ說ニツイテ別相傳アルヨシ今聞之仍此銘文ニ付トイヘドモ誰非據トイハシヤ加之仍彼唐櫃ヲ相具シテ上洛アルベシトイヘリ

〔樂家錄三十卷〕菩薩裝束

菩薩、左方六人、右方六人、總十二人也。裝束製法全體如菩薩。先著裝束、次第舉之。

先著決拾白次赤

大口、表袴也、已上束帶能

之用、次胴絹、次裳

腰、而當腰帶、製同于狩服

其  
袈裟  
條赤  
袈地  
裝金  
也、  
裏五

紅次著面方左方白方但少

赤、次右、著襪子及糸

而持赤蓮華已

綢緞製法無紋綾

前後一幅以其半

頸之處、前登栽

而其端綴同綾、橫五

許者爲枉其製至于

頭紙等、皆如狩衣

也、無袖、如肘形作之

絹縫附之、端施

紅緒、後緋結之、指入

通用者也、故首舉之、舞人裝束附之後、所謂常裝束者、烏甲俗謂之、半臂、下襲、表袴、赤大口俗謂之、忘緒、石帶、襪子、糸鞋、鞆掛此三者一足末廣總十一數而一具備焉已上三略

右常裝束著之法、先甲、次赤大口、次上袴、次下襲、次半臂、忘緒、次石帶、次襪子、糸鞋、鞆掛、

〔續世繼〕春のまゐり、天承二年元長承三月にや侍けむ、臨時客せさせ給ひき、○中左右のまひ人か、さねのよそひして、月華門にあつまれり、

〔台記別記〕仁平三年十一月廿六日辛亥今日詣春日、○藤原賴朝東遊了、舞人陪從著座、次奏音樂左右

六人用、○下略、清水寺、○下略

別裝束

〔歌舞品目〕十、舞、器、草履、別裝束○中、胡飲酒、藥王、其外玉櫛等ノ、其曲ニカ、

〔舞曲口傳〕秦王破陣樂、有別裝束、四人舞之、○中、散手破陣樂、有別裝束、一人舞之、○中

採桑老、別裝束○中、拔頭、別裝束○中、還城樂、別裝束○中、菩薩、別裝束○中

蘇莫者、別裝束○中、陪臚破陣樂、別裝束○中、羅陵王、別裝束○中、狛梓

別裝束○中、新末鞆、別裝束○中、八仙○中、別裝束○中、貴德、別裝束○中

納蘇利、別裝束○中、林歌、別裝束鼠付

〔續教訓抄〕四、宣、越、調、玉樹後庭花

抑此金釵兩臂垂ニオイテハ、各別ノ曲ト見及ブトイヘドモ、堀河院ノ御位ノトキ、粗此由緒ヲ聞召シ及テ、寛治二年ノ春ノ比、光季ヲ召テ御タヅチアル、則奏之申テ云ク、彼裝束ニオイテハ、先年ノ比ワヅカニ元興寺ノ寶藏ニ、玉樹裝束ノ唐櫃トイフ銘候シ由粗承及トイヘドモ、未ダ其眞偽ヲシラズ候旨陳申上ニヨツテ、元興寺ヘ勅使左大辨大江匡房ヲ下サル、寶藏ヲ開テ實檢セラルル處、唐櫃ノ銘文ニ云、玉樹金釵兩臂垂裝束ニ具納之ヨシ、カキノセラル、處ナリ、仍テ銘文ニ任テ、伴ノ裝束ノ體ヲ披見セラル、トコロニ、凡ソ愚眼ノ及ブトコロニアラズ、遍ニ青黃赤白黒ノ



御所法住寺殿度々有舞衣御覽裝束各裁錦繡其體目不暫捨視者拭感涙、

〔安元御賀記〕安元二年としのついでひのえさる彌生のはじめの四日、○中今年太上法皇○後白河い

そちに滿たまふによりて、我きみ○高の御賀を奉らせ給ふなりけり、○中舞人樂人中門に並び

たつ、亂聲三度、まづ左次に右つぎに左右おなじく是をふく、舞人の裝束左青色のうへのきぬえ

びぞめうちのはんひ櫻の下がさね、すほうのうへの袴紫だんのひら緒こへうのまりざや、まか

い、そのほかたちやなぐぬ、おひがけ、つねのごとし、右同じさうへのきぬ青、うちのはんひ、柳の下

がさね、山吹の上のはかま、青だんのひらを、ちくへうのまりざや、其外常のごとし、此程藏人所の

衆かざしの花をくばる、

唐裝束

〔續教訓抄二下〕或人云、舞樂人ノ裝束ハ、尤存知スベキ者也、唐裝束○コ、ニハ裝束○ト云、左右ノ色

ハカハレドモ、具足ノ數同事也、袍、半臂同緒アリ、下襲、表袴、下袴也、紅單衣近來只帶金又甲踏懸

襪、糸鞋、沓、此妻之時ハ折烏帽子ヲキテ、引立テ樂屋等ニハ著スルナリ、略儀ヲ存スル輩不引立之、

公役等皆用此裝束也、

蠻繪事、興福寺ニハ蠻繪裝束ヲ用、彼寺ヲ以テ根本トス、古老相傳云、彼常樂會ハ釋尊ノ御報恩ナ

リ、此裝束則服衣ノヨシナリト云々、末本文ヲミザレドモ申ツタフル所如此、此裝束ヲ用ル所、春

日御社大般若會、九日、長谷寺、法隆寺、信貴山、多武峯、笠置寺、東大寺、藥師寺、本ヨリ彼寺ニ調被置ナ

リ、此外醍醐寺樂人バ、左女牛樂人バ、又天王寺樂人バ、此ヲ又舞人ハ唐裝束ニテ樂人バカリ著也、

凡裝束、左廿具、右廿具、噴物八具、コレヲ一具ト云也、

〔樂家錄三十八〕舞樂裝束

凡舞樂之裝束、大抵皆如同也、然古今之製、有長短廣狹及彩紋之異、而品類太多、舞人之裝束、其種類最多、不能盡記之、今舉其略、又至于彩紋等、則有難詳記之者、示大概耳、抑有號常裝束者、是舞人樂人

其祭夏ナル時モ、冬ノ下具ヲ著モ一説也、又夏多著スル一説、又夏ナレバ一向夏ノ下具著ス一説也、一向夏ノ下具ヲ著、小忌ノ鷲目ニハルベシ、又冬ヲマスル時、引倍支ヲ略シテ唯相ヲヒラク、ヲヨリ出ナリ、是一儀ナリ、略中

一五節ナドノ時、小忌公卿下ハ表袴也、摺袴ハ凡舞人バカリ也、

〔台記別記〕久安三年三月廿八日辛申、入道殿忠實、御賀雜事、略中

一音樂略中 舞裝束

蘇合 新鳥蘇 青海波 鯤崙八仙 胡飲酒 新蘇鞆 狛梓 陵王 納蘇利 鼓鉦持裝束

左右各二具

已上申院

仁平三年八月八日乙丑、於土御門、定春日詣雜事、略中 定、

可參春日社給雜事、略中

一東遊 舞人 滿清 維繁 盛弘 宗言 正時 貞清 叙時 時弘 重定 義定

陪從 忠正朝臣 清職朝臣 盛業朝臣 以長朝臣 範基朝臣 賴方朝臣 經時 信綱

範光 章盛 維盛 賴成

裝束 舞人青摺加人長并赤紐 土左守朝臣

依冬改郷國 二藍下襲加人長 十具打白 備中守朝臣 地摺袴加人襲 十腰加人襲 但馬守朝臣 陪從青

摺十二領加人赤紐 忠弘朝臣 黃朽葉下襲十二具 顯長朝臣 表袴十二腰加人長打 信賴朝臣 大

口十二腰加人長打 盛隆朝臣

插頭花 行事前筑前守朝臣 盛業朝臣

〔帝王編年記二十〕安元二年二月廿一日、於內裏有試樂事、舞人樂人等爲殿上侍臣、略中 先是於院

雖夏晴之時、腰張衣也、生衣不知案內、公卿所爲歟。○中

下襲付半臂

同可用公物也。○中

舞人半臂、躑躅不可然事

仁安三十二十六後土源曰、今年舞人半臂、躑躅云々、未聞事也、仍著私物、或著件半臂、伊保定宗

著之云々、自餘私物云々。○中

糸鞋

襪上著之、乍著昇堂上無憚、參入之時、深泥者乍著、糸鞋著淺沓、但取去敷云々、

糸鞋作在八幡也、仍通氏朝臣舞人勤仕之時、尋別當幸清令著之、

〔連阿不足口傳抄〕一舞人裝束事

摺袴、腰左右ニ結垂ベシ、ヒヲク、リツガリノクミ、片一筋ヅ、ナリ、或ハ二筋ニテ片ヲツクル、此

時兩方四筋也、キラメクニクミノサキニ露シベヲ入ベシ、玉ニテ上サシス、或ハ又金物ウツ、ツガリノ

フナ、檢非違使彈正官等跨々ヲク、ル、○中

一摺袴ノヒヲク、リノ本樣。○中

一舞人 小忌也 青摺桐竹 摺袴 藍繪

キラメク時、年少綾ニテ下地ヲスル也、スリバカマト云ハスリノ名ナリ。○中

一此日ハ舞人馬腦帶ヲ損、乍十人也、六位ハ犀角ノ丸鞆布帶ヲモ指也、

此日四品ノ指馬腦ヲ借用ノ心地也、

一頭插花事 使藤 吹 人 長 藤 陪 從

一舞人裝束事

りざやをさす、五ぬはとら、六ぬはあざらし、をのくひらをあり、さくをもつ、かざしのはなは、ぢんにてさす、さすべきところをかぶりにかねてはなちてまいる、

〔助無智秘抄〕石清水臨時祭事

舞人、アラズリノ袍、ラデムノタテ、メナウノオビ、五位ハシザヤライル、○中略

今日ハ公卿サクラノシタガサチヲキルベカラズ、主上ノタテマツルニハハカルナリ、臨時祭日ハ馬腦ノオビヲサハズ、舞人サスユヘナリ、昔ハメナウノオビハワヅカニアリケレバ、モタヌ人モ、マヒ人ノレウニカリモトメシケレバ、タマノ殿上人ハサスニオヨバズ、ソレガ今ニ流例ニナリテ、近代ハツタリメナウトヲオホカレドモ、ナヲサハヌナリ、

〔飾抄下〕舞人

挿頭

臨時祭於禁裏賜之、諸社御幸行啓或於社頭賜之、或於仙洞賜之、先院廣岐八幡御幸、自鳥羽南殿有御出立、即於御所賜之、行幸之時於社頭賜之也、○中略

小忌付赤紐

小忌文竹桐、夏不笠之、冬笠之、故實多者著拜領小忌歟、但年少之人或私調之、著用云々、赤紐用公物、仁安二十一廿一、賀茂臨時祭、同三四三、石清水臨時祭、故殿著拜領小忌給也、但頭紙ヲ指改云云、○中略

摺袴付下袴津賀利糸

同以公物著用之、但下袴津賀利糸私用意之云々、○中略

摺袴腰夏冬無著別事

仁安三四三、石清水臨時祭、殿記曰摺袴无腰并津賀利組、重尋遺須之持來、腰生村濃大夫殿仰曰、



むらごのこしなり、くら人のけびいしまも、だちをばつがら下またのをつがるなり、  
かもやはたなどの、はれの御幸などには、まひ人のすりばかまを、宮ばら大臣大將などに、めさる  
れば、からあやにしきのこしをさしたまのつがりをして、くれなゐのうちたる、またのはかまな  
どをして、まいらせらるゝなり、それにはかまたのはかまべち／＼にて、まいらす人あり、う  
たてあることなり、これよりやがてはかまに、またのはかまをかさねて、ふたへにをしおりて、ひ  
らつゝ、みにもいれて、まいらすなり、これのみにあらず、たゞ人のもとへ、まひ人のすりばかま  
をつかはさんにもかさぬべし、さてこれを、かさねのはかまとはいふなり、

まひ人のさうぞくをすることは、まづはかまをつがりて、またのはかまきぬうちきぬをきて、は  
かまをまへごしの右をとりて、うしろよりまはして、左のわきにかたかぎにゆふなり、さてうし  
ろごしのひだりを、まへより右にひきまはして、右のわきにまたかたかぎにゆひて、うらうへに  
さげたるなり、ながさはこしに、またがふべし、さてのちはかまぎはをきるくゝりをすへてのち、  
またがさねはんひをきることは、わきあけにおなじ、そのうへにあをすりをきる、まへはわきあけ  
のやうに、またいりにきすべし、あをすりのまりは、ひとのなれども、またがさねのまりのうへに、  
なかのぬひめに、なかをあてゝ、わきあけのやうにとりて、まりをかくること、又わきあけのやう  
なり、たちにかけんをり、はんひのをひきいづべし、またうづをひとへはきて、またかゐをはく、はか  
まのくゝりにて、またかゐのきびすにかけてゆひたるが、ぬげでよきなり、その、ちひだりのそで  
のぬひめのうへのかたに、あかひもとちつく、うしろのさがりに、うはてのなかより、ひきとほし  
てさげよ、まへはあをすりのひとよりどころよりさげよ、

あかひもはひろさ五分ばかりにて、なからのほどにあげまきむすびて、うらうへのさがりに、に  
なむすびて、ひらてかひをおしたり、こきうちひとすぢ、すはうひとすぢあるなり、五の六のは、ま

石帶襪糸鞋、朝掛、末廣等ノ一具シタルモノヲ謂ヒ、別裝束トハ、胡飲酒秦王、玉樹等ノ裝束ノ如ク、其一曲ニノミ用ケルモノヲ謂フ、唐裝束ニハ、又左方、唐樂右方、高麗樂ニ因リテ其服色ヲ分チ、文舞武舞ニ由リテ其服玩ヲ異ニスル等ノ事アリ、  
假面ハ木ヲ彫刻シタル物ヲ以テ常トスレドモ、一種厚キ白紙ヲ用キテ作レルモノアリ、之ヲ造面ト云フ、

舞臺ハ舞人ノ舞樂ヲ行フ處ニシテ、高舞臺、敷舞臺ノ別アリ、樂屋ハ原ト樂人ノ著座シテ樂ヲ奏スル處ノ稱ナレドモ、後ニハ樂人ノ裝束所ヲモ稱セリ、

〔歌儺品目〕十舞器、舞人裝束、按ズルニ、裝束ノ書ニ、舞人裝束ト云モノハ、皆臨時祭、又ハ御幸ノ陪御幸ニハ、舞人ニ摺袴ト云モノヲ給ハル、又

〔政事要略〕二十八年中行事、下西一月十賀茂臨時祭

臨時祭裝束略中、舞人裝束青摺布袍赤紐、著左肩、小忌地摺袴、葡萄染下襲、合袴、糸鞋、除相之外、自殿所給○中略

又陪從裝束青摺布袍赤紐表袴、合大口、淺履、除相之外從殿上所給、其舞人雖卷纓不著綏、但陪從尙垂纓也、

〔雅亮裝束抄〕まひ人のさうぞくのこと

まひ人のさうぞくたまはるには、いくばんをしてまへのよう、うちへまいりて、ゆば殿にて給はる、よきふくろをぐすべきなり、かべいじうをせんもおなじことなり、きんだいくらのものとへ、ふくろばかりをやる、つねのことなり、あをすりはかりぎぬのまゐりがきに、山あるといふものして、竹きりにほうわうをすりたり、またがさね春はさくら、ふゆのにはつゝじ、うちはんひなり、はかまはふたのにてまたなし、くざくのまろをいろ／＼にかき、またのはかまをかさねたり、もゝだちをいろ／＼にくみたるいとしてつがりたり、つがりやうならふべし、かくにおよばず、こし

地久、新鳥蘇、林歌已上六人、皆舞之。

一鼓一人 左衛門府生近光新執 三鼓二人 左近府生清員 左衛門府生吉清 笙

二人 右兵衛尉公廉 右近府生光元 篳篥一人 右兵衛府生兼次 笛二人 內含

人基方 近衛清近 太鼓一人 物師正次 鉦鼓一人 物師是節

〔樂家錄四十八〕樂所之人授唱歌於或公達之時、以扇擊疊爲拍子、始少擊之後者無所憚而擊之、故疊中之埃氣甚起如煙、近仕之人曰、達于一道之人當于事必備自然之妙、然此樂師當于事如此有失也、師之不善不可用焉、後不召彼樂師云々、

〔長祿年中御對面記〕正月廿日 一山徒樂人出仕、御太刀絲 山門執當進上之、御對面次第は、一番ニ

執當其次御加持衆其次使節以下、其後樂人也、執當一重被下之、大使、節并樂人御太刀被下、

〔七十一番歌合〕七十番 左 樂人 右 舞人

面白や竹のまらべにまたがひて夜ごとの月も心すむかな

入がたの月にまはゞや陵王の日影をかへすばちの手づかひ

明たてし河よりをちの笛の音のゆかしとせめて聞人もがな

袖ふらば涙やみえんから人の立まふこともいかゞと思ふ

# 舞樂裝束 舞臺研入

舞樂ノ裝束ニハ、倭舞東遊ノ如キ、我國固有ノ樂ニ用キルモノト、唐樂高麗樂ノ如キ外國傳來ノ樂ニ用キルモノトノ二種アリ、前者ヲバ通常之ヲ舞人裝束ト稱シ、後者ヲバ之ヲ唐裝束ト稱ス、唐裝束ニハ、又常裝束別裝束ノ別アリ、常裝束トハ、烏甲半臂下襲表袴、赤大口、忘緒

右之通兩老分一方并在天へ相達候事

〔日本書紀<sup>九</sup>〕<sup>九</sup>四十二年正月戊子、天皇崩時年若干、於是新羅王聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十艘及種種樂人八十、

〔日本書紀<sup>十九</sup>〕<sup>明</sup>十五年二月、百濟遣下部扞率將軍三貴、上部奈率物部烏等乞救兵、<sup>中</sup>奉勅貢<sup>中</sup>

樂人德三、斤季、德已、麻次、季德、進奴、對德、進陀、皆依請代之、

〔令義解<sup>一</sup>〕雅樂寮

頭一人、<sup>中</sup>男、女樂人、音聲人名帳<sup>中</sup>略事、

〔江家次第<sup>六</sup>〕<sup>四</sup>月二孟旬儀

左右近衛發亂聲、<sup>略</sup>注、遞奏音樂舞等畢、<sup>中</sup>略樂人舞人皆近衛官人、<sup>略</sup>下略

○按ズルニ、衛府官ノ樂舞ニ關スル事ハ、官位部衛府總裁篇及ビ左右近衛府篇ニ載セタリ、

〔台記別記〕久安三年三月廿七日庚寅、今日高陽院<sup>原</sup>鳥羽后攝政<sup>原</sup>藤原俱賀禪閣<sup>原</sup>忠實七十算、

廿八日辛申

一舞人、樂人、女院廳催之

左方 舞人六人 左近衛將監光時<sup>萬歲樂、太平</sup> 左兵衛尉則康<sup>青海波、陵王、太平</sup> 左

近將曹<sup>輪臺、音聲、萬</sup> 則助<sup>輪臺、太平、萬</sup> 光近<sup>青海波、萬歲樂、太平、萬</sup> 光弘<sup>元官、輪臺、春</sup>

奚婁一人 左近府生季時 羯鼓一人 近衛則康<sup>新</sup> 羯鼓一人 物師國友 笙

二人 右近將曹時秋 府生光秋 篳篥一人 左衛門府生貞時 笛二人 雅樂允清

延 兵庫尉清久 太鼓一人 左衛門府生節行 鉦鼓一人 物師助遠<sup>新</sup>

右方 舞人六人 右近將監近方<sup>輪臺、新</sup> 將曹元秋 同忠節<sup>胡飲酒、新</sup> 成方<sup>輪臺、新</sup>

右衛門尉好方 右近府生季方<sup>輪臺、新</sup>



十月廿六日、四辻殿御招參上、

奉歎願口上覺

今般賜米三拾俵宛上藝、二拾俵宛中藝、拾俵宛衆分、拾俵宛衆外、

右之通年々可賜被仰下、一同難有仕合奉存候、然處不願恐奉歎願候儀者、今般賜米諸官人一同江  
は家別三十俵宛被下置候趣、右者何も相續方に被下置候御事と奉存候得者、何卒私共一同にも  
家別之分、以御憐愍諸官人同様拜領之儀奉願上、度尤格別之以思召上、藝中藝之輩江、別段藝料被  
下置候儀は、屹度樂道之勵に相成、且又及第執行之功も相立、何も深難有仕合奉存候、然處右、上  
藝中藝之輩は、兼而知行配當之人數ニ御座候得共、衆外之輩は未知行配當之人數にも不加申、無  
祿同様之者も有之、何も衆外に而は實以相續方に差支甚難澁之仕合に御座候得者、出格之御仁  
惠を以、一同相續方に相成候様、家別三十俵宛被下置、別段上藝中藝之輩江、は、今度御沙汰之通、拜  
領被仰付被下候者重々之御厚恩、至子孫迄忘却不仕、冥加至極難有仕合に可奉存候、此段宜御沙  
汰奉願候、以上、

亥 八月

東儀近江守

窪 甲斐守

多雅樂權助

四辻大納言權御内

八田織部殿

芝 式部殿○他二  
通略

去ル八月差出候歎願不當之儀に付、不被及御沙汰三通とも御差戻之事、

藝術も有之候事故、格別之思召を以子息迄藝料被下置候間、出精者勿論、心得違不致様可申達旨  
石尾氏被申達候事、

右者御定目錄之通、半納之積ヲ以、米高書附申候併延寶二寅年、知行所大洪水ニ而夥敷損亡仕、夫ヨリ年々川普請相續候ニ付、當時者三ッ物成配當仕候以上、

配當人數

正四位下 奧雅樂權助好古○以下七略

右之通御座候、以上、

奧雅樂權助

安政五年午四月

林石見守

多美作守

〔樂所日記〕文久三年七月十九日、四辻殿三方老分御招參上、忠惟、文均、近後代光張

當春大樹上洛、御所邊御手薄之儀見聞深恐入、以來乍聊拾五万俵上納之旨言上有之、就而は諸臣一同年々可願賜旨被仰出事、

三拾俵宛 上藝 貳拾俵宛 中藝

拾俵宛 衆分 拾俵宛 衆外

家別賜之間、雖上藝中藝子息之輩江は不賜事、

右之通石尾盛物尤書取 通達之事○中

上藝廿六人 京都方九人分三百七十俵 天王寺七人分二百拾俵

一七六拾俵 京都方九人分二百七十俵 天四人八十俵

衆分七人 京一人二十俵 京二人廿俵

一七拾俵 天五人五十俵 天七人七十俵

衆外十八人 京七人七十俵

四口 合千百九拾俵也

内四百俵南都方 四百拾俵天王寺方 三百八拾俵京都方

右知行貳千石 但五ッ物成

但

六百三拾四石壹斗餘 大和國平群郡目安村 三百四拾石餘 同國同郡神南村 六

拾石三斗餘 同總持寺村 四百七石八斗餘 同樺井村 百三拾六石五斗餘 同平

等寺村 百三拾八石四斗餘 同中之宮村 百八拾三石貳斗餘 同安明寺村 九

拾九石貳斗餘 同岩井村

右物成米千石之割

家領米五百拾石 但五拾壹人壹人拾石宛付 師匠料米九拾石 但三ヶ所之頭九人壹人拾石宛付

上中藝料米貳百石 但三ヶ所ニ而上藝廿人壹人拾石宛付 中藝廿人壹人拾石宛付 稽古料米 貳百

石

一師匠料上中之藝料其時之人により配當勿論人數多少有之、

一稽古料其時々之人數多少有之

一三ヶ所壹人宛三人年番を定樂人領貳千石收納申付配當、

一上藝中藝之改三ヶ所立會入札相究候、

一師匠上中藝料子共稽古料人數不足之時、殘米之儀、年番之もの納置、三ヶ所疊樂相續入用ニ遣

申候、

右之趣寛文五年六月御條目被下之、

〔樂所錄〕安政五年四月十日

樂人領

一高貳千石割村略

に<sup>略</sup>中 左大臣勅を承りて、一階をたぶよし仰下されければ、忠方再拜して舞て入り、かゝる程に、忠方右舞人たりといへ共、左舞を奏して勸賞をかうぶる。左かならず賞を行はれずとも、何事かあらんや、又狛光則、多忠方、いづれ上臈たるぞやのよし儀定ありければ、左衛門督雅定卿申されけるは、光則忠方同日に勸賞かうぶりて叙爵す、多は朝臣なるによりて内位に叙す、狛は下姓によりて外位に叙す、忠方上臈たるべしとぞ申されける、よく舞によりて賞をかうぶる、光則よく舞はゞ行はるべし、幽ならずは行はるべからずと申けり、或は左右ともに行はるべきよしをも申けり、

〔光臺一覽<sup>三</sup>〕天子御遊の賞などに依て、南天<sup>天〇南都</sup>二流には四品之正三迄も申候、京方は多は六位なり、

○按ズルニ、樂人ノ勸賞ヲ蒙ル事頗多シ、今一二ヲ錄スルノミ、

〔嚴有院殿御實紀附錄<sup>下</sup>〕亂世久しく打續きし後は、京の伶官等も其名のみにて、大内よりいさゝか物賜るとはいへども、定れる俸祿もなかりしが、寛文五年四月、神祖五十年の御法會はて、京伶あまた府に参りしとき、曰木書院にて舞御覽ありし後、彼等徵祿にして、進退かなはざるよし聞しめし、今よりのち廩米あて行はるべしと仰有て、明る六年三月、樂所料二千石の御朱印を下し賜ぬ、かゝりし後は、樂官連綿としてみな其技を傳へ、はたこれにより古樂の廢缺せざる事を得しも、みな當代の盛恩による所なりとぞ、

〔京都御役所向大概覺書〕樂人之事 但樂奉行四辻殿支配  
樂人合五拾壹人

内

拾七人者 京方 同斷 南都方 同斷 天王寺方



波 拔頭 散手 陵王

已上左方尾張漢主 伯光高ヨリ始、陵王之賞ハ其後寛治四年、朝觀行幸、光季勳賞、保安三年、光則以段王賞、在將監了、右一者以左舞賞者、胡飲酒、探桑老

地久長保樂 狛梓 退宿德 埴破 敷手 林歌 貴德 落蹲

寛治四年、資忠以落蹲賞任將監、

保安三年、忠方蒙賞了、

樂人

師子小部氏笛吹 豐原氏笙吹 大神氏笛吹各依樂人

又曲ニ付ズシテ、蒙賞賜纏頭ヲ、袍尻ヲ係ヒボヲサシテ參承也、サテ尻ヲ下シテ、二拜シテ尻ヲ引テ還入也、昔ハ其身ニ留リ、五位ニモ自餘官職ヲモ追テ被仰ケレドモ、近來ハ蒙勸賞スレバ則五位留也、我身ニアマリヌレバ、子孫一家ノ輩ニ讓與也耳、

〔中右記〕寛治四年正月三日己巳、有行幸中略、河、次召公卿候、實子敷、次亂聲、光末、佐忠振、龍王、光末、召

之叙爵、納蘇利佐忠 召佐忠轉任本府近將監

〔樂所補任〕永久二年甲午

左近將監時元室一 行高十二月日、白川阿彌陀堂供養之日、任、

右一物也、

元永元年戊戌

左近將監時元樂所室一 行高十二月十五日、榮壽、最勝寺供養之日、 正清同日、任將監、師、

一笛、

右近將監忠方始、胡飲酒、依宣旨、右一、年母、

〔古今著聞集六管絃歌舞〕保延元年正月四日、朝觀行幸に、多忠方胡飲酒唐樂をつかうまつりける

〔吉野樂書〕一左右ノ一者二人ノコウトウト云右ノ一物ハ左ノ舞人ヲ催シ左ノ一ノ物ハ右ヲ催ス、總ジテ右ガ大體ニテ、左ヲバツラノモノト云也、

〔樂所補任〕永久三年乙未 行高左一、年略 右近將監忠方右一、年略 光則中略 右近將曹近方右二、年略 左近府生季貞左三、年略 行季左四年 友光左五、年略 光時左六、年略

〔古今著聞集六管絃歌舞〕光則伯七旬に及べり、哀憐有けるにや、つゐに散手を奏する時、一階を給てけり、むかしはかく藝によりて、賞のさた有けり、近比より其善惡のさた迄もなく、たゞ一者に

名人

〔二〕中歷一十三樂人 清上大月、笛 尿磨華樂 富門村上帝師富門、雅信、師與、富真、富門、富

秀朝成、師、富 有近少、幅、笛 行見有秋、行見 公元有秋、子、室 利茂室 時延經、房、師、室 秀高濟、政、師、室

橫笛 明通橫、笛 正近丁、子、高 公賴壬、午、高

舞人 鳴繼加、運、部 大田磨加、運、部 子高 吉村多 吉連 信正 躬高 利量 正方 光

高伯 清國 成道 光重光、高 政資正、方 節資正、方 則高光、高

〔古今著聞集六管絃歌舞〕後三條院は管絃をば御沙汰なかりけり、去ながら中御門大納言宗後の等をきこしめして、此卿が等は只物にあらず、道におゐてうへなき物也と、御顔色も變じまし、

て御威有けり、白河院も此人の等をきこしめしては、御落涙有て、かんせさせ給けり、

○按ズルニ、名人ノ事ハ、唐樂樂曲篇高麗樂樂曲篇其他諸篇ニ散見セルヲ以テ、省略ニ從ヘリ、

蒙勸賞

〔教訓抄七〕一蒙勸賞事

舞付テ召時ハ、其舞之體ニヨルナリ、宣下上卿起座ヲ末ノ座ニテ被仰之、舞人居テ奉宣下、一階也、有、召、仰也、

事、承後立退二拜、入綾アル舞ニハ、蒙勸賞拜後チ一曲舞、

勸賞被召舞非、舞、曲、シ、テ、蒙、勸、賞、者、長、者、殿、下、御、參、宮、馬、場、院、舞、師、賞、左、一、物、一、人、蒙、之、 万歳樂 賀殿 太平樂 秦王 打球樂 青海

高舉則是

右若年且先祖勤勞有之、或家柄之者候間、自今可出精之旨申渡叱、別段自四辻家可教戒事

光重宿禰

年來不望及策不出精之至二候雖然七十有餘之間以御憐愍御咎無之叱之事

忠之朝臣 廣秋朝臣 俊一

一ヶ度限  
昌孝宿禰  
二ヶ度限  
葛能朝臣

右年來不望及策不出精之至三候節會舞御覽已下總而參勤被止之急度叱之事

但於俊一者漸四十歲候間、被止受領候事

久隆朝臣 近林宿禰 忠林朝臣

右爲中藝之後，不望上藝懈怠，是則不出精也。依之節會舞御覽已下，總而參勤被止之叱之事。

忠勇 忠告 近滿 近盈

右甚不出精之間，節會舞御覽已下，總而參勤被止之，被止官叱之事。

但於忠告近滿者兩官共二被止之事

右兵衛大尉兼土佐守俊一

被止土佐守候事

右近衛將監忠勇 右近衛將曹兼肥後守忠告

右近衛將曹兼阿波守近滿  
右近衛將曹近盈

右被止官事

一者

【歌唄品目】  
 一者又所ノ勾ナリ、○中略、即  
 假一者御教覽ヲ抑シ、承元、近  
 院ノ一者、院內裏ニテ参り、舞

者ヲシ、  
近、  
房、  
假、  
訓、  
一、  
沙、  
高、  
者、  
ニ、  
テ、  
樂、  
樂、  
ノ、  
拍、  
録、  
子、  
ノ、  
貞、  
手、  
永、  
二、  
サ、  
年、  
タ、  
ノ、  
リ、  
朝、  
ケ、  
レ、  
ニ、  
バ、  
ハ、  
一、  
拍、  
者、  
子、  
ノ、  
光、  
眞、  
近、  
房、  
氣、  
ト、  
ニ、  
異、  
ヨ、  
リ、  
テ、  
ツ、  
キ、  
タ、  
セ、  
リ、  
ザ、  
ケ、  
リ、  
ケ、  
リ、  
○、  
レ、  
下、  
バ、  
二、  
略、

平調 廣就亭

萬歲樂文均 近陳久談 甘州李賢 近陳光亭 夜半樂好古 林謨好文 近陳季光

鷄德季臨 出席如前會 廿九日丁酉三方及第 忠壽亭 雙調○樂曲、人名 十月十四日庚戌

三方及第予頭 黃鐘調好古亭 十六日壬子三方及第 季誕亭出席 盤涉調 十八日

甲寅三方及第出席 誓約狀持參 札持參 太食調 季資亭 十九日乙卯開札 好古亭○中

次祝酒飯等如例次開披

光亭上十一枚 近陳上十一枚

天王寺方 文靜中十五枚

京部方 季光上九枚 忠克上十一枚 久康中九枚

時鄰中十枚

葛忠中七枚 昌好上五枚 久康上四枚

如此相完畢入札之輩近濟近俊則賢葛房好學葛高真節行業季誕廣治廣就廣名文均廣賢昌好俊

應忠以忠愛景典季資胖秋忠壽節文季光

〔伯近德日記〕文化五年十二月

一樂所之輩每度被仰出候通一統藝術相勵候者勿論之事二候得共自今彌可有出精事

一於四辻家每月定會日有試候其上工拙可有言上事

一上藝之者同聞試可判斷候但誠難堪所勞或疎其術難成就暨樂道之故實等之儀專可相學候事

一及第不相望之輩有之由相聞候職分不相應候自今不相望輩者可省十七人列候事

一藝術雖為相達彌無懈怠可有出精候事

一位階事不論工拙以中置年限雖昇進候自今於四辻家撰其藝可有進止候事



曲稽古其聞不可然尤前々者六調子樂奏近年太食調略之事如何如前々六調子可有之事

昌但 昌業 近兄 葛雅 忠暉

當年及第相望且入札人數之内ニ候處互申合致會合或自分之入札見セ合頼候子細も候趣並先達上藝昇進之輩致入札候内江も以手筋頼込候趣ニ相聞記請文ニ相背其所意後々之差支ニ相成候條依之此度早速之輩藝料以後之會壹ケ度昇進之輩配當相濟其次可有配當勿論可停入札事

好文 季城

右五人トハ趣意相變入札人數ニハ無之處前件同様ニ自分札之儀狠處々江頼込開札前ニ入札之様子も粗存候體ニ相聞起請文ハ不仕候共其儘ハ及第相望候得者可有格語候處甚不愼之至其儘ニ指置而者後々坏も右體之儀可有之及第之制度難相立依之右五人可爲同様事

季邦

自分上藝昇進之身として當年入札之輩之内江罷越自分之入札狠ニ相見セ同意之者ニハ種々申合不法之事相聞先年及第之時も不審之子細相聞此度別而起請文之表相背キ候儀此儘ニ相成候而者後々之制法難相立依之永可停入札事

〔樂所日記〕安政六年七月三日辛未及第初會

登越調

眞節亭

嘉祥樂好古近陳久晴

鳥破好文近陳久康

颯踏忠以助忠愛光時鄰

陵王廣就近陳真忠

武德樂好賢一吹

近濟季凝忠惟近俊葛高廣實胖秋忠壽俊鷹近直眞節行業節文右出席之事

中飯仕出之事

五日癸酉及第出席

於當三月爲中旬、例月可爲十日、前後六ヶ月之内、京住兩在共十日、前後定式之差支、社寺之務等有無取調之事、

剋限午剋無遲々、參集以自筆著到相記事

三方會出仕人數十五歲以上凡八十五人三ツ割

一番

京  
南都  
方九  
人

二番

京  
南都  
方九  
人

三番

京  
南都  
方九  
人

天

王  
寺  
方九  
人

天

王  
寺  
方九  
人

樂曲七曲、凡三十人未滿之人數殘吹打物等各一役、相當中ニ者重役有之候、會月爲何日定、但以前

伺定、除極暑

三月 四月 五月 八月 九月 十月

極老之輩、并難堪所作之輩、爲聽聞出席十五歲未滿、出席相望者可願出候事、

每歲度數取調之事、隨意不參之族罪科之事、所勞永理之輩者兼言上、臨期不參有之候者、補闕出仕

無之方、却而出精之基、可相成哉、相窺候事、

右之通、三方老分被招公續朝臣御直ニ被達候事、在京一統承伏之旨、老分より四辻殿へ被申上候

由、治定之事、

〔狛近德日記〕文政二年十二月廿三日亥

一去ル十八日及第之義ニ付、被申渡候書付左ニ記、

一及第之儀、從古來嚴重仕來候條、近來種々不宜風說有之候、就中當年別而背制法、種々不宜事共

有之、以來制法之通嚴重可相守、可爲肝要事、

一以後及第入札之料紙相渡候節、實名書加直ニ書記可指出、力開札之節、於當家被相催、前大納言殿

可被致一覽事、

及第相望候者、其會前打寄、其調曲而已令稽古、御用會等も不參之族多分有之、其會前數月連續同

北氏以筆篲爲業、名乘行、家紋栢圓、右方樂人  
四氏一姓

已上奈良左右樂人十氏三姓

三宅氏不詳、筆篲自安倍氏傳之、見于系圖也、上祖及家紋未詳之、

玉手氏以龍笛爲業、舊記京都樂工、一本興福寺樂工云々、上祖武內宿禰男葛木曾頭日古命之後也、  
名乘字守及清也、但清字惣領下用、庶子守之、今斷絕

課試

〔歌儀雜識〕伶家課試

當時伶家ニ及第ト稱シテ、五年ゴトニ其優劣ヲ定ムルコトハ、寛文中ヨリ以往ノ定メナルトイヘリ、其法モ唐ノ制ニヨレルニヤ、唐六典ニ曰、凡習樂立師以教、每歲考其師之課業爲上中下之等、申禮部、十年大按之、若未成則又五年而按之、量其優劣而黜陟焉、トミヘタルト相同ジ、

〔樂所日記〕弘化二年三月朔日壬戌

文化五年十二月廿六日、被仰出候三方御用會之事、久々中絶之段、甚以恐入候、從先達被爲在御内調、重々恐入存候、右ニ付不相續之次第も可有之、被爲在御賢察、種々御厚配、何分以厚叙、庶被仰出候儀、永廢絶も如何、一箇年六會被定、永續有之様、更被仰出候得者、精々加指揮出精之様、申示於四辻家も、不怠之様相催御儀、御請申上度存候、猶此上宜敷御勘考之程事、願候、何卒以後無懈怠修行、每會如以前言上、御當職御届等之事、再興相窺度存候事、

二月

公積

公說

三方會久々及中絶候處、以伺書之趣、更被仰出候、先年度會日工拙言上被仰出候得共、於會度思召被爲在候間、不及言上、其日樂調和上中下可有言上候、  
自今以後急度中絶無之様、會日嚴重ニ可商量事、

東儀氏以簞篴及右舞爲業此中有左舞人、名乘兼家紋焉。

岡氏以龍笛及左舞爲業、名乘昌家紋、薺葉但以大葉如風車。

安倍姓東儀氏、抑安倍姓者本京都樂工、而余○安倍家姓乃是也、而今彼方有此姓者、余父祖安倍季

房有濁穢之事、不能勤神樂、屢及于不參、故文祿之比命于天王寺樂工東儀六郎泰兼、行被加于神樂

之簞篴、自是而其流則以安倍爲姓、名乘用季字也、家紋本東儀氏紋用焉。

已上天王寺樂人四氏二姓也。

### 第三 奈良樂人

狛姓宿禰別爲五氏、左舞人管業各異、上祖高麗國主夫連王之後也。

東氏以鳳笙爲業、名乘友家紋三引龍。

上氏以龍笛爲業、名乘近家紋、蓑荷丸。

奧氏家業井、名乘字家紋同上氏。

辻氏以鳳笙爲業、名乘近家紋引達。

窪氏或久保以簞篴爲業此氏又別爲兩流家業同爲、名乘光家紋栢丸、亦一流名乘近家紋木瓜。

藤原姓臣朝臣芝氏以龍笛及舞爲業、上祖天兒屋根命裔鎌足始賜藤原姓、名乘葛但總領上用、家紋○家。

私曰本狛姓乎、狛姓系圖中改姓有號藤原者承久比有在光、今世十一月每祭禮爲關白代有出於

樂處中者、初當關白被勤役之、及後世讓樂處、因賜藤原姓乎、否右左方樂人。

大神姓宿禰是京都太神之同流也、此中亦別爲四氏、其以右方舞樂爲業、就中中氏古來鳳笙之家也。

中氏以鳳笙爲業、名乘行、家紋篠圓水室神主。

西京氏以龍笛爲業、名乘秀、家紋鳩酸草。

井上氏、名乘口家業、家紋同于西京氏。



〔樂家錄樂人姓氏并家紋〕今世勤仕之樂人京奈良天王寺三處之輩也各家紋記之以爲篇矣古老曰至于舞樂裝束及幕等附爪紋者總樂人之紋也云々

一 京都樂人

豐原姓臣朝豐氏以鳳笙爲業上祖天武天皇第五皇子大津王也名乘通字秋但下用之家紋一縷藤圖但順祖本有三葉

大神姓宿禰山井氏以龍笛及舞爲業此姓亦在南部上祖素盞鳴命六世孫大國主之後也名乘景家紋右重鷹羽

安倍姓臣朝亦用之氏以篳篥爲業上祖孝昭天皇之末難波宿禰之後也和安倍名乘季家紋有二也一

楓一桃也蓋桃者實一葉二枝二也

多姓臣朝亦用之氏以神樂歌及舞爲業今也或又以三管中爲業上祖神武天皇皇子神八井耳命之後

也名乘嫡流忠中流人其次好此世無家紋嫡流鳩鳩草中流劔鳩劔草又割櫻古四姓至于

中原姓或末以篳篥爲業亦以神樂歌爲上祖舊記曰安寧天皇皇子磯城津彥命之後也云々名乘光

氏二字也家紋未考之

戶部姓氏以龍笛爲業名乘正成清也上祖及家紋未考之右二姓今斷絕

已上京都樂人總六姓也

二 天王寺樂人

太秦姓宿禰別爲四氏家業各異也上祖太秦公宿禰同祖秦始皇五世孫融通王之後也融通王一日弓月王仲哀八年

來朝云々見于六國史

園氏以鳳笙及左舞爲業名乘廣家紋三頭也

林氏以鳳笙及右舞爲業名乘廣家紋下藤

勤仕官位初而賜之。

稱號 蘭<sup>ソノ</sup> 林<sup>ハヤシ</sup> 岡<sup>ツカ</sup> 東儀<sup>トリギ</sup>

一北京譜代之家斷絶ニ付、依別勅新ニ名跡御取立也、

一古者豐原氏二流ヲ以、北京鳳笙之正統とす、然に天正元年八月、朝倉戰場にて討死家斷絶ス、當時豐原家之事ハ、竹内御門主之家司相續ス、其謂ハ豐原統<sup>トウ</sup>秋所撰之體源抄所持獻禁中、仍賜豐原之姓、筑後守正秋是也、笙相傳之儀ハ、南京伶人辻故伯者守伯近弘、同近元依勅命門弟として相傳ス、當時豐筑後守策秋家也、今一流ハ天王寺之伶人蘭故相摸守弟豐隱岐守相續ス、笙におゐては天王寺の流儀、當時豐越中守通秋家也、

一古者太神氏二流を以、北京龍笛之正統とす、然るに天正元年討死豐原家同前及斷絶候に付、新に名跡御取立、一流は山井故安藝守景治依勅命門弟として、南京の伶人上故越後守伯近直笛相傳す、當時紅葉山樂人山井主膳正景豐家は也、一流は天王寺之伶人岡故志摩守太秦公入子山井故近江守景福新に相續す、笛に於而は天王寺之流儀、當時山井近江守景村家也、

一古者安倍氏を以、北京筆簫之正統とす、然るに右同前斷絶、備前守多忠季末子新御取立、改安倍之稱號、安倍故飛驒守秀房是也、依勅命、南京之伶人久保故丹後守伯光成筆簫相傳す、當時安倍壹岐守季福家也、

一北京右方之舞人多氏舞相傳之儀は、天王寺舞人林故石見守太秦廣康同廣有、依勅命門弟として當時相承す、

右者當時三方樂人來歴也

一南京之伶人伯氏は、古來左之舞を業とす、一條院御宇、伯光高左方一者に補せられ、公事舞樂之事奉行す、今以無相違、當時は管打物に至まで專勤之、

世説

〔紳書十〕一樂人左方右方の事、辻伯耆守が云、本朝の樂は推古の時よりはしまれり、右は南都にわかれて、左方は南京に住し、右方は北京に住したり、左方は狛氏にて、右方は多氏なり、その外にも猶家數有き、如斯にて兩氏相わかれて、いろ／＼其職を掌り來れるに、京都將軍の時に至りて、尊氏卿笙を好み給ひしに、多氏の人其師たるにより、武家へ昵近して後に身を起して、一萬石計も祿を賜りて武家となれり、應仁の亂に及で、多氏悉く災に死したれば、こゝに於て右方の樂は斷たり、後陽成帝の御時に、右方の樂斷へたるを傷み思しめして、其家を起さしめんと有し故に、多氏の孫少々世に出たれ共、猶其職掌くはしからざる故に、天王寺の樂人を召て、右方に加へ入られたり、今の右方は多くは天王寺の樂人たり、故に樂の事に至て、左方とは異なる事有也、左方は古より今に至て斷絶なき故に、其傳を失ふ事なし、又左方には舞頭とて、代々辻伯耆守家のみ也、是を承りて右方は東儀林兩家也、其人を撰て舞頭とする故に、とし老かたむけ共、猶其職を辭する人なし、左方は年老ぬれば、舞頭は其子甥等を撰て奉らしめて、老たるは其他の職を勤ぬる事故、舞人皆とし若き輩也、右方は傳中絶して、天王寺より繼ぬれば、多くは高麗樂にて笙などの入ぬるは稀といふ、

〔狛氏新録〕一禁裏三方樂人之事

伶樂之家者、自天子攝官以下、以貴道之相傳譜代相承、從上古南北二京之樂人、與申候而、南京狛氏左舞人、北京多氏右舞人、管打物等ハ、豐原氏、太神氏、安倍氏之家譜代勤之、然處應仁以來京都戰場ニ至而北京樂家後裔斷絶ス、或ハ戰場ニ而討死、又ハ遁世職ヲ去リ、北京之伶人悉斷絶畢、一北京之伶人斷絶ニ付、南京譜代之伶人依召在洛益勤之、

稱號 辻 上 芝 東 奧 窪 久保

一多氏右之舞傳來相絶ニ付、後陽成院御宇新ニ天王寺之樂人ヲ以、右方之樂人被仰付、百年以來

〔儀式〕踐祚大嘗祭儀

太政官牒其等諸寺兩所共此

應借送樂人并樂器事具註二色日

右大嘗會其所請如件寺宜承知依件借送故牒

年月日

史位姓名牒

辨位姓

〔樂所補任〕天永三年 中臣爲行三月日任中略與福寺樂人 清原爲則同日任中略樂師寺樂人

永久四年 狛行貞八月日任中略與福寺樂人 小部清延八月日任中略與福寺樂人

保安元年 佐伯助行十二月日任中略與福寺樂人

同二年 紀季方同日任六月日中略與福寺樂人

〔台記〕久安三年九月十二日癸酉幸天王寺御車與轉供後渡御御所予 ○藤原退下休廬飲食御歸參

依召候〔中略〕語曰奏舞日最初令奏無面形之舞見舞人容貌之後令奏有面形之舞是古說也又仰曰

此寺舞人之中有容貌壯麗者今日有其人乎法皇爲人好美故有此言 對曰所候也名公方

〔謠曲〕富士太鼓

ワキ 詞 是は萩原院に仕へ奉る臣下也扱も内裏に七日の管絃の御座候により天王寺よりあさ

まと申樂人ははならびなきたいこの上手にて候を召上せられ太鼓の役を仕候處に又住吉よ

り富士と申樂人は是も劣らぬ太鼓の上手にて候が管絃の役を望み罷上りて候○下略

〔嚴島道芝記〕社家供僧内侍并諸役人神人之名

野坂將監大宮御守 佐伯某○中略

右十人舞方兼之

田木工樂頭 某○中略

右八人樂方兼之一

樂方者大神氏也大



同 同斷

當時相勤候紅葉山樂人

南京樂人

同左兵衛尉太秦昌喜

紅葉山樂人闕之節、南京之樂人病身之輩多御斷申、下向不仕候、依之當時右兵衛尉一人相勤候、

北京樂人

中右兵衛尉太神晴起

同

山井主膳正太神景豐

天王寺樂人

多右近將曹多忠明

同

東儀筑後守太秦兼行

同

東儀淡路守安倍季永

同

園木工允太秦廣則

同

東儀式部丞安倍季忠

同

岡大膳亮太秦昌英

都合九人

〔明和京羽二重〕在江戸樂人

從四位下多佐渡守多忠篤 岡駿河守太秦昌充 東儀淡路守安倍季晴 東儀筑後介太秦兼連

正五位下東儀右兵衛少尉太秦兼備 從五位上東儀右將監太秦兼倫 從五位下園左兵衛大

志太秦廣周 東儀左兵衛少志安倍季充 岡伊勢介太秦昌通 東儀右兵衛大尉太秦兼安 正

六位下多修理大屬多忠貫 中左將曹太神晴數 山井左將曹太神景諱

〔儀式〕踐祚大嘗祭儀

社寺樂人  
次進請左右近衛府樂人并雅樂寮歌女等奏、次牒送借諸寺樂人樂器之狀、

南京樂人

即取立

天和中、朝鮮人來朝之節、御返翰執筆被仰付、其後御日記役被召出、辻春達と改名仕候、跡役嫡子上采女正高規被仰付候、

辻故伯書守近元三男

同

上采女正事

上左兵衛尉高規

寶永元年申年、桐之間御番被召出後、御次番御番替被仰出候、樂人之跡斷絶ス、

同

上將監伯近方

寶永元年申年、桐之間御番被召出候、樂人之跡斷絶ス、

天王寺樂人

東儀内匠允太秦兼種

紅葉山樂人、當東儀筑後守嫡子之所、井上主税助斷絶ニ付、父子御切米拜領之儀重々之事ニ候得共、先當分被召出候旨ニ而御切米拜領ス、然處寶永元年申年、桐之間御番被召出後、御次番御番替被仰付候、

此後

南京樂人

御取立

天王寺樂人

中右兵衛尉太神晴起

紅葉山樂人、當東儀淡路守養子ニ候所、父子御切米拜領之儀重々ニ候得共、先當分被召出候旨

ニ而御切米拜領ス、

同

東儀主税助太秦兼行

寶永四年、桐之間御番被召出後、御次番御番替被仰付候、樂人之跡斷絶、

此後

同

從京都被召下候

様家宣○德川音樂を好ませ給ふ故、正徳の冬、朝鮮人來聘の節、京都より樂人を召して、御城に奏樂を起舞す。辻伯耆守近代家業に達したりと御褒稱あり、今佛家法會の音樂等はなり。

〔寛政四年武鑑〕御樂人衆

下谷御八現米八十石十五人、下谷御八現米八十石十五人、東儀大隅守現米八十石十五人、山井左衛門志現米七十石十人、岡近江守現米七十石十人、東儀修理進現米七十石十人、中主稅允現米五十石十人、岡主膳正現米五十石十人、多縫殿助現米五十石十人、東儀越前守現米五十石十人、

〔伯氏新錄〕一紅葉山樂人從京都初而被召出候事

寛永十九年三月十八日、依大猷院殿○德川仰、自禁裡御暇被下、江府二之丸樂人下向仕候輩、

南京樂人

久保丹後守伯光成

跡養子久保左京進儀丹後守死去之後、母出入有之、家斷絶ス、

同

辻故伯耆守近元弟、上越中守伯近康

近康子、上織部正高重跡相續仕候處、十五年以前寅之年、火災類焼之後、屋敷願之儀ニ付御追放、其後申之年御追放計御赦免、此以後致病死候、實子當上織部高直儀、當時日光御門主罷在候、

同

井上和泉守太神秀久

養子井上主稅助基久儀、十六年以前及口論討果、家斷絶、

北京樂人

山井安藝守太神景明

同

多佐渡守多忠明

天王寺樂人

東儀筑後守太秦兼長

同

東儀淡路守安倍季治

此以後

少尉豐原定秋 豊右兵衛少尉豐原時習 芝大隅守藤原寛葛 辻右京亮伯則安 岡伊豫介太

秦昌晴 林三河介太秦廣音○以下五略

〔光臺一覽〕三四辻殿は伶人樂士の總頭にて有也、樂人と申も、南郡方、天王寺方、京方とて三流有之候、南郡方は左方とて上、天王寺方は右方とて中、京方は伶人として家卑く候、

〔諸家家業記〕等 四辻○中略

四辻家其先祖後土御門院之御師範に被參候以來、殊更當道を家業之様に被致候、元來は洞院家より御師範に被參候得共、彼家斷絶に付、其以來四辻家代々御師範に被相成候事に候、近代にては音樂之事、都て四辻家之預に相成候得共、元來和琴は樂人辻某より、等は同東儀某より、四辻家へ傳へ候由、然る所當時にては却て四辻家之家業と被致、彼家より樂人共へも相傳有之事に相成候、南郡、天王寺、京方三方之樂人共、都て四辻家之支配にて、毎月日を定め宅に於て三方之樂人被集稽古有之、其藝之甲乙をも被定候事に候、件家々之外にも、歴代に相勵候方も有之候得共、家業と申は、前之家々に限候由、

幕府樂人

〔明良帶錄〕世職樂人衆

是は寺社奉行支配也、○中略

當時幕下の樂人東儀筑後介は、徐福が後にして東儀は秦の姓也、○中略

幕府頼朝卿樂官多右近將監を招き鎌倉に於て其藝を試給ふ、今の多縫殿助の先祖なり、後醍醐天皇の御宇、音樂尤盛にして公武是を弄せり、住吉の神官津守國度は、音律及和歌の藝を以其名を發せり、神事に又音樂を用ゆ、帝都にて四辻五辻、滋野井、綾小路、花園、持明院家にて、是旨を傳へて堂上に弄せり、地下樂人散輩、左方右方分別して、此藝に達したり、奈良、天王寺の伶官に古實を傳へたるもの多し、近代辻伯耆守此術に達したり、大猷院○鎌川以來京都の樂官を召して、紅葉山神君廟中祭禮の音樂に傳へ、四九月音樂を奏するを以恒例とす、日光山にても如斯、文昭院



〔毛詩註疏〕國風簡兮刺不用賢也。衛之賢者仕於伶官，皆可以承事王者也。箋：伶官，樂官也。伶氏世掌樂官而善焉，故後世多號樂官爲伶官。〔中略〕呂氏春秋及律歷志云：黃帝使伶倫氏自大夏之西，崑崙之關，於伶州鳩是。伶氏世掌樂官。雅言補記。

〔中殿御會部類記〕正中三年三月六日，禁中左近櫻盛也，不期而有花宴。〔中略〕朗詠詩也。御了有召伶倫堂上昇東階著東簀子。

〔歌傷品目〕典樂伶倫。伶人〔中略〕地下ノ召人ノミナヲ云、權神ノ所作人ヲ伶人トイヘリ、貞治六年中門督、京畿小路三位、拾遺、公全朝臣、宗泰朝臣、兩入實子ニ候スト、上ノ伶人ハ即權神家ナリ

新註樂人

〔令義解〕雅樂寮

歌師四人、掌教歌人歌女、二人、掌隨時取有聲音堪供奉者、教之。歌人卅人、歌女一百人、備師四人、掌教

雜舞、傷生百人、掌習雜舞、笛師二人、〔中略〕笛生六人、掌習雜笛、笛工八人、〔中略〕唐國以下諸樂者吹笛之

人、各在其、唐樂師十二人、掌教樂生、高麗百濟新羅樂師准之、樂生六十人、掌習樂餘樂生准此、高麗樂

師四人、樂生廿人、百濟樂師四人、樂生廿人、新羅樂師四人、樂生廿人、伎樂〔中略〕師一人、掌教伎樂生、其

生以樂戶爲之、腰鼓生准此、腰鼓師二人、掌教腰鼓生、

〔明和京羽二重〕樂人

正四位下、關土佐守太秦廣泰、豐伊賀守豐原倫秋、東儀播磨守太秦兼里、東儀因幡守太秦兼

村、東儀伊勢守太秦兼玄、多和泉守多忠宣、從四位上、比下野守狛則長、林紀伊守太秦廣基

豐備後守豐原敬秋、多下總介多久連、豐隱岐守豐原直秋、芝石見守藤原葛故、東儀駿河

守太秦兼陰、東長門守狛友永、多上總守多忠致、東儀佐渡守太秦康賢、多攝津守多久長

山井內匠權助太神景貫、奥丹後守狛好葛、多上野介多忠豐、多日向守多忠幸、從四位下、岡

右兵衛大尉太秦昌章、岡安藝介太秦昌盛、岡但馬守太秦昌家、多雅樂助多忠充、豐左兵衛

# 古事類苑

## 樂舞部十

### 樂人

樂人ハ歌舞音樂ヲ以テ職トスルモノナリ、大寶制令ノ時、雅樂寮ヲ置キテ、男女樂人ノ事ヲ管セシム。事ハ官位部ニ詳ナリ中世以降、樂人ニハ豐原多狛、大神安倍、中原等ノ諸家アリテ、之ヲ世職トス。此等ノ樂人中、京都ニ在リテ、朝廷ニ奉仕スルモノト、奈良及ビ天王寺ニ住シテ、其寺社ニ專屬スルモノトアリ、此三所ヲ總稱シテ三方樂人ト云フ。徳川幕府ノ時、三方樂人ノ内ヲ招致シテ幕府樂人トシ、寺社奉行支配トス。

近世三方ノ樂人ノ子弟十五歲以上ニシテ、課試ヲ望ム者ノ爲ニ、時ヲ期シテ之ヲ行ヒ、先輩者入札ヲ爲シテ、其優劣ヲ定ム、其選ニ當レル者ヲ稱シテ三方及第ト云フ。

名稱

〔下學集〕上會、下伶人、中樂人

〔書言字考〕節用集、四樂人、倫樂官、伶人樂師、伶人並同。

〔源氏物語〕六末摘花、朱雀院の行幸、けふなんがく人、まひ人、さだめらるべきよし、うけたまはりしを、おとゝにもつたへ申さんとてなん、まかで侍る。

〔日本書紀〕三十持統元年正月丙寅朔、皇太子曄公卿百寮人等適殯宮。武而慟哭焉。中樂官奏樂、

〔三代實錄〕十一貞觀七年十月廿六日甲戌、雅樂權大允外從五位下和邇宿禰大田麻呂卒、大田麻呂

者右京人也、吹笛出身、備於伶官。

鞀鼓鉦鼓也、

〔教訓抄七〕舞番様

別番様

略中

師子

無答、御願、供養舞之、

狛犬相撲、別亂舞、

〔元徳二年三月日吉社並叡山行幸記〕講堂へ入せ給へば、〇後左右の樂屋亂聲して、腰輿の御まへにて一曲を奏す、御輿は正面の間へよせ奉る。〇中雲客御迎にまいりて、蓋とり引導申、舞臺のきはにてこしよりおり給ひ、あゆみつれて高座にのぼり給ふ、儀式なべてならず、伽陵頻、胡蝶の後、師子の亂聲ならしければ、狛犬は地にふし、師子は舞臺にのぼりて、まづ四維を禮し、本尊ならびに證誠を拜し奉る、太鼓三拍子になりければ、つなとりつなを師子にうちかけ、はへはらひとものに舞臺の左右のすみにさぶらふ、すべて三段の曲をはりければ、師子行繼左衛門志になされ、笛吹戸部政躬從五位上に叙せらる、太鼓住吉神主津守國夏は、當座の勸賞を辭して、後日に申べきよし申、南谷光輪房に宿し侍けるが、客殿の柱にかき付侍けり。〇歌この曲は聖徳太子の御時、異朝よりわたされて、四天王寺供養に、はじめてまはせられけるのち、今日に至るまで七ケ度なれば、常にもちひらるゝ舞にあらず、然るを家につたへて、朝家の御うつは物となる、誠に優美におぼえ侍に、まきしまのみちにさへ、すでに譜代の態となれる、やさしくこそ侍れ、

建保二年、七條觀喜壽院供養小部正氏吹之。道ヲ蒙勳賞任左兵衛少尉了年□以住吉ノ神主長盛之相傳吹之大鼓權神主津打之也、長盛孫子守經國也、東帶

其作法先祖ニ相違、法用畢ニ舞之、從入調以□也。先召左樂行事左中將、可舞師子之由、奉勅作ス

樂屋、于時正氏自樂屋進ミ出テ、庭中へ著甲袍、中半許タミ行立テ、甲ヲヌギテ腰ニ付テ、エボシ

ヲ引立テ吹古樂亂聲、其時ニ左師子ヲキラ登ル、舞臺ノ上四ノ角ヲ拜シテ、正面ヲ立テ拜二度

之後止亂聲、古ハ次樂吹テ序、急體ニ、師子舞畢テ後ニ又著甲、樂屋還入了。度々例皆以相違、傾非、無不審也

私所ニテ吹師子、例鴨一切經會清延吹、樂屋之内ニ經頭鳥一疋引之、天王寺住吉社ニ有師子笛吹、ソレハコトノ

ホカノ相違ノ物也。亂聲ニ別物樂、吹樣モ大鼓打樣モ替リタリ、中々本師子リ面白侍也

〔白氏長慶集四〕西涼伎、刺封壇之臣也。

西涼伎、假面胡人假獅子、刻木爲頭絲作尾、金鍍眼睛銀帖齒、奮迅毛衣、握雙耳、如從流沙來、萬里、紫

髯、深目、兩胡兒、鼓舞跳梁、前致辭、應似涼州未陷日、安西都護進來時、須臾云得新消息、安西路絕歸

不得、泣向獅子涕雙垂、涼州陷沒、知不知、獅子回頭向西望、哀吼一聲、觀者悲、貞元邊將愛此曲、醉坐

笑、看看不足、享賓、犒士、宴三軍、獅子胡兒長在目、有一征夫年七十、見弄涼州、低面泣、泣罷、斂手、白將

軍、主憂臣辱、昔所聞、自從天寶兵戈起、犬戎日夜吞西鄙、涼州陷來四十年、河隴侵將七千里、平時安

西萬里、疆今日邊防在、鳳翔略、綠邊空屯十萬卒、飽食溫衣閑過日、遺民腸斷在涼州、將卒相看無

意收、天子每思常痛惜、後軍欲說合慙羞、奈何仍看西涼伎、取笑資歎無所愧、縱無智力未能收、忍取

西涼弄爲戲、

〔樂家錄二十四〕沙陀調曲

獅子古樂

此曲延四拍子也、拍子數四與三兩說也、大鼓如拔頭自二返頭加之、而吹止之時、如亂聲擊止之、不用



〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

左舞 壹鼓舞人二人、一人首懸二鼓、常裝束袍、

〔樂家錄<sup>三十六</sup>〕雜篇

壹鼓 番舞蘇利古爲小曲、或八仙小曲、

〔古今著聞集<sup>六</sup>管絃歌舞〕宇治殿平等院を建立させ給ひて、延久元年の夏の比はじめて一切經會を

行はせ給けり、法會儀式堂の莊嚴心こと葉も及がたし、大行道樂に濫河鳥を奏しける、多政資一者にて、一鼓かけて、池の邊をめぐるゝとて、鴨のむなそりといふ秘曲をつかうまつりける、ときにとりていみじくなん侍ける、

〔樂家錄<sup>二十八</sup>樂曲調注〕雜聲

獅子志志

〔教訓抄<sup>四</sup>〕師子

有序破急云々 笛子大鼓鉦鼓許也、

此曲御願供養ニ舞、笛者小部氏爲曲、舞者師子舞役也

有詠 師子天竺 問學聖人 瑠璃大臣 來期天子 飛行自在 飲食羅刹 全身佛性 羣

未輦車 毘婆太子 高祖大臣 隨身眷屬 故我稽禮

元永元年之最勝寺供養、小部正清吹之有勸賞任左近將監、生年七十、著甲大鼓ノ前ニ立テ吹之日腹分、明也、

保延二年、鳥羽勝光明院供養、小部清延吹之無勸、從右方樂屋渡リテ、於鼓許ニ立テ吹之元永、如水、

建久六年、東大寺供養、小部清景吹之無勸、

以有康相傳吹之、著テ甲ヲ大鼓ノ面立テ吹之入時ニ付テ入ル、

大鼓筑前守有康大鼓面打云、尾張包勸打之、有康拍子教許云々、

保延之比新院羽。召左光則光時右忠方近方此曲秘事御尋ノ侍シヲ左右四人之輩申狀聊モ無相違間頗有御感云々仁平御賀樂所始ノ參音聲ニハ左一ハ光時一人懸之口傳云五手打ヲハノ成也。

古譜說云光仁天皇御宇寶龜九年十二月廿一日一鼓儻行法此發行音聲澀河鳥准此他可知之右撥二遍左手右撥マノ右手打伏右足前屈上拍子見右撥二遍左手右手打伏左足屈上見四拍子撥二ノ左手一右手打伏右手打仰指西右足前屈右撥二ノ左手一ノ左手打伏右手打仰指東前足子舉拍如是從上初行登二鼓舞法又同

【樂家錄二十四節】雜篇

壹鼓 番舞 八仙或蘇利古

舞樂之次第先奏調子次當曲此間舞人出也而舞人二人出奏之一人懸壹鼓入時重吹

抑壹鼓之聲樂不定凡用延八拍子曲奏之其用之曲舊例學左舞人立定于舞臺後拍子之盡以後自四文管聲

急速奏之則加之揚拍子也破如鳥此曲舞人擊鼓爲文故於樂屋羯鼓不用之擊于一鼓也

舞人入時同曲重吹籠第二拍子加之壹鼓聲樂凡四曲澀河鳥度雲樂頭樂春庭樂

【狛氏新錄】一一鼓之事

一鼓と申名目之舞人ハ二人立に舞申候一鼓二鼓を頭にかけて右に撥を持襲裝束或蠻繪裝束冠かざしにて四季により樂は其時に應じ奏之樂始りて出舞臺に登り太鼓拍子に踏合舞申候近代は四季ともに大方裏頭樂を吹舞申候尤裏頭樂と申舞は別に有之一鼓と申名目の舞ばかりにて樂は無之候故樂は何にても用候事にて候

【教訓抄七】舞番樣

一別番樣 一鼓舞人懸一鼓一鼓一打舞 蘇利古



一曲舞御覽等邂逅有之時ハ振鈴之後左右舞之頭二人相並ニ舞臺ニ昇舞之一拜シテ入次ニ舞樂奏之、

一鳥向樂ニハ舞無之雖然一曲と申名目之舞ハ舞ばかりにて樂ハ無之候故鳥向樂を以て一曲を奏候事ニ候是も時により何樂にても用候事、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 一曲但舞人同予振鈴○舞人二人也常裝束袍左方舞人懸雞裏左持鼓右持桴右方舞人懸壹

鼓持桴

〔樂家錄三十六〕雜篇

一曲 出左右共舞故無番舞、

〔教言卿記〕應永十三年六月十一日己巳唐人參北山殿云々如先規俗人等一曲云々散狀追可尋記、  
鶏樓ハ右舞人多忠與云々一鼓ハ同忠信云々俄之間不及相觸南都、

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法〔雜聲

壹鼓以津古

〔教訓抄七〕一一鼓事

左ノ一者懸一鼓事ハ御賀樂所始參音聲左一者一懸之長者殿下ノ御春日詣ノ次日馬場院令付給一

曲フキアケ

與福寺ノ別當并僧正法務ノ慶申宿院 一曲

春日大明神ノ御京上還御ニ東御門 一曲

與福寺諸堂ノ御佛令入給ヒ參向 一曲

樂者隨季節春春庭樂夏應天樂秋萬歲樂冬萬秋樂如此雖充四季不定也太上天皇ノ御賀ノ參音聲賀王恩內宴ノ參



〔樂家錄三十七舞〕左右舞及人數裝束

左舞 振柶一舞人 右二方人但一人也 常裝束袍柶

〔狛氏新錄〕振棒三節略

左方一人 右方一人 舞之

裝束

烏甲 袍 紅紗 半臂 下襲 表袴 忘緒 赤大口 石帶 踏掛 鉢

但袍以下色萌黃也

〔樂家錄 樂二曲十訓法〕雜聲

一曲以津叙與具

〔樂家錄三二鼓十加四節〕雜篇

一曲無番舞、左右同音奏之、

抑一曲之加法皆同于壹鼓曲故略之惟其異者以聲樂用爲向樂爲定法耳

〔狛氏新錄〕一曲之事

參向一曲と申候而諸寺勅會法事之節、導師幄ニ入ル之時、其筵道<sup>江</sup>菩薩鳥蝶舞人樂人<sup>右方二行</sup>列ヲ引、幄前筵道ニ立列ス。時に盤涉調調子吹之、吹鳥向樂を吹始、左右舞之頭一人宛二人相並、幄之前ニ進而一曲を舞て一拜ス。其時賜祿被物或太刀目録也、坊官又は諸大夫二人出渡之。舞人は不請取之、管方之中五位六位之輩、左右より二人出候而請取之、但坊官諸大夫其時之體に應じ、樂所よりも受取に出候事也。次又鳥向樂を吹始、自下臈堂前樂屋之前平立に列して其儘吹之。菩薩鳥蝶ハ舞臺之上草墊著、導師入堂之後止樂、各樂屋復座、次ニ壹越調菩薩之樂を吹始、鳥蝶菩薩供花捧之、十弟子渡畢テ退<sup>キ</sup>入。

布匣此鎮詞者 公家 神社 佛寺 諸家 並恒例臨時其砌之詞聊可相替也殊可受師說口傳也  
貊氏嫡家相傳也

二部左新樂 一度 右高麗 一度 左右同音 一度用常之

三部新樂 高麗 古樂 各一度 同音 一度花殿會等如此

四部左新樂次林邑、右高麗次古樂、各一度、次同音 一度平立爲上中振之、東大寺總供養如此、

興福寺常樂會三部亂聲新樂一度、古樂一度、高麗大頭一度、

同音二度各振梓、不似余所、

次日法華會同三部新樂二度、古樂一度、高麗二度、同音 一度各振梓、無余所、

高麗ニ大頭振事留大會ニ其振樣普通ナラズ古紀氏舞人振之、今ハ大神舞人振之、

法莊嚴院供養長承元年十月七日、法莊嚴院供養ノ日振鉞次第大納言忠教奉行

先左右各一度、同音、一次左右各一度同音 一度

承元二年正月廿七日、中宮春日行啓試樂、閑院內裏中宮權亮忠定奉行只同音 一度一節ノ振梓ナリ、

建保四年ノ冬、北上北面ノ人ノ勝負ノ事ノ風流ニ舞樂、

〔延喜式中略〕凡七月中略廿五日中略五位已上立大旗了其揖著座、然後左奏厭傷、

〔中右記〕康和四年二月十二日、巳時許參內衣中略於東對南庭御覽御賀舞共中略舞六曲左高麗樂、春盤、

鳥蘇、皇仁、先舞以前、亂聲振鉞左右中將宗輔朝臣、馬頭師隆云々、

〔樂家錄四十八〕寬永之比、踏歌節會、每歲多氏奏振鉞、其時多忠清役之、一年及深更、舞臺之上寒霜降

甚凍矣、至振鉞終曲上鉞之時、左舞人謬足蹶踞、當于時忠清亦共蹶、一同振上鉞而止之、因茲左舞人

之過無見尤者、剝堂上堂下之人稱美云、今夜振鉞左右共用異說是雖忠清臨時之所爲亦非一時之功、他年得舞妙之故也、

〔塵袋〕<sup>七</sup>梓フルヲエン舞ト云フハ正字如何、其心オボツカナシ。

厭舞トカク也、厭ノ字ヲバマジナウトヨム、蔡邕ガ傳ニハ、厭ハ伏也ト、釋セリ、サレバ邪鬼等ヲ降伏シ、災殃ヲケススガタル故ニ、イワヒテ最初ニ是ヲナス、エブノ。亂聲トテ三度ホコヲフル、ハジメノ亂聲ハ天ノ分、第二度ハ地ノ分、第三度ハ人ノ分、三才ニ配當シテホコヲフルアヒダニ、トナフル頌文アリ、ヲハリノ一句ニハ兩說アルベシ、新造ノ御堂御前ナドニテ、此事アルヲバ鎮舞トモ云フ、定案摩ト云フモ鎮スル心アル故ニ、餘ノ舞ニ先ダチテ、始ニ必ズ是ヲ舞ニノ舞ハ地神ノ形ヲ表スト云々、或管絃者ニエンブトハイカニカクゾト人ノ尋シ返事ニ、舞ヲ延ト云フ心ニテ延舞トコソカケト答ヘシハ、エシラスト云ハムガ不覺ニ、當座ノワキマヘ、コト、パヲカマヘシナメリ、キハメタル僻事也。

〔教訓抄〕振梓樣

三節亂聲謂之口傳云<sup>ニ爲之、但該亂聲時者如常也、</sup>

金婁子云、周ノ武王朝至子商邦牧野誓、武王左杖黃鉞、右採白旄、以伐帝紂、定天下ノ時、先供祭地祇也。

初節者<sup>供天神</sup>、中節者<sup>和地祇</sup>、後節者<sup>祭先靈</sup>、左右各有禮儀、奏初二後一<sup>鎮曲云、或人鎮梓云</sup>

大國大常三卿者神祇官也、若天子若諸侯、若三公、若九卿、若大夫、祭先靈之時、必奏音聲爲神分云々、

先發亂聲于時、伶人首正禮節採<sup>爲左頭</sup>鉞<sup>爲右頭</sup>

至舞臺半、鉞右頭採、直成禮、初二後一禮<sup>有三說</sup>、天長地久、政和世理、王家太平、雅音成就

又云、聖朝安穩、政和世理、國家太平、雅音成就

初二後一禮了後、合梓時鎮詞云

一天雲殊靜、四海波尤澄、十雨不破塊、五風不鳴枝、天地和合禮、此鎮頌者<sup>五返振テ後、特峙テ持上テ地特</sup>

常説ナリ、大輪造テ舞輪廻了立定テ舞人居時加三拍

出、雲友貞云、對万秋樂時者可執白濱、後散以万秋樂爲大曲、可引證云々、准大曲故、付此説加三度

拍子尤爲秘説云々

此曲東三條殿ノ朱器大響セサセ給ケルニ、加三度入綾ノ手ニ居所ヲ舞タリ、メヅラシク殊勝ニ侍ケレバ、更居突ト云ベシ、今日賀殿ニ更居突ノ手舞了、左右相對シテ可用此説、對賀殿日可舞舞手居所此説能々可令秘藏也。

〔教訓抄七〕舞番樣

喜春樂喜心樂云、片屑組、輪廻舞有入綾、如右舞、白濱萬秋樂對日准大曲、執後奏、輪廻舞、諸屑組、

〔續教訓抄舞案譜〕或人云、中白濱諸屑組後參アリ、萬秋樂ナドニアハム日、大曲ニナヅラヘテコ

レヲトルベシ、地久ノゴトクナリ、サシテ万秋樂ニカギルベカラズ、大曲ニアハム日ハトルベキナリ、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 白濱四人常裝束體源抄曰、後參、粹取、

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

喜春樂 白濱略中

秋風樂 都志 或白濱

振鈴

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法、雜聲

振棒 意幸不



〔仁智要錄十一〕高麗雙調曲〔登天樂 拍子十〕

〔教訓抄五〕高麗曲雙調〔登天樂 雖爲童舞又男舞 小曲又登殿云拍子 舞間拍子五十〕

此曲モクハシク申タルコトナシ、ウチマカセテノ舞ノ如ク也、大神氏ニ舞侍ハ面白手ドモ候也、

三五要略ニハ舞間拍子五十、舞ニシタガヒテ加拍子、

此樂ハ返吹所アリトイヘドモ、四五度三度ハ口ヘ吹返ナリ、

〔教訓抄七〕舞番様

五常樂有甲片肩履、有入綾、如右舞次第舞入、 登天樂片肩履

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 登殿樂舞人冠、綵、袴、及下襲、常異袍、盤槍和袖、不祖袖 古圖常裝束和源抄

〔拾芥抄上末〕高麗雙調 白濱

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法〔高麗曲

拍雙調 白濱、波字非牟 一名榮圓樂、

〔龍鳴抄上〕拍樂〔白濱ひん〕

東三條殿の大饗にこれをまう、賀殿にあはす、

〔仁智要錄十一〕高麗雙調曲〔白濱 拍子十六、一說拍子十五長譜 舞 舞九十九拍子 輪了向北之時加拍

子 〔教訓抄五〕高麗曲雙調〔白濱 中曲 准大曲〕

序 拍子八、破 拍子六、舞間拍子 六十五、

三五要略 拍子十六、長譜拍子十五、舞間拍子九十、輪之向

此曲ノ事タシカニ申タル物ナシ、但口傳云、不吹彌取、直ニ序ヲ吹出一說也、如常、舞彌取テ吹當曲、

萬歳樂 延喜樂 或地久

同例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日

左○中喜春樂○中 右○中地久

法勝寺御塔供養 永保三年十月一日

左萬歳樂○中 右地久

八講

鳥羽院御八講 仁平四年三月廿二日

第四日 五卷日 夕座了供舞 左賀殿○中 右地久

〔古今著聞集管六 絃歌舞〕いづれの比の事にか、大宮右大臣後家藤原殿上人の時、南殿の櫻さかりなる比、うへふしよりいまだ装束もあらためずして、御階のもとにて獨花をながめられけり、霞わたれる大内山の春のあけぼの、よにゑらす心すみければ、高欄によりかゝりて、扇を拍子に打て、櫻人の曲を數反うたはれけるに、多政方が陣直つとめて候けるが歌の聲を聞て花の本にすゝみ出で、地久の破をつかうまつりたりけり、花田狩衣袴をぞきたりける、舞はて、入ける時櫻人をあらためて、藝山をうたはれければ、政方又立歸て同急を舞ける、をはりに花の下枝を折て後おとりてふるまひたりけり、いみじくやさしかりける事也、此事いづれの日記にみえたるとはゑらねども、古人申つたへて侍り、

登天樂

〔倭名類聚抄曲四 調〕高麗樂曲 登天樂

〔拾芥抄音上 樂〕高麗雙調 登天樂

〔樂家錄二十八 樂曲調法〕高麗曲

狛雙調 登殿樂 止字傳 李羅具 一本殿作天、

〔龍鳴抄狛上 樂〕登天樂とらう

ひやうし十、こまひなり、山階寺にはわらはまひにこれをす、五聖樂にあはす、

人<sup>好氏、久行、</sup>帽子无、一者好氏居<sup>右膝突</sup>、批ヲ解テ肩袒了、二者久行乍立カタヌグ、以下二人カタヌ

ガズ、サマノノ相違ドモ不審ニ侍リ可尋<sup>○中</sup>、

舞人向北袖ヲ取持<sup>加拍子</sup>、急手ヲ指上テ片躍時<sup>加拍子</sup>、  
又此曲ニ更居突ト云秘事候トカヤ未見侍、或人ノ申傳シハ、多氏大神氏タガヒテ候トカヤ、イマ  
ダオトシスエズ侍リ、

一説云、此舞破舞人解批、其時上拍子、急向北取袍前時上拍子、又當時ニ取後參ルハ万秋樂ノ答  
ニ舞時取之、番他曲之時者尤不可取之、

此樂呂歌美ノ山ニ合、但歌ノ説トテ在別習笛譜注之、

多忠節云、當曲取後參事ハ依勅定執之也、而近來者無其儀、尤無其謂歟、

〔教訓抄七〕舞番樣

萬秋樂<sup>有甲、近來不用、</sup>地久<sup>有面、甲、准大曲、軌後參、</sup>

〔續教訓抄舞案譜〕或人云<sup>○中</sup>、地久、面甲アリ、又後參アリ、喜春樂ニアフトキ、彼ニカタヌグ手ヲ舞

フ事秘事ナリ、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞<sup>六人</sup>、地久<sup>六人</sup>、面帽子、常裝束、甲異<sup>體源抄曰、著</sup>、

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

喜春樂 白濱<sup>或地久</sup>

萬秋樂 地久<sup>○中</sup>

賀殿 長保樂<sup>或地久</sup>

地久

〔續古事談五諸道〕宇治殿ノ卅講ニ、公近蘇支摩トイフ舞ヲマヒケルヲ、正方ミテ此舞ハソラ舞也、父ヨシモチ申シ、ハ、天曆ノ御時舞御覽ノ時、此舞ハタエタルヨシ奏シケルヲ、宣旨ニテアタラシクツクリテマヒタリケレドモ、其後ナラヒツタヘズトナン申ケル、左ノ一ノツラニ則高光季、右ノ一ノツラニ時助、助忠、タチタリ、ミナ父子ナリミル人イミジキ事ニナンイヒケル、

〔倭名類聚抄四曲調〕高麗樂曲 地久樂即歌有標曲是也

〔拾芥抄上末〕高麗雙調 地久准大曲

〔樂家錄二十八法〕高麗曲

拍雙調 地久千氣字 一名圓地樂

〔龍鳴抄上拍樂〕地久

破拍子十二、急拍子十、萬秋樂にあはす、大曲にならべたるものなり、まかればそりこをとる、雙調曲也、

〔仁智要錄十一高麗雙調曲〕地久 拍子十二 急拍子十

〔教訓抄五高麗曲雙調〕地久 有面甲 准大曲

破拍子十二、舞間拍子百、急拍子十、舞間拍子十、

先欲奏此曲時吹禰取之詞、如常說 准大曲時ハ吹拍調子、呂玄也、或人謂之大調子、云是秘事也、當世不用之、肩祖グ手アリ、此

舞ノ秘事内也、而仁平御賀ノ比三月一日、於鳥羽殿院殿上人舞御覽ノ日、俊通少將カタヌグ手ヲ

舞給ケルニ、半臂ヲトモニグシテ肩祖給タリケレバ万人見之、耳目ヲオドロカシタリケリ、舞入

之後父卿起座向子少將、雖被勸發無其益云々、ヨク、カヤウノ事ニテ心ツクベキ也、或古舞人云、如時肩祖手ハ無ナリト申ニ、如、此束帶之時肩祖侍ナリ、

承久二年三月十七日、常樂會後朝別當僧正、雅 一家公卿爲見物下向アリシニ、此手舞キ、舞人四



〔敎訓抄五高麗曲雙調〕蘇志摩 又廻庭樂云或數手異著義笠舞、中曲 蘇志摩利云、拍子八舞間拍子六十二、

古記云、此舞中古絶了、而天曆御時被仰多好茂可仕之由、好茂絶由再三辭申、重押計可舞之由、依被責案立舞之、後人藥師寺傷人味曾府生動類如形傳學習之、手今相傳云

此舞多氏ハ舞絶シテ今ハ不舞、紀氏ノ舞人近來マデ舞侍ケル、其氏ニモ舞失テ後、今ハ大神氏舞人許舞之、

此樂ニ有二說、漏取ヲ吹テ即吹當曲、一說此世ニ用之、又音取ズシテ如綾切直ニ吹當曲序吹一說、コレハ極秘說ニテ侍ナリ、古老人々ハ申サレ侍シ、合肘ノ舞渡事ナリ、其間ノ居笠ヲトリカフル也、渡返ヌレバ加拍子、

以之今壁絶舞長樂之人案之獻舞出、凡件日記爲奧切、不知誰人、鳥羽院在之藤相公後憲依、仰讀件日記云々、  
此舞天下一同ノ大早魃之時、爲雨請舞之、カナラズシルシアリテ雨下、樂舞俱秘事

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 蘇志摩利六人面帽子、常裝束、掛義笠、持子

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

蘇莫者天王寺舞之 蘇志摩

同例 曼茶羅供有舞樂儀

歡喜光院供養 永治元年二月廿一日 左○中蘇莫者○中 右○中蘇志摩

〔古今著聞集六管絃歌舞〕同喜○延廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時、勅をうけ給ひて、日比奏せざる舞を御覽せられけり、○中蘇志摩、○中是らを御覽せられけり、

同六年二月廿九日 左<sup>略</sup>○中 泚州 右<sup>略</sup>○中 林歌  
保安二年二月廿九日 左<sup>略</sup>○中 蘇莫者 右<sup>略</sup>○中 林歌

御賀

康和四年 白河院五十御賀 試樂 三月九日 左<sup>略</sup>○中 賀殿 右<sup>略</sup>○中 林歌

仁平二年 鳥羽院五十御賀 後宴 同月○三八日 左<sup>略</sup>○中 三臺 右<sup>略</sup>○中 林歌

〔古今著聞集<sup>六</sup>管絃歌舞〕同喜 廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時、勅をうけ給ひて、日比

奏せざる舞を御覽せられけり、<sup>略</sup>林歌<sup>略</sup>○中 これらを御覽せられけり、

雙調樂曲

〔拾芥抄<sup>上</sup>木同<sup>略</sup>〕高麗雙調 蘇志磨利 地久<sup>曲准大</sup> 登天樂 白濱

〔教訓抄<sup>五</sup>高麗曲〕雙調曲

地久 白濱 蘇志磨 登天樂

蘇志磨利

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>曲調〕高麗樂曲 蘇志磨利

〔拾芥抄<sup>上</sup>木同<sup>略</sup>〕高麗雙調 蘇志磨利

〔樂家錄<sup>二十八</sup>樂曲訓法〕高麗曲

〔樂考<sup>高麗調曲</sup>〕蘇志磨利 一名蘇志茂利、又長久樂、又廻庭樂、<sup>一本數手異名也云々</sup>

〔樂考<sup>高麗調曲</sup>〕蘇志磨利

按するに、此曲、舞人簀笠にて舞ふと見ゆ、神代に進雄尊、衆神に逐れて、青草を束て簀笠として

新羅に至り、骨尸茂利の所に居給ふ事、國史に出づ、此事を象りし舞なるべし、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>拍樂〕蘇志磨<sup>そし</sup>

拍子九、蘇莫者にあはす、みのかさきたる舞也、

〔仁智要錄<sup>十一</sup>高麗雙調曲〕蘇志磨利 拍子九

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

右舞 林歌<sup>四人</sup> 袴<sup>常裝束</sup> 袍及甲常異

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

左 右

秦王

皇仁

○或林歌略

傾坏樂

胡德樂

○或林歌略

蘇莫者 天王寺舞之

蘇志摩 ○或林歌略

採桑老

新林羯

○或林歌略

拔頭

靛輪八仙

○或林歌略

還城樂

林歌

同例 大法會

法勝寺御塔供養 永保三年十月一日

左 略○中 太平樂 略○中

右 略○中 林歌

法勝寺供養 承曆元年十二月十八日

左 略○中 秦王 略○中

右 略○中 林歌

曼茶羅供 有舞樂儀

宇治入道九體堂供養 廣治元年六月廿九日

左 略○中 採桑老 略○中

右 略○中 林歌

八講

堀河院宸筆御八講 長治元年八月一日被<sup>三</sup>始行

第六日 五卷日

左 略○中 拔頭 右 略○中 林歌

朝觀行幸

寬治二年正月十七日

左 略○中 青海波 略○中

右 略○中 林歌

同十九日

左 略○中 蘇合 略○中 林歌

〔樂家錄二十八〕樂曲調法高麗曲

拍平調 林歌利字調一本臨河

〔秋苑日涉四〕林歌

高麗部曲有林歌據體源鈔本是梵竺曲一名喇吒鉢羅伎曲歷攷之諸書無所見後閱法苑珠林曰爾時衆中有一菩薩比丘名婆須密多遊行竹園間緣樹上下聲如編猴或旋三鈴作那羅戲翻譯名上伎戲蓋喇吒鉢羅伎即那羅戲遊行竹園間緣樹上下故名之林歌耳

〔龍鳴抄上〕拍樂林歌かりん

平調のものなりかふとありむらさきのうつをきぬにこがねのねすみつけたり

〔仁智要錄十一〕高麗平調曲林歌 拍子十四舞五十拍子

〔教訓抄五〕高麗曲平調林歌 別裝束紫袍付金鼠有甲 小曲拍子十四又十一舞間拍子五十

此曲ヲ或譜云林鍾調ノ曲トシルセリサモアリヌベシ拍笛ヲ平調ニ吹ケバ横笛ノ下無調ニテ侍ナリ下無調ヲバリソウテウト申ナリ此舞ヲ出サント思時先吹亂聲舞出ヌレバ亂聲トバメテ禰取律音次當曲ヲ吹也舞人向西拾足之時拍子三度舞終ヌレバ樂止了又重吹此曲入ナリ即加拍子出入大旨如左舞

或記云右樂ハ皆一拍子ニ上也三拍子也而上唐拍子之樂謂三鼓也有二所謂林歌酣醉樂急也破者拍拍子也

此樂返吹ヤウアマタノ説侍ベシ十二拍子ニ反説十一拍子返説コレラハ皆引物ニ付テ横笛ニテ吹時ニモチキルベシト申タレドモ拍笛反處ノ秘説ト申タレバ拍笛ニモ時々マゼ吹ベキニヤ當時伶人ノ中ニモコレテイニ吹候メリ此曲西寺ノ老鼠ト云事アリオイチズミハ呂催馬樂也



歌林  
木切

洑州 酣醉樂 或仁和樂

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 葦波 鞘切<sup>○</sup>中 啄木

〔伊呂波字類抄<sup>太</sup>〕啄木 高麗樂

〔源平盛衰記<sup>三十一</sup>〕青山琵琶流泉啄木事

啄木ト云曲モ天人ノ樂也、本名解脫樂ト云、此曲ヲ聞者ハ生死解脫ノ心アリ、其聲歌ニ云、

我心無礙法界同 我心虛空其本一 我心通用無差別 我心本來常住佛

トゾ響ナル、震旦ノ高山ニ、仙人多集テ、儼ニ此曲ヲ彈ジケルニ、山神蟲ニ變ジツ、木ヲ啄様ニモ  
テナシテ、此ヲ聞ケルヨリ啄木トハ申也、此樂ヲ彈ズル時ハ天ヨリ必妙花フリ、甘露定テ、海老尾  
ニ結ビケリ、

〔源平盛衰記<sup>十二</sup>〕師長熱田社琵琶事

師長公終夜爲神明納受、初ニハ法施ヲ手向奉リ、後ニハ琵琶ヲゾ彈ジ給ヒケル、調彈數曲ヲ盡シ、  
夜及深更テ、流泉、啄木、楊真操ノ三曲ヲ彈給處ニ、本ヨリ無智ノ俗ナレバ、情ヲ知人希也、<sup>○</sup>中抑此  
曲ト申ハ、仁明天皇御宇承和二年ニ、掃部頭貞敏、遣唐使トシテ、膝狀ヲ賜リ、觀察府ニ參ジ、上覽ニ  
達シテ、琵琶ノ博士ヲ望申サレシニ、開成二年ノ秋ノ比、廉承武ヲ送ラレテ、秘曲ヲ授ラレ、我朝ニ  
傳ヘシハ流泉、啄木、楊真操ノ三曲ナリ、<sup>○</sup>下略

○按ズルニ、葦波、鞘切、啄木ノ三曲ハ、並ニ拾芥抄、教訓抄等ニ載セザルヲ以テ、壹越調ノ樂曲ナ  
リヤ否ヤヲ詳ニセザレドモ、姑ク此ニ附載ス、

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕同<sup>○</sup>高平調 林歌

〔教訓抄<sup>五</sup>〕高麗曲 林歌 平調曲

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 臨河<sup>或云二</sup>林歌

平調樂曲  
林歌

メリサレドモ今尾張得業圖意譜ニシルシオキタレバ、サル事ハ侍ケルナンメリ、此世ニシレル人ナニカハアルベキナレドモ、物ヲシラシメントメニカク申ナリ、ナラヒアリナンドハイフベカラズ、其譜ハ高麗笛譜ニ注置タリ、

〔樂家錄二十四坤〕高麗壹越調曲

造物曲小

仁和樂

〔拾芥抄上末〕高麗壹越調 仁和樂

〔樂家錄二十八法〕高麗曲

高麗壹越調 仁和樂 仁幸奈羅具

〔龍鳴抄上拍〕仁和樂らくにんわ

拍子十、こまひなり、

〔仁智要錄十一高麗曲〕仁和樂 拍子十

〔教訓抄五高麗曲壹越調〕仁和樂 中曲

以年號爲樂名、拍子十、舞間拍子 五十六、

此曲仁和年中ニ奉勅貞雄ト云ケル物作之、此樂喚頭アリ、人イトシラズ、タバロヘ反付ヲ吹メル、  
彈舞加彈物ニハ喚頭ナシト申メリ、喚頭秘ユ歟如何ユ

〔教訓抄七〕舞番樣

仁和樂片屑租 仁和樂片屑租

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

承和樂 仁和樂○中

〔樂家錄二十八〕高麗曲

高麗壹越調 常武樂志也字不羅具一名常雄樂

〔龍鳴抄上〕常武樂さうむ

ひやうし十二まひなし退出音聲に是をす、

〔教訓抄五〕常武樂

拍子七又十二、鳳凰集ニハ拍子十退出音聲用此曲

此曲戸部常雄作之、仍ヤガテ作者名ヲ付タリ、謂之常雄樂、此樂有二說近代高麗ノ退出音聲絶了、

〔樂家錄二十四〕高麗壹越調曲

常武樂爲小曲中大曲

作物

〔拾芥抄上〕高麗壹越調 作物

〔樂家錄二十八〕高麗曲

高麗壹越調 造物津具利毛乃

〔仁智要錄十一〕作物 拍子十二基政、清、一說拍子十、長秋

雄作、 一說拍子八明、基政、清、兩說同 百濟貞

〔教訓抄五〕造物 拍子八又十二、

コレハ百濟眞雄作之、或譜ニハ舞ニハ用仁和樂ト云、一說ナリ、又貴徳ノ急ヲ秘時用此樂ト云、是

一說カタハソノユエ侍ラム、シリガタシ、可尋又雙調ニモ造物アリ、高麗笛師下春ト申物ツタ

ヘタリト鳳凰抄ト申文ニイレタリ、サレドモ近來吹タリト申物モキコエ侍ズ、仍常ニモチキラ

レズ、

又平調ニモ造物アリ、兵庫允玉手公頼ガツタリタルトゾ申タレドモ、其家ノ目錄ニモイレズ候

トスベシ、此曲ハ從來西戎康國ヨリ傳ヘテ、陳ノ時ヨリ漢土ニ傳フトイヘリ、其後唐ニ至ルマ  
デコレヲ傳ヘタリシヲ、中書令張說コレヲ諫メテ、開元ノコロニハ、禁ジテコレヲヤメラレシ

トゾ、其標體跳足ノサマ、所謂散樂百戲ノ一ナルニヤ、

〔仁智要錄十一〕桔槔 拍子十

〔教訓抄五〕高麗無舞曲吉簡

拍子十二 早物、打唐拍子之、

相撲節氣揮脫對奏、此曲舞出間吹亂聲、王二人陪從十人、吹樂時乙躍退入、但フナ文擲ナリ

云々、實忠記云、右近府生、猿樂等出現シテ各思々ノホヲワザラシテ入也、退出音聲奏長慶子、又呂

歌無力蝦ニ合ト申タリ、此曲極秘曲ナリ、

〔樂家錄二十四〕高麗加節壹越調曲

吉簡曲小

〔教訓抄七〕舞番樣

別番樣略中 猿樂相撲節有之、唐拍子物、奏吉簡相撲節奏之、唐拍子物、奏

〔舞樂要錄上〕同番例 相撲節

同承四年略中 拔出同七月廿九日左略中 揮脫右略中 桔槔

同六年略中 拔出同七月廿九日左略中 猿樂 右略中 桔槔

天慶六年 拔出 七月廿八日 左略中 雜藝 右略中 乞寒

〔西宮記七月〕相撲召仰

御覽日略中 拔出、種々雜藝左見城樂、飲樂、右貊犬、吉干、

〔拾芥抄上末〕高麗壹越調 常雄樂

常雄樂



〔樂家錄三十四〕加節高麗壹越調曲

蘇利古爲小曲  
中曲

〔教訓抄七〕舞番樣

別番樣○中

菩薩林邑物、別號東、用道  
行者、時者謂之大菩薩、蘇利古又、鎌合

一鼓舞人懸一鼓、出  
舞臺一曲、打舞、蘇利古同前

〔續教訓抄舞家譜〕或人云、○中蘇利古、白スハエヲモツ、片肩袒ナリ、童舞ニハカヤウニアハスルナ

リ、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 蘇利古一人五人、冠、纓、垂、藏面、常裝束、白楚笏、腰袂、古圖、常裝束袍、

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

菩薩 曾利古

〔拾芥抄上末〕高麗壹越調 桔桿

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法高麗曲

高麗壹越調 桔桿氣加牟 一本桿作簡

〔歌傷雜識〕吉簡即乞寒戲

新井白石翁ノ樂考ニ、吉簡ノ曲ハ乞寒戲ナルベシトイヘリ、今按ズルニ此說是ナリ、其徵トスベキモノ、舞樂要錄ニミヘタリ、吉簡、吉干、桔桿、トモニ乞寒ノ假借ナリ、凡國俗其真ニヨラズシテ、假ニ從フモノコレノミナラズ、後々ハ其弊ニヨリテ、真ヲ知ラザルニ至ルモノアリ、要錄ニハ相撲ノ節ノ曲名ヲアゲタル中ニ、御脫ニ桔桿ヲ番ヒトシ、雜藝ニ乞寒ヲ番ヒトセシコト徵

高麗壹越調 新河浦 志李加不

〔龍鳴抄<sup>上</sup>拍樂〕新河浦 かふん

拍子五、よにまゐりたる人なし、舞なし、

〔仁智要錄<sup>高十一</sup>曲〕新河浦 或曰、舞、顔徐時、以此曲爲急云々、猶同、長保樂急、拍子五、

〔教訓抄<sup>高五</sup>無舞曲〕新河浦 拍子五

コレモ舞ナシ、或譜ニ、以此曲爲顔序急シルセリ、サレバ舞ノ侍ケルニヤ、

〔樂家錄<sup>二十四</sup>三鼓加節〕高麗壹越調

新河浦 曲小

進會利古

〔拾芥抄<sup>上</sup>音樂〕高麗壹越調 進會利古

〔樂家錄<sup>二十八</sup>樂曲訓法〕高麗曲

高麗壹越調 進蘇利古 志李會利古 一名龜祭舞、

〔大日本史<sup>禮樂十五</sup>〕按古事記、應神朝百濟人須須許理來朝、造酒獻之、須須許理與進蘇利古音相

近、樂名恐起于此、凡古者釀酒、必先祭井及龜、造酒司所祀神九座、其四座爲龜神祭之者、或又奏舞、

故稱龜祭舞乎、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>拍樂〕進蘇利古 かふん

拍子十二、はやきがくなり、退出音聲これをす、

〔仁智要錄<sup>高十一</sup>曲〕進會利古 拍子十二 明還譜拍子十一 長秋卿譜云、號龜祭舞、基政譜云、

退出音聲用之、

〔教訓抄<sup>高五</sup>無舞曲〕進蘇利古 拍子十一、又十二 謂之龜祭舞、

近代舞絶了、早樂也、仍退出音聲用之、

高麗龍

〔拾芥抄〕上末 高麗壹越調 高麗龍

〔樂家錄〕二十八 高麗曲

高麗壹越調 狛龍古眞禮字 一名高禮龍

〔龍鳴抄〕上 高麗禮龍といふ

破拍子十二、まゐりたる人なし、かくすべき物なり、急拍子八、皇仁の急のやうにひやうしをあぐ、く  
らべむまの行幸に、蘇芳菲にあはす、

〔教訓抄〕五 無舞曲 狛龍 又高禮〇禮、體源 龍云

破拍子十二、急拍子十二、  
又八、

件舞五月節、與出入之間、於御前奏之、乘小馬形二人舞之、冠豐繪書、右舞中人、略舞之 古記云、此曲者向御與筋替  
打舞也、此間吹急早物打 破ヲバ 不吹之、就馬行幸御幸之時、對蘇芳菲急ヲ奏ナリ、狛龍ノ中ニハ  
秘樂ノ隨一ナリ、此舞之體、古記ニハ頗相違シタリ、其作法ヲ日記セザルカ、

〔樂家錄〕二十四 高麗壹越調曲

狛龍小曲一

〔教訓抄〕七 舞番様

別番様略 中 蘇芳菲別號東、如、獅子、 狛龍別號東、如其胸、就馬奏之、

〔中右記〕康和四年閏五月十五日、巳時許諸卿參入、依可有就馬御覽也、寄御與於寒殿、〇中 龍頭鶴首  
兩船、奏蘇芳菲樂、左右共同、 於東假橋東頭、蘇芳菲、狛龍且舞且行、狛龍並 左右乘尻等、參向於  
馬場西頭、

〔拾芥抄〕上末 高麗壹越調 新河浦

〔樂家錄〕二十八 高麗曲

新河浦

或書云、中古近衛ノ馬場ニテ、時ノ殿上人草合ノ勝負アリケリ、而右方ニ角一ツアルウシニ、タカ  
コシノ人ヲノセテイダシタリケリ、左ニコレヲマウケザリケレバ、右ニ無左右勝ストノ、シリ  
テ、亂聲ヲ吹テ納蘇利ヲ舞ヌ、舞人政方、好茂也。其時ニ御堂○藤原長ノ女房車ニテシノビテ御見物アリ  
ケルニ、此事ヲ御覽ジテ御腹ヲタテサセ給テ、車ヨリヲドリオリサセ給テ、ハダシニテ舞人政方  
ヲシバラセ給テ、ラチノ柱ニユヒツケサセ給テ、其間好茂ハラチヲコエテ、人ノ馬ヲ取テニゲニ  
ケリ、天王寺ニクダリテ、隠レ居タリケルヲ、御堂ノ仰ニハ、金青鬼ハ物カクシヤハスル、タシカニ  
マキレトメシケレドモ、イカバ思ケン、ツヒニマキラデ、天王寺ニキテ、採桑老ヲバ彼寺ニ傳留タ  
リケルナリ、

〔古今著聞集十五〕宿執白河院の御時時資をめして、御寵童二郎丸に、貴徳、納蘇利等の秘事さづくべき  
よし勅定有けるに、時資再三辭し申て教へず、かやうのわらは當時こそ候へ、成人の後にはわが業  
にあらねば是を秘すべからず、世のため道のため、凌遲のもとゐに候とてつゐにさづけず、これ  
によりて天氣心よからず成にけり、

〔教訓抄五〕高麗曲查越調、納蘇利

忠方云、堀川院御時依雨下、於弓場殿内御覽舞アリシニ、時方布衣ニテ舞納蘇利、體責テイカメシ  
ク舞ケルヲ、父資忠見之事外ニ不請シテ目モ不合ケリ、時方恐々伺解由ニ、資忠責ニ御前近キ舞  
ヲ如然舞ハ、不可思議ノ事也、物荒カラデナツカシキ様ニ舞ナリト云、時方如此令勸發給ヨリハ、  
可舞様ヲ被仰云、大噴テ手ヲバ教了、如然ノ事心懃爾古曾爲禮、非可教事申ケル、此言ヲ忠方老後  
ニ心得テ、試ニ目出ク申ケリト證得シテ仰云々、

〔枕草子九〕まひは

らくそんは二人して、ひざふみてまひたる、



綠精色一人納蘇利二用之、

〔樂家錄<sup>三七</sup>〕左右舞及人數裝束

右舞 納蘇利<sup>舞</sup>二人面帽子、袴<sup>具</sup>、袍、補襦、腰桴、

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

左 右

還城樂 林歌<sup>或</sup>崑崙<sup>利</sup>

陵王 納蘇利

同例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左○中 陵王 右○中 納蘇利

圓融寺供養 天元六年三月廿二日 左○中 輪臺 右○中 納蘇利

法成寺講堂供養 永承五年三月十五日 左○中 還城樂 右○中 納蘇利

〔西宮記<sup>五月</sup>〕六日幸武德殿

掃部撤殿上床子、此間競馬<sup>略</sup>、馳了、<sup>註</sup>雅樂奏音樂<sup>於塔東、奏、類、</sup>

〔日本紀略<sup>二卷</sup>〕天慶九年正月十八日庚戌、賭弓也、天皇御射殿、右勝奏納蘇利、

〔扶桑略記<sup>二十六</sup>〕康保三年十月七日丁卯、殿上有侍臣舞、<sup>中</sup>次納蘇利、小舍人實資著天冠舞衣舞

畢、召實資於床子、脫阿古女衣賜之、左大臣<sup>實資</sup>不堪欣感、起舞前例、給御衣者即拜舞、今夜不拜、

少小之內、舞裝束難致、拜禮歟、

〔中右記〕康和四年二月廿日、今日於北渡殿上、御覽御賀舞共、殿上人束帶、新大納言<sup>公</sup>、新中納言<sup>國直</sup>、

被候御前、新中納言仲實卿子童舞、納蘇利容顏華麗、舞神妙、人々感歎、入夜事了、

〔教訓抄<sup>五</sup>〕高麗曲壹越調、納蘇利

〔仁智要錄高麗十一〕納蘇利 破拍子十二、急拍子十二、

〔教訓抄高麗曲壹越調〕納蘇利 別裝束舞 有面二樣紺青色、綠色、小曲 落蹲謂之

破拍子 急唐拍子物

先欲此曲吹時吹小亂聲但競馬相撲之時者頗ル長吹ク如義王、カクハ申タレドモ、近來不吹如何、

タヅスベシ、次ニ破吹有口傳加拍子、有二說 一者、舞人ノ樂屋ヲ出時始拍子ヲ上、二者、二返許吹後

加拍子 是玉手則近之說也、尤爲正說也

三五要略琵琶譜云、第二大鼓以後加拍子、破舞終後舞人ノ踊時ニ直ニ吹急、古人云、是ヲ急ト云、又早吹、加拍子、說

ト云ベシ、即唐拍子打、

古老伶人云、舞人良久舞舉右手而振撥之時吹急加拍子、而右近將監多資忠家說、舞人以左右手旋

撥走廻之時初成急也、アマタノ說アリ、折節ニヨルベシ、

雙龍舞有異名可謂一人舞時、入道左大臣說源房ニ、納蘇利三文字ヲ落尊トヨムベシ、其外ノ異

名ハ不可然也、

此曲荒序ニ對スル日秘事アルベシ、多氏申ハ、戸渡手ワタシテ更居突申、又膝打手尤爲秘、常ニハ二人舞之、

一人落蹲、スコシ事トアル時ニ舞ナリ、興福寺ニ綠青色ノ面一枚アリ、是ハ對荒序日、一者一人著

是面舞ベシ、忠節云、納蘇利ニ有勳賞、舞人躍賜蹠ヲ御前向テ指テ拜テ用也、

仁命云、義貞、陵王納蘇利平傳、正連ト申シハ、義光云、陵王納蘇利ハ、初ハ面ヲ指隠シテ不見シテ、

卒爾ニ見エ隠タルガ目出也、偏ニ打テ開テ見ルハ無性念ノ事也、搔臥シテ可舞也、

〔教訓抄七〕舞番樣

陵王別裝束、異名有多、有ニ樣、武部小面、納蘇利別裝束、有ニ樣、金青色、

〔續教訓抄舞案譜〕或人云、略中納蘇利、別裝束、面牟子、右ニ桴ヲモツ、面ニニヤウアリ、金青色常用之、

〔教訓抄<sup>五</sup>〕舞番樣 高麗曲 童舞 小曲

破<sup>拍子十二</sup>吹<sup>五尺</sup>急<sup>拍子十二</sup>舞入<sup>〇中</sup>

先舞出時吹亂聲出スレバ止亂聲<sup>取</sup>次破吹五返終帖<sup>加拍子</sup>近來略時二反舞同終時<sup>加拍子</sup>急度數無定<sup>二拍子後上拍子一拍子</sup>舞入マデ吹也右舞ノ切シタ、マリタルハ此破許也蝶ノ羽キタリ、花ヲモチテ舞也、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

別番樣 迎陵頻<sup>又鳥ト云、各羽</sup> 胡蝶<sup>又蝶云、各羽</sup>

菩薩<sup>〇註</sup> 蘇利古<sup>又蝶合</sup>

一鼓<sup>〇註</sup> 蘇利古<sup>同前</sup>

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

右舞 胡蝶<sup>四人</sup> 天冠、插頭花醯醢<sup>天冠左右求結天冠之袴及袍常異蝶羽、又醯醢作花持手、</sup>

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

左 右

迎陵頻 胡蝶

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 納蘇利

〔伊呂波字類抄<sup>奈事</sup>〕納蘇利<sup>高麗樂</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕高麗曲

高麗壹越調 納蘇利<sup>奈津曾利</sup> 一名落蹲、又雙龍舞<sup>私曰、二人舞言、納蘇利、一人舞、言、落蹲也、雙龍舞之別未考之、</sup>

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕納蘇利<sup>いふべしと</sup>

陵王の合なり

〔舞樂要錄〕舞番

左 右

春庭樂 石河

胡蝶樂

〔倭名類聚抄〕四曲調高麗樂曲

胡蝶樂延喜八年、亭子院、宇多、童相摸之時、山城守藤原忠房朝臣所作也。

〔樂家錄〕二十八曲調法高麗樂曲

高麗壹越調 胡蝶古傳字一本下加樂

〔古今著聞集〕相摸、強九延長六年閏七月六日中の六條院にて童相摸の事有けり、廿番はて、舞を

奏す、左は蘇合、右は新島蘇、次に新作の胡蝶樂を奏しけり、その曲笛は忠房朝臣、舞は式部卿親王作給ひける、

〔體源抄〕十二下胡蝶樂

破、延喜六年八月、太上法皇、宇多、童相摸之時、忠房朝臣作之、我實親王作舞。

〔龍鳴抄〕上胡蝶胡蝶ふて

破拍子十、五反すべし、はてのてうにひやうしあぐ一拍子、急ひやうし十二、ふた拍子の、ちあぐべし、まひのいづるに亂聲、童舞はねきたり、はなもちたり、せんざいあはせにつくりたりとぞまゐるしたる、

〔仁智要錄〕高十一曲胡蝶樂

破拍子十二、一說拍子十、急拍子十二、一說拍子十三、

〔難秘別錄〕胡蝶

右のもの高麗樂高麗は反すなきにこれを反す、さだまりたるものにてある、又は酣醉樂、これ二は拍子

をばかぞへず、反すをかぎりたり、こと舞は拍子をかぞへて舞なり、右樂にいとさしておぼゆる事なし、舞などにつきてはあるらめども、それはみちくものともがらの事なれば、さだめてこれならぬこともあるらむ、下



石川樂

〔倭名類聚抄四曲調〕高麗樂曲 石川樂

〔伊呂波字類抄伊人〕石川樂 イシカハ

〔樂家錄二十八曲調法〕高麗曲

高麗壹越調 石川 勢津勢平

〔龍鳴抄上拍樂〕石川 とせいふき

拍子十七、こまひなり、

〔仁智要錄十一高麗曲〕石川樂 拍子十六、明邊、呂歌石川也 一說拍子十 長秋 清 舞九十拍子

基政譜謂節世岐 隨舞加拍子、二拍子也、

〔教訓抄五高麗曲壹越調〕石川

拍子十六 又七、舞間拍子 九十、隨舞加拍子、

此舞近來絶タルガゴトシ、其故者去保延元年正月十九日內裏舞御覽日有兩曲、石川、元秋是行

等候ケレドモ、タゞ末方一人ヅ舞ケル、而大神是弘智習傳由披露申條尤モ不審也、然間多久行爲

習傳此曲、常樂會之下向、次彼是弘對面シテ子細タヅテケレバ、前後モアハヌ事ドモヲ申侍シト

物語申キ、尤不審也、仍舞有此樂ハイシカハト申催馬樂ニ同シ音ナリ、

〔樂家錄二十四曲調〕高麗壹越調

石川 爲二小曲中曲

〔教訓抄七〕舞番樣

無答舞 略 中 石川 片肩袒舞、此舞近來大方如、也、

〔續教訓抄舞案譜〕或人云、略 中 石川片肩袒舞、但近來无之、季方ニテ舞之、大神氏不分明歟、但是繼ハ

自是弘智傳云々、

〔倭名類聚抄四〕高麗樂曲 狛犬

〔樂家錄二十八〕高麗曲

高麗壹越調 狛犬古真以叙、一說古真以平、

〔仁智要錄十一〕犬 序拍子十三、破拍子十二、

〔教訓抄五〕無舞曲、狛犬

破拍子十一急拍子十四一說云、序破謂之、

相撲用之、舞欲出之時先吹亂聲大亂聲打毬之時右方以此爲勝負ノ樂、仍每取球發舞者二人用鼗

二人用右近時曹以、下府生以上、

舞入時乍含續松火入、樂有破急亂聲、狛犬出亂聲伏吹、破時興走舞吹、急食火舞入了、已上多實、忌日記

古譜云、吹亂聲爲出曲、犬出伏時吹序、次大真人出來、頃之犬追喫、大真人之時又吹亂聲、吹破入可云

云、今案者序ハ破歟、破者又急也、委狀者第、四卷注之

〔教訓抄七〕舞番樣

別番樣略○中 師子無答、御願、供養舞之、 狛犬相撲節舞之、有別亂聲、

〔舞樂要錄上〕同例○舞 相撲節

天慶六年 拔出 七月廿八日 左略○中 陵王略○中 右略○中 狛犬

寬仁三年略○中 拔出 同七月廿八日 左略○中 還城樂略○中 右略○中 狛犬

〔江家次第七八〕相撲拔出

左右各舞略○中 右必舞、歸德、狛犬、已上有別裝束、

〔中右記〕寬治二年七月廿七日、有御覽儀、存先規、未一點御出、略○中 追相撲出其後亂聲振棒之後、奏舞

曲略○中 日晚主殿寮炬火敷手、十還城樂、犬二猿樂、中有雜藝、吉干事了還御、

保延元年十二月一日、内裏舞御覽日、胡德樂四人元秋時高勸盃末ノモノニセサセタリケレバ、元近元爲季秋キラヒテ於舞臺高聲ニ光時ツカマツルベシト申ケレバ、俄ニ勸盃光時瓶子取時秋昔ハカヤウニ勸盃モ瓶子取モムネトノ輩ノシ侍ケル、今世ニハ勸盃モ末舞人、瓶子取モ樂所下樂人ノ役ニ成テ侍ナリ、且又近來ハ多氏ニ不舞之、末右舞人等舞故ナリ、其身ノ業ハ昔ニハシタテ、モ及ベカラヌニ、カヤウノ職ヲバサクル返々ミグルシキ事ナリ、光時云、右一者舞時ハ勸盃左二者、瓶子取ハ左樂人二者ノスベキナリ、

此曲勸盃執盃差右一貫一貫飲差二貫二貫不受之勸之一貫返直于飲時上大近來ハ舞人皆飲畢立時加拍子光時云此舞之勸盃ハ、左手ニ盃ヲ取直シテ節替打テ、舞人ヲ一通テ、舞人ノ末ヨリ入ニ舞人之中居、

寛治三年平等院一切經會記云、胡德樂勸盃高季著二舞面、依光季訓云々、時人奇之、實ニハ勸盃、瓶子俱有面二舞面ニ似タル別面ナリ山階寺有之

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

鳥羽院御宇春日ノ御幸ノ次ニ、興福寺ニ御入堂アリ、伶人舞樂ヲ奏シケルニ、胡德樂ト云樂ニ、河南浦ノ庖丁ヲ舞澄シタリケリ、胡德樂トハ酒ヲ飲樂也、河南浦トハ鯉ヲ切舞也、叙威ノ餘リニ、是ヲ鳥羽ノ御所ニ移シテ叙覽アラバヤト被思召ケレバ、還御ノ後、彼儀式ヲ鳥羽殿ニ被移テ、伶人はヲ奏シケレ共南都ニテ叙覽有シニハ、無下ニ劣リテ無興ゾ思召シケル、理ヤ彼寺ハ、淡海公龍宮城ノ上ニ立ラレタル寺ナレバ、底ヨリ勾通ツ、吹笛モ打樂モ澄渡テゾ聞エケル、

〔狛氏新録〕一役付之事

實永七寅年十月廿一日、舞樂御上覽役付、中

胡德樂

兼佐志壽

廣秀

勸盃

近家

瓶子取

東儀丹波寺兼伯

寺ニハ方ヲタガヘテアチコチマトヒアルクト申メリソレモアマリ侍ル、

抑此樂吹出有二說、一者<sup>五次</sup>始<sup>ハ</sup>常說、一者<sup>ハ</sup>穴ヨリ吹始是ハ極タル秘事ニテ侍世人シリタリトウ

ケ給ハラズカクスベシ、

〔樂家錄三十四<sup>坤</sup>〕高麗壹越調

胡德樂<sup>曲中</sup>

〔教訓抄七〕舞番樣

傾杯樂<sup>賜<sup>孟</sup>有<sup>入</sup>機</sup>胡德樂<sup>反鼻胡德云有面</sup>

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 胡德樂<sup>舞人四人此外勸孟一人</sup> 舞人面帽子常裝束 瓶子取面帽子常裝束瓶子土器孟

二<sup>爲</sup>勸孟唐冠藏面常裝束袍<sup>袍不短之但</sup>笏

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

傾杯樂 胡德樂

同例 大法會

法金剛院御塔供養 保延二年十月十五日 左<sup>略</sup>中 蘇真者<sup>略</sup>中 右<sup>略</sup>中 胡德樂

曼茶羅供<sup>有舞樂儀</sup>

歡喜光院供養 永治元年二月廿一日 左<sup>略</sup>中 採桑老<sup>略</sup>中 右<sup>略</sup>中 胡德樂

〔教訓抄五<sup>高麗曲壹越調</sup>〕胡德樂

長承元年三月廿三日内裏ノ臨時ノ樂ノ日有當曲勸孟<sup>季貞</sup> 依御定雖有冠不用面瓶子取<sup>清方</sup>笙

吹音頭也、



〔口遊<sup>音樂</sup>〕遍鼻胡童子<sup>有<sup>レ</sup>曲</sup>

〔拾芥抄<sup>音樂</sup>〕高麗壹越調 遍鼻胡德

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕高麗曲<sup>樂曲調法</sup>

高麗壹越調 胡德樂 古止具羅具 一名遍鼻胡德樂又胡章樂

〔樂考<sup>高麗樂曲</sup>〕胡德樂 統秋云、一作胡龍樂

按するに、百濟の官十六品あり、其七品を將德と云、九品を固德といふ、十品を李德といふ、是によりて見る時は、今曲名宿德、歸德、胡德等皆々其樂を作りし人の官名によりしなるべし。

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕胡德樂<sup>胡德といふ</sup>

拍子八、この舞ほうしゑたり、おもてはほうしゑたるもの、やう／＼なるかほなり、

〔仁智要錄<sup>十一</sup>〕遍鼻胡德 拍子八 呂歌酒飲也

〔教訓抄<sup>五</sup>〕高麗曲壹越調 胡德樂 面色々々也 酒醉<sup>シ</sup>色ナリ

謂之<sup>拍子</sup>又八

牟子 胡童樂 小曲 遍鼻胡德

此曲本是横笛ノ樂ナリシヲ、承和御時依勅定爲高麗笛、常世改作之、唐笛譜ニハ此曲序一帖<sup>拍子</sup>

云々<sup>返</sup> 呂催馬樂酒飲ニ合ス、赤面鼻ノユルガザルハ著<sup>一</sup>者也、多患節說

此舞輪ヲ造、舞人違肘ヲ打廻ルナリ、皆舞臺居<sup>皆座也</sup>、次左方ヨリ出勸盃著面、出間有二說、一說

者持盃筋替打寄也、一說者盃ヲ懷中シテ筋替ニ打寄リテ居<sup>横座ニ居也</sup>、此勸盃ハ右舞人ヨリ上

臍ノスベキヨシ申傳ナリ、次出瓶子取<sup>二舞著</sup>、東大寺<sup>瓶子取</sup>、樂人<sup>有別</sup>、

舊記云、勸盃左一二者役ナリ、瓶子取可然、樂人之中スベシト見ユタリ、宇治殿御在生ノ當初、平

等院一切經會有此曲、舞人<sup>政實</sup>、勸盃<sup>光季</sup>、瓶子取<sup>時光</sup>、云々、<sup>中</sup>

古記云、カヒナツカヒヲモツ、カヒクヒモチ足踏全ク他舞不似也、偏醉人ト舞成ナリ、サレバ天王

六位二人又四人

〔樂家錄三十七曲訓法〕左右舞及人數裝束

右舞 新舞舞四 唐冠袍恒衣冠冬袍也二人六位袴袴也 石帶靴沓笏

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

採桑老 新舞略 中

胡飲酒 新舞略

同例 大法會

法金剛院御塔供養 保延二年十月十五日 左 中 胡飲酒 中 右 中 新舞略

蓮花藏院供養 永久二年十一月廿九日 左 中 太平樂 中 右 中 新舞略

勝光明院供養 保延二年三月廿三日 左 中 採桑老 中 右 中 新舞略

平等院供養 永承七年三月廿八日 左 中 三臺 中 右 中 新舞略

曼茶羅供 有舞樂儀

南院供養 長承四年正月廿八日 左 中 拔頭 中 右 中 新舞略

八講

四條宮御八講 寬治二年六月十九日 拔頭了 第四日結願事訖供舞 左五常樂 右新舞略

相撲節

永承六年 略 中 拔出 同七月廿日 左 中 青海波 中 右 中 新舞略

承曆三年 略 中 拔出 同七月廿八日 左 中 秦王 中 右 中 新舞略

〔倭名類聚抄四調〕高麗樂曲 胡德樂

胡德樂

〔龍鳴抄<sup>上</sup>樂〕新靺鞨<sup>まかん</sup>

ひやうし十六、まひのいづるに亂聲、すこしまくりたるかぶりにはんひ、六位ろうさうのきぬ、大史二人はあかいきぬ、又官長者きぬのいろごくのおびさげ、さや、くすりぶくろさげたりまひいで、ぶたうす、

〔仁智要錄<sup>十一</sup>高麗曲〕新靺鞨 拍子十六

〔教訓抄<sup>五</sup>高麗曲壹越調〕新靺鞨 別裝束舞 小曲

拍子十六 唐拍子物

此曲或書云、靺鞨芋田人名也、出北土、靺鞨國名也、而件舞出彼國タリト申タリ、サレバ高麗ヨリ渡タル内ニハアラザルカ、先欲出舞ノ時吹亂聲、先出大史二人、<sup>赤衣小史、細靴人數ハ時ニヨル、或六人、</sup>次四人、略二人、舞臺ニ出テ、プタウト云事ヲス、プタウオハリスレバ、止亂聲、彌取ナリ、次吹此曲、<sup>即加拍子、早物</sup>

舊記云、著紫袍者一人、自大史前立テ舞、<sup>是ヲ王</sup>永保二年正月廿五日、中宮賀茂行啓試樂之日、五人立ツ、王一人、<sup>五位二人、</sup>舞之、近來不用之、イツゴロヨリトバマリテ侍ニカ、尤不審ニ侍ドモ、氏ノ輩モシラザルヨシヲ申、不審無極者也、

中院入道云、此舞昔令著例冠也、而法勝寺供養之時、俊綱朝臣奉白川院勅始テ作り出也、又云、新靺鞨目出舞也、而近來偏ニ實ヲ不習、散樂ニ成ニタリ、淺猿事也、助員コソモダエテ放所ヲバ舞シカ云、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

採桑老<sup>有面、別裝束、鳩杖、多氏、天王寺舞之、</sup>新靺鞨<sup>別裝束、紫袍一人、王、赤衣二人、</sup>

〔續教訓抄<sup>舞案譜</sup>〕或人云、<sup>略</sup>中、新靺鞨、別裝束冠アリ、笏ヲモツ、紫袍一人、<sup>王ト云</sup>赤衣二人、<sup>五位以下</sup>

右舞 延喜樂六人常裝束、

〔舞樂要錄〕舞番

左 右

賀殿 長保樂或地、久、或延喜樂、○中略

萬歲樂 延喜樂

同例 大法會

東寺舍利會 康永五年五月

左○中 賀殿○中

右○中 延喜樂

曼荼羅供 有舞樂集

法勝寺小堂供養 保安三年四月廿三日

左○中 太平樂○中

右○中 延喜樂

朝覲行幸

天永二年二月一日 左萬歲樂○中

右延喜樂

相撲

同治○寬五年○中

拔出同七月廿日

左蘇合○中

右延喜樂

〔扶桑略記二十六〕

康保三年十月七日丁卯、殿上有侍臣舞、○中

次奏延喜樂、舞人兼家朝臣、忠尹朝臣、

朝光、理彥、

〔中右記〕寬治四年二月十七日壬子、有行幸平野社、○中

社頭東遊之後、萬歲樂、延喜樂、龍王、納蘇利許

也、

新祓禊

〔倭名類聚抄四曲調〕

高麗樂曲

新祓禊二音末、葛、人出北土、見唐韻

〔大日本史禮樂十五〕

今按、金史、文獻通考、祓禊本號勿吉、有七部、黑水祓禊居肅慎地、東瀕海、南接高

麗、亦附于高麗、即此曲自高麗傳之者必有據也、



朝觀行幸

同治寛六年二月廿九日 左略中五常樂略中右略中長保樂

嘉保二年正月二日 左略中萬秋樂略中右略中長保樂

長治二年正月五日 左略中賀殿略中右略中長保樂

天永二年二月一日 左略中三臺略中右略中長保樂

延喜樂

〔倭名類聚抄<sup>四調</sup>〕高麗樂曲 延喜樂

〔樂家錄<sup>二十八調</sup>〕高麗曲

高麗壹越調 延喜樂<sup>江平風羅具一名花榮樂</sup>

〔體源抄<sup>十二上</sup>〕延喜樂 延喜八年亭子院前裁合左近中將藤原忠房朝臣作式部卿親王作舞

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕延喜樂<sup>えんき</sup>

ひやうし十一こまひなり

〔仁智要錄<sup>十一</sup>〕延喜樂 拍子十一

〔教訓抄<sup>五</sup>〕延喜樂 中曲

以年號爲樂名 拍子十一 舞間拍子五十

此曲延喜御門御時作之作者忠房歟樂者笛師建部逆磨所作也舞及末向北突足撥合袖時<sup>加拍子</sup>

〔體源抄<sup>九</sup>〕延喜樂

此舞ハ祝ノ所ニ必被用タリ万歳樂ニ合タリ

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

萬歳樂<sup>片屑組對大</sup> 延喜樂<sup>片屑組</sup>

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

此曲長保之比作タリ、サマト、ノ名アリ、サダメテヨシ侍ラム、イブセク侍、隨舞加拍子、

此急ノ吹様有ニ、既、喚頭吹一說、京樣忠返付處ニ付一說、奈、異樣、此笛ハ狛笛平調ノクラキノ物ナ

レドモ、彈物ニハクラキタガヒテ下無調ノクラキニテ彈侍トカヤ、此曲ニ拍子三拍子舞入テ又

返テ舞昇ル時上拍子、此舞ハ大事ニ侍ニヤ、ウチアル舞人等不舞シテ、ウシロアハセニノミ侍ナ

リ

〔體源抄 十一下〕舞曲古今相違事

古長保樂急吹トテ、平調ヲ音取、今ハ不然、

〔教訓抄 七〕舞番樣

賀殿有、甲、嘉殿ト云、片肩租、有、入、綾井、更、居、突、手、長保樂片肩租、破、保、曾、呂、久、世、利、急、加、利、夜、須、云、

〔樂家錄 三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 長保樂舞六常裝束、

〔舞樂要錄 上〕舞番

左 右

賀殿 長保樂略○中

三臺 皇仁 或長保樂

同例 大法會

興福寺塔供養 長元四年十月廿日 左○中 萬歲樂○中

右○中 長保樂

八講

鳥羽院御八講仁平四年三月廿二日發始行、同廿五日結願、第四日 五卷日 夕座了供舞 左○中 採桑老○中

右○中 長保樂

酣醉樂 爲中曲  
中大曲

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

三臺 皇仁 或長保樂  
或酣醉樂

卅州 酣醉樂

同例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左○中 太平樂○中 右○中 酣醉樂

〔古今著聞集六〕管絃歌舞同喜○延 廿一年十月十八日八條大將保忠中納言の時勅をうけ給ひて日比

奏せざる舞を御覽せられけり○中 酣醉これらを御覽せられけり

〔扶桑略記二十六〕康保三年十月七日丁卯殿上有侍臣舞○中 次酣醉樂兼家朝臣

〔倭名類聚抄四〕高麗樂曲 保曾路久勢利 賀利夜酒

〔樂家錄二十八〕高麗曲

高麗壹越調 長保樂千也字保羅具一本保作浦一名長寶樂又號泛野舞

舊記曰當曲破與念本別曲也破謂保曾呂久世利急謂加利夜須也然長保年中以二曲爲之一曲以三年號爲曲名云々

〔大日本史禮樂十五〕按曾路久與疏勒國讀相通本曲疑疏勒樂也舊唐書云周武帝聘勝女爲后西

域諸國來賡於是龜茲疏勒等樂新唐書亦有疏勒伎蓋此曲也姑附備考

〔龍鳴抄上〕長保樂うちうほ

破ひやうし十八これをほろくせりといふ急拍子廿一これをかりやすといふ

〔教訓抄五〕高麗曲壹越調長保樂又長浦樂又長寶樂又泛野舞云中曲

破拍子八謂之保曾呂久世利舞間拍子五十急拍子謂之加利夜須舞間拍子四十七

長保樂  
保曾路久勢利  
賀利夜酒

醋醉樂

〔古今著聞集<sup>十三</sup>〕承平四年三月廿六日、天子<sup>○</sup>來常事殿にて、皇太后<sup>○</sup>藤原<sup>○</sup>の五十算の賀せさせ給けり、廿七日後宴に、式部卿親王以下參り給、舞曲を御覽せられけるに、左大臣<sup>○</sup>藤原<sup>○</sup>右大臣<sup>○</sup>藤原<sup>○</sup>平仲<sup>○</sup>右大將保忠卿大納言恒佐卿庭におりて、崑崙を舞給けり、これ故實たるよし、吏部王記し給ひて侍とかや、

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 醋醉樂

〔伊呂波字類抄<sup>加</sup>〕醋醉樂<sup>カンスイウク</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕高麗曲

高麗壹越調 醋醉樂<sup>加</sup>半須以羅具

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕醋醉樂<sup>いらんす</sup>

破日やうし四七反すべし、急拍子十、三度ひやうしあぐべし、舞のいづるにきうをふく、またの説に亂聲ともいふいかに、かさねてきうをす拍子あげてゐる、みきの物のきりさだまりたるは、是と胡蝶と也、

〔仁智要錄<sup>十一</sup>〕醋醉樂 破拍子四、可彈七反、合拍子廿八、急拍子十、可彈十反、合拍子有、舞出入

彈急此急者即呂歌眉止自女也、長秋卿譜、急拍子打唐拍子、明逸譜云、打三度拍子、基政譜、加

拍子時急三度拍子、破一拍子、一説舞出時用亂聲

〔教訓抄<sup>五</sup>〕醋醉樂 中曲

破拍子四 急拍子十

右物切定タルハ、胡蝶ト此曲ナリ、保延比内裏舞御覽ニハ、末方一人舞之、其後何比ヨリ絶タリト

云事ヲ不知之似左舞出入手候也、

〔樂家錄<sup>二十四</sup>〕高麗壹越調



左 右

秦王

皇仁或林歌、或嵐  
嵎○中略

北庭樂

靺輪八仙○中略

拔頭

靺輪八仙○中略

還城樂

林歌或嵐

同例 大法會

圓教寺供養

長元七年十月十七日

左○中 太平樂○中略

右○中 靺輪

尊勝寺供養

康和四年七月廿一日

左○中 秦王○中略

右○中 靺輪

無量壽院供養

寬仁四年三月廿二日

左○中 蘇莫者○中略

右○中 靺輪

曼荼羅供

有舞樂儀

宇治入道九體堂供養

康治元年六月廿九日

左○中 陵王

右○中 靺輪

八講

美福門院

于時皇御八講久安二年十月四日、御佛供養、同  
后宮開白同九月九日、結願、○中略

第五日結願日、講演了供舞、左○中 還

城樂

右○中 靺輪

朝覲行幸

同○安○保

三年二月十日

左○中 打毬樂○中略

右○中 靺輪

同○承○長

四年正月四日

左○中 拔頭○中略

右○中 靺輪

同○延○保

五年正月四日

左○中 胡飲酒○中略

右○中 靺輪

相撲節

治安三年○中略

拔出同七月廿八日

左○中 青海波○中略

右○中 靺輪

延平三年○中 拔出同(七月)廿五日 左○中 萬歲樂○中 右○中 皇仁

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 崑崙八仙<sup>久呂波世</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕高麗曲

高麗壹越調 崑崙八仙<sup>古半呂波勢半、一說古呂、尋常略崑崙工字、一名鶴舞、都志之舞名、亦</sup>

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕崑崙八仙<sup>いふべし</sup>

破拍子十三、急拍子いくつといふ事なし、まげくうつなり、ふるきふにはきうといはず、はやきやうとぞまゐりたる、破のするにたゞすこし亂聲す、おもてにすゝはなさがりたり、仙人のまうたるとぞいふ、こけをきたるさむげなるていなり、

〔仁智要錄<sup>十一</sup>〕崑崙八仙 破拍子十三、急拍子無定、

〔教訓抄<sup>五</sup>〕高麗曲壹越調 八仙 三五要略號鶴舞、別裝束舞<sup>有面</sup> 小曲、崑崙八仙云、

破拍子十三、急拍子十三

此舞神仙傳云、淮南王劉安好仙、八公乃至、鬢眉皓白、伴舞先吹破、舞人渡事アリ、渡返之後、<sup>加拍子、又</sup>云、舞臺之中、振袖差肩之時、<sup>加拍子、</sup>近來ハ此振舞時、吹小亂聲、天王寺舞人大輪作テ舞侍トカヤ、可尋次急、<sup>唐拍子</sup>古人云、昔ハ急ト云ハズ、ハヤキ様トゾ申ケル、此舞ノ急ハ小童部ノアソブトテ足懸ト云事ノ體ニ侍也、仙宮ヨリ出タルユエニコケノ衣キタリ、スハ、ハナヲタレタリ、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番様

拔頭<sup>有面、別裝束、有入、綾、</sup>八仙<sup>有面、甲、崑崙八仙、云、別裝束、合肘舞、</sup>

〔樂家錄<sup>三十</sup>〕左右舞及人數裝束

石舞 八仙<sup>四人、面、帽子、袴、袍及甲常異、</sup>

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

〔教訓抄七〕舞番樣

桃李華赤白桃李花云、諸用程、皇仁有面甲、皇仁處甲、ト云

〔樂家錄三十〕左右舞及人數裝束

右舞 皇仁四人面帽子、常裝束、甲異、

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

桃李花 皇仁略中

萬秋樂 地久或皇仁

秦王 皇仁略中

三臺 皇仁

同例 大法會

鳥羽九體阿彌陀堂供養 久安三年八月十一日 左略中秦王略中 右略中皇仁

朝覲行幸

同保嘉三年正月十一日 左略中三臺略中 右略中皇仁

同久永三年二月十一日 左略中汴州略中 右略中皇仁

大治二年正月三日 左略中賀殿略中 右略中皇仁

御賀

康和四年 白河院五十御賀 試樂 三月九日 左略中胡飲酒略中 右略中皇仁

安元二年 後白河院五十御賀 試樂 二月廿一日 左略中太平樂略中 右略中皇仁

相撲

此曲ハ舞アリトモ申サズ、高麗ノ參音聲ニ奏ケントゾ、今世ニハ高麗參音聲モナシ、不用之、

〔樂家錄二十四節〕高麗壹越調曲

顔序爲中曲樂曲拍子十六也

〔倭名類聚抄四曲〕高麗樂曲 王仁庭

〔樂家錄二十八節〕高麗曲

高麗壹越調 皇仁庭和字仁幸傳以、尋常略庭字、

〔大日本史禮樂十五〕仁德帝即位、百濟人王仁作難波津歌賀之、古今和歌集序、與義鈔、此曲蓋是也、

〔龍鳴抄上拍樂〕皇仁庭

拍子廿七、又せちあり、公光公延ふたりがならひかはりたり、破ひやうし廿七、急拍子十四

〔仁智要錄十一曲〕皇仁庭 破拍子廿八 一説拍子廿七 急拍子十四

〔教訓抄五曲〕皇仁 有面甲青色黄色中曲、又皇仁庭云、

破拍子十九、又廿七、急拍子十四、  
又廿八、舞間百十、急拍子十四、

此破ニ有三吹樣、付初一返ニ、長ク吹、短カク吹、又中半吹、相違ノ樣也、ミジカク吹ハ京樣ナリ、中分吹ハ奈良樣也、舞人南向テ左右伏肘打時加拍子、天王寺ニハ此破居所舞、此方ニハ此手不、急唐拍、知ノ由ナリ、可尋、舞人押足之時、加拍子、大鼓五許後也、此急ニ有踊事多氏ニハ五度踊、大神舞人ハ三度踊也、謂之皇、仁之踊、春宮御元服ニ奏此曲、喜音樂ニ此舞ノユエヲ可然人ニタヅ子マキラセ侍シカバ、皆文字ニツキタルナリトゾ、オホセラレ候キ、マコトニイハレタル事ニテ侍ナリ、又皇仁庭ト云、コノ庭ノ字尤不審也、

〔樂家錄二十四節〕高麗壹越調

皇仁中曲準、于大曲、



〔教訓抄七〕舞番樣

威城樂片用祖 綾切有面、愛婆云、一說牟子、一說鳥甲、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 綾切舞人面無冠、垂縷、常裝束袍、古圖著鳳凰甲、一本鳥甲

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

玉樹 綾切

同例 大法會

雲林院塔供養應和三年三月十九日 左〇中 玉樹〇中 右〇中 綾切

朝覲行幸

同治〇寬七年正月三日 左〇中 探桑老〇中 右〇中 綾切

嘉保二年正月二日 左〇中 三臺〇中 右〇中 綾切

相撲節

延長六年〇中 拔出 同月〇七廿八日 左〇中 萬歲樂〇中 右〇中 綾切

〔倭名類聚抄四曲〕高麗樂曲 頑徐

〔樂家錄二十八〕高麗曲

高麗壹越調 頑徐加半志興、一本徐作序、

〔龍鳴抄上〕頑徐かんそ

拍子十七大法會の行道に是をすべし、いとひとまゑらぬ物也まひなし、

〔教訓抄五〕高麗無舞曲 頑徐 拍子十二、又十七、謂之頑徐

頑徐

都志 曲中

〔教訓抄〕<sup>七</sup>舞番様

央宮樂 片屑組 都志 近來此舞絶了、又、都志與呂岐云、

〔舞樂要錄上〕舞樂

左 右

秋風樂 都志

〔倭名類聚抄〕<sup>四</sup>高麗樂曲 阿夜岐理

〔伊呂波字類抄〕<sup>安事</sup>阿夜岐理 高麗樂

〔樂家錄〕<sup>二十八</sup>高麗曲 樂曲調法

高麗壹越調 綾切 阿也無利 一名愛嗜女又高麗女又大秣鞆又號綾箱舞、

〔仁智要錄〕<sup>十一</sup>高麗曲 阿夜岐利 拍子十八

〔教訓抄〕<sup>五</sup>高麗曲 壹越調 綾切 面女子、一說鳥甲、中曲又愛嗜女云、高麗女名歟 又大秣鞆云、舞人龜甲形立云 阿

夜岐理云、

拍子十八、舞間拍子百、

此曲アマタノ名侍サダメテヨシ侍ラメドモ未勸出、イカサマニテモ女ノ姿ノ舞ニテ侍ナリ、

口傳云、此曲彌ヲトラズシテ直ニ吹出ス、爲秘說付、此說テハ初二拍子、序吹、不打拍子、初拍子ハ次

壹打之也、能々可令、綾箱也

常說ハ吹心調子、即チ吹當曲、如常樂也 是世ノ人普通ニシレリ、アマタノ說アリ、ヨク／＼ナラフ

ベシ、又此曲ニソライリト云事アリ、ミナイリナムトスルヤウニテ、又ウチカヘリテ舞、謂之綾切、空入 打

返舞時加拍子、口傳云、空入ハ舞入テ後頭力、舞臺ノ端際ニテ歩ミ寄テ、俄ニ立返テ舞ヲ云ナリ、

阿夜岐理

〔扶桑略記付上〕十六 康保三年十月七日丁卯殿上有侍臣舞略○中 次歸德候時中、

〔教訓抄高麗曲壹越調〕貴德

宇治殿賴通藤原御時平等院一切經會ニ正連重名未元服舞胡蝶其體殊美有御威次日召之御覽歸

德華丸者正資孫山村義貞男也母爲正資姫也出時右足摺又破ノ大鼓上ノ果ニ梓ヲ左高差足波先差テ次ニ差反上隨時

也時資見之難此舞損之云々親父吉貞問之何ノ手ノ違留哉時資答云出時足ヲバ左ヲ可摺也破

ノ梓ヲ右高可差也云々吉貞云散手ハ左足ヲ摺ル梓ヲ右高差歸德ハ右足ヲ摺ル梓ヲ左高差也

此事万人所知也如申狀散手歸德同前歟然者無左右舞之差別歟相論此事之間遂及口舌俱問還

非於正資正資不答不言舞人峯九聞相論者拋梓流涕シテ不終其舞殿下令尋其由緒既ニ返於時

資之論因茲時資蒙御勘當三年不被免云々其後時資之流者左足ヲ摺志右高梓ヲ差正資流如先

久右足ヲ摺志左高梓ヲ差也

都鬱志與呂岐

〔倭名類聚抄曲四調〕高麗樂曲 都鬱志與○志與下

〔拾芥抄上末〕高麗壹越調 都鬱志與呂岐

〔樂家錄二十八〕高麗曲調法高麗曲

高麗壹越調 都志津志一本都鬱志與呂岐津字志與呂氣尋常一本鶴舞入仙之舞名亦

〔仁智要錄十一〕都鬱志與呂岐 拍子八

〔教訓抄五〕高麗無舞曲都志 又鶴舞謂之八仙也如何小曲又都鬱志與呂岐云拍子舞間拍子四十五

コノ舞中古ヨリ絶エ了常樂會ノ式舞ニ入タリ仍テ于今役奏ニハ書入テ進也一向法用ノ樂ニ

用之隨分秘樂ノ内ナリ

此與呂岐之字未勘出可尋

〔樂家錄二十四坤〕高麗壹越調曲

〔江家次第<sup>七八</sup>〕相撲抜出

左右各舞<sup>略</sup>○中 散手、歸德王者舞裝束番子如恒、但歸德番<sup>○番原脱、子著面形、</sup>

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

左 右

散手 貴德

同例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左<sup>略</sup>○中 散手<sup>略</sup>○中 右<sup>略</sup>○中 歸德

最勝寺供養 元永元年十二月十七日 左<sup>略</sup>○中 秦王<sup>略</sup>○中 右<sup>略</sup>○中 貴德

相撲節

同平<sup>承</sup>五年<sup>略</sup>○中 抜出<sup>同</sup>〔七月廿九日 左<sup>略</sup>○中 見蛇樂 右<sup>略</sup>○中 貴德

〔教訓抄<sup>五</sup>〕高麗曲<sup>五</sup>、歸德侯

延喜二年正月廿五日甲子、太上法皇<sup>多</sup>○字 御奉賀之日、此舞四人舞<sup>向立</sup> 太平樂ニ被合、舞ヤウアマ

夕候ハザリケム、

〔西宮記 正月<sup>上</sup>〕給蘇甘栗事

天慶八年正月五日、同記<sup>王</sup>○吏部 云、詣右相公<sup>實</sup>○藤原 養所<sup>略</sup>○中 式部卿親王<sup>明</sup>○重 與大臣唱、歸德胡德

曲云々、

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕管絃歌舞、天曆八年正月五日、右大臣<sup>師</sup>○藤原 家にて饗おこなはれけるに、はてつかた

に、式部卿親王<sup>明</sup>○重とおとと歸德を唱へられたりけるに、右近將曹伴野真行、狛梓と思ひつ、

松をとりてす、みけるを、おとと歸德のよしを告給ければ、松をすて、舞けり、真行は高麗舞人

なりけり、此事不審歸德ならば松をばなと梓には用ひざりけるにか、



感<sup>萬歲政</sup>世和世理<sup>此詞ヲ詠ジテ後退テ左右腰ヲ突見梓末<sup>此鎮詞近來不諫云々</sup></sup>御物語<sup>此說光次破六返執梓向北拾足之時<sup>如拍子</sup></sup>入舞人時又吹亂聲番子員<sup>六人四人略定二人相撲之時番子走如散手</sup>左右替也鯉口ノ面時番子著面<sup>本帽子也</sup>各咲力  
タチ、笏ヲ持ツ、

古人云清抄<sup>清體源</sup>子ハ咲歸德也<sup>常樂會冠者面依著變輪也</sup>

或人云清抄<sup>清體源</sup>子四人也以老人色黃爲上<sup>臆以色黑爲最下云々</sup>右舞人時高此舞有給言事未切也、

〔大日本史<sup>禮樂十五</sup>〕按二書<sup>體源抄抄</sup>並引漢書云神爵中封匈奴日逐王爲歸德侯是似以本曲爲起于此然漢書無作樂事二書蓋依曲名附說也、

〔體源抄<sup>九</sup>〕貴德

拾遺云貴德作物ハ破ニハ无秘急其代用之也其拍子如常三鼓曰充也而シテ口傳ニテ始自吹出上拍子ニ打テ上拍子之早ニハ上之上ケ定又上ナリ還可叶急之拍子也以此口傳秘事也、

〔體源抄<sup>十一</sup>〕舞曲古今相違事

古貴德四人立テ舞之今一人舞之、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

散手<sup>別裝束加破陣字有二樣寶冠龍甲</sup>貴德<sup>別裝束附鎧候云有二樣鯉口人色</sup>

〔續教訓抄<sup>舞案譜</sup>〕或人云<sup>略</sup>中貴德別裝束面甲劔ヲハキフカケス梓ヲモツナリ其面ニヤウアリ、

鯉口人色候字アリ、

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

右舞 貴德<sup>二人</sup>面帽子甲及袴常異袍褌襦腰帶太刀垂平緒梓番子二人常裝束内一人帶太刀、

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

打毬樂 壇破

同例 大法會

法勝寺金泥一切經供養 天仁三年五月十一日

左 中 打毬樂 中

右 中 壇破

朝觀行幸

元永二年二月十一日

左 中 傾坏樂 中

右 中 壇破

〔倭名類聚抄 四曲〕

高麗樂曲 歸德侯

〔樂家錄 二十八曲〕

高麗曲

高麗壹越調 貴德 氣止具一名歸德侯

〔龍鳴抄 上〕

貴德侯 いふべし

破拍子十急拍子十六散手のさうにすたゞし裝束ふたつなしすまるのやうに、いづれの散手に

もあふ急につくり物ありすなはち造物といふがくのあるなりまひには仁和樂をするなりい

でいるにこまの亂聲なり散手のごとく番子ありその番子はふたつのやうありうそおきおも

てするおりは番子のをもてありおの／＼のわらひたるかたち也

〔仁智要錄 十一曲〕

歸德侯 破拍子十急拍子廿

〔教訓抄 五曲〕

歸德侯 別裝束舞有面二横 口、中曲

歸德侯謂之破拍子十急拍子十六

漢書曰神爵中匈奴日遂王先賢憚欲降漢使人相聞遂詣京師漢封日遂爲歸德侯 川口清子抄

漢書曰神爵中匈奴日遂王先賢憚欲降漢使人相聞遂詣京師漢封日遂爲歸德侯 川口清子抄

地破

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 地破<sup>和波利</sup>

〔口遊<sup>音</sup>樂〕地破 一名弄玉

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕高麗曲

高麗壹越調 地破<sup>波</sup>幸奈利、一名金玉舞、又登玉舞、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕地破<sup>はり</sup>

拍子十六、こまぼこのさうぞくに、ともゑを五つけたるなり、左右のひちに、左右のひぎに、まかふにつくるなり、はにのたまを、いつもちたり、ようあいだとりいでゐるなり、

〔仁智要錄<sup>高麗</sup>〕地破 拍子十二

〔教訓抄<sup>五</sup>〕高麗曲壹越<sup>見</sup> 地破 裝束 如狛梓 中曲

登玉舞云<sup>拍子十六</sup>、舞間拍子<sup>百七十</sup> 地玉ヲ五持テ舞、

コレガユライモミヘタル事ナシトモ繪ヲ五ツ所ニ付タリ、左右ノヒヂ、左右ノ膝、マツ向トニツクナリ、ハニノ玉ヲ五フトコロニモチテ舞ノ間ニトリイダシテ、トモ繪ニアツルナリ、玉ヲ吹被ト申メリ、或右舞人申侍シハ、玉ノ中ニガマト云草ノホヲコムベキナリトゾ申傳、<sup>不知其由</sup>渡返立定、<sup>加拍子</sup>近來紙ヲマロガシテモツナリ、童舞ニハ時花ヲモタセタリ、常樂會<sup>十六日</sup>行道并蘇利古樂ニ用之、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞香樣

打球樂<sup>別裝束、打木持、玉振</sup> 地破<sup>別裝束、取</sup>

〔續教訓抄<sup>舞家錄</sup>〕成人云、<sup>中</sup>地破、冠マカフアリ、別裝束、玉ヲ懷中シテ舞臺ニテトルナリ、

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

右舞 地破<sup>舞人冠、綏袴、常服、襦袢、腰帶</sup> 地玉、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕<sup>樂</sup>敷手<sup>まき</sup>

拍子十四、このまひ輪臺にあはす、わをまうが故に、<sup>虫</sup>

〔仁智要錄<sup>十一</sup>〕<sup>高麗曲</sup>志岐傳 拍子十四

〔教訓抄<sup>五</sup>〕<sup>高麗曲</sup>志岐傳 敷手 名重來舞、中曲又志岐傳云、<sup>拍子十二、四、舞間拍子百八十、</sup>

此曲ヲ奏ト思時先吹心調子、吹當曲也、舞人大輪作次小輪作、上手下手二所作之、仍青海波ニ合タ

リ、小輪之後北向時、<sup>加拍子</sup>又云、大輪之後小輪ニ至タル時、<sup>加拍子</sup>舞人タヅヌベシ、<sup>有説、初拍子此</sup>

舞主上御元服ニ用之、裏頭樂ニ合タリ、ソレモ文字ニ付タル事ニテ侍ナリ、<sup>古老云、此樂ニ三鼓ニ</sup>

レ之云々、而似上拍子也、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕<sup>舞番樣</sup>青海波、<sup>有甲、別鼓、束、舞輪、畫、不、</sup>敷手、<sup>志岐傳云、有、大</sup>

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕<sup>舞</sup>左右舞及人數裝束

右舞、敷手<sup>四人</sup>常裝束、袍、

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕<sup>舞番</sup>

左 右

輪臺青海波 敷手

同例 大法會

福勝院塔供養、仁平四年十月廿一日、<sup>左○中</sup>青海波、<sup>略○中</sup>右○中敷手

上東門院御堂供養、長元三年八月廿一日、<sup>左○中</sup>輪臺、<sup>略○中</sup>右○中敷手

相撲

同○承平六年○中、<sup>略</sup>拔出、同七月廿九日、<sup>左○中</sup>萬秋樂、<sup>略○中</sup>右○中敷手



朝覲行幸

康平三年三月廿五日

左○中

青海波

右○中

狛狛

同年○永久四廿日

左賀殿○中

右狛狛

相撲節

寛弘二年

拔出

同(七月廿九日)

左○中

還城樂○中

右○中

狛狛

俱倫甲序

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>調〕高麗樂曲

俱倫甲序

〔拾芥抄<sup>上</sup>樂〕高麗壹越調

俱倫甲序

〔樂家錄<sup>二十八</sup>調法〕高麗曲

高麗壹越調

黑甲序

具呂加不志與、一本具呂加不志與、一本黑作俱論二字、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>樂〕俱論甲序

ふそか

拍子十三、大法會の行道にする物也、

〔教訓抄<sup>五</sup>高麗舞曲〕黑甲序

又俱倫甲序、拍子十一、又十二、

コレモ舞ナシ、古譜ハ高麗行道樂ニ奏此曲イヘドモ、近來タマ／＼右樂ヲ奏ニモ狛狛スル也、此

樂ヲ人シラス樂ナレバ、サヤウニシナシタルニヤ、

〔樂家錄<sup>二十四</sup>加節〕高麗壹越調曲

黑甲序

爲小曲

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>調〕高麗樂曲

志岐傳

〔伊呂波字類抄<sup>志</sup>人志〕志岐傳

高麗樂

〔樂家錄<sup>二十八</sup>調法〕高麗曲

高麗壹越調

敷手 志氣傳 一本志岐傳、又志岐手、一名重來舞、

志岐傳

此舞ハ古人説云高麗ヨリ渡ケル時五色ニイロドリタル棹ニテ船ヲ指テ渡タリケルヲヤガテ  
 四人肩ニ係テ舞始タリト申傳タリサレバ于今龍頭鶴首サスカヅラノ童部著盤繪差此棹也謂  
 之棹持舞云舞人東西互行替履舞之後更還本方即如但太神舞人ハ棹カハシノ後加此舞ノ手  
 ニコシカヘシ棹越手アリ多氏ニモ少々舞タルト申スル大神右舞人ハ舞タリ  
 又ツキカヘシト云手アリ天王寺ニ舞之此方ニハシラヌ手ナリ入綾ノ時ニ大鼓前ニテ二人シ  
 テ舞ナリ押足ラシテ拍子ヲ待テ我棹ヲ人ノニツキカヘテトリテ又シバラク舞テ又ツキカヘ  
 テトリテ入也有舞事ニ奏此樂何ノ所ニモ蘇利古之曲舞蘇利古樂依秘藏用之道  
 又近來行道ノ樂ニ用之昔ハ奏黑甲序ケルナリ

〔教訓抄〕舞番樣

太平樂

有面請肩祖執棹拔細有更居突 狛棹高麗棹云別裝束執棹

〔樂家錄〕

三十七 左右舞及人數裝束

右舞

狛棹四人冠細纓符異袍襦襦腰帶 狛棹

〔舞樂要錄〕舞番

左

右

太平樂

狛棹

打毬樂

埴破 或狛棹

同例 大法會

雲林院塔供養

應和三年三月十九日

左○中 秦王略○中

右○中 狛棹略○中

法勝寺御塔供養

永保三年十月一日

左○中 打毬樂略○中

右○中 狛棹略○中

興福寺塔供養

長元四年十月廿日

左○中 太平樂略○中

右○中 狛棹略○中

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

蘇合 進走禿 已上大曲

同例 八講

四條宮御八講寛治二年六月十九日被始了、同日廿二日結願、初日夕座了供舞 左蘇合 右進宿德

朝覲行幸

延久二年二月廿六日 左略中 太平樂 右略中 進宿德

〔倭名類聚抄四曲〕高麗樂曲 狛鉢古萬保古

〔樂家錄二十八曲〕高麗曲

高麗壹越調 狛鉢古萬保古 一本梓作鉢、一名花釣樂、又號棹持舞、

〔龍鳴抄上狛樂〕狛鉢こまほこ

一越調音拍子十八、右ののりじりのやうにして、さはをもちたり、太平樂にあはす、

〔仁智要錄十一高麗曲〕狛鉢 梓或作鉢 拍子廿二公光說 一說拍子十八公延說

頭書 明退笛譜云、拍子廿二、公光說也、公延說頗脫落、仍不記也、

〔雜秘別錄〕狛鉢

さをとるに秘事どもあるとかや、天王寺にはつきかへしといふをひす、多氏にはこしまはす手をひするとかや、

〔教訓抄五高麗曲壹越調〕狛鉢 別裝束 中曲

執鉢舞云、拍子十八又廿二十八拍子、説、返二付第七、舞間拍子二百廿、棹長一丈一尺七寸、口七分、ト云、

〔拾芥抄〕上末高麗壹越調 進宿德

〔樂家錄〕二十八曲調法高麗曲

高麗壹越調 進走德志牟志也字止具一本德作禿一名進宿德又號若舞

〔龍鳴抄〕上樂進走德とくそ

拍子廿退走德にをなじありさまの物也たゞしこれをばわかまひといふ退走德をばをいまひといふばうしをまたり大曲なり蘇合にあはすこのふたつは大曲なれどもそりこをとらず

〔仁智要錄〕十一曲進宿德 此曲頗早彈 拍子廿

〔教訓抄〕五高麗曲壹越調進宿德 有面牟子 大曲 謂之進走禿拍子二十舞間拍子二百若舞云

此曲ノ様委ク申タル物ナシ世人ワカマヒト申タリ面赤眉此舞モ合肘ノ舞ナリ渡カヘリヌレバ加拍子紀氏物語云前へ進ミ走テ右肩ヲ指シテ落居手ヲ中古マデ舞侍ケルヲ近來舞ウシナハレテ候也長元臨時樂マデハ此手ハ侍ケリ如林歌前へ後へ走手ハマコトニアラマホシク侍左ノ大曲ニハ走ル事ハ每曲侍ハ尤可對侍ル

古老語云古舞ノ中ニハ當曲極タル大事ノ曲云仍常樂會ノ安幕ニシテ紀氏舞人等ニ談義シテ多氏舞人モ不審ヲヒラキテ舞ケリ近來ハサルサタニモオヨバズ散々ノ事ドモニテ侍ナリ是モ大曲ノ内ナレドモ後參ハトラズサダメテヨシ侍ルラムタヅヌベシ進走禿退走禿調樂也於執柄取下有右樂時主人召仰云

〔教訓抄〕七舞番樣

蘇合有甲諸眉進宿德有面牟子合肘

〔樂家錄〕三十七左右舞及人數裝束

右舞 進走禿四人面帽子常裝束袍



モ、今世ニハソノ手舞絶タリ、此手ノユヘニコソ退走禿トハ名付テ侍ナレ、多好茂之時ニハ、輪ヲ作テ舞ケリ、何比ヨリトマワリタリトモ傳ヘズ、

〔體源抄 十一下〕舞曲古今相違事

古退走禿大輪ヲ作テ舞、今ハ不然、

〔教訓抄 七〕舞番樣

春鶯囀 有甲、諳、眉、根、天、長、寶、壽、樂、云、 退宿德 有面、半、子、合、肘、退、走、禿、ト、云、

〔樂家錄 三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 退走禿 舞四人、面、帽子、常裝束、袍、

〔舞樂要錄 上〕舞番

左 右

春鶯囀 退走禿 略○中 已上大曲

同例 大法會

同成寺法金堂供養 治曆元年十月十八日、 左 略○中 秋風樂 略○中 右 略○中 退宿德

朝觀行幸

同 治○ 寬五年正月十三日 左 略○中 春鶯囀 右 略○中 退宿德

同 和○ 康四年正月二日 左 略○中 玉樹 略○中 右 略○中 退宿德

天仁元年十二月十九日 左 略○中 太平樂 略○中 右 略○中 退宿德

〔嚴有院殿御實紀 三十一〕寬文五年五月十九日、舞樂御覽あり、略○中 青海波蘇合香退走禿は、四十年來

にて再興ある所とぞ、

〔倭名類聚抄 四曲調〕高麗樂曲 進宿德

同平○承五年○中 拔出 同(七月)廿九日 左皇帝○中 右古鳥蘇

〔長秋記〕天永二年八月十一日、右近衛府試樂略○中 白丁最手者五六人許令相撲、次亂聲、南慢前立、大

鼓、鉦鼓、梓等、舞人右近將曹多忠方振梓、次舞古鳥蘇、舞人四人右近將曹多忠方、府生多近方、左衛門府生爲季、

〔教訓抄五〕高麗曲壹越調、古鳥蘇

天養元年十一月十二日、定考、依上卿内大臣仰左賀王、右舞如忠舞不著冠、大劍、不指、笏、大旨爲新儀、

又舊例可尋又舊例可尋承久二年九月十九日、水無瀬殿ノ舞御覽有古鳥蘇、吹高麗調子式賢但不吹時拍子如

只常也元可吹後參如例但依勅定不止音樂、後參久經行入綾舞、是雖爲新儀、堀河院御時、以勅定蘇

合入綾光季舞、以其例、今日蘇合入綾アルベシ、仍古鳥蘇後參以後有一曲其興アリヌベシト依被

仰下、兩人隨分曲盡了、歡慶シカラシメタリケレバ目出シ、仍以賴資辨於勅使兩曲ノ入綾尤メヅ

ラシ勅庭外輒不可仕、此說尤秘藏云々、

退宿德

〔倭名類聚抄四〕高麗樂曲 退宿德宿音

〔樂家錄二十八〕高麗曲 退宿德

高麗壹越調 退走德太以志也字一本德作禿、一名退宿德、又號老舞、

〔龍鳴抄上〕退走德たいそ

拍子十三、いくかへりといふことなし、まひのいるにまたがふべし、拍子あぐるもまひにまたが

ふべし、大曲なり、春露囀にあはす、

〔仁智要錄十一〕退宿德 宿德作走禿 拍子十六

〔教訓抄五〕高麗曲壹越調、退宿德 有面牟子 大曲 謂之退走禿拍子十六、舞間拍子二百老舞云、

此舞樂ノ事、委シルセルコトナシ、世人ヲイ舞ト云、人色ノ面眉白コレモ合肘ノ舞ナリ、渡事アリ、

渡返テ立定時加拍子、紀氏口傳云、此曲後退走左右見上見事、向合後合テ、中古マデハ舞侍ケレド

三五要略云<sup>十三</sup>拍子初返三、第二返<sup>四</sup>、喚頭<sup>六</sup>、舞間<sup>拍子百五十</sup>。

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

團亂旋<sup>有甲盾祖</sup> 古鳥蘇<sup>有面、但近來不用之、冠着、劍笏指、執三後參、</sup>

〔續教訓抄<sup>舞案譜</sup>〕或人云<sup>略</sup> 古鳥蘇冠ニ劔ヲハキ笏ヲサス、後參アリ、昔ハ面アリ、今ノ世ニモチ

ナズ、

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

右舞 古鳥蘇<sup>六人</sup>冠<sup>緩</sup>常裝束、袍、笏、腰<sup>挾</sup>後參、

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

左 右

團亂旋 古鳥蘇<sup>略</sup> 已上大曲

同例 大法會

雲林院塔供養<sup>應和三年三月十九日</sup> 左春鶯囀<sup>略</sup> 中古鳥蘇

金剛心院供養<sup>仁平四年八月九日</sup> 左<sup>略</sup> 賀殿<sup>略</sup> 中 右<sup>略</sup> 中古鳥蘇

上東門院御堂供養<sup>長元三年八月廿一日</sup> 左蘇合<sup>略</sup> 中 右古鳥蘇

朝親行幸

嘉保二年正月二日 左<sup>略</sup> 團亂旋<sup>略</sup> 中 右<sup>略</sup> 中古鳥蘇

同<sup>和</sup> 六年正月二日 左<sup>略</sup> 中 三臺<sup>略</sup> 中 右<sup>略</sup> 中古鳥蘇

御賀

仁平二年<sup>鳥羽院五十御賀</sup> 法會 三月七日 左<sup>略</sup> 中 太平樂 右<sup>略</sup> 中 古鳥蘇

相撲節

同○康 四年正月二日 左○中 赤白桃李花○中 右○中 新鳥蘇

御賀

安元二年○後白河院五十御賀 賀宴 三月四日 左○中 太平樂○中 右○中 新鳥蘇

相撲節

延長六年○中 拔出 同○七 廿八日 左皇帝○中 右新鳥蘇

〔江家次第第八月〕相撲拔出

左右各舞時大曲各一左蘇合香、右新鳥蘇、

〔倭名類聚抄曲四調〕高麗樂曲 古鳥蘇

〔拾芥抄上末〕高麗壹越調 古鳥蘇曲大

〔樂家錄二十八〕高麗曲

高麗壹越調 古鳥蘇 古止利曾

〔龍鳴抄上〕古鳥蘇リそ

是をふかんとて高麗調子をふくといふ人、ことしらぬ物なり、ことの有さま、新鳥蘇にたがはず、蘇利古あり、かぶりして笏こしにさしたるまひなり、團亂旋にあはす、大曲なり、喚頭あり、

〔仁智要錄十一〕古鳥蘇 拍子十三、但初反拍子三、第二反四、換頭六、舞百五十拍子、

〔教訓抄五〕古鳥蘇

謂之高麗調子曲、拍子十加、舞間拍子、百五十冠著劔面、指近來、

先欲此曲奏時吹高麗調子、但依爲秘事常吹心調子云々、又此調子興福寺常樂會之後、日西樂門奏之、用略定之初返拍子、此内有五拍子處、謂之古鳥蘇待、第二返拍子、序吹也爲秘事、仍常不吹之、以第三返之樣近來用初返拍子、喚頭六拍子、此舞空渡ト云手アリ、其手舞終、立、定、時加拍、喚頭返付樣、如新鳥蘇

古鳥蘇



口傳云、喚頭返吹樣、序吹之間五返一度可吹、喚頭破吹時者三返一度加拍子、後二度一作一體抄作二度至蘇利古時每度付之吹也、

合肘舞也、執後參、拍子三五略五略五略譜

〔樂家錄二十四〕高麗壹越調曲三鼓加節、拍子十六云々

新鳥蘇新樂、大曲也、高麗曲皆新樂也、

〔教訓抄七〕舞番樣

皇帝在甲、昔有劍、加三破陣字、譜肩福、新鳥蘇在面、甲、合肘舞、執後參、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

右舞 新鳥蘇四人常裝束、袍、甲、異、帽子、後參桴、日、有、面、抄

仰即後參桴者、此曲舞人四人出舞之、而後下、腕二人入、于樂屋持桴、復逆授之上首、而二人共入于樂屋、後持桴、姑奏入合終曲、故謂之後參桴也、

〔舞樂要錄上〕舞番

左 右

皇帝 新鳥蘇略○中 已上大曲

同例 大法會

雲林院塔供養應和三年三月十九日 左略○中 萬歲樂略○中 右略○中 新鳥蘇

法勝寺御塔供養永保三年十月一日 左略○中 蘇合 右略○中 新鳥蘇

興福寺塔供養承曆二年正月廿七日 左略○中 春鶯囀 右略○中 新鳥蘇

八講

堀河院宸筆御八講長治元年八月一日被三始行、 第六日 五卷日 左團亂旋略○中 右新鳥蘇

朝觀行幸

〔雜秘別錄〕新鳥蘇

八教訓抄  
高五

屈曲登

越調〔新鳥蘇〕

有面甲

大曲

謂之納序曲

十拍  
二于

舞間拍子

四

先欲此曲奏時先吹納序有二說次古彈如亂聲物已上拍子打樣譜有與福寺住僧圓實尾張得業語云公賴雖究高麗樂未習古彈曲然間去長元年中高陽院歌合右方人爲遂所願參住吉社之次濟政卿召公賴於宿康高麗樂談之間公賴申云古彈師說未悞今日可申請者卿被答云尤可然但恐忙無暇不能委授宜以此譜可吹浮卽以自筆譜一紙被賜授公賴了公賴申云於譜者賜了可承師說者付其詞被吹此曲數廻云々今日所願有是者爰公賴耳雖聞樂音眼不見文字久送多歲未遇賢友今禪下得業明還

也得

明暹

譜說深智樂意願披譜令曉我情者卽圓寶稱對此譜詞吹三返其時公顙泣々聞君之音曲與濟政卿所吹無一乖違哀哉古今雖殊雅音惟同卽以此說欲授息公延者仍彼濟政卿自筆譜傳賜公延了公

公

地丁

延背世之後男公重給基政了基賢何時圓實給行真同次第相傳如此吹此曲次吹出一返拍子初近

之三

第三返 拍子四 喚頭 拍子六 急吹樣大旨同詞也 可授師傳也 舞人東西互二行替屢舞之後更還本方打丁

本主

力打丁

丁左右袖初吹急，加二拍子

無舞曲

都志 甘醉樂 狛龍 吉簡 進蘇利古 顔序 新河浦 黑甲序 常雄樂 狛犬 造物

新鳥蘇

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕高麗樂曲 新鳥蘇

〔伊呂波字類抄<sup>人志</sup>〕新鳥蘇

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕高麗壹越調 新鳥蘇<sup>大</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕高麗曲

高麗壹越調 新鳥蘇<sup>志</sup> 牟止利蘇、古彈納序、但舞樂之時最初笛吹、古彈以笛<sup>三</sup>、同音吹納、序畢吹<sup>二</sup>當曲<sup>一</sup>也、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕新鳥蘇<sup>新と</sup>

右の大曲とこれをいふ、皇帝のたうにこれをす、まづ此がくをふかんとては納序をふく、これによりてこの樂を納序の曲といふなり、つぎに古彈をふくべし、古彈は絶たる物也、たゞしせいせい<sup>○</sup>の三位と申ひとをはしき、そのてより兵庫允公賴譜を給はる、師説きく事兩三反、譜をしごろもたれども、まらぬが故にみず、みゝに師説をとめてたれども、ことのつゞきおぼえず、公光公延ふたりのこなり、それ譜もまらず年比あるほどに、おわりのとくごうといふ人いでき給へる、この道をこのまるゝにをくをきはめたる人也、其人に公賴この譜をみせまうしてふかせてきゝて、師説のありさまを申させたり、ふきとゝのへたるを古今ことなれども、むかしの三位、いまの禪師、たゞおなじことなり、いとゝあはれなりと申けり、そのとくごうの譜、并師説あうたり、喚頭あり、蘇利古あるわらひこぶらにゑみたるかたちにくけたり、三反のやうに拍子あぐ、

〔仁智要錄<sup>十一</sup>〕新鳥蘇

拍子十七 長秋卿譜云、拍子十六、明暹譜云、拍子十二、但初反拍子

古事類苑

樂舞部九

高麗樂樂曲

振鉢師子 一曲 一鼓

高麗樂ハ高麗國ニ起リ、我國ニ傳ヘタル樂ヲ云フ、而シテ我國ニ於テ擬作セル樂曲モ、高麗樂ノ調ヲ用キタルモノハ、高麗樂ニ收メタリ、高麗樂ニハ壹越調平調雙調ノ三曲調アリ、唐樂ニ對シテ右樂又ハ右方樂ト稱ス、猶ホ樂舞總載篇及ビ唐樂樂曲篇等ヲ參看スベシ、振鉢ハ一ニ厭舞ニ作リ之ヲエンプト云フ、凡ソ舞樂ノ初ニハ、必ズ先ヅ此曲ヲ奏ス、左方右方互ニ出デ、舞ヒ、了リテ更ニ左右並ビ進ミテ合舞ス、一曲モ亦左方右方各、一人ニテ舞ヘリ、一鼓ハ蘇利古若シクハ崑崙八仙ト番ヒ、師子ハ狛犬ト番ヒテ、並ニ左方ニ屬スレドモ、其樂調ノ如キハ、今之ヲ知ルニ由ナシ、

壹越調樂曲

〔拾芥抄上末〕高麗壹越調

新鳥蘇大曲

古鳥蘇同

退宿德同進宿德

進宿德

狛犬

皇仁庭

阿夜岐利

壇破

志岐傳

俱

論甲序 歸德

高麗龍 犬

顏徐

新河浦

長保樂

進曾利古

遍鼻胡德

石川

酣醉樂

靛輪八仙

新秣羯 納蘇利

桔棹

常雄樂

作物

仁和樂

延喜樂

胡蝶

都鬱志與

岐

〔敎訓抄高麗〕壹越調曲

新鳥蘇

古鳥蘇

退宿德

進宿德

狛犬

壇破

皇仁

綾切

敷手

延喜樂

仁和樂

保樂 胡德樂

石川 胡蝶

新末羯

八仙

貴德

納蘇利

○中





〔樂家錄二十八〕中華曲

盤涉調 遊兒女由字仁志與一名遊字女又遊人女又人字女又人字兒又遊兒子又戀女子

〔仁智要錄十〕盤涉調 遊字女 遊或作悠 字或作兒 拍子十 南宮橫笛譜云拍子八、小曲 新

樂 无舞 明遞橫笛譜云入角調

〔教訓抄六〕盤涉調 遊字女 拍子十 新樂

此樂モ大神氏ニハ不吹、サレバ此家ニモ不侍シテ則成習侍也早八カコ加三拍子喚頭アリ習フ

所ハ反度ニハ喚頭一反吹出一反吹也曳物ノ說ニハ喚頭ヲ二返吹云豐原氏說ニハ於喚頭者時

元之時絶畢有忠拍子說宋不延之或書云隋煬帝並子有誤脫作之遊兒女改近宮也

〔樂家錄二十四〕坤盤涉調曲

遊兒女新樂、中曲、當曲、擊羯鼓、拾鉦鼓、

盤涉調曲有白柱、歷代樂府並無所見、今詳應白紵之誤、柱與紵音相近、席上腐談曰、玉藻云、士不衣紱、鄭氏注云、織染糸紱之釋文云、織音志、今訛爲注、遂稱織絲爲注、絲志注聲相近也、或寫爲字、絲則又轉訛矣、可見柱紵音易訛也、通志樂略曰、白紵歌有白紵舞、吳人之歌舞也、吳地出紵、故輿其所見以寓意焉、始則田野之作、後乃大樂氏用焉、其音入清商調、故清商七曲有子夜者、卽白紵也、在吳歌爲白紵、在雅歌爲子夜、

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕盤涉調 白柱 無舞

〔伊呂波字類抄<sup>波事</sup>〕白柱 <sup>ハクチウ</sup> 角調

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

盤涉調 白柱 <sup>波具千字</sup> 一名德貫子、又兒女子、

〔龍鳴抄<sup>下</sup>〕白柱 <sup>ちう</sup>

拍子十、はやきものなり、この十拍子のやうをよの人ならやうといふ、また九拍子のせちあり、これを京やうと云、ゆへはまらず、三度にあぐべし、

〔仁智要錄<sup>十</sup>〕白柱 拍子九 一說拍子八 <sup>南宮長秋</sup> 綿譜云、拍子八、又云、有譜、拍子十、

小曲 新樂 無舞 明遠橫笛譜云、或入角調、

〔教訓抄<sup>六</sup>〕白柱 拍子九又八 新樂

謂之德貫子、有三說、一者拍子九、<sup>早八拍子</sup>加三度拍子、是兒女子、<sup>京樣云</sup>二者拍子十、<sup>拍子同前</sup>又是

云 <sup>案</sup>大判官 <sup>惟季</sup>ハコレヲ秘説トセリ、三者 <sup>忠</sup>拍子ハ可<sup>也</sup>用、<sup>類</sup>コレハイブレノ拍子ニモアルベ

シ、又口音ヲ吹樣アリ、メヅラシキ説ナレバ、サモ、シラム時ニ吹ベシ、<sup>傳雅三位之説、可爲古樂物云、</sup>

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕角調曲 遊字 <sup>○字原作字、女</sup>

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕盤涉調 遊字女 <sup>無レ舞</sup>

殿此調子ニハ樂スクナシトテ吹トマメ給云々此樂有二說一者早八拍子羯鼓二者早四拍子打又古樂揚拍子上ト古老申サレ候キ古樂說ハゲニトモオボヘズ侍用船樂說本說ハ八羯鼓也

古記云千秋樂近代之人監物所作云々而演雜入目録云々是三品譜云本朝所作之非云城樂

此事イマダオトシスヘズ唐ノ目錄ヲ見テ落居スベシ

〔體源抄二下調〕千秋樂 拍子八又十六拍子新樂小曲無舞

〔樂家錄二十四坤〕盤涉調曲

千秋樂新樂中曲當曲

長元樂

〔教訓抄六〕長元樂 拍子十六 新樂

此曲長元樂ノ大嘗會ノ時從三位源朝臣濟政作之或ニハ傳羅世人千秋樂ノ急ト申ハ辭事ナリ

謂長元樂也播磨三位說可云德菓子也コレハカキイルベクモ候ハズ世ニモ人モチキヌ物ニテ

侍ドモ任六條入道之說傳子則成之了管絃ノ時シテモテアソブベシ早四拍子加一拍子

角調樂曲

〔倭名類聚抄四〕角調曲 曹娘禪脫 白柱 遊字○字原作字一本改女

〔大日本史禮樂十五〕按和名鈔明退笛譜並立角調部而仁智要錄龍鳴鈔拾芥鈔等諸書不別立其

部諸曲皆入般涉調角調本般涉支調故諸書互有分合其實非有異同也

曹娘禪脫

〔倭名類聚抄四〕角調曲 曹娘禪脫

〔秋苑日涉四〕渾脫

角調曲有曹娘渾脫問襄錄以謂宋之間姜名因演爲曲宋之間河陽時曹娘按此說未確沙陀調

曲有曹婆筑曹娘曹婆疑是一人公孫大娘石火胡之類當時工此伎者耳

白柱

〔倭名類聚抄四〕角調曲 白柱

〔秋苑日涉四〕白柱



鷄鳴樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕盤涉調 鷄鳴樂 無舞

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中法 中華曲

盤涉調 鷄鳴樂 計以女以羅具

〔仁智要錄<sup>十</sup>〕盤涉調 鷄鳴樂 拍子十

〔教訓抄<sup>六</sup>〕盤涉調 鷄鳴樂 拍子十 新樂

此樂大神氏ニハ不相傳曲也從六條入道<sup>基通</sup>手尾張ノ<sup>則茂</sup>傳授樂之内也從則茂之手予傳へ習

ヒテ侍也<sup>有喚頭子也</sup>吹出不似普通之樂<sup>如三度拍子也</sup>

古記云鷄鳴本作啓明云者明皇名也鷄鳴時歌之或云鷄鳴歌者林歌也

或說云承和御時<sup>〇仁</sup>臨時深更還御時奏此曲爲退出音聲

千秋樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕盤涉調 千秋樂 無舞

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中法 中華曲

盤涉調 千秋樂 勢半志字羅具

〔大日本史<sup>禮樂十五</sup>〕按教坊記有千秋樂唐書云開元中以八月五日爲千秋節天下譟樂千秋樂蓋

起此本曲恐與此同曲也

〔龍鳴抄<sup>下</sup>〕盤涉調 千秋樂

拍子八まひなしはやきものなり盛物よりよしが後三條院の大嘗會につくりけるを入道左大

臣殿<sup>〇源</sup>のこの調子にもものすくなしとてひろうせさせ給ひたりとぞ申す

〔仁智要錄<sup>十</sup>〕盤涉調 千秋樂 拍子八 新樂

〔教訓抄<sup>六</sup>〕盤涉調 千秋樂 拍子八又十六拍子 新樂

此曲後三條院ノ康治三年大嘗會風俗所ノ預王監物賴吉吹トメ給云々奉勅作而入道左大臣

德實子

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕盤涉調曲 德實子

〔大日本史<sup>禮樂十五</sup>〕實疑實之訛蓋唐得實子曲太異外傳云明皇曰朕得楊貴妃如得至寶乎乃製曲子曰得實子又曰得鞍子蓋實字體近似故誤耳

盤涉參軍

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕盤涉調曲 盤涉參軍

〔樂考<sup>般涉調</sup>〕般涉參軍

般涉參軍は後漢より以後弄參軍戲といふ事あり唐に至り李仙鶴といふ者此伎を善すといふ事見えたり

〔大日本史<sup>禮樂十五</sup>〕按樂府雜錄云黃幡綽張野狐弄參軍始自漢館陶令石耽耽有賊犯和帝借其才免罪每宴樂卽令衣白夾衫命優伶戲弄辱之經年乃放後爲參軍誤也開元中有李仙鶴善此戲明皇特授韶州同正參軍以食其祿陸鴻漸撰詞言韶州蓋由此也由是考之此曲本因李仙鶴得名而以其入般涉調故名般涉參軍乎附待後考

永寶樂  
登貞樂

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕盤涉調曲 永寶樂 登貞樂

承秋樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕盤涉調 承秋樂<sup>無舞</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

盤涉調 承秋樂<sup>勢字志字羅凡</sup>

〔仁智要錄<sup>十</sup>〕承秋樂 拍子十

〔教訓抄<sup>六</sup>〕承秋樂 拍子十 新樂

是モ同ジ相傳<sup>大戸</sup>也此ノ家ニハツタヘヌ樂ドモナレドモ絃管ノ一物ダチニ申アハセ侍シ

カバ昔ヨリ今ニ物ヲ習フ道サノミコソアレト申サレ侍シ時ニ習アツメテ侍也<sup>有思</sup>拍子加三二

度拍子

盤涉調 感秋樂加李志字羅具

〔教訓抄盤涉調〕感秋樂拍子十 新樂

大戸清上作之有思拍子加三度拍子予相傳也

〔樂家錄二十四坤三鼓加節〕盤涉調曲

感秋樂新樂中曲當

山鷓鴣曲

〔倭名類聚抄四曲調〕盤涉調曲 山鷓鴣曲鷓鴣鳥名也

〔大日本史禮樂十五〕按、本書坊記曲名有山鷓鴣蓋是也、

竹林樂

〔樂家錄二十八曲調法〕中華曲

盤涉調 竹林樂千具利李羅具

〔龍鳴抄盤涉調〕竹林樂ちくり

拍子十、舞なしはやき物なり、三度拍子にあぐべし、新樂

〔仁智要錄盤涉調〕竹林樂 拍子十 古樂明進

〔教訓抄盤涉調〕竹林樂拍子十 古樂

此樂早物也、四拍子加拍子、口傳云、雖爲古樂、管絃之時打一鼓事、不食然者可用獨鼓也、古老物語云、大國ノ葬送ニハ奏、

此曲云、仍吉事不可用之、雖然不謂吉不用之、

〔體源抄盤涉調〕竹林樂 古樂、小曲、無舞、拍子十、自二反頭加三度拍子、可打羯鼓、早八拍子、延四拍子、

兩說有之、共加三度拍子、拾鉦鼓、

〔倭名類聚抄四曲調〕盤涉調曲 元歌

元歌

〔大日本史禮樂十五〕按、諸樂書無元歌、未詳其所起、唯萬秋樂一名曰柱歌、萬秋樂柱、咸作元、豈以名

異而復出乎、附埃後考、

に候けり、近方庭中に出ける時、樂人公貞扶持しけり、舞終て公貞をも舞せられけり、

〔看聞日記〕應永廿七年六月廿九日、郷秋參菊第事訪申對面○中抑久乙父子三人死去、採桑老秘曲

已斷絶了、久乙一流之外無相傳之仁、久乙末子四五歳小生有之舞不及傳受云々、採桑老舞曲斷絶、

朝家可御事關之條無念也、諸道零落時節到來歟、

〔聚樂第行幸記〕四日の十七日○天正十六年四月舞御覽略○中七番採桑老略○中

採桑老は天王寺の伶人舞之、天子より下さるゝ、えろき御衣也、面ならびに鳩杖あまのたきさし

と云笛は勅物なり、舞以後  
近上致

〔源氏催馬樂師傳相承〕採桑老相承

多公用右近大夫  
修正子同好茂兵衛大夫  
公用子

同正方右近將監  
好茂子、長元元年、賜朝臣字、宮人勅賞、

同節資右兵衛尉  
正方子

同資忠右近大夫  
實子、爲山村正連被殺害了、

秦公信

天王寺舞人、鼻ヲカム手始令舞云給、

同公貞公信子

多近方

右近大夫將監  
實忠子、父實忠爲山村正連被殺害之間、依勅定習之、

同公貞公信子

同成方

右近將監  
近方子  
成長右兵衛尉  
成方子

同近文

右近大夫將監  
近方子、未達其節、仍飾豐成不審、九十死去了、

同節近右近將監  
近文子、當曲次第同父、

同久行

近方子、承久二年九月十九日上皇臨時舞御覽始舞之、件日舞曲、  
右近大夫將監  
應永九年九月十九日、上皇臨時舞御覽始舞之、件日舞曲、

好方

右近大夫將監  
近方子、八十二死去了、

好節右近大夫將監  
好方子

好氏

右近將監  
好節子、承久二年五月廿九日、舞御覽日於樂高舞之、

感歌樂

〔拾芥抄上末〕疊涉調 感秋樂無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲



奏せざる舞を御覽せられけり。○中略探桑老。○中略これらを御覽せられけり。

〔定家朝臣記〕康平三年十一月廿六日辛亥殿下○藤原賴通於白河院賀大僧正○明尊九十算。○中略次有音

樂。○中略次探桑老。右衛門實時内大臣賜御衣。

〔中右記〕康和五年十二月二十日左近大夫將監柏光末入來。○中略問○藤原宗忠云探桑老如何答云是又

正方以後時佐佐忠三代相見之處時佐佐忠同様也猶至正方者雖同體殊絕妙也計之能得舞骨法者優妙之所致歟至探桑老者強無相違。○下略

〔續古事談五略〕探桑老ハ正方時助助忠ツタヘテ舞ケリタガフ事ナシ光季ガ申ケルハ正方ガ舞

シハコトニメデタカリキコレソノ骨スグレタルナルベシ此舞モ助忠シニテ後ナガクタエニケリ。

白川院天王寺ノ舞人公貞ヲ召テ此舞ヲ近方ニヲシヘシメテ朝覲行幸ニマハセラレケリ此事時ノ人ウケザリケリ公貞ガ舞ヲモチキラレバ公貞舞ベシ公貞舞マジクハ舞ヲ習マジトゾカタブキケルタバシ後冷泉院ノ御時蘇莫者ヲメシテ御覽ジケリ此舞ハ天王寺ノ舞人ノホカニハマハヌ舞ナリ宇治殿キ給テ近衛官人雅樂ノモノナラズシテメサル事イカバアルベカラムト仰ラレケリ若此儀ニテ公貞ニハマハセラレザリケルニヤ近方ガ探桑老多ノ氏ノ流ニハアラズ天王寺ノ流也

〔古今著聞集六管絃歌舞〕舞人多資忠死去の後胡飲酒探桑老曲かの氏に絶にければ久我太政大臣

雅實○源胡飲酒を將曹多忠方にをしへ給ひけり探桑老はをしふるものなかりけるに天王寺舞人

秦公貞此曲を傳へたりければ院の仰によりて右近將曹多近方にをしへてけり

保安五年○天治元年正月朝覲行幸に近方探桑老をつかうまつるべきにて有ければ四年十二月一

日仙洞にて近方探桑老をつかうまつりて一院○河白新院○羽御覽せられけり能俊卿以下御前

〔教訓抄七〕舞番樣

探桑老有面、別裝、東、鳩杖、多氏、天王寺舞之 新棘鞆別裝、東、紫袍一人、王云赤衣二人、以下六位二人又四人

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 探桑老舞一面、帽子、袴、大袍、小葵、冬、裾、浮、泉、綾、直衣 插頭花篠狹、子、下、鞘及藥袋、右、子、鳩杖、鳥皮沓、明、二、持之也、是白丁者

〔樂家錄三十六〕盤涉調之曲

探桑老曲中 番舞綾切曲中 或新棘鞆 林歌 胡德樂已上小曲

〔舞樂要錄上〕舞番

左探桑老略○中 右新棘鞆或林歌、或胡德樂

同例 大法會

勝光明院供養 保延二年三月廿三日 左略○中 探桑老略○中 右略○中 新棘鞆

曼茶羅供有舞樂儀

歡喜光院供養 永治元年二月廿一日 左略○中 探桑老略○中 右略○中 胡德樂

宇治入道九體堂供養 康治元年六月廿九日 左略○中 探桑老略○中 右略○中 林歌

八講

鳥羽院御八講仁平四年三月廿二日、被始行、同廿五日、結願 第四日 五卷日 夕座了供舞 左略○中 探桑老略○中

右略○中 長保樂

朝覲行幸

同治寬七年正月三日 左略○中 探桑老略○中 右略○中 綾切

〔古今著聞集六〕絃歌舞 同喜○延廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時勅をうけ給ひて、日比

景範云、百濟國樂、統秋云、唐に採桑子といふと見えたり、按するに、唐宋曲中採桑と云名はあれども、曲によりて起れる所別なり、百濟樂といふ説宜しきに似たり、

〔大日本史 禮樂十五〕按、教訓抄、體源抄、並以本曲爲唐樂考、唐書通典、有採桑曲、云商人等因三洲曲而所作也、古樂宛作採桑度、又羯鼓錄、太簇角曲、有涼下采桑、教坊記、有楊下采桑、採桑二曲、唯採桑老無所見、本曲未知其爲何曲、

〔龍鳴抄<sup>下</sup> 盤涉調〕採桑老<sup>うらいそ</sup>

てうしをふいてろくろをうつ、一越調の安摩をなじ事なり、こゑはかはれども、やうたいは同じ事なれば、くはしくはあるさず、これにて心うべし、拍子十二、このろくろに舞いづ、能々をいたる人のすがたにて、にしきのぼうしまたり、おなじ様なり、おなじくおひさして、またがさねきのさしぬきに、くわにはいとくつににたるものをはく、それが名たしかならず、たづぬべし、さやさげたる人にてをひあらくいづるまゝに、ばいすたちをくりてがくをす、ゑいあり、ふたゝびゑいはざまに、ふゑさうのふゑひちりきこゑをとるが、輪臺のていなり、はてのきりに三度拍子あぐべし、四反すべし、このがく古樂也、よりていちのつゝみかく、されども三度拍子あぐるならひとす、いるときに上調子ふく、ろくろをなじ事也、ゑいは三十より百まであれども、百歳にてゑする事うたがひなしと云か、きんきのあればせぬ也、九十までするなり、

〔仁智要錄<sup>十</sup> 盤涉調〕採桑老

拍子十二、可彈四反<sup>南宮</sup>、合拍子卅八、終帖打三度拍子、但二反後舞人

詠云、三十情方盛、四十氣力微、次樂屋取音、次又詠云、五十至衰老、<sup>今世</sup>詠六十行步宜、次樂一反、次詠云、七十懸杖立、八十座巍々、次取音、次又詠云、九十得重病、百歲死無疑、<sup>今世</sup>詠人多少氏稱終開句有忘、次樂一反、打三度拍子、長秋卿橫笛譜云、拍子十二、可吹五反、合拍子六十、二三兩反之後有各詠出入之時、吹調子、伴舞其體老人、携杖著紫淺袍、微々行步身體如不堪、中曲 古樂

〔教訓抄〕四蘇莫者 別裝束舞 天王寺ニ舞之 古樂

序二帖 拍子各六 破四帖 拍子各十

序二帖 拍子各六 大鼓如號序打之、一破四帖拍子各十二、終帖加拍子如遷城樂、舞出入用古樂亂聲

也、亂聲吹止各觸取、盤涉調音入時重吹破、加拍子一說也

或書云、本者有急、大奉公貞時令秘藏間絕之、拍子古老云、此破ヲ云、鵲コ十六、抑此破ニ有樂拍子之說、大

神惟季之流ノ外、他俗人不知之也、

永保三年十月一日、法勝寺九重御塔供養法用樂、惟季始吹之云々、

保延二年十月十九日、法金剛院御塔供養、錫杖上樂基政吹之、

承安三年日、蓮華王院御塔供養日、當座ニラ樂拍子可仕之、由被仰下、宗實失東西、散々吹之、覺給

ケル也、

〔教訓抄〕七舞番樣

蘇莫者有面、別裝束、持之、左 蘇志摩別裝束、著簪笠、志

〔樂家錄〕三十六盤涉調之曲

蘇莫者曲中 番舞蘇志摩利曲中 或八仙林歌已上曲

〔古今著聞集〕六管絃歌等同喜 廿一年十月十八日、八條大將保忠 中納言の時、勅をうけ給ひて、日比

奏せざる舞を御覽せられけり、○中 蘇莫者略、○中 これらを御覽せられけり、

〔伊呂波字類抄〕左事〔探桑老〕盤涉調

〔樂家錄〕二十八〔中華曲〕

盤涉調 探桑老佐以志也 字羅字 一名探桑子、

〔樂考〕般涉調〔探桑老〕

探桑老



〔中右記〕康和四年三月廿日乙亥、今日有御賀○白河後宴事、略、午刻許人々參上、御裝束儀一如式、先龍頭船樂六艘被相儲也、左右近衛府各二艘、外衛各二艘、於北殿南岸池頭、人々乘船、左一龍頭略、中第三左右龍頭、鷄首、下、屬樂人各十人也、皆吹鳥向樂、從左右各進出、

蘇莫者

〔樂家錄二十八〕曲調注、中華曲

盤涉調 蘇莫者、曾真具志也、一本莫者作蘇遮、

〔樂考般涉調〕蘇莫者 者當作遮

唐の時所謂西胡渾脫舞也、蘇莫遮は高昌國の女子の帽子の名なり、

〔大日本史禮樂十五〕按、敎坊記、曲名有蘇幕遮、羯鼓錄、太簇宮有蘇莫賴邪、並音相近、蓋同曲也、又敎調抄、體源抄云、天竺曲、然他書無所考、

〔龍鳴抄下〕蘇莫者くさま

序拍子六、二反すべし、破拍子十二、四反すべし、只拍子にするなり、はてのきりにひやうしあぐ、古樂にあぐ、まひのいでいるに、古樂の亂聲序のたいこのうちやう、荒序のやうなり、まひのてい金色なるさるのかたち也、ばちをひだりにもちたり、きなるみのをきたり、よに人のいひつたへたることは、さうさむたうきやくのおほみねとをられけるに、ふるをふかれけるにきゝて、山のかみのまひたるとぞ申す、おほみねには蘇莫者のたけといふ所ありとぞ、やまふしの人々かたらるゝ、さうさんはよかりけるふるふきなり、管絃に心をふかくえたる人なり、さもやありけんところおぼえたれ、

〔仁智要錄九〕蘇莫者

序拍子六、但打急拍子、可彈一反、破拍子十二、可彈四反、合拍子五十四、

破終帖打三度拍子、長秋卿橫笛譜云、序拍子十二、以二反爲一帖、今世序彈二反、破彈四反、終帖加、

拍子、舞出入用亂聲、中曲 古樂

付テ、青海波ノ曲ヲ舞給シニ、前ニハ月卿玉冠ヲ研十二人、後ニハ雲客花ノ袂ヲ連テ十五人、其中ニ父大臣ハ内大臣ノ左大將、叔父宗盛ハ中納言、右大將、知盛ハ三位中將、重衡ハ藏人頭、中宮亮已下、一門ノ月卿雲客、今日ヲ晴トキラメキテ、皆花ヤカナル貌ニテ、舞臺ノ垣代ニ立給タリシ時ハ、サシモウツクシクオハセシガ、中ニモ此時ハ、四位少將ニテ舞給タリシカバ、嵐ニ類花ノ色、勾ヲ招ク舞ノ袖、天ヲ照シ地モ耀程ニ見エシカバ、簾中簾外皆サハメキ立テ、櫻梅ノ少將トコソ申シハ、カ、哀ニウツクシク見エ給フ人カナ、今三四年ガ程ニ、大臣ノ大將ハ疑アラジモノヲト、諸人ニ謂給シゾカシ、略下

〔嚴有院殿御實紀三十〕寛文五年五月十九日、舞樂御覽あり、略中 青海波には垣代四十人參る、この青海波、蘇合香退走禿は四十年來にて再興ある所とぞ、

〔大江俊矩記〕寛政十一年正月十九日戌寅、舞御覽<sup>略</sup>中 午半刻計出御南殿、舞樂始<sup>七番也</sup>、二番目拔頭、還城樂之頃、御通始、極脇新藏人兩人參候、殿下、酌左大將殿、看時定如例、

鳥向樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕盤涉調 鳥向樂 <sup>無舞</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

盤涉調 鳥向樂 <sup>傳字如字關具</sup>

〔龍鳴抄<sup>下</sup>〕鳥向樂

拍子十八、まひなし、古樂、たゞし新樂にも、うちまかせては古樂といふべし、

〔仁智要錄<sup>十</sup>〕鳥向樂 拍子十八 中曲 新樂 南宮譜无舞

〔教訓抄<sup>六</sup>〕鳥向樂 拍子十八 古樂

此曲弘仁御時、南池院行幸船樂作之、鶴首ニ向故ニ<sup>名鳥向樂</sup>、船樂作故<sup>爲古樂</sup>、于今參向行道ノ樂ニ用之、<sup>此時</sup>新樂有忠拍子別ノ習アリ、加三度拍子、或人ノ說ニ云、以ニ白柱爲<sup>爲</sup>、愈云々、

ことちのたてやうなどををしへ給けると承侍也と聞ゆ、或人まことにもては候かとはれければ皆候也、琵琶にならひてけれど今は絶て侍る也と聞ゆ、ちからなくて咲止にけり、彼人々悔しくはづかしくこそおぼえけ、後に彼琵琶の師、二條院に参あひたりけるに、昔海波の論の時、御恩蒙りて候しこそ忘れがたく侍れとて、清輔いはれける、此曲は琴に易水曲といふ物の聲を筆にうつして候也、盤涉調の音也。

〔玉海〕永安五年○安元年

十一月十五日壬戌、今日左中將定能來、中宮大夫隆季與豐原時秋相論、青海

波垣代音曲事、令談語子細、大略時秋說非僻事之由、左大將○藤原被申、明通已讀、及基通入道、又時元自筆譜

意、已叶○仲兩譜由云々、○中定能時秋弟子也、所云偏彼理也、余○藤原案之、猶隆季所申、至此事者存

道理事歟、凡於上奏狀之條者、尤不落居也、時秋已隆季師匠也、弟子欲危師、豈有莫加哉、所行之旨、雖

似忘恩、執論之趣已爲得理、十二月十八日乙未、早旦定能朝臣來語曰、○中又語云、垣代音曲之間

事、以隆季申狀被問時秋、時秋申有兩說之由、以兩人申狀被問、光近、光近申時秋說不知之由云々、雖

然時秋所執之說、證據太多出來、仍法皇、○河後時秋所申有理之由有御氣色云々、○中余案之、隆季卿

以時秋之說稱濫吹之條尤偏執也、證文已多、爭謂僻事乎、又時秋以先度所吹之說爲秘說、專難取信

用仁平所用之說、猶以爲第一說、其故一者、載博雅譜、二者仁平之度、知足院殿、○藤原忠實宗輔卿、宇治左

府○藤原長等能評定、以此說爲第一說、被用、三者光近已時秋之所執之說稱不知之由、四者中院右府

○源以此說稱秘說者、爭可下此說哉、如此事出來爲道尤不便也、爲之如何、

〔源平盛衰記四十〕維盛入道熊野詣附熊野大峯事

此僧答テ曰、○中アレコン平家ノ嫡々故小松大臣、○平一男權亮三位中將維盛ヨ、一門ニ落具

シテ、屋島ニト聞シガ、如何ニシテ是マデハ傳ヒ給タルヤラン、出家シ給タルニコソ、御髮ノ剃様

近キ程ト見エタリ、○中安元二年春ノ比、法皇○後法住寺殿ニテ、五十ノ御賀ノ有シニ、時ノ銘ニ

したてられけるに、胡籥をおはざりけるをみて、舞人光時申けるは、白河院御時此儀有しかば、武者所みな胡籥を負て侍き、今其儀なし、世の凌遅ことにおきてかくのごとし、其後又此舞を御覽じける時には、武者所に仰て胡籥をおふたりけるは、光時が一言上聞に及けるにや、光時に御馬をぞ給はせける。

〔古事談<sup>六</sup> 亭老<sup>諸道</sup>〕

仁平御賀<sup>羽</sup>○鳥

之時、隆長卿列舞人被習青海波之間、知足院入道殿<sup>忠實</sup>被御覽

之、未練トテ、師匠光行之ヲ被舞、又御覽之處、只同體也、于時被仰云、光行之父者八十有餘之後、授此

曲之由聞食ハ實ニテアリケリ、老耄之間無四度計授タリケリ、摸寄波體之時ハ、首ヲ左ニ傾テ急

ニ寄之、摸引波體之時ハ、首ヲ右ニ傾テ、緩引之也トテ、召光行令授此秘事給云々、

〔十訓抄<sup>四</sup>〕

九條殿<sup>兼實</sup>藤原

右大將にておはしける比、讃岐三位<sup>季行</sup>藤原

の聲に取奉りてあつかひ聞

えけるに、常に和歌の沙汰有けり、清輔朝臣參て物がたりの次に、一日顯昭法師かたり侍りしは、

土佐大將<sup>師長</sup>藤原流され給ける日、陪從惟成をくりに參たりけるに、蒼海波といふ秘曲を教へた

まふとて、

をしへをくことをかたみに忍ばなん身は青海の波に流れんとよまれて傳ける、管絃のみならず和歌に優にこそ侍ぬれと云出されたりけるに、或蒼海波といふものこそ聞及侍らね、何の文字にととはれけるを、あをうみの波と書たりと答ふ、さては青海波の事にこそあなれとてわらひける、清輔朝臣の云、青海波えらぬ人や有べき、あらぬ曲なりといへども人更に用ひず、そののち主の三位、若もさる曲もあるらん、其道の人に尋らるべしとて、大將殿の琵琶の師にて、なにかしとかや申けるに、此事をとほる、かれ憚てえばらくためらひけるを、有のまゝいはるべきよし、頻にすゝめられければ、とばかりして絶たる物にて候へば、無が如に候と聞えける、さては有にこそはむかしは候けり、搦手、片垂、水羽翫、蒼海波、これら皆秘曲なりけれど、絶たれば大將も



舞青海波時王二人著麴塵袍或召談人 薛繪螺鈿劔紐地平緒中綳 不論左右官人並舞人相撲長爲

垣代打三篇

〔源氏物語紅葉〕朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり、よのつねならずおもしろかるべきたびのことなりければ、御かたへ、物見給はぬことをくちをしがり給うへも藤つぼのみたまはざらむをあかずおぼさるなれば、試樂を御前にてせさせ給、源氏の中將は青海波をぞまひ

給ける、かたてには大との、頭中將、かたちよい人にはことなるを、立ならびては、花のかたはらの深山木なり、へかたの日かげさやかにさしたるに、がくのことゑまさり、もの、おもしろき程に、おなじまひのあしぶみおも、ちよにみえぬさまなり、詠などし給つるは、是や佛の御迎、陵伽のことゑならんと聞ゆ、おもしろく哀なるに、みかど涙おとし給、かんだちめみこたちもみななき給ぬ、詠はて、袖うちなほし給へるに、まちとりたるがくのぎはしきに、かほのいろあひまさりて、つねよりもひかるとみえ給、中行幸には、みこたちなどよに残る人なくつかうまつり給へり、中こだかきもみちのかげに、四十人のかいしろ、いひしらす吹たてたる物の音どもに、あひたる山の松風、まことのみやまおろしときこえて、吹まよひ、いろ／＼にちりかふ、木のはのなかより、青海波のかゝやき出たるさま、いとおそろしきまでみゆ、かざしの紅葉いたうちりすぎで、かほのにほひにけおされたるこゝちすれば、おまへなるきくををりて、左大將さしかへ給ふ、日くれかゝるほどに、げしきばかりうちまぐれて、空のけしきさへみしりがほなるに、さるいみじきすがたに、さくのいろ／＼うつろひ、ゑならぬをかざして、げふはまたなきてをつくしたる、入あやの程そゞろさむく、此世のこと、も覺えず、物みしるまじきまも人などの、このもと岩がくれ山の木の葉に、うづもれたるさへすこしもの、心えるは、なみだおとしけり、中下

〔古今著聞集六〕管絃歌舞同治二年八月新院中 青海波を御覽じけり、垣代の不足に武者所をめ

〔續教訓抄〕舞案譜或人云○中青海波甲別錄東ア右肩袒輪臺ハ不袒

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 青海波二舞人至於甲及袴下襲半臂袍彩絞常異太刀垂平緒

〔樂家錄三十六〕盤涉調之曲

青海波曲番舞敷手或貊粹已上林歌八仙已上

〔江家次第第八月〕相撲拔出

左右各舞略○中 舞青海波時王二人著麴塵袍或召藏人蒔繪螺鈿劔紺地平緒海浮半臂不論左右

官人並舞人相撲長爲垣代打三顧

〔舞樂要錄上〕舞番

左輪臺青海波略○中 右敷手

大法會

福勝院塔供養仁平四年十月廿一日 左略○中青海波略○中 右略○中敷手

朝觀行幸

康平三年三月廿五日 左略○中青海波略○中 右略○中貊粹

寛治二年正月十七日 左略○中青海波略○中 右略○中林歌

相撲節

治安三年略○中 拔出同七月廿八日 左略○中青海波略○中 右略○中鯤輪

永承六年略○中 拔出同七月廿日 左略○中青海波略○中 右略○中新鉢鞆

同治五年略○中 拔出同七月廿日 左略○中青海波略○中 右略○中貴德

心もことばもおよばず、かいしろのがく人には、笙少將教豊、ひちりき侍從兼英笛少將教高、ひはむまのかみたか長なり、堂上堂下の物の音ども雲井をひゝかし、山の鳥もおどろくばかりなり、散かふ花の中より、青海波のかゝやき出たるさまなど、物がたりのおもかげもいまさらおもひいでられたり、さてもかいしろのかけびは、きはめたるみちのひじにて侍るなるに、けふたか長このさはうをあらはしぬる、めづらしとてめをとゞめぬ人ぞなきち、たかつぐの朝臣たちそひて口傳したる事なれば、さだめてやうあるにこそ、大かたははれのまひ御らんなどに、殿上の所作人かいしろにたつ時はありぬべき事なれども、ちかき世には絶て久しきにこそ、○中さてゑいのこゑ、ねとり、まやうか、ふきわたしなど、いつもの事ながら、けふはことにみゝにとゞまるやうなり、青海波舞はてゝ、つがひまひのことりとそ也。

青海波

〔倭名類聚抄四調〕盤涉調曲 青海波有レ詠

〔樂家錄二十八調法〕中華曲

盤涉調 青海波海勢以加、以波、海字調、

〔樂考般涉調〕輪臺青海波

唐の世青海舞あり 統秋云、此曲序四遍を輪臺といひ、破七遍を青海波と云、按するに、青海波は則青海破なるべし、

〔河海抄紅葉集〕南宮譜云、○中舞裝束、青海波

青色袍、表袴文小奏、蒲萄染下襲面大海、浦、裏蒲萄、大海浦半臂

舞手向一方、横寄波引波體也、

〔教抄訓七〕舞番樣

青海波有甲、別裝束、舞輪臺、不、肩祖、青海波片肩祖、敷手志岐傳云、有大輪、小輪、諸肩祖、

例也、實賢稱家說不發者、光近不可發之、光近依仁平例、可唱者、實賢不可唱、之、垣代音曲同時兩說、並鼻希代之珍事也、末代之事、只以白山爲先、何爲之、樂屋受取是第五切也、即  
 舞、其後詠次音取又詠次唱歌、次垣代吹、已上樂屋受取是第八切也、六七切略舞之、即青海波舞入、次  
 又輪臺延吹、此間隆季、成親、實賢等、經本路復、如初作大輪匝行、經本路歸入樂屋、其行列如初、但今度  
 青海波二人在先、成宗在先、維盛在後、乍和入也、垣代人皆懷反鼻、舞人擊須知加倍、如始、廿六日壬寅、定能朝臣中  
 略又語云、試樂日青海波唱歌之間有相違云々、實賢卿云、仁平詠後唱歌同所發也、此事有疑、左府記  
 仍今度發之、其詞自例、唱歌之、云々而又光近發之、同時雖發聲、實賢唱歌了、光近唱歌少、隆季ハ光近  
 唱歌末詞付之、也、中孔、成親者實賢唱歌訖、自其次句始付之、不順聲、笙早終、笛猶留者也、於筆策者無  
 先笛付之法、仍今吹出笛一詞、自其次詞付之、付云々、是時秋說并與內府相議所用此說也云々、  
 【古今著聞集】管六、絃歌舞、建長五年正月廿七日に、八幡行幸、後深草、の還御の次に、鳥羽殿に入らせおは  
 しまして廿八日に朝覲の禮あり、垣代の笛雅樂太夫戸部政氏はふえの一にて侍れ共、左近の將  
 監大神正賢立よりてうたへ申て吹たりしは、保延のためしにて侍けるにや、戸部氏こそ本體に  
 て侍しに、近代大神氏にはかせをとられて、かやうに正賢にもこたへられけるにこそ、  
 【北山殿行幸記】行幸○後小松行幸、是應永十五年やよひの初の八日なり、○中十四日、○中まひ御  
 らんの奉行頭中將宗量朝臣、かねてよりうけ給はりて、かく所のれうりなどせらる、○中かく屋  
 笙まづばむじきてうをふけば、よこ笛のへりんだいをふきいだす、次に青海波の童二人、尊藤丸  
 がく屋をいづ、左右の舞人おなじくこれにゑたがふ、かいえろの上童殿上人もみなくだりたち  
 て、をのくへんひをとりて、まづりむだいのわをつくる、すぢかへを打、大わこわひらたちなど  
 いふ事もあるにや、木だかき櫻のかげに、かい代の童殿上人十四人、花ををりにしきをたちきて、  
 あゆみつゝきたるもいとめづらかなり、此上童十人は本所の御ちご、その外は梶井青蓮院妙法  
 院、三ばう院、上せう院などの門跡たち承りて、いづれもわれおとらじとさしたてられたれば、



已上三人爲受取樂屋存不可立之由云々有房朝臣在公時笛資時同季信事樂盛定同已上五人

不立之奉行隆季卿定仰云除吹物各一人之外皆悉可立云々而此五人猶不立之有所存歟

各出樂屋北歷大鼓前南行傍池畔東行斜北折至御前斜西折匝行之大也左右舞人皆悉打須知

加倍此中公守一人不打之舞自餘垣代五人同雖可打須知加倍不打之如此又皆懷反鼻如倍之心

也立定之時取出持之一匝之後至大鼓前兩所作輪謂之除左舞六人之外皆作輪上臑下臑彼是立

東西輪假令第一三在四輪第二四在東輪次第如此作輪之人皆向外是正東西輪迫立無隙仁平記

由許丈不可然賴實實教輪蓋上維盛波在西輪內成經清經輪蓋上成宗波在東輪內垣代未立定之

間輪代猶延吹無定還數此間隆季笙成親笛資賢歌等卿在座上起座入自仙花門代經前庭立加垣

代後東輪此間定能朝臣集出自樂屋加其列並西上北面第一隆季次定能其立所及取笛笙之作法

委依不見具不記之垣代立定之後頗責吹輪臺于時輪臺四人出自垣代中不祖插笏仁平記云舞人

有例不進舞庭中賴實實教在西北上臑成經清經在東北上臑舞出之後四遍初切舞出第二切舞其後詠

暫時秋音取を相論のよし奏せられければ殿下忠通藤原院羽に申させ給けり院覺しめしえざるよし仰有けり殿下左大臣有仁源に尋申されければ左府申されけるは笙事の外に勝劣有先例官の上下臆によらず譜代をえらび用らるゝ事なりもし清方を用られば笙のためきたなき事也と申されければ殿下此よしを樂行事の司に仰られけり是を聞て中院右大臣源雅定の大納言にておはしけるをはじめとして悦人々おほかりけりかの右府は時秋が弟子にておはしける故也

〔玉海〕安元二年二月廿一日丁酉，此日御賀。○後白河試樂也。○中關白基房召實宗被仰○奏青海波之由，實宗退下，率殿上侍臣歷前庭向樂屋爲立垣代也。四位五位六位不論，衛府非衛府大都立之是康和例也。仁平辨官近衛次將外衛佐侍從少納言外不立之云々。衛府各持笏向樂屋，欲立垣代之時插之。

左輪臺 青海波

先吹笙調子笛吹之次吹出輪臺空吹調子中門前次垣代先青海波下鴈成宗不袒謂之次左右舞人相立之恨令先左舞第一、次右舞第一、次左舞第一、如是令立也次青海波上鴈維盛朝臣不袒謂前頭仁平例、前頭在垣代之最末今日於舞人、舞爲最末於垣代之中問是、非次殿上樂人打物皆悉立之吹物少々立之、如仁平及侍臣依位次相交立之、爲未辨相尊可決之、

實宗朝臣 長方朝臣 雅長朝臣 光能朝臣 重衡朝臣 通盛朝臣 經房朝臣 顯信朝臣

打物  
季能朝臣同  
信基朝臣  
光憲朝臣  
經雅朝臣  
時實朝臣  
親宗朝臣  
兼光  
光雅

基親  
師家打物  
佐盛  
信季打物  
兼忠同  
隆保吹物  
經仲  
隆雅吹物  
師盛同  
源

兼綱  
職人

定能朝臣 執筆  
經家朝臣 空  
泰通朝臣 笛

〔舞樂要錄〕舞番

左輪臺青海波略○中 右敷手

同例 大法會

圓融寺供養天元六年三月廿二日 左略○中輪臺 右略○中納蘇利

上東門院御堂供養長元三年八月廿一日 左略○中輪臺略○中 右略○中敷手

〔古今著聞集六管絃歌舞〕同喜○延廿一年十月十八日八條大將保忠中納言の時勅をうけ給ひて日比

奏せざる舞を御覽せられけり略○中輪臺略○中酣醉これらを御覽せられけり

〔扶桑略記二上十六〕康保三年十月七日丁卯殿上有待臣舞略○中奏輪臺舞人修理大夫源延光朝臣次

青海波濟時爲光著麴塵缺腋袍帶劍朱紫交舞視聽催威

〔中右記〕康和四年二月五日早旦馳參內略○中人々參會之次於東對中宮南庭御覽御賀舞○白河五

輪臺四人右中將宗輔左少將實隆師重朝臣青海波二人則高光殿上人廿餘人或束帶或直衣立垣代三

月廿日乙亥有御賀後宴事略○中輪臺垣代內殿上人卅人如樂人所役修理大夫顯季朝臣以下不論實

首立位階次第但輪臺舞二人實隆朝臣殿上人等後又輪臺二人宗輔朝臣藏人大學助重隆六位只

一人在垣代列依爲院殿上人青海波二人不立此列密々於樂屋中令裝束之故也於垣代中須令裝束也

之輪臺四人宗輔朝臣實隆朝臣師重朝臣能明朝臣此間內大臣童雅定實源雅從御前來加樂屋爰有仰右衛門督宗通

卿加垣代中吹笛下官宗忠藤原唱歌顯仲朝臣室俊賴朝臣左近將監伯光末殊召加此列令詠也青

海波二人通季宗能著青打半臂以銀押波文等螺鈿細劍紺緒綾永撤平胡簾老懸出于舞臺畢一二三返舞

之後詠四切又詠七切上拍子舞之間堂上地下衆人見者驚耳目是則依爲珍重舞歟

〔古今著聞集六管絃歌舞〕同保○三年正月四日朝覲行幸に輪臺いでんとしける左樂行事にて大炊

御門右府公藤原の中將としておはしけるがすゝみ参りて輪臺の垣代の笙吹雅樂屬清方左近將

造小輪樣爲極秘事有二說能々可受口傳也

垣代立樣抑打反尾有二說一說云唱歌也末一拍子打之一說曰唱歌并樂同如忠拍子可打之尤可爲秘說ナリ○中略

二帖ノ始左遠肘ヲ行高稱右遠肘而去康和四年三月廿日鳥羽殿御賀殿上ノマイニ付光時申狀  
左遠肘可舞由被宣下了而今又右遠舞也七帖ノ末東西マデ肘遠テ打テ北向テ諸手ヲ肩ニ懸下  
昔多政方ノ說南並寄テ舞殆光高此定ニ舞

詠二人勤仕ノ例正治二年三月三日平等院一切經會日近衛殿下也有御出輪臺詠一者青海波詠則房垣代

ノ役二人勤仕雖爲新儀則房訴訟ツヨキニヨリテ一者光重トヤマレテ當座ノ面目ヲウシナ  
ヒ後代ノ家ノキズ上下耳目ヲドロカス

古ハ青海波ヲバ舞トモ詠ヲバセズ只光季ノ嫡家流許也行高光則季貞ガ一者ノ時ハルカノ末

ノ物ニテ光時ガセシ也則近ノ時ヨリ其家ニハ始テスル也光近習タリ其相傳樣中卷申タリ一

人青海波舞例保安四年正月六日八幡宮修正光時一人舞之

〔體源抄十一〕舞曲古今相違事

古輪臺三匝之後一所ニ作輪今ハ一匝之後兩所作輪

古青海波畢テ入時又吹青海波ヲ今ハ吹輪臺

古輪臺諸祖ニテ舞之青海波諸祖ニテ舞之今ハ輪臺カタヌガズ青海波カタカタヌギ

古輪臺二人舞之今四人舞之

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 輪臺三十人 常裝束

〔樂家錄三十六〕盤涉調之曲

輪臺青海波共中曲也 番舞數手曲中 或納蘇利小曲



とこそ思ふらめいとをしく、

〔吉野樂書〕一青海波大輪小輪ト云事小輪ヲバ知人マレナリ北院御室則房ニ御尋有リケルトキ、サルコトハ候ハズト申テ不覺シヲハス近來ハ略説ナリト小輪ハ左右ノ太鼓ノ前ニテツクル也舞臺ノ上ニテハツクラズ右ノ一物ハ左ヘ行き左ノ二物ハ右ヘ行き左右共ニ打マジヲテ梓ノ前ニテ輪ヲツクリテ一ツヲバ左ニ裝束サセ二ツヲバ右ニ裝束サスルナリ大輪トハスデカヘウチテマワルヲ云ナリ垣代シテ樂人立次第在別紙先比巴四ニ次笙次了次笛唱歌後垣代比巴請取垣代取音ハ短キ様ヲ用ルベシ蓮華王院ノ總社ノマヅリニ時秋アヤマリテ長キ様ヲ吹ケリ其弟子ニテ隆基トガメ玉ヘリケルニ秘藏ノ様ナリト申ス所ニ一事モノコサズト起請シナガラ、イハレナシトノタマヘリ、

一輪臺ヨリ青海波ニウツルトキイタク早カラズ閑ニスベシ初ヨリアマリニ早ケレバ末ザマノシニクキ也又初二反ル時ハチト早ク成シ又反ルトキチト早ク成シキワヲカヘテスルナリ總テ何ノ樂モハジメハ靜ニシテヤウ／＼末ザマヲ次第ニ少シヅハヤカルベキ也但樂ノホドハ人ノコノミ／＼ニ依ル也輪臺バカリニテ青海波ヲ吹ザルトキムハ輪臺ノ終リヲ青海波ノ如ク早ク吹テ止ナリ、

〔教訓抄〕輪臺 有甲 中曲 新樂

序四返拍子十六、調輪臺、破七返拍子各十二、調二音

垣代四十人ノ内序四人、破二人、左右舞人、關白左右大將、御座輪臺青海波近代作法者云々○中略

抑相撲ノ節ニハ殿上ヨリ賜下藏人青色ノ袍爲青海波ノ袍殊有別習大輪ノ後舞臺後ノ砌左右

各造二小輪右方一輪、左方一輪爲此兩輪之内青海波著波袍但上手ノ一者有右方下手二者有左方輪内各

著裝束已後破兩輪以中爲上前也總相撲ノ節外不可作小輪也雖然便宜之時ハ可依御定就中

〔雜秘別錄〕輪臺青海破

あながちのまさい別にあらじ、舞のあひだこまかにあむめり、小輪といふ事ぞすでにたへぬべかりし、則房といふ舞人、二のものにてありしが、仁和寺舍利會のまひの師せし時、舍利會ごとにひきつくりはれしに、みち／＼のものおほかりしかど、樂人には宗實舞人には則房をむねとめしつけられしに、べちのふせいもなし、左右の大このまへにかいしろまろにたちて、そのうちにてりんだいのかふと、青海破のさうぞくをするやすき事を、のりふさいまはたえてさる事候はずと申しかば、いかにかくは申ぞ、舞のてにても説にてもあらばこそはあらめ、かいしろたつるほどのことは、汝がせんぞみなしきたることをかくは申すぞと、おほせありしかば、ちからさぶらはず、たゞにたりと申しかば、その時の一の者光重、こわと申ことは候ものをと申て、すでに會のはじまらむとせし時ふところより圖をとりいだしたりしかば、のりふさをのが身は二のものにてあるに、一のもののかく申すを見てよく候めるは、とく王殿たて給へと、よだちせしかば、うけたまはりぬとて、ことなくこわたて、き、そののちいまにいできたんめり、かいしろのうけとり、ふゑのあいだもとよはら、おほわのうちろん有、とよはらはながき説をもちある、おほわのうちはみじかきをもちある、とよ原のはりつよし、おほわのはすこしはりかなはねど、いへ／＼の説とてろんあればちからなし、仁平御賀に、とよはらもふきながら、このごろみじかき説をなじと申す、こはくきこゆ唱歌のしにくきによりて、舞人のなかよりいできたるにや、されど舞人どもはながきやうしりたりと申すもおほかり、かいしろに琵琶のたつ事あり、又ひく事あり、後高倉院舞御覽ありしに、だいごのちごにきくわかといふちご、かいしろにたてんとて、東大寺別當定範法師まげてをしへよと申しかば、琵琶をば樂屋にてすこしたかくうけて、たひきひくことをばつくりいだして、平調にてひかせき、まことのやうをばをしへざりき、ゆゝしき事ゑりたり

次第如此各向外方而立更無漂序破舞人在兩輪內輪第一第二第三第四各改著裝束輪解一行平立略時大輪一匝之後件垣代儲琵琶付琵琶第一第二第三第四各一人當左舞人後而次輪臺四人突腰行出樂二反道行一反舞間一反垣代樂了不次舞人詠云千里萬里禮拜奉勅安置鴻臚次垣代樂人取音先室次舞樂次琵琶次橫吹之但謂舞出時急吹也次又詠云我是西蕃國信三郎當持金魚次舞人唱歌二拍子略○中次垣代奏當曲二拍子略○中次樂屋奏樂一反次詠云燕子山裏散魚嘉鹽聲不迴次垣代取音略○中略前次又詠云其酌蒲桃美酒相把聚踏輪臺次唱歌前同次垣代樂前同次樂屋奏一反中舞人各一帖○中略合青海波二人相替打袖行出樂四反道行一反舞間三反輪臺不置次樂云桂殿迎初歲次垣代取音略○中次又詠相樓媚早年次唱歌一拍子略○中次垣代奏當曲拍子略○中一說二拍子略○中次樂屋奏一反次詠云煎花梅樹下次垣代取音略○中次又詠云蝶簫畫梁邊次唱歌前同次垣代樂前同次樂屋奏三反終帖打三度拍子略時彈一反從第二拍子上大鼓青海波舞了跪居時樂屋更吹出輪臺度數無定一說舞入時打三度拍子此間舞人垣代前同但為先上騰巡匝還入路經本龍吟抄舞人時吹本輪臺返入但如前破二人立最後退出時元譜入時如元但為元下腦歟中曲新樂今案輪臺作法已有古今之異說一者曰舞人卅人之內有序二人破二人垣代卅六人今序四人破二人垣代卅四人也二者古垣代三匝之後一所作輪今一匝之後兩所作輪三者古舞行立垣代樂止不止連吹之四者古輪臺後度詠了後兩所作輪改著青海波裝束此間樂屋吹輪臺度數無定今初度作兩輪序破舞人同改著裝束無再作輪之儀仍輪臺只彈四反而已五者古輪臺舞人入時不置程即吹青海波立定時吹止今不吹止六者古青海波初度詠以前樂二反詠後又樂二反後度詠後樂三反合舞七帖今初度詠以前樂三反詠後樂一反後度詠後樂三反合舞七帖也是樂之度數雖同詠之前後相違七者古舞了還入時更吹青海波今吹輪臺已上七箇條遠勘長秋之笛譜近見當時之樂禮所辨記古今兩說也夫禮樂之道法草隨時取捨之間竊俟後賢耳

同譜云可吹四反但二反之後有詠又四帖之後詠先吹調子次吹輪臺度數無定舞立定時吹止此間舞人卅人打袖舞出此卅人之內有序二人破二人垣代卅六人輪臺爲序青海波爲破三反之後一所作輪打右袖立更無漂序二人於輪內版垣代之人行平立但件垣代之中僞笙筆築橫笛各一人皆納懷序二人突腰行立之時吹止次吹輪臺一帖次詠一段次舞人打替左袖之時垣代笙取音次又一段詠後卽舞人唱歌以右袖打拍子次垣代笛吹二拍子○中次樂屋吹一反次又一段詠後打替左袖垣代笙取音次又詠後卽舞人唱歌次垣代笛等吹如前二拍子次樂屋吹無定度數後詠了後兩所作輪時垣代裝束改著青海波裝束裝束了輪解平立青海波二人打袖行出序相替突腰入之時不置程卽吹青海波立定時吹止又更吹二反次一段詠後打替袖時垣代笙取音次又一段詠舞人唱歌次垣代次一拍子○中次樂屋吹二反次又一段詠後打替袖之時垣代取音次又一段詠卽舞人唱歌次垣代吹一拍子如前次樂屋三反次又吹青海波退入又此曲明遞橫笛譜云可吹四反但二反之後垣代樂人取音次舞人有詠詠之後舞人唱歌○中次垣代樂人請取此末吹○中次樂屋請取吹一反樂止之後垣代樂人取音次舞人有詠詠之後唱歌如前又樂屋請取次一反其音不止直吹青海波四反樂止之後垣代樂人取音次舞人有詠之後舞人唱歌○中次垣代樂人吹此末○中次樂屋請取爲樂一反樂止堵代樂人取音次舞人有詠之後唱歌如前次樂屋請取三反但終帖打三度拍子舞人入時更吹輪臺加拍子或譜云青海波可吹八反○中但初反四反也一反出今世先笙吹調子次橫笛吹出輪臺度數無定至垣代平立了舞人將出之時復吹不止此間舞人四十人○中也序破舞人六人之外皆持反鼻但立定之後取出持之打袖舞出○中其行列最先青海波舞人下騰○中之後頭時元譜青海波舞人上騰在前同下昭在後次左舞人第一次右舞人第一次左第二次右第二次第如此舞人不足時召加左右近衛官人已下但內裏臨時舞御覽時召加瀧口院北面並武者所衆最末青海波舞人上騰○中之後頭時元譜青海波舞人上騰在前同下昭在後次左南邊東西作輪○中之小輪兩輪並立左舞人第一在東輪右舞人第一在西輪左第二在東右第二在西



〔龍鳴抄<sup>下</sup>盤涉調〕輪臺<sup>りんたい</sup>

拍子十六、四反すべし、二帖ののちにゑいあり、三帖の後にゑいあり、ゑいののち一反するに舞い  
る、そのかみにつゝいて、せかいに吹いづるなり、

青海波<sup>いせか</sup>

拍子十二、七反すべし、たゞし七反とはいへども八反するなり、まひのいるきをばきりにいれ  
ぬなり、みちきに用てまふ、きりを七反するなり、四反ののちゑいゑいののちまた一反、またゑい、  
ゑいの後三反、はてのきりに拍子あぐべし、いる時に輪臺をするなり、ゑいのさはうまゐる三度ま  
いてたちとゞまりてゑい、ゑいののちこゑをとる、まづさうのふえ、つぎにひちりき、次にふえ、は  
じめはおひすがひにをのく、吹いづれども、はてはをのく、ひとつにはつる也、ゑい、ゑいの後  
まひ人さうかをす、さうかのすゑをかいしろの樂人品拍子まふて、それをかくやにがくの拍子  
にうけとる也、青海波をなじ事なり、たゞしこゑとる事かはる、さうかもかいしろのふえもすく  
なし、いづるさほう、てうしふゐて輪臺吹いづるに、青海波さうまうさきにいで、はるかにまわる、  
そのまゝに左右のまひ人、關白殿、左右大將の御隨身反鼻をもちてまわる、へんひといいふは木し  
てつくりたるともゑにばちをぐしたり、かいしろにてそれを拍子うつなり、はてに青海波のげ  
らうはまわる、わをふたつにつくりて、その中にて青海波のさうぞくをする也、くはしくまゐるし  
つくすべからず、口傳を能々ならふべし、新樂

○按ズルニ、青海波ハ毎ニ輪臺ト共ニ連續シテ、之ヲ奏スルヲ以テ、諸書多ク輪臺ノ條ニ合載  
セリ、故ニ今又多クハ輪臺ノ下ニ合載セリ、下之ニ倣ヘ、

〔仁智要錄<sup>十</sup>盤涉調〕輪臺

拍子十六、可彈四反、有詠、輪臺爲序、青海波爲破、垣代舞人出入時彈輪臺、

南宮橫笛譜云、先垣代舞、次舞人出立、可吹二反、合拍子卅二、又一反後詠、二反後詠、○中 長秋卿

ワザラス、呪師モアリ、

又說、拍子十六、此ノ說ニハオトス所ナシ、タゞ口へ返シ吹之、十五時初一拍子ヲバオトシテ吹也、

物早、此曲ハ大事樂也、カクスベシ、

〔體源抄〕二下調、劔氣禪脫、古樂中曲、無舞、拍子十六、唐拍子物也、自第二三拍子、羯鼓壹鼓不打之、以

鉦鼓爲拍子、唐拍子ニテ無時打羯鼓、新古急打樣也、下無調ニテトム有口傳也、

〔舞樂要錄〕上同、舞例、相撲節

長元元年略中、拔出同七月廿日左略中、劔氣禪脫、右略中、桔槔

〔伊呂波字類抄〕人事、輪臺リントイ

〔樂家錄〕二十八調法、中華曲

盤涉調、輪臺利李太以、

〔大日本史〕禮樂十五、按漢書、自伐大宛之後、西域震懼、多遣使來貢獻、於是輪臺渠黎、皆有田卒數百

人、唐書北庭都護府有輪臺縣、而唐人岑參有輪臺歌、李商隱詩有將軍猶是舞輪臺之句、蓋此曲也、

〔仁智要錄〕金十調、輪臺略中

成盤涉調、但詠作小野篁略中、此曲本平調曲也、而承和御時有勅爲盤涉調曲、

〔教訓抄〕三、輪臺

大唐樂云々、作者酒總字恐誤二作之云、ツマビラカナラズ、可尋古老傳云、輪臺國名也、其國ノ人蒼

海波ノ衣ヲ著シテ舞タリシユヘニ、ヤガラ付其國名云々、青海波ハ龍宮ノ樂也、昔天竺ニ被舞儀、

青波ノ浪上ニウカム、浪下ニ樂音アリ、羅路波羅門聞之傳之、漢ノ帝都見之傳舞曲云々、

此曲昔ハ平調樂也、而承和天皇明御時、此朝ニシテ依勅被遷盤涉調曲舞ハ大納言良峯安世卿

作ル、樂者和爾部大田麿并乙魚清上等也、詠者小野篁所作也、有二說、

量非貽厥孫謀爲萬世之法也。又論語曰：樂則韶武。以此言之，散樂定非功成之樂。如臣愚見，請並廢之，則天下幸甚。

〔秋苑日涉〕<sup>四</sup> 渾脫

盤涉調曲有劍器渾脫<sup>器或</sup>樂府雜錄曰：健舞曲有棧大阿連柘枝劍器胡旋胡騰開元中有公孫大

娘善舞劍器，惛懷素見之，草書遂長。蓋准其頓挫之勢也。杜工部集有觀公孫大娘弟子舞劍器行序

曰：大曆二年十月十九日，夔州別駕元持宅見臨穎李十二娘舞劍器，壯其蔚跂，問其所師，曰：余公孫

大娘弟子也。開元三載，余尚童稚，記於郾城觀公孫氏舞劍器渾脫，洊瀕頓挫，獨出冠時。今既辨其由

來，知波瀾莫二。撫事慷慨，聊爲劍器行。昔吳人張旭善草書，嘗於郡縣見公孫大娘舞西河劍器，自

此草書長進，豪蕩感激，卽公孫可知。明皇雜錄曰：公孫大娘能爲隣里曲，及裴將軍滿堂勢，西河劍器渾

脫舞，妍妙皆冠絕於時。李肇國史補曰：張旭嘗言，始吾見公主擔夫爭路，而得筆法之意。後見公孫氏

舞劍器而得其神，通鑑唐紀曰：中宗宴近臣，令各效伎藝爲樂，將作大匠宗晉卿舞渾脫，胡三省注：長

孫无忌以烏羊毛爲渾脫氍毹，人多效之。謂之趙公渾脫，因演以爲舞。通雅曰：唐郭山暉傳宗晉卿舞

渾脫，帳冷舞黃塵。渾脫者亦卞戲拍張之遺也。哀紀時覽：卞射武戲，甘延壽傳，試弁註：弁手搏也。弁卞

同，吳興有卞山，形如弁，緯略作扑戲。又按格隄以殺小牛羊爲渾脫。曰：渾脫舞者，亦蕃語也。中國渾脫

蓋活脫之轉，草名活兌，音活脫，卽通脫木，言其靈通活脫也。當時人存此語可知。三國志：子建見邯鄲

淳，科頭拍袒，正拍張渾脫也。天祿識餘曰：劍器古舞之曲名，其舞用女伎，雄裝空手而舞，見文獻通考

舞部。杜子美公孫大娘舞劍器歌，指武舞而言，或以劍爲刀，劍誤也。陳鳴樂書曰：樂府諸曲自古不用

犯聲。唐自天后末，劍氣入渾脫，始爲犯聲。劍氣宮調，渾脫角調，以臣犯君也。

〔教訓抄〕<sup>六</sup> 盤涉調 劍氣渾脫 拍子十五又十六 無羯鼓子物 脫拍子云

此樂相撲ノ節猿樂用之拍子 大急物也、則拍子五、其ノ時ニモロ／＼猿樂出デ、オモヒ／＼

ル、按ズルニ、是レハ其傳ヲ失ヒシ者ナラン歟、樂書ヲ按ズルニ、劔氣之舞衣五色繡羅襦、折上巾、交脚絳繡□□□械、略中今教坊中呂宮有焉ト、コレ劔氣モト中呂宮ノ曲ナリシコト徴トスベシ、又曰、樂府諸曲自古不用犯聲、以爲不順也、唐自天后末年、劔氣入禪脫、始爲犯聲之始、劔氣宮調、略禪脫角調、以臣犯君故有犯聲トミヘタリ、コレニ據レバ、モト宮調屬セシヲバ、更ニ角調ニ改メ翻セシナリ、按ズルニ、宮調ハ上文ニ所謂中呂宮ナリ、仲呂ノ角ハ南呂ニシテ、我邦ニ所謂下無調ニアタレリ、新撰笛譜ヲ考フレバ、盤涉ノ部ニ劔氣禪脫アリテ、其盤涉ノ下ニ角調ノ曲曹娘禪脫ノ一曲ノミヲ載セタリ、曹娘禪脫モ序破禪脫ト三種ニ分別スレドモ、其笛譜ノ終リハ悉ク五穴ノ音ヲ以テ終リトス、サレバ劔氣ノ五孔ニ終ルモノ、モ、此曲ト一ナリシヲバ、盤涉調ニ加ヘタルハ、イカナル子細ノアリケルニヤ、樂書ノ説ト符ヲ合セタル如キニヨリテ、角調ノ曲ナルベキコトヲ知リス、サレド臆見ナレバ、後ノ識者ヲ俟ツ、

〔龍鳴抄<sub>下</sub>盤涉調〕劔氣禪脫げんき

拍子十五、つぎのかへりにはじめひとひやうしをとす、はやき物也、これをさるがふと云、すまひのせちにこれをして、ひやうしをあげてもろくのさるがういで、おもひくのわざをす、すしもあり、またのせちに十六拍子、このせちにはをとす所もなし、ひやうしのうちやうはをなじ事也、

〔仁智要錄<sub>十</sub>盤涉調〕劔氣禪脫

破拍子廿、可彈二反、合拍子四十、件破斷畢、禪脫拍子十六、第二反以後、每反拍子十四、度數無定、隨舞彈、中曲、長秋卿橫笛譜云、以此曲之禪脫爲相撲節、散樂雜藝之、略但先吹亂聲、此間散樂之舞人數十人、走出了時、件禪脫度數見舞爲限、雜藝同時奏、會要論、樂云、武德元年六月廿四日、万年縣法曹孫伏伽上書曰、百獸散樂、本非正聲、有隋之末、始見崇明、此謂淫風、不可不改、近者太常官司于人間、借女婦裙襦五百餘具、以充散樂之服、云擬於玄武門遊戲、臣竊思



盤涉調 宗明樂 曾字女以羅具

〔龍鳴抄盤下〕宗明樂そめい

拍子十、まひなし、喚頭あり、三度拍子にあぐべし、京にうたのさくわんためきよといひけるものありき、十四拍子なりとぞいひける、喚頭ふきくはへたりけるなめり、大判官とろんじ申たりけれどもまけにけり、そのゆるは、さはかへるをりはいかゞする、つぎの、拍子はいくつかあるとはれて、たうのなかりけるとかやぞ申す、新樂

〔仁智要錄盤九〕宗明樂

序拍子十、無舞、件序斷了、破拍子十、南宮橫笛譜云、破可吹、五反拍子

十、合拍子五十、又從五反打三度拍子、中曲 新樂

〔教訓抄盤六〕宗明樂 拍子十

新樂

昔ハ舞ノ侍ケリ、序并絶了、但於舞者有當時則助說有記ニモアリ、誰人哉尤不審也、又云、雅樂屬爲清ト申ケル樂人ノ說云、此樂拍子十四也、サラニ喚頭ニハアラズト申ケルヲ大判官○大神惟季カヘラン時ハ、カヤウナルベキゾトナムゼラレケレバ、申ノブル事ナクテ、クチヘコンハトツヅヤキケレバ、口ヘ反付、吹ベシトナラヒテ侍リケルニヤ、今世ニハモチキズ、有忠拍子、加拍子時三打

劍氣禪脫

〔倭名類聚抄曲四〕盤涉調曲 劍氣禪脫禪脫一云散樂

〔樂家錄二十八〕中華曲

盤涉調 劍氣禪脫 計半氣古太津

〔歌舞雜譚〕劍氣禪脫屬子角調

當時ニ傳フル所ノ劍氣禪脫ノ曲ハ、盤涉調ニ屬スレドモ、其曲ノコトバ他ノ曲ト異ナリ、コトニ其終リニハ下無調ヲ以テ終ル、サレバ今ハ別ニ吹キ止メノ手ヲ製シテ、盤涉ノ音ヲ以テ終

昔ハ五切アリケレドモ、四五帖絶、今ハ三切リ侍ナリ、終帖加子、略定一返之時如賀王恩十一拍子、加拍子、又末四拍子、樂説、舞出入用調子、

抑此樂及數返時、返吹様有口傳、以二帖喚頭爲四帖、以三帖喚頭爲五帖此説ハ可秘物云々、殊、後白河院日吉ノ御幸ノ時、伶人ノ中ニ此喚頭ノ次第御タヅテアリケルニ、トキニゾミテ各申ム子モナカリケルニ、殆則近ヨモ委クハ申サレタリケレ、頗御感アリ、

〔舞樂圖〕秋風樂

舞者四人

〔教訓抄〕七舞番様

無答舞略○中

秋風樂諸肩程

〔樂家錄〕三十六盤涉調之曲

秋風樂曲中 番舞白濱準子或都志曲中

〔舞樂要錄〕上舞番

左○中 秋風樂 右○中 都志 或白濱

同例 大法會

同成○法 金堂供養 治暦元年十月十八日

左○中 秋風樂略○中 右○中 退宿德

〔源氏物語〕紅葉の覺、行幸には、みこたちなどよに残る人なくつかうまつり給へり略○中 承香殿の

御はらの四のみこ、まだわらはにて秋風樂まひ給へるなん、さしつぎの見物なりける、

〔倭名類聚抄〕四調盤涉調 崇明樂

〔拾芥抄〕音上末樂盤涉調 宗明樂無舞

〔樂家錄〕二十八調法中華曲

崇明樂

欲退出之時被召留<sub>御太刀折紙等範久取之</sub>則候下壇次各進上御太刀<sub>亞相、子、山科、伯三位等也</sub>此後有一獻三獻之度御酌

此時各有召出次第參進了亞相退出又被參御所少時被參御前御盃參男衆有召出事了退出

〔倭名類聚抄<sub>四調</sub>〕盤涉調曲 秋風樂<sub>古老傳云弘仁天皇幸南池院之日初奏此曲</sub>

〔樂家錄<sub>二十八</sub>〕中華曲

盤涉調 秋風樂<sub>志字不字羅具一名長殿樂又弄春樂</sub>

〔仁智要錄<sub>十體涉調</sub>〕秋風樂<sub>〇中</sub> 南宮長秋卿橫笛譜以此曲弘仁御時行幸南池院所作也 明還

橫笛譜云常世乙魚依勅作此曲

〔教訓抄<sub>三</sub>〕秋風樂

此曲弘仁行幸南池院ノ時常世ノ乙魚依勅作此曲<sub>舞作</sub>樂者大戸清上制作之<sub>大石峯真說而在唐</sub>

譜<sub>如何</sub>或人說云自唐傳來也<sub>誰人哉</sub>其時ハ無喚頭云々件ノ常世乙魚作喚頭云々不耻唐家詞云

云就中至第三帖喚頭無雙云々

〔大日本史<sub>禮樂十五</sub>〕按文體明辨吳鏡歌有秋風蓋此曲而二書<sub>〇教訓抄一說並云大戸清上作樂</sub>

仁智要錄引龍吟鈔一說爲清上作舞恐俱誤

〔龍鳴抄<sub>下盤涉調</sub>〕秋風樂

拍子十六五反すべし喚頭あり二帖三帖の喚頭也五反するおりは二帖を四帖にす三帖を五帖

にするなりまひのいでいるにてうし新樂なり

〔仁智要錄<sub>十體涉調</sub>〕秋風樂 五帖拍子各十六但彈二帖爲四帖彈三帖爲五帖合拍子八十終帖打

三度拍子今世彈三帖終帖上太鼓略時彈一帖後第九拍子上之舞出入用調子 中曲 新樂

〔教訓抄<sub>三</sub>〕秋風樂 中曲 新樂

有三帖<sub>拍子各十</sub>  
六〇中略

承元元年、最勝四天王院御供養ニ此曲ノアリシニ、則房宿彌子ニ當曲ヲ申合セラレシ内ニ、清光將曹六人ノ舞人ノ中ナリ、仍人數ニ立ト思ハ、中半帖ノ秘説ヲバトメテ、後半帖ヲ片答ニ舞ハムト思ヨシ候テ、其様ヲ用ラレタリ、

〔教言卿記〕應永十三年三月十五日、少將教豐萬秋樂曲傳授事、日次兼日三位在弘朝臣撰給也、晚頭著衣冠、座敷泉屋高麗疊、著道服倉部大白直垂ニテ聽聞之、隱岐守口定狩衣香組狩衣、爲秋白布衣押ク、ミノ疊次定秋音口次少將序二帖、元來存知之間吹之、卽三帖説ヲ訓、次破二帖ニテ存知之間吹之、則二帖ノ末拍子ヨリ教之、三帖四帖五帖六帖ニテ帖々ノ初バカリ教之、末序吹ニテ教之、無異無事目出々々、

〔看聞日記〕應永廿三年正月十三日、隆盛朝臣、經時朝臣、經興同道參賀御所様、依御歡樂、無御對面長廣同參賀、抑新御所萬秋樂序三帖、奧二拍子、秘説被傳受申、廿四日、予○貞成親王萬秋樂序三帖、奧二拍子、秘説奉傳受、廿六日、先日奉傳受、萬秋樂秘説、奧書今日被下之、

〔親長卿記〕文明十二年五月廿七日、今日有往生講、有萬秋樂云々、其儀不能注、所作者人右大臣、教季園前中納言、基有兵部卿宗綱、伯二位、資益四辻宰相中將、季經俊量朝臣、今日萬秋樂始而所作重治朝臣、不吹萬秋樂他吹之、元長已前兩度於禁中所作、今日又勤仕高麗殿、

〔二水記〕永正十八年八月廿九日早旦、諸家參賀也、御代始之御禮也、依不合期不參、午刻參内、今日宮御方萬秋樂御傳受也、前大納言殿著衣冠、令參候給、則被參御妻御所、奉行山科宰相告召之由、亞相被候下、御妻次山科取御器、御方御大直衣退、次範久朝臣置器於亞相前、先々被候上了先序、次破二三四帖、一々被申入、序破下、藤原隆康、兼申入了、二但返付破詞之後各被略之、次五六帖、樂御同申入、被授申了、取出懷中之奧書、注、奧參進獻之宮御方、有御一覽、然後亞相器撤之、次御器撤之、次亞相退下、此時以奉行御太刀、每度爲銀劍、雖然當時難得候、折紙御馬、兼拜領、等被下之、祝著之由申入、



四年ノ春比大殿下ハ參テ清延可下預由切々ニ申入ケレドモ不下給テ被仰出云行則ガ許ニ行向テ秘曲ニ吹替ヨシヲ承テ行則住宅ニ來テ御定ノ趣ヲ語ル仍荒序ノ笛ニ吹替テ悅上洛畢日記ヲシカナリ其後元政モユルシテ侍了此曲ノ説々ハ惟季ノ正流ヲ得タリ其上堀河院并宗俊家舞樂無相違様ヲシタメオハシマシテ光季ニ下給了仍兩人ノ任記錄注之又參向參音聲奏此曲秘曲一鼓時ハハ新樂也返吹事第二帖幾カヘリモ返吹ヲ口傳トスオクヲ秘スル故也

〔古今著聞集卷十五〕行願寺に全舜法橋といふ者有けり韜足等ひきなりけりゆゑしきすきものに侍けるが不食の所勞おもりて已に命終の期に成て木工權頭孝道朝臣のもとへ使者をやりていひけるは所勞大事に罷成て命旦暮に有今一度見參に入てよみぢやすくまからばやと御わたりありなんやといへりければ孝道朝臣則來られにけり對面してこゝろに懸りたる事候て申傳つる也万秋樂の序の聞度侍る也此邊にも管絃は候へ共同じくば御琵琶にて聽聞仕たき也といひければ則琵琶たづね出して彈せられけり病者みづから善知識の前なる磬をとりて大鼓のつばに打あてゝ涙をながしつゝ聞居たりけり扱則終りけりあはれ成ける事也

〔源平盛衰記十五〕高倉宮出寺事

高倉宮ハ暫ク此ニモ御渡アラバヤト思召ケレ共山門ノ大衆ハ變改國々ノ源氏ハ未參寺バカリニテハ叶ハジトテ廿五日治承四年五月ニ園城寺ヲ出サセ給テ南都ヲ遷テ落サセ給ケルガ先金堂ニ御入堂アリテ蟬折ト云御秘藏ノ御笛ヲ以テ萬秋樂秘曲ヲアソバシテ御廻向アリ南無大慈大悲當來導師彌勒慈尊戒善ノ餘薰拙クシテ今生コソ空シク共龍笛ノ結緣ヲ以テ後生助給ヘトテ泣々佛前ニ差置セ給ケルコソ哀ナレ警固ノ大衆モ御伴ノ兵モ皆袖ヲシボリケル

〔教訓抄〕万秋樂

〔古事談<sup>六</sup>〕宅部博雅三位等譜奥書云、案、万秋樂、自序始六帖畢マデ無不落涙、予誓世々生々在々所々以筆生、彈万秋樂之身歟、凡調子中盤涉調殊勝、樂中、万秋樂殊勝也云々、博雅者依愛此調子再以此樂生都卒外院之由、見經信卿傳云々、

〔源平盛衰記<sup>三十一</sup>〕青山琵琶流泉啄木事

昔、村上天皇御宇ニ、月明々トシテ陰ナク、風、颯々トシテ最冷、秋夜深更ニ臨テ御寂キ折節、御心ヲ澄シツ、此青山ヲ取出御座シテ、御自萬秋樂ノ秘曲ヲ彈ジ給ヒケルニ、撥ノ音ニヤメダリケン、月モサヤケキ軒端ノ頭ニ、天人天降給ヒテ、五六帖ノ秘曲ノ時、廻雪ノ袖ヲ翻シ、雲井ニ登給ニケリ、

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕管絃歌舞大宮右相府<sup>〇藤原家</sup>薨去の後、七々の忌はて、人々分散しけるに、大納言宗俊卿ひとり舊居にとゞまり居て、心ぼそく思はれけるにや、髪かゝれけるついでに、草子宮のふたを拍子に打て、萬秋樂の序を唱歌にせられける、一句をしめては、涙をおとしてぞ居給たりける。<sup>〇下略</sup>

### 〔教訓抄<sup>二</sup>〕万秋樂

又被仰<sup>〇藤原忠實</sup>云、當曲ハ實ノ佛世界ノ曲ナリ、シカラバ舞人モ樂人モ、心ヲスマシテ天上世界ノ曲ヲ思ヤリテ舞ベシ、アラ／＼シキハ心得ヌコトナリ。<sup>〇中略</sup>

保延三年三月四日、宇治小松殿ニテ、知足院殿<sup>〇藤原忠實</sup>ノ御筈、當曲ヲアハセオハシマサン料ニ、俗人ヲアツメラレテ、皇帝已下ノ秘曲ヲ仕リシ時、當曲元政訴申上云、小部<sup>清延</sup>此曲ヲ不傳、別ニ可被聞食申處ニ、被仰下云、故堀河院之御時ニ、又正清ニ御尋ノアリシニ、正清不知申上畢、其上元永二年之比、宗俊大納言家ニ正清<sup>府生時</sup>召居玉テ、万秋樂一具、六帖ハ只拍子ニツカマツルベシト仰ラレシ時、不及申候、不習傳由憶申畢、其上ハ誰人ニ習傳侍リト御尋アリシニ、無申旨被留畢、同

十四、件序雖有二帖只用一帖並一帖之半帖、依舞絕也、破樂拍子從第五帖半帖急彈是謂大曲、一說從同帖第八第九拍子之間急彈今世舞用之、一說從四帖同所急彈是爲秘說、六帖第八拍子以下打三度拍子、略時序一帖破二帖二帖第八拍子以下上大鼓舞出入用調子 中曲 新樂

〔雜秘別錄〕萬秋樂

大曲也、ひじどもはさてをきて、これこそよに事かまびすしきものなれ、いさかひあはせろん世にたえぬものにてあり、いかなるわざはひのねやらん、とよ原氏とおほわの氏とろむず、五帖のなから程よりはてを、半帖よりかみ二拍子よりはやくなると、大神はいひ、半帖よりはやくなると、豊原氏はいふ、又家の説どもには、兩説ながらまゐりて、これらを秘事といひて、子孫にも大事の弟子にもをしへあいながら、ものろんのまたさには、さる事なしといひあひたれば、たゞ一説をまゐりたるになるは、をこがまし。

〔教訓抄〕舞番樣

萬秋樂有甲、近來不用、地久有面甲、准大曲、執後參、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 萬秋樂六人常裝束、甲異體源抄曰、著、

〔樂家錄三十六〕盤涉調之曲

萬秋樂準子大曲番舞白濱或皇仁、地久已上準大曲

〔舞樂要錄〕同番別朝親行幸

嘉保二年正月二日 左略萬秋樂略 中 右略長保樂

相撲節

同平承六年略 中 拔出同略(七月)廿九日 左略萬秋樂略 中 右略敷手

〔源平盛衰記十五〕萬秋樂事

抑萬秋樂ト云曲ハ、本ハ都卒天上ノ樂也、是即彌勒ノ内院ノ秘密灌頂ノ陀羅尼ナリ、釋迦如來切利ノ雲上ニシテ、彌勒ニ袈裟ヲ付屬シ給シ時、彼天ノ萬秋樂ト云木下ニテ、天衆菩薩此樂ヲ奏シテ、如來ヲ供養シ奉シカバ、萬秋樂ト名タリ、昔朱雀院御子ニ日藏上人トテ貴人ニテ、金峯山ニ行澄シテ御座ケルヲ、藏王權現ノ御方便ニテ、秘密瑜伽ノ獨古ヲ把テ六道ヲ見廻給ケルニ、都卒ノ内院ニ參給ヘリ、折節彌勒慈尊ハ大厦高堂ニ默然トシテ座シ給タリケルニ、菩薩聖衆秘密陀羅尼ヲ妓樂ニ移シ、此由ヲ奏シテ慈尊ヲ奉供養、日藏上人絃ノ道ニ長ジ給タリケレバ、唱歌ヲ以テ傳ヘツ、我朝ノ管絃ニ被移タリ、此ニ都卒天ノ樂ト云、序三帖破六帖合テ九品ニ是ヲアツ、舞ノ終ニ必膝ヲツイテ居事ハ彌勒ヲ敬由也、手ニ合掌ノ曲アリ、見佛聞法ノ樂トモ云、迦毗相經第六ニ說テ云、此萬秋樂傳受人天決定往生都卒天上文、誠大陀羅尼ノ功德也、不輒妙曲也、或說云、日藏上人大唐ヨリ此曲ヲ傳ト云々、

〔龍鳴抄<sub>下</sub>卷<sub>下</sub>〕萬秋樂<sub>まんくす</sub>

テうしにてまいでいる、序拍子十八、二反すべし、たゞしまひ十拍子たえたり、よりて此世廿六拍子す、されば一反十八拍子して、また半帖八拍子をかへるなり、破六帖ひやうしをのゝゝ十八喚頭あり、六帖のする十拍子を三度拍子にうつやうゝのせちあり、能々ならふべし、これは四の大曲の外なれども、大曲にかなふるなり、是も大曲と云也、たいていは權官などのやうなる事也、大納言は四人おはしますべけれども、權大納言ぐして五人をはしますなり、弁は六人あるべけれども、權弁ぐして七辨とはいふなり、もろゝのつかさかやうなり、そのていはふるき人のかやうにぞいひし、新樂なり、

〔仁智要錄<sub>九</sub>卷<sub>九</sub>〕萬秋樂<sub>まんくす</sub>

序二帖拍子各十八、破六帖拍子各十八、第六帖打三度拍子百四



〔體源抄 十二下〕一廿五萬秋樂次第、極テ他人不可見也

金聲萬秋樂 只拍子破マデ 慈尊一音樂 只拍子付第五說二帖マデ 見佛聞法樂 樂

拍子付第三說三帖マデ  
元老萬秋樂  
自破此帖マデ樂拍子付第二說四帖マデ  
曼陀萬

秋樂 樂拍子同說付 玄朗萬秋樂 只拍子第六說ニ付五帖マデ 慈尊陀羅尼樂 第三

説入只拍子五帖マデ  
天地和合樂 卽二帖マデ  
菩提樹下樂 卽二帖マデ  
一乘法

華樂 卽二帖マデ  
唱歌萬秋樂 卽五帖マデ  
神仙萬秋樂 卽六帖マデ  
落天萬秋

樂 五六帖計ヲ連テ吹瑟尊終、  
慈尊萬秋樂 序破二三五六帖、各拍子十八、序三反、大

和萬秋樂 說時者序三返半帖後太鼓三下付返 赤白萬秋樂 序不吹大曲二切々 次二無序

吹、彌陀引攝樂 序破計、但シ破終ヲ 大曲吹、有序、蓮葉萬秋樂 六帖計二反、無序、仙

歌萬秋樂 二三帖計ヲ連テ吹、大曲、無序吹、慈尊功德樂 序六帖計吹 宮商萬秋樂 四

帖マデ樂拍子四帖、自半帖、大曲  
九品万秋樂  
序三品破六品有有  
絃歌萬秋樂 六帖マ

テ皆只拍子ニ吹、又說、只拍子ノ時ハ二三四帖、只拍子ニシテ四帖ノ第八第九ノ自拍子樂拍子ニ

成也。大曲、大和萬秋樂六帖マデ八拍子吹之、四帖ノ第八第九ノ自拍子大曲吹、延說短說者

五六帖ニ兩ニ品々打三度拍子ニ也、慈尊武德樂譜ニアリ

已上略中

十二萬秋樂次第

絃歌萬秋樂  
大和萬秋樂  
慈尊萬秋樂  
金性萬秋樂  
曼陀萬秋樂  
神仙萬秋樂  
仙歌萬秋

樂 唱歌萬秋樂 元老萬秋樂 見佛聞法樂 菩提樹下樂 慈尊功德樂

此ヲ十二萬秋樂云也、妙音院殿五樣萬秋樂者、

慈尊功德樂 大和萬秋樂 宮商萬秋樂 九品萬秋樂 曼陀萬秋樂 此ヲ五樣ト云也

月仙洞御講に蘇合一具侍しに、予大鼓つかうまつりしにも兩帖に打侍き、只是法源坊に申あはする所也。

〔嚴有院殿御實紀三十〕寛文五年五月十九日、舞樂御覽あり、略中 青海波、蘇合香、退走禿は、四十年來にて再興ある所とぞ、

〔枕草子九〕まらべは

そかうのきう

萬秋樂

〔樂家錄二十八〕中華曲

盤涉調 萬秋樂漢平志字羅具、此曲歷有二十五異名、略之。

〔仁智要錄九〕萬秋樂 南宮橫笛譜云、又號慈尊樂、長秋卿橫笛譜云、又號慈尊萬壽樂、

〔教訓抄二〕萬秋樂

此曲ハ佛世界曲也、序破各別曲ニ侍ト、カヤウノ様マチノニテ侍、先自百濟國波羅門僧正所傳來也、コヽニ左大臣源信ウタガヒラナシテ、フシ給フ夜ノ夢ニ、天ニ音アリテ云ク、汝ウタガフコトナカレ、此序ハ五妙ノ音樂也、ユメサメテ彌掌合テ貴給ケリト申傳タリ、略中

萬秋樂異名

大和萬秋樂、金商萬秋樂、慈尊萬秋樂、慈尊來迎樂、曼茶萬秋樂、絃歌萬秋樂、元老萬秋樂、鳴歌萬秋樂、神仙萬秋樂、仙歌萬秋樂、見佛欄法樂、慈尊示德樂、菩提樹下樂、慈尊樂、出世成道樂、

已上十五名 或書注之、不審無極可尋、

〔大日本史禮樂十五〕按、類聚治要、教訓鈔、本曲異名甚多、冠萬秋以絃歌賀唱、金商、神仙慶賀、戀火、大和、曼茶、元老等語、又慈尊下加不退、一壽、成道來迎、示德等語、各爲一名、譜亦有小異、其別名又有見佛聞法樂、菩提樹下樂、出世成道樂等之號、然本文所舉、蓋其定名也、故今附諸異名以備考、

聲トシテ、入綾ヲ可仕ト仰ス、光季奉勅、燕姬周郎曲ヲユキノクモトラマハセリ、天皇頗御感アリ  
 ヲ、重被勅下云、御前ノ外此說更ニ仕事アルベカラズ、自三返ノ様ト謂者、未言此様ハ吹出テ一返喚  
 ナリ、爲三秘說、

〔古今著聞集〕管絃歌舞

六

或所にて會遊ありけるに、時元笛を吹けるが、まばらくやすみけるに、時廉

蘇合序を吹けり、時元聞て、あはれ正念なく吹物かな、かゝらんには興なくやとて、笙をはりて中  
 間に兩所かさねてあげて吹たりける、誠優美なりけり、侍從大納言のいはれる蘇合序は廿拍  
 子なり、まあるに今の世には十二拍子を用て、殘八拍子をばもちゐぬいはれなき事也、舞又た  
 らず、そのゆゑは舞は手のあひかはる五拍子也、此五拍子をはじめは東にむきて舞、次第に南に  
 向て舞、次に西に向て舞、次に北に向て舞、各五拍子を舞也、同じ手ををかへて舞也、まあるを  
 近代は南に向て三拍子、北に向て五拍子をまはざる也といはれければ、舞人光近聞て、五拍子方  
 をかへて舞事、またくさる事なしとぞいひける、抑序奥八拍子はたえて久敷なれり、まあるをか  
 の亞相ひとり傳へられたる事もおぼつかなき事也、されば元正正くつたへたりけるにや、此事  
 おぼつかなし、蘇合三四帖共に奏する時、籠拍子兩帖にうたづして四帖に用事は頼能、是季、時元  
 等の説也、まあるを季通朝臣いはれるは、蘇合は三帖を肝心とするがゆゑに、かならず此帖  
 に打べしとぞ侍りける、明退宗輔等は、兩帖共に打べきよし申されけり、堀河院御時御遊有ける  
 に、蘇合一具とをされけり、三帖を奏して後宗輔卿奏すべきよしを仰下しけり、これ天氣也ける  
 にや、此時の樂人元正以下宗輔の與奪を聞て、此人心おとりすとぞつぶやきける、是は三帖にう  
 たずして、四帖にうつべき由を思て、さらば三帖の時ぞいはれめと思て、かくつぶやきける、なる  
 べし、此條はいはれなき事にや、兩帖共に打事は亦正説也、妙音院殿藤原も兩帖共に打べき由  
 儘にまあるしおかれたり、是によりて其御流をうけたるものみな兩帖にうち侍りき、寛治三年六

〔舞樂要錄上〕同○舞例 大法會

法勝寺御塔供養 永保三年十月一日 左○中 蘇合○中 右○中 新鳥蘇

朝觀行幸

同年○寛治二十九日 左○中 蘇合○中 右○中 林歌

永久二年二月十日 左○中 蘇合○中 右○中 古鳥蘇

〔江家次第七八〕相撲拔出

左右各舞時 大曲各一 左蘇合香、右新鳥蘇

〔教訓抄二〕蘇合香

大納言從二位中宮權大夫源時中横笛ノ譜ノ裏書ニ云、寛和三年十月十三日、太上天皇、大井河邊御遊覽アリケルニ、古唐ノ妙音樂ノ急ヲ奏ケル、ヤウ、數返ニオヨビテ、コトニ樂水ノ音ニラウジテ、オモシロカリケレバ、攝政守給言ノ趣、時中朝臣ニオホセ付ケルニ、紅葉ヲアリテ插ザシテ、船ノ舳ニ立出テ、飄烟雪之襟、捫燕姬周郎曲舞了ヌ、姿ハ好茂躬高トイフトモ、時中ノ一曲ニハスギジ、仍仰勸賞八座列畢、昔ハ上臈ノ中ニモ如此目出人ノ御ケルナリ。

〔定家朝臣記〕康平三年十一月廿六日辛亥、殿下○藤原於白河院賀大僧正○明九十算○中、次有音

樂、左蘇合六人、右新宿德六人、殿上人各纏頭、四年十月廿五日甲辰、平等院御塔供養也、廿六日、

朝禮堂莊嚴、次召船樂於東池畔松下、左近將監則高舞蘇香唐急、右近將監正助舞新鳥蘇、各於船打

鼓、

〔教訓抄二〕蘇合香

長治元年八月一日堀河天皇御幸ノ御八幡オコナハセ給ケル次ノ日、弘宣殿ニシテ舞御覽アリケル、四帖忠拍子ノ説光季ガツカマツリケルニ、勅定ヲウケ給テ、左大辨基綱朝臣以古唐急入音



四反、舞出入時彈當曲破、南宮橫笛譜云、序五帖依次吹破、可吹四反、一反後依換頭吹急、可吹三反、一反後依換頭須吹、總帖別拍子廿、但序三四五帖打間拍子、急又同、今案譜入破之上有颯踏、而無其舞間、其由延曆遣唐使時、倭生和爾部島繼舞此曲、來時忘颯踏也、仍除棄之者、古善舞此曲者、有進物所布施忠雄及太宰大貳源行有朝臣等、長秋卿橫笛譜云、序五帖一二帖拍子各廿、三四五帖拍子各廿二、破拍子廿、可吹四反、颯踏拍子廿、急拍子廿、可吹四反、但序第二帖並颯踏世不用、龍吟抄云、舞出入時從六孔吹出、貞保親王譜云、返入時打三度拍子、今世先笙吹調子之間、橫笛吹出當曲破換頭是爲道行、度數無定、舞人行立了吹止、序四帖、但一帖拍子十二、三四五帖拍子如上註、件序每帖置程彈之、破彈三反、不、上太鼓急彈五反、從第二反加拍子、初一反不舞、第二反以後無四帖也、件破急不置程速彈之、略時序三帖、不、彈四帖但第一帖彈七拍子、若五拍子、破彈一反、急彈兩三反、舞入時重彈當曲破、大曲、新樂〔無名秘抄〕一抑樂の中にそかうといふ曲あり、是を舞に五帖まで、帖々をきれ、にまひをはりて後破をまふ、やがてつゝけて急をまふべきに、急の始一反をばまことにまふ事なし、かたのごとく拍子ばかりに足を踏合て、うちやすめつ、二反の始よりうるはしくまふ也、

〔體源抄十一下〕舞曲古今相違事

古蘇合入時吹道行加三度拍子爲入舞、今吹唐急舞入綾、

〔教訓抄七〕舞番樣

蘇合有甲、諸肩進宿德有面、半子、合肘

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 蘇合香舞人常裝束、袍、

〔樂家錄三十六〕盤涉調之曲

蘇合香四箇大番舞新鳥蘇、或古鳥蘇、退走禿、進走禿、已上大曲

國ノ大事ニテモトメクレドモ、オホカタモアリガタキ草ナレバモトメエズ、經一七日テ此クヲヲエタリ、卽病イエ給クレバ、ヨロコビ給テ作給ト云、傳ハ育偈ト云ケル人、此草ヲ甲トシテ起座舞ケルニ、一殿ノ内勾カウバシカリケリ、以此草名爲三樂名、又云蘇合香、出三蘇合國、諸香草煎汁名也、

〔大日本史 禮樂十五〕按、二書體源抄抄、云、天竺阿育王病、服蘇合香而愈、故悅作此曲、育偈者作舞、卽以蘇合草葉爲膏、又按、教坊記、樂府雜錄、文獻通考、並有蘇合香、卽唐教坊樂軟舞曲名也、然不言其所起、今姑從二書、

〔龍鳴抄下盤抄〕蘇合香といふ

まづてうしをふいて、みちきをふきいづ拍子廿序五帖、一帖拍子廿、このよ十二ひやうしをする也、いま八拍子半帖なり、よの半帖たえたり、はじめ二拍子は序にす、のこり十拍子はがくにす、かこいくつといふ事なし、二帖たえたり、三帖拍子廿二、こめ拍子あり、この兩帖おなじひやうしなり、たがふことなし、たゞしふるき人いひつたへたる事、四帖する時は、三帖にこめ拍子をうたずして、四帖にうつべし、そのゆへはともにある時は一にはうたぬ、由損をなじくば四帖にうつべし、五帖にうたねば四五帖ならびて、こめひやうしうたぬがわろければいふなり、五帖拍子廿三なり、二十拍子よりのちは序にふきのぶるなり、三拍子は序にするなり、たゞし廿拍子とは、ふきのへんする所なり、そのひやうしうちのぶるなり、能々心あるべし、破廿拍子四反すべし、颯踏といふ物ありけれども絶たり、このよ破を吹いで、すなはち急をつらねふくなり、急拍子二十四反すべし、はじめのきりはあげず、嘆頭よりあぐべし、あぐる所はならひ有よく／＼ならうべし、まひのいるに又みちきをす、これ大曲なり、新樂、

〔仁智要錄九盤抄〕蘇合香 序五帖、一、二帖拍子各廿、三四五帖拍子各廿二、但三四帖帖別各兩所打三度拍子、二、說五帖拍子廿三、件序一帖、奧八拍子並二帖斷了、破拍子廿可彈、四反急拍子廿、可彈、

青海波詠有 鳥向樂 蘇莫者 採桑老詠有 感秋樂 山鷓鴣曲名鷓鴣鳥 竹林樂 元歌 德貫子

盤涉參軍 永寶樂 登貞樂

〔拾芥抄上末〕盤涉調

蘇合香 萬秋樂 宗明樂舞無 蘇莫者 劍氣揮脫 秋風樂 鳥向樂舞無 輪臺 青海波 採桑

老 白柱舞無 竹林樂 承秋樂同 感秋樂同 遊字女同 鷄鳴樂同 千秋樂同 越殿樂同

〔龍鳴抄下〕盤涉調曲

蘇合香略 萬秋樂略 採桑老略 輪臺略 青海波略 蘇莫者略 秋風樂略

鳥向樂略 白柱略 宗明樂略 竹林樂略 千秋樂略 劍氣揮脫

〔仁智要錄九〕盤涉調曲 蘇合香 萬秋樂 宗明樂 蘇莫者 劍氣揮脫 秋風樂 鳥向樂

輪臺 青海波 採桑老 白柱 竹林樂 承秋樂 感秋樂 遊字女 鷄鳴樂 千秋樂 越殿

樂

〔夜鶴庭調抄〕樂名等

盤涉調 異大風 宮商荆仙樂 輪臺 青海波 元歌 萬秋樂 □□□ 蘇合香 劍氣揮

脫 宗明樂 蘇莫者 採桑老 鳥向樂 秋風樂 白柱 竹林樂 千秋樂 越殿樂 鷄鳴樂

〔倭名類聚抄四曲〕盤涉調曲 蘇合香大曲俗只云蘇合

〔樂家錄二十八曲〕中華曲

盤涉調 蘇合香曾加不加字、合字清尋常略香字、

〔教調抄二〕蘇合香

此曲ハ陳後主所作歟、一名古唐急、或書曰、中印度ノ樂也、而モ中天竺ヨリ出タルカ、抑阿育大王病ニワヅラヒ玉ヒタリケルニ、蘇合香ト云草ヲ藥ニエ玉ハズバ、存命カタカルベシト申ケレバ、一

〔大日本史 禮樂十五〕按、要錄○仁智治要○類聚共引、醉鄉日月、爲楊帝所造、隋書云、楊帝令白明達

柳汎龍舟、舊唐書亦云、帝在江都所作、其說皆合、

〔龍鳴抄下〕汎龍舟はなり

拍子十八六反すべし、喚頭あり、水調物也、まかれども、このよわうまきてうのてうしにてまひ、い

でいる、さうには散今打毬樂をす、

〔教訓抄四〕汎龍舟拍子十八童舞 新樂

此曲律書樂圖云、隋ノ楊帝所造也、以當曲爲破拍子十八、以散吟打球樂爲急拍子十二、今常樂舞之僅ニ序體○

源抄無、破急、略五拍子許也、末拍子三舞出入用黃鐘調調子、當曲者則水調曲也、尤雖可吹水調調子依

秘藏、不吹之云々、其様未、落居、

詠云、稽首無上諸善逝、妙法一乘無二曲、開樂悟入佛知見、三乘三望法善土、供養香花及音聲、以此微

妙殊勝舟、乘大牛車出三界、不入化城到寶前、願共衆生速成佛、近來此詠スルコトハナケレドモ目

出文ニテ侍バ註之變表州ハ是汎龍舟ノ別讀也、此古老ノ御説ニ云、ハムレウシユヲ奏スレバ、南

方ヨリ必スバシキ風來テ、アツキコトラ失ス、此曲漢土ニテハ有序二帖拍子六ア、可尋之、

〔教訓抄七〕舞番様

無答舞中 汎龍舟童舞 常樂會舞

〔續教訓抄 舞樂譜〕或人云ク、共ニ左舞ヲモテ相對スルコトアリ、中 春日行幸時、殿下御方黒木御

所奏、兩童舞事、如御春日詣泛龍舟五常樂、與福寺常樂會十六日、以泛龍爲左、則著左裝束、以五常樂

爲右、即著右裝束也、

〔續教訓抄 水調〕承涼樂 拍子十、初拍子五、已下八、

承涼樂  
盤涉調樂曲

〔倭名類聚抄曲四〕盤涉調曲 蘇合香 萬秋樂 秋風樂 崇明樂 劔氣揮脫釋散樂一 輪臺



〔夜鶴庭訓抄〕黃鐘調 重光樂

〔仁智要錄水調八〕重光樂 拍子十六 中曲 古樂 無舞

〔教訓抄黃鐘調六〕重光樂 拍子十六 水調曲 新樂

重光大臣作之云不分明可尋 有忠拍子加三度拍子

〔大日本史 禮樂十五〕按、古樂苑漢明帝爲太子、樂人作歌詩四章、其一曰、日重光、隋書云、宣帝時、革前代鼓吹制爲十五曲、第十二改漢上邪爲宣重光、據此、重光樂蓋漢樂、而後人因重光名、誤爲其所造歟、

〔續教訓抄水調〕重光樂 新樂 中曲 或古樂 拍子十六 初拍子 五 已下八 四反可吹之、加三度拍

子、有舞絕畢、忠拍子アリ、興福寺法華會梵音登樂ニ用之、抑此曲ハ大納言源朝臣重光之作也、仍重光樂ト云フ、且以作者之名付其名事、其タメシオ、キヲヤ、或云光大臣ト云々、此大臣大ナル僻事也、○中略 或云、花山法皇御宇作之云々、

九城樂

〔倭名類聚抄水調四〕水調曲 九城樂

〔續教訓抄水調〕九城樂 新樂 拍子十六、初拍子五、已下八、四帖アリ、一二三四帖ヲ反吹ナリ、

汎龍舟

〔樂家錄二十八調〕中華曲

水調 汎龍舟波牟禮字志字 一本泛作汎、一名變暑州、又變表州、

〔夜鶴庭訓抄〕黃鐘調 汎龍舟

〔仁智要錄水調八〕汎龍舟 泛或作汎 序拍子十六、件序斷了、破拍子十八、可彈二反、長秋卿橫笛

譜云、可吹六反、合拍子百八、南宮同譜云、破拍子十四、傳云、唐五月競馬、宴必儻此曲、舞既斷絕也、

綿譜云、但以散吟打瑟樂爲此舞急、可吹六反、明退橫笛譜云、此曲讀法、華經之樂也、有詠 中

曲 新樂 醉鄉日月云、此曲隋煬帝造

〔仁智要錄八調〕拾翠樂

序拍子七

南宮橫笛譜云、序可吹十二反、以二反爲一帖并六帖、每遍拍

子七、合拍子八十四、

長秋卿同譜云、

序拍子七、可吹五反、以二反爲一帖、合拍子卅五、件序斷了、破拍

子十、彈七反、合拍子七十、

長秋卿同譜云、

南宮譜云、破隨舞吹無定數云々、舞廻中則退入、承和大嘗會時、

豐樂殿前作海濱奏、此曲集砂石植樹木、成山阜之形、敷縹布散萍藻像海渚之體、引船於其上、擬飛帆

之隨波載舞、置於其中、似海人之拾藻、曲了卽撤復元、又笛作清上、舞作尾張濱主、龍吟抄云、序竹河

破伊勢海急拍子十、可彈七反、中曲 古樂

〔難秘別錄〕拾翠樂

この樂の急は、近うよりいできたり、いと人えらず、用ゐぬにや、

〔教訓抄六調〕拾翠樂

破拍子十

急拍子十

水調曲

古樂

破ハ笛師清上作之、有忠拍子、加三度拍子急、豎物賴吉作之、四カコ加二或管絃者云、傾坏樂急ヲ渡吹

歟、但不同、有時傳之、略中

又云、承和帝作之、催馬樂合序青柳破、伊勢海急、竹川、

〔續教訓抄水調〕拾翠樂

古樂

中曲 或新樂

又名拾藻樂略中

此曲ノ序鳥羽院ハ時元ガ説ヲモテシラシメ給トコロナリ、此外又知ル人ナシト云々、

京極大相國御記云、昔承和始作此樂、今永承續其急、雖時代異、趣惟同、賴能携竹音而多日、比蔡邕

之德、學龍吟而幾年、賴馬融之詞料、知能辨清濁、深知宮商者也、或譜云、豎物賴吉作、

〔樂家錄二十八調〕中華曲

水調 重光樂志字具和字羅具

〔樂考水調〕重光樂 未詳

按するに、此曲御即位もしくは立坊の時作られしなるべし、唐に宣重光曲あり、是は後周の明

帝即位の時造られし樂也、

重光樂

天安樂  
儀馬樂  
英雄樂

承和帝王明御作、舞是成作、催馬樂青馬歌音也、

承燕樂 古樂拍子十、有喚頭、初拍子五已下八、四反可吹此曲、大戶清上作、舞是成作、

天安樂 拍子十、初拍子五已下八、

催馬樂 序一帖拍子七、

極葉井〇體源抄拍子九、初拍子九已下八、五反吹ベシ、抑此曲承和帝王ノ御作、舞ハ犬上是成作、

之ヲ、催馬樂葛城同音、

英雄樂 破、抑此曲唐虞世南作、古人於貴所必奏、此曲云々、

〔大日本史 禮樂十五〕按羯鼓錄、太簇商有英雄樂、卽是

〔體源抄十中〕又云、催馬樂ハ我駒ヲモテ序トシ、伊勢海ヲモテ破トシ、竹川ヲモテ急トス、是古人之

口實ナリ、

〇按ズルニ、催馬樂ノ事ハ、雙調樂曲條ニモアリ、宜シク參看スベシ、

〔類聚治要十水調〕極葉井 拍子九

〔倭名類聚抄四水調〕水調曲 拾翠樂 重光樂 九城樂 汎龍舟〇仁智要錄同

〔拾芥抄上末〕樂目錄

水調 汎龍舟 拾翠樂無舞 重光樂 平蠻樂無舞

〔倭名類聚抄四水調〕水調曲 拾翠樂律歌有伊勢海曲是

〔拾芥抄上末〕水調 拾翠樂無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

水調 拾翠樂志須以羅具 一名拾湊〇薩恐誤 樂

〔夜鶴庭訓抄〕黃鐘調 拾翠樂

拾翠樂

水調樂曲

赤白蓮花樂

已下八、加三度拍子秘之序殊秘之此破山城歌音振様也、又一書說鷹山音也、眞偽難決、

〔體源抄〕<sup>二</sup>黃鐘調、西王樂、古樂、中曲、無舞、或新樂

〔拾芥抄〕<sup>上</sup>黃鐘調、赤白蓮花樂、<sup>無舞</sup>

〔樂家錄〕<sup>二</sup>曲調法、中華曲

黃鐘調、赤白蓮花樂、<sup>志也、具非也、具禮、李計、一本赤作青、</sup>

〔續教訓抄〕<sup>水調</sup>蓮華樂

抑此曲ハ尾張秋吉ガ所作ナリ、或云舞ヲ作ト云々、或云舞師尾張秋吉ト云々、秋宮云々、或云大安寺僧安操所作ト云々、或云與福寺僧義操ガ作ト云々、

〔龍鳴抄〕<sup>上</sup>黃鐘調、赤白蓮花樂、<sup>といふべし</sup>

律にてあるべし、拍子十二、新樂、これ與福寺東金堂蓮華會にする物也、人まらず、

〔仁智要錄〕<sup>八</sup>黃鐘調、赤白蓮華樂、拍子十二、明遍横笛譜云、可吹四反、絲竹譜云、爲蓮華會樂、

舞師尾張秋吉作舞

〔教訓抄〕<sup>六</sup>黃鐘調、蓮花樂、拍子十二、又謂、赤白蓮花樂、<sup>水調曲、</sup>新樂

此曲舞師尾張秋吉所作也、興福寺ノ金堂蓮花會ノ傳供ニ奏、此樂堀川院御時、被尋諸家、惟季之流ノ外コレヲシラザルヨシ奏聞ス、知足院ノ禪定殿下、<sup>○藤原忠實</sup>此樂ヲメデタガラセ給フ、仍

テ御忌日ニハ、イマニカナラズ樂ヲシ侍ルナリ、有忠拍子、<sup>加三度拍子、</sup>

〔續教訓抄〕<sup>水調</sup>蓮華樂、<sup>新樂、中曲、或古樂、</sup>一名赤白蓮花樂、一樣折臂、教掛樂、拍子十二、<sup>律樂、</sup>初拍子、<sup>五</sup>

已下、<sup>八</sup>延或早、四反可吹、或二反、加三度拍子、舞アリ、絶畢、忠拍子アリ、<sup>○中</sup>

又云、此樂ハ想夫憐ノ詞ヲ渡シタルガ目出キ也、

〔續教訓抄〕<sup>黃鐘調</sup>夏引樂、古樂、序拍子廿三、催馬樂、夏引歌音、破拍子十二、初拍子、<sup>五</sup>已下、<sup>八</sup>此曲笛

夏引樂  
承應樂



提金樂

〔續教訓抄黃鐘調〕皇帝三臺 新樂拍子十六、初拍子五 已下八、

〔倭名類聚抄四曲調〕黃鐘調曲 提金樂

〔續教訓抄黃鐘調〕提琴樂 新樂呂、拍子十二、或拍子十一、初拍子五 已下八、加三度拍子、此曲清瀨宮繼作、

長生樂

〔拾芥抄上末音樂〕黃鐘調 長生樂無舞

〔大日本史禮樂十五〕按、玉海、太常梨園別教院法歌章曲中有長生、疑此曲也、

〔仁智要錄八黃鐘調〕長生樂 序拍子六、可彈三反、破拍子十、可彈三反、各拍子四十八、長秋卿橫笛

譜云、所謂序青柳歌音、破即高砂歌音、中曲 古樂 南宮橫笛譜云、承和御時清涼殿前紅梅花賀時作此曲、笛則帝王之御作、儻則左大臣信朝臣所作也、則童男冊人著麴塵舞殿前、此儻斷也、

〔續教訓抄黃鐘調〕長生樂 新樂 中曲 或云古樂

序拍子六 三反可吹之、催馬樂青柳同音雅三品二反云々、破拍子十、初拍子五 已下八、可吹三反、終帖

加三度拍子、

西王樂

〔拾芥抄上末音樂〕黃鐘調 西王樂無舞

〔樂家錄二十八曲調法〕中華曲

黃鐘調 西王樂勢以和字羅具

〔仁智要錄八黃鐘調〕西王樂 序拍子七、可彈二反、破拍子十、南宮橫笛譜云、破拍子九、長秋卿同

譜云、是同花賀時作、笛帝王明 仁 御作、舞之時犬上是成作、伴曲序、草垣歌音、破鷹山歌音也、中曲

古樂

〔續教訓抄黃鐘調〕西王樂 古樂 中曲

序拍子七、或六、南宮御說二反吹ベシ、破拍子十、雅三品說、或九、南宮御說、又說八、只拍子也、初拍子五、

拍子、其屈指透、自狩衣木賊、顯然、永秀長之云、雖有聞笛聲者、未許其拍子、是非直之人云々、

〔源平盛衰記八〕法皇三井瀧頂事

今年〇治承二年ハ櫻ハ遅クツボミテ、桃花ハサキニ開タリケレ共、智者ハ秋ノ鹿トノミ詠ゼサセ給テ、花ヲ御覽ズル事モ無キ、依之雲上人、更ニ一人モ花ヲ詠ジスル人ハ御坐ザリケルニ、三月三日タリシニ、

春過遍是桃花水、不辨仙源何處尋、ト高聲ニ詠ズル人アリ、法皇〇後白河誰ゾヤト被聞食程ニ、ヤガテ清涼殿ニ參テ笛ヲ吹鳴シテ、時ノ調子、黃鍾調ニ音取スマシタリ、サルカトスレバ、又御厨子ノ上ナル、千金ト云フ琵琶ヲ懷下シ奉リテ、赤白桃李花ト申樂ヲ三返計ゾ引タリケル、直人トハ覺エズ、希代ノ不思議哉、トゾ、法皇ハ被思召ケル、赤白桃李花ヲ三返彈テ後ハ琵琶ヲ引ズ、詩歌ヲモ不詠、笛ヲモ不吹、良久音モセザリケレバ、此者ハ歸リスルヤラント思召テ、ヤ、赤白桃李花ヲバ何者ガ彈ツルゾト仰有ケレバ、御宿直ノ番衆トゾ答奏シケル、番衆トハ誰ゾヤト御尋アレバ、開發源大夫住吉トゾ、名乗給タリケル、サテハ住吉大明神ニコツト思食テ、急御對面アリ、夢ニモ非覺トモ思召サズ、希代ノ不思議カナトゾ被思召ケル、

〔倭名類聚抄四曲調〕黃鍾調曲 皇帝三臺

〔樂考黃鍾調〕皇帝三臺 未詳

按するに、宋朝の南岳神に獻する曲に、黃帝璽有り、黃と皇とは相通ず、黃璽を皇璽に作るがごとし、三臺は則三臺璽の名によりて、璽曲の事をいひし歟、まからば皇帝三臺は黃帝璽の事にや、

〔大日本史禮樂十五〕按、文獻通考云、三臺唐太宗所作、敎訓抄引醉鄉日月云、則天后造、二説不同、〇中略意者三臺璽則天所作、而此樂或太宗樂、故稱皇帝、猶破陣樂有秦王皇帝之別乎、附以備考、

四帖合拍子卅八從第五帖半打三度拍子舞出入用調子、中曲 新樂 南宮橫笛譜云大唐三月曲水宴必儻此曲、長秋卿同譜云內教坊奏此曲依無儻用央宮樂儻、

〔教訓抄三〕桃李花 又赤白 中曲 新樂

有六帖 拍子各八 本是妓女舞也○中

序破ノ舞古ヘ絶畢、仍以央宮樂舞云々令通用之但シ四帖ノ舞ヲ六帖ニ分ツ、尤秘事タリ、舞家ニ口傳有之故則房ノ申サレシハ昔ノ桃李花ノ舞ノ手内前後ヘ走ル手アリケリ是ヲ三帖ニ舞也、人ノシラヌ様ナリトゾ被申シ、加拍子有又數、六帖ノ舞時ハ、五帖從末四拍子、打三反一帖ノ時、不<sub>レ</sub>加拍子、二帖時、末四拍子加也、三帖舞時モ、二帖末從四拍子、加拍子也、三帖皆加<sub>之</sub>云々付舞故也、

〔續教訓抄 舞案譜〕或人云、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタナリ、○中 女舞ハ、○中 桃李花 十二人

〔教訓抄七〕舞番樣

桃李花 赤白桃李花云、諸肩祖、皇仁 有面甲、皇仁、唐ト云

〔樂家錄三十〕左右舞及人數裝束

左舞 桃李花 六人 常裝束

〔樂家錄三十六〕黃鐘調之曲

桃李花 曲中 番舞皇仁、<sub>大曲</sub>或登殿樂、<sub>小曲</sub>

〔舞樂要錄上〕同○舞 例 朝覲行幸

同○康 四年正月二日 左○中 赤白桃李花○中 右○中 新鳥蘇

〔古事談六宅諸道〕保延五年正月廿六日六條大夫基參入禮部禪門、語申云、八幡所司永秀、古時無左右笛吹也、正近同時者也、○中 永秀正近共居宿院水中門、永秀吹桃李花、令聞正近、正近密屈指計其

〔仁智要錄八〕清上樂 拍子廿、可彈四反、合拍子八十、終帖打三度拍子、中曲 新樂 長秋

卿橫笛譜云、貞保親王譜云、清上欲道唐使時、作此曲上奏、諸曲之中、殊善作、有勳便、以名號爲曲名、

〔教訓抄四〕清上樂惟季相傳譜書上 聖樂云々○中略

新樂有四帖 拍子廿 童舞

舞出入用調子與福寺常樂會童舞ニテ奏之近來僅カニ五拍子許也、末加四拍子、

〔樂家錄三十〕黃鐘調之曲

清上樂曲中 番舞未考之

〔伊呂波字類抄志人〕赤白桃李花黄シヤクヒヤク

〔樂家錄二十八〕中華曲

黃鐘調 赤白桃李花勢氣波津太字利具和尋常略赤白二字、

〔教訓抄三〕桃李花 又赤白

是唐家ノ物歟、貞保親王ノ譜曰、伊勢ノ興房申云、モロコシ桃花盛時ノ酒盛、三月三日曲水宴奏此樂

〔大日本史禮樂十五〕按本書志 唐高祖時歌草木二十一曲、其一赤白桃李花、卽是也、

〔龍鳴抄下〕赤白桃李花くわり

てうしをしてまひいづ序ありけれどもたえたり、破六帖、拍子おのく八、あはせて拍子四十八、

はてのてうに拍子をくはふ、たゞし五の帖のなかよりくはふべし、拍子をくはへてのち十二拍

子なり、このまひ絶たり、いまの世中央宮樂の舞をまふなり、件拍子十二四反なり、合四十八拍子な

り、よて十二拍子をあぐるいとゞことはりなり、新樂

〔仁智要錄八〕赤白桃李華 李或作柳 序一帖無舞、件序斷了、破六帖、拍子各八、但彈二帖爲

赤白桃李花



二反終帖打三度拍子舞出入用調子、南宮橫笛譜云、以此曲爲水調曲、同譜云、重親王源氏對面時、習此曲儻于御前、中曲 新樂

〔教訓抄〕舞番樣

咸城樂片屑祖綾切有面、愛樂云、一說李千、一說鳥甲、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 咸城樂六人常裝束袍

〔樂家錄三十六〕黃鐘調之曲

咸城樂曲中番舞延喜樂、或綾切已上中曲

〔倭名類聚抄四曲〕黃鐘調曲 聖淨樂

〔拾芥抄上末〕黃鐘調 清上樂無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

黃鐘調 清上樂勢以志也字羅具、一名淨聖樂、一本上聖樂、

〔樂考黃鐘調〕聖淨樂

按するに、一名上聖樂といふによれば、唐玄宗神仙の事を好み給ひし時に、賀知章、紫清上聖曲を奏せし事見えたり、

〔大日本史禮樂十五〕按、唐書、玄宗喜神仙之事、工部侍郎賀知章製紫清上聖道曲、疑是曲也、清上或改作之乎、

〔龍鳴抄下黃鐘調〕清上樂さうく

拍子二十、わらはまひなり、かぶとあり、四反すべし、調子にいでいる、おほとこのきよかみがこのがくはつくりたるを、すなはち樂の名につけたるなり、さいこの樂とぞ申つたへたる、

通憲之説云、是更非舞事也、祝敵謂之樂之終頭叩之鼓之、表多他調云々、案有打物部、是モ無左右事ナレドモ、魚作ル舞體、此事ニモカギラヌ事トミユ、熱田明神御饗應ト申モ、マコトニサル事モヤトオボエ侍ル、此事ヒラキガタシ、ナホタヅヌベシ、

〔教訓抄七〕舞番様

無答舞○中略 河南浦常樂會於中門舞之、乙魚作舞之、

〔伊呂波字類抄〕人加 感城樂カンセイラク 黃鐘調

〔拾芥抄上末〕黃鐘調 感城樂無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

黃鐘調 感城樂加半勢以羅具、城字調、

〔樂考 黃鐘調〕感城樂

景範云、唐曲、唐に感聖樂あり、聖は城の字音の轉じたる也、

〔類事治要十一〕黃鐘調 感城樂○中略 開元大常樂工馬順作之、但安世樂事歟、明還笛譜云、南都大安寺義

操作之、

〔教訓抄三〕感城樂

此曲誰人ノツクリタリト云コトミエズ、可尋 但童親王源氏對面ノ時、此曲ヲ作習トイヘリ、シカ

ラバ嵯峨ノ隠君子ノツクラセ給タルニヤ、

〔龍鳴抄下〕黃鐘調 感城樂かんぜ

おなじわうしきてうなれども、是は水調なれば呂にてあるなり、されば呂律にかよふとはいふ也、拍子十八、五反すべし、新樂まひてうしにていでいるなり、

〔仁智要錄八〕黃鐘調 感城樂 拍子十八、可彈五反、合拍子九十、終帖打三度拍子、今世彈三反、略時彈、

皮するに、本朝雜戲也。

〔教訓抄〕四 河南浦

此曲承和大嘗會尾張連演主歟作之、送之申傳タリ、而テ或書云、海濱人舞、今此曲尤故アリ云々、

〔龍鳴抄〕下 河南浦かな

拍子十六、まひあり、新樂、やましなでらの常樂會に、中門にていをつくることあり、それをすなはちまひといふにや、またべちのまひあるにや、いとくはしからず、

〔仁智要錄〕八 河南浦

拍子十六、可彈六反、合拍子九十六終、帖打三度拍子、二帖後詠、三帖後

詠、其詞云、坊北星辰皆大道、朱南日月照會場、八島新器鎮萬歲、自生元祖屬大嘗、南宮長秋卿橫

笛譜云、此曲本無舞、而承和大嘗會時作舞也、龍吟抄云、尾張濱主作舞、中曲 古樂

〔雜秘別錄〕河南浦

もとは舞ありけれどもたえたり、このごろは常樂會に、たちつくりとて、おほきなるこいのかたをつくりて、あむのうへにをきて、あむまのゑみおもてをして、そのいを、きるまねをするあひだ、これをするとかや、五常樂の破ににたる樂にてあり、

〔教訓抄〕四 河南浦 拍子十六 新樂

抑此舞者興福寺常樂會第二日、十六日法華會忠筭五師之時、始テ爲奉請、尾張國熱田大神、被制行法會也、其ノ分經樂ノ次ニ一曲アリ、中門ニ草蓐居テ、其祝置其上ニ散置其雲ニ據云、子時役人面ヲ著テ進ミ出テ、此魚形ヲ取テ、袖ツ、ミ、隨テ大鼓拍子ニ舞先北方、次東方、次西方、次南方、則チ加三度拍子、舞終テ魚ヲ置舞人草蓐祝置此、魚ヲ作ル、其時ニ著テ二舞咲面、舞者一人出テ、謂之蓐摺、鶏婁ヲ懸頭、以大鼓桴是摺リ舞之、寺役 此間魚ノ尾并ニセボ子ヲ蓐摺侍テ、蓐ヲヒタシテ心口見ル由ヲシテ、骨ヲタチタルヨシヲシテムネヲ打ツ、子時兩役人退ゾキ入リヌレバ止樂ヲ、

考等書、有謂房中之樂者、疑名混雜乎、

〔教訓抄六 黃鐘調〕安城樂 拍子十六 新樂

此曲中納言安世卿作之、仍安世樂云、又云、唐多作安世、和漢ノ作者不詳尋ヌベシ、有忠拍子拍子三度

〔大日本史禮樂十五〕按、通典云、周有房中之樂、歌以后妃之德、漢書云、周有房中樂、至秦名曰壽人、孝

惠二年、使樂府令夏侯寬備其簫管、更名曰安世樂、文獻通考云、魏文帝改安世樂爲正世樂、後改爲

正始、據此、周秦以來相承而傳之、教訓抄爲中納言安世所作、蓋就安世字而附會者也、

〔龍鳴抄下 黃鐘調〕安城樂いあんぜ

拍子十六、まひなし、新樂、これを平調にわたして、越殿樂の破にはするなり、

〔仁智要錄八 黃鐘調〕安城樂 拍子十六、可彈五反、合拍子八十、終帖打三度拍子、龍吟抄 長秋卿

橫笛譜云、以此曲吹平調音爲越殿樂破、新樂

〔續教訓抄黃鐘調〕安城樂 新樂 中曲 又作安世樂、一名房中樂、一名壽人、

五帖 拍子各十六 初拍子五、已下延八、終帖加三度拍子、忠拍子アリ、興福寺常樂會供養樂用之、或涅

槃會云々、又常樂會行道并中門樂用之、兼供花樂用之、又云、樂千ニ五千此詞ノ直千金ナリ、又云、此

樂ヲ平調ニ渡天、越天樂破ニスル也、長秋卿笛譜ニ曰ク、以當曲吹平調音爲越天樂破、

或記云、舞出入用調子云々、但近來舞絕畢、愚案此樂ハ城ヲ安ク樂ムトヨムベキ、歟付之代々被用

御祈禱之樂、將門逆亂之時、村上春宮聖代諸社御奉幣ノ事、又當曲三反被報之、被謝賀茂明神、天皇

朱雀御宇、關白眞信公藤原忠平〇又此社始有行幸、八幡同之、又堀河院御時、康和年中、源義親謀反ノトキ、准

件例、又被奉當曲三反、無程天下無爲云々、此曲故依有子細也、

〔伊呂波字類抄加 人ナ〕河南浦カナン 黃鐘調

〔樂考黃鐘調〕河南浦

河南浦



初拍子五已下八延六反可吹終帖ニ加三度拍子又第五反ヨリ加拍子監物頼吉譜云ク五反ノ後加拍子天頌出後第二拍子ニ吹物等同時ニ付之以前ハ一鼓ヲカク許ナリ又說第五拍子ヨリ付之又云舞アリ絶畢三十二相ニ付ク日樂六反ヲモテ頌一反ニ合ニ今頌一反ニハ加一度端ノ語也鳥急ヲ渡ヲ吹テ合スルナリ始ヨリ吹之一說第三拍子ヨリ付之加拍子ノ事終帖ニ加三度拍子ヲ又說自第五反ノ頭加之ヲ古說ニハ樂拍子ニ用而近來ハ忠拍子ニ用ト云々鞞鼓ヲモチキズ壹鼓ヲモテ拍子トス又云忠拍子ニ用ルトキハ古樂揚拍子ニ攝之ヲ云々又云三十二相ノ日ハ樂ノ詞モスコシヅカハリタリ師說ヲウクベシ北京ノ諸寺常ニ只拍子ヲ用

古秘譜云ク無舞而南京此曲ヲモテ汎龍舟ノ急トシテ舞之又說六反可吹抑三十二相トイフハ諸修正修二月ノ行ニ佛ノ御相ヲホメタマツル頌ナリ所々ニ其ナラヒカハリタリ三十二相一反樂三反合是樂拍子終帖加三度拍子ヲ又樂六反ニ作合末ニ鳥急ヲ渡吹テ如一度端頌合テ加三拍子ヲ忠拍子ニ用ルトキハ手ヲ作替テ詞合タルナリ興福寺東西金堂ノ修二月ニハ汎龍舟ノ急ノヤウヲ吹二所息次カハルナリ然而一切彼頌ニアハス尤心ヘガタキ事ナリ但シ昔ヨリシナラハシタル事ナレバ今ニカハラズ侍ルメリ

水尾ノ御門ノ御宇貞觀十一年二月三日興福寺別當興昭西金堂ノ修二月ヲ始メラル

後一條院ノ御宇萬壽二年東金堂修二月始之西金堂始行ノトシヨリコノトシマデノ日五十  
六年ニアタレリ

譜宮別様云樂拍子ヲ吹妙音院藤原ノ様忠拍子菩提山移之

〔伊呂波字類抄安〕安城宮實雄調

〔樂家錄二十八〕中華曲

黃鐘調 安城樂阿半勢以羅具一本城作世一名安城宮又正也樂又正治樂又壽人又房中樂按文通

央宮樂 片屑類 都志 近來此舞絶了 又都志與呂岐云

〔類箏治要〕十一 黃鐘調 央宮樂 〇中 答舞都志與呂岐又云赤白桃李花

〔樂家錄〕三 黃鐘調之曲

央宮樂 曲中 番舞綾切或都志 已上

〔倭名類聚抄〕四 黃鐘調曲 散金打毬樂 或云南

〔拾芥抄〕音上 黃鐘調 散吟打毬樂 無舞

〔樂家錄〕二十八 中華曲

黃鐘曲 散吟打毬樂 佐半氣半手也字氣字羅具一本吟作金

〔類箏治要〕十二 散吟打毬樂

〔龍鳴抄〕下 黃鐘調 散今打毬樂

拍子十二、七反すべし、また三十二相にあはするやうあり、ひやうしはおなじことなり、ことばの

すこしかはるなり、うつものまさちかこれをふく、さがの供奉院禪是をえりたり、三十二相願一反

にかく六反あはする也、如一塵臥といふ願あり、とりの急にあはす、ほかにはせず、やはたの修正

に大菩薩をおがみ奉る願なり、それにはこまふえの平調にてあはせふく、ふきはぐれば横笛の

下无調になる、佛名のころの黄鐘調にいたりければ、かまへたる事とぞいひつたへたる、

〔仁智要錄〕八 黃鐘調 散吟打毬樂 毬或作球 拍子十二、可彈六反合拍子七十二、從第二反打三度

拍子 長秋 龍吟抄云、終帖打三度拍子、南宮横笛譜云、世以卅二相合此曲、然其音不協相當、今

案聲明譜以六相願合當曲、一遍十二拍子、然則卅二相願當五反、餘四拍子、第六遍與八拍子其調不

足、即以我今略譜等四句、合被八拍子也、中曲 新樂

〔續教訓抄〕黃鐘調 散吟打毬樂 天竺 新樂 中曲 或古樂 拍子十二 吟金今皆通用

散金打毬樂

ひはをはりのはまぬしつくれる。

〔仁智要錄<sup>八</sup>〕應天樂 拍子廿 南宮長秋橫笛譜云、可吹五反、合拍子百終帖打三度拍子、中

曲 新樂

〔教訓抄<sup>六</sup>〕應天樂 拍子十 新樂

或書云、作桃李花時、作此樂云々、<sup>又云、此曲太平樂破、渡吹之云々、</sup>

參音聲行道等ニ用之、有只拍子、<sup>加三度拍子、</sup>

〔伊呂波字類抄<sup>八</sup>〕事、央宮樂<sup>ヤウクラ</sup>

〔樂家錄<sup>二</sup>〕十八 中華曲

黃鐘調 央宮樂也、字具字羅具

〔教訓抄<sup>三</sup>〕央宮樂

此曲イツノ御時ヨリ侍ケム、春宮始テ立給ケルニ奉勅林直倉作之、<sup>不分明、可尋</sup>

〔龍鳴抄<sup>下</sup>〕黃鐘調、央宮樂<sup>らうく</sup>

拍子十二、まひあり、新樂、是はまひをたうりくわにまふなり、

〔仁智要錄<sup>八</sup>〕黃鐘調、央宮樂 拍子十二、可彈四反、合拍子卅八、終帖打三度拍子、舞出入用調子、中

曲 新樂 長秋卿橫笛譜云、今世以此曲舞、爲赤白桃李花舞、

〔教訓抄<sup>三</sup>〕央宮樂 中曲 新樂 有四帖<sup>拍子各十</sup>

四帖三帖二帖ノ時、皆終帖<sup>加三度</sup>、略定一返之時、末二拍子<sup>加拍子、</sup>舞出入<sup>用調子、口傳云、</sup>

桃李花ノ舞タエタルニヨリテ、此舞四十八拍子ヲ、桃李花六帖四十八拍子、同員タルニヨリテツ

リ合也、<sup>殊ニ可有習也</sup>

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞香樣

南宮横笛譜云、此曲承和御時明○仁幸神泉苑而樂人來船奏樂、爰有勅云、一匣中島之程、新作曲可奏者、爰有勅、笛師清上、筆策、尿麻呂等、一匣中島作此曲、爰有勅賜祿。

【教訓抄六】黃鐘調海青樂 拍子十

新古不分明、但始ハ船樂ニツクリタリケレバ、古樂ニテゾ侍ケム、又法用之時ハ、當時新樂ニ用之、加三度拍子、

古老云、原座作説ニハ、加三拍子、古樂極ニ拍子、此説ハ人シラズ、仍可秘、又如、披頭破云、如何、

【續教訓抄黃鐘調】海青樂 新樂中曲、或古樂、或小曲、中小曲、一名海山樂、一名海仙樂、南宮譜或海

旋樂 拍子十

初拍子五或六又二已下ハ、常ニハ用新樂ニヨリテ加三度拍子、則法用ノトキ如此ナリ、

又云、退出音聲ノ時モ加三度拍子也、古舞アリ、今ハ絶畢、

又云、此曲ノ初拍子ハ、羯鼓六ニ宛ルナリ、而基政云ク不然、如常宛六ニハ越拍子也、今案之、樂ハ以

只拍子爲本體、其只拍子如常是以稱ル歟、

【拾芥抄上末】黃鐘調應天樂無舞

【樂家錄二】八中華曲

黃鐘調 應天樂還字傳幸羅具、一本天作殿、

【續教訓抄】應天樂 新樂 中曲 又古樂 律樂也 一名應殿樂

【仁智要錄八】黃鐘調應天樂 南宮譜云、此曲承和大嘗會時清上所作也、於應天門以舞之、故成文傳

習云々、又重親王源氏初對面時、習此曲、憐子御前、龍吟抄云、舞尾張演主作、

【龍鳴抄下】黃鐘調應天樂なうて

拍子廿、まひなし、これはおほとのきよかみといひけるふゑ吹のつくりたりとぞ、あるしたる、ま

應天樂



喜春樂 喜心樂云片屑舞、輪造舞有入綾如右舞、 白濱 萬秋樂對日准、大曲執後參、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

喜春樂 四人常裝束袍

〔樂家錄三十六〕黃鐘調之曲

喜春樂 曲中 番舞白濱地久 已上津、延喜樂長保樂已上、 林歌 曲小

〔舞樂要錄上〕同 番例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左 ○中略 喜春樂 ○中略 右 ○中略 地久

弄殿樂

〔拾芥抄上末〕黃鐘調 弄殿樂 無舞

〔仁智要錄八〕黃鐘調 弄殿樂 殿或作天 一名大天樂 拍子十四 中曲 新樂 無舞

〔續教訓抄黃鐘調〕王殿樂 新樂 曲中 又名玉殿樂又名大天樂南宮譜御說也殿天字通用拍子十四初

拍子 五 已下 八 加三度拍子、

海仙樂

〔倭名類聚抄四〕黃鐘調曲 海仙樂

〔拾芥抄上末〕黃鐘調 海青樂 無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

黃鐘調 海青樂 加以勢以羅具一名海仙樂一本曲作、又清和樂、

〔龍鳴抄下〕黃鐘調 海青樂 いらく

拍子十、まひなし、この樂は南池院の行幸にふながくをしてまいりたりけるに、退出音聲にはじめて樂をつくりてかへるべしと、宣旨をくだされたりけるに、おほとのかみこれをつくりて、三度拍子にあげてまかりかへりけり、博雅三位と申人の御譜に、かやうにぞまゐりたる、

〔仁智要錄八〕黃鐘調 海青樂 青或作山 拍子十 綿譜云、拍子如拔頭打、中曲 古樂 無舞

反舞七帖也從第十三反舞終帖也加拍子略時彈六反者四反彈六反時從第王反上大鼓彈四反時從第三反加拍子舞出時吹調子入時重彈當曲破中曲古樂

〔教訓抄〕喜春樂 中曲 古樂

序二帖拍子各十二破七帖拍子十四

序二帖拍子十二常一切舞也ウチマカセテハシノ舞人ハ、

破七帖拍子十四樂者以二返爲一帖拍子七故ナリ三帖常ニ舞ナリ三帖肩祖切是ニ秘說アリヒボ

ヲトキナカタヌグ間ニ有二說居肩祖ハ御前說ナリ四帖大輪切一說云從此帖古樂揭拍子云々五

帖渡切六拍子間六帖渡返云七帖加拍子舞終居右羅突

略定樣云序一返破三帖舞第一帖四帖ハボナトキテ肩祖五帖渡五拍則渡返五拍子間即加拍

子舞終居猶略定時、此渡切ヲ不舞也、

舞出時用調子打羯鼓古記云搔鹿裏打大鼓事如探桑老出打之、破入時吹重破即加拍子舞人之末

ヨリ首ニ至マデ乙舞入也如右舞

東宮御元服必ズ有此曲序六帖、破一切舞也、第八拍子ニカ

此舞人樂屋ノ内ヨリヒボヲサシテ序二帖破二帖舞ヲ第三切ニ始テ肩祖也一拍子ノ間也、此

帖加一舊說歟

〔體源抄〕十一下 舞曲古今相違事

古喜春樂破爲新樂加三三拍子今ハ古樂ニ書之又舞出時如探桑老搔鹿裏今ハ不搔之

〔續教訓抄〕舞樂譜或人云舞曲ノ名ハ同トイヘドモミナカハレルスガタアリ○中女舞ハ○中喜

春樂人六

〔教訓抄〕舞番樣

喜春樂

黃鐘調 赤白桃李花 蓮花樂 央宮樂 河南浦 弄破樂 喜春樂 應天樂 安城樂 西

王樂 咸城樂 汎龍舟 重光樂 平蠻樂 海清樂 清上樂 拾翠樂

〔伊呂波字類抄人本〕喜春樂キシュンラク

〔樂家錄二十八調法〕中華曲

黃鐘調 喜春樂氣志由半羅具 一名喜心樂又弄殿喜春樂又皇帝喜春樂

〔樂考黃鐘調〕喜春樂

唐教坊樂に喜春鶯曲あり

〔仁智要錄八〕喜春樂○中 南宮譜云、大安寺僧安操作此曲者、但此說不備、

〔教訓抄三〕喜春樂○中 又弄殿喜春樂 喜心樂 向立舞

此曲作者、或書云、陳書興公作、是大國人也、則漢土之立春、春宮太館奏此曲云々、古老傳云、此曲大安

寺住僧安操法師作之、舞樂間不分明、可尋

古記云、清和天皇ノ御時、行教法師八幡大菩薩ヲオヒタマツリ、男山石清水ノ宮ヘ奉還間、依夢

想告喜心樂ノ曲ヲ作、是今喜春樂舞也

〔龍鳴抄下〕喜春樂きすん

まひてうしにいづ松浦府に下著の時、唐人このがくを、序拍子十二、三反すべし、このよ二反する

にや、破拍子十四、七反すべし、するに拍子をくはふ、たゞしならいあること也、古樂なり、他樂は新

樂古樂にまふこともあり、これはひとへの古樂なり、まひも一鼓をかくる也、

〔仁智要錄八〕喜春樂 序拍子十二、可彈三反、破拍子七、可彈十四反、從第九反打三度拍子、合

拍子百卅四、南宮橫笛譜云、破可吹十四反、以二反爲一帖、舞并七帖、又從十二反打三度拍子、長

秋卿橫笛譜云、破拍子十四、可吹七反、但吹二反爲一帖、從五帖打三度拍子、今世序彈二反、破彈十四

古事類苑

樂舞部八

唐樂樂曲下

黃鐘調樂曲

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕黃鐘調曲

喜春樂 弄殿樂 海仙樂 應天樂 央宮樂 散金打毬樂<sup>或云南京</sup>

之傳 安城宮 河南浦 威城樂

聖淨樂 赤白桃李花 皇帝三臺 提金樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕黃鐘調

喜春樂 赤白桃李花 長生樂<sup>舞無</sup> 西王樂<sup>同</sup> 應天樂<sup>同</sup> 清上樂<sup>同</sup> 威城樂<sup>同</sup> 聖明樂<sup>同</sup>

弄殿樂<sup>同</sup> 河南浦 央宮樂 赤白蓮華樂<sup>舞無</sup> 海青樂<sup>同</sup> 散吟打毬樂<sup>同</sup>

○按ズルニ、聖明樂ノ事ハ、道調及ビ大食調條ニ載セタリ、

〔龍鳴抄<sup>下</sup>〕黃鐘調曲

赤白桃李花<sup>略</sup> 應天樂<sup>略</sup> 安城樂<sup>略</sup> 央宮樂<sup>略</sup> 河南浦<sup>略</sup> 喜春樂<sup>略</sup> 威城

樂<sup>略</sup> 聖明樂<sup>略</sup> 清上樂<sup>略</sup> 平蠻樂<sup>略</sup> 海青樂<sup>略</sup> 重光樂<sup>略</sup> 汎龍舟<sup>略</sup>

散吟打毬樂<sup>略</sup> 赤白蓮花樂

〔仁智要錄<sup>八</sup>〕黃鐘調曲

喜春樂 赤白桃李花 長生樂 西王樂 應天樂 清上樂 安城樂 威城樂 聖明樂 弄殿

樂 河南浦 央宮樂 赤白蓮華樂 海青樂 散吟打毬樂

〔夜鶴庭訓抄〕樂名等





如クバ、已ニ是古曲也、淨藏ガ作、ソラ事トイフベキ歟、重國史ヲ檢ルニ、演主和風長壽樂ヲ作ルナリ、然淨藏ガ作相違歟、

〔大日本史 禮樂十四〕按唐書通典並云、唐坐部伎有長壽樂、武后長壽中所製、與演主所作、同否不可考、

〔體源抄二上〕和風樂 又名弄春樂 舞絶了

春庭花

〔樂家錄二十九〕雙調曲 春庭花

抑謂春庭花者、舞曲之名也、此舞之時、樂曲直用春庭樂也、別無習、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 春庭花 四人常裝束袍冠綏太刀垂平緒

〔樂家錄三十六〕雙調之曲

春庭花 中曲 番舞狛梓曲中

〔教言卿記〕應永十六年二月十六日夜、前禁裏御樂、雙調春庭花、略中 春庭花舞之時、一覽有之、

〔類箏治要十調〕萬春樂 男踏歌之時、舞人著高巾子冠、用此樂、南都狛氏笛吹之、

〔類箏治要十調〕絲楊園

〔歌儔品目六佚曲名〕絲楊園 類箏治要、目錄ノミニシテ譜ナシ、

萬春樂

絲楊園

うけ給はりて、かく所のれうりなどせらる。○中まづまいり音聲、春庭樂一曲、舞童二人、左龜丸、右はれわか丸、これをまふ、ゑむぶ三、せつなどれいのごとし、

催馬樂  
狹蝸河樂

〔倭名類聚抄曲四〕

雙調曲

催馬樂

律、我駒（駒原作）  
調、曲是也

狹蝸河樂律、澤（澤原作）  
調、曲是也

〔玉勝間七〕催馬樂といふ名の事

或説に、催馬樂といふは、もと唐樂の名也、和名抄、音樂部曲調類、雙調の條に、柳花苑、春庭樂、催馬樂、狹蝸河、和風樂と、ならべあげたり、みな唐樂也といへども、ひがこと也、これは、吾駒の歌など、雙調に奏る故に、雙調の曲の中へ、まじへ奉たるにこそあれ、唐樂に催馬樂といふあることなし、さる故に、その催馬樂と奉たる分注に、我駒曲是也とあり、又其次なる狹蝸河も、催馬樂の中の澤田川の曲也、すなはち分注に、澤田川曲是也とあり、唐樂に狹蝸河といふ名あるべきかは、又春庭樂和風樂なども、皇朝にて作れる曲にして、唐樂にはあらざるをや、

和風樂

〔倭名類聚抄曲四〕

雙調曲

和風樂

〔續教訓抄雙調〕

和風樂

拍子十四、新樂中曲、有喚頭、一、拍子二、拍子笛、説、又名弄春樂、但四拍子在之、笙、説、

初拍子五已下、八、四、反、可、吹、加、三、度、拍子、光時記云、ク尾張濱主國王ノ御前ニシテ和風樂ノ舞歌ヲ

詠ズル事アリ、庭ニ錦ヲシキ、身ニ五色ノ玉ヲカザリテ舞之、庭玉コボレ落ト云々、又云、○中濱主

舞畢テ和歌ヲ讀テ奏ス、又奏云、春鶯囀ノトコロノ歌ナリ、此事彼歌ノ心ハ春鶯囀カトオボユ、而

諸記又和風樂トシタリ、不審云々、

或記云ク、此曲春ノ曼陀羅會ノタメニ、延曆寺僧淨藏ガ所作ナリ、舞師船木望眞舞ヲ作ル、喚頭ア

リ、秋ハ送秋樂ヲ奏ス、此曲第一ノ秘説ナリ、送秋樂モ淨藏ノ所作也、又云、此曲淨操大徳ガ所作ナ

リ、天台ノ舍利會ニ春奏之、○中

此曲濱主承和年中ニ舞事分明ナリ、淨藏ハ寛平三年辛亥歳生ゼリ、時代多クヘダタリ、日記ノ

一反時從第六拍子上大鼓舞出入用拍子、中曲 新樂 明暹橫笛譜云、又古樂、

〔教訓抄三〕春庭樂 中曲 新樂○中

有四帖、拍子各十、加常舞終帖、加三度拍子、常二切舞也、第二帖加拍子、光季秘說曰、從第二帖之始、向

對シテ手合テ押足シテ作大輪、如八拍子、左邊、終拍子、向合、三帖第三、前走、第四、尻走、又第七、前走、第八、

尻走、第九、諸去時打第十、諸使時打、北、四帖立テ一面ニ北向ナリ、則加拍子、三度拍子、一脫古、

古說曰、此舞、東、如古鳥、冠者、劍舞、如地、久云々、年號、

舞人出、吹品、玄、入時、吹入調、

〔舞樂圖左〕春庭樂 唐朝 四人舞

〔教訓抄七〕舞番樣

無答舞○中 春庭樂、片屑祖、例之春庭樂、又春庭子、中古出、舞、裏後屑祖云々、

〔樂家錄三十六〕雙調之曲

春庭樂、中曲、番舞石川、爲小曲、或林歌、還城樂、是中、華曲也、以爲焉、

〔教訓抄三〕春庭樂

此舞中古絶タルヨシ天下ニ其聞アリ、仍堀河院ノ御時、拍光季可有御尋處ニ習傳此說之由申上、

仍於御前有御覽舞人、光季、行高、其日相違アリ、兩人於舞臺上、右ヲカタヌギテ舞也、入時ニ行高如

本袍ヲ著テ入丁、光季等ハカタヌギナガラ入丁、兩說御覽ジテ頗ル有御感之後、世人有舞之由始

ヲ知云々、

〔台記〕仁平二年正月廿四日庚申、今日少納言弁巳下來、習明後日大靈禮○中、舞人樂人、衣冠乗船、飾中

奏樂、樂庭、參進、人所會

〔北山殿行幸記〕十四日、○應永十五年三月、後小松、まひ御らんの奉行頭中將宗量朝臣、かねてより



〔續教訓抄〕雙調柳花苑 新樂中曲、或古樂、或新古不悞、中大曲、略下

〔源氏物語〕八花裏きさらぎのはつかあまり、なんでんの櫻のえんせさせ給、略中 頭中將いづらおそ

しとあれば、りうくはえんといふ舞を、これは今すこしうちすぐして、かゝることもやと心づかひやまけん、いと面白ければ、御ぞ給はりていとめづらしきことに人思へり、かんだちめみなみだれてまひ給へど、夜に入てはことにけぢめも見えず。

春庭樂

〔倭名類聚抄〕四調雙調曲 春庭樂一云、夏風樂、外從五位下和邇部大田麻呂作之、

〔樂家錄〕二十八調法、中華曲 雙調 春庭樂志由李傳以羅具、一名春庭子、又春庭花、右春庭花、與春庭樂別曲也、按舊記春庭花聲

又夏風樂、又和風樂一名弄春樂、又和風香、非春庭樂別名、乃春鶯、略

〔仁智要錄〕八調雙調、春庭樂 一名夏風樂略中 長秋卿同譜云、外從五位下和邇部大田丸作、儻犬上

是成、

〔教訓抄〕三春庭樂略中 一名春庭花、又春庭子、

此曲延曆御時、遣唐使舞生久禮真藏所傳來也、成貞則給內教房奏御前、初大食調爲樂、而承和御時、

明、仁有勅改成雙調、了、仍春節會ノ奏音聲用之、古樂一舞時者、新樂一又云、此樂從五位下和邇部

大田麿所作云、其時拍子九、謂之夏風樂、

〔龍鳴抄〕上調雙調、春庭樂、又號、夏風樂、

拍子十、古樂四反すべし、はるのせちゑのまいり音聲に、つねにこれをもちゐる、まひあり、いづる

に品玄、いるに入調たゞしまゐの時、は新樂にす、よりて三度ひやうしあぐ、たしかならず、舞人に

尋べし、

〔仁智要錄〕八調雙調、春庭樂略中

拍子十、可彈四反、合拍子四十、終帖打三度拍子、略時彈一兩反、若彈

拍子廿四、新樂古樂たしかならず、樂拍子、たゞ拍子、又たしかならず、能々たづぬべし、ある譜に新樂とあるしたり。

〔仁智要錄雙八調〕柳花園

園或作苑

拍子廿四南宮譜可彈七反、合拍子百六十八、一說拍子廿、長竹

譜有詠、其詞云、後園桃李正芳菲、芳菲正是妾愁時、昨夜新州昭陽殿、更勿非情形、畫眉、玉關春色

晚、金河路幾千、琴瑟桂條上、竹怨柳花前、南宮橫笛譜云、可吹七反、拍子廿四、但一二反遲吹、三反急

吹、次詠四反急吹、五反遲吹、六反急吹、次詠七反急吹、則舞畢、延曆遣唐使時、傳生久禮真茂所傳、

也、則給內教坊奏御前、初大食調爲此樂、承和御時有勅、故成雙調、今依此奏云々、長秋卿橫笛譜云、

拍子廿、可吹七反、合拍子百卅、但三帖後有詠、詠後聊笙吹調子、端、又四帖後有詠、五帖打三度拍子、畢

速吹、六七帖靜吹、吹調子出入拍子廿四、同、但、又

中曲 新樂

〔教訓抄六雙調〕柳花園

柳花苑

拍子廿四、本者柳花怨云、而天曆內宴之日、有儀定、被吹、怨字苑字定、聖云々

昔ハ此曲ニ舞アリケレドモ、絶エテ久クナリテ侍ドモ、舞ノアリケル時ノ様ノ知ベキ事ニテ侍

バ、シルシ侍也、桓武天皇御時、遣唐使傳生久禮真茂所傳渡也、其時者一二三帖遲吹、各无間拍子、三

切舞終テ後音取計座笛次詠、次四帖ニ急ニ吹拍子同、次欲吹五帖之時、暫有其間、次五帖、一切次音取、次

詠、如前次六帖ヲ急吹拍子同、本是者ハ大食調、而承和御時、改テ成雙調、早物彈物ニハ無樂拍子、忠拍

子許也、惟季之說ニハトモニ侍也、時元ハ拍子吹之、樂拍

堀河院ノ御時マデハ、トモニ侍ケルヲ、天皇忠拍子ヲアイセサセ給ケルニ、ヤガテ樂拍子ヲ人ナ

ラハズシテシリヌル人スクナク侍ナリ、忠拍子ハヤスク候、樂ノ拍子ハトコロセバク侍ナリ、加

拍子時打三度、惟季ノ秘說云、第十三十四同、可吹六拍、鼓云、出雲已詳、明此樂ハ正說ヲバ世人クハ

シタシラズ侍ナリ、ヨクカクスベシ、

雙調樂曲

〔大日本史 禮樂十五〕按諸書性調中不載本曲而高麗曲有胡德樂又稱逼鼻胡德教訓抄體源抄並云胡德樂本橫笛曲仁明帝時改爲高麗笛曲據此本曲舊唐樂後改爲高麗樂也本書高麗曲已載胡德而又舉本曲蓋重出也

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>調〕雙調曲 柳花苑 春庭樂<sup>○中</sup> 催馬樂<sup>律我駒是也</sup> 狹緒河<sup>律澤田河是也</sup> 和風樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕雙調

春庭樂 柳花苑

柳花苑

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>調〕雙調曲 柳花苑<sup>或諸云延曆寺遣唐舞生久禮茂傳之即勅內教坊奏之初以大食調有此曲承和天皇仁明勅雙調奏之</sup>

〔樂考<sup>雙調</sup>〕柳花苑 苑一作園

按するに教坊記に柳含烟ありもしくはこれらの轉じたるにや

〔伊呂波字類抄<sup>利人</sup>〕柳花苑<sup>リウクハエン</sup> 雙調

〔樂家錄<sup>二十八</sup>調法〕中華曲

雙調 柳華苑<sup>利字具和江平</sup> 一本華苑作花怨又作花園一名柳花鹽樂

〔續教訓抄<sup>雙調</sup>〕柳花苑

或云柳花怨ハ葬送ノレウニ作タリケル樂ナレドモイキカヘリニケレバ此樂還テ祝所ニモ用ナルベキ樂カ

凡大國ニハ葬送ニハ必ズ新シク樂ヲ造テ奏スルニ此樂ノ音ハカナシミノ音ニハアラズト云ナ棺ヲ開テミタリケレバイキ返リテアリケリトイヘリ即此樂トゾオボヘ侍ル依之祝所ニ用ナリ<sup>○中</sup>

抑此曲露青仙人陶明柳園詠柳花之時奏此樂露青公一子青龍仙作之大國樂也或大唐樂也〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕柳花苑

〔拾芥抄〕上末性調 王昭君無舞

〔樂家錄〕二十八中華曲

性調 王昭君和字勢字具半

〔類箏治要〕八王昭君道調

〔教訓抄〕六王昭君

明君漢元帝造、本朝ニ絶畢、而南宮從尺八吹傳御坐云々、又云、我朝醍醐天皇作改御坐云々、延喜廿年御作之後、絃家ニ有之、管家ニ絶畢、中院呂之時遷管云々、或説云、明君漢曲也、元帝時匈奴單于入朝、以待詔王嬪配之、

〔龍鳴抄〕乞上王昭君性調

拍子八はやき物也、三度ひやうしにあぐべし、古樂やつかこなり、院禪供奉譜にはやき物十拍子よつかことゑるしたり、戸部正清が説おなじ、一度にあるなるこゝろはおなじやうなれども、てはすこしたがひたり、左近將監時元が弟子、うるはしきいつ拍子のがくなりといふ、この樂この日本國に絶たりけるを、これみなみの宮と申ける人の、かばかりゆゝしくめでたきものゝ、たえんには心うけれとて、尺八の譜よりたづねいだされたりけり、さやうなりければにやあらん、やうやうあまたあるなり、南の宮と申は、眞保親王とぞ申ける、管絃の長者におはします、

〔仁智要錄〕七王昭君 拍子八 一説拍子十 中曲 新樂 無舞

〔教訓抄〕六王昭君 拍子十、又八、 古樂略中

此樂アマタノ説アルベシ、一者拍子十、四略鼓早物院禪供奉、小戸正清之説曰、二者拍子八、古樂八、拍子、三度如万歳樂緩吹、一説早物吹、一説圓賢得業大神惟季之説曰、三者豐原時元之説正キ五拍子ノ樂ト云、於此説不可然可尋、

〔倭名類聚抄〕四性調曲 反樂鼻誤胡德



〔仁智要錄性七調〕安弓子

安或作案、又作按、拍子十二、南宮長秋卿橫笛譜云、可吹五反、合拍子六十、但二反後詠、三反後詠、從四反打三度拍子、中曲 古樂 南宮譜云、古善舞此曲者、有阿刀真弟

鷹

〔樂家錄二十四節〕性調

安弓子 新樂、中曲、當曲、擊、羯鼓、一本、古樂、

〔古今著聞集六〕

管絃歌舞同喜○延廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時、勅をうけ給ひて、日比奏せざる舞を御覽せられけり、○中弓士○中これらを御覽せられけり、

千金女兒

〔拾芥抄上末〕性調 千金女兒無舞

〔樂家錄二十八〕性調 中曲 中華曲

性調 千金女兒勢半氣半悲與志

〔仁智要錄性七調〕千金女兒

拍子十 南宮長秋卿橫笛譜云、四帖拍子各十、合拍子卅、終帖打三度

〔體源抄〕用產所曲

長命女兒 千金女兒

長命女兒

〔拾芥抄上末〕性調 長命女兒無舞

〔樂家錄二十八〕性調 中華曲、

性調 長命女兒千也字目以志與志 一本無兒字、

〔仁智要錄性七調〕長命女兒

拍子十 南宮長秋卿橫笛譜云、可吹四反、合拍子卅、但三反後詠三反、

〔倭名類聚抄性七調〕性調曲

王昭君式部卿貞保親王、自尺八譜中、所移、吹橫笛也、

王昭君

〔繪教訓抄新案譜〕或人云、略中蘇芳菲、別裝束アリ、師子ノゴトシ、競馬行幸ニ奏之、

〔體源抄十二上〕一切々斷絶舞事

或人云、此等ノ舞ノウチ、舞絶タル切々アリ、尤存ズベキ事也、略中蘇芳菲七反、今ハ無ガ如シ、

〔榮花物語二十三〕おなじ月〇萬壽元年九月の十九日、駒くらべさせ給ふ、略中ふながくどもこぎいで

たり、そはひ、こまがたなどさま、まひして、いまは東の對にわたらせ給

〔中右記〕康和四年閏五月十五日、巳時許、諸卿參入、依可有競馬御覽也、〇中龍頭鶴首兩船、奏蘇芳菲、

左右共同、樂船差童部、

性調樂曲

〔倭名類聚抄四調〕性調曲 西河 按弓士 千金女兒 長命女兒 王昭君 反樂〇樂恐誤 胡德

〔拾芥抄上末〕性調

長命女兒無舞 千金女兒同 安弓士同 王昭君同

西河

〔倭名類聚抄四調〕性調曲 西河

〔大日本史禮樂十五〕按、樂府雜錄云、大曆中有樂工、自造長命西河女、又教坊記曲名有西河師子、西

河劍氣、羯鼓錄太簇角曲、亦有西河師子、或與此同乎、未詳、

按弓士

〔倭名類聚抄四調〕性調曲 按弓士

〔拾芥抄上末〕性調 安弓士無舞

〔樂家錄二十八〕八調法中華曲

性調 安弓士、阿半氣字志、又阿具志、一本按弓士、一名安公子、

〔樂府雜錄〕安公子

隋煬帝遊江都時有樂工、笛中吹之、其父老廢於臥內聞之、問曰、何得此曲子對曰、宮中新翻也、父乃謂其子曰、宮曰、君商曰、臣、此曲宮聲往而不返、大駕東巡必不回矣、汝可託疾勿去也、精鑒如此、

獸也、五月節儺御轡前、從彼時初也、新樂 中曲

〔難秘別錄〕蘇芳菲

これも樂のまるし文にこまかにあれども、五月會に武德殿のこ五月くらべ馬の行幸に、御こしのさきに、左にまゝ、がまらをかづき、右にこまかたをつくりて、人のりたるやうにて、二行にたちて、左にはそはんひ、右にはこまりようをふきてまふよしするなり、いまはその事たえてひさしくなりぬ、おとくでんもほろく、小五月もたえく、かなしく、いつかおこしたてられんすらんな。

〔教訓抄〕蘇芳菲 拍子九 又古樂新樂

此曲五月節會舞御輿之御前、是從弘仁初競馬ノ行幸奏之、對右狛龍小馬形樂蘇芳菲ノ身ハ師子ノ姿ナリ、頭ハ如犬頭也、口細シテ面長、中實裝束如左乘尻裝束也、木帽子踏懸糸鞋ナリ、在子二人、裝束如犬、在面帽子ハ此中實樂所未、子者各從乘尻ノ前參向、奏當曲、向御車付御車舞ノ體者先ノ身ヲ振テ左ヲハクヒ右ヲハクミ、次拜二度、膝ヲカバメテハウ御車先キ立也、御車御所寄畢後又如先ハクヒテ還列之時、即加三度拍子、〇中略

古記云、此舞弘仁ヨリ初テ競馬行幸奏之、此舞體如獅子ノ頭有角、頭色金色、其身色、誅子二人面形如出色白、蒙紺帽子、如犬妓之、

又船樂ニモ奏之、ソノユヘニ古樂トシルシタル物也、是ハ古樂ニ用時口傳アリ、加拍子時ニ初ノ拍子ヲバ除テ、第二ノ拍子ヨリ古樂揚拍子打之、尤爲秘事仁安ノ日吉ノ競馬ノ御幸ノ舞ニハ、建仁三年ノ七社ノ競馬御幸、蘇芳菲作法事ノ外ニ違タリ、然者古キヲ正說トスベシ、仍仁安振舞注置也

〔教訓抄〕舞番樣

別番樣 〇中

蘇芳菲 別裝束如獅子、狛龍 別裝束如其胸、競馬奏之、

りければ、ともにいみじき面目なりけり、今日の宴いみじき事なりければ、舞人も物の上手をえらばれけるに、五人光季、高季、則季、成集、經遠、今一人たらざりければ、高季が子の未だ童にて年十四なるをめして、藏人所にて、俄に男になしてくはへられけり、時の人面目なりとぞ申ける、かくめでたき事にあきむねさせる道のものにもあらぬを、笛によりて召出されたる、いみじき事といひけるほどに、大井川に舟樂の時、笛を川の淵におとし入てえとらざりければ、龍頭に惟季、笛をふく、鶴首には、笛吹なくてえ樂をせず、人これを笑ひけり、いみじき失禮にてぞ有ける、始の面目後の不覺たとへなかりけり、

〔龍鳴抄<sup>上</sup> 乞食調〕放鷹樂はうあしし

白川院法皇御宇、野行幸ありき、船樂にこの樂をす、舞はなし、龍頭、大判官、鶴首にゐとの次官、あきむね頼吉弟子也が倍從なり、伴の人、臆病ならびなし、もとよりのくせなり、その日も臆してえふかず、ためきよといひたる、伶人は、あらざりけれども、たゞすこしをふきてことをなしけり、

蘇芳菲

〔伊呂波字類抄<sup>所</sup> 人事〕蘇芳菲ソハウヒ乞食調

〔樂家錄<sup>二十</sup> 八調法〕中華曲

乞食調 蘇芳菲曾波字非

〔夜鶴庭訓抄〕大食調 蘇芳菲

〔龍鳴抄<sup>上</sup> 乞食調〕蘇芳菲

拍子九新樂まひのていこまいぬにたり、二あり、くらべむまの行幸に是をす、船樂にもするによりて、日記に古樂とあるしたり、それによりて世の人これを古樂といふ、もし古樂にあぐる時には、こゝろあるべし、はじめの拍子をおきてつぎよりあぐ、

〔仁智要錄<sup>七</sup> 乞食調〕蘇芳菲 拍子九度數隨舞彈、南宮譜云、弘仁御時常以此儻奏于御前、像于猛



せられけり、此中雅樂屬船木氏有者放鷹樂を奏しけり、帽子に摺衣をぞきたりける、舞の間に心にまかせて鳥をとらせければ、見るもの目をおどろかしけり、又犬飼壹人をぐしたりけり、これは本よりあるべきものにはあらざる事とかや、この舞承和に奏したりける、其後聞えず、この装束中納言に調せられける、舞の、ち中納言庭におりて、氏有がとらする所の鳥をとりて膳部に給はせけり、

〔古事談<sup>第六</sup>〕<sup>第宅</sup>放鷹樂ト云樂ヲバ、明違已講只一人習傳タリケリ、白川院野行幸アサヲト云夜、山階寺三面僧坊ニアリケルガ、今夜ハ戸ナサシソ、尋人アラムモノゾト云テ侍ケルニ、如家有來入之人、問之是秀也、放鷹樂習ニカト云ケレバ、然也ト答坊ノ内ニ入テ、令授件樂タリ、<sup>秀作ニ是季ニ</sup>  
拾遺物語是

〔教訓抄〕<sup>四</sup>放鷹樂

或記云、白河院ノ御位ノ時、野行幸ト云事セサセ給ヒテ、嵯峨野幸ノトキ、大井川ニ奏、船樂、龍頭ニ大神惟季、鶴首放鷹樂吹タル伶人也ケル、<sup>略</sup>中大判官<sup>惟季</sup>未傳此曲給事ヲ兼テ知テ、淨明院得業圖憲アハレ此男ハ來スラム者ヲトテ、得業フシ給ハデマチ給ケレバ、夜半許ニ門ヲタ、ク物アリ、誰ナルラント問ケレバ、惟季ト名乗ケリ、門ヲ開テ人ラレタリケルニ、明日野行幸ニ放鷹樂ヲ可奏之由被仰下、而未得此曲爲令傳授馳下候シ由申サレケレバ、即傳取テヨモスガラ上洛シテ行幸ニハアハレタリ、惟季一夜ニ受師説目出カリケル、秋宗日來ナラシテ事關タル、水火ノ器量ニテ侍ケル者カナ、

〔十訓抄<sup>十二</sup>〕白河院御位の時、野行幸といふ事有て、嵯峨野におはし付て、放鷹樂をすべきを、笛かならず二人有べきに、大神惟季が外に此樂を習傳る者なかりけり、これによつて井戸の次官あきむねと云管絃者を召て、惟季と共に仕るべき由仰有ければ、かさねの装束して樂人にくは、

放鷹樂

是光 左近府生

光茂 府生

是茂

晴賢 是茂子

是弘 是光子

是長 是弘子

〔拾芥抄<sup>上</sup>〕乞食調 放鷹樂<sup>無舞</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

乞食調 放鷹樂<sup>波字與字羅具</sup>

〔夜鶴庭訓抄〕大食調 放鷹樂

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕放鷹樂 といふべし樂

拍子十八新樂五反すべし、まひのていたかのていとぞいひつたへたる、すわへもちたるべし、たかなぶりのていか、弘仁天長承和野の行幸に是を用る、

〔仁智要錄<sup>七</sup>〕放鷹樂 拍子十八、可彈五反、合拍子九十、終帖打三度拍子、弘仁、天長、承和野

外行幸必奏此曲、新樂 中曲

〔教訓抄<sup>四</sup>〕放鷹樂 拍子十八 船樂之時ハ古樂 新樂

樂談史云、弘仁三年八月一日樂生奏之、即以猿鳴調テ振餌合テ、此舞時飛翔於舞人、以曲節爲御狩之時、必雅樂寮校爲此歌舞、此曲野行幸奏之、舞姿牟子シテ左手ニ鷹ヲ居テ、右手ニ楚ヲ持タリ、鷹ナブリノ體カ、弘仁、天長、承和之野行幸送之、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番様

無答舞 放鷹樂<sup>野行幸奏、別裝束、白河院行幸船樂奏、</sup>

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕延喜廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時勅をうけ給ひて、日比奏

せざる舞を御覽せられけり、貞信公<sup>藤原忠平</sup>右大臣にてまゐり給參入音聲には聖明樂をぞ奏し

ける、荆山樂、西河、蘇志摩、傾坏樂、放鷹樂、弓士、採桑、老林歌、蘇莫者、泔洲、胡飲酒、輪臺酣醉、是らを御覽

上目ヲアヤニシテ、何ナル秘曲ヲカ彈ジ給ハンズラント思ハレケルニ、珍シカラヌ還城樂ヲゾ彈ジ給フ、皆人思ハズニ思ヘリケリ、去共大臣御心ニハ深キ所存オハシケリ、還城樂トハ都ニ歸ヲ樂ト云讀ノアレバ、昨日ハ東關ノ外ニ遷サレ、草庵ニ懶住居也シカ共、今日ハ北關ノ内ニ仕テ、槐門ニ樂筵エテオハシケレバ、此曲ヲ奏シ給モ理也ト、後ニゾ思合ラレケル、

〔源平盛衰記 十四〕小松大臣情事

小松大臣

○平重盛 中宮平德子

ノ御方へ、被申ベキ事有テ被參タリケルガ、仁壽殿ニ候ハレテ、帥典

侍殿ト申女房ト暫シ對面有ケルニ、良アリテ帥典侍殿ノ左ノ袴ノスヅヨリ、大ナル蛇ハイ出テ、

重盛ノ右ノ膝ノ下ヘハイ入ケリ、大臣コレヲ見給ヒ、我サハヒデ立ナラバ、中宮モ御騒有ベキ、帥

典侍殿モ驚給ベシ、此事旁惡カリナント推シヅメ給テ、左ノ手ニテ蛇ノ頭ヲサヘ、右ノ手ニテ

尾ヲ押ヘテ、六位參ト召ケレバ、伊豆守其時ハ未藏人所ニ候ケルガ、指出タリケルニ、是ハ何ト被

仰タレバ、見候トテツトヨリ、布衣ノ袖ヲ打覆テ、罷出テ、

○中略

郎等省ニ賜タレバ、不恐蛇ノ頭ヲ取

テ大路ニ出テ打振テ捨タレバ、蛇即死ケリ、翌日ニ小松殿自筆ニテ御文アリ、昨日ノ御振舞還城

樂ト奉見候キ、雖異體候、一匹一振令送進候トゾ有ケル、黒キ馬ノ七寸ニ餘テ、太還ニ白覆輪ノ鞍

置テ、厚房ノ鞆ヲ懸タリ、太刀ハ長伏輪也ケルヲ、錦ノ袋ニ入ラレタリ、優ニヤサシク見エケル、仲

綱御返事ニハ、御劔御馬謹拜領、御芳志之至、殊畏入候、抑去夜誠還城樂ノ心地仕候キ、仲綱頓首謹

言ト書タリケリ、還城樂トハ、蛇ヲ起舞ナレバ、角間答有ケルコソ、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕鳳輦

○後醍醐

まさニ社頭を出給へば、さしもめづらしき幸の御

名殘、神慮もさこそ思召らめ、戸津の濱になり給へば、龍頭鵠首御供申て、還城樂を奏す、

〔源氏催馬樂師傳相承〕還城樂相承

大神晴遠

右舞人

是遠

晴遠子、右舞人

是依

是遠子同

是行

是依子同

〔十訓抄〕南都に舞の師あざな和博士晴遠といふ者ありけり、重代にて還城樂を舞ひて君につかうまつりけるほどに、此舞いまだ人に教ざりける前に病付て失にけり、土用の比なりければ、彼棺を柞森の本におけりける、さて二三日有て、其前を木こり過けるに、物のうめく音のまければ、あやしく思て、彼葬家に告ければ、妻子親類行て見るに、いきかへりたりければ、家に具して來て漸くにたすけあつかひける程に、次第に人こゝち出來にけり、語て云、吾炎魔王宮に參て罪定められし時、一人の冥官申やう、日本の舞の師晴遠いまだ還城樂を傳へぬさきに其身を召れたり、今度召遣して舞を傳へしめさせて召ればよろしからんと申、そのとき各議して實にまかるべし、且今度の常樂會の舞仕れとて返さるゝと思ひつる程に生出たる也と語る、またしき者ども悦て、あさましくあらたなる事といひけり、そのち此舞を弟子に傳へ終て又失にけり、弟子をば上府生季高とぞいひける、此晴遠が先祖の舞人の家に、還城樂の面あまた有けり、ふりおもてと名付て重代是を傳へたりけるが、今は南都の寶物にて有と聞ゆ、彼王宮にも此道を重くせらるゝ事ありがたし、

〔教訓抄〕還城樂

大神晴遠が家ノ相傳秘曲也、從天降タル面ヲ嬌々相傳、今其家アリ、入京舞人近元舞之、八幡之系圖云、○中爰ニ晴遠ヨリ是光マデ嬌子一人此曲ヲ傳來處ニ是光之時二嬌子光茂傳了、仍今ハ二ルナリ、仁平二年十一月ニ是光朝勳成了、大衆沙汰シテ住宅被破損ナリ、同三年ノ常樂會依無還城樂舞、十三日試樂日大衆一者光時ニ仰付云、不可有是光之免除、而後日還城樂者、勅光久可舞ナリ、件光久者自ハ八幡助方之手、正ヲ習傳タル由所申也、衆議了、然間是光十四日以長者宣被免除了、仍不舞、然光久相傳ト各申、件助方ハ久安元年放生會舞タリ、非舞人、歟多好方八田別置近元ト申者ニ習傳タルヨシ、度々物部申シキ、件近元ハ久安六年ノ放生會ノ舞ヲ好方ハジメテハハ不舞也、

〔源平盛衰記〕十二師長熱田社琵琶事

此大臣師長原歸洛ノ後、御參内アリ、御前ニ琵琶ヲ調給ケレバ、月卿雲客頭ヲウナダレ、簾中堂



古還城樂破加三拍子、今ハ古樂ニ書之、

〔教訓抄七〕舞番樣

無答舞略○中 還城樂別裝束舞、有面、蛇持、見

〔續教訓抄舞案譜〕或人云略○中 還城樂 面別裝束アリ、蛇ヲ左ニモチ、右ニ桴ヲモツ

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 還城樂人舞一面、帽子、袴、常袍、襦、襦、桴、蛇、

〔樂家錄三十六〕大食調之曲

還城樂 番舞綾切曲中或八仙、林歌、狛犬、桔槔、納蘇利已上曲

〔江家次第七八月〕相撲、拔出

左右各舞略○中 還城樂用舞裝束○東原說、蛇者樂人置之、

〔舞樂要錄上〕舞番

左還城樂略○中 右林歌或崑崙利

同例 大法會

法成寺講堂供養 永承五年三月十五日 左略○中 還城樂 右略○中 納蘇利

朝覲行幸

同○天仁三年二月廿四日 左略○中 還城樂 右略○中 崑崙

相撲節

延長六年略○中 拔出同七月廿八日 左略○中 見蛇樂 右略○中 狛犬

同平承五年五年略○中 拔出同七月廿九日 左略○中 見蛇樂 右略○中 貴德

寬弘二年略○中 拔出同七月廿九日 左略○中 還城樂 右略○中 狛犬

古記云、此曲唐ノ目錄入雙調曲、何代彼移此調子

〔大日本史禮樂十五〕按見蛇與還城國音相近、故誤有此說乎、然舞者執蛇形而舞、則樂書所載、蓋又有由也、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>乞食調〕還城樂

いでんとするに、亂聲陵王のごとし、たゞ放生會には林邑亂聲をす、その故はその樂やのなをりんをくとなづけたるがゆへなり、ほかには新樂の亂聲をすべし、亂聲陵王の定なり、破拍子十八、古樂にあぐべし、たゞしたゞびやうしにするなり、いるに安摩、くちなはをとりたるまひなり、よりて見蛸樂となづく、いま還城樂となづく、これによりて行幸の還御に是を用るなり、

〔仁智要錄<sup>七</sup>乞食調〕還城樂

拍子十八、先吹亂聲、新樂

次吹羅陵王亂序、次嘯三度、但件嘯本七度也、

今世用三度、次吹乞食調端、次破二反、是即當曲也、終帖加拍子、次吹案摩入、南宮笛譜云、亂序從舞吹、則用陵王亂序、次嘯七度、次墮序、此則次先亂序吹、次破可吹七反、拍子十八、合拍子百廿六反、從七反打三度拍子、古善舞、此曲者阿刀真弟磨、古樂、中曲、

〔教訓抄〕還城樂

中曲、別裝束舞、古樂、

亂序一帖、嘯三度、

破二帖、拍子各十

先如陵王吹小亂聲、大神笛吹樣

又吹林邑亂聲、小部氏吹樣

大神氏モ放生會ニハ依爲林邑、終ノ舞用林邑亂聲也、

亂序隨舞吹之、大方如陵王、出舞人舞臺之後、總ナ

置ク、樂人ノ末ノ者之役也、○中略

小亂聲、如陵王

次各禰取、乞食調、

次破二切、終帖、

加拍子、

常一帖舞、

半帖、

加拍子、

入時吹安摩笛、如陵王

此舞出入之體、如陵王、而從昔近來迄此定侍シガ、是茂ガ時ヨリコマカニ躍イヅル事ハ始ナリ、  
若ハ秘事力、若ハ私ニ令、  
案歟、其氏ニ可相尋者也、

〔體源抄十一下〕舞曲古今相違事

相撲節

同○承五年 拔出同(七月)廿九日

左○中秦王略○中

右○中弄槍

〔教訓抄三〕秦王破陣樂

保延二年三月廿三日、鳥羽院光明院供養之日、一者良貊季當曲蒙勸賞十七退舞臺ノ中半へ步登テ  
ウルハシク左右ノ手ニ梓ヲ取替テブタウシテ、拜シテ樂屋入了、是モ付此曲唐家ノ振舞ヲキ、  
オヨビタルニヤ、其時ハビビシクサモアラマホシクミエケリ、感ズル人モ侍ケリ、又サモナクト  
モアリナムトナムズル者モアリケリ、

〔徒然草下〕後鳥羽院の御時、信濃前司行長稽古の譽ありけるが、樂府の御論議の番にめされて七  
德の舞をふたつ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、學問をす  
て、遁世したりける、

還城樂

〔樂家錄二十八〕曲訓法中華曲

乞食調 還城樂計半志也字羅具 一名見蛇樂、又還京樂、

〔大日本史禮樂十五〕按、還城樂、即還京樂、玄宗所製本書唐及樂府雜錄、具載其說、而京諸書或作

成、教坊記載、還京樂、而不載、還成樂、羯鼓錄載、還成樂、而不載、還京樂、蓋京城同韻故互有異同也、容  
齋隨筆論樂曲云、涼州今轉爲梁州、唐人已多誤用樂名、轉訛此類尤多、還城之爲、還成、九成之爲、九  
城、安世之爲、安城、皆同音之轉也、

〔夜鶴庭訓抄〕大食調 還城樂

〔教訓抄四〕還城樂

此曲者西國之人好テ蛇ヲ食トス、其蛇ヲ求メ得テ悅妻不可說聞、摸其體作此舞之、仍名見蛇樂云、作者不見、不可尋之、

〔體源抄十二上〕一破陣曲事

秦王太平樂者陣中ニハ不用之天下泰平之時之樂也

〔教訓抄三〕秦王破陣樂 有別樣裝束四人舞之

〔體源抄十一下〕舞曲古今相違事

古秦王於唐土者百二十人舞之今於日本者四人舞之又ハ二人

〔教訓抄七〕舞番樣

無答舞略中 秦王別裝束如四天王有前後散手云又秦王破陣樂云

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 秦王四人面、金、甲、袷、常、袍、鎧、石帶向手帶、喰、胡、錄、魚、袋、太、刀、垂、平、緒、肩、當、籠、手、肩、袷、袂

〔樂家錄三十六〕大食調之曲

秦王破陣樂中 番舞皇仁單子或狛桙中林歌八仙新袂已上

〔舞樂要錄上〕舞番

左秦王略中 右皇仁或皇仁

同例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左略中 秦王略中 右略中 狛桙

法勝寺供養 承曆元年十二月十八日 左略中 秦王略中 右略中 林歌

最勝寺供養 元永元年十二月十七日 左略中 秦王略中 右略中 貴德

鳥羽九體阿彌陀堂供養 久安三年八月十一日 左略中 秦王略中 右略中 皇仁

朝覲行幸

寛治二年正月十七日 左略中 秦王略中 右略中 新袂略



どついでに申なり。

〔教訓抄〕三秦王破陣樂

略中

中曲唐書

新樂唐古樂

有七帖

拍子各廿一帖者

吹三拍子定

○中略

一帖

廿三加序吹三拍子定

其後至第七帖

拍子終帖

加三度拍子

二三帖

如常

四帖

略定ノトキ

一帖

四帖舞也

此帖加拍子

五帖

被劍

六帖

劍舞ノ切ト云

當曲ノ中ニ

以此切ヲ

殊ニ

秘事トスル也

七帖

二度居從始加三度拍子

此曲七反者

則七德儀也

光季秘說曰

自第五帖於世吹

加三拍子吹之

七帖

城樂上拍子被

末三拍子

吹

仍准大曲謂古樂之說

一說ニ云

七切皆自始用思拍子

說

是漢土本

承和ノ帝

明仁ノ御時

當曲ヲ殊ニ

依有御興此忠拍子ノ說

ヲアマリ

御秘藏アリケレバ

俗人ニオ

ホセテ

樂拍子ヲ常ニハモテ

キルベキヨシ

被宣下了

其ヨリ以來

樂拍子由利吹ニハ成タルナリ

○中

舞出入ニ用

大食調子

樂ノ拍子

モチイルベケレドモ

作調子ノナキ

ユヘナリ

〔續教訓抄〕三秦王破陣樂

樂屋ノ内

コリ右下ニ銚ヲ突

左手ヲ印ニ造テ

腰ニ付テ出ルナリ

散手ノ出時ノ如ク

各突テ出ル

ナリ

出入ノ振舞極テアラ

シクアラハニ

武舞トミセテ

振舞ベキナリ

ヨハ

シキハ无下

ニ正念ナク

ミユルナリ

又此裝束ニテ

太平樂ヲ舞事アリ

但面ハトキニ

ヨリテ用ベシ

舞人ノ意

巧ニヨリテ

一樣ニスベキナリ

此時一說ニハ

秦王ノ出入ノ

ゴトク振舞ベシ

但尋常ニハ

太平樂

ノ出入ノヤウニスルナリ

是等本說ニアラザレドモ

武舞ノ氣色ヲナサ

ンタメニ

カヤウニ振舞

ナリ

皆是先達口傳セラル

トコロ也

又ハ舞臺ノ下ニテハ

秦王ノ出時ノ

ゴトクシテ

舞臺ノ上

ニテハ

太平樂ノ出ル時ノ

ゴトク振舞ベシト云々

入ザマ

コレニ準フベシ

歌、豈意今日登於雅樂、然其發揚蹈厲、雖異文容、功業由之致有今日、所以被樂章示不忘本也、尙書右僕射封德彝進曰、陛下以聖武戡難、立極安民、功成化定、陳樂象德、實宏濟之盛烈、爲將來之壯觀、文容習儀、豈得爲比、太宗曰、朕雖武功定天下、終當以文德綏海內、文武之道、各隨其時、公謂文容不如蹈厲、斯爲過矣、七年正月七日、上製破陣樂舞圖、左圖右方、先偏後伍、魚麗鵠鶴、箕張翼舒、交錯屈伸、首尾回互、以象戰陳之形、起居郎呂才依圖敎樂工一百二十人、被甲執戟而習之、爲三變、每變爲四陳、有來往疾徐擊刺之象、以應歌節、數日而就、其後令魏徵、虞世南、褚亮、李百藥改制歌詞、更名七德之舞、十五日奏之於庭、觀者觀其抑揚蹈厲、莫不扼腕踴躍、懷然震悚、武臣烈將咸上壽云、此舞皆陛下百戰百勝之形容、於是皆稱萬歲、

〔夜鶴庭訓抄〕大食調 秦王破陣樂

〔龍鳴抄〕<sup>上</sup>大食調 秦王破陣樂

まいいづるに品玄、いるに上調子なり、すべからく乞食のてうしをもちゐるべけれども、そのてうしなし、されば大食の調子をもちゐる、拍子廿三、七反すべし、近來二反をすはてのてうに拍子あぐ、三度拍子新樂

〔仁智要錄〕<sup>七</sup>大食調 秦王破陣樂

拍子二十、可彈七反、初一反者拍子廿三、第二反以後者拍子廿合

拍子百卅三、終帖三度拍子、略時彈二反、

舞人曰舞第  
一第帖也

終帖打三度拍子、長秋卿譜云、終帖加拍子、古

樂、南宮譜云、從七反打三度拍子、古樂、

一說新樂  
謂通

舞出入用調子 中曲

〔雜秘別錄〕秦王

この舞のていは四天王のやう也、ふるくもこのさうぞくをして、太平樂を舞ことありけり、この舞はさせるよそめのいみじからぬに、太平樂は樂も舞もこれよりはおもしろきに、この舞はすがたのめづらしきゆへに、さしけるとかや、よろづのことふしむのなかに申せば、事はかりたれ

送秋樂

すときこえ給みやこわかれて、とさの國へおはしけるに、○中かくてとしへてのちかへりのば  
り給へるに、二條の御かど、びはをこのませ給てめしければまゐらせ給て、賀王恩といふ樂をぞ  
ひき給ひけると、つたへうけたまはる、

〔類箏治要八調〕送秋樂 古樂中曲 中絃 拍子十二 秘曲

作者未詳、鹽井戸五郎作之一說、淨藏上人作之、重貞傳習之、尤可秘藏云々、

乞食調樂曲

〔倭名類聚抄四曲調〕乞食調曲 秦王破陣樂 還城樂 放鷹樂 蘇芳菲

〔拾芥抄上末音樂〕乞食調

秦王破陣樂 還城樂 放鷹樂無 飲酒樂 蘇芳菲 拔頭

〔龍鳴抄上〕乞食調曲うとしきて

秦王破陣樂○中 還城樂略 放鷹樂○中 蘇芳菲○中 鷄德

〔仁智要錄七〕乞食調曲

秦王破陣樂 還城樂 放鷹樂 飲酒樂 蘇芳菲 拔頭

秦王破陣樂

〔伊呂波字類抄志人半〕秦王破陣樂乞食調

〔續教訓抄乞食調〕秦王破陣樂○中 亦名神功破陣樂、亦名天策上將樂、群書會要曰、齊政破陣樂、亦

名七德舞、又名大定太平樂、

〔樂家錄二十八樂曲調法〕中華曲

乞食調 秦王破陣樂志和字波千半羅具、秦陣一名神功破陣樂、又齊正破陣樂、又大定破陣樂、又

大定太平樂、又號七德舞、

〔唐會要三十〕破陣樂

貞觀元年正月三日、宴群臣、奏秦王破陣樂之曲、太宗謂侍臣曰、朕昔在藩邸、屢有征伐、世間遂有此

〔仁智要錄<sup>大食調</sup>〕賀王恩 拍子十六、可彈五反、合拍子八十終帖打三度拍子、今世二反終帖打三

度拍子、略時彈一反、從第九拍子打三度拍子、舞出入用調子、中曲 新樂 南宮譜云、古樂

〔教訓抄〕賀王恩 中曲 新樂 有三帖 拍子各十六 又感皇恩 古樂物云略 中

昔ハ五切アリケレドモ、二切ハ絶テ今三切ゾ侍ル第三切<sup>加三度</sup>拍子

光近ノ口傳云<sup>第三帖ハ四方ナ舞居東南西北也</sup>皇恩ヲ賀スル心ト謂之仍妙音院禪閣者<sup>藤原賴長是土佐國ニテ、後被召返玉ヒテ、</sup>

<sup>於御前御覽置仕給ケルニ、令彈當曲玉云々ソレモ此心ナルベシ</sup>

太上天皇御賀奏音聲奏此曲、用古樂懸舞人一鼓故也、

舞出入用調子<sup>古記曰、有詠舞出入用道行以皇聲、略一切舞時者從第十一拍子、末四拍子樂說、</sup>

〔樂家錄<sup>三十</sup>〕詠舞

賀王恩<sup>此曲難曰有詠未考之</sup>

〔教訓抄〕舞番様

無答舞<sup>中</sup> 賀王<sup>諸用親又感皇恩</sup> 又賀王恩

〔樂家錄<sup>三十六</sup>〕大食調之曲

賀王恩<sup>中</sup> 番舞石川<sup>爲小曲中曲綾切中曲</sup>

〔源氏物語<sup>三十三</sup>〕みな御ゑひになりて暮かゝる程に、かく所の人めす、わざとの大かくにはあ

らず、なまめかしきほどに殿上にわらはへまひつかうまつる、朱雀院の紅葉の賀の例のふるご

とおぼし出らる、賀王恩といふを、そうするほどに、おほきおとゝの御をとこの十ばかりなる、せ

ちにおもしろうまふ、うちのみかど御ぞぬぎて給、おほきおとゝおりてぶたうし給、

〔續世繼<sup>飾五</sup>〕太刀みなながされ給て、うらくにおはせしに、中納言中將殿<sup>藤原師身</sup>の御ざえな

ども、をさなくよりよき人にておはしますときこえ給き、びは、すべてじやうすにておはしま



平調 感恩多 加道半太

〔仁智要錄大七〕食調 感恩多 拍子十六 醉鄉日月云李德祐造

〔類箏治要九〕食調 感恩多 拍子十六 平調柱彈之吏部王譜性調曲入之 感恩多或用此字

〔教訓抄六〕大食調 感恩多 拍子十六 新樂

會昌宰相李德裕所作也 古老云祝所祈所奏此曲所願成就云々 應和元年閏三月十一日藤花宴ニ

退出音聲奏此曲早入ニ加 三度拍子 常ハ四加一 拍子此樂ハ無惟季之流而樂ガラノ面白侍シ時ニ尾振則

〔樂家錄二十四〕乾 平調曲

感恩多 新樂、小曲

〔拾芥抄上末〕大食調 賀王恩

〔樂家錄二十八〕樂曲調法 中華曲

乞食調 賀王恩 加和字還奉 一名感恩恩

〔教訓抄三〕賀王恩 略中 又感恩恩

此曲者嵯峨天皇御時大石峯良所作也而漢土作者子今不勸

〔大日本史禮樂十五〕按通考 ○文獻 云唐太宗洞曉音律造新聲者五十八若宇宙賀皇恩降聖萬年

春之類皆藩邸所作述太祖美德卽是也 教訓抄體源抄並云此曲嵯峨帝時大石峯良作之恐非

〔龍鳴抄上〕大食調 賀王恩 いふべし

拍子十六 五反すべし 此の樂古樂といふなり 御賀のまいり音聲にまたりけるより古樂と日記

せられたり 其のゆへはもろくの道行乃至參音聲には舞人のいちをかくるなり によりて古樂

に拍子をあぐる也 たゞし道行には左をば新樂といふ 右をば古樂と云されば右をば古樂にあ

ぐるなり 左は新樂にあぐる也

〔樂家錄二十八〕中華曲

乞食調 飲酒樂 道平志由羅具也此樂名有二飲字於壹越唱之以平於當調唱之連平也酒字可通又此曲一本人性調之中

〔仁智要錄七〕食調 飲酒樂 拍子十 無舞 南宮譜云二帖帖別拍子十 新樂 中曲

〔敦訓抄六〕食調 飲酒樂 拍子二十一 說十 古樂

此樂長者殿下御春日詣之時鹿園進傳鈍之時奏此曲加三度拍子ウチマカセテハ酣醉樂ヲ渡シテ吹也例ニヨリテ此樂ヲバ被用也近來ハ十拍子ヲ返々吹之奥十拍子ヲバ二帖云又此曲入乞食調或公卿被仰此調食ニテハ飲酒樂云壹越調ニテハ飲酒樂トヨム文字一ナレドモ調性調曲云

ニヨツテ替ル也此樂作者未詳出

大天樂

〔倭名類聚抄四〕道調曲 大天樂

〔大日本史 禮樂十五〕按隋書煬帝大業六年高昌獻聖明樂其舞曲有小天據此大天或與小天相對乎未詳附待後考

大寶樂

〔倭名類聚抄四〕道調曲 大寶樂 大補樂

〔大日本史 禮樂十五〕按二書○教坊記有大寶樂大補樂據此補當作補

〔倭名類聚抄四〕道調曲 大定樂 與明樂 五坊樂 後散

大定樂  
與明樂  
五坊樂  
後散

〔樂考 道調〕後散

按するに後散は隋志に所謂拂舞也

〔大日本史 禮樂十五〕按本書○唐高宗將伐高麗燕洛陽城門觀屯營教舞按新征用武之勢名曰一

戎大定樂蓋此曲也

感恩多

〔拾芥抄上末〕大食調 感恩多 無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

傾坏樂有入綾 片肩祖 胡德樂反鼻胡德云有面

〔續敎訓抄舞案譜〕或人云、○中 傾杯樂 片肩祖 入綾アリ 一人舞之

〔樂家錄番舞三十六〕大食調之曲

傾盃樂曲中 番舞胡德樂或林歌已上小曲

〔舞樂要錄上〕同番例 朝觀行幸

同和 四年正月二日 左略 中 傾杯樂略 中 右略 中 綾切

元永二年二月十一日 左略 中 傾杯樂略 中 右略 中 埴破

〔古今著聞集六〕同喜 廿一年十月十八日八條大將保忠 中納言の時勅をうけ給ひて、日比

奏せざる舞を御覽せられけり、○中 傾坏樂略 中 これらを御覽せられけり、

天人樂

〔拾芥抄上末〕大食調 天人樂無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

乞食調 天人樂傳字志、李羅具、人字調

〔龍鳴抄大食調〕天人樂んらん

拍子十二、まひなし、新樂、

〔仁智要錄大食調〕天人樂 拍子十二、可彈四反合拍子卅八終帖打三度拍子、新樂 中曲

〔敎訓抄大食調〕天人樂 拍子十

此樂者和邇部大田丸所作也、東大寺惣供養之日、天皇於樓上令行道奏之、加三度拍子 忠拍子説アリ、

飲酒樂

〔倭名類聚抄四〕道調曲 飲酒樂

〔拾芥抄上末〕乞食調 飲酒樂

大食調 傾盃樂 計以波以羅具一名傾杯醉鄉樂

〔教訓抄三〕傾杯樂

此曲モ大唐ノ物ナリ、醉郷日月ニ云、此曲貞觀元年中内宴長孫無忌所作也、會要云、無爲傾盃樂

〔大日本史 禮樂十五〕本書書、高祖遣内史侍郎李元操等、列清廟歌辭十二曲、其獻奠登歌六言、象

傾盃曲、是隋代既有此曲、而唐書云、太宗詔長孫無忌製傾盃曲、羯鼓錄爲玄宗所製、樂府雜錄云、唐

宣宗自製此曲、恐並誤

〔龍鳴抄大食調〕傾杯樂 けいはらく、又名醉郷日月といふなり

序ありけれども、樂も舞もいまは絶たり、破拍子十六、二反すべし、もとは三反なり、まいたえて二反をするなり、嘆頭あり、それより拍子をあぐ、急拍子十六、三反すべし、はてのきわにあぐべし、まひのいづるに品玄、いるにかさねてきをす、

〔仁智要錄大食調〕傾杯樂 序拍子十六 無舞 件序斷了、破拍子十六、可彈三反、今世彈二反、略

時彈一反、件破不加拍子、急拍子十六、可彈三反、終帖加拍子、破急合拍子九十六、舞出時、用調子、入時重彈急、新樂

〔教訓抄三〕傾杯樂 中曲 新樂 破二帖 拍子十六 急三帖 拍子各十六

此曲モ大唐ノ物ナリ、中略序二帖アリ 破二帖 拍子各十六 第二帖ヨリ加三度拍子、一帖時ハ不可

歟、或説云、末六拍子、可加拍子云々、左兵衛尉、則季之説云、本ハ破三返ナリ、而第三帖絶了、仍不加拍子、其申狀頗無

其謂者歟、未絶舞樂其數皆急三帖拍子各十六 終帖加一拍子、舞出時、次調子入時、重吹急、

口傳云、三臺、傾盃樂、其ニ不加拍子、樂ナリ、一日兩曲、舞時、三臺不不加拍子、傾盃樂可加拍子、傾入綾次第、加三臺也、但當

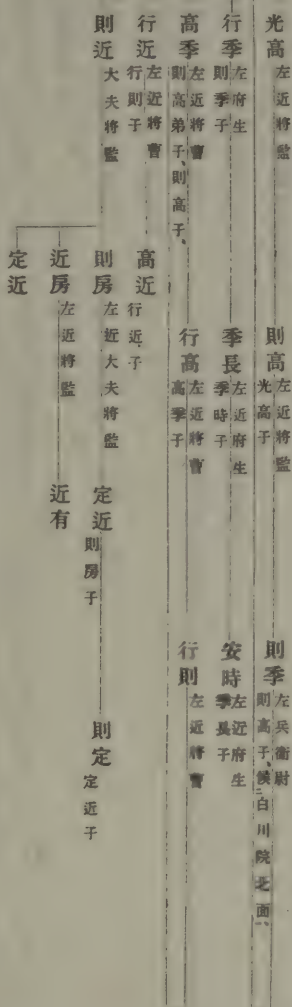
舞也、ソレハ破二帖ノ中、手ヲ抽出舞ナリ、秘事ノ中ノ秘事也、

〔教訓抄七〕舞番樣



ナク、歴然ト傳ヘ來レリ、シカルニイツノホドニカアリケン、天王寺ニハカヘリテコノ樂斷絶セシカバ、寛政八年ニ、ムカシ房顯ニツタヘケル、岡昌歲ノ後裔伊豫守昌稠ニ、元貞ヨリ復傳セリ、ソレニツキテ故障イデキテ、元貞ヲ京都ヘメサレ、樂所ノ者ニモアラズ、譜面ヲモモタズシテ復傳セシハ、イカナル故アリテノコトゾト、訊問アラセラレシニ、六七百年以來ノ故實ヲ記錄シ、社人ノ身ナガラ、樂役ヲ帶テ譜代ノ者ナルヨシ、委曲ニ申上シカバ、朝廷ノ御疑モトケテ、社祭ノ舞樂退轉ナクツトムベキヨシ、カシコクモ傳奏ヲ以テ仰ワタサレケリ、ソノ時ニコノ面ヲバ證據ノタメニ、叙覽ニソナヘシトゾ、サレバ當島ニオイテ拔頭舞ノ傳來ハ、イトフルキコトニテ、ヤンゴトナキ神事ナリカシ、

〔源氏催馬樂師傳相承〕拔頭相承



〔枕草子〕まひは

ばとうはかしらのかみふりかけたる、まみなどはおそろしけれど、がくもいとおもしろし、

〔伊呂波字類抄〕計

〔傾盃樂〕大食調

〔樂家錄〕二十八調法〔中華曲

〔舞樂要錄上〕同○舞例 曼茶羅供 有舞樂儀

南院供養 長承四年正月廿八日 左○中 拔頭○中 右○中 新鉢羯

八講

四條宮御八講 寛治二年六月十九日 被始了、 第二日夕座了供舞 左○中 拔頭○中 右○中 林

歌

朝親行幸

同○長 四年正月四日 左○中 拔頭○中 右○中 嵯倫

相撲節

同○天 七年 召合 七月廿九日 左拔頭○中 右古鳥蘇

寛仁三年 召合 七月廿七日 左拔頭 右納蘇利

〔嚴島寶物圖會〕拔頭舞傳來

當島ノ拔頭舞、ソノ濫觴サダカナラズトイヘドモ、下ニ圖スルトコロノ裏書ニ、伊津岐島社拔頭面承安三年トミエ、マタ棚守所藏ノ古文書ノ中ニ、嘉禎三年舞樂裝束注進狀ノ寫シアリ、ソノ狀ノウチニ、拔頭裝束一具、以赤地錦用之、面縫物袍、錦打懸、同袴、同帶ト見エタレバ、凡六七百年バカリ以前ヨリ、コノ舞アリシコト知ラレタリ、ソノ後連綿トシテ斷絶ナカリケルニヤ、文明三年ニ、天王寺樂人太秦廣吉トイフ者ヨリ、彦三郎安種トイフ者ヘ、拔頭相傳ノ狀アリ、コノ安種トイフ者、ナカニ知ラズトイヘドモ、當島マタ同寺ノ樂人岡兵部大輔昌藏トイフ者ヨリ、戈菊房顯ヘ相傳ノ狀中ニモ、拔頭ノ舞アレバ、ソレヨリ以前モ代々ノ相傳ハカナラズアリツラムコト、更ニウタガヒナシ、房顯ヨリ以來ハ譜面ヲ用ヒズ、所作ヲ以テソノ子孫ニヲシヘ、今ノ棚守元貞ニイタリテ九代、オヨソ三百餘年ノ間年ゴトノ正月五日禁裡御祈禱ノ舞樂ニ、コノ拔頭ヲ用ヒテ退轉

〔教訓抄四〕拔頭 小曲 別裝束 古樂

又髮頭 破拍子十五 搔拍子物 略○中

古記曰大鼓相撰數十面、彼ノ琵琶、撥頭、ハ八人、出舞之、中、古來、擬、會、歌者、略也、右、方、

先以林邑亂聲舞出、則チ以此亂聲舞亂序、置桴時止亂聲、節會者略也、各翻ヲ取ル、人食調音次破ヲ

吹自始搔鼓者、常說行高ノ家秘說云、初大鼓三ヲバ四ニ打テ、第四拍子ヨリ古樂ノ四揚拍子ニ可

加拍子カ是ハ當曲ノ秘事、南向ノ様ヲ舞時打之、則房宿禰ノ申サレシハ、南向ノ様ハ今ノ入綾舞ノ

手也、退左  
ト寄云見、  
テ右ト寄  
上寄見、

次桴ノ探本末返ツ、大輪一返、是ニ桴ヲ右ノ面ニ懸テ、左右伏テ面懸如杖替事、如胡飲酒破

其後諸伏肘ヲ打チ、尻へ走テモドリチ打テ居テ返サシテス、是之スルハ近房將監ノ秘曲習ザル

事カ、セラレ候、是正説也

〔體源抄 十一下〕舞曲古今相違事

古拔頭連舞之、相撲節時八人立テ舞之、又四人立テ舞事在之、今ハ一人舞之、又入時モ如出時吹簫

聲之都利ヲ入、今ハ樂ヲ止メズ入舞之、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

拔頭有入綫、  
八仙別有裝束、合肘舞、

〔續教訓抄 舞案譜〕或人云、○中 拔頭、面別裝束アリ、入綾アリ、右手桴ヲ持

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 拔頭一人 面、帽子、袴、異袍、補襠、帶、腰太刀、垂平緒、梓

〔樂家錄三十六番舞〕大食調之曲

拔頭曲小  
番舞新靺鞨、或八仙、林歌、納蘇利、小已曲上

還城樂曲是爲中華之曲例也，多以爲

明三帖、紅欄景氣烈、朱旆客輝晴、四帖、虓勝千里響、股肱西海聲、五帖、春調虎煩業、秋唱入桂城、六帖、二漢退鴻德、綿々詠歌英、七帖、

秘記云、大病身侵時、常可聞此音、苦惱忽癒、性復明云、ヘリ云々、委旨コト、勘真言書也、

〔古今著聞集〕管絃歌舞同喜、廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時勅をうけ給ひて、日比奏せざる舞を御覽せられけり、貞信公藤原忠平、右大臣にてまゐり給、參入音聲には聖明樂をぞ奏しける、

拔頭

〔倭名類聚抄〕曲調道調曲、拔頭拔清

〔拾芥抄〕上卷乞食調、拔頭

〔樂家錄〕二十八中華曲

乞食調、拔頭、波止、一本拔作髮、亦作撥、一名宗妃樂、

〔教訓抄〕四拔頭略、又髮頭略

此曲天竺ノ樂ナリ、波羅門傳來隨一也、舞作者非詳之、一說云、沙門佛哲傳之、置唐招提寺云々、唐后嫉妬口貌云々、未詳、古老語云、唐ノ后物チタミヲシ給テ鬼トナレリケルヲ、以宣旨樓ニ籠ラレタリケルガ、破出給テ舞玉ヲ姿ヲ摸トシテ作此舞而無作者、尤不審云々、無后御名、

〔舊唐書〕九撥頭出西域、胡人爲猛獸所噬、其子求獸殺之、爲此舞以像之也、

〔大日本史〕禮樂十五、按樂府雜錄、拔作鉢曰、其子上山求父屍、山有八折、故曲八疊、戲者被髮素衣、面作嘴、卽是也、

〔元享釋書〕十五釋佛哲、林邑國人也、略、本朝樂部中、有菩薩拔頭等舞、及林邑樂者、哲之所傳也、

〔仁智要錄〕七乞食調、拔頭、拍子十五、度數隨舞彈、但先吹林邑亂聲、次聊吹乞食調端、次彈伴曲、以此曲用相撲勝樂、南宮譜云、昔能儼此曲者有伴內麿、古樂、小曲、



〔伊呂波字類抄〕人事聖明樂大食調

〔拾芥抄〕上末黃鐘調聖明樂無舞

〔樂家錄〕二十八法中華曲

水調聖明樂勢以女以羅具一本聖作勢一名大常樂又本胡樂

〔仁智要錄〕八黃鐘調聖明樂略中

義操作、醉鄉日月云、開元中大常令樂人馬順造、明邇橫笛譜云、興福寺

〔大日本史〕禮樂十五按本書○隋楊帝大業六年高昌獻聖明樂曲帝令知音者於館所聽之歸而肄

習及客方獻先於前奏之胡夷皆驚焉即是也仁智要錄類箏治要並引醉鄉日月云、開元中大常令

馬順造羯鼓錄太簇商曲有聖明樂爲玄宗所製二說恐誤

〔龍鳴抄〕上黃鐘調聖明樂いらくめ

拍子十六まひなじ新樂もとはだいしきてうの物なりいまわうしき調にするなり

〔仁智要錄〕八黃鐘調聖明樂拍子十六長秋卿橫笛譜云、以此曲爲大食調曲新樂

〔教訓抄〕三黃鐘調聖明樂拍子十六新樂○中

本是大食調曲也○中大食調ヨリ富調ハ作渡歎又新作歎不詳可尋有忠拍子加三度調子

〔續教訓抄〕黃鐘調聖明樂新樂中曲呂樂又作勢明樂

醉鄉日月云、大常樂

或譜入大食調目六、以一曲渡于兩調也、拍子十六有詠

初拍子五、已下八延四反可吹、加三度拍子但舞絕タルニヨリテ、度數定メナシ、忠拍子アリ、常樂會

梵音ノ登樂ニ用之、或云、本ハ大食調ノ樂ナリ、而テ近來常調子ニ用之、畢唐譜云々、或本胡樂也云

云、詠詞云、由彼向陶門、眼睛皆與青、一帖、繁株春色好、秦階天下平、二帖、稽答皆督王、武勇又文

〔古今著聞集〕管絃歌舞季通のいはれけるは、非管絃者口惜事、堀河院御時平調にて御遊有しに、物の音よくしみて漸曉に及に、五常樂急百反に及べば草木も舞なるものをあるべしとて、あそばされ侍しに、五十反ばかりにて天明ければ、時元排て見るに、庭樹のうごくをみて、さて舞めるはと申けるを、目出さ心ばせかなと人々いひて感じ思けるに、顯雅卿いまだ殿上人にて無能にてその座に催だにかたはらいたきに、奏云、あれは風の吹候へばうごくに侍りと申たりけるに、満座わらひけり。

同院の御時樂歌の事ありけり、殿上三臺を奏す。略○中この答に地下五常樂を奏す、笛時元序後詠の段々つねのごとし、破六反畢て急を奏するに、歡感ありて、樂をとむべからすと天氣有けり、其間夜月窮昇ぬ地下の勝になりにけり。

〔吾妻鏡〕壽永三年四月廿日戊子、本三位中將○平依武衛○源賴朝御免有、沐浴之儀、其後及秉燭之期、稱爲慰徒然、被遣藤判官代邦通、工藤一騰祐經、并官女一人○號千等、於羽林之方、剩被副送竹葉上林已下、羽林殊喜悅、遊興移刻、祐經打鼓歌今様、女房彈琵琶、羽林和橫笛、先吹五常樂爲下官、以可爲後生樂由稱之。

〔源平盛衰記〕三十九、重衡酒宴附千壽伊王事

賴賴ノ袋ニ入タル琵琶一面錦ノ袋ニ入タル琴一挺、女○千前ニ置タリ、中將○平琵琶ヲ取寄見給フ、女柱立テ彈タリケリ、中將宣ケルハ、只今アソバス樂ヲバ、五章樂トコソ申習ハシテ侍レドモ、重衡ガ耳ニハ後生樂トコソ聞侍レ、往生ノ急ツケントテ、テンジユキデツ、妙音院殿○藤原師長ノ口傳ノ御弟子ニテ御坐セバ、皇座ノ急、撥音氣高ク彈ラル。

聖明樂

〔倭名類聚抄〕四調道調曲 聖明樂

〔口遊〕音樂聖明樂中略已上

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

左舞 五常樂<sup>舞人</sup>常裝束袍

〔樂家錄<sup>三十六</sup>〕平調之曲

五常樂<sup>曲中</sup> 番舞<sup>地久</sup>或登殿樂<sup>曲小</sup>

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕同<sup>舞例</sup> 八講

四條宮御八講<sup>寛治二年六月十九日被始了</sup> 第四日結願事訖供養 左五常樂 右新秣羯

朝覲行幸

同<sup>治</sup> 寛六年二月廿九日 左<sup>略</sup> 五常樂<sup>略</sup> 右<sup>略</sup> 長保樂

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕貞保親王桂河の山庄にて放遊を給けるに平調にまらべて五常樂をなす間、灯のうしろに天冠の影顯現じけり、人々おち恐れければ所現の影みづからいよく、我は唐家の康承武の靈也、五常樂急百反に及所には必來侍也とてうせにけり、

〔教訓抄<sup>三</sup>〕五常樂

白河院ノ御時、醍醐ノ童舞御覽ノアリケルウチニ、五常樂急樂コトニオモシロカリケレバ、舞人皆入トイヘドモ、俗人不止樂音、シカルホドニ被勅下云、行高一曲ヲ可乙ト、于時行高大鼓ノ前ニス、ミイデ、膝突ヲホセヲカフリテ、御前ニス、ムデ一曲ヲ仕タリケレバ、歡慮ニ叶テ頗蒙御感、此行高ハ此急ノ初一返ハ不<sup>忠影押</sup>舞<sup>拍子</sup>ス、

此曲ニ似失錯可有情之事、此舞上ノ句二果舞テ、下句二果ニ打返テ舞、爰ニ尙入舞暫アラマホシキ時ハ、下句二果ヲ謬テ三返吹ナリ、是ニ舞人打テ返ガ尤有興ナリ、以事只一度許可有也、大神某改爲試舞人、行則賀茂一切經會有此曲、某政吹此說處ニ、行則其心得テ打返テ舞ケレバ、某政行高ガ說ハウセザリケリト感シケルトナン、

これはたれもまじりたんめり、急いありとぞ、されど舞人こそ急いはしりたれ、妙音院師○藤原長をならひておはしまし、をたまはりたり、このころはおそれあれど、さほど譜につくりてくわしくまじりたる人はなくや、急は二反よりやがて大鼓をあぐ、いくたりもみないりあやをまふ、左舞ばうちまかせては、一のものばかりいりあやをまふに、喜春樂やこれなどこそ、右の舞の様にまへ、大鼓をあぐる事も、すゑのきりはあぐるに、二反よりやがてあぐるなり、又反すさだまらぬ事も、太平樂急と鳥の急とこれこそ、反すさだまらぬものにてある、わらは舞にもかぶとす、

〔教訓抄三〕五常樂 有甲 中曲 新樂

序一帖拍子十六、以樂二反、爲舞一帖、破六帖拍子十六、急拍子八五返舞之略○中

詠詞雖有詞多、說依不、用、近來略之、○中略序二帖拍子各八一說云拍子十六、以樂二反、爲舞一帖、

此序笛小部大神兩氏以外相違一度吹事更ニ不可叶、仍常時可付音頭也、舞者無相違、近來序與破

之間、詠樂三度有鼓、此秘事

舞人左伏時ヲ打テ詠ズ、樂間左押、是レ大鼓拍子ス、

破六帖拍子各十六終帖加三度拍子、常ニハ一六帖舞六帖、加拍子、一返ノ此破ヲ樂拍子吹時者、初拍子

ヨリカ忠拍子吹也時ノ慶、雪末同、反、是又樂拍子以體有二說、初一說如太平樂破、一說太曲、是當用說、又、

急拍子八第二返ノカシラヨリ拍子、加三度此舞ハ如右舞次第第二舞入テ、樂屋ノ前ニテ各ノ乙テ可入シ、

又欲吹畢時ニ笛吹様アリ、隨分秘事タリ、

〔吉野樂書〕一五常樂急サテアテムカテト云コトアリ、藤井中納言實範、綾小路僧正實詮、二王講吹

レタリケルニ、景康笛ヲヤメテ感申サレタリ、又林歌ニモ有リ、返々秘事々々也、

〔教訓抄七〕舞番樣

五常樂有甲、片眉祖、入、綾、如、右、舞、次、第、舞、入、登天樂片眉祖



傳爲新樂可疑也。

〔續敎訓抄〕平調五常樂略○中

又作五聖樂又性字通用一名禮義樂亦名五塋樂

〔夜鶴庭訓抄〕平調五常樂

〔敎訓抄〕三五常樂

唐太宗朝貞觀末天觀初帝製五常樂曲圖五常作之仁義禮智信謂之五常常トハ人ノ可常行也五常ハ卽配五音此曲能備五音之和云々

〔龍鳴抄〕平調五常樂さう

まひてうしにいづ序拍子八二反すべし破六帖拍子おのく十六はてのきりに三度拍子あぐべし急拍子八第二反といふに三度拍子あぐべしすなはちまひいるなりわらはまひなりかおとしたるゑいあり序をもちひてする也ゑいよたびそのはざまにすこしづがくをすみたびなりこのがくのまやうをばよのひとおせかことぞいふつねのがくにはにぬ也新樂

〔仁智要錄〕平調五常樂

常或作聖序拍子八可彈二反破拍子十六可彈六反終帖打三度拍子但

二帖詠三帖詠其詞云嘆佛音芳感報恩志欲申詠願禱寶歷率舞賀弘仁天歡五聖樂崇恩北極辰可憐衆鳥舞歌響動梁塵天歡五常樂玉燭開天道弘仁發聖君無尊三古曲歌對七佛堂天歡五聖樂

明還橫笛譜云五常樂詠本是三段有六句而依近代所用略注記之序吹了後欲吹破之時舞人詠云

歎佛音芳感報恩志欲申詠願禱寶歷率舞賀弘仁天歡五聖樂今世序二反後詠云歎佛音芳感次

彈破二拍子樂拍子次又詠樂同前次又詠云報恩志欲申次彈破三拍子樂拍子略○中次又詠云詠願

禱寶歷率舞賀弘仁天歡五常樂次彈破六反終帖打三度拍子略時序彈一反破彈三反終帖上大鼓

急拍子八從第二反打三度拍子度數無定舞入了彈止舞出時用調子新樂

〔雜秘別錄〕五常樂

〔吉野樂書〕一仙遊霞ハ齋宮ノ伊勢ヘ下給トテ勢多橋ニテスル樂ナレバ人ノ別レナドノ時ニハスベカラズ齋宮下リ玉フトキハ又都ヘ歸リ給ナト云コト有此故ニ櫛モワカル、人ニハトラセズ、

〔樂家錄二十四〕三鼓加節大食調曲

仙遊霞新樂、小曲、

〔倭名類聚抄四調〕道調曲 五聖樂或在平調、

〔拾芥抄上末〕平調 五常樂

〔樂家錄二十八〕樂曲調法中華曲

平調 五常樂古志長字、羅具、一本當作聖、一名禮義樂、又五塙樂、又天觀五常樂、又天祝五常樂、

〔執苑日涉四〕五常樂

平調曲有五常樂、蘇名類聚鈔作五聖、非矣、凡古樂有序聲、破聲、急聲、其全備者今亡、幾何、而此曲有序、有詠、有破、有急、蓋伶工相承崇重此曲故耳、其教人首授此曲、意必有所由也、因按古來常讀如韶、韶舜樂也、五卽虞字之轉訛、吾邱壽王水經注作虞邱壽王、王應麟詩攷曰、鄒虞或作騶、五、見劉芳詩義疏、乃知五常卽虞韶之誤也、南齊書樂志曰、凱容舞本舜韶舞、漢高改曰文始、魏復曰大韶、又造咸熙爲文舞、晉傳玄六代舞、有虞韶舞、宋以凱容繼韶爲文舞、相承用魏咸熙冠服、梅龍先生嘗以五常樂爲舜樂、當時未及請其說、今姑錄所私致以徵之、未、知是不、

〔大日本史禮樂十五〕按五聖五常並虞韶之訛、吾虞通用見水經注及王應麟詩攷、聖常、樂家讀並如韶、尙存其音、卽其爲虞韶無疑、中本朝初亦傳爲虞韶、而後人因音轉訛是類多有固不足怪也、且樂家相承尤重是樂、凡教樂以是爲首、意必有所受也、續教訓鈔以是爲始、皇所作其誤不足辨、然是亦因其存韶武而致此誤、又可以爲一證也、凡三代遺聲存于今者、唯是樂與安世樂而已、然樂家並

打毬者四十人、列殿前再拜、

○註 雅樂舉幡、奏樂、天曆九年、中略、左右、各十八、左傍、列立、南見、幡

擊奏、樂、唐在南、狗在北、球、南走、則奏、打、毬、樂、北走、則奏、退、音、聲、入、球、門、則各、亂、聲、

〔經國集十一〕七言早春觀打毬一首使、渤海、客、奏、此、樂、

太上天皇○ 嵯、

芳春烟景早朝晴、使客乘時出前庭、廻杖飛空疑初月、奔毬轉地似流星、左擬右承當門競、分行群踏虬雷聲、大呼伐鼓催籌急、觀者猶嫌都易成、

七言奉和觀打毬一首

蕃臣入覲逢初、初暖暖芳時、戲打毬、綉戶爭開、鵲館紗窓不閉、鳳皇樓、如鉤月、度冀階、側似點星、晴綵騎頭、武事從斯、弱見輪、輪、案、死、數千籌、

〔源氏物語二十五〕たさうらく、らくそんなどあそびて、かちまけのらんさうどもの、あるも、よに入はて、何事もみえず成はてぬ、とねりどものろくまなく給はる、

仙人河

〔伊呂波字類抄人事〕仙人河大食調

〔樂家錄二十八〕中華曲

乞食調 仙遊霞勢、幸、由、字、加、一名仙人河、又仙神歌、

〔大日本史禮樂十五〕按、隋書、煬帝令白明達、創神仙留客曲、與仙遊霞音相近、恐此曲也、

〔龍鳴抄大食調〕仙遊霞

拍子十、はやき物也、まいなし、新樂、

〔仁智要錄大食調〕仙遊霞 拍子十 無舞 古樂 中曲 南宮橫笛譜爲性調曲、

〔教訓抄大食調〕仙遊霞 拍子十、又拍子九、 又仙人河云、又仙神歌云、新樂

此樂齋宮群行之時、勢田ノ橋上ニテ、樂人參向之時、奏之、早ハニ如、二返吹之様ト云、說アリ、今ノ世

ニハ不用、拍子十二ニナル也、此說モアシクモ待ズ、忠、拍子、此曲ニハ有三說也、作者未、點、出、之、

一說玉ハ一列舞人懷中之第二帖ノ十拍子居テ取出テ我前ニ置テ振テ皆振了テ第四列第十一列  
拍子ニ居テ、中シテ入云々

光季秘記云、玉搔切ハ三四五六帖也、此帖ノ末第十拍子、古樂揚拍子、第十一拍子、廿三度拍子、第七帖正加三此說者玉搔手合テ目出ナリ、略定時ハ一二三七帖ヲ舞二列長、二三帖玉搔也、  
舞出入用調子抑入時ニ一者打木ヲ用ニ懸入了ノ一說舞臺次列ニテセヌ事也、

〔體源抄十一下〕舞曲古今相違事

古打毬樂八十人、又四十人等、騎馬ニ舞之、今ハ四人舞之、又天王寺ニハ六人舞之、

〔教訓抄七〕舞番樣

打球樂別裝束、打木持、埴破玉取鼓東

〔續教訓抄舞樂譜〕或人云、略中打毬樂冠マカフアリ、別裝束ナリ、タチヲモツ、玉ヲカクナリ、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 打毬樂舞人四冠、綉袴、常衣、襦袢、腰帶、毬打、玉、

〔樂家錄三十六〕平調之曲

打毬樂曲中 番舞古鳥蘇曲大 或狛梓埴破曲上 林歌曲小

〔舞樂要錄上〕同番舞例 大法會

法勝寺供養承暦元年十二月十八日 左略中打毬樂略中 右略中狛梓

法勝寺金泥一切經供養天仁三年五月十一日 左略中打毬樂略中 右略中埴破

朝觀行幸

永久二年二月十日 左略中打毬樂略中 右略中 靦輪

〔西宮記五月〕六日幸武德殿



唐教坊樂宋朝女舞にあう

〔大日本史 禮樂十五〕按羯鼓錄曲名有打毬樂其爲唐曲明矣而教訓抄以爲黃帝所作者可疑故不取

〔龍鳴抄<sup>上</sup>大食調〕打毬樂といふべし

拍子十、七反すべし、舞人四人、左のくらべ馬のさうぞくにいたり、たちをもちたり、たまあり、そのたましたての一のつらのまへにをく、次第にかいて、上らうのかきいづるなり、たしかならず、たづぬべし、はてのきりに拍子あぐべし、新樂

〔仁智要錄<sup>大食調</sup>〕打毬樂

拍子十一、可彈七反、合拍子七十七、終帖打三度拍子、南宮譜意用之長秋卿譜云、從六帖打三度拍子、略時彈四反、第七第二終帖也終帖打三度拍子、舞出入用調子、新樂

中曲

〔類事治要<sup>水調</sup>〕散吟打毬樂 中曲、有儻、拍子十二、可彈六反、新樂

〔教訓抄<sup>三</sup>〕打毬樂 中曲 新樂

有七帖<sup>拍子十一</sup>各 別裝束舞<sup>打木持</sup>、向立舞四人舞之、略○中

被行小五月節會時者、號馬裝束シテ舞人四十人立テ、木ノサキカバマレルヲモチテ玉ヲ係、件ノ玉ハ一ノ上ノ下シ玉ト云々、件玉ニハ大廿子ヲ紙ニツ、ミテトゲクダシ給也、舞終スレバ舞人懷中シテ罷入ナリ、是ハ宇治殿御物語ナリ、

古記云、作舞人八十人、馬乘云々、件節ノ時、大鼓ヲ百發、立打ケレバ、武德殿ノ天ヒ、キテ地ニ落云々、件舞所ハ、舞ノドクノ體ナル物ヲ立、可尋、

一二帖<sup>如常</sup>以下玉搔、其次第者三帖<sup>二列</sup>四帖<sup>一列</sup>五帖<sup>四列</sup>六帖<sup>三列</sup>七帖<sup>二列</sup>、即加拍子、

口傳云、父并ニ師匠ノ玉搔遣時ハ、右膝突テ居玉留置也、可爲次玉置様者當曲相傳、若未舞人令置之、其習云、下手ノウシロヲ廻リテ、次列ノ前ニ置テ如本道返入ナリ、

〔教訓抄<sup>六</sup>〕庶人三臺 拍子十六、又八、古樂、又新樂

此樂相撲節ニアラ、ムキト云事ノアリケルニ、シカレドモ、近來ハ舞絶テ早物也、十六拍子時者、

四カッコ<sup>二</sup>八拍子時者<sup>早ハカ</sup>、加三度拍子、ウチマカセテハ四羯鼓ヲモチキルベシ、<sup>或者ニ有、忠拍子、大旨、間樂拍</sup>

八拍子<sup>二</sup>、<sup>可<sup>三</sup>用<sup>三</sup></sup>

古記云、舞出、自樂屋時、其長甚短、漸進堂上時、其長隨長、承明門懸尻舞了、入時如本漸掛ズ、幼主之

時被停止之子細者、見一條院御記作者不見云々、

其舞者阿良々木<sup>女房體云々有、録</sup>

詠云、アララキノ、スエニハナサク、コトシバカリハ、カゼナフカセソ、

アララキハ、カフチバカリニ、キチチヌレバ、ココロカウバシ、

〔吉野樂書〕一庶人三臺ニハアラ、ギト云舞アリケリ、女房ノ姿ニテ紅ノ袴ニ薄衣ヲ著、イチメ笠

ヲキテ舞フ、從女一人有、黃成アコメヲキタリ、

〔續古事談<sup>五</sup>〕同御時、<sup>條</sup>一相撲ノヌキデノ日、アラ、ギマヒトイフ舞御覽ジケリ、コレハ藥師寺

風俗トゾ、女スガダニテ始ハ人ノタケノホドニテ、ヤウ／＼タカクナリテ、二丈ニオヨビケリ、從

女アリケリ、ソノ後御門ホドナクカクレオハシマシケレバ、ヤガテコノ舞ナシ、

打毬樂

〔伊呂波字類抄<sup>太</sup>〕打毬樂<sup>太</sup>、<sup>大食調</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕<sup>樂曲訓法</sup>中華曲

大食調 打毬樂<sup>太氣字</sup>、<sup>羅具</sup>、

〔教訓抄<sup>三</sup>〕打毬樂

此曲黃帝所作也、依兵勢作之、<sup>唐ニハ</sup>

〔樂考<sup>道調</sup>〕打毬樂

にかたきにぐしてあそびけんなどきくに、

〔隆康私記〕永正二年五月廿一日乙酉、有御月次御樂大食調朝小子、一反同破、一反合款鹽、三反〇

朝小子

〔樂家錄〕二十八  
樂曲調法、中華曲

大食調 朝小子 傳字古志

〔龍鳴抄〕大食調、武將大平樂

道行なりき おば、てうせうしといふべし、

〔樂家錄〕二十四乾、大食調曲 朝小子 新樂、中曲、當曲、擊羯鼓、拾鈺鼓、

樂曲拍子十二也、初三文已下延四一返之時、籠末四拍子、加之三度拍子、

合款鹽

〔倭名類聚抄〕四調、道調曲 合款鹽 太平樂也

〔樂家錄〕二十八  
樂曲調法、中華曲

大食調 合款鹽 加津具和江半、合字清、此曲舞樂之、時、急用之、尋常曰太平樂急、

〔樂家錄〕二十四乾、大食調曲

合款鹽 新樂、中曲、當曲、擊羯鼓、拾鈺鼓、

〔拾芥抄〕上末、大食調 庶人三臺 無舞

〔樂家錄〕二十八  
樂曲調法、中華曲

乞食調 庶人三臺 曾仁半、佐平、太以、應字濁、

〔龍鳴抄〕大食調、庶人三臺

拍子十六はやきもの也、すまいのせちに、あら、さと云事ありけり、それにこれはまける、近來そのあら、きたえにき、

〔仁智要錄〕七  
大食調、庶人三臺 拍子十六 無舞 新樂 小曲

朝覲行幸

延久二年二月廿六日 左<sup>略○中</sup> 太平樂 右<sup>略○中</sup> 進宿德

天仁元年十二月十九日 左<sup>略○中</sup> 太平樂<sup>略○中</sup> 右<sup>略○中</sup> 退宿德

同久<sup>永</sup>四年二月十九日 左<sup>略○中</sup> 太平樂<sup>略○中</sup> 右<sup>略○中</sup> 皇仁

御賀

仁平二年 鳥羽院五十御賀<sup>略○中</sup> 法會三月七日 左<sup>略○中</sup> 太平樂<sup>略○中</sup> 右<sup>略○中</sup> 古鳥蘇

相撲節

延長六年 拔出 同<sup>略○中</sup> 七廿八日 左<sup>略○中</sup> 太平樂<sup>略○中</sup> 右<sup>略○中</sup> 渤海樂

〔續日本紀<sup>文武</sup>〕大寶二年正月癸未宴群臣於西閣奏五帝太平樂極歡而罷賜物有差、

〔扶桑略記<sup>村上</sup>〕十六、康保三年十月七日丁卯殿上有侍臣舞<sup>略○中</sup> 次太平樂初定舞人四人而濟時忽有

所勞不能供奉仍爲光佐理二人、

〔百練抄<sup>一條</sup>〕寬弘三年十一月五日東宮第一皇子<sup>明</sup>於左大臣<sup>藤原道長</sup>枇杷第元服<sup>餘君御此所、今未、有先例、</sup>

日左大臣捧劔舞太平樂、

〔台記別記〕久安三年三月廿七日庚寅今日高陽院攝政具賀禪閣<sup>藤原忠實</sup>七十算 廿八日辛申左右

遞奏舞<sup>略○中</sup> 太平樂<sup>依藤原仲光時佐其井突、</sup>

〔古今著聞集<sup>神祇</sup>〕後德大寺左大臣<sup>藤原實定</sup>同<sup>略○中</sup> 承三年三月晦日いつく島に參るとて出られに

けり<sup>略○中</sup> 六條の太政大臣<sup>藤原賴實</sup>の中將にて侍りけるもおはしける伴申されけり此度の事に

や、中將かの鳥の寶前にて太平樂の曲をまはれけるが面白かりける事也<sup>略○下</sup>

〔枕草子<sup>九</sup>〕まひは  
たいへいらくはさまあしけれどいとをかし、太刀などうたてあれどいとをもしろし、もろこし



卅人今ハ不然又古ハ四所ニ立分テ障ヲ作リテ後舞始之今ハ如常舞立定舞始之又古以新樂觀  
聲出今ハ以道行舞出又无道行ニ拍子ヲ加テ爲入舞今ハ以合歡鹽舞入綾

〔教訓抄〕七舞番樣

大平樂有面執持 拔諸扇 狛棒高麗持云 別裝束

〔額故訓抄〕舞案譜或人云略中 太平樂面アリ但常ニモチキズ諸肩担棒ヲモチ劔ヲハク面鴨ノ社

ニアリ

〔樂家錄〕三十七左右舞及人數裝束

左舞 太平樂人舞四 常裝束太刀垂平緒棒體源抄

〔樂家錄〕三十六大食調之曲

太平樂曲中番舞古鳥蘇大曲或酣醉樂爲中曲皇仁傳子大曲狛棒長保樂已上曲胡德樂新秣鞞八仙林歌上

小倍臚是中華曲也以番曲爲之例多焉

〔舞樂要錄〕上同番例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左○中 太平樂略 右○中 酣醉樂

法勝寺御塔供養 永保三年十月一日 左○中 太平樂略 右○中 林歌

興福寺塔供養 長元四年十月廿日 左○中 太平樂略 右○中 狛棒

圓教寺供養 長元七年十月十七日 左○中 太平樂略 右○中 靛輪

蓮花藏院供養 永久二年十一月廿九日 左○中 太平樂略 見 右○中 新秣鞞

曼荼羅供 有舞樂儀

法勝寺小堂供養 保安三年四月廿三日 左○中 太平樂略 右○中 延喜樂

待賢門院于時御塔供養 保安三年三月十九日 左○中 太平樂略 右○中 新鳥蘇

〔智仁要錄大七〕

武昌樂

道行○朝小子 破○太平樂急 合○歌略

〔大日本史禮樂十五〕

按二書○仁智要錄

及和名抄此舞道行及急並各別曲而唯破即本曲其稱武

昌樂者蓋合奏三曲之名也

〔雜秘別錄〕太平樂

龍鳴抄のあひだのふしんにこまかの事ありこの舞にひさうの事とてさらゐつきといふ事ありそれはたゞの時ばかりをぬきつればやがてまはるをわといふにたちをぬかだまはるをこふしのわといふ御まへとをる時ひざつくをさらゐつきのとはいふ也急もかすさだまらぬ事は五常樂に申つ

〔教訓抄〕武將太平樂

有面

中曲

新樂

破二帖拍子二十

急拍子二十四向立舞也

貞保親王ノ譜ニ云吹亂聲罷出天安天皇○文

御梨本移内裏之時左近衛府奉獻物常澄當經以劔

攪舞四十人被甲合此三曲號府裝樂○中

破二帖拍子各廿

第二帖末六拍子拍子加三度

略定一返舞時輪末六拍子

コノ破略様ハ

拍光則ガ

大治三年

禪定院ノ大般若供養童舞ニ始作テ教タリシ説也此破謂太平樂者平

急拍子廿四

謂之合歌鹽

第五拍子ヨリ舞始樂返之程舞

次有輪謂之古伏輪

有二説野田巡輪右廻

次有渡乎古伏渡云

次達時二度ノ後拔大刀則加拍子一説云古伏輪初

次大輪一返如常謂之大刀

突次小輪一返

各持テ一返回テ立尼ナ

次渡如常

此間在秘乎項莊鴻門曲手一者一人舞之劔ヲ納

時右膝突居

一説向答一説上手北面

此間奏小亂聲有由結

舞出入用道行號朝小子入時加三度拍

子抑小六條内裏朝親行幸拍光季依勅定入綾舞其ノ舞此家ニアリ年號可尋古記合歌鹽入云々

〔體源抄十一〕

舞曲古今相違事

古太平樂於唐土者一百四十人等舞之今於日本バ不然又天安天皇○文

之御時ハ四十人舞之又

樂舞部 七

唐樂樂曲中

四三七

王時年十二歲、

〔扶桑略記二十六〕村上、康保三年十月七日丁卯、殿上有侍臣舞、○中次奏散手破陣樂、重光朝臣、

太平樂

〔倭名類聚抄四〕曲調、太平樂出時曲調之初、小子武昌樂也、

〔拾芥抄上〕末、大食調、武昌樂

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法、中華曲

大食調、太平樂太以達以羅具一名武將破陣樂、又武昌太平樂、又項莊鴻門曲、又五方師子舞、又城

舞此曲名周代名之云々

〔教訓抄三〕武將太平樂○中、又稱武昌樂或說巾舞、又謂項莊鴻門曲、常太平樂云、

會要曰、立部伎八部樂、一安樂、後周平齊所作也、周代ニハ爲之城舞、二太平樂亦謂之五方師子舞、

通典曰、亦謂之五方師子舞、師子兼載出於西南夷、天竺師子等國、綴毛爲衣象其倂仰馴狎之容、二人

持繩秉拂爲習弄之狀、五方師子各依其方色、百四十人、歌太平樂舞、并以從之、服飾皆作毘盧象、

〔大日本史禮樂十五〕按唐書、立部伎八、二曰太平樂、卽周隋遺音、三曰破陣樂、以下皆難以龜茲樂、舊

唐書通典並云、公莫舞卽巾舞、蓋取高祖鴻門會飲、項莊劍舞、項伯以袖隔之、使不得害高祖、且語莊

云、公莫、謂公莫害、漢王也、彼舞者用巾、蓋像項伯衣袖之遺式也、本朝所傳太平樂、樂家稱爲巾舞、又

鴻門曲有劍舞、卽其爲公莫舞無疑、唐初或稱太平樂乎、

〔龍鳴抄上〕大食調、武將太平樂たいふべし

道行みちなりきおば、てうせうしこといふべし、てうしをふいて、このみちきをしていづ、まひたちとま

るに、またがひてとまる、つねのごとし、拍子十二、破拍子廿、二反すべし、是は律のものなり、みち

きと、きうとによりて、呂にいたり、急拍子廿六、たゞし廿拍子をかへす、すべし、廿六はたゞ

一反なり、いる時の道行には拍子あぐ三度、きうを合歡鹽といふ、

摺テ後ヲ見時ニ番子走也、如此子細ヲ能々分別シテ可舞云々、此破ニ有作物（頭樂也、大治三年御覽用此說、吹簾有別）

【教訓抄七】舞姿法

別姿舞（中略） 散手ノサヒテカダカヲ舞ベシ、四五六（六下一本有七帖二字）執持、謂之長持、

【體源抄十二上】一破陣曲事

散手者陣取カタメテ、大將ノ陣ノ柱立ノ時用之、

【教訓抄七】舞番樣

散手（別裝束、加破陣字、有ニ條、寶冠、龍甲、貴德別裝束、歸德侯云、有ニ條、鎧口、人色）

【續教訓抄（舞案譜）】或人云、（中略） 散手別裝束、面甲、劔ヲハク、フカケラス、棒ヲモツナリ、其裝束ニヤッ

アリ、寶冠、龍甲、破陣樂ノ字ヲ加フ、

【樂家錄（三十七）】左右舞及人數裝束

左舞 散手（一人）、面、帽子、甲（常異）、袴、襦、袴、腰帶、大刀、垂平緒、梓、

番子二人常裝束、内一人帶太刀、

【樂家錄（三十六）】大食調之曲

散手破陣樂（中曲） 番舞貴德（中曲）

【舞樂要錄上】同（舞例） 大法會

雲林院塔供養（應和三年三月十九日） 左（中略） 散手（中略） 右（中略） 歸德

【江家次第（七八）】相撲拔出

左右各舞（中略） 左（必舞散手、還城已上有別裝束）

【三代實錄（四十九）】仁和二年正月廿一日辛丑、是日勅聽貞數親王舞、散手其舞裝束帶劔、故持賜之、親



十、二反すべし、近來一反をす、破拍子二十、喚頭あり、つねには二反をす、なかほどある時は七反すべし。

〔仁智要錄大食調〕散手破陣樂

序拍子廿、可彈二反、略時彈一反、長秋卿橫笛譜云、件序可吹二

反、而依不傳舞、今世吹一反、破拍子廿、可彈七反、終帖打三度拍子、略時彈一反、從第十五拍子打三度拍子、長秋卿橫笛譜云、可吹七反、從五帖打三度拍子、合拍子百八十、南宮長秋卿譜皆云、合拍子百六十、舞出入用調子、但相撲節舞出入用亂聲、南宮譜云、嵯峨帝王善舞此曲、仍有勅爲童親王

源氏對面價、新樂 中曲

〔教訓抄三〕散手破陣樂

中曲 新樂○中

序二帖拍子各二十

破七帖拍子各二十

序二帖拍子各二十

以初十二拍子爲半帖、常ニハ一帖舞、自半帖執棒ナリ、破七帖拍子各二十、常ニハ一、二、三、四、五、六

帖ニ執棒相之散手長棒、殊ニ爲秘説ナリ、七帖拍子各三度、略定時ハ一切ヲ舞也、末六拍子加拍子、件曲嵯峨帝王殊ニ善

ク舞ハセ給タリケル、長棒秘事ナリ、

左大臣賴長、長棒ヲ舞給光時、面ヲバ著セ、テゾ舞給ヒケル、寶冠ノ裝束シテ舞セ給ケレバ、ケダカ

クビ、シク侍ケルガ、龍甲メシタリケル時ハ、呪師ニゾ似タリケル師長同令

中納言兼長、長棒舞給光近、ソレハハレニテ舞セ給ヒタルコトキコヘ侍ラズ、左大臣殿ハ春日御

社ニテタバ、アソバシタリケルナリ、

印破陣字見皇帝解、但著寶冠之時如此字云々

番子人從ト、本儀ハ六人、常ハ四人、略ハ二人、舞人下、脇役ナリ、又上、例モアリ、舞出人有二、大法會ニハ用調子、口

傳云、長棒ヲ舞時ハ、舞臺ノ中半ニ行立有拜再拜、其後作法ヲバシテ棒ヲ立ツル手ヲバ舞也、是第

一爲秘説也、能々可請師説也、棒立事、舞人下脇ノ役ナリ、相撲ノ時ハ用新樂、至舞臺之中半、左足ヲ

上元樂  
五更轉  
散手破陣樂

樂 仙游霞 感恩多 庶人三臺 長慶子 飲酒樂 放鷹樂 聖明樂 拔頭

〔倭名類聚抄四曲調〕道調曲 上元樂 五更轉

〔倭名類聚抄四曲調〕道調曲 散手破陣樂俗云二散手

〔樂家錄二十八曲調法〕中華曲

太食調 散手破陣樂佐平志字波千平羅具手陣二 一名主皇破陣樂

〔教訓抄三〕散手破陣樂略 中 一名至皇破陣曲 常散手ト云或說云釋迦誕生之時師子

此曲誰人ソツクリタルト云コト勘イダサバル所也古老傳曰率川明神平新羅軍拵悅之餘向新

羅國指麾而舞時人見此姿摸之見船輪今寶冠散手是ナリ

或書云此曲新造ノ所多奏此曲地鎮存云々

〔大日本史禮樂十五〕按二書體源抄不記年代今考事實姑定爲神功征韓時又按釋日本紀王舞

而象媛田彥神也凡舞樂稱王者指散手歸德其假面並鼻梁甚大且散手以歸德爲答舞者蓋擬媛

田彥神奉迎皇孫而下土歸德之狀也而後人或傳以爲率川神乎附以備考

〔龍鳴抄大食調〕散手破陣樂といふ

まひいづるにふたつのやうすまひの時は亂聲新樂亂聲をすべしそのさうぞくはたつかぶと  
うちかけはうにしきのはかまふかけたちはくひらをありとりくびのたちなりおもてにもふ  
たつのやうありそのありさまはたがはすしててうしにていであるやうもあり又そくたいと  
いふははちかぶとあかきうへのきぬ大夫の外記史のうへのきぬのいろなるがわきあけにて  
ある也はんびゑたがさねうへのはかまくりかはといふくつをはくそのさうぞくにてはてう  
しにいでいるおほかた亂聲はもちあす  
序亂聲にいづるをりはこの序ふかんとする時聲をとるべし調子にいづる時はとらず拍子二

〔仁智要錄六平調〕鷄德 鷄或作慶德或作積 拍子十

〔教訓抄六平調〕雞德 拍子十 新樂

此樂有二樣一者堀河院元政以下伶人等下給御說當時用之二者口音ヲ不吹スベテ手ヲ吹替此古ト

モニ一四カコ加ニ拍子 白川院此樂ニクミオボシメシタリケル間其代伶人不沙汰

〔樂家錄二十四乾〕平調曲

鷄德 新樂 小曲

道調及大食調  
樂曲

〔倭名類聚抄四曲調〕道調曲 上元樂 五更囀 散手破陣樂俗云散手 太平樂 合歡鹽 庶人三臺

打毬樂 仙人河 五聖樂或在平調 聖明樂 拔頭拔音如末 傾盃樂 天人樂 飲酒樂 大天樂

大寶樂 大補樂 大定樂 興明樂 五坊樂 後散

〔大日本史禮樂十五〕按和名鈔道調曲仁智要錄拾芥抄等諸書入大食調中大食本平調之分調道調亦平調之支調其音概無異故諸書互有出入其實非有錯亂也

〔拾芥抄上末音樂〕大食調

散手破陣樂 傾坏樂 武昌樂 打毬樂 天人樂無舞 庶人三臺同 仙遊霞 輪鼓揮脫同 長

慶子同 感恩多同 賀王恩

〔龍鳴抄上〕大食調曲

散手破陣樂略中 傾坏樂略中 武將大平樂略中 賀王恩略中 打毬樂略中 庶人三臺略中

仙遊霞略中 天人樂略中 輪鼓揮脫略中 長慶子

〔夜鶴庭訓抄〕樂名等

大食調 賀王恩 秦王破陣樂 還城樂 散手 太平樂 傾杯樂 打毬樂 蘇芳菲 天人

盡尋卒後人嗟惜之遂製此曲亦名得至寶又教坊記曲名有紅娘子與康老子音相近疑亦此曲之訛音然未詳

〔仁智要錄平調〕小郎子 拍子八 一說拍子十四

〔教訓抄平調〕古娘子 拍子十四 又八 新樂

大國有一太子雖年長身量纔其身長三尺也生年八十一之時作之故名小老子此樂有二說一者拍子十四四カゴ常說二者拍子八八カゴ加一拍子是ハ秘說ニテ候豐原氏同之

〔拾芥抄上末〕平調 雞德無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

平調 雞德計以止具一本雞作慶

〔教訓抄平調〕雞德

此曲又雞德云雞有五德故作此曲云々漢土南ニ一ノ國アリ名雞頭國其國ヲ打トリテ悅テ作此樂云云雞積云

〔大日本史禮樂十五〕按隋書曰景帝神室奏景德凱容舞慶德疑景德也

〔龍鳴抄上食調〕雞德けい

拍子十はやくきものなり此がくは大判官にもつたへ申さずたゞし賴吉がわたふといふ物ある也土御門の大納言殿より富家殿になてまつらる天下より當院になてまつらる譜にあるなりそれもふたやうなる院の御宇の時於御前さしたてまつりたり御前よりも玉へり又我まじたる事も御前にさつとなどしたり時元もまじたりと申けりそれが白河院の御時あさましくにくきことにおぼしめしたりしかばさたもせぬなりこれはまのびやかにてさたあらん時さたすべし



〔教訓抄<sup>平六</sup>〕扶南

大國ノ法男女姪行之時奏此曲漢土有扶南云所好色女多有之有男子爲姪行彼所之時奏此曲云々扶南州名也善相公意見文云<sup>如判事札斷</sup>伏望依舊置判事六人撰明通法律者補任之使之俱

議科文詳定條章各懷其意然後奏聞如是則怨獄永絕罪人自甘不待扶南之鰥魚豈用堯時之獬豸或人云獬豸宿棟仍獄云云<sup>宮羅語云舞者二人以朝霞爲衣見上笑</sup>

〔龍鳴抄<sup>平下</sup>〕扶南

拍子十四はやきもの也説々おほかり一拍子にあぐふるきやんごとなき人のおはせられしは只のがくいわるにはせずとぞありしくはしくはゑらすまたの説には拍子八ともゑるしたり

〔仁智要錄<sup>平六</sup>〕扶南

拍子十四 小曲 新樂 無舞

〔教訓抄<sup>平六</sup>〕扶南 拍子十二 新樂

凡此曲有三説一者<sup>四カマ</sup>加一拍子二者<sup>初十拍子四カマ</sup>末二拍子是十二拍子<sup>説也</sup>入三者初七拍子ヲ皆吹替タル様也樂ハチイサクレドモ此等説々人シラヌ事也<sup>於十六拍子者不知之惟季</sup>

云ヲカレタル異曲ノ内也

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕平調 小娘子 無舞

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

平調 小老子<sup>古稱字志</sup>一本老作郎一名康老子又小娘子

〔樂考<sup>平調</sup>〕小娘子 紅娘子に作るべし

教坊記に紅娘子曲あり諸本古娘子と作り又小老子に作る皆誤れり

〔大日本史<sup>禮樂十五</sup>〕按本書<sup>雜錄</sup>云康老子即長安富豪子常與國樂游處家產蕩盡偶一老嫗窮舊錦褥以半千獲之尋有波斯見驚曰是水蠶絲所織者即酬千萬康得之還與國樂追歡不經年又

ノ説ノ世ニナキニハ侍ズ慶雲樂也

〔拾芥抄上末〕平調 春陽柳無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

平調 春楊柳志由平也字利字 一本上加大

〔樂考平調〕春楊柳

唐教坊記春楊柳曲あり

〔龍鳴抄下調〕春楊柳うりや

拍子十二はやき物也、泔洲などの程にすべし、新樂喚頭あり、人もまらぬものなり、かくすべし、

〔仁智要錄平調〕春楊柳 拍子十二 無舞 中曲 新樂

〔類事治要性調〕春楊柳 中曲、或大曲、又小曲、大神笛説、拍子十二、新樂、无舞、

〔教訓抄平調〕春楊柳 拍子十二 新樂

此樂吹様可有三説、一者於世吹如甘州可吹、加三拍子、二者早吹説如皇華急吹之一、一者吹忠拍子説、

名之大倍如倍、加拍子様如倍、昔イブレノ御時ニカ侍リケン、無雙ノ管絃者ヲアツメテ、樂合セト云

事侍ケルニモ、此忠拍子説ヲモテ勝タリト申傳タリ、總テ此樂ヲバ能秘ベシ作者尤難不

〔拾芥抄上末〕平調 扶南無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

平調 扶南 不奈半

〔唐會要三十三〕南蠻諸國樂

扶南天竺二國樂、隋代全用天竺、列於樂部、不用扶南、因煬帝平林邑國、獲扶南工人及其匏琴、模陋

不可用、但以天竺樂轉寫其聲

〔教訓抄四〕陪臚 破陣樂 別樣舞 天王寺舞之 古樂

破用新羅陵王破急當曲吹拍子十三

先舞出時吹林邑亂聲于時左右舞人十二人出作輪立定ヌレバ禰取吹新羅陵王破有二說拍子十

二說者奈真機拍子四者天王寺次又吹亂聲又禰取吹當曲拍子十二以樂二返爲一帖謂之中帖次說即加拍子如通

城次又吹亂聲作輪亂合シテ走入云々

次唐招提寺四月八日陪臚會此曲舞豐眞大和尚所傳也尋舞人僧著甲襦襦大刀輪舞實侍各小舞人一人相副タリ笛ハ玉手氏三

鼓之達吹之ナリ大鼓打寺僧謂圓滿寺ノ別當某流歟自當所下末樂屋裝鼓吹笛也

〔體源抄十二上〕一破陣曲事

陪臚者合戰之吉凶ヲサトリ勝負ヲシル樂ナリ此時舍毛之音口傳在之

〔教訓抄七〕舞番樣

無答舞略中倍臚別樣舞舞餘禰突呼加破陣字

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 倍臚四人常裝束太刀垂平緒楯梓近代同子打鼓樂之裝束而著鳥甲

〔樂家錄三十六〕平調之曲

倍臚曲中番舞未考之

〔體源抄一〕陪臚破陣樂

和云專源義家義光合戰度ゴトニ試吹勝ヲ得給シト也

〔教訓抄四〕陪臚

建仁三年十一月卅日東大寺之忍供養日唄上樂ニ林邑樂屋奏ス陪臚樂用忠拍子尤樂拍子ニテアリタク侍シカドモ笛吹不知樂拍子說歟長慶ト申ケル物ハ一向用樂拍子ケリサレバ樂拍子

云、其模トシテ此舞所遺云々但太子傳不見

〔仁智要錄平調〕倍臚 倍或作陪、臚或作盧、拍子十二 一說拍子六天王寺用之 長秋卿橫笛譜云

吹林邑亂聲之間、被甲取手戈走出、次以新羅陵王破爲破、可吹四反、次同亂聲、入時吹伴倍臚度數無定、是僧正婆羅門、僧菩提并佛哲師等所傳也、明還橫笛譜云、近代四月八日、於招提寺舞此曲、

今世先橫笛吹林邑亂聲之間、左右舞人各八人走出於棹前、相向合楯了昇舞臺、更還降於初所、又合楯還走昇了、列立之後吹止、次笙取壹越調音、次彈新羅陵王破二反、終帖加拍子、次吹古樂亂聲、舞人刺棹列立之後吹止、次笙取壹越調音、次彈新羅陵王破二反、終帖加拍子、次吹古樂亂聲、舞人、中曲

### 林邑樂

〔難秘別錄〕陪臚

只拍子をすこしはやくしてまふ、べちの樂拍子なし、それがいかなるやらん、世の中に只拍子、中拍子、樂拍子といひて、みしなにしあひたり、いとあるべくもなし、我いるになき事をば、人ごとにあざむく事にてあれども、又いはれあるどなきとはかはるべきことなり、すべて樂ひやうしといふものは、舞につきてあるべきことなり、只拍子なからちとはやくてまふものは、これと又蘇莫者破還城樂、拔頭、これらは只拍子にてまふ、いづれも只拍子にてまひはありとぞ、みつちかは申ける、樂人舞人はまひにするを樂拍子としり、たゞののりのをたゞひやうしといふめり、まことにはのびて、かこを二つ、うちたるぞ、只拍子おなじまくはりにうつぞ、樂拍子とは管絃者方にはまゐりたる蘇莫者破、輪鼓揮脫などに、宗賢がすち樂拍子あり、秘藏すなど申すは、いゑのならひなれば、申にをよばねども、理かなひても覺ず、もとまさか譜には、蘇莫者破には樂拍子なし、ただし大判官○大神惟季ふかると□□ゆそあるかとぞかきたれども、その子孫等はひさうの事とてふくとかや、おぼつかなし、



〔吾妻鏡〕壽永三年四月廿日戊子、武衛朝源令問酒宴次第給、邦通申云、羽林重衡云、言語云、藝能、尤以幽美也。略○中樂名之中、廻急者、元廻骨大國葬禮之時調、此樂云云、吾重爲囚人、被誅條、存在旦葬

由之故歟云云。略○下

〔龍鳴抄〕平調廻急

拍子十二は、やき物也、たゞ拍子の時は、はてをのべず、かくにする時は、はてをのぶるなり、

〔仁智要錄〕平調廻忽 拍子十二 新樂 無舞

〔教訓抄〕平調廻忽 拍子十二 又廻骨云 新樂略○中

惟季ノ說ニハ忠樂トモニアリ、忠拍子時終不延、注ヲカレタリ、但今世ニハ管絃ニ此忠拍子ハ不

聞也、此流ニ樂ノ拍子ニモ當世ハ末不延、而ハ大鼓ハ返初ハ六羯鼓ニナル也、口傳云、反時口ヲ六

打也、ハアリ知足院殿忠實御說ニハ、終ヲ不延ベシテ吹出ノ于穴ヲ延テ、八羯鼓打說コソ、目出キ說

ナレ、又秘說ニテモアルトゾ仰ラレケル、

〔吉野樂書〕一廻忽ノ終拍子不足ハセザルスガタニテアル也、又初拍子ハ五ニ當ル、終ノ拍子タラ

ザルヤウハ大神氏說也、拍子ヲ足ラス様ハ、戸部氏ノ說也、近來皆不足說ヲ用ル也、

〔伊呂波字類抄〕波人陪臚平調ハイロ

〔樂家錄〕二十八樂曲訓法中華曲

平調 倍臚波以呂 一本倍臚破陣樂

〔教訓抄〕四陪臚

斑朗德所作也、是天竺樂也而大國法精舍日、於陣內奏此曲、知死生、此樂七返之時、有舍毛音、我陣即

勝、怨陣即破、若我陣無此音、自陣破、怨陣則勝云、此舍毛音何事哉、可尋、古

或人云、樂者波羅門僧正傳來タリ給フ、舞者上宮太子爲獻守屋臣奏此曲之時、有舍毛音仍自陣勝

りつたへたる其時の人々の日記にしたる、かくいひつたへたるとぞ、人もいとまらぬもの也、かくすべし。

〔仁智要錄平調〕夜半樂 拍子十六 中曲 新樂 無舞 南宮橫笛譜云、承和御時、宴止退出之時、屢奏此曲。

〔類箏治要八調〕夜半樂 拍子十六、中曲、新樂、無舞。

〔教訓抄平調〕夜半樂 拍子十六 新樂略○中

惟季説ハ、如五常樂破吹之、有忽拍子略、加三度拍子略○中

又云、南池院行幸及深更有還御、此樂名號依應時奏、此夜半樂有興、仍公卿侍臣進出之時、猶吹此樂、乘興退出畢。

〔伊呂波字類抄久事〕廻忽クライコツ

〔拾芥抄上末〕平調 廻忽無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

平調 廻忽具和品古津一本忽作骨、

〔大日本史禮樂十五〕按、陳氏樂書、唐天后時、有陷冤獄者、其妻配入掖庭、乃撰別離曲、以寄哀情、因號廻骨、不知與之同否也。

〔徒然草下〕廻忽は廻鶺なり、廻鶺國とてえびすのこはき國なり、其の夷漢に伏して、のちに來りて、おのれが國のがくを奏せしなり。

〔教訓抄平調〕廻忽

此曲貴養成所作也、昔大國ニ有一人大臣、號曰貴養成、彼有父曰大忠連、忽受病死去畢、經百ケ日、彼臣至普下墓退、作一ノ樂、彈之、至七返之時、彼死骨息生、廻墓三匝之失了、仍名廻骨云々、件曲用、葬禮云々、其時用古樂、

此曲大唐ニハ男子誕生之時奏此曲我朝本院ノ六十御賀日退出音聲用之但唐譜入道内々被譯  
意存所ハ即大國ニハ男子誕生之時用此樂有三說一者四ニ加一拍子二者十八拍子說中略是未吹  
此樂云々何此朝ニハ可有樂也也

レ知可也三者忠拍子手吹管八カニ是大旨曳物說也

〔樂家錄二十四乾〕平調曲

老君子新樂中曲

〔倭名類聚抄四調〕平調曲 直大火鳳 連珠火鳳 移都師 略勢娘

直火鳳  
連珠火鳳  
移都師  
略勢娘

〔樂考平調〕直火鳳 連珠火鳳 右二曲諸本不載

火鳳は唐竺部曲名李白茶火鳳詞あり

〔夜鶴庭訓抄〕盤涉調 真大鳳○真大鳳當

夜半樂

〔伊呂波字類抄也〕夜半樂ヤハンラク

〔拾芥抄音上末〕平調 夜半樂無舞

〔教訓抄平調〕夜半樂

唐玄宗舉兵夜半誅章皇后製夜半樂或書云有作

〔樂府雜錄〕夜半樂

明皇自潞州入平内難正夜半斬長樂門關領兵入宮翦逆人後撰此曲名還京樂

〔龍鳴抄平調〕夜半樂

拍子十六五聖樂の破のやうにする物なりうちまかせてながき物にはあらずこのかく退出音聲にすと云つたへたり承和の御時御遊ありけるによにいりて上達都殿上人いさせ候けるに時のこゑなどや平調なりけむまた夜に入にたれば夜半樂をこそせめなどありけるにや退出音聲にこれをせられけりいみぢうおもしろかりければ陽照までせられたりけるとぞかた

〔教訓抄<sup>六</sup>食調〕長慶子 拍子十六 新樂

此樂博雅三位造之、モロ／＼退出音聲并立樂ノ下高座等用之、口傳云、行幸之立樂ニハ加一拍子、退出音聲加延三度拍子、管絃時加早三拍子、此兩說ヲバ人イタクシラズ、尤秘ベシ、

古老語曰、堀川院ノ春日行幸ニ、興福寺ノ不開門ニテ給人立、舞ヲ奏シケルニ、加三度拍子、タリケルヲ寶聲ノ御内ニテ一拍子ニコソテアゲレト、御願ニテテナシヘサセ給ヒタリケルコソメテ、カカリケルナクコソ侍レ、

〔殘夜抄〕后宮五夜七夜、これもいとかはりめなし、律になりて後、樂に長慶子を必あるべきとぞうけ給はりし、建保二長慶子ありけるには、つくる人すくなきよし、人かたりき、

郎君子

〔拾芥抄<sup>上末</sup>音樂〕平調 郎君子 無舞

〔樂家錄<sup>二十八</sup>樂曲訓法〕中華曲

平調 老君子 羅字具平志、一本老作郎、

〔樂考<sup>平調</sup>〕郎君子 未詳

景範が説に、老君子に作りて、嵯峨君子所作といふ、此説いふかし、教坊記に郎君子好君子の名あり、

〔仁智要錄<sup>六</sup>平調〕郎君子 郎或作老 拍子十六 一説拍子八 龍吟抄云又説拍子十八 小曲

新樂 無舞

〔難秘別錄〕郎君子

四拍子八拍子兩説ありとは、たれもまじらんめり、これは七拍子すがたのものといふなりと、おほせありき、これは樂のすがたの事なり、すべてこの世には、樂のすがたわきまへたる人はなし、これらをば、なにといふとも心うべからず、

〔教訓抄<sup>六</sup>平調〕老君子 拍子十六、又拍子十八、又拍子八、 新樂



〔敎訓抄平調〕永隆樂 拍子十 新樂

是ハ左大臣信相作之仁明帝時、但左大臣信卿蒙勅原免之日作也、一說ニハ唐之永隆作之、人名付歟

信ハ作改給歟加三度拍子アリ、

〔樂家錄二十四加節〕平調曲

永隆樂 新樂、中曲、

〔倭名類聚抄四調〕平調曲 長慶子

〔樂考平調〕長慶子

景範云、用明天皇の誕日に所作、統秋云、三位源博雅作、敎坊記に長慶樂あり、まからば舊曲により、改作りしなるべし、

〔口遊音樂〕長慶子已上大

〔拾芥抄上末〕大食調 長慶子無舞

〔樂家錄二十八調法〕中華曲

大食調 長慶子千也字許志、

〔夜鶴庭訓抄〕大食調 長慶子

〔龍鳴抄上〕大食調 長慶子

拍子十六は、やきものなり、行幸のたちがくに是をす、一度ひやうしにあぐる也、退出音聲の時三度うつといふことあり、新樂、

〔仁智要錄七〕大食調 長慶子 拍子十六 小曲 新樂 無舞 南宮橫笛譜爲平調曲 箏平調彈

之

〔類筆治要九〕大食調 長慶子 拍子十六、小曲、新樂、退音聲用之、終帖加拍子三度拍子、

ばいろの時樂拍子の事は申つ、ふるき人申をきたるは、阿波戸の催馬樂音也、曲はのこりて歌は絶とあむめれば、などか只拍子樂拍子はあらんといふ事あれども、みなふるき樂目錄にいりたれば、いまはそのうたがひあるまじたゞいまなきもの、樂拍子、なにのれうぞといふ、ひとへのうたがひばかりなり、この樂をふねの中にてすべしといふことあり、これ二のぎあり、一には臨湖とかきたるに、うしほにのぞむといふゆへ、一には樂のことばつゞき、ふねこぐみやつこににたるゆへとかや、

〔教訓抄<sup>六</sup>大食調〕輪鼓輝脫拍子廿三 用只拍子<sup>又廿二</sup> 古樂<sup>又新樂</sup>○中

昔催馬樂歌安波戸ト云歌ニ合ケリ、其歌振雖絶之、音尙留云々、

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>曲調〕平調曲 娥媚娘

〔樂考<sup>平調</sup>〕娥媚娘

唐教坊記武媚始あり、娥は武の字の訛れるなるべし、

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>曲調〕平調曲 澠金樂 豐生樂○中

〔伊呂波字類抄<sup>惠事</sup>〕永隆樂<sup>平調</sup> エイリウラク

〔拾芥抄<sup>上末</sup>音樂〕平調 永隆樂<sup>無舞</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>樂曲訓法〕中華曲

平調 永隆樂<sup>江以利字羅具</sup>

〔樂考<sup>平調</sup>〕永隆樂 未詳

統秋云、左大臣源信作、一説に唐永隆中所作といふ、まからば其を改め作られしにや、按するに、

永隆は高宗の年號、其時に作られし樂七曲也、其中に永隆の曲名なし、

〔仁智要錄<sup>六</sup>平調〕永隆樂 拍子十 新樂 無舞 左大臣信朝臣作

續編

澠金樂  
豐生樂

永隆樂

臨胡禪脫

〔倭名類聚抄四調〕平調曲 臨胡禪脫

〔伊呂波字類抄利人抄〕臨胡禪脫リンココンマツ

〔拾芥抄上末〕大食調 輪鼓禪脫無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

乞食調 輪鼓禪脫利平古古太津

〔樂考平調〕臨胡禪脫 諸本皆作輪鼓渾脫 未詳

源順の説に、雜藝の中に輪鼓を弄する者ありと見えたり、之からば此曲唐の舞輪鼓の類にや、渾脫は曲名也、

〔大日本史禮樂十五〕按、禪脫當作渾脫、杜甫詩集、杜陽雜編、並作渾脫、教坊記曲名有醉渾脫、樂府雜

錄、鼓架部、有羊頭渾脫、渾脫蓋言舞容也、

〔枕苑日涉四〕渾脫

平調曲有臨胡渾脫、或作輪鼓渾脫、蘇名類聚鈔曰、輪鼓形如細腰鼓、輪轉於絃上、照按、輪鼓渾脫未詳、所出、臨胡疑是輪胡之誤、輪胡蓋胡旋之伎、樂府雜錄曰、舞有骨座舞、胡旋舞、俱於一小圓毬子上、舞縱橫騰踏、兩足終不離於毬子上、

〔龍鳴抄大食調〕輪鼓禪脫

拍子廿二、はやきものなり、新樂是は律の物なれども、ふるき目錄に大食調にいりたり、その故は未らす、

〔仁智要錄大食調〕輪鼓禪脫 輪鼓或作臨湖 拍子廿二南宮長秋編 一説拍子廿三今世多用之

一説拍子廿四 小曲 新樂 無舞 南宮橫笛譜爲平調曲 箏平調彈之

〔雜秘別錄〕輪鼓禪脫

奏せざる舞を御覽せられけり。○中 刑山樂。○中 これらを御覽せられけり。

〔倭名類聚抄四〕平調曲 平疊樂

〔拾芥抄上末〕水調略○中 平疊樂無舞

〔樂家錄二十八〕樂曲調法中華曲

水調 平疊樂邊幸波羅具

〔續教訓抄黃鍾調〕平疊樂

抑此曲ハ平疊國ノ所作也、大國ノ樂也、唐土ノ法、元三日以餅與人之時、奏此樂云々、又云、南疊戰ノ

時ニ於テ、陣内ニ奏之、又云、四天不調之時、爲社稷奏之、又云、當曲ハ武樂也、文樂ニアラズト云々、

〔龍鳴抄下〕平疊樂へいばん

拍子十八、新樂、もとは破ありけり、舞ひありけりとあるしたれど、このよともになし、もとは平調

の目錄にいれたれど、いまの世、黃鍾調也、はやき物なり、

〔仁智要錄八〕平疊樂 拍子十八 中曲 新樂 無舞 南宮長秋卿橫笛譜等、爲平調曲、

〔教訓抄六〕平疊樂 拍子十八 可吹廿八返 新樂

〔續教訓抄黃鍾調〕平疊樂 新樂 中曲 又小曲 拍子十八 又說十六

初拍子五已下八早 二十八反可吹之、加三度拍子、舞アリ、今ハ無之、或終帖打三度拍子、又云、八幡放

生會古式此樂アリ、本首舞歟、又云、本破アリ、舞同在之、而今世舞樂共ニ絶畢、支正云リ、呪師ノ請人

ノ吹體ヲ、ヨクハナレテ吹ベキナリ、黃鍾調ノ禰取同事ナリト云々、

或云、元ハ黃鍾調ノ曲也、博雅三品ノ譜、平調ニ入ト云々、

又云、此樂平調ノ音終リ、黃鍾調ノ音、仍時ニ隨テ用之、此曲本ハ平調ノ樂ナリ、而テ何ノ比ニカ此

調子コワクサシ畢ヌ、



朝覲行幸

嘉保二年正月二日 左○中 三臺 右○中 綾切

同三年正月十一日 左○中 三臺 右○中 皇仁

同○康 六年正月二日 左○中 三臺 右○中 古鳥蘇

天永二年二月一日 左○中 三臺 右○中 長保樂

御賀

仁平二年 鳥羽院五十御賀 後宴 同○三八日 左○中 三臺 右○中 林歌

〔古今著聞集〕六 管絃歌舞同院○堀の御時樂歌の事ありけり、殿上三臺を奏す、主上御笛あそばし、破

二反、急二反、さらに又急數反あり○下

〔樂家錄〕三 鼓用說三臺急

貞享四年於仙洞有七夕之音樂也、其中有三臺急也、大鼓高季肥後守羯鼓某季向予語于高秀、三臺急

羯鼓有別譜也、先達不用之、故予亦然矣、高季曰、雖一曲再興可也、羯鼓異說用之、則大鼓亦有法、而擊

大鼓於古樂四拍子攝也、高季能譜舊記之說、余後稱美之、

〔倭名類聚抄〕四 曲調平調曲 宮商荆仙樂俗云荆仙樂

〔樂考〕平調宮商荆仙樂此曲譜本不載、或作荆山、未詳、

通考文獻に常林歎は宋梁間曲江左の時、荆雍の地をさして樂上とす、荊州に長林縣あり、長

を誤りて、常となせし也と見えたり、本朝の古吳樂といひしは、則江左諸曲也、まからば荊山樂

も常林歎の類をいひし、又唐教坊に迎仙客曲あり、これら聲の轉じ誤れるにや、

〔夜鶴庭訓抄〕盤涉調 宮商荆仙樂

〔古今著聞集〕六 管絃歌舞同○延 廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時、勅をうけ給ひて、日比

て拍子をあびてゐるなり、新樂也、破にも急にも喚頭あり、

〔仁智要錄平六調〕三臺鹽

序四段拍子各八、件序斷了、龍吟抄云、犬上是成爲舞師時秘此序不傳、

仍永不用之、破拍子十六、可彈三反、今世彈二反不上大鼓、略時彈一反、急拍子十六、可彈三反終帖、

加拍子、舞出時吹調子、入時重彈、當曲急加拍子、中曲 新樂 則天皇后作

〔教訓抄三〕三臺鹽 中曲 新樂

破二帖 拍子各十六 急三帖 拍子各十六

序二帖アリケレドモ、件是成舞師時依秘不傳之云々、拍子八、以二返爲一帖、仍、

破二帖 拍子各十六 兩帖共ニ不加拍子、而大納言成通説曰、末三度拍子ヲ急三帖 拍子十六終帖

加一拍子、舞出時吹調子、入時重吹急、

古老曰、入綾舞事如常、童舞ニハ二人モ舞、但次列

〔續教訓抄平調〕三臺鹽 略 中 有囀、近來絕畢、

〔教訓抄七〕舞番樣

三臺 有三臺鹽云、諸屑祖、甘醉樂此舞近來絶了、舞出入如左舞云々、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 三臺 六人 常裝束袍袖體源抄曰、袍袖左右祖、

〔續教訓抄平調〕三臺鹽 略 中 答舞皇仁、又長保樂、又酣醉樂、

〔樂家錄三十六〕平調之曲

三臺鹽 中 番舞酣醉樂 爲中曲 或皇仁 本中曲 長保樂 中

〔舞樂要錄上〕同 舞例 大法會

平等院供養 永承七年三月廿八日

左 中 三臺 右 中 新鉢羯

へ共、今まげひらがためには、後生らくとこそくはんすべけれ、やがてわうじやうのきうをひかんとたはふれ、びはをとり、てんじゆをねちて、皇じやうのきうをぞひかれける、

三臺鹽

〔伊呂波字類抄〕左事、三臺鹽サングイエン平調

〔樂家錄〕二十八法、中華曲

平調 三臺鹽佐平太以江平、一名天壽樂音聲轉別名亦、

〔樂考〕平調三臺鹽唐教坊一名天壽樂宗燕樂 五三臺

按するに、武后の樂三つ、鳥歌鳥歌は前に見ゆ、長壽樂、天授樂、皆年號を以て名づく、此樂一名天壽樂、壽の字、授の字の訛れるなるべし、

〔續教訓抄〕平調三臺鹽略○中 又參臺亦名天壽樂、○中 鹽字常不呼之、

〔教訓抄〕三三臺鹽

此曲唐國物ナリ、醉郷日月曰、高宗ノ后則天皇后所造、モロコシニ張文成云イロコノム男アリケリ、后イカバシタマヒタリケン、アヒ給ニケリ、ソノ、チユメカウツ、カニテ、御心ハカヨフトイヘドモ、ヒマヲエザリケルアヒダ、心ノナグサメガタサニ、彼后ノ作り玉ヘリ、可尋、此朝ヘハ犬上是成ガ渡シ侍ニヤ

〔大日本史〕禮樂十五、按事物紀原、蔡邕作此曲、續教訓抄、體源抄、文獻通考並云、唐太宗所作也、教坊

記曲名有三臺、又教訓抄引醉郷日月曰、唐則天作之、未知孰是、然其爲唐樂似無疑、

〔龍鳴抄〕平調三臺鹽いふべし

序ありけれどもたえたり、破拍子十六、三反すべし、たゞしこのよ二反す、この樂に拍子をあげず、その故ははてのきりのたえたればとなむ、兵衛尉貊則季といひし舞人さぞいひける、急拍子十六、三反すべし、するのきりに拍子をあげべし、まひのいづるに調子品玄をふく、いもには急をし

帖ヲバ殊次吹云々、今大神氏ニ略シテ舞バ、一八帖ヲバ緩ク吹キ、九帖ヲ火急ニ吹テ、即打三度拍子也、中古皆ユルク吹説タリシガ、近代如此舞無不審アラズ、○中此舞於光季則季雖傳、依又則高之命不舞、三郎將曹高季今ハ大神古舞人ヲ舞傳ケル、抑祖父近光妓女令習料、是光習ハシテ侍ケル、妓女ニ教ケル説

一帖禮拜、ハ帖天女ヲ禮頭、九帖於世吹、即加拍子也、左並寄テ袖カヅキ、右並寄テ袖カヅク、如此向四方舞、急三返、如三蓬急舞、第三切ニ初楚ヲ取テ、加拍子、左右捻向テハ足ヲ踏上ツ、舞也、

此舞天王寺ニ舞様、大神氏舞ノ様、以外相違シタリ、

〔續教訓抄〕舞案讀、或人云、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタアリ、童舞ハ、○中皇座、

〔教訓抄〕舞番様

無答舞○中皇座有甲片屑祖 白楚持 有入綾

〔樂家錄三十六〕平調之曲

皇座中番舞倍臚是中華之曲也、曲番之事未考之、

〔舞樂要錄上〕同○舞例 相撲節

同○天七年 拔出同七月卅日 左○中皇座○中 右○中弄槍

〔西宮記臨時三〕御庚申御遊

延喜十六年七月七日、御庚申、亥二剋事始供、天酒給侍臣、茲歌頻奏之、○中蔭孫源藏俊於東庭舞王

座

〔平家物語〕せんじゆ

かの、すけも、家の子らう、どう十よ人ひきぐして、中將殿○平の御まへちかう候けつが、酒をすすめ奉る、千じゆのまへ玄やくをとる、○中三位中將ふつうには、此がくをば五しやうらくとい



皇慶

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕平調 皇慶<sup>皇如</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

平調 皇慶 和字忠花字 一名海老葛

〔教訓抄<sup>四</sup>〕皇慶

此曲者 黃慶谷名ナリ、於件谷作此曲云々作者不見

〔龍鳴抄<sup>下</sup>〕皇慶<sup>さう</sup>

ゆせいありけれどもたえたり、いまの世きうをすこしえづかにして、それに、まひはいづるなり、序ありけれども絶たり、破なきゝり一帖より七帖まではおなじ事を返々す、八帖に喚頭あり、九帖はひとつにかはる拍子をのゝ十、きうの拍子二十、十一反すべしとぞあるしたれども、このよたゝまひにまたがひてするなり、入時にはまたきうをす、新樂わらはまひなり、ずわへをもちてまうなり、びむづらのうへにかふとをす、このまひはこまのいゑにありたりといへども、三郎將曹高季がすそのまうべきなり、父のりたかゝゆいごととぞきこゆる、

〔仁智要錄<sup>六</sup>〕皇慶 遊聲一帖序一帖拍子十、有舞、件遊聲序共斷了、破三帖拍子各十、但一帖可

彈七反、第八第九兩帖合舞九帖也、第九帖打三度拍子、急拍子廿、可彈十一反、南宮橫笛譜云、從十

反打三度拍子、今世彈六反、從第三反加拍子、舞出入時彈當曲急、但入時加拍子、中曲 新樂 南

宮譜云、昔傳此曲者、有左大臣源信朝臣、物師安曇孫經等、

〔教訓抄<sup>四</sup>〕皇慶 有甲 中曲 新樂

破九帖 拍子各十 急拍子廿、吹十一、反又七反、近代五返歟、

右遊聲一帖 井序侍クレドモ絶タル間、急ヲ延吹テ爲道行出舞也、羯鼓打據如道行、破九帖、舞七帖ニテハ一帖ヲ返々吹之、八帖有喚頭九帖、曾響吹如拍子、伯高季說ニ、七帖ヨリ於世マセテ八九

越天樂

堂此同船樂  
奏慶雲樂 進

〔倭名類聚抄四曲調〕平調曲 越天樂一本天

〔樂家錄二十八曲調〕中華曲

盤涉調 越殿樂江都幸羅具 一本殿作天或亦略樂一名林越天又林鍾州

〔樂考平調〕越天樂 天又作殿 未詳

通考○文獻 通考 到夷部樂名の中に願天樂ありもしくは願天越天その聲の轉じ誤れる歟

〔龍鳴抄平調〕越殿樂らくてん

破ありわうしきてうにあるあんせい樂を平調にふくなりこのよの人いともえらす急拍子十二はやき物なりこのよの人盤涉調のものとえりたるきてこそはあらめたゞもとはかう平調の物とえるしたればかうえるすなり新樂

〔仁智要錄盤涉調〕越殿樂 拍子十二但以安城樂渡彈爲破可彈二反以當曲爲急可彈十二反合

拍子百四十四龍吟抄云出時用急笛中曲 新樂 南宮長秋卿橫笛譜爲平調曲律書樂圖

云宴樂之林鐘羽用此曲

〔教訓抄平調〕越天樂 拍子十二 新樂

此破ハ黃鐘調安城樂ヲ渡シテ平調ノ物トスト云リ有三拍子加三拍子急拍子十二可吹十二返

惟季ノ時ナラバ平調ノ物トセルヲ法勝寺金泥一切供養之日鍋杖衆ノ下樂始テ用之盤涉調ニ

小樂ナキユヘニ然附音盤涉調ノ物トセリ于今法用下樂用之加三拍子康保三年侍臣ノ奏樂退出音聲奏此急

拍子六カツヲ平調曲

〔扶桑略記二十六〕康保三年十月七日丁卯殿上有侍臣舞○中奏退出音聲越殿樂朕即入内公卿侍

臣丑二刻退出已記上

のふきけるをば、時秋いかりとゞめけり、みつもとすぢなき事なり、我もならひたればこそは  
ふけといひけれども、きくわいに候、いかで光元はつかまつらんとゞまり候へくといひけ  
れば、さてやみにけり、時元がゆめのせちといひて、させることなけれども、世にひする事あり、

〔體源抄平調〕勇勝 新樂

破 拍子十六

昔ハ舞ノ侍ケル也、道行アリト申タリ、雖然近來不聞之、此破ハ秘事ニテ侍、其上説々アリ、宇治禪  
定處下ノ仰ニ云、此破ノ末ニ五常樂破ノ様ニ、於世吹ニスル説アリ、又末ノ六氣ヲ不延シテ吹説、  
尤秘事トセリ、有忠拍子説、加三拍子、  
〔拾芥抄上末平調〕慶雲樂、無舞

慶雲樂

〔樂家錄二十八〕中法中華曲

平調 慶雲樂、氣也、字字半羅具 一本慶作景、一名兩鬼樂、

〔仁智要錄平調〕慶雲樂 拍子十、可彈四反合拍子、卅終帖打三度拍子、中曲 新樂

〔教訓抄平調〕慶雲樂 拍子十、可吹四返、新樂

或記云、大國ノ法、食事ノ時奏此曲、於大唐望食有二鬼、名食鬼、云飲鬼、繫念人食惱人、而聞此樂音曲、  
彼鬼神去七十里、云々、此樂本名謂兩鬼樂、我朝ニテ慶雲年中渡テ改名、付慶雲樂、或説唐有此曲大  
祠享皆用之、忠拍子アリモロノ參向音聲體ノ祝ノ事、用此曲、加三度拍子、

〔大日本史樂十五〕按唐書、上元髙宗所作、其中有慶雲之曲、通典、燕樂有景雲舞、教訓抄、體源抄  
並云、文武帝慶雲中傳此樂故名、恐就慶雲字爲說者、不取、

〔體源抄平調〕慶雲樂 新樂、中曲、無舞、○下

〔法勝寺供養記〕承暦元年十二月十八日甲午、被供養白河御願寺、○中略、已刻天皇駕腰輿、遷御金

ハ大法會行道ニ用之。一説云、舞人向南方トキ打三度拍子、謂所中半説ナリ。  
天皇御元服ノ後宴ノ口必奏此曲。舞一返ニ有口傳、一帖ノ終角ニサ、終舞出入用調子出、品玄入、隨調子、秘記云、出ニ品玄入ニ入調ヲ可用也。

〔教訓抄七〕舞番様

無答舞略中 裏頭樂片屑廻 主上御元服舞之 數手合タリ

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 裏頭樂六人 常裝束袍

〔樂家錄三十六〕平調之曲

裏頭樂曲中 番舞數手曲中

〔伊呂波字類抄人〕勇勝樂〇ウシ〇ウ

〔拾芥抄上末〕平調 勇勝無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

平調 勇勝興字志興字

〔龍鳴抄下調〕勇勝ようせう

まい絶たり、破拍子十六、急拍子廿六、この樂は人もしらぬ物也、其心をしてかくすべし、

〔仁智要錄平六調〕勇勝 長秋卿横笛譜加樂字 破拍子十六、可彈二反、龍吟抄云終帖打三度拍

子、急拍子廿六、南宮横笛譜云破可吹二反拍子十四、急可吹四反拍子廿合拍子百八、又從四反打

三度拍子、中曲 新樂

〔雜秘別錄〕勇勝

破を豊原氏の笙ふきひさうす、宇治殿にて樂ありけるに、とよ原うちなれども、光元といふもの

勇勝



ふ、よりて文字を改められしか、

〔續敎訓抄平調〕裏頭樂〇中 又作裸頭樂、一名散手作物、

〔敎訓抄三〕裏頭樂

此曲李德裕作之云、舞敎又云明帝所作云、樂敎同記曰、大國法、蛾拂ノ時以錦羅絹綾等裏頭拂之、此故唐金御國ト云所アリ、一百歳ニ一度大蛾千萬來テ害損人也、其時奏此曲彼ノ蛾皆悉ク死云々、或人語云、此曲霓裳羽衣之曲雖然、無其謂者歟、

〔大日本史禮樂十五〕按二書〇續敎訓云、漢明帝樂又云、唐李德裕作舞、並無明證、然此曲爲新樂、非漢樂曲明矣、

〔龍鳴抄平調〕裏頭樂火く

拍子十二、五反すべし、まひのいでいるにてうし、するのてうに三度拍子あぐ、此樂は帝王御元服の時そうす、又散手のはのつくり物にす、つくり物といふは散手のはをまらぬ人の、これを申なり、

〔仁智要錄平六調〕裏頭樂 拍子十二、可彈四反、合拍子卅八、終帖打三度拍子、舞出入用調子、中曲新樂

〔難秘別錄〕裏頭樂

帝王御元服にすといふ事あり、又大衆の發合するおりの樂にす、かしらをつゝ、むといふ名によりてとかや、

〔敎訓抄三〕裏頭樂 中曲 新樂

有三帖 拍子各十二 散手破作物用之以二返爲破

昔ハ四帖アリケレドモ、今ハ二帖ヲ習傳タリ、終帖加三度拍子、略定ノ時一反舞末四拍子、加二拍古

〔教訓抄〕舞番様

無答舞略 卅州略 諸府祖、有入鏡、近來林歌合

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 卅州六人冠、綵袴、及下襲常異袍、燈繪燈繪不祖 古用常裝束也體源抄曰、燈

〔續教訓抄〕平調 卅州略 中 答舞仁和尚樂、又石川、又醋酢樂

〔樂家錄三十六〕平調之曲

卅州曲小 番舞醋酢樂爲中曲 狗棒、仁和樂、敷手已上 石川爲小曲 林歌、登殿樂已上

〔舞樂要錄上〕舞番

左卅州略 中 右醋酢樂 成仁和樂

同例 曼茶羅供、有舞樂儀

待賢門院于時 御塔供養 保安三年三月十九日 左略 卅州略 中 右略 卅州略 中 林歌

〔古今著聞集六〕管絃歌舞 同喜 廿一年十月十八日、八條大將保忠 中納言の時、勅をうけ給ひて、日比

奏せざる舞を御覽せられけり略 卅州略 中 これらを御覽せられけり、

〔古今著聞集二十〕魚虫食歌 〔承安二年五月二日、東山仙洞にて、鷄合の事ありけり、略 中 北面下屬等にし

きの地鋪を庭上に敷て、舞臺に擬す、女二人卅洲をまふ、負方、妓女舞奏する事、いはれなき事なれ

ども用意のこと、制仕すべきよし、仰下さる、間奏しける也、

〔樂家錄二十八〕樂曲調法 中華曲

平調 裏頭樂、具和止字、羅具 一本裏作裸、

〔樂考 平調〕裏頭樂 一名散手作物 未詳

按するに、唐曲に六州歌頭あり、裏頭は歌頭の轉せしにや、昔は天皇元服の日、此曲を奏すとい

拍子十四、七反すべし、はやき物なり、怠いありとあるしたれども、このよせず、まひのいづるには、てうし、いる時はおなじがくをまたするなり、はてのきりに拍子をくはう、

〔仁智要錄<sup>平六</sup>〕<sup>平六</sup> 汴州

汴或作甘、汴或作州、拍子十四、可彈五反、合拍子七十、終帖加拍子、南宮

橫笛譜云、可吹五反、又一二反後詠、長秋卿橫笛譜云、可吹七反、合拍子九十八、從六帖打三度拍子、

又三後有詠、四帖詠曰、燕路霸山遠、胡關易水寒、茫々風藻動、滄々陽雲雙、殘月蘆江白、老花菊岸舟、竹驚暖露冷、桑落寒風圓、今世詠斷了、舞出時調子、入時彈當曲加拍子、小曲 新樂

〔雜秘別錄〕汴洲

このころは只拍子をひさうするといへども、見る人まゐりたり、むかしは樂拍子をひしけるとかや、堀河院樂ひやうしをこのませおはしましけるゆへに、時の人我もくときけるより、世にひろまりたるとぞ、故權亮入道成隆まうされし、只拍子にすとても、人々みなはじめをあしくまゐひたりしが、このころまのあたりよくしなりあひたり、せうくはき、とりわざにこそ、

〔教訓抄三〕汴洲樂 小曲 新樂

有五帖<sup>○中略</sup>拍子各十四

五帖アリ、常ハ三切、若ハ四帖ノ舞、第五帖ハ以外ノ秘事ナリ、終帖<sup>加一</sup>拍子<sup>謂之</sup>、一<sup>說加三</sup>度拍子<sup>謂之</sup>、<sup>近代不用之、秘スル故ナリ、コトアラントキニ可打此說、</sup>

舞出時<sup>用調子</sup>、入時重吹當曲<sup>則加拍子</sup>、古老說云、此曲對林歌スルトキ、打三度拍子、去保延元年十

月廿九日ノ舞、御覽ニ、依勅定入綾舞一列<sup>光時舞</sup>、二列<sup>則助庭</sup>、用三度拍子ノ說<sup>此入舞ニハ五帖手</sup>

此曲ニ有只拍子之說極タル秘事也、アマタノ說侍レドモ、ウチマカセテノ正說ヲバシラズ、實

<sup>子說殊</sup>秘事也、即十六帖子後<sup>武樂</sup>、獨鼓ノ秘事、白水耶、打此曲也、<sup>大神氏ノ說ニハ、無足拍子シテ、自分二返成樂拍子云々如何、</sup>

昔ハ三四帖ノ間ニ詠アリケレドモ、今ノ世ニハ不用之、

〔聚樂第行幸記〕四日め十六日○天正 舞御覽 一番萬歲樂○中

振棒を始てより萬歲樂にうつる、裝束は赤地紋紗袍、唐錦袴、あかぢの金襴打掛、鷄冠、石帶、糸鞋以下美麗なり、

〔樂家錄類話四十八〕貞享二年六月六日、於禁裏有舞御覽、三番也、無樂屋及舞臺、立庭上而奏之、其中萬歲

樂四人、其第一肥後守狛高秀也、各舞入之後、見庭上、就地去沙、故地底之黑沙相交而足跡甚狼藉也、然於高秀無此患矣、堪能之所爲、人皆感其有妙焉、後樂所之輩或嘲之曰、頃日之舞高秀一人之外、皆耕庭上之白沙耳、

甘州

〔倭名類聚抄四調〕平調曲 甘州有餘

〔樂家錄二十八調〕中華曲

平調 甘州加幸志字 一本下加樂或加鹽、一名衍臺、

〔樂考平調〕甘州又作甘州、又甘州鹽、甘州に作るはあやまれり、

天寶年中の樂曲、もと胡部の樂、後に法曲と合せらる、

〔續教訓抄〕甘州略中 又云甘州樂、或甘州鹽、有詠、近來不用之、亦名衍臺、

〔教訓抄三〕甘州

是ハ唐玄宗皇帝ノ御作也、天寶後多以邊地名曲、甘州涼洲是ナリ、又有胡旋舞、而モ照千山ト云者作之云也、依勅甘州ハ國名

也、彼國ニ海アリ、竹多クオヒタリ、甘竹ト云、件ノ竹ノ根ゴトニ毒蛇、毒蛇毒虫多ミチテ、切ウルニアタハズ、毒虫ノタメニ人多ク死ス、而奏此曲、乘船來テ此竹ヲ切レバ、彼虫入ヲ不害、金翅鳥ノ音ニ似ユヘニ、毒虫ヲソレヲナシテ、人ヲ害センノ心ナシ、此時ニ此竹ヲ船ニ切入テトルト申タリ、不レ體可レ尋

〔龍鳴抄下調〕甘州しかむ



## 〔教訓抄〕万歳樂

知足院ノ禪定殿下

○藤原忠實

仰云、光近ハヨク此道ニハイタリケリ、万歳樂ハ興ナキ舞トラボユル

ニ、此男ノ舞ハ面白メデタキ物カナト、ホメサセ給ケルカタジケナキ事也、道ニイラバカヤウノ

ヲホセヲカフルホドニコノムベシ、今世ニハアリガタクコソ侍レ、人ゴラムジシラセ給人モヲ

ハシマスベカラズ、

## 〔古今著聞集〕

六管絃歌舞

同安

○久三年十一月卅日、院にて舍利講を行はれけり、

略○中

万歳樂三反あり

けるに、その第三反に雅樂大夫清延なを半帖をもちゐたりける、人あやしみとしけり、

## 〔玉海〕

承安五年

○安元年

十月十六日癸巳、今日樂所始云々、事訖、亥刻許經家朝臣來語曰、

略○中

吹平調

調子、先左萬歳樂廿拍子舞之、康和不終一曲、

略○中

仁平十拍子云々、

今度舞人上首左中將賴

實申事之由云々、仰云、全上不可知、食舞人意也云々、于時可有廿拍子之由、示樂人云々、

以藏人長後奏之事、由主上(高倉)密御見物、白被候云々、

文治五年十月廿九日乙卯、此日當今初度春日行幸也、

略○中

童舞、先萬歳樂

六人、次賀殿六人、

著右舞裝束舞之例也、兩共武親取、大拍子進候、

每舞訖、諸大夫給祿、

## 〔二水記〕永正十四年五月二日、有御月次御樂、

略○中

今日舞立萬歳樂中帖曲之事、統秋朝臣語是隨分

之秘說云々、上古七反、或五反、又三反、又一反、半有之不同也、今日一反之說尤秘說之由候、只拍子ニ

テ舞立、殊珍重之事也、其儀笙吹調子、次箏、篳篥、筚篥等、同吹調子、彈撮合如常、笙吹出、万歳樂、

只拍子也

拍子之程、如管絃立、但聊早也、從半帖於勢吹也、樂拍子也、

當曲ノ樂拍子ニハアラズ、只拍子ニハアラズ、彈也、

拍子之程、如青海波、可彈之由、統秋朝臣示之、今日聊早也、半帖之平大鼓二計相替也、被下反付前詞、以上大鼓

二十拍子也、曲了更候、調子絃撮合也、右物笙吹音取、其間聊長也、終日程打三鼓、其時琵琶七撥、箏爪

調也、音取了吹出、大鼓二ハカリ序ノカ、リ也、不當拍子、頗聞惡也、有殘樂、今日三反、如普通、

調也、音取了吹出、大鼓二ハカリ序ノカ、リ也、不當拍子、頗聞惡也、有殘樂、今日三反、如普通、

雅樂寮進庭中舞各二曲左萬歲樂北庭樂  
右地久延喜樂

〔古今著聞集六管絃歌舞〕延喜作○延喜當四年十月大井河に行幸有けるに、雅朝○雅朝作雅明當親王御舟に

て棹をとめて、萬歲樂を舞給ける、七歳の御齡にて、曲節にあやまりなかりける、ありがたきた  
めし也、叙感にたへず、御半臂を給はせければ、親王給て拜舞し給けり、此日勅有て、親王舞劔劔○舞

〔扶桑略記二十六村上〕康保三年十月七日丁卯、殿上有侍臣舞○中次奏萬歲樂、舞人左兵衛佐佐利高遠

略○下

〔榮花物語二十御賀〕治安三年十月十三日、殿の上の御賀なり、○藤原道長妻倫事どもはつる際に、萬歲

樂家の子の公達舞人にて、四人まひ給、左衛門の督の御子の右馬の頭兼房のきみ、前帥の御子の  
四位の少將つねすけ、おなじ兄君の藏人の少將よしより、帥中納言の御子の源の少將さねとも  
がさゝれたりつるが、俄になやむことありて、え舞はずなりぬるか、はりにめされたるなりけり、

〔古事談六亭宅諸道〕堀川院御時、召南都僧徒被行大般若御讀經ケルニ、明選在此中、于時主上御笛ヲ

アソバシケルガ様々ニ、調子ヲ替テ令吹給ケルニ、明選毎調子聲ヲタガヘズ經ヲ上ケレバ主上  
奇玉テ、此僧ヲ召ケレバ、明選跪テ候庭上、依勅昇候、簀子、笛ヤ吹ト令問御ケレバ、オロ／＼吹候ト  
申ニ、サレバコソトテ、御笛ヲ給テ被吹ニ、萬歲樂ヲエモイハズ吹タリケレバ、叙感有テ、其御笛ヲ  
給ケリ、

月夜吹笛有登猪鼻之者、元正於山井私宅聞之、不聞知之樂也、成奇走登大阪隱藪見之、青衣ヲ被テ  
帶劍之僧也、元正問云、何人乎、其時衣被ヲ脱テ、法師ゾカシト云、見之山路權寺主永真也、元正重問  
云、所被吹何樂哉、永真答云、萬歲樂ヲ逆ニ吹也、若逆ニ吹ト、申人モアラバトテ、所吹習也云々、件永  
真宮寺所司ナリ、永秀若同人歟、此兩事式實所語也、

歲樂<sup>八</sup>

〔教訓抄〕舞番樣

萬歲樂

<sup>片用祖對大</sup>  
<sup>曲時譜用祖</sup> 延喜樂<sup>片用祖</sup>

〔樂家錄<sup>三七</sup>〕左右舞及人數裝束

左舞 萬歲樂<sup>六人</sup>常裝束袍

〔續教訓抄<sup>舞案譜</sup>〕或人云ク、共ニ左舞ヲモテ相對スルコトアリ、<sup>〇中</sup>萬歲樂<sup>賀殿、藤氏長者殿下御</sup>

春日詣ノ時、馬場殿黒木御所童舞奏兩曲、以萬歲樂爲左、則著左裝束、以賀殿爲右、則著右裝束、

〔樂家錄<sup>三十六</sup>〕平調之曲

萬歲樂<sup>曲中</sup> 番舞新鳥蘇<sup>大</sup> 或地久<sup>曲大</sup> 延喜樂綾切、長保樂<sup>已上</sup> 石川<sup>爲小曲中</sup>

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕舞番

左萬歲樂<sup>〇中</sup> 右延喜樂<sup>或地久</sup>

同例 大法會

雲林院塔供養<sup>歷和三年三月十九日</sup> 左<sup>〇中</sup>萬歲樂<sup>〇中</sup> 右<sup>〇中</sup>新鳥蘇

法勝寺御塔供養<sup>永保三年十月一日</sup> 左萬歲樂<sup>〇中</sup> 右地久

興福寺塔供養<sup>長元四年十月廿日</sup> 左<sup>〇中</sup>萬歲樂<sup>〇中</sup> 右<sup>〇中</sup>長保樂

相撲節

承平三年 拔出<sup>同七月廿五日</sup> 左<sup>〇中</sup>萬歲樂<sup>〇中</sup> 右<sup>〇中</sup>皇仁

天慶六年 拔出<sup>七月廿八日</sup> 左<sup>〇中</sup>萬歲樂<sup>〇中</sup> 右<sup>〇中</sup>綾切

同七年 拔出<sup>同七月廿日</sup> 左<sup>〇中</sup>萬歲樂<sup>〇中</sup> 右<sup>〇中</sup>敷手

〔江家次第<sup>正二月</sup>〕二宮大饗

昔ハ舞五返アリケレドモ、三四帖ハタエテ、今ハ一二五帖バカリゾツタハリテ侍ル、當時モチキ  
ル様口傳ノ候ナリ、中古ハ此拍子一帖半ヲ舞フ、ソノ時ハ第一帖ト第五帖ノ終十拍子舞也、此時  
笛ニモ習侍ベシ、一返此拍子ヲ吹テ、又半帖ハ返吹テ即加拍子ナリ、元爲三拍秘歌一帖廿拍、舞時第一帖ノ  
始十拍子、第五帖ノ始十拍子、舞ノ半帖ヨリ加拍子ナリ、近代十拍子ヲ略シテ初半帖十拍子、中半、  
五拍子、加拍子、舞家ニハ不用之、或講  
時ニハサモ侍ナン

此舞ノ様ハ、公事侍ル時ニ、ウチマカセタル俗人、カクハユメニモシラヌ事ニテ侍ル、秘事ニテ候、  
ヨク〜カクスベシ、舞出ルニハ品玄ヲ吹入時昔ハ入調ヲ吹ケレドモ、近代ハ臨邑調子ヲモチ  
キル、入調秘故也、又云品玄ニ返吹所アリトイヘドモ、入調ハ渡テ吹説アリ、秘事也、尙此曲ハ公私  
ニ付テ、祝所舞モ樂モ先奏之、自出曲也

二代御記云、延長四年十月十九日、大井河行幸ニ、雅明親王御年七歳ノ時、當曲ノ趣舞給、三帖ナリ、  
帝王ニカメニタヘズオハシマシテ、半臂ヲトキテカヅケサセ給タリケレバ、親王カタニカケ

テ、拜シテ一曲ヲ乙給タリケルコソ、古今アリガタクメデタク侍ケレ、今ニ件曲山階寺ノ別當ノ  
元日ノ朝拜ノ次ニ御遊アリ、ゾノ忠拍子ノ万歳樂ノ時必首官一曲ヲ舞、首親王ノ忠拍子ノ一曲  
ニテ傳來始ハウチマカセタル御遊ノ忠拍子ノ由利吹、半帖ヨリ於世吹ニナリテ、青海波ノ程ニ

早吹舞ナリ、是ヲ中帖ノ曲  
云、以外秘事也、

此舞ハ大曲ニ准ベキニヤ、大法會ニ入調ノ始ニ、新鳥蘇ニ合タル事ノ侍ナリ、ウチマカセタル事  
ニハアラズ、

此樂參音聲并ニ船樂、立樂ニ奏、用古樂、一鼓ヲ懸故ナリ、仍古樂擡拍子、三拍子

〔吉野樂書〕一萬歳樂一反半スト云ハ、初一反半帖シテハ、又ノテヘカヘリ〜スル也、秘事也、

〔續教訓抄〕舞樂譜、或人云、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタアリ、略、中女舞ハ、略、中万



萬歲樂曲 用明天皇御製作也云々○中略

一說漢武帝登嵩山時空中有呼萬歲之聲問之無唱之

者云々

〔大日本史 禮樂十五〕隋書云煬帝令樂正白明達撰萬歲樂卽是也體源抄引通典爲鳥歌萬歲樂曰

唐武太后所造也時宮中養鳥能人言又常稱萬歲故爲樂以象之今考通典無此說而文獻通考所

載與此全同唯鳥歌萬歲樂在盤涉調與此同名異曲

〔龍鳴抄下調〕萬歲樂いらく

まひてうらにいで拍子廿五反すべしはてのうに拍子をくはふる也 新樂

〔仁智要錄平六調〕萬歲樂 拍子廿可彈五反合拍子百終帖打三度拍子 南宮橫笛譜云可吹七反

每遍拍子廿合拍子百卅又從七反打三度拍子 長秋卿橫笛譜云本是舞七帖也而今世舞五帖近

代彈三反五舞一也終帖打三度拍子略時彈一反半若彈一反時從半帖打三度拍子舞出入用調子

中曲 新樂 隋煬帝作

〔雜秘別錄〕萬歲樂

みな人まゐりたることなれど半帖ぐして廿拍子を一反といふべしりやくするには一反廿拍子  
するにこのごろはいたく略して半帖よりかみ十拍子をするにおく三拍子を大こあぐる事い  
つの程よりまなしたるにかものは二拍子を一といふ神樂などにも一拍子をはめ拍子二拍  
子などをこそあぐるに半に三拍子あぐる返々おぼつかなしなか／＼に又なからをあぐる事  
はあり一反の時はん帖よりあぐれば十拍子せば下五拍子さなくば四拍子はさもありなん  
なにかするにひやうしあぐるものあるらんよく／＼たづぬべし

〔教訓抄一〕萬歲樂 拍子二十 中曲 新樂

有三帖終帖打三度略

〔教訓抄<sup>六</sup>調〕相夫戀

拍子十

又相夫憐拍子十四可吹四返

有詠

新樂〇中

執聲奏此曲、又有於世吹說如五常樂、是院禪供奉說也。有忠拍子、加三拍子、

〔源平盛衰記<sup>二十五</sup>〕小督局事

仲國明月ニ鞭ヲアゲテ、西ヲ指シテ浮岩アサナ行ハナ。〇中 龜山ノアタリ近ク、松ノ一叢アル方ニ、幽ニ琴コ

ソ聞エケレ、峯ノ嵐カ松風カ、尋ル君ノ琴ノ音カト、覺束ナク思ヒ、駒ヲハヤメテ行程ニ片折戸ノ

内ニ琴ヲゾ引澄シタル、手綱ヲユラヘテ聞ケレバ、少シモ可達モナキ、小督殿ノ爪音ナリ、樂ハナ

ニゾト聞ケレバ、夫ヲ想テ戀ト讀、想夫戀ト云フ樂也、仲國急ギ馬ヨリ飛テ下リ、ヤウヂヨウスキ

出シ、テト合テ、立寄り門ヲホト、ト扣ケバ、琴ヲバ彈ヤミ給ヒケリ、

萬歲樂

〔伊呂波字類抄<sup>末</sup>〕萬歲樂平調

〔樂家錄<sup>二</sup>十八調法〕中華曲

平調 萬歲樂眞平佐以羅具一名鳥歌萬歲樂

〔釋日本紀<sup>十五</sup>〕奏踏歌 私記曰、今俗曰阿良禮走、師說此歌曲之終、必重稱万年阿良禮、今改曰萬

歲樂、是古語之遺也、

〔教訓抄<sup>一</sup>〕萬歲〔中略〕或書云、我朝用明天皇御作云、旁非無不盡可尋也、

是ハモロコシニ隋煬帝ト申御門ノ御作セ玉ヘル也、唐國ニハ賢王ノ世ヲヲサメサセ玉フ時ニ、

鳳凰ト云鳥カナラズ出來テ、賢王萬歲々々ト囀ナルヲ、囀詞ヲ樂ニ作り、振舞姿舞ニツクラセ給

テ侍也、此朝ヘハ誰人ノワタシタルトイフ事ミエズ、

〔樂家錄<sup>三十一</sup>〕平調曲 萬歲樂

〔伊呂波字類抄左〕想夫憐平調サワレン

〔拾芥抄上末〕平調 想夫戀無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

平調 想夫戀左字不禮字 一本相夫憐又相府連

〔徒然草下〕想夫戀といふ樂は女をとこをこふる故の名にあらず、もとは相府蓮文字のかよへるなり、晉の王儉大臣として、家にはちすをうゑて、愛せし時の樂なり、是より大臣を蓮府といふ、

〔大日本史禮樂十五〕按、國史補曰、唐司空于頔以想夫憐其名不雅、將改之、客曰、南朝相府曾有瑞蓮、故歌相府蓮、自是後人語訛相承不改耳、又樂府解題云、相府蓮者、王儉爲南齊相、一時所辟皆才名之士、時人以入儉府爲蓮花池、謂如紅蓮映綠水、今號蓮幕者、自此始、其後語訛爲想夫憐、徒然草說、

略同解題、凡曲名轉訛、是類甚多矣、

〔龍鳴抄平調〕想夫戀れん

帖子十、をいしけり、されどこのよには絶たり、

〔仁智要錄六平調〕想夫戀 戀或作憐 拍子十彈四反、終帖打三度拍子、南宮橫笛譜云、一二反之、

後詠長秋 中曲 新樂

〔雜秘別錄〕想夫戀

妙音院入道師長 藤原 此の樂の名をいみて、御大はむ所にをしへまいらせられざりき、それにおはりへながされさせおはしましたりしに、譜をかきて猶いみてをしへまいらせざりき、このふにていかにもくたうじはひかせ給べきよしを、おほせられつかはしき、譜などにてとをき所より、人にもまづをしふる事はあるべくもなければ、これをれいにては、ひさうのものなどならざらんもの一二は、あながちの事あらじ、さればとておほくはゆめくあるべからず、

古事類苑

樂舞部七

唐樂樂曲中

平調樂曲

〔倭名類聚抄曲四〕平調曲

相夫憐 萬歲樂 泚州有 裏頭樂 勇勝 慶雲樂 越天樂一本天作木

皇座王如 三臺鹽 宮商荆仙樂俗云荆 平蠻樂 臨胡禪脫 娥媚娘 澀金樂 豐生樂

永隆樂 長慶子 郎君子 直大火大 鳳 連珠火鳳 移都師 駱勢娘 夜半樂

〔拾芥抄上卷〕平調

三臺鹽 皇座 萬歲樂 慶雲樂無 裏頭樂 廻忽無 泚州 想夫戀無 五常樂 勇

勝無 永隆樂 同 倍臚 春陽柳無 夜半樂 同 扶南 同 郎君子 同 小娘子 同 鷄德 同

〔龍鳴抄下〕平調曲

三臺鹽略 皇座略 萬歲樂略 慶雲樂略 廻忽略 泚州略 越殿樂略 春

楊柳略 夜半樂略 想夫憐略 五常樂略 裏頭樂略 勇勝略 倍臚略 扶

南

〔夜鶴庭訓抄〕樂名等

平調 三臺鹽 皇座 萬歲樂 春楊柳 太平樂 五常樂 裏頭樂 甘洲 廻忽 想夫戀

永隆樂 小娘子 老君子 扶南 鷄德 王昭君 勇勝 倍臚 輪鼓禪脫

〔口遊音樂〕想夫憐有舞有中

想夫憐



婆理

〔續敎訓抄沙陀調〕婆理 拍子十或九或譜ニハ盤涉調ニ入之

〔令集解四職〕雅樂寮

古記云略○中 大屬尾張淨足說今有寮儷曲等如左略○中 婆理儷六人二人持刀楯儷四人持棹略○中 右

四儷度羅之樂

〔仁智要錄沙陀調〕弄槍樂 南宮長秋卿橫笛譜、無樂字、拍子十二 南宮譜云、此帖帖別拍子十

二、但此舞隨律吹之、無定數、中曲 古樂

〔教訓抄六〕弄槍樂 拍子十二、可吹四十返云 古樂

昔ハ有舞、拍棹ノ棹ノヤウナル棹ヲモチテ、如太平樂體舞云々、光時說 古ハ供華ノ樂ニシケリ、十天樂出來ノ後ハ用十天樂、忠拍子アリ、加拍子時打三度拍子、

〔續教訓抄沙陀調〕弄槍 古樂 中曲 或兼新古 拍子十二 又名弄槍樂 此樂字古說也

初拍子五已下八四十返可吹ト云、又云度數無定、隨舞吹之、加三度拍子、但近來舞絕畢、又云、忠拍子アリ、略中 此曲供花樂ニ用之、又云、供養樂ニ用之、又云、八幡放生會ノ御供樂也、林邑樂屋ニ勤之、又云、此曲ハ大法會ノ供華樂ニ用之、而十天樂出來後、大旨彼樂ヲ用ルユヘニ、當曲ヲモチキズ、サレ

ドモ時ニヨリ所ニシタガヒテ、コレヲ用ル事モアリ、略中

拍光時云ク、此舞ノ姿、拍棹ニニタリ、拍棹ノヤウナルモノヲモチテ舞之、帶劔シテ冠ヲ著タリ、太平樂ノゴトク舞ト云々、則出入吹調子、同云、舞人大伴兼時マデハ舞、此曲云々、唐舞圖四人舞之、

右舞形ナリ、有打懸以赤紐結付冠上也、帶劔、棹如拍棹著糸鞋、曳屐也、未渡此朝曲也ト云々、

承平五年相撲節、七月廿九日、拔出ノ日、秦王ノ答舞ニ弄槍ト云リ、又天慶七年七月晦日相撲節ニ

ハ、皇慶答舞、弄槍ト云々、付之當曲ハ未ダツタハラヌヨシ在之、然ドモ兩年ノ答舞現前ナリ、但皇

慶ノ答舞ニ舞フ事ハ、其左方舞ナリ、此一曲ニカギリテカヤウニアハセラルベカラズ、愚推ヲメ

グラスニ、弄槍トカキテ、ホコトリトヨメリ、シカレバ拍棹ヲ思テカヤウニカケルニヤ、不審ナリ、

〔舞樂要錄上〕同舞例 相撲節

同平承五年略中 拔出同七月廿九日 左略中 秦王略中 右略中 弄槍

同慶天七年略中 拔出同七月晦日 左略中 皇慶略中 右略中 弄槍

莫業諸縣

初拍子三已下四早吹樂也加一拍子又云拍子不似普通如右樂

〔倭名類聚抄四〕沙陀調曲筑紫諸縣〇縣原作今改

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

定雅樂寮雜樂師事

歌師四人 傳師四人莫業諸縣師一人在此中

大同四年三月廿一日

太政官符

定雅樂諸師數事

傳師四人中略莫業諸縣傳師

弘仁十年十二月廿一日

〔令集解四〕雅樂寮

古記云〇中大屬尾張淨足說今有寮傳曲等如左〇中筑紫傳廿人諸縣師一人傳人十人傳人八人

著甲持刀禁止二人歌師四人立歌二人大歌笛師二人兼知橫笛及文

〔伊呂波字類抄呂〕弄槍ロウサッ

〔拾芥抄上末〕沙陀調 弄槍

〔樂家錄二十八〕中華曲

沙陀調 弄槍呂字佐字一本下加樂

〔龍鳴抄上〕弄槍ろさ

拍子十二これ大法花供養樂にする物也十天樂のなかりし時はこれをもちゐる、いまの世十天樂をす、されど是をもすまひなし。

さまにおちにけり、はいおきてかしらかいさすりて、あむらくゑんつかまつりて候といひけるを、人々わらひて、これをいはんれうに、わざとおちたるにこそといひあひけり、ゑんよりおちたるをば落縁とかきたり、文字はかはれども、すくはさやうにもあむめり、

〔拾芥抄<sup>上</sup>〕<sup>音</sup>樂沙陀調 壹德鹽<sup>無舞</sup>

〔續教訓抄<sup>沙陀調</sup>〕一德鹽

抑此曲ハ三島武藏之所作也、又云漢王御即位ノ樂、陽例天作之、

〔大日本史<sup>禮樂十四</sup>〕按鹽監音相通、左思吳都賦註云、監楚歌是也、教坊記曲名有一斗鹽、音相近疑

同曲也、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕<sup>音</sup>一德鹽<sup>えいとく</sup>

ひやうし十四古樂、

〔仁智要錄<sup>沙陀調</sup>〕壹德鹽 拍子十四、一說拍子十、小曲 古樂 無舞

〔續教訓抄<sup>沙陀調</sup>〕一德鹽 古樂 小曲 又新樂 中曲 又作壹德鹽 拍子十四 一說拍子十

初拍子<sup>五</sup> 已下<sup>八</sup>延 四反可吹、加三度拍子忠、拍子アリ、又云、度數无定、无舞云々、經信卿譜云、此曲可

昇也、又云、此樂古樂トハシルシタレドモ、担任セテハカコヲ打也、カヤウノ樂ノナラヒナリ、此樂

一ニカギラザル歟、近來導師呪願等ノ迎ニ用之、又云、常樂會十六日舞奏マイラスルニ吹之、其

作法、安樂<sup>一</sup>ノゴトシ、安部友正云ク、ミタケマイリニ、人ニ吹セテマイル、ケシキヲハナレテ吹ベ

キナリ、

〔倭名類聚抄<sup>曲調</sup>〕沙陀調 曹婆

〔大日本史<sup>禮樂十四</sup>〕按、教坊記、曲名有胡僧破、僧破曹婆音近、蓋同曲也、

〔續教訓抄<sup>沙陀調</sup>〕曹婆 拍子十七、又說七、博雅說十、古樂、



安樂鹽

奏スベシト云、希代ノ勝事ナリ、

〔倭名類聚抄四調〕沙陀調曲 安樂鹽安出時

〔樂家錄二十八樂曲訓法〕中華曲

沙陀調 安樂鹽 阿牟羅具江牟

〔康熙字典亥集下〕鹽中略曲之別名、凡歌詩謂之鹽者、謂如吟行曲引之類也、古樂府有音鹽、神龜謂慢調也、鹽黃帝鹽諸名、並讀作鹽、按鹽即古曲前之鹽、但歌此曲不定爲曲前曲中、直如

〔樂家錄三十一本邦樂說〕沙陀調曲 安樂鹽

安樂鹽曲唐帝之御時音重作之、

〔仁智要錄沙陀調〕安樂鹽 拍子十二 小曲 古樂 無舞 南宮橫笛譜云、世俗出案摩時先爲

此音聲其曲體無所見、

〔教訓抄六鹽調〕安樂鹽

此樂クハシク申タル者ナシ、近來法會之時用之忠拍子ト加拍子打三度時拍子、又沙陀調ノ曲云、

〔續教訓抄沙陀調〕安樂鹽 古樂 小曲 或新樂 中曲 拍子十二

初拍子五已下八延 四反吹ベシ、加三度拍子、只拍子アリ、又云、古樂用ルトキ大鼓擡之、桂譜說同之、

又云度數無定無舞云々、

〔雜秘別錄〕安樂鹽

させることなき申ことなれど、孝博のおとゝに六波羅別當覺暹といふ人ありき、宇治小松殿にて御遊ありけるに、琵琶をひきけるがてんせいづきしくふるまふ人にて琵琶をひくとてもまばしひまあれば、びはをおきて袖をかきあはせて、おしきりくするくせのありけるに、御ていのゑんのひきくであるに、おてつぎしくをふるまいけるほどに、おしきりすぎてのけ

すぐるとき、兩三拍子うちてとをるに、ひざうのてどもあるなかに、かものむなざりといふ手のあるとかや、それに河にしぶくとりとかきたるゆる、鳥向樂もやがてこの心なり、行幸いけあるところは、ふねにて舞人まいりむかふに、げきといふとりのかたをふねにつくりたり、まいればとりむかふといふゆゑとかや、これらによりて、いまは行道には大やうこれ二をするなり、又澁河を隋煬帝用子河作とあるは、すいのやうだいは河をこのみて、たうに卅六まで河をほりたまひけり、その河はるとき、この樂もまたまひける事なり、

〔續教訓抄〕沙陀調 澁河鳥 新樂 中曲 或古樂 或新古兼帶 沁字通用

序拍子十、二反、可吹、舞アリ、新撰龍吟抄云、序舞、仍雖有譜、序舞共絕畢、破拍子十二、或說拍子、初拍子トイヘドモ近、代絕畢、五又七、已下八延、五反、可吹終帖加三度拍子、但用古樂トキハ、極之、喚頭本ハナカリキ、而中古ヨリ出來レルナリ、只拍子アリ、舞アリトイヘドモ近來無之、

〔北山抄〕拾遺錄抄 内宴事

天曆五年、依召參御前、奉從二、女御、徵子女王從四、加階事、召内記、仰可儲位、記之由臨時、仰、師尹、女位記不唱、又、父親、申、刻召王卿云々、喚中納言元方在衛等卿、令獻題中納言藤原朝臣云々、參入音聲舊例最涼州也、而奏澁河鳥、未知其意、能出音聲海青樂例多如之、但延喜廿二年、安樂

〔古今著聞集〕十、九、天曆七年十月十八日、殿上の侍臣左右をわかつて、をのゝ殘菊を奉りけり、中略、左方澁河鳥、左近將曹船木茂真、舞師長尾秋吉ぞつかうまつりける、右方綾切、右衛門府生秦良佐、近衛身高つかうまつる、

〔續教訓抄〕沙陀調 澁河鳥

天曆三年二月十一日、櫻花宴、參音聲參退通用之、同五年正月廿二日、内宴、參音聲ニ用之、内教坊ノ別當右衛門督高明奉行之、中古ノ事ニヤ、平等院一切經會ニ樂行事樂屋ニ入云、シブカハトリヲ

左大臣殿は宇治天下の御養子なり、御曹司すみのあひだつねに參て、かやうにかたり申て、末代にもまゐりたるものよも候はじ、管絃このますおはしますとも、まろしめしおきて候はん、あしくも候はじと申ければ、このかくこのさたてうの調子とはまろしめしたりけるを、康和四年七月五日ならひ給はりたるなり、末代に此があるべくば、是ぞたしかなるつたはりたる師説、他人はふにてかまへたる事なり、土御門大納言殿ぞ頼吉がでし、樂人時光將監こそ、これよりならひ給はりたると申しか、そのながれぞ心にくき、かの時光に聲歌にしあはせたりしかば、いともたがはず、はじめすこしは譜のやうなりし、師説はふにもたがひたることの有也。

〔仁智要錄〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

〔體源抄〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

〔拾芥抄〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

澁河鳥

〔樂家錄〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

〔教訓抄〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

〔古記〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

〔仁智要錄〕

沙陀調

最涼州

涼或作梁

拍子廿

可彈四反

合拍子八十終帖加拍子

南宮橫笛譜云

打三度拍子

譜同

中曲

古樂

南宮

橫笛譜云

打三度拍子

〔吹五反〕

合拍子五十

五反打三度拍子

中曲

古樂

醉鄉日月云

伴曲隋煬帝用子河作

〔雜秘別錄〕

澁河鳥

〔是もろく〕

大法會行道に

鳥向樂澁河鳥をすめり

常樂會行道にぞ

陵王の破をすなる

いかな

るゆゑにかあるらむ

さてこれらは行道に

右舞人上らう一をうつ

御前御さじきのまへなどを

〔是もろく〕

大法會行道に

鳥向樂澁河鳥をすめり

常樂會行道にぞ

陵王の破をすなる

いかな

るゆゑにかあるらむ

さてこれらは行道に

右舞人上らう一をうつ

御前御さじきのまへなどを

〔教訓抄六〕最涼州中略此樂急長貞秀勝道久作云々

〔大日本史禮樂十四〕按唐書云九功舞者本名功成慶善樂太宗宴群臣於慶善宮賦詩起居郎呂才被之管絃名曰功成慶善樂又云涼州曲本西涼所獻也其聲本宮調有大遍小遍據此卽涼州九功本爲別曲明矣今爲一曲者不詳其故然舊記所載亦或有以也唐書通考並云坐立二部唯慶善樂顯用西涼疑由此等文混爲一曲也

〔唐六典十四〕太常寺太樂署令一人中略太樂令掌教樂人調合鍾律以供邦國之祭祀饗燕丞爲之貳中略凡大燕會則設十部之伎於庭以備華夷中略三日西涼伎

編鐘編磬各一架歌二人彈箏擗箏豎箏篋篋中略筚篥琵琶五絃笙長笛短笛大篳篥小篳篥簫腰鼓齊鼓擔鼓各一銅鈸二具中略下鼓之具

〔龍鳴抄一〕最涼州中略

ひやうし廿古樂この樂大判官大判につたへたまはず入道左大臣殿源よりならひ給はる御ものがたりに常におほせられしは王監物頼吉といふ人ありそれが王太とてありけるに帝王内宴といふことをば主給きまいり音聲にはこの樂をすべかりけるにその時の伶人みなまらざりけり正近のうたのせうもまらずと申ければことがくを改定すべきかまた内宴のとまるべきかなんど公卿さだめ給ける延近といひしもの、弟子に王太といふものこそまらぬことなくよく物まらるものあんなれかれをめしてとひてかれまらずと申さんをりいかにもいかに候べしと定められてのちたづねられけれどもとみにいでこずさらに尋られてとはれければつたへならひたるよし申ければ此内宴とげられにけりまかるべき者にて有けれど伶人にぐしてつとめてありけりそれより大功の者なりとて宇治殿藤原かんたんして監物になり内從の頭になり樂所のあづかりになりてやんごとなくなりたりけるにこの入道



古鳥舞急畢テ入時、重テ急ヲ吹テ入、今ハ急樂ヲ止ズ入ナリ、

〔敎訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

別番樣

迎陵頻又鳥ト云、各羽

胡蝶又蝶云、各羽

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

左舞

迎陵頻四人

天冠

插花

櫻天冠左右

求結天冠之袴

及袍

常異

脛巾

鳥羽

銅拍子

〔源氏物語<sup>二十四</sup>〕

鶯のうらゝ

かなるねに

鳥のがく

はなやかにきゝ

わたされて

いけの水鳥も

そこはかとなく

さえづりわたるに

きうになりは

つるほど

あかすおもしろし

てふはまして

はかなきさまにとびたちて

やまぶきのませのもとに

さきこぼれたる花のかげに

まひいづる宮のすけをはじめて

さるべきうへ人共

ろくとりつゞきて

わらはべにたぶ

とりにはさくら

のほそながてふには

やまぶきがさねたまはる

〔榮花物語<sup>二十二</sup>〕

御供養堂

御

は六月

〇萬壽

五日に

さだめさせ給へり

佛のわたらせ給ふその日

になりて

春の霞のたえ間より

たつ紫の雲すぢをたゝ

すたなびきけり

〇中

佛やうゝおはし

ましよるほどに

御階の左右のそばより

童部の鳥の舞またる程

まことの孔雀鸚鵡

ふがえんあふのあそびなれたる

と見えたり

〔枕草子<sup>九</sup>〕

まひは

鳥のまひ

〔伊呂波字類抄<sup>左</sup>〕

最涼州

サイリヤウシユ

〔續敎訓抄<sup>沙陀調</sup>〕

最涼州

古樂

中曲

或ハ云兼新古

一名西涼樂

一名涼州

一名功成慶善樂

一名慶善樂

一名九功舞

一名九功

一名九功樂

涼樂

又州洲通用之

〇下

最涼州

まひて、めぐりはて、おの／＼わがもとのたちどに、立さだまるとき、みたび拍子あぐるなり、

〔仁智要錄四〕鳥

一名伽婁、伽婁或作迦陵賓、或作頻。序拍子八、可彈一反、破拍子八、可彈

六反、終帖加拍子。南宮橫笛譜云、可吹四反、今世彈二反、終帖第三拍子以下上大鼓。急拍子八度、數無定、隨舞彈舞作大輪、巡了復本列之時、打三度拍子、舞出時吹林邑亂聲、入時重彈當曲急、中曲

林邑樂。先吹調子、奏十天樂之間、鳥舞童六人取花瓶、並菩薩十人取花供大蛇等、各兩行經舞臺

之上、供佛前、還時先鳥童退著舞臺上之草墊、次道行之間、菩薩行還立舞畢、還入、次鳥立舞、今世供花

了、退還時菩薩蝶直經舞臺入于樂屋、鳥童著舞臺之草墊、菩薩出時鳥起、草墊退入、菩薩舞了、還入之

後、鳥更出舞、鳥還入蝶出舞。長秋卿橫笛譜云、是僧正婆羅門僧菩提並佛哲師等所傳云々、明還橫

笛譜云、是鳥極樂淨土鳥也、音十唱、苦空無常等之義、是妙音天降、南天竺傳此舞、婆羅門僧正見傳、不

留唐地、直傳日本。

〔教訓抄四〕迦陵頻 童舞 古樂

序二帖 拍子八 破二帖 拍子十六、以二返爲一帖、常急、拍子八、度數無

此曲天竺祇園方供養ノ日、伽陵頻來舞儀、時妙音天奏此曲シ玉フ、何難傳之流布矣云々、迦陵賓是

梵語也。○中 序常ニハ一返舞、破モ一返舞、第二返從第十一拍子加拍子古樂編略、略定時、用八拍子、末

四拍子、加拍子、又有一說、極速打之、謂之鳥振舞急、拍子大輪之後立定時、加三度拍子、不止樂音次第

入出時用亂聲、此舞ハ太神右舞人本トシテソナフ、又未舞人等知之舞師ヲスル也。○中

〔樂家錄三十〕詠舞

迦陵頻此曲雖謂有詠未考之

〔體源抄十一〕舞曲古今相違事

臨邑亂樂

迦樓頻

屋前机下取供花左右樂人各一次第授之 二行相並經舞臺就御塔西面階下上昇階十弟子於壇上傳取居机上

次樂止 次井供舞 自下闕次第退過草臺中央之間樂人發林邑亂舞即止發樂井留舞左右上闕

舞下闕各四人可退入之處无案內之間八人共舞仍違次 舞了各還著草臺樂止

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調曲 臨邑亂樂

〔伊呂波字類抄利人等〕臨邑亂聲リシキウ調 沙陀調

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調曲 迦樓頻或譜云天竺語也漢云教鳥其鳴時聲中傳苦空無我常樂我淨

見之受傳之後不傳

〔翻譯名義集二音生〕迦陵頻伽此云妙聲鳥大論云如迦羅頻伽鳥在鼓口中未出發聲微妙勝於餘鳥

者唯除如來音聲

〔伊呂波字類抄加人等〕迦樓頻カレウヒン

〔拾芥抄音上末〕壹越調 鳥

〔樂家錄二十八曲調〕中華曲

壹越調 迦陵頻加禮字非一名不言樂又鳥

〔龍鳴抄一結調〕迦陵頻ナリ

林邑の亂聲にてまひいづこれは古樂の亂聲ともいふ也菩薩のいでん時は林邑といふべしこ  
とまひいでん時は古樂といふべしとみえたる事ありよくくまれらん人にたづぬべし學生  
のがくはえりたることなり

序拍子八二反すべし破拍子十六六反すべしこの樂ならふところは一反八拍子なりされど二  
反をして一反といふなりするのてう四拍子をすぎて拍子をあぐべしつねのがくのあげつゝ  
みなりきう拍子八いくかへりといふ事なしまひのいるまでする也拍子あぐる事はまひふる

〔教訓抄七〕舞番様

別番様

○中

菩薩林邑物、別殿東、用道、時者謂之大菩薩、蘇利古又螺

〔續教訓抄

舞案譜

〕或人云ク、共ニ左舞ヲモテ相對スルコトアリ、安摩二舞菩薩如、此對之、

〔續教訓抄

舞案譜

〕或人云、○中菩薩面有別裝束

〔樂家錄三十六〕壹越調之曲

菩薩

曲中

番舞

獅々

或蘇利古

爲小曲中曲、舊記、

有以迦陵頻香之例、

〔法成寺金堂供養記〕治安二年七月十四日壬午、此日入道大相國○藤原建立法成寺金堂五大堂、新

佛開眼供養會也、

○中

堂童子西八人

○註

東八人

○註

相分著庭中座打金鼓打下同、次發音聲十

天樂

迦陵頻八人、胡蝶八人、菩薩十六人、各口佛供、二行相分、經舞臺列壇下、傳供僧傳供之、訖迦陵頻

八人、菩薩八人、著舞臺上草墊、胡蝶八人、菩薩八人、著鐘樓臺草墊漢中島南、更發菩薩行道樂、先菩薩

舞舞上同舞、次迦陵頻、

〔榮花物語鳥の舞〕四月元○萬壽

なれば、賀茂の祭りとて、世さはぎたるに、またやまの座主、山の舍利

を女のみをがみ給はぬ事いとくちをしとて、舍利會せんとて、舍利をまづくだしたてまつ

りて給へれば、世中の人々参りをがみ奉る、祭はて、四月廿日あまりに舍利會せさせたり、祇陀

林におはしまして、おまへの庭をたゞかの極樂淨土のごとくにみがき、たまをしけりとみゆる

に、こゝらの菩薩舞人どもに、れいのわらははべのみもいはす、さまゝ装束たびまひたり、この樂

の菩薩だち、金銀るりの笙や、琵琶や、さうのふえ、ひちりきなどふきあはせたるは、この世の事と

ゆめにおほえず、唯淨土とおもひなされて、先もいはずあはれにたうとくかなし、

〔東寺塔供養記〕建武元年九月廿四日己酉、今日有東寺塔供養事、○中次僧侶著坐○註螺吹饒持退

還佛個塔、東面

次予執香爐、次總禮三度、次樂人發樂拾天樂、次供花、并十六人各起草墊、經舞臺上到樂



〔大日本史 禮樂十四〕按、文獻通考云、宋教坊有菩薩獻香花隊、衣生色窄砌衣、戴寶冠、執香花盤、橫笛譜所言與此相類、疑此曲也、

〔教訓抄四〕菩薩 別裝束舞 古樂

序一帖有三說破一帖有三說○中略說

舞出様 有二說、一者吹林邑亂聲、舞出畢又レバ吹止テ、 禰取黃鐘調音 有二說、長キ 禰取様 一說短キ  
近來用之 禰取ノ様 一者吹笙調子、笛壹越調ノ 禰取ヲ吹、道行出也、拍子四 以一鼓拍子十 近來 拍子  
六爲二拍子

而近代常樂會後日用道行レドモ、此說ヲ不打知伶人ノ無故ナリ明此曲ノ故ナリ同

序一帖拍于八是モ長短ノ說アリ、長說ハ古説、今不用之、短說ハ今世ニ用ナリ、破一帖拍于十一

此樂以二返爲一返是京橋從喚頭加拍子、古樂揚拍子、長キ說ナリ、拍子十四、又說、拍子十六、又十八、是者古說大菩薩道行也、所習道

行者、自喚頭吹出テ、則始ノ拍子十六後加三拍、謂如陵王ノ破也。號著薩也、此曲ハダケシカナクナレベキニ世ニコトニシド

ス能  
ベ令  
シ沙  
汰

古抄云、唐有菩薩蠻田、何事ノ可尋々々、

又云菩薩序破之間有詠此大和國橘寺說

合掌詠

其詞曰、南无佛法僧禮拜、南无極樂界會開闢衆禮拜、又云、近來菩薩舞絕了、但大道時一鼓ヲ打、鴨ノムナヅリノ手ハ、是菩薩ノ舞ノ手也、是舞人能貞ノ説也

興福寺常樂十六日、可舞此手、乃前懸二枝、

此菩薩舞ハ此世ニハ絶タルヤウニ承ノ處ニ、狛氏ニ季長入道ト云者アリキ、此舞ヲ令相傳之由

依之令申出、一寺ノ沙汰菩薩ヲ中央ニ教繼畢、雖然一切不見其舞ノ手、只入様ノツチナラズ、從先

頭中央ハ舞入タル也、其外無別手、

花をたてまつりて、かへるにまうなり、つぎにこてうはなをたてまつりて、又かへるにまう、そのさほうくはしからず、これないていばかりなり、

この菩薩のみちきをして、ばらもん僧正、南天竺へまいり給ひし道に、百歳ばかりのをうなおきなあり、ひとりはむまれけるよりして目をみす、ひとりとは生れけるよりして腰たゝす、この樂の聲を聞て、こしゐざるものもたちぬ、めしゐたる者もみあげて、ともにまゐよろこぶ、僧正ばらもん、これらはなにもものぞとたづね給、答ていはく、我々はむかしたうり天の同聞衆なり、つねにかくのごときの樂をきき、よりていまこれをきくに、身にしみおもしろし、故にこしのたゝぬもわすれ、めのみえぬもあきてまひよろこぶなり、天衆なりけれども、宿業によりて、さるかたはものゝとむまれたりける也、

〔仁智要錄<sup>五</sup>〕菩薩

道行拍子四度、數無定、舞入時行立了彈止、他曲道行皆効此、次取黃鐘調

音、序拍子十八、可彈一反、今世破彈一反、卽以道行更彈、從第三拍子上大鼓、舞入時重彈道行、南宮

譜云、道行拍子八、序可吹四反、拍子十八、合拍子七十二、此僧正婆羅門僧正、菩薩并佛哲師等所持傳

也、中曲 林邑樂 長秋卿譜云、先吹調子、吹十天樂之間、鳥舞童六人、取花瓶置、菩薩十人、取花供

大蛇等、各兩行經舞臺之上、供佛前、還時先鳥童退、著舞臺之上草墊、次吹道行之間、菩薩行還立、次聊

吹黃鐘調、<sup>中</sup>次吹序、四帖以菩薩爲序、但件序依舞絕、次一帖、次又吹道行入了、度數不定、明還橫

笛譜云、舞出時、二說、或林邑亂聲、或吹調子、入時又吹道行也、龍吟抄云、此僧正婆羅門菩提并佛哲

師等所持傳也、次此曲先登五臺山、欲供養文珠師利菩薩、白頭翁相向云、文珠師利利益、日本衆生化

生彼國傳聞、行基菩薩因之婆羅門來此國、相逢行基、其時百歲老翁有二人、一者自生眼睥不見、一者

自生其腰不立、又乍二人言語不通、而二菩薩相向傳是樂、眼開腰立、各舞悅婆羅門問云、是二人不知

誰人行基菩薩答云、忉利天天人、靈山同聞衆、故今日向聖人覺知云々、

菩薩

當曲神供等備時用之、則及其半、古樂極拍子加之云々、

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調曲 菩薩或謂云、僧正樂羅門等并哲師等所傳也、

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 菩薩保佐津

〔教訓抄四〕菩薩

是天竺舞樂也、而波羅門僧正菩提并佛哲師等ノ化人等、此朝江所傳也云々、

〔元亨釋書十五〕釋佛哲林邑國人也、略中本朝樂部中有菩薩、拔頭等舞、及林邑樂者、哲之所傳也、

〔龍鳴抄一上〕菩薩

まひいづる事ふたつのやうあり、林邑の亂聲にて、いづるやうあり、てうしをふいてみちきをして、いづるやうあり道行拍子なり

序をせんとするに、わうしきてうのこゑをとるなり、笛には聲とるやうふたつの説あり、近來すくなきやうをとるなり、拍子十八、たゞし十六拍子の様あり、つねにはそれをもちゐる、まひのいるにまたみちきをす、そのたびは喚頭よりすべしとぞおほゆる、よく／＼あんなるべし、道行四拍子といふは、かこ十六に拍子のあたるなり、喚頭より拍子をくはふるは、八拍子の古樂のつゝみにあげける、さればまひのいる時は、すなはちなり拍子をくはふべければ、喚頭すべしとおほゆる也、このよにまゐりたる人なし、いよく／＼まどけなし、もし末の世にさたする人もやおはしますとてゑるしをくなり、がくをならはんにゑたがひて、たしかなるべし、これはたいていばかりなり、

十種供養する時は、菩薩と迦陵頻といふ也とをするなり、こてうはいま、でにつくり物也、まづ菩薩はなを奉りてかへるにまうなり、鳥おなじ事也、大法會にとりて、こてうとする時は、まづとり

十天樂

ノ辻吹ニヲカシゲニ吹侍ナリ、

〔教訓抄六〕雙調新羅陵王急拍子十二

此曲ニモアマタノ説侍レドモ、用十二拍子之説也、樂拍子早吹物也、加拍子時打一拍子、

〔倭名類聚抄四〕曲調沙陀調曲 十天樂古老傳云、東大寺講堂會之時、

〔拾芥抄上〕末沙陀調 十天樂無

〔樂家錄二十八〕曲調法中華曲

沙陀調 十天樂志津傳李羅具

〔龍鳴抄上〕越調十天樂天樂

拍子八、古樂、東大寺の會にふみのしさたうをかくにつくりたるなり、よて末代に供花樂にもち  
ゐる、沙陀調のもの、口傳云、件のかうたう供養に、天人十人くたりて、佛前にはなをたてまつりけ  
れば、はじめたるがくをつくりて奏すべしといふ宣旨のくだりたるに、つくるとぞ申傳たる、た  
しかには日記をたづねべし、

〔仁智要錄五〕沙陀調十天樂 拍子八 中曲 古樂 无舞 南宮橫笛譜云、此東大寺講堂會時、笛

師當世乙魚所作也、

〔教訓抄六〕越調十天樂拍子八 古樂

此樂者東大寺講堂供養ノ日、○續教訓抄爲、天人十人空ヨリ下リテ佛前花ヲ供シケレバ、始タル

樂ヲ作テ可奏ト云依宣旨、笛師當世乙魚之所作也、天人十人下リタリシニヨツテ、十天樂ト付ラ

レタル也、舉拍子アリ 加拍子時打三度

〔續教訓抄沙陀調〕十天樂 古樂 小曲 或新樂 或兼新古 中曲

〔樂家錄二十四〕乾壹越調曲 十天樂古樂、中曲、略



〔樂家錄二十八〕中華曲

沙陀調 新羅陵王志幸羅禮字和字一名團長樂一作團

〔仁智要錄沙陀調〕新羅陵王 一名團長樂 破拍子十六、可彈三反、終帖加拍子、急拍子十六、可彈

四反、終帖加拍子、合拍子百十二、南宮橫笛譜云、從急三帖打三度拍子、此舞弘仁御時、有勅給左兵衛府、一說破拍子八、急拍子十二、中曲 古樂 天王寺舞倍臚時、彈當曲破入拍二反、終帖加拍子、

〔雜秘別錄〕新羅陵王

このがくの破は世にたえにたり、これも孝博はえられたりけれどつたはらず、ならの樂人狛有時ぞ、武德樂破とこれとはえりたりけるとて、有光もつたへたると申める、天王寺もろくの大法會に、寺のならひにて、みなのはてに陪臚を舞に、かならずまひぐする、それも破はたえたりけるを、ふるき譜に、くち二拍子はありて、おくのなかりけるをみて、天王寺冠者公貞と世にの、えりけるもの、舞樂こうりうまけるが、おくをつくりぐして、いまにつたはりたる三五要錄にあるもその説なり、急は沙陀調にては十六拍子、雙調わたしもの、譜には十二拍子ある、ゆゑ、しくおぼつかなき事なり、

〔教訓抄六越調〕新羅陵王 破拍子十六 可吹三返 古樂

此曲弘仁御時、有勅左衛門府爲古樂、伴舞絕畢、仍近來天王寺陪臚ノ破用之、但用彼寺樣ハ、有別説、短檠拍子京樣拍子十六 各加三度拍子、是非惟季之流尾張則成傳之、舞アル物ナレバ、吹タキ事モヲバ知アテ 又團長樂云、弘仁御時、有勅修左、急ニ有二説、一者十二拍子説四陽鼓、加三二者十六拍子説云々、從第三返頭子爲秘三者喚頭ヨリ吹始説、コレハ吹物ニハイトモチキズ、曳物ニハ是ヲ本トシタリ、而相傳之上有時ニ不審ヲヒラキテ侍也、ウチマカセテハ秘樂ノ内ニテ侍ヲ、中々京

直衣中將具實謂元可被準賀由定左萬秋樂序一帖中破舞人三人光真定右地久四人好氏久行破  
 ニ肩袒手アリ好氏居久肩袒下鴈二人不肩袒陵王光繼ガ童伊王生年十三ニテ舞當座ノ二卿ノ  
 御計ニテ入綾ノ手ヲ舞ベシト付仰シ無地下ノ例由ヲ雖申返猶依被責仰領掌申舞終テ入時ニ  
 召御前具實中將大床ニシテ單衣ノ袖ヲトキテ給肩係テ還入ノ時樂屋ノ前ニテ入綾舞之御床  
 也貴賤ノ見物ノ大衆頗興ニ入畢ユ、シキ秘事ニテ侍シ予近眞ハナチテハシル人ナシ能々可  
 秘藏古記云問此曲已ニ古樂也舞出時何ゾ用新樂ノ亂聲乎音亂序同音故也  
 〔太平記二十四〕天龍寺供養事附大佛供養事

明レバ八月元年貞和晦日也今日ハ又爲御結緣兩上皇御幸ナル○花園光嚴法會終シカバ伶人本  
 輕ニ歸テ舞アリ左ニ蘇合右ニ古鳥蘇陵王荒序納蘇利太平樂拍梓也中ニモ荒序ハ當道ノ深秘  
 ニテ容易雖不奏之適聖主臨幸ノ法席也非可默止トテ朝榮荒序ヲ舞シカバ笙ハ新秋笛ハ景朝  
 大鼓ハ景茂ゾ仕タル當道ノ眉目天下ノ壯觀無比シ事共也

〔さかゆく花〕ゑいとくぐわん年三月十一日ざやうかうあり○後園融行幸足同十二日けふはま  
 ひ御らんなり○中略俊葛くわうじよ○陵王をまふ時簾中よりくれなゐの御きのをいださる右  
 大將○足利これをとりて舞人にかけらるふえ景永笙英秋太こ久景玄やうこ重葛なりこの舞  
 はもともひきよくたるにより列座みな一物なり

〔樂家錄四十八〕陵王舞之秘曲有日攝手也慶安之比例年舞御覽伯耆守狛近元舞此品所謂手在亂  
 序之中如還城樂合于大鼓而走作大輪既欲廻歸于本座之時願右後即指上桴見空號之日攝手亦  
 就座入日手也疾走之中不意願後故万人驚目甚稱美之

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調曲 新羅陵王一云二圖  
 〔拾芥抄音上末〕沙陀調 新羅陵王無

## 〔源平盛衰記 三十二〕福原管絃講事

入道弟修理大夫經盛ハ、詩歌管絃ニ長ジ給ヘル中ニモ横笛ノ秘曲ヲ傳ル事、上代ニモ類少ク、當世ニモ並人ナカリケリ、一年法皇○後故堀河院ノ御爲ニ、法住寺殿ニテ報恩講經供養ノ時、○中八條左判官忠房ハ、陵王ノ秘曲ヲ舞盡ス、大ヒザマヅキ、小膝突、入口ヲ返ス合掌ノ手、終ニハ皇序ノ袖ヲ翻ス、其家ナラス人ニハ、各笛ヲトメシニ、此經盛皇序ノ秘說ヲ吹給シカバ、法皇歎感ニ不堪ヤ思召ケン、御前ノ御簾ヲ上サセ御座、御衣ヲ脱テ押出サセ給ケルヲ、經盛給テ階下ニ歸著給シカバ、男女耳目ヲ驚ス、

## 〔教訓抄〕羅陵王

古說曰、左馬ノ屬大友成道ト云ケル舞人、竊竟ノ陵王舞也、時ノ人生陵王トナン申ケル、信正弟子ナリ、伴舞人成道關東ヘ下向ノ時、常陸國鹿島宮ニシテ陵王ヲ舞ケルニ、其國ノ書生ナリケル翁、此舞ヲ見テ申ケル様ニ、ヲキナ陵王ヲ見事コレ始也、但物語ニシツタヘテ侍ハ、陵王ハ一躍ニ千里ヲカケリ、石踏ハ泥如ナリ、吐氣ハ雷如タリ、小龍ヲヒタヒノシハニ、タハミトメナントスル物ニテコソ侍ルナルニ、今ノ陵王ハ蜻蛉返、鬚取手コトノ外ニモミユルモノカナ、生陵王トコソ申ナルニ、事ノホカニモ侍物カナト、アザワラヒテ立タリケリ、サテ成道舞畢テ樂屋ニ入テ、ヨビムケテ、ヤハ此ヒゲ取トコロヲバ、諸手ニテナデ、終ヲアラクハナチ給ベシ、當時舞給ヲミレバ、ウケ給ルニモタガヒテヲカシキ也、翁ガカヤウニ申ヲバ、ヲコガマシク思給トモ、聞タモチ給ヘト云テサリニケリ、成道アサマシク思テ云、見モシラス翁ノカハル遠國ニテ、カヤウニ申ハタバニハアラジ、御神ノ變化シテヲシヘ給ニコソトテ、ヲシヘノマハニマヒケレバ、目出ク侍ケルトカヤ、年號日月タシカナヲ子ドモ本說也、古記ノ裏書ノ中ニ承久元年ノ常樂會ノ後朝ニ、別當僧正雅通錄源一家公卿下向アリ、大納言通具中納言道男已上

たゞしかりけり、こゝらに集りたる者どもおどろきさはざけるを、正資おそろしながら思けるやう、則高が舞ことにかひ有てめでたし、忽に寶殿ひゞき給へるいとゞ忝し、但我等今落蹲をまはむとす、若此ときえるしなくば、いみじき耻なるべしと思て、寶殿に向ひて泣々祈申けり、陵王入て後各舞けるに、始より増りさまに寶殿ゆすり、いとゞ恐しかりけり、

〔中右記〕康和四年三月九日甲子、今日有御賀五十賀○中頃而又亂聲、龍王童舞之一曲、依不誤、衆人頗感氣、

〔續古事談五諸道〕鳥羽院御時、賭弓ニ陵王ノ廣序ヲ舞ケルニ、正清俄ニ故障アリテ、笛吹カケタリケル時、侍從大納言成通中將ニテ、幔ノ外ニタチテ廣序ヲ吹タリケル時、人イミジキコトニ申ケル、

〔古今著聞集六管絃歌舞〕京極太政大臣宗輔内裏より罷出給けるに、月面白かりければ、心をすまして、車の内にて陵王の亂序を吹給けるに、近衛万里小路にて、ちいさき人の陵王の裝束をして、車の前にてめでたく舞みえけり、あやしく覺て、車をかけはづして、榻にえりかけて、一曲みな吹とをし給にけり、曲のをはりに此陵王、近衛より南万里小路より東のすみなる社の内へ入にけり、笛曲も神威有けるにこそやむことなき事なり、

〔玉海〕安元二年二月廿一日丁酉、此日御賀五十賀○後白河試樂也、○中左陵王亂序之後、破二遍、先是關白基房原召實宗仰陵王可出之由、今般父卿無向樂屋之儀仁平家成卿向樂屋、昨日宗家例、彼者一族卿相甚多候、樂之間專榮繼、今度獨身追彼例、頗異樣歟、但不存先規、又如何者、予嘗云、御案尤可然事也、康和仲實卿納蘇利重父不臨樂屋、謂時謫謂先例旁可有思慮、被座樂屋尤尋其宜者、仍無向亂聲之後舞童宗原出曲畢、其舞優美殆欲還入之間、應勅喚參上、左近中將泰連朝臣扶持之、之經賜祿於堂上奏一節退下、父卿座候件卿著座、受取祿拜、遂退之間、昇降自長橋南裏、此道尤已上儀一同胡飲酒、但父卿無奏一曲之儀、又定能朝臣受取其祿、



衛府習舞也、貞數親王舞陵王、上下觀者感而垂淚、舞畢、外祖父參議從三位行治部卿在原朝臣行平、候舞臺下抱持親王、歡躍而出、親王于時年八歲、太上天皇和清第八之子也、

〔扶桑略記二十三〕延喜四年三月廿六日、宇多院供養圓堂略中同日勅差藏人頭仲平朝臣、率童舞樂

工等、令奉此會、先是、去廿四日於內裏有童舞、大納言國經朝臣之子舞陵王、中納言有穗朝臣之子舞

納蘇利、大臣奏此兩舞童宜被聽昇殿、勅依請、大臣仰兩父、令拜舞殿、庭侍臣持祿給之、左大臣原時藤

平給御下襲、參議已上細長已下小掛衣、樂工等內藏寮給祿有差、此間左大臣問舞庭中、更仰令推大

鼓御階前、大臣打之、自餘親王公卿下侍庭中、

〔扶桑略記二十六〕康保三年十月七日丁卯、殿上有侍臣舞略中次羅陵王、小舍人藤原親光著舞衣并

天冠、

〔日本紀略十一〕長保三年十月七日甲辰、院一條母后東三條院藤原詮子御賀宴試樂、今日左大臣息藤原道長子賴通舞

陵王、天皇有勅賜御衣、仍左大臣不堪感於庭唱、天長地久之由拜舞、彼童舞左賴通右賴宗云々、

〔教訓抄〕羅陵王

長保三年辛酉十月九日丙午東三條院四十御賀セサセオハシマシケルニ、宇治殿藤原賴通ノ若君ニテ

陵王アソバシケルニ、入綾ノ手ヲシヘマキラセタリケル、サテ御師賴光高其勸賞ニ左方ノ奉行

給タリ、是以前ハ多氏ノ一者ニテ、兩方ヲ奉行シケルトカヤ、納給、蘇利ヘ賴宗イロ君九歳ニテマハセ給、多氏失面目ケリ、

其ヨリ此方御賀ノ陵王ミナ若君アソバス、

仁平ニハ家成卿若君安元ニハ宗家卿若君皆入綾ノ手ヲシヘ御例也、

〔日本紀略十三〕長和二年九月廿五日甲寅、今日皇太子於凝華舍御覽蘇芳菲、駒形、陵王、納蘇利、

〔十訓抄十〕備中守政長が神拜にくだりける時、則高正資時資などいふ時の舞の上手どもをいざ

なひ下たりけるに、吉備津宮の御前にて、則高陵王を舞ける時に、寶殿大にゆすりひきておひ

〔教訓抄〕一、羅陵王 別裝束舞略○中 面有二樣、一者武部、樣、黑眉、入、方、一者、長、恭、假、面、樣、小、面、云、

〔教訓抄七〕舞番樣

陵王別裝束、異名、有、多、有、二、樣、武、部、小、面、納蘇利別裝束、有、二、樣、金、青、色、

〔續教訓抄〕舞案譜或人云、略○中 陵王、別裝束 面牟志 右ニ桿ヲモツナリ

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 陵王一、人、面、帽子、符、常、與、袍、褌、襦、腰、帶、

〔樂家錄三十六〕壹越調之曲

羅陵王曲中 番舞納蘇利曲小

〔舞樂要錄上〕同番○舞例 大法會

雲林院塔供養應和三年三月十九日 左○中 陵王 右○中 納蘇利

曼荼羅供有、舞、樂、儀、

宇治入道九體堂供養康治元年六月廿九日 左○中 陵王 右○中 梶輪

相撲節

天慶六年 拔出 七月廿八日 左○中 陵王○中 右○中 狛犬

〔江家次第第三〕賭射

奏勝負舞左後、高乙矢、放、間、出、 左羅陵王必、舞、廣、序、 右納蘇利依、時、右、不、舞、

〔西宮記 五月〕六日幸武德殿

掃部撤殿上床子、此間競馬略 馳了略 雅樂奏音樂於、培、東、奏、龍、

〔三代實錄四十一〕元慶六年三月廿七日己巳、天皇於清涼殿設酒宴、慶賀皇太后陽成、母、后、四十之

舞出時吹新樂亂聲但常用小亂聲也又競馬相撲ノ勝負舞賭弓ニハ頗長吹也

競馬 終番走上時始吹出亂聲御前登入ノ時吹止次亂序返數無定者歟

相撲 最結手出テ太刀ヲ圖座ニ置時始吹亂聲方屋ニ返入時吹止テ吹亂序也

賭弓 終番ノ左方ノ射手ノ矢放時發亂聲射畢ヌレバ吹亂序也

已上三ヶ説爲秘事今樣伶人シル事侍ズ

此舞出時趨走ト云事有三説一者大鼓前ハ二者舞臺五尺置テ走説入時昔ハ沙陀調子モチキケル而高野姬○稱殊此曲ヲ好オハシマシケレバ常ニ御前ニテ舞セテ御覽ナリケルニ高野天皇

天平勝寶ノ比尾張濱主仕ケル時殊ニメデタク侍ケルニ勅定云此舞殊目出オボシメス但入時

頗其興ヲウシナフ早止調子以案摩急吹爲入曲即一曲ヲ乙カテベシ奉宜旨演主忠節ヲツクシタリ

ケレバ數慮ニカナヒタリケレバ永止調子可用案摩之曲重被勅下畢○中

舊譜作龍王此舞合戰ノ間闕死已埋墓即等樂舞又云管陽公與韓佛和戰而日暮授戈而橫之日反

又云新樂亂聲并陵王亂序者雙調曲也先序又云短取常是沙陀調調取也長舊譜曰調子之端仍吹

又云并入破者沙陀調曲也是三官ノ舞說又云短取常是沙陀調調取也長舊譜曰調子之端仍吹

又云中略又云舞時大康卷小康卷蟬蛻返顯取手ヲ大舞事ナリ入時按摩ノロククロヲフク早物治氣丸說

又云博雅請入孔是師說中曲コレヲハ古說ト申ストイヘドモ有興事ドモニテ侍也ヨクモオボエ

テ人ノトハセ至ハムニモ許申スベシ又云山階寺常樂會小舞之樂用之惟季ノ忠拍子ニ吹侍ケルチ今ハ樂拍子吹尾張氏說

〔體源抄十一〕下舞曲古今相違事

古陵王入時吹沙陀調調子今ハ高野天皇○稱之御時ヨリ吹安摩

〔體源抄十二上〕一破陣曲事

蘭陵王入陣曲ハ序者陣中敵ニ向テ用之又打取テ破陣之曲ニモ用悉天下靜謐シテモ用帝王御

即位ニモ用之

一説、我等胡人、許還城樂石、於第二度、光則、踏泥如說、當時、川之、一説、阿力胡兒、吐氣如電、初度、我探頂電、踏石如泥、光近、

囑序、此內在秘手、秘取手、各荒序舞時用之、

秘口傳云、代々ノ御賀、若君ノ陵王マハセ給ニ、秘事ヲシヘマキラスル手ノ中ニ、此ヒゲトル手ヲバカナラズラシヘマキラス、ソレヲ御ビンヅラナデサセマキラスルヤウニヲシヘマキラスル也、此等ハ努々人知ヌ事也能々カクスベシ、今世ニハ小亂序トナヅケテ、只少舞ハヨノツ子ノ様ナリ、但囑序ハ絶タル曲、世ノ云ル、囑序ナリ、但囑序ハ絶タル曲、世ノ云ル、囑序ナリ、

吹、竊取、先答笙、次篳篥、次橫笛、各沙陀調ノ音取也、

荒序有八帖、拍子此鼓如亂聲、打之、有二説、二四八説、八

二四八説曰、北方、拍子北方、二東方、二西方、二南方、二舞ヲ、樂終ニ北向テ終也、コレハ當時舞ト笛トタガ

フ所ナクテ、メデタク合侍也、仍此説ナ

八方八返説曰、キハメタル大事、秘事ニテ候ベシ、北方ヨリ一帖舞始テ、乾二西三坤四南五巽六東

七八艮九北十向テ、八帖ノ舞ノ末ハ居終ル也、右膝突舞手モ大旨カハリタリ、長短コトノホカ也、笛吹

ニ對シテ能々合スベシ、長承二年三月六日ノ賭弓ノ勝負舞、此説可有、御覽由、藏人頭奉行ヲホセ

クダサレタリケル、笛吹清延ヲ枇杷殿ニ、舞人光時ニ召向テ申狀吹樣ヲ聞食ケリ、少々事ハ清延

ゾムゼヌ事ドモ侍ケレドモ、光時ガ任教訓吹事、口傳云、八帖終居タリ、舞人入破ヲ吹出、初ノ大コ

拍子立、第一爲、此樣清延シラズ、光時ガ教訓ノ内也、總異曲也、黑眉面

大鼓、在、異説、拍子也、中ノ上拍子ト可謂、或笛吹説云、以、

入破二帖、拍子各十六、第二帖自頭加拍子、略定一時、自半帖加拍子、略定一時、件加拍子樣有二説、一

者京樣當世用之、二者奈良樣ツバケ桴ヲ今一拍子サゲテ打也、尤秘説云々、



又還入時以安摩吹此無所見但尾張守濱主云高野天皇例好此曲仍奏御前還入時又吹沙陀調入有勅以案摩爲入音聲此古老可傳也長秋卿橫笛譜云伴破可吹四反而今改吹二反伴舞亂序舞了次囀三度停囀是七度而今改三度囀了又早吹亂序次聊吹調子端中次荒序次破二反次入時吹案摩吹了吹六孔是說也今世先吹新樂亂聲次吹亂序次囀云次又吹亂序次聊吹調子端次彈荒序八帖次彈破二反終帖加拍子略時彈一反從第九拍子加拍子舞入時吹案摩中曲古樂

〔雜秘別錄〕陵王

この舞にはお、ひざまき、こひざまき、おしもむどり、荒序などいふことなるひさうの事どもあるとかや相承、いづれもおろかならねども、ちかくはめでたきもの、十れつにも、光則が陵王とこそは、人の手すさみにもあむめれ、むかしは亂聲の正このあしふみといふめでたきたいはいなどもありけり、宇治まきの長者則助めでたくつたへたるものにてありけり、それが子にてまきの長者わくの神主光助といふもの、ちかうまでまいたるも、まことになべてならすいきほひなりき、そのすぢいまだあれども、手はさだめてつたはあたるらむ、すぢなき事はもの、説はうせず、すがたはみなうすめり、八條中納言顯長の弟子にて、拍光重といふ舞人ありき、それが子光宗として、いまだうへらかにてあんめり、光助が子にいや三郎光行といふものあり、それにたうじの舞人近真ならひたり、されば二ながれあり、

〔教訓抄〕羅陵王 別裝束舞 通大曲 古樂

亂序一帖 囀二度 囀序 荒序八帖 八拍子 入破二帖 六〇中十

亂序一帖 此内各別名日返返手、囀返手、通走

囀三度 音七度アリケレドモ、今世ニハモチキズ、三

一説云、吾野胡人古見如來、或國守護、翻日爲樂、傳主

其詞云、即向四方舞之、唯八方

まづ亂聲をす、新樂亂聲也、舞樂のはてにする時はすこしをすべし、競馬すまいなんどのはてにする時はながうするなり、うちまかせてはすまひにははとうをす、もし陵王をもせん時のれう也、競馬には、はてのつがひのはしりのぼるにはじめて、いるまですべし、すまひにはほていで、かゝるにはじめて、いりはつるまですべし。

### 亂序

これにおほひざまき、こひざまきある也、眞序といふことあり、あるひとにたづねしかば、さえずりの、ちすこしまうをいふとぞ申候、ひげとるところはそこにあるなり。

### 荒序

この荒序せんとはこゑをとる、まづ笙、つぎにひちりき、つぎに笛、おゐすがひにはじめ、されど一どにはつべし、八拍子なり、すなはち八きれ也、はやきものなり、きたよりはじめてにしにいたるまで、四方に二反づ、まうなり。

### 破

荒序ある時には、こゑもとらずしてふくべし、拍子十六、二反すべし、つぎのきりよりあぐべし、ふるき譜に三度とあるしたり、よてある人光則宿禰にたづねられしかば、いかゞ候らむ、二度よりほかにならはずと申き、いる時安摩をふく、これもとは沙陀調調子をふきけるが、女帝高野姬天皇（傳）の御時安摩になされたとぞいひつたへたる。

〔仁智要錄（五）附聞〕陵王

一名羅陵王

亂序一帖、度數無定、隨舞吹、次囀云、我等胡兒、吐氣如雷、我

探頂雷踏石如泥、右得士力、左得鞭廻、日光西沒、東西若月、舞樂打去、錄々長曲、荒序八帖、拍子各一、合拍子八、破拍子十六、彈二反、合拍子卅二、終帖加拍子、舞入時吹案摩、南宮橫笛譜云、初吹亂序、次囀七度、又次吹、元吹亂序、世號囀序、次吹荒序、次入破可吹、四反、拍子十六、合七十二、亂序並囀序以同吹、

陵王

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調 陵王有

〔伊呂波字類抄利人享〕陵王リロウワ

〔樂家錄二十八曲調法〕中華曲

沙陀調 陵王禮字和字一名羅陵王一本羅又沒日還午樂

〔教訓抄〕羅陵王

此曲ノ由來ハ通典ト申文ニ申タルハ、大面北齊ニ蘭陵王長恭ト申ケル人、國ヲシヅメンガタメニ軍ニ出給フニ、伴王ナラビナキ才智武勇ニシテ、形ウツクシクオハシケレバ、軍ヲバセズシテ偏ニ將軍ヲミタテマツラムトノミシケレバ、其様ヲ心得給テ假面ヲ著シテ、後ニゾ周ノ師ヲ金墉城下ニウツ、サテ世コゾリテ勇三軍ニカブラシメテ此舞ヲ作指麾擊刺ノカタチコレラニ習コレヲモテアソブニ天下泰平國土ユタカ也、仍テ蘭陵王入陣曲ト云、此朝來様未出尾張連濱主ノ流ヲ正説トスル也、連道譜ニ云、此曲沙門佛智傳へ渡又云、脂那國一人王アリ、トナリノ國ノ王ト天子ヲアラソヒケル間ニ、彼王崩畢、其子即位シテナホアラソヒヤマザリケレバ、太子王ノ陵ニ向ヒ給テナゲキ申サレ給ヒケレバ、忽墓ノ内コエアリ、雷電シテ召子、王云ク、汝ナグクコトナカレトテ、則現此形赴戰陣龍顏美鬚髯不異日スデニクレニオヨビテ戰ヤブレヌベシ、爰父王飛神魂日ヲ拯仍若天成午時サテ合戰如思國ヲウチトリテケリ、サテ世コゾリテコレヲ歌舞ス、名沒日還午樂、雖無本文自古昔傳也、

〔通典百四十六〕散樂隋以前謂之百戲

大面出於北齊、蘭陵王長恭才武而貌美、常著假面以對敵、嘗擊周師金墉城下、勇冠三軍、齊人壯之、爲此舞、以效其指麾擊刺之容、謂之蘭陵王八陣曲、

〔龍鳴抄上〕龍鳴〔陵王調〕陵王といふべし、

二舞二人面帽子、常裝束、插頭花簪、但男形者換子帽子、甲附子、桴鼓、桴男形者持之、大

舊記曰、二舞本著右裝束、而出左樂屋云々、

〔樂家錄三十六〕壹越調之曲

安摩曲中 番舞二舞曲小

舊記曰、雖以二舞番於安摩、而其左方奏之、則蘇利古爲小曲、或新秣羯曲小番之云々、

〔教訓抄〕安摩

長久ノ比、狛光高ノ老體シテ侍ケル時、二者ニテ則高ガ常樂會ノ一人、案摩ヲ舞ケルヲ、光高是ヲ見テ、孫子光季向テ、彼ノ則高ガ安摩、笏持タル伏肘、今三寸ナガリタリ、足ヲヒロフニハ袍ノ尻ヲ高ク蹴上ト申サレケルヲ、光季還私宅、後則高ニカタリケレバ、次ノ年又則高ガ舞ケルヲ、光高見テ、ホヲエミテ、光季コゾノ事ヲ語テ、ケリトゾ申ケル、昔ハ手ノ上下ヲモサタシ、足踏ナンドモ委クセンギシケルニコソ、今ノ世ノ舞人ヲ昔ノ人ニミセタランニ、イカデヲカシク侍ラン、無正體也タルナリ、光則宿禰ノ舞ケルニ、木ヲ折置ガゴトクニシテ、打登所ハ袍尻ヲ舞臺ノ地布ニモツカズシテ、天ニ飛ガゴトクナリケルナント申傳テ侍ナリ、土家ノ案摩ヲバ不似餘曲、神妙ナル由、昔ヨリ于今申傳タリ、サレバ行近將曹ハ餘ノ舞ハイトシモナカリシカドモ、案摩ヲバヨク舞トホメラレ侍シトゾ、ヨク／＼コウヲイルベキ曲也、大事也、

〔狛氏新錄〕一役付之事

寶永七寅年十月廿一日、舞樂御上覽役付、○中

安摩

近家

近任

二舞

乾左近將曹  
行家

新左近將曹  
行祐

○按ズルニ、續教訓抄ニ云ヘル如ク、二舞ハ安摩ニ相對スルヲ以テ、今便宜此條ニ附載ス、



スルナリ、急ニナリテ渡スレバ下手ノ作法ヲ舞ナリ、タトヘバ二人シテ舞コトヲ一人シテ舞ナリ、ヨク師說ヲウケテ後シツクベシ、

急舞終スレバ、又序吹笏ヲ貫テ入作法シテ入ナリ、

二ノ舞有ニ面ニ様上ハ略ハ案摩ノ時ハ一面一人舞、樂屋シテ先咲ナリ、安摩ニ出替腰ヲヤラレテ笏ヲコフヨシヲス、一說輪作ヲ舞、腰ニ甲ヲ付タリ、

是地祇土神入醉狂舞カナル乙姿也、仍謂之陰陽地鎮曲、

詠曰日ハパンケイニナリニタリ、ト詠ジテ桴ヲ振ナリ、二人手ヲトリクミテ、一人ハ立テ一人ハ居ル、三度スル時ニ樂止了謂之桴拍其後又急吹打拍子子其時左右ノ肩差脇差舞也、如急摩ニ急

ボヒテ入ナリ

コレハサシテ習コトハ侍子ドモ、大神光茂ガ物語申侍シヲ、ヨクトヒテ其ノ申狀ヲカキテ侍ナリ、コトノホカニアラキコトハヨモ侍ジトオボエ候、其說ニ云、日ハ吐氣ノタメカ、

〔體源抄 十一下〕舞曲古今相違事

古安摩二人舞之、今以一人舞爲秘事、

〔續教訓抄〕或人云、略中安摩冠ニ面ヲアテ、笏ヲ右ニモチ蹈懸ヲスルナリ、一人二人舞之、

蘇利古、白スバエヲモツ、片肩袒ナリ、童舞ニハカヤウニアハスルナリ、

〔教訓抄 七〕舞番様

安摩二舞答、有ニ面ニ様、冠蘇利古童舞、合之、片

〔續教訓抄 舞案譜〕或人云ク、左舞ヲモテ相對スルコトアリ、安摩二舞

〔樂家第 三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 安摩六人常裝束、冠、綰、藏面笏、

〔狹衣二下〕びわをひきよせて、略中すこし心に入てひき給へる。例のいひえらす心ばそく哀なるに、かきかへさるゝ、ばちのをと、おもしろいぎやうづきて雲井はるかにひゞきのぼる心地するを、かくれみのゝ中納言の二のまひにやならんとむつかしければ、ばちついさしたまへるを、人々も宮もあかずおぼしめしたり。

〔榮花物語<sub>衣珠</sub>二十七〕むかしのよのくはほうにこそはと思給へれば、いま、でよにかくて侍るいみじきこと也、されどおぼさるゝやうに、まばし心をのどめんなど思て、月日をすぐし侍る程に、せんせられ奉り侍ぬれば、いまは二のまひにて、人の御まねをするになりぬべきが、いとくちおしきなり。

〔源平盛衰記<sub>四十</sub>十六〕土佐房上洛事

範頼既ニ出立テ、小具足計ニテ、熊王丸ニ甲持せて、二位殿源朝ニ見參シ給フ、和殿トテモ非可打解、九郎ガ様ニ二ノ舞モヤト存ズレバ、上洛事暫可相計ト宣フ、

〔徒然草<sub>上</sub>〕唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧有けり、氣のあがる病ありて、年のやう／＼たくるほどに、はなの中ふたがりていきもいでがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目、眉、額などもはれまどひて、打おほひければ、物もみえず、二の舞のおもてのやうに見えけるが、たゞおそろしく鬼のかほになりて、目はいたゞきのかたにつき、額のほど鼻になりなどして、後は坊のうちの人にも見えすこもりゐて、久しくありて猶わづらはしくなりて、まに、けり、かゝるやまひも有事にこそありけれ、

〔教訓抄<sub>二</sub>〕案摩 准大曲 古樂

亂序三段 囀三度 左笏一段 急吹三段略中

口傳曰、一人安摩ハ亂序囀左笏マデハ上手ノ作法ヲ舞也、但東ニ向テ此ヘチデ向テ舞ヲ口傳ト

舞家説曰昔龍宮有寶玉重之、或雖欲取之無其術、傳謂此龍女愛雀、因集鳥毛、作雀頭著之、而學雀鳴、至于彼處、則開門戶、令入龍室、遂而後盜、彼寶玉去、摸此時之象、作此曲云々、今藏面者摸雀象云々、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>越調〕安摩

沙陀調調子ふきて、ろくろまひ、造面するとき、安摩をふきいづ、笙のてうしはとゞまりぬ、ろくろはとゞまらず、がくとゞまりて、さえづり三度といふ、はてにてうしあぐ、まひはて、二舞わらふ、その、ちいでつるがごとくにまづかにふく、またろくろいでつるやうに、おなじちがゐて、二舞いで、のぼるに、がくとゞまる、はらへのたいこに、二舞おどろきたてる、さて又がく拍子をあぐ、二舞まひいるまです、二舞は二人なり、あみおもてはわらふなり、はれおもてはよくく、かく病おもきてい也、

安摩のていをまなふ

ふたりがまいやう、おのくたがふべし、このごろひとつもてをばまはず、たゞさるがうをす、いとゞみぐるしきことなり、ひとりまう時あみがほがまう也、わらふ事の一定あるべければなり、ろくろといふことは、てうしに大鼓をうつなり、一鼓のことは、にまたがひて、大鼓をうつなり、その一のことはやうく、なり、ふるき譜には、第六第九第三とあるしたり、一鼓むふるに大鼓一ど、九度大鼓一ど、三度大こ一度なり、そのいち、は、三度拍子かく也、三度拍子一度を一拍子といふなり、大鼓の、ち鉦鼓こたふ、そのことはふたつのせちあり、一説に、は聲、こ聲、まり聲、一説に、は聲、さしりこる、こかやうにはうちいづらんならひたる事なり、たとへばことしるすなり、

〔倭訓栞<sup>中</sup>編十八〕

にのまひ 安摩とてをかしき舞ありて、其次の舞を二の舞といふといへり、

狹衣に、かくれみの、中納言の二の舞にやならんとあり、<sup>略</sup>中今の俗語にあとの舞といふも又同じ、

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調曲

案摩有

陵王有

新羅陵王長樂一云國

十天樂○中

菩薩○中

臨邑亂樂 迦樓頻○中

最涼州 澀河鳥

安樂鹽安出時

壹德鹽

曹婆 筑紫諸縣○縣原

改、

〔拾芥抄上末〕沙陀調 壹越內

陵王 新羅陵王舞無

最涼州

弄槍

澀河鳥舞無

壹德鹽同

安樂鹽同

十天樂同

〔仁智要錄五〕沙陀調曲

陵王

新羅陵王

最涼州

弄槍樂

澀河鳥

壹德鹽

安樂鹽

十天樂

〔夜鶴庭訓抄〕樂名等

壹越性調井 沙陀調九

安摩

羅陵王

新

陵王

弄槍

澀河鳥

最涼州

安樂鹽

壹越 曹婆

〔倭名類聚抄四曲調〕沙陀調曲

安摩有

〔伊呂波字類抄人事〕安摩沙陀調

〔教訓抄二〕案摩

此曲承和御門明

○仁ノ御時事勅大戸清上作之前之陰陽地鎮曲、南之大明監曲、

古記云、此曲天竺ノ樂也、此朝へ渡ル次第不見而ヲ承和御時大戸清上奉勅作曰、古老語ヲ云、更

非新製、改直其詞許也、囀詞ニ合テ天竺ヨリ渡コト、符合目出侍也、

〔樂家錄本邦樂〕沙陀調曲 安摩

安摩曲○中 或曰、此曲不可本朝製作、以囀詞見之、則正可爲天竺國之曲云々、

囀詞曰、初音聲本出何處段一音聲本出南天竺國佛家種子阿修羅等所作妓樂段一音聲娛樂佛娛樂

貴人之所賦安摩一段已上



序破拍子、これたえたり、まひも絶たり、武德殿の五月會にもちゐける物なり、急拍子十二、これのみぞある、一度にあぐべし、たゞし三度、ひやうしにもあぐる事ありと、ふるき人いひき、もしかの退出音聲には、三度拍子にあぐといふにやあらむ、

〔仁智要錄五〕

〔武德樂五〕

序拍子十六、件序斷了、破拍子十二、急拍子十二、

長秋卿橫笛譜云、左

近衛權少將藤原忠房作、

〔教訓抄六〕

〔武德樂六〕

破拍子十二、急拍子十二、新古不明

又云、是爲相撲節、獻舞、左近衛權少將藤原忠房朝臣奉勅作、改之、破今世無、急上一拍子、但法用之時、打三度拍子、序アリケレドモ、絶畢、

〔教訓抄六〕

〔武德樂六〕

拍子十二

此曲本調子ニテ吹ニハ少々吹カヘタル也、加拍子様モ三度拍子ト申メヅラシク侍リ、忠拍子ニモ吹トモ、曳物ニシタガフベシ、

〔續教訓抄五〕

〔武德樂五〕

新樂

或古樂

或新古不詳

中曲

序拍子十六

或十二

或六

但近來シレル人ナシ、秘藏スベシトイヘリ、然而近來絶畢、破拍子十二、初拍子五已下八拍子、加三度拍子、諸家ノ日記ニ大旨絶タリトイヘリ、近來ノ人不知之、但六條入道連道知之、可秘云々、其後人知之、或云絶畢云々、

急拍子十二

初拍子三

已下

四

早

常ニハ

加一拍子

又說加

三度拍子

或云、忠

拍子ノ時

加三度拍子

又

云、下高座并退出音聲御用ナドノ時ハ加三度拍子、又渡海ノトキ奏ス、之ヲ又將軍家ニシテ奏之、

〔續教訓抄五〕

〔左撲樂五〕

拍子十一

初拍子五

已下八

四反吹

ベシ、又說三

反吹

ベシ、加

三度拍子

抑此

曲ハ大戸清上ガ作、

天壽樂

初拍子五已下八加三度拍子、大食調有此樂名、以譜分之、飲酒樂ト云ナリ、

〔倭名類聚抄曲四〕壹越調曲 天壽樂

〔夜鶴庭訓抄〕樂名等

壹越調 天壽樂

〔大日本史禮樂十四〕按舊唐書、謚樂有天授樂、張文收所造、通典以爲武后天授年所造、疑此樂也、續

教訓抄爲春鶯囀一名、又三臺鹽一名、未知何據、

蘇羅密

〔倭名類聚抄曲四〕壹越調曲 厥磨賦 蘇羅密

〔夜鶴庭訓抄〕壹越調 蘇羅密 厥磨賦

〔大日本史禮樂十四〕按本書○太簇商有舞厥磨賦、又有蘇羅者卽是也、

古詠詩

〔倭名類聚抄曲四〕壹越調曲 古詠詩

〔夜鶴庭訓抄〕壹越調 古詠詩

〔大日本史禮樂十四〕按此恐非樂曲名、後世樂曲有詠曲、或其類乎、未詳、

武德樂

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 武德樂 不止具羅具 一名武頌樂

此曲武德漢高祖作之、則武德殿小五月會ニ奏之、近來絕事

〔漢書二十二〕孝惠二年、○中 高祖廟奏武德、文始五行之舞、孝文廟奏昭德、文始、四時、五行之舞、孝武

廟奏盛德、文始、四時、五行之舞、武德舞者高祖四年作、以象天下樂已行、武以除亂也

〔通典百四十一〕歷代沿革

文帝○受禪後、改漢巴渝舞曰昭武舞、○中 武德樂曰武頌樂、

〔龍鳴抄上〕越調武德樂ふとく

〔續教訓抄〕壹越調 雙鼻麗 新樂 拍子十、或說十四、又作雙亮麗、初拍子五已下八四反吹ベシ、加三度拍子、

歌曲子

〔倭名類聚抄〕曲四調 壹越調曲 歌曲子

〔樂家錄〕二十八調 中華曲

壹越調 河曲子、和氣興具志 一本河作歌、

〔龍鳴抄〕上越調 河曲子

拍子十二、このがくもとは十六ひやうしなり、延喜の御時宜旨くだりて、十二拍子になさる、まひなし、新樂、

〔仁智要錄〕五壹越調 河曲子

河或作歌 拍子十六、一說拍子十二、類聚箏譜云、拍子十六、但延喜

御時除口四拍子用十二拍子、依師說註之、或譜云、去延喜十一年相撲節奏、奏音聲之時、故山城守藤原忠房朝臣改古手所撰也、無舞、

〔教訓抄〕六壹越調 河曲子 拍子十二、又歌曲子慢、

延喜十一年、相撲ノ節ニ有勅、被棄四拍子、以其同之也、雖然小部正清尙用十六拍子云々、即最勝寺供養日、供花樂ニ用十六拍子、此慢字舞姫ノ名也、忠拍子アリ、加拍子時打三度拍子、

〔大日本史〕禮樂十四 唐書云、慢者過節、蓋謂節奏也、教訓抄、以慢爲舞姫名、恐非、

〔體源抄〕三上壹越調 歌曲子新古不詳、中曲、无舞、○下略、

〔倭名類聚抄〕曲四調 壹越調曲 宴飲樂一云飲酒樂

〔拾芥抄〕上末壹越調 飲酒樂無舞

〔仁智要錄〕五壹越調 飲酒樂 拍子廿

〔續教訓抄〕壹越調 飲酒樂 拍子二十

新樂、又名宴酒樂、又宴飲樂、

宴飲樂

〔教訓抄六〕壹越調壹團橋 拍子十七 新樂中

口傳云、吹一返後者始可除一拍子、仍拍子十六、早物ノ日云々、加拍子、樣有二說、三度拍子一說、一度

拍子一說、ヲリフシニヨルベシ、ヨニ耳トヲキ樂也、能々カクベシ、此一團橋者、堀河院御時、有勅定、

移吹、續  
笛也、

〔倭名類聚抄四〕壹越調曲 酒淨子

〔拾芥抄上〕壹越調 酒清司無舞

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 酒清司志由勢以志 一本司作詞、

〔龍鳴抄上〕酒清子すせ

拍子八、古樂まひなし、拍子三度拍子にあぐべし、このがく大判官○大神 惟季 つかへ申さず、はり川の

左大臣入道○源 房後 大ゆとじめといふうたをふくなりと仰らる、ことにたがふことなし、

〔仁智要錄五〕壹越調 酒清司 司或作詞 拍子八 小曲 古樂 絲竹譜云、可彈二反、終帖打三度

拍子、無舞、

〔教訓抄六〕壹越調 酒清司 拍子八、又六、 古樂

此樂入道左大臣○源 房後 御説ヲ傳へ給ハル云々、催馬樂合譜、眉止自女也、早物四拍子 加三度拍子、

一説八拍子首 有時一説 六拍子則成説、有喚頭放入道大臣御談曰、酒清司并通鼻胡篋之破、從本

酒飲也、音振、  
聊不違故也、

〔古今著聞集六〕管絃歌舞 天曆元年正月廿三日、内宴行はれけるに、重明親王勅をうけ給はりて、箏を

ひき給けり、○中 次酒清司をぞ奏しける、この間琴の武絃絶にたりけれど、稍彈じはて給ひけり、

〔倭名類聚抄四〕壹越調曲 雙皐鹿



壹越調 壹團橋 以津止計字

〔續教訓抄〕 壹越調

壹團橋 略中

橋又嬌字通用、亦名還宮舞云々、略中

抑此曲ハ舞ヲバ三島武藏ツクリ、樂ヲバ大戸清上作之、或ハ舞樂ト云々、武藏ガ作トイヘリ、但近來舞絶畢、略中

或記云ク、笛此譜アリトイヘドモ世ツタウル人ナシ、而間基綱師經信ニ順テ西府ニ在トキ、宋人ニアフテ琵琶ヲモテ曲ヲツタフ、師洛ノ後効之、笛譜ト相カナフ、其説タガハズ、仍天下ニ流布スル也、基政効之、仍傳之、

〔大日本史〕 禮樂十四 按續教訓鈔一説云、本曲笛譜雖存、師傳已絶、源基綱從父在太宰府、遇宋人以

琵琶傳曲、後還京師、寫之横笛、然本書已以此樂爲本朝所作、而今言受之宋人者、相爲矛盾、唐段成式詩有一團嬌之語、然自註以爲錦名、非樂曲名、而唐樂亦未聞有此曲名、一説頗可疑、

〔龍鳴抄〕 上 壹團橋 いとう

拍子十七つぎのかへりにははしの拍子一をすつ、さて十六拍子を返々するなり、はやき物也、このがくは大判官 ○大神 にもつたへ申さず、堀河の院の御時、上下をろんせす諸家の樂目六をめし、をり、基綱中納言家目錄にのみいたりしを、宣旨に云、基政民部卿忠教卿のいへにまかりて、基綱中納言をまねざとりて琵琶にひかれたなる一團橋を、ふゑのふにうつすべし、ふるきふにみあはせて、よろしきやうにゑるしてまいるべしと、おほせくだされたりしかば、そのさたのあひだ師説をえりたる也、かつらの大夫と申人おはす、かの中納言の息也、孝清入道の養子なり、さてかつらち □ しらる、そのゆへにかつらの大夫と人の申なり、その人はそのひをはせしが、さらぬひとは、これはよもあらざるらん、

〔仁智要錄〕 卷五 壹團橋

橋或作嬌

拍子十七 一説第二反以後、每反拍子十六、

此曲承和年中ニ黃菊ノ宴ト云事セサセ給ケルニ、奉勅舞ハ三島武藏作之、樂者大戸清上作之、卽以年號爲樂名、一說云承和帝明<sup>〇</sup>仁作之、

〔體源抄<sup>三下</sup>〕<sup>登越調</sup>承和樂

又云<sup>〇</sup>一仁明天皇御卽位ノ樂ナリ、承和元年、樂所預從五位上大中臣成文作之、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕<sup>越調</sup>承和樂

新樂、拍子十六反すべし、はてのきりに拍子をくはうべし、まひのいでいるに、てうしつねのこと也、承和帝王明<sup>〇</sup>仁のつくらせおはしましたると申す、

〔仁智要錄<sup>五</sup>〕<sup>登越調</sup>承和樂 拍子十、可彈六反、合拍子六十、終帖打三度拍子、今世彈四反、或時彈二

反、終帖上大鼓、舞出入用調子、中曲 新樂

〔教訓抄<sup>三</sup>〕承和樂 中曲 新樂

有四帖<sup>〇</sup>拍子各十

承和二年左司獻舞<sup>序アリケレド</sup>、中古絶<sup>モ、</sup>タリ、

有四帖<sup>拍子各十</sup>終帖<sup>加三度拍子</sup>、略定時<sup>准ニ余舞、末四拍子打三度拍子</sup>、舞出入調子、

抑以當曲、伎樂ノ内醉胡ニ用之、非無不審、

〔教訓抄<sup>七</sup>〕舞番樣

承和樂<sup>祖片</sup> 仁和樂<sup>祖片</sup>

〔續教訓抄<sup>舞案譜</sup>〕或人曰、著常裝束奏曲舞等、<sup>或ニ之比夏萬</sup>

〔倭名類聚抄<sup>曲四</sup>〕<sup>壹越調</sup>壹團樂

〔拾芥抄<sup>上末</sup>〕<sup>壹越調</sup>壹團樂<sup>無舞</sup>

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕<sup>樂曲調法</sup>中華曲

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

壹越調 酒胡子志由古志 一名酒公子 又醉胡子一本胡作公 又清酤子 又酒飲子

〔教訓抄<sup>六</sup>〕雙調 酒胡子 拍子十四

此樂唐ニテハ名醉公子是シナ玉名也 仍唐人尙件曲歟又酒盛之時爲三音聲云々

〔大日本史<sup>禮樂十四</sup>〕按和名抄引諸葛相如酒胡子賦云、因木成形象人質在、掌握而可玩、過盃盤而則出、王定保唐書云、盧汪連舉不第、賦酒胡子長篇以寓意、序曰、巡觴之胡、聽人旋轉、所向者舉杯、頗有、意趣、然傾倒不定、緩急由人、不在酒胡也、亦似有緣、姑附備考、

〔龍鳴抄<sup>一</sup>〕上 酒胡子すこし

拍子十四、はやき四拍子、かこのものなり、拍子をあぐるには一拍子にうつべし、但古老人口傳云、かやうなるものを退出音聲にするときは、三度拍子打つべしとぞいひける、うちまかせたる事にはあらず、古樂

〔仁智要錄<sup>五</sup>〕壹越調 酒胡子 一名醉公子 拍子十四 小曲 古樂 無舞 南宮譜云、唐人爲酒飲

時爲此音聲、

〔樂家錄<sup>二十八</sup>〕中華曲

壹越調 承和樂勢宇和羅具 一名冬明樂

〔大日本史<sup>禮樂十四</sup>〕按唐書通典並云、唐初祖孝孫定樂制十二和、號大唐雅樂、其十二曰承和、疑本朝古昔傳之、而亡其曲、故至是作之、襲用其樂名乎、

〔仁智要錄<sup>五</sup>〕壹越調 承和樂〇中 類聚等譜云、大戸清上所作、三島武藏作舞、南宮橫笛譜云、舞作

大戸真經、

〔教訓抄<sup>三</sup>〕承和樂〇中 又冬明樂

是ハ亭子院○字ノ御時不老門ノ北庭ニテ作之可尋也見

〔體源抄三下〕北庭樂○中北亭樂或云名雙鼻麗云々○中

或云亭子院ノ御作○中或云大國ノ法始成夫婦之日於家北面奏此曲必人妻居北面云々

〔大日本史禮樂十四〕按本書○教曲名有北庭子卽是體源抄一說云唐土婚姻之日北面奏此曲亦

可徵其爲唐樂矣教訓抄云亭子院時於不老門北庭作此樂恐因樂名附會此說也

〔仁智要錄五〕北庭樂庭或作亭拍子十四可彈四反合拍子五十六終帖打三度拍子略時

彈二反終帖上大鼓舞出時吹調子入時重彈當曲中曲新樂

〔教訓抄七〕舞番樣

無答舞○中北庭樂諸肩親又北亭樂云有入

〔樂家錄三七〕左右舞及人數裝束

左舞北庭樂六人常裝束

〔樂家錄三十六〕壹越調之曲

北庭樂曲中番舞八仙林歌已上

〔教訓抄三〕北庭樂

抑堀河院御時承德ノ比舞御覽ニ狛光季ニメシ仰テ五常樂ノゴトクニ次第ニ舞入ベシト任勅

定各曲ヲ盡タリケレバ頗有御感云々

保延元年十月廿九日内裏舞御覽日任承德之例次第ニ入綾可仕ノ由有御定舞人四人光時行貞

舞之

〔倭名類聚抄四〕壹越調曲酒胡子一云醉

〔拾芥抄上〕壹越調酒胡子無舞

酒胡子



えず、

〔仁智要錄五〕壹越調 詔應樂 韶或作韶 拍子十 南宮長秋卿橫笛譜云、可吹五反、合拍子五十終

帖打三度拍子、中曲 新樂

〔教訓抄六〕壹越調 詔應樂 拍子十 新樂

昔ハ舞ノアリケルニヤ、可吹五返申タリ、返吹初拍子、有智說 又梁州詔應樂云、忠拍子 加拍子時打

度拍

廻杯樂

〔拾芥抄上末〕壹越調 廻杯樂無舞

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法 中華曲

壹越調 廻盃樂具和以波以羅具、

〔樂考〕壹越調 廻杯樂 未詳

按するに、唐教坊樂に回波樂あり、杯波音の轉じ説れるにや、

〔大日本史禮樂十四〕按杯疑波之誤、教坊記曲名有回波樂、羯鼓錄太簇商調有回婆樂、蓋是也、

〔龍鳴抄上〕一越調 廻杯樂火いらく

新樂拍子八、四反すべし、序ありけりとまゐるしたり、但し近來絶たり、

〔仁智要錄四〕壹越調 廻杯樂 序一帖、拍子四、無舞、件序斷了、破拍子八、可彈四反、合拍子卅二、終帖打

三度拍子、中曲 新樂 南宮橫笛譜云、承和仁明 御時、殿上被好此曲、明暹橫笛譜曰、古老傳云

此間有譜音樂大行道用之、

北庭樂

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法 中華曲

壹越調 北庭樂、保具傳以羅具 一名北亭子、一本亭

〔教訓抄三〕北庭樂略 中 又北亭樂

〔仁智要錄<sup>五</sup>〕河水樂 拍子十 新樂 无舞

〔教訓抄<sup>六</sup>〕河水樂 拍子十 新樂

近來登<sup>度</sup>高座ノ樂ニ用之、有基之說云此曲雨乞ノ時奏スレバ、必雨下ルト、忠拍子アリ、加拍子<sup>三</sup>時<sup>三</sup>拍子<sup>一</sup>

溢金樂

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕壹越調曲 溢金樂<sup>一云承和樂</sup>

〔樂考<sup>壹越調</sup>〕溢金樂 溢又作壹

按するに、唐武德年中雅樂を作られし中に、承和といふあり、もしくは其雅樂を探りて改め作り、其舊名の残りしにや、

〔龍鳴抄<sup>上越調</sup>〕一金樂<sup>いさんらく、承果</sup>

拍子十、まひなし、河水樂おなじてい、とりものなり、

〔仁智要錄<sup>五</sup>〕溢金樂 一名永果樂 拍子十 南宮長秋卿橫笛譜云、可吹六反、合拍子六十、

終帖打三度拍子、類聚等譜云、可彈四反、是大田丸所作也、犬上是成、作舞而絕畢、南宮譜云、儻

作大戸真繩、中曲 新樂

〔續教訓抄<sup>壹越調</sup>〕壹宮樂 拍十七、一金樂也、

詔應樂

〔倭名類聚抄<sup>四</sup>〕壹越調曲 詔<sup>〇</sup>詔<sup>〇</sup>應樂<sup>詔原應樂</sup>

〔伊呂波字類抄<sup>人事</sup>〕詔應樂<sup>セウヤウラク</sup>

〔樂考<sup>壹越調</sup>〕詔應樂 又名梁州詔應樂 未詳

按するに、唐樂府に涼州あり、後轉じて梁州とす、之からば梨園の法曲なり、

〔龍鳴抄<sup>上越調</sup>〕詔應樂

拍子十、新樂、ふるさふに五反すべしとあるしたるは、もしまひのありけるにや、たゞし近來きこ

山村正連右兵衛忠

同倫貞

顯長中納言

顯隆子倫貞竊自雲州上洛之時習之、

雅定右大臣雅實公子、出家號中院入道、

多忠方

右近大夫將監資忠子、父資忠爲正連被殺害之間習之、實庄殿院供養日、舞袖手足穩定連被資加云々、

忠節

右近大夫將監忠方子、弱冠之時難習、忠方體不覺時々、仍鳥羽院御賀之時受左府說、

定仲

中納言師仲子、號山濟權守、仁平御賀童舞、一定通通親公子未施其由、

多文行

三位密々子承久二年九月廿五日於太上天皇御前舞之、同廿九日爲御覽於、

雅行

三位密々子承久二年九月廿五日於太上天皇御前舞之、同廿九日爲御覽於、

多景節

右近大夫忠節子、後白河院御時、於蓮花王院、總社舞也、

同忠成

右近將監忠節子、東大寺大佛供養日舞之、爲夜打被殺害了、舍兄景節所爲、由世以繼之、

多好方

右近大夫景節下、向東國、其後死去了、其之間當曲已終、絕仍樂、御免七十有餘之後習之、最勝四天

同好氏

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

同好節

右近大夫將監同廿七日於禁裏爲御覽、一人舞之、同四年九月十九日、太上天皇臨時舞御覽日始舞之、

河水樂

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 河水樂加須以羅具

〔大日本史 禮樂十四〕按唐書高宗時張文收作景雲河清歌本曲疑河清之說、

〔龍鳴抄上〕龍調 河水樂らくい

拍子十、まひなし、新樂

〔吉野樂書〕隱岐院<sup>鳥羽</sup>御幸アリ、伏見ノ源中納言師仲ノ子息大宮權亮定仲、胡飲酒ヲ舞ハレケル

ニ、太鼓ト鉦鼓トノ間ヨリ出テ舞臺ヘハ不行、御所ヘムキテ行ヲ、房方イカンノ忘却カト云ケリ、高名ノ秘事也、ヨク酒ニ酔タル心也、サテ御所ヘ向テ行テ後、舞臺ヘハノポリテ序ニ反破七反、ハウノタガヘズ舞了、人々メデタガリアヒケリ、又胡飲酒舞、大納言定房中院ノ子息三位雅行、此ハ七ノ秘事ノ内、太鼓前ノフルマイ、祿給ル所ムツケテハナラハズ、

〔看聞日記〕嘉吉元年二月十九日、後聞今夜右舞人忠右被討、借物大法事ニ伊勢ト確執、忠右惡口之間、公方被聞食被召捕、則被刎首云々、胡飲酒舞曲相傳者也、被經御沙汰被討、天王寺有舞曲之間不可斷絕云々、

〔難波宗建卿記〕享保二十年正月十八日、舞御覽也、今日胡飲酒再興也、抑胡飲酒舞事、元來久我家舞也、依之去冬被仰下久我家、從彼家被命之云々、古例自久我家被傳多家之間、多家之外無此舞、去十三日於久我家多家練習此舞、是自久我家被傳授之儀云々、多家一流自今可舞之、而今度久長舞之事有其謂、胡飲酒之面自古來持傳之由也、件面作人不知、俗云自天降、雖不足信、用於彼家同用之由也、去年此面依仰四辻中將持參被入、觀覽之時、予同見之、甚以古物也、以此子細今度先久長奉仰奉仕之、殊以本家云々、旁有其謂、舞譜去冬被尋下久我家之處、大略如注、長秋記、

〔源氏催馬樂師傳相承〕胡飲酒相承

多公用 右近大夫將監

同好茂 兵衛大夫公用子

關白兼通

多正方 右近將監好茂子

同正資 右近大夫將監

正方子、正方時、胡飲酒授、正資、探桑、老授、節實、永承五年三月、後冷泉院御時、四條宮樂日舞之有置、

雅實 太政大臣

顯房子、誠三久、我、治、曆、臨時、舞、御覽、舞之、九歲、

多資忠 右近將監

節實子、爲正連、被殺害了、又、節實爲正資養子、令、行向之日、正資、存、知此、舞、舞之、由、件日、授、胡飲酒、序、畢、

節資

正資之猶子也、其後、節實、習、實、忠、承、曆、四年、四月、廿一日、臨時、樂日、舞之、有置、



著裝束之所<sup>四方侍所也</sup>、隆季成親入自樂屋北面、交居行事座、

左胡飲酒序一遍破五切、

古鳥蘇入之後先發亂聲、數刻胡飲酒不出殆過一時、再三被加催促<sup>遣藏人於樂之後童疊樂屋、即</sup>

出自北第二間<sup>經太鼓與鉦鼓間、此童經此路故實也</sup>、此間父卿相副扶持、即率三卿復座、童進舞庭中、其由絕妙、觀者

稱美、破五遍舞了、更又吹破舞童欲還人之間、關白召之<sup>示之</sup>、幼童不覺悟、仍實宗朝臣進寄仰之、即

舞童昇自中門廊南妻<sup>曲扶持之在殿上</sup>、歷同廊并納言座末昇長押、自廣庇西進跪候<sup>去御座二</sup>

此間關白起座<sup>童道中門</sup>、著御座東間簾下、置笏取御衣<sup>紅打</sup>、目童童疊進又跪候、關白掛御衣於童

右肩、取笏復座<sup>至他舞者雖掛左肩於胡飲酒掛右肩故實也、是左手取之故也、無主上脫所</sup>、童乍

掛御衣於肩、於同底奏一曲、歷本路退下、父卿受取祿<sup>程、受取之</sup>、暫立中門廊<sup>此立長橋邊</sup>、即左手

持笏右手取御衣奏一節<sup>破一、童入綾云々</sup>、衆人驚耳目、舞訖降自中門廊南妻<sup>此間舞童經前庭入歷</sup>

殿上人座後<sup>徒跪</sup>、并中門內平橋於同橋西畔<sup>此間乍持祿舞跪立、定退歸之</sup>、右廻歷本路復座<sup>左有</sup>

<sup>房朝臣出樂屋、經前庭右將代之、侍從衆同在中門邊相共出、</sup>胡飲酒無答舞、

〔長門本平家物語二〕同年<sup>二年</sup>安元七月八日、げん玄ゆんもんいん<sup>道平</sup>かくれさせ給ひぬ、御とし三

十五、是はぞう左大臣ときのおの御むすめなり、法皇<sup>白河</sup>の女御、とうていたかくら院の御ぼぎ

なり、せん年にふれいの御ぐわんをはたさんとして、御かちにて、御くまのまうでありけり、四十日

にほんぐうにまわりつかせ給ひて、ごんげんはうらくのために、こおんしゆといふまひをまわ

せて、おはしましけるに、にはかに大雨ふりけれども、舞をとめずぬれくまいりけり、せんし

を返すまひなれば、ごんげんもめでさせ給ひけるにや、

〔百練抄<sup>八</sup>高倉〕安元二年二月廿一日、御賀試樂<sup>兩院</sup>小舍八雅行舞、胡飲酒賜勅祿之間、父定房卿肩藏

於廣廂奏一曲、聖代之佳猷、希代之壯觀也、

れたりける、いと興有てぞ侍ける、

〔古今著聞集〕卷六 狂歌舞保延元年正月四日、朝親行幸○崇に、多忠方胡飲酒をつかうまつりけるに、

此曲たび／＼御覽せられつるに、今度ことにすぐれたるよし、おほやけわたくしきたありけり、

左大臣○藤原忠忠勅を承りて、一階をたふよし仰下されければ、忠方再拜して舞て入りけり、かゝる程

に忠方右舞人たりといへ共、左舞を奏して勸賞をかうふる、左かならず賞を行はれずとも、何事

かあらんや、又伯光則多忠方いづれ上臈たるぞやのよし議定ありければ、左衛門督雅定卿申さ

れけるは、光則忠方同日に勸賞かうふりて叙爵す、多は朝臣なるによりて内位に叙す、伯は下姓

によりて外位に叙す、忠方上臈たるべしとぞ申されける、よく舞によりて賞をかうふる、光則よ

く舞はゞ行はるべし、幽ならずば行はるべからずと申けり、或は左右ともに行はるべきよしを

も申けり、光則七句に及べり、哀憐有けるにや、つゝに散手を奏する時一階を給てけり、むかしは

かく藝によりて賞のさた有けり、近き比より其善惡のさた迄もなく、たゞ一者になりぬれば、

左右なく賞を行はるゝ習になれば、頗無念の事也、

〔台記別記〕久安三年三月廿七日庚寅、今日高陽院攝政、具賀禪開○藤原忠實七十算、廿八日辛申、左右

遞奏舞、○中略胡飲酒、○右近將實多忠時、舞了欲入之間、禪開云、參、藤原忠實、

不問、舞人即懸右厨行、入、龜屋座、將予給衣畢、即復座、同左大將曰、常儀懸左厨而令懸右厨、若胡

飲酒習、大將爲、胡飲酒師、故問之、答曰、胡飲酒左手持、桴、故懸衣於右厨、是故大相國所教也、大相國

者雅實也、是左大將父也、胡飲酒師也、其言正歌、

〔玉海〕安元二年二月廿一日丁酉、此日御賀○後白河試樂也、○中略右古鳥藝○中略

舞中間、關白○藤原基房召實宗朝臣仰云、日景已傾、依康和例、先可覽胡飲酒者、實宗觸源大納言、不仰樂

次亞相起座、降自小板敷著香、入自仙花門代、歷前庭其時如實國等、入向樂屋、爲扶持、胡飲酒實、源中

宮大夫隆季、新大納言成親已上舞童源中納言雅賴父童等卿相從之、定房雅賴入樂屋、北二間向童

強無相違、至胡飲酒者、每見之、必有相違、若是後舞之手、有其數、歟、將又不舞得本體之手、歟、其不得心、事者、件事尤依爲希代舞、光末言談、然以所記置也、

〔古今著聞集<sup>六</sup>管絃歌舞〕長治貳年正月五日、朝覲行幸有けるに、胡飲酒中院右大臣<sup>源</sup>雅定量にて舞給

けり、左衛門督右大弁宗忠、宰相中將忠教、絲竹にたへたるによりて、樂屋の前に座を敷て著座せられけり、舞いまだおはらざりけるに、法皇<sup>白</sup>の召によりて、胡飲酒の童參りけり、靴をぬがず

御前の簀子に候ければ、主上<sup>河</sup>堀紅の御柏を給はせけり、右大臣<sup>忠實</sup>實原傳へ給はせけり、童庭上

におりて舞てまりぞき入ければ、父内大臣<sup>源</sup>實庭におりて拜舞を給ひけり、一家の人々みな下

殿せられける、ゆゑ敷ぞ見え侍りける、御遊に忠教卿笛をふかれけるを主上とゞめおはしまし

て、みづからふかせ給ひけり、胡飲酒のわらははふえふき給ひけり、めづらしくやさしくぞ侍り

ける、

〔續古事談<sup>五</sup>諸道〕中院入道右大臣<sup>源</sup>雅定量ノ時、公私トコロトニテ、タビ／＼胡飲酒マハレケリ、中

納言ノ後舞ノ裝束シテ、白川院ノ御前ニ召テマハセラレケルニ、廿餘年ヲヘテ、舞ノ手ツユワス

レズマハレタリケリ、アリガタキ事ニナム人申ケル、タマシ納言已上舞ノ裝束シテマフ事、オホ

ツカナシ、

左舞人光季ガ申ケルハ、ワカクヨリ正方、正助、助忠、胡飲酒タビ／＼ミルニ皆タガヒタリ、此事オ

ボツカナシ、ナラヒツタヘン事タガフベカラズ、モシ此舞手様々オホカル歟、又本體ノ手ヲエヌ

ニヤ、心エズトナム申ケル、

〔古今著聞集<sup>八</sup>飲食〕中の院右大臣<sup>源</sup>雅定鳥羽殿へ參られたりけるに、さけをなんす、められけるに、

御前にさかなもの有けり、右府のまへにもませくだ物すゑられたり、其間に院御笛にて、胡飲酒をふかせおはしましたりけるに、右府柑子を箸にさして祓にして、ひさうの手をつくしてまは

日宇治殿正助ヲハシノモトニ召テ、御衣ニカヅケラレケリ、香染白也、忠時ガ嫡子景時マドヒウセニキ、忠義又ヌス人ニコロサレニキ、其後此舞ナガクタエニケリ、世ノ末ニナル事、カヤウノコトニモ思シルベシ

〔古事談<sup>六</sup> 宅諸道〕久我大相國<sup>○源實</sup>被授胡飲酒於忠方之時、授畢之由聞食テ、天皇河<sup>○堀</sup>御覽之處、不

叶<sup>○</sup>叙<sup>○</sup>虞<sup>○</sup>仍召相國被仰示其旨、相國被申云、授ニハ能授了、然而此曲ハ、頗ノサビニ舞所ニ候テ、天性

無骨者ニ候間、幽玄之處ヲ、エマヒ候ハヌナリ云々、又被仰云、彼エ不舞處ヲ見合バヤ、仍被遣取<sup>○</sup>裝束於里亭間、退直廬解脫シテ高枕臥、依押移時刻、御使適到來之時、是ハアラヌ面也トテ、又被遣取

他面之間、已及晚頭、遲參過法之間、有逆鱗ト御使申ケレバ、猶已乍臥、胡飲酒ハ參上之程アル物也

ト被示テ、愁裝束シテ被舞ケリ、其曲神妙、天皇被仰云、凡力不及云々、

〔續世繼<sup>二</sup> 紅葉<sup>一</sup> 御狩〕康和四年三月十八日堀河の御かど鳥羽に行幸せさせ給て、ち、の法皇河<sup>○白</sup>の五十の御よはひをよろこび給ふなり、舞人樂人などは、殿上人中少將さまト、左右のゑらべ

し給ひき、童舞三人、胡飲酒陵王、納蘇利なん侍ける、その中に胡飲酒は源氏のわかきみ<sup>○源雅定</sup>なん

まひ給ひし、袖ふり給さま、天童のくだりたるやうにて、このよの人のゑわざともなく、めもあや

になん侍ける、御ぞかづけ給へるをば、御おやの大納言とて太政のおほい殿<sup>○源實</sup>おはせしぞ、と

りてはいし給ける、そのわかきみは、なかの院の大將と聞え給しなるべし、

〔中右記〕康和五年十二月二十日乙丑、左近大夫將監伯光末入來云、近日有風病、爲達醫師、今日京上、

年已八旬、命在旦暮<sup>○藤原宗忠</sup>予問曰、胡飲酒初見之後、舞體如何、答云、少年之昔、多正方舞之ニケ度、正

助五度、時助二度、助忠三度、見之處、頗以不同也、先正方ニケ度、每度相違之由、我祖父光高所申也、其

後正助時助、助忠等各頗相違、於是非者不習知之事也、今度去年内府若君<sup>○源雅實</sup>舞此曲、尤雖有

興、又頗所々違往古體、此舞絕妙、從昔相違有疑者<sup>○中略</sup>又問云、採桑老如何、答云、<sup>○中略</sup>至採桑老者



〔續古事談<sup>五</sup>〕

左舞人光末申ケルハ、

<sup>略</sup>○中

正方死ナムトスル時、正助胡飲酒ノ事ヲトヒケレバ、マ

コトニヲシヘタリ、ソレニトヘトナム云ケル、

<sup>略</sup>○中胡飲酒ハ村上ノ御時、忠義公○<sup>藤原</sup>殿上人ノ<sup>略</sup>○中

白河院ノ御時、臨時樂アリケ

時、タビ／＼御前ニテ此舞ヲ奏シテ、多好茂ニツタヘラレケリ、

<sup>略</sup>○中

白河院ノ御時、臨時樂アリケ

ルニ、正助ウセテ後、胡飲酒無ベキモノナカリケレバ、時助ヲ召テ、父正方コノカミ正助コノ舞ヲ

傳ヘテタビ／＼奏シキ、汝サダメテミナラヒケン、ツカウマツレト仰ラレケレバ、イマダナラハ

ヌヨシ申ケルヲ、ナホツカマツレ、汝ガ子助忠、正助ニナラヒタルヨシキコシメス、カレニイヒ合

テツカマツレト仰アリケレバ、シブ／＼ニ仰事ナレバ、ツカウマツルバカリナリトテ、マカリタ

チニケリ、コノ詞子イナリトナム人々イヒケル、サテソノタビ舞ヲ賞カウブリニケリ、時助ガ子

タビ／＼舞ヲ勸賞カウブレリ、助忠正連ニコロサレテ後、ナガクコノ舞タニケリ、タビシ後冷

泉院ノ御時、殿上人ノ舞御覽ジケルニ、雅實ノオトハ童ニテ正助ニ此舞ヲナラヒテマハレニケ

リ、勸祿ヲタマハル時、感ニタヘズ祖父土御門大臣

<sup>○藤原</sup>

座ヲタチテ祿ヲトリテマハレケリ、コレ

當時欣感ノミニアラズ、村上ノ御時、實資大臣納蘇利マハレタル時、清慎公○<sup>藤原</sup>タチテ舞給フ

舊貫ナリ、白河院五十ノ御賀ノ時、此大臣ノ子雅定、童ニテ又コレヲ舞助忠シニテ後、此舞絶タル

事ヲイタミ思食シテ、白河院此大臣ニ仰ラレテ、助忠ガ子忠方ニヲシヘシム大臣雅定ヲ師トシ

テ忠方ニヲシヘシム、最勝寺供養ノ時ハジメテコノ舞ヲ奏ス、父助忠ニナラハズトイヘドモ、コ

レハ正助ガオナジ流ナリ、正助ガイキタリケル時、外孫正連<sup>童名</sup>ニ胡飲酒ヲシフベキヨシ、白河

院頭弁實政朝臣シテ仰ラレケレバ、正助峯丸ヲグシテ御前ニヲシヘニケリ、サレドモ正連ツミ

カウブリテ、カレガ流タニケリトゾ、

久我大臣<sup>○藤原</sup>實資カタラレケルハ、童ニテ宇治殿ノ御前ニテ、此舞ヲ御覽セシ時、正助ガヲシヘタル

秘スル手ヲ舞タリシカバ、後ニ正助ハラダチテ、ソノ手ヲバタヤスクマハズトナン云ヒケル、此

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 胡飲酒一人面、帽子、袴常袍、襦、襦、帶、腰大襦、香同新、桴、

〔樂家錄三十六〕壹越調之曲

胡飲酒曲番舞林歌或新靺鞨已上曲

〔舞樂要錄上〕舞番

左胡飲酒略○中 右新靺鞨

同例 大法會

法金剛院御塔供養保延二年十月十五日 左略○中 胡飲酒略○中 右略○中 新靺鞨

朝覲行幸

同延○保五年正月四日 左略○中 胡飲酒 右略○中 靺鞨

御賀

康和四年白河院五十御賀 試樂 三月九日 左略○中 胡飲酒 右略○中 皇仁略○中 後宴 同廿

日 左略○中 胡飲酒略○中 右略○中 納蘇利重

〔古今著聞集六〕管絃歌舞同喜廿一年十月十八日、八條大將保忠中納言の時勅をうけ給ひて、日比

奏せざる舞を御覽せられけり、略○中 胡飲酒略○中 これらを御覽せられけり、

〔扶桑略記二十六〕村上、康保三年十月七日丁卯、殿上有侍臣舞、略○中 次胡飲酒、兼通朝臣、

〔扶桑略記二十九〕後冷泉、治曆三年十月廿二日、於中殿御覽童舞、權中納言源顯房之息雅實、舞胡飲酒、召御

前給御衣、祖父內大臣源朝臣師房起座拜舞、

〔殿曆〕康和二年六月十五日庚戌、今夜右舞人助忠并子時方被殺害了、採桑老并胡飲酒神樂絕了、非

唯爲彼等、實是輕慢朝感、

なりとぞおほせありし、これはつちみかどの大納言殿源も、大みやのすけによく／＼ならひたる人にておはしますも、この言にぞおほせられし、いまはいかゝおほせられんすらむはえらす。

〔教訓抄四〕胡飲酒 有別裝束 小曲 古樂略中

序二帖 拍子各七 破七帖 拍子各十四

序二帖第二帖 舞人居、破七帖第二反之末舞二拍子打三度拍子、是多氏舞五返時從第二反頭賴吉

說第三反末加惟季說加一拍子

此舞昔ヨリ右舞人多氏舞、其故不知可尋、

當曲作法白右樂屋渡左之樂屋者裝束、左右順聲應シテ一盃酒ヲ動ムル例ナリ、先奏古樂亂聲、御

然ニ承久二年水無瀬殿舞御覽日、御隨身某、舞人出テ亂聲一曲ノ後止テ、亂聲各禰取、如常

次序二帖有居事 次破七返舞踏シテ如大輪舞廻其姿如如此舞テ七帖ノ終ニ北廻向テ終ナリ、

而近來樂七反、舞不合間大旨八返九反吹ナリ、

〔教訓抄六〕胡飲酒 破 拍子十四

是モ忠拍子ナリ、サレドモ呂歌、田中井戸ニ合タルユヘ、樂拍子ヲ用タル也、但シ歌ニ合時ハ少シ

ノゾク所アリ、加拍子、一拍子打之

〔吉野樂書〕一胡飲酒、ハウヨリウヘニ黒キハンヒヲキル也、總ヅテミナ左前ニキルナリ、胡人エビス也、七ノ秘事ノ内ニ、三位殿ノ方ニハ太鼓ノ前フルマヒ、祿給ハル所ムツケテハナラズ、樂屋ノ御使ハ右ヘ行ン秘事也、

〔教訓抄七〕舞番樣

胡飲酒有面、別裝束、有入、綾、源氏、並多氏舞也、 林歌有甲、別裝束、金、鼠付、

まつりたりとて、おきの院<sup>鳥羽</sup>の御前にて御覽あり、おほみやのすけ、ゆめを見たとぞ、よには申ける、白河のさんほうゐんくやうに、おほみやのすけまひたまひけるに、みちをあしくいで給たりけるを、時の人のまらぬおもてかたきてさみつる事よと、そしりければ、さかさはすこそおぼえざりつれとてありける程に、まことにはそれがめでたき秘事にてありけるが、かゝるさいできてのちあらはれてのちは、たれもまゐりにたり、ことまひの出るみちにてはあらで、太鼓正このなかりいづるなり、樂の名は胡飲酒と、やがてかきたむめり、口傳にもいかめしげなるものら、よく／＼さけにゑいたるにて、このいでやうもみちまよふてといふとかや、これはあぶなし、たいこのばちの様なるものもちたるも、人はばちとまゐりたり、天王寺のものは、かくやの太鼓のばちをとられたれば、かたばちにてうつとまゐりたりとかや、まことには酌といふものなり、ひさごつぶりのさけいれたるものなり、えながひさごなどいふものなり、さけのまするへいじとりを、まやくとりといふもこの心なるべし、破をするに太鼓をあぐる事は、第二反のする二拍子をこめてあぐると、たれもまゐりたり、それに持明院の御所にて、そのかみふち井の中納言まいりて、舞たてたるやうして、遊びを申おこなはれしにまいりて、琵琶ひきしに、亂聲してのち序ありき、破やがてありしに、孝時太こをうつとて、第二反のかしらよりあげんとせしを、めを見やりてする二拍子よりあげさせたりしを、はて、のちふちぬの中納言、あれは第二反のかしらよりあぐるもさもあるものを、七反の時こそすゑよりはあぐれ、略するには三反も五反もあるには、又大鼓をもひきあげて半くはふるなりといはれしかば、さは候はぬものをとばかりは、なをつぶやきしかども、さすがさ程の人を御前にてつめふせんもあらかりしかば、一ことばばかりにてやみし、のちにぞ宮に申しやうは、略すと申すも、三反の、ちをこそ舞も略し候へ、三反よりさきは、いかにも略し候はすところうけたまはり候へと申しかば、そはさぞかし、ひが事をいひし



序拍子七、二反すべし、破拍子七、七反すべし、三反のするに拍子をこめて三度拍子にうつ、まゐ古  
亂聲にいづるときは、拍子あげているなり。

〔仁智要錄<sup>五</sup>、<sup>壹</sup>、<sup>越</sup>調〕胡飲酒

序拍子七、可彈二反、破拍子十四、可彈七反、南宮長秋卿橫笛譜云、可

彈五反、終帖打三度拍子、今世破彈七反、從第二反十三拍子、打三度拍子、舞人多時助曰、三度拍子  
之中或加小撥、樂所預源賴能曰、雖有此說、不用之、略時序彈一反、破五六反、舞出吹林邑亂聲、入  
時重彈當曲破、但打三度拍子、小曲 古樂

〔難秘別錄〕胡飲酒

まことに舞にとりて、ことなるひさう大事の物とかやこれをまひつれば、くゑんまやうをかぶ  
る、みたるにたゞおなじていにて、いづくに秘事あるべしとも見えねども、をりくゑんまひて  
出いりにつけて、ひさうの事もありとかや又つたはりもあるべきことは、いづれもといひな  
がら、事どもありげなり、多助忠正連にうちころされて、氏の者おなじくうちころされ、いきのこ  
りの子どもにて、あに忠方おと、近方、わづかに十三四のものどもにてありけるには、堀河院す  
けたゞにめしとひたる事どもを、おのくゑんにたる事に、またがひて、御はからひありて、みちをつ  
がせさせおはしましけるうち、たゞかたはこいむす、近方はかぐらふぞくをきはめけるとかや、  
その、ち中院太政大臣殿<sup>雅源</sup>こいんすをつたへさせ給て、忠方が子たゞ時にもをしへたびけ  
るにや、その御日記には、忠時こいんすまふ、さうでんなき事どもあり、自由らうせきのをのこな  
りなど、かゝせ給たる所もあり、又ゆゑしくほめさせ給たる所もありとかや、そのおほい殿は、ち  
かくまでおはせし、おほみやのすけ定仲と申し人、仁平の御賀<sup>羽</sup>にわらはまひせられけるに  
は、その人によくくゑんまかにをしへさせ給けるにも、やうくゑんまの事ありけるとかや、いまは忠  
時がするこそは、こいんすまふべきにて、されど多久行おほみやのすけに、こまかにならひたて

ナルニ、樂所ニハ舊記ニモ見ヘズ、云傳タル事モ侍子バ、旁不審无、極トイヘドモ、コヒウケ給ハルガメデタク貴ク侍レバ、心アラン人ハアヤシノ曲ナリト、合掌廻向シタマツルベキ也、仍テコレヲ注シ侍ル也、

〔三長記〕建久七年十一月五日庚辰、天皇○後行幸于賀茂社之日也、○中次引入神馬於中門内、次東

遊、次神樂、次音樂、左、萬壽樂、賀殿、陸王、右、延喜樂、地久、納蘇利、

〔吾妻鏡 五十二〕文永二年三月四日癸酉、今日於御所鞠御壺、覽童舞、○中又右近將監中原光氏廻雪

奏賀殿之間給祿物、五衣、能基朝臣役之、

〔教言卿記〕應永十六年二月十六日、夜前禁裏御樂、○中賀殿破、同急、○中賀殿破珍敷、○中賀殿破予

及九十、樂祇候其席、

### 胡飲酒

〔樂家錄 二十八〕樂曲訓注壹越調 胡飲酒古辛志由、一名醉胡樂、又宴飲樂、飲酒樂別名、亦謂之

〔樂考 壹越調〕胡飲酒 未詳

按するに、唐散樂部に蘇郎中戲といふあり、後周の世蘇葩といひしもの、酒に酔りし體を象りし舞也といふ、後戲樂郎胡部の舞なれば胡飲酒といふ、もしくは蘇郎中戲の事にや、統欽一名やみひしけあ

〔大日本史 禮樂十四〕按教坊記曲名有胡醉子、不詳異同、

〔教訓抄 四〕胡飲酒○中 一名宴飲樂○中

班聶所作也、胡國人飲酒醉ヲ奏此曲、漢其妻乙、舞曲、野者酒約、此事不詳、可尋、又云、胡國王舞之也、標ハ笏ナリ、

或書云、承和年中、奉勅樂方大月清上作之、然者如青海波、此朝ニシテ又新作歟、不詳、可尋之、又兒女子牛

飼童酒醉鄉之姿所舞、舞者源家ニ留ル、土御門御一家、樂者被下坊家、是有諸家、

〔龍鳴抄 上 越調〕胡飲酒

させ給へるなりけり、かざしの花ども、まろがねこがねの菊をつくりて、この公達みなかざしたり、

〔古今著聞集〕

六

管絃歌舞

嘉保二年八月八日、院河○白に行幸河○堀ありて相撲を御覽せられける、江帥

河○大

江兼日に式をつくりて奉ける時、舞人狛光季申けるは、万歳樂をとめて賀殿を奏せんと

思、そのゆるは一には萬歳樂は毎年、に御覽せらるゝ曲也、一には祝は賀殿おなじかるべし、一には舞興賀殿まされり、一には此院新造たり、賀殿の儀あひかなへり、江帥このよしを奏せられければ、まかるべき由勅定有て、まづ賀殿、地久を奏しけり、其時の内裏は堀河院、仙洞は閑院にて侍けり、程ちかければ、かちの行幸にてぞ侍ける、

〔教訓抄〕賀殿

或記曰、狛行光生年十六歳ニシテ、父行高ニ賀殿ノ曲ヲ習、其後春日社へ參詣ノ度ゴトニ、カタガタニ立寄テ、密々ニ此曲ヲ舞テマキラスル事、年月ヲヘテ後、重病ヲウケテ令逝去畢、冥途ニオモムク間、貴客相副ヘリ、炎摩廳庭ニ參給時ニ、ゴクソツツハゲシクセメントスル處ニ、此貴客マゲテコヒウケ給フ、仍カヘサル、時ニ問云、コハタレ人ノソハセ給テ、忝クコヒウケサセ玉ゾト申所ニ、貴客答云、我ハコレ春日大明神ナリ、汝年來我ニ心ザシフカキコトアサカラズ、其恩ヲホフゼンガタメナリト仰ラレテ、地獄ノアリサマユカシキミセント仰ラレテウセサセ給ニ、コレヲミル凡機モ心モ失ヌルホドノコト也、見終後ナク、申テ曰ク、イカバシテ此ノ苦ヲハナレ候ベキト申セバ、父母ニ孝ヤウスルニスギタル事ハナシ、ハヤク本國ニカヘリテ此ヨシヲカタルベシト仰ラルトオボユレバ、貴客モ見エサセ給ハズ、又蘇生シヌ、其後仁平二年九月二日、令逝去畢、生年六十三、御社檢記ニ、解脱聖人、眞慶ト申シテ、世コゾリテ生佛ノゴトク、タツトミタチマツリシ人ノカキオカセ給タリ、又說法ニモ度々セサセ玉シ也、然間件ノ行光ハ无下ニマデカキモノ

〔樂家錄三十六〕登越調之曲

賀殿中 番舞古烏蘇大 或地久已上 白濱大曲 延喜樂長保樂已上 林歌中

〔舞樂要錄上〕舞番

左賀殿略 中 右長保樂或地久

同例 大法會

金剛心院供養仁平四年八月九日 左略 中 賀殿略 中 右略 中 古烏蘇

東寺舍利會康永五年五月 左略 中 賀殿略 中 右略 中 延喜樂

八講

鳥羽院御八講仁平四年三月廿二日 被始行同廿五日結願 第四日 五卷日 夕座了供舞 左賀殿略 中 右地久

朝覲行幸

同和 四年正月二日 左賀殿略 中 右長保樂

同年 永久四年廿日 左賀殿略 中 右狛粹

大治二年正月三日 左略 中 賀殿略 中 右略 中 皇仁

御賀

康和四年 白河院五十御賀 試樂三月九日 左略 中 賀殿 右略 中 林歌

〔扶桑略記村上〕十六 康保三年十月七日丁卯殿上有侍臣舞略 中 次奏賀殿舞人兼通朝臣親賢朝臣、

〔榮花物語御賀〕二十 治安三年十月十三日殿の上の御賀なり藤原道長妻倫子六十賀中略 かねてんかてん原作か

は源の大納言の御子右近の少將あきもと、皇太后宮の權大夫の御子の左近の少將すけふさ、と

もたふの源の宰相の御子右近の少將もろよし、近江の守なりまさの朝臣の子右馬の助みちな

りなどなり、資通は藏人の侍從五位にてまふべきを侍從は衛府ならねば俄に右馬の助にはな



子光時、略時二返舞、終帖加拍子、猶略時ハ一返舞、自半帖加拍子、光時カ秘説云、第四帖ナハ名更居、家一説、略時二返舞、終帖加拍子、猶略時ハ一返舞、自半帖加拍子、光時カ秘説云、第四帖ナハ名更居、事故也、急第二返ノ第二拍子、ヨリ加拍子、自筆ノ舞譜付也、

於更居突者、舞、只ノ入綾ニハ居手ヲバ舞ベカラズ、此曲入綾ハ四帖舞、サル程ノ舞人ハマハ又也、○中略

或古記曰、大國ニハ國王ノ大賀セサセ玉フ時奏此曲云々、舞曲モ唐ニ候ケルニヤ、非無不書可尋

之此舞ニ百拍子ノ説ト云事アリ、某習云、破二帖拍子二十、急四帖拍子八十、合百拍子ナリ、此説曰、速舞、破第二切末二拍子早成、ノ加拍子、急ハ第四帖加拍子、

〔教訓抄〕雙調嘉殿 拍子十

右目錄ニハイレラレ侍ラ子ドモ、近來曳物ニツチニシデ、侍也、是モ忠拍子ニ吹ベシ、加拍子時

二、拍三度  
拍子

急

是モ忠拍子ノ説候ヘドモ、近來御前ノ御遊ニモ樂拍子ヲ用キラレ侍也、加拍子時打一拍子、

〔殘夜抄〕わたまし、これは未だ承らねど、それもたゞ御遊普通のにてあるべきに、此殿といふ歌をうたふべし、其外かはりめいとなきにや、樂にも必ず賀殿あるべきとぞ聞侍し、

〔教訓抄〕舞番様

賀殿有甲嘉殿ト云、片肩組、長保樂片肩組、破賀呂久、賀殿有入綾并更居突手、

〔續教訓抄〕舞案譜、或人云、○中賀殿、甲アリ、片肩組、入綾アリ、一人舞之、

〔舞樂圖〕賀殿、唐制、或四人舞

〔樂家錄〕三十七、左右舞及人數裝束

左舞 賀殿、六人、常裝束、甲異、體源抄曰、

みだしひやうしにうつべし。

急拍子廿四反すべし、たゞしこの世三反する也、はてのてうに拍子をあぐべし、口いる時は、また急をもまひの立かへりて、かくやにむかふ時、拍子をくはふべし、このかくはたうよりは急をつたへたるなり、破をば嘉祥樂といふ、こゝにはじめて破としたるなり、

貞敏いふ人なりとしたりたうより比巴にならひてきたるなり、舞林眞倉といふ人つくる、太宗人なり、但可尋、

さらむつきといふ事あり、いる時あることにや、たしかならぬことなり、

〔仁智要錄四調〕賀殿

賀或作嘉 破拍子十、可彈四反、長秋卿橫笛譜云、但不加撥急拍子廿、

可彈四反、終帖加拍子、南宮橫笛譜云、打三度拍子合拍子百廿、今世破彈二反、終帖二拍子上大鼓、

急第四反舞更居突同帖拍子略時破彈一反、末二拍子上大鼓、急彈三反以下彈二三反時、終帖加

拍子、彈一反時從第十一拍子上大鼓舞出時彈鳥急、入時重彈當曲急、舞人南向時加拍子、他曲入樂

皆倣此、中曲 新樂 南宮橫笛譜云、此曲承和遣唐使判官藤原貞敏彈于琵琶、未有勅作舞時以

嘉祥樂爲破、以嘉殿爲急、以伽婁寶急爲中舞也、但件舞物師林眞倉作之、

〔雜秘別錄〕賀殿

さらむつきといふ事は、べちの事なし、一の物ばかりまふとかや、ひざをつくをいふ、賀殿と、太平

樂急とにこのてあり、略中 更居突、さらにむつくとかきたるなり、

〔教訓抄〕賀殿 有甲 中曲 新樂

破有二帖 拍子各十 急有四帖 拍子各二十

破二帖アリ、ツ子ハ一帖、舞二帖ハコモリタル物也、加拍子様、一帖乃至二帖ノ時モ、末ニ拍子加三

度拍子、秘事也 南宮笛譜ニハ終帖、加三度拍子、光博雅笛譜云、不加撥急四帖アリ、常ハ三返舞、加終帖拍

〔樂家錄二十八〕樂曲訓法中華曲

壹越調

賀殿加傳幸、二字共清、

一名嘉殿樂、又甘泉樂、又含泉樂、嘉祥二年、開院行幸の時、伯光

〔樂考〕

壹越調

賀殿賀嘉通川

按するに、隋朝に河傳曲あり、煬帝下河を開れし時に作れる曲也、嘉祥二年、開院行幸の時、伯光季奏請して、賀殿を以て萬歲樂に代ふと云こと、著聞集に見えたり、然らば河傳賀殿字音同じきが故に、文字をあらためて、新殿を賀する樂をなせしなるべし、

〔執苑日涉四〕賀殿

壹越調曲有賀殿、蘇名類聚鈔曰、承蘇中遺唐判官藤原貞敏以琵琶傳此曲、一日貞敏受唐廉承武、然唐時樂府無有此目、照疑當是河傳、以國音同訛耳、西涼州作最涼州、康老子作小老子、越殿樂作越天樂、大酺樂作大補樂之類也、按碧溪漫志曰、水調非曲名、乃俗呼音調之異名、陸說云、水調河傳煬帝將幸江都時所製、聲韻悲切、帝樂之、蓋水調中河傳也、河傳唐詞存者二、其一屬南呂宮、凡前段平韻、後仄韻、其一乃今怨王孫曲、屬無射宮、以此知煬帝所制河傳、不傳已久、然歐陽永叔詞內河傳附越調、亦怨王孫曲、今世河傳乃仙呂調、皆非也、略下

〔教訓抄一〕賀殿

延長二年正月廿五日、太上法皇

多○字

奉賀天皇

冊算ノトキ、舞ヲ奏セシ内ニ、含泉樂四人舞、

殿異名也古老賀殿ノ別名ト申處、或目錄黃鐘調ノ内ニアリ、シカラバ別舞力不審ノコル可尋云々、

〔龍鳴抄一〕賀殿かて

てうしをふいて、とりのきうをみちきにす、かこを打べし、いくかへりとさだめす、まひのゆきたちをはるに隨ふべし、

破拍子、十四反すべし、たゞしいまの世三反する也、まひのたえたるが、するのてうの末二拍子を

〔倭名類聚抄曲調〕壹越調曲 壹弄樂下音同如耶

〔伊呂波字類抄伊人〕壹弄樂 イ ャ ロ ワ ャ

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 壹弄樂 以千呂字羅具 一名一隆樂又承天樂

〔樂考壹越調〕壹弄樂 又名承天樂

按するに、唐樂曲承天樂といふ二つあり、一つは高宗の時に所作、一つは玄宗の朝に所作、太常卿韋縉が作也といふ、

〔龍鳴抄一越調〕一弄樂うらろく

拍子十四、四反すべし、新樂このまひ拍家ならはすとかや、藥師寺にのりきよといひし三鼓うちまひければ、清貞もゑりてやあるらん、いまだたづねず、

〔仁智要錄壹越調〕壹弄樂 弄或作隆、拍子十可彈、四反、合拍子四十、終帖打三度拍子、中曲 明

暹橫笛譜云、急名承久樂、大戸清上作、

〔大日本史禮樂十四〕續敎訓抄引、醉鄉日月曰、承天樂、博士馬順等作、或云、武太后作、今無所考、按新

唐書、通典並云、高宗時、張文收作、景雲河清歌、名曰燕樂、分爲四部、其四曰承天舞、唐書又云、中宗時、大常卿韋縉制六曲、其一承天樂、然則爲清上所作者、恐非今姑從舊說、

〔敎訓抄壹越調〕壹弄樂 拍子十 又奏天樂云、又一隆樂、新樂

此樂者、大戸清上作之、舞者大戸眞繩作之仁明帝云々、或譜云、此舞ハ玉手則清之家ヲ可尋メト申

タレドモ、其子孫子、今侍ドモ不傳習云々、忠拍子アリ、有序ケレドモ、絶畢此破南宮說、自ニ加拍子時

〔倭名類聚抄曲調〕壹越調曲 賀殿古老傳云、承和遣唐判官藤原貞敏、以琵琶傳曲、林眞倉奉勅作此舞



帖舞也、又云、從第七返、打三度、拍子、終帖打三度、拍子、

貞保親王譜云、但須從六返、終加一拍子、而可打也、從七反、正拍子、三度、抑此曲別習、謂之金劍兩臂垂、

與兩臂垂、陳後王所作ナリ、大江國房說也、○中略

承和遣唐使舞生伴歸朝之間、此樂忘タリケレバ、又ツカハシテ、此朝ニハ習トハメタリ、

〔續教訓抄〕舞案譜、或人云、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタアリ、○中女舞ハ春鶯囀

十八 玉樹十二人

〔教訓抄〕舞番樣

無答舞 玉樹昔有別裝束、比世失了、有甲、中古諸肩袒、細著也、今世

〔續教訓抄〕並越調、玉樹後庭花、○中昔有別裝束、但今无之、仍用常裝束、中古細著、諸肩袒、著甲、今如常

舞、雖然又用細著事在之、可依時也、爲平立舞、答舞綾切、

〔舞樂要錄〕舞番

左玉樹○中 右綾切

同例 大法會

雲林院塔供養 應和三年三月十九日 左○中 玉樹○中 右○中 綾切

朝觀行幸

同○康 四年正月二日 左○中 玉樹○中 右○中 退宿德

〔教訓抄〕玉樹後庭花

治曆二年正月廿六日、宇治殿召光季、舞樂間事、御タヅチアリケル内、霓裳羽衣曲ハ、今ノ玉樹ノ中、別ノ舞ノ手ノアルヨシ、タシカニ光高勸申上タリキ、汝ハシレリヤ如何、此仰ニツキテ、ソコヲハラヒテ申上處ニ、シキリニ御威ニアヅカリテ罷出了云々、

らずと申されしに、宣旨云、管絃はさらにいみなし、人の心を自然に感せさする也、なげきある物はきけばなげく、よろこびあるものはきけばよろこぶ、人の心に玄たがふ物也、かくによるべからず、よりに貞觀二年六月十日、内教坊にたまはりて、成樂の、ちそうす、それによりてさらに世あしからず、玄かれは正月節會に是を奏す。

〔仁智要錄四〕玉樹後庭花

拍子十四可彈八反、但第二反以後每遍拍子十二、合拍子九十八、

從第七反打三度拍子、南宮橫笛譜云、但須從六反終加一拍子而可打也、從七反正打三度拍子、此則諸曲通例也、以下諸曲可准此可打、今世第八帖打三度拍子、略時彈二反、終帖上大鼓、舞出入用調子、中曲 新樂

〔雜秘別錄〕玉樹

つらのまひといひて、かすあまたたちてまうまいは、舞臺の左右にたちむかひてこそまうに、これは舞臺の南方にきたむきによこざまに、八人たちて八反をまうなり、心はたまのうへきとかきたり、木をすちやりてすぐにうへたるよしにこそ、一のものにはしのはし、二の物はひむがしのはし、三の物は又にし、四の物は又ひむがし、かくなかざまへ下らうしだいにたちて、八反があいだ、一反づゝ、たちかはりてまふなり、りやくする時は、二反一帖八帖をまふなり、四反にたちかはりて、のちの四反をもとのざせきにたちなをるなり、りやくする時には、たちかはる事なきにや、

〔教訓抄〕玉樹後庭花

有甲 近來不用之

中曲 新樂

有八帖

拍子各十二

一二三帖

如常

四帖

下手端渡切

六帖

本立所

平立舞也

以並立

初者

四帖

以端爲上、從六帖亦以中爲上、欲渡之時如此、以中爲上也、(朱書)略定ノ時ハ、必左右ノ端爲上秘事也、

一帖

拍子十四

初ニ序吹

二拍子アリ

加此定樂ニ成後

至八帖

拍子終帖

加三度拍子

略定之時

一八

玉樹後庭花伴侶之曲其聲俱存朕當爲公奏之知公必不悲矣

〔體源抄三下〕

〔玉樹後庭花略〕

〔中〕

又金釧兩臂垂略之略 又名一越波羅門

〔續教訓抄四〕

〔玉樹後庭花略〕

抑此金釧兩臂垂ニオイテハ各別ノ曲ト見及ブトイヘドモ堀河院ノ御位ノトキ粗此由緒ヲ聞

召シ及テ寛治二年ノ春ノ比光季ヲ召テ御タヅチアル則奏之申テ云ク彼裝束ニオイテハ先年ノ比ワヅカニ元興寺ノ寶藏ニ玉樹裝束ノ唐櫃トイフ銘候シ由粗承及トイヘドモ未ダ其眞僞ヲシラズ候旨陳申上ニヨツテ元興寺ヘ勅使左大辨大江匡房ヲ下サル寶藏ヲ開テ實檢セラルル處唐櫃ノ銘文ニ云玉樹金釧兩臂垂裝束二具納之ヨシカキノセラル處ナリ略 抑光季年來ノ不審ヲ披ガタメニ勅使左大辨匡房ノ許ニ行向テ名府ヲ捧テ玉樹金釧兩臂垂通名ノ子細尋申サレケルトコロニ答申サレテ云ク玉樹ト兩臂垂ト共ニ陳ノ後主所造ナリ而モ一曲タリ未其因縁ヲ知ラズト雖彼作者別人ニアラズ而兩臂垂曲未コレヲ見聞カズ但シ唐櫃ノ銘文尤詳ナリ予ガ不審同以開之然者今ニオイテハ玉樹金釧兩臂垂ト云ベキ歟就中舞ノ說ニツイテ別相傳アルヨシ今聞之仍此銘文ニ付トイヘドモ謹非據トイハンヤ加之仍彼唐櫃ヲ相具シテ上洛アルベシトイヘリ

〔龍鳴抄上〕

〔玉樹後庭花玉樹といふべし〕

拍子十四はじめ二拍子は序にすつぎのかへりは十二拍子この樂はむかしいみありきそのゆへは帝王この樂をこのみせさせ給きまかるほどによにえきれいをこりて人民百姓ほろびう

せきその時公卿せんぎありしにひとりの大臣この樂の故なりこれをながくとめらるべしとさだめられしかばながくとめられにき一兩代過て又帝王このがくいみじくおもしろかりけりとてまたこのませ給公卿いみありしかばとめられにし物也更に／＼さぶらふべか

仍今度有再興雖然依爲初度師家之輩許相勤度之由舊冬内々言上今日舞人二人於管方者音頭師家之面々役之舞首尾了甚有御感就中辻豐前守狛近任依爲上臈伴一人預勸賞叙正四位上且五人輩爲賞賜太刀馬代銀十兩自實長朝臣被沙汰之中實長朝臣賜紫組懸緒大曲再興之賞也

〔枕草子九〕まらべは

うぐひすのさへづりといふまらべ

〔倭名類聚抄四調〕壹越曲 玉樹後庭花

〔教訓抄三〕玉樹後庭花中 又金釵兩臂垂謂之一名玉樹曲子一名陳宮怨見許渾詩

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 玉樹後庭花和尋常時後庭花三字一名玉樹曲子又金釵兩臂垂又霓裳羽衣又壹越婆羅

門

按文獻通考等書金釵兩臂垂霓裳羽衣玉樹後庭花各別曲也本邦或爲同曲者想當初金釵焉雲之兩曲傳舞體耳而不傳聲曲乎因舞被兩曲則舞玉樹因之遂誤爲同曲者乎此例間亦有焉

〔通典百四十五〕雜歌曲

玉樹後庭花堂堂黃鸝留金釵兩臂垂並陳後主所造恒與宮女學士及朝臣相唱和爲詩太樂令何胥採其尤輕艷者以爲此曲

〔唐會要三十二〕雅樂

武德九年正月十日始命太常少卿祖孝孫考正雅樂至貞觀二年六月十日樂成奏之太宗謂侍臣曰禮樂之作蓋聖人緣物設教以爲撙節治之隆替豈此之由御史大夫杜淹對曰前代興亡實由於樂陳之將亡也爲玉樹後庭花齊之將亡也而爲伶侶曲行路聞之莫不悲泣所謂亡國之音也以是觀之蓋樂之由也太宗曰不然夫音聲感人自然之道也故歡者聞之則悅憂者聽之則悲悲悅之情在於人心非由樂也將亡之政其民必苦然苦心所感故聞之則悲耳豈樂聲哀怨能使悅者悲乎今



〔續教訓抄宣越調〕春鶯囀

永治二年元康治三月三日、平等院一切經會ナリ、此日太上法皇鳥ノ御幸アリ、願主禪殿下

原思

實舞人光時ヲ召テ、仰下サレテ云ク、年齡已ニ高シ、後會何レノ時ヲカ期ベキ、然バ今日ノ舞ニオイテハ、丁寧ヲ存ベキナリト云々、光時申云、舞ノ體ハ善惡ヲ申ニアタハズ、思モヨリ候マジケレバ、舞ノ切ヲ不殺シテ可奏ト申畢、樂屋ニ歸テ行則ニ對テ云ク、今日舞其切ヲ略スベカラザルヨシ申上テ、今春鶯囀急聲ニ反アリ、行高不舞之、行則同前歟、然バ行則舞ニ立ベカラザル歟、將又第二切ヲ略ベキ歟、于時則助云ク、急聲ニ反ノ有無尙異論ナリ、舞切ヲ略ベカラザルヨシ申上テ、今日不奏之者、異論ノ語ニ引レン歟、必可被奏也ト云々、爰ニ行則舞ニ立ベカラザルヨシ申トイヘドモ、依御定立舞、第二切ニ至テ舞臺ノ上居畢云々、

〔古今著聞集六管絃歌舞〕

康治元年三月四日、仁和寺の一切經會に、兩院鳥羽御幸有けるに、入道殿

下藤原參らせ給けり、春鶯囀を舞ける時、行則申けるは、光時颯踏急聲ニ反を舞、行則一反を舞、

第二之切絶たり、入道殿仰られけるは、第二反のたび則舞べからず、是によりて、第二反の時ひ

ざまづきて候けり、京極大相國宗輔其時大納言にて候はれけるが申されける、康和御賀に、光時が曾祖父光季第二反たゆるよし申侍き、いま光時二反をまふいかゞ、もし光季秘藏せけるにや、宇治左府御記には、伴の卿もとより光季をにくみていはれけるにやとぞ、かき給て侍るなる、

〔玉海〕安元二年二月廿一日丁酉、此日御賀後白河試樂也、中

左春鶯囀

舞人插筍不租、仁平租之、

立様同方歲樂、序一遍、颯踏一遍、入破三遍、鳥聲一遍、急聲一遍、

〔教言卿記〕應永十六年五月六日戊寅、禁裏御懺法講初日、壹越調、中

天長寶壽樂、颯踏同入破、下

〔難波宗建卿記〕享保十七年正月十八日、今日春鶯囀久中絶、再興之事度々雖有仰、及數年不能再興、去々年此事再應被仰出、至今年必可再興、若於背仰者、樂所可及難之由也、實長朝臣奉之、既及御請、

狛光時記云ク、去永久三年二月十二日、白河殿朝親行幸ノ日、春鶯囀アリ、舞人行高左一者急聲一帖ノヨシ、笛吹正清ニ約束シテ樂屋ヨリ出テ、而急聲ニ至テ、正清第二反ヲ吹加ユルキザミ、行高庭ニ居テ舞ヲ奏スルニアタハズ、爰ニ光則光時等ハ、違亂ナクコレヲ舞上下ノ諸人耳目ヲ驚ス、行高誠ニ當坐ノ面目ヲウシナフ、其恨ヲナグサメガタクシテ、樂屋ニ入テ後、正清太コ打能元等ヲ勸發セシメテ云ク、此急聲ニオイテハ二反一反ノ相論未詳、仍一反ノヨシ其約束ヲカウフリナガラ、自由ノ違約尤不審也、但樂人自トシテ舞人ノ教訓ニ相叶ハザルテウ樂所第一ノ違例ナリ、思其意趣何事哉、正清答申云、樂興アル時ハ約諾ヲ背テ吹加之、來落不易ノ例ナリ、就中光季存生之時、此急聲ニオイテハ二反ノヨシ、慥ニ其習ヲ存ス、全ク樂人ノ新儀不審ニアラズ、而其證據貴賤皆シロシメス所也、爰ニ光則難申テ云、故光季ニオイテハ、尙モ舞曲重代ノ指南トシテ、廻雪相傳ノ家風ヲマナブ所ノ傳受、祖跡才藝殊ニ群ニ拔タリ、此道ニ私ナシ、就中正流未流兩家相承、此急聲一曲ニカギラズ、雲泥懸隔ノ由緒アリ、又彼氏ノ淺深同日ノ論ニ不及、凡道ノ習、嫡ト庶トノ勝劣又相異ナリ、而一具ノ耻辱ヲノガレンタメニ、第二反猶疑說ニオヨブ條、已ニ万代ノ嘲哂ヲマチク、其身ノ瑕瑾トイフベキ歟、時ニ行高閉口、凡相論ノ間、上下諸人コレヲキク仍當家ノタメ子孫ノ爲、シルシオクトコロ如此シ、

〔台記〕康治元年三月四日丁酉一切經會如恒例、今曉入道殿、○藤原忠實尼御前、菖蒲丸等、渡御棧敷、已刻兩院臨幸、○鳥羽、崇徳中時今日舞進退優美、万人屬目、欲舞春鶯囀、其間行則申云、光時童舞、急聲二反、行則舞一反、第二切絶之由所承也者、入道殿仰云、第二反度行則不可舞、因冥加、第二反時跪候、權大納言宗輔卿長祿竹道云、康和御賀、故光季、光時曾祖第二反給了由所申也、今光時、舞二反如何、答、光季秘藏歟、原賴長案此事、件卿、自本願室、○願室本作願惡光時、今所云、若詐貶光時、歟、胡飲酒間、清信多失錯、可謂恥、今日事、具次第、因委不記、

〔舞樂要錄上〕同○舞例 大法會

雲林院塔供養 歷和三年三月十九日

左○中 春鶯囀 右○中 古鳥蘇

興福寺塔供養 承曆二年正月廿七日

左○中 春鶯囀 右○中 新鳥蘇

朝覲行幸

同治○寬五年正月十三日 左○中 春鶯囀 右○中 退宿德

〔續日本後紀十五〕承和十二年正月乙卯是日外從五位下尾張連演主於龍尾道上舞和風長壽樂觀

者以千數初謂飴背之老不能起居及子垂袖赴曲宛如少年四座僉曰近代未有如此者演主本是伶人也時年一百十三自作此舞上表請舞長壽樂表中載和歌其詞曰那那都義乃美與爾萬和倍留毛毛知萬利止遠乃於支奈能萬飛多天萬川流丁巳天皇召尾張連演主於清涼殿前令舞長壽樂舞畢演主即奏和歌曰於岐那度天和飛夜波遠良無久左母支毛散可由留登岐爾伊天氏萬毗天牟天皇賞歎左右垂淚賜御衣一襲令罷退

〔古今著聞集六〕天曆元年正月廿三日內宴を行はれけるに重明親王勅を承りて琴を引給

けり一絃ゆるかりければ右兵衛佐清正に仰てはらせられけり先春鶯囀を奏し後に席田をと

なふ

〔源氏物語花宴〕きさらぎのはつかあまりなんでんの櫻のえんせさせ給

らにもいはすとへのさせ給へりやうく入日になる程にはるのうぐひすさへづるといふ

舞いとおもしろくみゆるに源氏の御紅葉の賀のをりおぼし出られて春宮かざしたまはせて

せちにせめのたまはするにのがれがたくてたちてのどかに袖かへすところをひとをれ氣色

〔續教訓抄四〕春鶯囀

略下

鳥聲急聲各彈一反舞入時笛吹上調子、大曲 新樂 南宮橫笛譜云昔善舞此曲者有左大臣源信朝臣及巨勢式人等仍承和御時勅信大臣以此曲令傳習于成康親王合于御笛舞於清涼殿前見之者無不感泣、

〔教訓抄抄六調〕春鶯囀 楓路 拍子十六 謂中序也

是樂拍子忠拍子トモニ曳物ニ用キグニ侍ハ、イヅレニテモ人ノセムカタニシタガフベシ、本調子ニハ拍子ハクハヘ侍子ドモ、或講體ノ事ニ打物ノアラバ可加拍子、三度拍子可上也、

同入破 拍子十六 謂ル破也

是モ樂拍子忠拍子トモニ候也、加拍子畢リ六羯鼓ノ者ニハナベテノ事ナレドモ、古老說云、講演等ニ打物アラバ如林歌上三度拍子、其上堀河院御時、六羯鼓ノ者ニ拍子上グル事ヤアルト、諸道ニ御尋アリシニ、狛光季奏シテ云、中古無雙ノ管絃者侍キ、南無阿彌陀佛ヲ樂ニ作合テ、謂六拍子也其說如三度拍子、又古老云、題解ノ返立口六拍子也、即加拍子ノ時三度拍子、入破等樂更ニカハルベカラズ候由申ス、頗有御感、於自今以後者、尤可加三度拍子、被宣下タリケレバ、當世ニモ加拍子、人ソシリヲナスベカラズ、

〔續教訓抄抄案譜〕或人云ク、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルナリ、略中女舞ハ春鶯囀十人下

〔教訓抄抄七〕舞番樣

春鶯囀有甲、諸府盟、天長寶壽樂、退宿德有面、幸子、合肘、退走禿ト云、

〔樂家錄抄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞 春鶯囀四人常裝束、甲異、體源抄曰、著、袍、左右袖、

〔樂家錄抄三十六〕壹越調之曲

春鶯囀四箇大曲中也 番舞新鳥蘇、或古鳥蘇、退走禿、已上大曲



白明達寫之爲春鶯囀亦爲舞曲據此二書蓋誤、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>越調〕春鶯囀

てうしを吹てゆせいをしてまひの出るなり、いくかへりといふことなし、まひのたちとゞまるにまたがふべし、よつの大曲のうちにゆせいあることは、皇帝とこれと也、仍て大田麿がつたへの大鼓うつべしといふ先達もありき、但譜もさもあるさず、口傳にもなし、さうちいふもあしくもなし、さいたる文もなしといふばかり也、序拍子十六、二反すべしとあるしたり、たゞしこのよ一反をす、まひの絶たるなり、

颯踏拍子十六、二反すべし、かつつきのきれをよの人喚頭といふ、たゞし喚頭とはいふべからず、はじめのこと葉をふたことばすつるなり、そのゆへは、はじめのひやうしのかこなゝつにあたるなり、よりてつぎのをいつゝにあてんれうに、ことばをすつる也、これならずはじめのことばすつるがくあまたあり、

入破拍子十六、四反すべし、むつかこの物也、

鳥聲拍子十六、二反すべし、序にする也、たゞしこのよ一反す、

急聲拍子十六、二反すべし、たゞしこのよ一反す、ふたつのやうあり、二反ながらまひありといふ、又一反はたえたりといふ、たゞし光則大夫將監將曹らありと申す、よてたえぬことなり、鳥聲につゞきてすべし、皇帝の五六帖の如し、あはひすこしのふべし、まひのいるとき上調子、四の大曲とは是をいふ、まひひとつは蘇合なり、

〔仁智要錄<sup>四</sup>越調〕春鶯囀

一名天長寶壽樂

遊聲無拍子、序拍子十六、可彈一反、長秋卿橫笛

譜云、可吹二反、今吹一反、颯踏拍子十六、可彈二反、入破鳥聲各拍子十六、可彈四反、急聲可彈二反、即以入破更彈合拍子二百廿四、今世鳥聲拍子十六、彈二反、餘如上注、略時颯踏彈一反、入破彈兩三反、

堀河院宸筆御八講長治元年八月一日被<sub>レ</sub>始行、同七日結願、○中略 第六日 五卷日 左圍亂旋○中 右新鳥蘇

朝親行幸

嘉保二年正月二日 左○中 圍亂旋○中 右○中 古鳥蘇

〔倭名類聚抄四〕壹越調曲 春鶯囀大曲

〔類聚治要六〕春鶯囀○中 一名天長實壽樂、亦號梅苑春鶯囀、

〔續教訓抄四〕春鶯囀○中 會要曰、天長實壽春鶯囀、新撰龍吟抄曰、天長實壽樂、或譜曰、天壽樂、

或曰天長實樂、

〔樂家錄二十八〕中華曲

壹越調 春鶯囀 志由牟阿不傳字 一名和風長壽樂、天長實壽樂、又天長最壽樂、又天壽樂、三產別名、凡此中以一名爲二曲之名多、胡飲酒一名宴飲樂、亦爲飲酒樂之別名、秋風樂一名弄春樂、亦爲和風樂別名、八仙都志共載、雖舞、蓋同名異物者乎、抑亦誤傳爲二曲之名乎、今不能考之、隨古記耳、

〔教訓抄二〕春鶯囀

此曲モモロコシ舞也、作者未勘出所ニ、或書云、合管青云人造之、大國ノ法ニテ春宮ノ立給日ハ、春宮殿大樂管ニ此曲奏スレバ、必ズ鶯ト云鳥來アツマリテ一日囀ラス、コノ朝ニモサルタメシ侍ル、與福寺僧圓憲得業ト申ケル人ハ、僧ノ身ナリケレドモ、管絃ノ道ニ無雙ナリケレバ、天下ニユルサレタリケリ、春朝ニハ住房淨明院ノマガキノ竹ニ向テ、此曲ヲ吹給ケレバ、ウグヒス來リアツマリテ、笛音トオナジキ音ニ囀侍ケル、マシテカラ國ノコトハ、サコソハ侍ケメト、オモシロク侍也云々、○中 此曲古記云、名、天長實壽樂ト云、

〔續教訓抄四〕春鶯囀

抑此曲ハ、唐太宗皇帝ノ御製作ナリ、

〔大日本史禮樂十四〕按續教訓抄、體源抄云、唐太宗造然教坊記云、唐高宗曉聲律、嘗聞鶯聲、命樂工

〔龍鳴抄一<sup>上</sup>越調〕團亂旋

てうしにまひはいづるなり

序三帖なり、一帖は序にす、二三帖はかくにす、たゞし末五拍子を序にす、おのゝ拍子十六、入破拍子十六、すゑ七拍子序にす、四反すべし、たゞしきれゝにす、

颯踏いふなりと拍子十六、四反すべし、序にする也、つゝきすべし、ふたつのやうあり、

急聲といふなりと七反すべし、入破のやうにきれゝにするなり、樂のことはも入破おなじ事也、たゞし吹いてひとあなかはるばかり也、舞のいるとき上調子なり、きぬの装束はをなじ事なれど、かふとはかはる、これ大曲也、

〔仁智要錄四<sup>四</sup>越調〕團亂旋

序三帖、拍子各十六、破拍子十六、可彈四反、颯踏拍子十六、可彈二反、急聲可彈七反、即以破更彈合拍子二百五十六、今世入破彈二反、餘如上註、略時序彈二帖、入破颯踏各彈一反、急聲彈二反、舞出入用調子、大曲新樂、南宮橫笛譜云、昔善舞此曲有林真倉大戸貞繩等、

〔體源抄十一<sup>下</sup>〕舞曲古今相違事

古團亂旋入破序吹之、舞人居返吹テ、樂吹ニ成テ舞人立、毎遍如此也、今ハ居事無之、

〔教訓抄七〕舞番様

團亂旋<sup>有</sup>甲<sup>諸</sup>肩祖<sup>有</sup>古鳥蘇<sup>有</sup>面、但近來不用之、

〔樂家錄三十七〕左右舞及人數裝束

左舞團亂旋<sup>有</sup>四人<sup>常</sup>裝束<sup>東</sup>袍<sup>甲</sup>異<sup>袖</sup>源抄曰、和

〔續教訓抄四<sup>四</sup>越調〕團亂旋<sup>略</sup>中答舞古鳥蘇有後參、

〔舞樂要錄上〕同<sup>舞</sup>例<sup>八</sup>講

子破六帖音通說宗賢ガ弟子舞人ハ一者光重ナリ其トキ二者ニテ具房ガ侍シガ東屋ニテ誰人

ノ今日皇帝ヲバ舞モ吹モスベク候ゾト孝道比巴利秋宣侍クルニ向テ云ク殿原彈モ吹モ笙吹

セ玉ベシ則房流ノ輩ハ舞ベシトノ、シリ侍クレドモ一者光重宣笛一者宗賢一切ニモノモ申サ

デコソ侍リクレ二條院ノ舞御覽時父元賢フカズシテヤミニシ事ヲトガメバイハムト存タル

ナリ一道ハカヤウニサウスベキナリサリナガラコトナリトグラレ侍三帖光重シラザル事ア

ラバカサン料ニ初三拍子ハ則房已下ノ舞ヲマイ出ズシテ見ニ正體ナキ事ニゾハベリケル

〔倭名類聚抄曲四調〕壹越調曲 團亂旋大曲

〔伊呂波字類抄止人〕團亂旋曲トワンテン

〔樂家錄二十八法〕中華曲

壹越調 團亂旋止羅傳一本團蘭傳一名后帝團亂旋

〔大日本史樂十四〕按通考文獻唐教坊樂軟舞中有團亂旋即是也

〔教訓抄二〕團亂旋

此曲モカラ國ノマヒニテ侍ナリ作者未勘之或笛譜曰ク大戸ノ其繩作ノ曲古人語ニ云其繩ハ

此朝ノ人也此曲ハ唐ノ舞ナリ或書ニ云后帝團亂旋以之推之皇帝ハ玄宗造之當曲ハ后宮ノ造

ルニヤ此朝ヘ渡ルコトモ皇帝ト一度ニワタルナリ不審ナキニアラズタヅヌベシ

〔體源抄三上〕團亂旋

抑此曲ハ唐ノ太宗皇帝ノ后宮ノ御製作トイヘリ但后宮ノ字ヲモテ推スルニ則天皇后ノ御作

歟中或笛譜ニ云フ大戸其繩作之ト云々但此說ニオイテハ一定ヒガコトナリ唐舞ノ條子細

ナキモノ也若舞ノ手ナド少々ツクリカヘタル歟且唐朝ヨリ傳來ノ舞樂其手ヲヤワラゲタル

事此一曲ニカギラズ其證多者也



〔續教訓抄〕四皇帝破陣樂

凡當曲一具アル事ハ先例希ナルモノ也、應保元年三月十六日、九條殿實錄舞御覽當曲アリ、序卅拍子、破六帖、文永七年十月四日、法皇宸筆御經供養習禮殿有之、其日當曲一具アリ、序卅拍子、破六帖ナリ、舞人五人、眞葛朝葛、則氏繁眞、定繼、樂人堂上皇后宮大夫公藤土御門大納言通賴、四條二位房名三、上笙地下近秋、政秋、重秋、筆筆、季茂、季俊、守保、此守保ハ先祖ヨリシテ傳ヘズトイヘドモ、親父光葛ユルス間吹之、笛堂上花山院大納言雅長、同三位中將家長、地下景貞、仲賢、景好、羯鼓秋兼、大鼓實重、琵琶春宮大夫師繼弟時、爰ニ序、大鼓卅一打之、又破五帖ノ大コ廿一打之、是失錯ナリ、常ニハ序初半帖十六拍子、破一二五六帖ヲ舞ナリ、尤略ノ時序半帖、破一二五帖舞也、又一二帖ヲ舞、又云此內以三四帖爲秘事、

〔教訓抄〕二皇帝破陣樂

大神元賢ト申、笛吹侍キ、承安元年四月十八日、二條院舞御覽ノアリケルニ、今日皇帝ヲ御ランアルベキヨシ仰下タリケルニ、件元賢皇帝吹ニテ唯一人候ケルガ、チカラヲヨバズ候、ハカバカシクモヲボヘズ候ヨシ申上ケルヲ、笙笛吹豐原時秋ソバワツキヲ、イカニワキミハ口惜事ヲバ申スゾ、時秋ガ笙付ヲ吹ベキヨシ返々申ケレドモ、チカラヲヨバヌヨシヲ申テ、目モミアゲズシテ侍ケレバ、舞人樂人等、我が家ノ皇帝ハ今日ウセスルヨシ、申ノハシリケレドモ、閉口シタゾアリケル、上ニモ、口惜事ニヲボシメシナガラ、玉樹ニカヘラレテ、公私面目ヲ失タリ、家ノナガキキズトゾ申侍ケル、サテ同二年ノ春ノ比、辻判官則近家ニ來テ、ナク、昔ノ契ヲ申ケレバ、惟季カノ譜ヲ取出シテ、兩三度合、コノ手ヲツカチテヨロコビテカヘリケルト被書置レテ侍ケル也、其ノチノ常樂會ニモクダリケル、カヤウノ事ヲミテ人ハ心ツクベキナリ、建久九年ノ冬ノ比、仁和寺ノ舍利會ニ皇帝アリ、御室ノ御愛弟ニ金剛ト申ス童ニ、笛合テキコシメスベキユヘ也、序十六拍

トシテ當曲ノ秘事ヲ御タツチアリケルニ、兩人ノ申狀イサ、カモタガフコトナカリケレバ、御  
威シキリニアリテ、二道ノ高名コノコトニアリ、此異説ハ非勅定不可有披露ノ由奉勅令退出了、  
〔古今著聞集管絃歌舞〕堀河院御時、節會につねよりもいそぎ入御有けるを、人々あやしう思ひけ  
る程に、御膳宿のかたにて、立樂の時になりて、皇帝を吹出させおはしたりけり、めづらしくいみ  
じかりける事也、彼右府源のまゐるしをかれたるとかや、尋ねべし、

〔續古事談五〕

〔元正ト云シ樂人ハ、横笛ノ上手也、ソレガ童ニテ八幡ニアリケルヲ、イミジキ天性

ナルニヨリテ、八幡別當賴清樂人正清ヲヨビテ、笛ヲシフベキヨシ云ヒケレバ、子ニヲシフベシ

トテ、キカザリケレバ、奈良ノ樂人惟季ヲヨビテ、此童ニ笛ヲシヘヨト云ヒケレバ、我子孫ナシ、心

ニ入テナラハバ、秘スベカラズトヲシヘケリ、皇帝ナラヒケル時、賴清米百五十石トラセケリ、

惟季コノ樂ヲ正近ニナラヒケル時、山階寺ノ眞範トラセタリケル例也、正清惟季トモニ正近ガ

弟子ナレドモ、スコシタガヒテ、タガヒニウケストコロアリケリ、正清ガイヒケルハ、カシコキ弟

子オロカナル子ニハヲヨブベカラズ、惟季イヒケル、正清ムマレヌサキニヲシヘン、子アルベシ

ト、カチテシランヤトゾイヒケル、正近ハ樂所ノアヅカリ賴義ガ弟子也、ヨリヨシハ左右ナキ物

也、コレスエホドナクウセニケレバ、皇帝、團亂旋此八幡ノ童ツタヘタルナリ、コノ元正ガ子ニ元

方ト云モノアリキ、父ニヲヨブベカラズ、樂モハカトシクオボエザリシニヤ、内ノ舞御覽ノ時、

皇帝エフカジト申テ、樂人ドモニシラレシモノナリ、

〔十訓抄十一〕

〔八幡の樂人元正、當宮領備中國吉河保二條御

〕に下向して上洛の間、種生の泊にて心

神達亂如亡片發雪のごとく變奇異の思をなして巫女に占ふ所に、吉備宮託宣し給て云、適當國  
に下向、其曲をきかざるに由崇りをなす所也、忽に押歸て彼社に參て、皇帝以下の秘曲を吹聞、  
白髮忽にもとのごとし、尤道の眉目といふべし、

皇帝者必御卽位ノ樂也、平人ノ爲ニハ不吹之、皆口傳在之、

〔續敎訓抄<sup>四</sup>〕宣越調 皇帝破陣樂

凡大國ノ習、亂ヲヲサメ王業ヲ陳ズルトキ、歌舞ノ曲ヲ作テ帝位ニ登テ始テ奏之、此舞則其隨一ナリ、唐ノ玄宗皇帝卽位ノトキ作之云々、而禮記樂記等ノ心ヲ案ズルニ、武舞ハ必戟ヲトルベシ、當曲ハ戟ヲトラザルニ、破陣樂ト稱スル如何、但舞譜云、破ノ四帖太刀拔手アリト云々、隨テ又唐舞ノ繪様ニハ、帶劔ニテ舞之、然バ武舞ノ條ハ子細アルベカラザルコト歟、但太刀拔手何比ヨリ舞失フカ、當世ノ舞ノ手サルベシトモオボヘズ、又タシカニミヘタルモノモナシ、然而繪本トイヒ、舞譜トモニシルシトムルウヘハ、破陣樂ノ字、其謂レナキニアラザルカ、

〔續敎訓抄<sup>舞案譜</sup>〕或人云、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタアリ、○中 女舞ハ、○中 皇

帝、六人

〔敎訓抄<sup>七</sup>〕舞番様

皇帝<sup>在甲、背有劍、諸</sup>新鳥蘇<sup>在面甲、合肘</sup>

〔樂家錄<sup>三十七</sup>〕左右舞及人數裝束

左舞 皇帝<sup>四人</sup>常裝束袍甲異<sup>體源抄曰、袍</sup>

〔續敎訓抄<sup>四</sup>〕宣越調 皇帝破陣樂、○中 答舞新鳥蘇有後參、又號蘇利古

〔舞樂要錄<sup>上</sup>〕同番 舞例 相撲節

延長六年 拔出 同月○七廿八日 左皇帝<sup>略</sup>○中 右新鳥蘇

同○平 五年 拔出 同月○七廿九日 左皇帝<sup>略</sup>○中 右古鳥蘇

〔敎訓抄<sup>二</sup>〕皇帝破陣樂

抑應德ノ春ノ比、白川院ヘ舞人光季、笛吹惟季ヲ別ノ所ニメシスヘテ、權中納言藤原宗俊ヲ勅使

拍子、准餘曲不相似、今問案内、昔尾張演主傳云、此舞序初卅拍子也、而遣唐使時、舞生還、本國時忘八拍子也、仍除奇十拍子、今遺半帖只十拍子、此事雖不確說、古老所傳也、又昔善傑此曲者、有中務大輔清原瀧雄、造酒正高階黑雄、命婦石川色子等、

〔教訓抄二〕皇帝破陣樂 有甲 大曲 新樂 序一帖 拍子三十 破六帖 拍子各二十

遊聲一帖、無拍子舞ノ出笛トス、返吹處有二說、ウチマカセテハ口ヘカヘルナリ、抑和爾部大田麿

ガツタヘニ、舞人立定ル時、打大鼓一拍子、有口傳尤爲秘事

序一帖、有三、半帖、初半帖、拍子十六、後半帖、拍子十、此家ニ習フ所ハ如此、而外從五位

下尾張連演主傳云、コノ舞ノ序ハジメハ四十拍子ナリ、シカルヲ遣唐時、舞生還、本國時忘、未八拍

子タメシニヨリテ、承和御時、仁明諸葛中納言奉勅、序一帖、拍子三十、以十六拍子爲半帖、定了、此序

ニ小部氏、大神氏ニ相違所アリ、第二ノ大鼓拍子ノ内、譜ヲハナレテヲトシテ吹ナリ、小部ノ落句

ト是ヲ云、舞ニハサシタタガフ事ハナクレドモ、コジツノ侍ナリ、又初半帖、十六拍子舞時モ乃至

廿拍子舞時モ三十拍子、終ノ手ニ拍子舞ヲトマルナリ、コレハユ、シキ秘事ニテ侍ナリ、ウチ

マカセテノ舞人ハシラヌ事ナリ、ヨクノ秘スベシ、

破六帖、拍子各二十、或云入破、切之吹之帖、一二三四帖末、吹、五六

舞人ノ入時上調子ヲ吹、偏中守源ノ政長ト云ケル人ノ說ニハ、出入トモニ遊聲ヲ吹ケル、今世ニ

ハモチキズ、

〔體源抄十一下〕舞曲古今相違事

古皇帝ハ羅裝束、及樂末至第六帖居也、今ハ不居、又唐輪ニハ帶劔ニテ舞之、今不帶劔、又破五帖樂

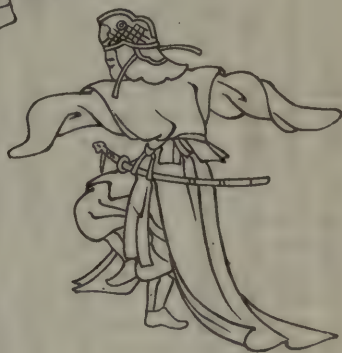
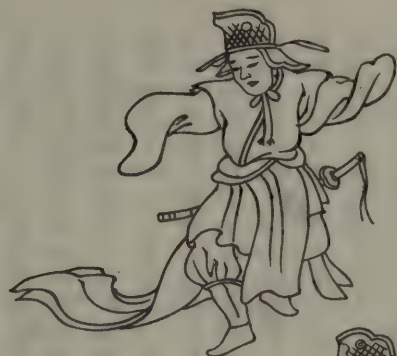
吹ニ用之、今ハ序吹ニテ又入時不用遊聲、吹上調子、

〔體源抄十二上〕一破陣曲事



〔信西入道古樂圖〕

皇帝破陣樂



胡飲酒



之、垂線爲髮、畫狹皮帽、舞蹈姿制、猶作羌胡狀者是也。

〔龍鳴抄上一越調〕皇帝破陣樂いふべしと

まづてうしをふいて、まひのいでんとする時ゆせいふく、いくかへりといふことなし、まひのゆきたちをはるにはつべし、大田鷹がつたへに、まいのとゞまるときに、たいこひとつをうつ、

序拍子三十、十六拍子の、ちを半帖といふ、もとは四十拍子なり、たうにつかはしたりしまひの師、この國へかへりし時、八拍子わすれにき、よりにて十拍子をすてたる也、四十拍子の時は、廿拍子の、ちを半帖とせし也、いま三十拍子なる時、諸葛中納言と申ける人、十四拍子を半帖とさだめられたるなり、もろ／＼の樂の半帖はなからをいふなり、是はまからず、このゆへにかくある也、破六帖

一帖二帖三帖四帖はがくにす、たゞし一二帖のするは三拍子を序にす、三四の帖のころには四拍子を序にす、是を秘するなり、又おほやうはむつかこの物也、されども八拍子にあたる所もあるなり、また四ひやうしにあたるところも有なり、これを大曲拍子といふべし、五六帖は序にする也、ふたきれをつけてするなり、たゞしふたきれが間をば、たゞすこしの程あるべし、拍子六帖ながら廿拍子也、舞のいる時は上調子を吹べし、まひのまやうぞくことにかはる事也、これを大曲といふなり、

〔仁智要錄四越調〕皇帝破陣樂

遊聲一帖無拍子、又度數無定、舞人行立了彈止、他曲遊聲准、此可

知序一帖拍子卅、但件序本卅拍子也、于時半帖拍子廿、而除奇十拍子之後、以十四拍子爲半帖、是承和御時、與諸葛中納言所被定也、見類聚等譜○本書頭書曰、類聚等譜者、破六帖拍子各廿、合拍子百

五十、略時序彈廿拍子、若十六拍子、破不彈三四兩帖、舞入時吹調子、類聚等譜備中守源政長說、舞了將入時又吹遊聲、但無末拍子、大曲新樂、南宮橫笛譜云、今案序半帖拍子必可有廿、而只有十

胡子○中 壹團橋○中 一金樂○中 一弄樂○中 承和樂○中 廻坏樂○中 酒清子○中

武德樂○中 陵王○中 胡飲酒○中 澀河鳥○中 安樂鹽○中 一德鹽○中 最涼州○中

略 安摩

〔仁智要錄〕<sup>四</sup>壹越調曲

皇帝破陣樂 團亂施 春鸞嘯 玉樹後庭花 賀殿 鳥 廻坏樂 胡飲酒 河曲子 北庭樂

韶應樂 壹弄樂 溢金樂 承和樂 河水樂 菩薩 酒胡子 酒清司 飲酒樂 壹團橋

武德樂

〔夜鶴庭訓抄〕樂名等

壹越調<sup>廿三</sup> 皇帝破陣樂 團亂旋 春鸞嘯 天壽樂 蘇羅密 厭磨賦 玉樹 廻坏樂

古詠詩 梁州 韶應樂 賀殿 胡飲酒 壹弄樂 酒胡子 北庭樂 承和樂 承果樂 壹團

橋 河水樂 菩薩 迴陵頻 武德樂 十天樂

〔倭名類聚抄〕<sup>四</sup>壹越調曲 皇帝破陣樂<sup>大曲古老傳云、中務大輔清原</sup>

〔樂家錄〕<sup>二十八</sup>中華曲

壹越調 皇帝破陣樂<sup>和字太以波千辛羅具帝陣二</sup> 一名武德太平樂又安樂太平樂

〔續教訓抄〕<sup>四</sup>壹越調 皇帝破陣樂<sup>字潤尋常略破陣樂之三</sup> 破陣樂字常不呼之亦名武德太平樂又名安樂太平樂

〔教訓抄〕<sup>二</sup>皇帝破陣樂

此曲ハ大唐玄宗皇帝ト申ス御門ノ國ヲタイラゲ給テ、即位ノ時令作給タリト申傳タリ、此朝ヘ誰人ノ渡シタリト云事タシカナラズ可尋、栗田道麻呂渡破陣曲云、然者<sup>漢書</sup>漢書

〔大日本史〕<sup>禮樂十四</sup>按舊唐書云、高祖因隋舊制用九部樂、其後分爲立坐二部、今立部伎有安樂太平樂等八部、安樂者後周武帝平齊所作也、周世謂之城舞、舞者八十人、刻木爲面、狗喙獸耳、以金飾

古事類苑

樂舞部六

唐樂樂曲上

壹越調樂曲

唐樂ハ支那樂ニシテ、支那ヨリ我國ニ傳ヘタル樂ヲ云フ、而シテ林邑樂又ハ我國ニ於テ擬作セル樂モ、此樂調ヲ用キタルモノハ、此樂中ニ收メタリ、唐樂ニハ壹越調以下ノ十二曲調備ハレリ、高麗樂ニ對シテ左樂又ハ左方樂ト稱セリ、猶ホ樂舞總載篇ヲ參看スベシ、

〔倭名類聚抄〕

四調壹越調曲

皇帝破陣樂

○大曲

團亂旋曲

春鷲嘯曲

玉樹後庭花

樂

弄音如郎、賀殿

○中胡飲酒

河水樂

溢金樂

○和樂

韻應樂

廻杯樂

北庭樂

酒胡

子云辭

承和樂

壹團樂

酒淨子

雙阜麗

歌曲子

宴飲樂

○酒樂

天壽樂

厥磨賦

蘇羅密 古詠詩

〔拾芥抄〕

上末壹越調

皇帝破陣樂

團亂旋

春庭樂

○殿本春

玉樹後庭花

賀殿

鳥

廻杯樂

○舞無

胡飲酒

北庭樂

詔應樂

壹弄樂

溢金樂

承和樂

河水樂

○舞無

菩薩

酒胡子

○舞無

酒清司

飲酒樂

壹團樂

〔龍鳴抄〕

上越調曲

皇帝破陣樂

○中

團亂旋

○中

春鷲嘯

○中

玉樹後庭花

○中

賀殿

○中

菩薩

○中

迦陵

類

○中

十天樂

○中

弄槍

○中

詔應樂

○中

河水樂

○中

河曲子

○中

北亭樂





たんこふしきとふんで、あふぎながしをうたひすまし、まん玄ゆが花の袂へ頼朝のかりぎぬの  
御袖、まひかさね／＼二三ど四五どまはせ給へば、風もふかぬに大みやのたまのとも、きりきり  
はつとひらき、八まんも御なふぞうあるときこへける、さるほどに八百八つのみすだれの、さち  
やうもさゝめいて、きせんくん玄ゆを返しける。○下

らん、ゆめにもみやこ人こそめでたや、御代にはいつの國、うらゑまがたまてばこゝあけてくやしきはこね山、かまくら山をきて見れば、つるがをかとや申らん、鶴は千年のめいてう、松は千とせのめいばくめでたし、とうたふたり、二番はきせ川のかめづる、ゑばりはぎをうたふたり、いせのはまをぎなにはのあし、かまくら山やむさしの野草のなおほしと申せども、ゑばりはぎにゑくものは候はじ、とうたふたり、三番はゆやがむすめのゑやう、太平樂をふむ、四番はいるま河のぼたん、すゞりわりをうたふたり、五番のくじはまんゑゆなり、みだいさまより御ゑやうぞくは給はる、としは十三のはるなれば、十二ひとへをちやくしつゝ、花のま袖を返し、かく屋の内より出けるを、物によくくたふれば、花木にうぐひすのはおき出たるふせいも、これにはいかでまさるべき、はたとあげてうたふたり、かまくらは八つ七がうと承る、春は先さく梅がやつ、あふぎのたに、すむ人の心は涼しかるらん、秋は露おくさ、めがたに、いづみふるかや雪のゑた、万年かわらぬ龜がへのたに、つるのからこえ打かはし、ゆいのはまにたつなみは、いくゑま江のゑまつゝいたり、江のゑまのふくてんは、ふくゑゆかいむりやうのほうゑゆをいだし、疊られたり、君が代はさゞれ石のいわほとなりて苦のむすまで、たかさごや相生の松、万歳樂に御いのちをのぶ、東方朔の九千歳、うつゝらわうの八まんざい、ゑやうみやう居士の一千ざい、西王母のそのゝ、桃三千ねんに一度花さきみのなると申せども、相生の松にゑく事さふらふまじ、抑君は千代をかさねて六千ざい、さかへさせ給ふべき、かほどめでたき御事に、あいをひの松が枝、ふくゑゆむりやうのよろこびを、きみにさゝげ申さんと、小松のゑだをゆりかづき、みなゑろの大まくへ二三ど四五どまいかゝりたりければ、頼朝御覽じて、ほういにたちゑばし、ゑろさやまきを指ながらみなゑろの大まくをなけあけて、かゝるめでたき御事に、相生の松がゑを給らんとて出たまふもとより頼朝はいまやうは上手なり、たつ浪いるなみよするなみ、びくゑほのひやしあしを

ゆをちかづけて、御身はみめよく、いまやうは上手にてましませば、此たびいで、いまやうをうたはせ給へ、まんゑゆさまこそ申ける、まんゑゆきこしめし、此たびのいまやうは、よのつねのいまやうにかわりて、めでたき事をばみづからなにとはからふべし、おもひもよらずとおほせける、さらしな大きにはらをたて、かやうなる時、今やうをうたはせ給ひてこそ、御よろこびもましまさんとて、御つばねさまへ参り、まんゑゆこそ今やうの上手にて候と申上る、御つばねよりも御だいさま、頼朝様へ御ひろうあり、頼朝大きによるこびたまひ、まんゑゆ一目見んとて、御まへにめされ御覽じて、大きによるこび、みだいさまより十二ひとへの御ゑやうぞくをぞくだされける、もとよりすがたすぐれたり、かたをならぶる女はなし、此は正月十五日、御まへに山をたて、大みやのゆんでは、頼朝の御さじき、八ヶ國の大みやう小みやうの御さじき、かす八百八とぞ聞へける、さて又めてには、大御所様とみだいさまの御さじきをはじめとして、八ヶ國の大みやうゑゆのうへがた、ゑやうろうゑゆの御さじき、かすをゑらす、かまくら中のきせん上下が参りて、けんぶつ申けるほどに、つるがをかに、こまをたつべきかたもなし、十二人のやをとめ、七十五人のみやびと、かぐらをさうして奉り、今やうをはじめらるゝ、先一番の今やうは、手ごしの長者がむすめ、せんゑゆのまへときこゑける、きせんくんゑゆのことの葉に、かいだう下りをつゞけたり、あふさか山の夜るの月、くもらぬ影をやながむらむ、せたのからはし野路の里、かすみにくもるかゞみ山、ふわのせきやのいたびさし、かりねのゆめはやがてさめがゐのゑゆく、むしのいせいやははりの國、三川なる三河にかけしやつはしの、くもでに物やおもふらん、ゑるもゑらぬもとをとうみの、はまなのはしのいるゑほに、さゝねどのぼるあまをおね、こがれて物やおもふらん、まゆみ月ゆみひきまのゑゆく、さよの中山せとをすぎ、うつつの山べのつたのみち、手ごしを過てゆくほどに、月をきよみがせきの戸を、をしあけがたのそら見れば、ふじのけぶりやなびく



さらしまといふ所にながされて、

月かげのみよするはたなかい川の水、いな舟のいづらしかは、もがみ川のはやきせぞ、こともまらぬびはのこゑ、霞のひまにまぎれる、とうたひしも、今こそおもひまられけれ。○下

〔義經記六〕まづかわか宮八幡宮へさんけいの事

人をすかさんとする事なれば、酒えんはじめていく程もなかりけるに、祐經が女房今やうをぞうたひける、藤次が妻女も催馬樂をぞうたひける、いそのせんじ珍しからの事なれども、きせんといふ白拍子をぞかぞへける、さいばらそのこまも主にをとらぬ上手どもなりければ、ともにうたひてあそびけり、

春の夜のおぼろの空に雨ふりて、ことさら世間まづかなり、壁に立そう人もきけ終日の狂言は千年の命をのふるなり、我もうたひてあそばんとて、別の白拍子をぞかぞへける、

〔からいとさうし〕いかにや申持うけたまはれ、つねにきねんするまゝの間のざしきに、今夜の内に小松が六本生ひ出たり、かまくら中のわづらひか頼朝が身の上か、天下のみだれか、うらなへとぞおほせける、はかせ承りて、○中かほどめでたき御事に、あひおの松がえを、鶴が岡のたまがきの御内に、ほうらいをうつしかへ、十二人のたをやめをうつして、今やうをうたはせ給はゞ、神とくもふかく、きみもめでたふましまさんと、うらなひたるこそめでたけれ、頼朝のめにおぼしめし、六本の小松をつるがをかのたまがきのうちへうつし、十二人のたをやめをそろへらるゝ、まづ一番には、手越の長者がむすめせん、まゆのまへ、二番には、遠江國ゆやがむすめのまゝ、う、三番には、させ川のかめづる、四番は、さがみの國山下の長者がむすめとらごせん、五番は、むさしの國いるまがわのぼたんといひし、まらびやうし、是をはじめて十一人なり、かまくら中ひろしと申せども、人一人にことをかき、色々尋らるゝ、そのちまんまゆのひめのめのとば、まんま

〔吉野樂書〕一承安四年九月一日ヨリ同十五日ノ夜ニ至ルマデ、七條殿ノ御所ニシテ、後白河院今様ノ御會ノアリケルニ、其御遊ニ、左大將師長笛新大納言成親別當笙家通卿宰相比巴頭中將實宗了左中將定能催馬樂按察大納言資實付歌源少將雅賢其時按察今様

キクニ心ノスムモノハ、ヲギノハソヨグ秋ノクレ夜フキフエノ子箏ノコト、ヒサシキヤドフク松風、モトハアレタルヤドフク松風トアリケルヲ、ヨリニヨテヒキナサレケリ、尤モ興アリ、判者左大將

筭差按察

六番 左秦通朝臣 右少將

右勝雅賢

十二番 左雅高

右勝爲賢 判官代ノ大夫

十三番 左資時 大夫

右盛能

〔梁塵秘抄口傳集〕この兼雅卿今様合の時に、足柄のなかに、するがの國うたはれしを、おと前がむすめきゝて、これは御所よりたまはられたると、おぼゆるふしのあるは、ならひまゐらせたるやらんといひけるを、ことうたよりわけて、たび／＼うたはれたりしをかく申せば、のどかにてつけて、ふりのにるべきところおぼえしか、

〔八雲御抄三上〕磯 地磯 などと云も磯也、今様に松もきけ、こいそもかたれと云、一説を磯と云、是いそ也、

〔八雲御抄三上〕佛所 靈鷲山をば、わしのやま、又きりたらこたといふ 今様なり、歌などにはきい、

〔義經記七〕直江の津にて笈さがされし事

やがて御舟に乘給ひて、きよ川の船頭を、いやごんのかみとぞ申、御舟支度して參らせけり、水上は、雪えるみかさまさりて、御舟を上せかねてぞ有ける、是や此はるちうさのせう／＼、まやうの

○さしき事いできて、今様沙汰もなかりしに、保元二年のとし、おとまへが歌をとしごろいかで  
 きかむと思しものたりを、出たりしに、信西入道これをきゝて、たづね候はむ、それが子我も  
 とに候とて、木工允清仲をよびてかの五條にいひやる返事に、さやうの事もせでひさしく成て、  
 みなわすれにたり、そのうへにそのさまいとゞみぐるしく候とてきたらず、たび／＼せめての  
 ち、はしたなきさまになりしかば、すぢなくて、正月十日あまりばかりにまいりたりき、道戸のう  
 ちに居てさしいつる事なし、人をかけて高松殿の東向のつねにある所にて、うたのだむぎあり  
 て、我もうたひてきかせ、あれがをきゝて、あか月あくるまでありて、その地さりてそののちよ  
 びよせて、つばねしてをきて、足柄よりはじめて大曲様、舊古柳今様、物語田歌等にいたるまで、い  
 まだまらぬをばならひ、もとうたひたる歌、ふしたがふ、ひとすちにあらためならひしほどに、こ  
 れかれや様々もまりにき、○下

今様合

〔百練抄八食〕

承安四年九月一日、於太上天皇

河○御所幸法住

有今様合事、撰定堪能輩卅人、十五箇夜

間毎夜一番被決雌雄、師長資賢卿等爲判者、十三日、仙洞今様合之次有御遊上皇六、令歌今様  
 給、希代之美談也、

〔玉海〕承安四年九月一日乙酉、自今日院中有今様合、

公編以下廿  
餘人云々

今日番前大納言實定、別當成親云

云、十五日己亥、今日院今様合終之日也、又有御遊云々、

〔吉記〕承安四年九月三日、參院奏覽法花堂御佛座光等繪様、

○中

申斜退出、入夜又歸參、爲聽今様合

也、今夜、左、新大納言、右、六角宰相、

略云々

其有興云々、四日、今夜今様合、左、宰相中將、右、左兵衛督

云々、五日、今様合、左、實宗朝臣、右、光能朝臣云々、六日、今夜今様合、左、泰通朝臣、右、雅賢朝臣、略左

騷負優美云々、七日、今夜今様合、左、右少將隆房朝臣、右、信濃少將實教朝臣、略八日、今日今様合、

左、顯信朝臣、略右、濟綱朝臣、人々微咲云々、九日、今様合、左、隆信、右、師廣、略

くつ、ましかりしかども、このみたちたりしかば、そののちもおなじやうに、夜ごとにこのみうたひき、鳥羽殿にありしとき、五十日ばかりうたひあかし、とよりて東三條にて船にのりて、人々つどへて四十餘日、日出る程まで夜ごとにあそびき、如此このみしかど、さしたる師なかりしかど、賢賢やかねなどがうたをき、とり、せう／＼ならひてうたふもあり、又うたひあひたるともがらのうたを、ゑらぬをば互にならひつ、なにとなく歌の數ありたちては、足柄など今様も秘藏の歌をゑらむと思ど、上手とき、てたよりをたづねとりてき、しに、まことによくきこえし以後つねによびてうたはせき、足柄一二はならひたりしかど、いと我にまさりてうたしりまさりたることはなかりき、いちめほそ九郎、藏人禪師、千手二郎などやうのもの、其かすをき、しほどに、家成卿のさゝなみ、五條が弟子とき、て、彼中納言うせて後たづねとりて、三月四月ばかりはをきてうたはせてありき、かくのごとくきかぬものもなくき、あつめたるに、はつこゑを資賢もめでたきよし申、人々上手とのみいひあひたりしかば、いかできかむと思しかど、ゆかりもゑらでありしに、二條院の御めのと坊門殿、ぐしてこむと契たりしに、新院にひとつ所をはゝかるよしをき、て、押小路京極の堂へ坊門殿ぐしてきたりしかば、夜もすがらうたはせてき、我もうたひ歌の事などたがひにとひなどして、夜あけしほどに、家成の中御門にありしかば返にき、かくのごとき上達部殿上人はいはず、京の男女所々のはしたものの、雜仕、江口神崎のあそび、國のく、つ、上手はいはず、今様をうたふもの、き、および、われがつけて、うたはぬものはすくなくやあらむ、ある人申云、さいのあこまろとて、あをはかぬもの、歌あまたまゐりたる上手、このほどのぼりたりと申、朝方がもとにあるよし、式部少輔定正いまだ六位なりし時、申とき、てたづねしかば、とゞめおきて足柄、たみ、伊地古、蜷川、舊古柳少々ならひしほどに、近衛院うせさせ給しかば、なにとなくてやみにき、そののち鳥羽院かくれさせ給て、物さはがしき事ありて、あさまさ



事なし、ち、たる春の日は、枝にひらき庭にちる花を見、鶯のなき、ほと、ぎすのかたふ聲にも  
そのこゝろをえ、せう／＼たる秋夜、月をもてあそび、むしの聲々にあはれをそへ、夏はあつく、冬  
はさむきをかへりみず、四季につけておりをきらはず、晝はひねもすにうたひくらし、夜はよも  
すがらうたひあかさぬ夜はなかりき、夜はあくれど、まをあげずして、日いづるをわすれ、日  
高くなるをまらず、そのころをやまず、おほかたよるひるをわかず、日をすこし月をおくりき、そ  
のあひだ人あまたあつめて、まひあそびてうたふ時もありき、四五人七八人男女ありて、今様ば  
かりなる時もあり、つねにありし物を番におりて、我はよるひるあひぐして、うたひし時もあり、  
又我ひとり雅藝集をひろげて、四季の今様法文早歌にいたるまで書たゝ次第をうたひつくす  
おりもありき、聲をはる事三千度なり、二度は法のごとくうたひかはして、聲のいづるまでうた  
ひいだしたりき、あまりせめしかば、のどはれて湯水かよひしもすぢなかりしかど、かまへてう  
たひ出しき、あるひは七八九十日、もしは百日の歌などはじめてのち、千日の歌もうたひとをし  
てき、ひるはうたはぬ時もありしかど、よるは歌をうたひあかさぬ夜はなかりき、賢季兼なぞ  
かたらひよせてもき、かゝみのやまのあこ九、とのもりづかさにてありしかば、常によびてき  
き、神崎のかね、女院に候しかば、まいりたるには申てうたはせてき、しを、あたりにては、時々は  
是にてもいかできかではあらむするぞとぞ、夜ませにたばむとて給ひしかば、あの御かたへ参  
夜は、人をつけてあか月かへるをよび、我たまはる夜は、いまだあかきよりとりこめてうたはせ  
てき、ならひてうたふ歌もありき、あけがたに返しやりても、猶うたひしを、かねがつばねむか  
へたりしかば、あけてのちも猶つゝみの音のたへぬさまに、いつのひまにかすむ覽とあたみ申  
き、かくのごとくこのみて、六十の春秋を過しにき。○中略

崇徳院の新冠と申し時、ひとつ所にわがもとにあるべきやうにおほせられしかば、餘りまぢか

而鼓ヲ取テ、發歌ケル時ハ、放光シテアリツキメタル見ヘシナリ、其弟子ニテ敦家、歌ハ四郎大夫、河内前司三枝ガ弟子也、前草ハ始ハク、ツニテ、後ニハ遊女ニナリテ、南方ノ事ヲシリテメデタカリケリ、前草ガイヒケルハ、歌ハ第一ノ句ヲ短ク歌テ、吉ナリトゾイヒケル、

〔鄧曲相承次第〕刑部卿政長○中

資兼卿家神樂、兼親卿流音曲、當此時代、後冷泉院御宇也自伊豫守敦家朝臣始也、催馬樂不致沙汰、神樂朗

詠今樣隨分堪能名人也、參熊野施藝依神威被召留、爲御眷屬之由古傳也、○中宮内卿有賢略中

此卿殊今樣堪能也、爲羽院爲御方違御幸伏見殿、被寄御事不及下御、令待鶴鳴御之間、依勅定令奉仕今樣其藝絕妙、不堪叙威被下、屬了此卿天仁清暑堂神宴依所勢不參、

〔禁秘御抄中〕一諸藝能事

後白川今樣無比類御事也、○下

〔鄧曲相承次第〕右馬頭資時

今樣者家說、受庭訓之上、爲後白川院勅弟被下、御奥書十三年にならひたる事を、只二年にならひとりぬる、以外事也云々、

教習

〔續世繼か六りがれ〕かの九條の民部卿宗通藤原四郎にやおはしけん、侍從大納言成通と申こそ、よろ

づの事能おほくきこえ給しが、笛歌詩など、そのきこえおはしていまやうたひ給事、たぐひなき人におはしき、略中いまやうもごばんにご石を百かぞへをきて、うるはしくさうぞくし給て、

おびなどともとかで、釋迦のみのりはまなへといふおなじうたを、一夜にも、かへりかぞへて、百ようたひ給などしけり、

〔梁塵秘抄口傳集十〕そのかみ十餘歳の時より、いまにいたるまで、いまやうをこのみてをこたる

上人座之末ニ列座云々、頭辨時房朝臣背先例之由、雖令諷諫不用之、結句下臈六位猶令座列云々、此上事重不及問答云々、持經當時室町殿御氣色異于他、仍以權威如此、任雅意歎之間、不及謂是非云々、

〔二水記〕大永二年正月二日、今夜殿上淵醉也、○中勸盃巡流如前、次今様、先空拍子兩三度打出也、春

始梅花、資能朝臣唱之、○マコヘノ池ナルヲケテ、基規朝臣唱之、終句籠之、只今也、基規朝臣出萬歲樂、一同

以扇叩臺盤拍之、此時藏人參臺上舞、後下了退殿上人悉於本座舞了、郢曲人止拍子動坐、○中

今夜條々、兩貫主飯居折敷了、雨頭之外不寒、此兩條猶可尋是非哉、○中

今様事、前大納言殿老蒙失念給、仍無達人、資遠朝臣雖令傳受、不及稽古、仍不知也云々、此事内々伺申入之處、適再興之時、無其儀、事不可然、加涯分之了簡、可唱歌之由被仰下、仍大方以大納言殿了簡、今度者有其儀、郢曲之道微々、不堪嘆息者也、博士等見古譜、雖令了簡、定可相違、可愧可恐、可爲二反也、然而未熟之間、先一反唱之云々、可爲二反之由見、次第、及天明、劣、

流渡

〔郢曲相承次第〕刑部卿政長

資兼卿家神樂、兼親卿流音曲、當此時代、後冷泉院御宇也自伊豫守敦家朝臣始也、○中彼時代二條楊梅兩

流未相分、敦兼朝臣孫大貳季行卿子息等、散位重季、兼親卿子孫也、今、然、代々當家門第不、能左右委細見典、大納言定能卿、資兼卿之時、兩流相分也、

重季者神樂不致沙汰、只朗詠今様許也、定能卿神樂朗詠、兼親卿子孫也、今、然、代々當家門第不、能左右委細見典、敦家朝臣來相傳之、○中而至子子三

位資家卿之時、催馬樂朗詠今様等皆棄之、燒失文書、○下

善今様

〔體源抄 十下〕今様事

歌唱音ナリ、コヘアシキ者ノウタウハ、キカマホシクモヲボヘテムツカシキナリ、當初大圓綾木

ト云無雙ノ歌女アリケリ、敦家○藤原ハ綾木ガ弟子也、敦家ガ綾木ガ體ヲ語シハ、額ハ項マデハゲ

テ、鼻ハクチビルカクル、ホドニサガリテ、目ハソコニヲチイリテ、生身ノ鬼ニテゾアリケル、然

六位今様出歌無先規之由、兼行卿等令申之條、管見之至不可思議也、舊例聯綿事也、見諸家記

五節事、諸家可謂、空子常案之由事、宗子未定、猶兄也又永仁六年五節、諸家宗清朝臣可詠今様之由申之、而信有卿支申之、其故者、彼宗清朝臣曾祖父宗

平卿并有資卿、親父安貞三年正月三日、殿上淵醉參仕之時、宗平卿今様不助音、而今以誰人說可

歌哉之由、所申之、其時又後深草院被進、見勅書云、是又自內下給也五節間事、信有卿所存委尋聞候

了、且加教訓候也、所詮於今者、不可支申、宗清今様候、又五節事、信有爲先達、每事可相談之由、且可仰

宗多卿候也、穩便之儀、神妙候、凡源家音曲、自敦實親王至信有相續所藝異他候、就中於五節事者、信

有殊爲正統存故實候、初出仕之輩尤可相談事候、此趣宗冬ニモ可被仰下候、自是モ可仰候也、

十一月十八日

兩通勅書、或此道事一向可爲信有之計之由被載之、或又被載正統字、仍就重代之輩等、皆以令請益、

書狀等于今明白也、

藤家今様不歌事、永仁如此雖有沙汰、正安三年五節之時、冬定卿出仕、猶信有卿申所存、冬定卿歌之

時、人々皆不助音、冬定卿其後略今様、又嘉曆四年元三淵醉、宗兼卿子時五可詠今様之由、風聞敦雅

朝臣有時卿子有申所存之間、今様事可爲敦雅之計之由、以經季卿子時藏人右少升被仰下之間、宗兼不歌今様、其後

正慶五節人願時藏以下、每年元三燕醉等雖候、坐不詠今様也、宗重宗泰等卿又以同前略下

〔永和大嘗會記〕おなじき年十一月元廿二日、けふは寅の日なり、先殿上人の淵醉あり、略中又いまや

うあり、信俊朝臣靈山の山の句を出す、人々助音いとおもしろく、やがて扇をたきて、万歳樂を

はやす、略中同廿三日卯の日なり、大嘗會の當日なり、神齋ことに嚴重なるべし、又殿上の淵醉昨

日のごとし、略中今様蓬萊山の句、兼時朝臣これをいだし、

〔看聞日記〕應永廿三年正月二日、内裏淵醉、長資朝臣參、今様出歌、楊梅中將親家朝臣令與奪、舊多大

嘗會之時、源宰相信俊卿音曲事令請益、爲門弟之間令與奪云々、極騰源持經殿上横敷座ニ不著、殿



上にはかめあそぶといふ一せいを返し二へんまでこそうたひけれ、略下

〔春日權現驗記十六〕笠置の解脫上人は、略中笠置般若臺の鎮守に春日大明神を勸請したてまつらんがために、小社を一字造營す、略中或時上人夢想に天の中に御聲ありて、和歌を詠せさせ玉ふ、略中又同御聲にて今様をうたひ給、

鹿島の宮よりかせ木にて、春日のさとをたづねこし、昔の心もいまこそは、人にはじめてまられぬれ、となん見給けり、

〔増鏡九〕齋宮後嵯峨皇女の御まへに、院山山身づから御銚子をとりて聞え給ふに、宮いとく

るしうおぼされて、とみにもえうごき給はねば、女院山后この御かはらけのいと心もとな

く見え侍るめるに、こゆるぎのいそならぬ、御さかなやあるべからむとのたまへば、ばいたむの

翁はあはれなり、をのが衣はうすけれどといふ、今様をうたはせ給ふ、御こゑいとおもしろし、宮

きこしめしてのち、女院御さか月をとり給ふとて、天子には父母なしと申なれど、十善の床をふ

み給ふも、いやしき身の宮づかひなりき、一ことむくひ給ふべうやとのたまへば、さうなる御事

なりやと、人々めをくはせつゝ、まのびてつきしろふ、御まへの池なる鰯岡に、鶴こそむれゐてあ

そふなれとうたひ給ふ、そのち院きこしめす、善勝寺善勝寺原院せれうの里ぞいだす、人

人こゑくはへなどして、らうがはしき程になりぬ、略下

〔鄂曲相承次第〕權中納言信有

正應元年正月三日、殿上淵醉門弟極胸藤原說春可與、奏出歌之由、約諾之、忠成、兼行、教頼等卿、六位

出歌無先規之旨申之時、後深草院勅書之、可爲家之重寶之由、被仰之、給云、淵醉鄂曲事承候了、信基

爲爲家之計、由事、信有如此申候者何事候、此道事當世一向可爲信有之計之由思給候、爲正統受其說之故也、且意

説も淵醉之時、鄂曲仕候しと覺候、

てたちしが、あはれ權現の御前にて、なに事にても御入候へ、御ほうらく候へかしとありしかば、  
まづか是を聞て、何事を申すべきともおぼへず候、近きほどのものにて候、毎月にさんろう申な  
り、させるげいのふある身にても候はゞこそと申ければ、あはれ此ごんげんは、れいげん無雙に  
わたらせ給ふ者を、かつうは罪障懺悔のためにてこそ候へ、この垂跡は、藝ある人の御前にて、た  
んせいはいこばぬは思ひに思ひを重給ふ、面白からぬ事なりとも、わが身にまゐる事のほどをたん  
せいをはこびぬれば、よろこびに又よろこびをかさね給ふごんげんにてわたらせ給ふ、是わた  
くしに申にはあらず、ひとへにごんげんの託宣にてぞわたらせ給ふと申されければ、まづか是  
を聞て、おそろしや、我はこの世中に名をえたるものぞかし、神は正直のかうべにやどり給ふな  
れば、かくてむなしからむ事もをそれあり、舞までなくとも、ほうらくの事はくるしかるまじ、我  
をみまゐりたる人は、よもあらじとおもひければ、ものはおほくならひまゐりたりけれども、別して  
白拍子の上ずにて有ければ、音曲文字うつり、心もことばもをよばれず、さく人なみだをながし、  
袖をまぼらぬはなかりけり、つゐにかくぞうたひける、

ありのすさみのにくきだに、ありきのあとは戀しきに、あかではなれし面影をいつの世にか  
は忘るべき、わかれの殊に悲しきは、おやのわかれ子のわかれ、すぐれてげにかなしきは、夫妻の  
わかれなりけり、と涙のまきりにすゝみければ、きぬ引かづきふしにけり、

〔曾我物語<sup>八</sup>〕すけつねがやかたへゆきし事

さるものせう、<sup>○工藤</sup>かみならぬ身のかなしさは、我を心にかくるとは、ゆめにもまらずして、  
十郎殿さかづきいかにほし給はぬ、御前たちあまたましませば、さかなまち給ふとおぼえたり、  
今やううたひ給へといひければ、二人の君<sup>○少将</sup>あふぎひやうしをうちながら、  
ほうらいさんにはちとせふる、せんしうばんせいかさなれり、松の枝にはつるすくい、岩ほの

か成やうにぞいひける、思ひあまれる心の色あらはれてあはれなりければ、聞人みな涙をながしけり、興宴の座も事さめて、まめりかへりければ、御室はたへかねさせ給て、千手をいだかせて、御ね所に御入有けり、満座いみじがりの、まりける程に、其夜もあけぬ、

〔百練抄<sup>九</sup>〕

<sup>安徳</sup>養和元年閏二月四日、入道太政大臣<sup>清盛公</sup>、<sup>法</sup>薨<sup>十年六</sup>、天下走騷、日來有所惱、身熱如火、

世以爲燒、東大興福之現報、八日葬禮、寄車之間、東方有今様亂舞聲<sup>許人</sup>、以人令見之、聞最勝光院中

云々、

〔源平盛衰記<sup>三十九</sup>〕重衡酒宴附千壽伊王事

宗茂宿所ニ歸テ、時ノ景物尋テ、奉酒勸ト支度シタリ、酌取ニハ晝ノ女ヲ出シテ、狩野介瓶子懷家

子侍看盃面々ニ持テ參タリ、中將<sup>重衡</sup>酒三度ウケテ、最無興ニ思ハレタリ、<sup>中</sup>女承テ、十方佛土

中、以西方爲望<sup>略</sup>、<sup>中</sup>ト云朗詠シテ、極樂欣<sup>チカ</sup>ハン人ハ皆彌陀ノ名號唱フベシ、阿彌陀佛、南無阿

彌陀佛、阿彌陀佛、大悲阿彌陀佛ト云今様、四五返ウタヒケルニ、<sup>中</sup>將助音シ給ケル、<sup>中</sup>樂

二三返彈ジ給テ、同ハ一聲ト勸メ給ヘバ、女承ハツテ、一樹ノ陰ニ宿リ、一河ノ流ヲ汲ム人モ、先世

ノ宿緣也ト云、契ノ白拍子ヲ一時カズヘ澄シタリケルガ、夜ハ深更ニナリヌ、人ハ鳴ヲ靜タリケ

レバ、徐ソマデモ耳目ヲ驚シ、袂ヲ校計也、

〔義經記<sup>五</sup>〕まづかよし野山に捨らるゝ事

まづかこれを見て、いかなる所にてわたらせ給ふらんと思ひて、ある御だうのかたはらに、まば

らくやすみ、これはいづくぞと人にとひければ、よしの、御嶽とぞ申ける、<sup>略</sup>、<sup>中</sup>まづか正面に參

りて、念修して居たりける所に、わか大しゆの申けるは、あらうつくしの女のすがたや、たゞ人と

もおぼへず、いかなる人にておはすらむ、あのやうの人の中にこそ、おもしろき事もあれ、いざや

すゝめて見むとて、正面に近付しに、素絹の衣をきたりける老僧の、はんまやうぞくの珠數もち

〔源平盛衰記<sup>十七</sup>〕實定上洛事

後徳大寺ノ左大將實定ハ、舊都ノ月ヲ戀ワビテ、入道<sup>○平</sup>ニ暇乞、都へ上給ケリ、<sup>○中</sup>大宮ノ御所ニ參、待宵ノ小侍從ト云女房ヲ尋給フ、<sup>略</sup>中大將ハ福原ノ都ノ住ウキ事語申テ被泣ケレバ、宮ハ平京ノ荒行事仰出シテ、共ニ御涙ニ咽バセ給ケリ、角テ夜モイタク深ケレバ、后宮ハ御琵琶ヲ搔寄サセ給テ、秋風樂ヲヒカセ給フ、侍從ハ琴ヲ彈ケリ、大將ハ腰ヨリ笛ヲ取出シ、平調ニ音取ツ、遙カニ是ヲ吹給、其後故郷ノ荒レ行ク悲サヲ、今様ニ造リテ歌給フ、

古キ都ヲ來テ見レバ、淺茅ガ原トゾ成ニケル、月ノ光ハクマナクテ、秋風ノミゾ身ニハ入、ト三返歌ヒ給ケレバ、宮ヲ始進セテ、御所中ニ候給ケル女房達、折カラ哀ニ覺テ、皆袖ヲゾ絞リケル、

〔古今著聞集<sup>好色</sup>〕紫金臺寺御室に千手といふ御龍童有けり、みめよく心ざま優也けり、笛を吹、今様などうたひければ、御いとをしみはなはだしかりける程に、又參川といふ童初て參じたりけり、爭ひき歌よみ侍りけり、是も又龍有て千手がきらすこしをとりにければ、面目なしとや退出して、久敷參らざりけり、或日酒宴の事有て、さまゝの御あそび有けるに、御弟子の守覺法親王なども、其座におはしましけり、千手はなど候はぬやらん、召て笛ふかせ、今様などうたはせ候はばやと、申させ給ひければ、則御使をつかはしめされけるに、此程所勞の事候とて參らざりけり、御使再三に及ければ、さのみは子細難申て參にけり、けん紋紗の兩面の水干に袖にむばらこき雀の居たるをぞ、ぬふたりける、紫のすそごの袴をきたり、ことにあざやかにさうぞきたれども、物を思入たるけしきあらはにて、まめりかへりてぞ見へける、御室の御前に、御盃をさへられたる折にて有ければ、人々千手に今様をすゝめければ、

過古無數の諸仙にも、すてられたるをばいかせん、現在十方の淨土にも、往生すべき心なし、たとひ罪業おもく共、引接し給へ彌陀佛、とぞうたひける、諸佛にすてらるゝ所をば、すこしかす



驚て候へば、

みねのあらしのはげしさに、きゝの木の葉もちりはて、この歌のさかりにおはしますに、右のうしろをむけてゐさせ給たる、そとつげ申よしをおこしに來るなりに申けり、この女夢のうち、若宮のこの御歌をきかせをはしますとおぼへしよしを申、さてつぎの夜若宮にまいりて、今様の會終夜ありてのち、亂舞猿樂白拍子、まなぐ、まつくしき、治承二年九月廿四日の事なるべし、

〔源平盛衰記十〕中宮御産事

治承二年十一月十二日寅時ヨリ、中宮<sup>○高倉后</sup>御産ノ氣御座ト匂ケリ、去月廿七日ヨリ、時々其御氣御座シケレ共、取立タル御事ハナカリツルニ、今ハ隙ナク取頻ラセ給ヘドモ御産ナラズ、二位殿心苦ク思給テ、一條堀川戻橋ニテ、橋ヨリ東ノ爪ニ車ヲ立サセ給テ、橋占ラゾ間給フ、十四五許ノ禿ナル童部ノ十二人、西ヨリ東ヘ向テ走ケルガ、手ヲ扣同音ニ、摺ハ何摺、國王摺、八重ノ鹽路ノ波ノ寄摺、ト五四返ウタヒテ、橋ヲ渡、東ヲ指テ飛ガ如シテ失ニケリ、

〔百練抄<sup>高倉</sup>〕治承二年十二月廿三日、於院被行阿彌陀講、有管絃朗詠今様等、兼日結構也、

〔源平盛衰記十一〕燈爐大臣事

此大臣<sup>○平重盛</sup>二世ノ悉地ヲケサン爲ニ、靈神靈社ニ志ヲ運ビ、佛法僧寶ニ首ヲ傾ケ給ケリ、<sup>○中</sup>四十八人ノ女房達、衣裝花ヲ折、蘭麝ノ芳ヲ新ニシテ、日沒靜ニ禮讃シ、念佛貴ク唱ツ、四十八間ヲゾ廻ラレケル、念佛禮讃終リヌレバ、彼女房達六人ヅ、番ヲ結テ、鼓銅鈸子ヲハヤシツ、今様謠テ、又彼四十八間ヲゾ廻リケル、

心ノ闇ノ深キヲバ、燈爐ノ火コソ照スナレ、彌陀ノ誓ヲ憑身ハ、照サヌ所ハナカリケリ、ト別ノ詞ヲ交エズ、是バカリヲ折返々々謠ハセテ、我身ハ中臺ニ座シ給ヒ、是ヲゾ被聽聞ケル、

ヒツ、先ハ證誠殿ニ手向奉リ、二度三度ハ結早玉ニ奉ルトテ、心ヲ澄シテ歌クレバ、權現モ岩殿モサコソ哀ニオボシケメ、

〔長門本平家物語五〕少將成原は、九月半過て鳥を出給、すでに都へ上べきにてありけるが、下向の時大すみ正八まん宮に宿ぐはん有き、願望成就したり、その願をとげんとて、正宮にぞ参けいし給ひける、さつまがた房のとまりといふ所より鹿兒島逢のみなと、木入津向島をもおし過て、鳩脇八幡崎にぞつき給ふ、それよりとりあがりて、宮中の馬場執印法道と申許に宿かられたり、御湯を出して浴せまいらせ、さまゝに御身いたはりなどし奉る、その後正宮の御ほう前にまゐりて、さまゝ念誦あり、をりふし月の夜なりければ、宮中すみわたり、ことにおもしろかりけり、臺明寺法師に俊惠房阿闍梨と申究竟の歌鼓の上手のありけるに擊せて、少將いまやうをぞうたはれける、

月もおなじ月、空もおなじ空の、いかなれば、今夜の空の、てりまさるらむ、とをし返し／＼てぞうたはれける、

〔梁塵秘抄口傳集〕我八幡にまいりて、十ヶ日こもりて、千部經をはじめてよみしに、九月廿日よりこもりたりしに、廿五六日のほど經はて、今様を御前にして、よもすがらうたひき、夜中にをよぶほどに、あしつゝみたる女の、中門のもとに親盛ゐたる所によりて、うしろをひく、申けむになに、さいふとてき、いれず、又よりて度々になるおり、見かへりて見れば、勸學院のくりやめ也、老かいふ事をきけば、ゆめにこのはしがくしのはしらのもとに、うつくしきちこの十二三ばかりなるが、うらうへに、ひとりはうすあをの、□□におりたるわきあけをきたまひたるが、白馬にたてまつり、今ひとり、あろきうすものとおぼしきに、あたはこむはいに見ゆるをめして、ぶちななる馬にのりて、うらうへにたちたまひて、この御歌をきかせ給ふとおぼしく見え候て、うち

デハ叶フマジ、アハレ祇王ハ今様ハ上手カナ、上代ニモ聞及バズ、末代ニモ有難トゾホメ給フ、  
〔源平盛衰記九〕康頼熊野詣附祝言事

誘給ヘ少將殿トラ、精進潔齋シテ、熊野詣ト准テ、岩殿ヘコソ參ケレ、略○中 結願ノ日ニ成ケルニ、康頼入道社壇ノ御前ニテ、歌ヲウタヒテ、法樂ニ備ケリ、

白露ハ月ノ光ニテ、黃土ウルラス化アリ、權現舟ニ掉サシテ、向ノ岸ニヨスル波ト未謠モ果ザルニ、三所權現トナヅラヘ祝ヒ奉ル、略○中 今日ヲ限ノ參詣也トテ、少將モ康頼モ、御名殘ヲ奉、惜テ、去夜ハ是ニ留テ、通夜法施ヲ奉、手向、曉方ニ康頼歌ヲウタヒ、其終リニ足柄ヲ歌テ、禮奠ニソナヘ奉ル、サテチト、マドロミタリケル夢ノ中ニ、海上ヲ見渡セバ、沖ノ方ヨリ白帆係タル小船一艘浪ニ引レテ渚ニヨル、中ニ紅ノ袴著タル女房三人、舟ヨリ上リテ、鼓ヲ脇ニ挾ミツ、拍子ヲ打テ、足柄ニ歌ヲ合歌ヒタリ、

諸ノ佛ノ願ヨリモ、千手ノ誓ハタノモシヤ、枯タル木草モ忽ニ、花咲實ナルトコソ聞、ト三人聲ヲ一ニシテ、二返マデコソ歌ヒケレ、略○中 サモト覺ル處ヲバ、窪津王子ヨリ八十餘所ニ御座王子王子ト拜ツ、略、神幣挾レタル、心ノ内コソ哀ナレ奉幣御神樂ナンドコソ、力無レバ不叶ト、王子王子ノ御前ニテ、馴子舞計ヲバツカマツタル、康頼ハ洛中無雙ノ舞也ケリ、魍魎鬼神モトラケ、善神護法モメデ給フ、計ナリケレバ、昔今ノ事思出テ、

サマモ心モ替カナ、落ル涙ハ瀧ノ水、妙法蓮華ノ池ト成、弘誓ノ舟ニ竿指テ、沈ム我等ヲノセ給ヘ、ト舞澄シテ泣ケレバ、少將モ諸共ニ涙ヲゾ流シケル、略○中 性照申ケルハ、三十三度ノ參詣已ニ結願シヌ、今日ハ暇給テ黒目ニ下向シ、侍<sup>ヤツラ</sup>ベケレバ、身ノ能施テ、法樂ニ奉ラン、我身ノ能ニハ、今様コソ第一ト思侍レトテ、神祇卷ニ二ノ内、

佛ノ方便也ケレバ、神祇ノ威光タノモシヤ、扣バ必ズ響アリ、仰バ定テ花ゾサク、ト三返是ヲ歌

リケレバ、入道興ニ入給ヘリ。○中 目出キ事ニ思程ニ、天下無雙ノ能者出來レリ、佛御前ト云者ノ歌ヲ聞、舞ヲ見ル者、目ヲ迷シ耳ヲ峙、祇王祇女ニハ雲泥ヲ論ジテ、勝リトゾ云ケル、或時太政入道ノ亭ヘ推參シテ、家貞シテ申入ル。○中 遙ニ歸リタル佛ヲ被召返テ宣ケルハ、罷出ヨト云ツルヲ、祇王ガ吾經シ道也、召返セト様々云ツレバ、佛ニ見參スルゾ、折節吾前ニ杯アリ、何ニテモ一ツ申セト聞ケレバ、

君ヲ始テ見時ハ、千代モ經スベシ姫小松御前ノ池ナル總ガ岡ニ、鶴コソ群居テ遊ナレト折返折返、三度歌ヒタリケレバ、入道祝スマナレテ興ニ入給ヘリ。○中 入道ハ佛ヲソバニ居テ、人々ト酒宴シテ御座ケリ、祇王祇女ヲバー長押落タル廣廂ニスヘラレタリ。○中 入道宣ケルハ、如何ニ遅クハ參リタルゾ、佛ヲスヘ置タレバトテ怨思フカ、宿世ノ道ハ今ニ始ザル事ゾ、努々思ベカラズ、折節佛ガ前ニ杯アリ、一申テ強ヨト宜フ、祇王承テ、

佛モ昔ハ凡夫ナリ、我等モ終ニハ佛ナリ、三身佛性具シナガラ、隔ル心ウタテサヨト折返々々三返マデコソ歌ヒタレ、是ニハ入道メデズモヤ有ケン、滿座哀ヲ催シテ、袂ヲ絞ル者モアリ、入道打ウナヅキ給テ、景氣ノ今様ヲバ、イシクモ歌タル者哉、此歌ハ雜藝集ト云文ニ書レタルハサハナシ、三四ノ句ハヨケレ共、一二ノ句ヲ引替テ、佛モ昔ハ凡夫也、我等モ終ニハ佛トウタフハ、二人ガ阻ラレタル所ヲ云ニヤ、猶モ聞アカズ、今一度ト宜フ、何度モ仰ニハトテ、

君ガアゲコシ手枕ノ絶テ久成ニケリ、何シニ隙ナクムツレケン、ナガラヘモセヌモノ故ニ、ト是ヲ二返ゾ歌ヒタル、入道又打領許ウナヅキ此歌ハ侍從大納言成藤原帥中納言ノ娘ニ相具シテ契アサカラザリシニ、何程モナクシテ別ツ、歎ノ餘リニ作り出シテウタヒシ今様也、ソレニハ我等ガアゲコシ手枕ノトコソ有ニ、一ノ句ヲ引替テ、君ガアゲコシ手枕ト歌フ事ハ、入道ガ所ヲ思ナゾラエテウタフニヤ、ソレヲバ祇王ハ如何ニトシテ知タリケルゾ、加様ノ事ハ時ニ取テ上手ナラ



の雪こそふりかゝれ、とこの歌卅反ばかりありけり、その、ちおなじ人、神歌をいだす、

ちはやぶる神神にをはしますものならば、あはれにおぼしめせ、神もむかしは人ぞかし、○中

あきのいつくしまへ建春門院○後白河にあひぐして参る事ありき、やよひの十六日○承安京

を出て、おなじ月廿六日まいりつけれ、○中公卿殿上人樂人太政入道、そのとも人いまだ座をた

たぬほどに、まさしきみことて年よれる女をぐして人きたれり、我にむかひてぬ、いふやうわ

れに申ことはかならずかなふべし、後世の事を申こそあはれにおぼしめせ、今様をさかばやと

いふ、あまりはれにしてまかもひるなり、いだすべきやうもなくであるに、猶たびくいへば、資

賢をよびてこれうたへといふ、かしこまりてゐたり、なをさかむといへば、すぢなくていだす、

次第聲聞いかばかり、よろこび身よりもあまる覽、我らは後世の佛ぞと、たしかにきゝつるけ

ふなれば、いだしてこれつけよといへど、すけかたあらで、つくることなく、二反おほりにき、必

に後世の事、他念なく申し事をいひ出たりしかば、まむをこりてなみだおさへがたかりき、○下

〔十訓抄〕資賢卿配所より歸りたりける比、法皇○後白河今やうをすゝめ仰られけるに、信濃に有し

木曾路川とうたはれけり、御威有けり、信濃に有とぞ云ならはせるを見たる由をうたはれける、

誠にいみじかりけり、

〔源平盛衰記〕十祇王祇女佛前事

世ニ白拍子ト云者アリ、○中其頃京中第一ノ白拍子アリ、姉ヲバ祇王妹ヲバ祇女ト云、天下無雙

ノ舞妓ト披露シケレバ、入道○平彼等ヲ召ス劣ス、弟子ドモ二三人同車シテ、祇王祇女參レリ、五

人ノ女侍所ニ并居タリ、入道先景氣ヲ見レバ、紅顔色鮮カニシテ、白粉媚ヲ造レリ、容貌品コマヤ

カニシテ、蘭麝ノ匂ナツカシ、舞歌ヘト宣ヒケレバ、

蓬萊山ニハ千歳經、萬歳千秋重レリ、松ノ枝ニハ鶴巢食、巖ノ上ニハ龜遊ト同音ニ歌ヒ澄シタ

す、その次第つねのごとし、よふけてまたのぼりて、みやめぐりのち禮殿にして通夜、千手經をよみたてまつる。略○中 資賢つやしはて、あかつきかたに禮殿へまいりたり、今様あらばや、只今おもしろかりなむかしとす、むればかたまりてゐたるすぢなくてはつからいだす、

よろづの佛の願よりも、千手のちかひぞたのもしき、かれたる草木もたちまちに、花咲みなる  
ととい給ふ、をししかへしく、たびくうたふ、資賢通家つけてうたふ、必ずましてありしけにや、  
つねよりもめでたくおもしろかりき、覺讀法印宮めぐりはて、御前なる松木のもとにつやして  
ねたりけるに、その松の木のうち、心とけたるたゞいまかなと、うたふ聲のしければ、夢うつ  
つともなく、かくき、あざみて、禮殿にまいりて、いそぎかたる、一心にこゝろすましつるには、か  
かることもあるにや、夜あくるまでにはうたひあかしてき。略○中

おなじとらの二月四年○仁安 七八日頃、おほ雪ふりたりし日、さまをかへむいとま申に、賀茂へまい  
りき、まづ下のやしろにまいりて見るに、おもしろき事限りなし、おまへの梅の木に雪ふりかゝ  
りて、いづれをむめとわきがたく、あけの玉がきまで、みな白たへに見えわたりて、たぐひなくお  
ぼゆ、次第の事みかぐらはて、その、ち法花經一部、千手經一卷を轉讀したてまつり、おはりて  
のちに、成親卿平調に笛をならす、さいばらを資賢卿いだす、あをやぎ更衣、いかにせんなり、その  
のちわれ今様をいだす、

はるのはじめの梅の花、よろこびひらけてみなるとか、資賢第三句をいだしていはく、  
みたらしがはのうす氷、心とけたるたゞいまかな、とうたふをりにあひめでたかりき、敦家内  
裏にてこのくを、まへのながれのみかは水とうたひけるも、かくやありけむと、われかむじをく  
りにき、

松の木かげにたちよれば、ちとせのみどりぞ身にまめども、むめがへかざしにさしつれば、春

いとまこひしに、とめてありしをよび返して、うたはせてき、しに、神妙なりといはれて、

次第聲聞いかばかりよろこびみよりもあまるらむ、我らは來世の佛ぞと、なしかにき、つるけふなれば、とうたひたりしかば、かむにたへずして、からあやのそめつけなる二きぬを、てんとうにしてき、略中

我○後河永曆元年十月十七日より、まやうまんをはじめて、法印覺識を先達にして、廿三日進發しき、廿五日むまやどの宿に爲保左衛門尉にてありしに、それがぐしたりし先進の遊女に、このたびまいらせ給は、うれしけれど、ふる歌をたづねぬこそ口おしけれど、見たるよしを申、もとより王子にてはする事をばすなるに、御歌などはあるべきものをなどいふもの有しかど、あまり下らうがちにて、けんぞにやなどいふものもありて有しほどに、かくゆめの事をき、てさうなくうたはんとて、馬屋どを夜ふかくたちて、ながおかの王子によのうちにまいりぬ、あひぐしたりしかば、太政大臣清盛大貳と申しおりなるべし、まいりあひてありしに、この夢をいひあはせしかば、さる事候は、さにこそ候なれ、さにをよび候はぬよしを返事に申て、心のうちいたく、さう人などあまたありて、いかゞとおもひけるほどに、きとねいたりけるに、束帶きたるこせむぐして、から車にのりたるもの、御幸のなるやらんとおぼしくて、王子の御まへにたてたり、このうたをさくにかとおもひて、きとおどろきたるに、今様をある人いだしたりけり、其うたにいはく、

熊野の權現はなぐさのはまにぞおり給ふ、わかのうらにしましませば、としはゆけども若王子、これををどろきて、資賢卿にかたりて、あざまれけるゆめにおもひあはせられて、人々けんてふなるよしを申あひたりき、○中

應保二年正月十一日より精進をはじめて、同廿七日たつ、○中 同月十二日新宮にまいりて奉幣

〔梁塵秘抄口傳集〕乙前八十四と云し、其病をもくありしかど、いまだはきくしかりしにあはせて、べちの事もなかりしかば、さりとともとおもひしほどに、程なく大事になりたるよしつげたりしに、ちかく家を造りておきたりしかば、ちかくに、まのびていきて見れば、むすめにかきをこされて、むかひてゐたり、よはげにみえしかば、けちるんの爲に、法花經一卷よみてきかせてのち、歌やきかむとおもふといひしかば、よろこびて、いそぎうなづく。

像法轉ては、藥師のちかひぞたのもしき、一たびみなをきく人は、よろづのやまひなしとぞいふ、二三反ばかりうたひてきかせしを、つねよりもめでいりて、これをうけ給はるぞいのもいきぬらんと、てをすりてなくく、よろこびしありさま、あはれにおぼへてかへりにき。○中略

五月はなの頃、江口神崎の君、みのくつあつまりて、花まいらせし事ありき、歌さたありしに、延寸、こひせいと申、あしがらをいまだうたはぬとて、御所にならひまいらせたきをえ申いでぬと、これかれにきかぬぞといふに、きくしかどもき、いれぬやうにはありしほどに、季時入道とて申いだしたり、いかでさる事はあらむするぞ、さかさまごとにてぞあらむ、我ためは名聞にてこそあれど、かたはらいだし、さいのあこ九うたふめるは、それにならへしと返事にいふ、延寸また申やう、いかさまにもならひまいらせて候はむこそ、此世のよろこびにては候はめ、あこ九は大進も小大進もみなしり候はぬを、誰にならひたるぞと、おぼつかなく候、またこれらもさ申せば、かたかくにと申せば、のちにこそこれらゐるときありて、きくとられなむするは、ひとりあらん時に、さらばおしへんといひしを、残りともまりてならはむと、いたくいひしかば、おとまへにいたくいふはいかゝとかたりしを、さ申さばおしへさせ給へかし、さやうにいみじがり申さば、さやうのれうにてこそ候へと、おとまへ申しかば、よるく二三夜ばかりにぞおしへたりしに、せぬ所もかたはらいたくおぼへてえなをさで、われよくなるまで、うたひてぞおしへし、そのち



ませのうちなる白ぎくも、うつろふみるこそあはれなれ、我らがかよひてみし人も、かくしつ  
つこそかれにしか、とくりかへし／＼うたひけるを、北の方聞て、心はやなをりにけり、それより  
殊になからひ目出たくなり、にけるとかや、優成北の方の心なるべし。

〔續世繼<sup>六</sup>花<sup>六</sup>ちる庭の面<sup>六</sup>〕

このおとゞ公藤原

はわかくよりこゑもうつくしく、藏人少將などいひて、

五節のえんすいのいまやうなどに、權現うたひ給ける。

〔續古事談<sup>一</sup>王道后宮〕

殿上ノ一種物ハツチノ事ナレドモ、久シクタエタルニ、崇徳院ノスエツカタ、

頭中將公能朝臣ハ、絶タルヲツギ廢タルヲ興シテ、神無月ノツゴモリ比ニ、殿上ノ一種物アリケ

リ、○中略

一二獻藏人季時信範ス、ム、少將資賢タケノハニラク露ノイロトイフ今様ヲウタフ、○下略

〔古今著聞集<sup>六</sup>管絃歌舞〕

侍從大納言、成通、雲林院にて鞠を蹴られけるに、雨俄にふりたりければ、階

隠の間に立入て、階にをりをかけてまばしはれ間をまたれる程。

雨ふれば軒の玉水つぷ／＼といはゞや物を心ゆくまで、といふ神歌を、口ずさまれる程、格子の中より、をしあけて女房の聲にて、このほどこれに候人の物の氣をわづらひ候が、只今御聲をうけ給て、あくびてけしきかはりてみえ候に、いますこし候なんやとす、めければ沓をぬぎて堂の中へ入て、木丁の外にゐて、

いづれの佛のねがひより、千手のちかひぞたのもしき、かれたる草木もたちまちに、花さきみ  
なるとときたれば、といふ句をくりかへし／＼うたひて又

樂師の十二の誓願は、衆病悉除ぞたのもしき、一經其耳はさておきつ、皆令満足すぐれたり、こ  
れらをうたはれるに、もの、けの○か○の○い○け、原作もわたりてやう／＼の事共いひて、其病やみ  
にけり、かならず法驗ならねども、道達せる人の藝には、靈病も恐をなすにこそ、○又見十一、  
訓抄十一、

天王寺へ参リテカヘリケルニ、江口ニトバマリテ、ヨフクルホドニ、アソビノトコロヲウカバヒケルニ、火ノモトニテスグロクヲウチケリ、ヲシイリテ今様ヲモヨウスニイダシタイワク、

竹ノヨナガクアワレナル、フシモサダメズヲキキツ、人ニシラレスコヒヲシテ、トリノナクマデチモイラズ、此歌サセルフシモナケレドモ折ニヨリテ興モアリキ、又ワスレスフシニ人ノカタリシナリ、折ニヨルト申

又、ヨシナノワレラガヒトリネヤ、カバカリサヤケキ冬ノヨニ、コロモハウスクヲヨハサムシ、タメメシ人ハマヲドコズ、

又、心ノ内ニハシノベドモ、色ニハイデクリワガコヒハ、物ヤ思トミル人、アヤメタイカニトトフマデニ、

### 已上イカホドモアレドモ略之

〔古今著聞集<sup>八</sup>好色〕刑部卿敦兼はみめの世ににくさげ成る人也けり、その北の方ははなやかなる也けるが、五節を見侍りけるに、とり／＼にはなやかなる人々の有を見るにつけても、先わが男のわろきを心うく覺へけり、家に歸りてすべて物をだにもいはず、目をも見合す、打そばむきてあれば、まばしは何事の起きたるぞやと、心もえす思ひゐたるに、まだいにいとひまさりて、かたはらいたき程也、さき／＼の様に一處にも居ず、方をかへて住侍けり、ある日刑部卿出仕して夜に入て歸りたりけるに出ゐに火をだにもとさず、装束はぬぎたれ共た、む人もなかりけり、女房共もみな御前のまひきに随ひて、さし出る人もなかりければ、せんかたなくて車よせの妻戸をおしあけて、獨ながめ居たるに、更闌夜まづかにて、月のひかり風の音、物ごとに身にしみわたりて、人のうらめしさもとろそへておぼへけるまゝに、心をすまして、筆箒を取出て、時のねにとりすまして、

〔古事談神五〕放生會佛寺被准行幸之儀式事ハ、延久二年始也。○中

陪從等歌山城令引幸者、先例也、而隆季卿殿上人左馬頭間勤仕使之時、式部大輔惟盛イトヨリカ

ケタルシダリヤナギト云今樣ヲ歌云々、若有先例歟、

〔體源抄十下〕音曲事

白河院之御時ニ、メサレテ歌ツカマツリケルニイダシテ云、

カヒダウクダレバ波タカシ、サムダウトオモヘバ、スグレテヤマキビシ、マシテホクロクダウ  
 ハ雪タカカムナルモノヲヤ、イザサハイセデニカ、リナム、此歌ヲウタフアヒダ、ハヲノ句出サ  
 シトスルニ、歌トシテメサレテ御定ニ、コノウギノ句イザタヤミヤコニフタリキタラムトウタ  
 エト仰下サル、扱其ヨリ其定ニツカマツリタリケルニ、御心ニアヒカナヒテ、感ジヲボシメスト  
 テ、纏頭給リス、

又同院ノ御時、歌近藤ト云モノ、御前ニメサレテ歌ウタワセサセ給ケルニ、思ヤウ、アワレナル歌  
 ヲウタハント思出シテ云、

太子ノミナゲシタリシニ、コロモハカケナキ竹ノ葉ニ、ワシノミ山ヲイデシヨリ、クワハアレ  
 ドモスシモナシ、此歌ヲイダシタリケルニ、一首ヲワラヌサキニヲイダサレニケリ、ヲリニシタ  
 ガウベキコトナリ、○中

シタシキトモガラアマタ歌ウタフ女一人グシテ、月ノアカキコロ、三條坊門東洞院ノヘムニア  
 ソビアリキケリ、カチツク程ニ、アル所ニヨキ聲ニテ歌ウタウモノアリキ、シバラクトママリテ  
 是ヲキク、按ノゴトク男ヒトリシテ笛ヲ吹、二人今樣ウタウ、其歌ニイハク、

シナノニアンナルキノデガハ、君ニヲモイノフカケレバ、ミギハニソデヲヌラシツ、アラヌ  
 セヲコソス、ギツレ、是ヲエモアヘヌセヲコソトハ、其女ノウタイタリケル、

なんとしける時、

我等何しにおひぬらん思へばいとこそ哀なれ、今は西方極樂の、みだのちかひを念すべし、と  
たび／＼うたひて引入にけり、其時西方に樂の聲聞えて、あやしき雲たなびきけりとなん心に  
まみけるわざなれば、今様をうたひて往生を遂てけり、解脱は何をわかず只心のひくかたに付  
て信をおこすによるべし、

〔紫式部日記〕八月○寛弘五年廿日あまりのほどよりは、上達部殿上人ども、さるべきは、みなとのゐが

ちに、はしのうへ、たいのすのこなどに、みなうた、ねをまづ、はかなうあそびあかす、ことふ  
えの音などには、たど／＼しきわか人たちの、とねあらそひ、いまやう歌ども、所につけては、お

かしかりけり、○中略十一日○寛弘六年三月のあかつき御堂へわたらせ給ふ、○中略月おぼろにさし出て、

若やかなる君達、今様うたうたふもふねにのりおほせたるを、わかうおかしく聞ゆるに、大くら

卿○藤原光のおふなく、まじりて、さすがに聲うちそへんもつゝ、ましきにや、忍びやかにてゐた

るうしろでのおかしうみゆれば、みすのうちの人もみそかにわらふ、○下略

〔古事談三行〕惠心僧都、金峯山ニ正シキ巫女有ト聞テ、只一人令向給テ、心中所願ウヲナヘトアリ

クレバ、歌占ニ

十萬億ノ國々ハ、海山隔テ遠クレド、心ノ道ダニナホクレバ、ツトメタイタルトコソキケト占

タリケレバ、涕泣シテ歸給云々、

〔春記〕長暦四年十一月廿三日甲戌、今日故中宮第一女宮著袴日也、廿五日丙子、入夜關白、〔藤原通直〕

東宮大夫、直衣皇后宮大夫、東帶長家師房信家卿、直衣以上皆已下參候、宮御方著饗饌、盃酌無算、有詠歌

之興、又有今様歌之戲、重尹卿依、有其體、發今様歌、滿座解頰、大納言已下發此曲、太以輕々也、惣人心

之追從尤甚也、



居横坐執鼓彈○此間一拍子之上句其詞云周防ムロツミノ中ナルミタラヒニ風ハフカネドモサ、ヲナミタツ云々其時聖人成奇異之思眠而合掌之時件長者應現普賢之貌乘六牙白象出眉間之光照道俗之人以微妙之音聲說云實相無漏之大海ニ五塵六欲之風ハ不吹ドモ隨緣真如之波タ、ヌトキナシト云々其時聖人信仰恭敬シテ拭感涙開目之時ハ亦如元爲女人之貌彈周防室積給閉眼之時ハ又現菩薩形演法文如此數ケ度敬禮之後聖人乍涕泣退歸于時件長者俄起座自閑道追來聖人許示云不可及口外ト謂畢即逝去于時異香滿空云々長者俄頓滅之間遊宴醒興云々

〔撰集抄五〕性空上人之事 付室之遊女

むかし播磨國書寫といふ山寺に性空上人と云人いまそかりける。○中此聖人は法花讀誦の功によつて肉身にまのあたり六根清淨の功德を得たりといへども生身の普賢菩薩の尊像を拜見し奉らぬ事うらみの中の恨みに侍りとして七日祈念していまそかりけるに七日のあかつきのうつゝに天童託していはく室の遊女が長者を拜めそれぞ實の普賢なるとまめして失給ひぬふしざと思ひおどろきて急室へいたり給ひなんとす墨衣にては遊女を見んといわん事あしかりなるとて白ききぬき給て同じさましたる僧五人ぐして室の長者が庵にいたりつき給ひて宿をとり給ふに長者出あひやがて酒をすゝめ奉れりまゐ申とて舞をまひうたひけり周防のみたらしの澤邊に風の音つれてとかすふればならびゐたる遊女ども同じ聲してさゝら波たつやれこさつとうけはやしけりされば是は生身の普賢にこそと思ひ給ひて目をふさぎ心をまづめて觀念をし給ふ時に端嚴柔和の生身の普賢白象に乗給ひて法性無漏の大海には普賢恒順の月ばかりほがらかなりとうたはせ給へり。○下

〔十訓抄十〕神崎君とねくろ男に伴ひてつくしへ行けるが海賊にあひてあまた所手をひてま

〔閑吟集〕花の錦の下ひもは、とけて中々よしなや、柳のいとのみだれごゝろ、いつわすれうぞ、ねみだれがみのおもかげ、

いくたびもつめ、いくにのわかな、きみも千代をつむべし、なほつまばさはに、ねせりや見ねど、いたとりしかのたちかくれ、

木のめ春雨ふるとてもく、なほきえがたき此野邊の、雪の下なるわかなをば、今いくかありてつまし、はるたつといふ計にや三よし野の、山もかすみてまら雪の、消しあところ路となれ、消しあところ路となれ、

〔體源抄下〕音曲事

教訓抄ニ云所ノ歌ヒハ、又別ナルニコソ、法文ノ歌、今様片下、早歌コレヲモノイトカタシトアリ、第一ニ今様ハヲリヲキラウベシ、春ハ春ニツケ、夏ハ夏ニツケ、秋冬モ同之、月ノ比ヤミノヨシヲ歌ヒ、祝ニ無常ノ歌ヲ歌ヒ、夏冬ノ歌ヲウタフハアルマジキ事也、又女房ナドノ前ニテアソビ、ナサケアルトコロニテ、蓬萊山ナンドウタウハフルメカシ、如此事ハ歌ヒモノニ限ラズ、樂人モ同事也、

〔續教訓抄平調〕萬歲樂

又云、此曲ハ公私ニ付テ祝所ニハ必舞トイヒ、樂トイヒ先奏之、後ニコソ何ノ曲ヲモ用イラレ侍レ、サレバ誠ニ目出タキ曲ニテ侍ナリ、ナニハノコトモ名ニヨリテ、其德ヲアラハスコトナレバ、尤其謂アリテヲボヘ侍リ、サレバイハヒノ今様ニモ、

祝ノ所ニ吹笛ハ、地久ミノ山黃鐘調、君ガヨハヒハ萬歲樂ト云ヘリ、

〔古事談<sup>三</sup>〕書寫上人<sup>性</sup>可奉、見生身普賢之由祈請給、有夢告云、欲奉見生身普賢者、神崎之可見、遊女之長者云々、仍乍悅行、向神崎、相尋長者家之處、只今自京上日之輩群來、遊宴亂舞之間也、長者

やつるのむれぬる、まづ山に、千世にちとせをかさねつ、じやよはひは君が、ためなれやむ、  
あめの下こそ、のどかなれ、○中

白薄様

白うすやう、こせんじの紙、まきあげの筆、ともゑかいたる、筆のちく、やれ、ことうとう、五反七反 相替也

〔源平盛衰記〕五節夜間打附五節始并周成王臣下事

抑五節ト申ハ、○中五人ノ仙女舞事各異節也、サテコソ五節ト名付タレ、彼舞ノ手ヲ摸ツ、雲

ノ上人舞トカヤ、其時拍子ニハ、白薄様厚染紫ノ紙、卷上ノ糸、鞆繪書タル筆ノ軸ヤト、ハヤス也、  
略○下

〔拾玉集〕五今様

花

春のやよひのあけぼのに、四方の山べを見わたせば、花ざかりかもまら雲の、かゝらぬみねこそ  
なかりけれ、

郭公

はなたちばなにもにほふ也、軒のあやめもかほる也、夕ぐれさまの五月雨に、山郭公なおりして、

月

秋のはじめになりぬれば、ことしのなかば、すぎにけり、わがよふけ行月かげの、かたぶくみる  
こそ哀なれ、

雪

冬のよさむの朝ぼらけ、ちぎりし山路に雪ふかし、心のあとはつかねども、おもひやるこそ哀な  
れ、

今やうはながくてくせづきたる

〔綾小路俊量卿記〕五節間郢曲事

一 丑日出朝

帳臺試事、於子午廊南上有后町廊亂舞大歌了阿音三反、鬢多々良三反、

びんたゝらをあゆがせばこそ、あゆがせばこそ、あきやうついたれ、やれ、ことうとう、就三反、鬢多々良五反、七反

相替也、  
○中略

一 寅日叙位  
之議 殿上淵醉事○中略

今様

＋ 靈せむみやまの、＋ 五えうまつ、＋ ちく葉なりとぞ、ひとはいふ、われもみる、＋ ちく葉なりとも、  
おりもてこむ、ねやのかざしに、＋ まろさん、○中略

一 於准后御休廬推參事

思之津五反

おもひのつに、舟のよれかし、星のまざれに、をしてまいらう、やれ、ことうとう、たふときはとん、  
之、説有

やれとはよびいだすこと、葉子はその人をさす歟、とんとは富つ也、とつ五音相通也、○中略

蓬萊山一反

＋ 蓬萊山には、＋ 千とせふる、＋ 万歳千秋かさなれり、む、＋ 松の枝ニハ、つるすくひむ、いはほがそ  
ばには、＋ 龜あそぶ、○中略

一 御前召事、於朝所南面庇有之、對西座上

月令三反 新豊二反 鶴之群入一反



歌之、仍號今様或號新様也、其後又天曆聖主第十姬宮號三宮爲東國青墓宿長者、今様堪能也、天下今様皆彼餘流也、彼時中卿濟政等皆翫之、

書

〔體源抄十下〕今様事

又云、今様ハ本體ハ律ナリ、然而呂律俱ニ存也、クハツノヤウハ呂音ニ歌也、比巴法師ノ歌又呂音ナリ、而傀儡ノ體ニアラデ、直ク歌ナガラ、呂音ニ歌カナデタキナリ、歌女駒ガ歌其様也、

又云、男歌ハ揚聲ニテ、不久テ迅クヲロシテウメキニテ、遙ニ延々待懸ルナリト、言者詞ヲ迅拾テ早ナガラノドカニキコユルコト、詞ヲバ早ク歌モ振、大浪ニナミヨリテハ、歌ハノドカニキコユルナリ、忠季云ク、今様近來其程延タリ、今様ハ四句也、而一句各一息也、仍其程ツバマヤカニアリシナリ、今ノ世ノ人、句中間ニ皆息ヲ繼ナリ、顯仲ハ今様ニヲイテヨク習ル人也、歌ハレケルハヨクツバマヤカニゾアリケル、詞多キ句ヲバヒロヒ、詞スクナキ句ヲバ延テ不乖程ス、繼將ナリ、鴨惟明云、今様ノノビタルハアサマシキモノナリ、實ハ早ク歌ガ、人ノ耳ニハシヅカニ延テ歌ト聞也、如此ガ神ヒアリテハキコユルナリ、唯今様ノミニアラズ、ヨク得タル皆如此也、

又云、今様ハ興ヲ可尋也、始ハ緩歌テ音染時早ク歌ハ、面白ク成テ有法興ナリ、

又云、獨歌ニハ延テ可歌也、樂ノ小間カニ歌出ニハ、ツバマヤカナルガ其興アルナリ、

又云、獨歌ニハ歌者ノツハシミスギテ唱ハ、必ズ歌ヒ損ズル也、傍若無人ニ思テ歌ガ不損ナリ、

又云、聲ハツヨクウタヘバ揚ル、緩ベテ歌ヘバ下ル也、

又云、聲ハ吉朽スルトキハ、聲ハ惡ナガラ大音ニナル也、忠政ハ政長ガ說ヲウケテ、歌笛ヲ知人也、其ガ今様ノ歌笛ハ習ナキヲ、彼人ノ付テ吹ケルハ、誠ニメデタカリケルナリ、律ノ催馬樂笛ノ詞ヲ、其振舞ニテ今様ヲ吹レケルガ、メデタカリケルナリ、

〔枕草子十一〕歌は

似タリ、而シテ村上天皇ノ頃ヨリ漸次上下ニ行ハレ、朗詠ト同ジク朝家ノ御遊ニモ用キラ  
レシガ、後世全ク衰ヘタリ、

〔簾中抄〕下風俗略○中

今様

〔書言字考節用集八言辭今様〕

〔倭訓栞中編二〕いまやう 耶曲を○に誤を今様あり、土師連八島がうたひ初しよし、太子傳に見え

たり、物にいまやうたとも見えたり、

〔聖德太子傳上〕九年庚子夏六月、有人奏曰、有土師連八島、唱歌絶世、夜有人來相和、爭歌音聲

非常、八島異之、追尋到住吉濱、天曉入海者、太子侍側奏曰、是熒惑星也、天皇大驚問之、何謂、太子答

曰、天有五主、五行、象五色也、歲星色青、主東、木也、熒惑色赤、主南、火也、此星降化爲人、遊童子間、好

作謠歌、歌未然事、蓋是星歟、天皇大喜、

〔狹衣四下〕道のほどに戀草つむべきれうにやと見ゆる、ちから車ども、あまたをしやりつゝけ

つ、行ちがふ略○中 この比わらはべのくちのはにかけたる、あやしのい。ま。や。う。た。ど。も。を。い。と

あうくしき聲にてうたひて過るけしき、○下

〔枕草子〕これはむかしのことなり、い。ま。や。う。は。や。す。げ。な。り、

〔白氏長慶集四調略〕時世粧 儼戒也

時世粧イノスガ時世粧、出自城中傳四方、時世流行無遠近、○下

〔耶曲相承次第〕贈從三位濟政、

今様者、昔敏達天皇御宇、土師連八島歌始之、著赤衣人、夜々付歌之、其聲太絶妙也、及曉天至、難波浦

化不見、天皇奇之、被尋申聖德太子之處、是熒惑星也、云々、時人學而翫之、其後廣而山蔭中納言再興

〔平家勸文錄〕抑東大寺ノ親隆僧正、入唐之時、自本朝隨身給ケル文ニハ、朗詠、文粹、三教指南歸、平家は等也、

〔沙石集九下〕靈之訖佛法物語事

ソノカミ東大寺法師ニテ、信教得業トテ、才覺ノ仁アリケリ、朗詠注ナドシタル物也、○下略

〔平家物語中〕木曾のくはん書

此覺明と申は、もとはじゆ家の者也、藏人みちひろとて、くはんがく院にぞ候ける、出家の後はさいせうはう信教とぞなのりけれ、

雜説

〔續世繼二紅葉御持〕白河院は、後三條院の一御子におはしましき、○中略又から國の歌をももてあそ

ばせ給へり、朗詠集にいりたる詩の、このりの句を、四韻ながらたづね、ぐせさせ給事も、おぼしめしよりて、匡房中納言なん、あつめられ侍りける、その中に、さ月のせみのこゑは、なにの秋ををくるとかやいふ詩の、このりの句を、えたづねいださやりける程に、ある人これなんとて、たてまつりたりければ、江帥見給て、これこそこののりとも、おぼえ侍らねと、そうしける、のちに仁和寺の宮なりける手本の中に、まことの詩、いできたりけるなどぞきこえ侍し、

〔和漢朗詠集上夏〕蟬

千峯鳥路含梅雨、五月蟬聲送麥秋、李嘉祐

## 今様

今様ハイマヤウト云フ、今様歌ノ略稱ニシテ、中古今様トハ今メカシキノ意ニシテ、古格ナラザル歌詠ヲ今様ト云ヘルナリ、傳説ニ敏達天皇ノ時ニ始マレリト云ヘルハ、妄誕ナルニ

たへたるも、皆歌を書つらねられたり、其うへ藤原の基俊は師頼卿に同時にて、新撰朗詠集を撰  
び給へりしも、又うたをかきそへ給へり、基俊朝臣は二條家の和歌の祖にて、公任卿を宗とし給  
へれば、その朗詠集の體をうつしてこそ新撰し給ひけめ、いかでか師頼卿をしも規模とし給は  
ん、これらの事其證なるべし、但此朗詠の註、むかしより詩文ばかりにありて和歌の註解なし、か  
つ又無題の詩一ツ、信阿が説に師頼卿くはへらるゝよし註せり、是らのことによりてふかくも  
えらぬ後人、をしはかりて歌をも其たぐひにいふなるべし、努々用ふべからずとぞ師説に侍し、  
〔古今著聞集十六〕此句目録、經爲題の事、中御門右大臣宗能知足院殿忠實藤原の御時、九十句を撰  
定の、ち妙音院殿師長藤原また百廿句をせんじくはへさせ給ける、かれこれ合二百十句也、其中  
にもかの句入らず、かたゝおかしきいひやう也、たゞしみなこれを詠じあひけり、  
〔續世繼三五〕ちかくおはしまし、法性寺のおとゞは、藤原忠通白川院にもみまきの詩えら  
びたてまつり給ひもとゝしのきみにも、からやまとおかしき言の葉どもをぞ、えらびつかは  
せ給ける、かやうのことゝもおほくなんはべなる、

〔徒然草上〕ある者、小野道風のかける和漢朗詠集とてもちたりけるを、或人御相傳うけることに  
は侍らじなれども、四條大納言藤原任原えらばれたる物を、道風かゝんこと、時代やたがひ侍らん、  
おぼつかなくこそといひければ、さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれとて、いよゝ  
秘藏せけり、

〔老人雜話下〕梶井御門跡に、世尊寺伊頼の書ける朗詠集あり、佐理より六代目なり、佐理の朗詠よ  
り賞翫すとぞ、

〔古事談三〕東大寺ノ上人舜乗坊入唐之時、教長手跡之朗詠ヲ持渡、育王山長老以下見之、感歎無  
極、其中天神御作春之暮、月之三朝之句、殊以褒美不堪、感懷遂乞取納、育王山寶藏云々、



〔和漢朗詠集〕下 雜

風 雲 晴 曉 松 竹 草 鶴 猿 管絃 付舞妓 文詞 付道女 酒 山 山水 水 付漁

父 禁中 古京 故宮 付故宅 仙家 付道士隱倫 山家 田家 隣家 山寺 佛事 僧 閑

居 眺望 餞別 行旅 庚申 帝王 付法皇 親王 付王孫 丞相 付執政 將軍 刺史 詠史

王昭君 妓女 遊女 老人 交友 懷舊 述懷 慶賀 祝 戀 無常 白

〔和漢朗詠集註〕和漢朗詠ト者和ハ吾朝也漢ハモロコシ也和國ニハ歌ヲ以テ思ヲ述漢朝ニハ

詩ヲ以テ志ヲ云此詩歌ノ作ニ秀逸アレバ人皆是ヲナガム是ヲ朗詠ト云歌ハ偏ニ此國ノ風俗

ナレバ唐人ノ作ナシ詩ハ此朝ニモコノミ作レル物ナレバ倭漢ノ作者トモニ書也 略下

〔十訓抄〕七 圓融天皇の御時 略中 公任卿此殿 教通 蘇原を聲に取て始こし入されける時朗詠上下卷

えらびてをき物の厨子にをかれたりけるゆゑしきむこ引出物にこそ

〔十訓抄〕一 大方は心操 心 もおさまり才幹も有てよき人と云初られぬれば少々失あれ共世にも人

にも必思ひゆるさるゝ也大勞身にある時は少過ありといへ共凶とせずといへるがごとし詩

歌のたとへにてこれらを申べし

楚思森茫雲水冷商聲清呢管絃秋 白 此詩をば頌聲聞にくしと難申人有けれ共秀句なるに

よりて四條大納言公任卿朗詠に撰入られにけり

〔江談抄〕五 朗詠集相如作多入事

又四條大納言 公任 者高相如之弟子也仍撰朗詠集之時多入相如作所謂蜀茶漸忘淨光 ○光一

味并蘊蘇往反之句有何秀發乎

〔和漢朗詠集註〕或説に此朗詠集詩文は公任卿のあつめ給へり歌は堀河院の御宇に左衛門督

師頼卿かきくはへ給ふといへりひが事なるべし四條大納言の自筆の朗詠集とて今の世につ

と被致候は綾小路家に限り候事にて、庭田家にては綾小路家方も傳統を被受候由持明院家も古來よりは是を家業と被致候綾小路持明院兩家之内にて一家ヅ、曲所と申ものに被相成、郢曲之事、總體彼家の預に相成候故、○中乍去郢曲之事は、此二家之家業と被致候事、古代よりの例に候、兩家より當時相傳有之家々、大抵左に記之、

庭田

庭田同家  
五辻

庭田庶流  
大原

持明院庶流  
園

園庶流  
東園

持明院庶流  
石野

源氏新家  
慈光寺

〔運步色葉集（五ノ）〕朗詠集（四ノ）大納言公任、欄之作也

〔本朝書籍目錄〕和漢

和漢朗詠

二卷公任卿撰

新撰朗詠

同基臣撰

拾遺朗詠

同

和漢拾遺朗詠

同

和漢兼作集

廿卷

〔和漢朗詠集〕上春

立春

早春 春興 春夜 子日

若菜 三月三日 付桃花

暮春 三月盡 閏三月 鶯霞

雨 梅 付紅梅

柳 花 付落花

野躑 欸冬 藤

夏

更衣

首夏 夏夜 端午 納涼

晚夏 花橘 蓮 郭公 螢 蟬 扇

秋

立秋

早秋 七夕 秋興 秋晚 秋夜 八月十五夜 付月

九月九日 付菊 九月盡 女郎花

萩 蘭 槿 前栽 紅葉 付落葉

雁 付歸雁 虫 鹿 露 霧 擣衣

冬

初冬 冬夜

歲暮 爐火 霜 雪 氷 付春氷 霰 佛名

第三反、又基規朝臣自歎無極句唱之。資能朝臣依韻也。次資能朝臣東岸西岸唱之、付所如例。第三句基規朝臣、第四句同唱之。再反、第三句資能朝臣音、再反句資能朝臣第三句、基規朝臣第四句、資能朝臣朗詠了。

〔言繼卿記〕永祿八年二月廿日、禁裏御樂始之間、午時參内。中御樂平調調子万歳樂。中次朗詠、德是也。

〔嚴有院殿御實紀〕二十七寛文三年九月廿九日、公卿の管絃御聽聞あり。中雅章鳥井嗣孝數實起

倉小の三卿嘉辰を朗詠せられ。中下

〔大海のはし〕宗時の中將、家にて持明院郢曲をうたひすまされたりけるを、あやしげなるさぶらひの門にたちて聞きけるが、雨のふり出でけるに、ぬれながら猶ねんごろにきゝてたてりけり。さるもの候よし、人の申しければ、やさしきやつなりとて、よび入れさせずのこにするて、ことさら一曲をうたひてきかせられけり。

相傳

〔郢曲相承次第〕權中納言信有。中

兼親卿流事、代々受當家。源說之條不能左右。其子細見右然者朗詠今様之體當流之條無不審、且度々令

自稱也、就中於朗詠者、以雅信公爲元祖。其子細見右彼公者圓融、花山、一條御代人也。中下

〔狛氏新録〕一郢曲之事

朗詠之詩ヲ謳候、持明院家綾小路家傳來、其外者堂上地下共門弟也。

〔諸家家業記〕神樂郢曲

綾小路 持明院

綾小路は刑部卿政長朝臣、堀川院之郢曲之師に被參候以來、代々相傳家業と被致候、其後其家庭田綾小路と兩家に相分レ、當時庭田家之方本家に相立、郢曲之事兩家共被相勤候事候得共、家業

〔和漢朗詠集上〕花付落花

花明上苑輕軒馳九陌之塵猿叫空山斜月瑩千巖之路張讀

〔和漢朗詠集下〕山水

山復山何工削成青岩之形水復水誰家染出碧潭之色江澄明

〔增銳十三の山〕御遊はてのち文臺めさる藏人内記俊基人々の文をとりあつめて一度に文臺のうへにおく披講のをはる程にみじか夜もほのゝとあけはてぬ御製〇後を左のおとゝかへすがへす誦してうるはしく朗詠にしたまふこゑいとうつくしおりふし郭公の一聲なのりすてゝすぎたるはいみじくえんなりかやうのまことしき事はかねて人も心づかひすればあやまちなかるべし。

〔永和大嘗會記〕おなじき廿二日〇永和元年十一月けふは寅の日なり先殿上人の淵醉あり〇中三獻あり

二獻に雅兼朝臣歡無極の朗詠をいだす五位職事ことにたえたるなきゆへに郢曲の人いだしなり〇中同廿三日卯の日なり大嘗會の當日なり〇中淵醉の式昨日におなじけふの朗詠は新

豐酒色信俊朝臣これをいだす

〔和漢朗詠集下〕酒

新豐酒色清冷鸚鵡盃之中長樂歌聲幽咽鳳凰管之裏公乘信

〔薩戒記〕應永卅三年九月廿二日壬子四辻宰相中將季保奉院宣送消息云今夜可爲月次御樂可令參入之由被仰下〇中戊終刺事始略調子黃鐘調喜春樂序同破央宮樂平蠻樂海青樂拾翠樂急

此間有朗詠初反内府出之源宰相三品羽林付之、二反源相公出之内府三品羽林付之、次鳥急等也

〔二水記〕大永二年正月二日今夜殿上淵醉也〇中次朗詠二首其儀基規朝臣自歡無極句唱出之令

句五位職事出之例也然而當世辭之仍從歌無極唱之其音聲壹越調許也自萬歲各付之如常第二反加嘉辰句資能朝臣唱之



〔明月記〕承元二年十一月十九日權大夫殿示給云、皇后宮淵醉十八日、毎事無違亂。○中一獻、頭中將  
子六二獻子等相中將忠信、瓶此間人々新儀朗詠、右大將出、人々助看、次雜藝、

〔増鏡五〕内野の雪十二月○寛元元年六月元三夜のぞしき。○草深本宮の御さたにていとめでたし、○中御か

はらけ二めぐりの、ち大夫すけらうゑい嘉辰令月とのたまへばありすけこゑくはへらる、又  
昭王とをしかさねていださる御こゑく、まうとくにあらまほしうめでたし、

〔新撰朗詠集下〕帝王

隆周之昭王賀原序穆王曆數永、吾君又曆數永、本朝之延曆延喜胤子多、吾君又胤子多、藤原伊周同三司 ○

〔勸仲記〕弘安七年三月廿四日癸酉及晚參内、今夕被行御書所作文、○中披講了、人々復座、次朗詠、

略 鄂曲丁有連句、

〔吉續記〕文永五年正月三日、有殿上淵醉、○中兩貫首先著座、兩貫首先著座、○中兩貫首先著座、次應召鄂曲之仁、公秋朝臣、長

顯、信基等朝臣著座、○中三獻之後袒裼朗詠、萬歲樂等如常、

〔増鏡十〕老の波あくる日○弘安八年三月二日午の時ばかり、寢殿より西園寺まで筵道しきて、兩院○後深草、御

ゑばうし直衣春宮見、御く、りあげて堂々おがませ給ふ、○中佛の御まへに、がりそめの御ま

しながら、皆わたらせ給ふ、庇に上達部つきて、御遊のぐめす、○中兼行花上苑明也とうといたし

たるに、いと、物の音もてはやされて、えもいはすきこゆ、具顯範藤など羅綺重衣と、二返ばかり

いへるに、なさけなきことを、機婦にねたみと本院○後深草、くはへ給へば、新院山○龜、御こゑたすけ給

ふ程、そゝろさむきまでえんなり、かへらせ給ひても、又きのふの花のかげにて、鞠御らむせられ

つ、それよりやがて御舟にたてまつりてをしいでたれば、はるかなる海づらにこぎはなれた

らむやうしていとをかし、○中兼行山又山とうちすんじたるに、變態續紛、新獨朗詠集並不見、た

りと、兩院あそばしたるに、水のそこもあやしきまで、みのけたちぬべくきこゆ、

ト支度シタリ、酌取ニハ晝ノ女ヲ出シテ、狩野介瓶子懷家子看盃面々ニ持テ參タリ、中將酒三度  
ウケテ、最無興ニ思ハレタリ、狩野介女ニ向テ、兎テモ角テモ御前御徒然ヲ慰進ン料也、一聲舉テ  
今一度申サセ給ヘト云ケレバ、女兼テ心得タル事ナレバ、酌サシオキテ、

羅綺之爲重衣、妬無情於機婦、管絃之在長曲、怒不関於伶人、ト云朗詠ヲ、二三返シタリケルガ節  
モ音モ調テ大方優ニゾ聞エケル、中將宣ケルハ、折節ノ朗詠コソ思合テ痛ハシケレ、此句ハ北野  
天神ノ、春嫩無氣力ト云事ヲ、内宴ノ序ニアソバセリ、譬ヘバ春嫩トハ、ミメヨキ女也、無氣力トハ  
力ノ弱キ也、上句ニ羅綺トテ薄ク嚴キ衣ヲ著シテ、美女ノ舞時ニハ、輕キ衣モ重ク覺フ、コレハ機  
婦ニ妬トテ機織ケン女モ、ウラメシク覺ヘ、下句ニ管絃ヲサシモ面白ケレ共、舞姫舞弱リテ力ナ  
ケレバ、速ニ入バヤト思ヘ共、長曲ヲ彈ズル時、伶人ニ怒ルトテ、管絃スル人モ惡ク覺ト云心也、サ  
レバ永日ナガラ湯ヒカセ、夜サヘ又長々ト酒勸ル事ヨトオボシテ、此朗詠ヲバシ給フカ、誠ニ心  
元ナクコソ覺レ、湯モ酒モ我心ヨリヲコラテ共、折カラ優ニ聞ユル者哉、但天神此句ヲアソバシ  
テ、我ナガライミジクモ作リタリ、此句ヲ詠ゼン所ニハ、必我魂行望テ、其人ヲ守ラント御誓アリ  
ケリ、重衡ハ逆罪ノ身ニテ、神明ニモ佛陀ニモ奉被放タレバ、其助音仕ルニ憚アリ、佛道成ベキ事  
アラバ、サモ有ナント宣ケレバ、女承テ

十方佛土之中、以西方爲望、九品蓮臺之間、雖下品應足、雖十惡兮猶引接、甚於疾風之披雲霧、雖一  
念兮必感應喻之巨海之納涓露、ト朗詠シテ、極樂欣<sup>チカ</sup>ハン人ハ、皆彌陀ノ名號唱フベシ、<sup>略</sup>○中夜ハ深  
更ニナリヌ、人ハ鳴ヲ靜タリケレバ、徐ソマデモ耳目ヲ驚シ、袂ヲ絞計也、斯リケレバ、人々は是ヲ見  
奉ラントテ、障子ヲ細目ニアケタル間ヨリ、風吹入テ前ノ燈消ニケリ、狩野介星燈進セヨト申ケ  
ルニ、中將爪調ベシテ、

燈暗數行、庾氏淚夜深四面楚歌聲、ト云朗詠ヲ二三返シ給ケリ、夜明ニケレバ、女暇給テ歸ヌ、

〔和漢朗詠集〕猿下

瑤臺霜滿、一聲之玄鶴、唳天、巴峽秋深、五夜之哀猿、叫月、謝觀

〔源平盛衰記〕二十六、〔平家東國發向并邦綱卿薨去同思慮實事〕

治承四年十一月ニ、福原ニテ殿上ノ五節ノ宴、醉ノ夜、雲客后宮ノ御方ヘ推參アリケル、公卿竹斑、湘浦ト云朗詠ヲ被出タリケリ、邦綱卿聞給ヒテ、取敢ズ穴淺猿、是ハ禁忌トコソ承レ、斯ル事ヲ聞トモ聞カジトテ、拔足シテ被逃ケリ、此朗詠ノ心ハ、昔大國ニ堯王ト申賢キ帝御座キ、二人御娘アリ、姉ヲバ娥皇ト云、妹ヲバ女英ト名ク、金屋ニ育テ、玉臺ニ成人給ヘル、時ニ賤キ盲目ノ子ニ、舜ト云者アリ、孝養報恩ノ志深シテ、父ガ盲ヲ開シカバ、堯王叙威有テ、舜ヲ以テ二人ノ姬宮ニ擧取シ給ヒテ、即位ヲ讓給ヘリ、舜王ト申ハ是也ケリ、舜王隠レ給ヒテ、湘浦ト云南ニ、若梧ト云野ニ奉納タリケレバ、二人ノ后歎悲ミ給ヒケルアマリ、自湘浦ノ岸ニ幸シテ泣給ヒケル、血ノ淚竹ニ懸テ、其色斑ニ染ニケリ、サレバ後ニ生出竹マデモ、皆斑ニゾ在ケル、今ノ世ニ斑竹トテ斑ナル竹ハ、彼ノ湘浦ノ竹ヒロマレル也、二人ノ后隠レ給ヒニケレバ、爰ニテ舜帝ヲ歎キ悲ミ給シカバトテ、湘浦ノ岸ニゾ奉納ケル、サレバ后ノ御前ニテハスマジキ朗詠也ケレバ、邦綱卿モ聞答メテ立給ヒケリ、

〔和漢朗詠集〕雲下

竹斑湘浦雲凝、鼓瑟之蹤、風去秦臺、月老吹蕭之地、張讀

〔源平盛衰記〕三十九、〔重衡酒宴附千壽伊王事〕

同晦日比元曆元ニ成テ、狩野介湯殿尋常ニコシラヘテ、御湯ヒキ給ヘト申ス、中其夜ニ入テ、

佐殿源頼朝狩野介ヲ召テ、三位中將重衡ハ無雙ノ能者ニテ座シマス也、和君ガ私ナル様ニテ琵琶

彈セ奉レ、頼朝モ汝ガ後園ニタ、ズミテ聞ベシト宣ケリ、宗茂宿所ニ歸テ、時ノ景物尋テ、奉酒勸

アケボノニ成行バ、月モ西山ニ傾ク、大臣御心ヲ澄シテ、初ニハ

普合調中、花含紛馥氣、流泉曲間、月舉清明光、此句、和漢朗詠集並不見、ト云朗詠シテ、重テ

願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、誠爲當來世々讚佛乘之因、轉法輪之緣ト被詠テ、御祈念ト覺シクテ暫物モ仰ラレズ、

〔古今著聞集十六〕興言利日、嵯峨の釋迦堂に人あまた参りて、通夜またりけるに、夜うちふけて僧の有けるが、經爲題目佛爲眼といふ句を朗詠にまたりけり、心計はすると思たりけり、孝道朝臣折ふしまいりあひて閑居たりけるが、朗詠はて、孝道かの僧にむかひて、おもまろう候つる物かなと式代またりけるを、僧心ちよげに思て、少居なをりて、是はすいぶんに孝道にならひて候し也といひたりけり、

〔和漢朗詠集上〕蓮

經爲題目佛爲眼、知汝華中植善根、源爲憲

〔源平盛衰記十七〕祇王祇女佛前事

佛ハ水干ニ白キ袴著テ、髮結アゲ調子取負セテ、

德是北長椿葉影再改、尊猶南面松花色十返ト朗詠シケリ、

〔吉野樂書〕一承安四年九月一日ヨリ同十五日ノ夜ニ至ルマデ、七條殿ノ御所ニシテ、後白河院今様ノ御會ノアリケルニ、○中

朗詠左大臣

德是北辰 瑤臺霜滿 變態積粉、此句、和漢朗詠集並不見、雞人曉唱

雞人曉唱、此ノ朗詠ノトキ、能聞人々大將殿コソ、朗詠ニテイトマ申サセ給トゾ云アヒケル、又秋夜欲曙、已上朗詠五首、



リ、○中 藏人辨朝隆三獻ノカハラケトル、又頭中將ノス、メニテ朗詠ライダス、佳辰令月ノ句ナ  
リ、頭中將朝隆ガヒモヲトク、人々ミナカタスグ、色々ノ衣ヲキタリ、用意アルナルベシ、頭中將朗  
詠、雖三百盃莫辭ノ句ナリ、○中 人々亂舞ノ後、ミコエイグシテ座ヲタチテ、御殿ノヒロビサシニ  
テ、ナダイメンハテ、宮ノ御方ニ參テ、朗詠難藝數反ノ後マカリイデケリ

〔和漢朗詠集〕下刺史

雖三百盃莫強辭邊土不是醉鄉此一兩句可重詠北陸豈亦詩國保胤

## 祝

嘉辰令月歎無極萬歲千秋樂未央謝偃

〔古今著聞集四〕文學少納言入道信西が家にて、人々あつまりてあそびけるに、夜深催管絃云題にて、  
當座の詩を作りけるに、皆人は作いだしたりけるに、敦周朝臣案じ出さぬけしきにて程へけれ  
ば、滿座興さめてけり、あまりにすみて侍ければ、有安が座のすへに有けるに、入道朗詠すべきよ  
しをす、めければ、第一第二絃索々といふ句を詠じたりけり、此心自然に此題によりきたりけ  
るにや、敦周朝臣やがて作りいだしたりけり、瀧吟水暗兩三曲、鶴唳霜寒第四聲、○此句和漢朗詠集並  
見、とつくりたりける、殊にその興有て人々感歎しけり、彼朗詠のこゝろいと相違なきにや、  
〔古今著聞集八〕好色妙音院のおとゝ師長原玄のびたる女をむかへさせ給て、尾張守孝定に、夜のあ  
けん程はからひて申せと仰られたりけるに、やうくよく成にける時、將軍在座、兔園之露未晞、  
僕夫待菴雞籠山欲曙、この句を朗詠にまたりけり、孝定が所爲かくこそあらまほしき事なれ、い  
といみじきことなりかし、

〔源平盛衰記十二〕師長熱田社琵琶事

師長公終夜爲神明納受、初ニハ法施ヲ手向奉リ、後ニハ琵琶ヲゾ彈ジ給ケル、○中 夜モヤウく、

老人

少於樂天三年、猶已衰之齡也、遊於勝地、一日、是非老之幸哉、管三品、管原文時

太公望之遇周文、渭濱之波疊面、綺里季之輔漢惠、商山之月垂眉、江匡衡

〔續世繼〕鳥羽の御覽、さぬきの院德崇位におはしまし、かばまぶらせ給しにこそ、このゑのみか

ど東宮にてまなめしける夜、にはかに内へ御幸鳥羽とて、殿上人せうくかぶりして、よにいり

てきたの陣に御車たてさせ給て、略中御車にて、春の夜あけなんとすといふ朗詠、又十方佛土の

中にはなにといふ文を、詠せさせ給て、佛のみな、たびくとなへさせ給ける、きく人みなみだ

ぐましくぞ思あへりけるとなむ、きこえ侍し、

〔和漢朗詠集〕佛事

十方佛土之中、以西方爲望、九品蓮臺之間、雖下品、應足、慶保胤

〔續世繼〕花六ちる庭の面、實能德大寺のおとゞ、藤原の御子は、右大臣公能のおとゞ、その御は、按察中

納言顯隆ときこえしむすめにおはす、此おとゞ管絃も身のざえも、かたゞおはすときこえき、

略中おとゞに朗詠したまへりけるなかに、はなやかなる御こゑして、羅綺の重衣たるとうちい

でたまへりける、としおいたる人など、なみだをさへなどして、むしろこぞりてめでおもへり、又

讃岐のみかど、德崇くらゐにおはしましけるとき、きさいのみやの御かたにて、管絃する殿上人

どもめして、よもすがらあそばせ給けるに、おほとのもおはしまして、朗詠つかまつれとおほせ

られけるに、このおとゞの中將など申けるときに、太公望が周文にあへるといだし給へりける

こそ、御こゑもうつくしう、みかど一の人の事にて、そのよしあることのいうにきこえ侍りけれ、

〔續古事談〕王道后寛、殿上ノ一種物ハ、ツ子ノ事ナレドモ、久シクタエタルニ、崇徳院ノスエツカタ、

頭中將公能朝臣ハ、絶タルヲツギ、廢タルヲ興シテ、神無月ノツゴモリ比ニ、殿上ノ一種物アリケ

めづらしくうちにいらせ給へりける時、月のあかく侍ける夜、むかしはかやうにはべる夜は、殿上人あそびなどこそうちわたりはし侍しか、さやうなることも侍らぬこそ、くちおしくなど申させ給ければ、いとばかしくおぼしめしけるほどに、月の夜めでたきに、りん／＼としてこほりしきといふた、いとはなやかなる聲して、うたひけるが、なべてなくきこえけるに、又いといたくしみたる聲のたうときにて、無量義經の微音まづおちてなどいふところを、うちいで、よまれ侍りけるが、いづれもく／＼とり／＼に、めでたくきこえければ、むかしもかばかりのことこそ、えき、侍らざりしか、いというなるものどもこそ侍りけれと申させ給けるにこそ、御あせもかはかせ給て、御心もひろごらせたまひにけれとき、侍し、後冷泉院御時、上東門院などいらせ給へりけるにや、又その人々は伊家の弁、敦家の中將などにやおはしけん、とぞ人は申侍し、ひがごとによ、

〔中右記〕寛治六年三月廿八日辛亥、今日有吉祥院聖廟作文、○中夜及深更、欲講詩俄天陰雨下、神明自有感應、歟、講席了後、雨脚頻下、已無歸與思、此間返朗詠、或管絃之在、長曲句、或指象魏而北轅句等也、

〔新撰朗詠集上〕春夜

古篇春止聲  
春夜欲明、望牛漢之西轉、夏日告朔、指象魏而北轅、以言

〔古今著聞集四學〕永久三年七月五日、式部大輔在良朝臣御侍讀にて、始て御前へ参りたりけるに、先朗詠をしける、幸逢堯舜無爲化、○德德是、○德德是非、老之幸哉、○德德以下七字、一本大公望遇周文等の句也、次古事をかたり申けり、

〔和漢朗詠集下〕帝王付法皇

幸逢堯舜無爲化、得作犧皇向上人、白○白居易

に夜もうちふけて世の中もまづかなるつかん今據一本改ほどに、齊信民部卿をめしてこよ  
ひたゞにはいかゞやまん、朗詠有なんやと仰られければ、いとかしこまりて、まばし煩ふけしき  
なるを、人々みゝをそばだて、いか成句をか詠せん今據一本改、すらんと待程に、極樂の尊を  
念する事一夜とうちいだしたりける、たぐひなくめでたかりけり、此句かきたる齊名やがて御  
供にさふらひけり、我句をしもさばかりの人の朗詠にせられたりける、いかばかりこゝろの中  
のすゞしかりけん、此句は勸學會の時、攝念山林を賦する序なり、

念極樂之尊一夜山月世世和漢朗詠集作正

圓先句句同

曲之會三朝洞花欲落、これは三月十五夜の

事也、九月十三夜に詠せられけるいかにとおぼゆ、但念佛の義ばかりにとりよれるにや、古人の  
所作仰而可信歟又見續世繼

〔郢曲相承次第〕大納言資賢

仁安元年、同三年兩度清暑堂神宴、雖有上首宗家卿藤家先祖家、資賢卿被仰拍子、院拍子合之時、宗家卿朗  
詠許也、是當家源之眉目也略、下

〔古今著聞集十六〕堀河内府入道藤原賴宗

大納言の時、くどく遊有ける、念佛禮讃などはて、朗

詠ありけるに、少納言阿闍梨なにがしとかやいひける僧、東方五百之座といふ句を詠すとて、五  
百の字をあやまりて、八十の座と詠じたりけるを、尾張の内侍簾中にてきゝて、八十といひだに  
はてぬに、今四百二十落ぬといひ出したりける、心はやさの程ありがたき事也、

〔新撰朗詠集下〕佛事

中夜八十之火、假唱鶴林之煙、東方五百之塵、長懸鷲峯之月以言

〔續世繼九〕

賢道々いとやさしくきこえ侍しことは、いづれの御時よりかはべりけん、なかごろのき

さき上東門院藤原一條子陽明門院藤原後朱雀后などにやおはしけん、ちかきよのみかどの御とき、



〔枕草子<sup>十一</sup>〕下すだれもかけぬ車のすだれをいとたかくあげたるは、おくまでさし入たる月に、  
 略○中こききぬのいとあざやかなるつやなど、月にはへておかしう見ゆるかたはらに、  
 略○中なをしのいと白きひきときたれば、ぬぎたれていみじうこぼれいでたり、  
 略○中月影のはしたなさに、うしろざまへすべり入たるを、ひきよせあらはになされて笑ふもおかし、  
 略○中りんくとして氷りまけりといふ詩を、返すくすんじておはするは、いみじうおかしうて、夜一よもありかまほしきに、いく所のちかくなるも口おし、

〔和漢朗詠集<sup>上</sup>〕八月十五夜<sup>付月</sup>

秦旬之一千餘里、凜々氷鋪、漢家之三十六宮、澄々粉飾、<sup>公衆傳</sup>

〔枕草子<sup>十二</sup>〕大納言<sup>伊藤原</sup>殿まいり給ひて、ふみの事などそうし給ふに、例の夜いたうふけぬれ

ば、<sup>略○中</sup>たゞひとりになりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、うしよつとそうする也、<sup>略○中</sup>うへ一

條のおまへのはしらによりかゝりて、すこしねぶらせ給へるを、かれ見奉り給へ、今はあけぬる

にかくおほとのごもるべき事かはと申させ給ふ、げになど宮<sup>藤原一條后</sup>のおまへにもわらひ申

させ給ふも、まらせ給はぬほどに、おさめがわらはの庭鳥をとらへてもちて、あす里へいかんと

いひて、かくしをきたりけるが、いかゞしけん、犬の見付てをひければ、らうのさきににげいきて、

おそろしうなきのゝ、まるに、皆人おきなどまぬ也、うへもうちおどろかせおはしまして、いかに

ありつるぞと尋させ給ふに、大納言殿の聲めいわうのねぶりをおどろかすといふ詩を、たかう

打出し給へる、めでたふおかしきに、ひとりねぶたかりつる目もおほきになりぬ、

〔和漢朗詠集<sup>下</sup>〕禁中

雞人曉唱、聲驚明王之眠、見鐘夜鳴、響響暗天之聽、<sup>都賀</sup>

〔古今著聞集<sup>四</sup>〕東三條院關白前太政大臣<sup>藤原</sup>兼家<sup>家</sup>九月十三夜の月に、東北院の念佛に參給へる

〔蓬萊抄〕正月二日殿上淵醉<sup>○</sup>或<sup>○</sup>用<sup>○</sup>三日

兩貫首已下於殿上有盃酌事經管屬文之隨其催獻朗詠雜藝等無定法

〔おもひのまゝの日記〕けふ<sup>○</sup>二月は又殿上の淵醉とてひしめくえいきよくの人々數をつくして廿人ばかりさふらふ

〔公事根源〕十一月五節

同日<sup>○</sup>中<sup>○</sup>丑<sup>○</sup>

寅日は殿上の淵醉あり朗詠いまやうなどうたひて三獻はて亂舞あり<sup>○</sup>下

〔枕草子<sup>七</sup>〕故殿<sup>○</sup>藤原の御ために月ごとの十日御經佛くやうせさせ給ひしを九月十日まきの

御ざうしにてせさせ給ふ上達部殿上人いとおほかり<sup>○</sup>中酒のみ詩すんじなどするに頭中將たゞのふの君月秋ときして身いづくにかといふ事をうち出し給へりしかばいみじうめでたし、いかでかはおもひいで給ひけん

〔和漢朗詠集<sup>下</sup>〕懷舊

金谷醉花之地花毎春句而主不歸南樓翫月之人月與秋期而身何去<sup>管三品<sup>○</sup>菅原文時</sup>

〔枕草子<sup>八</sup>〕雪のいとたかくはあらでうすらかにふりたるなどはいとこそおかしけれ<sup>略<sup>○</sup>中</sup>よひ

も過ぬらんとおもふほどにくつのをとちかふきこゆればあやしと見出したるに時々かやうの折おぼえなく見ゆる人なりけり<sup>略<sup>○</sup>中</sup>わらうださし出たれどかたつかたのあしはまもなが

らあるにかねのをとのきこゆるまでになりぬれどうちにもといふ事どもはあかすおぼゆるあけぐれのほどにかへると雪何の山にみてるとうちすんじたるはいとおかしき物也

〔和漢朗詠集<sup>上</sup>〕雪

曉入梁王之苑雪滿群山夜登庾公之樓月明千里<sup>謝靈運</sup>

定法也、絃管者與助音均附之。笙等樂笛各一管附之、數音古用、

朗詠用詩文和歌

〔和漢朗詠集上〕立春

逐吹潛開不待芳菲之候、迎春乍變將希雨露之恩。紀淑望

池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒。萬茂

年のうちに春はきにけりひと、せをこぞとやいはんことしとやいはん元方

柳無氣力條先動、池有波文氷盡開、今日不知誰計會、春風春水一時來。白居易

夜向殘更寒碧盡、春生香火燒爐燃。真岑春道

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立けふの風やとくらむ。實之

春たつといふばかりにやみよし野のやまもかすみてさはみゆらむ。忠岑

〔新撰朗詠集下〕風

雲霧輕身窺列子之云、鯢游授手問宋人之不龜。管家

沙鷗之眠易驚、陸惠曉之柳拂地、浦月之影漫動、孫子荆之枕揚波。齊名

迎晴拂盡牆陰雪、解凍翻來岸曲波。後中書王

枕冷唐妃專幸裏、襟飄魯聖以思程。以首

花の色は霞にこめてみえず共かをだにぬすめ春の山風。暹昭

我せこがきまさぬ宵の秋風はこぬ人よりもうらめしきかな。好忠

歌朗詠

〔伯氏新錄〕一鄧曲之事

鄧曲ハ管絃之間ニ是を謳候、其時附物として其聲にえたがひ笙、一管、笛、一管、篳篥、一管、三管にて附

候事ニ候、

〔萬葉緯九〕朗詠。（中略）今按大納言公任卿以所被朗詠集之時、應時宜詠歌、句中或取音或用調、具見鄧曲之內、與以和歌詠、歌曲節音聲異、歟、因茲從古所典、朗詠詠調點現在焉、

こえのたすけなく、さら／＼と常のことばをいふごとくうたふべし、甲の處など、かたちなどやかに首いがます、こゝろよきかほにて、聲に今いち段よけいあると、人にきかせうたふもの、けいこのつみたる人とあるべし、切々いきをのこして、聲をみな／＼出すべからず、ひくいきをこしのもとまでかよひ、腰は岩のごとくに、こしより上は只青柳のごとく、面は常よりもにうわに、かenseいちらすして、ゑりくびをはなれずして、かす／＼唱とも、そんなやうにうたふなり、鄧曲神樂、今様、催馬樂、足柄片下、田歌など、ひとつに音聲うたひ、みれんの内は、みな／＼一やうに唱などといふ事は、口をしき事なり、はかせ音振みな／＼それ／＼のめりかりあり、みな／＼そのはかせの内、にふちを入る、古人うたひのこしはべり、稽古のみたざるものは、何も一流に唱るものなり、一首／＼に心をいれて唱をりは、そのふりいでにき、中唱こゑは、稽古に鄧曲うたふときは、まづことにても、びはにても、糸にその音をうつして、急なる音を一段にめらして、一糸と立をき、平調の時はめぐりを合て、其はかせの聲にならひ、つまびきしてこえとためして、あふあはざるをためし、ひとにも聞てこゑを出し、こゑにて數を唱て、よく／＼合時に調子を正りつに合て、大音にていつしも唱とき、のやうに稽古すべし、後にまらべをく糸はなれて、聲おなじやうに定、ことに笙ひちりき吹合て、附物してかす／＼唱べき也、はかせおもく、ふうしの折目になんあるは、調子にうるとき人なり、調子合ぬるときはめぐりにかなふゆへ、ふしもめでたく、聲も出よきものなり。○下

〔樂家錄二十九〕

鄧曲附物大意

此草中以調名爲律名、惟舊例不改

抑謂鄧曲者、以歌朗詠之詩云爾、至于近代所傳曲四也、此曲御遊時於最終曲之前成之、蓋其詞唯一而或二返或三返歌之、但每返發聲之人相替、管聲附物之法略曰、自商角移于徵、而或至于宮音、凡宮調之曲、則宮、商、角、徵、黃、鐘、羽、鐘、涉也、他調、樂之可知之、於一曲之終、以宮音止之、是其



極樂尊 第一第二 羅綺重衣 八月九月 春過夏闌 傅氏巖嵐 德是北辰

私註謂之根本七首朗詠歟

〔和漢朗詠集<sup>上</sup>〕擣衣

八月九月正長夜、千聲萬聲無了時、白○白

〔和漢朗詠集<sup>下</sup>〕管絃付舞絃

第一第二絃索々、秋風拂松疎韻落、第三第四絃冷々、夜鶴憶子籠中鳴、第五絃聲尤掩抑、灑水凍咽流不得、白

羅綺之爲重衣、妬無情於機婦、管絃之在長曲、怒不闌於伶人、言○言

佛事

念極樂之尊、一夜山月正圓、先勾曲之會、三朝洞花欲落、紀齊名

丞相付執政

傅氏巖之嵐、雖風雲於段夢之後、嚴陵潮之水、猶涇渭於漢聘之初、言三品○  
春過夏闌、袁司徒之家雪應路應、旦南暮北、鄭大尉之溪風被入知、言原文時

〔新撰朗詠集<sup>下</sup>〕帝王

德是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻、後江相公○

音調

〔郢曲抄〕夫唱物音聲のことをまつ世のためにかきのこすものなり、郢曲もろくの朗詠どもを唱、そのふりつよからぬやうにして、聲のかすりなく、甲乙たゞしく唱もの也、六調子の内に雙調急音にとり唱事、催馬樂のふりのこゑにて、郢曲はつよきもの也、たゞゆるくとして、のどかに節九く、りつに合て、ひちりきの音あるともきこえず、笛笙もそれときこえぬやうに、合をよろしく目出度し、こえをながくとつかひて、かせのゆうとときこえるはあしく、たゞひといきに、

古事類苑

樂舞部五

朗詠

朗詠ハラウエイト音讀ス、和漢ノ詩文中ノ雅趣アル妙句ニ曲節ヲ施シ、琴、琵琶等ニ合セテ、吟唱朗詠スルモノナリ、摺紳又ハ文學ニ志アル者ノミナラズ、遊君白拍子ノ如キモ、宴席ニ於テ之ヲ詠ジ、遂ニ朝家ノ御遊ニモ亦之ヲ用キラル、ニ至リシガ、鎌倉幕府以後兵亂相踵ギタルヲ以テ、朗詠ハ漸次ニ衰替シテ、唯纔ニ其聲律音調等ヲ、樂家ニノミ傳承スルコト、ナレリ、

名稱

〔量壞集<sub>下</sub>〕朗詠<sub>ヲ、エ</sub>

〔書言字考節用集<sub>八</sub>〕朗詠<sub>ヲ、エ</sub>

〔文選<sub>一</sub>〕遊天台<sub>山</sub>賦

孫興公

凝思幽巖朗詠長川<sub>〔中略〕輪曰、〔中略〕朗高也、凝思坐於幽巖、高詠臨於長川、</sub>

起原

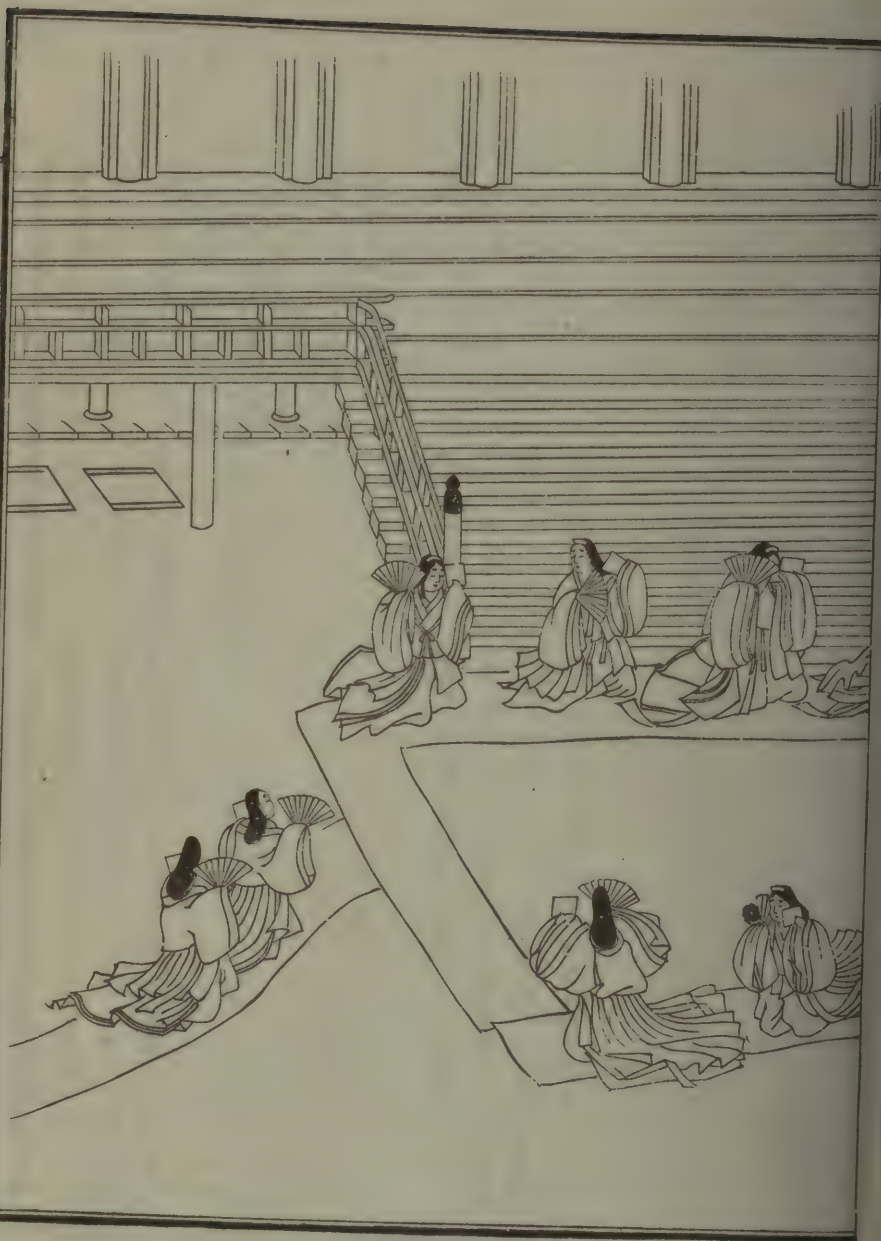
〔郭曲相承次第〕左大臣雅信

朗詠事

朗詠者、興從詩之詠聲、上古纔七首也、號之根本七首、其七首內、傳氏巖之嵐、春過夏闌、以上兩句雅信公左大臣第三度辭表名句也、件表作者、皆三品文時卿自身持來、此表秀句、有二之由稱之、大臣披見之、卽詠吟之、仍於當家者、以傳氏巖之嵐句爲朗詠秘曲、然間朗詠又以此大臣爲元祖也、<sub>○下</sub>

〔朗詠由來〕根本源家所詠朗詠

歛行、河陽舊縣先亡色、金谷新園無復榮、泣看々不曾厭、徒然奪魂亦損明、還知人間仙路近、重見桃  
李目前生、





〔踏歌圖〕  
平中行事  
繪卷所載



万春樂 舞人姿也、次西金堂次第如御監禮堂著座行事、下廳對座上間分、次東金堂次第樂習者有譜

〔日本書紀三十一〕七年正月丙午十六日漢人等奏踏歌

○按ズルニ、正月十六日ニ踏歌ヲ奏スル事ハ、歲時部踏歌節會篇ニ詳ナリ、

〔日本紀略二卷〕承平二年七月十四日、入夜命近臣踏歌、太后臨覽、到曉賜祿、

〔九曆〕天德三年十二月十六日、於殿上有踏歌、與左大臣實賴朝忠、朝成等候云々、右近中將元輔朝

臣壽言、兼通珍材取輪云々、伴踏歌等依去九月天變已停止、而依左大臣催奏、又被興行云々、時人爲不穩云々、

〔鹽尻四〕熱田宮踏歌ヲ見ル詩 正月十一日熱田宮前にて、宮人卯杖舞を奏し、陪從竹川を唄ふ、尾

張氏踏歌の頌を唱へ、高巾子の神人鼓鼓を振り侍るさまいとく昔おぼえたる、略下

〔鹿島志上〕踏歌祭 正月十四日、禰宜祝等梅花の枝を手毎にもち、太鼓をうち、笛をふき、笏拍子を

打て、御假殿を三度うち廻り、各神拜の式あり、

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷兩京畿内踏歌事

右被右大臣今月十四日宣稱奉勅、今聞里中踏歌承前禁斷、而不從捉搦、猶有濫行、嚴加禁斷、不得更

然、若有強犯者追捕申上、

天平神護二年正月十四日

〔延喜式理四十〕凡京都踏歌、一切禁斷、

〔凌雲集〕內藏頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守十三首略○中

奉和觀佳人蹋歌御製、

春女春粧言不及、無量無數滿華庭、心嬌膽小羞蹋步、聲裏微々壽千齡、洛津廻雪當韶影、巫嶺朝雲應

雲鬢尙恨無新樣

天人感呼

霧殿還嫌色不輕

聖主億千齡

明々聖主億千齡

千春樂

春歌清響傳金屋

千春樂

雙踏佳聲繞玉堂

千春樂

借問曲中何處有

天人感呼

仙齡延祚與天長

聖主億千齡

早年愛光華

千春樂

春遊不知厭

暮景落朱顏

猶恨韶光短

徘徊不欲還

聖主億千齡

以此爲急

〔年中行事秘抄〕

正月

踏歌

仁和五年正月十四日踏歌記云、議者多稱踏歌者、新年之祝詞、累代之遺美也、歌頌以延寶祚、言吹以祈豐年、豈管縱樂遊於管絃、惜時節於風景而已哉、宜依承和事實、以作每歲長規、

〔江談抄〕

佳辰令月秋無極

萬歲千秋樂未央

謝任雜言詩

此詩踏歌詩也、古塔瓦銘有萬歲千秋樂、未央字、今案件文見唐神州三寶威通錄、上件錄云、仁壽二年正月、復分布舍利五十三州、至四月八日、同年時下其州、如左云々、其中梨州塔地下瓦文千秋樂云々、件錄、唐麟德元年、終南山釋氏所撰也、

踏歌法

〔教訓抄〕

踏歌樣

持統天皇ノ御時、始之家

正月十六日、內裏ノ女踏歌、節會云、坊家夷遣次第、加白馬、節會舞、妓庭、羅舞、

有男舞

萬歲樂、延喜樂、

古記云、退出音聲、感恩多、同十五日、八幡宮寺踏歌、先吹雙調調子、著小忌童

等行道ヲス、其尾ヲ付テ踏歌ヲウタウ、

備馬樂也、右一者多武、盡動之、其次樂人等歌調ニ付テ吹ト云々、

正月十四日夜、興福寺ノ金堂

四金堂、東金堂、

有踏歌

金所、不似、

先於中門吹雙調調子

有別、

次御監唱聲歌

左一者、別名也、

其調云、大唐日

會月節、

於之萬春樂

樂歌、

事吹終コレハ奏參音聲シテ、列參即入御堂行道ス一匝、

行道樂、別曲也、

行道終ラバ各著座

御監正面、東、

次東西ニサシ筵ニ居ル

四上、

次牛王、次香之水、

左手、

度、右肩、

大導師

調アリ、

次事吹

樂所申、

其詞有別、

次舞、

即爲退、

裝束ハ衣冠

サ、

イ、

左手

度、右肩、

安作號驗無窮新年樂平安新年正月北辰來滿宇韶光幾處開麗質佳人伴春色分行連袂儼皇核新  
已上物有差樂平安卑高泳澤洽歡情中外含和滿頌聲今日新京太平樂年々長奉我皇庭新皇賜五位

〔朝野群載二十〕樂章

踏歌章曲

萬春樂萬春樂萬春樂

延曆休期帝化昌萬春樂

我皇延祚億千齡萬春樂

願以佳辰掌樂事萬人感呼

女踏歌章曲七首

明々聖主億千齡千春樂

網疎刑措還千古天人感呼

明々聖主億千齡千春樂

悅以使民民悅服天人感呼

明々聖主億千齡千春樂

南山雪盡春峯遠天人感呼

明々聖主億千齡千春樂

曉光偏著青樓柳天人感呼

自此以下爲破

明々聖主億千齡千春樂

我皇延祚億千齡萬春樂

百辟陪筵華幄內天人感呼

人霑湛露歸依德萬春樂

千々億載奉明王萬春樂

無事無爲唯賞豫千春樂

治定功成太平年千春樂

深仁潛及三泉下千春樂

上月韶光早先春千春樂

北闕煙生瑞氣淳千春樂

君王曉奏旒蘇帳千春樂

寒色金舞玉砌梅天人感呼

宮女春眠常懶起千春樂

元正慶序年光麗萬春樂

千般作樂紫宸場萬春樂

日暖春天仰載陽萬春樂

凝旒端拱任群賢千春樂

鴻德遐充六合中千春樂

階前細草綠初新千春樂

春日芳菲遠興催千春樂

被催中使繪粧成千春樂



ナク、闇夜踏歌セシムト云フ而シテ歌曲ハ始メ唐詩ヲ用キシガ、後ニハ唐詩ノ外ニ、我家此殿竹河、萬春樂等ノ曲ヲ用キタリ、兩京畿内ニ於テ私ニ之ヲ行フ者ハ、官ノ嚴禁スル所ナリシガ、神社及ビ佛寺ノ踏歌ハ、近代マデ行ハレタリ、而シテ此篇ハ、歲時部踏歌節會篇ニ關スルモノ、勢カラズ、宜シク參看スベキナリ、

名稱

〔釋日本紀十五〕奏踏歌私記曰、今俗曰阿其禮走、此歌曲之終、必重也、

〔伊呂波字類抄太事〕踏歌本朝事始云、天武天皇三年正月朔、朝大極殿、詔男女無別、闇夜踏歌、具輪曆也、顯類氏治、女踏歌聖武天皇天平十四年正月十六日、天皇御大安殿、

天下之時也、案、群臣酒酣奏、五節田舞、了更令、少年童女踏歌、

〔倭訓栞前編二〕あらればしり 踏歌をいふ、持統紀に見ゆ、宣命譜にはあられまじりとよめりと、

公事根源に見えたり、男踏歌は正月十四日、女踏歌は十六日也、聖武紀に天平元年、同十四年に此事あり、釋日本紀に、此歌曲之終、必重、稱万年阿良禮、今改云萬歲樂と見えたり、あられば可有といふ、音便也といへり、四時調攝牋に、唐觀燈士人作踏歌唱之、歌曰、長安少女踏春陽と見え、踏歌の字此義也、踏歌章曲、女踏歌章曲、具に朝野群載に見ゆ、

〔速水見聞私記九〕曲水宴踏雪踏歌之事

振雅雲箋卷第三三十二葉曰、○中宮女及宦官士庶之婦踏歌三日、聲調徹入于雲中、

我朝踏歌節會和訓、アラレバシリト云、此和訓ヲ解シタル書未見、依茲馬近年色々難思之不考

得、依件書小出氏踏歌ノ和訓ノ解、太面白事也、踏雪踏歌ト有之、踏歌ハ謠歌舞也、其舞ヤウ微ノ

降テ飛ガ如ク舞ユエニ、アラレバシリト訓ス、是秘説也、輒不可傳事也、

〔唐書二十〕宣宗每宴群臣備百戲、○中有慈嶺西曲士女踏歌爲隊、

〔類聚國史七十二〕延暦十四年正月乙酉十日、宴侍臣奏踏歌、曰、山城顯樂舊來傳、帝宅新成最可憐、郊

野道平千里、望山河、擅美四周連、新京樂、平安、冲襟乃眷八方中、不日愛開憶、載宮壯麗裁、規傳不朽、平

歌章

〔萬葉集九〕登筑波嶺爲繼歌會日作歌一首并短歌

鷺住筑波乃山之裳羽服津乃其津乃上爾聲而未通女壯士之往集加賀布繼歌爾他妻爾吾毛交牟  
吾妻爾他毛言問此山乎牛掃神之從來不禁行事叙今日耳者目申毛勿見事毛咎莫

繼歌者東俗語曰賀我比略反

右件歌者高橋連蟲麻呂歌集中出

〔續日本紀十〕天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣男女二百四十餘人五品已上有風流者

皆交雜其中正四位下長田王從四位下栗栖王門部王從五位下野中王等爲頭以本末唱和爲難派

曲倭部曲淺茅原曲廣瀬曲八雲刺曲之音令都中士女縱觀極歡而罷賜奉歌垣男女等祿有差

〔續日本紀三十〕寶龜元年二月庚申車駕行幸由義宮三月辛卯葛井船津文武生藏六氏男女二百

三十人供奉歌垣其服並著青摺細布衣垂紅長紐男女相並分行徐進歌曰乎止賈良爾乎止古多智

蘇比布美奈良須爾詩乃美夜古波與呂豆與乃美夜其歌垣歌曰布智毛世毛伎與久佐夜氣志波可

多我波知止世乎萬知天須賣流可波可母每歌曲折舉袂爲節其餘四首並是古詩不復煩載時詔五

位已上內舍人及女嬭亦列其歌垣中歌數閱訖河內大夫從四位上藤原朝臣雄田麻呂已下奏和儻

賜六氏歌垣人商布二千段綿五百屯四月丁酉正六位上船連淨足東人融麻呂三人族中長老率

奉歌垣並授外從五位下

## 踏歌

踏歌ハタフカト云ヒ又アラレバシリト云フ日本書紀持統天皇七年正月丙午ノ條ニ漢人

ノ踏歌ヲ奏セシ事見エタルヲ以テ始トス又一說ニハ天武天皇三年正月詔シテ男女ノ別

哀余志斯毘都久阿麻余斯賀阿禮婆宇良胡本斯耶牟志毘都久志毘如此歌而闕明各退

〔日本書紀十六〕十一年○仁八月、億計天皇崩、大臣平群真鳥臣專擅國政、欲王日本、陽爲太子、武營

宮了、卽自居、觸事驕慢、都無臣節、於是太子思欲聘物部龜鹿火大連女影媛、遣媒人向影媛宅期會、影媛會軒真鳥大臣男餉、此云恐遠太子所期報曰、妾望奉待海柘榴市巷、由是太子欲往期處、遠近待

舍人就平群大臣宅奉太子命、求索官馬、大臣戲言陽進曰、官馬爲誰飼養、隨命而已、久之不進、太子懷恨、忍不發顏、果之所期立歌場、衆歌場此云執影媛袖、踴躍從容、俄而餉臣來排太子與影媛間立、由是

太子放影媛袖、移廻向前立、直當餉歌曰、之哀世能催鳴理、鳴理阿蘇、寐俱思寐、我簾多泥、爾都摩陀氏理彌喻、一本以之裏餉答歌曰、飲彌能古能耶、陸耶、智羅智、枳瑜履世登耶、彌古太子歌曰、飲真

陀振鳴多黎播枳多撒氏、晨智儒登慕須衛婆陀志氏、謀阿波夢登茹於謀、賦餉臣答歌曰、飲哀枳彌能耶、陸能矩彌智、枳智哥、梅騰謀、催鳴阿摩之耳、彌智、智農俱彌、柯枳、太子歌曰、於彌能姑能耶、賦能之魔

柯枳、始陀騰余彌、那爲我與釐據魔耶、黎夢之魔、柯枳、一本以耶賦能之魔、柯太子贈影媛歌曰、舉騰我彌、爾枳謂屢箇、皚比謎、拈摩、羅磨、阿我、真屢拈摩能、阿波寐之羅陀魔、餉臣爲影媛答歌曰、於哀枳彌

能、彌於寐能之都波、拈夢須寐陀黎、陀黎耶、始比登謀、阿避於謀、婆催俱爾、太子甫知、餉曾得影媛、〔釋日本紀〕攝津國風土記曰、雄伴耶波比具利岡、此岡西有歌垣山、昔者男女集登此上、常爲歌垣、

因以爲名、

〔常陸風土記〕香島郡童子女松原、古有年少童子、俗曰加味乃乎止賣、稱那賀寒田之郎子、女號海上安是

之娘、子並形容端正、光華鄉里、相聞名聲、同存望念、自愛心熾、經月累日、歌之會、俗曰字太我、曉也、邂逅

相遇于時、郎子歌曰、伊代是留乃、阿是乃古、麻部爾、由布、志乎、爾波、多々、娘、子報歌曰、止、奈西及古、何、夜、志乎、爾波、多々、頻咲、佐久理和乎、彌、便欲相語、恐人知之、避自遊場、蔭松下、携手促膝、陳懷吐憤、既釋故戀之積疹、還起新歡之

の並べるを垣といふ、友垣の言の意也、踏歌と同義成べし、其服並著青摺細布衣、垂紅長紐、男女相並分行徐進、歌曰云々と、續紀に見えたり、

〔古事記傳 四十三〕歌垣と云名の意は、垣は借字なり、書紀に歌垣と書きたるも、名の義には當らず、けなれど、此名には其事を云る名にこそあれ、其歌加賀比にて、賀比を切めて伎とは云なり、濁たがへぬを云名には非れば、場とは云べきに非ず、加賀比にて、賀比を切めて伎とは云なり、濁たがへぬを、加を濁り、加を濁るが故に、古への音便にて上略のさて加賀比と云は、右の長歌に、加賀布とある如く、本用言なるを、體言になしたる名なり、其名は又加具禮交の切まりたるなるべし、萬葉九十四勝鹿真間娘子を詠る長歌に、夏虫之入火之如水門入爾船已具如久歸香具禮人乃言時云々と、此外には見えざれども、要なるべし、是なり、加賀比の字はよく當れりとも、往來説ととも、古より書也、然云る古言のあり、事なるべし、是なり、加賀比の字はよく當れりとも、往來説ととも、古より書又人と物を互に云あらし、加賀比に用ふべき由は見え、さて又今世の言に、加賀比よりうづれる言にやあらむ、されば歌賀伎とは、互に歌をよみて、加具禮交すよしの名なるべし、さて上に引る風土記萬葉などに依に、歌垣は田舎にては山上にてもえたりと見ゆるを、倭などにては市にて爲しにこそ、此時のも書紀に依に、海石榴市なり、萬葉十二に、海石榴市之、八十箇解、立平之、結繩乎、さて續紀十一に、天平六年二月癸巳朔、天皇御朱雀門覽歌垣、略此續紀の頃は、實の歌垣には非ず、古の歌垣の狀ばかりを、まねびて爲し、一種の風流藝にぞありけむ、

歌垣例

〔古事記 清和〕平群臣之祖名志臣、立于歌垣、取其哀祁命、○願將婚之美人手、其娘子者、菟田首等之女、名大魚也、爾哀祁命亦立歌垣、於是志臣厭曰、意富美夜能、哀登都波多傳須美加多夫祁理、如此歌而乞其歌末之時、哀祁命歌曰、意富多久美、哀遲那美許曾須美加多夫祁禮、爾志臣亦歌曰、意富岐美能、許呂哀由良美、淡美能、古能、夜幣能、斯婆加岐伊理多、多受阿理、於是王子亦歌曰、斯本勢能、那哀理、哀美禮婆、阿蘇里久流、志里賀波多傳、爾都麻多氏理、美由爾志、志臣愈忿、歌曰、意富岐美能、美古能、志婆加岐、夜布士麻理、斯麻理母登本、斯岐禮牟志婆加岐、夜氣牟志婆加岐、爾王子亦歌曰、意布



一葉室侍從殿、臨時祭舞人御參勤ニ付、東遊舞御入門之儀、御宅へ服中之者參上之儀、御差支ニ付、今日持明院殿ニ而舞合ニ付

東遊駿河舞

右者雖爲秘曲、就石清水臨時祭御用、奉授葉室侍從殿者也、

文久三年三月

正五位下治部少丞兼右近衛將監伯近陳

右之通、別間ニ而御渡シ申上ル、

雜載

〔源氏物語六末摘花〕だいはん所にさしのぞき給て、くはや昨日のかへりごと、あやしく必ばみすぐさるゝとて、なげき給へり、女房達何事ならんとゆかしがる、たゞ梅の花の色のごと、みかさの山のをとめをばすてゝと、うたひすさびて出給ひぬるを、猶命婦はいとをかしと思ふ、

〔源氏物語湖月抄六末摘花〕咲○風俗と花鳥にあり、奥入には求子の歌と見ゆ如何、求子駿河舞とて東遊にあり、風俗は別の事也云々、一註可尋、

〔枕草子九〕まひは

するがまひ もとめこ

## 歌垣

歌垣ハ一ニ歌場ニ作り、並ニ之ヲウタガキト云フ、又繼歌ノ字ヲ用キテ、カガヒトモ云ヘリ、數群ノ男女、山上或ハ市場ニ集リ、互ニ歌謠シテ踏舞シ、相聘スルナリ、而シテ聖武稱德兩朝ノ時、其歌垣ノ狀ヲ摸シテ歌舞セシメシ事アリ、

〔倭訓栞前編四〕うたがき 日本紀に歌場と見え、古事記續日本紀に歌垣と見えたり、うたへる人

名稱

佛會奏東遊

競馬奏東遊

へ、此時十天樂を奏し奉る、それより東遊を歌舞す、陪從の内一人ハ神樂歌を唱へ、外二人ハ筆策と高麗笛を役す、舞曲終りて御膳をすへすを下御膳と稱して、また此時伶人羅陵王を奏する事とかや、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年三月十四日戊子、於東大寺、設無遮大會、供養毗盧舍那大佛、中略先令內舍

人端貌者廿人、供倭舞、次近衛壯齒者廿人、東舞、

〔江家次第十九〕臨時競馬事

競訖次運近衛府奏東遊勝方以下舞少將者延喜十八年、神泉苑、左勝奏風俗、少將以下八人舞、朱雀

○雀下恐左勝、左近欲供東遊、而依日暮止云々、若持者左右可奏、四月駒牽時者、右近奏音樂、納蘇利、

狛犬、次東遊、右駿河舞、左求子、

〔宇槐雜抄〕保延三年九月廿三日壬午、今日仁和寺競馬行幸也、廿四日、參仁和寺、中略騎射了間、舉

松明立、柱松件柱松立、又西庭有立明、次左近府奏駿河舞、舞人權少將公通、同爲通將監下毛野厚利、

皆著束帶、帶弓箭、出自馬臺北舞之、舞了歸入、左方依無琴柱申事、由召渡右將監近方、然而近方依著

舞裝束、不採琴、如不遭祭之鳥、次右舞求子權少將藤忠策、依承、同仕、同立、同不、同之、同申、

出自馬臺南舞之、舞了歸入、右近無笛吹、申事由召左府生資種、令吹笛、

〔東遊歌圖〕堀河右大臣殿藤原宗原流、大宮右大臣殿藤原家俊按察使大納言藤原宗忠、皆

此人々次第所傳也、

〔樂家錄四十八〕每歲南都春日社祭禮之日、有東遊之歌、京都樂工多久富家傳勤之也、父多久貴之時

有故障、因傳彼曲余家弟安倍季高令役之、其時季高雖爲六位、著五位人之上、是依古例也、或曰、以歌

爲本故崇之、附物者爲助、歌聲耳、中華之奏音樂、亦歌者在、上、是崇歌聲之故也、

〔狛近陳日記〕文久三年三月朔日未

弓場代之邊停立、

一次被馬御覽、

一召内藏寮使内侍賜宣命、

一次檢非違使山城使、御幣馬寮使、飭車舞人近御使陪從、内藏寮使以下行列、每歲之通也、各後ニ牽

馬日御門之外ニおゐて乗馬ス、

一下ノ社 參鳥居之外に而下馬、一ノ鳥居之内ヨリ如禁庭、近衛使舞人次陪從、歌筆、篳篥、和琴を

發し、廊門之内に參進して止之、

一次社頭之作法有之、内藏使奉仕して近衛使於拜殿捧宣命、此内東遊走馬遣之文ニ申シ給フ事

也、

次近衛使下テ自拜殿庭上著胡床、次陪從六人立列、次舞人庭中進舞、駿河舞、此歌和琴、篳篥、篳篥奏之、

舞畢而退、袍右之肩を袒、又進舞求子、陪從奏スル事同前、終而各退出、駿河舞求子之歌ニ首有歌替也、外之社ニ而ハ其社其

社にて歌替シ多家傳來ス、

一次上ノ社參行裝社頭之儀等、大概如下ノ社之儀、

一舞人六人、伯氏陪從ハ歌一人、多氏和琴一人、多氏但四、辻家篳篥壹人、伯氏篳篥一人、伯氏琴持二人、多氏

和琴之本末を二人にて持テ立列ス、多氏所作之ニ付、和琴ハ三人タリ、都合六人、舞人陪從共に近

衛之將監將曹也、

〔日光山志〕五東遊 御祭儀の節御旅所にて奏する舞曲なり、伶人の内七人にて修せり、其内舞人

四人は、紅紗の袍に下襲、藤色表袴ハ白精好に青摺の模様、下袴ハ緋精好の大口、陪從の三人ハ紫

の紗袍に蠟虎を縫たる蠻衣、下襲ハ玉虫色紫の刺貫、右の七人ともに騎馬にて神輿に供奉シ、御

旅所に至る、入御の節、伶人御安座樂として、拔頭を奏す、御三品立の御膳を奉る、是を上り御膳と唱

近衛府官人中堪歌曲者十五人爲陪從、內藏寮儲幣依穢停止、令藤滋實於彼所邊祓祈云々、  
〔日本紀略<sup>朱二</sup>〕天慶五年六月廿一日癸酉、奉東遊走馬十列於祇園社、依東西賊亂御賽也、

〔日本紀略<sup>村四</sup>〕應和二年十月七日辛卯、左大臣<sup>實賴</sup>藤原參大原野社、奉東遊、

〔江家次第<sup>四六</sup>〕平野祭

自寛和年中被奉東遊、使殿上五位不必相侍、

〔狛近德日記〕文化十年十一月十日酉

一春日若宮御祭禮東遊御改正ニ付當年々大人相勤候故、勤方之義、殿下<sup>江</sup>近之參上相伺候處、賀茂祭東庭之通片舞可宣旨被仰付候旨近之入來ニ而被申候也、

〔狛氏新錄〕一東遊之事<sup>但東遊ハ總名也</sup>

一四月中之酉日、自禁裡近衛使賀茂下上之社參向、當日平旦、近衛使<sup>格年々左近衛中將也</sup>里亭<sup>江</sup>舞人陪

從十二人參集御使之亭ニ而葵桂を挿頭華參御所舞人六人<sup>狛氏近衛中將</sup>次近衛使<sup>中將</sup>次陪從

六人<sup>狛氏多氏近衛將監</sup>行裝整、禁裡自御唐門參內、此時先御使、次舞人陪從相從、弓場殿之前ニ進<sup>今ハ弓場殿ナリ</sup>

代<sup>シ、弓場</sup>に進、笛簞<sup>二</sup>人物音ヲ發ス、物音ヲ發候事ハ御使參內之儀をまらしめ申爲なり、時に藏人近

衛使の前に出、互に一揖あつて及奏聞作法有て、夫より御使長橋東之妻に著座、尤清凉殿出御、簾

外御廣椽南面殿下著座、近衛使ニ居、衛重賜獻此間長橋之自南陪從歌筆、簞笛和琴を發し參進し

て長橋之内西上北面に立列、次舞人袍、右之肩をぬぎ庭中進出、西面ニ求子を舞、庭上ハ清凉殿之

東庭也、

求子計を舞を片舞ト云、今日東遊の體御覽までに片舞ばかりにて候、駿河舞、求子兩舞奏候を

諸舞と申なり、

舞畢而舞人陪從長橋之外退ク、御使賜祿肩懸て、御使下、自長橋、於庭上拜舞、舞蹈也、畢而退出、暫ク



大原野祭儀

近衛等供東舞

〔江家次第第六〕石清水臨時祭試樂

舞人進寄吳竹臺下若被仰一舞者藏人頭奉仰渡御前如前之經失竹臺四仰一舞二人進入露臺出自

當御前間南北間上謂可在北而舞以右進立御前舞八拍子次他舞等次第相分進立駿河舞畢自

上退到竹臺下相右只組袖許不進出御前舞求子如前畢自下退舞人出畢陪從反歌大比退出

公卿以下退

同途中以後事

使著南一間半帖再拜之後讀宣命略又再拜返祝之後廻御馬八復中門座次東遊

陪從入自東門立舞人東中門舞人入自南中門立舞殿駿河舞畢退出祖又進舞

東遊畢次御神樂

〔江家次第第六〕同野祭儀四月十一日

廻御馬七次東遊次使以下退於東門外馳御馬歸參可申案内歟

賀茂祭使

陪從發物音參進堂酒部所舞人進立舞北上西行舞畢退出略陪從等於仙華門外發歌笛音漸登

進立於長橋內次舞人進出於庭中舞求次舞畢舞人以下退出

〔公事根源六月〕祇園臨時祭

つかひ殿上五位東遊を奉らる

十五日

〔年中行事秘抄十一月〕下酉日賀茂臨時祭事

寛平元年十月廿四日午御記云未登祚之時鴨神託人曰略仍自去年調備馬十疋令馳又習東舞

舞法

〔樂家錄<sup>三七</sup>〕東遊之舞

舞之次第、先陪從出<sup>是則歌方人也</sup>、次笛笙<sup>已上各人管以三首爲始、立于舞臺右傍</sup>、次舞人出作大輪立定後奏音取當曲歌附

物舞人入後止曲、

〔續教訓抄<sup>十一上</sup>吹物〕又求子駿河舞ヲバ諸舞トイフ、求子バカリヲバ片舞トイフ、歌モ則諸舞ノトキ

ハ初ヨリ歌之、片舞ノトキハ第三句ヨリ歌之、

〔樂家錄<sup>三七</sup>〕求子片舞諸舞之事

求子駿河舞之兩曲、當初爲番舞乎、<sup>略下</sup>

〔伯氏新錄〕一東遊之事、<sup>但東遊ハ總名也</sup>

一東遊と申にて、舞樂之時奏し候は東遊の駿河舞求子をひとつに合候て、童舞<sup>四人</sup>或は二人に

て袍袴ともに青摺の裝束に冠細纓老懸にて舞申候陪從三人、裝束衣冠歌一人、箏<sup>一人</sup>笛<sup>一人</sup>

舞臺の脇に立別れ奏之、舞申候事にて候、此節番舞會利古を奉候、

一近世は中絶に候處、近年賀茂祭御再興に付、辻故肥後守高季、辻伯耆守近家蒙勅命、辻家傳來之

古譜備天覽再興之、

舞人

〔花鳥餘情<sup>十松風</sup>〕今案物節といふは、近衛とねりの中、東遊に達したるものを物節に補す、其中に番

長府生などをもまはせる也、是によりて春日祭賀茂祭の使の羽林、東遊の近衛十人召具するに、

物のふじの近衛求子、するがまひなどいふ事をつとむる也、

○按ズルニ、物節ノ事ハ、官位部左右近衛府篇ニ載ス、

神事奏東遊

〔儀式〕春日祭儀

馬寮牽神馬廻社八度、訖賜頭并隴人神酒、訖退出、次近衛少將率近衛等人而東舞、

天衣（衣）己（於）曾（曾）與利天己曾（於）也（安）末（安）波（安）與（良）禮衣（衣）止乎女

〔大鏡（宇多）〕かもの臨時祭はじまること、この御ときよりなり、（略）あづまあそびのうたは、とし行の朝臣のよみけるぞかし、

ちはやぶるかものやしろのひめ小松よろづ世ふともいろはかはらし、これは古今にいりて侍り、

〔公事根源（六月）〕祇園臨時祭

十五日

天延三年の東遊の歌にいはく

神の代の八坂のさと、今日よりぞ君が千年はかぞへはじむる

〔後拾遺和歌集（二十）〕祇園一條院御時、はじめて松尾の行幸侍けるに、うたふべきうたつかうまつりけるに、

源兼澄

ちはやぶる松のを山の影みればけふぞちとせのはじめなりける

後三條院御時、はじめて日吉社に行幸侍けるに、東遊にうたふべきうた、おほせ事にてよみ侍ける、

大貳實政

あきらけき日吉の御神君がため山のかひあるよろづ代やへん

おなじ御時、祇園に行幸侍けるに、あづまあそびにうたふべき歌めし侍ければよめる、

藤原經衡

ちはやぶるかみのそのなる姫小松萬代ふべきはじめなりけり

式部大輔資業伊與守に侍ける時、彼國の三島明神に、あづまあそびして奉けるをよめる、

能因法師

止於<sub>レ</sub>也安<sub>レ</sub>奈遠於<sub>レ</sub>可安<sub>レ</sub>介衣<sub>レ</sub>也安<sub>レ</sub>安末安<sub>レ</sub>乃於<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>  
可安<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>川字<sub>レ</sub>乃於<sub>レ</sub>引於<sub>レ</sub>介衣<sub>レ</sub>也引乎乎乎乎

駿河舞歌

也宇止波末安<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>須留可奈安<sub>レ</sub>留安<sub>レ</sub>宇止於<sub>レ</sub>波安<sub>レ</sub>末安<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>宇

知與須留奈見波奈奈久佐安<sub>レ</sub>乃伊毛於<sub>レ</sub>己止己曾與志己止己曾與於<sub>レ</sub>志以<sub>レ</sub>奈

奈久佐安<sub>レ</sub>乃伊毛於<sub>レ</sub>波安<sub>レ</sub>己止己曾於<sub>レ</sub>與之<sub>レ</sub>安戶留止支伊佐佐安<sub>レ</sub>禰

衣奈武也安<sub>レ</sub>奈奈久字<sub>レ</sub>佐乃伊毛於<sub>レ</sub>己止己曾與之己止己曾與之

伊波太之太安<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>可佐和須字<sub>レ</sub>禮太利也伊波太之太安<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>止乃波良安<sub>レ</sub>

毛於<sub>レ</sub>志留久毛於<sub>レ</sub>可安<sub>レ</sub>奈安<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>可佐末川利於可武也志良佐良安<sub>レ</sub>武<sub>レ</sub>

安世可曾於<sub>レ</sub>乃於<sub>レ</sub>止乃波志良安<sub>レ</sub>佐安<sub>レ</sub>良武<sub>レ</sub>伊波太奈留也太戸衣<sub>レ</sub>

乃於<sub>レ</sub>止乃於<sub>レ</sub>波安<sub>レ</sub>知可支止奈利乎於<sub>レ</sub>

安奈也須奈也須良安<sub>レ</sub>介衣<sub>レ</sub>安奈也須字<sub>レ</sub>良也須良安奈也須良介衣<sub>レ</sub>禰利乃乎乃

己呂毛乃曾天乎太禮天衣

知止利由惠<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>波末仁天天<sub>レ</sub>出安曾不知止里由字<sub>レ</sub>惠仁<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>安也毛奈支己末

川可字禮仁<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>安見名波利曾安見奈波利曾

毛止女子歌

知波也不留可毛乃也安<sub>レ</sub>志呂<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>比女己末川字<sub>レ</sub>安波禮<sub>レ</sub>

安波禮

於保比禮

於保比禮也安<sub>レ</sub>乎比禮衣<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>乃於<sub>レ</sub>也安<sub>レ</sub>末安<sub>レ</sub>波安<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>與利以<sub>レ</sub>





二歌

乎  
乃

乎引乎引乎引已同上音乎

已上二曲、唱各一度

駿河歌有同舞音唱

也字止者末爾引須留加馬河

以毛於古止古曾餘之

禮天衣重安奈也須良介安

於安美奈者利曾

以者太之太江引加左和須禮太利也並以者太之太江引止乃者良毛之留久毛可奈也影可左末川里於並

可无、可左末川利於可无也

〔郢曲抄〕催馬樂にうたひがへはありといへども、諸國風俗歌なれば大曲の名是なし、足柄は神歌にて、風俗といへども、其まなかはることなり、するがまひあづま遊びなど、いふも、是なん足柄のうらなるべし、あしがら明神の神歌ゆゑに、風俗といへどもそのをんあり、

## 〔神樂歌新釋〕東遊の事

あづまあそびとは、一歌二歌駿河舞等、駿河相摸の地名みゆれば、東の歌をうたひて遊ぶによりいふなるべし、一歌の詞の中に左加无乃禰とあり、萬葉十四に、相摸禰乃乎美禰云々とあり、二歌に奈乎加介也未乃可川乃介とあり、これも同卷に阿之賀利乃和乎可難夜麻能可頭乃木能とあれば、これを據とす、次に駿河歌に宇止者末、また以者太之太江などあり、和名抄志太郡あり、日本德國風土記とて殘篇なる書に、薦河國止駄郡浦ニヶ云々、止駄郡東限岩田山などあれば、是らによりて東遊といふなるべし、はたかの迎具良といふは、其處にて歌垣の遊わざの有けむを、やがて朝廷の樂に用ゐはじめしが、そのはじめにてやあらん、上古の國栖の歌笛を召し、ためしなとにやありけん、

題原

〔續教訓抄十一上吹物〕

駿河ウドハマニ、天人ノオリテマヘリシコトナリ、アヅマアソビトテ、イマニア

ルハコレナリ、野叟ノミテマナビツタヘタルナリ、東國ニテノコトナルユエニ、アヅマアソビトハナヅケラレタルニコソ、

或記ニ云、人王廿八代安閑天皇ノ御宇、敎到六年丙辰歲、駿河國宇戶濱ニ、天人アマクダリテ歌舞シタマヒクレバ、周瑜ガ腰タヤカニシテ、海岸ノ春ノヤナギニオナジク、回雪ノタモトカロクアガリテ、江浦ノユフベノカゼニヒルガヘリケルヲ、或翁イサゴヲホリテ、中ニカクレキタミツタヘタリト申セリ、今ノ東遊トテ公家ニモ諸社ノ行幸ニハ、カナラズコレヲ用キサセラル、神明コトニ御納受アルユエナリ、其翁ハスナハチ道守氏トテ、今ノ世ニテモ侍ルトカヤ、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

辰日○中一觴之後吉野國栖於儀鸞門外奏歌笛并獻御贊

〔延喜式三十一〕凡諸節賜群官饗者正月一日十六日九月九日等三節親王已下次侍從已上及命婦

大歌立歌人國栖笛工九月九日除大歌立歌人加文人正月七日十七日五月五日七月廿五日十一月新嘗會等五

節親王已下五位已上及內命婦大歌立歌人國栖笛工○中

凡諸節會吉野國栖獻御贊奏歌笛每節以十七人爲定國栖十二人笛工五人但笛工二人在山城國綴喜郡其十一月新嘗會

各給祿有位調布二段無位庸布二段

〔古事記傳三十三〕小右記に寛弘八年正月一日乙亥云々無國栖奏依不參上也近年如之是大和守

頼親時被調已不參上云々と見えればこのほどより國栖人の參入て仕奉る事は絶たるなり

此後江次第其外の書どもにも節會に國栖於承明門外奏歌笛と記したるは眞の國栖人に非ず

た其まればのみなり公事根源元日節會條に今の國栖の奏とて歌なうたひ笛を吹ならすは

吉野より年始に参りたる云こいなり經代年中行事細記元日節會條云次國栖奏云々私云

謂國栖者樂人一人候南階砌下奏歌笛義也笛雙調音取また白馬節會條云次國栖奏音取平調ま

た諸歌節會條云國栖奏音取壹銘調と云り

○按ズルニ國栖人ノ奏歌ノ事ハ歲時都元日節會篇踏歌節會篇及ビ神祇部大嘗祭篇新嘗祭

篇等ニ載セタリ參看スベシ

東遊

東遊ハアヅマアソビト云フ又東舞ト稱ス東遊ハ神事佛會或ハ競馬等ノ時ニ行ハレシガ

後ニハ專ラ神社ノ祭祀ニノミ行ハレタリ

〔伊呂波字類抄人安〕東遊アヅマアソビ



ふぞくよくうゝひたる

國栖歌

〔古事記應神〕吉野之國主等膽大雀命○仁之所佩御刀歌○中又於吉野之白橋上作橫曰而於其橫

曰釀大御酒獻其大御酒之時擊口鼓爲伎而歌曰加志能布邇余久須衰都久理余久須邇迎美斯意

富美岐宇麻良爾岐許志母知衰勢麻呂賀知此歌者國主等獻大贊之時時恒至于今詠之歌者也

〔日本書紀應神〕十九年十月戊戌朔幸吉野宮時國標人來朝之因以醴酒獻于天皇而歌之曰伽辭能

輔珥豫區周塙苑區利豫區周珥綿蘆淤朋瀾枳宇摩羅珥枳虛之茂知塙勢磨呂俄智歌之既訖則

打口以仰吟今國標獻土毛之日歌訖即擊口仰吟者蓋上古之遺則也

〔內裏式上〕元正受群臣朝賀式○中會

觴行一周吉野國栖於儀鸞門外奏歌笛獻御贊若有善客不奏他皆效此○中略

七日○正會式

一觴之後吉野國栖獻御贊若有善客不奏他皆效此○中略

十六日○正踏歌式

一蓋之後吉野國栖於儀鸞門外奏歌笛獻御贊及大歌立歌人等參入奏歌如常若有善客不奏他皆效此○中略

〔內裏式中〕十一月新嘗會式

觴行一兩周吉野國栖於儀鸞門外奏歌笛進御贊

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

卯日○中宮內官人率吉野國栖十二人檜笛工十二人並著青襪布衫入自朝堂院南左掖門就位奏古風○中

皇太子入自東方南掖門親王入自西門大臣以下入自南門各就輕下座六位以下在陣章修式兩

堂後依次列立其群官初入集入發聲立定乃止訖國栖奏古風五成

めきてすすびゐ給へり、

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕

管絃歌舞

久安三年九月十二日、法皇<sup>〇</sup>鳥羽

天王寺へ御幸有けり、内大臣御供に候はせ

給ひけり、十三日念佛堂にて管絃有けり、<sup>〇</sup>中略

平調、万歳樂、<sup>〇</sup>中略

我門更衣、淺水、梢、鶯、<sup>〇</sup>中略、此外催

馬樂ありけるとかや、朗詠今様、風俗など數反ありけり、資賢朝臣ぞつかうまつりける、

神事奏風俗歌

〔儀式<sup>四</sup>〕踐祚大嘗祭儀

次國司率風俗歌人等、且歌<sup>運時</sup>

亦同

參入、<sup>國司</sup>

立前、

次男、

次女、

次男、

立

庭中、

歌人先入、

次國司就、

幄座、

伏地者更

起、<sup>鉦</sup>如初儀、入、<sup>幄</sup>乃奏風俗歌、<sup>儻</sup>

成列、

以八人

〔殘夜抄〕大嘗會には和歌所いはひの歌をよみて奉りたるを風俗所に下して歌のふりをつけて、

其歌のこはふりに隨て、悠紀主基の樂人樂を作たるにて、左右舞人まひを作るべきとかや、され

ど此頃は、樂も舞も其歌によらず、思ひくゝに作りあひたんなり、

〔日本後紀<sup>十七</sup>〕

平城

大同三年十一月辛卯、是夜御朝堂院、行大嘗之事、壬辰、於豐樂殿宴五位已上、二國

悠紀

奏

風俗歌舞、

〔日本後紀<sup>二十</sup>〕

嵯峨

弘仁元年十一月乙卯、行大嘗於朝堂、丙辰、御豐樂院、悠紀主基兩國獻、好雜物、

奏土風歌舞、

〔續史愚抄<sup>桃園</sup>〕

延享五年

〇寬延

十一月十七日丁卯、大嘗祭、

十八日戊辰、

辰巳日風俗今度再興云、

○按ズルニ、大嘗祭ノ時、風俗歌舞ヲ奏スル事ハ、神祇部大嘗祭篇ニ詳ナリ、

〔體源抄<sup>十下</sup>〕風俗事

四條大納言ノ仰ラレケルハ、風俗ウタハヌ人、雨ノ日ノ徒然ヲイカニシテカクラスラント云々、

又云、風俗ハ古人ハ戲言ノ口ズサミノヤウニゾ歌ヒシ、

〔枕草子<sup>十一</sup>〕歌は

雜載

みくさのはな手につみいれて、宮へまゐらむのほどを、れいのはかはりたるやうにうけ給はりしかば、とほきほどにおいのひがみ、にこそはとおもひ給へしを、この按察大納言殿公任も、まかぞの給はせける、殿上人にてありしかば、とほくてよくもきかざりき、かはりたりしやうのめづらしう、さまかはりておぼえしは、あのとの、御事なりしかばにや、又もきかまほしかりしかど、さもなくてやみにしこそ、今にくちをしくおぼゆれとこそ、のたまふなれ。

## 〔今昔物語 二十七〕近衛舍人於常陸國山中詠歌死語第卅五

今昔□□ノ比□□ノ□□ト云近衛舍人有ケリ、神樂舍人ナドニテ有ルニヤ、歌ヲジ微妙ク詠ケル、其レガ相撲ノ使ニテ東國ニ下タリケルニ、陸奥國ヨリ常陸ノ國へ越ル山ヲバ、焼山ノ關トテ極ク深キ山ヲ通ル也、其ノ山ヲ彼ノ□□通ケルニ、馬眠ヲシテ徒然タレカリケルニ、打驚クマヽニ、此ハ常陸ノ國ヅカシ、遙ニモ來ニケル者カナト思ケルニ、心細クテ泥障ヌシヲ拍子ニ打テ、常陸歌ト云歌ヲ詠テ、二三返許押返シテ詠ケル時ニ、極シク深キ山ノ奥ニ恐シ氣ナル音ヲ以テ、穴薙ト云テ、手ヲハタト打ケレバ、□□馬ヲ引留メテ、此ハ誰カ云ツルゾト、從者共ニ尋ケレドモ、誰ガ云ツルゾトモ不聞ズト云ケレバ、頭毛太リテ恐シト思々々、其ヲ過ニケリ、然テ□□其ノ後心地惡クテ病付タル様ニ思エケレバ、從者共ナド怪ヒ思ヒケルニ、其ノ夜ノ宿ニシテ寢死ニ死ケリ、然レバ然様ナラム歌ナドヲバ、深キ山中ナドニテハ不可詠ズ、山神ノ此レヲ聞テ目出ル程ニ留ル也、此レヲ思フニ、其ノ常陸歌ハ、其ノ國ノ歌ニテ有ケルヲ、其ノ國ノ神ノ聞キ目出テ取テケルナメリトゾ思ユル、然レバ此レモ山神ナドノ威ジテ留テケルニコソハ、由无キ事也、從者共奇異ク思ヒ歎キケレドモ、相構テ京ニ上テ語ケルヲ、聞繼ギ此ク語リ傳ヘタルトヤ、

〔源氏物語五葉〕きみは大殿におはしけるに、れいの女君とみにもたいめんし給はず、ものむつかしく覺え給て、あづまをすがゝて、ひたちには田をこそつくれといふたを、こるはいとなま

〔本朝書籍目録〕管絃

風俗譜 二卷

〔西宮記臨時八〕私遊宴事

夫於律道者平調於呂遊者用雙調至于他調隨時用之但律呂遊以歌爲本樂曲相交反聲於和琴先常陸同音數度次甲斐各獨唱風俗等也、

〔體源抄十下〕風俗事

又云御遊ノトキハ、先常陸歌歌フ也、此歌ハ令染物歌也、次又可致朗詠染物音無如朗詠、

〔續日本紀元七〕養老元年九月戊申、行至近江國觀望淡海、山陰道伯耆以來、山陽道備後以來、南海道

讃岐以來、諸國司等詣行在所奏土風歌儔、甲寅至美濃國、東海道相摸以來、東山道信濃以來、北陸道越中以來、諸國司等詣行在所奏風俗之雜伎、

〔日本後紀十二〕延暦二十三年十月甲辰、行幸和泉國、辛亥播磨國司奉獻奏風俗歌、

〔日本後紀十四〕弘仁六年四月癸亥、幸近江國滋賀韓埼、略中國司奏風俗歌舞、

〔三代實錄四〕貞觀二年十二月八日癸丑、新修釋奠式頒下七道諸國、先是播磨國言博士正八位上

和邇部臣宅繼申請云、略凡厥諸國相犯者多、或稱大學例用風俗樂、或據州縣式停止音樂、略下

〔土左日記廿七日〕承平四年鹿兒の崎といふ所に守のほらからまたこと人これかれ、酒なども

ておひきて、磯におりゐてわかれがたきことをいふ、略中ある人にしぐになれどかひうたなど

うたふ、かくうたふにふなやかたのちりもちり、そらゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる、

〔大鏡上〕此殿源信源こそあらたにおふるをばなべてのやうにうたひかへさせ給ひけれ、一條院の

御時の臨時祭の御まへのことはて、上達部たちの物見にいで給ひしに、外記のすみのほどす  
ぎさせ給ふとてわざとはなくて、くちすさびのやうにうたはせ給ひしが、中々いうに侍りし、と



加利奈良波、奈乃利會世末之、奈乎久々比奈利也、止宇止宇、

〔政事要略 六十七〕

又云、○正式滅紫色者、參議已上聽通用、五位已上聽著半臂、

滅紫雖讀言古老稱黑紫、○中或云、表黃裏蘇芳以之號滅紫、衛門府風俗歌云、多々良女乃花乃加

以彌利好牟夜滅紫色好牟夜、此風俗歌頗似此說者、然而猶不得意、

〔拾遺和歌集 十樂歌〕

安和元年、大嘗祭風俗ながらの山、

大中臣能宣

君が代のながらの山のかびありとのどけき雲のゐるときぞ見る

さゝ浪のながらのやまのながらへてたのしかるべき君が御代哉

○按ズルニ、大嘗祭ノ時、悠基主基兩國ヨリ風俗歌ヲ奉ル事アリ、神祇部大嘗祭篇ニ載セタル

ヲ以テ省略ニ從ヘリ、

〔體源抄 十下〕風俗事

風俗ハ律ノ物也、源師長云、長秋聞之訓云、

師忠

風俗ハ催馬樂ヨリハ延テ可歌云々、風俗有拍子、多

者催馬樂拍子ナリ、又相交テ有三度拍子也、又云、大鳥其駒ハ如樂之破急也、大鳥ヲバ延歌天、其駒

ヲバ早ク歌也、神樂ニ歌フ時ハ、初二三反ハ三度拍子ニ打之、其後ハ入拍子ハ打テ早成也、御子左

馬頭兼實ハ只拍子ノヤウニゾ拾遺テ歌ケル、○中

又云、風俗ニハサケコエニ歌フトコロノアルナリ、近方サケコエヲウタハザルナリ、此人最上手

ナリシゾ、サルニハアラジ、定テ様アラン歟、但下音アルコソ風俗ノヤウニハスレ、

又云、風俗ハ歌終ヲ必ズ投ルナリ、近方コレヲ投ズ、最モ定テ様アラム歟ト云々、

古人風俗ヲバ世人皆律歌ト思フ、シカラザル也、呂律相分也、呂歌律歌可尋之、

〔台記別記〕康治元年十一月十六日甲辰、悠紀國司率風俗歌人等、風俗者新祿歌也、以其歌之心新造

知歌心、後作樂成、舞、自注五音不諧、行事宮內卿、發余○藤原音聲、後作樂成、吹物、參入、

時、朝臣風俗所寄人、音聲人并歌女、舞人等相從、

與也之太留古也名支

志太留加伊天波也安久爾曾止美世牟爾已保利曾佐加衣牟那佐止曾止美世牟里和伊戶曾

止美世牟也之太留己也奈支

乎之高倍

乎之太加戶加毛佐倍衣支爲留波良乃伊介仁於不留太生末玉安毛波也與支久佐乃由

加利曾也末爾奈加利曾也

伊勢人

伊世比止波奇安也之支毛乃乎也安奈止於天戶波乎不爾小仁乃利乘以天衣也安

奈見乃字惠乎已久夜奈安見乃戶乎已久也

加比加爾

加比加爾甲仁之呂支波白由字支加安也伊奈乎佐乃加比乃於介古呂毛

也佐安良須天川久利也佐良須天不久利也

奈利高之

名利太加之高也名利太加之大於保美也知加久天奈利太加之安波禮乃奈利太加之

八乎止女

也乎止女波安和加也乎我止女衣曾太川夜立夜乎止女衣太安

川也安也乎也止女加美乃也須也太加末天乃於波原安良安

仁以引太川也乎止女衣太川也也乎止女

彼乃行

加乃由久波安加利加久雁久比加加利奈良波安波禮也止字止字

木見乎支<sup>君</sup>以<sup>々</sup>天衣<sup>々</sup>安太之<sup>々</sup>呂乎也奈<sup>持</sup>和加毛太<sup>安</sup>波引<sup>々</sup>和加毛太波<sup>安</sup>須惠

乃末<sup>安</sup>川<sup>字</sup>山奈見毛已衣奈見毛已<sup>於</sup>衣奈武

荒田

安良太仁於不留<sup>生</sup>字<sup>々</sup>止見久<sup>富</sup>字<sup>々</sup>佐安<sup>々</sup>乃波<sup>花</sup>安<sup>々</sup>奈安<sup>々</sup>天衣<sup>手</sup>仁<sup>以</sup>川<sup>字</sup>

見禮<sup>入</sup>天<sup>々</sup>見也<sup>宮</sup>戸衣<sup>引</sup>末井良安<sup>引</sup>牟奈加川<sup>字</sup>太衣<sup>引</sup>

安津末知

安川末知仁加留<sup>東</sup>字<sup>々</sup>加也<sup>堂</sup>安<sup>々</sup>乃於<sup>々</sup>與<sup>々</sup>己於<sup>々</sup>保<sup>々</sup>知仁奈佐介<sup>衣</sup>乎<sup>於</sup>

加伊加留<sup>字</sup>加也<sup>安</sup>乃於<sup>引</sup>見禰<sup>字</sup>波也<sup>安</sup>己止毛也<sup>本</sup>須良仁<sup>引</sup>加

留<sup>字</sup>加也<sup>安</sup>乃志佐也<sup>安</sup>加伊加留<sup>字</sup>加也<sup>安</sup>乃

菅牟良

須加牟良<sup>村</sup>安<sup>々</sup>乃也波禮己<sup>字</sup>加牟<sup>字</sup>良乃也<sup>安</sup>牟良<sup>安</sup>乃也<sup>安</sup>須加牟

良安<sup>々</sup>乃也於比天波和禮古曾加伊加良女

大鳥

於保止利乃波禰仁也禮奈<sup>安</sup>之毛不禮利<sup>以</sup>也<sup>安</sup>禮奈太禮加佐伊不<sup>知</sup>止利曾<sup>於</sup>佐

伊不<sup>字</sup>加安<sup>々</sup>也<sup>安</sup>久支<sup>以</sup>曾佐伊不<sup>見</sup>止佐<sup>安</sup>支曾京與利支天佐伊不<sup>來</sup>

知々良々

知々良々<sup>門</sup>加々止仁<sup>字</sup>曾不伊末呂古曾太<sup>立</sup>安<sup>々</sup>天禮<sup>調</sup>天<sup>字</sup>止乎比佐介<sup>提</sup>天奈止加波也<sup>立</sup>太天利之毛

世佐良於乃禮加也伊止古世乃加止仁天<sup>爲</sup>宇止乎比佐介天

我門

和加加止乃也之太良古也奈支佐波禮<sup>衣</sup>止宇止宇之太留古也奈支志太留加伊天波<sup>安</sup>奈

川<sup>月</sup>支乃於毛乎、佐和太留久毛乃末佐也介久美留、名波乃川不良衣、

大鳥

於保止利乃、波<sup>羽</sup>禰仁也禮名之毛不禮利也禮名、太禮加佐伊不知止利會佐伊不加也久支會佐伊不、

奈末不利

奈波乃於川字不字、良安、衣<sup>江</sup>、乃<sup>引</sup>波留奈安、禮、波安、

良衣、

太末太禮

太末太禮乃、可女、引乎於、引、奈可仁字、引、惠天安留志波安、毛也安、

佐可奈毛<sup>求</sup>於、支以、仁、佐加奈毛止於、女仁、引己由留支乃於、伊

會於、仁、和可女可利於介、和可女可利於介牟、

比太知字太

比太知仁以、波安、<sup>田</sup>太乎己會川久禮、安太己己呂、可奴止也支見波、山乎己於、衣、

乃乎<sup>引</sup>己衣、安末與支末安、世留、

津久波山

川久波也安、末安、引、波也安、末引志以、介、山志介支乎會於、也安、

太可己於、毛加與不名安、之以、太仁、引加與戶、和加安、引、川末波安、之太仁、



波也良道之待末天波須戶難之也

甲斐

加比可甲斐禰乎清佐也見爾毛美之加也心介々無禮心奈久橫與古保立利太天流佐也中乃奈加也山末

件歌以三之切稱一切有故也甲斐歌之本是也一二之句歌連異也可歌仍以三切謂二切了

常陸

津久波筑禰乃古乃毛此加面能毛面爾引可介波阿禮止也引木三加三加介爾引末須加介毛末須可

介毛難之也無引

同

比太千仁波田乎古曾川久禮阿太古々常陸呂也作加奴止也心支美加也兼末乎古江乃乎古江阿末君與支末勢山

流

師說此歌乃乎之處頗異前歌之音振又及其末琴之須加々木其詞又替越飯何拍子延也打其雌拍

子如甲斐歌

玉垂

太末太禮乃加女乎瓶名加仁宇惠天安留之波毛也中佐加名止利佐加名止利仁己與留支乃伊曾奈留居

和加女加利安介仁

常陸歌

比太千仁毛田太乎已曾川久禮安太己己呂加奴止也支見加也末乎己衣乃乎己衣安末與支末世留山

筑波山

川久波也末波也末之介也末之介支乎曾也誰太加己毛加與不名之太仁加與戶子和加川末波之太仁通

月面

鷺養

乎之多加為、倍、加毛佐戶木居、為流、波良乃、伊介二合能玉、也、太末毛波、末禰那

加利范、會也、於比毛川久加爾也、一說加爾也、於比毛川久、加仁、

之太乃浦

之多乃字良乎安佐古久乎不禰、佐志與勢呂和禮佐戶乃利天奈之太、一說之太乃字良美牟、

也、

君乎量天

木三乎於木天、安太之古々、呂乎和加毛太波也奈與也須惠乃末川、也末、奈美

毛古江、古江奈无也、奈美毛古江奈牟、

越方

乎知加太也、加乃可太也、阿太千乃波良爾、多々流可良爾、

太々流可良爾、字和流可、良仁、於乃乎仁、與須留、左奴登之難久爾、

與世波與勢、與世波與勢、與會不流比止能、爾久可良難、

小車

乎久流末爾之木能比毛止加牟與比利遠之能者勢世與也奈和禮之乃、波世古和禮之能、

者勢、

曾與末佐爾、天介良、之毛川木乃於毛乎、佐和太流久毛乃、末佐也介久、

三留古佐也介久、三流、

陸奥

阿波禮也、安武久末爾、支利、太、千、和太利、阿介奴止毛、世難乎

車 陸奥 甲斐 常陸二首 玉垂 常陸歌 筑波山 月面 大鳥 奈

末不利 太末太禮 比太知字太 津久波山 木見乎 荒田 安津末知 菅

牟良 大鳥 知々良々知々皮々 我門 乎之高倍作上河海歌抄 伊勢人 加比加

禰 奈利高之 八乎止女 彼乃行

〔拾芥抄〕上末五 鳴高又宮三

九筑波山 七難波乃都布良江

一荒田 十甲斐加禰

二十玉垂

六知知良良

十東道

〔體源抄十下〕風俗事

其駒ハ本體風俗ナリ、而ヲ一條院ノ御時朝倉其駒ハ神樂ノ無下ニ尾モナキヤウナルニトテ、神

樂ニ歌ヒ具スルナリ、當時ハ神樂ナレドモ本體ハ風俗ト習フ也、

〔風俗歌〕乎津久波

遠川久波乎、古由流須利、支奴加戸利木天也多加古比須久世、遠川久波乎、古由流須

幾奴、

小由流支

古與呂木乃、以會太千奈良之、以會奈良引之、難津引牟、女佐引之、奴良

須奈奴、良須那、於木爾遠、禮乎禮、奈美也、

奴呂、引毛木、美引加女須倍支、女須戸幾奈乎之、川引美津美、天波也、

玉垂

太万多禮乃、加女乎、奈加仁須惠天、阿流之者毛也、佐加奈末幾仁、佐加難止利仁、己與流

木乃伊曾乃、和加女加利、阿介仁、

# 風俗歌 國栖歌 禊人

風俗歌ハ元ト諸國ニ行ハレシ歌謠ニシテ、後其曲調ノ宜シキモノヲ撰ビテ、以テ朝家ノ謠ヒモノトナシ、ナリ而シテ大嘗祭ノ時ニハ、悠紀主基兩國ヨリ其土風ノ歌舞ヲ奏スルヲ以テ例トス、

國栖歌ハ、大和國吉野國栖人ノ元日節會踏歌節會、新嘗祭、大嘗祭等ノ時、朝廷ニ參リテ奏スル所ノ歌ニシテ、應神天皇ノ時ニ起レリ、

名稱

〔催馬樂譜入文〕催馬樂時代

鄧曲秘鈔風俗裏書云、催馬樂、本路頭巷里之謠詞也、然而後好事之士女取以爲彈琴歌曲、故其歌因來、其有古代、有中世、厥後更奉諸國、謂之風俗、又後代謠詞、謂之今樣、催馬樂、風俗、固是一也、遂翫於宮中已久矣とある、まことにさりけらし、

〔神樂歌新釋〕風俗の事

これは字音に古よりふうぞくといへるなるべし、くにふりとかくにふり歌とかいふべけれど、さいふ例も見あたらず、かの難波曲、倭部曲、廣瀬曲、さては古今集に出たる東歌みちのく、さがみ、常陸歌のたぐひ、これに同じかるべし、こは代々の大嘗祭のをりに咏ひたりし歌の、其代におもしろかりしを後々の代にも物の興にうたひなれて、かく一ふりの歌ひ物とつたはれるにやともおぼゆ、○中略

古本の難波方歌の裏書に、難波方不入此譜、以他本所書入、また磯等前の所に或説云、此歌貞觀神宴之時撰定歌、次日云々、又朝倉此歌云々、延喜廿一年勅定也、神樂遊仕時、櫛音振唱、又其駒此歌人長立座云々、本風俗也云々、

曲名

〔風俗歌〕平津久波

小由流支

玉垂

鶯鶯

之太乃浦

君乎置天

越方

小



〔古今著聞集<sup>六</sup>管絃歌舞〕久安三年九月十二日、法皇<sup>○鳥羽</sup>天王寺へ御幸有けり。<sup>○中</sup>此外催馬樂有けるとかや、朗詠今様風俗など數へん有けり、資賢朝臣ぞつかうまつりける朗詠は法皇御發言有けるとぞ、其後としよりあそん讀經つかうまつりけり、人々興にせうじて覺邊、信西、楊真操彈けり、法皇のおほせに、資賢は催馬樂のみの長者なりと、えいかん有けるは、此たびの事なり、いかにめんぼくに思ひけん、

〔鄧曲相承次第〕按察使有資權中納言信有

文永八年八月十五夜、唱催馬樂、依歡感被下<sup>御劔被下、後深草院</sup>

文永八年八月廿六日、後深草院御記云、召侍從信有<sup>四子、時十</sup>令歌催馬樂、累家業可謂堪能云々、

〔玉海〕壽永二年正月廿三日己丑、右大將<sup>藤原實通</sup>密々向宗家卿第、爲習催馬樂也、此事近代之禮雖不

必可然、知足院殿<sup>藤原忠實</sup>向經信第聽琵琶、又故殿時々向中御門右府第給<sup>拜大臣之日爲實其悅云々</sup>於家有其

例、爲親昵之上、又非趨權勢之儀、仍所令行向也、

〔無名秘抄<sup>上</sup>〕ちか比土御門内大臣<sup>源家通親</sup>家に、月ごとに影供せらるゝこと侍しころ、玄のびて御幸

などなる時も侍き、その會に、古寺月といふ題にてよみたてまつりし、

ふりにけるとよらのてらのえのは井になほまらたまをのこす月かな、五條三位入道<sup>後藤原成</sup>

これをきゝて、やさしくもつかうまつれるかな、入道がまかるべからむ時、とりいでんとおもふ

給へつるを、かなしくせんせられにたりとて、まきりに感せられ侍き、この事催馬樂の詞なれば、

たれもまりたれど、これよりさきには歌によめる事も見えす、そののちこそ、れんせいの中将<sup>定</sup>

家の歌によまれて侍しか、

歌實

樂歌

公任 關白賴忠子、號四條大納言、  
政長 利部卿  
有賢 從三位宮内卿

資賢 大納言按察使

通家 左近少將  
資賢子

雅賢 參議  
資賢子

公繼 右大臣  
實定子少々習之云々

資雅

藤氏

博雅 從三位皇太后宮權大夫  
克明親王子

至光 博雅子、號雙調公一

賴宗 右大臣  
實定子

俊家 賴宗子、號大宮右府

宗俊 大納言按察使

宗忠 宗俊子、號中御門一

宗能 內大臣

宗家 大納言  
宗能子

定能 大納言

師長 太政大臣  
定能子

隆房 大納言

隆仲 隆房子

宗經 中將

宗家子、出家、安元御賀舞、號王童、宗平宗經子

老儒馬樂

〔三代實錄三〕貞觀元年十月廿三日乙巳、尙侍從三位廣井女王薨、廣井者二品長親王之後也。○中

天安三年轉尙侍、薨時年八十有餘、廣井少修德操、舉動有禮、以能歌見稱、特善催馬樂歌、諸大夫及少年及好事者、多就而習之焉、至于粗沒時人悼之、

〔鄧曲相承次第〕式部卿敦實親王

宇多第八御子源家音曲元祖也、師匠未詳、若藤原千魚朝臣弟子歟。○中 孝道治國抄云、催馬樂ト和

琴トハ自敦實親王世傳云々、

〔續世繼六人遊〕右のおとゝ藤原是中御門のおとゝとて、催馬樂は上手におはして、御あそびな

ごにはつねに拍子とり給けり、

すみて出て、地久の破をつかうまつりたりけり、花田狩衣袴をぞきたりける、舞はてゝ入ける時、櫻人をあらためて、装山をうたはれければ、政方又立歸て同急を舞けるをほりに、花の下枝を折て後、をどりてふるまひたりけり、いみじくやさしかりける事也。○中

大貳資通卿管絃者共を伴ひて、金峰山に詣づる事有けり、下向の時、ふじにふるき寺あり、其寺におりゐてやすみけるついでに、其邊を見めぐりけるに、壹人の老翁のありけるをよびて、此寺をば何といふぞと問ければ、翁これをば豊等寺と申侍るとこたふ、又寺のかたはらに井有、これ極葉井といふ、又うしろの山はなに山といふぞとこたふ、此山は葛城山なりとこたふ、人々これを聞て感涙をたれて、各堂に入て寺をうちらはひて、葛城を數反うたひて歸けり、

〔閑田耕筆四〕催馬樂の樂曲にあふもの多しと、常に鈴木氏かゝられしが、みづからうたひ、また笛にあはせ、箏にのせてきかされしことも有りき、是おもしろきことなり、いづれの曲もかくやうにうたひものにあはましかば、俗樂を捨てこれによる人も有べきものと、歎息したりし、樂所には催馬樂も纔に二三曲近年勅によりて再興ありとかや、

流源

〔體源抄十中〕又云、大納言定能卿中山内府○藤原ニカタラレケルハ、催馬樂ノ源○藤原兩家説淵源ヲ

キハムトイヘドモ、源家ニハ雅賢卿資賢朝臣侍リ、彼等ミナ我ニマサリタリ、藤家ニオイテハ他人ナシ、仍常此説ヲ用ル也トゾイハレケル、興アル事ナリ、○下

〔胡琴數錄上〕催馬樂

師説云、○中近來催馬樂三流也、一には大納言宗家の説、一には資賢卿、一は少納言師廣等説也、皆これ格別也、付絃時能々用意あるべし、

〔催馬樂師傳相承〕源氏

敦實親王

一品式部卿  
寛平(宇多)御子

源雅信

左大臣  
敦實親王子

時中

雅信子、號舞大納言、又致仕、

云々、然者被召殿上人、笏有何事哉。宗家卿云、用公卿笏定事也。殿上人有何差別。隨又、遠座有便歟。重  
家卿云、召上地下召人樂器是定例也。被用殿上人笏可宜。余云、尤可被准據。在則召經家兼光等笏。

〔中右記〕康和四年三月十八日癸酉、天皇依被奉賀太皇<sup>河</sup>白<sup>○</sup>五十算。可有行幸鳥羽殿也。<sup>○</sup>中主殿

寮立明南庭、次御遊天皇御笛、右大臣<sup>事</sup>宗忠<sup>拍子</sup>左大辨<sup>琵琶</sup>右宰相中將<sup>笛</sup>顯仲朝臣<sup>笙</sup>俊賴朝臣<sup>樂</sup>呂

安島<sup>破</sup>律<sup>青柳</sup>、<sup>○</sup>中略<sup>略</sup>廿日乙亥、今日有御賀後宴事。<sup>○</sup>中及乘燭先令數召人座於階西砌下、<sup>地下</sup>

家卿、<sup>急</sup>律<sup>定式</sup>部丞<sup>後</sup>呂<sup>櫻人</sup>美作<sup>刀自</sup>律<sup>伊勢</sup>海<sup>更衣</sup>、<sup>萬</sup>人々所役如、一昨日儀事了人々退下、

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕管<sup>六</sup>終<sup>歌</sup>舞<sup>六</sup>天永三年三月十八日御賀の後宴に、舞樂はて、御遊の時、呂は安名尊、席田

鳥破<sup>○</sup>破<sup>一本補</sup>律<sup>是青柳</sup>、更衣應子萬歲樂主上<sup>羽</sup>鳥<sup>○</sup>催馬樂を付うたはせ給ける、めづらしく目出

たかりける事也。おほせによりてさらに又、更衣應子など數反有ける、興ありける事也。

〔榮花物語<sup>三十二</sup>〕長元八年五月卅講はて、關白殿歌合<sup>歌合</sup>せさせ給<sup>○</sup>中左のかたの人々、色々のう

すものをやかたにはりて、かねのとなつのはなをえたる船ふたつにのりて、ふえけしきばか

りふきすすさびて、伊勢の海うたひて、いけの心にまかせてさをさしてまいる。<sup>○</sup>中藏人俊經、ふた

あゐのうつくしきとりて、ひろげしきをみれば、むらさきのふせんれうに青きざうがんをつけ

て、伊勢海と云さいばらを、あし手にぬひたり。

〔殘夜抄〕わたまし。これは未だ承らねど、それまた、御遊普通のにてあるべきに、此殿といふ歌を

うたふべし、其外かはりめいとなきにや。

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕管<sup>六</sup>終<sup>歌</sup>舞<sup>六</sup>いづれの比の事にか、大宮右大臣<sup>○</sup>藤原<sup>後家</sup>殿上人の時、南殿の櫻さかりなる

比、うへふしよりいまだ装束もあらためずして、御階のもとにて獨花をながめられけり、霞わた

れる大内山の春のあけぼの、よにえらす心すみければ、高欄によりかゝりて扇を拍子に打て、

櫻人の曲を數反うたはれけるに、多政方が陣直つとめて候ひけるが、歌の聲を聞て、花の本にす



臨時客にも尊者など有て、よのつねの大饗の儀式におなじはてつかたには御遊ありて催馬樂をうたふ、

〔大鏡八〕むらかみうせおはしまして、またのとし小野宮に人々まわり給て、いと臨時客などはなけれど、嘉辰令月などうち誦せさせ給ふついでに、一條左大臣殿源雅信六條殿源重信など拍子とりて、むしろだうちいでさせ給けるに、あはれ先帝のおはしまさましかばとて、御笏もちおきつ、あるじ殿をはじめ奉りて、事いみもせさせ給はず、うへの御衣どもの袖ぬれさせ給ひにけり、

〔公事根源十一月〕豊明節會

中辰日

ことにたへたる上達部五節所とふらひて催馬樂などうたふ、

〔増鏡五内野の十四日寛元元年六月十日〕五夜のさしきさきのごとし、こよひは御遊有、實基の大

將殿大じくひやうしとり給ふ、まやう宗基ふえ二位中納言のりひちりき乗敷朝臣琵琶大夫すけん

爭のこと權大夫ふられ和琴すけすゑのひやうしも、おなじ人なりしにや、安名尊、鳥破席田、伊勢海

萬歲樂、三臺舊借字、れいの事なり、かすくめでたし、

〔資勝卿記〕寛永三年十一月十九日戊子、中宮様後水尾御七夜、御祝儀有之、中今朝先宮ノ御方

ニテ御振舞有、次ニダノ作法過テ、寢殿ニテ有御遊、右大臣琴内大臣、四辻大納言、左大將、亮、新三位

等也、催馬樂有伊勢海也、

〔宇槐雜抄〕保延三年七月廿三日、今日姬宮御百日也、中今日右府宗原取余藤原笏、被歌催馬

樂也、

〔玉海〕承安二年八月廿一日丁巳、此日小童有著袴之事、中二獻、定能朝臣取續、次催馬樂席田、更衣、

余兼實藤原先示人々云、先々有催馬樂、今度可然歟、人々云、尤可候、余云、拍子無便宜如何、宗家卿云、只

可、打鳴扇歟、余云、召殿上人笏如何、人々相議、雅賴卿云、攝政若君御五十日之時、有議被用他人之笏

此うたひ物は國風也、當時相經、近年立后之催馬樂ニハ、朗詠之様少替たるうたひものにて有之尤笙、笛、箏、築之三管も、其聲に應じ附候也、

二條行幸ノ時アリケル以後ノ事也。○中催馬樂ノ役人歌物ハ綾小路俊景并持明院基時琵琶ハ今出川伊季花園公晴琴ハ白川雅元和琴ハ四辻公韶ナリ地下樂人六人階下ニ候ス笛ハ上越後山井近江笙豐主殿園淡路守筆簾ハ東儀左衛門窪甲斐也三方ヨリ三人宛出座ヲ望申セドモ二條行幸ノ時ノ樂人ノ位階ニ合セラ用之給フト聞エシ、

天和三年二月十四日立后御節會也此時有御遊可奏催馬樂之旨仰之依俄之催墨譜及拍子之法異于古法時人疑之故不詳之焉

〔殘夜抄〕大臣大舞。これも御遊の儀式、打任これらにはかはらず、それにとりて、母屋の大舞には、鹿山といふ歌をうたふべきとかや、それは源家にはあり、藤家にはなき歌にて、うちまかせては、一どうけ給りしも、安名算にてぞ侍し、又律にも鷹子あるべきにや、

引出物ニ進ゼラレタリケルニ、出ント欲スルノ時、自取拍子「鷹子ヲ歌ハレタリケル爲珍事」ト云云。底大聲ニハ不歌御鷹飼不參故ナリ、

御神樂ニハ葛城ノ歌也又臨時客ニ歌之執簪ノ家臨時客ニハ吾家ヲ歌フ時下  
 【公事根源 正月】臨時客 同日 〇二

同日  
日〇  
二

ト、ヒキナラシテ歌給ヘリケリ、加様ノコトハ時ニヨリ、ヲリニシタガヒテヒキナラス事、常ノナラヒナリ、

〔體源抄<sup>十中</sup>〕春宮大夫宗能云、<sup>略</sup>○中 安名尊ヲウタヒツレバ、新年ヲバウタワザル也、但朝<sup>〇</sup>現<sup>〇</sup>行<sup>〇</sup>幸<sup>〇</sup>ニハ、必ズ新年ヲウタフベキ也、是ハ新<sup>〇</sup>キ<sup>〇</sup>年<sup>〇</sup>ノ始<sup>〇</sup>ニ、此コソ仕祭ラメ万歳マデニノ詞、千金ニ直スル故歟、

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕<sup>管絃歌舞</sup>嘉承二年三月五日、鳥羽殿に行幸有て、六日和歌の興有ける、呂安名尊三反、櫻人一反、席田二反、鳥破急賀殿急、律ハ青柳二反、萬歳樂、五常樂、急、絲竹のまらべことに面白かりけり、

〔増鏡<sup>十五</sup>〕<sup>時雨</sup>又の年<sup>〇</sup>元<sup>〇</sup>徳の春やよひのはじめつかた、花御らんじに北山に行幸なる、<sup>〇</sup>後<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>略又の日<sup>〇</sup>三<sup>〇</sup>月<sup>〇</sup>は御遊はじまる、拍子に治部卿まいる、うへもさくら人うたはせ給ふ、御こゑいとわかくはなやかにめでたし、こぞの秋ころかとよ、すけちかの中納言にこの曲はうけさせ給ひて、賞に正二位ゆるさせ給ひしも、けふのためにやありけんといとえん也、

〔大猷院殿御實紀<sup>八</sup>〕寛永三年九月八日、天皇<sup>〇</sup>後<sup>〇</sup>尾<sup>〇</sup>二條城の行宮におはしまして、第三日の朝がれぬ、内々の儀にて奉り給ふ、<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>やがて御遊はじまる、<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>調子平調催馬樂伊勢海、こは百年ばかりも廢たりしを、こたびこと更の詔にて、四辻中納言季繼卿に再興せしめられしとぞ、

〔古今著聞集<sup>六</sup>〕<sup>管絃歌舞</sup>久安三年九月十二日、法皇<sup>〇</sup>鳥<sup>〇</sup>天王寺へ御幸有けり、内大臣御供に候はせ給ひけり、十三日念佛堂にて管絃有けり、<sup>〇</sup>中<sup>〇</sup>先雙調、鳥破同急、賀殿急、安名尊妹與我、次平調、萬歳樂、慶雲樂、三臺破同急、五常樂、同急扶南、老君子、廻忽、甘州、陪臚伊勢海、我門、更衣、淺水、梢、鷺見、盤涉調、秋風樂、<sup>初一帖、後二帖、〇中略</sup>此外催馬樂有けるとかや、

〔伯氏新録〕催馬樂之事

わたどの、西のひさしにて、うへ條○一の御笛ふかせ給ふ、たかとはの大貳御ふえの師にて物し給ふを、こと笛ふたつして、たかきこををりかへしふかせ給へば、なほいみじうめでたしといふもよのつねなり。

〔源氏物語〕

紅葉七

「ゆふだちして、なごり涼しき宵のまぎれに、うんめいでんのわたりを、たゝすみ

ありきたまへば、此内侍内侍

源氏

びはをいとおかしうひきぬたり、御前などにて、をとこ方の御あ

そびにまじりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、もの、うらめしう覺えけるをりから、いとあはれにきこゆ、うりつくり成やしましなまし○うりつくり成やしと、聲はいとおかしうて

うたふぞ、すこし心づきなきがくしうにありけん、昔の人もかくやおかしかりけんとみ、とまりて、き、給ふ、ひきやみて、いとおもひみだれたるけはひなり、君あづまやをまのびやかにうたひて、よりの給へるに、おしひらいてきませとうちをへたるも、例にたがひたるこゝちぞ

する。○下略

〔源氏物語〕

十

御あそびのすこしみだれ行程に、たかさごいだしうたふ、○中

あはましものをさ

ゆりばのとうたふとちめに、中將御かはらけまいり給ふ、

〔體源抄〕

十中

又云、安名尊ヲ歌ツレバ、新年ハウタハザルナリ、先年ニ左右ヲ別テ扇合アリ、事ヲハ

リテ御遊ノ時、政長朝臣爲方人、安名尊ヲウタフ、于時故二條關白殿○藤原

師通

新年ヲ歌ベキヨシ其

仰アリ、仍政長此ヲウタフ、聞方人嘲哢ス、政長ノ云ク、一日ノ事人々嘲哢セラルナル更ニアヤマ

タザル事ナリ、指仰アランニオイテハ、堤坊ヲモ心ベキヨシ前言耳ニアリ、而殿ノ仰ニヨテ、ウタ

ハシムルトコロナリ、殿ハ大納言ノ弟子ニテマシマセバ、豈シロシメサバランヤ、

〔吉野樂書〕

一

隱岐院

鳥羽

御時正月ニ御遊ノ有ケルニ、徳大寺殿公梅、枝ニキキルウグヒス春

カケテナケドモイマダ雪フリツ、

枝○梅

此催馬樂ヲ歌ヒ給ヒケルガナケドモノ所ヲクレドモ



洞院へ遣事不可叶之由申、然而勅定難默止之間教訓畢、廿九日、郢曲文書二合召出、仙洞へ進之、而本譜事猶可進之由被仰下、是ハ家重寶更無他見者也、可如何候哉、無理之仰也、六月二日、仙洞文書一合被返下、○中本譜事可召進之由堅被仰下、八日、催馬樂本譜五卷律香表紙、呂三卷、無、奧書、仙洞へ遣之、

〔本朝書籍目録〕管絃

催馬樂譜

二卷

〔樂家錄五〕催馬樂曲説、催馬樂絃管之説

催馬樂古御遊用之、凡其法先奏調子、次催馬樂歌之、數音絃管各一附之、次奏樂曲、類有、之次亦催馬

樂曲爲次第、第二目録拍子者、拍子者、

或曰、古御遊者、擊拍子、不用三鼓也、今世御遊、除拍子者、  
堀河院寄、好音、故催馬樂、不奏之、三鼓用之、是其始也、云々、

〔殘夜抄〕消暑堂御神樂の御遊は、みかぐら終りて後にあり、是も樂催馬樂呂律これらにかはらず、但近來消暑堂御神樂に、或人めづらしき事せんとて、葛城といふ秘藏の歌をうたひたりけるに、其歌はつたはるべきことあるを、あしくうたひたりけるとて、とき人をしりけるやうのがる、處なかりけり、珍らしき事は、限りある事にはせであるべきにこそ、建保六年十二月七日、東宮行啓高陽院殿へありしに、其日やがて御五十日の御遊に拍子とり、我家といふ催馬樂うたはむと申けれども、などやらん其日はうたはざりけり、

〔古今著聞集六〕管絃歌舞、同、五年正月二十三日、宴おこなはれけるに、式部卿重明親王、琴、左大臣

實○藤原、箏、中務大輔博雅朝臣和琴侍從延光朝臣琵琶、散位朝忠朝臣右近中將藤原朝臣笙、安名尊

春爲囀、席田葛城などをぞ奏しける、

〔枕草子二〕小一條院をば今内裏とぞいふ、○中二月十日の日の、うらくと長閑に照わたれるに、

催馬樂發聲者其曲名爲之發聲也、假令歌安名尊則發聲安名尊、歌伊勢海則發聲伊勢海爲之發聲、而自次句助音即附管矣。○中

### 催馬樂曲調之說

催馬樂所用之調、多律平調、呂雙調、而不見用他調之例矣、按梁塵愚按抄、夫律用平調、呂用雙調、至他調隨時用焉云々、

或曰、催馬樂平調雙調之外不用他調者、未  
盛之故歟、何可限于二調乎云々、○中略

曲譜

〔奥儀抄下ノ〕問云、かはやしろと云はなに事ぞ、

答曰、中催馬樂の譜は、一條左大臣源信の時こそは、はじめて律呂の歌もさだめられたりとう

けたまはれば、貫之がよに夏神樂のことはしまらんもかたかるまじ。○下

〔鄧曲相承次第〕左大臣雅信

催馬樂譜、此大臣作之、或抄云、延喜廿年、右近少將藤原忠房依勅、

〔胡琴教錄上〕催馬樂

又云、○慶後催馬樂は、笛には左近少將藤原忠房、依延喜聖主勅ふを作る、等比巴には中務大輔信明

博雅譜をつくる、院禪所用此説云々、

〔中右記〕元永三年元保十一月十二日、巳時許招出雲守資文、示頭辨事、○中催馬樂譜、小草子事、

十三日早旦資文爲頭辨使來云、○中催馬樂譜、在故宰相中將家、有無未尋得、過穢氣之後、一日可尋

也。

〔體源抄十中〕澤田川或譜ニ此歌絶畢ト云々、而ニ博興ガ譜ヲミルニ、安名尊ト同歌ト云々、竊ニ案

同歌不乖云々、

〔看聞日記〕永享二年四月廿六日、鄧曲文書事、有俊姉妹ニ令申之處、故中納言○綾小遺言申置之間、

催馬樂我駒ヲバ呂律俱ニ唱之、澤田川呂律俱唱之、呂ニハ安名尊也、律ニハ澤田川ヲ唱フルニ、用安名尊之音取也、

新年梅枝、

三首同音ナルニ

澤田川亦同音也、催馬樂歌出ノ非歌程、与ク被歌歌アリ、以之推之樂ノ程ノ只

拍子ニ吹出サル、樂アリ、同儀歟、拍子取歌唱ヘ畢ヌレバ、拍子ヲ重テ笏ヲ持ガ如ク取之ト云々、

又云、催馬樂ノ歌出シ不同也、雄拍子ヲ打置テ歌出アリ、安名尊ノ類是ナリ、音ト拍子ト一度ニ歌

ヒ出スアリ、筵田ノ類コレナリ、出歌ノ後ニ拍子ヲ打アリ、西寺ノ類コレナリ、略中

又催馬樂ハ極大事ニテアル也、音振ダニ私ヒスレバ、云甲斐ナキモノ也、只在此事也、傳定ハ目出

カリケル者也、音ヲワナ、カシ、ニ付テ目出也、略中

間云、此樂律和脱輪鼓催馬樂安波ノ戸ノ音振ヲモテ作之云云、事實ハ爲呂樂如何、答云、爲呂樂ガ甚

深ノ證ニテ有也、古人ノ律歌ヲ歌ケルハ、偏ニ律ニ今様ノ如ニハウタハザリケリ、半呂ノ音ニゾ

歌ヒケル、律ノ催馬樂ヲモテ大食調呂歌ニ入ナリ、其儀相叶ト云々、目出キ事也、宗通卿ハ宗俊ノ

說ヲウケシメ給也、其音振半呂ナリ、其已前ノ古人如此云云、而宗忠ニイタリテ偏ニ律音ニハ歌

ハル、ナリ、自爾以來偏ニ律音ニ成了、今竊ニコレヲ思フニ、催馬樂我駒歌ヲシテ、拾翠樂伊勢海

等水調呂音尤此奥ノ事也、半呂音ニ歌フアリ、證據以明哉、略中

又云、催馬樂ハ、我駒ヲモテ序トシ、伊勢海ヲモテ破トシ、竹川ヲモテ急トス、是古人之故實也、略中

美作呂歌美作歌振ハ柳花苑ニ合ナリ、是ニヨテ面白キ也、上古催馬樂ヲモテ樂ヲ作ル者流例也、

又以樂之音曲合歌テ歌出シ證如此、

山城歌詞ニライシナヤサイシナヤト云詞、葛城之詞ニ乎志毛止云詞等ハ、其時ノ童謠之詞ドモ

ナリ、タトヘバ近來ノ童謠ニヤレコトムトウセイサラナリト云義ナリ、

〔樂家錄五催馬樂曲説〕發聲及助音附管之節

云て、律を次にする也云々とあるは、ともに古本催馬樂の次に同じければ、後に律呂とせし本は、ひが事なりとあり、今又古本を檢るに、仁智要錄の節付には律呂とついで賜へり、文治二年の節付には呂律とついでたり、嘉禎二年の節付には律呂とついでたり、和名抄音樂部に、催馬樂曲を出したるに、それにも律呂とついでたり、教訓抄黃鐘調の目錄にも、律呂とついでたり、こは譬へば、みぎひだりと云を、左右と記す類なれば、誤りあやまらぬの、けぢめあるにはあらず、男は陽、女は陰なるを、をみな男といはん時も、字には猶男女と記さるめれば、假令催馬樂には呂を重すとも、猶その目錄などには律呂ともついでざらむやは、既に花鳥餘情には、然かのたまひて、その同じ君の愚按抄には、律呂を次第給ひたるにあらずや、かゝれば、今文治本の本文を用ふるといへども、歌の順悉く別なれば、猶嘉禎本に隨ひて、律呂とはついでつ、

〔鄧曲抄〕資賢卿のいふ、○中催馬樂の装の山歌に合せ上て唱こと禁句也、其所はセアゲテといふ節也、あなたふとのあはれをあれと唱、同じ事なるべき、

〔體源抄十中〕中伯朝葛記ニ云、催馬樂ハユ、シク科アリテ歌フベキナリ、大納言宗俊ノ歌ハレケルハ、如此ノ骨法ノ目出キ也、敦家ハ少シ今樣氣ノアリテ私シヒタリケル也、有賢又政長ニモ今樣氣アリケリ、

春宮大夫宗能云、催馬樂ハ雄拍子ヨリ打始也、初二雌拍子ノ中ル歌ヲバ、不打シテ、雄拍子ヲ持テ打始ナリ、歌出トキ歌ハントテハ、先拍子ヲ打オイテ歌ヒ出スナリ、○中

梅枝ニハ鳴トモノ字ヲバ、御前ノ儀ニハ不歌、棲トモ歌ナリ、

更衣ニハ春ハ萩花摺ヲバ替テ歌也、春ノ花摺歟、可尋之、或人云、萩ノ葉摺ト云々、

筵田ノ初段ニハ、棲鶴ヲバ二度不唱ナリ、主上ノ御前ニテ歌ニハ、身ヲ堅ク心ヲ慎テ、主上ニ對奉テ、帝德ヲ褒タテマツルガ如クニテ可歌也、



美作 拍子十六、二段各八、略○中

藤生野 拍子十六、二段各八、美作同音○中

妹與我 拍子十○中

淺綠 拍子十二略○中

青之馬 拍子十二、淺綠同音○中

妹之門 拍子十二略○中

席田 拍子十二、二段各六、美濃國元慶悠紀風俗○中

大宮 拍子十略○中

角總 拍子十、大宮同音○中

本滋 拍子二十、二段各十、但音振同大宮○中

渡山 拍子十、備前國悠紀風俗○中

眉戸白女 拍子八略○中

酒飲 拍子八略○中

田中井戸 拍子十略○中

難波海 拍子十二略○中

我家 拍子十一略○中

無力蝦

〔催馬樂譜入文〕律呂

或人の校本云、古本催馬樂は呂律とついでたるに、愚按鈔體源抄などは、律呂とついでを改けり、されど花鳥餘情若菜下に、本律呂と云律は陽正也、呂は陰助也、然れども催馬樂には呂律と

更衣 拍子十二、何爲同音、○中

何爲 拍子十三、○中

老鼠 拍子十

〔仁智要錄三〕催馬樂譜 呂歌一越性調

安名尊 拍子十四、三段、一ノ五、二ノ五、三ノ四、新年、梅之枝、此三首同音、○中

新年 拍子十四、三段、○中

梅之枝、○中

櫻人 拍子二十四、二段各十二、地久破、○中

葦垣 拍子三十五、五段各七、○中

山城 拍子三十、三段各十、○中

真金吹 拍子二十二、二段各十、山城同音、○中

紀伊州 拍子十七、一段九、二段八、○中

葛城 拍子二十二、三段、一段六、二段七、三段九、○中

竹河 拍子十四、二段各七、○中

河口 拍子十四、二段各七、竹河同音、○中

此殿 拍子十六、二段各八、○中

此殿之 拍子十六、二段各八、○中

此殿奥 拍子十六、二段各八、○中

鷹山 拍子十六、二段各八、已上四首同音、○中

石河 拍子十六、三段、一段六、二段六、三段四、○中

わいへ、は、とばかりやうをも、たれたるを、おほぎみませ、むこにせん、みさかなに、なによけむ、あはびさだえか、かせよけん、あはびさだえか、かせよけん、

音調

〔仁智要錄二〕催馬樂律

高砂 七段、拍子各五、合拍子三十五、略中

夏引 二段、第一段拍子九、第二段拍子十四、合拍子廿三、貫河同音三段、略中

貫河 三段、拍子各九、合拍子廿七、略中

東屋 二段、拍子各九、合拍子十八、略中

走井 拍子九、略中

飛鳥井 拍子九、略中

青柳 二段、拍子各六、合拍子十二、類聚箏譜云、歌音振出所異、譜說、反立之度同、譜說、略中

伊勢海 拍子十、略中

庭生 拍子九、略中

我門 三段、一段拍子七、二段拍子六、三段拍子八、合拍子廿一、略中

我門乎 二段、拍子各七、合拍子十四、大路同音、略中

大路 二段、拍子各七、合拍子十四、略中

大芹 拍子三十四、略中

刺櫛 拍子十五、略中

鷹子 拍子十五、略中

逢路 拍子十三、道口同音、略中

道口 拍子十三、略中

田中、井戸 一段、拍子十、薩家五拍子用之、

たなかのゐどに、ひかれるたなぎ、つめく あこめ、田中のこあこめ、たらし、らり、たなかのこあこめ、

無力蝦 一段、拍子八、

ちからなきかへる、ちからなきかへる、ほねなきみゝす、ほねなきみゝす、

難波瀉 一段、拍子十二、聊早歌也、

なんばのうみ、なんばの海、こぎもてのぼる、をねおほおね、

つくしづまでに、いますこしのほれ、山さきまでに、

鈴之川 一段、拍子九、録興我同音、但一句替、

すゝか川、すゝか川、やそせのたきを、みな人のめぐるもまゐるくや、時にあへる、時にあへるかもや、

石川 三段、拍子六六四、合十六、

いしかはの、こまうどに、おびをとられて、からきくいする、

二段、いかなる、いかなるおびぞ、はなだの帯の、なかはたえたる、

三段、かやるかあやるかなかはたえたるか、

奥山 一段、拍子七、

おく山に、ききるやをぢ、きをやはけづる、ま木やはけづる、きけづるをぢ、

奥々山 一段、拍子九、

おくやまに、きながすと、ききるをぢ、きやときやときをやはけづる、まきやはけづる、きけづるをぢ、

我家 一段、拍子九、



いもがかどや、せながかど、行過かねてや、わがゆかば、ひちかさの、ひちかさの雨もやふらなん、まばたをさ、あまやどり、かさやどり、やどりてまからん、までたをさ、

席田 二段、拍子二十、初段八、二段十二、或説廿四、藤家用五拍子、

むしろ田のや、むしろ田の、いつぬき川にや、すむつるの、いつぬき川にや、すむつるの、

二段

すむつるのや、すむつるの、ちとせをかねてぞ、あそびあへる、よろづ代かねてぞ、あそびあへる、  
大宮 一段、拍子十、

おほみやの、にしの、こんちにあやめ、こんだり、さやめ、こんだり、たり、やり、たんな、

總角 一段、拍子十、本滋、同音、

あげまきや、たうく、ひろばかりや、たうく、さかりてねたれども、まろびあひにけり、たうく、  
かよりあひにけり、たうく、

本滋 二段、拍子各十、總角同音、而替節多之、藤家五拍子用之、

もとまげきもとまげき、きびの中山、むかしより、むかしから、

二段

むかしから、むかしより、名のふりこぬは、今の世のためけふの日のため、

美濃山 一段、拍子二十、藤家五拍子用之、

みの山に、まじにおひたる、玉がしは、とよのあかりに、あふがたのしさを、あふがたのしさを、

眉止之女 一段、拍子十六、聊早可唱之、藤家五拍子用之、

おほみきわかせや、まゆとじめ、まゆとじめ、まゆとじめ、まゆとじめ、まゆとじめ、

酒飲 一段、拍子十五、藤家五拍子用之、

さけをたうべて、たべゑうて、たふとこりんぞや、まうでくる、なよろほひそ、まうでくる、たんな、たんなたりや、らんな、たりちりら、

うばたまり、われを、われをこふらし、こがごゆなるや、こがごゆなるや、

應山 二段、拍子各八、此段同音、夏不可用之、

たか山に、たかを、たかはなちあげて、をくよしをなみ、あはれ、をくをなみ、はれ、  
をくをなみ、わがす、わがする時に、あへるせなかもや、あへるせなかも、

美作 二段、拍子各八、不加空拍子、

みまさかや、くめの、くめのさら山、さら／＼に、なよや、さら／＼に、なよや、

さら／＼に、わがな、わがな名はたえじ、よろづ代までにや、よろづ代までや、

藤生野 二段、拍子各八、與美作同音、

ふちふの、かたち、かたちが原に、まめはやし、なよや、まめはやし、なよや、

まめはやし、いつさいはひしもゑるく、時にあへるかも、時にあへるかもや、

妹與我 一段、拍子十、

いもとわれと、妹とわれと、いるさの山の山あら、ぎ、手なふれそや、かをすがにや、かをまさ  
すがにや、

淺緑 一段、拍子廿四、青馬同音、近來不用、

あさみどりや、こいはなだ、そめかけたりと、見るまでに、たまひかる、ま、たひかる、ま、んきやう、すさ  
かのま、だりや、なぎ、まだいたゐとなる、せんざい秋はぎなでしこ、からほひ、ま、だりや、なぎ、

青馬 一段、拍子廿四、淺緑同音、

あをのま、はなればとりつなげ、さをのま、はなればとりつなげ、まのいざやの、まのいざやの、さを  
こがひこなる、さいろこ、またいたんこの、たいきのわらはの、さをこがひこなる、さいろこ、  
妹之門 一段、拍子廿二、同淺緑、而末相替、

きのくにのきのくにのや、まらゝの濱に、眞まらゝの濱に、おりゐるかもめ、はれ、その玉もてこ、  
二段 かせしもふいたれば、なごりしもたてれば、みなぞこきりて、はれ、その玉見えず、

葛城 三段 拍子廿二、一段六、二段七、三段九、

かづらきの寺のまへなるや、とよらの寺の、にしなるや、

二段 えの葉ゐに、まら玉まづくや、ましら玉まづくや、おしとど、おしとど、  
三段 まかしてば、くにぞさかえむや、わいへらぞ、とみせんや、おしとど、としとど、おしとど、としとど、

竹河 二段 拍子各七、合十四、空拍子、

たけかはの、はしのつめなるや、はしのつめなる花ぞのに、はれ、

二段 花ぞのに、われをばはなてや、われをばはなてや、めざしたぐへて、

河口 二段 拍子各七、竹川同音、

かはぐちのせきのあらがきや、せきのあら垣や、まもれども、はれ、

二段 まもれども、いで、われねぬや、出てわれねぬや、せきのあらがき、

此殿者 二段 拍子十六、各八、

このとは、むべも、むべもとみけり、さきくさの、あはれ、さき草のはれ、

二段 さき草のみつばよつばの中に、との作りせりや、とのづくりせりや、

此殿西 二段 拍子各八、與此殿者同音、

このとの、此との、にしの、にしのくらがき、春日すら、あはれ、春日すら、はれ、

二段 はるびすら、ゆけど、ゆけどもつきず、にしのくらがきや、にしのくらがきや、

此殿奥 二段 拍子各八、與此殿西同音、

このとの、此との、おくの、おくのさかやの、うばたまり、あはれ、うばたまり、はれ、

二段  
ことをこそ、あすともいはめ、をちかたに、つまさるせな有禁忌常不用也、よばふひと仍替用之、なれば、あすもさねこじや、そ  
よや、ああすもさねこじや、そよや、  
葦垣 五段、拍子各七、合拍子卅五、

あしがき、まがきかきわけて、ふみこすと、おひこすと、はれ、

二段  
ふみこすとたれか、たれか、此ことを、おやに、まうよこし、まうし、

三段  
と、ろける、この家、此家の、おとよめ、おやに、まうよこし、けらしも、

四段  
あめつちの、神も、かみも、そうしたべ、われは、まうよこし、まうさず、

五段  
すがのねの、すがな、すがなきことを、われはきく、われはきくかな、

山城 三段、拍子各十、合拍子三十、空拍子、

山しろの、こまのわたりの、うりつくり、なよやらいしなや、さいしなや、うりつくり、うりつくり、は

れ、  
二段  
うりつくり、われをほしといふ、いかにせん、なよやらいしなや、さいしなや、いかにせん、いかにせ

ん、はれ、  
三段  
いかにせん、なりやまぬらし、うりたつまでに、やらいしなや、さいしなや、うりたつま、うりたつま

で、  
真金吹 二段、拍子各典、山城、同音、

まがねふく、まがねふく、きびの中山、おびにせる、なよやらいしなや、さいしなや、おびにせる、はれ、

二段  
おびにせる、はそたに川のおとのさやけさ、やらいしなや、さいしなや、おとのさや、おとのさやけ

さ、  
紀伊國 二段、拍子十七、初段九、二段八、



にしでらのおいねすみ、わかねすみ、おんもつんづ、けさつんづ、けさつんづ、ほうしにまうさん、  
 玄にまうせ、ほうしにまうさん、  
 玄にまうせ、

隱名 一段、拍子十、近來不用之。

くほのなをば、なにかいふ、くほのなをば、なにかいふ、つびたり、けふくなう、たもろ、ひのなか  
 の、ひつきめな、けふくなう、たもろ、

呂 安名尊 三段、拍子十四、一段五、二段五、三段四、

あなたふと、あなたふと、けふのたふとさや、いにしへも、はれ、

二段

いにしへも、かくやありけんや、けふのたふとさ、

三段

あはれそこよしや、けふのたふとさ、

新年 三段、拍子十四、同上、此歌正月可用之、

あたらしき、あたらしき、としのはじめにや、かくしこそ、はれ、

二段

かくしこそ、つかへまつらめや、よろづ代までに、

三段

あはれそこよしや、よろづ代までに、

梅枝 三段、拍子十四、與安名尊同、自春始至二月可用之、

むめが枝に、きあるうぐひすや、はるかけて、はれ、

二段

はるかけて、なけどもいまだや、雪はふりつ、

三段

あはれそこよしや、ゆきはふりつ、

櫻人 二段、拍子十二、此歌花比可詠之、

さくら人、さくら人、そのふねちやめ、  
 玄まつたを、とまちつくれる、  
 見てかへりこんや、そよや、あす  
 かへりこんや、そよや、

さしぐしは、とうまりな、つ、ありしかど、たけくのまようの、あしたにとり、ようさりと、とりしかば、さしぐしもなしや、さきんだちや、

應子 一段、拍子十五、與更衣同音、歌用之、

たかのこは、まろにたうばらんや、手にするて、あはづの原の、みくるすの、めぐりのうづら、とらさんや、さきんだちや、

逢路 一段、拍子十三、與更衣同音、

あふみちの、まの、をす、きはやひかす、こもち、まちやかぬらん、まの、をす、きや、さきんだちや、

道口 一段、拍子十三、逢路同音、

みちのくち、たけふのこふに、われはありと、おやにはまうしたべ、こゝろあひのかせや、さきんだちや、

更衣 一段、拍子十三、空拍子初反之時、可打之、

ころもがへせんや、さきんだちや、わがきぬは、のはらまのはら萩の花すりや、さきんだちや、何爲 一段、拍子十三、更衣同音、此歌冬、可用之、

いかにせん、せんや、をしのかもとり、いで、ゆけば、おやはありくと、さいなめど、よづまさだめつや、さきんだちや、

鶏鳴 一段、拍子十一、近來不用之、

とりはなきぬてふ、けさくらまぎれ、またひものをに、おしすがりゐてこそ、とゞこほれ、なくこなすまで、

老鼠 一段、拍子十、

たり、

我門爾 三段、拍子四十、第一段十四、二段十二、三段十四、藤家用五拍子、

わがかどにや、わがかどに、うはものすそぬれ、またものすそぬれ、あさなつみ、夕なつみ、朝なつみ、  
二段あさなつみ、ゆふなつみ、わがなを、あらまくほしからば、みそのふの、みそのふの、

三段みそのふのや、みそのふの、あやめのこほりの、大りやうの、まなむすめといへ、おとむすめとこそ  
 いはめ、

我門乎 二段、拍子廿八、各十四、第二反、猶有空拍子、藤家五拍子、

わが門を、とさんかうさん、ねるをのこ、よしこざるらしや、よしこざるらしや、

二段よしなしに、とさんかうさん、ねるをのこ、よしこざるらしや、よしこざるらしや、

大路 二段、拍子廿八、各十四、此歌春用之、

おは於ぢに、そひてのぼれる、あをやぎが花や、あをやぎがはなや、

二段あをやぎが、まなひを見れば、今さかりなりや、今さかりなりや、

大芹 一段、拍子三十四、有空拍子、此歌春用之、或難時、

おほせりは、くにのさたもの、こせりこそ、ゆで、もうまし、これやこの、せんばん、さんたのきの、ゆ  
 しのきのばん、むしかめのどう、さいかくのさい、ひやうさいとさい、りやうめん、かすめうけたる、  
 さりとほし、かなはめばんぎ、五六がへしの、一二のさいや、四三のさいや、

浅水 一段、拍子二十一、

あさづのはしの、とゝろとゝろと、ふりしあめの、ふりにしわれを、たれぞこの、なかびとたて、み  
 もとのかたち、せうをこし、とぶらひにくるや、さきんたちや、

插櫛 一段、拍子十六、與更衣同音、此歌冬五節頃、可用之、

貫河 三段、拍子各九、各拍子廿七、

ぬき川の、せゝのこすげの、やはらたまくら、やはらかに、ぬるよはなくて、おやさくるつま、

二段、  
おやさくるつまは、ましてるはしも、まかしあらば、やはぎのいちに、くつかひにかん、

三段、  
くつかは、せんがいの、ほそしきをかへ、さしはきて、うはもとりきて、みやちかよはん、

東屋 二段、拍子各九、合拍子十八、

あづまやの、まやのあまりの、あまそゝぎ、われ立ぬれぬ、そのと、のどひらかせ、

二段、  
かすがひも、とざしもあらばこそ、そのと、のど、われさゝめ、おしひらいてきませ、われや人づま、

走井 一段、拍子九、此歌自三月至五月用之、

はしりゐの、こがやかりをさめかけ、それにこそ、まゆつくらせて、いとひきなさめ、

飛鳥井 一段、拍子九二切、音振走井、少相替、

あすかゐに、あすかゐに、やどりはすべし、おけ、かげもよし、かげもよし、みもひもさむし、みまくさ  
もよし、

青柳 二段、拍子十二、無空拍子、春中用之、

あをやぎを、あをやぎを、かたいによりて、や、おけや、うぐひすの、おけや、

二段、  
うぐひすの、ぬふといふかさは、おけや、むめの花、がさや、

伊勢海 一段、拍子十、無空拍子、

いせのうみの、いせのうみの、きよきなぎさの、まほがひに、なのりをやつまん、かひやひろはん、玉  
やひろはん、

庭生 一段、拍子九、此歌春中用之、

庭におふる、庭におふる、からなづなは、よきななり、はれみやびと、の、さぐるふくろを、おのれかけ



歌章

難波海

千年經

淺也

狹鰭河

已上律歌

〔催馬樂〕律 我駒二段

いでわが駒はやくゆきこせ、まつち山あはれ、まつち山はれ、  
つち山まつらん人を、ゆきてはや、あはれ、ゆきてはや見ん、

澤田川 三段

さはた河、袖つくばかり、あさけれど、はれ、

あさけれど、くにの宮人、高はしわたす、

あはれそこよしや、高はしわたす、

高砂 七段、拍子各五、合拍子三十五、

たかさごの、さいさごの、たかさごの、

をのへにたてる、まら玉つばき、玉やなぎ、  
本玉やなぎ、一

それものがとさん、ましものがと、ましものがと、

ねりをさみをの、みぞかけにせん、玉柳、

なにしかもさん、なにしかも、なにしかも、

心もまだいけん、ゆりばなの、さゆりばなの、

けささいたる初花に、あはましものを、さゆり花の、

夏引 二段、第一段拍子九、第二段拍子十四、合拍子廿三、真川同音、

なつ引の、まらいと、七はかりあり、さごろもに、おりてもきせん、ましめはなれよ、

かたくなに、ものいふをみなかな、ましあさぎぬも、わがめのごとく、おもとよく、きよくかたよく、

こくびやはらかに、ぬひきせめかも、

にはあらざる也、すべて此譜をよみ見ん人もとは陋巷の謳歌なりといふことをよく心にくみしめずては、おもひあやまつ事多かりなん、

〔伊呂波字類抄〕左人本、催馬樂サイハラ 狭サハタカハ 青柳アサヤキ 夏引ナツヒキ 貫

河メキカハ 高沙古カサコ 伊勢海イセノウミ 衣替コロモカヘ 道口ミチノクチ 淺

水橋アサムツノハシ 何爲無イカニセシ 鷹子タカノコ 刺櫛サシクシ 大芹オホセリ

大路オホミチ 我門ワカカト 東屋アタマヤ 激井ハシヅキ 飛鳥井アスカキ 鳥鳴ハマナ

之キメ調ハハ 櫻人サクラヒト 草垣アシカキ 山城ヤマシロ 石川イシカハ 紀伊國キノクニ

竹川タクカハ 河口カハタチ 葛城カツラキ 鷹山タカヤマ 此殿コノトノ 淺綠アサ

ミトリ 青馬アサマ 妹門イモカカト 大宮オホミヤ 養山ミノヤマ 舉卷アケマキ

田中井外タナカノキト 眉刀自女マユトシメ 本滋モトシケ 庭生ニハニオホル 陰名グホク

之ノナ、調ハハ

〔兼中抄〕音樂 催馬樂

安名尊アナナホ 梅枝ウメエ

山背サセ 眞金吹マキンフ

奥山オクヤマ 白馬ハクバ

此殿コノトノ 酒屋サカ

鏡山キヨヤマ 高島タカシマ

總角ソウカク 高沙古カサコ

伊勢海イセノウミ 庭生ニハニオホル

達道タツミチ 何爲ナニヲシム

新支ニウシ

紀伊國キノクニ

淺綠アサ

倉垣クラカキ

婦門フメ

夏引ナツヒキ

我門ワカカト

鶴子ツツシ

櫻人ウメエ

本滋モトシメ

筵田セデン

鷹山タカヤマ

大宮オホミヤ

貫河クワカハ

大芹オホセリ

道口ミチノクチ

美濃山ミノヤマ

美作ミササキ

御馬草ミウマクサ

吾家ミヅカ

長澤ナガサワ

飛鳥井アスカキ

淺水橋アサキハシ

衣替コロモカヘ

石川イシカハ

藤生野フジノノ

酒飲サカ

田中井戸タナカノイデ

已上呂歌イサノロカ

東屋アタマヤ

大道オホミチ

西寺セイジ

草垣カサキ

婦吾フメ

竹川タクカハ

無力ムリキ

走井ハシヅキ

我門ワカカト

鷄鳴キヲ

葛木カヅキ

鈴鹿川スズカハ

河口カハタチ

万木マンキ

青柳アヲナギ

差櫛サシクシ

陰名グホク

てのまひ言なるをや、故今は古本どものむねに隨ひて、其名の意は、右の二つを出じとおもふ中に、もしは初のかたなるか、

〔催馬樂譜入文上〕催馬樂時代

或樂家記錄曰、神樂催馬樂曲之事、家傳云、淡海三船撰之、多氏へ相傳ふ、右近將監多自然麻呂、神樂催馬樂の祖也、故神樂の時、多氏今に神を取て人長をつとむ云々、鄧曲相承次第曰、神樂催馬樂譜云々、以舞人多自然麻呂爲根元、其後次第上下翫之と見えたり、今此傳に就ていはゞ、彼淡海真人御船と云し人は、元正天皇養老六年に生れて、聖武天皇天平年間より經て、桓武天皇延暦四年に卒せられたれば、かの催馬樂を撰べりしは、寧樂朝の末つかたばかりの事とすべし、然れば次に引く書どもに、左近少將作催馬樂などある類は、其時始て作れりと云にはあらず、もしは當昔の曲どもを輯て、今ある譜のごとく六十餘曲に修録せしを云か、又其譜を作り定られたるを云にもあるべし、既に三代實錄<sup>第三</sup>貞觀元年條曰、多十月云々、廿三日乙巳、尙侍從三位廣井王薨<sup>略</sup>○中特善催馬樂<sup>略</sup>○中とあるにても、此催馬樂の、其以前より世に弘まりて有し事、いちしろし、續紀天平十四年正月、六位以下等鼓琴歌曰、新年始爾<sup>ハルシ</sup>何久志<sup>ナニコシ</sup>社供奉<sup>ヤウケホウ</sup>良米<sup>リヤウミ</sup>、萬代摩提丹と載たる、是則今の催馬樂の、呂の新年曲に收めたるもては、やくそのかみうたひそめつる、一の證とすべきものなり

○中 此人<sup>尾張</sup> 神樂催馬樂曲の相承の人なる事は、既に神樂の始に引つるが如し、これらをもおもふべし、さて鄧曲秘鈔、風俗裏書云、催馬樂、本路頭巷里之謠詞也、然而後好事之士女、取以爲彈琴歌曲、故其歌因來、甚有古代、有中世、厥后更奉諸國、謂之風俗、又後代謠詞、謂之今樣、催馬樂風俗、固是一也、遂翫於宮中已久矣とある、まことにさりけらし、おもふに神代より上に雅樂ありつれば、下にも謳歌ありし事、歌を上下おしなべてよみ來りしと同じ、○中 彼の淡海御船撰とあるも、只そのかみの、ちまたの謳歌をあつめて、多氏にあたへて、節を付させしを云にて、新に作れりと云

中へまじへ擧たるにこそあれ、唐樂に催馬樂といふあることなし。さる故にその催馬樂と擧たる分注に、我駒曲是也とあり、又其次なる狹鰭河も、催馬樂の中の澤田川の曲也、すなはち分注に、澤田川の曲是也とあり、唐樂に狹鰭河といふ名あるべきかは、又春庭樂和風樂なども、皇朝にて作れる曲にして、唐樂にはあらざるをや、さてついでにいはむ、催馬樂といふ名は三代實錄三の零にはじめて見えたり。

〔催馬樂譜入文〕名義

岡部氏○誤の催馬樂考曰、神樂に前張あり、それが拍子にうたふ故に、是もさいばりの名を負しもの也、前張は一首なるをそれが調べにうたふ神樂を、皆大小の前張の中にこめていへり云々、  
略○中

今按に、右の岡部氏の説もわろかれど、又此本居氏の説ども、心得がたし、そは既に神樂歌にも、ことわりつること、古本どもには、かの大前張標下に、或曰催馬樂とあるし、又前條に引る古鈔どもに、某作神樂催馬樂とありて、其濫觴をいろ／＼さたせる、専ら一つ物の如くに、いひなせる中にも、鄧曲相承には、たゞ拍子の少し換るのみといひ、嘉禎節付本には、大前張以下、半出於催馬樂とさへ記したれば、かの大前張小前張は、もと此催馬樂より取て神樂の餘興にうたひたる事明らかし、然ればさいばらといふ名は、本吾駒の歌より出たるが、神樂に取れけむとき、その歌どもの中に、さいばりにと云がありしにつきて、かしこにては、さいばりと轉じたるか、又かのさいばりと云が、名義の起りにてありしを、後に吾駒の歌の、初二句の心によりて、催馬樂とは、字を改めたるか、いづれ此二の内ならずては、古本どもの細注に叶ひがたし、此古本どもに従ひてこそ右の前張に、大小の名ある事なども、いと心得安くなりつれさもあらずては、いかにとも解べきよしあらず、十六曲同じふしなる故なりなどいへど、其節付の悉く別なるをいかにせん、皆おしあ



を三代實錄にもまかざるせしが、さて後々の人其字につきて、或抄の如き説をなせしことあるし、かゝる説は後人のくせなり、催馬樂と書ても、猶さいはりと云べくおぼゆ、

## 〔玉勝間〕催馬樂といふ名の事

長瀬眞幸がいはい、催馬樂といふ名は、その初についでたる、吾駒の歌によれるもの也、○此歌はもと萬葉集十二に、乞吾駒早去欲亦打山將待妹乎去而速見牟とある歌也、はじめの二句、馬を催す詞なるをもて、催馬樂とは名けたり、樂は唐の樂曲どもの名、某樂々々といふによりて、添へたるにて、やがて其字音をとりて、良とよぶ也、さて此吾駒の歌を、初とする故に、其名をもろくの曲の惣名とせる也といへる、此説よろし、體源抄には、狛朝葛新作、續教訓抄云、催馬樂といふは、催馬樂といふ樂あり、それより事おこれり、此樂の唱歌に、駒をもよほすといふことの有けるを、やがて歌になして、國々よりうたひ出したり、我駒といふ催馬樂これといへれど、これはかの歌、もと万葉の歌なることをまらすして、唐樂の唱歌より出たりと、誤りつたへたるひがことに、國々よりうたひ出したりといへるもひがこと也、又ある説に、催馬樂といふは、いにしへ諸國より御貢物を納むる時、民の口すさびに、うたひたる歌にて、御貢物を負する馬をかりもよほす意也といへるは、催馬といふ名につきて、造りたるつたなき説也、又縣居大人は、さいばりをさいばらといひなせる也とて、やがて催馬樂を、さいばりとかゝれたれども、これも誤られたり、さいばりといふは、もとさいばりに衣はそめむ云々、といふ歌の一曲の名なるを、十六曲の總名として、大前張、小前張と分れたる、皆神樂歌の方につきたる物にて、催馬樂とはもとより別物なるをや、さてついでにいはむ、さいばりを前張と書は、借字にて、初棹也、さて又或説に、催馬樂といふは、もと唐樂の名也、和名抄、音樂部曲調類、雙調の條に、柳花苑、春庭樂、催馬樂、狹路河、和風樂とならべあげたり、みな唐樂也といへるもひがこと也、これは吾駒の歌など、雙調に奏る故に、雙調の曲の

# 古事類苑

## 樂舞部四

### 催馬樂

催馬樂ハサイバラト云フ、三代實錄貞觀元年十月、廣井女王ノ薨去ノ條ニ見エタルヲ以テ始トス、素ト路頭巷里ノ諸歌ナリシガ、後ニ譜ヲ定メテ、指紳ノ間ニ行ハレ、遂ニ朝廷ノ御遊ノ時ニモ用キラル、ニ至レリ、足利氏ノ時一旦中絶セシガ、後水尾天皇ノ寛永三年、二條城ニ行幸ノ時再興セラレタリ、

名稱

〔運歩色葉集佐〕催馬樂神樂也、名青柳、

〔易林本節用集左〕催馬樂神歌也

〔體源抄十中〕又云、催馬樂ト云ハ、催馬樂ト云樂アリ、其ヨリ事起リ、此樂ノ唱歌ニ、コマヲモヨホスト云事ノアリケル、ヤガテ歌ニナシテ國ヨリ歌イダシタリ、我駒ト云、催馬樂是ナリ、故ニ馬ヲ催ストカキタルナリ、

〔梁塵愚案抄下〕催馬樂

愚按、催馬樂ハ、昔諸國より御貢物を大藏省へ納し時、民の口ずさみに謠ひける歌なれば、さいばらと名づくるなり、馬を催すとかけるは、御つぎ物おほする馬をかり催す心也、

〔催馬樂考〕神樂に前張有、それが拍子にうたふ故に、是もさひはりの名を負しものなり、略中然るにこれをばからの唐の世に、催花樂てふ樂の有しをもて、好事の者の後に催馬樂とは書つらむ



家ノ樂ヲ奏セシム別國ノ風俗ニ擬スベキ歟

〔樂家錄<sup>神樂</sup>〕陪從之神樂說

謂陪從之神樂見于舊記其所作堂上地下相交也未詳之或曰自堂上神樂之所作人被執行之故有此名乎

〔大鏡<sup>五</sup>太政大臣伊尹〕冷泉院の御車のうちよりたかやかにかぐら歌をうたはせ給しはさまぐけうあることをも見きかなと、おぼえ候しにあきのふ<sup>明</sup>順<sup>原</sup>ぬしのはびいとまうなりや

と、の給けるこそ、萬人のたへすわらひ給にけれ、

〔徒然草<sup>上</sup>〕神樂こそ、なまめかしくおもしろけれ、<sup>略</sup>○下

〔續史愚抄<sup>桃</sup>〕<sup>國</sup>延享五年<sup>元</sup>○寛延十一月十七日丁卯、大嘗祭、<sup>略</sup>○中今夜神樂歌再興云、



り舞に非ず、絲竹の調べ、歌曲の節奏、古より傳ふる家有り、神舞と俗に言は、大和舞の事にして、尤上古の風也、春日の若宮にては、巫女の舞あれどいとふるび、古への姿と見えたり、伊勢の大々神樂、近代の俗也、熱田にてせし神樂正徳二辰二月十四日十五日兩日なりいと俗にして傳もなく、爲麻呂如きの妖巫が造り出せし事、檀長胤が獼猴の舞にもおとりていとにげなし、

〔東都歳事記三月〕十一日、深川猿江摩利支天太々神樂興行拜殿の内へ舞臺を設け、極歌を舞へ、九座の神樂興行あり、

〔東都歳事記五月〕九日、龜戸天満宮太々神樂興行、

雜載

〔體源抄十上〕神樂 口談諸方之家記載之

舊神樂譜云、昔貞觀ノ御時、神宴之日被撰定神樂歌、若是消暑堂御神樂歌、

次朱雀院御時、貞信公攝政之間、被始御神樂云々、彼時、磯等前歌、依有禁忌不被歌、其後尙又歌云々、或秘說ニ云ク、大嘗會ノトキ、消暑堂件堂豐樂院内ニ今元基跡御神樂、昔ハ未必始終奏之、其歌少々唱之、只

事御遊云々、

秘記云、日本紀竟宴ハ、一代一度行ハル、ナリ、近來此儀ナシ、和歌講後御遊ヲ始トスルトキ、先神樂歌一曲ヲ歌天、然テ後ニ樂ヲ奏スルナリ、

神樂ニ難義アリ、星歌ニ、白衆等長説晨朝清淨偈、此詞ハ涅槃經ノ文ナリ、而神樂ハ我朝ノ事、起樂神世者如何、○中略

又云、堀川院ノ御時、近方が童ナリシヲ召テ、神樂ヲ賜シニ、衆人ニ勝テ早速ニ賜シ也、仰ニ云、子孫ハ目出キモノ也トテ、頻ニ御感アリケリ、○中略

問、樂ノ品マチノ、ニワカレタリ、今ノ神樂何ノ樂流ゾヤ、答、漢家ノ法ヲ案ズルニ、歷代ノ正聲ヲモテ雅樂トシテ、祭禮以下ニ用ユ、古樂兩胡ノ樂ヲ號ス、別國ノ風俗ヲ備フ、今關ノ神樂ハ本朝開關ノソノカミ、天照大神之御事ヨリ起レリ、本朝ノ樂神樂ヨリ先ダテルハ、ナシ、是正聲爲雅樂、漢

とて候、かしく、

さへものの督どのへ

八幡宮里神樂樂頭領分之事、御糺明之處、盛秋朝臣不然證文不能二答候間、女房御奉書如此候、以此旨可被存知候旨被仰出候也、恐惶謹言、

三月十五日

大澤良門守

綱家判

山井安藝守殿

盛秋朝臣來此段申聞候處以外不與歸畢、

〔東都歳事記二月〕十日、小石川氷川明神廿五座神樂、十一日、下谷稻荷社湯花廿五座神樂、元飯田

町世繼稻荷社十八座神樂、

大神樂

〔當代記〕慶長十三年五月二十四日、伊勢太神宮有大神樂、是は大坂秀頼公乳母局有參詣、秀頼公并御袋爲祈禱ニ前被行大神樂、

〔伊勢參宮名所圖會四〕神樂

他の神社のごとく神前にて神樂といふ事なし、御師の宅に神前を構へ、神樂役人を招待して勤む、是神樂職の外曾て知る事にあらず、其式兩宮に傳へて舊記見る事なし、纔に古語拾遺に備はれりとするのみ、

大々神樂

〔鹽尻四十五〕友人今度熱田の社にて初めし太々神樂を見しとて語る、其さまいと美々敷、巫女は

赤大口天冠を戴き、大柏の白拍子の事也、舞ふに似たり、靨は金のぬり烏帽子など著す、猿樂の三番三の

黒面を蒙り、鉾を持ち舞ふ様、舞樂にも非ず、猿樂田樂に似て、河原狂言に近しと謗る、或人聞て曰、

近年東都芝神明宮按神明太々神樂の起りは、寶永六年の比、神田明神杯の社家神樂とて俳優の

わざをなす、夫を能事に見なして、熱田の神樂座似せ學びける姿と見えし、されば神樂とは、元よ

安居當人依執行修之、如號安居神樂云々、

〔樂家錄神一〕安居神樂說

安居神樂於男山八幡有之、號安居者、十二月朔日至十五日有深齋人、名之號安居當人、詳素知之、所謂當人執行之故、有安居神樂之名、所修之次第、如內侍所也、略定時自庭燎以早韓神終、而奏其駒也、而宮巡其法舉之前書矣、○中略

高良神樂附山神樂之名

八幡高良神樂其法如安居神樂也、山神樂之名限于石清水乎、未見于舊典之中也、蓋自山上執行之義乎、

〔懷竹抄横笛〕可吹笛樣

又云笛穴中ニ○中略亦息クツクニモ、笛ニ入吹テ由詞ヲ吹ハ、田樂笛、里神樂○笛、ナンドノ心地シテワロシ、

〔言繼卿記〕天文十三年三月十二日辛亥、盛秋朝臣與景雄相論之、八幡里神樂事、令披露了、盛秋朝臣仕樣言語同斷之儀也、何も景雄ニ被仰付候由先盛秋朝臣可申聞候由被仰下候了、十五日甲寅、今朝景雄訴訟之儀、御催促申候處、案文調進之由候間調進候、女房奉書如此、同從此方之折紙相調、晝來候時遣了、

仰天文十三三十五 かけを申候、八わた里かぐらがくとうぶんの事、もり秋のあそんまやうの一さきうとかすめ候につきて、文を出され候へども、御きうめい候へば、せうもんをも二たうをも出し候はず、ことに御きうめいなかばにくしをぶけへ出し候とても、色々くせ事せひもなく覺しめし候、ことにまやうの所さ人、かつらにいろひ候べき事はあるまじき事、せうもんにまかせ、もとのごとくかけおにそへちし候へと申きかせられ候、又まやけへもこのぶん御下ぢ被申候よし申

歌之、今於地下忠有一人歌之條、遂被時之樣雖存候、忠有傳此曲候之上ハ、勿論次第候、所詮秘曲事、可有寂慮候云々、仍余仰曰、今夜只弓立曲許有之條可宜、可爲其儀歌數事可相計者、大將可存知之、由申之、則始神宴、

〔看聞日記〕永享十年十二月廿日、有俊今日神樂秘曲弓立、洞院大納言授與云々、

〔言繼卿記〕天文十四年七月廿八日己丑、

一高橋刑部丞來、神樂相傳之奥書、昨日調遣了、文章如此、

・神樂笛曲燒、與利合、神韓神同早韓神其駒等、所授與防州三宮高橋刑部丞源長賢也、

天文十四年七月廿五日

權中納言 花押

名人

〔體源抄上〕神樂道名人

從五位下伯耆權介多宿禰公用能長此道 二品式部卿貞保親王作俊琴譜 右近權少將

良岑朝臣宗貞撰左笛譜 左衛門尉大石宿禰富門撰左筆集譜 左近將曹入役部宿禰重

種能歌 左近將監尾張兼時同 右近將監多政方同 同節資同 道將曹同 右

近將監多資忠同 右近府生道守同

〔神道名目類聚抄五〕里神樂 凡テ諸社ニテ行フ神樂ヲ云ト云リ

〔類聚名物考神祇十三〕里神樂 さとかぐら

或書云、神樂はもと天照大神の寶前に限る事にて侍けるが、後諸方の神社にも行ふに依て、禁裏

内侍所の御神樂に對て諸社の神樂を里神樂と云也、冬にて夜の神事なり、

〔樂家錄神一〕里神樂之說

號里神樂者、於諸社擊鼓及銅拍子、而神子鳴鈴舞焉、號之里神樂也、然亦地下舊記之中、於八幡之神樂有此名、而傳曰、鄉里之人依執行修之名之號里神樂也、蓋修法之次第、庭燎以早韓神終曲矣、假令

里神樂



爲鶴岳八幡宮神事山城江次久家以下侍十三人被遣之爲弟子探器量早可被教立神樂一座之所作悉被沙汰出後如本社始行二季御神樂可被上洛也弓立星歌者爲秘事之由聞召然者相傳之仁重可被仰遣且又其志可有御存知也者鎌倉殿仰旨如此仍執達如件

十二月十九日

盛時奉在例

右近將監殿

〔吾妻鏡<sup>十二</sup>〕建久三年三月四日丙子江次久家爲相傳神樂秘曲等上洛仍被遣奉書於左近將監好節之許平民部丞盛時奉行之

江次久家所上遣也弓立星歌等爲相傳上洛之由申之件歌以下神樂口傳故實入意能々被教授來八月放生會以前定被參向關東歟其時相具久家可被下向者鎌倉殿仰旨如此仍執達如件

三月四日

盛時奉

〔吾妻鏡<sup>十三</sup>〕建久四年十月七日庚子多好節依召自京都參著來月於鶴岳依可有御神樂也又右近將監久家同歸參是爲令相傳秘曲先日所上洛也宮人曲不殘一事傳受之由申之加之好方載狀言上其旨非譜代之輩雖不傳此曲隨嚴命悉以令授之由云云

〔八幡御幸記〕延慶三年十月六日己酉今日余伏見參八幡宮○中爰左大將具守源以多忠有申云今夜

若有秘曲者可爲何曲又歌員數可爲何首哉可存知者自是可仰之由仰之了時遣國房仰合前左大臣冬平藤原也前槐申云神樂間事殊無才學仍無左右難計但今度御願異他秘曲有之條誠可宜歟

文永宮人弓立等曲有之今度弓立許有之若可宜歟宮人曲忠有若存授賞之事心懸歟之由推量候左大將參之時宮人曲毛可候歟計申者勿論候云云此間左大將已參云々仍直可同答之由存之于時大將參余直問答大將申云今度秘曲有之條爲御願尤可然候歟就其宮人曲實泰不傳之然而忠有祇候之上者歌之條不可有子細弓立ハ傳受之上ハ不可有子細文永宮人於本拍子實季卿一人

御口ウツシニモノヲバ仰ラレズシテ、師時卿シテツタヘ仰ラレケレバ、彼卿モコエヅワルカリケレドモ、此道ノハカセニハナリニケリ、ヲノヅカラ師時候ハザリケル時ハ、近方ガウタイトラザリケルカギリハ、イクタビモウタヒテゾキカセサセヲハシマシケル、ヨクナリストオボシメシケルトキハ、物ヲバ仰ラレズシテ、御歌ヲトバメサセヲハシマシケリ、三年マデヨルヒルチカク候ケルニ、御口ウツシニ物ヲバ一度モ仰ラレザリケリ、古體ナリカシヤ、又クヒモノナカリケレバ、ヲノヅカラ師時卿ナンドノタ、ウ紙ニ飯ヲイレテタビタリケレバ、其ヲワヅカニナメヅリテゾ、二三日モスゴシケル、カクシツ、十六歳ニナリテゾ、始テ内侍所之御神樂ニ拍子トリタリケル、メデタクテ御門ヨリハジメテホメサセヲハシマシケリ、神樂ノ曲ハスデニ絶ヌベカリケル事ヲ、御門ノ御口ヨリ給ケル、メデタカリケル事ナリ、

〔體源抄 十上〕神樂

同人○多云、資忠所勞ノ間、時方始テ牙テ拍子ヲ取トキ、資忠ガ秘説ドモヲ時方ニ教シテ承キ、其後近方堀河院ヨリ給テ仕シテ聞合シカバ、彼時承シニハニザリキ、以之思之秘調ニヲイテハ、尙主上ニモ殘テ奉リ秘シケルカト云々、

〔源平盛衰記 四十四〕宮人曲内侍所効驗事

二十九日○元曆二年四月國忌成ケレバ、御神樂被止、五月一日ニ、又被行ケル、宮人ノ曲多好方仕ケレバ、勸賞ニハ、子息右近將曹好節ヲ被任將監ケリ、宮人ノ曲ト云ハ、好方祖父八條判官資忠ト云々、舞人ノ外ハ知ル者ナシ、堀河院バカリニゾ奉授タリケル、

〔吾妻鏡 十一〕建久二年十一月十九日甲子、召右近將監好方、於幕府賜盃、酒好方盡野曲、○中又重忠景秀等依仰於當座習神樂曲、兩人器量之由、好方感申云云、十二月十九日癸巳、爲鶴岡神事、道山城江次久家以下侍十三人、可傳神樂秘曲之由、所被成下御教書於好方之許也、

相國被奏云、何故強御歎候哉云々、被仰云、神樂秘曲、胡飲酒采桑老、此等三箇事亦無相傳説之人、已欲絶、爭不歎思食哉云々、重被奏云、神樂ハ所殘ナク、令傳説御畢子息等成長之時、撰器量可授給之、采桑老ハ召天王寺舞人、可被習、胡飲酒者某可教候云々、依之兄忠方被教胡飲酒、弟近方給神樂被習采桑老云々、

堀川天皇令習神樂給之時、天皇御之倚子、助忠候小庭師、時朝臣候小坂敷令傳申、秘曲時於萩戸方令奉云々、

〔續古事談諸道〕

神樂ハ近衛舍人ノシワザナリ、ソノ中ニ多ノ氏ノモノ、ムカシヨリコトニツタヘ

ウタフ、略中時助ガ子助忠コレヲ傳テ、コトニ堪能ナリケレバ、堀川天皇階下ニ召テウケナラヒ

給テ、ツチニコノ神樂アリケリ、藏人盛家ソノ骨ヲエテ、人長ヲツカウマツリケリ、カヽルホドニ

時助助忠父子、カタキノタメニコロサレニケリ、君ヨリ始テ此道ノタエヌル事ヲナゲキ給テ、助

忠ガ末ノ子忠方近方、イマダイトケナキ童ニテアリケルヲ、召イデヽヲトコニナシテ、忠方ハ歌

ノ骨アルニヨリテ、神樂ノ風俗ヲウタハシム、ユタチ、ミヤ人トイフ歌ハ、助忠ガホカシル人ナシ、

助忠カタジケナク君ニサヅケタテマツレリ、内侍所御神樂ノ時、本拍子家俊朝臣、末拍子近方ツ

カウマツレリケルニ、主上御簾ノ内ニオハシマシテ、拍子ヲトリテ此歌ヲ近方ニヲシヘ給ケリ、

マコトニ稀代ノ勝事、イマダ昔ニモアラヌ事也、父ニ習ツタヘンニハヨノツチノ事也、イヤシキ

ミナシゴニテカヽル面目ヲホドコス事、コノ道ノタエザル事ヲ、世ノ人感涙ヲナガシケリ、

〔體源抄十上〕

神樂 口談諸方之家之記

又多近方ハ、資忠ニハヲサナクテヲクレニケレバ、神樂ノ道ハ傳ヘザリケルヲ、堀川院資忠ガ手ヨリメデタク傳ヘシメタリケレバ、近方ヲ尋メシテ、召人ノ中ニ此道絶ナバ口惜カルベキトテ、近方ヲメシテ近衛陣サブラハセテ萩ノ戸ノ邊ニチカクメシテ、御ミヅカラゾヲシヘ給ケル但

人長之舞一人、多（多）腰鼓守忠壽家ニ相承ス、其體四品昇進之時は、其子五位六位之近衛將監將曹之内一人舞之、又は爲門弟、多家之中勤之事、有之、尤此舞は舞樂と申にては無之、神樂人長ノ舞と申也、

笛ハ四辻家ニ相承ス、爲門弟地下家兩家譜代一人宛勤之山井但馬守、太神景村、

篳篥ハ地下兩家譜代一人宛勤之、安倍壹岐守安倍季武、篳篥之事ハ、昔安倍兩家雖有之、兩家共斷

絶漸一流養子を以、薄殿より神樂篳篥ばかり相傳ス、樂者其傳絶候故、南京之樂人久保丹後守光

成より相傳、當時安倍壹岐守家相續、神樂之篳篥權管依無之、後陽成院御宇蒙勅命、東儀出雲守太

秦氏之姓を安倍ニ被改、神樂篳篥之權管ト成、仍于今此家ニ相承ス、

〔諸家家業記〕神樂鄂曲 綾小路 持明院○中

御神樂之節之本末拍子付歌等右二家より庶流之家々并他家之内にても、歷代被相勵候家々へ、被相傳有之事に候、然る所近代之例、四辻家樂所支配として、音樂之事總體彼家之預に相成候故、神樂之笛等、彼家へ入門無之ては、古く傳來之家にても、御神樂に出候事を不被許など申事も有之由、乍去鄂曲之事は、此二家之家業と被致候事、古代よりの例に候、兩家より當時相傳有之家々、大抵左に記之、

庭田 庭田國家 五辻 庭田庶流 大原 持明院庶流 國世流 東園 持明院庶流 石野 源氏新家 慈光寺

此外 鷺尾 河緒

件家々歷代連綿して御神樂之節參役有之候故、當時家業のごとく被相勵候由、

〔神皇正統記〕堀河此御門和漢の才まし〜けり、○中神樂の曲などは、今の世まで地下につたへ

たるも此御説なり、

〔古事談〕六毛諸道舞人助忠爲傍輩正連一名被殺害、祇園林畢、仍堀川天皇御歎息過法之間、久我大



藤家音曲當此時代

後一條後朱  
審御宇也

右大臣賴宗公始也。賴宗公者博雅卿三男也。或次伯耆守至光弟子也。

委事習濟政朝臣彼博雅卿者敦實親王弟子也。

以上見  
管要抄

云彼云是當家之末流也。仍長元清暑堂御

神樂賴宗

時大納言  
藤家元祖

于濟政朝臣取本末拍子弟子執本拍子師匠取末拍子例之由注之。濟政之ガサ

ヘヅルコエト云秘說世之美談此時事也。是敦實親王以來所傳也。此親王師匠雖未詳於神樂者定

受地下說然而地下說自長元之比已斷絕。偏爲源家秘說。但近代當家又此說絕了。口惜事也。以委細

講於令詠之者雖不可有相違。師說中絕之間令斟酌之重當道之故也。

抑賴宗公者敦實親王三傳門弟濟政朝臣直弟也。而近來藤家音曲之爲體以外參差尤不審也。妙音

院相國

藤原  
師長

者中御門內府宗能公弟子也。然而彼相國所作絃譜等以源家爲本體。歟將又宗能公

孫中將宗經也。

宗國

廿五歲早世之間其子宗平卿。催馬樂少々雖令傳習之不及分明。相承大略以斷絕。

子息宗雅卿爲孝繼

孝道末子號  
萬歲藏人

弟子令再興家業。是皆世之所知也。孝繼父孝道妙音院弟子也。依令

展轉彌振達歟。但孝繼又習守覺法親王。彼法親王當家資時朝臣寫瓶弟子也。依令窺緒流給。若以藤

家說被授孝繼歟。

〔梁塵愚按抄上〕

凡神樂は、一越調をもてうたふといへり、二條家には宮人の曲をもて與義とす、綾

小路家には弓立を秘曲とす、但宮人の曲は、近代うたひたえすといへり、

〔伯氏新錄〕一神樂之事

内侍所御神樂ハ、堂上地下庭之座ニ著、堂上歌之時は地下不附之、但笛ハ

太神氏  
一安倍氏  
兩

管共ニ地下吹之、和琴は四辻家所作之、

堂上歌之家ハ

持明院家  
續小路家

兩家、其外之堂上歌所作之輩ハ、兩家之門流也、

和琴ハ四辻家相承也、

地下歌之家

多攝津守久富  
多上野介忠政

兩家、其外之多家ハ、兩家之門弟也、

〔中右記〕寛治八年嘉保元年四月十八日戊子、入夜、參齋院有御神樂於神殿南庭敷座、但無庭火、依爲極熱也。

〔樂家錄神樂〕秘曲大曲修法之次第

舊記曰秘曲簡便而重目之時有之乎大曲簡便而可立也凡七修法次第自庭燎至早歌如例無異儀凡大曲有曲舞也最無仰時人最易曲而各退而後大曲修之輩著座歌方本末或一人自上一首進而有勅使頭中將動舞人是舞是時人最易曲而後奏音取但受本拍子之氣色奏之次歌本末音無附物而後殘輩再著座爲上首而有星可修之勅使從中一將次音取每歲如次星歌三首次朝職其駒已上如例

庭燎諸歌之說

庭燎諸歌近代雖不用之所載于舊記暫記之庭燎歌詞美屋麻仁者阿羅禮不留羅志登屋麻奈留如  
此歌之而下句不歌之是每神樂之說也諸歌之時所謂下句歌之也其詞麻佐紀乃加都羅伊呂都紀  
仁介利一首歌之以爲秘事焉但人長輪投掛之時歌諸歌也云々

〔樂家錄人四〕早歌舞之事附起舞

早歌舞爲人長之秘曲故不仰則不奏之也蓋當於有大曲之夜而有此舞也中夜或結夜也賞賜珠最麗舞品異舞出所及舞行之次第如早韓神持柳舞焉但第一首本方發聲拍子文十四自第二首各附歌卽附管拍子

舊記曰、早歌之舞品、在昔多近方第三首歌詞、アカリ跼踏幸歌之時起于後顧矣云々

〔郢曲相承次第〕式部卿敦實親王

神樂雖爲諸神製作，傳于世以多自然，磨爲根元，其後次第上下翫之，彼親王殊携此道子孫雅信公，時中卿以下皆名譽堪能也。

〔清輔奥儀抄 下之〕問云、かはやしろと云はなにぞ、

答云、かはやしろのことさまに申めれど、みなひがこと也、是は夏神樂のこと也、神樂は冬することをおのづからにはかなる事にて、夏などする時には、きよき川のほとりにてするなり、河の瀬にさかき四本を立て、それをしらにて、まの竹をたなにかきて、それに神供をばそふ、これをかはやしろとはいふなり、さてには火に、

かはやしろまのにをりはへてはす衣いかにほせばかなぬかひざらむ、といふ歌をうたふ也、この作法夏神樂の譜に見えたり、神樂のいへに秘することなり、これ多忠方が説也、問云、夏かぐらむかしよりこそ侍らめ、此歌は貫之集にあり、屏風歌のつゞきに、夏かぐらとて、あるはいかに、答云、れいの神樂は神代よりあることなれど、歌ははるかにさがりたるよの歌どもにてこそはべれ、をりゝに、人のうたひはじめたるにこそ、されど夏神樂もむかしよりありとも、此歌をのちの人のうたひはじめたるにもあらん、催馬樂の譜は、一條左大臣源信の時こそは、はじめて律呂の歌もさだめられたりとうけたまはれば、貫之がよに夏神樂のことのはじまらんもかたかるまじ、もしはかのまふのひがことにもやはべらむ、これはふかき歌とぞおぼゆる、

〔體源抄 上〕神樂

資忠云、内侍所ノ神樂四月ニ行ハル、時、夏神樂ノ作法ヲ用ト云々、夏神樂トハ、庭火ニ唱フ歌ノアルナリ、略中

或記云、夏神樂ニハ不燒火ヲ云、而長和四年閏六月廿三日、内侍所ノ御神樂ナリ、内侍所兩面ノ庇中ニ庭火ヲタクト云々、是左近將曹重胤が、依有所申燒之云々、

〔新古今和歌集神十九〕延喜御時、屏風に夏神樂の心をよみ侍りける、

川やしろまのにをりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらん

美衣ヲ著シテ參詣夜ニ入テ未神樂ヲ奏セザル間ニ時資西國ヨリ上路ノ次ニ敦家ノ在ヨシヲ聞テ參入、敦家殊ニ感嘆ヲ成、自ラ庭中ニ下居テ、相具テ神樂ヲ奏スルニ、時資庭燎ヲ歌ニ、後山ヨリ風吹テ村雲飛、霞殊ニ降ル、萬人皆垂感涙、件般只社頭許ニ降テ、社頭ノ外ニハ天晴テ全以不降之神威揭焉歟、御山ニハアラレフルヲシノ調歟

〔吾妻鏡 三十〕文暦二年○嘉祿元年十二月廿四日壬子、重爲御祈○藤原賴經病氣於所處本宮、令轉讀大般若經、

可修御神樂之由被仰下、被付雜掌人、仍面々遣使、依可勤仕之也、

伊勢内外宮

相州○北條時房御沙汰

石清水八幡宮

武州○北條時義御沙汰

賀茂社

大炊助入道沙汰

春日社

長井判官代

日吉社

駿河入道

祇園社

陸奥掃部助

大原野社

武州御沙汰

吉田社

毛利入道

北野社

武州御沙汰

若宮

武州

熱田社

出羽左衛門尉

熊野社 正月十五日以後、可被始此御祈、

本宮

佐原三郎左衛門尉

新宮

備中左近大夫

那智

湯淺次郎入道

〔類聚名物考 神祇十三〕夏神樂 なつかぐら

〔八雲御抄四由緒言〕かはやし夏ろす夏と云り、夏川の上にてするなり、て

〔袖中抄四〕河やし略ろ○中

顯昭云、是は神樂の譜に夏神樂と云事あり、うちまかせては、神樂は冬する事を、夏するに河のうへにさか木を立たるを、かきてする事とぞ申、○下略



可叶歟然者景房可參之由所望云々奉行廣橋黃門景繼ニ相尋候所元來景盛者異姓他人何可有輕服故景茂猶子景字與云々且吉田神主ニ相尋同前申候仍景秀可下向云々珍重々々次以抑大神ニハ神樂不傳誰人ヨリ相傳哉相尋景茂父重茂入道相傳云々珍重々々十三日春日社御神樂一七ヶ夜被行無爲無事目出就中山木數百本枯之處ヤガテ本復云々奇瑞之至珍重々々神慮之條尙々珍重嘉元之時如此十四日春日御神樂事等景秀來對面委細語之○中今度散狀本拍子忠興末拍子久乙付歌忠信忠國忠清笛景秀筆筆季英陪從五人長久遠

〔吾妻鏡十一〕建久二年十月廿五日庚子來月鶴岳可有遷宮之子細被凝詳議○中條々被申定者爲令唱宮人曲召下多好方云云十一月十九日甲子召右近將監好方於幕府賜盃酒好方盡野曲善信候御前助音太絕妙也廿二日丁卯多好方等欲歸洛之間自政所賜餞物行政仲業家光等奉行之其上有別藏馬十二疋云云

〔吾妻鏡十四〕建久五年十一月四日辛卯鶴岡八幡宮御神樂也將軍家○源賴朝御參右近將監大江久家唱秘曲等畠山次郎重忠梶原左衛門尉景季候付歌云云

〔吾妻鏡五十二〕文永二年三月九日戊寅今夜於鶴岡若宮寶前被行管絃講別當僧正讀式八幡講云云其後有御神樂人長松若丸本拍子萬壽末拍子源王和琴千手筆筆乙大笛夜叉王云云

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕掃部寮御神樂の座をまうければ舞人これにつき近衛の官人實子にさふらひて御神樂はじむ歌あまたに成て夜半もまば／＼あけなんとするに星仰られければ三首ともにうたひつゝふかきまことの御手向聲々にあげ侍るいまやあさくらかへしのこゑどもに神の心はすみわたり給らん

〔體源抄十上〕神樂 口談諸方之家之記

備前國ノ廳官笠ノ吉時語テ云ク敦家備前國司タリシトキ吉備津宮ノ霜月ノ御神樂ニ敦家小

社記云、二季初卯の御神樂は、宮内勅節十箇度其原宇佐宮より傳はり醍醐天皇延喜十四年敦實親王に勅して行はせ給ひしより始り堀河院康和五年十一月上卯、行幸の御沙汰あり、其事御延引ありといへども、神樂は日中をもつて行はせ給ふ爾後代々祭祀怠ることなく、又高倉院承安元年九月十三四日、公家の御祈によつて、神樂を行はれしより、臨時の御神樂を奏し給ふ事も亦多し、其後應仁兵亂の後、祭祀中絶に及しが、絶たるを繼ぎ、廢たるを興し給ふ御代に當て、靈元帝延寶六年再興ありしより、今に至て退轉なし、今相傳ふる所の證歌は、万葉集に多く見えたり、其昔古は時に應じて詠出せるを歌ひ舞しとなり、其式酉刻神樂所作人、東外廊に著座し、戌の刻各樓門より、次第に神前に進み舞殿に著座す、次に俗別當神主檢知及び他姓六位大福宜、小福宜神前に進みて、神供を獻す、宮守神人これを送る、神主祝戸あり、次に總官、祠官、所司、樓門、西内廊に著座ありて、後、神樂を始む、人長軾の前に進み、三拍子を踏立て、東面本方に行、笛、箏、和琴、次第に庭燎曲を奏し、人長軾前に立て、神殿に向ふ、笛、箏、同音に寄合の曲を奏す、本の歌末の歌庭燎曲を奏して後、軾を撤す、次に付歌の聲著座、採物、前張等の歌を奏す、先久止之拍子、阿知女本末三度拍子、神本末、閑韓神本末、早韓神本末、次に人長舞神子座を起、鈴を振て舞合す、次に於介、阿知女本末於介本末、次に勸盃作法あり、次に阿知女薦枕本末篠波本末千歲本末早歌本末於介本末星三首音取りあり、朝倉本末其駒、人長神子舞ふ、次に神樂人各座を起、韓神を奏し、神殿を廻ること一匝、瑞籬の前に還立て、曲を止む、此時神主起て、人長の櫛を取て、神前に捧げ、各一揖して退出し、休所において一獻あり、其式戌の刻より寅の刻にいたる、

〔古事談六〕天永三年三月、石清水臨時祭師時卿令勤仕之時、御神樂依有興、近方唱宮人之由、見子彼卿記錄、然者雖非勅宜令之歟、但宮守之外定無其例歟、

〔教言卿記〕應永十二年六月三日、景秀來對面、春日社御神樂之事、景盛遁世他界之間、輕服之上者不

神遊御字氣間、女藏人所司羞儀如常事畢、中宮同行、神樂畢、

〔年中行事秘抄十一月〕下酉日、賀茂臨時事、略同御神樂事、

有障若依雨無御神樂、於弓場殿給祿云々、今案用五節後酉、

〔公事根源十一月〕賀茂臨時祭

下酉日

階の間のとほりの庭、南北二行に座をまきて、使舞人つく、うしろに本末の神樂の所作人、陪從近衛召人つく、出御有て公卿めしあれば、簀子長階に候す、階の下に頭已下つきて、使舞人をめす、勸盃ありて神樂あり、庭燎よりはじめて、朝倉其駒までうたふ、庭火にもろ歌あるべければ、人長さほうあり、御神樂はて、祿有、

〔紫式部日記〕御ものいみなれば、みやしろ賀よりうしの時にぞかへりまゐれば、御かぐらなどもさまばかりなり、かねときがごまでは、いとつき／＼あげなりしを、こよなくおとろへたるふるまひぞ、みえるまじき人のうへなれど、あはれにおもひよそへらるゝことおほく侍る、

〔古事談六〕承元四年三月日、鴨禰宜祐綱奏云、爲御祈禱、欲勤行臨時御神樂、其次弓立宮人等

ウタハセント存候、仍可執御氣色也云々、上皇鳥羽仰云、神樂事不知食子細、可示合實教云々、因之左近大夫將監家綱奉勅問彼卿、被申云、宮人者荒涼不唱之歌也、於他之秘曲者何事候哉、至宮人者

可有御計候歟云々、私語曰、唱宮人事實教覺悟二ケ度也、一度二條院御宇平治亂逆靜謐之後、永曆元年四月於八條内裏被行三ケ夜御神樂之時、成方唱之、今一度者後白川院御樂危急之後、被行日

吉臨時祭之時、可仕之由被仰下、好方再三辭申、有然而被仰可遣仕之由、然唱之、實教爲

〔狛氏新録〕一神樂之事

神樂ハ每歲内侍所八幡宮初卯等被行也、

〔諸國年中行事大成二月〕初卯八幡祭、山城國男山に鎮座、石清水八幡宮と稱す、略中

傳世 左衛門府生常修正信見習也 左近府生清原助貞同

〔三代實錄四十八〕仁和元年十月廿三日甲戌天皇御紫宸殿○中日暮親王已下降殿於玉階前奏神

樂歌舞極歎嘆諸衛官人内豎等能歌者預之、

〔年中行事秘抄十一月〕下卯日東三條御神樂事、

〔續古事談諸五〕神樂ハ近衛舍人ノシワザナリ、ソノ中ニ多ノ氏ノモノ、ムカシヨリコトニツタヘ

ウタフ、今ニタエズ、コトモノハ今ハハカム、シクウタフモノナシ、宇治殿○藤原ノ東三條ニテ

神樂シ給ケルニ、下野公親コノ道ニ長ジタルキコエアリケリ、多時助又家風ヲツタヘタルモノ

也、メシアハセテキコシメスベシト人々申ケレバ、公親本拍子、時助未拍子、シナガドリ、イセシマ

ノ歌ツカウマツルベキヨシ、公親ニ仰セラレケルニ、イマダナラハズト申テウタハザリケリ、時

助コレヲウタフ、コノ家風ナホスグレタリトテ、次日時助ヲ召テ祿タビケリ、

〔中右記〕嘉承三年元年天仁十一月十七日、今夕俄有御幸六條殿、攝政殿、藤大納言以下、公卿五六輩直

殿上人廿人許直衣前驅於六條殿北面方有御神樂興密儀也殿下按察本拍子予宗○藤原末拍子殿

中將經忠、信通、敦兼、有賢、家俊、伊通、成通、候、寶子敷石近府生近方候前庭○中今夜御幸御方違云々、

〔儀式〕園井神神祭儀二月春日祭後丑、十一月新嘗會後丑、

神祇官率御巫物忌神部等歌舞、即調神樂於兩神殿前、造酒司史生酒部等候、進朝神樂料酒一缶、主

殿寮殿部等供庭燎、事了退出、

〔公事根源六月〕神今食

同日○十日

神饌の程は、近衛の帷にて神樂あり、よひの程とり物韓神までうたふ、よもすがらうたひて還御の程、御輿の左右にうたひて供奉す、聲たえず千歳をうたふ、いと興ある事にや、

〔北山抄十一〕中寅日鎮魂祭事



ジケル時仰アリテ、人長兼弘馬ニノリテアゲツ、御前ヲワタリケリ、近衛舍人ハヨキ人ノチカク召仕モノニテ、事ニフレテナサケアリ、ミメヨク藝能フルマヒ人ニコトナルベキモノ也、カレバ昔ノモノドモハ皆サノミコソアリシニ、今ノヨニハミメノワロク、能ノナキノミナラズ、心ギハアサマシキモノドモナリ、ナガクウヒニタルモノナリ、

〔古今著聞集<sup>六</sup> 絃歌舞〕鳥羽院八幡に御幸有て御神樂行はれけるに、みづから御笛をふかせ給けり、本拍子徳大寺左府<sup>實定</sup>納言にてとり給けり、末拍子按察資賢卿の殿上人にてとられけり、備後前司季兼朝臣庭火の本歌をとなへけるに、兼弘人長にて、もろ歌を仰すとて、外山なるとうたふ時おほせけるにも、末句をうたはで、季兼朝臣まりぞきにける、其説をまらぬこそと世の人いひけり、神のふりに末句をうたはざるは、故實にて侍るとなん、季兼朝臣歸洛しけるに、作道にてうしろのかたよりはせ來る物有けり、見歸たれば多近方也、はせつきていひけるは、穴かしこ此事ちんじ給な、たゞまらざるよしにておはしますべし、若ちんじ給はゞ、秘説あらはれぬべしとぞいひける、兼方がまらざりければ、兼弘はまらぬはことほり也、拍子とりて出たつとき、人長輪を冠にかけて引とゞむるとかや、是秘説にて侍り、

〔體源抄<sup>十上</sup>〕神樂

人長名人

從六位下行施藥院史海連船雄<sup>上古人</sup> 左近將監尾張兼時<sup>中古人</sup> 右近將監多政方 右近將監下野公安 左近將曹中臣近友 右近將曹秦兼方<sup>天永二年六月出家</sup> 右近府生同兼久 同兼弘 左近府生同兼行 左近將曹多兼信 同兼久<sup>不喜但兼ト</sup>

人長代名人

下野光行<sup>號西京下太一</sup> 右近將曹清原安國<sup>雖無其傳之見習云々、聞如之時召之ナ世以許之</sup> 右近府生道守 重久<sup>無其</sup>

其駒之曲、人長持、神舞焉、最難舞品異、舞行之次第、如早韓神早歌等也、蓋此曲之墨譜二段也、初一返、  
拍子文後段三返、各拍子已上爲一返、而二返奏之也、舞出當于終返頭也、舞終後取所置於本座之輪、  
退散、

### 納神之事

滿御神樂而人長所持、神、卽以御神樂奉行頭辨捧畢、

〔續古事談緒五〕

人長コレモ近衛舍人スル事也、昔尾張安居兼時ムキトコノ事ニタヘタリケリ、尾

張時頼トイフ人長ウヱテ後、スベキモノヤナカリケム、下野安行兼時ガ孫ナルニヨリテ、宇治殿

賴○藤原メシイデハ、ソノ藝ヲコハロミ給ニ、家風オトサズ優美ナリケレバ、兼時モ近衛ニテツカ

ウマツレル例ニヨリテ、エラビモチキラレケリ、タバシ番長ヨリシモツカタ、人長スルコトヒサ

シクタエテ、ソノ裝束タシカニ知人ナシ、時ノ儀アリテサダメ仰ラレケリ、此安行モホドナクウ

セニケレバ、中臣宗武ソノ家ニツタヘズトイヘトモ、容體スグレタルニヨリテ、宇治殿メシテ此

事ヲツトメシメ給ケリ、天曆御時仲秀ト云人長アリケリ、ソレガ孫ニ紀本武ト云人長アリケリ

重代ノモノトイヘドモ、庭火ノマヘニス、ミイデハ、カナデケルコトガラ、兼武ニハオヨバズト

ゾ時ノ人イヒケル、カヤウノ事モモノガラニヨルコトナリ、中原氏ノ人長、兼武ヨリハジマレル

ナリ、ソノ子近友兼近モ人長也、兼近殿ノ隨身ニテアリケル時、松尾行幸ニ御供ニ候テ、社頭ニテ

人長裝束シテ還御ノ時、ソノ裝束ナガラ弓ヤナダヒオヒテ御共ニ候ケリ、扶宣モ人長ナリ、骨ナ

ガリケルニヤ、茨田重方トイフモノハ、五位ノ後マデ人長シケリ、今ノ世ニハ秦氏兼方ガナガレ

ノミスルコトニナリタリ、ソレダニハカ、シクナラヒタルモノキコエズ、兼弘モノ、フシニ

テ、始テ人長シケルニハ、フタアキノカウシヌノ、カリハカマニフセクミシテ、金銀ノ造花ノ枝

ヲツケタリケリ、鳥羽院小六條内裏ニオハシマシケルニ、ツカヒ陪從御サジキヲワタシテ御覽

內侍所鳴鈴三度之後人長進神樂卷輪持之也但到于軾前踏三拍子此處人長舞譜記舞以右是〇是

笛奏庭燎曲而著于本方次人長行於軾前向于神殿以左足蹴軾而立神樂卷于南庭謂之末方〇是籌築奏庭燎曲

著于末方次人長行於軾前向于神殿以右足蹴軾而立神樂卷于本方和琴奏庭燎曲而著于本方次人長行於軾前向于神殿神樂卷笛築同音奏寄合曲此間人長微稱唱壽文而人長以右足蹴軾而立神樂卷本方本拍子

奏庭燎曲而著于本方次人長行於軾前向于神殿以左足蹴軾而立神樂卷于本方末拍子奏庭燎曲而著于末方次人長經軾前著座神樂卷而神與輪置于座左也〇是

三拍子之法

人長三拍子之法先整兩足立而伸進左足而復還踏本地而右足而復左足其法皆同于初焉〇中

掌上中立立入長法附家說

早韓神終而堂上中立也地下舞次曲之人長持輪進于舞庭踏三拍子其而立于北庭或南

庭也其立處不相定者無本末之差別上首立于退方故也但凡上首在本方又同座有次上首則不還立方而堂上各退後著本座矣

人長家記曰早韓神終持輪進立者天照大神聞食神樂開磐戶六合晴常聞之遺法也〇中

早韓神舞行之法

早韓神人長持神舞焉凡此曲墨譜初段二返一返各拍于十六文也但初返本方發聲中段一返

召人之末座舞出至于舞庭是設軾也而行北庭是立于庭燎也又舞還于舞庭而行南庭是立于庭燎也又舞

還于舞庭而向于神殿神樂卷舞左廻而至召人之末座邊終舞也而後望上中立持輪進也〇中

其神舞之事

譽樂人助貞聞テ此事ヲ其骨ナクシテコレヲマナブ、萬人咬嚼云々、○中

凡神樂ノ人長ニハ、甚深ノ作法アルナリ、秘記ニ見タリ、座燎ノ諸歌ハ唱フル所ノアルナリ、人長ノ詞ニ隨テ歌フ也、モロウタツカマツレト云ナリ、又一首ナガラ歌終ル事アリ、是モ人長ノ詞ニシタガフ也、此作法近世ニハ知人マレナリ、○中

口談諸方之家之記

通憲云ク、神樂之本體ハ、氣比社神樂ニハ、可尋人長之輪ニ輪ツケタルハ、摸鏡也、輪可付鏡事、此詞在由緒

近方云、人長詞ニ稱籍ヲ兼タリ、大江山大事ト云ハ、御前儀ニアラザル也、此詞在由緒

同云、人長詞、我君千秋萬歲可御座、御輿ノ長ト申ハ、長申詞ナリ、代々ハ物聞ト申也、十二月晦日、夜

爲物聞之奏、故稱近衛舍人、故歟、舍人等數洛中、聞人首之善惡、申大將令奏之也者、今世絕事、

〔樂家錄四人長〕、人長、輪調進附、乞請人長事

輪御神樂之日、於吉田賀茂山等而伐之、衛士調進之、渡于内侍所女官也、及于制限、人長至于内侍所南階之下、乞、其詞高聲曰、人長、納于一枝者、于時女官刀自授之、枝也、人長受之、而長四尺許伐之、本二尺許間去枝

爲之持所也、殘于一枝者、納于自家、

輪制法附、輪之別名

輪以小圓木造之也、徑八寸是古法也、有柄長一尺八寸、大各徑五分許也、皆以白粉塗之、而以白糸結附輪於柄、糸長三寸許也、

或曰、今所用輪經營造尺八寸也、何不用神祇尺乎、蓋神祇尺八寸者、當于營造尺六尺、○尺二分

四釐也、○中

舊記曰、庭燎諸歌之時、人長登比加介留投掛之、言輪之事也、此說稀知人云々、

立于庭燎次第



頂戴焉。

〔樂家錄<sup>神一樂</sup>〕恒例二箇夜三箇夜七箇夜之事恒例神樂每歲之式也、殿上人地下之輩勤仕之也、臨時依御願被行之、或一箇夜、二箇夜、三箇夜、七箇夜也、公卿相交勤之。<sup>略中</sup>

春日社七箇夜座圖并大曲修法

天和第二自十一月廿一日、於南都春日社七箇夜之神樂也、於拜屋修之。<sup>略下</sup>〔倭訓栞<sup>前編二十</sup>〕にんぢやう 人長と書り、神樂にあり、御神樂行事の者近衛の官人勤む、資忠記

に、御神態乃人乃長佐と見えたり、その神は天鈿女命也とも、とる神に輪をかけたるは、鏡を摸せりとも、體源抄に見えたり、

〔元々集七〕或書云<sup>神寶日出</sup>人長者猿女君祖天鈿女命也、依高貴尊勅令、負沖天氣宇、即時八百萬神等集會坐、故手持物名之沖也。<sup>古語婆娑羅</sup>〔體源抄<sup>十上</sup>〕神樂右舞人多近方云、人長之詞ニ鳴高ト二聲唱テ、中臣近友ハ合太笛ノタノ穴唱タルナリ、奏之兼弘ハ合ル中ノ穴ニ也、或人云、タノ昔ハ本體云之可尋之、少納言入道<sup>信四</sup>云、蟋蟀ハ惣說上中下ノ三說アリ、自木根折之爲下說、自御蘭折之爲上說也、鳥羽院御物ノ笛譜、載自御蘭折說也。<sup>略中</sup>親方多<sup>○</sup>云ク、人長ハ其歌ノ詞ヲ舞ナリ、早歌ニ近衛御門ニ巾子落ニハ冠ヲ抑エ、赤雁踏ナニハ、後ヲ顧リ見テ前ヘ進ニ、舍人コセウニハコセウ尻ニ成ナリ、如此ゾ取物ニモ狹張ニモ、コトバニシタガイテカクゾ舞ケル、但是ハヨク其骨法ヲエテ、神妙ノ境ニ入ラムモノ、スベキナリ、シカラズバ違テヨコノ端歟、

磯等ガサキヲウタヒケルニ、兼氏ガ人長シテ櫛ヲモテ觸ツル體ヲナシケル、時ノ人稱美、後代遺

爲座之揖、次蹲退一二度而立、經本道而離座末、又東行至于自座前而有沓揖、次脫右沓踏薦端而突、右膝次脫左沓、突左膝著座、一揖平座、出足之法不如此前、合足心上、左右次笏或管傳于左手、以右手掩裾如初、但置之後也次本末歌方及絃管輩皆置笏於下、但附歌輩不置笏持之而後本末歌方從袖中出笏拍子奏之、

退座之法、先左足折于後、次右足折于後、而爲座一揖、初次著沓爲沓揖、次如前經座後、西行而南廻及于召人之末座、向於神殿突、左右膝與左手、而拜揖退下、地下輩無拜揖也、已上所記是本方之法也、末方可反此、○中略

### 燒庭燎之法

神樂燒火有傳矣、世曰上古無燒油、以篝火爲政務、今燒庭燎亦其遺法乎、其法先如此上右、次如此上左、是天地齊整、陰陽交感之儀也、是初燒之法也

石清水八幡宮恒例神樂略式○中

### 神樂次第

先社務家著座、紅衣次神樂所作人著座、外先是神主取人長之櫛、而神殿之翠簾立置之、次獻神供、神主別當檢知等役、而後俗別當檢知等著座、而神主取神殿之櫛、而立于本方末座、與人長座之間、而東次兼官出樓門、立于外廊西邊、而東櫛、加伊々々々二爲之高聲、于時人長進取櫛、即進于軾前矣、人長之法及神樂次第、如內侍所、蓋早韓神終有勸盃、各在坐仕丁促之

略法藤波早歌作法一收早歌三首得錢子等除之、是亦舊例也

### 宮巡之法

滿神樂各立于座前、振更歌早韓神而巡宮、但自西巡東一返也、仕次第先神子、次人長、次絃管歌方、上首立各爲所作、和次社務家、次檢知神主等矣、巡還各立于本坐後也、人長與神子者立座前、暫舞而櫛振上突、左手爲尊居之時、各止曲拜禮、而神主取入長之櫛、捧于神前、而各退散入于休足所御酒等

著座先堂上、下地、但、地、次、擊、久、止、段、拍、子、是、本、末、所、作、人、無、調、只、擊、三、度、拍、子、耳、最、笛、擊、此、次、阿、知、女、末、  
 一、人、歌、之、間、拍、子、之、曲、也、和、琴、彈、之、次、擊、三、度、拍、子、段、拍、子、其、法、如、次、笛、奏、音、取、方、對、笛、爲、可、奏、之、色、也、和、琴、  
 不用、而、歌、神、也、次、柵、本、末、皆、效、此、又、歌、調、及、律、聲、法、者、神、樂、曲、設、樂、音、均、附、之、餘、曲、次、擊、三、度、拍、子、其、段、  
 拍、次、韓、神、本、末、其、法、如、神、也、次、早、韓、神、齊、早、四、拍、子、擊、之、故、號、早、韓、神、也、人、長、有、舞、次、本、方、歌、阿、知、女、  
 次、末、方、歌、於、介、

已上爲探物之歌

至于此堂上有中立其人法之样而早歌終再著座次阿知女末自是以下至于早次薦枕本末簡曲也其法次篠波本末也其法如柳次千歳本末也其法如柳次早歌先之本末間拍子歌曲次如早舞神無本其法次篠波本末也其法如柳次千歳本末也其法如柳次早歌先之本末間拍子歌曲次如早舞神無本此曲人長有舞蓋以此舞爲之人長之秘曲故不仰則尋常不奏之人也

秘曲及大曲仰之則於此修之其法卷末詳焉

次星此曲開拍二得錢子本末第三首奏之也第一作本末利先有勅使神樂奉頭辨躡于本方所作人後即云星于

時本方爲一揖而後奏音取也音取次第爲可與之氣色而先吉々利々本末次得錢子本末次本綿

作本末也次朝倉本末先奏音取次第如星此曲本末齊擊的拍子也當上脫拍子也次其胸達別地下本末齊擊的

有的拍子歌也

曲終後、人長取所置於座之櫛與輪退散、而以神樂奉行頭辨奉櫛畢、略○中

### 進退之法

進庭燎之法先會集于南門之東腋至於紫宸殿巽而斜行古人也又東行而至于軾前踞即坐也而身行也以左手引軾二三寸許本方次第也末同也可準之知而先軾上突左膝次突右膝龜居著座一揖但足已上有揖揖下次平座先左足出於軾前次出右足次笏或管傳于左手以右手掩裾置于右傍也大臣不帶笏故無揖下次平座先左足出於軾前次出右足次笏或管傳于左手以右手掩裾置于右傍也大臣三掩引下下次還笏或管於右手而奏焉若納力持笏而歌所作終後先左足折于後次右足折後而







ナドニ可打ツ、委分テ令奉授也、主上資忠ガ口傳ヲモテ、御テヅカラ譜ヲ作ラシメ、御天後資忠ニ仰ラレテ云ク、如口傳クニ譜ヲ作り進ベキヨシ也、資忠綸言ヲカウフリテ譜ヲ作り、二日許ヲヘテ撰テ進覽、叡筆ノ御譜ニ比校セラル、トコロニ、字ノ初中終振間拍子、一トシテタガハズ、殊ニ叡感アリテヨリ傳ルヨシ、深ク信ゼシメ、御畢、主上ノ好マシメマシマスニヨリテ、時人皆資忠ガ説ヲモテ神樂ヲ習フ、コレヲキクニ皆資忠ガ音振ニヲヨバズ、此事ヲモテ叡聞ニ達ス仰ニ云ク、誠ニシカナリ、我モ音振ニヲイテハ未ダ及バザルナリ、先ヨリウケワタサシメテ後、音フリノサタハアルベシト仰ラル、アヒダニ、資忠殺害セラレヌレバ、神樂ノフリハ資忠マデナリ、堀川院ノ御時絶畢、

〔郢曲相承次第〕大納言資賢

久安元年御賀試樂當日御遊上首宗家卿藤家雖參候資賢卿取拍子了、依堪能無比類、仁安元年同三年兩度清暑堂神宴雖有上首宗家卿藤家資賢卿被仰拍子院拍子合之時、宗家卿詠朗詠許也、是當家之眉目也、當家爲上首之時、藤家爲下臈、取此宸宴拍子例會無之、凡公宴重事雖多之、携音樂之輩、以清暑堂神宴爲先途、然者爲人々生涯之由、被載後伏見院御記云々、於他御神樂御遊者、強不及相論、自他隨時也、又自仁安元年至安元二年十一ヶ年朝親行幸御遊拍子、聞上首宗家卿資賢卿取之尤爲眉目歟、

抑藤家清暑堂所作數代令中絶也、内大臣宗能藤家天仁、保安兩度候付、歎其後康治、久壽平治已上三代、雖令現存不預勅喚子息宗家卿久壽吹笙子時侍從信能之外、平治仁安元年同三年壽永、元曆以上五代、雖令現存無勅喚、又子息中將宗國朝臣宗經其子參議宗平卿總而不接此神宴、建久建曆、貞應嘉禎仁治、寛元雖令已上兩度宗雅卿參付、子時侍從基云々在生、不預勅喚也、總而不參例十箇度、當家不參六代皆有故也、天仁有賢卿俄所勞、元曆資時朝臣俄依音乾辭申、仍被召加盛定朝臣畢、建久建曆、貞應同朝臣出家以後也、文保有時爲



〔尺素往來〕佐女牛八幡之放生會當年爲御祈禱舞樂以下別被結構略候。○中。此日御所且爲御敬信、且爲御見聞、令通夜給之間、人定之時分有神樂、櫛葉、其駒、庭燎等之數曲、本拍子者二條中納言、末拍子者中御門宰相付歌者子息達和琴者大炊御門大納言、笛者洞院三位中將、篳篥者楊梅二位、人長者地下舞人俊胤猶子云々。

〔瑤囊抄〕庭訓往來詞ニ、調拍子本末侍ルハ、本末トハ始終ノ心歟、始終義ニハ非ズ、拍子ニモトス  
エト云事侍リ、喻ヘバ内侍所御神樂等ニモ、人長舞之時、左右列座シテ拍子ヲ取ル、左ノ歌ヲモト  
歌ト云右ノ歌ヲスエ歌ト云、只左右拍子不亂ヲ云ナルベシ、サレバ左右ト書テ、モトスエトコソ  
讀タレ、本末ト書ケルヲ、如何カト覺ユレ共、強テ申サバ同カナルベシ、

〔樂家錄〕二神樂曲說〔笏拍子〕附擊法

神代卷有曰於介註擊木之聲也云々蓋笏拍子本于此乎

舊記曰，笏拍子，上古用尋常筭兩箇，然割一筭用之，未詳起於何時，今所用笏拍子，長一尺二寸，上橫合二枚，而二寸六分，厚三分五厘，下橫合二枚，而一寸六分，厚二分五厘，外面四方，其形如笏也。

擊法以平齊方與割口相擊之但左手者割口爲前圖方爲向手者割口爲左圖方爲右擊之本蓋左右共以橫廣方爲上以狹方爲下而及擊之則不別芴本分末故其形如鳥膝擊之也芴拍于一本記合々々本々々

拍子名說

問拍子 凡神樂拍子者歌聲如高低及神等擊之故其程不閑歌是也又連放號間拍子也此拍波

體星  
如一

前張拍子則前本方隨之，急受擊之，號之。前張拍子也，所謂前張名者，神樂總號。前張故，則末方急受擊之，亦自末方擊始之。

空拍子是者早轉神麗枕之本、佐者有波之合于和琴之法、於空拍子者、不均于和琴也、似

久止拍子此拍子先彈<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>和<sub>ニ</sub>琴<sub>ニ</sub>其終<sub>ニ</sub>之手一擊合<sub>ニ</sub>拍子  
名也久與九同字有<sub>ニ</sub>口<sub>ニ</sub>傳<sub>ニ</sub>詳<sub>ニ</sub>于和琴之下



哉勵其業焉。

一年神樂其駒之發聲不叶于律故助音亦然因茲管歌甚不和也各雖欲歌改之終不得之想暫唱管聲之詞而後歌改之則何有難乎。

神樂歌古實質朴其聲難溫淳也。

余○安倍季命

一日就業謳歌者問聲與色之異彼人對曰聲之善惡因人

之天稟不可力致也然於爲色則或有一習練也其大意聲與色別耳聲者聲而色者貶聲也凡爲謳歌以聲而歌則必剛毅無餘音故其聲如不出而謳甚賤矣爲色則有濕聲易出而亦不賤也蓋色者在聲於寓鼻乎蓋寓鼻則響齒故有色然太過則人惡之惟在意存耳是僅其一端也如唇舌牙齒唯之習練非此類不可混矣。

〔袖中抄〕かへしもの

神樂譜云朝闇吹返催馬樂拍子云々

或本云あさくらやきのまろどのにわがおればなのりをまつ、ゆくやたれ。

此歌爲御所返歌是延喜廿一年勅定也。

神樂遊仕る時は、櫛音振唱又云星已了攝返絲竹シテ可仕朝倉支催堪能之歌人。

私云朝倉うたふをばあさくらかへすといふ或は吹返といひ或は攝返絲竹といへり。

〔十訓抄〕朝倉にとりてはめでたき曲なり昔よりかたみにゆづりて上手にうたはせんとするなりことがきすがいきをかくに拍子ばかりを打て上下脇をいはす堪能のものにゆづりてかれがうたふを待つなり消暑堂の御神樂に齊信公任本末の拍子とられける時にもつけうたにて定類ぞ朝倉をばうたはれける。

〔庭訓往來〕職掌神樂男合銅拔子伺候拜殿臨時陪從當座神樂朝倉返詠物調拍子本末賽禮莫致如在之儀神威之興嚴重之態誠以揭焉也。

さはがしくものゝ、公事もをこたりはべり、問釋交名だにもとふひとなく、さいのあこ丸なんいとまあり、めしてむかしのことゝもとひ、夏神樂の庭火の歌などを聞しに、里神樂は河井の社にて歌をしへて唱なんどといひしぞかし、

〔體源抄十上〕神樂

古人云、神樂ノ歌サガルトヲモハ、息ヲシゲクツグベキナリ、同息ニテ延歌ヘバ、息ノユルビテ、必ズ音ノ下ル也、只ノ音ワザ又カクノゴトシ、略中

右近番長多節茂ガ云、神樂ハ倭琴ヲ羯鼓ニテ織其程也、而今世ニハ事外ニ延ニタルナリ、顯仲忠

季其命ゼラル、ムネ、此詞ニ同ジキナリ、略中

原作又云ク、上代ハ神樂ハ無調ナリ、而近來都テ以テ一越調爲之、我世ニ相替事是ナリ、

忠孝又云、神樂ハ、近來其程以外ニ延タリ、神樂ノ程ヲバ、和琴ノ織ナリ、和琴ヲモテ其程ヲ正シテ拍子

ヲ打ナリ、而拍子ヲ遙ニテ打バ、和琴ノ中絶シテ前後ノ詞ノ次ノ忘ル、程ナリ、又歌ノ一句ヲバ

一息ニ歌也、而近來一句ノ間ニ息ヲ繼ナリ、サカキバノ已上一息ニ歌シナリ、近來其間

息ヲ繼、不可説ノ事也、コレハ此道ノ長者近方ガ長ク歌ナスナリ、堀河院ノ御時、資忠ガヲシヘタ

アマツリシヲ、常ニ承シニ、其程ツマヤカニゾ聞シ、又朝暮此事アリキ、或時ハ資忠本拍子、主上

末拍子、神祇伯顯仲供、和琴、又主上本拍子、國信末拍子、顯仲供、和琴、仍其程、體ニオボユルナリ、和琴

ノ程ニ綴合テゾ拍子ハ打レシ、人長ハ源盛家六位、時、顯、宜旨ニヨテ兼方ガ説ヲウケテ供奉セシナ

リ、

〔樂家錄四十八〕今世神樂之歌方其人頗多、然不用意之故、雖五聲之法、知人稀也、茲有多忠正下、守、多

忠兼上、野、介、一日會而論神樂之音聲、兩人云、於神樂管養之習、不知之、惟於歌節無盤涉之聲矣、此兩人

常勵業、故聽于聲律、夫業精于勤、成于思、忠正忠兼實兄弟也、弟忠兼繼忠秋之家督爲多氏之正嫡、宜

音調

〔鄧曲抄〕足柄、今様、神樂、取物、皆音は別なれども、三聲はみな同様のふりなり、神樂、催馬樂、かへつて神遊の歌に唱、本催馬樂よりわかち唱なり、神是なん神樂の音せいななり、取物みなおなじふしにて唱、今様に唱におなじ、ほうらい山なんど一ッ節なり、磯等とうにいたりて、おなじりうに唱ものか、大曲、湯立、これ神遊の秘藏の事なり、秘曲ともなん、査目秘曲といへども、大曲におなじ、取物のひとつにと申つたへたり、星三首曲、是又ほしのはかせ、又別といふ、このぎ子細あり、星は神遊の別譜なり、神遊は取物になり、星句吉々利々佛經の説あり、このところ僧中加多の音ヲ別一句ごとに畢也、雙調よりいだして、又黃調ノ乙とまる、一句ごとにこれを星のハカセと云、本云加多音なるべし、たゞこゝにますといふ歌は、とくせにの拍子籠なり、これは別に唱たり、くはやよりつきはにて笛也、これゆへ一句はそのふしまでとあるべき也、得鏡子のいたし拍子は、その内に籠と知るべし、人長のよひにまたかひ、又返數によるとかや、白衆等常のかへしなるべき、前張、宮人、難波方、大曲、是も前張のはかせとていはれあるものなり、これ又神遊の内なり、樂拍子に唱時は、皆催馬樂のごとくなり、其駒催馬樂ノ樂拍子、コノ拍子同流にうたひ始、今様ノピン多々良も亂舞のせつには、樂拍子に唱、朝倉催馬樂の音にして三段に唱、催馬樂ノ三段歌、是又おなじ、段拍子打ハ、神取物計也、催馬樂打ハ、歌ノ類、一百トヲト入ル、也、早歌、これなんべつりうにて、早歌は一音々々みなおなじふりにて、はかせをわたす處のふり、取物のはかせなり、神はかせにいれど神をなし、神遊神樂同ことなり、神樂は神代のふうぎをうつして和國の祭とするなり、日本紀神書あり、神家につたへ有り、聞べし、湯立神樂の大曲と云、諸社國々行處、阿知目於介、是なん神樂根本神語也、湯立以宜大曲に唱、湯立大曲と云、弓立と用唱時、兩用なるべし、足柄大曲、黒鳥子前張に宮人ゆふしでなり、略中よろづの神樂、里神樂などに、さいのをのこなどあつまりて、すゝしめの聲なんきこえ侍り、雲明殿のひろにはに神樂して、才のをのこめされて、神遊もあらぬか、今どき

略○  
中

春日の若宮社の神樂舞の歌

春日の若宮社の神樂舞の歌とて、書つけたるを、人の見せける

君が代のひさしかるべきためしには神もうゑけむ住吉の松やれ住吉の松やれ 春日山いは

ねの松はいはねども千年をみどりの色にまみれ  
みねの嵐はおとせねど萬歳のひびきぞ耳に

三笠山生そふ松のえだごとにてえすも君がさかゆべきかなやれさかゆべきかなく

くや色かへぬ松と竹との松と竹とのく末の代にいづれ久しとやく君

のみぞ見むくくくいづれ久しとやく君のみぞみむくく

同 千代までと君をいのれば三笠山みねにもおなじ聲きこゆなりやれ聲きこゆなりやれ

松はいはひのためしにひかる、は春日の山の姫小松八千代の玉椿 一つのき川にすむ鶴な

がゐの浦にあそぶ鶴 鶴の子のまたつるの子のやしは子のそだゝむ代まで君はましませや

れ君はましませくくく  
宮人のくすれる衣に  
すれる衣にくくゆふだすきか

けて心をやくたれによすらむくくかけて心をやくくたれによすらむた

れによすらん誰によすらむく

万代のまつのを山のかげまげみ君をそいのるときはかきにはやれく  
モロノ  
拍子ニ舞ノ

神明所にましましては一切諸願もよしなし万民うれへなければかむこもおきてなにか

わがやどの千代の川竹ふしとほみさもゆくすゑのはるかなるかな  
来ノ歌  
 られはるかなるかな  
ミホル

なくくくや  
拍子ヲ  
チキハ  
クナリ  
うゑて見る殖てあまのまがきの竹のまがきの竹のく

くふしごとはいやこもれる千代はく君のみをみむそみむくいやこもれる千代はく

君のみぞみむくく



手にとりもちてをがめば四方の神も花とよむらん　よき馬によきくらまきて手綱かけ朝日にむいて神をせうせん　神の父いづくにますぞ幣さしてとほりにまゐる神をせうせん　神の母いづくにますぞみくまもり出雲にまゐる神をせうせん　神せうし磯をぞまはるあまをぶねかいがちそろへ船子さだめん

タカフコロ  
高所

たんなんたひらの神棚にかほよき女體おはします　をつとはたれぞととひたれば

松のうら葉のとみ男　をさなききんだちみやしろに學問せよとてあげたれば　うめと櫻にたはふれて五葉の松とぞなり給ふ　われらが植木のせきようはつくく　ぼうしをなべすゑて　あゆみ給へばあとごとくに七本蓮花の花ひらく　南おもてのひら縁にいとげの車やりすゑて　南面の泉水にようある鳥こそきてゐたり　此殿のみかどのまへにはよくうゑてまゐれる人によしといはせん　此殿の十二の柱はかねよたゝおせどもひけどもなびかざらまし　此殿をあたらし殿とたれかなづく九國のとのゝふるやなるもの　酒殿に酒はつくりつともはらやちはらの酒ぞ神はめすらん　酒殿に風の吹かしさらく　とまげ木が本を宿とさだめん　酒殿入來るとみのかへらんばおかの子共と物語せん

藏手　いさやうちおきのみしまに鹽かけてかいたる鹽ぞ神はよろこぶ　東には日月さやかにひをてらす西にはよをつけよを經給ふ　北には一れうめうけん大將軍とのとのづくり南に南海をたてたり　一目のよどみの池に船うけてのぼるはやまもくだるはやまも　みさやまの諏訪のみまへの初穂花まゐれる人のかざしなるもの　天照大神宮のゆふだすきかけのの後ぞたのしかるもの　水神のましましさに綾はへて錦をはへてとくと踏せん　土佐の國はたの郡の北野なる客の天神といはひそめけん　土佐の國ありほが嶽にてる紅葉くれなゐ紅葉色かへて見ん　上件の歌どもは肥後國の神樂歌也とてかの國人の見せたる也かの

り、  
かつらぎや、わたるくめちの、つぎはしの、こゝろもまらず、いざかへりなん、あさかへりなん、  
其駒

そのこまぞや、われに、われにくさこふ、くさはとりかはん、くつわとり、くさはとりかはんや、水は  
とりかはんや、

威説

あしぶらのや、もりの、もりの下なる、わかごまゐてこ、あしぶちの、とらげのこま、

龍殿歌

本  
とよへつひ、みあそびすらし、久かたの、天のがはらに、ことのこゑする、ひざのこゑする、ひざのこ  
ゑする、

末  
久かたの、あまのがはらに、とよへつひ、みあそびすらしも、ひざのこゑする、ひざのこゑする、

酒殿歌

本  
さかどのは、ひろしまびろし、みかごしに、わがてなとりそ、まかはせぬわが、まかつげなくに、  
末  
さかどのは、けさはなはきそ、とねりめの、もひきすそひき、けさははきてき、けさにははき、

威説

本  
あまのはら、ふりさけ見れば、やへ雲の、雲のなかなる、雲のなかとみの、なかとみの、天のこすげを、

末  
さきはらひ、いのりしことは、けふの日のため、あななふとや、わがすめ神の、かむろぎのよさ、  
にはとりは、かけろとなきぬなり、おきよおきよ、わがひとよづま、人もこそ見れ、人もこそ見れ、

〔玉勝間十一〕肥後國の神樂歌

地響歌

むかしより世をはじめ給ふおは太子よのよきことをおきてはじめん 御手幣を

本編作

ゆふつくる、まなのはらにや、あさたづね、あさたづね、あさたづねや、

あさたづね、ましもかみぞや、あそべあそべ、あそべあそべあそべあそべや、

晝目歌

いかばかり、よきわざしてよ、天てるや、ひるめの神を、まばしとゝめん、まばしとゝめん、

いづこにか、こまをつながん、朝日こが、さすやをかべの、玉さゝのうへに、たまさゝのうへに、

或説

なにわざを、われはしつゝか、

弓立

いせまや、あまのとねらが、たくほのけ、於介於介

たくほのけ、いそらが、崎にかをりあふ、於介於介

おほきみの、ゆきとるやまの、わかざくら、於介々々

わかざくら、とりにわれゆくや、ふねかちさを、ひとかせ、於介々々

すめ神の、けさの神あげに、あふ人は、ちとせのいのち、のおとこそきけ、

そべ神は、よき日まつれば、あすよりは、あけの衣を、けごろもにせん、

朝倉

あさくらや、きのまろどのにや、わがをれば、わがをれば、

わがをれば、なのをしつゝや、ゆくはたが子ぞ、ゆく人やたれ、

或説

あさくらや、おめのみなとに、あびきをれば、あまのめざしに、なびきあひにけり、なびきあひにけ

本やあかゞりふむな、まゐりなるこ、  
末やわれもめはあり、さきなるこ、

本やとねりこんぞ、まゐりこんぞ、  
末やわれもこんぞ、まゐりこんぞ、

本やあちの山せやま  
末やせやまのあちのせ

本やこのゑのみかどに、こじおといつ、  
末やかみのねのなければ

本やをみなこのざえは  
末やまもつきまはすの、かきこぼり、

本やあふりとや、ひわりど、  
末やひわりどや、あふりど、

本やゆすりあげよ、そゝりあげん、  
末やそゝりあげよ、ゆすりあげん、

本やたにからゆかば、岡からゆかん、  
末や岡からゆかば、谷からゆかん、

本やこれらゆかば、かれからゆかん、  
末やかれからゆかば、これからゆかん、

明星 吉々利々

本きゝり、せんざいいやう、びやくまゆとう、ちやうせつまんでう、まやうくげや、あかほしは、み

やうまやうは、くはやこゝなりや、なにしかも、こよひの月の、たゞこゝにますや、たゞこゝに、たゞ

こゝにますや、

末びやくまゆんとちやうせつ、まんでう、まやうくげや、あかほしは、みやうまやうは、くはやこゝ

なりや、何しかも、こよひの月の、たゞこゝに、たゞこゝにますや、たゞこゝに、たゞこゝにますや、

得銭子

本とくせにこが、ねやなるまめゆふひばを、たれかたをりし、とくせにこや、たゝらこきひばや、たれ

かたをりし、とくせにこや、

末われこそは、見ればやうれたさに、たをりて來しかや、とくせにこや、たゝらこきひばや、たをりて

來しかや、とくせにこや、



大宮

おほみやのちひさことねりや、てらにや、たまならば、てらにや、  
たまならば、ひるは手にすゑや、よるはまきねん、てらにや、よるはまきねん、てらにや、

湊田

みなと田に、くゝひやつをりや、とろちなや、とろちなや、やつながら、とろちなや、  
やつながら、ものはすをりや、とろちなや、やつながら、とろちなや、とろちなや、

蜚

きりくすの、ねたさうれたさや、みそのふにまゐりきて、木のねをほりはんで、おさまさ、つのを

れぬ、おさまさ、つのをれぬ、

ねたさうれたさや、みそのふにまゐり來て、木のねをほりはんで、おさまさ、つのをれぬ、

或説

あたらがまうどの、ひとへのかりぎぬ、なとりれそ、いとねたし、

なとりれそ、こさめにそほぬらせ、よがれする、いと／＼ねたし、

千歳 折説二反或三反之後、本方千歳歌、末方萬歳歌、如常、

せんざい、せんざい、せんざいや、千とせのせんざいや、本方なほせんざい

まんざい、まんざい、まんざいや、よろづよのまんざいや、末方なほまんざい

早歌

やいづれども、とうどまり、やかのさきこえて

やみやまのこつゝら、やくれくこつゝら

やさぎのくびとろんと、やいとはたながうて

たがにへ人ぞ、まぎつきのぼる、あみおろし、さでさしのぼる、  
あめにますや、とよをかひめや、そのにへ人ぞ、まぎつきのぼる、あみおろし、さでさしのぼる、あい  
ぞ、そのにへ人ぞ、まぎつきのぼる、あみおろし、さでさしのぼる、

開野

まづやのこすげ、かまてからばおひんや、おひんやこすげ、

あめなるひばり、よりこやひばり、とみくさ、とみくさもちて、

磯等

いそらが崎に、たひつるあまも、たひつる、たひつる、

わぎもこがためと、たひつるあまも、たひつるあまも、

篠波

さ、なみや、まがのから崎や、みまねつく、をみなのよさ、や、それもかも、かれもかも、いとこせの、

異いとこせにせん、

あしはら田の、いなつきがにのや、おのれさへ、よめをえすとてや、さ、げてはおろしや、おろして

はさ、げや、かひなげをするや、

殖槻

うゑつきや、田中のもりや、もりやてふ、かさのあさちが原に、

われをきて、ふたづまとるや、とるなてふ、かさのあさちが原に、

總角

あげまきを、わさ田にやりてや、そをもふと、そをもふと、そをもふと、そをもふと、

そふもふと、なにもせずして、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら、

本綿志天

ゆふまでし、神のさき田に、いなほのいなほの、

いなほのほの、もろほにまでよ、かれちほもなく、かれちほもなく、

前張

さいばらに、ころもはそめん、雨ふれど、雨ふれど、

雨ふれど、うつろひがたし、ふかくそめてば、ふかくそめてば、

階香取

まながとり、ゐなのみなとに、あいぞ、いる舟の、かちよくまかせ、ふねかたぶくな、ふねかたぶくな、

わかくさのや、妹ものりたりや、あいぞ、われものりたりや、ふねかたぶくな、ふねかたぶくな、

井奈野

まながとりや、ゐなのふし原、あいぞ、とびてくる、まぎが羽音は、おとおもしろき、まぎが羽おとは、

まながとりや、ゐなのふし原、あいぞ、あみさすや、わが世の君は、いくらかとりけん、いくらかとり

けん、

脇母古

わぎもこにや、一夜はだふれ、あいぞ、あやまちせしより、鳥もとられず、鳥もとられずや、

まかりともや、わがせの君は、あいぞ、いつとり、むつとり、七つ八つとり、こゝのよとをはとり、と

をはとりけんや、

小前張

薦枕

こまくら、たかせの淀にや、たがにへ人ぞ、まぎつきのぼる、あみおろし、さでさしのぼる、あいぞ、

わが門の板井のまみづ、里遠み、人しくまねば、みづさひにけり、みくさるにけり、

片折

本  
おほ原や、せがるや、せがるのみづを、  
末  
わが門の、いたるや、いたるのまみづ、

諸舉

本  
せがるや、せがるのみづを、  
末  
いたるや、いたるのまみづ、

萬  
元○歌

韓神

本  
みま、まゆふ、かたにとりかけ、かたにとりかけ、我から神の、からをぎせんや、からをぎ、からをぎせ

んや、

やひらでを、手にとりもちて、われから神の、からをぎせんや、からをぎせんや、

或説

本  
わがあれば、みな人まらず、ち、がかたは、がかたとも、神ぞまらん、神ぞまらん、

末  
みや人の、まではさかゆる、おほなほみ、いざわがともに、神さかもどれ、神さかもどれ、

大前張 或曰 龍馬樂曲

宮人

本  
みや人の、おほよそごろも、ひざとほし、きのよろしもよ、おほよそ衣、

末  
ひざとほし、きのよろしもよ、おほよそごろも、

難波瀉

本  
なにはがた、まほみちくれば、あまごろも、あまごろも、

末  
あま衣、たみの、ままに、たづ鳴わたる、たづ鳴わたる、



さ、の葉に、雪ふりつもる、冬のように、豊の遊びをするがたのしき、するがたのしき、

みづかきの、神の御代より、さ、の葉を、たぐさにとりて、遊びけらしも、あそびけらしも、

弓

弓といへば、まななきものを、梓弓、まゆみつぎ弓、まなこであるらし、まなこであるらし、

みちのくの、あだちのま弓、わがひかば、やうくよりこ、まのびくく、に、まのびくく、に、

## 或説

さつをらが、もたせのまゆみ、おく山に、みかりすらしも、弓のはす見ゆ、弓のはす見ゆ、

よも山の、まもりにしたのむ、あづさ弓、神のたからに、今まつるかな、今まつるかな、

あづさ弓はる來るごとに、すめ神の、豊のあそびに、あはんとぞおもふ、あはんとぞおもふ、

劍

まろがねの、めぬきのたちを、さげはきて、ならの都を、ねるはたが子ぞ、ねるはたが子ぞ、

いそのかみ、ふるやをとこの、太刀もがなく、みのを、まで、宮路かよはん、みやちかよはん、

## 或説

いはひこし、神はまつりつ、あすよりは、くみのを、まで、あそべたちはき、あそべたちはき、

おきつきに、すめ神たちを、いはひこし、心はいまぞ、たのしかりける、たのしかりける、

鉾

此ほこは、いづこの鉾ぞ、あめにます、豊をか姫の、みやのほこなり、みやのみほこぞ、

よも山の、人のまもりに、するほこを、神のみまへに、いはひつるかない、いはひつるかない、

杓

おほ原や、せがゐの、まみづ、ひさごもて、鳥はなくとも、あそびてをくめ、あそびてゆかん、

〔神樂歌〕採物歌 神

さ<sup>本</sup>か木葉の、香をかぐはしみ、とめくれば、八十氏人ぞ、まとゐせりける、やそうぢ人ぞ、まとゐせりける。

神<sup>末</sup>がきの、みむろの山の、さか木葉は、神のみまへに、まげりあひにけり、まげりあひにけり、

成説 時によりて、うたふ事のあるを、如此記せり、

神<sup>本</sup>葉に、ゆふとりまで、たが世にか、神のみまへ<sup>本</sup>〇<sup>みまへ</sup>に、いはひそめけん、いはひそめけん、

霜<sup>末</sup>やたび、おけどかれせぬ、さか木葉の、立さかゆべき、神のさねかも、神のさねかも、

幣

みてぐらは、わがにはあらず天にます、豊をか姫の、神のみてぐら、神のみてぐら、

みてぐらに、ならましものを、すべ神の、御手にとられて、なづさはましを、なづさはましを、

杖

此<sup>本</sup>つゑは、いづこの杖ぞ、ちめにます、豊をか姫の、みやの杖なり、かみのつゑなり、

あふ<sup>末</sup>さかを、けさこえくれば、やま人の、ちとせつけとて、くれし杖なり、くれし杖なり、

成説

あし<sup>本</sup>引の、山をさかしみ、ゆふつくる、さか木が枝を、つゑにきりつる、つゑにきりつる、

すめ<sup>末</sup>神の、みやまの杖と、やま人の、ちとせをいのり、きれるみ杖ぞ、きれるみつゑぞ、

篠

此<sup>本</sup>さゝは、いづこのさゝぞ、とねりらが、こしにさがれる、ともをかのさゝ、ともをかのさゝ、

さゝ<sup>末</sup>わけば、袖こそやれめ、とね川の、いしはふむとも、いざ川原より、いざかはらより、

成説

歌曲の人のうたひ弄ぶ限りをあつめて、又一部とはなし來しにこそ、もとより神樂催馬樂と上下になして、一部の書のごとく傳へ來つるも、さるやうこそあらめ、若別種の物ならんには、如此相並べてものすべきいはれもなし、かく見る時は催馬樂といふ名のゆるよし、何かの事に又疑ひも出べけれど、そは又催馬樂のはじめに云べし。

〔體源抄 十上〕口談 諸方之家に記載之

舊神樂譜云、昔貞觀御時、神宴之日被撰定神樂歌、若是清暑堂御神樂歟。

〔十訓抄〕天智天皇世につゝし、み給事ありて、筑前國上座郡朝倉といふ所の山中に、黒木の屋を造りておはしけるを、木丸殿と云。略中さてかの木丸殿には用心をまたまひければ、入來の人かならず名のりをしけり。

朝倉や木の丸殿に我をれば名のりをまつゝ行はたが子ぞ、是天智天皇の御歌也、これを民ども聞とめてうたひ初たりける也、其國々の風俗どもえらびたまひける時、筑前國の風俗の曲にうたひけるを、延喜帝神樂の歌どもくはへられけるに、うたひそへられたりけるなり、其駒も同御時くはへられたるとぞ。

〔吉野樂書〕一アサクラハ本ハ筑前ノ風俗也、清和水尾ノ御時、神樂ニハ被入之、又其駒ハ本催馬樂也、延喜御時、神樂ニハ被入也、又其駒ノツマケ拍子ハ、大宮殿後藤原ノウタヒハジメタマヒケリ秘藏云々。

〔神樂歌〕庭燎

本末一首み山には、みやまには、あられふるらし、と山なる、まさ木のかづら、色づきにけり、色づきにけり、

〔梁塵愚案抄 上〕み山には、霞ふるの歌は、古今集第二十の内、大歌所の歌の中に、神遊の歌とて載侍る其内也、是は後の世の人のよめるを、庭火の曲と名付てうたひ侍る也。

〔古事記傳<sup>十三</sup>〕神樂歌に前張と云は前榛に衣は染む云々といふ歌一曲の名なるを他の歌をもかけて十六曲の惣名になして、大前張小前張と呼、

〔神樂歌入文<sup>中</sup>〕大前張 或曰催馬樂曲、

鈔曰、大前張に七首あり、下の小前張に九首あり、前張は一曲の名なるを、總にわたりて大小と名付かへたる事、いとおほつかなし、たとへば大前張七首の中に、前張は本曲にてあるを、其調子にて十六首ながらうたにとり、又呂律等のちがひめあるによりて、大前張小前張とは替たるにや、ひとへに是は僻案也、可笑之、猶郢曲の人にとふべし、考曰、さいばりに衣はすらんてふ歌によりて、此名は有、さいばりは初萩なり、今は傍なるに似たれども、物の名はさる類も多かるなり、神樂さいばらと云は、後の好事の云るにて、此さいばりを總ての名にも負せしなり、書入曰、宣長云、此説はいみじきひが事なり、神樂と催馬樂とは、本より別なるを、此神樂譜の曲名を、催馬樂中にうつして云べきことわりなし、こゝの前張は本より一曲の名なるものをや、<sup>上</sup>今按に、此大前張小前張と云曲名のゆゑよしは、神樂の事をよく見知給へりし一條兼良公だに、右の如く心得かね給ふむねなるを見るにも、はやくよりまられがたき事なりし也、それにつきて、今守部見す、暗推の杜撰を述べ、試むべし、先づこゝの標下に、天治本文治本嘉禎本等に、或曰催馬樂曲と記したれば、是實は催馬樂のはじめなりしも知べからず、其は神樂曲は、もと八種の採物のみなりけむ故に、韓神曲に、直會のうた出て、御靈上<sup>ゲ</sup>せしにぞ有ける、さて其餘典に打とけたる遊びすとて、はじめて七首の催馬樂をうたひて興じけるを、其後又九首くはへける時は、じめの七首を大前張と名づけ、後に添たる九首を小前張とはとなへけん、それよりして此十六首は、もとは催馬樂ながらも、毎時神樂にうたふ故に、神樂歌譜の中に收て一部とはなし來しならん、又次の催馬樂譜は、右の神樂にはとりのこしたれども、はやくより



櫛ツキ 幣ハテ 杖ツヅ 篠ササ 弓ユイ 劍ケン 鉾ホウ 杓シヤク 葛カヅラ 韓神カンシン

大前張オホマエハシ 前張マエハシ 何爾波ナニハハ 木綿キヌ 前張マエハシ 階香取カキヨリ 面白オシロシ 井奈野イナノ 和支母子ワサモコ

小前張

薦枕モセツラ 閑野ケンヤ 小菅コサガ 又マタ 小菅コサガ 無ム 磯等崎イソトウサキ 篠波ササナミ 殖春ウヅフフ 總角ソウカク 大オホ

宮ミヤ 湊田ミナタ 養ヤウ 千歳チサイ 早歌ハヤカ 磯等崎イソトウサキ 篠波ササナミ 殖春ウヅフフ 總角ソウカク 大オホ

星歌ホシカ 等トウ 加カ 之ノ 彼カノ 是シ 七シチ 首ウタ 被カケ 之ノ 立タテ

吉々利々キツリキツリ 一利イチリ 無ム 得錢子トクゼンコ 木綿作キヌフクロ

雜歌ザカ 之ノ 千歳チサイ 早歌ハヤカ 外ソト 無ム 之ノ 立タテ

畫目エビメ 作ス 下シタ 被カケ 之ノ 湯立ユダテ 立タテ

其胸ソノムネ 同ドウ 龜殿カメテン 無ム 之ノ 木キ

酒殿サケテン 同ドウ

神舉カミタテマツ 同ドウ

朝藏アサザウ 星歌ホシカ 被カケ 之ノ 立タテ

〔神樂歌入文上〕採物歌

考曰神遊の時、人長が取て舞などする物を云、則其物ごとに、古歌をうたふ也、實木より、ひさご、葛まで九種の、取物あり、今按に、天治本云、取物九種、櫛、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛、但用葛、不不、各雄拍子、雌拍子、十、次、韓神拍子、末末、十、次、御遊了、天、酒司度、二、坏、給則了、次、笛、筆、箏、琴、等、隨、召、次、第、仕、天、各、本、座、著、久、次、御遊、其間和舞可仕男、袁召、臣、舞、仕、留、則了、間、爾、於、佐、戸、天、人、長、申、云、是、男、二、度、和、舞、上、告、依、奉、仕、多、留、爾、司、位、令、祿、衰、給、次、前、張、と、あり、是、に、て、其、凡、を、知、べし、但、採、物、九、種、と、ある、は、古、く、よ、り、唯、へ、誤、れる、なる、べし、こ、は、本、八、種、な、り、け、ん、を、杓、葛、を、杓、と、葛、と、二、つ、と、心、得、た、る、よ、り、九、種、と、記、せ、し、に、や、あ、らん、右、天、治、本、に、葛、但用葛、不不、と、云、嘉、禎、本、に、葛、昔、よ、り、無、歌、と、ある、な、ど、も、其、故、か、此、事、下、の、杓、の、條、に、委、く、云、は、ん、皆、岩、屋、戸、段、の、品、々、よ、り、事、起、れ、る、事、初、に、引、書、紀、の、文、に、合、て、知、る、べし、

木名也、振其葉之調也、其

〔殘夜抄〕此朝のあそびは世のはじまり、神の代に天照大神あまのいはとをもちて、天下をつくやみになし給へりしに、やはよろづの神々よりあひて、神めで給ふほどのあそびといふ、

〔古語拾遺〕神武天皇略中、建都橿原、經營帝宅略中、爾乃立靈時於鳥見山中、天宮命陳幣祝詞、禮祀皇

天、徧秩群望以答神祇之恩焉、是以中臣齋部二氏俱掌祠祀之職、媛女君氏供神樂之事、自餘諸氏各有其職也、

〔體源抄十上〕神樂 口談諸方之家之記 略之○中略

カノ天照大神ノ御時、神樂ヲ始メラレシ事、人王ノ御代ニハ第十四代ノ御門、仲哀天皇九年庚辰二月崩御間、后キ神功皇后カハリテ天下ヲ攝政セサセ給シニ、神樂ヲハジメ給ヘリキ

〔古事記仲夏〕故天皇坐筑紫之詞志比宮、將擊熊襲國之時、天皇控御琴而、建内宿禰大臣居於沙庭、請神之命、

〔古事記傳三〕沙庭サニは神を降し請せ奉て、其御命を請ふ場にて、齋清イサキめたる由にて、清場の切りたる名なり、佐夜は佐切まる書紀神功に爲審神者サニとあるは、清庭に候ふ人を云るなり、

〔政事要略二十八〕下西中行事○十月賀茂臨時祭事

神樂譜云、散簫此云產波、又云美利、下探簫同、古老云、昔臥箕攪其背遊、或作探簫、但於御前人長云、召可奉仕御

琴之士此云正古、

今案、謂神者與散簫以審神可爲本文、散簫未詳其說、但今以彈琴之者、佐爾波止云、偏以供奉神遊、漸訛、以經彈琴所構歟、

〔拾芥抄上末〕庭燎神樂、宸筆本無之、

採物

曲名

初卯神樂二月初卯の神樂さすまで彼社の備物おもしろやうたへうたへ朝日かみ神樂さ夜神樂さか木  
 ばうたふなどいへり 宮つこ御火まろくたけら里かぐ庭火の影 庭火たく下

〔藻鹽草人十六事〕歌 音曲也

かへりゑに青柳うたふ　からをきうたふ　あかほしうたふ　あほしのこゑ　あさくらう  
たふ　あさくらのこゑこれらは神樂也

〔玉勝間〕かぐら

かぐらは、いにしへは神あそびとぞいへる、されば其歌をも、古今集にはかみあそびの歌とぞいへる、されたる神樂と書るも、ふるくはかみあそびとぞ訓べき、かぐらといふ名は、いかなるよしにて、いつのほどよりかいひそめけむ、六帖の題にはかぐらとかけり、

起原

○素戔鳴尊之爲行也甚無狀。神代略中是時天照大神驚動以梭傷身由此發恨乃入于天石

窺閉磐戶而幽居焉。○中略又猿女君遠祖天鈿女命則手持茅纒之○矜立於天石窟戶之前巧作俳優亦

以天香山之具板樹爲盤此云以蘿此云爲手經云須臾此云而火處燒覆槽置顯神明之憑談明神之憑談此云是時天照大神聞之而曰吾比閉居石窟謂當豐葦原中國必爲長夜云何天鈿女命噓樂此云如此者乎乃以御手細開磐戶窺之時手力雄神則奉承天照大神之手引而奉出略○下

〔古語拾遺〕于時天照大神赫怒入于天石窟閉戶而幽居焉。略○中萬皇產靈神會八十萬神於天八

以真辟爲爲蠶以羅爲爲手蠶羅萬者可氣以竹葉飢憩木葉爲手草今多手持著鏹之矛而於石窟戶前以

登古梧字福約雪意之布舉庭燎巧作俳優相與歌舞中于時天照大神中心獨謂比吾幽居天下悉聞群神

何由如此歌樂、聊開戶而窺之。○中當此時、上天初晴、衆俱相見、面皆明白、伸手歌舞、相與稱曰、阿波禮言天阿那於茂志呂。古語、事之甚切、皆稱明白也。阿那多能志。言伸手而舞、今指樂事。阿那佐夜憩。竹葉之聲也。餓餓。

阿那於茂志呂古語、事之甚切、皆稱之、多能志、謂之多能志此意也、阿那多能志言伸手而舞、今指樂事、阿那佐夜愁竹也、葉之、阿那佐夜愁

於庭。

〔類聚國史七十一〕延曆十四年正月庚午朔、廢朝、以大極殿未成也。宴侍臣於前殿、奏大歌及雜樂、宴畢賜被。

〔續史愚抄後櫻町〕實曆十四年〇明和元年十一月十一日戊午、豐明節會。〇中今夜立舞臺於南庭、有大歌、自今豐明宴可爲如斯者。

○按ズルニ、大歌ヲ大嘗祭、新嘗祭、踏歌節會等ノ時ニ奏スル事ハ、神祇部、歲時部ノ各篇ニ載セタレバ、一二ヲ錄シテ、餘ハ省略ニ從フ、

## 神樂

神樂ハ舊クカミアソビト云ヒ、後ニカグラト云フ、神樂ハ天照大神ノ天岩戸ノ故事ニ、基因スル舞樂ニシテ、神祭ノ時ニ奏スルナリ、神樂ヲ行フ者ノ長ヲ人長ト云フ、中世人長ハ、多クハ近衛舍人ノ行フ所トス、神樂ノ中ニ於テ内侍所及ビ清暑堂ノ御神樂ヲ以テ、最モ重キモノトシ、伊勢、石清水、賀茂等ノ如キ大社ノ神樂コレニ次グリ、後世ニハ里神樂大神樂大々神樂等ノ別アリ、而シテ内侍所御神樂ハ帝王部神器篇ニ、清暑堂御神樂ハ神祇部大嘗祭篇ニ載セタリ、

名稱

〔類聚名義抄七〕神樂カグラ

〔伊呂波字類抄加人〕神樂カグラ

〔下學集神上〕神樂カグラ

〔藻鹽草十四〕神樂カグラ 神樂ハ越調をもてうたふといへり



よく似たり、さて此の讃歌と云は、自作れることを云には非ず、樂府にての歌むと云るは叶は  
り、或人この讃歌を漢國にて徒歌と云る如く、たゞにうたへるの歌ならむと云るは叶は  
す、

奏大歌

〔内裏式〕<sup>上</sup>十六日〇正路歌式

早旦天皇御豐樂殿賜宴次侍從以上、<sup>中</sup>一盞之後、吉野國栖於儀鸞門外奏歌、笛、獻御贊及大歌、立

歌人等參入奏歌如常、<sup>若</sup>有善客、<sup>並</sup>不奏、

〔内裏式〕<sup>中</sup>十一月新嘗會式

吉野國栖於儀鸞門外奏歌、笛進御贊、訖大歌別當大夫率歌者參入、就座、座定、奏大歌舞五節、<sup>或</sup>於殿

〔儀舞〕訖治部雅樂率工人等參入奏立歌、<sup>或</sup>有勅、<sup>停</sup>之、

〔儀式〕<sup>五</sup>大歌并五節舞儀

當日〇新嘗會、早旦、兵庫寮鼓吹司夫等、就大歌所、受鉦、鈸、簫、簫、運送會所、次歌人并琴師、笛工等、候儀鸞

門屏幔外、吉野國栖奏歌、笛、畢別當降、自殿東階、南行、出自儀鸞門、東戶、東行、更西向、宣令立臺、即大舍

人二人著當色、牽鐘、鐃、鼓、簫、簫、<sup>四</sup>列、<sup>入</sup>自同門、東戶、列立舞臺南、<sup>相</sup>去二許丈、<sup>鐘</sup>在東、<sup>鐃</sup>在

部寮、設床子、<sup>舞臺東相去一許丈、立大歌別當床子、鐃、鐃、南去二許尺、各立師床子、其南左、</sup>退出、訖掃

歌人已下共稱唯、左右相分行列、<sup>相</sup>去一、其次、第左彈御琴師二人、<sup>著紫袍、各</sup>次歌人十三人、<sup>四人著紫</sup>

井、<sup>次</sup>笛工四人、<sup>擊</sup>拍子四人、<sup>次</sup>鐘師一人、<sup>並著</sup>右彈御琴二人、<sup>次</sup>歌人十三人、<sup>四人著紫</sup>

各一人、<sup>各著</sup>次擊拍子一人、<sup>同左</sup>次鐃師鼓師各一人、<sup>色</sup>立定別當宣喚之、共稱唯、別當列入自戶、彈

御琴已下依次、次人各當床子前、折而立、即鐘、鐃、鼓、師、自歌人座邊、越共就床子、訖、鐘并鼓師相目、撞擊鼓

各三下、訖、別當以下共就床子、訖、笛工調擊聲、次調御琴、空、壓御琴三聲、<sup>詞云、幸</sup>

奏數曲、訖奏五節歌、

〔續日本紀〕<sup>三十六</sup>天應元年十一月丁卯、御太政官院行大嘗之事、己巳、宴五位已上、奏雅樂及大歌

讀歌

〔古事記下略〕一時天皇遊行、到於美和河之時、河邊有洗衣童女、其容姿甚麗、天皇問其童女、汝者誰子、答自己名謂引田部赤猪子、爾令詔者、汝不嫁夫、今將喚而還坐於宮、故其赤猪子、仰待天皇之命、既經八十歲、於是天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是其愛悲、心裏欲婚、憚其極老、不得成婚而賜御歌、其歌曰、美母呂能伊都加斯賀母登、由由斯伎加母、加志波良、袁登、袁又歌曰、比氣多能、和加久流、須婆良、和加久閉、爾韋泥氏麻斯母能、淡伊爾祁流、加母、爾赤猪子之泣淚、悉濕其所服之丹指袖、答其大御歌而歌曰、美母呂爾都久夜多麻加岐都岐阿麻斯多爾、加母余良牟加微能、美夜比登、又歌曰、久佐迦延能、伊理延能、波知須波那婆知須微能、佐加里毘登、登母志岐呂加母多祿、給其老女以返遣也、故此四歌者、志都歌也、○中 天皇坐長谷之百枝槻下、爲豐樂之時、○中 爾袁杼比賣獻歌、其歌曰、夜須美斯志和賀、淡富岐美能、阿佐斗爾波、伊余理陀多志、由布斗爾波、伊余理陀多須、和岐豆紀賀斯多能、伊多爾母賀阿世袁、此者志都歌也、

〔古事記下略〕故其輕太子者、流於伊余湯也、○中 其衣通王、○中 追到之時、待懷而歌曰、許母理久能波都世能、夜麻能意富、哀爾波多波理陀氏、佐袁哀爾波多波理陀氏、意富哀爾斯那加佐陀賣流、淡母比豆麻阿波禮都久由美能、許夜流許夜理母阿豆佐由美多底理多底理母能、知母登理美流、意母比豆麻阿波禮、又歌曰、許母理久能波都勢能、賀波能賀美都勢爾伊久比袁字知斯毛都勢爾麻久比袁字知伊久比爾波、加賀美袁加氣麻久比爾波、多麻袁加氣麻多麻那須阿賀母布伊毛加賀美那須阿賀母布都麻阿理登伊波婆許曾爾伊幣爾母由加米久爾袁母斯怒波米、如此歌、即其自死、故此二歌者讀歌也、

〔古事記傳三十九〕讀歌は樂府にて、他の歌曲の如く、聲を詠めあやなしては歌はずして、直誦に讀舉る如く、唱へたる故の名なるべし、凡て余牟と云は、物を數ふる如くに、つぶくと唱ふることなり、故物を數ふるなり、余牟と云り、又歌は漢國にて余牟と云ふ、心に思ふことと云、數へたからとなり、云出るよなり、されば歌余牟と云は漢國にて余牟と云ふ、心に思ふことと云、數へたから

云これまで江次第石清水臨時祭儀に、舞人出畢陪從反歌退出と見えて、抄に反歌大比禮返也とあり、源氏物語若菜上卷に唱歌の人々御階に召て勝れたる聲のかぎり出して、返り音になる、夜の更行まゝに、物の調どもなつかしくかはりて、青柳遊び給ふほど云々、注にかへりこゑになるは、呂の律になるなりとあり、體源抄にも返り聲に青柳をうたふと云は、律の聲を返り聲と云と云り、呂聲の凡て律聲を返聲と云には非ず、又云、朝倉がへしと云は朝倉の歌を催馬樂拍子にうたふを云、神樂は一越調なるを、催馬樂拍子に琴を調ぶるなりと云り、是し右の袖を見て心得べし、右のことをも合せて考るに、調の易るを返ると云、其は物の下上に易るを、覆ると云、裏表に易るを翻ると云類にて、調の易るは、呂の律に翻るなり、さて其調を易へたる際に歌を返歌と云、返物と云も是なり、○註そも、物の調歌音などを呂律と分つことは、漢國の定めに依れることにて、但し皇國にては、いかなる故にか、呂律の名、漢國とは相反りて、呂勿後のさたなるに、此の返歌を其調の易ることに説むは、如何と思ふ人あるべけれど、呂律など云名こそ後なれ、上代よりして、歌音にも、物の調などにも、おのづから強き柔なる差などほのるべければ、其を翻して歌ふ事などもありて、返歌と名けけんこと何かは疑はむ、然るわざにも然るわざはあるなり、後

〔古今和歌集打聽大歌二十所御歌〕かへしものゝうたやまと琴の呂を律にかへす也

〔古事記下巻〕此之御世、免寸河之西、有一高樹、其樹之影、當旦日者、逮淡道島、當夕日者、越高安山、故切是樹以作船、甚捷行之船也、時號其船謂枯野、故以是船、旦夕酌淡道島之寒泉、獻大御水也、茲船破壞、以燒鹽、取其燒遺木作琴、其音響七里、爾歌曰、加良志哀、志本爾夜、岐斯賀阿麻理、許登爾都久理、加岐比久夜、由良能斗能斗、那加能、伊久理、爾布禮多都那豆能、紀能佐夜佐夜、此者志都歌之返歌也、

拂紅紐青皆變紅色爾口子臣之妹口口賣仕奉太后中於是口子臣亦其妹口比賣及奴理能美三人議而令奏天皇云、太后幸行所以者、奴理能美之所養虫、一度爲匂虫、一度爲穀、一度爲飛鳥、有變三色之奇虫、看行此虫而入坐耳、更無異心、如此奏時、天皇詔然者、吾思奇異故欲見行、自大宮上幸行入坐、奴理能美之家時、其奴理能美己所養之三種虫獻於太后、爾天皇御立其大后所坐殿戶、歌曰、都藝泥布夜麻斯呂賣能許久波母知字知斯意富泥佐和佐和爾、那賀伊幣勢許曾字和和多須夜賀波延那須岐伊理麻章久禮此天皇與大后所歌之六歌者、志都歌之返歌也、

〔古事記傳 三十六〕志都歌之返歌此御段の末にも如此云るあり、彼處には返歌を諸本共に、歌返

とあるをたゞ延佳本にのみは返歌とあり、かくて此も諸本には返歌とあれども、眞福寺本には、歌返とあり、故思ふに、歌返とある方や正しからむ、註もし歌返ならば、字多加幣志と訓べきにや、されどなほ返歌と云ぞ、理穩に聞え、又夷振之上歌など云例格にも叶へれば、今は姑く

此も彼も返歌とあるに依りつゝ、さて志都歌と云は、朝倉宮段にも二處に見えたり、註神樂歌古本に云く、次薦枕靜歌拍子十、本上、拍子十四、又、真末各七、以前宮人木綿志天、前張此三首各靜歌二返、尋琴拍子打尻舉二返云々と見え、韓神歌に靜韓神早韓神と云ことあり、早に對へて、靜と云

を以て見れば、志都歌は徐に歌ふ由の名なるべし、返歌は、古今集大歌所歌の、神樂歌の中に、返し物の歌として、青柳を片糸に撻カサて云々の歌を載たり、此歌は、神樂の青柳と云歌なり、註六帖

歌に、吾妻琴春の調を惜しかば返し物とは思はざりけり、註袖中抄返し物の條に、右の歌どもを引て、神樂譜云、朝倉吹返催馬樂拍子云々、あさくらや木の丸殿に云々、此歌爲御前返歌、是

延喜廿一年勅定也、神樂遊仕る時は、櫛音振唱、又云星已了、搔返絲竹して可仕朝倉、支催堪能之

歌人、私云、朝倉うたふをばあさくらかへすと云、或は吹返といひ、或は搔返絲竹と云り、或は催馬樂拍子と云り、云此かへすは、笛も琴も別にあらべ改むるか、催馬樂拍子と云にて知りぬ云



夷振之片下也、

〔古事記傳三十九〕夷振之片下、夷振は既に出、片下は上の尻上歌上歌などの上と相照して心得べし、上も下も歌ふ音振を以て云なり、片とは三句の歌を片歌と云如く、本にまれ末にまれ、片を下してうたふなるべし、諸舉と相對へて心得べし、古き東遊譜に、先一二歌、次駿河舞、次求子、次加太於呂之とあり、此は一の歌にまれ、片下になれる物か、はた何、

古事記傳

〔古事記傳下〕大后爲將豐樂而於採御網柏幸行木國之間、天皇婚八田若郎女於是、大后御網柏積盈

御船還幸之時、所驅使於水取司、吉備國兒島之仕丁、是退已國於難波之大渡、遇所後倉人女之船、乃語云、天皇者皆婚八田若郎女而晝夜戲遊、若大后不聞看此事乎、靜遊幸行、爾其倉人女聞此語言、即追近御船、白之狀具如仕丁之言、於是大后大恨怒、載其御船之御網柏者、悉投棄於海、中即不入坐宮而引避、其御船、泝於堀江、隨河而上、幸山代、此時歌曰、都藝泥布夜、夜麻志呂、賀波能煩理、和賀能煩禮婆、迦波能倍、迦波能倍、迦波能倍、陀氏流、佐斯夫、衰、佐斯夫、能紀、斯賀斯多、迦波能倍、陀氏流、毘呂、由都麻都婆、岐斯賀波、那能、氏理、伊麻斯、芝賀波、能比呂、理伊麻、須波、波富岐、美呂、迦母、即自山代、廻到坐那良山口、歌曰、都藝泥布夜、夜麻斯呂、賀波能、美夜、能煩理、和賀能煩禮婆、阿衰、迦余志、那良、衰須疑、衰陀氏、夜麻登、衰須疑、和賀美、賀本斯、久迦波、迦豆良、紀多迦、美夜、和藝幣、能阿多理、如此歌而還、暫入坐筒木韓人名奴理、能美之家也、天皇聞看大后自山代上幸而、使舍人名謂烏山人、送御歌曰、夜麻斯呂、迦伊斯、祁登理、夜麻、伊斯、祁、伊斯、祁、阿賀波、斯豆摩、迦伊斯、岐、阿波、牟迦母、又續遣九廻臣口子、而歌曰、美母呂、能、曾、能多迦、紀、那流、意富、章古、賀波、良、意富、章古、賀波、良、迦阿流、岐、毛、牟迦布、許呂、衰陀、迦阿比、淤母、波受、阿良、牟、又歌曰、都藝泥布夜、夜麻志呂、賣能、許久波、母知、宇知、斯淤、富泥、土漏、能斯、漏多陀、牟、岐、麻迦、受祁婆、許曾、斯良、受登、母伊波、米、故是口子臣、白此御歌之時、大雨、爾不避其雨、參伏前殿戶者、違出後戶、參伏後殿戶者、違出前戶、爾匍匐進赴、跪于庭中、時水潦至腰、其臣服著紅紐青褶衣、故水潦

豆<sup>ツ</sup>句<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>磨<sup>シ</sup>爾<sup>ニ</sup>和<sup>ハ</sup>我<sup>ガ</sup>謂<sup>フ</sup>爾<sup>ニ</sup>志<sup>シ</sup>伊<sup>ハ</sup>茂<sup>シ</sup>播<sup>ハ</sup>和<sup>ハ</sup>素<sup>ハ</sup>還<sup>ル</sup>珥<sup>シ</sup>譽<sup>シ</sup>能<sup>ハ</sup>據<sup>ル</sup>鄧<sup>ハ</sup>厥<sup>ハ</sup>鄧<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>亦<sup>モ</sup>云<sup>フ</sup>彥<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>々<sup>々</sup>出<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>尊<sup>ニ</sup>取<sup>ル</sup>婦<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>爲<sup>ス</sup>乳<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>湯<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>及<sup>テ</sup>飯<sup>ハ</sup>嚼<sup>ハ</sup>湯<sup>ハ</sup>坐<sup>ス</sup>凡<sup>ソ</sup>諸<sup>ハ</sup>部<sup>ハ</sup>備<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>奉<sup>ス</sup>養<sup>ス</sup>焉<sup>ニ</sup>于<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>權<sup>ニ</sup>用<sup>ス</sup>他<sup>ノ</sup>姬<sup>ハ</sup>婦<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>乳<sup>ハ</sup>養<sup>ス</sup>皇<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>焉<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>世<sup>ニ</sup>取<sup>ル</sup>乳<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>養<sup>ス</sup>兒<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>緣<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>後<sup>ニ</sup>豐<sup>ニ</sup>玉<sup>ハ</sup>姬<sup>ハ</sup>聞<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>兒<sup>ハ</sup>端<sup>ニ</sup>正<sup>ニ</sup>心<sup>ハ</sup>甚<sup>ニ</sup>憐<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>欲<sup>ス</sup>復<sup>ス</sup>歸<sup>ス</sup>養<sup>ス</sup>於<sup>レ</sup>義<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>故<sup>ニ</sup>遣<sup>ハ</sup>女<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>玉<sup>ハ</sup>依<sup>ハ</sup>姬<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>來<sup>ス</sup>養<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>于<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>豐<sup>ニ</sup>玉<sup>ハ</sup>姬<sup>ハ</sup>命<sup>ス</sup>寄<sup>ス</sup>玉<sup>ハ</sup>依<sup>ハ</sup>姬<sup>ハ</sup>而<sup>テ</sup>奉<sup>ス</sup>報<sup>ス</sup>歌<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>阿<sup>ハ</sup>柯<sup>ハ</sup>娜<sup>ハ</sup>磨<sup>ハ</sup>廼<sup>ハ</sup>比<sup>ハ</sup>阿<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>播<sup>ハ</sup>阿<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>登<sup>ハ</sup>比<sup>ハ</sup>鄧<sup>ハ</sup>播<sup>ハ</sup>伊<sup>ハ</sup>珥<sup>ハ</sup>耐<sup>ハ</sup>企<sup>ハ</sup>珥<sup>ハ</sup>我<sup>ハ</sup>譽<sup>ハ</sup>贈<sup>ハ</sup>比<sup>ハ</sup>志<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>輔<sup>ハ</sup>妬<sup>ハ</sup>勾<sup>ハ</sup>阿<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>計<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>凡<sup>ソ</sup>此<sup>ハ</sup>贈<sup>ハ</sup>答<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>首<sup>ハ</sup>號<sup>ス</sup>曰<sup>ク</sup>舉<sup>ハ</sup>歌<sup>ハ</sup>

〔古事記<sup>九下</sup>〕天皇崩之後定木梨之輕太子所知日繼未即位之間軒其伊呂妹輕大郎女而<sup>中</sup>又歌曰佐佐婆爾宇都夜阿良禮能多志陀志爾章泥氏牟能知波比登波加由登母字流波斯登佐泥斯佐泥氏婆加理許母能美陀禮婆美陀禮佐泥斯佐泥氏波此者夷振之上歌也

〔古事記傳<sup>三十九</sup>〕上歌は書紀神代卷にも、依企都郭利云々阿柯娜磨廼云々凡此贈答二首號曰舉歌と見え神樂採物歌に諸舉と云あり上に後舉歌と云あり下に片下と云あり此らを相對へて思ふに、皆其歌ひざま音振に依て負たる名なり、然るゝか<sup>カ</sup>の神代<sup>カ</sup>の舉歌<sup>カ</sup>の注<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>可<sup>カ</sup>なり、<sup>カ</sup>置<sup>カ</sup>

志良宜歌

〔古事記<sup>九下</sup>〕天皇崩之後定木梨之輕太子所知日繼未即位之間軒其伊呂妹輕大郎女而歌曰阿志比紀能夜麻陀袁豆久理夜麻陀加美斯多備袁和志勢志多杼比爾和賀登布伊毛袁斯多那岐爾和賀那久都麻袁許存許會婆夜須久波陀布禮此者志良宜歌也

〔古事記傳<sup>三十九</sup>〕志良宜歌は後舉歌を切めたる名なり、搔上<sup>カ</sup>を加<sup>カ</sup>々<sup>カ</sup>宜<sup>カ</sup>指<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>を佐<sup>カ</sup>佐<sup>カ</sup>宜<sup>カ</sup>持<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>を母多宜など云に同じ神樂歌譜に、一前張云々各尻上また次置枕靜歌云々尻上また尻舉は三度拍子乎用留、即轉乃音振也などあり

片下

〔古事記<sup>九下</sup>〕故其輕太子者流於伊余湯也亦將流之時<sup>中</sup>又歌曰意富岐美袁斯麻爾波夫良婆布那阿麻理伊賀幣理許牟叙和賀多多彌由米許登袁許會多多美登伊波米和賀都麻波由米此歌者

大直日歌  
ひろめ歌

葬歌

上歌

〔古事記傳 四十二〕天語歌は、朝廷を天とせる例、万葉のうたに、ひさかたの京ともよみ、京人を天を以て名けたるなりと云れたれど、其もわるし、餘語歌なるべし。三歌皆終に許登能加多理基

登母許登婆と云ことの添れるが、歌の意の外にて、餘れる語なればなり。○中、字岐歌はいかなる由の名にか、未思得ず、師は酒盞歌なりと云れつれど、そは上なる三重採の歌こそさは云め、此御歌には由なし、若くは詠ふ聲の浮沈を以て號たるにて、浮歌にや、其に就て思ふには、次なへど、彼はなほ上に云る

が如く餘歌なるべし、

〔古今和歌集 大歌所御歌〕おほなほひのうた

新しき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ

ひろめのうた

さゝのくまひのくま川に駒とめてまばし水かへかけをだにみむ

〔古事記 倭建命〕中、此時御病甚急、爾御歌曰、歌竟即崩、爾貢上驛使、於是坐倭后等及御子

等諸下、到而作御陵、即匍匐廻其地之那豆岐田、而哭爲歌曰、那豆岐能多能伊、那賀良爾伊、那賀良爾波比母登富呂布登許呂豆良、於是化八尋白智鳥、翔天而向濱飛行、爾其後及御子等、

於其小竹之刈杵、躰足躰破、忘其痛以哭追、此時歌曰、阿佐士怒波良、許斯那豆牟、蘇良波由賀受、阿斯用由久那、又入其海鹽而、那豆美、行時歌曰、宇美賀由氣婆、許斯那豆牟、意富迦波良、能字惠具、佐宇美賀波伊、佐用布、又飛居其磯之時、歌曰、波麻都知登理波麻用波、由迦受伊、蘇豆多布、是四歌者、皆歌其御葬也、故至今其歌者、歌天皇之大御葬也、

〔日本書紀 二〕一云、中、豐玉姬、已而從容謂天孫、曰、妾方產、請勿臨之、天孫心怪、其言竊覘

之、則化爲八尋大鰐、而知天孫視其私屏、深懷慚恨、既兒生之後、天孫就而問曰、兒名何稱者、當可乎、對曰、宜號彥波瀲武鸕鷁草葺不合尊、言訖乃涉海徑去、于時彥火々出見尊、乃歌之曰、飢企都鄧利、柯茂



麻閉阿禮許會波余能那賀比登蘇良美都夜麻登能久週爾加理古牟登伊麻陀岐加受如此白而被  
給御琴歌曰那賀美古夜都里週斯良牟登加理波古牟良斯此者本岐歌之片歌也

〔古事記傳 三十七〕本岐歌は祝書歌なり

〔古事記傳 雄略〕天皇坐長谷之百枝槻下爲豐樂之時伊勢國之三重嫔指舉大御蓋以獻爾其百枝槻葉  
落浮於大御蓋其嫔不知落葉浮於蓋猶獻大御酒天皇看行其浮蓋之葉打伏其嫔以刀刺充其頸將  
斬之時其嫔白天皇曰莫殺吾身有應白事即歌曰麻岐牟久能比志呂乃美夜波阿佐比能比傳流美  
夜由布比能比賀氣流美夜多氣能泥能泥陀流美夜許能泥能泥婆布美夜夜本爾余志伊岐豆岐能  
美夜麻紀佐久比能美加度爾比那閉夜爾濃妻陀氏流毛毛陀流都紀賀延波本都延波阿米袁濃幣  
理那加都延波阿豆麻濃幣理志豆延波比那袁濃幣理本都延能延能字良婆波那加都延爾濃知  
布良婆閉那加都延能延能字良婆波斯毛都延爾濃知布良婆閉斯豆延能延能字良婆波阿理岐奴  
能美幣能古賀佐佐賀世流美豆多麻宇岐爾宇岐志阿夫良濃知那豆佐比美那古遠呂許袁呂爾許  
斯母阿夜爾加志古志多加比加流比能美古許登能加多理非登母許袁婆故獻此歌者赦其罪也爾  
大后歌其歌曰夜麻登能許能多氣知爾古陀加流伊和能都加佐爾比那閉夜爾濃妻陀氏流波昆呂  
由都麻都婆岐曾加波能比呂理伊麻志曾能波那能氏理伊麻須多加比加流比能美古爾登余美岐  
多氏麻都良勢許登能加多理非登母許袁婆即天皇歌曰毛毛志紀能濃富美夜比登波字豆良登理  
比禮登理加氣氏麻那婆志良袁由岐阿閉爾波須受米宇受須麻理韋氏祁布母加母佐加美豆久良  
斯多加比加流比能美夜比登許登能加多理非登母許袁婆此三歌者天語歌也故於此豐樂譽其三  
重嫔而給多祿也是豐樂之日亦春日之袁杵比賣獻大御酒之時天皇歌曰美那會曾久濃美能袁登  
賣本陀理登良須母本陀里斗理加多斗良勢斯多賀多久夜賀多久斗良勢本陀理斗良須古此者  
宇岐歌也



體の三七句をば、半なる物にしたりとおぼしくて、白檮原朝神の御世よりして此體なるは、何れも物を問かけたる、答へたるなどにして、此記書紀なるかぎり、未まで皆然なり。中故一首離れたるが三句なるは、いと／＼稀なるに因て、殊に片歌とは名けたるなるべし。下

酒樂歌

〔古事記仲中〕故建内宿禰命、率其太子神、爲斯禊而、經歷淡海及若狹國之時、於高志前之角鹿、造假宮而坐。中於是還上坐時、其御祖息長帶日賣命、饗待酒以獻、爾其御祖御歌曰、許能美岐波和賀美、岐那良受、久志能加美、登許余還伊麻須伊波多多須須久那美、迦能加牟苦岐、本岐玖流本斯登余、本岐本岐母登本斯麻都理許斯美岐、叙阿佐受哀勢佐佐、如此歌而獻大御酒、爾建内宿禰命爲御子、答歌曰、許能美岐波、迦美祁牟比登波、會能都豆美宇須迦多匹多比都都迦美祁禮加母麻比都、迦美祁禮加母許能美岐波、美岐能阿夜還宇多陀怒斯佐佐、此者酒樂之歌也。

〔古事記傳三十一〕酒樂は佐加本賀比と訓べし、本賀比は本岐を延たる言にて、泥具を延て、賀比

宮内省式に、大嚴祭、此云於保登能保加比とある是なり、祝詞式に載れる大嚴、字鏡には、祠保加

布とあり、保加布と云書の一の抄なり、書紀に、皇太后舉觴以壽于太子、とある壽をも、サカホガ

ヒシタマヒと訓り、さて此に樂字を書るは、宴樂の時にうたふ歌なる故なり、樂字の義に云書は

らざれども、かの大嚴祭のたぐひなり、祭字も本賀比に、當らざれども、被祭に讀む詞なる故

に、やがて樂字を書り、師賀良還はサカエラと訓れたる、其は樂の字に當りたれども、な

は然るに、其あらじ、新樂記に、酒禮といふと云、云云、此は禮世の奇なれり、さへ、さて上にも云る如

く、國歌の處、思記中の例、二首以上を云ときは、此二歌者、此三歌者などあるを、此には然云ざる

は、酒樂之歌と云は、一首にや、されどなほ上の御歌をも併せて云ること聞ゆ、

本岐歌

〔古事記下〕一時天皇爲將、豐樂而幸行日女島之時、於其島雁生卵、爾召建内宿禰命、以歌問雁生卵之狀、其歌曰、多麻岐波流、字知能阿會那許會波余能那賀比登、蘇良美都夜麻登能久還爾、加理古牟登、岐久夜、於是建内宿禰以歌語白、多迦比迦流、比能美古宇倍志許會斗比多麻閉、麻許會還斗比多

近江振  
水巻振  
四橋山振

思邦歌

盛音楽、舉房男女、悉盡出來、傾演歎矣。○下

〔古今和歌集二十〕  
大歌所御歌、あふみより

あふみよりあきたちくればうねののになづぞ鳴なる明ぬこのよは

みづくきより

水くきのをかのやかたにいもとあれとねてのあさけの雪のふりはも

まはつ山より

まはつ山打出てみればかさゆひの鳥こぎかくるたななし小舟

〔日本書紀七〕  
景行十七年三月己酉、幸于湯縣、遊于丹裳小野、時東望之、謂左右曰、是國也、直向於日出方、

故號其國曰日向也、是日、陟野中大石、憶京都而歌之曰、波辭枳豫辭和藝幣能伽多由區毛位多知區、暮夜麻苦波區、珥能摩保遷摩多多、饅豆久阿烏伽枳夜摩、許莽例展夜摩、苦之子漏破試、異能知能、摩會、祢務比苦破、多多彌許莽幣遇利能夜摩、能志遷伽之餓延塙于受珥左勢、許能固是謂思邦歌也、

〔古事記中〕  
景行、爾天皇亦頻詔倭建命、言向和平、東方十二道之荒夫、琉神及摩都樓波奴人等、而副吉備

臣等之祖、名御鋌友耳、建日子而遣之。○中、自其幸行而到能煩野之時、思國以歌曰、夜麻登波久爾能、

麻本呂婆多多那豆久阿袁加岐夜麻基母禮流夜麻登志宇流波斯、又歌曰、伊能知能麻多祢牟比登、

波多多美許母幣具理能夜麻能久麻加志賀波衰宇受爾佐勢、曾能古、此歌者、思國歌也、又歌曰、波斯、

祢夜斯和岐幣能迦多用久毛章多知久母、此者片歌也、

〔古事記傳二十八〕  
片歌、すて思國歌、片歌など云類の目は、其歌を古より然名付け來たるなり

と、師賀淵の云れたるが如し、かくて樂府にては、諸の歌に、皆如此様の目ありて、其部を分た

るものなり。○中、さて片歌と名けたる由は、三句にして、なべての五句六句の歌の半にして、片

なるが如くなればなり。○中、抑かく名けたるは、や、後のことなるべけれど、上代よりして此

宮人振  
天田振

彼歌を此に假しありしは、彼歌樂府にて、河米那流夜の歌と並びて、共に我振なりける。然れば、作とせるの傳しありしにや、されど是に誤にて、此記に假歌は無きぞ、正しき傳なりける。然れば、天なるは、天の歌を、天の歌に引ひて出たる物と心得たる名ひ、萬の疑はの味なり。

〔古事記下〕爾輕太子畏而逃入大前小前宿禰大臣之家、而備作兵器。於是穴穗御子、安興軍、園大前小前宿禰之家。爾其大前小前宿禰舉手打膝、與詞那傳。自詞下二歌參來、其歌曰、美夜比登能、阿由比能、古須受、淡知爾、岐登、美夜比登、登余牟佐斗毘登、母由米、此歌者宮人振也。中故大前

小前宿禰捕其輕太子率參出以貢進其太子被捕歌曰、阿麻陀牟加流乃衰登、賣伊太那加婆比登、斯理奴倍志波佐能、夜麻能波斗能、斯多那岐爾、那久又歌曰、阿麻陀牟加流、衰登賣志多、爾母余理泥、底登富禮加流、衰登賣母、故其輕太子者、流於伊余湯也、亦將流之時、歌曰、阿麻登夫登理母都加比、曾多豆賀泥能、岐許延牟登、岐波和賀那斗波佐泥、此三歌者天田振也。

〔古事記傳三十九〕宮人振とは、歌の首の詞を取て名けたるものなり。○中、天田振は、上なる二首

の初之言を取て、阿麻陀牟振と云なり。○中、天田の字は、魯字のみなり。○中、

〔續日本紀十一〕天平六年二月癸巳朔、天皇御於朱雀門、覽歌垣。○中、以本末唱和爲難波曲、倭部曲、淺

茅原曲、廣瀬曲、八雲刺曲之、昔令都中士女縱覽。

〔萬葉集抄〕肥前國風土記云、杵島郡縣南二里有一孤山、從坤指艮、三峰相連、是名曰杵島、坤者曰比

古神、中者曰比賣神、長者曰御子神。○中、名軍神、動、鄉閭士女提酒抱琴、每歲春秋、携手登望、樂飲歌舞、曲

盡而歸、歌詞云、阿羅禮符、纒耆資、座加多、位塙、嵯峨紫、禰苦區、經刀理我泥、氏伊母我提、摩刀、纒島曲。○中、

〔常陸風土記〕行方郡、古老曰、斯貴瑞垣宮、大八洲所取天皇。○中、崇之世、爲平東夷之荒賊、遣建借間命、○中、

略、於是、有國栖名曰、夜尺斯、夜筑斯、二人自爲首帥、掘穴造堡、常所居住、覘伺官軍、伏衛拒抗、建借間命

縱兵驅追、賊盡遁還、閉堡固禁、俄而建借間命大起權議、校閱敢死之士、伏隱山阿、遣備滅賊之器、嚴飭海

濱、連船編楫、飛雲蓋、張虹旌、天之鳥琴、天之鳥笛、隨波逐潮、杵島唱曲、七日七夜、遊樂歌儺、于時、賊黨聞

難波曲  
倭部曲  
淺茅原曲  
廣瀬曲  
八雲刺曲  
杵島曲

一三九



之神者故汝先往平之乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢遣之天稚彥受勅來降則多娶國神女子經八年無以報命略中時天神取矢而呪之曰若以惡心射者則天稚彥必當遭害若以平心射者則當無恙因還投之卽其矢落下中于天稚彥之高胸因以立死略中先是天稚彥與味耜高彥根神友善故味耜高彥根神登天弔喪大臨焉時此神形親自與天稚彥恰然相似故天稚彥妻子等見而喜之曰吾君猶在則擊持衣帶不可排離時味耜高彥根神忿曰朋友喪亡故吾卽來弔如何誤死人於我耶乃拔十握劔斫倒喪屋其屋墮而成山此則美濃國喪山是也世人羣以死者誤己此其緣也時味耜高彥根神光儀花鏡映于二丘二谷之間故喪會者歌之曰或云味耜高彥根神之妹下照媛欲令衆人知映丘谷者是味耜高彥根神故歌之曰阿妹奈屢夜乙登多奈婆多廼汗奈餓勢屢多磨廼彌素磨屢廼阿奈陀磨波夜彌多爾輔梅和梅廼須阿泥素企多伽避顧彌又歌之曰阿磨佐箇屢避奈先謎廼以和多邇素西渡以爾箇播箇梅輔智箇拖輔智爾阿彌播利和拖爾妹盧豫爾豫爾豫利播爾以爾箇播箇拖輔智此兩首歌辭今號夷曲ヒナフ

〔古事記上〕故阿治志貴高日子根神者忿而飛去之時其伊呂妹高比賣命思顯其御名故歌曰阿米那流夜淤登多那婆多能宇那賀世流多麻能美須麻流美須麻流爾阿那陀麻波夜美多邇布多和多良須阿治志貴多邇比古泥能邇微會也此歌者夷振也

〔古事記傳十三〕夷振書紀には右の歌の次に又歌之曰とありて阿磨佐箇屢避奈先謎廼云々といふ歌を載て此兩首歌辭今號夷曲とあり凡て歌を記して此者某振也また某歌也と云ること記中に多しその某振とあるは此夷振の外に記中に宮人振ミヤヒトイリ天田振アメノタと云る年二月歌垣の中に難波曲ナニハ倭部曲ヤマト淺茅原曲アサハ廣瀬曲ヒロセ八雲刺曲ヤスササなど云名あり古今集大歌所歌に近江ふり水莖ふり四極山ふりあり略註さてかく某振某歌といふは皆後に書紀に今號とあるべし樂府にて呼る名なり略註抑此記書紀などに載れる歌は何れも上代の多くの歌の

# 古事類苑

## 樂舞部三

### 大歌

大歌ハオホウクト云フ、我邦古來ノ歌謠中、風調雅正ナルモノヲ採リテ、鼓吹ニ合セテ奏樂シ、朝會公儀等ノ時ニ用キシモノナリ、大歌所ノ掌ル所ニシテ、而シテ大歌所ノ事ハ官位部大歌所篇ニ載セタリ、

名稱

〔倭訓〕於中編三十おほうた 大歌なり、五節に大歌小歌あり、大歌所など稱せり、大歌生も見えたり、内裡式蹈歌に大歌立歌とみゆ、

〔古今和歌集打聞二十〕大歌所御歌

此大歌所は、神樂風俗等のうたひ物をつかさどる官人、其外歌人等を召おかる、所なり、それを習ひ傳ふるも、こゝにて教ふることなり、江次第に大歌小歌見ゆ、大歌は公朝（公朝）に用ゐ給ふを云、おほやけならず、世に専らうたふを小歌と云、おほやけにもちゐさせ給へば、大歌といひ、御歌ともいへど、御みづからのよみませしにあらす、又うたふには、更に撰びてうたひ、其曲調をも作れることありとぞ、

〔江家次第第十一月〕五節帳臺試

大歌移候於后町廊邊、次大歌小歌發聲如恒、

〔日本書紀（二）代〕一書曰、天照大神勅、天稚彥曰、豐葦原中國是吾兒可王之地也、然慮有殘賊強暴橫惡、

歌曲  
夾振曲

閑靜  
 老んになり侍ると、ことこのみする人はいへど、その國に相應したる、まことの樂をきゝてはこころおもしろく、いそ／＼しくなるべきを、老んにおぼゆるは、樂のまうけの本意にあらず、ことくにの音なればなり。

〔夢語〕一今樂人として有ながら、唯御神事御佛事の時の役人として、御遊等の用なし、是古代雅樂にて、天下泰平の樂なるべければ、今も申樂の輩のごとく、折々柳營に於ても舞樂の御覽等あらば、其道を執するものも出來て、雅樂永く傳はるべし、只今のごとく御神事御法事のみの役人として、舞樂などたえてなくなれば、末々は夫々の家の業荒みて、果は本傳を失して、あたらし古樂を失ふべし、右のごとく折々御聽聞等もあらば、其道も委しく成傳もつたはり、人々も日本の古へはかくなんありしと、故きを温てあたらしき淫聲のあしきをもあるべく、樂といふ事をもあるべし、さあらばかの淫聲制せらるゝに、泛て防ぐに便あるべし。

〔琉人奏樂之記〕天保十三年壬寅十一月廿二日琉球人登營奏樂目錄、

奏樂儀注一帖  
 恭奏樂儀注 一初設列樂器奏樂、自一章至三章畢、徹去樂器、一次提出樂器唱曲畢、提收樂器、

一又次同前儀 又恭奏樂儀注〇中 恭唱琉歌儀注 一提出三線唱曲畢、提收三線、

樂帖一帖  
 第一奏樂 萬年春 哨哨 城間親雲上 笛 安里里之子 笛 眞壁里之子 鼓小銅鑼

幸地里主 銅鑼〇中 豐見城里主 韻鑼 玉城里之主 第二奏樂 賀聖明〇中 第三奏

樂 樂清朝〇中 第四唱 三絃 幸地里主 琵琶 安里里之子 昇平世 功德頌 席琴

玉城里之子 三絃 幸地里主 琵琶 安里里之子 胡琴 嵩原里主〇下

シ、舞樂ヲナサシメ玉ヒシカバ、卿大ニ感悅アリ、傳奏廣橋一位伊光卿ヲ招キ玉ヒシ時モ、舞樂ヲ奏セラレシガ、卿モ數十曲熟練シタルヲ感ジ玉フ。略中樂ハ固ヨリ伶人ノ家ニ傳ル者ニシテ、田安ノ復古ト雖モ、種々ニ屬セル故、伶家ノ舞樂ヲ學ビ置ベシトテ、京師ノ伶官上左近將監、伯近之、享和元年日光ニ行歸路、暫ク滯府セシ時、舞ヲヨクスル近臣四人ヲ選ミ入門ヲ命ジ、先近之ヲ召サレ、厚ク托シ玉ヒケレバ、左方十八曲ノ奥意ヲ悉ク傳授セリ、古ノ舞曲中ニ諸物アリ、是モ宗武卿ノ考訂ニテ其正ヲ得タレドモ、猶持明院家ニ入門シ、其傳ヲ受シメ玉フ、斯マデ心慮ヲ盡シテ、後世ニ傳ヘンコトヲ謀ラセ玉フ、

〔花月草紙〕いにしへのことゝだにいへば、いとおほどかに事少なきものと思ふが、いかでさ是有りなん、それはかの太古の世をいふにや、むかしべは今の世よりもひらけぬれば、今の樂もていふとも、横笛の手のまげきも、箏のことに左手用ひしも、かの蘇香のつくりざまのたくみなるなど、いかでおほどかなるふりとはいはん、さるを樂のまひなんども、手を少くしておもしろからぬさまにまなし、樂もこゝらのはいと長く引きのばして、人の睡生する様にするを、高き事と心うるぞ淺ましき、雅樂とても、人の心をたのしましむるものなるを、睡生するを本意とせんや、ことにいまの樂は、房中又は妓樂なるを、おもしろからぬさまになすぞ、本意うしなへりともいふべき、樂のことは殊にあやまりのいとおほきをも、まゐるひとなきぞうたてきと、人の口まねびにや人のいひし、

〔たはれぐさ〕伶人のつたへし樂は、もろこしからの樂のみおほく、此國にてつくれるはすくなし、そのうち廟樂もあれど、おほかたは俗樂にて、まかもこゑしかたばかりありて、唱歌はなし、ふるきとつくにの事、此國につたはりたると、から人までもめでたくおもひ、ふしぎなる事にはあれど、をしへのそなへとはなりがたし、音樂はどたふときものはなし、こなたのこゝろおのづから



綱ノ解弛ニ隨ヒ、或ハ秘シテ失ヒ、或ハ世亂ニ廢シ、其行ハル、所モ謬傳多ケレバ、古樂絶タルニ均シカリシヲ、有徳大君古宗、台慮モ在セラレ、殊ニ田安宗武卿復古ノ志厚ク在シ玉ヘバ、諸家ノ秘録名山ノ秘藏ヲ、悉ク纂集有テ、其志ヲ遂サセ玉フ、宗武卿才徳在セラレ、自ラ感得ノコト少カラズ、數十年ニシテ、終ニ殘ナク古樂ヲ再興シ玉ヒ、當時天王寺京師紅葉山ニ行ハル、舞トハ大ニ殊ナリ、略註然ルニ宗武卿長逝ノ後、田安ニモ中絶シタルヲ、公定信早歲ヨリ深ク歎キ、田安ノ舊臣ヲ招カレ、間斷ナク合奏シ又近昵ニモ習ハシメ、一藩本知ヲ賜ヒシ後、本多吉人龍藏弟、云浪士ヲ招キ、音樂ヲ教シメ、退職ノ後、年少ノ者田井元興、山中餘章ニ命ジ、幕府樂人ノ門人ト成リ、鼓管ノ類ヲ學バシメ、又宗武卿復古ノ時、志ヲ受ケ學ビタル、田安ノ臣長野清良貞取ニ從ヒ、舞ヲ習ハシメ、小田八十郎ヲモ招玉ヒ、公モ自ラ羯鼓ヲ打セラル、重キ忌日ノ外ハ、毎日未ノ刻ヨリ稽古アリ、五六帖ノ長曲連奏シ、又不調ニシテ先立チテ成玉ヘバ、自ラ怠ル者ナク、半年ノ稽古ニテ裝束ヲ著ケ、舞臺ニ登リ、耻ル所ナク、業ヲ成得ルニ至レリ、其後三管ハ伶家ヨリ大曲ノ傳ヲ受、舞ハ長野氏ヨリ傳ヘテ得タリ、數年ノ後ハ、武昌樂、青海波、輪臺杯、舞者數十人ニ及ベリ、團亂旋、鶯囀、口秋樂、秦王破陳樂ノ大曲、天下ニ絶タリシヲ、田安ノ復古ヲ繼テ悉ク成功ヲ得玉ヘリ、大曲ノ中ニモ、蘇合ハ、殊ニ秘授ナレドモ、一具全ク備ハレリ、秦王ノ七帖、陵王ノ全曲、輪臺青海波ノ歌曲、又四十人ノ廻代マテ、欠ルコトナク、調ヒシヲ以テ、外ハ推テ知ベシ、舞ノ裝束、面ノ類ニ至ルマテ、古ニ違ハズ、悉ク製シ玉フ、夫ヨリ文武ト均シク學校ニテ稽古シ、其局ヲ習樂局ト稱シ、師範、世話役、傳授ノ賞典等、悉ク武事ニ准ゼリ、朝陽山神廟ニ於テ、五常樂、萬歲樂、音曲ヲ、一日十回、或ハ百回復奏シ、又學校ニ於テ、毎月一度試樂ト稱シ、裝束シテ習樂セシメ玉フ、抑々此主意ハ、有徳大君及宗武卿ノ遺志ヲ繼、天下ノ爲當藩ニ維持シ置、往々古樂再興ノ時ニ至リ、朝廷ノ用トナラン事モ有ベク且ハ文教ノ助ト成シ玉ハン爲ナリトゾ、舞樂ハ禁中ニテ、タマハ行ハル、ト雖モ、關東ニハ絶テ無ケレバ、殊ニ復古ノ盛事ヲ欽慕シ玉ヒ、紀伊大納言治寶卿ヨリ懇希セラル、ニヨリ、十六人ヲ紀邸ニ出

〔俗樂問答〕もと樂のことは古より傳りけれども、いつか物飾もみだれ、中比に至りては、管絃風流もつはらとなりてより、樂の本意はたがへりけり、さるに田安中納言の君○徳川宗武いとけなき御時より樂を好みたまひて、初めは今やうの舞樂とり行ひ給ひけるがや、その謬りをさとり給ひてけり、まかるに徳廟○徳川吉宗にも、その御志をとげしめ給はむとの御事にや、古き樂の書籍家々の秘録、この樂に用あるは皆田安府へ下したまはりけるにて、つひに復古の御考ありてけり、それよりして三十年ばかりも、つひに樂のことは捨て給はず、ゆかかへ給ふ頃までも、この樂の御考のみはありて、皆御口占みしたまひて、侍臣に書かしたまひけり、余○松平定信その御志をつぎ侍るにも、學いと狭く侍れば、御考をたすくべきやうもなし、たゞわが家にのこしおきて、人のひらくるを待ち侍るなり、然るに何知らぬものは、都の伶人などいへば、ふるき事も今の事もよく通達し侍ることとのみ思ひあやまるさまに聞えたり、よりて七八ヶ條まことにたやすき條を設けて、天王寺の樂人の宿老へやりて、よく考へて答へ侍れといひやりたるが、數月して答におよぶ、また再開しけるが、答は猶おそく、やう／＼に再答におよぶ、ことしまた阿部氏來りたるが、この人は好古の癖ありて、奈良京天王寺の伶人の中にての事知りなりと誰々も云ふよりて、又たづねしに、その答初に出すが如し、猶又宿老の中にも事知りたる人々、答へよといひやれども、今に答ふるものなし、笛竹ふくことなんどのみくるしみて、かゝることは露知らぬ輩おほく侍るとぞ、去年みやこの伶人おほく下りたるを招きて、いさゝかの事とひこゝろみたりしに、いとうとかりけり、よりて後には問はず侍りき、かくなし侍るも、かの家々の人をそしるにもあらず、かちまけきそふにもあらず、たゞあやまりを人々知りて、復古の道ひらけなば、中納言の君の御説あふぐものも、あるべからむかと思ふのみにてぞありける、

〔守國公御傳記〕六、昔隋唐ノ樂、吾朝ニ渡リタル後、彼土ニ絶傳シテ、吾朝ニノミ存在セシガ、是モ朝

總テ舞ニ付タル事ハ、物ヲヨクキ、ミタル様ナレバ、師說カギリアリ、舊記ソムウチバ中々ニ心ヤスキ方モ侍リヌベシ、只御遊ノ作法カ、管絃式、講體ノ事ニ彈キ物アマタ侍コソ、ユ、シキ大事ニテ侍ナレ、其中ニモ女房管絃者ノ琵琶箏ヨリ、思モヨラズ樂ドモヲ曳キ出タレバ、樂カ催馬樂カ、ワキガタキ程ニ心マドヒテ、辭事付テ、ハデモカク事ニテ侍ナリ、サレバ稽古モアラハレ器量モ見ヘ侍ナリ、タバ管絃ヲコノモシト思テ、マジロヒタク思ハバ、耳ヲヨク聞テ、說々ヲウカメテ忠拍子ニ樂ヲ尋常ニ吹テ、音曲ニキ、ニクカラズツクベキナリ、但笛ノ催馬樂ハ絶ナリ、更ニ不可付之、但シ内々納涼ノ時ハ、風俗催馬樂モ取々付ルハサモアラマホシキ事ナリ、今バ梵音錫杖體ノ物ニモ付ゲニ候メレバ、ゾレタイノ付物ニテ侍ベキニヤ、指南シガタク侍、

口傳云、彈物吹物打物口トソヘタラン時ノ樂ノ次第ハ、延タル樂ハ一返乃至二返ニハスギズ、一返之時ハ未如拍子、二返之時ハ第二返之頭ヨリ加拍子、但一樣ナラズ樂ノ習ニヨルベシ、早キ樂モ第二返ノ頭ヨリ加拍子ヲ未スコシノコシテ、大鼓鉦鼓ハトマルベシ、次ニ笙トマル、次ニ鞀鼓、次ニ笛、次ニ筆、樂トマルリテ、樂一返ノ間、トコロ、吹物ヲタワヤカニ付ベシ、琵琶トマリテ、箏計ニテ一返シテ果ベキ也、一說云、打物吹物、物一度ニ不終ガ樂、任スト本更ニ云ヘリ、是ハサバズシテ、中々ニ日出ナリ、大旨之折節ニシタガキテ、當座ノ先達ノハカラヒニヨルベシ、此間聲歌アルベシ、當座ニイタレル人ノスル事ナリ、女房兒共ノ事ハシキノホカナリ、堂上ノ御遊ニハ、催馬樂ウタヒノス、堂下ノ聲歌ハ別ノ仰ヲカフリテ仕ナリ、以是爲本儀、ユルス所ハ青海波ノ詠聲歌ヲユルサル、體ハスベシトゾ、古老ハ口サレ侍シ、又云、方磬ノ有所ニハ鉦鼓ヲバトムベシ、同音ニテマギル、ユヘナリ、ソレモヲリフシニヨルベシ、凡御前御遊ニハ、打物ヲモチキズ、琴瑟堂上ニアリ、鐘鼓ハ庭ニアリ、コレニヨリテウチマカセテハ、忠ヒヤウシヲモチイラレケレドモ、堀川院ノ御時ヨリ樂拍子ヲバ、モチキラレテ候トカヤ、申傳タリ、

る也。○中略

又云、殿下おほせにいはく、當世に管絃のかぶと、すべき人おほかたなきなり、藤中納言定能こそぢうだいなり、かつは物よくなりひたる人なり、もともその人たるべけれども、無下に上手がらのなき人也、一日中宮御方にて御あそびありき、ひそかにきけば、かの卿云、のべたる樂は一返きうなる物は三返にてあるべしと云々、このやうおほきにうけざる事也、管絃と麻左とはかねてさだめ思べからず、時にのぞみてけうにいりて、いみじくけうすれど、けうなくなれば、これやりやくす、まからば自然をもしろき曲いできたならば數返もしてん、無興は一返にてもそのきよくのあるやうによるべき事也、かねてしきをつくること、もはら道をまらざるににたりと云々、このおほせもともまかるべし、

又云、管絃者は、その道の用にはかならずたてたんとおもふべき也、慶俊は最上品の笛吹也、まかに人のこのみちをもてあそぶ時、わざとにくげをたて、用にはかなはずとする也、よて無兼芳もそのう人にすぐれてもきこえざるなり、まかればとてところもきらはず、こちなきともがらをもえらばず、つらなるべきにあらず、かくのごとくのはからひ、きはめたる大事にてある也、

〔教調抄〕凡ソ管絃之事者、一道ノ習イ最トサタセヌ事ニテ、昔ハ侍ケレドモ、養父則房宿禰殊ニコノミテ沙汰セラレタルヨシ申サレ侍シヲ、コノモシク承リ侍リシ時ニ、予○近頃モ又少々アナグリ習ヒ申テ侍ナリ、但シ古ノ伶人タチハ、ヲウヤウノ舞ニ付タル事ト許ニテ、管絃ノ事ハサタセズ侍ケルヲ、今ノ樂人等ハ舞ニ付タル説々ヨリモ、中々ニアナグリサタシテ、才覺ヲアラハシテ、傍輩ヲ□サントイトナミアヒテ侍ヲバ、ブルメカシク御シマス、管絃者達ハ、昔ニハカハリユク樂所ノ作法カナ、サシモナクトモアリナン物ヲト難作ゲナリ、但人ノ能モ代々ニカハリゲニ侍ハ、コノモシト思テイトナム志モニクカラズゴソ侍レ、



てき、たび／＼やう／＼にきつてこそ、神妙にはひき給しか。

又云管絃者はまやうぞくをしつし、そのふるまひをしつすべきなり、樂人などはさたにおよばず、たゞ人の管絃の道にひかれて、ところ／＼にゆきて、放埒仕たるが多也、まかのごときなど申ならはれぬれば、一れつのやうになりて、漸々にあしきことになる也、物をこのむでは面目をただし、なをあげ身をたつる事こそはいなれ、あしくしければ、身も人ならずなりぬ、藝能もいやしくもちなされて、諸人に被笑、おこんの事也、これ等輩交衆之時は、某有れば其事はせさせてん、さに及ばすなど、かねてあてがはるゝは口おしき事也、すこぶるわづらはしきやうに、思なされて、我とこそつかまつるべからん事をもし、興にもいらぬ、させる樂人にもあらず、さうなくやすらかにせさすべきと思はるまじき也、人前にては、あいかまへて、みづから比巴持てたちゐることなどをば、のがれんと思へき也。

又云管絃者は、たちいづるより、よくしてんかしと見ゆべき也、二條院御時、御かんをかうふりて仰云、有安は事とおぼしき時さしいでたるに、かなしくしつと見ゆる也、このおほせまことにかたじけなし、故白河院御時、侍従大納言殿上に座せられけるに、中門のほどに、職事奏者などあまた參あつまりて、物さたあるに、はるかにかたかくれて、袖ばかりみゆる法師あり、大納言かしこにわづかにみゆる法師は、かならず管絃者とおぼゆるなり、袖によしある者也、諸人くわうりやうのすいりやうといへり、時にかの僧の名をたづぬるに、天王寺の俊賀上座と聞えたる筈ひき也、大納言おほきに自讃せらる云々、

又云管絃者は、よく／＼こゝろあるべき者也、筈比巴など、ゆめ／＼なめてつかふまつるべからず。○中略

又云管絃者はそのこゝろまことにすかすとも、好色をならふべき也、そのきよくもよくきこゆ

〔伊豫國田所注進田文〕臨時田 十四町二反六十步 略○中

樂人 舞人 六町

東舞 壹町 曲舞 壹町貳反 陵王 壹反 納曾利 貳反 加陪從 四反

蟠舞 四反半 鳥舞 四反半 陪從 壹町貳反 樂頭 壹町○中

樂所 卅九町三百步

東舞 三町七反大 曲舞 九町六反 加陪從 八反半 納曾利 二反

陵王 壹反 陪從 九町八反半 鳥舞 貳町壹反半 蟠舞 二町一反半

樂所別當 壹町 樂頭 二町○中

右注進如件

建長七年十月日

田所主允紀

〔胡琴教錄下〕雜口傳

又云、○備後前管絃者いとしもなきものにあいまじはる事を、あいかまへてのがるべき也、まか  
のごとき人に、一列に成立ぬれば、藝能もはいしれね身も漸々に放埒仕也、よく／＼用意すべし、  
もし又さがたくて交居たれども、うちとくべからず、如然の業物は、ひきよくなどは、おのづか  
らならひえたるを、かくなんとふきひく事のあるなり、たとひ主人のおほせなりとも、可然者わ  
すれたるよしを申て、與彼、不可合彈なり、何況於私所乎

師説云、管絃者は、このみて人の所作をきくべき也、善惡につけて、かならず心づきものをきくに  
ある也、よくするとおもへども、我所作をばほかにてはきかず、てもとすこしも、たちさりぬれば、  
異事なれば、樂攝合の遲速にもあれ、大撥小技のこじつにもあれ、きいてそのこゝろをうべき也、  
殿下に比巴さづけたてまつりし時は、攝合を彈給しには、その所をたちさりて、遠くてき、近く

代參に命せられまいりて拜謁す、この便りにつけて、女院より舞樂圖二卷、照高院道見法親王筆の額字を進らせ給ふ、

〔舞樂圖〕舞樂の圖の世に傳はるもの少からず、いと古きは教訓抄に引く所の唐舞の圖、これは當時絶えたる舞、或は雜戲の類、またさま／＼の樂器などありて、古きを探る助けにはなるべけれど、繪のさま草にして細やかならず、次に光長朝臣の屏風の繪は、まのあたりまひ出でたらむ如く、姿おもざしめさむる勢ひありて、猶力あまり意のゆくまゝに、舞の手衣のひだも式にかゝはらず、一きわありて、おかしけれど異様なり、中昔のものに、光信朝臣の圖は、舞の容より裝束の色目も委しく畫がきて、則となすべき者なれども、其數六十の半にもたらず、後の物に光起大夫の卷は、其圖多けれど、繪の様こまやかにて、舞の手衣のあやなど心より出たる所あらんかし、いと近き者に法眼元陳が寫せるかたは、御裝束いさゝかも差はじと寫し得たれど、多くは舞ひ出でざる所の容をゑがきたり、此外縁起畫の中、あるは三ひら四ひら、亦是七ひら八ひらなど、残れるもの無きにしもあらねど、備りたる者を見ずかゝるにおのれ幼きころ母に従ひて、年ごとに舞樂の場に詣でしより、物まなぶ年つもるにつき、此舞の圖いかで備へたしがなと思ひなりて、舞御覽にまいりては、いまだ寒き春風のさそへる雪をかざしの花の散るとみ、○中南都の祭に、春日の石坂の水にみがけるを、白玉の階かと怪み、かくしつゝ、近きは更なり、遠きも厭はず、年ごとに見めぐりて、つゆ洩さじと寫し取り、猶其道の人々に問ひ計りて、闕けたるを補ひ足らざるを畫がき、年頃を経て、こゝらの卷と成りたるを、こたび其中より、舞ごとに圖ひとつづゝ、寫しつらね、このゆゑよしをかいつけ侍りぬ、時は文化六年冬霜月、

高島千春

雜載

〔拾芥抄下末諸事吉凶見〕音樂吉日

甲辰 乙丑 丙辰 丁巳 天生人日也、利爲吉事也、

以呈安倍君、君大褒賞、乃特授大曲、奉時時年九歲、晨夕隨侍、及觀其事、然未識其書、而臨年亡伯沒矣、安倍君以是書供光格天皇乙覽、殊加歎感、嗚呼可謂榮及泉壤亡伯不死矣、其後十年、奉時侍讀於我王府、與安倍君相見談及是書、始得借觀焉、其書爲體立門分類、引彼徵我、考據精核、樂府之名色稱謂、瞭如指掌、夫樂家之書、亡慮數十種、雖或所帳秘者、如是書之簡而明、且悉者、蓋罕矣、抑皇朝之神樂東遊、備馬樂等用之、郊廟用之、宴饗而西土之樂存於我者、蓋傳於遣使隋唐之日、俗官世守其職、以迄於今、其歌詞雖失傳、三調尙存焉、在彼則五季以還、隋唐之樂泯焉漸滅、則我之所傳、卽支那上代之遺聲、而實非宋元諸儒所曾識者矣、方今奎運休明、文物粲然可徵、而樂家但講吹彈節族習其俯仰綴兆、而不必考究其典要、好古之士亦莫有稽及焉者、豈非一大憾事乎、然則是書之成、未必不無資於稽古之採擇、而蒙叔威也宜矣、安倍君曾使奉時、叙其事、諾而未果、今君齡已踰八袞、而亡伯墓木已拱矣、意者非奉時靡有悉其事者、乃不辭而述其概略云、亡伯名守中、字誠甫、小川其氏、尾張人以醫仕國老志水氏、

安政四年丁巳春王正月

華頂王府侍讀池內奉時拜撰

〔守國公御傳記〕宗武卿既ニ樂曲考數十卷ヲ著述シ玉ヒテ復古ノ道ハ詳カナレドモ、古代ノ法則存セザルヲ歎キ玉ヒテ、古樂書數十部ヲ悉ク抄錄シ、舞管鼓絃雅俗ノ樂ヨリ朝廷ノ行事、臨時ノ祭式、遊宴ノ類ニ至ルマデ門部ヲ分チ撰バシメ玉フ、此企ハ文化三年、在城中ニ命ゼラレテ、稿本已ニ成リ、猶指紳家ノ記錄ヨリ、當時行ハル、所ノ事實ヲモ加ヘントテ、致仕ノ後、檜山成德ニ命ゼラレ、過半抄錄ノ功ヲ竣シニ、文政十一年ノ火災ニ、稿本ト共ニ燒亡ス、是ニ於テ再ビ成德ト加治胤禎ニ、編集ヲ命ゼラレ、已ニ二百卷計脱稿ニ及ベリ、此書初ハ爲樂大成、成樂類編、樂典ナド呼玉ヒシガ、未ダ定名ナクシテ長逝シ玉フ

〔嚴有院殿御實紀〕三十四、寛文七年三月廿五日、女院○後水尾后東附野々山肥前守兼吉、日光山の



嘉祿三年六月六日旦記畢

音樂生數位藤原孝道在判

〔教訓抄〕

子

○近真竹馬ニムチヲ打手車ニノリシ程ヨリ母達ノ方ニハ因縁子細侍間伶樂家ニマ

ジロヒ侍シカバ

○中略

曾祖父ガ記錄ヲ傳得テ尤嫡家ノ流タリ而齡既ニ六旬ニミチナムトス

凡古老無雙人々ニ多年ノ間ソヒタマワリ侍シカバ舞樂ニ付各口傳物語ハソノカミウ

ケタマハリシカドモミタモチナカリケルミノクチヲシサハミナワスレ侍スラメドモ子カ

クレ候ナムノチハメクラノ杖ヲウシナヒタルガゴトクニテ天ノウラミモ侍スラムスエノ世

ニミルヤウニ侍トキニモシ心エルハシトモナレカシトテ十卷ヲツクリテ教訓抄ト名タリコ

レヲヨク見ヲボエテ譜ヲミルベシ

〔伯氏系圖〕

一者二年

近真從五上

實光眞弟也始作荒序譜仁治三年五月廿五死六十六

〔樂家錄〕

五十

夫雖本朝之樂曲其傳久而未失其統是幸依歷世之先達詳秘譜也竊聞西域震旦既其

道絕之以是愚恐後世失其道故嘗至子所奏之曲或舊記之諸說樂器之制法矣其大意今筆略之爲

五十卷終焉私自名之樂家錄矣惟識此道之人見之若有取而正之云爾

元祿第三臘月

正四位下行飛騨守安倍季尙書

〔騎蘭臺集〕

二稿

四樂書序

吾國爲樂也即古樂也自六朝至唐漸傳諸吾國而彼已亡矣今獨存吾國好古國也統也好樂久矣名

山所藏古樂書多有得之比考古調已明故爲後世亡失此調記以傳焉凡秘而不傳我國風也是以亡

絕亦多可惜甚矣統也不爲秘乃憂亡也雖然又何輕焉傳不上堂人乎統自弱冠至四十六七年未見

入其室者非郊衛之音也今伶人等能者多矣然亦同好古志故風雅略失

〔歌舞品目〕

中

歌舞品目十卷奉時亡伯敬所君所纂也亡伯深喜音律從雅樂助安倍君學焉君職世伶

官嘗慨樂府名目之湮晦有志纂修適屬亡伯代纂也亡伯苦思積年以成是書文政壬午歲携之入京

〔龍鳴抄<sup>上</sup>食調〕鶴徳<sup>○中</sup>

頼吉がわたふといふ物ある也、土御門の大納言殿より富家殿<sup>○藤原</sup>に奉らる、天下より當院<sup>鳥羽</sup>にたてまつらる、譜にあるなり、

〔梁塵秘抄<sup>下</sup>〕此本は妙音院入道殿<sup>○藤原</sup>御本歟、而法性寺禪定殿下<sup>○藤原</sup>御邊、年來御日記に相具して被取置之由、傳承者也、而二條中將經定朝臣預置之間、彼羽林又依爲雜曲之弟子、密々借寄て書寫之也、

寛元四年八月廿一日送給之、同廿二日書寫之、

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕長承二年五月日

散位大神在判

龍のないてうみにいりにしに、またこのこゑをきかばやと、こひわびしほどに、竹をうちきりてふきたり、こゑにたりき、はじめはあないつゝをゑりたりき、のちになつになす、是が故に笛をば龍鳴といふ、また龍吟ともかく、をなじ心なり、抄といふ事は譜の名なり、もろゝの抄出といふことは、要しをゑるいたるふみを云なり、上巻といふは、呂をば上巻とす、律をば下巻とするなり、仍外題に龍鳴抄上巻目錄とかきしなり、

○按ズルニ、本書ハ唐樂及ビ高麗樂ニ屬スル樂曲ノ事ヲ記セリ、

〔管絃音義〕夫管絃者万物之祖也、竈、天地於絲竹之間、和陰陽於律呂之裏、執闢闔緊那同、鼗、鼗、物人倫等感、而石、金、竹、絲、雖分其響、調之併以風、管、琴、瑟、鼓、吹、似異其曲、本之咸以龍笛、仍且就中笛圖、明調子名義、其首尾相合一卷、名之曰管絃音義<sup>○中</sup>、于時文治元年仲冬二十三日、北山隱倫涼金草之、

〔雅秘別錄〕女房などはあらでも事かくまじけれども、をのづからさありし者の子なれば、心にくがりてとふ人あらばとて、せうく常ならぬことを思ひいつるに従ひてゑるし申、本文にかぎりあることはいふにおよばす、<sup>○中</sup>

卷之下 琵琶彈時用意 晴所作 樂屋琵琶 彈玄上用意 琵琶寶物 琵琶名所等二十四條、  
每卷目錄あり、毎條裏書を奥にゑるせり、孝道云とあり、○中

樂譜要錄 寫本 十五卷

卷之一より卷之七まで横笛譜 卷之八より卷之十まで風笙譜 卷之十一より卷之十三まで  
篳篥譜 卷之十四箏譜 卷之十五琵琶譜

卷末に從四位下遠江守兼宿禰昌名撰とゑるせり、奥書に云、享保九甲辰年春二月淨寫了、○中 又  
云、右三管二絃譜依家々之傳本、選之内有疑者疑曲暫闕之、以三方集會議定之上、可追加者也、

〔續日本紀十二〕天平七年四月辛亥、入唐留學生從八位下上道朝臣眞備獻、○中 樂書要錄十卷、○下

〔元享釋書十六〕釋永忠、京兆人、性秋篠氏、實龜之初、入唐留學、延曆之季、隨使歸涉經論、解音律、善攝威

儀、齋戒無缺、桓武帝勅主梵釋寺、弘仁七年四月滅、歲七十四、遺表上唐所得律呂旋宮圖、日月圖各二  
卷、律管十二枚、塤一枚、

〔本朝續文粹八〕管絃譜序

參議從三位行左近衛權中將藤原朝臣宗輔

夫樂者德之華也、非聽其鏗鏘而已、是以聖人之治天下、正律呂以辨四序、順陰陽以和五聲、雅頌之道  
絲之興焉、太上天皇○中 取俗之時、娼賁謝韻、虞琴讓薰、雖遜尊位於汾水之陽、猶傳德音於咸池之曲、  
玉樓春宴、妙管調落梅之風、綺閣秋遊、繁絃撫幽蘭之露、於是聽覽之餘、勅臣而曰、世之所傳絲竹譜等、  
或師說廢以徒存其名、或秘說絕以多失其操、興廢繼絕、非汝誰乎、宜抽衆本、勒爲一家、小臣敢奉、數賢  
殊譽、愚忠、考殿最於鍾銖之間、通旦忘寢、決是非於毫毛之末、涉年竟功、彼祭祀饗射之禮、登降飢饉之  
儀、專奏音聲、必關供奉之者、定彼從此、悉皆抄出、凡厥篇目、具載于左矣、大唐本朝高麗林邑樂譜等也、  
上可以勸天地、感神祇、下可以厚人倫、導風俗、邦國之用、蓋在於斯者歟、臣平章忝任、郎將備員、職同蔡  
邕、久持陸載之節、才異吳札、更感官懸之音、敢課管窺、略舉綱領云爾、

卷第十二 角調柱次第 箏絃口傳事等

此書第一卷より第十一卷までは曲調の譜本にして、絃の名一二三四五六七八九十斗爲巾を以てあるせり。○中略

五重序 寫本 一卷

管絃の書にして、演主の作なるよしあるせり。五重は毛皮肉骨髓の五なり云々、書中貞保親王記を引り、奥書に云、元祿四辛未歲十一月中旬、從五位下右近衛將曹大秦廣富書寫畢、

鳴鳳集 寫本 一卷

作者つまびらかならず 大唐樂圖 釋名、白虎通、說文、潘岳笙譜等の說、古善吹笙者 渡本朝

事 笙 箏 築 笛 高麗笛調子 琵琶和琴打琴等々の調 撥合名 東遊 踏歌名 催馬樂 樂

器名物 吹笙次第 始習笙事 付物事 十種供養伽陀事 朗詠事 御遊事 秘事 調子音

取等の事をあるす

體源抄 寫本 二十卷

豐原統秋

豐原の姓を字の旁にとりて、體源と名づけたる也、奥書に云、豐原統秋判云々、磧磯集に云、豐原樂

人統秋 豐筑後正 位下 正 といふものあり、かたじけなくも後柏原院の御師範たり、又歌道も無手ならず、

道遙院實隆公の高弟なり、風流のものにて隱者なり云々、○中略 昔傳拾葉に曰、○中略 近來樂道の達

者豐原朝臣統秋といふもの、亂世に生れながら、ふるき反故をあつめて、樂器の來歴を明して一

家に傳ふ、それを體源抄と名づく、其書につまびらかなり云々、

胡琴教錄 寫本 二卷 琵琶の書なり、かなにてあるせり、

卷之上 教學琵琶 取撥 差柱 撥音 諸調子品 十二律調 樂曲 催馬樂 師傳相承等

十五條



シ、是亦上ニミヘタル孝道ノ撰ナルベシ、木師ト云フコトハ、芳野吉水院樂書ニマヽミヘテ、コノ木工頭ヲ斥スノ辭トキコユ、以テ徵トスベシ、殘夜抄一卷、是亦前人ノ撰トミヘタリ、木師抄ニイヘル所ト符ヲ合セタルガ如クニシテ、琵琶ノ七徽ノコトヲ記シタルガ、二書ノコトハ相同キラ以テミルベシ、樂臣類聚一卷、誰人ノ撰トモ知ルベカラズ、コレハ一ノ成書ニアラズ、尊卑分脈中ニ於テ抄錄シタル者トミヘタリ、好事ノ者ノシワザナルベシ、

〔群書一覽<sup>五</sup>仁智要錄<sup>寫本</sup> 十二卷

藤原師長

等曲の書なり、卷首に太政大臣從一位藤原朝臣師長撰とあるせり、

首卷 等案譜法 絃名 右手 左手

卷第一 調子品 壹越調 沙陀調 平調 大食調等

卷第二 催馬樂<sup>律</sup> 高砂 夏引 貫川 東屋 走井等

卷第三 催馬樂下<sup>呂歌</sup> 安名尊 新年 梅枝 櫻人等

卷第四 壹越調曲上 皇帝破陣樂 春鶯囀 玉樹後庭花等

卷第五 壹越調曲下 胡飲酒 河曲子 北庭樂等

卷第六 平調曲 三臺鹽 皇座 萬歲樂等

卷第七 大食調曲 散手破陣樂 武昌樂 打毬樂等

卷第八 雙調曲 春庭樂 柳花苑 黃鐘調曲 小調曲等

卷第九 盤涉調曲 蘇合香 萬秋樂 秋風樂等

卷第十 同下

卷第十一 高麗曲上 新島蘇 古島蘇等

類箏治要、全部十六卷、太秦昌名跋文アリ、曰、全七冊古傳之樂曲、諸家之秘說、悉輯錄之、按據此書中語、皇朝八十九代龜山帝御宇弘長以後之作、彈箏之秘蘊實在、此書可秘可秘ト記セリ、而其撰何人ノ手ニ出ルコトヲイワズ、今按ズルニ、此編ハ中御門家相傳ノ書ナルニヤ、其徵スベキ者ハ、彼書壹越調、溢金樂ノ條下ニ云、藝祖大納言宗俊、笛譜ニ云ト、藝祖トハ其家ノ子孫タル人ノ祖先ヲ斥スノ辭ナリ、ソモ宗俊卿ハ堀川大納言ト稱シテ、世ニ名ヲ得タマヒシヤンゴトナキ管絃者ナリ、笛ハ王暨物類吉ニ傳ヘ抄、源笙ハ豐原時元ニ傳ヘテ其秘蘊ヲ竭シ古事、總ジテ樂ノ故實ニ明達セラレシトイヘリ、胡琴箏ハ父右大臣俊家公ヨリ相傳シテ、猶五節命婦ニ學ビ、又院禪ガ説ヲ受ケタマヒシトミヘタリ、葉然シテコレヲ其家ニ傳ヘタマヒシコトハ、秦箏血脈ニミヘタリ、又荒序相承次第ヲ考フレバ、荒序ハ其祖父堀川右大臣賴宗公ヨリ次第相傳シ、侍從宗有卿マデ連綿セリ、然レバ此撰モ其家ノ子孫タル人ノ筆記ナルコト明カナリ、又其第四卷ヲ考フレバ、云予自嘉禎之昔日、至弘長之今時、未拋此藝、故作其圖而已ト云ニ據レバ、參議宗尹卿其子宗雄卿ノ筆記セラル、所ナルニヤ、又其奥書ニハ、永仁二年六月、當卷手自點之、云老云病、以雖不耐其骨、於樂曲爲奧秘之間加點者也、但有僻事之以後、本書點了、但於順々次第者、聊有續改事ト云ヒ、又永仁四年ノ奥書ヲ載セタルニ據レバ、其增補セシ所ハ、宗冬宗有兩卿ノ手ニナリシニヤ、略○中

八音抄一卷、古ク傳ヘタル琵琶八面ノ事ヲ具サニ記錄シテ、猶琵琶製作ノ事ヲ載セタリ、群書類從ニコレヲ載セテ、其撰者ヲイワズ、今按ズルニ、書中師子丸ノ傍註ニ私物トアリ、承久中御琵琶合ニ、狛犬ハ孝定琵琶也、本名ハ獅子丸云々、孝道造、改此琵琶、仍其音事外ニ心ツヨクナレリトミヘタルニ據リテ考フレバ、尾張守藤原孝道ノ撰ナルコト明カナリ、琵琶血脈ニ、妙音院相國原○藤長ノ御弟子ノヨシミヘタリ、

木師抄一卷、樂ノ故實ヲアラト記セリ、今按ズルニ、木師ト云フモノハ、木工頭ヲ云フナルベ

梨園舊風一卷

東遊笛譜一卷

梁塵秘抄廿卷

龍吟抄

三五要略

原師長（藤原師長）

三五要錄十二卷

仁智要錄

仁智要略

糸管抄十卷

抄御殘夜抄

類聚樂錄

類聚箏譜

三五中錄十二卷

宜陽殿

竹譜

南竹譜

長竹譜

懷中譜

風俗譜二卷

催馬樂譜同

神樂譜二卷

〔仙洞御文書目錄〕一丙御文車

杉櫃

一合

一合

一合

御手箱一合

黑漆御手宮一合

〔樂家錄〕

三五要錄

胡絃要錄

風管

仁智要錄

三五要錄

胡絃要錄

風管

抄室

息每譜

蘆聲抄

蘆管譜

蘆管

集譜

竹譜

絲竹譜

南宮譜

南宮

仕之

懷竹譜

絲竹譜

南宮譜

南宮

也譜

長竹譜

絲竹譜

南宮譜

南宮

胡琴教錄

懷竹譜

絲竹譜

南宮譜

南宮

新夜鶴抄

殘夜抄

續教訓抄

體源抄

體源抄

右外雖有抄物略之

〔歌傳雜譜〕樂書撰者

得シ者、コ、ニ記シテ他日ノ參考ニ備フ、

云、此外未考之、

沙門

天台山慈覺大師承和年中入日藏上人、朱金剛國子也、自天、婆羅門僧正自天竺青海波、俗號、著歌萬、和樂者、東大寺實沙門佛哲、俗號、拔頭傳來、俗號見于上、未、忠和尙傳來云々、沙門佛哲詳之已上三人天慶比之人乎、

右四人自異朝、傳來之人也

興福寺僧圓賢笛、僧仁命笛、南都笙正院佛性吹笙、豐原明還已講、笛、廣澤僧正寬朝笛、同僧正實朝集

興福寺尾張得業圖憲、同淨觀坊同儀操、大安寺僧行教和尙、同安操法師已上五人所作

〔類聚國史七十七〕、弘仁十年七月甲辰、正六位上上村主乙守、授從五位下、乙守之男豐田麻呂、善蟬歌、

天皇悅之、授從五位下、豐田麻呂讓父、

天長五年二月癸丑、從三位藤原朝臣繼彥薨云々、性聰敏、有識度、尤精星曆、亦熟絃管、雖三爵之後、曲

誤必願之、七年十一月庚辰、散位從三位藤原朝臣眞夏薨云々、性有飭詞、隨時容身、音樂之間、能盡

其妙、大同初、預大嘗會所、造千功之標、調八佾之舞、可謂大樂之貴、從此而起者也、

〔文德實錄四〕、仁壽二年六月乙卯、相摸權守從四位下橘朝臣眞直卒、中、眞直性善唱歌、仁明天皇殊

所憐愛也、

〔三代實錄七〕、貞觀五年正月三日丙寅、大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定基中、定基長於

深宮之內、未嘗知世俗之難、居家之事、無所經問、往來溫雅、愛好音樂、家庭常置鼓鐘、退公之後、必令事

而觀之、

〔神皇正統記堀河〕、此御門和漢の才まし／＼けり、ことに管絃、郢曲舞樂のかたあきらかにましま

す、

〔本朝書籍目録〕管絃

樂書



後二條關白（藤原師通）

大臣

信大臣（比巴） 西宮左大臣（源高明）

花蘭左大臣（源有仁）

本院左大臣（藤原時平）

小一條左大臣

（藤原師尹） 大宮左大臣（後家）

一條左大臣（雅信）

六條左大臣（源重信）

中院左大臣（室賴）

常左大

臣（實宗） 實宗公（比巴）

太政大臣（公繼）

太政大臣（公相）

久我太政大臣（巴）

久我太政大臣（巴）

〔樂家錄（四十）〕武臣神職醫師沙門修音樂之舊例（略）

武臣

攝津守源賴光（多田滿仲）

將軍伊豫守源賴義（延豐）

將軍左馬權頭源義家（賴義）

部必源義光（賴義）

刑部卿平忠盛（前樂師）

內大臣平宗盛（後見）

鉦鼓之役見焉

中納言平經盛（前）

三位中將平重衡（巴）

從三位平通盛（前）

薩摩守平忠度（前）

三位中將平經正（比）

敦盛（前）

淡路守平清名（前）

侍從平忠房（和）

佐藤四郎兵衛忠信（前）

二階堂能登守知藤

征夷將軍源尊氏（前）

左馬頭源基氏（前）

左兵衛督源義將（前）

征夷將軍源義滿（前）

征夷將軍源義量（前）

征夷將軍源義教（前）

征夷將軍源義持（前）

神主

權神主津守經國同長盛同修理亮國助（前）

少輔國久（前）

鴨社司祐泰（前）

同祐賴（前）

體源鈔曰醫師之法上師聞聲中師見色下師診脈知病故醫師雅忠者習琵琶能彈之是爲知音也云

〔二〕中歷一十三管絃人 貞保時中 忠房博雅 雅信重信 寛朝淨藏 定方實資 朝成助信  
公任雙調 信義信明 馬助遠理 爲光致光 長能至光 濟政資通 敦貞經季 信賴蟬丸  
院禪

說云貞保親王南宮 大納言時中 大和守忠房 博雅三位 一條左大臣雅信 六條右大臣

重信 廣澤僧正寛朝 定額淨藏 三條右大臣定方 小野宮右大臣實資 朝成卿 助信中

將 四條大納言公任 博雅太郎 雙調君 同二郎信義 同二郎信明 馬助入道 若狹守

遠理 山城守爲光 致光 長能 至光 濟政三位 兵部卿大貳資通 式部卿敦貞親王

少納言經季 民部大輔信賴信義 會坂蟬丸者 西院供奉院禪室

〔體源抄十一上〕帝王管絃御沙汰之事 次第不同

聖武天皇等 小松天皇光華 仁明天皇和琴 文德天皇笛 嵯峨天皇 清和天皇比巴 宇多

天皇等比巴 延喜龜等 村上等比巴 一條笛 堀川笛室 鳥羽笛 二條比巴 高倉笛 後

鳥羽比巴 持明院法皇比巴 新院今中院後サカノ御子 承和仁明 本院比巴

親王

致平親王室 隱君子琴 泰明親王等 敦實親王笛 貞保親王比巴 高明親王比巴 重明親

王等

女房

光明皇后等 延長公主同 右子命婦 小一條女御等 齋院女御同 五節命婦同 石川命婦

同 兵衛命婦笛 馬內侍比巴

攝籙

昭宣公藤原基 清慎公藤原實 後宇治加足院藤原忠實 京極藤原師 猪熊藤原家 月輪藤原兼

右者雖爲秘曲依懸望難默止今般以家父之例所令相傳于源利長他傳他言者勿論雖爲一子堅不可有直傳者也

文政八

岡村——殿

〔狛近德日記〕文化十三丙子歲六月四日子

一尾州熱田神職大原吉大夫若山仁大夫外二今度入門有之候磯部伊織鏡味殿雄等書狀到來並誓狀差越之

誓狀之事

一今度舞曲依神用御許容之儀相願候處則預御相傳辱奉存候

一御相傳之舞曲御倉略存間敷候事

一於狼席不可舞樂奏候事

一雖爲一子全直傳仕間敷候事

右之條々於相背は日本大小之神祇可蒙御罰者也仍誓狀如件

文化十三年子四月

辻下野守殿

辻豐前守殿

尾州熱田神職

鏡味殿雄

眞常列

〔樂家錄四十八〕古昔閉樂曲秘譜則下必敷賣者也近世漸以用紙者爲善矣古人敬道重物近世人不信而輕物故自無堪能之人也凡賣之制以竹作之其竹大五釐許圓削之以紅絲或紫絲編之其制大抵如簾而四方以錦緣之其大隨于譜也

從——  
正——  
判 判

ズ、タ、ハ、人ニシタガヒテ、尋モ問ベキヤ、カヤウノ事中々ニワキマヘタキ也、能々案ベシ、

〔親長卿記〕文明十六年三月廿八日、今日於禁裏有御樂云々始有曲甘州、只去應永廿八年之後無之、

今度若年之輩、俄相傳云々頭辨前同傳受、景益條々巨細不及注、後聞參仕之輩內雖令傳受、猶有不

達所作之輩云々、

〔宗綱卿記〕文明十七年九月廿二日、筑後守參、今度御樂來廿八日御治定云々、蘇合急三反說可有之云々、仍御傳受、此次急入之說ツイトラリノ說三ヶ條具申入、

〔樂書〕蘇合香

右一具第四帖第五帖只拍子等說々、所授與櫻町圖書頭秀正舉、

元和三年七月十七日

太上天皇花押

〔大猷院殿御實紀三十〕寛永十五年二月二日、京伶辻伯耆、久保丹後、園左兵衛、日光山伶に樂曲相

傳せしとて、銀卅枚時服二づ、給ふ、

〔狛近信日記〕文政八年乙酉十一月廿二日

一尾州東照宮樂役舞入門、先達而頼來候ニ付、傳授狀相認差下ス、

傳授狀之事

左方舞曲依戀望難默止、今般以家父之例、所令相傳于源利長、狠他言不可有之者也、

文政八年乙酉五月

從五位上右近衛將監狛宿禰近信判  
正五位下左近衛將監兼豐前守狛宿禰則是判

岡村大吉殿○中

傳

振鉞 散手 陵王



くばさづけまいらすべきよし奏し給ければ、申旨にたがふべからずと勅定有て、兩説ながら傳  
させ給ひてげり、嘉承貳年、崩御の後、右府人々にたれか彼曲習ひ給はりたると尋られけれ共習  
まいらせたる人なかりけり、おとれる説をも猶秘せさせ給けるにこそとて、悲涙をながされけ  
り、中御門内大臣、子息大納言宗家卿、外孫同宗能卿に授られたりけり、六波羅の太政入道、○平盛  
島の内侍につたふべきよし、宗家卿に示されければ、歎ながら世にまたがふならひ力およびで、  
おとる説を傳へられけり、但他人に教べからざる由を、まづ起請をぞかゝせられける、

〔教訓抄〕四日記云、保延六年十月十日、行則始光時舞習安摩渡機、散手破二返、青海波傳受了、

天養元年二月十二日、狛行則ハ光時ガ許ニ來テ、央宮樂ヲ桃李仁安二年比花ノ舞樣、春庭樂ノ秘説等ヲ習タ

リ、眞嫡男則近多年ノ間、光近ニ心ザシヲハコピテ、玉樹讀切秦王劍鋒切、青海波其體文ソレ詠習在注家ソレ

ヨリサキニハ、嫡家ノ外如此ノ曲シラヌ事ニテ侍シナリ、而ルニ文治平等院一切經會ニ、近衛殿

下御出アリシニ、則近一者ニテ青海波ノ詠仕タリケレバ、殿下左樂屋ノ行事、某ニテ有御尋云、汝

家ニハ青海波ノ詠ハ無相傳由、者ヨリ聞食置處ニ、誰人ニ習ジヤ、可申相傳、被仰下タリシニ、更ニ

申ノブル方ハナクテ、傳テ候ト許ツブヤイテケル、光近ガ相傳トモ、サスガニ申上テ閉口シテソ侍ケル、マシテ其以下ノ輩

ノ行貞季時達事ハオシハカルベシ、秘事秘曲名ヲダニモシラヌ體ドモナリ、以一ヲ可知、万多氏

舞人ハ紀氏ノ右舞ヲ習繼タリ、同節近ハ父近久ヲヲキナガラ、多景節ニ習同好氏好繼ハ父好節

ノ存生ノ時清原助成ニ舞ヲ習タリ、是皆世間ノ沙汰可尋、無人ノ中ニモ左右如此侍リ、樂人ノ中

ニモ、サルト偽タリ、樂ニ付申ベシ、コレラハ習ベキ父祖父ニソヒナガラ、他人ニ物ヲ習ハ口惜事

也、但諸道皆便宜ニヨルコトナレバ、トモカクテモ侍ヌベシ、

又狛光近ガ妹女ノ舞ノ料ニ、大神是光ニ皇慶、五常樂習タリシヤ、多好方ガ央集近元ト申シ物ニ、

還城樂ヲ習タルト申サレキ、コレラ體ノ人ノイタレルハナンスル人モナシ、又ワロクモキコヘ

五宇多天皇號孝子院、聖豐原、成秋、等、和理巴、御師範未考、

六村上天皇、聖豐原、有秋、同公、御師範未考、大石

七三條院官、宗國、納

七鳥羽院官、三條、內大臣、公、教、公、一本、京、

八高倉院官、實國、納

九伏見院號、持明院、未考、巴

三後二條院範、御師、未考、

九後光嚴院範、御師、未考、

一百後小松院聖、豐原

六後奈良院聖、豐原

九法皇水、後

一百一後光明院公、事、理、四、痛、辻

十三今上天皇聖、元、等、四、辻、公、

右天子下、爲、御、師、範、凡、此、中、十、一、人、乎、

十六醍醐天皇號、延喜帝、延巴、等、御師範未考、

六一條院範、御師、範未考、

七二條院範、御師、範未考、

八後鳥羽院號、順德院、範、御師、範未考、

二後伏見院範、御師、範未考、

九後醍醐天皇範、御師、範未考、

一百一後圓融院聖、豐原

二百稱光院聖、豐原

八後陽成院

一百本院女帝、明正、等、四、辻

十二新院範、御師、範未考、

〔中右記〕永長二年元○承徳閏正月四日、巳時許、正四位下行内藏頭兼備中守源朝臣政長卒、年六

是故播磨三位濟政孫、故參議資通三男、母故賴光朝臣女也、後冷泉院御宇初聽昇殿、經近衛少將民部輔後任、若狹任中濟公文任次第、任備中、兼内藏頭、今爲内并院殿上人、傳累代之業、長管絃之道、寛治元年以來爲當時御師、常近龍顔河○而從去年勢邪氣、今日遂逝、哀哉、

〔古今著聞集卷六管絃歌舞〕殿上の其駒は知たる人すくなし、略○中堀河院中御門右大臣宗忠藤原にならはせ給ける時申されけるは、一説は誠に思召人あらばおしへさせ給て、今一説は教へ給ふまじ

を開き見て、必ずかの時を思出て、餘優心に浮ぶなり、

〔三内口決〕一馬太刀進物事

樂道部曲等傳受候時、又有此禮、

〔三代實錄〕

清十五

貞觀十年閏十二月廿八日丁巳、左大臣正二位源朝臣信實、信朝臣者嵯峨太上天皇

之子、源氏第一郎也、

略中

太上天皇親自教習吹笛、鼓琴、彈琵琶等之伎、思之所涉、究其微旨、

〔三代實錄〕

開成四十一

元慶六年三月廿七日己巳、天皇於清涼殿設酒宴、慶賀皇太后、

也、

略中

親王公卿皆悉侍宴、雅樂寮陳鼓鑼、童子十八人遞出、舞殿前、先宴二十許日、擇取五位以上子

有容貌者、於左兵衛府習舞也、

〔禁秘御抄〕御侍讀事

堀川院御宇、樂人清任奉授笛、天曆御宇、

上村

秀高例也、但如此管絃地下御師匠尤無由、同御宇多忠

方近方等給神樂曲、是不令絕家之故也、別儀、歟、管絃一條院十一歲、圓融院被傳申、然大貳高遠爲御

師範、其後近例、堀川院御笛、

備中守

鳥羽院御笛、

太政大臣

後白川院催馬樂、

實賢

今樣、

遊女

二條院琵琶

少將高倉院御笛、

大納言

院、

鳥羽

御笛、

實教

予、

順琵琶、定輔

〔樂家錄〕御師範之例

夫樂者、協邦國和神人、故本邦自古使置雅樂寮、掌之、然音樂本聖人所作、有養性去欲之德、故雖天子

亦自修之、洎其始習之時、必召樂家之中、其業精者師之、

地下樂家以音樂爲

是、是本邦一故實也、古來地

下之輩、多候于師範之例、今略記之如左、其間闕不記者、家記不全故也、

人王四聖武天皇

御師範

未考

四仁明天皇

深草中

御師範、

未考

五清和天皇

御師範

未考

五嵯峨天皇

御師範

未考

五文德天皇

御師範

未考

五光孝天皇

御師範

未考

六清和天皇

御師範

未考

五嵯峨天皇

御師範

未考

五文德天皇

御師範

未考

五光孝天皇

御師範

未考

五嵯峨天皇

御師範

未考

五文德天皇

御師範

未考

次万歳樂只拍子也、始三句許吹之、次主上同詞被遊之御器、而後龍秋退出云々、

後小松院御笙之始、明德三年十一月三日、御師範豐原量秋藏人左少辨宣俊御奉行也、主上出御于

朝餉、次室町殿著座、宣俊卷御簾半許乎、而後召量秋、參進于軒廊衣冠座、而室町殿被氣色、先平調音取、

次万歳樂只拍子也、三手吹之、次主上同詞被遊之御器太、而後量秋退出云々、

寛文第十戊戌年四月廿八日甲寅、今上皇帝十六歲御笛始出、御于小御所東面、不搦、御師範南都樂人上

越後守狛近豐正五位下、襲著衣冠於樂屋、至于已下、刻著于庇敷敷座、而後吹平調音取、次万歳樂拍子以

吹止之、次主上同詞被遊之取無音、而近豐降庇之後、六位藏人持御太刀授之、樂所奉行四辻少將季

輔朝臣、季輔朝臣著于階、本給之近豐、而後召于御玄關、賜黃金壹枚、畢服部備後守役之

私曰、狛氏樂人御師範之例是始也、自是前柳原右中辨實聚朝臣、蘇少將綱章朝臣、皆續笛于近豐、而此兩人復奉授于主上、由是召近豐爲御師範乎、

〔樂家錄二十七傳名〕授口傳之時、乞神文之說

或曰、音樂之道爲君子之所作矣、本邦樂工至授口傳、乞神文者何也、曰、神文者、此道不可疎、亦口傳之

品、不可爲筆記之制禁也、所以其然、口傳之品々、流布乎世、則雖初聞之人、知其傳然、則止于此、而無勵、

是已、而終不知至極乎樂工之害在于此也、宜哉、古人之制禁、皆有故焉、愚聞記曰、南宮譜序曰、物以秘

爲貴、故待價深藏、音以希見、重故待人傳云々、又妙音院入道殿授小調於花山院兼雅公之時、以銀作

龜而甲上積金、爲蓬萊山之體、被進于寶枕云々、近世有相傳之事、雖弟乞之、不輒契之、令重積日步矣、

又當授之期、弟必厚贈重禮、亦是古之遺法也、

〔胡琴教錄上〕教學琵琶

又云、師初め師説をうくる時、必ずよき日を用ふべし、秘曲を傳へうけんことに於ては、名ある

日を用ゆべき也、いはゆる八月十五夜、九月十三夜、をよび七夕、端午、重陽、曲水宴等の日、以師自筆

之書譜、又記年月日、其下に加判べし、或は私に記さん時の天氣、これすなはち年月をへて後、これ



知之乎、蓋是幼稚之時、專傳樂曲耳、而音樂之全體不語之咎乎、所謂失多在笛、簞、篳、可受師說焉、

傳授

○按ズルニ、音樂上ノ秘事甚ダ多シ、宜シク神樂、催馬樂、唐樂、樂曲、及ビ樂器篇等ヲ參看スベシ、

〔禁秘御抄〕一諸藝能事

第一御學問也、時第二管絃、延喜天曆以後、大略不絕事也、必可通一曲、圓融一條、吉例ニテ、今笛代御能也、和奉又延喜天曆吉例、箏同之、琵琶雖無殊例、可然事也、笙、簞、篳、未聞、笙後三條院學給、簞、篳不相應事也、音曲上古有例、堀川院內侍所御神樂之時、別有此音曲、鳥羽後白河御備馬樂、雖不窮其曲、已晴御所作云々、又後白川今樣無比類御事也、何モ只可在御心、笛、堀川鳥羽高倉法皇代々不絕事也、但箏、琵琶何劣哉、

〔樂家錄四十七〕始習之曲

天子者始習用萬歲樂、高記曰、先只拍子、手計、授之、舊記曰、古聖王時、鳳皇來儀而呼聖王、萬歲乃摸其聲作萬歲樂、因此曲爲天子習樂之始曲云々、今按文獻通考曰、鳥歌萬歲樂、舞唐武太后所造也、當此時宮中養鳥能人言、又常稱萬歲、故爲樂以象之云々、

諸家者始習用五常樂、急、舊記曰、此曲象仁義禮智信之德制之、故又名禮義樂、以爲始習之曲云々、

御師範之略式

後圓融院御笙始、永和元年八月廿八日、御師範豐原信秋、信秋者自勤之、故英秋、扶持之、今所作之云々、主上出御于朝餉、

藏人右少辨俊任參進卷御簾、次中御門宰相宗泰卿著座、而後召信秋、中御門宰相、于氣色、藏人、辨仰之、藏人、永行而召之、參

進于軒廊、衣冠打板上、數、著座、次英秋著座、衣冠、信秋、來、座著、圖座、而中御門宗泰卿氣色于信秋、又信秋氣色于英秋、先

奏平調音、取子九次萬歲樂、只拍子也、始、吹之、次主上同曲同詞三句被遊之、御器生、而後信秋英秋退出、

後光嚴院御笙始、延文三年八月十四日、御師範豐原龍秋、藏人左兵衛佐嗣房御奉行也、主上出御于

朝餉、而嗣房卷御簾、次一條中納言參進著座御前、次龍秋參上于軒廊、衣冠、打板上、數、著座、而後先平調音取、

也。皇靡曲本中曲也。然準于大曲者。皇帝團亂旋之二曲。傳樂譜相傳之統絕焉。自是以來。以萬秋樂皇靡之二曲足其數。用之四箇曲也。最萬秋樂素樂曲灌頂而重焉。

### 絃管各秘曲之名

鳳笙爲秘曲者。調子也。其中以大食調之入調爲最。一焉。

華篳爲秘曲者。小調子。臨調子二曲也。常就小調臨調。而不呼字也。

橫笛爲秘曲者。獅子伎樂二曲也。

箏爲秘曲者。搔調子。由賀見調子。千金調子三曲也。

琵琶爲秘曲者。石上流泉。楊真操啄木之四曲也。

### 鼓類秘傳之曲

羯鼓爲秘傳者。八聲及亂拍子等也。

太鼓爲秘傳者。荒序。蘇莫者之序也。

鉦鼓未考。

### 輕重有之口傳之說

凡三管傳習之次第。先習唱歌。次拍子擊法。或道譜法。既至于吹管者。音取調子。樂曲吹品。息入律聲可。否。是等初聞之傳習也。然所作成而後不再曉之。則不可。至于其關矣。蓋是等之中有口傳。積功久則自可知之矣。每管之口傳者可難曉之乎。其傳皆純粹之中純粹而不易口傳也。○中略

### 音樂全體口傳

音樂律聲大意於律十二之中。取五聲用之。其五聲之座位。一律相去與二律相去有之。蓋一律相去則聲和。隔二律則音節遠不知也。故加二變聲以用七聲。而各令隔一律。故其聲不奪倫。如玉貫矣。是樂聲自然之妙也。或曰。今世樂工之長足所作故也。舉言雖上古何驗之乎。然間亦有失全體乎。其失初學得

皆ユルスモノ也構テ是マデト思ベシ、略中  
絃管秘曲

笛ノ秘書ニハ、皇帝團亂旋獅子荒序、以上四ノ秘曲也、コノナカニ獅子ヲ以テ、最秘事トス、笙秘曲ニハ平調ノ入調、太食調ノ入調、箏、篳篥ニハ臨調子、小調子、琵琶ニハ石上、流泉、啄木、楊真操、是ヲ胡渭州ノ三曲トハ云也、箏ニハ撥調、由加見調子、千金調子、是等ヲ最秘スル也、古人云、琵琶ノ手ヲバ皆第ニウツシヒカルレド、啄木ヲバエヒカズ、箏ノ撥調ヲヒクコトナシ、是等第一ノ秘曲ナルガ故ニ、昔ハ凡十二ノ調子アリケレドモ、其曲ツタヘタルモノ、髓ナラズ、孝博ガ習ニハ七ノ調子ツタヘタリ、林歌加利夜須ノ柱ヲバ、太食調ノ調ヲ以テ彈也、秘事ニテアリ、其故ハ狛壹越調ノ時ハ、箏ヲ太食調ノシラベニテヒク也、其柱ヲバタテナラサズ、彈ヲ以テ秘事ニスル也、其口傳ニハ、以九合爲、爲ノ絃ヲスコシサゲ斗ノ絃十ノ絃ニツガヒ、爲ノ絃ヲ斗ノ絃トツガヒタマフ也、是體ノ秘事ヲ書ツクル事ハナケレドモ、書付ヲクモノ也、普通ニハ平調ノ柱ニ立テコソヒクトコソイヘリ、

〔樂家錄口傳名十七說〕三管總爲秘事樂曲

凡三管總稱秘事之類者、奉庭樂、只拍子之中當子六羯鼓之說、蘇合急返三返之說、萬秋樂一帖奏二返之說、輪臺青海波之吹渡矣、此餘可推類而知焉、

三管總爲秘說曲

稱秘說之曲者、萬秋樂六帖只拍子之說、陪臚五節樂拍子之說、甘州只拍子、喜春樂只拍子、蘇合四帖只拍子、萬歲樂只拍子二返之說、此餘可推類而知焉、此中稱三管只拍子曲者、蘇合四帖、甘州、喜春樂之三曲也、

三管總爲口傳曲

稱秘傳之曲者、皇帝團亂旋、春爲囀蘇合、已上爲之四箇大曲、萬秋樂、皇座總六曲也、蓋此中萬秋樂、本準于大曲

〔律疏〕八唐

かたじけなくめでたし、關白殿大おとゞ、左大臣、内大臣、みな傳供にまたがはせ給ふ、宗明樂秋風樂を奏して、くり返したるほど、おもしろき事、身の毛だつばかりなり、御前の御遊には、笙は公藤通賴房、名宗雅、笛は長雅、師親、相保、篳篥は實成、朝臣、光顯、御琵琶は新院、今出川、中納言實兼、富小路公成、箏は大納言の二位殿、院のうへ、このごろ又なき御めしうど、故入道相國の御女とぞ聞えし、又刑部卿中宮の御母、少納言、新兵衛男には、良教の大納言などぞひかれける。○下略

七日不孝謂

○中略 居父母喪、身自嫁娶者、作樂。○中略 八曰不義謂。○中略 聞大夫喪、不舉哀、若作樂、

○按ズルニ喪中音樂ヲ停止セシムル事ハ、禮式部天皇服喪篇及ビ服紀篇等ニ散見セリ、

〔書言字考節用集九〕秘曲

〔殘夜抄〕第十物を秘すべき様は、べちにいかにをひすべし、ひすまじといふ事は、今はじめて申べきにあらねども、なべては比巴には三曲と申、その中にも啄木といひ、箏には水調調子、ゆかふ調子、かくてうしのおくのひせち、笙には大食調の入調、篳篥には小調子、笙には皇帝、團亂旋、師子、荒序など、なべて申、此外は猶奥ふかき樂、催馬樂など申は、なべての事なれば、きゝをよびて、誰も申めれども、中々細々の事に秘すべき事おほし、何よりは我道々の口傳こそよく、秘すべしとぞおぼゆれ、又同物なれど、あまねく人のまゐりたる秘事よりは、さしもなき事のなかに、人のいときゝをよぶ事、能々秘すべし、又我道ならぬ事をも、その中の秘事をきゝをよびたらん、事秘すべし、人の事をあさくすれば、我道もかろくなる、蘇合、万秋樂などにも秘事ありげに申めり、かやうの事は申さば、つきすまじければとゞめつ、

〔蘇竹口傳〕箏ノ絃張次第○中略

樂ノ中ニ四ヶ大事ト云ハ、蘇合、万秋樂、皇帝、團亂旋是也、其餘ノ秘事ト云ハ、コレダニモ傳ヌレバ



〔法勝寺供養記〕承暦元年十二月十八日甲午、被供養白河御願寺、○中略說法勝寺前一日、○中略庭前南構舞臺、舞臺四角立龍頭、懸綵幡壇上東西各并立五間絹屋、○中略爲左右樂屋、○中略當日、○中略天皇入御西大門之間、雅樂寮著門外、○中略奏音樂經講堂後、就御出御座所、次進物所供御膳、次左右樂人發亂聲、○中略已刻、天皇親腰輿、遶御金堂、○中略此間船樂、○中略宸儀著御座、次公卿已下、著堂前座、此間亂聲、○中略各一節、又師子出臥舞臺、巽坤、次吹調子、○中略一行事、鐘式部彈正相分參入、雅樂寮率樂人、集立僧集會所、○中略下發音樂、○中略安樂、○中略新僧侶到座前立、○中略打金鼓、○中略發音樂、○中略十樂、次伽陵頻八人、胡蝶八人、菩薩十六人、各捧供花、二行相分經舞臺上、到御堂壇下、傳授於僧、○中略止、伽陵頻胡蝶、次第著舞臺上、草壁先發樂、菩薩供舞、次伽陵頻供舞、畢打金鼓、樂人發樂、○中略散花發音之時、樂人發樂、○中略東西相對、○中略定者、散花引頭、○中略諸衆、○中略衆僧等出了之時、加錫杖衆末、樂人先列立東西樂屋前、衆僧著座訖、○中略樂人入樂屋、次打金鼓、樂人發樂、○中略讚衆起座、登舞臺唱讚、○中略又樂止、先東寺、次天台、立唱了、又發音聲、○中略讚衆復座、○中略次打金鼓、樂人發樂、○中略一弄樂、梵音起座、登舞臺唱梵音、○中略誦了亦音聲、○中略酒胡于、退歸如前、次打金鼓、樂人發樂、○中略鳥向樂、錫杖衆起座、昇舞臺供錫杖、○中略畢、又發音聲、○中略柱退歸如初、○中略導師呪願降高座、樂人發樂、○中略新古明樂、就禮盤禮佛退出、樂人省寮相引退、如入儀、次打金鼓、左右互奏樂、○中略左高陵、○中略右胡蝶、○中略新蘇利、○中略日景已暮、夜漏屢移、○中略下

〔増鏡七野の雪〕四月四年、廿三日より院のうへへ、○中略嵯峨は、又龜山殿にて御如法經あそばす、女院もか、せおはしましけり、五月廿三日、十種供養の御經二部、淨土の三部經もか、せ給へり、齋會の御ありさまはつねよりもなをいみじ、○中略盤涉調の調子を吹て、天童二人玉の幡をさ、げて、傳供ども次第にたてまつる程、鳥向樂を吹出したり、中島に樂屋はかざられたれば、橋のうへを樂人つらねてまいる程、院のうへも、いひでさせ給ひて、傳供に立くは、らせおはします御さまいと

振鈴 小兒四人舞

按摩 小兒面舞

雞冠 小兒四人舞

拔頭 大人一人面舞

破魔弓 小兒四人舞

兒納曾利 小兒二人面舞

能拔頭 大人一人面舞

花籠 小兒四人舞

大納曾利 大人二人舞

太平樂 小兒四人舞

陵王<sup>退出</sup> 大人一人舞

小兒は大抵十三四歳計の者を撰び集め、大人も例年舞覺えたる者皆其一月も前より天津社の拜殿にて、毎日拍子合せをする事なり、舞の手今様の事をまじへず、昔より習ひ傳へたるまゝ、を律儀に守り來れる事ゆゑに、其古雅なる事甚し、何れの頃より始れる事にやと、所の人に尋しかど、さだかに知る人なし、三四百年前暫く斷絶せしに、此あたりの老婆一人舞の手を覺え居て、中興せしといふ、三都の地繁華の所は、物事時々の盛衰ありて、殊に花街柳巷のはやり事に移され、新奇の事に走るゆゑ、大内の外には古雅なる事稀なり、是等の祭禮を、好古の士に見せまほしく覺へし。

○按ズルニ、神事ニ樂舞ヲ行フ事ハ、神祇部ニ散見セリ、

〔殘夜抄〕大法會、これ又女房の身いかにてもありぬべし、されど見物などの爲にきて、をろくきき置くべきにや、事と、のひてやうに隨て、其所へ行幸御幸、もしは長吏などいらせ給へば、左右樂屋亂聲して、後又亂聲して、舞人梓をふる、まづ左、次右、次左右あはせふる、これをば薙舞ともいふ、又三切の亂聲ともいふ、其後師子こまいの舞事もあり、菩薩、そりこあり、又鳥蝶もまふ、所に隨ひてやうくあり、法會の舞とてあり、又供養の舞とも云、それはて、後に、入調と名けて、安摩二舞とて有、其後の舞は何にても思々に、期に臨時に隨てあんめり、常樂會、放生會、天王寺、仁和寺の舍利會、醍醐櫻會、此等皆同體なるにとりて、常樂會は日本國第一の大法會、次には八幡の放生會也。

かへし、惠美須社の前にてまた樂を奏し、大鳥居の内へ漕いれ、亂聲を奏し、舌先并に客人社のまへにてまた奏樂伽陀あり、その後大元浦にいたりても奏樂伽陀ありて、終に御船を御池にかへす、この夜府下より御供船とて百餘艘をいだし、御船の行儀に隨ひて進退す、其粧ひ甚壯麗にし、舌端筆頭の盡すべきにあらず、およそ二階屋形、舳屋形を作り、金銀をちりばめ、珠玉を飾り、錦の上幕綾の水幕、紅紫水上に翻り、燈花波間に漂ふ、比しも六月の暑き空ながら、涼風徐に來りて、萬人夏をおぼえず、或は舳に碇おろし、或は舳に棹さして、祭儀を拜見せんとするもの、海上に充滿して舳舳相吻けり、實に海西の大祭當社の勝事なり、六月間あれば後の十七夜、神前にて管絃あり、俗にこれを居管絃といふ。○下

〔甲子夜話四十三〕修驗行智上京ノ還路、尾州ニ知ルベアリテ滯留ス、ソノ間見聞セシ事ヲ唱セシヲ書トム。○中

名古屋ノ三九ニ神祖ノ御靈屋アリ、ソノ東ニ天王社アリ、爰ヲ天王房、權限房ト云、四月十六日ニハ、神祖ノ御宮ノ前ニテ舞樂アリ、廻廊アリテ尤美麗ナリ、御宮ノ邊勾陳、騰蛇四神ノ旗ヲ立、御門ノ外西ノ側ニ帷ヲ設テ樂屋トス、舞樂ハ振鐺、狛杵、陵王、奈曾利ナリ、

〔東遊記後編四〕舞樂

我國を神國といふ事、ゆゑなきにあらず、世間すべての事の古風残れるは、多くは祭に見ゆ、殊に邊鄙田舎は、物事質朴にして、其氏神などの祭禮といふもの最古雅なる事多し、越後國糸魚川に、彼地にて一の宮と稱する宮あり、實は一の宮にはあらず、天津社といふなり、毎年三月十日祭禮なり、此祭小兒の舞といふ事あり、是を見るに皆古樂なり、舞の面、抔古物多し、横笛太鼓を以てはやす事なり、音律に不拘、拍子計にて邊鄙の聲甚野調なり、舞はふつゝかならず、雅樂の趣あり、例年十二曲を奏す、この曲名、

日、晝神事如例、樂所奏音樂（録述調）

四日、御神事如例、自今日者、樂所不參也、先規之上者勿論也、

十一日、今日旬御神事如例、

○中略

樂所奏音樂、仍二御殿旬直會、下行樂所畢、廿一日、今日旬御神事

如例、

○中略

音樂等如先々、

〔御湯殿の上の日記〕慶長三年十月三日、ならのがく人しゆ、春日の御まへにて、ぶがくし參らせ候よし申候て、くわんじゆ、柿一折進上申がく奉行日ろう、白銀五まいくださる、

〔嚴島圖會五〕祭禮并年中行事禱祀故事

正月○中略

二日、巳刻兩宮御供、式元日の如し、大宮にて萬歳樂、延喜樂等の舞樂あり、○中略

同日○中略

三日、兩宮御供、式前の如し、太平樂、拍鼓、胡德樂、陵王、納蘇利等の舞樂あり、○中略

五日、禁裏御祈禱、

一に天下御祈禱といふ、寅刻上卿已下諸祠官内侍等出仕、兩宮に於て神樂及び供僧の勤行あり、

また振棒、甘州林歌、拔頭、逗城樂、長慶子等の舞樂あり、○中略

十七日、管絃講、

一に十七夜講と稱す、大宮御前に於て、供僧は終日法華經を誦讀し、俗人は樂を奏す、甘州、五常樂、

皇慶、太平樂、鶴德樂なり、十二月十七日には客人宮にて行へり、○中略

六月○中略 十七日、夜船管絃、

十六日の夜、御船三艘を御池にならべ、座をつらね、竹にて藩を結び、屋形を作り、さまざまの彩花燈籠を懸く、これを御舟組といふ、十七日申の刻、大鳥居の正面より乗出す、諸祠官座主供僧各裝束をなし、御船に候す、水主十四人、烏帽子素袍袴にて、その行儀最嚴重なり、是を御船みなふね泛といふ、かくて俗官樂を奏し、衆僧伽陀を唱へ、地御前に押渡り、大建石の邊にて燈を舉ぐ、それより外宮鳥居の内に御船をいれ、樂を奏し、伽陀を引く、その後御船を廻らし、中流にて奏樂讀經して長濱に



東儀華人祐季蕃 山中內藏助景富 東儀將曹元鳳 多縫殿助忠彬 東儀越中守季城

余紀伊宰相齊順卿西壘緣著陣○中五位朝散大夫從序列座大樹內府公坐給予上段田安中納言

齊匡卿以下著坐于御後廣橋胤定卿甘露寺國長卿冷泉爲調卿一之間東面著坐有端疊之嫌其故德

大寺實堅卿四辻公萬卿同公說卿綾小路俊資卿同有長卿持明院基延卿一之間西面著坐花園實

路朝臣南內緣著坐上段捲給御簾公卿殿上人地下各拜伏中興小姓大岡土佐守忠雄持髭進置

實堅卿之前國部因幡守長富持和琴進置公萬卿之前渡邊甲斐守輝綱持等進置公說卿之前小笠

原長門守長恒持等進置有長卿之前中興番大澤主馬位豐持髭進置實路朝臣之前中興小姓與

緣○中深皆自東端殿歷南內緣入一之間膝行退如式之實堅卿之琵琶進置實路朝臣之前中興小姓與

不熱觀聞人而記耳

呂雙調調子無御遊之音取不如其故

穴尊 鳥破只拍子

席田 鳥急殘樂

胡飲酒德永德元年之度當

律平調調子

萬歲樂只拍子

伊勢海 五常樂

音頭 安倍季良 豐文秋 山井基壽

殘樂 窪近義 奧好古 林廣好

呂律之間有中立微樂器稍有故云々樂畢而微絃如出時同朋微俗人之焙爐此間紅藥山之俗人退

後席上賜祿各有差○中

此裏上段垂給御簾公卿以下祿懸肩退去公卿殿上人者板賜餐于各所及慶賀謝思之樣如常儀故

略歸邸迄黃昏挑燭之時凡今日之儀可謂千秋一遇珍重々々萬人之美談也何究余筆端耳四日御

答五日饗宴如常

〔明應六年記〕正月一日晝神事如例樂所奏音樂壹越調 二日晝御神事如例樂所奏音樂平調 三

柳營管絃之次第

文政六年癸未三月二日、於柳營有堂上管絃之事、去年壬午三月一日、轉任于大樹○德川從一位左大臣、右大將公○德川內大臣、備府並任大臣、自鎌倉以來所未聞也、於是遵鹿苑院殿○足利之故事、被賜大饗御遊之口云々前月二十八日、勅使院使并管絃之公卿殿上人及伶人到著饗客館如例、三月朔日被聞食勅談、二日管絃也、前日紀伊宰相齊順卿、田安中納言齊匡卿、同右衛門督高莊卿、一橋兵部卿齊禮卿、清水式部卿齊明卿、賜直衣予○德川亦預之、命曰、近日於營中有管絃、宜著此衣、依而賜御物且冠、以吉可著御召之繁紋、旨被仰下之、紀伊大納言治實卿、尾張中納言齊朝卿、依在食國可有追賜之由、早旦出邸、雨頻降、道路苦土泥、辰刻登城、紀伊宰相齊順卿共參入畢、已刻勅使院使管絃之人、令參殿、即時被行儀式○中大樹內府公坐給于黑書院上段○中花園美作權介實路朝臣出坐、高家披露各退、廣間東端殿著陣、此間雅樂人廣間南廣緣昇階、列居四位五位各束帶、三管用發家緒、不似晴之御遊、無用之例、不知其故、

京方

笙 多近江守忠堅

笛

山井伊豫守景和

笙

多大和守久敬

笙

安倍玄番權介季良

笙 安倍肥後守季隨

同

安倍大隅守季德

笙

豐隱岐守文秋

笛

山井左近將曹基壽

南都方

笙 窪甲斐守近義

笛

奥丹波守好古

同

上右近將盛近興

同

辻左近將盛高舉

笙 辻豐前守則是

天王寺方

笙 林日向守廣好

同

藺淡路守廣勝

同

林奎助廣濟

笙

東儀出雲守季邑

紅葉山方



まん殿の御座の間の御簾をあぐ。○中 宰相中將いりあやの程はしの間をすぎて退き、かへる時  
季貞を御使にてめしかへさる、よて更にすゝみ舞前關白殿西の御簾のもとにて祿をかづけら  
る。○中 いさ、か一曲を舞て、勅祿を葛榮につたふ。○中 次に源中納言探桑老を舞、おなじく祿を  
かづけらる。○中 八日、法水院のまへの御つばにて、又にはかに舞御覽あり、景繁うけ給て、そりは  
しより東に樂屋をまうけて幔をひく、蘇合一具、けふは四帖のたゞ拍子あり、地久賀殿、長保樂、太  
平樂、新秣耜などあり、舞人土御門宰相中將家房朝臣、季真右に久經、久利、久脩、久藤など也、けふは  
源中納言胡飲酒をまふ、中將教宗藏人清藤康統おほせをうけ給はりて、三度のめしあり、舞おは  
りて祿をたまはる。○下

〔聚樂第行幸記〕暮はつる儘に、○天正十六年四月十四日、おほとなぶらか、げそへて、御遊とぞき  
こえける、

御人數十四五人、一番五常樂、二番郢曲、三番太平樂、

一さうのこと 御所作、其外一條殿、四辻前大納言庭田中納言、四辻中將、飛鳥井中將五人、

一琵琶 伏見殿、菊亭右府同三位中將三人、一笙、大炊御門大納言

一笛 伯三位、五辻左馬頭兩人、

一郢曲 四辻前大納言、持明院中納言、也 五辻左馬頭三人、

德是北辰椿葉陰、二改尊尚南面松花色、十回此句を朗讀し給ふ也、色々の調の中について、主上の

御つま音、こと更にこそきこえけれ、○中

四日め十七日

舞御覽

一番萬歲樂 二番延喜樂 三番太平樂 四番拍梓 五番陵王 六番納蘇利 七番探桑老



若ハヒキモセバ、今一反セヨト心ヘテ、猶一反ヒクモノ也。

〔木師抄〕管絃著座次第

琵琶、箏、和琴、笙、横笛、但行道時、竽、篳篥、方響、羯鼓、鉦鼓、一鼓、二鼓、三鼓、

〔舞御覽記〕行幸は三月○元德三年三日ときこえしが、先中宮行啓にて夜あけて四日の朝ぞ行幸○醍醐

行幸藤原公宗第はなり侍し、その日は前の右のおほひまうちぎみなどまいらせ給て、左少辨宗兼朝臣

におほせて、樂屋の料理などせらる、舞は五日ときこえき、康保二年の花のえんに同日に侍れば、

かの例をうつされけるにや、されどその日は雨くだりて、舞はとゞまりぬ、北殿の小五月の御所

へなりて御習禮あり、少納言少將家房朝臣東帯につばやなくひおひてまふ御所は御比巴あそ

ばさる、宗兼朝臣もちて參前右おとゞこれをとりにて、御まへにまいらせらる、比巴大納言二位殿

前右のおとゞ笛景光、景朝、景茂室宗兼、兼秋筆兼茂政つかふまつる、等治部卿播磨内侍たかさこ

と聞ゆ、地下の舞人北のおちひさしのうへにこうず、御樂万歳樂、地久、太平樂、拍子、嘉殿長保樂、甘

州、林歌、陵王、落蹲、このうち万歳樂、嘉殿、甘州をぞ家房朝臣まひける、二條前殿侍從中納言、御子左

中納言著座なり、○中六日辰時に集會の亂聲、巳時にことはじまる、玄ん殿のはしの間を御所の

間とす、○中地下の樂人は、御はしの西の高欄のきは、猫垣に候ず、景光、脩秋、兼秋、宗秋、龍秋、景朝、景

茂、則秋、茂政、末景、茂光とぞきこえし、樂屋には舞人ばかり祇候す、左には季真、行政、光榮、康真、真仲、

葛榮、行重、近榮、諸葛、右には忠有、久春、忠脩、久經、忠良、久俊、忠右、久脩、久藤、忠春なり、○中まひは万歳

樂よりはしまりて、納蘇利まで十五帖に侍しやらむ、そのうちいづれの曲も、常の事に侍れば、め

にもたゝず、青海波は物語のおもかげも思いでられて、ことにめとまり侍き、○中春日もやうや

うくれかゝるほどなれば、舞の次第をみだりて、まづ陵王をさきだてらる、荒序のゆへなるべし、

源宰相中將たちて、御念誦堂にて裝束をあらためて、樂屋にわたる、そのあひだ左少辨宗兼參て、

皇太后宮大夫宗能卿通稱先□□新大納言伊通琵琶左兵衛督重通卿等禪閣之歷公卿座前進  
御所、彈開顯委不、此之、事未、在實子、先日、彈公、仰曰、有稱、雙調、之調、非常、呂調、是格、曲也、今度、可  
彈、未、聞、老、頗、可、招、囑、因、之、不、出、和、琴、新、大、納、言、伊、通、卿、笛、權、大、納、言、宗、輔、卿、先、日、申、請、院、御、笛、甘、竹、插、之、甚、已、笙、左、大、將、雅、定、卿、子、子、面、辭、等、策、兵、部、丞、藤、原、賴、方、絲、竹、興、欲、終、賜、予、長、原、以下、祿、祿、上、四、位、五、位、取、之、公、卿、起、座、

〔源平盛衰記 三十二〕福原管絃講事

二位殿○平清盛 又人々ニ被仰ケルハ、此福原ハ故入道大相國○清ノサシモ愛シ給シ所也、魂魄  
モ定テ此ニコソ住給フラメ、今夜バカリノ遺也、ナリ西海ニ出ナン後ニハ、再ビ愛ヲ見ン事モ有難シ、  
亡魂モ如何計カハ哀ニ思召ラン、且ハ最後ノ別也、且ハ最後ノ弔也、入道ノ爲ニ管絃講行給テ、後  
生ヲ弔給ヘト被仰ケレバ、大臣殿尤可然トテ、先故禪門ノ墓所被參、○中御所ニ歸、佛懸奉ナン  
シテ、管絃講ヲ被始ケリ、右衛門督清宗、讃岐中將時實ハ簫ノ役、薩摩守忠度、越前三位通盛ハ笛役、  
左中將清經、淡路守清房ハ笙ノ役、和琴ハ丹後侍從忠房、羯鼓ハ若狹守經俊、鉦鼓ハ平大納言時忠、  
方磬ハ平中納言教盛、太鼓ハ内大臣宗盛、琴ニ挺琵琶三面、簾中ノ役、辨局大納言佐殿ハ琴普賢寺  
殿北政所帥佐殿内侍局ハ琵琶ノ役、法勝寺執行能圓、中納言律師忠快ハ伽陀ノ役、經滿坊阿闍梨  
祐圓ハ式役、二位僧都仙尋ハ法華經、タエ、ニコソヨマレケレ、

〔絲竹口傳〕管絃講之陸次第

先大鼓、次ニ羯鼓、次ニ笙、次ニ横笛、次ニ篳篥、次ニ琵琶、次ニ箏也、是ハカシマシキ物ヨリトバメ  
テ、次第二面白クヤサシキ物ヲ殘シテ、遊ブナラヒ也、笙モアマタアリ、笛モ數多シテ吹キ、彈物  
數多アルニハ、初心ノ者ヨリトバメハジムルナリ、箏モ數多アラバ、上手一兩人ニ殘シアツル  
ベシ、兒女房ナンドヒカバ、ツレヘモテナシアツルベシ、サレバ箏ハ易カラズ、大事ノ物也、能々  
沙汰有ベキモノ也、モシヒキヤマンドセントテ、篳篥ニテモ、笛ニテモ、琵琶ニテモ、樂ノ末ヲ吹、

方仁和樂、次左占飲酒也。先發亂聲，其後議奏廣橋前亞相有命，藏人一腦大江俊幹降殿上。人下戶  
四第一同引，引，青色袍束帶如常不執，筭路頭向引，繫著一邊西經神仙無名等門，出弓場殿第三間，經舞臺西向右樂屋南行，經右樂

屋前舞臺後等東行當左樂屋中央間程巽面立定樂屋北凡小舍人所衆各一人自殿上小庭路頭

從行口居其後小舍人山科從五位下紀伊守正甫在右方所築結城從五位上筑後守秀延在左方

各著衣冠單左靴鼓人近壽宿禰宿甲斐守自樂屋越溝進出勅使前其間五尺藏人跪突片左微音仰云

胡飲酒速久、其酩酊、伶人平伏、藏人仰了左廻經本路歸入昇殿、伶人出長樂門傳仰舞人後復座

舞人有動盪之此間左樂屋吹亂聲不休次舞人忠職多上野介舞胡飲酒了初出亂聲舞舞了次取次舞先序次吹

破六反之間有舞人退入，先是議奏同卿，於便所渡給祿物，白褂一領，藏人二，隔丹波賴望執之，受命經

西南簀子進出南階上。添西欄柳向裝居引見舞人退入目之。舞人卽經舞臺東參進砌下。一兩手舞

之藏人見舞人進來離舞臺頃起添西欄降階先右足每級如此不壓自下五六級之時斜降兩三級

到下第二級、中央行會被之舞人、亦砌下舞手了自階東端斜昇、第二級相跪給之、瘰人被祿於舞人

右肩了，懸凡被肩者，爲已下，有執物者，必懸無執物，肩故左肩也，左肩以左手緣下，倨添西欄昇階退入

先左足、每級、舞人給祿降階出砌下、又有舞手、且舞且拜、退入云々、但此體不見及、

殿上鋪設之事、兼日榜頭均光朝臣有命、卯半刻出納小舍人所衆各一人出仕奉仕之、出納職厚依

所勞不參代小舍人生靜如常著束帶小舍人正甫所衆秀延各著衣冠單出仕是可從勅使也

久安三年三月廿七日庚寅今日高陽院攝政具賀禪閣○藤原七十算、廿八日辛申、殿上

立持參御遊具次敷召人座於南階西砌外東上北面件座築地地下堪管絃者參著此座華人正清

清定、武部、丞、原、達、信、吳、郡、即、街、重、役、股、勤、同、前、叔、于、大、攝、政、被、仰、可、召、皇、太、后、宮、權、亮、爲、通

臣備後守資賢朝臣上總守季兼朝臣之由爲通資賢郎參候公卿座末邊季兼今日不參云令同被

武藏守季行朝臣又不參因地下召人方賴吹簫簾次奏呂律樂先雙調阿名律席田美作鳥養兼賀歌

大日本國志卷之六十五



例年舞御覽正月十七日也。此舞樂昨夜諸於清涼殿之前奏之。凡其定式舞臺隔御殿東階之前三間

許構之。四面此處就腰庭大率用數舞臺也。用高舞臺圖在舞臺舞初樂屋自舞臺三間許退構之。西面

間許深四間許。但前一間中許為衣紋之座。後二間中許為舞人裝束處。以原樂屋之前引幔交紐赤黑

爪紋。左樂屋座上羯鼓末太鼓鉦鼓構之。右座上三之鼓構之。太鼓鉦鼓同左。用高舞臺則用大太鼓。左

右樂屋之前立鉦。自樂屋外邊過三尺許內去樂屋之前四尺許而立。及刻限而出御于清涼殿月卿者

著座于御魂之間。自始提。翠客著座于長橋而揭樂屋之幔。樂所各平伏。此時於數舞臺之上。有鶴鹿丁

有之。高橋大。而後樂處奉行著于階之南端簀子。而自懷中被出舞樂目錄。于時左右笛頭出樂屋二行

進經舞臺上參向昇階半受之。下。口。未。鞋。先左方受之。而置之末。樂行。事上退立。但未廣不開也。右方

授之也。受。而經本道歸于樂屋授之上首。上首披之次第傳拜覽之。至于頭取笛工取留之畢而奏舞樂

先左右同音集會亂聲。次振梓三節。次舞樂五番或七番也。舞樂終左右同音奏長慶子一返。以為退出

音聲。此音聲間入奏畢垂幔。樂人退散。而後賜天酒於樂屋也。

〔大江俊矩公私雜日記〕寬政十年正月十九日甲申舞御覽也。辰刻參勤。一鴈二鴈卯半刻參勤。若束帶

也。四鴈依便宜同刻參入。一鴈二鴈參仕扈議奏。

一今日舞樂有胡飲酒催促使。一鴈大江俊幹舞人給祿。二鴈丹波賴望等。兼日奉仰。各束帶參勤。先有

內見。廣橋前亞相諷諫其餘議奏各於南殿有指揮云々。

一四辻黃門。公高。息羽林公。殿朝臣。等各有申合樂所窪甲妻守。方隔鼓。多上野介。忠順。胡。飲。等皆立

會有內見云々。進退之儀。見。與。樂所進退覺悟書。四辻羽林被為見。一鴈亦進退備忘書為心得。進。四辻入。一

覽。進退書亦各。見。與。○中略。

一直渡御南殿南廂簾中御座。出御之儀。女房沙汰為內々。機。但於此殿有樂舞被始。南庭中央。機。設。舞

大鼓。承明門內左右。四辻羽林於南階上給目錄於伶人。後先發音聲。次左右振鉦了。左方賀王恩。右



伯二位子、益秋朝臣、筆篋橘以緒笛音頭源中納言景長等口等御所作、四辻前大納言、鷲尾前中納言

季達、太鼓景通等也、目錄平調萬歲樂、只拍子三臺急樂三反、笙笛二位、藤篋、五常樂急、太平樂急、

而殘樂口云、小娘子、老君子殘樂、笙前、白、朗詠、通達、慶德次撤器口先之起座、

〔御湯殿の上の日記〕慶長三年七月廿八日、あす、れんしの舞あるべしとて、がく人ども老ゆらいさせらるゝ、くろ戸のまへにてあり、廿九日、くろ戸の前にてれんしのまいあり、六つがいあり、左は萬ざいらく、ばとう、太平樂げんざやうらく、りうわう、かんしう、右ゑんぎらく、りんか、きとく、こまぼこ、なつそり、長はうらく也、ちやうけいしにてたいしゆつ申なら天王寺きやうのがく人ども廿四人まいる、三百疋づゝたふふしみの、八條どの、どんげゐんどのなる、十月三日、ならの樂人しゆ、春日の御まへにてぶがくし參らせ候よし申候て、くわんじゆ柿一折進上申、がく奉行ひろう、白銀五まい下さるゝ、

〔難波宗建卿記〕享保十四年九月廿六日、申云、明年堂上輩舞樂可有御覽之旨有御沙汰、堅固内々之義也、於當時者久無其沙汰、後水尾院御賀之時有之歟、其様可有如何哉、殿仰云、於堂上之輩舞樂之、先石清水臨時祭是也、其他御賀之時多有之、於舞人者可爲殿上人所作人之座、古來多爲庭上、或構樂屋、今度於御覽者、尹宮定可有所作歟、於然者庭上如何、内々依有此御沙汰、被勸之處難知者也、左右大臣於堂上被彈箏之事有所見、若可被准之歟、於執柄親王者未得所見、或公卿絃之輩悉可爲堂上居、且地下樂人相交之事可有如何哉、此事於勸得者、早速内々可奏之由也、

〔後水尾院當時年中行事正上〕十七日、舞御覽あり、清凉殿東庭左右の樂屋をかまふ、ひさしに翠簾かけわたして御見物所とす、中樂所奉行二人舞の目六を持って東階に望む、左右の樂人二人階下に進みて、目六を給りて退く、振舞三折等常のごとし、宮門跡攝家方見物に參る、

年始舞御覽

〔樂家錄四十七〕年始舞御覽、樂屋等圖

等役之、氏直置器奉行起座授目録於上首即退歸錄道狹不置器次第披見之後地下輩令見之、然

後置音頭之人前、次御笙被遊調子之頭、次各應之、二句之末、筆策音取、次笛、次比巴等如常調子了、樂

次第奏之、郎君子之後朗詠二反如恒、音樂了從下、騰器物撤之後、自下、騰起座、花山院、菊亭、西園寺等、

可被候御前之由、有仰、仍參進被候、議定所、北方東上、三獻參、御陪膳帥中納言、手長右中辨秀房朝臣、

○註 親王御方中務卿宮等御前同、花山院以下言口重親、宗藤朝臣、範久、範遠等役之、此間堂上於鬼

間各勸盃如常、地下輩於、御前三獻之度、帥中納言爲酌有召於臣下、遠近共參進、了入御各退出、今日

御樂無事珍重之由、以奉行各申入了、每年花山院申沙汰也、當年依有外樣申沙汰、今日無其儀、從御

所沙汰也、仍不及數獻、○錄狀

〔言繼卿記〕享祿五年○天文七月三日、從禁裏七夕御樂、御目錄可書進之由、被仰出候間、書進候、則皆

皆相催候、平萬、只三急、五急、大急、小老鷄等也、

七夕可有御樂可令參仕給之由、被仰下候也、

七月二日 言繼

四辻前大納言孝、鷺尾前中納言孝、源中納言殿、口但、不具、子細候、應分、可、伯二位殿、同、得、不具、候、

致參勤、可、得、御意候、四辻少將殿孝、藏人式部丞殿、所勞、子細候、同、加、養性候、通分、

得、御意候、地下へ

七夕御樂各可被參勤之由、可被相催候也、

七月三日 言繼

山井筑前守殿

七日、暮に參内御祝、五時分御樂始、二條殿下被參候、於議定所有之、時分出御次予告之、先二條殿下

簾中被參候、次各著座、次第置之、所役殿上人長雅朝臣、藤原氏臣等也、次予目錄持參、笙前關白音頭

略 二月十七日に、又新院○後深草富小路殿にて舞御らむ、その朝大宮院まづ左のびてわたらせたまふ、一院○後嵯峨の御幸は日たけてなる、冷泉殿よりたゞはひわたるほどなれば、樂人舞人けふの装束にて、上達部などみなあゆみつゝ、○中万歳樂をふきて樂人舞人まいる、池のみぎはに梓をたつ、春鶯囀、古鳥蘇後參、輪臺、青海波、落蹲などあり、日ぐらしおもしろくのゝしりて歸らせ給ふほどに、赤地の錦の袋に、御びは入てたてまつらせ給ふ、刑部卿の君、御すの内よりいだす、右大將とりて、院の御まへにけしきばみたまふ、胡飲酒の舞は、實俊の中將とかねては聞えしを、父おとどの事にとゞまりにしかば、近衛前關白殿の御子三位中將ときこゆる、いまだ童にて舞たまふ別してこの試樂よりさきなりしにや、内々白川殿にて心みありしに、父の殿も御簾のうちにて見給ふ、若君いとうつくしう舞たまへば、院めでさせたまひて、舞の師たゞもちろく給はりなどしけり、

〔國太曆〕貞和二年五月十五日、抑仙洞○光嚴

密々有舞御覽事、必令參可、見物、如大臣著座、不思議之儀

也、可候、簾中之由、昨日以基隆卿有被仰下旨、是近日御寵愛左舞人葛榮息童明菊丸○俗名俊萬并同猶子

童々○俗名延喜等卿召覽云々、此間於御所ニ施其藝及祿物云々、頗如田樂法師歟、遠不便候哉、予○藤原公

賢如此事元來不庶幾之上、永陽門院事卅ク日中也、旁雖憚存、近日奸人讒宛滿禁中、洞中頗違時議

歟、然而若有勅問者、雖可申所存無其儀、進獻諫諍、雖爲忠臣之節、不可被用之條存儲之上無詮、仍千

万忝存、卷而懷畢、未刻許彼輩已參入云々、仍參洞中○爲相直衣、番宮大夫同車、布衣上延、其後舞裝

束已下不具事等有之云々、及申刻上皇出御、西面簾中依召予參、簾下、今日參御本意之由有仰、

〔二水記〕永正十四年二月廿三日、御樂始也、○中午一點著衣冠令參内、先予○藤原隆康花山院菊亭、西園

寺等參上、○被候、鬼間未刻許出御、簾中之由奉行示之、花山院以下○侍立、飾、立、次第著座、各圖、座、爲、重親朝臣、宗

藤朝臣、橘以緒等一列之、緣無座候由ニ候間、御湯殿緣ニ候、著座了置器、範久、範遠、橘以緒、藤原氏直

子之音樂ニハ、樂名之下ニ樂拍子或只拍子ト其譯程書のせ候事也、

三臺鹽急 合歡鹽 殘樂三反、又ハ五反、林歌 陪臚 殘樂三反、又ハ五反、夜半樂

郢曲 朗詠嘉辰、或何ニ而も其時ニ應ジ有之事也、又御遊ニハ必二星被仰出也、郢曲ハ樂七ニ

候得バ、六之後有之候、次ニ樂一ツアリ、都合七ニ而相濟、五ノ時ハ四之後郢曲次ニ樂一アリ

相濟、

慶徳

一七夕御遊ニハ、必盤涉調之音樂也、

一當日音頭殘樂打物以下之儀、堂上地下共ニ以書付被仰出也、

〔日本書紀三〕神武戊午年八月、天皇以其酒空、班賜軍卒、乃爲御謠之曰、歌是謂來目歌、今樂府奏此歌

者、猶有手量大小及音聲巨細、此古之遺式也、

〔日本書紀十五〕顯宗元年六月、幸避暑殿、奏樂會群臣、設以酒食、

〔日本書紀二十九〕天武十年正月丁丑、天皇御向小殿而宴之、是日親王諸王引入內安殿、諸臣皆侍于外安

殿、其置酒以賜樂、

〔日本後紀二十〕繼體弘仁元年十一月乙卯、行大嘗於朝堂院、丙辰、御豐樂院、悠紀主基兩國獻翫好雜物、

奏土風歌舞、五位已上賜衣被、戊午、宴五位已上、奏雅樂并大歌、

〔日本紀略一〕應和延喜二年九月廿九日壬申、召元慶寺舞童十餘人於禁庭、覽其舞、

〔吉記〕承安二年四月一日、今日內有舞御覽、舞人著襲裝束、左二人賴實朝臣公時、右三人隆房雅賢等

朝臣、公守舞、萬歲樂、地久泰平樂、古鳥蘇賀殿、林哥龍王、於御殿南庭有此事、公卿右大將按察使、花山

院中納言等候、御前殿下御座簾中云々、

〔増鏡八飛鳥川〕永とし文永五年正月に間あり、後の廿日あまりのほどに、冷泉院にて舞御らむあり、中



主上御所作、御笛、或御笙、或御箏、小御所簾中正面之御座、

一次攝家之大臣納言者、正面之御廣縁より北一之間、御簾内之座、著座、

一次清華之大臣、或納言ハ、御廣縁疊之座、著座、公卿何も同前、

一次殿上人落縁著座、儲、圖座、

一次地下伶人御繼縁ニ著座、儲、圖座、各衣冠

一極、脇藏人等公卿之絃管、陪膳殿上人之管ハ各懷中、絃ハ兼而其座に儲置、

一樂所之奉行四辻家其座ヲ立、其日之音樂目錄、第一之大臣ニ而も納言ニ而も座上江被渡之復

座、座上之自公卿殿上人地下伶人迄拜見、當日音頭之伶人吹始若音頭、御所作亦ハ堂上ニ候得バ

御吹始之事也、

一音樂目錄ハ、大高檀紙横折四辻家被認之、

平調

但壹越調、平調、雙調、黃鐘調、盤涉調、太食調、此六調子之内、何調子ニ而も、樂銘も時宜次第被仰出也、尤樂數五ニ而も七ニ而も、御目錄被載事也、

調子

調子ト有之候ハ、平調ニ而候得バ、平調之調子、其外右六調子之内、當日音樂目錄次第其調子ヲ吹申候、尤音取ト御書付ニ出候得バ、其時之調子之音取ヲ吹申候、六調子共ニ調子音取ト申候て、別段ニ有之事ニ候、

萬歲樂

樂拍子

又只拍子

樂ハ樂拍子物早八拍子物、延四拍子物、早四拍子物、早只拍子物、或序吹、或大曲吹、坏ト申候而吹、分候事ニ候、樂拍子物ニハ必只拍子ト申候而、同樂ヲ吹分候事、上古ヨリ之傳來ニ候、依之樂拍

大臣大饗、これも御遊の儀式、打任これらにはかはらず、それにとりて、母屋の大饗には、鷹山といふ歌をうたふべきとかや、それは源家にはあり、藤家にはなき歌にて、うちまかせては、一どうけ給りしも、安名尊にてぞ侍し、又律にも鷹子あるべきにや、

わたまし、これは未だ承らねど、それもとゞ御遊普通のにてあるべきに、此殿といふ歌をうたふべし、其外かはりめいとなきにや、樂にも必ず賀殿あるべきとぞ聞侍し、

后宮五夜七夜、これもいとかはりめなし、律になりて後樂に長慶子を必あるべきとぞうけ給りし、○中略

臨時客、これは耳とはくて、いまだたちぎ、し侍らず、これはちとかはりめありて、朗詠などあるべきにや、

第二舞樂、これゆゑ、しく事こたい也、女房などあながちに去らでもあるべけれど、をろくは必要もすべし、これも品々あり、大嘗會、大法會、堂供美、同塔、常樂會、放生會、舍利會、朝親行幸、内裏舞御覽、内裏、内裏樂所始、相撲節、社頭供日等、

大嘗會には、和歌所いはひの歌をよみて奉りたるを、風俗所に下して歌のふりをつけて、其歌のこはふりに隨て、悠紀主基の樂人樂を作たるにて、左右舞人まひを作るべきとかや、されど此頃は、樂も舞も其歌によらず、思ひくゝに作りあひたんなり、樂はがく舞はまひといふたとへは、これよりおこるとぞ、ふるき人は申し、これは女房の身にいかでもありぬべけれども、かたはしづつかやうの事もき、をかむために、をろく申をく、○中略

朝親行幸には、定たる舞つねの事にて別事なし、供御のまいる時は、まはす、みちきとて舞人はある也、供に立舞、内裏の舞御覽には、ほこふりつれば、やがて左右の舞思々にあり、

〔狛氏新錄〕一御遊之事 禁中院御所同前

林院端會  
試樂等也又或只召一兩人於階下令奏其所能往々有之又召樂所生等有試其習物其儀所別當并

侍臣候彼所者遵行其事宸儀出御付御倚子敷疊於下侍部下爲樂所人座東上北面以次試其習物訖賜

盃酌呂酒殿酒調  
覽殿者調管絃或給祿召內福樂  
相給之或不給

〔殘夜抄〕第一御遊に又品々あり一消暑堂の御神樂二朝親行幸三主上御元服四大臣大饗五わたまし六后宮の御産の五夜七夜七東宮行啓臨時客里子の五十日百日等宮々の御はかまぎなをもあるらめどすがた同事也

朝親行幸御遊やう／＼なれどもとよりさまおほやう只同じ事也三獻をはりて御遊の具を置比巴箏和琴笛宮の蓋に笙横笛箏拍子を入てやく人所作人の座籍に隨て次第に置て後始は雙調調子の次第まづ笙次第箏次第笛ねとりて後比巴の撥をあつべし略○中其後調子間は比巴箏

思々に撮合せ引べし笛の調子をはりなば比巴はゆめ／＼ひくまじ調子の末にこめざまに和琴にはことおこしといふ物あり此頃は絶たるにや引人なし又ことおこしなきにはすがゝき

といふ物をすべきとかやその雄拍子をきゝて拍子をうちをきて催馬樂をば歌ふべきにそれも此頃はもはへたる人かたくなめり次第はまづ催馬樂次第うちませ／＼すべし此頃は定まりて歌には呂には安名尊新年或雄柱但  
近來不歌之美作席田樂には鳥破急賀殿急律伊勢海或青  
柳更衣

萬歲樂五常樂急三臺急おほやうこれにはすぎず此外させることなし昔の事はふるき日記にあんめり

消暑堂御神樂の御遊はみかぐら終りて後にあり是も樂催馬樂呂律これらにかはらず但近來消暑堂御神樂に或人めづらしき事せんとて葛城といふ秘藏の歌をうたひたりけるに其歌はつたはるべきことあるをあしくうたひたりけるととき人をしりけるやうのがるゝ處なかりけりめづらしき事はかぎりある事にはせであるべきにこそ○中

玉林苑下 附 鄧律講式 繼出來加之 仍次第不同

山王威德

法印忠覺作、藤原助員調曲、藤

背振山靈驗

待山住僧密海作、月江調曲成、取捨、

同山口

同前

隨身競馬與

月江作、同、

同番口藝德

同前

寢寤戀

月江作、左金、春洞調曲、

屏風德

藤原親光、作、曲、同、

琴曲

月江作、左金、春洞調曲、

餘波

藤原助、調曲、

〔宴曲集一〕春

霞たなびく雲井より、春立けりな天の戸の、明る氣色も閑にて、鶯誘引春風、かすむとすれど淡雪の、下草は猶結れて、岩間の氷解やらす、争か春の越つらん、不來の關の東路ぞや、有間ほしきは梅が香を、櫻の花に匂せて、柳が枝に發てしが、百千鳥木傳は己が羽風にも亂ぬべき物をな誰に仰てか、鳴音も絶せざるらん、八重欵冬、紫深き藤浪、汀になびく池の面、取々にてや覺り、まゐてや手折まし、おらでや挿頭ましやな、三月の永き春日も、猶あかなくに暮しつ、

行樂舞  
朝廷行樂舞

〔新儀式四〕

臨時

召雅樂寮物師等令奏音樂舞等事

付諸寺法會試樂、並召試樂所管結生事、

若召雅樂寮物師御覽舞、並開食音樂前一兩日、知其音聲、殿上公卿奉仰書出可覽舞樂等、下給彼寮、又藏人仰內藏寮穀倉院、令儲饗祿事等、當日藏人等、率所司并藏人所雜色以下、供奉御裝束事、先撤畫御座、垂母屋御簾、東廂南第四間敷、舊代立平文大床子御座、孫廂南一二間敷、疊爲親王公卿座、又北廊內爲雅樂寮頭以下樂人召人等座、仙華門內南廊壁下殿上侍臣座、承香殿西簾下立鼓處、打物皆在其間、南上時刻著御座、大臣依召參上、爰伶人發音樂、王卿依次參上侍座、內藏寮給王卿以下侍臣等饗侍臣益送、又賜樂人饗、藏人所雜色以下益送、御厨子所取供御菓子干物、計程供御酒、大唐高麗遞奏舞樂、或召大臣於御前、仰優長舞并絃管之輩、預恩賞之由、斯文、皆是延喜廿一年十月十八日、大志、大石、半吉、任、權、小尉、也、又王卿以下侍臣等、堪其事者、陪殿上奏管絃參議已上、賜御衣各有差、寮頭少屬樂人召人物師等、皆給祿有差、延喜廿一年、頭、金一條、九二人、襖子各一領、屬、事畢入御、王卿退出、諸寺法會可被供音樂時、若有試樂、其儀亦准之、延喜廿二年、九月廿九日、元慶寺會試樂、同四年三月、



南都靈地譽

同并

巨山景

明空成拾調曲

五節本

明空成拾調曲

同未

同前

忍戀

所被出候明空

金谷思

明空成拾調曲

宇都宮叢祠靈瑞

瀧山等覺

明空成拾調曲

同

同

摩尼勝地

同前

拾葉集下

梅高階

明空成拾調曲

磯城島

明空成拾調曲

遊仙調

明空成拾調曲

賦鞠

明空成拾調曲

同

車生覺

明空成拾調曲

袖情

明空成拾調曲

旅別

雲候

明空成拾調曲

曹源宗

明空成拾調曲

後一條院御宇

嘉元四年三月下旬

比重加注之舉

沙彌明空

拾葉抄

調卷後日出來之同追加入云々

管經曲

明空成拾調曲

文字譽

明空成拾調曲

仙家道

明空成拾調曲

五明德

同

同

江羽林

明空成拾調曲

旅別秋情

明空成拾調曲

曉思

明空成拾調曲

戀明哀傷

明空成拾調曲

得月空

池砌

明空成拾調曲

全身駄都德

同

江島景

明空成拾調曲

諏訪効驗

明空成拾調曲

同

花園院御宇

正和第三

三月五日重注之舉

別紙追加曲

源氏紫明

雨榮花

明空成拾調曲

琵琶曲

明空成拾調曲

聖廟靈瑞

明空成拾調曲

同靈瑞

起過

鹿島

靈驗

明空成拾調曲

同社壇砌

同前

補陀落靈瑞

明空成拾調曲

同湖水奇瑞

同

同

巨山龍峯

讚

明空成拾調曲

同砌修意讚

同前

玉林苑上

鶴園靈威

明空成拾調曲

善巧方便德

明空成拾調曲

永口寺勝景

明空成拾調曲

同砌并

同前

同

同鹿山景

明空成拾調曲

竹園山譽讚

明空成拾調曲

同砌法寫經讚

同前

象山謠

明空成拾調曲

同

紅葉與

明空成拾調曲

同砌修意讚

同前

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

宴曲抄下

内外 筆德 袂衣袖 同妻 鷹德 馬德 靈鼠譽 船明衣作 空成 取捨調曲 寄山祝

真曲抄

對揚 遊宴 夢 無常 法華 釋教 淨土宗

以上七首附 新作三首

祝 薰物 雨

究百集

隱德 和歌自 或所 被出 冷泉 武衛作、 長恨歌 納涼 風 水自 或所 被出 不知作者、 十驛少

雷部賴慶作、明 明王德自 或所 被出、 君臣父子道法 明空 成賴順作 取捨調曲 老後述懷

後伏見院御宇 正安三年八月上旬ニ比錄之畢 沙彌明空

いまはむそぢのあまり、つれなきいのちの程をもまらざるべきにしもあらねば、まづかなるす  
さびに身をかくして、ひたすら佛の御名をたのむよりほかはとよろづをおもひすて侍しを、の  
がれがたうこゝかしこより、あながちにすゝめられしかば、なまじゐにうけひきかみの目録に  
こそもれ侍れども、なをざりにてやまむも、まがすがなるべければ、かかねてゑるす、まかあれば、  
よその家の風に吹つたふることばの花の匂は、まづさきだちて、たをらまほしく、色にうつるか  
ずもおほく、これをえらびつたなきもとにさびしき老木に、のこることのはは、かつはふりはて  
ぬるも、めづらしからず、冬枯の木末、まれに人にまらぬかくれがの、ふかき林にいはりをまめ、  
後にひろひあつむるわざなれば、拾葉集となづけ、巻をふたつにわかちて、上下といへるなるべ  
し、

拾葉集上

時にさかりならむ未學の郢作よしあしのわきまへ、人のはちにあはゞはれざらめや、

宴曲集卷第一 四季部

春花藤三品作、明空調曲、

春野遊

夏

郭公漸空上人作、明空調曲、

秋月

秋興

冬

雪洞院前大相國家作、

明空調曲、

宴曲集卷第二 神祇部

祝言 嘉辰令月

宇禮志喜哉

優曇花

花亭祝言

不老不死

神祇

宴曲集卷第三 戀部

吹風戀樂月作、同調曲、

遅々春戀

戀路

龍田河戀冷泉式衛作、同調曲、

袖志浦戀權少僧部作、同調曲、

袖湊

袖

餘波或人作、明空調曲、

源氏戀或女房作、同調曲、

名所戀

宴曲集卷第四 無常部

樂府 伊勢物語

源氏或女房作、同調曲、

海邊

海路

海道上

同中

同下

羈旅

留餘波

行

餘波 無常

宴曲集卷第五 雜部

朝夕 年中行事藤三品作、明空調曲、

山同前

草

上下

心

顯物

酒

遠玄

閑居

閑居釋教

宴曲抄上

熊野參詣自京到住吉、

同二自池田到藤代、

同三自藤代御坂到切目山、

同四自切目山到瀧尻、

同五自瀧尻山口、

善

光寺修行 同次

道花山院右幕下家作、

十六

雙六

宴曲抄中

鄂律講總禮

三島詣

理世道

夙夜忠

文武自或所被出、不知作者、

朋友同前

山寺同前

松竹同前

名取河戀冷泉羽林作、明空調曲、

曉別同前

懷舊自或所被出、不知作者、

明空或取捨調曲、

む、あめの下こそ、のどかなれ。

万歳樂不肩脱、自下、廣物之學名詞也、自下、關物云舞自下、關水猿曲 白薄様

白うすやう、こせんじの紙、まきあげの筆、ともゑかいたる筆のちくやれ、ことうとう、五反七反

〔二水記〕大永八年正月十九日、午後參内、御會始也。略○中今日下官、藤原發聲事雖、令固辭下、冷稱咳

氣頻故障也。黃門同故障、仍予勤之、臨期迷惑此事也。總別郢曲者可、勵稽古事也。而近年歌道經歷人之外、傍若無人、仍平生無沙汰、不可說事也。

〔撰要目録〕夫當道の郢曲は、幼童のうちにすさみ、萬人の耳にさへざるたぐひ、さまゝおほしといへども、愚老が撰あつむる曲、すべて其軸十まきをさため、其歌百のかすをきはむ、このうち二十餘首は、愚作の外なり、すなはち其作者の名字をたどるゝゑるす、これ或は其命により、あるひはうた、聞をよぶところ、耳にとゞまり、ゆへあるまなをさきとして、都鄙のもてあそび、ちまたの説をもきはざれば、さだめてあやまりもあり、本説もおぼつかなく、うける事おほくして、後のそしりのがれがたかるべし、いはんやみづからもとめ、外をうかゞはざれば、はかなき筆のまよひおろかにして、なをつたなきあまり、あるかざし花に賦するおもひをのべ、あしびきの山の名を、うとき國までにとぶらひ、なをゝ一年中に行事、あさがすみてのどけき日かげより、霜雪のつもるとしのくれまで、あらゆる政につけても、君が御代をいはふ、すゞしき泉のふたつのながれには、たつた河名とり河に、戀のあふせをたより、もしほぐさかきあつめたる中に、女のまはざなればとて、もゝさひも、いにしへの紫式部が筆の跡おろそかにするにも、たれば、かるかやのうちみだれたるさまの、おかしくすてがたくて、なまじゐに光源氏の名をけがし、二首の歌をつらね、のこりはことまげければ、こゝろみなこれにたりぬべし、よりていま録するところ、撰要目録の巻となづけて、後にみだりがはしからまめじとなり、この外にいできたり、世にもてなし、



一としのうちに咲梅紅にをひのうすゆき、

一ひかげの糸にむすば、れをみの袖にをく霜、

一御まへの池の鴨とりうは毛の霜のまろさよ、

一つゐたてみたれば、御はしの月のあかさよ、

一つゐたてみたれば、神のますうち野の森のかげのたかさよ、

一つゐたてみたれば、御隨身のもちたるたてあかしのまろさよ、

一つゐたてみたれば、衣かづきのおほさよ、

一つゐたてみたれば、舞姫のおほさよ、

一すさまじくいふなるまはすの月夜を、豊のあかりのひかりはめづらしくぞおぼゆる、

水猿曲 或鹽水  
白拍子

水のすぐれておぼゆるは、西天竺の白鷺池、まむしやう許由にすみわたる、昆明池の水の色、行末久しくすむとかや、賢人の釣を垂しは、嚴陵瀬の河のみづ、月影ながらもるなるは、山田のかげひのみづとかや、蘆の下葉をとづるは、みま入江のこほりみづ、春立空の若水は、くむともくむともつきもせじ、つきもせじ、

伊佐立奈牟 五反二反  
時立座

いさたちなんおしのかもと、水まさらばとくぞまさらむ、

一御前試事、於昇廊 北上有露臺亂舞大歌了、儀同昨日、

一御前召事、於朝所南面庇有之、西上對座

令月 三反新豊二反 鶴之群入 一反

やつるのむれゐる、まつ山に、千世にちとせをかさねつ、む、やはひは君がためなれや

令月三反○順

今様

ヤ 雪せむみやまの、<sub>ヤ</sub> 五えうまつ、<sub>ヤ</sub> ちく葉なりとぞひとはいふわれもみる、<sub>ヤ</sub> ちく葉なりともおりもてこむ、ねやのかざしに、<sub>ヤ</sub> まろさゝん、

万歳樂 自下四  
舞

一於准后御休廬推參事

思之津 五反

おもひのつに舟のよれかし、星のまざれにをしてまいらうやれ、ことうとう、<sub>う</sub>なふときはと  
反の、既  
有之、

やれとはよびいだすこと葉、子はその人をさす歟、とんとハ富つ也、とつ五音相通也、

令月三反 新豊 二反○  
中略

蓬莱山 一反

ヤ 蓬莱山ニハヤ 千とせふる、<sub>ヤ</sub> 万歳千秋かさなれりむや、松の枝ニハつるすくひ、<sub>む</sub>いはほが  
そばにハヤ 龜あそぶ、

万歳樂 自下四  
舞

物云舞

一千世に万代かさなるは、鶴のむれある龜をか、

一椿のかげは八千とせ、松花の色は十かへり、

一みるにめでたき花のいろ、千とせの松にふる雪、

一豊年の来るしは、尺にみちてふるゆき、

永享二年四月十九日、自仙洞被下御書、拜見之處、故源中納言信俊卿、郢曲文書是預申之由、被聞食洞院前內府有俊郢曲師弟之間、文書可被見之由望申、少々可被遣歟、可進之由被仰候、此事先年洞院與故源中納言、就文書事有確執事、於文書者一切不可免一覽之由申切云々、然間無左右可進之條如何之間、有俊ニ相尋可申入之由、御返事先申入畢、廿六日、郢曲文書事、有俊姉妹ニ令申之處、故中納言遺言申置之間、洞院へ遣事不可叶之由申、然而勅定難默止之間、教訓畢、仍文書一兩卷進之、則仙洞へ進之處、時宜不快之趣也、所詮文書悉不進者不可叶歟、其子細重綾小路へ申遣、廿九日、郢曲文書二合召出、仙洞へ進之、而本譜事猶可進之由被仰下、是ハ家重寶更無他見者也、可如何候哉、無理之仰也、六月二日、仙洞文書一合被返下、是ニ可預置之由被仰下、一合ハ洞院ニ被遣畢、進請文云々、本譜事可召進之由望被仰下、八日、催馬樂本譜五卷香表紙、呂三卷、無典書、律二卷、仙洞へ進之、有俊姉妹狀入見參、勅報洞院ニ被預遣者、可被召進請文之由被仰下、始終有俊可被返下事不定也、當道之斷絶不便事也、若又有俊成人之間、公方ニ可被召置歟、時宜尤不審也、洞院請文者不出之、可抑留所存歟、

## 〔綾小路俊量卿記〕五節間郢曲事

一 丑日朝齋  
出御齋帳臺試事、於子午廊南上、有后町廊亂舞大歌了、阿音三反、贊多々良三反びんたゝらをあゆかせばこそ、あゆかせばこそ、あきやうついたれやれ、ことうとう、就三早、多反、五反、七反、相贊也、万歳樂自下、馬、亂舞、一 寅日叙位  
之議位

殿上淵醉事

楚襄王問於宋玉曰先生其有遺行與何士民衆庶不譽之甚也宋玉對曰唯然有之願大王寬其罪使得舉其辭客有歌於郢中者其始曰下里巴人國中屬而和者數千人其爲陽阿薳露國中屬而和者數百人其爲陽春白雪國中屬而和者數十人引商刻羽雜以流徵國中屬而和者不過數人而已是其曲彌高其和彌寡

〔歌舞目録〕七上 郢曲明詠ノ一名ナリ然ルニ又外ノ歌諸ヲモ通ジテ呼ビシコトミヘタリ文故曰郢曲也トミヘタリ客歌郢中トハ宋玉ガ賦ニ出タリ郢曲ヲ要シトハ卷十八卷 宴曲郢曲ノ一名ノ正安三年沙彌明空ノ撰ノロシハ宴曲集等數部ヲ類聚セシモノナリ 〇中略 宴曲郢曲ノ一名ノ明詠ノ類ニアラズ一種ノ歌詠ニシテ今ノ諸曲ノ類ハレリ又酒醉ガカノコトイフマコノ歌曲ノ類ナリ 猿曲其曲ノ假借ナルベシ後量卿記ニ 〇按ズルニ明詠ヲ郢曲ト稱シタルモノハ明詠篇ニ載セタリ

〔徒然草〕上 梁塵秘抄の郢曲のことばこそ又あはれなる事はおほかめれむかしの人はたゞいかにいひすてたることくさも皆いみじきこゆるにや

〔吾妻鏡〕十四 建久五年三月十五日丙子將軍家〇源賴朝渡御子若宮別當坊是別當法眼自京都招下垂髮尤堪郢律舞曲可覽其藝之由被申請之故也有勸盃等兒童施藝

〔明月記〕建仁二年二月十五日巳時許參上〇中申時如例遊女郢曲等了早出不知其後事

〔吾妻鏡〕四十九 正元二年〇文應元年正月廿日戊子今日於御所中被定早晝番衆其内於壯士者歌道蹴鞠管絃右筆弓馬郢曲以下都以堪一藝之輩於時依可有御要被結番定

〔看聞日記〕應永廿七年二月三日抑綾小路少將資興源宰相子息今日逝去云々此十餘年令病氣其體惘然狂氣也仍不出頭一向蟄居了遂以遠行不便無極源宰相家業無相續之人體相公已及六十

你之間縱猶子雖出來音曲相續不定事也郢曲可斷絕歟爲朝爲家驚歎無極但道神有加護者不可斷絕歟



候なんやとすゝめければ、沓をぬぎて堂の中へ入て、木丁の外にゐて、中これらをうたはれるに、ものかけわたりて、やう／＼の事共いひて、其病やみにけり、かならず法驗ならねども、道達せる人の藝には、靈病も恐をなすにこそ、

〔續世繼數十島の打問〕いづれのいつきの宮とか、人のまいりて、いまやううたひなどせられけるに、すゑつかたに、四句の神歌うたふとて、うへきをせしやうは、うぐひすませんとにもあらず、とうたはれければ、心ときき人などきゝて、はゞかりあることなどや、いでこんと思ひけるほどに、くつくつかうながなめすへて、そめがみよませんとなりけり、とぞうたはれたりけるが、いとその人うたよみなどには、きこえざりけれども、えつるみちになりぬれば、かくぞいへりける、この事刑部卿とか人のかたられ侍しに、侍従大納言通成と申人も侍しが、さらばことはりなるべし、

〔源平盛衰記九〕康頼熊野詣附祝言事

康頼誘給へ少將殿トテ、精進潔齋シテ熊野詣ト准テ、岩殿へコン參ケレ略中、去夜ハ是ニ留テ、通夜法施ヲ奉テ、向曉方ニ康頼歌ヲウタヒ、其終リニ足柄ヲ歌テ、禮奠ニソナヘ奉ルサテ、チトマドロミタリケル夢ノ中ニ、海上ヲ見渡セバ、沖ノ方ヨリ白帆係タル小船一艘、浪ニ引レテ渚ニヨル、中ニ紅ノ袴著タル女房三人舟ヨリ上リテ、鼓ヲ脇ニ挟ミツ、拍子ヲ打テ、足柄ニ歌ヲ合歌タリ、

〔類聚名物考樂律二〕鄧曲 えいきよく 詠曲俗

鄧曲は西土の事によれり、鄧と云ふ地は、楚國の都の名なり、その前にて謡ひ出せし書なれば、玄かいへり、此方にてても駿河舞曲歌のたぐひにて、俗謡の伊勢音頭岡崎歌の類ひを云ふ、玄かるを後世俗には詠曲と書り、鄧字の目遠きによりてなり、京都將軍家比の記録などには、多く詠曲と書り、是すべて歌謡の惡名となれり、

〔文選四十五〕對楚王問

〔郢曲抄〕催馬樂にうたひがへはありといへども、諸國風俗歌なれば大曲の名はなし、足柄は神歌にて風俗といへども、其まなかはることなり、するがまひ、あづま遊びなど、いふも、是なん足柄のうちなるべし、あしがら明神の神歌ゆゑに風俗といへどもそのをんあり片下、田歌など娑羅林など、今様これなん曲流なし、神遊の歌に、古今集のうち神遊のうたいだす事は、和國のゑるしなり、さすれども歌がらによつて、上句下句のちがひありとゑるべき也、○下略

〔體源抄下〕草柄事

今世ニアシガラハ誰人が歌ラム、目出キモノナリ、宮内大輔基俊が歌シコソ絶タル程ノ事ニテハアリシガ、本性ノアシガラニナリタリシナリ、ナマリテウタヒシ節共ノフカシギナリシ也、其後基俊、其説ヲウケテ歌ヒシカドモ、ミス／＼トシテ、何事トキコヘザリキ、足柄ハ世人嬭難藝タリ、此事不然歟、政長朝臣家歌笛譜ニ、以足柄歌笛譜入風俗部也、以之案之、足柄ハ風俗歟、私ニ案之、風俗ハ諸國ノ古風ヲ集也、故ニ諸國ノ風俗多在催馬樂中事也、廣河限催馬樂雜藝、今様童謡之詞、此多是風俗之流也、○中略

神樂事

神歌ハ昔ハツマメテミジカク歌ヒケル也、今ノ世ニナガクナリニタリ、敦家ハサゾノ給ヒケル、顯仲云、神歌ハ前句末歌終ニ籠ザマニ次句ヲ出スナリ、

〔古今著聞集管註歌舞〕侍従大納言成道雲林院にて鞠を蹴られけるに、雨俄にふりたりければ、階隱の間に立入て、階にまゐりをかけて、まばしはれ間をまたれける程、

雨ふれば軒の玉水つふ／＼といはゞや物を心ゆくまで

といふ神歌を口すさまれける程、格子の中よりをしあけて、女房の聲にて、このほどこれに候人の物の氣をわづらひ候が、只今御聲をうけ給て、あくびてけしきはりてみえ候に、いますこし

〔源平盛衰記十七〕祇王祇女佛前事

入道○平 打ウナヅキ給テ、景氣ノケ様ヲバ、イシクモ歌タル者哉此歌夫○今權、佛ヲ昔ハ凡ハ難。茲  
集。ト云文ニ書レタルハサハナシ、○下

〔梁塵秘抄口傳集〕<sup>十</sup>我○後○河○白○ひとり雜藝集をひろげて、四季の今様、法文、早歌にいたるまで書たる

次第をうたひつくすおりもありき、略中ある人申云、さいのあこまろとて、あをはかのもの、歌あ

また老りたる上手、このほどのぼりたりと申、朝方がもとにあるよし、式部少輔定正いまだ六位

なりし時申とき、て、たづねしかば、とゞめおきて、足柄、たみ、伊地古、舊川、舊古柳、少々ならひしは

どに近衛院うせさせ給しかばなにとなくてやみにき、略中保元二年のとし、略中正月十日あま

りばかりにまいりたりき前の遺戸のうちに居て、さしいづる事なし、人をのけて高松殿の東向

のつねにある所にてうたのたむきありて我もうたひてきかせあれかをもき、ておか月あく

るまでありてその地ざりてその、ちよひよせてつほねしてをきて足柄よりはじめて大曲

舊古橋今橋物語田部等にいたるまでいまたまらぬをはならひもとうたひたる歌ふしたか

ひとすまにあふたぬひに  
ひとはこわかれや樹々もさけにき足柄黒鳥子伊地子なとや

[illegible]

中三余行主原氏等於文二三三月十三日、龍馬習

大旦大旦西、黒島子、喜可、子也、方、寄、古、即、廣、見、即、各、亭、勿、樂、

日秋二、乙のまて、見ならんて寫眞しおはよりぬ、

歌。朝野群衆僉爲子記ニハ田歌、神歌、棹歌、辻歌トアリ、拾芥抄雜藝目錄ノ中

〔歌俣品目〕  
七上  
歌上  
協律  
神歌  
ニ朝  
ハ野  
ミ群  
ヘ載  
ズ、傀  
今偏  
按子  
ズ記  
ルニ  
ニハ、  
是田  
レ歌  
モ神  
又歌  
今棹  
様歌  
ノ辻  
中歌  
ノト  
一ア  
體ヲ、  
拾  
純芥  
名抄  
ナ雜  
ル藝  
ベ目  
シ、其  
ノ神  
中

新紙  
 へノ  
 シ辭  
 ナア  
 ルル  
 ベモ  
 シノ  
 (中、チ  
 略神)  
 又歌  
 鄂ト  
 曲シ、  
 抄浮  
 ニ属  
 ハニ  
 風屬  
 俗ス  
 ノル  
 中モ  
 ニノ  
 墨テ  
 ス法  
 ル文  
 類歌、  
 シ或  
 モハ  
 ミ契  
 へ羅  
 タ林  
 リト、

1

〔葉黃記〕寛元四年六月廿八日乙卯、今日祇園御靈會也。○中 猿樂等推參。可相從 頻欲施藝、然而大略被追退了。

〔吾妻鏡〕四 建長二年六月十五日己酉、將軍家令逍遙造泉殿給。○中 白拍子參上施藝、和泉前司行方以下及猿樂云云。

〔二中歷〕十三 散樂 豐定 白太丸 壽延 坂二吉實 元同 春三土武 神泉太郎 仁難

厄同丸時任

〔歌舞品目〕七上 雜藝俗ノ名目ハ 歌曲ノ統名ニテ、後世ノ轉用ノ名目ナルベシ、 拾芥抄ニハ、風

歌、片下、物樣、マアチノセヨリ、サレバ歌謡ノ雜體ヲ統稱シコトアリ、  
ベシ、又スベテ古クハ散樂百戲ノコトナモ、雜藝ト稱セシコトアリ、  
〔拾芥抄〕上末、風俗部第卅三。○中略

東遊 朗詠 今樣 古柳折歟 田歌 沙羅林 早歌 片下 物樣

〔朝野群載〕三 傀儡子記

今樣古川樣、足柄、片下、催馬樂、里鳥子、田歌、神歌、棹歌、辻歌。○下

〔西宮記〕七月 相撲召仰

御覽日。○拔 天皇御南殿太子參。○中 次將等獻盃。○註 種々雜藝。左見城樂、散樂、 天皇歸御、

〔舞樂要錄〕上 同。舞例 相撲節

天慶六年 拔出 七月廿八日 左。○中 雜藝 右。○中 乞塞

〔日本紀略〕四上 天德三年七月卅日癸酉、雜藝之中於御殿前施其伎藝、又奏音樂、

〔百練抄〕八 高倉 承安二年七月廿三日、行幸三條殿、翌日有雜遊、北面下臈施雜藝、夕還御、

〔中右記〕嘉承三年。○天仁 十一月十七日、今夕俄有御幸六條殿。○中 御神樂了有盃酌御遊。○中 今樣

雜藝、盤涉調、今樣各出之、



略○中 右ノ競馬ノ裝束ノ舊ク弊キヲセサセテ、枯鮭ヲ太刀ニ帶ケテ、裝束ヲモ片喝下腰ニセサセテ、袴ハ踏合セテ、情格モ猿樂ノ様ナルヲ、女牛ニ結鞍ト云フ物ヲ置テ、其レニ乗セテ出シタリ、

〔古今著聞集二十〕

魚虫禽獸

寛治五年十月六日、殿上人、所衆、瀧口、小舍人、左右をわかつて、小鳥合の事有

けり、○中 左勝て、殿上にとまりて、朗詠、今様猿樂など有けり、

〔中右記〕寛治八年正月二日乙亥、今夜及深更、雨貫首以下著殿上、有淵醉事、朗詠、今様之後、已及散樂、

〔十訓抄十二〕

國司師綱被下とき、山林房覺遊といふ猿樂、供にくだりけり、

〔宇治拾遺物語五〕

これも今はむかし、一乗寺僧正御室戸僧正とて、三井の門流にやんごとなき人

おはしけり、○中

一乗寺をば増譽といふ、○中

その坊は一、二町ばかりひしめきて、でん樂猿樂な

どひしめき、隨身衛府のをのこともなど出入ひしめく、○中

略下

〔吾妻鏡十四〕建久五年閏八月二日己未、於三浦有小笠懸、昨日勝負云云、其後於船中興遊、如棹一葉、

參猿樂、小法師中太丸參施藝、上下解頤云云、

〔明月記〕建仁二年二月十六日、巳時參上、今日猿樂、依召參、御前庭施其藝、公卿以下候、御前末座、殿上

人上北面等、自閑所見之、申時許事不濟、以前退下、各賜馬一疋、○中

後院飯

等之外

出云々、

〔百練抄十二〕

建保二年七月十一日、今曉主上行幸上皇、○中

後

御所高陽院、十二日、今夕於主上御前、

有種々御會遊事等、上皇同御覽之、舞女并猿樂等應其召云々、

〔吾妻鏡三十五〕

仁治四年、○中

寛元

九月五日戊申、將軍家入御、佐渡前司基綱大倉家、○中

薄暮舞女兩

三輩參入、翻廻雪之袖、人々及猿樂、鶏鳴以後還御、

〔吾妻鏡三十六〕

寛元二年五月十一日庚戌、於將軍御方、有御酒宴、大殿、○中

御

舞女

詠光、今出河殿

拍子、年廿二、施妙曲、大藏權少輔朝廣、能登前司光村、和泉前司行方、佐渡五郎左衛門尉基隆

等、答辨猿樂云云、

次左右各舞時隨大曲各一左蘇合新鳥蘇合自餘依時左必舞散手還城樂散更右必舞歸德散更之中樂有一足高足輪鼓等裏書云散更獵樂也

〔舞樂要錄上〕同番舞例 相撲節

承平六年同廿九日 左略○中 猿樂 右略○中 桔槔

寛治二年同廿七日 左略○中 散更 右略○中 桔槔

〔三代實錄五清和〕貞觀三年六月廿八日辛未天皇御前殿觀童相撲略○中 左右互奏音樂種々雜伎散樂

〔三代實錄七清和〕貞觀五年五月廿日壬午於神泉苑修御靈會略○中 命雅樂寮伶人作樂以帝近侍兒童

及良家稚子爲舞人大唐高麗更出而舞新伎散樂競盡其能

〔三代實錄三十八陽成〕元慶四年七月廿九日辛巳晦御仁壽殿覽相撲左右近衛府遞奏音樂散樂雜伎各

盡其能出內藏寮絹一百疋賜左右相撲人各一疋右近衛內藏富繼長尾米繼伎善散樂令人大咲所

謂鴻猷人近之矣亦各賜絹一疋

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十月廿三日甲戌天皇御紫宸殿右近衛右衛門右兵衛三府并右馬寮獻

物是去五月六日武德殿前就走馬之輪物也諸親王及太政大臣已下出居侍從已上侍殿上奏音樂

種々散樂

〔古今著聞集十相撲〕延長六年閏七月六日中の六條院にて童相撲の事有けり廿番はて、舞を

奏す略○中 舞終て船吉實散樂を供しけり

〔今昔物語二十八〕右近馬場殿上人種合語第卅五

今昔後一條ノ院ノ天皇ノ御代ニ殿上人藏人有ル限員ヲ盡シテ方ヲ分テ種合セ爲ル事有ケリ

色事敢大德之形勢都猿樂之態、鳴喟之詞、莫不斷腸解頤者也。抑上下不同、論以可辨矣。百丈高振神妙之思、默步古今之間、仁南常出猿樂之庭、必被衆人之寵、定緣者鳴喟之神也。先見其形、斷一端之腸、形能者猿樂之仙也。未出其詞、解萬人之頤。略○下

〔枕草子七〕人のなぞくあはせしける所に略○中古の人おこに思ひてうちわらひてや、さらにまらずと口引たれて、さるがふまかくるに、數させくとしてさ、せつ、

〔源氏物語乙女二十〕あざなつくことは、ひんがしの院にてし給。略○中かしこましようの、しりをるかほども、夜にいりては、中々いますこしけちえんなるは、かげに、さるがうがましくわびしげに、人わろげなるなどさまく、にげにいとなべてならず、さまことなるわざなりけり、

〔禁秘御抄中〕可遠凡賤事

凡界限五位藏人下、謁女房也、有藝者依其事近召事近代多、如寛平遺誠不可然、况如猿樂。藝庭上可止事也、

〔令集解職見四〕雅樂寮

別記云。略○中大屬尾張淨足説、今有寮舞曲等如左。略○中高麗舞師一人。散樂師一人、

〔續日本紀三十七〕延暦元年七月壬辰、勅。略○中廢餅戶、散樂戶、

〔儀式八〕相撲節儀

其樂器樂人等次第、具相撲司記文。略○中次登木人十六人、略○四列人次擲倒人四人、略○左右各二次散樂人

冊人、略○四列人

〔西宮記臨時〕祭使事

職掌之外、所隨身之官人、各一員、元五位者陪從官人一人、用府生之中見才者、散

〔江家次第七八〕相撲召合

都命太常教習每歲正月於建國門內廊八里爲戲場百官起棚夾觀昏以繼曉十五日而罷兩都各一親王主之自彈弦吹管以上萬八千人元宗以其非正聲置教坊於禁以處之若尋常饗會先一日具坐立部樂名太常上奏御注其下會日先奏坐部伎次奏立部伎次奏蹀馬奏散樂然後奏部次第並取當時進止舊制之內散樂一千人其數各繫諸州多少輪次隨月當番遇閏月六番人各徵資錢一百六十七文一補之後除考假輪半次外不得妄有破除貞觀二十三年十二月詔諸州散樂太常上者留二百人餘並放還

神龍三年八月勅太常樂鼓吹散樂音樂人並是諸色供奉乃祭祀陳設嚴警鹵簿等用須有矜恤宜免征徭雜科

〔雲州消息上本〕依無指事久不出仕只偃息蓬屋耳而昨日藤亞相源拾遺忽以光儀談云今日稻荷祭也密々欲見物如何不能固辭慙以饗應相共同乘到七條大路中有散樂之態假成夫婦之體學衰翁爲夫摸娼女爲婦始發詭言後及交接都人士女之見者莫不解頤斷腸輕々之甚也日暮事訖廻轅歸幕中謹言

四月 日

參議伴

### 大藏卿殿

請嚴訓旨

右下人產穢慮外觸來一昨日奉暇文世間事鬱念多端今有恩示欣感々々稻荷祭事先年依或人誘引密々見物尤有興之事也中爲果各々之願狼表種々之藝橫笛內藤太之橫笛琵琶禪師之琵琶黑長丸之傀儡白藤太之猿樂如此之輩不可勝計中不具謹言

乃刺

大藏卿

〔新猿樂記〕予廿餘年以還歷觀東西二京今夜猿樂見物許之見事者於古今未有中拍子男共之氣



散樂得業生正六位上行兼殿陣吉上秦宿禰氏安對、

對竊以人之稟性賢愚區分、樂之理情古今唯異、喜怒哀樂之相變、性之所適、謂之情動靜治亂之不同、聲所和謂之樂、是以上有明王、戴德者不知手舞足蹈、國無庶事、誇仁者既亦心動言形、常不可剛強其情、常不可和柔其性、方圓不定、智水欲隨、神器之中、進退難期、蒙雲宜卷、聖風之裏、遂使愚蠢之人、飽恩醉德、陶染淳化、質朴之性、見舞聞歌、合應御遊、金印紫綬之貴臣、規模茂真而勵袖、李部槐市之重客、庶幾吉見而揮衣、寔是供奉于中禁、慎密於外人者也、卽知半部者、非代勞之儲也、人臣事費輒以馳矣、胡籛者是備武之器也、武士豈對柱而負焉、少年同宿之處、戲言應知、衆口共啓之時、談笑難聞、安本忠之傳相撲、勸酒以進親衛之幕府、藤醜人之習傀儡、捧脯而弄承香之簾前、至于夫體隨月次光朗、圓座、若以案牘偏謂變體、恨倦誨人之情、亦稱相同、巧爲放光、恐有等佛之罪、馮虛亡是之作、出自謠士之浮言、含咲解頤之論、豈是耐臺之本業、我國家時反朴略俗、類花胥、萬民皆就樂遊、四方各戲伎藝、譬堯德於就日、彼猶有慙、歌舜曲於薰風、其未盡善、自然樂而不淫、神而又妙、神樂之雪夜、雖怪短男之輕身、踏歌之春天、偷恨高冠之吞舌、氏安假虛釣名、課無責有、學摧心肝、雖歎多年刺股之苦、問離視聽、未通一日缺鼻之詞、謹對、

應和三年六月

〔唐會要三十三〕散樂

散樂歷代有之、其名不一、非部伍之聲、俳優歌舞雜奏、總謂之百戲、跳鈴擲劍、透梯戲繩、緣竿弄杖、珠大面撥頭、窟窿碓子、及幻伎、激水化魚龍、秦王捲衣、篋鼠、夏育扛鼎、巨象行乳、神龜負岳、桂樹白雪、畫地成川之類、至于斷手足、剔腸胃之術、自漢武帝幻伎始入中國、其後或有或亡、至國初通西域、復有之、高宗嘉其荒俗、勅西域關津、不令入中國、具百戲、後魏道武、明元二帝增修之、每大設於殿前、後周武帝保定初罷之、至宣帝復召之作、殿庭晝夜不息、隋文帝時並放遣之、煬帝大業二年、又總追集於東

古事類苑

樂舞部二

樂舞總載下

雜樂

〔令義解一〕雅樂寮

頭一人掌文武雅曲正舞○義解略雜樂以外雜樂也

〔令集解四〕穴云稱雅正者依不加淫樂耳○中穴云笛工以上諸舞等雅樂耳

〔論語註疏十七〕子曰惡紫之奪朱也○註惡鄭聲之亂雅樂也○包曰鄭聲淫聲之亂者惡其亂雅樂也

〔延喜式二十〕凡諸節會日省輔丞錄各一人將寮屬以上及雜樂歌人歌女等候閑門外○若非節會御者預之行幸之所屬已上率雅樂人祗候

〔日本後紀十七〕大同三年十一月戊子勅如聞大嘗會之雜樂伎人等專奉朝憲以唐物爲飭令之不行

往古所議宜重加禁斷不得許容

〔本朝文粹三〕對是辨散樂

問散樂之與其來尙矣俳優入魯還當斷足之刑暢軒來朝自爲解頤之觀仰尋前日之伎歌俯察當今

之風俗不關周禮施人之所學亦殊漢典遠夷之所獻船太之新鞵鞞人爲美談魚丸之世羅國世稱妙

舞未審揚鞭騎半莖指何方而逃去傍柱負胡篋爲誰人而裝備安勅氏之臨老相撲難辨其師傳吏部

王之惟新傀儡欲聞其秘術隨月次而變體拾遺之說爲眞爲僞馮圓座而放光亞將之談非毀非譽子

傳儒家之累業開翰苑之詞華宜學峽猿之奇態莫泥水鳥之陸步

散樂

邑上御製



凡入合之舞者、如惜曲之終、至於樂屋之内、猶如舞之可舞入云々、

〔雜秘別錄〕賀殿

さ。ら。ゐ。つ。き。といふ事は、べちの事なし、一の物ばかりまふとかや、ひざをつくをいふ、賀殿と太平樂急とにこのてあり、太平樂には急にわをつくる、わといふはたちをぬきて、左さまへまはるをいふ、めぐる時御前をすぐるおり、一のものひざをつくなり、更居突さらにゐつとかきたるなり、

詠

〔歌舞品目〕

詠<sup>七上</sup>

歌<sup>七上</sup>

協<sup>七上</sup>

律<sup>七上</sup>

舞<sup>七上</sup>

樂<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

詠<sup>七上</sup>

〔續教訓抄二下〕

或人云ク、舞樂ノ曲ニ詠ト云事アリ、思ヲノブル儀ナリ、其心ヲノブルユエニ、

モイウナリ、昔ヨリタエズシテ、傳ルハ、輪臺青海波、採桑老等也、是ハ舞アルホドノ儀ニ、略スル事

ナシ、陵王ノ詠ハ、タヤスクスル事ナシ、公家ニテハ、別ノ勅ヲカブリ、サナラストコロニテハ、御定

ヲカブリテスベキ事ナリ、但シ身ニトリテ、サモト思ハムトコロニテハ、ハカライテスベキナリ、

此外案、摩迦陵頻菩薩、河南浦汎龍舟、三臺、五常樂、賀王、甘州、還城樂、師子、貴德侯、胡德樂、是等ハ詠ア

リトイヘドモ、當世舞アルトキモチキズ、柳花苑、庶人三臺、聖明樂、想夫戀、安弓子、長命女、兒越天樂、

是等ハ當世舞モナケレバ詠モモチキズ、ヤスキホ口ツ事ナガラ、カヤウニシリワケテ爲ベキナ

リ、



五常樂ハ不吹止急、卽次第入舞也。如布舞、鳥舞、如二五常樂。

重吹破急人舞

胡飲酒 負殿 三臺 傾坏樂 皇慶 喜春樂 北庭樂 甘州

凡其入綾ノ末物ニテ曲ヲツクス事ハセヌ也、ワレシリタレバトテ、サシモナキ所ニテ曲ヲツクスベカラズ、先達制止セラレタル事也、

抑公家ノ舞御覽ハ庭也、樂屋遠クバ舞臺上ノ手ヲ舞テ、スコシ步入様ニシテ、立返テ樂屋前ノ手ヲ舞ベシ、樂屋近シテ二様ノ手惡カリヌベクバ、臺ノ程ヲバ下テ、舞臺樂屋ノ中半ニシテ舞也、又呂返テ猶可仕有御定、膝ヲ突居テ請之、スコシ進出一曲ヲ可舞也。相續テ以前ノ手ヲ舞、ベシ、同手ハ無念ノ事ナリ、

〔樂家錄三十七〕舞形教訓

舊記曰、凡舞之形者、左右之姿其法異、左方舞者假令如秋風吹紅葉、右方舞者如楊柳隨于春風云々、凡舞之習法、禁戒舞家各有詳說、今取其最爲大要者、舉之左、

凡奏舞者、以八方爲正面、可不忘于意、假令或只以前一方耳爲意、則忘左右後此類也、舞人進之法、後參之舞人者、量庭上無踰躡、可出樂屋、而意宿于舞臺無滯可步也、

凡於舞臺有步則無意、不可步如有思步爲佳、手指之法亦意做之、

凡踏足者不高踏、鳴爲佳、折膝以踵踏之、於躍上之舞翹落居也、是等之類皆做之、

凡伏肘之類者、少傾如打掛于顔、而手先屬目可也、是等之類皆做之、

凡取梓之法、將取之時先見之、是其法也、爲會得梓之形勢也、意如宿于梓可也、

凡著面之舞者、必先見其面、是其法也、見面是能識面形、爲意與面形同一奏之也、帶劔之舞亦做之、

凡舞形者、以舒爲佳、故必欲當于太鼓之拍子、舞則易進、而舞或至于速少後、當于太鼓餘音舞之、則其節自佳、每拍子之文亦皆做之、

次列ノ輩ノ假ノ一者タルハ、左登橋ヨリ上テ、右へ步渡テ、初メテ手ヲバ作ルナリ、庭儀准之、  
入事ハ調子ニ笙笛付テ、鞀鼓打テ後先頭ノ始ムルヲ見合セテ、一度ニ手ヲ作リテ、左廻ケ入ルナ  
リ、下臈次第ナリ、向立舞ハ上手モ下手モ同中へ入也、素王、打球樂、太等舞ナリ、○中  
入綾可舞口傳、舞臺ノ中半ニシテ、御前ノ方へ立直テ、舞始メテ登橋ノ程マデ舞ナリ、口傳云、舞臺  
ハ一者不舞也、庭ノ入綾ハ庭トヲケレバ、足ヲコマカニフミテ、二寄バカリハ寄テ舞始ナリ、樂屋ノ  
近ニハトク始テ、打返テ樂屋へ舞廻リテ舞也、借一者タル時舞臺ノ上ニテ舞手ヲバ、庭ニテハ舞  
替也、久不可舞、樂一左ニモアレ右ニモアレ、入綾ハ以御前爲本舞ナリ、但爲正方所ニハ、

### 入綾舞手者

賀殿ハ更居突切舞、但無更居突時ハ、此切之中ノ手ヲ抽出舞ト、甘州ハ五帖舞、口傳云、初ハ拍子ヲ  
後六拍子ヲ爲三舞手、其外ハ入綾或手ヲ舞加也、三臺、傾杯樂ハ、中ノ手ヲスキイダシテ舞、舞似兩曲、喜春樂、五常樂ハ  
ナレドモ、白楚ツカラニ有留ベシ、打入手ヲ舞ベシ、但一連ハ打テ返テ、一手北庭樂ニモ中古ハ舞キ、近來常不用之也、呂乙並後手ヲ舞  
クテ面蘇合、太平樂ニ以別御定、入綾舞事アリ、各急之中手ヲ抽出舞也、是有口傳、陵王入綾ハ、御賀ニ若君ニマワセ  
マイラス一切、不知餘人也、仍、拔頭ハ南面手舞ケリ、其ニモ家々口傳侍ベシ、如此カキヲクトハイヘドモ、大旨バカリナリ、仍心ヘガタカルベシ、  
能々師說ヲ受テ後、先立ノセラレムヤウヲミルベシ、舞人ノ體拜ノミユル事ハ、只此ノ出入ニア  
リ、能々シツクベシ、近來舞人殊ニ不覺見事、只有  
光時記云、前宇治殿下御存生當初平等院一切經會、三臺一時ニ光季舞入綾、右舞人正資節資訴申  
云、入綾者在右舞也、左舞ニハ自本無之、今光季等作之、其志欲失、右舞人也、因茲被召問光季、光季陳  
申云、左舞多以調子返入舞不舞之、以樂於人舞等者皆存之、自本依入綾舞也、所陳申有謂仍彼等令  
閉口畢云々、

左舞以樂入時有人綾口傳

頭ニ對テ、舞ノ切タヲ申含テ、其後笛吹禰取テ吹調子、三句許之後可打羯鼓也、其後舞人ハ出ナリ、登舞臺スコシアユビヨリテ、右足ヲ踏出シテ、諸手ヲ披テ、左足ヲ進テ、踵踏諸手ヲ合テ、右足ヲ爪立テ、ヤワラゲツ、延立ス、シヅカニ落居、右足ヨリ踏進テ、左足ヲバ付テ、一番々々步行ナリ、口傳云、ヲヨギ虫ノハウガゴトシ、我立所ニ行立スレバ、左足ヲ踏出テ、右足ニ如先延立テ落居テ、右手ヨリ一ヅ、前ニ下テ、右足ヨリ退立ナリ、

次以道行出作法ト云ハ、笙篳篥ノ調子ハ如先ナリ、笛禰取テ吹出道行セバ、笙篳篥ハトマリテ、太鼓ノ初拍子ヨリ可付、一説ニハ第二拍子付之出作法ハ大旨同事ナレドモ、手ヲ合スル事モ、延立落居事モ、太鼓ハ拍子ニアワスベキナリ、步行事モ羯鼓ノ拍子ニ踏合トヒサスナリ、調子ニテ出ヨリモ、スコシハヤカルベシ、

向立舞、大旨同體ナレドモ、上手ハ右廻向、下手ハ左廻向テ對面ヲスルナリ、

平立舞 五人立樣 二者 四名 五者 一人 乃至七人、九人、十者 一人、如此立也、

玉樹ヲ本トス、有二説、一説云、以中央爲上、臍、此ヲ爲本ト、以左右端爲上、次説兩儀ノ時ハ、何舞トイヘドモ平立ニス、所ノ樣ヨリ中端ハ立ベシ、ナカハシ

三行立樣 又行立樣 横サマニハ一連ヲ四ニテ、次第、東ヲ下臍ニ立ナリ、

三者 六者 九者 番長

二者 五者 八者 十者 舞人十二人 相撲節、句、節會、如此立

一者 四者 七者 番長

治曆三年三月廿五日、興福寺供養萬歲樂三行十二人立、但番長ハナシ、此立樣不知人能々可令秘藏也、

抑舞ノ出入ニ違踏ト云事アリ、左右ノ一者ノスル事ナリ、

サシカタナルキヲメテスシムナリ、□タルコハクミユ、腰ト云、膝ト云、タワヤカニ、上下ノヨクヨクナリアフベキ也、次踏足モ臺ヲナラサズ、膝ヲリリテ踵ヲラク、爪立足モ拍子ニアハスベシ、高麗ル舞ニモ爪立テ、ヤガテ落居ハ臺ナリ、事ナシ延立シ、落居モヤハラカニスルヲ吉舞人トハ云ナリ、去<sup>シテ</sup>肘モ伏<sup>シテ</sup>肘モ拍子ヲマチテ、シヅカニカナヅ、腰ニ付タル手モ、拍子ゴトニシムルナリ、又伏肘ヲ打ニハ、スコシカタブキテ顔ニ打カケテ、手ノサキニ目ヲカクベシ、

次器量神妙ナラ子ドモ、ヨクコウラダニモイレツレバ、目出ミユルナリ、只人ニヨク、物ヲラシユベシ、ソレニ、スギタル稽古ハナキナリ、古今無雙ノ人々モ、御賀ノ舞ノ師、妓女ノ舞師、次ニハ童舞師ナムドシタル輩ハ、コトノホカノ事ハナキトゾ申侍、マコトニサ候メリ、我家ノ中ニテモ、庭立エム行道ナムドセムトキモ、足踏コシヅカヒラバシツクベキナリ、又フシタルトキニ、中々モノハ案ジツバケラレ侍ナリ、立居ニ付テ子テモサメテモ心ニカクベキ道ニテ侍ナリ、思ノキヌレバ、ナヅカヌ曲ニテ候ナリ、次舞ノ姿、昔ニハ今ハカハリタリト古人申、尤モコトハリニテ侍ナリ、近來ノ若キ舞人等、一切ニセムシヤヲカフムラズシテ、僅ニ手ヲ移得タレバ、ソレニテカタノゴトク事ヲナシテ、コマカニ物習フ事ヲバ物ウキ事ニシテ、道ノフカキ事ヲシラズシテ、サウナリイタレルヨシヲ申フルマフハ、人ゴトノ事ニテ候也、又父ニモ老筆シヌレバ、行步合期セザレバ、體拜モカワリユク、進退モ物ウクヲボユルマ、ニ、コマカニモラシヘズシテ、ムナシクスギヌ、相傳ノ譜モチタルトモガラモ、無智文盲ナレバ心得ガタシ、譜ナムドモタザル物共ノ事ハ、コトバニモトラズ、愚案ヲモツテ他人ニサヅクル間、一曲ノ内ニ僻説ドモハイデクルナリ、此ノ様ヲ存ジテ本説ヲウシナハズシテ、子々孫々ニモ可授也、○中

一舞出入作法 調子道行聊其ノカハリメラ存ズベシ

先吹笙調子ヲ、次ニ箏樂ニ編取テ即吹調子、ヨク、吹スマサセテ、舞人出ト思フ時ニ、笛吹ノ音



モ方角ヲスゴス事モセヌナリ、其様ト云ハ、伏肘モ中央ヲスゴサズ、指手モ正方ニ指トトリ、目尻  
 指<sup>組</sup>コシテニハツ足踏モ足ニ准ズベシ、次ニ其身ヲユルベズト云ハ、心ヲユルサズシテ、他事ヲ  
 思ヒマゼヌナリ、樂ヲ耳ニトバメテ、心ニ拍子ヲ打ナリ、殊ニ走物ハ體ヲ責テ、本ヲ折置ガゴトク  
 ニ舞ナリ、延所ハコトサラニシヅカニ、早所ヲバ殊ニ火急ニ舞ベキナリ、

古老語云、舞ノ腰ハ春ノ柳ノ風ニ順フヲマネビ、乙袖ハ秋ノ花ノユキカフ人ニナミヨルガ如シ  
 ト、カヤウニ譬ヘテ侍バ、ヨク／＼タワヤカナルベシトラボヘ侍ナリ、其モ舞ノ體ニヨルベキナ  
 ムメリ、近來ノ右舞人ノ姿ハ、タトヘニモスギテナヘテ侍ヨシ、古人申メリ、マコトニモ父祖父ノ  
 體拜ニハ、スコシモ似侍ラズ、不審ナキニアラズ、<sup>私云、大方ノ子ニ舞ノ左右ヲ申ハ、左ハ秋山ノ紅  
 葉ヲ風吹ガゴトシ、右ノ大方ハ春風ニ柳ノナビ  
 トカナリ、</sup>次顔モチ、頭ヅカヒ、皆生レツキナレドモ、家々ノ先達ノヲモカゲヲ案ヅツクベシ、其  
 上傍輩ノ中ニ、ヨクイタリテ體拜モ吉、其骨モ得タリトミエ、人モイサシデ見テ、其振舞ヲ心ニカ  
 クベシ、ゾレトモハ鏡ト云コトノ侍ユヘナリ、又ワロカラムヲ見テ、ワレモアレタイニコソアル  
 ラメ、アワレサラレハヤト思フベシ、サレバ則房宿禰ハ親父則近舞ノ姿ニハ似ズシテ、一向光近  
 體拜ヲウツサレタルヨシ、上下人々イサメ侍シカバ、答ヘテ云、ワカク侍シ時、父則近教訓云、舞ノ  
 姿ハワレヲミル事ナカレ、アノ光近判官ノマハレンヲ、ヨク／＼ミルベシト、常ニ申サレ侍シカ  
 バ、シカ侍ニヤト申サレキ、光近一者ノ時ナリ、ウチマカセテハソレカラナスベキ事ナレドモ、ヨ  
 キ人ハ善惡ヲシリテカク候ナリ、イカニモ我身ヲ吉ト思云ベカラズ、人ニホメラルベシ、次ニ人  
 ノ姿ト、ノヘガタキモノナレバ、人ゴトニ難ジ候ベシ、アフノキタルヲバ正念ナクミユト云、ヲ  
 チクビナルヲバ物ヲ求ルカト笑フ、口傳云、鎌頭ト云事アリ、ゾノヤウヲ存ジテ、吉程ヲハカラフ  
 ベシ、次ニ見<sup>シ</sup>目モノ、口目ヲツカヌナリ、人ヲモ見、頭カロクナリヌレバ、口頭ト異名ニナル、只  
 乙手ノサキ／＼ニ目ヲカケツレバ、タマシイハアリテミユルモノカラトミノ姿モミユルナリ、









取手  
ヘ右手  
ナ手  
トニ  
ルヲ  
ナリ、  
左、  
同、

腰挿  
手

突  
右

腰付  
右左  
手、

延立  
ツ右、  
足  
ノヲ  
ビマ  
アタ  
ガラ  
ルナ  
ナリ、  
リ、

落居  
ザ

迦陵頻又鳥ト云、各羽 胡蝶又蝶云、各羽

菩薩行林邑物、別、大菩薩、 蘇利古合又蝶

一鼓舞人懸一曲、打鼓、 蘇利古前同

蘇芳菲別、駿東、如、師子、 貍龍別、駿東、如其胸、鼓馬、

猿樂相、撰、節、有、之、唐、拍、子、物、奏、之、但急、 吉簡此曲、同、猿樂、等、ヲ、サ、ウ、ス、

師子供養、御、願、之、 狛犬有、別、亂、聲、之、

一無答舞

放鷹樂野行幸、奏、別、駿、東、白、 汎瀧舟童舞、常樂、會、

清上樂童舞、常樂、會、 倍別、破、陣、守、天王、寺、舞、之、

河南浦常樂、會、於、中、間、舞、之、

昔ヨリカク合ヲキタレドモ、舞御覽童舞ナンドニ如何ト云事ナシ、只便宜アル様ニ合セタリ、

サレドモ無下ニ由シナク、先例モ不辨合ザレバ、子細知タル人ノ前ニハソシヲナスナリ、大

曲ナレバ何レヲモアハスルナムナシ、萬歲樂ニ新鳥蘇合タル事アリ可准、大曲ニヤ、代々日記

ヲ能々見覺ベキ也、

〔續敎訓抄舞樂譜〕或人云ク、舞ノ番ハ昔ヨリサダメオク舞アリ、シカレドモ又時ニヨリ折ニシタ

ガヒヲ、カヘテツカフ事モアレドモ、大方ノヤウヲバ尤存知スベキ事ナリ、○中

或人云ク、左舞ハカズオホク、右舞ハカズスクナシ、コノユエニ答ノ舞ハ、ヨロシキヲアワセテ舞

ツテノコトナリ、○中

或人曰、一向答舞ナクテ左バカリ舞アリ、

放鷹樂 別裝束アリ、野行幸ニ奏之、白河行幸ニハ船樂ニ奏之、

感城樂祖片 絃切有面、受變云、一說

央宮樂祖片 都志近來此舞絕了、又

蘇莫者有面、別鼓、持左 蘇志摩別鼓、來、著、簫、蘇氏舞也、

承和樂祖片 仁和樂祖片

散手有別鼓、東、加、破陣、甲、貴德、別鼓、東、歸、鍾、隻、云、

陵王有別鼓、東、武、部、小、面、納、蘇利、別鼓、東、有、二、樣、金、青、色、

案摩有舞、答、ス、有、面、二、樣、冠、蘇利、古、有、舞、白、楚、持、

無答舞

玉樹有別鼓、東、比、引、也、謂、之、有、玉、樹、後、古、諸、又、金、細、兩、臂、也、今、世

秦王有別鼓、東、如、四、天、破、陣、有、面、悅

賀王有別鼓、東、又、賀、皇

石川有別鼓、東、此、舞、近、來、大、方、明、也、

秋風樂祖片

春庭樂有別鼓、東、謂、之、春、庭、樂、又、春、庭

嘉頭樂有別鼓、東、謂、之、嘉、頭、樂、又、嘉、頭

汴州有別鼓、東、謂、之、汴、州、樂、又、汴、州

皇座有別鼓、東、謂、之、皇、座、樂、又、皇、座

北庭樂有別鼓、東、謂、之、北、庭、樂、又、北、庭

還城樂有別鼓、東、謂、之、還、城、樂、又、還、城

一別番樣

矣

〔教訓抄〕舞番樣

皇帝在甲、書有、劍、加、新鳥蘇在面、甲、合肘

團亂旋有甲、諸古鳥蘇有面、但近來、不用之、

春鶯囀有甲、諸、寶、退宿德有面、李、合肘、

蘇合有甲、諸、進宿德有面、李、合肘、

萬秋樂有甲、近來、不用、地久有面、甲、准、大曲、執、後、

喜春樂有甲、近來、不用、白濱有面、甲、准、大曲、執、後、

桃李華有甲、近來、不用、皇仁有面、甲、准、大曲、執、後、

青海波有甲、近來、不用、敷手有面、甲、准、大曲、執、後、

太平樂有甲、近來、不用、狗梓有面、甲、准、大曲、執、後、

打球樂有甲、近來、不用、垣破有面、甲、准、大曲、執、後、

三臺有甲、近來、不用、甘醇樂有面、甲、准、大曲、執、後、

傾坏樂有甲、近來、不用、胡德樂有面、甲、准、大曲、執、後、

萬歲樂有甲、近來、不用、延喜樂有面、甲、准、大曲、執、後、

賀殿有甲、近來、不用、長保樂有面、甲、准、大曲、執、後、

採桑老有甲、近來、不用、新秣羯有面、甲、准、大曲、執、後、

胡飲酒有甲、近來、不用、林歌有面、甲、准、大曲、執、後、

拔頭有甲、近來、不用、八仙有面、甲、准、大曲、執、後、

五常樂有甲、近來、不用、登天樂有面、甲、准、大曲、執、後、



左三臺 卅州 太平樂 散手 陳王

太平樂 乙王 夜叉王 松若 禪王 瑠璃王 幸王

散手 乙王 陵王 松若

右長保樂 林歌 狛梓 貴德 納蘇利

狛梓 萬歲 金王 千手 乙鶴 金毘羅 竹王 各著淺黃直垂 貴德 萬歲 納蘇利 禪王 幸

王 豆王

女舞

〔歌舞品目〕九曲通稱〔女舞〕內敷坊ノ婦人ノ  
妓女舞 女舞ノ一名ナリ、續敷、訓抄三篇條ニ、少納言入  
也。

〔教訓抄七〕一舞姿法

女舞 天長寶壽樂十人 煬王樹後庭樂八人 赤白桃李華十二人

〔續教訓抄〕舞案譜 或人云ク、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタアリ、○中女舞ハ春鶯

囀十人 玉樹十二人 桃李華十二人 喜春樂六人 萬歲樂八人 皇帝六人 萬秋樂ナリ、或記云ク、內敷坊

同用ル時、慈尊萬秋樂ト名ベシト云、

走物

〔歌舞品目〕九曲通稱〔走物〕武舞ノ類ノ其舞步趨、疾速ノ稱ニヤ、教訓

〔教訓抄七〕一舞姿法

走物 散手 陳王 披頭 置城樂

〔教訓抄七〕口傳云、○中走物ハ體ヲ資テ木ヲ折置ガゴトクニ舞ナリ、延所ハコトサラニシヅカニ、

早所ヲバ殊ニ火急ニ舞ベキナリ、

香舞

〔歌舞品目〕九曲通稱〔番舞〕左ノ舞一曲ニ右舞一曲、奏スルヲ番ト云、二番三番等同ワ、コレヲ

〔樂家錄三十六〕舞樂有番舞也、其法先左方奏中華舞曲、右方爲其曲之番奏、高麗舞曲也、卽號之一番

皇帝破陣樂 秦王破陣樂 散手破陣樂 倍臚破陣樂 武將太平樂

文舞目錄

皇慶 春露曉 玉樹 桃李花 喜春樂 萬歲樂 泛龍舟 或記、皇帝、及萬歲、

〔歌舞品目〕 九舞曲通稱、童舞、龍舟、清上樂、胡蝶、登天樂、トアリ、リ、コノ外ニモ、胡蝶、飲酒、陸王、納蘇利、ナドモ、童舞、

舞ニナヘシコトアリ、又、ソフハマヒトモイフ、

〔教訓抄〕七 一舞姿法

童舞 清上樂 五常樂 皇慶 汎龍舟

〔續教訓抄〕 舞案譜、 或人云ク、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、シナカハレルスガタアリ、童舞ハ迎陵頻、五

常樂、皇慶、汎龍舟、清上樂、胡蝶樂、登天樂、

〔樂家錄〕三十七 童舞之目錄

迎陵頻 五常樂 皇慶 清上樂 泛龍舟 胡蝶 登殿樂 東遊 右八曲、舊記、本童舞也、云々、

賀殿 萬歲樂 輪臺 打毬樂 還城樂 蘇利古 右六曲、體源鈔、曰、童舞也、云々、

羅陵王 納蘇利 拔頭 散手 右四曲、本非童舞、近代用之、

〔中右記〕康和四年三月九日甲子、今日有御賀試樂、○中 未刻御出衣、東帶、御中略、 爰光景漸傾、此間居、公因

之先不守次第、欲召胡飲酒、內大臣起座歸殿上、出從仙華門、渡前庭、被向樂屋、一家公卿、左衛門督、後雅

源中納言、信國宰相中將、顯通右兵衛督、賴師相從之、爲令裝束、胡飲酒被來向也、於東中門廊邊、童舞三人令

裝束、內大臣子童、名雅定、胡飲酒、藤中納言子童、名季、此間發亂聲、內大臣以下歸著御前座、胡飲酒出、

庭中舞一曲不誤、萬人感歎、○中 頃而又亂聲、龍王童舞之一曲、依不誤、衆人頗感氣、

〔吾妻鏡〕五十二 文永二年三月四日癸酉、今日於御所、鞠御壹覽童舞、是所被引、移昨鶴岡法會舞樂也、

先舞童等相分南北著座、爲上、以四土御門大納言、花山院大納言等、被候、簾中云云、○中

〔唐六典十四卷〕凡宮縣軒縣之作則奏二舞以爲衆樂之容、一曰文舞、二曰武舞、宮縣之舞八佾、軒縣之舞六佾、文舞之制、左執籥、右執翟、二人執纛以引之、

文舞六十四人、供郊廟服、委貌冠、玄絲布大袖、白練領、標白紗、中單絳領、標絳布大口袴革帶、烏皮履、白布襪、其執纛人衣冠各同也、

武舞之制、左執干、右執戚、二人執旌居前、二人執鼗鼓、二人執鐸、四人持金鐃、二人奏之、二人執鏡以次之、二人執相在左、二人執雅在右、

武舞六十四人、供郊廟服、平冕、餘同文舞、若供殿庭服、武辨、平巾幘、金支、緋絲布大袖、緋絲布編襪編、甲飾、白練襜褕、錦腰、蛇起梁帶、豹文大口布袴、烏布襪、其執旌人衣冠各同、當色舞人、

餘同工人也、

### 〔教訓抄七〕一舞姿法

武舞皇帝破陣樂 奏王破陣樂 散手破陣樂

〔續教訓抄舞案譜〕或人云ク、舞曲ノ名ハ同トイヘドモ、ミナカハレルスガタアリ、○中 武舞トイウ

ハ、皇帝破陣樂、秦王破陣樂、散手破陣樂、倍臚破陣樂、武昌太平樂、是等ハミナ武ノ功ヲアラハシテツクリイダセルユヘニ、童舞女舞ニハニルベカラズ、○中 文ノ舞トイウハ團亂旋已下ノ劍梓トラザルヲ云ベキナリ、大國ノナラヒ文ノ德ヲアラハシテツクレル舞ヲバ、文ノ舞トナヅク、武ノ功ニヨリテツクレル舞ヲバ、武ノ舞トイウ、歌ノ詞又カクノゴトシ、

### 〔樂家錄三十七〕文武之舞目錄

按本朝稱武舞者有五曲、皆帶太刀持梓之曲也、此外雖類之者有一二曲而不載于武舞之中、稱文舞者有七曲、皆不帶太刀、不持梓之曲也、類之者亦有數曲、而不載于文舞之中、共有其故乎、未知其說、

### 武舞目錄

供花樂

弄槍

十天樂東大寺講堂供養始奏之、

赤白蓮花樂

汎龍舟同寺法花會奏之

安城樂同寺用

林邑樂天竺ノ名ナリ 佛哲傳之

拔頭

陪臚 烏 菩薩

又云胡飲酒

蘇莫者

劒氣禪脫

輪鼓禪脫

用參音聲曲

春庭樂

有舞時新樂奏之、仍加三ト拍子、

賀王恩

御賀奏音聲奏之、右ハ古樂、左ハ新樂、拍子奏之、

用退出音聲曲

酒胡子

武德樂

輪鼓禪脫

長慶子

常武樂

進蘇利古

用駝馬曲

汎龍舟

勝奏也

拔頭 陵王

蘇芳菲

小馬形

亦名狛龍

用相撲節曲

劒氣禪脫

拔頭古樂亂聲用之、勝方用之、

吉簡鼓樂是也

用產所曲

長命女兒 千金女兒

用元服曲

裏頭樂

私云、此事不書、古事者大ニ習事、

樂ト云事ニ如此注之、大略諸記載之所勿論也、雖然當家用說不用說相交、以分別可沙汰者也、

〔令義解一見〕雅樂寮

頭一人

掌文武雅曲正舞、有千戈者曰武、

文武  
舞



以兩朝樂爲一曲

蘇合香ハ天竺所作、急一曲ハ唐土ノ作、霓裳ハ天上月宮曲、玉樹樂ハ唐土作、青海波ハ龍宮曲、輪臺唐土作、秋風樂一帖ハ唐朝曲、二三喚頭ハ日本作、賀殿急唐朝曲、破ハ日本作、

二曲異名

以輪臺號道行、以早輪臺爲序、以青海波爲破、以皇座急延吹爲道行、破急又如常、一説入時急吹猶號道行、

祝所吉事等不用樂

廻骨 柳花苑 老君子 竹林樂 又皇座舞 取捨衆之委也 扶南 玉樹 遊子女 王昭君 想夫戀

參音聲樂

春ハ春庭樂 夏ハ應天樂 秋ハ萬歲樂 冬ハ萬秋樂 賀王恩 太上天皇御賀用之  
最涼州 內宴用之 澀河鳥同上 臣下御賀ニハ萬秋樂、鳥向樂ニ、太平樂、慶雲樂、  
參音聲ニハ舞人懸一鼓也、仍古樂大鼓ヲ上也、タトヒ新樂タリト云トモ、參音聲ニ用ル時ハ、古樂大鼓ニ上ベキナリ、 高麗 顔序

退出音聲

長慶子 通用 還城樂 行幸還御用之 夜半樂 承和御時、宗明樂 御願供養、上  
樂奏之 海青樂 南地院給

越殿樂急

高麗 新蘇利古 放生會御興還御奏之 常武樂 同前

行道樂

秋風樂 鳥向樂 澀河鳥 裏頭樂 高麗 黑甲序 狛梓 都志 埴破 長保樂破

伊勢海 更衣

朗詠

春過 東岸 池冷 紅葉 曉梁王 嘉辰 德是

〔歌儼品目〕九 舞曲品見亡佚舞曲

吉志舞一名橋歌舞今傳ハラズコノ儀久米傳 小聖田儼其傳來ノ詳 隼人歌儼コノ歌儼中往

往ミヘレド延暦廿四年正月辛未朔乙酉永停大嘗年人風俗 鳥子名儼コノ儼今ハ伊勢亡神未

歌儼ト類樂國史ニミヘレバコノレバコノレバ 筑紫儼諸縣儼ニ舞共ニ續紀及令集解ニシヘタリ初名抄ルモ樂曲アリヤ未詳

〔體源抄〕一以二曲爲一樂

以輪臺爲序以青海波爲破共盤涉調曲

以汎龍舟爲破以散吟打毬樂爲急共黃鍾調曲

以鳥向樂爲破以白桂爲急共盤涉調曲

以長元樂爲破以千秋樂爲急共盤涉調曲 或長元樂急非千秋樂別曲也當家(豐原)說也

以安城樂爲破以越殿樂爲急破黃鍾調曲急

以新羅陵王破爲破以陪臚爲急破一越曲急

以保曾呂具世利爲破以賀利夜須爲急破一越曲急

以酣醉樂爲破以林歌爲急破一越曲急

以顏徐爲破以新河浦爲急共一越調曲

以三曲爲一樂

以朝小子爲道行以太平樂爲破以合歡鹽爲急破平調曲道行急ハ大食調曲

以鳥急爲道行以嘉祥樂爲破以賀殿爲急共壹越調曲

春庭樂 柳花苑 廻杯樂 颯踏 入破 酒胡子 武德樂

黃鐘詞

喜春樂破 赤白桃李花 央宮樂 海青樂 平蠻樂 西王樂 拾翠樂

盤涉調

宗明樂 輪臺 青海波 白柱 竹林樂 蘇莫者破 千秋樂

越天樂

太食詞

太平樂 一具 打球樂 傾杯樂急 仙遊霞 還城樂 拔頭 長慶子

右樂名四十五

高麗

延喜樂 地久 胡蝶 八仙 仁和樂 林歌 古鳥蘇 胡德樂 狍梓

還城樂 白濱 敷手 登天樂 貴德 納曾利

舞樂 拾番

萬歲樂 延喜樂 散手 貴德 迎陵類 胡蝶 甘州 林歌 太平樂

胡德樂 拔頭 還城樂 北庭樂 八仙 打球樂 狍梓 春庭花 白濱

陵王 納曾利

催馬樂

呂

安名尊 席田 山城

律

新秣鞞 八仙 石川 胡蝶 延喜樂 桔簡 胡德樂 仁和樂 長保樂 納曾利 林歌 蘇志摩利 地久 登殿樂 白濱

高麗舞曲全斷絶之目錄

都志 酣醉樂 狛龍 進蘇利古

高麗曲無舞之目錄

黑甲序 顏序 新河浦 常武樂

已上見于體源鈔者也、今類集之、

〔憲法類編二十三〕庚午三〇明治十二月十二日、雅樂局へ御沙汰、

今般大曲以下朗詠ニ至ル迄曲數別紙ノ通御撰定ニ相成候事、

別紙

大曲

蘇合香 三帖 破 急 平常ニ用 萬秋樂 破 同

春鶯囀 風踏 入 破 同 皇康 急 同

中曲以下

一越調

賀殿 急 破 鳥 急 破 承和樂 北庭樂 羅陵王 胡飲酒 破序 新羅陵王急

平調

五常樂 急 破序 萬歲樂 甘州 三臺急 春楊柳 林歌 老君子 陪臚

慶德

雙調



耳也其目錄舉之左者拍中及子近代亦舞斷絕者付之續人也

舞曲全傳之目錄

玉樹 迦陵頻 胡飲酒 北庭樂 菩薩 玉指 安摩 二舞 五常樂

倍臚 春庭樂 青海波 蘇莫者 太平樂 秦王 打毬樂 拔頭 東遊

查鼓

舞曲處方斷絕之目錄

皇帝序 本四拍子 音日就子中郭傳之者歸朝後遺忘中團亂旋入破本六帖一各二帖風 春疊  
序本二帖今傳者一帖鳥 賀慶破本三帖今承和樂序本六帖今傳者四帖本 陵王帖今傳者二帖 三臺序四  
樂共絕破本三 萬歲樂本五帖今傳者三帖 嘉頭樂本五帖今傳者一帖本 七帖今傳者五帖 皇慶序遊樂共絕 散手序  
帖今傳者二帖 三 萬歲樂本五帖今傳者三帖 賀王恩傳者三帖今 還城樂本七帖今 放慶樂本七帖今 蘇芳菲  
三帖今傳 領孟樂本三帖今傳者二帖 桃李花序四帖破本六帖各皆絕 威城樂本五帖今 河南浦本六帖今 蘇合序  
本七帖 喜春樂本三帖今傳 桃李花序四帖破本六帖各皆絕 威城樂本五帖今 河南浦本六帖今 蘇合序  
今如舞 二十拍子也末八拍子與風踏二帖舞樂共 萬秋樂序二帖今 輪臺返舞二返也 四秋風樂本五帖今採  
絕畢同二帖皆絕破本五帖今傳者三帖 共 萬秋樂序二帖今 輪臺返舞二返也 四秋風樂本五帖今採  
桑老 傳者五帖今 傳者四帖今

舞曲全斷絕之目錄

酒胡子 武德樂 最涼州 弄槍 澀河鳥 廻孟樂 河曲子 一弄樂 查金樂 查團橋 新

羅陵王 麗雲樂 扶南 勇勝 想夫戀 仙遊霞 天人樂 鹿人三臺 輪鼓禪脫 安弓子

長命女兒 千金女兒 柳華苑 海清樂 應天樂 安城樂 平蠻樂 散吟打毬樂 連華樂

重光樂 西王樂 拾翠樂 聖明樂 大定樂 長生樂 和風樂 宗明樂 越殿樂

高麗舞曲全傳之目錄

新鳥蘇 古鳥蘇 退走德 進走德 皇仁 狛粹 壇破 綾切 敷手 貴德 造物 狛犬





左樂ノ一名也、本  
文未ダ考ヘズ、

〔吉野樂書〕一舞人モトハ一ニテ有ケルガ、大神公持ガ時ヨリ、左右ノ舞ヲ分テリ、ム子トノ舞、胡飲酒、採桑老、輪臺、青海波、還城樂ナドヲモ、右ノ舞人トリコメテ、左ヘワタリテマイケルヲ、光末左ヘ青海波、バカリマチヲ玉ハルベキ由、申ケルニ依テ、正方ヨリ光末ニ傳フ、其ヨリ左ニハ舞也、

〔儀式〕正月八日講最勝王經儀

子時雅樂寮就座、各奏樂一曲、左唐樂、右高麗、諫問之時、撤樂、

大曲中曲小曲

〔樂家錄十三管總論〕左右樂大中小曲之說

左右樂雖有大曲中曲小曲三品、本邦不能作樂、故暫以所記譜面考之耳、抑以中華曲爲左樂、以高麗曲爲右樂、其中華曲中有四大曲、皇帝、團亂旋、春鶯囀、蘇合香、已上謂之四箇曲也、

萬秋樂本雖爲大曲之外、準之大曲以秘之、古今定目如此、已上以五曲爲傳受秘曲也、是等之曲、或樂始終、或其一具中之一帖、有序吹也、以之爲大曲乎、又樂始雖有序吹、終無序者、爲中曲乎、五常樂之類是也、予安倍季曲見中花

齊戴氏鼠撰、曰、今之樂、章至不足道、獨有正調、轉調大曲、小曲、異云々、見此說、雖中花、亦有樂曲、大小之異乎、

中曲者、延早八拍子、并延早只拍子之八拍子、四拍子、共皆爲中曲也、其早八拍子中、白柱、遊字女、仙遊霞、三曲與早只拍子之四拍子中、拔頭、已上四曲入于小曲部也、不知其故也、

小曲、延早四拍子、共爲小曲也、其早拍子中、酒清司、壹圍橋、小老子、王昭君、老君子、劔氣、禪脫、越天樂、已上七曲入于中曲部也、不知其故、又序與破、或破與急、并備曲入于中曲部也、凡賀殿、新羅、陵王、三黃、皇

上胡飲酒、已上八曲也、又朝小子、合歡鹽二曲爲中曲也、

按奏太平樂一具之時、以朝小子爲舞道、行用合歡鹽爲急、以爲一具依之、此二曲入于中曲部乎、高麗曲有四大曲、新鳥蘇、古鳥蘇、進走德、退走德、已上謂之四箇曲也、皇仁、地久二曲、本雖爲大曲之外、準之大曲

云々、又或記有白濱亦準大曲之說、然則已上三曲也、左方大曲者、雖不知其說、考譜面則以有序吹、知



人はゐる也。

渡物

〔歌傳品目〕五 奏樂汎稱「渡物」其樂曲ノ本調ニ變シテ、他ノ調ニ移シ、換ルノ名ナリ、讀取調抄、渡物ハ只也、以之先際トシテ、登越調ヲカギレトナリ、此調子元ヨリ樂ナシ、春庭、樂柳、花苑、共ニ渡物要ヲ引テ曰扶南、天竺、樂隋、代用、天竺、樂列、樂部、不月、扶南、煬帝、平林、色、獲、扶南、工入、及其、飽、聲、朴、應會云、可用、以、天竺、樂、轉、寫、其、聲、ト、コノ、轉、寫、ト、云、云、

〔教訓抄六〕渡物曲

鳥破急

春鶯囀風流云序、入破云破、

胡飲酒破

嘉殿急

武德樂急

以上七曲御遊ノ時料ニ所被渡置雙調也仍舊續之具ニ見本調子此樂目錄古中御門右大臣宗忠之家目錄也

〔樂家錄十三〕

渡物樂曲相渡之法此章中以調名爲律名、應舊例耳

渡物之樂曲者、自呂渡于呂、自律渡于律、律、呂、新舊隔、於筆者改其調耳、手文等無異、直如本朝彈之六之律也、八謂八者、至於八音相生之律也、律呂相生之律言也、然則各聲樂之詞、皆以其律當于順八或逆六之律也、八相生者是也、謂逆六者、歸于相生之律言也、成曲也、以是呂渡于呂、律渡于律、而常用之、亦自律渡于呂、自呂渡于律、則更非改制譜則不可成曲也、故常無此事、管類者雖自呂呂、自律律、是皆改制之故、無律呂之差別也、凡制法曰、先以笙譜可渡之、假令壹越之樂、移于平調之樂、則先書壹越樂曲之譜、而左附平調之譜字也、但其譜字之律考之、則自壹越平調者、當于二律上也、故盡二律上書之也、自餘倣之、如琵琶亦亦依調假令有鸞鏡等相當、此聲音無于風笙、故前後之律用之、至爰有口傳曰、自呂渡于呂、則用上律、自呂渡于律、則用下律、亦自律渡律、則用下律、自律渡呂、則用上律也、上者、盤淺、下者、黃鐘也、餘倣之、如此書定而後、笛箏篳之譜字可附之、又曰、笛箏篳如笙譜直用之、則手文無分別、故排手文等、可否損益之、以可定其一體也、是以初學者、不堪其任矣、郭曲等附物、相

渡于五調子皆同之、○下略

左樂右樂

〔歌傳品目〕五 奏樂汎稱

「左樂」左方ニ用フル樂ノ義ニシテ、

右樂、又右方ニ用フル樂ノ義ニシ

尊樂

〔龍鳴抄上〕一節調「春鶯啼

てうしを吹てゆせいをしてまひの出るなり、いくかへりといふことなし、まひのたちとゝまるにまたがふべし、

〔歌舞品目〕五上「道行」舞人樂屋ヲ出テ、舞臺ニ行キ向フノ間ニ奏スル樂ヲイフ、龍笛、横要抄ニ、エトリ、

〔續教訓抄〕舞臺調或説云ク、道行ニテ出ル時、足踏ヲ拍子ニアワセタルハ、シタ、マリタルヤウニテミニクキナリ、サレバ調子ニテ出ル時ノゴトク、足踏ヲアナガチニ拍子ニアラズシテ出ベキナリト云々、但是ハ嫡家ノ説ニハアラザルナリ、

用道行舞者

蘇合出入ノ時、用之太平樂出入ノ間、吹、賀殿出時、吹、鳥青海波以口切一反、就、皇座出時、

用之、入時、急、吹、一菩薩出入ノ時、用、倍臚舞臺之間、稱、道、行、事、伎樂行、道、之、時、吹、之、仍、就、道、行、或、

以樂號、道、行、云々、新羅陵王出時、以急爲、道、行、賀王恩出入ノ時、以急爲、道、行、勇勝出時、吹、急、但、

道行、一、越殿樂出入ノ間、吹、急、用、之、賀殿かてん

〔龍鳴抄上〕一節調賀殿

調子をふいて、鳥のさうをみちきにする、かこを打べし、いくかへりと定めず、舞のゆきたちをはるに随ふべし、

〔龍鳴抄上〕武將太平樂といふべし、

道行なりおばてうせうしといふべし、てうしをふいてこのみちきをしていづ、まひたちとまるにまたがひてとゝまるつねのごとし、

〔殘夜抄〕朝靨行幸には定たる舞つねの事にて、別事なし、供御のまいる時はまはす、みちきとて舞



林邑亂聲林邑ハ天竺ノ名也此亂聲古樂亂聲ト同詞ナレドモ四部樂屋ノ片取時ニ呼林邑也津介勝道成之説云用此亂聲時自口穴不吹出初度如此可吹中自口穴吹出也其詞云中丁火タ中丁火タ中タ五中タニロ中タロ如此吹也今世不用彌取ノ様ハサキニ申ツコレヲ分別シテ習ヲヨク物ヲ習トハ申也以此亂聲出舞菩薩迴樓頻拔頭陪臚コレミナ婆羅門僧正自天竺渡給タリ林邑ハ天竺ノ國名ト申タリ委ハ内傳ニゾ侍ラン可尋

高麗ノ亂聲此亂聲定テ高麗國ヨリ渡テゾ侍ラム其次第三度不見可尋此亂聲ナ吹時ニ彌取ナセズ吹雙ノ穴吹出吹尤爲秘説以此亂聲出舞胡蝶林歌新末説尤爲秘説

〔樂家錄三鼓總論〕亂聲之説

亂聲者笛之曲而其品凡有三皆無拍子之文大鼓始終片桴而無遲速擊之鉦鼓亦用之羯鼓不用之也一曰集會亂聲新樂按拍子之位可隔脈度數一許乎二曰林邑亂聲前之古拍子之位可隔脈度數二許乎三曰小亂聲新樂取始終之詞而短急速奏之故大鼓鉦鼓亦同之拍子之位當于每脈度數乎是其大抵也擊止之法見譜別無子細右桴合如序退意擊之可也亦有設之亂聲也是非曲名假令奏聲樂供奉于神輿而將入中門等時止之而請取之樂屋以奏亂聲故有此名別無子細

〔龍鳴抄上〕迴陵頻なり

林邑の亂聲にて舞ひいづこれは古樂の亂聲ともいふ也菩薩のいでん時は林邑といふべしこ  
とまひいでん時は古樂といふべしとみえたる事あり能々えれらむ人に尋ぬべし

陵王羅陵王といふべし

まづ亂聲をす新樂亂聲也舞樂のはてにする時はすこしをすべし競馬すまいなんどのはてにする時はながうするなり略競馬にははてのつがひのはしりのぼるにはじめて入るまですべし相撲にははていでかゝるにはじめて入りはつるまですべし



古記云、凡欲樂發之時者、先亂聲ヲ返々能々可爲也、其故者、壹越調士也、不固者衆物不正、禮ハ理也、又治也、理衆聲也、治衆者也、是土御門大納言說云々〇中略

集會亂聲者、諸神事佛事爲事調最前奏新樂亂聲、一返也入御亂聲者、朝觀行幸之時奏也、入御奏、大納言奏也奏畢還給時樂屋之方、以笏令搔給時奏、左右亂聲同音、左新樂、右高麗、

貞應元年正月廿日、高陽院朝觀行幸入御奏、九條大納言良平前ニ相違セリ、入中門スデカヘニ橋

隱ノ間ヲスギテ打出間ニ向テ奏玉フ常也、是ハ中門ヨリ直ニ西ヘ渡玉フ、橋隱ノ間ニ向テ奏給

一是又催亂聲ヲ、笏不搔、是雖然行幸ハヤガテナリシカバ、樂屋ヲシテ奏亂聲、御家習熟、而寬喜四年正月十二日、明陽殿行幸ニ源大納言通方又同ジ但元二度奏ス、相違尤不審也、可尋仁和尚舍利會

御室入御ノ時、奏、左右亂聲、天台舍利會屋主入御、同興福寺常樂會正權別當出御、奏、新樂、以下也、處々ノ首

官長吏出仕ノ時、奏、亂聲、常例也、新樂、御神奉下、下若遷奉他社時、奏、新樂、亂聲、度數無嫌、コレミナ祝事也、サレバ音

聲ノ中ニハ、亂聲スグレタリ、管絃ノ中ニ笛スグレタリ、打物ノ中ニハ大鼓スグレタリト、古抄ニ

アリ、其故笛鼓許ナレドモ、ケダカクニギヤカニ、又ヲモシロキ所モアル也、古老物語以此亂聲出舞散

手、相撰陵王、還城樂、

古樂亂聲、此亂聲或人說曰、自胡國出タル物也、仍古樂亂聲謂也、コノ說ハ不詳也、古樂ノ樂屋ニ片

取故名古樂亂聲トタマヤハラゲ所習新樂ト云ハ、鞀鼓、打ト云古樂ト云一鼓搔、云ベシ四部乃至

三部、如此分明ニワカタタレドモ、未落居可尋此亂聲有二說、手略吹樣、一手ヲ吹ク樣、一福取樣タ六リ、

說口タニ六リ、一是林邑ノ時福取スベシ、此亂聲以テ出舞、胡飲酒蘇莫者ハ、抑天下大旱魃ノ時、於

春日御社奉祈雨下事、自中古始其時奏此亂聲、吹胡飲酒破其故ヲ不知、若馬樂音ニ付タルユ又

青海波蘇志摩舞、是ハソノ故侍也、青海波龍宮樂也、又水音タリ、蘇志摩ハ、篳篥著テ舞其姿雨ヲコ

ウナルベシ、サレバ昔ヨリ今ニシルシナキ事ナシ、〇中

略

吹いてひとあなかはるばかり也、

春露囀

序拍子十六、二反すべしとあるしたり、略中

入破、拍子十六、四反すべし、むつかこの物也、略中

急聲拍子十六、二反すべし、略下

〔龍鳴抄平調〕五常樂らくさう

まひてうしにいづ序拍子八、二反すべし、破六帖拍子おのゝ十六はてのきりに三度拍子あぐべし、急拍子八、第二反といふに三度拍子あぐべし、すなはちまひいるなり、

〔古今著聞集管六絃歌舞〕同院河白の御時、樂歌の事ありけり、殿上三臺を奏す、主上河細御笛あそば

し、破二反、急三反さらに急數反あり、この答に地下五常樂を奏す、笛時元序後詠の段々つねのごとし、破六反畢て急を奏するに、寂感ありて樂をとむべからずと天氣有けり、

〔教訓抄〕羅陵王

舞出時吹新樂亂聲、但常ニ用小亂聲也、略中

一亂聲事、新樂亂聲有二說、長說者當世用之、短說者古說也、用新樂樂屋之仍呼新樂或抄云此亂聲從仙宮出ナリ、

然者由來目出タク侍リ、略中

寅一點奏神分亂聲者、新樂亂聲一返許也寅一點者爲當日時刻之始、凡神明神道御遊行、井奏祝禊、

必可用寅時云々、

抑祭神祇先靈之時、發亂聲驚神靈者、據天地陳王業爲古例、但神不稟非禮仍五音七音之外、不聞夷

狄之音故、以正華音奏亂聲致天下和平爲神分、略中

初夜後夜亂聲事、諸大法會試樂云、三節亂聲ナシテ即陵王落舞ヲス、ル也、事始終也、不可謂神分亂聲一歟、

シ、又、仰其一帖ノ一名中ヲ申貼ト稱ス。半帖上見  
初頭續中帖、美妙香雲變條云、古口傳云、風果<sup>ハゲ</sup>  
拍度拍子、已下拍子終結加三終帖上見終切上見  
のて、つとれよしの當つた方にて、御覽所及び富一けり  
で巴聲やむ一具ルニ其備序被急タルヲ以テ一具申兩ス、  
龍鳴抄上鑑見、皇帝破陣樂いふべしと

〔龍鳴抄一上越調〕皇帝破陣樂いわふうべだい

序拍子三十、十六拍子ののちを半帖といふ、もとは四十拍子なり、たうにつかはしたりしまひの  
師この國へかへりし時、八拍子わすれにき、よりて十拍子をすてたる也、四十拍子の時は廿拍子  
ののちを半帖とせし也、いま三十拍子なる時、諸葛中納言と申ける人、十四拍子を半帖とさだめ  
られたるなり、もろくの樂の半帖は、なかをいふなり、是はまからず、このゆゑにかくある也

破六帖

一帖、二帖、三帖、四帖はがくにす。○中略五六帖は序にする也。

序破急

〔樂家錄〕三十三卷序破急之說附息籠之圖

夫樂者以序破急三曲爲具也然或以序與破破與急耳爲一具者亦有之未有記其說者故不知其所  
以惟傳樂位而已而序者無拍子文故於譜而其體可知破與急者共有拍子文其體雖別然及奏樂則  
其大體有異

〔龍鳴抄〕  
一上  
越調  
〔團亂旋〕

序三帖なり、一帖は序にす、二三帖は樂にす、たゞし末五拍子を序にす、各々拍子十六、入破拍子十

六、すゑ七拍子序にす、四反すべし、たゞしきれぐにす、略○中

急聲ときいふふじやし七反すべし、入破のやうに切々にするなり、樂のことばも入破同じ事也、たゞし

みなそのはやうに唱などいふ事、口おしき事、はかせ、音振みなそれ、のめり、何もあり、みな  
 唱るものなり、一首ふり、心に、き、聲振、上、同、シ、又、フ、シ、墨譜  
 元亨、釋書云、大原、真忍、深、子、聲、博士、假借、シテ、墨譜  
 明、一日、接、唄、策、盡、墨譜、トアリ、聲、博士、假借、シテ、墨譜

【樂家錄五十】節墨譜之事

或曰世謂節墨譜者、其名別而實一也、然二名連續之者、曲節高下能以合于墨譜、故稱美之而重言乎、  
 凡號節者、唱聲必有高下、準之竹節、故記節字也、號墨譜者、以墨圖高下、而能計合之、故記墨譜也、譜即  
 記矣、世多以聲之高下爲節、亦以其中大振小振等之品號之、墨譜也、是未論乎、雖大振小振皆聲之高  
 下、然則其節也、

【歌儼品目】

五上 樂曲 汎稱、曲物、樂曲ノ通稱ナリ、最歌ニ對シテ、イフ、トキノ、曲、ナセル、ナチ、ハ付、ス、辭、ナリ、

又某樂曲ナド云フハ、樂曲、四宮記、但呂遊、仁歌爲、本、樂曲相交、  
 轉用セルナリ、○中略、樂曲、唐禮樂志ニ、天寶樂曲、皆以、邊地名、

【倭訓彙編九】

源氏にみゆ、樂曲をいふなり、

【源氏物語】三十五、さんのねをはなれては、なにごとを、か、物をと、のへ、まゐる、まゐるべとはせん、○中略

おほくのまらべ、わづらはしき、く、おほかるを、

【源氏物語】五十五、琴びはのしとて、ないけうぼうのわたりより、むかへとりつ、ならはす、○中略、は、や

りかなる、く、く、ものなどをしへて、まとおかしき夕暮などに、ひきあはせてあそぶ時は、○下略

【連歩色葉集】

音曲、

【禁秘御抄】

一諸藝能事

音曲上古有例、堀河院內侍所御神樂時、別有此音曲、鳥羽、後白河御催馬樂雖、不窮其曲、已晴御所作

畢、又後白河院今樣、無比類御事也、何只可在御意、

【歌儼品目】五上 樂曲 汎稱、帖、樂ノ通稱ナリ、名、漢土ニ疊、ノ字ヲ用、フ、又、編、トモイフ、陳氏樂書制上元之舞二





〔倭調琴中編四〕かへりごゑ 源氏にみゆ、反聲の義、音樂に律より呂にうつるをいふ也とぞ、古今

秘抄に、すべて始は律にて呂にうつり、又本の律にかへるをかへしものといふなりといへり、

〔殘夜抄〕調子のうつりかはりめといふはまづあらべ一をあらめたるに、こと聲のいできたる、なべてはわろし、それにわろからでよきあり、是をかへりごゑといふ、是は呂より律にかへる、律より呂につたふ、其聲の位をよく、心えつれば、こと調子にうつれども、やがてよし、ふるき略頌に云、下一盤涉還雙調、平大同音上黃鐘、又云、雙調平調上黃鐘、下一盤涉還雙調といふは、雙調より平調にかへり、平調より上無調にかへり、上無調より黃鐘調にかへり、黃鐘調より下無調にかへり、下無調より一越調にかへり、壹越調より盤涉調にかへり、盤涉調より雙調にかへるべしとなり、これは笛一がうちの事にて、かたのごとくつゞけたれども、まことしき聲の位はあはぬ也、此中に雙調と平調とうつりよく、壹越調と盤涉調と又うつりよし、又黃鐘調と下無調とはよし、此外のかへりごゑは、いといみじくなし、これらは十二律といふことをよく、心えてゐるべきこと也、

〔管絃音義〕返音略頌曰

平調返減云返南々返音故也高高返黃

黃鐘返減云返徵々變音故也賤賤返壹

壹越返盤盤返雙

雙調返音是平調

夫返音者、從先調子乙音二重高音以爲次調子甲音、從此甲音三重下音以爲乙音、如此次第輪環、無始無終、無際無限、名爲返音輪轉也、

〔西宮記略八〕私遊宴事

律呂遊以歌爲本、樂曲相交反聲、

〔源氏物語二十四〕

よもすがらあそびあかし給、かへりごゑに、喜春樂たちそひて、○下

〔花鳥餘情十三〕

反音は呂より律にうつるをいふ也、喜春樂は黃鐘調の樂也、平調にもわたして

まきてうには、こつ食調、一越てうには沙陀調、雙調にはなし、中呂調、小石調などいふ事あれどもくはしくならはず、これを又ある管絃者論議す、何のゆゑぞといふ也、くはしくはならはず、大體はものゝにはひのやうなるなめり。

〔教訓抄〕ハ一枝調子ハ平調ニハ性調、道調、黃鐘調ニハ水調、太食調ニハ乞食調、壹越調ニハ沙陀調、盤涉調ニハ角調、雙調ニハ枝調子ナシ、大呂調小石調ナンド云事ハ侍ドモ其故ヲ不知可案也、〔夜鶴庭訓抄〕枝調子といふものあり、盤涉調并に雙調にはなし、

平調性調  
黃鐘調水調  
大食調乞食調  
壹越調沙陀調

次第の聲のゆくはさまにかゝる聲ある也譬へば物の匂ひのやうに、其色と見ゆれどすこしいかにぞや、なりをはぬ聲のあるなり、それを枝調子に合するなり、いかなるまらべに枝調子のあへなき調子の又あるに、こゝもとにいふせく候、まだ習はねばかき候はす、尤尋ぬべき事也。

〔大日本史〕禮樂十三有支調、壹越以沙陀調爲支調、黃鐘以水調爲支調、平調以絃調、道調爲支調、大

るなき調子の又あるにこゝもとにいふせく候、まだ習はねばかき候はず、尤尋ねべき事也。

食以乞食調爲支調般涉以角調爲支調唯雙調無支調故名雖五調其實爲十二調○  
蓋皆本朝

樂家之所斟酌損益，而其調名意出于唐部當二十八調中，所謂壹越調，蓋越調，卽無射商黃鐘也，平

調疑正平調，卽仲呂羽太簇也。雙調卽雙調夾鐘商仲呂也。黃鐘調卽黃鐘調無射羽林鐘也。般涉調

蓋般涉調黃鐘羽南呂也按隋書周武帝時龜茲人蘇祿婆善琵琶調有七種以其七調勘校七聲若合符六曰般祿婆善琵琶調有七種以其七大食調卽大食

調黃鐘商太簇也。唐書宋史大成樂章圖譜按唐書大食本波沙陀調疑婆陀調卽宮調也。唐書按本

晉曰  
 也陳  
 氏力  
 樂亦  
 書蘇  
 宮調  
 胡所  
 名傳  
 婆婆  
 陀力  
 力調  
 謂華  
 言平  
 各聲  
 道調  
 宮  
 水調  
 蓋隋  
 主楊  
 廣所  
 製商  
 調也  
 祖  
 謂名  
 萬樂  
 物弄  
 人按  
 事非  
 五

律呂調合因施用水道調蓋唐主李治所造道調宮也唐書食調疑歌指調卽林鐘

商南呂也。此唐書  
又史大  
伯氏所傳  
倚樂  
蘭琴區  
譜接  
有碼  
石氏  
調。他  
莫所  
見。碼  
石。乞  
食。音  
亦近。  
疑乞  
食之  
碼也。  
角調。

出于閏聲七角唐書宋史唯性調無所考也按隋書云清調主商並與性音相近疑清調若商調也五

出于閏聲七角應費唯性調無所考也按隋書云清調主商三五要略有清調之名又平調於五

出于閏聲七角應費唯性調無所考也按隋書云清調主商三五要略有清調之名又平調於五

出于閏聲七角應費唯性調無所考也按隋書云清調主商三五要略有清調之名又平調於五

出于閏聲七角應費唯性調無所考也按隋書云清調主商三五要略有清調之名又平調於五





の本とし、九寸より次第に短くなるの義に的當す、今古違へる所以は、甲乙の事也、黃鍾を乙にし、  
 鳧鍾を甲にすれば、かくのごとし、壹越を中音とせるが、人聲に應ずる證は、今俗間優曲者の一本  
 といへるは、やゝ高き音にて、一本は即壹越の義なるを、俗間には定らずしていへども當れり、朝  
 に失ひて野にもとむるといふも、是なるべしとなん。

〔新廬面命〕今日三〇賣水元年三月十二日十二律ノ僉議アリテ、只今樂人ノ吟味スル律可然ナリ、東寺ニ古ヨリ  
 傳ハリタル十二律來西土ナリト平調ノ板トイフモノアリ、先年淺利檢校上京ノ時、右ノ東寺ニ之  
 アル十二律ヲキカセ候へバ、三分高ヒト被申候、平調ノ板ヲタゝキテ、此音ハイカバト申候へバ  
 平調也、是又カクアリテモ、本ノ調子ニアラズト申サレ、ムカシハ定メテ平調ニテアルベクレド  
 モ、板フルクナリ、少々カケ候處モ出來候故不合ナルベシ、カノ十二律ノ事ヲ後ニ聞候へバ、本ノ  
 モノハ加賀殿へ御取ナサレ、只今アルハ寫シニテ候由ナリ、總ジテ近年淺利ホド調子ヲヨク存  
 候モノハナシ、サテ調子ト申スモノハ、唐ノガヨク候ト何レモ仰セラレ、加藤内藏助殿就中唐ビ  
 イキニテ候故、日本ノ調子ハヒヨンナコトノヨシ仰ラレ候。略又或時人々寄合テ笙ヲフキ申  
 候時、カタハラニ有之候藥罐鳴申候ニ付、ドノ管ヨリ通申哉ト、一本ヅ、吹申候へバ、ドノクダニ  
 テモ通ゼズ、唯一本通ヒ申ス管有之、是其藥罐ニ其律ヲソナヘ申候故ナリ、又井上河内守殿被仰  
 候ハ、近代宗薰ホドノ尺八ノ上手、調子ニ達シタル者ナシ、茶碗ヲ見テ指ニテナラシ、コレハ何ノ  
 調子ナリ、御覽候へト申シ、其調子ヲ吹候へバ、其茶碗ヤマズニ鳴申候、此茶碗ヲワリテ見セ可申  
 トテ、其敵ノ調子ヲ吹申候へバ、忽チ茶碗ワレ申候、此ノ如クナル事毎々也、コレ調子ノ功ナリ、太  
 閤ノ時、森本檢校ト申スアリシ伏見大地震ノ前ニ、調子ニ天下ノ亡ブベキ音アリト驚キテ、京ヘ  
 遁レ申候、サレドモイマダ調子ノナホリ不申候ニ付、愛宕ヘ遁申候、愛宕ニテ承リ候時ニ、我身ノ  
 調子モ違ヒタリト、ナゲキ申候ヨシ、其夜大地震ニテ谷崩レテ、森本モ死セシト也、其森本ガ切シ

五行ノ中ニハ火土也、五方ノ中ニハ南方也、生住異滅四相ノ中ニハ、住ノ位也、住居トハ、人ノ齡ニ  
アツル時ハ、三十以後四十以前ノ比也、サレバ源少將モ、其時ハ盛過テ三十一也、法皇ノ御齡ハ紅  
葉ノ比ニ移ラセ給タリケレ共、奉祝猶夏景氣ニ調ベタリ、

〔徒然草〕<sup>下</sup>なに事も邊土はいやしくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都にはぢすといへば、  
天王寺の伶人の申侍しは、當寺の樂はよく圖をまらべあはせて、物のねのめでたくと、のほり  
侍る事、外よりもすぐれたるゆへは、太子の御時の圖、いまに侍るをはかせとす、いはゆる六時堂  
の前の鐘なり、其聲黃鐘調のものなかり、寒暑に隨ひて、あがりさがり有べき故に、二月涅槃會よ  
り聖靈會までの中間を指南とす、秘藏の事なり、此一調子をもちて、いづれの聲をもと、のへ侍  
るなりと申き、凡鐘の聲は黃鐘調なるべし、是無常の調子、祇園精舎の無常院の聲也、西園寺のか  
ね、黃鐘調にいらるべしとて、あまた、び鐘かへられけれども、かなはざりけるを、遠國より尋出  
されけり、淨金剛院の鐘の聲又わうしきてうなり、

〔閑田耕筆<sup>四</sup>〕故人鈴木修敬は多能の人にて、殊に樂を好めりし、管も絃も皆弄しかども、他人に異  
なるは律學にて、和漢を考あはせて説れし趣子<sup>〇</sup>件は此意にくらければ、其是非の極る所はま  
らざれども、理さもやとおぼえしま、其説を書置るをいさ、かこゝに舉、今樂家十二調子の次  
第は、壹越<sup>一</sup>斷金<sup>二</sup>平調<sup>三</sup>勝絕<sup>四</sup>下無雙<sup>五</sup>調<sup>六</sup>見鐘<sup>七</sup>黃鐘<sup>八</sup>鸞鏡<sup>九</sup>盤涉<sup>十</sup>神仙<sup>十一</sup>上無<sup>十二</sup>なり、是を唐山の十二律に配すれ  
ば、黃鐘<sup>一</sup>大呂<sup>二</sup>大簇<sup>三</sup>夾鍾<sup>四</sup>姑洗<sup>五</sup>仲呂<sup>六</sup>蕤賓<sup>七</sup>林鍾<sup>八</sup>夷則<sup>九</sup>南呂<sup>十</sup>無射<sup>十一</sup>應鍾<sup>十二</sup>次第のまゝに壹越を黃鐘に充る也、  
然るにかくのごとくにては、すべての人聲雙調さまでならではとゞかず、見鐘以上は唯器の聲  
のみとなる、凡十二律はなべての人聲の高下に應すべきものなるを、器の聲のみにては、本義に  
あらざること知べし、されば是を改めて、かなたの黃鐘をこなたの黃鐘に充て、下音の極とし、鸞  
鏡より漸々に次第すれば、壹越第六次に充り、中音となり、見鐘上音の極となる、古所謂黃鐘を律

九月雙調呂十月見鐘調律十一月黃鐘調律十二月斷金調呂

カクハアテタレドモ、一切ニシラヌ事ニ侍ドモ古キ物ニシルシテ侍バ、シルスバカリナリ、可尋見其圖タリ、

〔樂家錄三十五〕

〔本朝律名及樂調之名〕

凡於本朝所用律名、與樂調名同而無分別、所謂律名壹越調、斷吟調、平調、勝絕調、下無調、雙調、見鐘調、黃鐘調、驚鏡調、盤涉調、神仙調、上無調也。樂調名亦壹越調、平調、雙調、黃鐘調、盤涉調、大食調、以之爲名、特太食一調、非律名耳。十二律之名出于周禮、所謂黃鐘、大呂、大簇、夾鐘、姑洗、仲呂、蕤賓、林鐘、夷則、南呂、無射、應鐘是也。後代不得改之、若夫越調、平調、雙調、黃鐘、般涉、皆調名而非律名也。其餘、斷吟、勝絕、下無、其調之名、不知其詳、○中略

## 事林廣記七聲略圖

按宋朝蔡氏律呂新書所載十二律、旋相爲宮、各有五聲。宮聲十二、商聲十二、角聲十二、徵聲十二、羽聲十二、總爲六十調、蓋以雅樂而言、至於燕樂、則各加之二變、變宮十二、在羽聲之後、宮聲十二、在徵聲之前、總八十四調、然事林廣記排列於宮商羽變宮之四聲、各十二調、總四十八調、則備記其調名、而於角徵變徵之三聲、各十二調、總三十六調、則不記其調名、實有聲而無調名也。

〔源平盛衰記十八〕文覺高雄勸進附仙洞管絃事

資賢孫源少將雅賢ハ、笙ノ笛ノ役也。○中水精ノ管ニ黃金ノ覆輪ヲ置タル笛ニテ、黃鐘調ニ調子ヲトル、黃鐘調ト申ハ、心ノ臟ヨリ出ル息ノ響也、此臟ノ音ハ、逆ニ乙ノ音ヨリ高甲ノ音ニ上ル間、脾臟ノ上音ニ同ス、順ニ甲ノ音ヨリ乙ノ音ニ下ル時ハ、肺臟ノ金ノ音ニ同ス、故ヘニ土ノ色ヲ黃ト名ケ、金ノ色ヲ鍾ト名ケ、當知土與金ハ陰陽ノ義ニテ、男女相應ノ儀式也、故ヘニ法皇ト女院トノ御前ナレバ、圓滿相應ノ御祈トテ、黃鐘ニ調ヘタリ、又此調子ハ呂ノ音也、名之喜悅ノ音トス、又

六調合三陰聲者也、此十二者以網爲管、轉而相生、黃鐘爲首、其長九寸、各因而二分之上生者益二分、下生者去一分、

〔拾芥抄上末〕十二律

十一月 壹越調イハツアラ 十二月 斷金調ツグキン 正月 平調ヘイテウ 二月 勝絕調ショツゼツ 三月 下無調ゲムテウ 四月 雙調ソウテウ

五月 鳧鐘調フクロカネ 六月 黃鐘調ワウレキ 七月 鸞鏡調ランケイ 八月 盤涉調バンセキ 九月 神仙調センセン 十月 上無調ジョウム

音調

〔大日本史 禮樂十三〕按本文拾芥抄、十二律、舊謂之調、樂工歷世所傳者、如壹越平調、雙調、黃鐘、般

涉、有與五調名全同者、且唐樂有越調、雙調、平調、仙呂調、黃鐘調、般涉調、皆調名而非律名、其它斷金、勝絕、鳧鐘、鸞鏡、絕無所考、上無、下無、樂家以爲本朝所命、然不知所以名之、或云聲之清濁、上至上無之清而盡、下至下無之濁而盡、上無者、言此上無復有聲也、下無者、言此下無復有聲也、

〔瑤囊抄七〕出聲調子ト云ハ何ゾ、并ニ十二調子トハ何々ゾ、

壹越調 斷金調 平調 勝絕調 龍吟調此云下無調 雙調 鳧鐘調 黃鐘調 鸞鏡調 盤涉調

神仙調 鳳音調是云上無調 以上十二調子也

〔教訓抄八〕十二調子者

壹越調呂 壹越性調律 平調律 性調律 乞食調呂 道調律

雙調呂 黃鐘調律 水調呂 盤涉調律 大食調呂 沙陀調呂

コレハ以前ニ申ツル十二時ニアツベシ

又十二月ニ充ル時ハ

正月 盤涉調律 二月 神仙調呂 三月 鳳音調律 四月 壹越調呂

五月 鸞鏡調呂 六月 平調律 七月 勝絕調呂 八月 龍吟調律



ルトゾ問之ヲ答云、一ニハ律ノ音ハ三、呂ノ聲ハ二アラバ陰陽ノ儀タガフベシ、ソノユエニ呂ニモ三大切也、又平調ハ管絃ノ中ノ本體ナリ、

〔體源抄〕一調子姿事

平調は、春風に柳のたをれたるがごとく、これを可吹、

盤涉調は、何にたとへつべくもなし、只まづかに延て吹べし、いづれよりも此調子を延可吹、

黃鐘調は、銚子にすみたる酒を入たるをみるがごとし、

大食調は、板じきの下にて、コトヒツキヲスルガ如シ、

壹越調は、明障子に沙をうつが如し、

雙調々子ハ、在御遊所此外ニ又後可注、但不申常之耶、又古秘歟、此段ニ餘々ナ可シ沙汰者也、

抑此六調子の姿、如此は注侍とも、たしかに可吹似様口傳之書モ不見、他人ニ尋とも、かつて知人

なし、有時於閑所北船入己父にこれを不審す、いみじくも尋侍、是は口傳のみならず、器を取て幾

度も吹之テ心得べき事也、とて、笙を取よせ吹て、きかせられ侍、一大事也、可秘由堅被申侍、書ニ注

事、此文を始と見るべし、故人筆跡にあるまじき事の第一と可思、穴賢々々、

〔教訓抄〕一八音ト云者、金石金鐘一、絲竹糸琴瑟三、匏土匏笙芋五、草木草鼓七、

金石ハ方磬體ナリ、絲竹ハ曳物吹物ナリ、匏ハヒサゴツブリナリ、唐ニハ笙ノ笛ノカシラニスル

ナリ、土ハワツチニラツクリタル物ナリ、草木ハ鼓ナリ、カハト云木ト云ナリ、又六調子ニ上下ノ无

調ヲクハヘナハ音ト云様モアリ、

〔歌佛品目〕二律呂聲調十二調子二律呂我邦ニテハ十調子ト稱シ來レリ

〔周禮註疏〕卷十二大司樂掌成均之灋以治建國之學政、而合國之子弟焉、○中以六律六同五聲八

音六舞大合樂、以致鬼神、示以和邦國、以諧萬民、以安賓客、以說遠人、以作動物、註、六律合二陽聲者也、

〔新廬面命〕或時樂人何某、內藏助殿藤加御茶屋へ參候時、床ニ有之候琴ヲシラベヨト仰ラレ候ニ付シバラク調候テ、床ニサシオキ候。其時八月ニテ候故、時ノ調子ニシラベ置候。其夜人モイロハヌニ、其琴タヘズ鳴申候ニ付、內藏助殿不思議ニ思シ召、何レモ見ヨト被仰候へバ、平調ノ糸一筋風ニ通ヒテ鳴申候。八月ノ調子ニテ候へバ、天氣ニ通ヒテ鳴申候也。依之藤子モ殊ノ外心服被申候。

〔龍鳴抄<sup>上</sup>〕五音調（雙調、黃鍾調、平調、盤迷調、登越調）といふは、先にいひつるいつ、のこゑなり、六てうしといふこと

〔教訓抄ハ〕六調子ト云ハ、先ノ五音ニ大食調ヲクハヘタルナリ、平調ト同ジ音ナリ、但呂律ノ音ニ相違アリ、其分様者、

昔ノ管絃者コレヲウタガフ、平調ノ音ニテアルニカケタル事ナシ、何ノ故ニ大食調ヲワカチタ

春ハ雙調東方、木音、青色、夏ハ黃鐘調南方、火音、赤色、秋ハ平調西方、金音、白色、冬ハ盤渉調北方、水音、黑色、壹越調ハ中央土音、黃色、若紫色、

是ヲ五音ト云ナリ、

五調子ハ、

是女媧所造也、六調子ノ者ナリ、大内記令明朝臣說ニ、調子ハ仙人所造也、書文或ハ土火木金水 或ハ宮商角徵羽 宮一經調平調准角准民徵准事也、羽准物也、

是ヲ時ノ音ト云ベシ、又一日一夜ニトリテモ、時ノ音アリ、スナハチ天ニ感應ノ音アリ、鹿ノコエ、

鳥ノ囀リ、蟲ノ子、風ノヲトニ付テモ、面白ト思フユエニ、オノヅカラ會事アリ、コレヲ又時ノコエ

ト云ベシ、又十二時ニトリテ時ノコエアルベシ、六調子ヲアツベケレドモ、ミエタル事モナケレ

バカ、ズ、但シ古物語ニ申タルハ、昔シ時剋ヲモタバサズ、星ノ位ヲモシラザリケレドモ、我管絃

イタレル心ヲモチテタマス、イマハ何ニテアレハ何時ニテアルヨト心エケル也、又闇夜ニ柱ヲ

打テ、子丑ノ時ヲシリ、香ノ火ヲミネドモ、午未ノタケユルヲモシリケリ、

〔經信卿母集〕琵琶琴上手といふ中にも、よのつねの人にはあらざりし、ときの調子のまらべをな

しては、やよひの目かすのうちに、夏のせちのきたるをわきまへ、う月のうちに、はるのせちのあ

まれるをまゐり、なつよりあきにつり、秋よりふゆにかはり、冬より春のたつこと、そのゐんにま

ざれず、よるひるの時のうつるをも、たれこめゐても、かいひきては、さだかにおもひえたり、ある

よ、とくまかで侍るべきことありと、道方卿いりてふしたるよ、女もいといぎたなういねたりけ

るを、みちかたふとめさめて、よひより申しつるに、かひなくもいねたまふものかなと申されけ

れば、まくらなるびはひきよせつまならし、まだうしみつなり、びむかき、はかまのひもさしたま

ふとも、とらひとつにうつりぬべし、をそくはあらじものをと申されしかば、よぶかしとはおも

ひながら、それもたがふこともやといそがれて、

とらひとつうしみつよりもうかりけり、といひすて、いでにけり、つとめてあのごとくとき

合て七聲とす、又調子品その數おほしといへども清濁のくらゐみな五音をいでず、讚佛教神の庭禮義宴後の筵も、この聲なければ、其儀を調す、故に興福寺の常樂會、百花句をくり、石清水の放生會、黃葉衣におつ、まかのみならず、清涼殿の御遊には、ことごとく治世の聲を奏し、姑射山の御賀には、まきりに万歳のまらべをあはす、心を當時にやしなひ、名を後代に留る事、管絃にすぐれたるはなし。

〔龍鳴抄上〕おほよそこ、ろうべきことは、時のこと。ことといふ事あり、春は雙調、夏は黃鍾調、秋は平調、冬は盤涉調、壹越調は中央なり、土の聲といふ、おほやうこれを時のことといふべし、また一日一夜にとりても、ときの聲あり、すなはち天感應のこゑなり、まかのなき、うぐひすの聲むしのね、ほらのこゑ、わが心にをもしろしと思ふ聲に、おのづからあふこと有これを又ときのこゑといふことあり、古文にはく、暗夜にはしらをうちて、ねうしの候をしる、白中に聲をきゝて、午未のあやまりをたゞす、ひかしかしこかりけるくわげんのもの、香の火もみず、かいのこゑもきかず、ほしのくらゐをもたづねず、月のたくるをさたせず、人にたゞいまいくときといふに、もしは子とも丑ともいふを、まくらにあるはしらをもつて、たゞいまは子にこそありけれ、うしにこそありけれと、まりけるにこそはあんめれたゞし六時を六調子にあてなどすることは、いとものならず、みえたる文もなし、これによりてうたがふ人もあり、されどおほやうかやうにならふなり、又五音といふは、先にいひつるいつゝのこゑなり、

〔教訓抄八〕管絃者ノ可存知事ハ、ヨロヅヲ心得テ物ノアハレヲシリテ心ヲスマシ、ヤサシカルベキナリ、風ノヲトニ心ヲソメ、鳥ノサヘヅリニミ、ヲトメテ、世中ノツキナラヌ事ヲ返々モナゲキテ、アシキ友ニアフマジキナゲ、凡そ時ノ音ヲタガヘジト思ベキ也、先此道ニ心ウベキ事ソノカズアリ、先ヅ時ノ音ト云い、





成熟ス、羽音亂時ハ、每人知可有危、勘正人所爲、須直懸慮曲事也ト云々、五音共亂時ハ、天下有憂ト云也、サレバ孝經曰、移風易俗、莫善於樂、省萬邦風、以知其盛衰ト云々、

〔龍鳴抄〕七音といふことあり、五音に二音をくはへたるなり、その二のこゑと云は、上无調下无調なり、上无てうは林鐘調といふ、下无てうは角調といふ、この二の聲は、もし五音にたがふものあらんれうなり、ふるにあはせんには、この七のこゑよりほかにまらず、合ふ笛ふといふふなり、○中ちゆうの法輪院の僧正の天王寺の別當にておはしける時、恒例の念佛會に、僧のこゑ七音にあはざりける、樂人等恠奇なりとさだめけり、笛にあはざりけるをいひけるなり、これ長吏の怪なりといひけり、すなはち寺司玄たいありければ、このゆへなりけるとぞいひあひける、いとくおかしきこと也、

〔秋調抄〕一七音ト云ハ、以前ノ五音ニ二ノ音ヲ加タル也、其二音ト云ハ、

上无調、下无調、上ニテハ、其後無傳人、仍絶歟、

有二說、或書云、大國ニハ昔六十四調ナリシテ、則天、皇后ノ御時、七音ニツバメテ被定、之云々、一說ニハ、下无調ヲバ角調ト云、上无調ヲ

バ林鐘調ト云、一說ニハ、上无調ヲバ角調、上爲甲、下爲乙、下无調ヲバ林鐘調、上爲甲、下爲乙、行高説

宮。商。角。徵。羽。變羽。變羽、謂之コレヲ加ルユエハ、五音ニモレタガウコエアラバ、コレ二音ニ合テミヨトイフ心ナリ、此七音ノホカニイキトシイケル物ノ音ハナル事ナキユエ也、

〔樂家錄三十五〕聲調考正本朝五聲及七聲之圖

本朝樂調壹越調以黃鐘爲宮、平調以太簇爲宮、雙調以仲呂爲宮、黃鐘以林鐘爲宮、盤涉以南呂爲宮、是皆用樂曲之終律、於爲宮惑焉、假令用平調之調、則其商者下無也、以其下無起曲止曲爲之、平調、商也、故求號嬰聲者以爲七聲、因茲亦混而無差別、其圖舉于左、亦有呂調律調之別、所以其然未曉之、

學記之

〔拾芥抄<sup>上</sup>〕<sup>七音</sup>律歌

高砂 夏引 貫河<sup>○中</sup>

呂歌 安名竹 新年 梅之枝<sup>○下</sup>

〔口遊<sup>音樂</sup>〕

宮商角徵羽<sup>謂之五音</sup>

今案宮一越調准君商平調准臣角雙調准民徵黃鐘調准事羽盤涉調准

物春雙調東木音夏黃鐘調南火音秋平調西金音冬盤涉調北水音中央一越調土音<sup>亦謂之五音</sup>宮商角

徵羽變徵變宮<sup>謂之七音</sup>

今案五如上變徵當上无調變宮當下无調

〔拾芥抄<sup>上</sup>〕<sup>七音</sup>五音

宮一越

商平

角雙

徵黃鐘

羽盤涉

〔爾雅註疏<sup>五</sup>〕<sup>釋樂</sup>宮謂之重商謂之敏角謂之經徵謂之迭羽謂之柳<sup>註皆五音之別名其義未詳</sup>

〔禮記註疏<sup>三十七</sup>〕<sup>樂記</sup>宮爲君商爲臣角爲民徵爲事羽爲物五者不亂則無怙慝之音矣五者君臣民事

物也凡聲濁者尊清者卑怙慝怙敗不和義宮亂則荒其君驕商亂則敗其官壞角亂則憂其民怨徵

亂則哀其事勤羽亂則危其財匱五者皆亂迭相陵謂之慢如此則國之滅亡無日矣

〔瑤臺抄<sup>七</sup>〕<sup>出聲調子</sup>ト云ハ何ゾ并十二調子トハ何々ゾ

凡呂律二ツハ司陰陽又宮商角徵羽五音并六調子ヲ以テ五佛五藏五行五季五色五味五根五方

五穀等當也宮司壹越調呂大口脾藏土音土用黃色甘味意根中央黍穀也商司平調律阿彌陀肺藏

金音秋ノ季白色辛味鼻根西方糯穀也角司雙調呂藥師肝藏木音春ノ季青色酸味眼根東方胡麻

穀也徵ハ司黃鐘調律心藏火音夏夏季赤色苦味舌根南方麥穀也羽ハ司盤涉調律釋迦腎藏水音冬

季黑色鹹味耳根北方大豆穀也大食調呂通宮然間以宮爲王故開五音亂即識天下之興衰若宮ノ

音亂則主上可知有危正有其德政祈禱ハ不過政ト云ヘリ若商音亂時ハ臣下可知有危即致其祈

禱其所禱者察識臣之忠勤即諫行可行也角音亂時百姓所爲可知有危替政行民也徵音亂時

ハ草木萬物知可有不熟可致其計王臣政何事不稱天心能々察之改其政時ハ則風雨順于時萬物

古法一有七音十二律共八十四調、シ。ラ。ム。久。音。調。ノ。階。和。セ。ザ。ル。ノ。類。ナリ。字。津。保。仙。語。手。ふ。れ。て。更。細。分。之。尙。不。止。八。十。四。遠。調。至。多。萬。ノ。モ。ノ。ヘ。た。る。と。先。室。ヲ。入。レ。バ。腹。數。調。抄。拜。樂。ノ。面。白。カ。ラ。ス。ハ。笠。ノ。時。ノ。音。ニ。キ。ヤ。ハ。ト。キ。ノ。事。也。

〔空穂物語 後藤〕みかどことゝもをこゝろみ給に、おどろかしき聲いで、おどろき給ての給はく、このことゝもはいかでつくりしぞてふれて久しく成にけるに、こゑも去らまず七ながらおなじ聲には、いかでと、のひたるぞと、とひ給ときに、有しやうを委くそうす。

〔龍鳴抄〕上呂といふ聲はおと。このこゑなり、律のこゑといふは女のこゑなり、陰陽又これをなじ、文武といふも、天地といひ、おもてうらといふ、上下といふ、みなこれ、是をはじめて心えて、みな

みなの一とにくわしく尋て、よくゝゑるべし。○中また黄鐘調は呂律にかよふとばかりなり、おなじ聲なれど、呂の樂、律の樂とわかれてある也、呂の樂といふは水調のこゑ也、水調といふは黄鐘調のゑだてうしなり、

〔拾芥抄 上末〕壹越調 土音 沙陀調 秋 平調 金音 秋 大食調 金音 秋 乞食調

性調 雙調 木音 黄鐘調 火音 夏 水調 盤涉調 水音 冬

〔西宮記 臨時八〕私遊宴事

夫於律遊者平調於呂遊者用雙調、至于他調隨時用之、但律呂遊以歌爲本、樂曲相交、反聲於倭琴、先常陸同音數度、次甲斐各獨唱、風俗等也、

〔樂家錄 三十五〕律聲相生次第 右於中華之律名、左本朝所記律名、

凡律之次第無和漢異、蓋始于子終于亥、如歲月矣、相生法者當于八爲次第、  
 第一黃鐘 第二林鐘 第三大呂 第四南呂 第五姑洗 第六上徵 第七蕤賓 第八大呂 第九夷則 第十夾鍾  
 第十一無射 第十二雙調

右次第皆當于八相生也、五聲者自第一至第五直取之、七聲者自第一至于第七取之用矣、爲示初



天皇太后同亦行幸是日百官及諸氏人等咸會於寺請僧五千禮佛續經作大唐渤海吳樂五節田儼久米儼

林邑樂

〔元亨釋書<sup>十五</sup>〕釋佛哲林邑國人也○<sup>中</sup>本朝樂部中有菩薩拔頭等舞及林邑樂者哲之所傳也

〔唐會要<sup>三十三</sup>〕南蠻諸國樂

扶南天竺二國樂隋代全用天竺列於樂部不用扶南因煬帝平林邑國獲扶南工人及其匏琴、篳篥、不可用但以天竺樂轉寫其聲

〔續日本紀<sup>二十四</sup>〕天平寶字七年正月庚申帝御閣門饗五位已上及蕃客文武百官主典已上於朝堂作唐吐羅林邑東國華人等樂

〔續日本後紀<sup>十四</sup>〕承和十一年閏七月戊午天皇御仁壽殿令奏林邑樂未曾覽此樂故也

〔三代實錄<sup>四十三</sup>〕元慶七年二月廿一日戊午林邑樂人百<sup>類○百、原本無、補、</sup>七人於大安寺令調習以大

和國正稅充給其食欲令渤海客徒觀彼樂也

樂調

〔歌儺品目<sup>二</sup>〕律呂聲調調子<sup>律呂ノコトヲバ我邦ニテ調子ト稱シ來レリ類等治要引義釋曰調此</sup>

ニテシラベトイフモノ即樂調ノ調ナリ春ノシラベ秋ノシラベ水ノ調ノ調知シ又調子トモ云フ同名異用ニシテ上ノ律呂ノ名ト同ナリ

〔源氏物語<sup>二十四</sup>〕空のいろ物のねも春のまらべひきはいとことにまさりけるけぢめをひと

律呂

〔伊呂波字類抄<sup>利宅</sup>〕律呂

〔歌儺品目<sup>二</sup>〕律呂聲調律呂<sup>前漢律曆志曰律有十二屬六爲呂黃帝之所作也ト天籟自然ノ</sup>

リコトハ天平七年下道朝臣眞備唐ヨリ將來セシ調律アリ然レドモ書テ允恭天皇ノ御時新羅トヨ  
ア稱セシコトソレハ律呂ニ協ハザルノ調然レドモ書テ允恭天皇ノ御時新羅トヨ  
リ○中略

〔日本書紀推古二十〕二十年百濟人味摩之歸化曰學于吳得伎樂儻則安置櫻井而集少年令習伎樂儻於是異野首弟子新漢齊文二人習之傳其儻

〔聖德太子傳曆下廿年古推〕百濟味摩之化來自曰學于吳國得伎樂舞則置之櫻井村而集少年令習

傳今諸寺伎樂是也太子奏勅諸氏貢子弟壯士令習吳鼓又下令天下擊鼓習舞是今財人之先太子縱容謂左右曰

供養三寶用諸蕃樂或不肯學習或習而不佳而今永業習傳宜免課役即令大臣奏免之

〔日本書紀二十九〕朱鳥元年四月壬午爲饗新羅客等運川原寺伎樂於筑紫

〔續日本後紀仁明天武〕天長十年四月戊寅左衛門左兵衛二府奉獻吳樂

〔大安寺伽藍緣起并流記資財帳〕合伎樂貳具

右一色平城宮御宇天皇以天平二年歲次庚午七月十七日納賜者

〔觀世音寺資財帳〕觀世音寺嘉保口年寶藏實錄日記

第五韓極入吳樂儻調度

前帳云破損仍不注色目者治曆二年七月十三講堂中尊御料內下用已了但見在銅陸斤者寬治

六年帳云今檢同前

〔令集解雅樂寮〕

別記云略中大屬尾張淨足說今有寮儻曲等如左略中度羅儻師一人歌師一人婆理儻六人二人持

刀楯儻四人持鉞立久太儻廿人邪禁女儻五人三人儻人二人花取韓與楚奪女舞女廿人之中五人

著甲帶刀右四儻度羅之樂

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年正月庚申帝御開門饗五位已上及蕃客文武百官主典已上於朝堂

作唐吐羅林邑東國隼人等樂

〔續日本紀聖武十七〕天平勝寶元年十二月丁亥大神禰宜尼大神朝臣杜女其與紫色一同紫與拜東大寺天皇太上

テマツル、

次醉胡

又醉胡王云 刀福云 人丸云 ハラメキト云

壹越調音可吹五返雖有別曲近來用承和樂尾張則成說

次武德樂

壹越調物也而舞故ニカ近來不用之天王寺于今略

已上十妓樂如此有光家ハ八妓樂云其故者崑崙力士ヲバ一曲ニスル故ナリ於武德樂雖入目

錄自昔不舞之

久安九年佛生會ニハ尾張則成ト清原爲則ト二人吹之件爲則樂師寺樂人面軍子得

長承二年兼九吹之日記明予者則成ニ令相傳侍也ヲノヅカラ彼有光之流ノ絶ム時斷亡更ニ競

上吹カム斷ニハアラズ此様ヲ心エベシ

古記曰聖德太子我朝生來シ給テ後自百濟國渡舞師味摩妓樂ヲ寫シ留テ大和國橘寺一具山城

國太秦寺一具攝津國天王寺一具所寄置也其後百餘歲之後七大寺ニハ移シ置テ餘ハ諸事皆絶

了東大興福兩寺ニ殘留又天王寺住吉社ニハ如形有テ也今云々又雅樂習寫シ給ラバ公家一具

被寄置京ノ南北ニ天王寺一具被寄置彼寺佛事供養料今樂氏舞人樂人住丁

〔樂家錄三十六〕抑謂伎樂者非笙簫篳之曲不用三鼓特橫笛爲秘曲而甚重之南都樂人貊氏近代傳

之而至今於和州興福寺之金堂每歲四月八日刻申奏此曲然惟聲樂耳而舞曲斷絶只存其遺法而已

也其法佛經誦終後自左樂屋奏笛著持于時舞人四人出或垂衣、素無定裝束、古在而今斷絕、各

著面持梅梢奏舞舞形不似於尋常舞樂之面如鬼面而廻金堂外一返畢各入于樂屋次舞人二人出侍

役之其法及鼓東如初、面亦如鬼面少奏舞而入于樂屋而後止曲

冠、次打物三拍鼓、二人、

先師子舞

其詞壹越調音似三破、古記破、喚頭三反、高舞三反、口下三返、何事哉、

次口天公願持

可吹三返盤涉調音吹之、紀氏舞人說ニハ、舞人出舞臺後、向樂屋笛吹由スル時笛吹也、又笛吹止也

止也

次迦樓羅大金剛、可吹三返、盤涉調音吹也、式假、前、要、唐、女、トウ、カ、アリ、是不知、可、導、

謂之ケヲハ、拍子十三可吹三返、而近代雖前別曲吹還城樂破也、舞人走手舞、

次婆羅門

謂之ムツキアチ也、又名持悅拍子十一可吹三反、壹越調音吹之、

次崑崙

拍子十、可吹三返、壹越調吹之、先五女燈籠前立ツ、二人打輪持、其後舞人二人出テ、舞終ニハ扇ヲ

ツカヒ、ヤカケヲ指テ、五女之内二人ヲケサウスルヨシス、

次力士手、キテ出、金剛開門、

壹越調音吹急吹之、謂之ヤウアリ、彼五女ケサウスル所、外道崑崙ノカウ伏スルマ子也、マウカ

タニ繩ヲ付テ引テ、伴ヲウ折ヲリヤウ／＼スル體ニ舞也、或人云、尺迦佛ノ御用也、ヨハイニマ

ハスルトハ是也ト云、

次大孤

又名繼子、序吹物、可吹三返、平調音吹之、

老女姿也、子各二人ニ腰ヲオサレ、膝ヲウクセテ、佛前へ參詣シテ、左右脇子ヲキテ、佛ヲ禮シタ



〔續日本後紀仁明〕天長十年四月戊午朔天皇御紫宸殿賜侍臣酒、音樂之次、右京大夫從四位下百濟王勝義奏百濟國風俗舞、

唐樂

〔續日本紀二十六年〕天平神護元年十月戊子、幸弓削寺禮佛、奏唐高麗樂於庭、刑部卿從三位百濟王敬福等亦奏本國舞、間十月庚寅詔曰、中略事畢、幸弓削寺禮佛、奏唐高麗樂及黑山爾師部舞、下略

〔續日本紀二十七年〕天平神護二年十月癸卯、授從五位下李忌寸元環從五位上、正六位上袁晉卿從六位上皇甫東朝皇甫昇女並從五位下、以舍利之會奏唐樂也、

〔日本紀略六略〕天延二年八月十一日丙戌、中納言源延光仰云、石清水八幡宮、奉十五日放生會、宜仰雅樂寮准諸節會、音樂官人率唐高麗樂人舞人等、從今年永供奉彼會者、

伎樂

〔塵袋七〕一伎樂ト云フ伎ハ何ノ意ゾ

伎ハ衆ノ意也、一種ナラズ、アマタノ心ナルベシ、伎ハ岐也ト釋セリ、岐ハマタ也、マタハワカレテ、アマタニナル義歟、伎トカヨハシテ釋ス、妓トカクコトアリ、伎樂ト云フハ、樂ハ八音ヲアヤツリテ、衆音和合スル故ニ、アマタノ心ヲアラハス、凡ソ伎ハ藝ノ心也、手ニアルヲバ伎ト云フ、身ニアルヲ藝ト云フト釋セリ、打物、引物、吹物、皆手ノアヤツリヲハナレヌ能ナレバ伎樂トモ云フ歟、兩方何モタガハズ、妓字ハ女ノ義也、カミニヨリテカヨヘル歟、慎子曰、毛嬙西施則天下之美妓也ト云ヘリ、是レ美女ノ心歟、

〔教訓抄四〕一妓樂

四月八日佛生會ト曰、七月十五日妓樂命ト曰フ、此笛大坂府生則方之流也、一方、拍行光、一、舞者、坂田氏寺役等舞也、

東大寺職掌紀氏傳之、與、福寺ニハ、大神氏并、坂田氏寺役等舞也、

此舞者聖德太子之御時、從百濟國技渡舞師末摩摩所傳置伎樂曲也、而古老云、楊梅神ノ御相傳ト云、可尋之、先編取、録、涉、訓音、次調子、調、之道、行、音、聲、或、是以爲行道、立次第者、先師子、次踊物、次笛吹、次帽



寺殿好古略○下

〔樂家錄四十七例〕古今殘樂目錄

壹越調 春鶯囀鳳踏賀殿急陵王胡飲酒破酒胡子新羅陵王急已上六曲

平調 五常樂急三臺急甘州夜半樂老君子已上五曲林歌越天樂已上二曲又拔頭合歡鹽多用之

是太食與平調通用之故也

雙調 於此調樂曲惟二也因殘樂所用之曲皆渡物也其曲見于壹越調

黃鍾調 海清樂拾翠樂已上二曲千秋樂青海波越天樂已上三曲渡物也總五曲

盤涉調 蘇合急白桂青海波千秋樂越天樂已上五曲

太食調 拔頭合歡鹽已上二曲多還城樂庶人三臺已上四曲總

〔伊呂波字類抄志疊字〕試樂

〔紫式部日記〕をみの日の夜のてうがくはげにおかしかり

〔江家次第三六〕石清水臨時祭試樂

試樂前三十日調樂先上日試樂

○按ズルニ賀茂臨時祭石清水臨時祭等ノ調樂試樂ノ事ハ神祇部ニアリ

〔新儀式臨時四〕天皇奉賀上皇御算事

先二三日有試樂事構舞臺於仁壽殿東庭

〔西宮記臨時八〕內教坊舞

延喜四年三廿四日於御前有圓堂試樂

〔言繼卿記〕大永八年三月廿九日辛丑今日黃鍾調之御習禮候了

〔歌傳品目一〕皇朝樂目神遊略○中 久米舞略○中 田儼略○中 楯節舞略○中 吉志舞略○中 黑山金師

管附之、用三鼓之次第如常。所謂三鼓者、大鼓、鉦鼓也。次琵琶和琴次第附之。其法如常。樂曲一返奏終而助音之類管及三鼓皆止之。三鼓如拍子者、於一返之末、如常也。箏者各無止也、而自二返頭、鳳笙、簫、篳篥、橫笛各頭取一管耳。殘奏之故名之殘樂也。而鳳笙者至于二返之半止之。橫笛者至於三返之頭拍子文四五六或七八九止之。唯簫篳與絃合奏之、而簫篳亦或止或奏接絃聲耳。而凡簫篳始止之者、至於橫笛後拍子文六七或九十許止之、而待拍子文六七或九十許又奏之、唯以隨時宜爲善、預其法難一定也。而至於終樂之前拍子文三十四五止、簫篳自是不復奏。箏、琵琶、拍子文十許彈之而止之、次和琴拍子文十許攝之而止之、唯箏耳。至於終曲彈之、而自上古次第彈止之。是以夜半樂論其節耳。五返之法奏二返畢、而助音類管并三鼓皆止之。猶大鼓、鉦鼓、自三返之時、次第亦如三返之時。夫殘樂五返奏或五返頭止橫笛、而後簫篳亦止之、或止或奏、其法如三返之時。絃次第亦如三返之時。夫殘樂五返奏者專愛絃聲爲令久彈之、故簫篳許樂曲終早止之。藏管可也、不然則聽絃聲不多、非本意乎。

### 殘樂之制法

殘樂者三管共皆重之、故疎業輩可難堪乎、其法三管其以其當曲之聲音不可吹止之、以他律可止之。管聲終以其當曲之宮音止之、故管聲避之、是殘樂者專主爭故也。假令於平調曲則以林鐘南呂止爲最善也。是自太簇隔八相生律聲故也。又曰、凡殘樂者專主箏、而以簫篳接之、故簫篳者受他管聲、而專寄意於箏奏之笙笛者亦受絃聲、而寄意於簫篳可也。皆如此則無聲音不和、無樂曲不善矣。又曰、三管連聲之間、一管不可有吹止之、但簫篳有蘆舌之難、則可爲制外乎。

〔宗綱卿記〕文明十七年二月十三日、早旦參內、少々參集、申刻許事始、御懸北上西面、今日細雨、尤不辨簾中親王御方式、部卿宮御祇候、御所作殘樂甘州。

〔伯近德日記〕文化八年二月四日丑

一四辻家樂始、二付午刻過近信參上、又申刻御始、平調々子甘州、傾盃樂急、越天樂、殘樂、三反樂、文秋、德大



大樂樂

〔歌儔品目〕五上大樂人數多ニシテ、其音聲ノイカ  
 つたどあるべけれど、ことひきなどの上ハア、  
 又、人數ノ少キ樂ヲ、小樂トイフコトハア、

小樂小曲ノコトヲハ、ハヤキ小樂トイフ、ハ水師

## 〔胡琴教録上〕樂曲

又云、師古樂はことにはそく絃勝にひくべき也、なかんづくに、大樂にあひ交はりて、かくやに  
 してひくとき、諸の管音ひきて、わが比巴はをとなきやうに思まゝに、撥ごとに大音聲にひか  
 るゝ也、

殘樂

## 〔伯氏新録〕一御遊之事

一殘樂之事は、三反之時は初反に而助音之絃管太鼓鉦鼓まで悉のき候て、音頭之笙笛箏篋三管  
 ばかり残り、打物は羯鼓ばかり残り、絃は琵琶一和琴一箏は何絃にても有次第彈之、右之通二反  
 之頭より残り二反目之樂之中、半過にて笙とゞまる、次に羯鼓とゞまり、三反目之樂之頭にて笛  
 止り、次に箏篋少のき又付吹又のき付吹事數度、所々たわやかに付吹、末にいたりとゞまる事に  
 て、其内琵琶止まりて、箏和琴ばかり始終彈之、樂相濟事也、律呂相和堪能之得者甚深微妙之事也、  
 一殘樂五反之時は、助音之絃管打物等二反にてのき申候、其餘は三反殘樂之格にて、段々に止る  
 事也、

## 〔樂家錄十三管雜論〕殘樂之大意

殘樂者御遊時必有之、凡特謂御遊者奏樂御遊也、自餘御遊是也、是爲愛絃類有此事、就中賞箏之義也、故無  
 以琵琶和琴專奏之例、箏者雖數絃彈之、琵琶和琴者各一絃爲限也、又於三管則賞箏、故他管皆止  
 而唯箏篋耳殘奏之、然是亦爲助箏聲也、抑奏之者三返或五返也、奏樂有七、則在于第三第六之二曲、  
 有五則限于第三之一曲也、其法舉之左、樂曲有七、則第二第四第六已上三曲、有五則第一第四已上二曲、是近年之例也、舊記未考之、  
 殘樂三返之法、先頭取横笛發聲、而自初大鼓鳳笙各附之、而箏篋及餘笛不殘附之、但箏篋者頭取管  
 耳、先附之而後續

〔中右記〕康和四年三月廿日乙亥今日有御賀後宴事○中略午刻人々參上御裝束儀一如式先龍頭船

左右近衛府各二艘、外衛各二艘、於北殿南岸池頭人々乘船、左一龍頭、一鼓童龍名宗重、王童也、左近少將

實隆朝臣、同師重朝臣、左兵衛佐能明、右兵衛佐通季、備後介有賢朝臣、室尾張守長實朝臣、右中將宗

輔朝臣已上安藝守經忠朝臣左京權大夫俊賴朝臣兼左兵衛權佐宗能大鼓右馬頭兼實朝臣

鼓  
少納言實行鉦鼓  
將暨四人差舟差舟裝奉  
如右一鷁首一鼓童納名蘇利童  
左馬頭師隆朝臣藏人少

將顯國右少將家定侍從實明刑部卿顯仲朝臣右衛門佐家保已上越前守家保朝臣侍從信通已上

越後守敦兼朝臣纂集 右近少將師時朝臣大鼓 少納言實明三鼓 兵部大輔雅兼鉦鼓 將監四人差舟

不足  
將曹左二龍頭舞師光末打一鼓召人左樂人等又召加之合十人乘之右二鷄首舞師忠方一鼓樂人

合十人，第三左右龍頭鶴首，下腦樂人各十人也，皆吹鳥向樂從，左右各進出，上皇河○白主上河○堀出御。

藏人頭右近權中將顯雅朝臣召公卿公卿著御前座源宰相能俊召法親王如一昨日此間舟樂遲參

類有其仰下官○藤原宗忠依仰先候樂屋今日樂行殿上人船樂二艘於南池岸邊下從船左右一鼓量進

御前、殿上人舞人樂人列立樂屋前、入樂屋如一昨日、在第二龍頭鵠首光末忠方早參進、取大拍子、相

具一鼓童次召人樂人寄舟於樂屋前參入樂屋中第三龍頭鶴首遙奏烏向樂差隱別島中了

歌儼品目五奏上汎稱昇樂ラ體源抄スルズ時ルニニ音注テ會發ノス時導ノ師稱ノ高座ニヤ、降樂高座渡ノ抄又ニ導奏師スル

樂ノ稱呼トミヘタリ。

〔舞樂要錄〕法勝寺御塔供養 永保三年十月一日 略○中

讚降昇樂樂耶瑟君頭子樂 梵音降昇樂樂倍慶盧雲樂 錫杖降昇樂樂越蘇殿莫者樂

〔木師抄〕大法會には、法會の昇樂降樂終りて、入調になりて、あんま二の舞の後より琵琶箏はひく

入也

同上、又今ハ於世物ト稱ス、於世吹、由利樂同上、由利ハ舒緩ノ義、緩吹、ノ  
ノ體ノ樂曲ノコトハ、キコヘタリ、寄樂同上、寄吹ニスル  
コトハ、キコヘタリ、

## 立樂

〔歌傷品目五上〕立樂節會ノ目、庭上ニシテ、俗人立

〔伯氏新錄〕一立樂之事

無舞臺庭上樹木等に幔幕を所々に引、其間より參音聲として四季により、其時の調子音樂吹はじ  
め、尤吹ながら左右之舞人樂人二行に立列立樂故鞆鼓無之、左方第一座之伶人一鼓をかけ、右方  
第一座之伶人三鼓をかけ、打之、荷大鼓荷鉦鼓左右共に、布衣或は白張にもたせ候て打之、庭上正  
面列して止樂、此時振鉦なし、直左方之舞曲を奏す、終て舞人は幔幕の内へ引入、次に右方の舞を  
奏す、終て引入事同前、舞五番にても七番にても相濟之後、舞人前之座に列立退出、音聲長慶子を  
吹はじめ、下臈より次第に引入、

當時禁裏小御所東庭の立樂は、御池の橋より二行に立列、庭上にて樂之次第右の如し、

一近年踏歌南殿之立樂には、左右管方束帶を著し候故、舞人の裝束と各別に相わかれ宜候也、

〔内裏式中〕十一月新嘗會式

治部雅樂率工人等參入奏立樂或、有、勤、停、之、

〔古今著聞集管絃歌舞〕堀河院御時節會につねよりもいそぎ入御ありけるを、人々あやしう思ひ  
ける程に、御膳宿のかたにて立樂の時になりて、皇帝を吹出させおはしたりけり、

〔歌傷品目五上〕居樂體源抄、按ズルニ、坐シテ奏スルノ隔ナルベシ、

〔歌傷品目五上〕道樂天行幸、又ハ神幸ノトキ、其道

〔伯氏新錄〕一船樂之事

昔は閑院内裏御池之船樂、南院行幸船、其外所々の船樂有之、近代無之、船樂之時第一先鳥向樂を

音聲

也○中 日暮酒酣勅喚親王公卿昇殿絲竹合奏樂飲極歡竟酒之後賜祿有差

【歌傷品目】五上 奏樂 汎稱音聲音聲ノ音ナリ所參音聲ノ節會等ノ日、伶人、庭上ニシテ、音聲ヲ奏

音聲トイヒ、樂ハテ、又其位ヲ退ク時、制ノ如ク、中略參入音聲同子上參向音聲略退出音聲ノ上ニ見ユ、又退 罷出音聲

【龍鳴抄】上 雙調春庭樂又號ニ夏 風樂

拍子十、古樂、四反すべし、はるのせちゑのまいり音聲に、つねにこれをもちゐる、

【龍鳴抄】上 大食調長慶子

退出音聲の時、三度うつといふことあり、

【新儀式】四時天皇奉賀上皇御算事

三獻之後日行事公卿令奏樂、樂所於西門內奏亂聲三度、訖奏參入音聲、略中 晚景天皇奉坏獻壽、訖

復御本座、舞訖奏罷出音聲退出、

【西宮記】臨時入臨時樂

康保三年十月七日、此日覽殿上侍臣奏樂、略中 兵部卿親王、上野太守親王等參候、次奏參入音聲、略男

左大臣彈正、右大臣經略中略左馬允永 令奏唱歌賜祿、公卿已下有差、略註 次奏退出音聲、略天 即入

內公卿侍臣退出、

【築花物語】十日かげのかつら、大嘗會のいそぎさせ給、略中 長和元年十一月されどその日は唯うるはしうぞ

ある、略中 悠紀のかたのいねつきうた、さかたのこほり、略中 まいり音聲たかみくら山、略中 まか

で音聲やすかは、略下

【歌傷品目】五上 奏樂 汎稱延樂體源抄、今ハ延物ト云フナリ、續教訓抄、甘州ノ條ニ、此曲延樂ニアラズ、早

守テニアリ、獨リナシ體テ早樂體源抄、今ハ早物トイフ、古クハ早キ物トミハダリ、龍鳴抄於世樂

延樂  
早樂  
於世樂  
寄樂





合、蓋、合、後、宴、也、有、歌、合、并、絃、管、與、主、合、吹、笛、  
輪、如、龍、之、咽、水、中、近、世、無、如、此、事、人、以、感、歎、

絲管。杜又同上。樂書。二。絲管。抄。十。卷。句。ア。リ。唐。絲竹。又同上。

〔新儀式四時〕御庚申事

及于曉更令侍臣奏絃管

〔中右記〕嘉保二年六月九日癸酉近日每夜召樂人於弓場殿有小音樂被始樂所後當番樂人等宿仕

之時必召弓場殿有絃管與也

〔西宮記〕臨時ハ花宴

天曆三三十二乙卯花宴。中 樂人奏絲竹、

〔書言字考〕節用集八卷。奏樂之總註、

〔倭訓栞〕中國四かなづる。略。中 文選に奏字をよめり、琴などかきなづるの義なるべし、

〔歌儼品目〕奏樂汎稱。此字古ク舞ヲ馬スノ稱ニ用ヒシコトアリ、拾葉集五節ノ條々、久方ニ、天

字典ニ、舞字見考工記、矢人挾而搖之、文、今人以指夾矢、擲、按、諸、韻、書、不、載、音、義、無、考、附、考、之、用、ヒ、シ、

タ、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

ト、今ハ尋常ニハ見、ア、乙、今、時、凡、奏、樂、ヲ、カ、ナ、ヅ、ル、手、品、ノ、名、目、ナ、リ、然、ル、手、ヲ、以、奏、樂、ノ、コ、ト、ニ、轉、用、

のまわぎを打やめて居を、あそぶといへば、其義にや、延佳はかみことすと訓す、紀には啼哭悲歌と見えて、遊宴の遊にあらず、喪葬令の遊部も此よしなるにや、伊勢物語のひるは遊居といふも又此意有ぬべし、一説に畢竟死せしもの、神を樂まむる也といへり、

〔歌儔品目〕奏上 汎稱 遊凡遊トハ奏樂ノ古言ナルニヤ、神遊御遊ノ類、其外某ヲ遊ビテナド云モノ、のつかさの御ことにもめす、又惟木卷ニ、かんす、源語、嘉業卷ニ、うへの御あそびはじまりてふん、つてうの心に、さくら人あそび給ふナド、皆其歌樂ヲ奏スル事ト云ム、

〔古事記上〕故天若日子之妻下照比賣之哭聲與風響到天、於是在天、天若日子之父、天津國玉神及其妻子聞而降來哭悲、乃於其處作喪屋而略中、如此行定而、日八夜八夜以遊也、

〔古事記傳三〕凡て歌舞管絃をば、皆阿蘇夫と云、體言にして阿蘇備とも云り、上卷天若日子段に、日八夜八夜以遊也略と見え、石屋戸段に爲樂とあるをも、阿蘇備斯と訓べく略註、神遊

東遊など云も是なり略中昔の物語書などにも管絃をもはら御遊と云り、續紀十五に、皇太

子の五節舞を舞賜へるを御覽て、太上天皇の詔に、今日行賜布熊乎、見行波直遊止乃味爾波不ズレナフ、フナリト云フコトヲ示ス、在之底、天下人爾君臣祖子乃理乎、放賜比趣賜布止爾有良志止奈母所思須略中抑阿蘇夫と云

言の本は、今俗にも云と同意なれば、何事にも云中に、歌舞管絃は、遊の至極なる故に、殊に其名を負るなり、

〔書言字考節用集九言辭〕御遊

〔倭訓栞前編二〕あそぶ略中

御遊は樂と催馬樂とつがふをいふといへり、

〔伊呂波字類抄久〕管絃

〔下學集下〕管絃

〔書言字考節用集八言辭〕管絃謂之糸竹、遊、文、選、

〔歌儔品目〕奏上 汎稱 管絃爲管籥ノ通稱ナリ、○中略

絃管即上ナル、管、絃、六、年、五、月、五、日、禁、處、有、根、

〔伊呂波字類抄疊字〕音樂。

〔運歩色葉集<sup>遠</sup>〕音樂<sup>ガク</sup>

〔令義解四考課〕音樂克諧、不失節奏、爲雅樂之最、謂助以上

〔日本紀略一醴二〕延喜二十一年十月十八日庚午、覽雅樂寮舞人、於清涼殿前奏音樂。

〔歌儔品目〕  
奏五  
樂上  
汎  
稱  
音<sup>○</sup>  
樂<sup>音</sup>  
類管  
ヲ簫  
交鐘  
ヘ<sup>國</sup>  
ザノ  
ルミ  
ノニ  
通シ  
稱テ、  
ナ諸  
リ絃

〔西宮記〕 正月上 二日二宮大饗

王卿以下參本宮拜禮。略○中  
三獻飯汁次樂舞。各二曲

〔唐六典十常寺〕太樂署令一人從七品下

周禮大師師當司樂中大夫二人樂師下大夫四人掌成均之法以樂舞教國子帑舞略○中人舞之節

〔伊呂波字類抄疊加字〕歌舞。

〔書言字考節用集言八〕辭歌舞カブ

〔歌儻品目〕  
 奏上五  
 汎稱  
 歌儻  
 夫歌ハ、人心ノ喜ビチ伸ルノ餘リ、歌ムコトアタハザルヨリ發スル所也  
 サレバ、詩ノ大序ニ、詩者志之所之也、在心爲志、發言爲詩、情動於中、而形

於言言之不足故嗟歎之嗟歎之不足故永歌之永歌之不足怨以怒其政乖亡國之音哀以思其民困故正得失動

天地感、鬼神交、  
所以ニシテ、自然ノ理ナリ、  
是以、經ニ夫婦、成ニ孝、  
此邦ニテモ、上古ヨリシテ、  
人倫、美教化、移風俗ト、  
是レ、歌ト舞ト、  
見ユル者、枚擧

ニ遠アラズレド總シテ樂ヲ斥テ歌ハト稱スルコトハ、書紀允恭天皇四十二年、天皇崩御リテ、後

泣波ヨリ京ニ至リ、或ハ哭  
シ、或ハ舞ストイヘリ、

【日本書紀一神代】一書曰、○中土俗祭此神○伊弉冉尊之魂者、花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣。

奥の内に遊ぶといふ事、舊事紀、古事記などに見えたり、今もよろづ



雜也。○中 變或方謂之音其方猶文章也。比音而樂之及于戚羽毛謂之樂。疏略

樂者音之所由生也其本在人心之感於物也是故其哀心感者其聲嘶以殺其樂心感者其聲啾以緩其喜心感者其聲發以散其怒心感者其聲粗以厲其敬心感者其聲直以廉其愛心感者其聲和以柔六者非性也感於物而後動。略中

凡音者生入心者也情動於中故形於聲聲成文謂之音是故治世之音安以樂其政和亂世之音怨而怒其政乖亡國之音哀以思其民困聲音之道與政通矣

〔大日本史 禮樂十〕樂之起蓋防於伊非諾尊妍哉之詠至天鈿女命歌調舞曲始備而祭祀用樂亦起于此太祖則用之軍陳崇神帝設神宴奏樂爾後宴會亦用之當時簡朴之俗器唯有琴笛舞者或用劍鉞耳所謂大樂必易者亦足以和神人諸君臣也及三韓內附各獻其國樂推古朝皇太子廐戶最好而講之於是韓吳諸樂始行于世然專用以供養三寶而佛事奏樂之弊始于此時方通使西上故伶官又傳隋唐之樂凡其諸曲皆彼所謂俗部胡部散樂雜戲者然俗部諸曲悉源於雅樂間有周漢遺音而唐初所作者雖非絕雅尚不至於淫放故大寶定令置雅樂寮專領諸樂時加釐正用之朝會燕享唯祭祀則用神樂倭舞自弘仁後文武恬嬉唯宴遊是耽歌舞是事至其流弊則奸聲淫曲競興而公卿大夫與優倡侏儒爲伍恬不知耻自以爲風流韻事俗習淫佚流宕不及後世衰亂之禍末必不由乎茲聖人放鄭聲其旨深矣但歷朝好樂之餘囑官子弟世傳其業雖中歷喪亂守而不失上世樂舞幸有流傳于今日者如隋唐諸樂聲器皆隸于有司唯傳世之久記其聲而不曉其義傳其譜而不知其詞者有之惜哉

# 〔律疏〕八虐

七曰不孝謂略○中 居父母喪身自嫁娶若作樂釋服從吉中略樂用擊鐘鼓奏絲竹

〔歌儔品目〕五上 略 奏樂汎稱樂按ズルニ說文ニ樂五聲八音之總名トイヘリサレバ諸ノ樂器ヲモツテ合奏ヲ凡ハ音調作

# 古事類苑

## 樂舞部一

### 樂舞總載上

本邦樂舞ノ起原ハ遠ク神代ニ在リ、外國ト交通スルニ及ビテ、新羅樂、百濟樂、高麗樂、唐樂、伎樂、林邑樂等傳ハレリ、凡ソ樂舞ニハ唱歌樂器ヲ主トスルモノト、舞踊ヲ主トスルモノトアリ、唱歌樂器ヲ主トスルモノハ、律呂五音八音十二調子等ノ樂調ニ依リテ之ヲ奏シ、舞踊ヲ主トスルモノハ、舞譜ニ依リ、聲調ニ應ジテ之ヲ奏ス、舞樂ハ唐樂ヲ左方トシ、高麗樂ヲ右方トス、左右各一曲ヲ番ヒテ一番トシ、之ヲ番舞ト稱ス、其樂曲ハ之ヲ大中小ノ三曲ニ別チ、又製樂ノ時代ニヨリテ、古樂、新樂ノ目アリ、

文武天皇大寶ノ制、雅樂寮ヲ置キテ樂舞ノ事ヲ總管セシメ、別ニ內教坊ヲ置キテ女樂ノ事ヲ掌ラシメシコトハ、官位部ニ詳ナリ、凡ソ朝廷ノ儀式、神事、佛會等ニハ必ズ樂舞ヲ奏ス、樂家其業ヲ子孫ニ傳ヘ、指紳ノ間ニモ、亦音樂ヲ翫プロト甚ダ盛ナリシカバ、中古喪亂ノ世ヲ經ト雖モ、尙ホ上古ノ樂曲ヲ失ハズ、幸ニ傳ヘテ今日ニ至レルモノ多シ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕加人亭樂<sup>カ</sup>舞<sup>カ</sup>也。

〔說文解字〕六上樂<sup>五聲</sup>八音<sup>總名</sup>也。象鼓

〔禮記註疏〕三十七

凡音之起、由人心生也、人心之動物、使之然也、感於物而動、故形於聲、註、宮、商、角、徵、羽、雜比曰音、單出曰聲、形猶見也、聲相應、故生變、註、樂之器、彈其宮則樂宮應、然不足、樂是以變之、使

雜載

九九九

○

狂言  
狂言問  
狂言師  
小舞  
論

一  
〇〇四

武人自爲能

九一三

市人自爲能

九二〇

手猿樂小猿樂

九二三

女猿樂

九二五

辻能

同

### 樂舞部十四

#### 能樂三

觸流

九二七

能役者大誠

待脇遇師

同

囃子方鼓笛

一大調鼓 一小管鼓

太

九四六

### 樂舞部十五

#### 能樂四

狂言 俳入

假面假面工

九七三

裝束裝束師 衣裳著

九八四

道具道具師

九九一

舞臺

九九四



能樂曲名

諸曲作曲者節

改竄法

諸評釋例

樂曲忌本

諸小曲文

及其結構

仕手ツレ

仕舞法

雜舞子例

前

脇ツレ

教習

傳授

松囃

諸初

能組

朝廷行能樂

武家行能樂

神事能

薪能

勘進能

一代能

樂舞部十三

能樂二

七五五

七六〇

八一

八三〇

八三二

八三五

八三九

八四三

八四七

八五六

八六四

八七一

八八六

八九三

八九六

同

誦經文

七二八

薩摩琵琶

七二九

琵琶會

七三二

雜載

同

幸若音曲

名稱

七三四

起原

同

曲名

七三六

音調

七三七

幸若音曲例

七三九

幸若待遇

七四〇

樂舞部十二

能樂一

名稱

七四六

起原

七五一

沿革

同

流派

七五四

田樂曲

六九二

田樂法師(附圖)

同

裝束

六九五

道具

同

樂器

同

朝廷行田樂

六九八

臣下行田樂

七〇〇

神社行田樂

七〇六

寺院行田樂

七一二

勸進田樂

同

雜載

七一四

# 琵琶法師

名稱

七一五

傳來

七一六

平家物語作者

同

曲節

七一八

流派

七二〇

名人

七二一

語平家

七二二

袍 桐 襦

六五二

半臂

六五三

下裳

六五四

帶 平結 魚袋

六五五

袴

六五六

踏懸

六五七

襪

六五八

履

同

武器 旗 大刀 鐃 鈸

六五九

舞樂具 拍子 棒子 浮迦 鼓 杖 羽 藥袋 胡蝶 羽 下 緒 蛇 松 瓶 明子 毬 土 器 玉 机 子 楚

銅

六六二

假面 (附圖)

六七〇

雜載

六七六

○

舞臺 樂屋

六八二

樂舞部十一

田樂

名稱

六八七

田樂能

六八八



樂人

名稱

六一七

朝廷樂人

六一八

幕府樂人

六一九

社寺樂人

六二二

世襲

六二四

課試戒飭

六二八

一者

六三二

名人

六三三

蒙勸賞

同

俸祿

六三五

貢樂人

六三九

雜載

同

舞樂裝束舞臺唄人

舞人裝束

六四一

唐裝束

六四六

別裝束

六四七

冠帽

六四九

盤涉調樂曲 蘇合香海萬秋樂向樂風蘇莫崇明樂桑老創氣感潭秋樂輪  
 山鶴鳴曲 登貞樂承秋樂元歌 鷓鴣樂實子千秋盤涉參長元樂永  
 角調樂曲 柱實振遊字脫女 白

五〇三  
 五四七

樂舞部九

高麗樂樂曲 振鉞 師子 俱 曲 一鼓

壹越調樂曲 新鳥志蘇傳古鳥城破 歸宿德侯 迷宿都 鬱德志 與貽呂 鉞 俱 倫 甲  
 勢利理 賀利徐 王仁延喜樂巖 嶺仙 藕 醉 胡醉樂 長 貽保犬樂 石川會樂路久  
 胡蝶樂 納蘇 利物 高仁龍樂 新河波浦 胡醉樂 長 貽保犬樂 石川會樂路久  
 林歌

平調樂曲 林歌 五九八

雙調樂曲 蘇志磨利白濱地久 六〇一

振鉞 六〇七

一曲 六一〇

一鼓 六一一

師子 六一四

樂舞部十

樂舞部七

唐樂樂曲中

平調樂曲

越天樂 萬壽樂 三臺樂 宮商樂 仙樂 男婦 平變樂 樂

子胡

彈琵琶 連珠 火風 移都師生 駱勢永隆 夜半樂 于溫 超郡君

小陪

子 鳳 柳 扶南 合 五更 龜 鹿 人 三 破 陣 打 確 樂 太 平 仙 人 河

道調及大食調樂曲

小上元樂 合 五更 龜 鹿 人 三 破 陣 打 確 樂 太 平 仙 人 河

五聖樂

大聖明樂 大拔頭樂 傾 興 孟 明 樂 天 人 五 坊 樂 飲 酒 樂 歡 大 鳳 天 多 樂

送賀秋王恩樂

大聖明樂 大拔頭樂 傾 興 孟 明 樂 天 人 五 坊 樂 飲 酒 樂 歡 大 鳳 天 多 樂

乞食調樂曲

秦王破陣樂 蓬城樂

四三二

性調樂曲

命西河兒 按弓士 芳 千 金 女 胡 兒 德 長

四七三

雙調樂曲

和柳風苑 春庭花樂 萬 春 馬 樂 絲 狹 橋 園 雨

四七六

樂舞部八

唐樂樂曲下

黃鐘調樂曲

金喜春 鍾樂 弄安殿 城樂 海河仙 南樂 應天 城樂 央聖宮 淨樂 散

赤白桃李花

夏引樂 皇帝三臺 天德金樂 備長馬生樂 櫻葉王井樂 英雄白樂 盛

水調樂曲

拾翠 龍舟 承光 涼九城

四八三 五〇〇

名稱

起原

音調

歌章

詠今樣歌

流派

善今樣

教習

今樣合

雜載

二八五

同

二八六

二八八

二八九

三〇八

同

三〇九

三一二

三一三

樂舞部六

唐樂樂曲上

壹越調樂曲

皇帝破陣樂(附圖)胡飲酒亂旋河水香樂鸞鳴金玉樹後庭花

雙卓麗杯樂

北庭宴飲酒胡天子壽樂承和厥樂廣賦壹團羅密酒淨古子餘

左詩武德樂

沙陀調樂曲

安祿山亂樂(三舞)迦樓羅王最新涼州王溫河十天樂安樂菩薩

壹越調樂曲

弄槍婆娑理紫

三六七

三一九



名稱

二五八

歌章

同

踏歌法

二六〇

踏歌例(附圖)

二六一

禁私踏歌

同

雜載

同

## 樂舞部五

### 朗詠

名稱

二六五

起原

同

音調

二六六

朗詠用詩文和歌

二六八

歌朗詠

同

相傳

二八〇

朗詠集

二八一

雜載

二八四

### 今樣

雜載

○

國栖歌

二四二

### 東遊

名稱

二四三

起原

二四四

歌章

二四五

舞法 舞人

二四九

神事奏東遊

同

佛會奏東遊

二五三

競馬奏東遊

同

傳授

同

雜載

二五四

### 歌垣

名稱

二五四

歌垣例

二五五

### 踏歌

樂舞部四

催馬樂

名稱

二〇一

曲名

二〇五

歌章

二〇六

音調 曲譜

二一六

詠催馬樂

二二二

流派

二二八

善催馬樂

二二九

教習

二三〇

難載

同

風俗歌 國栖歌併入

名稱

二三一

曲名

同

歌章

二三二

音調

二三八

奏風俗歌 神事奏風俗歌

二三九

歌  
奏大歌

同  
一五〇

神樂

名稱

一五一

起原

一五二

曲名

一五三

歌章

一五六

音調  
拍子  
譜子

一六八

神樂作法

一七四

人長

一七八

行神樂  
夏神樂

一八三

秘曲

一八九

傳授

同

名人

一九五

里神樂

同

大神樂

一九七

大々神樂

同

雜載

一九八



雜樂

六九

散樂  
猿樂

同

雜藝

七五

郢曲  
宴曲

七八

行樂舞  
樂初延行  
樂事舞行  
樂年結舞  
樂佛會寬行  
樂臣舞下行

八七

停音樂

一〇七

秘曲

同

教習

一一〇

傳授

同

好音樂

一一七

善音樂

同

樂書

一一九

雜載

一二八

樂舞部三

大歌

名稱

一三七

歌曲  
夷振曲

八宮  
雲人振曲  
天田  
杵島振曲  
鐘波  
江曲  
振  
儀  
水部  
曲  
振  
淺  
四茅  
極原  
山曲  
振  
廣

思邦歌歌

舞酒  
歌樂  
歌上  
歌本  
歌志  
歌真  
歌宜  
歌天  
歌厭  
歌片  
歌下  
歌宇  
歌旋  
歌志  
歌都  
歌大  
歌直  
歌返  
歌日  
歌厭  
歌厭  
歌ひ

古事類苑

樂舞部一

樂舞總載上

名稱

奏樂稱呼奏立合奏居音樂聲道廷樂樂船早樂樂昇於樂世樂降樂由利大樂樂寄

調小樂  
試殘樂

皇朝樂

外國樂伎新羅樂度羅百濟樂渤海麗樂林邑唐樂

樂調二律呂子五枝調子七音反音六調子乙八音十

歌曲

樂曲左序破急樂亂大聲曲中音曲小曲遊聲古樂道行新樂渡物

舞曲物文舞番武舞無答舞舞女舞歌走

樂舞部二

樂舞總載下

雅樂



舞樂裝束 舞臺 併 凶

樂舞部十一

田樂

琵琶法師

幸若音曲

樂舞部十二

能樂一

樂舞部十三

能樂二

樂舞部十四

能樂三

樂舞部十五

能樂四 狂言 併 凶



踏歌

樂舞部五

朗詠

今樣

樂舞部六

唐樂樂曲上

樂舞部七

唐樂樂曲中

樂舞部八

唐樂樂曲下

樂舞部九

高麗樂樂曲

振鋒  
師子

一  
曲

曲

一

鼓

樂舞部十

樂人

古事類苑

樂舞部第一冊目錄

樂舞部一

樂舞總載上

樂舞部二

樂舞總載下

樂舞部三

大歌

神樂

樂舞部四

催馬樂

風俗歌

國栖歌 研入

東遊

歌垣

AE  
35  
2  
K6  
1933  
V.43



神宮司廳藏版

樂舞部一

# 古事類苑

古事類苑刊行會







AE

Koji ruien

35

.2

K6

1933

v.43

East

Asiatic

Studies

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---



